

Summer Pockets #2

トミー@サマポケ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Summer Pockets(無印)、グランドエンディングから一年後の物語になります。

しろはと恋人同士になった羽依里が、一年ぶりの鳥白島での夏休みを満喫します。

全クリ後に、この夏休みを終わらせたくない!と言う気持ちで書きました。

ネタバレ考慮していませんので、閲覧の際はご注意ください。

また、一部独自解釈やオリジナル設定(呼称など)がありますのでご了承ください。

感想など頂けましたら、飛び上がって喜びます。

目次

第一話	7月25日	1
第二話	7月26日	18
第三話	7月27日	38
第四話	7月28日	64
第五話	7月29日	93
第六話	7月30日	118
第七話	7月31日	145
第八話	8月1日	173
第九話	8月2日	213
第十話	8月3日	253
第十一話	8月4日	295
第十二話	8月5日	334
第十三話	8月6日	381
第十四話	8月7日	418
第十五話	8月8日	465
第十六話	8月9日	494
第十七話	8月10日	533
第十八話	8月11日	584
第十九話	8月12日	624
第二十話	8月13日(前編)	669
第二十一話	8月13日(後編)	708
第二十二話	8月14日(前編)	747
第二十三話	8月14日(後編)	779
第二十四話	8月15日	811

第二十五話	8月16日		856
第二十六話	8月17日	(前編)	900
第二十七話	8月17日	(後編)	928
第二十八話	8月18日		954
第二十九話	8月19日	(前編)	994
第三十話	8月19日	(後編)	1029
第三十一話	8月20日	(前編)	1064
第三十二話	8月20日	(中編)	1093
第三十三話	8月20日	(後編)	1131
第三十四話	8月21日	(前編)	1180
第三十五話	8月21日	(後編)	1228
第三十六話	8月22日	(前編)	1283
第三十七話	8月22日	(中編)	1328
第三十八話	8月22日	(後編)	1361
第三十九話	8月23日		1417
第四十話	8月24日		1479
第四十一話	8月25日		1545
第四十二話	8月26日		1588
第四十三話	8月27日		1643
第四十四話	8月28日	(前編)	1690
第四十五話	8月28日	(中編)	1740
第四十六話	8月28日	(後編)	1772
第四十七話	8月29日		1796
第四十八話	8月30日		1846
第四十九話	8月31日		1896

第五十話 エピソード
Summer Pockets
#2・外伝

19631922

第一話 7月25日

『夏の思い出を作り、鳥白島に来ませんか』

連絡船の船内に貼ってあるポスターが目に残る。

今年の夏、鳥白島が掲げたキャッチフレーズらしい。

そういえば、パンフレットにも同じ文句が書かれていた気がする。

正直、ありふれたキャッチフレーズだな、と思う。

これだと、都会の人間はあまり魅かれなないかもしれない。

……一度来てもらえば、島の魅力が分かると思うんだけどな。

「ふう……」

ポスターから目を離して、壁に据え付けられた時計を見る。島に着くまで、もう少し時間がかかりそうだ。

俺は柵にもたれながら、しろはと出会った時のことを思い出す。

『チャーハン美味しかった』

『やっぱり作り方、教えて』

この会話を皮切りに、付き合いをお願いしたのが去年の夏休み。しかも最終日。地元行きの船から飛び降りた直後。

もちろん、しろはも相当混乱たまにしていた。

そんな中、頼み込んで連絡先だけ教えてもらって。

地元でやらかしたことの決着をつけて、ようやく島に戻ってこれたのが、秋。

それからはバイトで旅費を貯めて、休みの度にしろはに会いに行っていた。

彼女と初めて出会った食堂に通い詰めたり、一緒に釣りをしたり。

自分でも不思議なくらい、必死だった。

大切なしろはをシティーボーイから守ると言う蒼と、壮絶な言い争

いもしたし、最初は島の皆にも警戒されていた。

でも、しろはと仲良くなるにしたがって、受け入れられていった。やがて季節が巡り、冬。

年末年始もこの島で過ごし、初めて餅つきをやらせてもらった。すっかり打ち解けた良一たちに、寒中水泳だとかで海に投げ込まれたりした。

春。桜が咲く頃、しろはに告白した。

しろはは即OKしてくれたけど、しろはのじーさんが認めてくれず。海で水中相撲で勝負する羽目になった。

その勝負に勝ったことで、俺としろはは島公認のカップルになってしまった。

そして、今に至る……。

「おかーさん、あのおにーちゃん、なんでニヤニヤしてるの?」

「こら、見ちゃいけません!」

……どうやら喜びの感情が顔に出てしまったみたいだ。

……だってしょうがないだろ! 待ちに待った夏休み! 久しぶりの長期滞在! 楽しみでないはずがない!

『まもなく鳥白島。鳥白町漁港に到着いたします』

……思わず踊り出しそうになったその時、島への到着を知らせるアナウンスが流れた。俺は冷静になって、下船の準備をする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

タラップを渡ると、すぐに強烈な夏の日差しと盛大な蝉の鳴き声が出迎えてくれる。

他の観光客たちはスーツケースやら荷物を持って、思い思いの方向に散らばっていく。

「ちーっす、羽依里」

「そろそろ来る頃だと思っていたぞ」

その観光客たちから少し離れて歩いていると、前から見知った二人が歩いてきた。

「まさか迎えに来てくれたのか？ 時間とか、鏡子さんにしか伝えてなかったはずだけど」

「朝から港で待ってた。暇だしなっ」

「マジか」

爽やかな笑顔を向けてくる半裸の男が、三谷良一。すぐ裸になりたがるのが玉に瑕だが、良い奴だ。

「そうだ鷹原、荷物を持ってやろう。良い特訓になりそうだ」

そう言って荷物を持ってくれた眼鏡男子が加納天善。いわゆる卓球馬鹿だ。良い奴だけど。

「羽依里。今度は長く滞在するんだろ？」

「ああ。待ちに待った夏休みだ。八月末まで、たっぷり楽しませてもらうよ」

「ほう。フルセットマッチか」

天善は相変わらずの卓球例えだ。

「また一緒に裸祭りやろーぜ、羽依里！」

「いや、やらないから」

笑顔で親指を立てて来るが、そんなことをやるつもりはない。

「……どーせ、羽依里は夏休みの間、ずっとしろはとイチャラブするんだろ?! 手とか繋いで、村中を練り歩くんだろ!？」

「いや、まだそこまでの度胸は……だって男子校だし」

「鷹原、もうその男子校ネタは使わなくていいんじゃないか？」

「そーだそーだ！ 連休の度にしろはとイチャラブしていたくせにー！ ずっと見てたんだぞー！」

「ご、誤解を招くようなことを大声で言うなっ！ まだそこまでやってないー！」

「島公認の混合ダブルスだろう。今更何を恥ずかしがる必要がある」
こんな風に駄弁りながら歩けば、この暑さも多少紛れる……はずもなく、男三人横並び。暑苦しいことこの上ない。

結局、俺は加藤家に着くまで、ずっといじられ続けたのだった……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ありがとう。ここでいいよ」

加藤家の前に到着した所で、天善から荷物を受け取る。

「……二人はこれからどうするんだ？」

「駄菓子屋だな。こうも暑いと、アイスでも食わねーと裸になっちゃま
いそうだ」

「やめといた方がいいぞ。ここで裸になったら、またのみきに狙撃さ
れる」

「うっ……あの氷水は、もう勘弁してほしいぜ」

「鷹原も落ち着いたら駄菓子屋に来るといい。蒼たちも会いたがつて
いたぞ」

「ああ、後で行くよ」

「それじゃーな」

二人は軽く手を挙げて、去っていった。

なんとなく腕時計を見ると、午後二時前。始発の時間から考える
と、あの二人は炎天下の港で五時間近く待っていてくれたことにな
る。

「今度、何かでお礼しないとな」

そう考えながら、今日からまたお世話になる加藤家の呼び鈴を鳴ら
す。

……しかし、中からの反応がない。

「あれ？」

もう一度呼び鈴を鳴らす。誰かが出てくる様子はない。

「ごめんくださいーいー!」

例によつて鍵はかかつていないので、玄関口を少しだけ開けて中に呼びかけるが……結果は変わらず。

「鏡子さん、出かけてるのか……?」

ちなみに、鏡子さんは俺のおふくろの妹。つまりは叔母にあたる人で、去年の夏からこの家の管理をしている。

春先には住民票をこの島に移したらしい。苗字が加藤じゃないから結婚はしてはるはずなんだけど、そういう身の回りの話も一切聞かない。なんというかミステリアスな人だ。

「今日の昼の便で着きますつて、連絡はしたはずだけど」

忙しい人だから、急な寄合でも入つたのかもしれない。

……少し悩んで、上がらせてもらうことにする。加藤家が無人になることはよくあることだし、ちよくちよく滞在する加藤家は、勝手知つたる他人の家だ。

「お邪魔します」

居間に足を踏み入れると、ふすまも開け放たれていて、気持ちの良い風が通り過ぎていく。騒がしく聞こえていた蟬の声も、心なしか遠くに感じる。

その居間を抜けて、すっかり自分の部屋になつている客間に荷物を置き、一息つく。俺がない間も鏡子さんが定期的に掃除してくれているのか、ほとんど汚れていない。

「夏休みの間は、できるだけ家事手伝わないと……」

先日電話をした時も、夏休みの長期滞在を快く了承してくれたし、鏡子さんにはお世話になりっぱなしだ……食生活は、まあアレだけど。

その後、二十分程待つてみたが、鏡子さんが戻ってくる気配はない。

「俺も駄菓子屋に出かけるか……」

俺は財布だけを持って加藤家を後にする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家から出てしばらく歩くと、駄菓子屋が見えてくる。駄菓子屋と言っても看板もなく、ガラス戸は開け放たれている。

「お、来たな」

「随分早かったな。ふっ！ ふっ！」

先程家の前で別れた二人と、店の軒先で再会する。

「鏡子さん、出かけてるみたいでさ」

「忙しい人みたいだからな。ふっ！ ふっ！」

「夕方には戻るんじゃないか」

良一は宣言通り、ベンチに座ってアイスを食っている。その足元を見ていると、青色の生物が鎮座していた。

「ようイナリ、久しぶりだな」

「ポンー！」

こう見えて、こいつは野生のキツネらしい。鳴き声は全く別の生き物のそれだが。

「ふっ！ ふっ！ ふっ！」

ちなみに天善は良一から少し離れた場所で、ラケットを持って素振りをしている。ぶつちやけ暑苦しくて、近づきたくない……。

「蒼ー、羽依里が来たぞー」

「あ、いらっしやーい」

良一が店の奥に呼びかけると、澄んだ声が返ってきた。

「蒼、久しぶりだな」

「この前の連休にも帰ってきてたんだし、久しぶりってもんでもないんじゃない」

そう言いながら、太陽に負けない笑顔で迎えてくれたのは空門蒼。この駄菓子屋でバイトしてる女の子で、先程のイナリの飼い主だ。

「蒼、かき氷もらえるか？」

「いいわよ。何味？」

「ブルーハワイ」

「全部同じ味だけどね」

「だよな」

「はい、百万円よ」

すっかり聞き慣れたお約束のネタを適当に流しながら、百円玉を手渡す。

「99万9900円足りないわよ」

「足りない分は良一につけといて」

「了解」

「マジかよ!」

「じゃあ、少し待っててね」

しゃこしゃこ、と手動のかき氷器で氷を削る音が聞こえ始める。俺はベンチに腰かけ、目をつぶってその音に聞き入る。

「おまたせー」

しばらくして、蒼がブルーハワイのかき氷を持って戻ってきた。というか、ブルーハワイなのにやけに白い。

「蒼、練乳かかっているけど?」

「サービスよ」

「まあ、うまいからいいけど」

最近はこの練乳ブルーハワイにも慣れてきた。

しゃくしゃく、とストロースプーンでかき氷をいただく。冷たい氷で体の内側から涼しくなる。これが百円。最高だ。

「……羽依里さん、来てたんですか」

夢中になってかき氷を食べていると、頭上からの声に顔を上げる。すると目の前に麦わら帽子を被った藍が立っていた。その長い髪と、身に纏った淡い青色のワンピースが風でふわりと揺れている。

「夏休みですし、しばらく滞在する感じですか?」

「ああ、夏休みが終わるまでいるつもり」

「そうですか。きつと蒼ちゃんも喜んでいることでしょう」

見れば見るほど蒼と同じ顔だ。藍は蒼の双子の姉で、妹の蒼がバイトの日にはこうやって様子をみに来る。

「藍はいつもの日課?」

「はい。蒼ちゃんの仕事ぶりを見に来ました」

藍はそのまま店の奥に向かうと、座敷に座って蒼が仕事する様子を眺める。

「藍、そんなに見つめられると仕事やりづらいんだけど」

「大丈夫。蒼ちゃんは今日も可愛いから」

「理由になつてないし……」

藍は少し……いや、かなりのシスコンだ。純粋に蒼が一番可愛いと思っっている。

藍にとって序列は蒼が一番上。次が女子。男連中は一番下で、幼馴染のはずの天善や良一ですら平気で名前を間違えられるレベルだ。

たぶん、蒼が飼い主つてだけでイナリの方があの二人より序列が上だろう。

「いいよなー。羽依里は藍に名前覚えられてて」

「少なくとも二人よりは序列が上つてことだもんな」

「理不尽な話だぜ……全員タメのはずなのにな」

「天善ちゃん、パビコ取つて」

「だから俺は良一だっ！」

そう言いながらもアイスケースからパビコを取り出して藍に手渡す。

そんなやりとりを見ながら、俺は残りのかき氷に取り掛かる。

「そういえば羽依里、しろはとはもう会ったの？」

店の奥からベイビースターの箱を持ってきながら、蒼が聞いてくる。

「いや、俺もさつき島についたばかりだし。もしかしたらここに居るかとも思っただけだ」

「午前中にスイカバー買いに来てたけど……今の時間は食堂じゃない？」

「食堂か」

「もしかして、彼女にも会わずに駄菓子屋でうつつを抜かしていたんですか。羽依里さん、最低ですね」

藍はパビコを二つに割ると、ひとつを蒼に手渡す。

「もしかして、しろはに連絡してないの？」

「あー……実は、しろはを驚かそうと思って、連絡してないんだ」

「へー。黙ってるわけねー。サプライズってやつねー。さすが彼氏さんは優しいわねー」

なんだろう。蒼の笑顔が怖い。

「えーと、食堂行ってみるよ。かき氷、ごちそうさま」

俺は仲間達からの無言の圧力に耐えかね、残りのかき氷をできるだけ早く食べきって、駄菓子屋から立ち去る。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うう……かき氷、急いで食べたから頭に響く……」

「なんて言うんだっけこれ。ソフトクリーム頭痛だっけ……？」

俺は駄菓子屋の皆と別れ、食堂へ向かっている。

目的地の食堂は島の反対側。かなりの距離を歩かないといけない。

かき氷のせいで発生した頭痛に耐えながら、少し歩くと……。

「……羽依里」

……背後から声をかけられる。聞き覚えのない声だ。

「えっ？」

振り返ると、やっぱり覚えのない少女がいた。

整った顔立ちに、すらっと伸びた黒髪。清楚なお嬢様みたいな印象だ。

それ以上に目を引くのが、彼女が座っているスーツケース。ひたすらに大きい。

「えーっと……どこかで会ったっけ？」

「ううん。初対面」

そうだよな。島の人間はほとんど覚えてしまった。でも、目の前の少女には見覚えがない。

「でも、俺の名前……」

「駄菓子屋さんで、そう呼ばれていたから」

「ああ……」

通りすがりにでも見られていたのか。

「でも、いきなり名前で呼ばれるのはその、心臓に悪い」

少女はニコニコとこちらを見ている。全く悪びれる様子はない。

「……観光か？」

「そんなところ」

……スーツケース持つてるんだから、当たり前か。何を聞いてるんだ俺は。

「ねえねえ、ひとつお願いしていい？」

「え？ なに？」

「このスーツケース押すの、手伝ってくれないかな？」

ぽんぽん、と自分が乗ってるスーツケースを叩く。ずいぶん図々しいお願いだと思っただが、確かに女の子が一人で持つには大きすぎる。

「えっと、どこまで？」

「港のほうなんだけど」

食堂も港の近くだ。通り道だし良いか。

「まあ、暇だしいいよ」

「ありがとう」

「……久島鷗」

「え？」

「私の名前。こっちだけ知ってるのも変だし」

「鷗……」

あの鳥のカモメと同じだろうか。変わった名前だ。

「それじゃ、動かすからどいてくれるかな」

「私ごとお願い」

「なに??」

「私、こう見えて軽いから」

そういう問題じゃないと思う。

「疲れちゃって」

えへへ、といった感じに頭を搔いている。

「いや、危ないぞ?」

「大丈夫。バランス感覚には自信あるから」

スーツケースの上で両手を広げて、手足をバタバタさせる。安心させてるつもりだろうか。

まあ、港までそこまで急な坂はないし、本人が大丈夫って言ってるんだからいいか……。

「それじゃ、しゅっぱーっ!」

鷗の号令を受けて、俺はスーツケースを押し始める。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

がらがらとスーツケースを押しながら、港までやってきた。スタート地点に戻ってきた感じだが、まあいいか。

「あ、ここでもいいよ」

ぴよん、とスーツケースから降りる。

「もういいのか?」

「うん。ありがとね」

「ああ」

「それじゃ、ばい」

笑顔で手を振った後、スーツケースを引きながら去っていった。

もう本土への最終便は終わってるはずだ。近くにしなければホテルがあつたし、そこに滞在してるのかな。

それにしても……なんというか、ものすごいなれなれしさだった。こっちもつられてしまうほどに……。

「鷗……か」

あいつもこの島に滞在するんなら、賑やかになりそうだ。

「羽依里」

余韻に浸っていると、背後からまた声をかけられた。今度は先程の

鳴の声と違って、凶たく高圧的な声だ。

振り向くと、そこには熊を人間にしたような立派な体格の男性が仁王立ちしていた。しろはのじーさんだ。

「島に来るなら、連絡をしろ」

「鏡子さんには連絡をしたんですが」

「今年の夏こそ、お前を島の水球部に紹介してやろうと思っていたんだ」

「だから、それは春からずっと断ってるじゃないですか」

「わしは諦めんぞ」

水泳は得意だが、もう運動部に入るつもりはない。

「そうだ、食堂には行ったのか」

「これから行くところです」

「なら、これをしろはに届けてやってくれ」

しろはのじーさんから、白いビニール袋を受け取る。

「なんです?」

「夕方に戻ってきた漁師仲間からもらった魚だ。食堂で使えるだろう」

「ありがとうございます。しろはも喜びますよ」

「そうか」

心なしか、しろはのじーさんは満足そうに去っていった。時々袋の中で何かが動いてるし、まだ新鮮なんだろう。

「さて、色々あったけど、ようやく食堂だ」

俺と出会った時から、彼女は一人でその食堂を切り盛りしていた。亡くなった両親が経営していた店を引き継いだらしい。今はまだ学業優先で、夕食の時間帯だけの営業。お酒の取り扱いもしていないが、常連客もそれなりにいるみたいだ。

「しかし表の看板、まだ慣れないな」

ビニール袋を片手に港から少し歩くと、墨文字ででっかく『しろは食堂』と書かれた看板が見えてきた。

正直、この店にはでかすぎる。しろはのじーさんが魂込めて書いてくれたらしく、しろはも扱いに困っていたけど。

入口の扉に手をかけ、一呼吸置く。

しろは、驚くだろうな。心の中でニヤニヤしながら扉を開ける。

「いらっしやい」

「よう、久しぶりー！」

「うん、久しぶり」

挨拶を済ませて、適当な席に座る。俺以外に客はいないようだ。

「……あれ？」

……至って普通の反応だった。せつかく内緒で島に帰ってきたっていうのに。

「しろは、驚かないのか？」

「……」

「……しろは？」

「……遅い」

「え？」

「来るのが遅い」

「……羽依里が島にいるの、知ってた」

「え、マジで？」

「うん。今日から来てるって、島中で噂になってた」

「噂……一体誰が？」

「木戸のおばーちゃん。駄菓子屋で、空門さんとの双子ちゃんや男の子たちと仲良くお話してたよって」

「おばーちゃん!？」

まさか、見られてた!？」

木戸のおばーちゃんの顔も知ってるはずなのに、全く気付かなかつた。

それにしても、まだ島に着いて三時間くらいしか経ってないのに、ここまで広がるものなのか!？」

「島の情報網を侮らないほうがいいよ」

「……来るなら、真っ先に会いに来てほしかった」

「先に蒼たちに会うなんて……」

「あー、あれは不可抗力というか……その……」

凄い顔で睨まれてる。あの、怖いです。しろはさん。

「えーっと、色々あって遅くなった。ごめん」

「反省してる?」

「反省してます」

「……なら、許してあげる」

ふっと空気が緩んだ気がした。

「しろは。待ちに待った夏休みだし、その……楽しい事、たくさんしような」

「……うん」

ようやく笑ってくれた。一安心だ。

「まずはデートしなきゃ。そのうち花火もしたいし、海水浴も……」

「そ、その辺はまたゆっくり考えよう!」

「そ、それもそうだな」

これから毎日しろはに会えるだろうし、急ぐ必要なんてない。

「……ところで、それ何?」

しろはがカウンター越しに、俺の持っているビニール袋を指差す。

「ああこれ。さっき、港でしろはのじーさんからもらったんだ。魚だ
と思うけど」

まだ時々動いているビニール袋をしろはに手渡す。

「わあ、おいしそう」

「食堂で使ってくれてさ」

「……羽依里。せっかくだし、晩ごはん食べてく?」

「え?」

壁にかけられた時計を見ると、午後五時を過ぎていた。帰っても家にあるのはインスタント食品だろうし、折角だから食べて帰ろう。

「おじーちゃんの魚、さっそく使わせてもらおうよ」

……数分後、俺の目の前には見事な生け作り定食が用意された。

ご飯に味噌汁。ひじきの煮物にわかめの酢の物。メインの活け造りはアジと鯛、イカの刺身の盛り合わせ。イカに至っては、まだ動いてる。

「おお、すごいな」

そんな中でひとつ、見たことのない刺身がある。

「なんだこれ？」

「トビウオ」

「トビウオって、あの空飛ぶ？」

「そう。内臓が少ないから鮮度が下がりにくくて、お刺身に向いてる。美味しいよ」

「それじゃ、さっそく。いただきます」

「どうぞ。めしあがれ」

一番にトビウオの刺身を口に運ぶ。コリコリしてて美味しい。

続いてご飯。これも炊きたてでふっくらとしてうまい。

「……………どう？」

「……………彼女の手料理がまずいわけない」

「そ、そういうことは思っても口に出さないでほしい……………はずかしいから」

真っ赤になって顔を背ける。ああ、可愛い。

そんな光景をほほえましく感じながら、味噌汁をすする。

「おお、味噌汁も美味しい」

「トビウオをメインに使った魚介の出汁だし。最高だし」

「え、今のダジャレ？」

「ち、違うし！」

また顔を赤くする。可愛すぎる……………。

……………そんなこんなで、食後。

「ふう。うまかった」

「お粗末さまでした」

「いくら？」

「今日は私のおごり」

「え？ いいのか？」

「再会のお祝い。次からはちゃんと貰うから」

「わかった。ありがとうな」

「うん」

「そろそろ戻らないと、鏡子さんが心配するよ？」

「……そ、そうだな。初日から遅くなるのはやばい」

席を立って、出口へ向かう。

「宿題、きちんとやらなきやダメだよ？」

「え？」

「夏休みだからって、遊びほうけてちやダメだよ？」

「あ、ああ。わかってるよ」

まるで母親のようなことを言う……めっちゃ嬉しいけど。

「ごちそうさま。それじゃ、またな」

「うん」

しろは食堂を出ると、日はほとんど沈んでしまっていた。楽しくてつい、長居してしまったみたいだ。

急ぎ足で加藤家にたどり着くと、明かりがついていた。さすがに鏡子さん、帰ってるよな……。

「……ただいま戻りました」

「あ、羽依里君。おかえりなさい」

「ごめんね。お昼の船で来るって聞いてたから、迎えに行こうとは思ってたんだけど」

「ごつちこそ、来て早々遅くなっちゃってすいません」

「いいよいいよ。私もさつき帰ってきたところなの。急な寄合が入っちゃってね」

「羽依里君の部屋覗いたら荷物はあったから、しろはちゃんの出かけてるんだろうなー、くらいに思ってたけど」

「あー、大体あってます」

「なら、もう晩御飯は食べてきた？」

「はい、食堂で食べてきました」

「うんうん。彼女の手料理、堪能してきたのね」

「そ、そういう言い方やめてください……」

しろはと島公認のカップルになって以後、こういうことは日常茶飯事だが……未だ慣れない。

「えつと……鏡子さん、改めてお世話になります」

「気にしなくていいよ。楽しい夏休みを過ごしてね」

「ありがとうございます」

「長旅で疲れたでしょう。お風呂沸いてるから、入っちゃって」

「何から何まで、ありがとうございます」

お言葉に甘えて入浴を済ませ、自室に戻ると……既に布団が敷いてあった。申し訳ない……。

持ってきた荷物を箆笥にしまい、布団に入る。

長旅の疲れもあって、すぐに俺は眠りに落ちていった。

第一話・完

第二話 7月26日

……朝。

蝉の鳴き声と、窓から差し込む日差しで目が覚める。

「おはようございます」

「おはよう。羽依里君」

居間に行くと、ちょうど鏡子さんが出かけようとしているところだった。

「あれ。出かけるんですか?」

「うん。お昼過ぎには帰れると思うんだけど。パン買ってあるから、朝食はそれ食べちゃって」

「わかりました」

「そうそう。ガレージに置いてあるバイク、好きに使っていいからね」

「ありがとうございます」

「それじゃあね」

……行ってしまった。本当に忙しい人だ。

俺は居間に座って、用意してもらったパンを食べる。コッペパンに卵サラダを挟んだ総菜パンだった。港のほうに店があつたから、そこで買ってきてくれたんだろう。

テレビをつけると天気予報をやつてた。今日も快晴のようだ。

……やがて朝食を終えて、暇になる。

バイクの使用許可も出たし、今日は少し遠出を試みよう。もしかしたら、昨日会えてない人に会えるかもしれない。

ガレージからバイクを引っ張り出す。ぶっちゃけカブだ。

「よう相棒。またよろしく頼むぞ」

ぽん。とバイクのボディを軽く叩き、またがる。

相変わらずセルスターター駄目っぽいのが、キックスイッチでエンジンをかける。調子は良いようだ。

「よし、出発!」

エンジン音を響かせながら、バイクで田舎道を走り、港へ出る。

「おお、快適快適」

朝から日差しは強いが、バイクで走ると風があつて幾分涼しい。港で掃除をしていたおばさんと軽くあいさつをして、一路灯台を指す。

「相変わらず、徒歩で来れる場所じゃないよな」

海沿いの道を行って、ほどなくして灯台に辿り着く。するとさつそく二人の女の子の姿が見えた。

「おーい。紬、静久ー」

「むぎゆー！ タカハラさんですー！」

ツインテールを揺らしながら、最初に金髪の少女がこっちに走ってきた。

「紬、久しぶりだな」

「はい、おひさしぶりですー！」

この子は紬・ヴェンダース。今は使われていないこの灯台で、親友の静久とよく遊んでいる。

二人との出会いは今年の春。たまには釣り場を変えようと、しろはと灯台に行つたところで二人に声をかけられたのだ。

「紬は今日も灯台にいるんだな」

「はい。今日もいますー！」

遠い外国の出身という事以外、住んでる所もわからない不思議ガールだ。この灯台に住んでるとかいう噂まである。

そして、灯台の中に大量のぬいぐるみをコレクションしてるとか、大量のパリングルスの空き容器をストックしてるとかの噂もある。

まあ、あくまで噂だろうけど。

「あら、パイリ君」

「静久、久しぶり」

紬に少し遅れて静久がやってきた。俺より年上で、その……何とも言えない包容力がある人だ……胸もだけど。

ちなみに静久は島の間人ではなく、普段は本土の大学に通つてい

る。

「ようやく大学も夏休みか？」

「ええ、ようやくね。そろそろパイリ君がやってくる時期じゃないか
と思ってたのよ」

「昨日から来てるんだ。八月末まで滞在する予定だよ」

「じゃあ、タカハラさんも夏休みですね！」

「ああ、そうなるな」

「……実は、そんなパイリ君に紬からプレゼントがあるのよ」

「え。プレゼント？」

「はい！」

「たくさんある中から選りすぐったのよね、紬」

「そうですね。一杯悩みました」

「なんだろう。ちよつと期待してしまう。」

「では、どうぞ！」

笑顔の紬から渡されたのは、一本の缶コーヒー。

「これは？」

「再会のお祝いです！」

「たくさんある中から、この銘柄を選りすぐりました！」

缶には『ブラック黒田のブラックコーヒー』の文字と、白地に真っ
黒いカラスのイラストが描かれていた。

「再会のお祝いが、缶コーヒー一本……」

まるでどこかで聞いたような話だ。

「むぎゅ……足りないのでしたら、まだ十本くらい残ってます」

「いや、一本で十分嬉しいよ」

俺から見えないような位置に段ボール箱が見えた。あの箱の変形
具合、どう見ても漂着物だ。

一応賞味期限を確認してみるが、大丈夫っぽい。

「それじゃ、いただきます」

恐る恐る口をつける。生ぬるいうえに恐ろしく苦いが、飲めない事
はない。

「そういえば、二人はここで何をしていたんだ？」

「シズクと一緒に体操をしました！タカハラさんも一緒にやりましょう！」

「え？ 何の体操？」

「おっぱい体操です！」

「あー、それは俺は無理だな」

「……センニューカンに捕らわれてはいけません！」

いや……やったら色々な物を失いそうな気がする。

「さあ、パイリ君もやりましょう」

「やりましょう！」

まずい。二人が迫ってくる。

笑顔だけど、手の動きが怪しい。ぶっちゃけ怖い。

「お、俺！ まだ行くところがあるから！ 缶コーヒー、ごちそうさま！」

半分以上残った缶コーヒーを一気に飲み干すと、空っぽになった缶をスボンのポケットに無理やりねじ込む。

そのままバイクにまたがり、キックスイッチを蹴ってエンジンを起動。

逃げる様に灯台を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ふう、危ないところだった」

あの場を離れるため、とっさにああ言ったけど、当然この後行く場所なんてない。

港まで戻った後、一度しろは食堂を覗いてみたけど人影はなし。まだ昼前だし、早すぎるんだろうな。

2日続けて午前中から駄菓子屋に行くのもどうかと思いつつ、バイクを走らせていると……バイクのエンジン音が急に頼りなくなる。

「おい、どうした相棒」

……やがて完全に止まってしまった。

「しまった。ガソリン切れだ」

よく見たらガソリンの残量を示すメーターがゼロになっていた。久々に動かしたから、燃料メーターまで見てなかったな。

仕方ないので、そのまま押していくことにした。住宅地まで行けば、スタンドがあつたはずだし。

「が、頑張れ俺。頑張れ」

蝉の大声援と強烈な日差しの中、ただの荷物になってしまったバイクを必死に押す。

目の前には緩やかながら、長い坂。

「俺は登り始める。長い坂道を……」

……って、何を言ってるんだろう。暑さにやられてるんだろうか。それからかなりの時間をかけて、やっとの思いでスタンドに到着し、燃料を補給。

一方で、缶コーヒーしか燃料を補給していない俺はへろへろだ。

「つ、疲れた……」

復活したバイクを走らせ、昼頃によく加藤家に帰ってくる。さすがに腹が減った。

「な、何か食べよう……」

冷蔵庫の中を探すが、ほとんど空っぽに近い。水屋の中を探して、ようやくカップうどんを見つけた。栄養価は心許ないが、この際しようがない。

お湯を入れて三分でできる、人類の英知が生み出した確信的な食べ物だ。

「う、うまいー！」

きっちり三分待つてからいただく。味もそれなりだが、空腹は最高のスパイス。おつゆまで飲み干す。

「……ぐちそうさまでした」

満腹になると、とたんに眠気が襲ってくる。

「食欲の次は睡眠欲……これも人間の三大欲求の一つだ……抗えるはずもない……ぐう」

俺は睡魔に身を任せ、眠りに落ちる……。

……どれくらい眠っていただろうか。

「……みませーん！」

「……………ん？」

「あの一、すみませーん！」

玄関から誰かが呼ぶ声で目が覚める。

「こんにちわー！」

「……しまった。眠ってた！」

「はいー！」

跳び起きて、急いで身だしなみを整えてから玄関へ向かう。すると玄関先に見たことのない女の子が立っていた。

「ここ、加藤さんのお宅ですよね？」

「はい。そうですけど」

「初めまして。岬 夏海です。親戚の」

「あー、今日来るっていう……」
すっかり忘れていた。鏡子さんと同じ苗字だし、この子がそうなのか。

それにしても……なんだろう。初対面なのに、どこかで会ったことがあるような。

……ああ、鏡子さんに雰囲気似てるんだ。さすが親戚というか。

茶色くてショートボブの髪型。黒い蝶のアクセントがついたヘアピンをつけている。

そして大きなリュックサックを背負っている。

「あの、あんまりじろじろ見ないでください」

「ご、ごめん」

「えっと、鏡子さん、出かけちゃってるみたいなんだ」

「そうですか」

「上がっていいよ」

「それじゃ、お邪魔します」

居間が上がってもらい、適当な場所に荷物を置いてもらう。とりあえず麦茶を出して、対面に座る。

「えーっと、俺は鷹原羽依里。鏡子さんの甥……ってことになるのかな」

「鷹原さんですね。よろしくお願いします」

「……」

「……」

夏海ちゃんは出された麦茶に手をつけず、正座して、両手は膝の上。背筋もびしっと伸びていて、顔は俺の方をじっと見たまま。

すごく緊張してるのが手に取るようにわかる。

「……」

「……」

そりやそうだろう。親戚の女の人がいるはずの家に行ってみたら、若い男の人が一人いるんだもん。緊張するなって方が無理かもしれない。

「えーっと、夏海、ちゃん？」

「はい」

「……麦茶、飲んでいいからね」

「はい」

「……」

「……」

「えーと、夏海ちゃんって、何年生？」

「6年です」

「へえ、そうなんだ……」

「……」

「……」

全然会話が續かない……。

正直、気まずい……。

その後も沈黙の時間が続き、耐えきれなくなった頃……。

「ただいまー」

鏡子さんが戻ってきたらしい。助かった。

「夏海ちゃん、来てる?」

「……お邪魔してます」

「ごめんね。港に迎えに行ったんだけど、入れ違いになっちゃったみたいで」

「いえ。夏休みの間、お世話になります」

「その様子だと、もう羽依里君とは自己紹介済ませたみたいね」

「はい」

「それじゃ、お部屋に案内するわね」

「はい」

夏海ちゃんが荷物を持って鏡子さんについて行ったので、ようやく解放された気分になる。

「つて、俺が緊張してどうするんだ……」

いくら男子校で女子と話す機会が少ないからって、初対面の女の子相手に、あそこまで緊張するなんて。

島の皆と初対面の時は大丈夫だったんだけどな……。

夏海ちゃんは部屋に荷物を置いた後も、鏡子さん家の中を案内されてるみたいで、家のあちこちから話し声が聞こえていた。

俺はというと、ついて歩くわけにもいかず、居間から動けずにいた。

……数分後、鏡子さんに家の中の案内してもらった夏海ちゃんが居間に戻ってきた。

「夏海ちゃん、自分の家だと思ってくつろいでいいからね」

「鏡子さん、ありがとうございます」

「羽依里君、夏休みの間に一緒に暮らすんだから、夏海ちゃんと仲良くね？」

「ええ。わかっています」

「それじゃ、私はもう少し用事があるから」

え、鏡子さん行っちゃうの。

「……仲良くね？」

「は、はい……」

俺の心中を察したのか、鏡子さんは意味深な笑顔を俺に向けた後、どこかへ出かけていった。

そして、また二人で居間に残される。

「……」

「……」

「……て、テレビでもつけようか」

沈黙に耐えれず、俺はテレビをつけてみる。

テレビでは、子犬がボールと戯れる様子が映っていた。

「おお、激プリチーだね」

「そうですね」

少しして、今度はニワトリがボールの上に乗ってきた。

「おお、激スリリングだね」

「そうですね」

今度は猿が近づいてきた。

「激モンキーだね」

「そうですね」

……面白かったが、会話は相変わらず続かなかった。

やがて政治家の討論番組が始まったので、テレビを消す。

テレビを見ていた間も、夏海ちゃんの表情にはほとんど変化がな

い。まだ緊張してるんだろう。

「……」

「……」

再び訪れた沈黙の時。

……駄目だ。限界だ！

「……夏海ちゃん、かき氷食べたくない？」

「か、かき氷ですか？」

「近くにかき氷を売ってるお店があるんだけど」

「は、はあ……」

「行こう！」

半ば強引に誘って、駄菓子屋へ向かう。こうなったら、皆の力を借りるしかない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おっ？」

駄菓子屋に着くと、昨日と同じように良一がベンチに座ってラムネを飲んでいた。

「なんだ、その子？」

「まさか……隠し子か？」

「違う。親戚の子だ」

俺は夏海ちゃんに良一を紹介する。

「こいつは三谷良一。時々上半身裸になるが、そういう生き物だと思ってくれ」

「ええー……」

あ、じりじり後退してる。ぶっちゃけ怖がってる。

「羽依里、もう少しマシな紹介してくれ……めちやくちや引いてるじゃないか」

「だって、間違ってるないだろ？」

「そうだけだよー」

「ほら、夏海ちゃんも自己紹介して。大丈夫。取って食われたりしないから」

「……岬 夏海です。三谷さん、よろしくお願いします」

「おう、よろしくな、夏海ちゃん！」

「そういえば良一、対応が自然だとは思ってたけど、確か妹がいるとか言ってたっけ。」

「こんにちは。羽依里さん」

「あれ、見かけない子ねー？」

その時、ちようど店の中から藍と蒼が出てきたので、二人にも夏海ちゃんのことを紹介しておく。

「ああ、鏡子さんの親戚の子ね。今日来るって話は聞いてるわよ」

「なんで聞いてるんだ？ 島の情報網恐るべし。」

「わたしは空門藍。こっちが妹の蒼ちゃんです」

「そう言いながら藍は蒼の両肩を掴んで、ぐいっと真横に引っ張ってくる。」

「あ、同じ顔」

「あたしと藍は双子なの。よろしくね。夏海ちゃん」

「はい。よろしくお願いします」

「ちなみに、蒼は蒼穹の蒼よ」

「おいおい、いくらなんでも小学生にその字はわからないだろ……。」

「はい。蒼さん」

「え、わかるの？ 俺、天善に教えてもらわなかったら分からなかったんだけど。」

「そうだ蒼、夏海ちゃんにかき氷頼めるか？」

「いいわよ。何味？」

「え？ えーっと」

「あ、そつか。イチゴ、メロン、レモン、ブルーハワイ。どれにする？」
「えっと、それじゃレモンで」

「どれも同じ味だけどね」

「そ、そーなんですか？」

「なんか……久しぶりね。その反応」

お約束のネタがスルーされることが多い昨今、夏海ちゃんの新鮮な反応に、蒼はどこか嬉しそうだ。

「そうそう。練乳かける？」

「え？ レモンに？」

「なあ、レモンに練乳ってありなのか？」

「レモン牛乳つてのがあるくらいだし、ありなんじゃない？」

「えっと……それじゃあ、お願いします」

夏海ちゃん、冒険した。

「110万円よ」

「え」

「あ、俺が出すよ」

ポケットから200円を渡す。

「はい。おつり90万円。ところで、羽依里は食べないの？」

「あ、俺はいいよ」

慌てて出てきたから、ポケットに200円しか入って無かったとは言えない……。

「じゃあ、少し待っててね」

しゃこしゃこ氷が削られる音が響く。そんな中、夏海ちゃんは棚に並んだ駄菓子を物珍しそうに見て回ってる。

「あの、この木の枝はなんですか？」

「ニツキの木です。食べられますよ」

「食べられるんだ……この紙も？」

「はい。ガムみたいな噛むお菓子です」

「この割り箸の先についてるのはなんですか？」

「水あめですね。その割り箸でよく練ってから食べるんです」

「へえー……」

藍が隣に立って相手をしてかれている。見たことない駄菓子を前に、夏海ちゃんの目がキラキラしている。

二人とも子供相手には慣れてるだろうし、女の子同士の方が話しやすい部分もあるんだろう。正直助かった。

「はい。氷レモン、おまたせー」

「ありがとうございます……え？」

蒼からレモン練乳を受け取って、その量に目を丸くしている。

「これで百円……？」

「あれ、少なかった？」

「いえ、逆です」

「なら良かった。溶けないうちに食べちゃって」

「はい。いただきます」

かき氷をこぼさないようにゆっくりとベンチに戻ってくる。

俺の隣に座って、太陽の光を受けてキラキラと輝くかき氷をスプーンストローですくって口に運ぶ。

「おいしいです！」

「氷が違うからな」

「そうなんですか？」

「良一、嘘言わないで。ただの水道水よ」

「でも、おいしいです」

おお、初めて笑った気がする。

その後もかき氷を食べながら、蒼や藍と色々な話をしていた。

「くーださーいなー」

しばらくすると、がらがらとスイーツケースを引きながら鷗が現れる。

「いらっしやーい」

「かき氷ください」

「いいわよ。何味？」

「イチゴとメロン半分ずつで。あと練乳もお願いします」

「通な食べ方するわね。120万円よ」

「はい」

笑顔で120円を渡している。さっきの夏海ちゃんと反応が違うせいか、蒼の表情が若干暗い。

「あと、ここに鳥白島まんじゅうって売ってます?」

「あるわよ」

「あるのか。ここ駄菓子屋だろ?」

「クッキーや最中もあるわよ」

「もはや和菓子屋だな……」

「それじゃ、鳥白島まんじゅうと最中、ひとつずつください」

「全部で900円よ」

「お土産買うってことは、もう帰るのか?」

「帰らないよ? 名物があるって聞いたから、食べてみたくなっただけ」

そういう考えもあるのか……。

「なあ羽依里、あの美少女は誰だ?」

良一がほとんど密着するくらいの距離まで近づいて耳打ちしてくる。暑苦しいからやめてほしい。

「鳴のことか?」

「知ってるのかよ! しかもファーストネーム!」

「昨日知り合ったんだ。島に観光に来てるみたいだぞ」

「天善ちゃん、スーツケースの女の子にベンチ譲ってあげて」

「だから良一だって言ってるだろ!」

だが涙目で立ち上がる良一。主従関係ははっきりしているらしい。

「いいよいよ。スーツケースに座ってるから」

「そういう時便利だな。そのスーツケース」

「でしょ。羨ましい?」

「いや、全然」

「……あれ?」

スーツケースに腰掛けてかき氷を待っていた鳴が、俺の隣でかき氷を食べている夏海ちゃんに気づく。

「誰その子」

「うん？ ああ、この子は……」

「……まさか、羽依里の隠し子!？」

「良」と同じことを言うなっ！ 親戚の子だっ！」

そのまま成り行きで、鷗に夏海ちゃんの紹介をする。

「私も昨日この島に来たの。同じ旅人だねえ。なっちゃん」

「な、なっちゃん……?」

「ありや、なつなつが良い?」

「なっちゃんでもいいです……」

「私、久島鷗。よろしくね」

「よろしくお願ひします。鷗さん」

「はい、かき氷おまたせー」

「わーい」

イチゴの赤とメロンの緑。見た目はすごく鮮やか。まるでスイカのようだ。

……そのかき氷が溶けた時の事は想像したくないけど。

「二種類の味が楽しめるなんて、お得だよね」

「あー、味は同じだけどね」

「蒼さん、さつきも言ってますけど、それって本当なんですか?」

夏海ちゃんが当然の疑問を投げかける。俺だって半信半疑だ。

「本当よ。味は同じで、色と香料で違いを出してるだけ」

夏海ちゃんは何とも言えない表情で自分の氷レモンと鷗の二色かき氷を見ている。

「なっちゃん、私の食べてみる?」

「え? 良いんですか?」

「うん、どうぞ」

「じゃあ、一口……」

まず氷イチゴの部分、続けて氷メロンの部分を食べる。次に自分の氷レモンを食べる。

「むー?」

香料でごまかされてるせいか、首をかしげている。

「確かめたかったら、鼻摘んで食べてみるとか?」

「さ、さすがにそこまではしないです……」

結局、その後も騒がしく皆でおしゃべりしていた。夏海ちゃんの緊張もだいぶほぐれたみたいだし、皆には本当に感謝だ。

……やがて夕暮れになり、俺達二人は見送られながら帰路につくことに。

「楽しかったです」

屈託のない笑顔で笑ってくれる。

初めて会った時は大人びて見えただけ、今だと年相応というか、逆に幼く見えるな。

「鷹原さん、知り合い多いんですね」

「うん。この島の人とはほとんど知り合いじゃないかな」

「すごいですね」

俺にも話しかけてくれるようになったし、一步前進だろうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後は一度家に帰って鏡子さんの許可をもらい、しろは食堂に出席する。

急に俺達が仲良くなったのを見て、鏡子さんも驚いていたみたいだけど。

何か納得したような表情をした後、俺達を笑顔で送り出してくれた。

「着いた。この店だよ」

「え、ここですか？」

表の看板を見た夏海ちゃんは、何とも言えない顔をする。

「しろは食堂……」

インパクトのある墨文字だし、傍から見ると強面のおやじが経営する居酒屋か何かに見えるかもしれない。

「中は普通の食堂だから。安心していいよ」

「そうなんですか？」

「俺の彼女がやってるお店だからさ」

「え。鷹原さん彼女いるんですか？」

「い、いるし」

何故か声が裏返ってしまった。

「と、とりあえず中に入ろう」

……急に気恥ずかしくなってしまった。それを誤魔化そうと、足早に店に入る。

「あ、いらつしやい」

カウンターの向こうで振り返ったしろはだが、すぐに客が一人多いことに気づく。

「あれ、その子は？」

「鏡子さんとこの親戚の子。今日から夏休みの間、一緒に暮らすことになったんだ」

「初めまして。岬 夏海です」

「はじめまして。鳴瀬しろはです」

カウンター越しに、ペコペコとお辞儀を繰り返す二人。

セルフサービスのお冷を用意しながら、その様子を眺める。

なんとも微笑ましい光景だ。

お辞儀の後、じーつとしろはの顔を見る夏海ちゃん。

「な、なに……?」

「……しろはさんが、鷹原さんの彼女さんですか？」

「うん、そう」

笑顔で即答。めっちゃ嬉しい。

「……って、親戚の子に何話してるの?」

その後、思いつきり睨まれた。

「いや、成り行きでさ……」

「……別に良いけど。本当のことだし」
顔真っ赤になってますよ、しろはさん。

「……」

いや、これって俺の顔も赤くなってるパターンだよな。

「と、とりあえず晩ごはんにしよう！」

微妙な空気を打ち消して、俺と夏海ちゃんはメニュー表に目をやる。

「えーと……」

夏海ちゃんはウエストポーチの中身を見ながら、なんだか迷っている。

「あ、食費は俺が出すから、好きな物注文していいよ」

「え？ 悪いですよ」

「大丈夫。こう見えてバイトしてるから」

「じゃあ……コロッケ定食をお願いします」

「俺はかつ丼かな」

「わかった。少し待ってて」

しろはが調理に取り掛かる。

……それから15分程で料理が出てきた。

夏海ちゃんの前にはご飯、味噌汁、漬物、きゅうりの酢の物、メイソンのコロッケ。そして付け合わせに大量の千切りキャベツ。

俺の前にはメインのかつ丼の他に漬物と味噌汁が並び、栄養面を考えてか野菜サラダもついていた。

「あとこれ、おまけ」

更にアジの南蛮漬けが登場。

「これって昨日の？」

「うん。アジだけ少し残っちゃったから。南蛮漬けにしたの。おいしいよ」

「こうやってテーブルに並べられると、凄い量だな……」

「作りすぎちゃったかな……二人とも、大丈夫？」

「……たぶん食えるとは思うけど」

「が、頑張ります」

「うん。二人とも食べ盛りなんだから、これくらい食べないと。それじゃ、冷めないうちにめしあがれ」

「いただきまーす」

さっそく揚げたてコロッケにかぶりついた夏海ちゃん。

「あつっ……」

やっぱり熱かったみたいで、慌てて水を飲んでる。

「でも、おいしいです」

コロッケからはサクサクといい音がしている。

「クラッカーを細かく砕いて、衣に混ぜてるの。サクサクでしょ」

「はい！」

「俺のカツもそうなのか？」

「ごめん、そっちは普通のパン粉だけ」

「そ、そうか……でもおいしいよ」

スタンダードなかつ丼だけど、卵と出汁がしっかりとトンカツに絡んでうまい。刻まれたタマネギも甘くて良いアクセントになっている。

続いてアジの南蛮漬けに手を伸ばす。衣はサクツと香ばしく、アジの身はしっとり。漬け込まれているので骨までまるごと食べられるし、野菜も良いアクセントになっている。

「サラダのドレッシングも自家製だよ」

シソを使った和風ドレッシングっぽい。優しい味だ。

「ふう、ごちそうさま」

ゆっくりと時間をかけて、昨日に引き続き手料理を堪能した。

「おいしかったです。しろはさん！」

夏海ちゃんも満足してくれたようだ。

「お粗末さまでした」

なんだかんだで食べられてしまうものだ。もちろん、美味しかった

のもあるけど。

「羽依里、明日はどうするの?」

「明日? 特に予定ないけど」

「それなら、夏海ちゃんに島の案内をしてあげたら?」

「それもいいかも。夏海ちゃん、どうかな?」

「見て回りたいです。気になるところ、ありますし」

「気になるところ?」

「灯台とか」

あー、あの灯台は遠くからでも目立つし、気になるだろうなあ。

「そうだ。しろはも一緒に来ないか?」

「ごめん。私は明日用事があって……」

「いや、用事があるならしょうがないよ」

「それじゃ夏海ちゃん、明日は島を案内するよ」

「はい、よろしく願います」

明日を楽しみにしながら、俺達は食堂を後にした。

ちなみに加藤家に帰宅すると、鏡子さんがちょうど一人で夕飯のカップうどんを食べているところだった。

その様子を見た夏海ちゃんは、何かものすごいショックを受けたような顔をしていた……。

第二話・完

第三話 7月27日

「鷹原さーん！」

「そろそろ起きてくださーい！」

「もう八時ですよー！」

夏海ちゃんの元気いっぱいの声に起こされる。

そういえば、朝に誰かに起こされるとか、久しぶりだ。

「夏海ちゃん、おはよう……」

目を開けると、目の前にピンク色のフリルがついたエプロンを着た夏海ちゃんが立っていた。

「えっと、そのエプロンは……？」

「さあ？ 台所にあったので、鏡子さんのじゃないですか？」

鏡子さんはそんなフリフリエプロンは着ないと思う。

それ以前に、料理しているところをほとんど見たことがない。

「そんなことより、ごはんが冷めてしまいますから、早く起きてください」

顔を洗って居間に行くと、チャーハンが用意してあった。

「え？ チャーハン？」

思わず二度見してしまった。

「えーと、夏海ちゃんが作ったの？」

「はい。頑張りました」

味噌汁の隣に置いてあるのは、間違いなくチャーハンだった。

「朝からチャーハン……？」

「あ、もしかしてチャーハン嫌いでした？」

「いやいや、そんなことはないよ」

チャーハン嫌いって人も、そうそういないと思う。

「でしたら、食べましょう」

エプロンを外した夏海ちゃんも向かいに座り、二人揃って朝ごはんにする。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

スプーンですくって口に運ぶ。

「おお、美味しい」

全体に良く味が染みていて、ご飯もパラパラ。具材の炒め具合も絶妙だ。

「よかったです。たくさん食べてくださいね」

「うん」

「そういえば、鏡子さんは？」

「今日も朝から寄り合いだそうで。少し前に出ていかれました」

「忙しい人だからなあ……」

「ですなあ」

そんな会話をしながら、朝からチャーハンという少し変わった朝食を堪能した。

食後、夏海ちゃんが洗い物を終えて居間に戻ってくる。

「鷹原さん。一つ相談があるんですが」

「え、どうしたの？」

「この家で生活するにあたって、家事の分担をしたいと思うんです」

「昨日、鏡子さんに家の中を案内してもらった時に、洗面所やお風呂を見せてもらったんですが」

「洗濯物は溜まってましたし、お風呂もその……」

「あー……言いたいことはわかるよ。細かく見てたんだね」

「そして、昨日の鏡子さんの夕食……!」

そういえば昨日の夜、鏡子さんが一人でカップうどんを食べていたのを見た夏海ちゃんは、何かを決意していたみたいだった。

「私達はもしかして、鏡子さんに大変な苦勞をかけてしまっているのでは……!」

確かに自分たちが外食してきて、帰宅したら家主さんがカップうどん食べてたらショックだよなあ。

「違うよ。あの人はものすごい偏食でさ。それに、加藤の家の血筋と

して、致命的に料理が下手なんだ」

「それじゃあ、鏡子さんはご飯どうしてるんですか？」

俺は無言で台所の隅に積まれた大量のカップうどんの容器を指し示す。

「……マジですか？」

「マジマジ」

「三食全部？」

「たぶん」

「まさか、鷹原さんもですか？」

「いや、俺はしろはにチャーハン習ったから」

「じゃあ、料理できるんですね？」

「チャーハンだけね」

「ええー……極端ですね」

「まあ、わけありだね」

「それに、俺は夜には食堂に行ってるから」

「あ、しろはさん食堂ですね」

「うん」

「鏡子さんは食堂、行かないんですか？」

「うーん。しろはから鏡子さんが来たって話は聞いたことないなあ」

「偏食、ですかあ……」

夏海ちゃんが何とも言えない表情を見せている。

「それでも、家事を分担しようってのはいいことだと思うよ」

「で、ですよね。ですよね」

とりあえず鏡子さんの件は棚上げにして、家事分担の話を進めることにする。

「ひとまず私たちの食事ですが、朝ごはんは私が作ります」

「今朝も作ってくれたよね」

チャーハンだったけど。

「こう見えて得意なんですよ」

「じゃあ、お願いするね」

「はい！」

「夜はしろは食堂でいいとして、問題はお昼だね」

「鷹原さん、作ってくれますか？」

「さつきも言ったけど、俺が作れるのはチャーハンだけだからね」

「今日だと、二食続けてチャーハンになってしまいますね」

それは、正直きついなんてもんじゃないと思う。

「そうだ。確か港の方にスーパ―があつたはずだよ」

「え、そんな大きなお店があるんですか？」

「うん。お昼はそのお惣菜で工面するつてのはどうかな」

「栄養の偏りは否めませんが、背に腹は代えられませんか」

なんとか食事の件はまとまった。続いて他の家事に取り掛かる。

食事の他に思い浮かぶ家事と言えば、風呂掃除、トイレ掃除、ゴミ

出し、買い出し等々。

厳肅なる協議と公正なる抽選の結果、洗濯も夏海ちゃんが引き受け

てくれ、俺の仕事は掃除とゴミ出し、そして買い出しに決まった。

「掃除やゴミ出しなんて、料理に比べたら楽なもんだよ」

「水回りの掃除つて大変なんですよ。ごきごき出てきますし」

「バキ……？」

……聞かなかつたことにしよう。どうか、遭遇しませんように。

家事分担を決めた後は、宿題することに。

俺自身としてはあまりやる気はなかつたけど、夏海ちゃんが参考書やノート広げて頑張つてるのに俺がやらないわけにもいかず、向かい合つて勉強した。

その宿題も一時間ほどで終わる。

「それじゃ夏海ちゃん、宿題も終わったし、そろそろ島を案内するよ」

「はい、よろしくお願いします」

「でも、歩いて回るにはこの島、結構広いですよね？」

「大丈夫、バイクがあるから。後ろに乗ったらいよいよ」

「え、二人乗りですか」

「ヘルメットあるし、島だから大丈夫だよ」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

ガレージからバイクを引っ張り出した後、後ろの荷台に夏海ちゃんを乗せて出発する。

夏海ちゃんは昨日、灯台が気になってるって言ってたけど、まずは近場の神社から案内することにした。

石段の下にバイクを止め、境内まで歩く。

「すごい眺めですねー」

「島でも高い場所にあるからね」

一番上まで来ると、住宅地から海まで一望できる。

「ここは海神を祭ってる神社だね。年に一回のお祭りでは、ここから神輿が出ていくんだ」

「今年もあるんですか?」

「もちろんあるはずだけど……いつだったかな」

「……今年は8月21日だな」

すぐ後ろから声があったので振り返ると……そこに天善が立っていた。

「む……鷹原、見慣れない子を連れてきているな」

「ああ、親戚の子なんだ。昨日から島に来てるんだよ」

その場の流れで、天善に夏海ちゃんを紹介する。

「岬 夏海です。よろしくお願ひします。加納さん」

「俺のことは天善でいい。よろしくな」

「はい。天善さん」

「フ……」

あ。なんか嬉しそうだ。

「ところで天善、お前はこんなところで何をやってるんだ?」

「ああ、日課の参拝をしていたところだ」

「ごこつて、なにかご利益があるんですか？」

「海運祈願とかじゃなかったかな？」

「この神社は、連日通うと必殺技を授けてくれるらしくてな」
え、そんなのだっけ？

「あの一、必殺技ってパンチ拳とか、オーロラの剣とかですか？」

どうしよう、夏海ちゃんの言ってることの意味が解らない。

「残念だが、俺が欲しているのは卓球の必殺技だ」

そして、天善の言っていることの意味も解らない。

「……実は、夏海ちゃんに島を案内している途中なんだ」

だから、足早に退却させてもらうことにした。

「そうか。俺はもう少しここで粘ってみるとしよう」

「それじゃあな」

「ああ」

夏海ちゃんを連れて石段の下まで降りてきたところで、神社から

『ちよれええええええええい！』

と、謎の声が聞こえてきたが、ここは何も聞かなかったことにしよう。

再びバイクにまたがり、一本道を抜けて港まで出る。連絡船乗り場
周辺を案内した後、昼ごはんを買うためにスーパーを探す。

「あれ？ この辺りにあったはずんだけど……」

「あ、もしかしてあれじゃないですか？」

結構大きめの店があった。しかし、シャッターが下りている。

「閉まつてる？」

「……なんか、張り紙が貼ってますよ？」

「なになに……」

『当店は五月末をもって閉店します。短い間でしたが、ご愛顧ありが

とうございしました。スーパー徳田』

「潰れちゃったみたいですね」

「……お昼ごはん、どうしまししょう?」

「確か、港には小さい商店もあつたはずだよ」

記憶の糸を辿って、港周辺を散策し、ようやく見つけた商店で食料品を買い込む。結局インスタント食品しか手に入らなかった。

それをバイクの座席にある収納スペースにしまい、そのまま灯台へ向かう。港を抜けてしまえば、あとは灯台まで海沿いの道が続く。

道幅も広いので、それなりに飛ばす。潮風がいい感じで身体に当たって、涼しい。

横目に見える海面も太陽の光を受けて、キラキラと輝いている。

そんな景色を楽しんでいると、灯台に到着した。適当なところにバイクを止めて、二人で灯台に近づいていく。

「色がついてない灯台なんて、珍しいですね」

言われてみればそうかも知れない。たいてい赤とか白とか色がついているイメージがあるけど。

「随分昔に作られたらしいから、そのせいかもね。今は使われてないらしいし」

「そうなんですネ。でも近くで見ると、すごく大きいです」

「あら、ありがとう」

「え?」

いつの間にか夏海ちゃんの背後に静久が回り込んでいた。灯台の影にいたらしい。

「でも、あなたのも将来有望よ?」

「は、はい?」

静久は夏海ちゃんの両肩に手を置き、意味深に頷いている。

「あー、静久。大きいっていうのは灯台のこと……」

「パイリ君は黙っていて」

「はい……」

怒られた。乙女の会話に口を挟むなということだろうか。

俺が意味も解らずうなだれていると……。

「あ、タカハラさんです！」

どこからか紬の声が聞こえた。

「紬？」

声はするものの、姿が見えない。

「こつちですよー」

「こつち？ どつち？」

「上ですよー」

「上？」

見上げると、紬が灯台の柵にもたれかかり、こつちを見下ろしながら笑顔で手を振っていた。

「うおっと」

俺は慌てて視線を下げる。

ちょうど太陽の位置で逆光になってくれていて助かった。危うく

見えてしまうところだった。

「な、何をしてるんだー？」

俺はなるべく上を見ないように紬に話しかける。

「風を感じていまーす」

風を受けてツイントールがふわふわ。ついでにスカートもふわふわ。危ない危ない。

「つ、紬ー。降りて来いよー」

「むぎゅ？」

本人、まったくわかってないみたいだし。

「えーと、紹介したい子がいるから、降りて来いよー」

「……？ はーい」

なんだか腑に落ちない感じだったが、灯台から降りてきてくれた。

紬と静久の二人が揃ったところで、夏海ちゃんを紹介しておく。

「夏海ちゃんね。私は水織静久。おっぱいさんでいいわ」

「はい。よろしくお願いします。静久さん」

華麗に流した。年齢不相応なスルースキルだ。

「わたしは紬・ヴェンダースです。紬と呼んでください」

「よろしくお願ひします。 紬さん」

「夏海ちゃんは昨日島に来たばかりでさ。今日は島を案内してるんだ」

「そなんですね」

「外から来てる私が言うのもなんだけど、良い島よ。ここは」

「はい、素敵な所ですね」

「……ところで、ナツミさん！」

「はい？」

「ずいっと夏海ちゃんに近づくと」

「自己紹介も済みましたし、さっそくお友達になりましょう！」

「えっ、お友達？」

「はい！ いけませんか？」

「いえ、いけまかないです！」

「なんか、紬の勢いに圧されて夏海ちゃんがしどろもどろになってる。」

「では、さっそくズツ友に認定します！」

「ず、ズツ友……？」

「ふふ。紬の友達なら、私も友達ね」

「では、ズツ友のナツミさんにプレゼントがあります！」

「紬は素早く灯台の中に入ると、大きなぬいぐるみを二つ持って戻ってきた。」

「ア riquイさんのぬいぐるみと、ナマケモノさんのぬいぐるみ、好きな方を差し上げます！」

「え、ええー……」

「大きい。1メートル近くあるじゃないだろうか。そしてどっちも可愛いとは言えない。どっちかっていうとキモい。これも流れ着いた品だろうか。」

「え、えーつと……じゃあ、こっちで」

「夏海ちゃんは悩んだ結果、ア riquイのぬいぐるみを選んだ。」

「サユリさんをよろしくお願ひします」

「ア riquイの名前だろうか。」

「流れ着いたばかりの頃は、それはそれは哀れな姿でした。ゆであがったゾウのようにデロンデロンで……」

やめて、想像したくない。

「そんなアリックイさんも、シズクが直してくれました。今ならどこにオヨメに出しても、恥ずかしくありません!」

色々語弊がある言い方だけど、ここはあえて何も言わないほうが良さそうだ。

バイクの収納スペースにはすでに食料品が詰まっているので、もらったぬいぐるみはまるでリュックのように背中に背負う羽目になった。

その後、四人でしばらく話をしていたが、まだ夏海ちゃんを案内している途中であることを伝え、灯台を出発することに。

「それじゃあ、俺たちは行くよ」

「はい、また一緒に遊びましょう!」

「パイリ君、夏海ちゃん、またね」

「はい! またです!」

二人に見送られながら、再びバイクを走らせる。

「夏海ちゃん、そのぬいぐるみ臭ったりしない?」

「大丈夫ですよ。ふかふかです」

「……ちよつと暑いですけど」

「走ってれば風があるし、帰るまで少し我慢してね」

「はい!」

灯台の方……島の東側は大方見て回ったので、いったん昼食を食べるに加藤家へと向かう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その途中、小学校の前を通りかかる。

「ごっつて……」

「あ、行く時に紹介し忘れてたね、小学校だよ。今は夏休み中だけど」
バイクを止めて簡単な説明する。

「小さいけどプールもあるんだよ。でも島の子はほとんど海に行っ
ちやうみたいで、ここはすごく寂れちやつてるんだ」

「……」

「祭りが近くなると、ここで祭りに使う灯笼を作ったり……つて、夏海
ちゃん？」

「……」

どうしたんだろう。どこか遠くを見てるような。心ここにあら
ずって感じた。

「……大丈夫？」

「だ、大丈夫です……」

声が震えてる。それに凄い汗だ。

ぬいぐるみ背負ってるし、もしかして日射病だろうか。

「大丈夫、大丈夫ですからっ」

「でも」

「い、一回帰りましょう！ お腹空きましたし！」

「う、うん……」

夏海ちゃんに気圧されるように、再びバイクを走らせる。

道中、後ろの夏海ちゃんの様子がずっと気になってたけど……加藤
家に着く頃には、すっかり良くなったみたいだ。

……どうしたんだろう。暑い中、連れまわしすぎちゃったかな。

帰宅後、港の商店で買ってきたカップうどんで昼食をとる。

念のため、昼食後に夏海ちゃんに体調の確認をしたけど、午後から
も案内よろしくお願いしますと笑顔で言われた。

ちなみに、アリのクイのぬいぐるみは夏海ちゃんの部屋に鎮座するこ
とになった。

そして午後からはもしものことを考えて、加藤家の周りを徒歩で

ゆっくり見て回ることにした。

住宅地、役所、漁港、診療所等一通り見て回って、最後に休息を兼ねて駄菓子屋に立ち寄った。

「羽依里、夏海ちゃん、いらっしやーい」

さっそく店先の掃除をしていた蒼に声をかけられた。

「蒼、かき氷もらえるか?」

「いいわよ。何味?」

「俺はブルーハワイ。夏海ちゃんは どうする?」

「今日は氷イチゴください」

「わかったわ。適当に座って待っててねー」

蒼は俺から200円を受け取ると、すぐに店の奥へと入っていく。

ベンチのほうを見ると、藍としろはが座っていて、その向かいにスーツケースに座った鴎がいた。

「夏海ちゃん、座っていいよ」

ベンチには後一人分のスペースしか無かったので、夏海ちゃんに座るように促す。

「ちよつと待ってください。しろはちゃんの隣は羽依里さんが良いと思います。恋人同士ですし」

「あ、そうですねー」

悪戯っぽく笑う藍と夏海ちゃん。俺は言われるがまま、しろはの隣に座らされてしまった。

「ほうほう、二人がそんな関係だったなんて」

そういえば、鴎は俺としろはの関係を知らなかった気がする。

「それなら、なっちゃん。隣カモン」

てしてし、とスーツケースを叩く。

結局、夏海ちゃんは鴎の隣でかき氷を待つことになった。

「しろはと鴎はスイカバー食べてるのか?」

「ううん。スイカバーは貴重だからしろしろに譲ったの。私のはメロンバー」

なるほど、言われてみれば鴎のはメロンバーだった。

というか、しろしろか……。変わった呼び方だな。

「羽依里、夏海ちゃんをちゃんと案内してあげた？」

「ああ、めぼしいところはそれなりに回ったつもりだよ」

「……ため池は？」

「あ。行ってない」

「あそこ、大きなザリガニが釣れる穴場なのに……」

「えー、そこ重要なのか？」

「重要だし。ゆくゆくは羽依里と夏海ちゃんにザリガニの調達を頼もうかと……」

「あ、特製チャーハンの材料だったな」

「そう。あそこのは活きが良いから」

ちなみに、当事者の一人に数えられている夏海ちゃんはというと、ベンチの下で涼んでいたイナリに興味津々といった様子。

「えーと」

イナリに声をかけようとして、夏海ちゃんが固まった。なんと表現しているのか悩んでる感じだ。

「この子はイナリです。こう見えてキツネです」

そこに藍が助け舟を出す。

「キツネ……」

「ほらイナリ、あいさつしてください」

「ポン！」

「キツネ……？」

二度見したり、イナリの前足を握ったりしてる。

「……よろしく、イナリさん」

「ポン！」

色々考えるのをやめたみたいだ。

「……ごちそうさま」

そのタイミングで、しろはがスイカバーを食べ終わる。そして、すぐに立ち上がる。

「……ごめん、もう食堂に戻らないと」

「え、行っちゃうのか？」

「うわ、心底悲しそうな顔してますね」

「……ごめん。本当に少し休憩に寄っただけだから」

「もしかしてしろはちゃん、今日一日羽依里さんと一緒にいた夏海ちゃんに嫉妬してるんじゃないですか」

「そ、そんなんじゃないし！」

「ふふ、冗談です」

「帰る。それじゃ」

しろはは、どこかばつが悪そうに去っていった。

「はい、かき氷お待たせー」

少しの間を置いて、両手にかき氷を持った蒼が店の奥から戻ってきた。

「……ってしろは、もう帰っちゃったの？」

「ああ……食堂が忙しいんだってさ……」

「うわ、心底悲しそうな顔してるわー」

さすが双子、見事にシンクロした台詞をありがとう。

「くそ、こうなったらブルーハワイやけ食いだ」

蒼からかき氷を受け取り、一気に食べ始める。

「羽依里さん、一気に食べたら頭痛くなりますよ」

「ぐああ」

食べ始めてすぐに後悔したが、既に後の祭り。藍に呆れ顔されてしまふ。

「ねえねえ、しろしろの食堂って、港にあるおっきな看板の？」

「え？ ああ、そこだよ」

メロンバーを食べ終えたらしい鳴が話題を振ってくる。

「なんか食堂、忙しいみたいだよ。お昼に行ったら閉まっていた」

「あの食堂は元々夜だけなんだよ」

「あ、そうなんだ。物音はしてたみたいだったけど……」

そこまで話したところで、鉄塔から大きな音が鳴り響く。

『島内放送、島内放送』

『一昨日から島に滞在している鷹原羽依里君、同じく久島鷗さん、昨日から島に滞在している岬夏海さん。役所にお越しく下さい』

「……あの声はのみきだな」

「え、誰ですか？」

「ハイドログラディエイター改だ」

「はいどろ……？」

夏海ちゃんが首をかしげている。

「名指しされた……これは、はずい」

一方の鷗はスーツケースから立ち上がり、顔を赤らめている。

確かに校内放送に似た恥ずかしさがあり、何回やられても慣れない。

「しかし、のみきは俺たちを呼び出して何の用だ？」

「あー、たぶん三人の歓迎会じゃない？」

ちやうど切れたらしいかき氷シロップを交換しながら、蒼が説明してくれる。

「え、俺達の？」

「まあ、行けば分かりますよ」

「そうだな。役所はここから近いし、行こうか夏海ちゃん」

「はい！」

「あ、待って羽依里」

出発しようとしたところで、鷗に呼び止められる。

「どうしたんだ？」

「私、役所がどこか知らない」

「あー、そう言われればそうか」

「というわけで、案内して」

鷗は再びスーツケースに腰を下ろす。

「え、押していけと？」

「近いんでしょ？」

「確かに近いけど……」

「あ、なっちゃんも乗る？ 羽依里が押してくれるよ？」

「えーと」

「乗っちゃいなよー、ゆー」

あああ、極悪カメモ団の団長が夏海ちゃんを悪の道へと引きずり込もうとしている……！

「ほい。どうぞどうぞ」

スーツケースの少し端に寄り、鷗は夏海ちゃんが乗れるスペースを確保する。

「かき氷も移動しながら食べればいいし」

夏海ちゃんは少し悩んだ後、俺の顔を見る。

「……乗ってもいいよ。一人も二人も変わらないから」

結局、苦笑いしながらそれを了承する。ガラガラと二人が乗ったスーツケースを押しながら、俺は役所を目指したのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よし。到着」

「ありがとう、羽依里」

「ぐらぐら揺れて、なんだか楽しかったです」

「でしょう。バランスをとって乗ってるのも大変なんだよー」

役所に到着すると、そこにはちんまい少女がいた。背中に大きな水鉄砲を背負っている。のみきだ。

「三人とも、突然呼び出してしまつてすまないな」

「……まさか、スーツケースに乗って現れるとは思わなかったが」

「そこは、気にしないでくれるとありがたい」

「初めまして。はいどろさん」

「はいどろ……？」

夏海ちゃんが率先してあいさつするが、のみきは鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

「まあいい。私は野村美希。この島の少年団の執行部を取り仕切っている」

そこは場慣れしているのみき。すぐに挨拶を返し、お互いに自己紹介を終える。

「ところで、執行部ってなに？」

「まあ、島の風紀委員みたいなものだ」

「フーキーン？」

鴟、イントネーションが微妙に違う。

「まあ、悪いことしたら背中の水鉄砲でハチの巣にされるぞ、ってことだな」

「ええー……」

「鷹原、誤解を招くようなことを言うな。怖がってるじゃないか」

「それよりのみき、俺たちはどうして呼び出されたんだ？」

「ああ……今日の午後六時から、食堂で三人の歓迎会を行おうと思っ
てな」

「あの一私達、昨日一昨日来たばかりなんだけど」

「うむ。この島に長く滞在する旅行者は『渡りの人』と言われていてな。歓迎するのが習わしなんだ」

「つまり、黙って歓迎されろってことだな」

「そういうことだ」

「というわけで、午後六時になったら島の食堂に来てくれ」

「食堂の場所は鷹原がわかるだろう。二人を案内してやってくれ」

「わかった」

「よろしくたのむぞ」

そこまで伝えると、のみきは役所の中に消えていった。

のみきと別れた後、腕時計を見る。

なんとも中途半端な時間だったので、その後は鴟も加藤家に来てもらい、一緒に時間を潰すことになったのだが……。

「羽依里！ 羽依里！ アリクイがいる！」

鴫は夏海ちゃんの部屋にあったアリクイのぬいぐるみに興味津々の様子で、時間ギリギリまで夏海ちゃんの部屋に入り浸っていた。

「おーい、二人ともそろそろ……うお!?!」

時間が迫ってきたので部屋に呼びに行くと、ちょうどスイーツケースとアリクイによるシユールな人形劇が展開されているところだった。あれは下手すると夢に見るかもしれない。記憶から抹消しておかないと。

そして午後六時ちょうど。しろは食堂へとやってくる。

すでに店に明かりはついていたので、三人一緒に店に入ると……。

「ようこそ、鳥白島へー！」

四方からクラツカアの音が鳴り、紙吹雪がシャワーのように降り注ぐ。俺達三人は呆気にとられる。

その後我に返って、ぐるりと店内を見渡す。俺と夏海ちゃんと鴫の他、カウンターの向こうにしろは、それぞれの席に蒼、藍、のみき、天善に良一。それに紬の姿まである。全員見知った顔だ。

「それではこれより、鷹原羽依里君、久島鴫さん、岬夏海さんの歓迎会を始めます」

「話聞いたところ、ほとんど顔見知りのようだが、一応自己紹介をしてもらいたい」

「どうも、鷹原羽依里です」

「あ、鷹原はいい。すでに有名人だ」

「だよな。言ってみただけだ」

「久島鴫です。よろしくお願ひします」

「久島さんは毎年この時期だけ島に滞在している。皆、よろしく頼む」

「岬夏海です。よろしくおねがいします」

「夏海ちゃんは鏡子さんの親戚になるそうだ。この夏の間、加藤家に滞在することになってる。困ったことがあったら何でも言ってくれ」
「ありがとうございます」

俺たちが自己紹介をしている間、ジュースの入ったコップが配られていた。

「それでは、三人の来島を祝して」

「かんぱーい！」

自己紹介が終了し、乾杯の音頭がとられる。その後は言い方は古いが、どんちゃん騒ぎが始まった。

「タカハラさーん」

「おお、紬も来てくれたんだな」

「はい！ わたしも島の一員ですので！」

「ナツミさんの歓迎会となれば、来ないわけにはいきません！」

「ツムツム、なっちゃんのこと知ってるの？」

「はい。ズツ友です！」

「すでに親友!?!」

「親友と言えば紬、静久は来てないんだな」

「わたしに全て任せると言って、帰ってしまいました。島の人間じゃないからと。ものすごく残念そうでしたけど」

「ありや、ズクズク来てないんだ」

「水織先輩も、今更そんなこと気にしなくてもいいのにね」

「……水織先輩いないんだってよ。残念だったな、天善」

良一が良一を慰めるように、肩に手を置く。

「べ、別に残念だなどと思っていない！」

いや、思いつき顔に出てるだろ。

「あの一、ところで天善さんは、なんでずっとラケット持ってるんですか？」

「……よくぞ聞いてくれた」

夏海ちゃんの質問に、天善が気を取り直したように立ち上がった。

「それは、卓球部だからだ！」

「へ、へえー」

びしっ、とサーブを打つポーズをとる。夏海ちゃんが引いた。

「ちよつと天善、夏海ちゃんが怖がってるじゃない！」

「ナツミちゃん、こつちでわたし達とお話ししましょう！」

「あわわわー……」

夏海ちゃんが袖たちに引っ張っていかれた。

「女連中、普段駄菓子屋であれだけ喋ってて、何喋るんだ？」

俺の横にいた良一はひよい、と唐揚げを口に放り込む。

「さあな」

しおらしく座りなおした天善は、おとなしくフライドポテトを食べ始める。

「きつと乙女チックな会話じゃないか」

どんな会話か想像できないあたり、俺達には関係のない話題になりそうだと。

「よつと」

唐揚げに続いて、焼き鳥の盛り合わせの中からつくねをつまむ良一。

「こつちはこつちで男らしく、焼き鳥の話でもするか？」

「するするー」

「鷗、お前はこつち側で良いのか？」

「え。鶏皮とか美味しいよね？」

「いや、うまいけどさ」

「しろしろ！ 焼き鳥の盛り合わせ、もうひとつ追加！」

ダメだ。なんかテンションがおかしくなってる。

こういう場になると、キャラが変わるタイプなのかもしれない。

そんな時、俺はふとした疑問を天善たちにぶつけてみる。

「そういえば、港にスーパーあったよな？」

「スーパー徳田のことか？ 春先までは営業していたみたいだが、経営不振で潰れてしまったな」

「この島じゃ、大体駄菓子屋か港に行けば事足りるからな」

確かにその通りかもしれない。

「蒼、サラダおまちどうさま。鴎は、焼き鳥の盛り合わせ、もう少し待ってて」

その時、しろはが料理を運んできてくれた。

その様子を見て、俺はカウンターの方へ向かう。

「あ、羽依里」

焼き鳥を焼いているんだろうか。しろはが手元から目を離すことなく、俺に話しかけてくる。

「料理が足りなかったら言って。作るから」

俺たちが店に入った時から、結構な量の料理がテーブルには並んでいた。

つまり、しろはは今日一日をかけて、この料理やら会場の準備をしてくれていたのか。

「ありがとな、しろは」

「えっ。べ、別に羽依里のためだけじゃないし」

「夏海ちゃんや、鴎のためでもあるし」

「でも、俺も楽しんでるから」

「そ、そう……なら、いいけど」

やっぱり小恥ずかしくなってしまう、途中で話題を変える。

「い、いつもとメニューも違うな」

「あ、うん。居酒屋仕様。お酒は出ないけど」

それにしても、すぐにでも居酒屋が開けそうなレパトリーだ。

その後は調理をするしろはとしばらく話をしていた。

歓迎会も終盤になると、しろはもオーダーストップということので、皆の輪に加わった。

そんな楽しい時間はあっという間で、すぐにお開きの時間になる。俺はともかく、鴎や夏海ちゃんは島の皆と出会って数日とは思えな

い打ち解けようだった。

歓迎会は大成功だったと思う。

解散の号令がかけられた後、女連中が片づけを始めたので手伝おうとしたら、主賓なんだから手伝わなくていいと言われて、俺と夏海ちゃん、鴎の三人は揃って店から追い出されてしまった。

「むう、せめて片づけくらい手伝いたかったんだけど」

「皆が良いって言うてくれてるんだから、ここはお言葉に甘えておこう」

「そうですね」

気がつけば日は完全に沈み、空には満天の星空が広がっていた。

「そういうえば、鴎は家近いのか？ なんなら送ってくぞ」

「ありがとう。すぐ近くだから、大丈夫だよ」

またね、と言葉を残し、鴎はスーツケースを引きながら去っていった。

「それじゃ、俺たちも帰ろうか」

「はい」

そして加藤家までの道のりを、夏海ちゃんと二人で喋りながら帰ることに。

「あの料理、全部しろはさんが作ったんですよね？」

「そうだよ」

「昨日のコロッケもおいしかったですし、しろはさん料理上手ですねえ」

彼女のことを褒められて頬が緩みっぱなしになってるのが自分でもわかる。これは気をつけないと。

「見て夏海ちゃん、星がすごいよ」

「本当ですねー！」

俺の住んでる場所もそこまで都会とは言えないけど、ここまでの星空なんてまず見えない。

星を眺め、虫の音を聞きながら歩く。

ふと気がつく、昼間通った小学校の近くを通りかかる。

「……」

「夏海ちゃん？」

昼間のうろたえ方も気にはなってたけど、やっぱり様子がおかしい。

星を見るのもやめ、うつむいている。

「夏海ちゃん……大丈夫？」

「え、えっと……」

目の端で学校を見ている。やっぱり学校が原因なんだろうか。

「……学校で何かあったとか？」

「あ……その……えっと」

凶星みたいだ。でも、言い淀んでいる。

……だから、先に話すことにした。

「……俺も一年前、学校で失敗してね」

「逃げてきたんだ。この島に」

「え？ 鷹原さんが？」

「うん」

「その時は島の誰とも関わらずに、黙々と蔵整理だけしていたっけかな」

「うそですよ。だって、昨日も今日も、あれだけ皆さんと仲良くしてたじゃないですか」

「今はね……その後、色々あったし」

「信じられないです」

「……島の皆と仲良くなれたから、今の俺がいると思うんだ」

「ごめんね、突然こんな話して」

「い、いえ」

「あ……あのっ、鷹原さん」

少し考えるようにして、夏海ちゃんが顔を上げる。

「……私も逃げてきたんです。この島に」
「え？」

「……私、いじめられてました。学校で」
「島にいる間は、忘れられてるって思ったんですけど」

「学校見たら、思い出しちやっみたいで……」

いわゆるフラッシュバックってやつなのかな。

真夏だというのに、夏海ちゃんは自分の身体を両手で庇い、震えている。

「それで、ですね……鷹原さん。変なお願いしていいですか」
「うん」

「……夏休みの過ごし方、教えてくれませんか」
「え？」

「その……私の夏休みは、学校から逃げるためのものだったので」

「夏休みの過ごし方、わからないんです」

「友達もいませんでしたし」

……今の話、出会ったばかりの俺に打ち明けるなんて、相当に勇気が必要だったはずだ。

「夏休みの少し前、鏡子さんから手紙をもらったんです」

夏海ちゃんはウエストポーチから封筒を取り出して、中から数枚の写真を見せてくれる。

「一緒に送られてきた写真に、凄く楽しそうな皆さんが写っていて」

ほのかな星明りに照らされた写真の中には、島の風景写真と一緒に、俺たちの写真があった。

「これは……」

これは今年の春。お花見の時の写真だ。俺としろはを中心に、皆が映ってる。とびきりの笑顔で。

「混ざりたいな……って、思ったんです。この写真見て」

友達がいらないなら、夏休みも一人。

そんな夏休みがずっと続いていたのなら。

そんな時に、この写真が送られて来たとしたら。

……飛び出してきてしまうかもしれない。

いや、その事情を知っていたからこそ、鏡子さんはこの夏、夏海ちゃんをこの島に招待したのかもしれない。

「……じゃあ、教えようか？」

「え？」

「夏休みの過ごし方」

自分でも自然にそんな言葉が出ていた。

辛い思いを抱えて島にやってきた一人の少女が、一年前の俺と重なったのかもしれない。

なかなか難しい問題だとは思う。

でもせめて島にいる間は、心から楽しめる夏休みを。最高の思い出を作ってもらいたい。

そう。いじめのことなんか、忘れるくらいに。

「……明日、皆にも話してみよう？」

「え？」

「大丈夫。皆協力してくれるよ」

「……ごめんなさい。変なお願ひして」

「全然変じゃないよ」

「この島に来たからには、絶対に忘れられない思い出を作ってもらわないとね」

「それに、友達ならもういるよ」

「え？」

「今日、灯台で。紬や静久と友達になったよね」

「あ……」

「ズツ友なんだよね？」

「そう、です……」

「もちろん、俺やしろは、この島で出会った皆も、もう友達のもりだから」

「……ありがとうございます」

……この島に来て、一番の笑顔が咲いたかもしれない。

「……もう、大丈夫そうだね」

「はい」

「……それじゃ、帰ろうか。鏡子さんが心配するよ」

「そうですね。あの人、またカップうどん食べてますよ」

「そうだね」

俺たちは並んで歩き始める。その足取りはさつきより軽く、力強いものになっていた。

第三話・完

第四話 7月28日

「鷹原さーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんの元気な声で目が覚める。

「おはよう、夏海ちゃん」

「おはようございます」

布団をたたみながら時計を見ると、かなり早い時間だった。

「あれ、いつもより早くない？」

「今日からラジオ体操があるらしいので」

「一緒に行ってきたらどう？ って、鏡子さんに勧められました」

夏休みを楽しむには、まずはラジオ体操……ってことかな。鏡子さんなりに気を使ってくれたのかもしれない。

「なんでも、皆さんも参加するらしいですよ」

「皆さん？」

「蒼さんとか、天善さんとか」

「そうなの？」

ラジオ体操って、小学生くらいまでの子が参加するイメージがあるんだけど。この島のはちよっと違うんだろうか。

「……そうだ。ラジオ体操に皆が来るならさ、その時に話してみない？」

「え？」

「ほら、夏休みの過ごし方。楽しく過ごせるように、皆にも協力してもらおうって話」

「あー、はい……」

「そんなに身構えなくて大丈夫だよ。夏休みを楽しみたいって伝えるだけだし、皆協力してくれるよ」

「……わかりました。よろしくお願いします」

「それじゃ、ラジオ体操に行こうか」

「はい！」

夏海ちゃんはすでに準備万端、といった感じで俺を待っている。

「あー、夏海ちゃん。言いくいんだけど……」

「はい？」

「着替えるから、廊下の方で待つて欲しいんだけど……」

「あ。ご、ごめんなさい！」

ぱたぱたと廊下の向こうまで走っていく。

俺は手早く身支度を済ませた後、夏海ちゃんと一緒に家を出る。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ラジオ体操、行ったことないんです」

「そうなんだ？ それじゃ、楽しみだね」

夏海ちゃん曰く、ラジオ体操は神社で行われるらしい。朝の清々しい空気を味わいながら、二人で歩く。

「ラジオ体操の後に食べる朝ごはんは格別だよ」

「はい。楽しみですね！」

そんな話をしながら、神社の境内に到着する。夏海ちゃんからの事前情報通り、島の子供たちに混ざって知った顔がいっぱいいた。

「うん？ 鷹原たちも来たのか」

「あ、羽依里、夏海ちゃん。おはよー」

「おはようございます」

「ちーっす」

「おう」

のみき、蒼、藍、良一、天善。朝の神社とか普段来ない場所だけど、見知った仲間がいる。子供の頃のラジオ体操ってこんな空気だった

気がして、なんだか懐かしい気がした。

「そうだ、ラジオ体操が終わった後、皆に話があるんだ」

「話？」

「良いじゃね？ どうせ暇だしな」

「そうだな」

「うむ。後々の楽しみにしておこう。ほら、二人分のスタンプカードだ」

のみきからスタンプカードを受け取る。

「懐かしいな。スタンプカード」

「なんですか、これ」

「ラジオ体操に参加すると、毎日一つずつスタンプが押してもらえるのよ」

「スタンプがたまると、良い事があるんです」

夏海ちゃんの隣にやってきた蒼と藍が説明をしてくれる。

「良い事？」

「それは秘密です」

「さらに、スタンプとは別に島の特産品が参加賞としてもらえるんだ」
その二人の説明を、天善と良一が引き継いでくれる。

「鳥白島では、この景品のことをログインボーナスと呼んでいる」

「ろ、ろぐいん、ぼーなす？」

「通称ログボだ」

良一が意味もなく略してくる。

初めて聞く単語だが、そういうものなんだろう。

「あ、そろそろラジオ体操大好きさんが来るわよ」

「え。誰？」

「ラジオ体操を指導してくれる人です」

「子供の頃のラジオ体操って、上級生とかが勝手に仕切ってた記憶があるんだけど」

「この島のラジオ体操は変わってるから」

「へ？」

しばらくして、ラジオ体操大好きさんがやってきた。

「おまえらー！ 準備はいいかー！ いくぞー！」

なんというか、独特のオーラをまとった人だ。

その人の号令に合わせて、ラジオ体操が開始される。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「ジカイキン？」

「鷹原さん、ジカイキンってどこでしょう？」

「わからない」

「ピクピク。ピクピク」

「うわ、皆耳が動いてる」

「なあ蒼、どうやって耳動かすんだ」

「話しかけないで。今集中してるんだから」

「は、はい」

というか、俺の知ってるラジオ体操じゃない……。

その後も初めて聞く運動が続き、なんとか見よう見まねでついていく。

「なんだろう。普段動かさない筋肉を動かしてるせいか、めちゃくちゃ疲れる……」

「ぴくぴく……むむむ、ぴくぴく……」

夏海ちゃんは最後まで耳を動かそうと躍起になっていた。

「さあ、スタンプを押すぞー」

ラジオ体操終了後、スタンプとログインボーナスをもらう。

今日のログインボーナスは鳴瀬さんちの鶏の生みたて卵らしい。

「そういえば、しろはの家には立派な鶏小屋があったな」

その後、ラジオ体操大好きさんやほかの子供たちが帰ったタイミングを見計らって、俺は話を切り出す。

「実は、話っているのは夏海ちゃんのことなんだけど……」

「夏休みの過ごし方？」

「ふむ。これまたざっくりとしているな」

「そんな難しく考えないで、夏休みを楽しめるイベントをいっぱい考えてあげたいんだ」

「うーん。よくわかんないけど、なんかイベントがあればいいわけよね」

蒼は顎に手を当てて考えてくれている。

「せっかくなら、毎日イベントを考えてやろう」

「あ、それいいわね」

「あの、いくらなんでもそこまでは……」

「夏海ちゃん、俺たち島民を舐めないほうがいいぜ」

「え？」

「そうですよ。わたし達もイベントには飢えています」

「もちろん、夏海ちゃんにも楽しんで欲しいけど、あたし達も楽しみたいのよ」

「暇だからな」

「ふむ。毎日イベントを考えると、私達だけでは力不足だな」

「島内放送で呼びかけて、イベントを募集してやろう」

「えええっ!?!」

「あたしも紬やしろはにも伝えておくわ。駄菓子屋にそのうち来るだろうし」

「後は、そうですね……」

「……よし。手始めに皆で釣りに行かないか」

わいわいと話が盛り上がる中、良一が一声上げる。

「釣り？」

「磯釣りだ」

「午前中はちよつと用事があるから、昼からになるけどな」

「午前中は出店だっけ？」

「ああ。朝のうちに釣り道具やエサは用意するから、手ぶらで来てくれて良いぜ」

「良一、釣りの場所は？」

「しろはの釣り場でいいだろ。あそこが一番広いし、色々釣れるからな」

「わかった」

「皆さん、ありがとうございます」

「気にすんな。さつき蒼が言ったように、俺達も楽しみたいんだ」

「それじゃ、またお昼からねー!」

「は、はい! よろしくお願いします!」

なんとか話もまとまって解散となる。

皆と別れて、神社からの帰り道。

「ね、皆協力してくれたでしょ?」

「本当ですね。驚いてます」

「皆がああ言ってくれたからには、本当に毎日イベントがあるかもしれないよ」

「はい。すぐドキドキしています。こんな気持ち、初めてです」

「うん。夏休みに入っすぐって、そんな気持ちになるよ」

小学校の頃、一学期の終業式の日とかそんな感じだった記憶がある。

「そういえば、夏海ちゃんは釣りはやったことある?」

「いえ、ありません」

「俺もそこまで得意じゃないけど……きっと皆が教えてくれるよ」

「はい!」

その後も色々話をしながら、加藤家に戻ってくる。相変わらず鏡子さんの姿はない。

「それじゃ、さっそく朝ごはん作りますね」

夏海ちゃんはそういうと、手を出してくる。

「え、何?」

「ログボの卵ください。チャーハンに使いますので」

「ちよつと夏海ちゃん、生みたて卵をチャーハンに使うなんて、さすが

にもつたいないよ」

「え。どういうことですか？」

「こういう新鮮な卵は、卵かけごはんにして素材の味をそのまま味わうのが一番だと思うんだ」

「……鷹原さんの言い分もわかりますが」

「やつぱりこの卵は、チャーハンに使ってこそ至高だと思っんです。これなら黄金の卵チャーハンが作れそうな気がするんです！」

あれ？ 夏海ちゃんもチャーハンのことになると引かない。

でも、俺としてもここで卵かけごはんを諦めるわけにはいかない。

「いやいや、卵かけごはんってのは日本が世界に誇るファーストフードで、都会だと専門店があるくらいなんだよ。専用の卵はもとより、専用のしょうゆまで売られてるくらいなんだ。卵は加熱すると熱に弱いタンパク質やビタミンBが減少しちゃうけど、生食なら栄養素はそのまま。しかも油を使わないから目覚めたばっか朝の胃には優しいんだ」

「そもそも、卵かけごはんというものは……」

俺はその後数分間にわたって熱弁をふるう。

「はあ……わかりましたよ。卵かけごはんが食べたいんですね」

ついに根負けした夏海ちゃんは、ため息交じりに台所へ向かう。

その後、白いご飯とみそ汁を持って戻ってきた。

「はい。どうぞ」

続いて持ってきたのは、しょうゆと小さい器。

この器、何に使うんだろう。付け合わせに焼き海苔でも持ってきてくれるんだろうか。

俺はさっそく卵を炊きたてのご飯に割り入れ、醤油を軽くたらす。

「あれっ、器、使わないんですか？」

「えっ？」

見ると、夏海ちゃんは卵を器に割り入れてから溶き、しょうゆを混ぜ込んでからご飯にかけていた。

「え、混ぜてからかけるの？」

「混ぜないと、味にムラが出ませんか？」

「この味にムラがある感じが良いんだよ」

「そんなもんですかねえ」

そんなこんなで、卵かけごはんを堪能した。

食後は宿題。昨日と同じように向かい合わせになって、小一時間ほど頑張った。

宿題を終えると、お昼まで時間ができてしまう。

「そういえば、良一が港に出店出すって言ってたよね」

ぼんやりと眺めていたテレビのローカル情報番組に飽きてきた頃、出店の話を思い出した。

「お昼まで時間あるし、行ってみない？」

「はい。行ってみたいです」

「それじゃ、行こう」

時間をつぶすため、歩いて港へと向かう。

道中、小学校の前を通りかかったけど、夏海ちゃんは昨日のように取り乱すことはなかった。

昨日とは少し状況が違うし、皆のおかげで好転してるのかもしれない。

しばらくして港に到着する。

『宇都港行き、間もなく出港します』

ちやうど船が出港するところで、アナウンスが流れていた。

「あら大変。急がないと」

すると目の前を女性が一人、スーツケースを引いて走っていった。でもスーツケースが大きいせいか、このままだと間に合いそうにない。

「夏海ちゃん、ちよつと船に待ってもらって！」

「はい！ すみませーん！ 待ってくださいーい！」

夏海ちゃんに係員の所に行ってもらって船を止めてもらい、俺は女

性の方に近づいてスーツケースを押すのを手伝う。

「大丈夫ですか？ 手伝いますよ」

「すみません。ありがとうございます」

女性のスーツケースを押す時、貼つてある色々なシールが自然と目に留まる。そのうちのひとつに『S・K』と文字が書かれていた。イニシャルかな。

「ご兄妹ですか？ おかげで助かりました」

なんとか連絡船に間に合った女性は、俺たちに何度もお礼を言つてから、船に乗り込んでいった。

はて、あの黒髪にあの雰囲気。どこかの誰かに似ているような。

船が出港するのを見送つた後、出店を探し始める。

少し離れた所にその店はあった。周囲に何もないので、離れていても目立つ。祭りとかでよく見る出店の形だが、いつもなら商品名が書いてある部分には何も書かれていない。

「よう」

「羽依里、夏海ちゃん、ちっす」

店の中を見ると良一が上半身裸で何か作っていた。

「良一、何作ってるんだ？」

「海鮮やきそばだ」

鉄板の上ではエビ、イカ、タコ、アサリ……様々な具材が中華麺と一緒に炒められ、そこにソースが絡められている。

「美味そうだな」

「うまいぞ。獲れたての食材を使ってるからな」

ソースの焼ける香りが周辺に漂い、食欲をそそられる。朝は卵かけごはんのみそ汁だけだったし、宿題をして糖分も消費している。そろそろ小腹が空いた。

「いくらだ？」

「ひとつ300円だ」

むう。一つ300円はちよつと高い。

そして、一人前を食べたら間違いないで昼飯が入らない。

「夏海ちゃん、二人で半分こしない？」

「良いですよ」

「それじゃ良一、海鮮やきそばひとつくれ。あと割り箸二膳と、とりわけ用の紙皿もな」

「あいよ。まいどありー」

300円を渡し、品物と割り箸、紙皿を受け取る。

「そのテーブル、使つていいぜ」

屋台の横には、申し訳程度に日よけのついたテーブルセットが置かれていた。そこに二人で腰かけて食べることにする。

半分ずつに取り分けて、紙皿の方を俺がもらう。

「それじゃ、食べようか」

「はい、いただきます」

早速口に運ぶ。

「おお、うまい」

磯の香りが素晴らしい。それに負けないソースの濃さも絶妙で

……

……ジャリ。

アサリの砂だろうか。何か口に当たった。

「なあ良一、このアサリって砂抜きしたか？」

「……30分くらいやったが、足りなかったかもしれないな」

しろは曰く、貝の砂抜きは最低一時間くらいやった方が良いはずだ。

……ジャリ。

「あう……」

夏海ちゃんも砂に当たったみたいだ。

念のため、二人してアサリは避けて食べることにした。

「ごちそうさまでした」

「アサリ以外はうまかったぞ」

「おう、次からはしっかり砂抜きしとくからな」

清々しい笑顔で言われた。次とかあるのかなと思いつながら、適当に返事をしておいた。

その後は少し港を散策し、頃合いを見て一度加藤家に戻る。先日買いだめしておいたカップうどんの中から適当な種類をチョイスし、きちんと昼食をとる。

それから少し食休みをした後、バイクで島を南下。しろはの釣り場に向かう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

釣り場に到着すると、そこにはラジオ体操に来ていた5人に加え、しろは、鷗、紬、静久の四人の姿もあった。

蒼達がしろは達にも知らせてくれたのだろうか。まさか、これだけの人数が集まってくれるなんて。

そして良一が用意してくれたんだろう。全員分の釣り竿があった。「よくこれだけの数の釣り竿が用意できたな」

「親父の使い古した品が多いけどな。手入れだけはしっかりやってるからな」

「釣りエサもあるよ」

しろはが持っていたのは小さなタツパー。それがいっぱいある。試しに一つ、ふたを開けると……その中には無数のうごめく虫。

「うあー」

「ひっ」

「きもいー」

中身がよく見えずに覗き込み……一斉に声を上げたのは、俺と夏海ちゃんと鷗。

「何だ羽依里、お前しろははいつも釣りしてるくせに、虫も触れないのか？」

「そ、そうだよ。悪いか」

実は俺は釣り専門で、エサをつけたり釣れた魚を外すのはほとんどしろはにやつてもらっていた。

いわゆる共同作業ってやつだ。うん。

「やれやれ、先が思いやられるぞ」

全員に釣り竿とエサが配られた後、思い思いの場所に散らばって釣りを始めた。

俺は夏海ちゃんと一緒に適当な場所で釣りを始めたんだけど……。

「えーいつー！」

あー……逃げられた。

「夏海ちゃん、しつかり浮きが沈んだタイミングで上げなきや」

「ううー……エサだけ取られちゃいました」

夏海ちゃんは一瞬、エサの入ったタツパーを見て……すぐに視線を逸らす。

「ごめんなさい鷹原さん、付けてもらえますか？」

心なしか涙目になってる。

「……うん。いいよ」

正直、俺もうまくできる自信ないけど。夏海ちゃんの前でかつこ悪いところは見せられない。

「うわああ」

ぐねぐね動く虫に悪戦苦闘しながら、なんとか針につける。

「こんなもんかな」

「……そんなつけ方じゃ、海に投げたと同時に外れちゃうよ」

そんな俺達を見かねてか、しろはが助けに来てくれた。

「貸してみて」

しろはが慣れた手つきでエサをつけてくれ、三人並んで釣りを始める。

「……ヒットー！」

仕掛けを入れて一分としないうちに、しろはの竿に当たりが来て、大きめのアジが釣れた。さすがだ。

……一方で俺と夏海ちゃんは、まったく当たりが来ない。

「おかしいな……いつもなら、なんだかんだで釣れるんだけど」

「あれじゃないですか。港で海鮮やきそばなんて食べたから、魚介類に警戒されてるんじゃないですか？ こいつらに近づいたら食われるぞって」

「逆にイカやエビの魚介のにおいが染みついて、仲間だと思って魚が寄ってきそうな気もするけど」

……その後、もう少し粘ってみても全く当たりが来る気配なし。

「夏海ちゃん、ちよつと場所変えてみよう？」

「はい」

「しろは、ちよつと場所変えてくるよ」

「ちゃんと夏海ちゃんに教えてあげてね？」

「わかってる」

しろはに一声かけた後、俺と夏海ちゃんは釣り場を変えてみることにした。皆の様子も気になるし。

防波堤の先にある、古びた建物まで行ってみた。少し沖のほうに突き出ているので、潮の流れが早そうな場所だ。そこでは良一とのみき、鷗が並んで釣りをしていた。

「よう。良一はどんな感じだ？」

建物にもたれかかって竿を垂らしていた良一に声をかける。さすがというか、大きめのアジを何匹も釣っている。

「おお、やるな」

「まだまだ、本命は釣れちゃいない」

「何を狙ってるんだ？」

「鯛だ」

「え、この辺りって鯛が釣れるんですか？」

「潮の流れに乗って、時々な。瀬戸内の海で鍛え上げられたヤツだから、そう簡単には釣れないけどな」

未だに当たりの一つもない俺達には無謀すぎる相手だ。

「鷗さんは釣れてます?」

スーツケースに座って釣りをしていた鷗に、夏海ちゃんが声をかける。

「むー、これ見てよ。なっちゃん」

鷗は複雑そうな顔で、近くにあるバケツを指さす。

「わ……」

その中には見慣れた魚の姿はなく、謎の生き物が数匹。

「ナマコにウミウシ……これはヒトデか?」

「そう。こんな変なのしか釣れないの」

これはこれで、ある意味才能かもしれない。

「……のみき、調子はどうだ」

鷗のバケツは見なかったことにして、のみきの様子を見る。

「まずまずだな」

のみきのクーラーボックスには何匹かの魚が入っている。

「おお、さすがのみきだな」

「えっへん」

「そうだ。のみきさんも背中の水鉄砲であれすれば、もっと獲れるんじゃない?」

鷗がいたずらっぽい表情で話しかけてきた。

「あれとは?」

「水をびゅーっ! ばしーっやって、エサをとる生き物いるよね」

「……すまない。よくわからないんだが」

「鷗、それってテツポウオのことか?」

「そうそれ!」

「なるほど、水鉄砲で海面を攻撃して魚を気絶させて捕まえるんですね!」

「気絶させるのはいいが、どうやって捕まえるんだ?」

そこはアミを……と言おうとしたが、近くにそんなものはない。

「そうだ。鷗なんだから、お前が直接海に飛び込んで獲ってくれば良いんじゃないか?」

「うけーうけーって?」

「そう。うけーうけーって」

「……やってみよっか?」

「え?」

そういうが早いか、鷗は着ていたケープを俺に投げてよこす。

「いくよー」

「ちよ、ちよっと待った!」

「おわっ」

……思わず抱き留めてしまった。

「えっと……さすがに冗談……なんだけど」

「あ、悪い……」

どうしてだろう。鷗なら本当に飛び込みかねないと思ってしまった。

……海に落ちた記憶なんてないのにな。

「……はっ」

直後、背後から強烈な殺気を感じて振り返る。

「……お前達、子供の前で何をやっているんだ?」

のみきさんの手には、広域掃射モードに設定されたハイドログラ
デイエーター改。

「夏海ちゃんバリア!」

俺はとっさに夏海ちゃんの陰に入る。

「くっ、卑怯な」

「今だ、ダツシユ!」

のみきが一瞬躊躇した隙に、俺は夏海ちゃんと鷗の三人でその場か
ら離脱する。

「ひーん、なんだか私まで悪者になった気分だよー!」

俺たちは浜辺近くまで戻って、息を整える。そこでは紬と静久、天
善の三人が釣り糸を垂れていた。

「むーぎーぎー」

見ると、紬が妙な声を出しながら水面とにらめっこしていた。

「やつほー」

「あ、タカハラさんとカモメさん、それにナツミさんです！」
「ツムツム、なにそれ？」

鴟は紬の少し後ろでスーツケースに座りながら、紬の横に積まれた大量のガラクタを不思議そうに見ている。

片方だけの長靴に、穴の空いたやかん。どうみてもガラクタだ。

「紬がどれだけ頑張っても、生き物は全然釣れないのよね」

「むぎゅ〜……」

うなだれる紬の隣で静久が苦笑していた。確かにこの惨状を見たら、笑うしかない。

「……マツスル、エクササイザー？」

そんな中、鴟がガラクタの中から何かを発見する。

手書きのラベルが貼られたペットボトルだ。なんだろう。中身はほとんどないみたいだけど、下手に触らないほうが良さそうだ。

「ところで、ナツミさんは釣れてますか？」

「え？ えーっと、その……実は全然釣れなくて、釣り場を変えてきたんです」

「エサもうまくつけれないですし」

「なら、わたしが教えます！ 一緒に釣りましょう！」
「え」

ちらり。と積まれたガラクタに目をやる。

「大丈夫です！ わたしが教えるので、頑張りましょう！」

紬は夏海ちゃんの腕をしっかりと掴んで離さない。純粹に一緒に釣りを楽しみたいんだろう。

「よ、よろしくお願いします……」

夏海ちゃんが折れた。

「それでは、さっそくエサ付けの特訓です！ いきますよ！」

「は、はい！ ひええ……」

そして、二人はうごめく虫を針につける特訓を始める。

「夏海ちゃん、頑張つて……！」

夏海ちゃんを袖に任せて、俺は隣の静久と天善に話しかける。

ちなみに、俺の左側で夏海ちゃんと袖が釣り、右側で天善と静久が釣っている。鷗はそんな俺達の後ろでスーツケースに座って休憩している。

「ところで静久、なんで水着なんだ？」

「これなら、万が一濡れても着替えなくていいでしょう？」

確かに、こちら辺は場所によって波が高くなる場所がなくもないけど……。

「……あら、また取られちゃったわ」

そのタイミングで、静久が仕掛けを上げる。見事にエサだけ取られていた。

「水織先輩！ 新しいエサをお付けします！」

ずっと静かだった天善が突如として動き、常人離れた動きで静久の針にエサをつける。

「はっ！ できました！ 水織先輩！」

「ありがとう、加納君」

「でも今の私は学校も卒業してるし、もう先輩じゃないわ。水織さんでも、静久でも、好きに呼んでくれて構わないのよ？」

「いえっ！ 滅相ありません！」

「ねえ羽依里、天善君こんなキャラだっけ？」

今のやり取りを見ていた鷗が困惑している。

「静久の前だとああなっってしまうんだ。いわゆる憧れの人だからな」

「ふーん」

「だからほら、静久に良いところ見せようと頑張ってる」

「ちよれええええい！」

天善は自分の浮きが沈んだ瞬間を見計らって、ものすごい力で竿を引き上げる。

「……くそ、糸が切れた」

勢いが強すぎて糸が切れてしまう。しかし、天善は目にも留まらぬ

速さで仕掛けを直していく。

「おお、お見事」

「ちよれええええいー!」

そして、すぐさま仕掛けを海に投じる。

あ、思いつきり水面に竿先を叩きつけちゃってる。

「くそ、竿の先が折れた……」

古い竿に無理させるから……。

「なんの! これはどうだ!」

しかし、すぐにそれも修理する。

「すつこい」

その手の動きに鷗は目を丸くしている。

「修理する技術は認めるけど、天善はもつと道具を大事にした方がいいと思う」

卓球のラケットよろしく、振り回すんだもんなあ。

「あ、紬さん、引いてますよ!」

「むぎゅー!」

その時、夏海ちゃんが声をあげ、同時に紬の気合の入った声が響く。次の瞬間、俺の目の前を真っ黒い物体が横切った。

「ぶわああつ!」

……その真っ黒い物体が天善の顔面を直撃する。

「だ、大丈夫ですか、カノーさん!」

良く見るとワカメだった。そして当たり所が悪かったのだろう、天善はそのまま気絶してしまった。

……まあ、静かになったし良いか。

その後、俺も気を取り直して釣り糸を垂らしてみるが、全く当たりはない。

「全然ダメだな……」

背中越しで鷗と雑談していると、再び紬と夏海ちゃんの声。

「わ。紬さん、また何か釣れましたよ!」

「むぎむぎむぎ……！」

俺の目の前を、今度はサッカーボール大の半透明の物体が通り過ぎていった。

「きやあつー！」

「シ、シズク！ 大丈夫ですか!?!」

「ええ、平気よ……！」

見ると、静久の足元には彼女の胸のそれと同じくらいの大きさの……クラゲ。

「なんていうだっけこれ。エチゼンクラゲだっけ」

この化け物クラゲのボディプレスを容易く弾き返すなんて、さすが静久のクーパー韌帯だ。

とりあえず微妙に動いて気持ち悪いので、足で蹴って海にお帰り頂いた。

「紬さん！ またまた引いてますよー！」

「むぎ……むぎ……！」

三度目の叫び声。

すると、今度は巨大な宝箱が俺の目の前に降ってきた。

「な、なんだこれ。宝箱?」

「紬、すごいもの釣っちゃったのね」

「おお！ お宝だよ、羽依里!」

さっきまでスーツケースに座っていた鷗を含め、気絶してる天善以外の全員が興味津々に寄ってくる。

「羽依里、開けて開けて」

「え、俺？ なんで」

「男の子だから!」

「えええ」

正直、俺だって怖い。妙な罨とか仕掛けてあつたらどうしてくれるんだ。

「ほらほら早く」

やめて。そんなキラキラした瞳で見つめないで。

「……ええい、ままよー！」

その純粹な視線に耐えきれず、勢いに任せて宝箱を開ける。

ずるり、と赤黒い物体が出てきた。

「ひいひい」

俺を含めた全員がその場から後ずさる。

……って、タコか。

どうやらこいつがタコつぼ代わりにしていたみたいだ。よく見たら横に穴が開いている。

他にも、ウニやらアワビやらが入っていた。

「こいつら、よくタコに食われず共存していたもんだな」

ある意味宝箱だった。

とりあえず、出てきたお宝は天善のクーラーボックスに入れてフタをしておいた。

その後、もう少し紬さんと頑張ってみます。という夏海ちゃんと、空になった宝箱で遊んでる鷗、気絶した天善を介抱している静久をその場に残し、俺だけでもう少し歩いてみることにした。

岩場の方に行くと、空門姉妹が釣りをしていた。

「おーい、ふたりとも……」

「うあああ——————！！」

話しかけようとしたら、蒼の絶叫が聞こえてきた。

「いくら釣り糸垂らしても、エサすらとられないってどういうこと——！！？」

「これって、魚に見向きもされてないってことよね————！！」

「蒼ちゃん落ち着いてください。可愛い顔が台無しですよ」

「なんだ。蒼は釣りは苦手なのか？」

近寄ってみると、二人の間にはひとつバケツが置かれている。中には貝や蟹が入っていた。

「これ、そこの岩場で取ってきたのか？」

「失礼ね。釣ったのよ。藍が」

「え、この立派な貝も？」

「そうですよ」

蟹はわからないでもないけど、どうやったらあのエサで貝が釣れるんだろう？

偶然針が引つかかったのかな。

「藍の性格と同じように、変わったものばかり釣れてるのな」

「は？」

「羽依里さん、今聞き捨てならない言葉が聞こえたんですが」

「気のせいだ」

「わたし達の成果を笑う前に、羽依里さんの成果を見せてください」

「よせ、やめろ」

とつさに背中にバケツを隠すが、双子らしい見事な連係プレーでひったくられる。何気に運動神経良いからな。この姉妹。

「あれ、空っぽじゃない」

「き、今日は潮が悪いんだ」

「それ、しろはが釣れない時の言い訳と同じよ？」

「うぐう……返す言葉もない」

「はあ……それじゃ、そろそろ引き上げようかしら。あたしも今日は駄目っぽいし」

「え、もうやめるのか？」

まだ日は高い。釣れないのなら俺みたいに場所を変えてみたらいいのに。

……場所変えても俺みたいに何も釣れない可能性もあるけど。

「だってそろそろやめないと、食べる時間なくなっちゃうでしょ？」

「え、食べる？」

蒼達によると、少し早めに切り上げて釣った魚をみんなで食べるそうだ。

もう少ししたら浜辺で調理をはじめるとのことなので、空門姉妹と別れて夏海ちゃんたちがいる浜辺へと戻る。

夏海ちゃんたちの所に戻ると、鷗達は場所を変えたのか紬と夏海

ちゃんの二人だけだった。

「夏海ちゃん、どう?」

「むぎゆ?」

……ずっと紬と一緒にいたせいか、口癖がうつってる。

でも、自分でエサつけられるようになってた。凄い進歩だ。

……ってあれ? 俺負けてる?

「鷹原さん見てください! ついさつき、こんなの釣れました!」

「おお、初ゲットだね。どれ?」

「これです!」

夏海ちゃんが両手いっぱい抱えてきたのは、洗面器ほどの大きさの岩……いや、手足がある。頭もある。

ウミガメだった。

「どうしましょう?」

「うん。逃がしてあげようか」

かなり重たそうだけど、よく夏海ちゃんたちだけで釣り上げたなあ。

「……亀?」

そのタイミングでしろはがやってきた。

「……食べるの?」

「いやいや、逃がしてあげようよ」

「ウミガメのスープ、おいしいけど」

会話の内容を理解しているのかいないのか、ウミガメは手足をバタバタさせて抵抗している。

可哀想なので、逃がしてあげた。

「いつか恩返しにやってきて、竜宮城に連れて行ってくれるかもしれないね」

夏海ちゃんはああ言ってるけど、どっちかっていうと俺たちは亀をいじめていた側に入るんじゃないだろうか。

「ところで夏海ちゃん、他にはどれくらい釣れた?」

「あ、えーっと、その……」

「……なるほど。二時間釣って、ウミガメさんだけ」
「しかも、指導役の羽依里は夏海ちゃんを放って、蒼達の所に行っていたと」

「羽依里に夏海ちゃんの指導を任せてたのがいけなかった」

……その後、俺はしろはに怒られていた。

大きい石も目立つ砂の上に正座だ。長ズボン穿いてるとは言え、痛い。

でも、しろはがご立腹なのももつともだ。

「夏海ちゃん、皆が戻ってくるまで、私と最後にもうひと頑張りしよう？」

「はい！」

しろはは夏海ちゃんに笑顔を向けて、海の方へ向かう。

「……羽依里は料理の準備しておいて」

「わかりました」

俺の後ろにはいくつもの調理器具やガスコンロ、簡易テーブル、紙の食器、調味料等が置いてあった。

二人が釣りを始める中、俺は黙々とセッティングを始める。

「タカハラさん、手伝います！」

途中から紬が手伝ってくれたので、すごく助かった。涙が出そうだった。

準備が終わる頃になると、あちこちに散っていた皆も浜辺に戻ってきた。

「良一、鯛は釣れたのか？」

「いや、ダメだ」

手にしているクーラーボックスにはたくさん魚が入っているが、鯛の姿はないみたいだ。

「それより天善！　なんでお前の竿はそんなにボロボロなんだよ！」

「すまん。何度も直したんだが」

「そういう問題じゃねーよ！　何度も壊すほど乱暴に扱うな！」

「でもでも、天善君すごかったんだよー」

興奮気味に話すのは鴫。

「私、海が縦に割れるところなんて初めて見た」

待て、俺が蒼達と話してる間に何やってたんだ。

その時、夏海ちゃんの声が聞こえた。

「ひ、ヒットですー!」

最後の最後で夏海ちゃんに当たりが来たみたいだ。

「やったね、夏海ちゃん!」

「す、すごく力が強いですー!」

しろはの明るい声も聞こえてきたが、どうも一筋縄ではいかない感じだ。

「……羽依里、夏海ちゃん手伝ってあげて!」

「わかった!」

しろはの指示を受け、俺は急いで夏海ちゃんの釣り竿を支える。

「お、重い!?!」

なんだこれ。今まで感じたことのない引きなんだけど。

「おい、こいつはもしかしてあれじゃないか?」

良一が興奮気味に俺達の方に寄ってくる。

「あれって?」

「鯛だよ」

「そんな、まさか」

でも、この力強さは以前釣ったアジとかの比じゃない。

「一度糸を全部出せ。疲れさせるんだ」

「魚が疲れて力を抜いたタイミングに合わせて、少しずつ引くんだ。

焦ったり、力任せにやっちゃだめだぞ」

「はい!」

良一が後ろからの確にアドバイスをしてくれる。

「まだ魚影は見えないか。目視できればハイドログラディエーター改で打ちぬいて気絶させてやるんだが」

「気絶させたら、私がすかさず飛び込んで捕まえる!」

二人ともやめて。今度は本当にやりそうだから。

「ナツミさん、特訓の成果を見せる時です！ 頑張ってください！」

「ほら、今引いて！ あ、やっぱり引いちゃダメ！」

蒼、どっちだよ。つか、指揮系統は一つにまとめてくれ……！

こんな感じに皆に見守られながら、かなり長い時間獲物と格闘し、
そして……

「えーいーいー！」

二人で力を合わせ、渾身の力で釣り上げたのは。

「マジかよ。真鯛だ」

お祝いの席とかで見慣れた紅い魚体。それが太陽の光に照らされてキラキラと輝いていた。

その美しさに、二人して見惚れていた。

「なっちゃん、すごい！」

「ああ、良一でもこのサイズはあまり釣ったことないだろう」

「えっと、皆さんのおかげです」

皆が口々に褒めてくれる。夏海ちゃんも照れてしまって、鯛に負けないくらい顔が真っ赤だ。

……ってあれ？ 俺の頑張りってなかったことになってる？

……まあいいけど。

「それじゃ、さっそく食べる？」

「え？」

夏海ちゃんと一緒に後ろを振り返ると、既にガスコンロには火が灯され、準備万端になっていた。

「ほらお前達、調理の前に手を洗え」

のみきがハイドログラディエーター改を皆に向けている。良一が反射的に両手を挙げ、降参の意を示す。

「安心しろ。低出力威嚇モードだ」

直後、シャワーのような柔らかい水が発射される。それぞれ手を差し出して、手洗い完了。

「これで準備完了だ」

そして全員で調理に取り掛かる。

こうなると俺はできることがほとんどないので、皆の様子を見学することになる。

「真鯛はお刺身と塩焼き、半分ずつにするね」

「あ、手伝わせてください」

しろはが真鯛を両手に抱えてまな板のほうに持って行くと、夏海ちゃんがそれに追従して一緒に調理を始める。

「鵠、アジの下ごしらえお願いできる?」

「任せといて」

しろはからの指示で、鵠もまな板の前に立つ。

「鵠、お前料理できるのか?」

「失礼な。こう見えて自信あるのだぞ」

「鵠だから、てつきり魚は丸のみかと思ってた」

「それ以上、そのネタ引つ張るつもりなら、夜道に背後からスーツケースのスーちゃんががぶりといくよ?」

想像してみたら怖かったので、それ以上言わないことにした。

鵠の他にも、静久と紬もアジの下ごしらえに参加している。あの二人が料理できるのも意外だ。

その間、良一と天善は釣り道具の片づけをしていた。俺も手伝おうかとも思ったが、道具の扱いに慣れてない俺が行ったところで足手まといになるだけだろう。

「ふむ。こんなものか」

そして、例の宝箱から出てきたタコはしつかり塩もみされた後、ゆで上げられていた。

ちなみに、鍋を担当していたのはのみきだった。

「恥ずかしながら、私は皆ほど料理が得意じゃないからな」

「そのタコ、どうするんだ?」

「刺身にするらしい。蒼、頼んだぞ」

「まかせて。しろは、柳刃包丁貸してくれる?」

「うん。持って行っていいよ」

「ありがとう」

蒼は慣れた手つきでタコを切っていく。

「うまいもんだな」

「まだまだ藍には負けるけどね……見直した？」

「見直した」

「ふふん。魚釣りの汚名挽回よ」

「それ、汚名返上な」

「こ、細かい事はいいのよ！」

それこそ、蒼の名誉のためにこれ以上突っ込まないほうが良さそう
だ。

そして蒼の横では、藍が雪平鍋を火にかけている。

「藍はなに作ってるんだ？」

「自分で釣った貝でお吸い物を作ってるんです」

どうやら最後の仕上げの段階のようだ。醤油で味を調えた後、お玉
で小皿にすくって味を確かめている。

「羽依里さんも味見してみますか？」

「じゃあ一口」

「はい。どうぞ」

藍から吸い物を小皿に足してもらい、一口飲んでみる。

「おお、美味しい」

「それはよかったです」

……って、今の状況はもしかして。

「? どうかしましたか？」

思わず口元に手をやった俺を、藍が不思議そうに見ている。

「天善ちゃんじゃないので、ちゃんと砂抜きはしていますよ」

……良一の失敗談をどこかで聞いたんだらうか。

本人が気づいてないようなので、変に意識しないことにしよう。

「羽依里さん、そろそろ皆の分のお皿を並べてください」

「ああ、了解」

簡易テーブルに紙皿を並べ、刺身用のしょうゆや割り箸を用意す
る。

それからしばらくすると、テーブルには豪華な料理が並んだ。

「おお……すごいな」

アジの刺身、アジフライ、アジの塩焼き、貝の吸い物にタコの刺身。一部偏ってる感はあるが、そうそうたるラインナップだ。

ちなみに鵜が釣った海の軟体生物たちは、この場での調理が大変ということで海にリリースされた。

また、タコと一緒に宝箱に入ってたウニやアワビは漁協組合の取り決めで漁期以外は獲っちゃダメらしく、海に帰された。

「はい、お待たせ」

そして夏海ちゃんの釣った真鯛の刺身と塩焼きが最後に登場する。

「一番にどうぞ、夏海ちゃん」

「良いんですか?」

「あなたが釣ったものだし。しっかり食べてあげることが礼儀」

俺の手伝いは完全になかったことにされていた。

「それじゃあ、いただきます」

夏海ちゃんは真鯛の塩焼きに箸を伸ばす。

「……すごくおいしいです」

すごくいい笑顔だ。俺も頑張ったかいがある。

「それじゃ、皆もいただきますしよう」

それからは各々食事を楽しんだ。

鮎はタコと格闘していたし、良一はどこか悔しそうに真鯛の刺身を食べていた。

天善と静久は吸い物に舌鼓を打っていたし、鵜はアワビが食べたかったとぶつぶつ言っていた。

やがて日が暮れ始めたところで、食事会もお開きになる。

「……本当に俺たちだけ先に帰っていいの?」

バイクで来てるので、俺と夏海ちゃんだけ先に帰らせてもらうことに。

「片付けも終わったし、私たちはゆっくり歩いて帰るから」

「今日はお店休むけど、もうおなかいっぱいだよね?」

「あはは……はい。お腹いっぱいです」

さすがに俺も腹いっぱいだ。夕飯は入りそうにない。

夏海ちゃんが釣った鯛の塩焼きの一部はアルミホイルに包んでもらって、鏡子さんへのお土産にさせてもらった。

「……皆、ありがとうな」

「今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました」

「これくらいでお礼言っちゃ、夏休みが終わるまでもたないわよ?」

「そうですよ夏海ちゃん、夏休みはまだまだこれからです」

「なっちゃん、次は負けないからね!」

「ナツミさん、また一緒にやりましょう!」

「今度は俺も鯛を釣ってやるぜ!」

俺たちは皆に見送られながら、良い疲労感に包まれたまま、帰路についた。

第四話・完

第五話 7月29日

「ううう……俺が悪かった！ やめてくれえええ……」
「うーん……うーん……」

「鷹原さん！ しっかりしてください！ 鷹原さん！」
「……はっ」

「大丈夫ですか？ うなされてましたけど」

「……どうやら夢を見ていたようだ。」

「なんだろう。アジの大群に海の底に引きずり込まれる夢を見ていた。」

「昨日アジを食べすぎたから、あんな夢を見たのかな……」

「なんですか？」

「ううん。何でもないよ」

「変な汗をかいている。」

「起こしに来たらうめき声が聞こえたので、びっくりしました」

「夢見最悪だよ……ちよつと顔洗ってくるね」

洗面所で顔を洗って、歯磨きを済ませる。

その後部屋に戻って着替えを終える頃には、そんな夢のことはほとんど忘れ、いつもの調子に戻ってくる。

準備を終え、ラジオ体操に参加するため神社へと向かう。

境内に着くと、昨日と同じメンバーがいた。

のみき、良一、天善、藍、蒼、ネコ、ウシ……。

いや、昨日より増えている。

「鷹原さん、ウシとネコがいるんですけど……」

「静久に紬、その格好はなんだ……？」

「ウシよ。モー」

「ネコさんです。ニヤー」

いや、それは見ればわかる。

「なんで二人がここに？」

「結局昨日、帰るのが遅くなっちゃって。最終便に間に合わなかったのよ」

「だから、シズクには灯台に泊まってもらったんです」

あー、そういうことか。

「それで、朝から二人でラジオ体操に行こうって話になったんだけど……」

「袖が寝ぼけて、パジャマのまま出発しちゃったのよね」

「むぎゆ！ シズク、バラさないでくださいー！」

パジャマで外に出るってのは都会ではありえないけど、ここは島だし。着ぐるみなら大丈夫なんだろうか。

「さあ、ラジオ体操を始めるぞー」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきて、本日のラジオ体操が始まる。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああああー！」

「うるあああああー！」

ラジオ体操大好きさんの指示に合わせ、皆で大きな声を出して横隔膜を動かす。

「なあ天善、これって本当に横隔膜の運動になってるのか？」

「さあな。ラジオ体操大好きさんがそう言うんだから、なってるんじゃないか」

「うるああああー……けっほ、けほけほ」

夏海ちゃんはまだやり慣れてないみたいだ。

「むぎいいいいいいー……っ！」

こっちは根本的に発声内容違うし……。

相変わらず妙な体操だし、ラジオ使ってすらないけど、朝からいい運動になった。

「さあ、スタンプを押すぞー」

ラジオ体操を終え、スタンプとログインボーナスを受け取る。

ちなみに今日のログボはちりめんだった。これ、ご飯に乗せて醤油をかけるとうまいんだよな。

ラジオ体操の後も各々と話をしていたが、一人、また一人と帰っていく。

「夏海ちゃん、俺達も帰ろうか」

「はい」

そろそろお腹も空いたし、俺達も帰ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、羽依里君。ちょっとお願いがあるんだけど」

ラジオ体操から帰宅すると、庭先で鏡子さんに声をかけられた。日中に姿を見るのは久しぶりな気がする。

「どうしたんですか？」

俺は持っていたスタンプカードとログボを玄関先に置いて振り返る。

「朝ごはんと宿題終わってからで良いんだけど、港に荷物取りに行つてもらえないかな？」

「10時の船で届くとは思うんだけど、私はちょっと手が離せない用事があつて」

「いいですよ」

「生ものじゃないんだけど、ちょっと重くてね。バイクの荷台に積みば大丈夫だと思うから」

「わかりました」

「くれぐれも落としたりしないでね。強い衝撃を与えなければ大丈夫だとは思うから」

ええ？ 何それ怖い。もしかして爆発したりするのかな。

「持つて帰ったら、台所に置いておいてくれたら良いから。それじゃ、お願いね」

……出かけてしまった。

相変わらず、忙しい人だ。

宿題終わらせたら受け取りに行こう。そう考えながら中に入ろうと振り返る。

「あれ？ ログボのちりめんがない？」

確か、スタンプカードと一緒に靴箱の上に置いたはずなのに。スタンプカードしかない。

「変だな……」

首をかしげながら家の中に入り、居間に腰を下ろす。

台所からは夏海ちゃんが朝ごはんを作る音が聞こえてくる。

「……まさか」

俺は急いで台所へと向かう。

「あ、もうすぐ朝ごはんできますから。座って待っていてくれていいですよ」

食材が炒められているフライパンの横には、空っぽになったちりめんの袋。

「遅かったか……」

「え？ 何の話ですか？」

「夏海ちゃん、たばかったな……」

夏海ちゃんの笑顔の向こう側に、してやったりという表情が読み取れた。

「はい。どうぞ」

数分後。提供された朝ごはんはもちろん、ちりめんチャーハンだった。

昨日は卵をチャーハンに使えなかったから、今日は先手を打たれたみたいだ。

「ちりめんチャーハン、おいしいですよねえ」

「そ、そうだね」

美味しかったけど、何か悔しかった。

食後はいつものように向かい合って宿題。

「あ」

今日の分が一通り終わった頃、夏海ちゃんが小さく声を上げる。

「どうしたの」

「工作の宿題があったの忘れてました」

「工作？」

そういえば、小学校ってそういう宿題が出てた気がする。

「工作の他に、自由研究もあるんですよー」

夏海ちゃんが心底めんどくさそうな声をあげる。

「自由研究も自由なんてのは名ばかりで、ある程度内容は限定された覚えがあるよ」

「そうなんですよー……むぎぎぎぎ」

夏海ちゃんはテーブルに突っ伏して頭を抱えている。紬の口癖もうつってるし。

まあ、俺も昔は苦労した覚えがあるし、夏海ちゃんの気持ちもわかる。俺も

「というわけで鷹原さん、何かネタください」

「え」

ぱつと顔を上げて、俺に無茶振りしてくる。

「鷹原さんは小学生の頃、どんな自由研究したんですか？」

そ、そんな期待に満ちた目で見ないで。

「俺は……」

なんだっただけ。ビート版による浮力と推進力の関係性とかだっけ。スポーツ少年だったから、真面目過ぎる内容で引かれてた記憶がある。

「……秘密」

「ええー……」

だって、なんか恥ずかしいし。

後はクラスメイトで、人形が海を泳ぎ切れるか実験した奴がいたよ
うな。結局海の藻屑になったとか、ならなかったとか。

……これも参考にならないな。

「そうだ。他の皆の意見も聞いてみようよ」

「他の皆、ですか？」

「うん」

善は急げ。俺は夏海ちゃんを乗せて、バイクを駄菓子屋へと走らせる。

「近いのに、どうしてバイクなんですか？」

「実はこの後、港に行く用事があった」

「あ。鏡子さんに何か頼まれてましたけど、それですか？」

「そう。港に大きな荷物が来るらしくてね。バイクじゃないと運べないらしいんだ」

「それで悪いんだけど。帰りは一人で戻ってもらっていいかな」

「良いですよ」

そんな話をしているうちに、駄菓子屋に到着する。

「私一人で聞いてみますので、港に行ってきたください」

「いや、もう少しいるよ」

「え？」

「……他の皆がどんな自由研究をしたのか気になる」

「鷹原さん、悪趣味ですよ……」

駄菓子屋を覗くと、今日も蒼が店番をしている。手前のベンチには藍が座っていて、その横には扇風機。藍はトンボ玉付きの紐で髪を結ってポニーテールにしている、その髪が扇風機の風でなびいて綺麗だった。

他の客の姿はなかったなので、入店してすぐに二人に工作と自由研究について質問してみた。

「工作ですか。あいにくこの店には工作キットみたいなものは売って
ないですね」

「プラモデルくらいしかないわねー」

二人がガサゴソと棚の上や奥の倉庫を探してくれる。さすがにプラモを提出するわけにいかない。

「やっぱり工作は望み薄だな……完全自作するとか、何か考えないと。」

「ところで、お二人は小学生の頃どんな自由研究をしたんですか？」

夏海ちゃんもそれを察して、話題を変えたようだ。

先輩たちの実体験なら、良い参考になるはずだ。

「自由研究ねえ……えーっと」

「わたしは蒼ちゃんの観察日記を書きました」

「え？」

「観察日記って、夏休みの間ずっとか？」

「そうですよ。まだとってあります」

「……マジで？」

「言っておきますが、男子には見せませんよ？」

「いや、見たくないけど」

「そこは見たいって言いなさいよ！」

「え、言ったら見せてくれるのか？」

「見せるわけないでしょ！ 藍ってば、お風呂の中のことまで書いてるんだから！」

「……」

「ちよっと！ 何想像してるのよ！」

「恥ずかしがるんなら、変な想像させるようなこと言わないでほしい。」

「あの、蒼さんはどんな自由研究をしたんですか？」

「そうだ、そっちのほうが気になるな」

「えーっと……あれよあれ、昆虫採集」

「昆虫採集か……」

「何よ、子供っぽいとか思ってる？」

「いや、小学生の時なら子供っぽいのは当然だろうし、むしろ蒼らしいと思うぞ」

「え？　そ、そう……？」

「昆虫採集つてことは、かぶと虫とか、くわがた虫とかですか？」

「その辺ならこの島でも集められそうだな」

「はい！」

「あたしの場合、蝶専門だったけどね」

「蝶？」

「アレキサンドラトリバネアゲハとか、アサギマダラとか捕まえて標本にしてたわ」

「アレキさん……って何です？」

「世界最大の蝶よ。おとーさんと一緒にパプアニューギニアまで行って、捕ったの」

「パプアニューギニア!？」

「アサギマダラ……ってのは？」

「別名『旅する蝶』って言われていてね。日本にもいるけど、アジアのほうに多く分布してるのよ。あっちの方が羽根の色が綺麗だから、台湾に捕りに行ったわ」

「台湾!？」

さすが昆虫学者の娘だ。ガチな昆虫採集だった。

「……あ、やっぱりあたしの自由研究ってマニアックすぎ？」

明らかに引いてる俺達を見て察したのか、蒼はバツな悪そうな顔をする。

「いや、ワールドワイドだが、藍の自由研究よりよっぽど良いと思うぞ」

「は？　蒼ちゃんの観察日記のどこがいけないんですか!？」

「問題ありまくりだろ！」

蒼にもプライバシーはある。たとえば姉妹であっても。

「……ところで鷹原さん、時間大丈夫ですか？」

「あ」

腕時計を見ると、10時を15分ほど過ぎていた。

「それじゃ夏海ちゃん、俺はそろそろ港のほうに行くから」

「はい」

「あれっ、羽依里どこか行くの?」

「ちよつと鏡子さんに用事頼まれててさ。夏海ちゃんには、後で一人で戻るよう言ってるから」

「大変ですね。それなら夏海ちゃんのお相手は任せてください」

「悪いけど、よろしく頼むよ」

「夏海ちゃん、かき氷ごちそうしたげる」

「蒼ちゃんの観察日記、見せてあげます」

「……え、夏海ちゃんには見せるのか?」

「女の子には見せますよ?」

「だから藍、女の子にも見せないで——!」

少し不安も残るけど、夏海ちゃんを空門姉妹に任せて、俺は港へとバイクを走らせる。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

もともと駄菓子屋から港まではそこまで離れていないので、ひとっ走りですぐに到着。すぐに荷物を受け取る。

「さて、一旦荷物を置きに戻ろうかな」

バイクのキックスイッチに足をかけた瞬間。

「羽依里」

背後から聞き覚えのある野太い声が聞こえた。

「そ、その声は」

振り向くと、そこにはしろはのじーさん。

さらに、見た目が逞しいじーさん二人も連れ従っていた。

「これで4人そろったな」

「え? あの、何の話ですか」

「四天王スクワットだ!」

「うわあああ!?!」

屈強なじーさん二人から両脇を抱えられ、バイクから引きずり降ろされる。

「羽依里、お前は朱雀だ!」

「ええー……」

有無を言わず、といった感じだ。こうなったが最後、逃げたりした日にはどうなるかわかったもんじゃない。

もし仮にバイクに乗って逃げ出せたとしても、未知の力で先回りされたり、謎の連係プレーでバイクから落とされたりしそうだ。

「いくぞー! ししんそうおう!」

そして、四天王スクワットが始まった。

「玄武! げん! げん! 青龍!」

「せい! せい! 白虎!」

「びゃこ! びゃこ! 朱雀!」

……俺か。

「……ざく! ざく! 玄武!」

「げん! げん! 青龍!」

ちなみに四天王スクワットとは、四人一組となってそれぞれに『青龍』『朱雀』『玄武』『白虎』の役を割り当て、お互いに名前を呼ばれた者が対応してスクワットを行うというものだ。

「せい! せい! 朱雀!」

……また俺か。

「……ざく! ざく! 白虎!」

「びゃこ! びゃこ! 朱雀!」

……え、また俺?

「……ざく! ざく! 玄武!」

何度もやってると、頭の中に得体の知れないドーパミンみたいなものが出るのか、妙なテンションになってくる。おかげで一人でスクワットするより数倍の回数こなす事ができて、すごいトレーニングになるんだ。って、俺は何天善みたいなことを言ってるんだろう。きつと既

に妙なテンションになってるに違いない。楽しくなってきた。これはやばい。ぎくー！ぎくー！

「うむ。今日はこれくらいにしておいてやろう」

……ようやく解放された。

「ぜえ、はあ、ひどい目にあつた」

一時間近く付き合わされてしまった。あのjeeさんたち、元気すぎだろ。

それにしても、頼まれた荷物が生ものじゃなくて助かった。炎天下に置きっぱなしだったもんな。

汗だくの体で、やけに重たい荷物を荷台に固定。さあ出発……と思つたところで、すごいいい匂いが漂ってきた。

一度乗りかけたバイクから降りて、匂いの元を探す。

見ると、昨日と同じ場所に出店が出ていた。

「よう、羽依里」

「……良一か？」

昨日は海鮮焼きそばを焼いていたが、今日はまた別の料理をやつている。

「今日は何を焼いてるんだ？」

「見てわからないのか？」

「……悪い、わからない」

めちやくちや食欲をそそる匂いがしてるが、料理そのものは見たことがない。

「まったく、それでも岡山県民か？ ホルモンうどんだよ。ホルモン

うどん」

「うまそうだな……」

昨日の海鮮焼きそばといい、良一は麺類が得意なんだろうか。

「実は今日のホルモンうどんは岡山から来た謎のホルモンおじさんから教えてもらったんだ」

「ホルモンおじさん……っ？」

「ああ、秘伝の醤油ダレも分けてもらった」

「というわけで、食ってけ」

「今なら300円のところ、200円だ」

「しかも、大盛りにしてやるぞ」

四天王スクワットの後で、腹はめちやくちや空いている。

しかも値引きまでしてくれて大盛。これは誘惑に勝てなかった。

「ひとつくれ」

「ほい。まいどあり」

昨日のと同じテーブルセットに座って、さつそく食べてみた。

ホルモンの油が良い感じにうどんに絡まり、独特のコクがあつてうまい。野菜も秘伝の醤油ダレをまとつていて、これまた良い。気がついたら完食していた。

「うまかった」

「良い食いつぶりだったぜ！ 羽依里！」

いい笑顔で親指を立ててくる。

「これだけうまいのに、ほとんど売れないんだよな。今日は日が悪いぜ」

自分で焼いたのを自分で食べている。何とも言えない悲壮感があつた。

「……うぷ」

それにしても、食べ過ぎてしまった。四天王スクワットで腹が減っていたとはいえ、これは昼ごはんは入らないな。

良一に別れを告げ、改めてバイクを走らせて加藤家へ戻る。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー」

「おかえりなさい。ずいぶん遅かったですね」

「色々あつてね……」

四天王スクワットから解放されるのに時間がかかってしまったせいか、既に夏海ちゃんは加藤家に戻ってきていた。

鏡子さんから頼まれた荷物を台所の方に置き、居間に腰を下ろす。

「夏海ちゃん、今日のお昼……」

「そういうば、しろはさん来てましたよ」

「え？　しろはが？」

「はい。お昼に食堂に来てほしいって」

「なんだろう？」

「私もお呼ばれたので、ついて行っていいですか？」

「もちろん。一緒に行こう」

二人で歩いてしろは食堂へと向かう。

「そういうば、駄菓子屋ではあの後、何もなかった？」

「お二人とおしゃべりは楽しかったですよ」

「そつか。ならいいんだけど」

別れ際の藍の台詞から、あのがちよつと不安だったんだけど。考えすぎだったかもしれない。

夏海ちゃんも着実に島に溶け込んでいってるようで、なによりだ。

「でも、あの観察日記……」

「え？」

「いえ。なんでもないです」

見たんだろうか。観察日記。

藍の妹に対する溺愛っぷりはわかってたつもりだけど、うーむ。

「それで藍さんから自由研究にと、絵日記帳をもらいました」

「絵日記帳？　なんでまた」

「島の思い出をしっかりと書いて持って帰ってください、って言われました」

「……そういうことか。」

なんだかんだで、しっかりと夏海ちゃんのこと考えてくれてるんだな。

絵日記で書き残したら、写真とはまた違う思い出になりそうだし。

「良かったね」

「でもその後、絵を描く道具がないって言ったら、色鉛筆セットを買わされました」

……商魂逞しい看板娘達だった。

その後も楽しく話をしながら、小学校の前を通り過ぎて食堂に到着する。

食堂の扉には『準備中』の札がかかっているが、鍵は開いているみたいだ。

「しろはー」

扉を開けて、中に入る。

「……えっ?」

カウンターの向こうにいたしろはが振り返る。

……下着姿で。

「ご、ごめん!」

俺はとっさに、夏海ちゃんの目を隠す。

「え? なんですか?」

「いや、教育上よろしくないとって……」

「……早く、しめて」

「あ、うん」

ガラガラと扉を閉めている間に、しろははさっさと服を着る。

「なんてタイミングで入ってくるの」

「大丈夫、カウンターの向こうだったし、背中しか見えなかったから」

「そういう問題じゃない。道に誰かいたらどうしてくれるの」

顔を赤くしてるが、怒ってはないみたいだ。

恋人同士になってから、この辺のトラブルには寛容になってきている気がする。

「ところで、なんか呼ばれたらしいけど」

「あ、そうそう。二人とも、お昼ご飯まだでしょ?」

「はい。まだです」

「え？ えーと」

「二人に試食してもらいたい料理があるの。すぐに用意するから、ちよつと待ってて」

「あ、しろは……」

さつきとは打って変わって、すごい笑顔だった。これはとても食べられないなんて言えない。

軽いものだと嬉しいな……。

そんなことを考えていると、しろはが調理を始める。

「なんでしょう。楽しみですねえ」

「そ、そうだね」

「♪♪♪♪♪」

しばらくすると、包丁のリズミカルな音に交じって、鼻歌が聞こえてきた。

「その歌、何なんですか？」

「あ、聞こえてた？」

「確か、島に伝わる童謡だっけ？」

「そう。島に住んでる人なら皆知ってるよ」

「元は外国の歌だっけ？」

「そう。ずっと昔、島にやってきた外国人が教えてくれたんだって」

その後もしろはから島の童謡のレクチャーを受けていたが、やがて漂ってきた香りに俺は戦慄する。

……あれ？ この香り。どこかで嗅いだことあるぞ？

そう。あれはついさつき。港で良一が焼いていた……！

「お待ちせ」

笑顔のしろはが運んできてくれたのは、二人分の……ホルモンうどん。

「わあ、おいしそうです！」

「ほ、本当だな！」

俺の声は動揺して間違いなく裏返っていた。

「謎のホルモンおじさんって人に、レシピを教えてもらったの」

「へ、へえ……」

「これ、ホルモンうどんって言って、岡山の名物なんだって」

まるでへじやぶだ。

「二人が美味しいって言ってってくれたら、食堂のメニューに加えようと思っただけど」

めちやくちや笑顔だ。よほど自信があるんだろう。

「どうぞ。めしあがれ」

「いただきますーす」

「い、いただきます」

笑顔で箸を持った夏海ちゃんに続いて、俺も箸を手にし……意を決してホルモンうどんを口に運ぶ。

「……どうかな?」

「美味しいです!」

「うん、美味しい」

……もちろん良一の作ったやつなんかより、遥かに美味しかった。3口目くらいまでは。

いや、当然彼女の手料理だし。全体的なレベルもさつき食ったやつ
の比じゃない。圧倒してる。

でも、ホルモンうどんなんだ。さつき食ったメニューなんだ。まさか連続するなんて思わなかった。

それより最悪なのは、ここで残してしまうことだ。もし残せば、芋
ずる式に港での出来事が明るみに出るだろう。

そうなれば、良一のホルモンうどんは完食して、彼女のホルモンう
どんを残した最悪の彼氏になってしまう。それだけは避けなければ。

色々と頭を高速回転させて満腹中枢を麻痺させ、勢いに任せてホル
モンうどんを平らげる。

「……ごちそうさま」

「え、もう食べたんですか!?!」

「……美味しかったよ。しろは」

「本当？ よかった」

ああ……この笑顔が見ただけで、俺は救われた気がする。

その後は夏海ちゃんが食べ終わるまで、しろはと料理の改善点や、味付けについて話し合った。

まだまだ改良の余地ありと、意気込む彼女の姿はとても輝いて見えた。

「……それじゃ、また来るから」

「うん。またね」

「しろはさん、ごちそうさまでしたー」

笑顔で手を振るしろはに別れを告げ、食堂を後にする。

そこから数歩歩いたところで……。

「うっぷ」

俺はその場にうずくまってしまう。

「た、鷹原さん、大丈夫ですか？」

「……大丈夫。ちよつと食べ過ぎちゃって」

「でも、私と同じくらいの量でしたよね？」

「は、早くも夏バテかもね」

「ええー……スタミナがつくように、ウナギでも買ってきましようか？」

い、今は食べ物の話はやめてほしい……。

「……大丈夫。少し休めば歩けるから」

しろは食堂からできるだけ離れた場所で、少しの間休む。

その後、一歩一歩必死に歩いて、息もお腹も絶え絶えになりながら、なんとか加藤家に帰りついた。

……今夜はホルモンに追いかけられる夢でも見そうだ。

そんな腹もようやく落ち着いてきた、午後三時頃。

玄関に静久がやってきた。

「静久さん、どうしたんですか？」

夏海ちゃんに続いて、玄関に出る。

「灯台の周りが大変なことになってるのよ。来てくれない？」

「わかった」

静久は他の皆にも知らせてくると言っ、去っていった。

「どうしたんですかね？」

「よくわからないけど、灯台に行ってみよう」

「はい！」

バイクに夏海ちゃんを乗せて、二人で灯台へ向かう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

灯台に着いてみると、そこには灯台の主である紬のほか、天善、良一、のみぎ、蒼に藍と、いつものメンバーが揃っていた。

「皆、何があつたんだ？」

皆は灯台の向こう側、灯台そばの浜辺を見ていた。紬が良く拾い物をしている場所だ。

「羽依里、あれ見てみるよ」

「うわっ!？」

良一の指差す先を見ると、そこには浜辺に流れ着いた大量のパリングルス。

「朝見た時にはきれいだったのですが、お昼前くらいからどんどん流れ着いてきまして」

紬が悲しそうな顔で浜辺を見ている。紬の大切な場所だし、当然だろう。

「なあ、これって」

「おそらく不法投棄だろう。少し前に期間限定で販売されていたネオレインボー味がほとんどだ」

のみぎが浜辺に打ち上げられていた容器の一つを持ち上げる。虹色をしたカラフルなパッケージだ。

「あー、なんかすごい独特な味で人気なかったやつよね。全然売れないって、問屋さんが泣いてたわ」

駄菓子屋の看板娘から決定的な情報もたらされた。きつとたくさん売れ残ったんだろうな……。

「役所から業者に連絡して、回収してもらおう」

のみきが呆れたような口調で言う。

「あ、あの」

その時、夏海ちゃんがおずおずと手を挙げる。

「そのまま回収してもらって、捨てるのは簡単だと思うんですけど……その、もったいないと思うんです!」

「このパリングルスを使って、皆で工作しませんか」

「工作? パリングルスでか?」

のみきが手にしているパリングルスを、皆で見つめる。どう答えるべきか悩んでいる感じだ。

「……良い考えです! パリングルス工作大会を開催しましょう!」

そんな中、紬が一番に賛同してくれる。さすが夏海ちゃんのズツ友だ。

「そうですね。そういう活用方法もありですかね」

「うん。面白そうじゃない」

「確かにただ捨てられるよりも、何かの役に立った方が浮かばれるかもしれないな」

それを皮切りに、皆が続々と賛成してくれる。

「なら、まずは材料のパリングルスを集めないとな!」

「そうだな。まずは材料集めだ」

良一と天善が走り出したのを合図に、皆で一斉に浜辺に降りて、手分けしてパリングルスを集め始める。

いざ集めてみると、ネオレインボー味の他に、激甘ワッフル味、ひでんソース味といった種類も見受けられた。どれも際物の部類なのか、売れ残ってしまったらしい。

途中から静久も合流し、彼女が呼んできたしろはと鷗もパリングルス回収に加わる。

俺を含めた男連中は、浜辺で持てるだけのパリングルスを持った後、灯台まで全力ダッシュを繰り返していた。まあ、もちろん時々休みながらだけど。

夏海ちゃんは紬と一緒に、両手いっぱいパリングルスを抱えている。

「♪♪♪♪♪」

そんな中でも、皆でやるのが楽しいのか、紬は例の鼻歌を歌っていた。

「本当に皆知ってるんですね」

「紬は特別気に入ってるみたいだしな、あの歌」

「よし、いくよー!」

鳴は落ちていた紐で、パリングルスをスーツケースの側面に可能な限り結び付けている。まとめて運ぼうという魂胆だろう。

「うぐ、重い……」

「カモメさん、手伝います!」

「はい!」

しかし予想以上の重量になったためか、紬と夏海ちゃんが後ろから一緒に押していた。

「ほい」

「はい」

「ほいっ」

「よし」

「はいっ」

それ以外の女性陣はバケツリレーのようにパリングルスを受け渡していく。さすがの連係プレーだ。

皆、砂だらけになりながらパリングルスを持って運ぶ。

そのおかげで、浜辺に大量に流れ着いていたパリングルスはあっという間に集められ、灯台のふもとに集められた。

「集めたのはいいが、大事なことを忘れていたな」

「はい。大事なことを忘れていましたね」

漂着物だし、濡れてる。そして中身も入ってる。

「工作に使うにしても、中身を捨てたうえで何日か日干ししないと使えないね、これ」

鵜の言う通りだ。海水に浸かっているから中身を食べるわけにもいかないし。そもそも美味しくないから大量投棄されたはずだ。

「皆さん、これを使ってください」

紬が灯台から半透明のゴミ袋を出してきてくれたので、それに中身を出しておくことに。

「なんか……グロテスクな色になったわね」

ネオレインボー味はパッケージだけでなく、中身もレインボーだった。

「絵具と同じです。カラフルな色も混ぜちゃうとすごく汚くなっちゃうんですよ」

「せめて黒いゴミ袋が欲しかったよな……贅沢言えないけどよ」

一杯になったゴミ袋は灯台の裏に置かれ、回収を待つことに。

「ゴミ袋の口はしっかり結んでおこう。変なガスとか発生したら危ないし」

しろははいたって真剣な表情だ。

パリングルスの空き容器の管理は紬がやってくれるとのこと、今日はここで解散となる。

「皆さん、ありがとうございました」

「おかげさまで、綺麗になりました！」

紬と夏海ちゃんが並んで頭を下げている。二人とも、きれいになった浜辺を見て満足そうだ。

「やっぱり、きれいな方がいいですよね」

「はい。大切な場所ですから！」

女の子同士で年も近いせい、本当に仲良くなったなあ、あの二人。

「そうだしろは。今日は食堂は？」

だいぶ日も傾いてる。昨日みたいに休むかもしれないので、一応確

認しておく。

「昼間に用意だけはしてきたから大丈夫。今からだど6時前には開けられるよ」

「そっか。なら6時過ぎくらいに行くよ」

「うん。待ってる」

「それでは、工作用のパリングルスが良い感じに乾いてきたら、またお知らせしますので！」

元氣良く手を振る袖に見送られながら、俺達は灯台を後にする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

バイクで加藤家に戻ったのが5時過ぎ。それから少し時間をおいてから、しろは食堂へ向かう。

「二人とも、今日はお疲れさま」

しろはも疲れているはずなのに、俺達の労をねぎらってくれる。

「しろはこそ、お疲れさま」

「私はそこまでしてないし。それより羽依里、港では大変だったね」「え？」

なんだろう。良一のホルモンうどんの件がバレたのだろうか。

「おじーちゃんから聞いたよ。四天王スクワットに参加させられたんだってね」

「あー……うん」

「四天王スクワットって何ですか？」

「……夏海ちゃん、島にはまだ知っちゃいけない秘密があるの」

「……わ、わかりました」

なんだろう。しろはが笑顔なのに怖い。

確かにアレは、子供には色々刺激が強すぎる……かもしれない。

「それで二人とも、今日は何にする？」

「そうだな。えーつと……」

気を取り直して、メニュー表に視線を落とす。

「あ、ところで今日の日替わりって……」

「うん、ホルモンうどん」

……眩暈がした。

「お、お昼に食べたし、せっかくだけど別なものにしようかな」

「そ、そうですね」

お昼に食堂を出た後の惨状を知っている夏海ちゃんも同意してくれた。

「あれ？」

メニュー表を見てみると、気になるメニューを見つけた。

親子丼 (A) 600円

親子丼 (B) 600円

「なあ、この親子丼 (A) と親子丼 (B) の違いって何？」

「内緒」

「え、そう言われると逆に気になる」

「それにする？」

「じゃあ、それにします」

「俺は (A) にしよう」

「私は (B) でお願いします」

「うん。少し待っててね」

しろはが調理に取り掛かる。しばらくすると、普通の親子丼と変わらない良い香りが漂ってきた。

「はい。親子丼 (A)、おまちどうさま」

俺の前に提供されたのは、卵と鶏肉を使った普通の親子丼だった。

「親子丼 (B) もおまちどうさま」

夏海ちゃんの前に置かれたのは真っ赤などんぶりだった。

「え、なにそれ？」

「鮭といくらの親子丼だよ」

そういうことか。確かにこれも親子だ。

「つて、これで値段一緒なのはおかしくないか？」

「別に普通だと思うけど。それより、冷めないうちにめしあがれ」

「あ、うん。それじゃ、いただきます」

スタンダードな親子丼（A）を口に運ぶ。ふわとろ卵が鶏肉を出汁の旨味ごと包み込んでいて、それでいてしつこくなく優しい味わい。

疲労困憊している今日の俺の胃にはちょうどいい。

「美味しい。しろはの愛情が伝わってくる」

「さらっと恥ずかしいこと言わないで」

おっと、思わず本音が漏れてしまったみたいだ。

「こつちの親子丼もおいしいです」

鮭といくらの親子丼のほうは、夏海ちゃん曰く、わさびとしょうゆが効いて、ぴりっと美味しいらしい。

……今度はそつちを頼んでみよう。

「そういえば、明日港にお店を出すんだけど」

横目で夏海ちゃんの親子丼を見ると、しろはが唐突に切り出した。

「港に？」

「そう。ここ何日かは良一が出してたと思うんだけど、明日は私が出すの」

「午前中だけなんだけど、手伝ってもらえない？」

「もちろん、手伝うよ」

断る理由はない。

「ありがとう」

「あの、私もお手伝いしていいですか？」

「もちろんだよ。ありがとう、夏海ちゃん」

「気になってはただんだけど、あの出店って当番みたいのがあるのか？」

「そういうわけじゃないよ。出ない日もあるし、出すお店も特に決められてないし」

「お小遣い稼ぎに出す人もいるし、趣味で作ったものを売る人もいる

よ。たまに役所に使用料を払って、本土からも来るみたいだし」
「へえ、割と自由なんだな」

条件だけ見れば、観光客が必ず通る港の一等地に店が出せるってのは魅力的なのかもしれない。

「それで、明日なんだけど」

「うん」

「朝の9時くらいから始めたいから、8時半くらいから手伝ってほしいの」

「わかった」

「わかりました！」

「あと、明日必要な物なんだけど……」

その後、しろはと明日の細かい打ち合わせを終えてから帰宅する。

入浴を済ませた後、居間に行くと……先に入浴を済ませていた夏海ちゃんが何か書いていた。

「夏海ちゃん、なに書いてるの?」

「あれですあれ。絵日記です」

あ、すっかり忘れてた。藍からもらったって言ってたっけ。

「工作の方もめどがつきそうですし、良かったです」

「そうだね。今度改めて工作大会を開くって言ってたし、しばらくはネタを考える時間がありそうだね」

「はい! 色々考えてみます」

一生懸命書いてるのをずっと見るのも気が引ける。俺は挨拶を済ませて、自分の部屋に戻って布団を敷く。

明日はどんな料理を出すんだろうか。できればホルモンうどんじゃないほうがいいんだけど。

そんなことを考えていると、体は疲れているのか、すぐに眠気が訪れた。

「鷗、どれだけ気合い入れても耳は動いてないぞ」
「ええー。結構頑張ってるのにー」

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああー！」
「うるあああー！」

「えっ？ う、うけー！」
見よう見まねで体操をこなしていく鷗。

「よし、今日の体操はここまでー！」

「ありがとうございましたー！」

本日のラジオ体操が終了する。結局、今日もラジオは使わなかった。

「なんか、変に疲れた……」

鷗はげんなりしている。まあ、気持ちはわからなくもない。

「さあ、スタンプを押すぞー」

「え、スタンプって何？」

「そういえば鷗はスタンプカード持ってないのか」

「うん。ないよ」

言われてみれば、のみきも何も渡してなかったような気がする。

「ああ……悪いが鷗、スタンプカードは初日にしか渡せない決まりなんだ」

「スタンプカードがないと、スタンプはもちろん、ログボももらえないのよ」

あ、そういうシステムなのか。

「……ろぐぼ、ってなに？」

「参加賞みたいなものですね」

「うーん、参加賞欲しかったけど、しょうがないよね」

「鷗、気を落とすなよ。来年また参加すればいい」

俺は今日の分のスタンプを押してもらい、ログボをバケツから受け取る。

「え、バケツ?」

受け取ったものをよく見てみると、うにだった。
うにらしく、うにうにと動いている。

「え、これがログボ?」

「そうよ。なかなか生きが良いでしょ」

「朝獲れたたてだそうです」

あつけらかんと言う空門姉妹。

「それこそ前の釣りの時、うには獲っちゃダメって言われたぞ?」

「これはきちんと許可をもらったものなので、大丈夫です」

それでも、うにをラジオ体操で配っちゃうんだ……恐るべし、島の
ラジオ体操。

皆は持つて帰ったうにをどうやって食べるかの話で盛り上がって
いる。

「そういえば、しろはってラジオ体操に来ないよな?」

「なんだ鷹原、お前彼氏なのに知らないのか?」

「どういうことだ?」

「しろは、朝にすつごく弱いよ。ああ見えて」

「そうだったのか……」

今度、何かのタイミングで起こしに行ってもいいかもしれない。サ
プライズってやつで。

「ちなみに、蒼ちゃんも目覚めは悪いです。そして、ラジオ体操から
帰ったら必ず二度寝もします」

「ちよつと藍、バラさないでー!」

うん。今日も鳥白島は平和のようだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

そして神社から帰宅。

「……それでこのうに、どうしましょう?」

「食べたい……けど」

「まだ動いてますよ。うにうにって」

「そうだね……」

俺達の手の上で、うには元気に動いていた。

「中身を取り出したいのですが……」

どうやって出すのか、そもそも家にある道具で取り出せるものなのか、さっぱりわからない。

「あら?」

朝から途方に暮れていると、鏡子さんがやってきた。

「おいしそうなにね。食べるの?」

「え? ええ。でもその……」

「食べるんですよ?」

「は、はい」

「貸して」

鏡子さんは俺達の手からうにをひよいつと掴むと、台所へ持って行く。

あつけにとられていると、台所からめきめきと硬い殻を砕く音が聞こえてくる。

「ひっ」

夏海ちゃんが思わず両耳を押さえている。

「はい。どうぞ」

しばらくすると、俺達の前に綺麗に洗われた新鮮なうにの身が出てきた。オレンジ色に輝いていて、すごく美味しそうだ。

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、さっそくチャーハンにしますね」

「夏海ちゃん、ちよつと待って」

「はい?」

さも当然のように持って行くこうとした夏海ちゃんにストップをかける。

「昨日のちりめんはチャーハンに譲ったんだから、今日のうにはご飯

に乗せさせて」

「え、そんな約束しましたっけ？」

「……いや、してないけど」

そもそも、翌日のログボが何かわからないのだから、約束のしようもない。

「だったら、このうにもチャーハンになった方が幸せになれますよ」

「いや、幸せとかそういう問題じゃなくて……」

と、昨日と同じように論戦になりかけた所で、時計が目に入る。今日は出店の手伝いがあるし、あまり時間がない。

「……そうだ。今日はしろはの出店を手伝わなきゃいけないし、ここは公平な手段で決めようと思う」

「公平な手段、ですか？」

「じゃんけんだよ」

「俺が勝ったら、うには白ごはんと醤油で食べる。夏海ちゃんが勝ったら、うにチャーハンだ」

「……いいですよ」

「というわけで……一発勝負！ 恨みっこなし！」

「はい！ ジャーんけーん！」

「ぽんー！」

「くっ、負けた……」

じゃんけんは夏海ちゃんが勝ち、うには結局うにチャーハンへと姿を変えた。

「早く食べて、しろはさんの手伝いに行きましょう！」

「そうだね」

うにの中身を取り出してくれた鏡子さんも一緒に食卓を囲む。

「うん。美味しいわよ、夏海ちゃん」

「ありがとうございます」

うに以外の具材は一切使われていないシンプルなチャーハンなのに、一口食べるとうにの風味が口の中に広がる。最高のチャーハン

だった。

食後は身支度を済ませて、すぐにバイクで港へ向かう。

「今日の出店、何を出すんでしようねえ」

「わからないけど、しろはのことだし、きつとおいしいものだよ」

時間や準備物の打合せはしたけど、具体的に何を作るのかは聞いていなかった。

港に到着すると、昨日まで良一が使っていた屋台の隣にしろはの姿があった。

「おはよう、しろは」

「しろはさん、おはようございます」

「おはよう二人とも。来てくれてありがとうございます」

しろはは既にエプロン姿。髪は後ろに束ねていて、臨戦態勢といった感じだ。

屋台でひとときわ目を引く大きな鉄板にはすでに油が引かれ、良い感じに熱せられている。

「はい、夏海ちゃん。これあげる」

そしてもう一枚のエプロンと、三角巾が出てきた。どうやら夏海ちゃん用らしい。

「え？　ありがとうございます」

夏海ちゃんは慣れた手つきでエプロンと三角巾をつける。

「このエプロンの絵はなんですか？」

「ひげ猫だよ」

「ひげねこ？」

あー、なんか子供のころに見たことあるような。

「可愛いですね」

「でしょ」

「それでね夏海ちゃん。さっそくで悪いんだけど、食材の下ごしらえ手伝ってくれる？」

「はい！」

「こつちに長芋と豚肉、イカ、アサリ、キャベツがあるんだけど……」

仲良く並んで、山盛りになつてる食材の下ごしらえを始める。材料を聞いただけじゃ、イマイチ何を作るのかもわからない。

とりあえず麺がないので、ホルモンうどんじゃないことは確かだ。

「あ、羽依里はこっち。まだ食材や調味料とかたくさんあるから、運んでほしいの」

「よし、まかせてくれ」

俺には食材運びの任務が与えられ、近くの倉庫から小麦粉やら卵を運ぶ。

それが終わると、俺は手持ち無沙汰になつてしまった。

ダメもとで手伝いを申し出してみるが

「羽依里には後でやってもらうことがあるから。今は体力温存しておいて」

と、笑顔で断られてしまった。体力温存って、何やらされるんだらう？

邪魔しないように、二人が調理する様子を眺めることにする。

「夏海ちゃん、タネできた？」

「はい。これでいいですか？」

「うん。いい感じ」

「他の材料も準備できたし、そろそろ始めよっか」

複数の材料をきつとタネの中に混ぜ込むと、それを鉄板の上に流し入れる。

形を整えつつ、ある程度火が通つた所でヘラでひっくり返し、上に鰹節と天かすをふりかけ、マヨネーズとソースを素早くかける。

「最後にもう少し焼いて、完成」

「……お好み焼きだ」

「うん。正確には海鮮お好み焼き」

鉄板の火力のなせる業なのか、予想以上に早く焼きあがった。

「食べてみる？」

そう言うと、しろははお好み焼きをヘラで半分に分けて紙皿によそい、俺と夏海ちゃんに渡してくれる。

「できたら広島風にしたかったんだけど、ものすごく手間がかかるから、今回は関西風なの」

「……うん。美味しい」

見た目でもっとがっちりしてるかと思っただけど、生地がやわらかくて食べやすい。長芋のおかげだろうか。

「これ、いくらで売るのが？」

「400円。材料費を考えたなら、これくらいが妥当」

「良いんじゃないかな」

もう一口食べる。海老やアサリの魚介類が良いアクセントになっていて、飽きない感じだ。

「このエビ、美味しいな」

「実はそれ、エビじゃないの」

「えっ？ それじゃあ何？」

「秘密」

そう言われると、気になる……。

その後もこまごまとした準備をしていると、汽笛と共に船が港に近づいてくるのが見えた。

「ほら、もうすぐお客さんが来るよ。このタイミングが勝負だから」

「え、勝負って」

なんかしろは、商売人の顔になってる。食堂を経営する中で色々と学んでるみたいだ。

「いくよ、夏海ちゃん」

「はいー」

しろはと夏海ちゃんが見事な連係プレーでお好み焼きを焼き、パツクに詰めていく。

その様子に見入ってしまう。

「ほら、そろそろ羽依里も準備して」

「え？ 準備？」

「あれだよ」

しろはが指さす先には、ポケモンの着ぐるみがあった。

確か去年のクリスマス会で、子供向けにしろはのじーさんが着たやつじゃなかったっけ。

「どうやらそのまま、しろはの家で預かっていたようだ。」

「え、あれを着るのか?」

「うん、客寄せお願い」

「この炎天下で? マジ?」

「うん。マジ」

仕方ない。他でもないしろはの頼みだ。これも彼氏の務め。

俺はいそいそとペケモンの着ぐるみを着る。予想はしていたが、めちゃくちゃ暑い。

今日もこれからますます暑くなる。気合いで何とかするしかない。

「かわいいですねぇ」

かわいいのか? 着てる俺としては、よくわからない。

「ところで、このペケモンってなんて鳴くんだけ?」

「え、知らない」

「私もわからないです」

「声を出せないと、客寄せにならないぞ」

「そ、そうだけど」

「適当でいいのかな」

俺は試しに、適当に思いついた言葉を発してみる。

「くけー!ー!ー! けえー!ー!ー! けっけえー!ー!ー! ぐええっけえー!ー!ー!」

「それやめて。聞いたことないなぞなのに、なんだか寒気がする」

しろはは耳を押さえて、ふるふると頭を振っている。

「……やっぱり、ペケモンは静かに愛想良くしてるのが一番じゃないですか?」

確かに。可愛らしい着ぐるみから野郎の声が聞こえてきたんじゃ、夢も希望もあったもんじゃない。

「なんとかランドにいる人形みたいに振る舞えばいいわけだな。よし」

俺はコミカルに動いてみたり、手を振ったりしてみる。

「そうそう、そんな感じ」

でも、これだと客寄せ出来ない。

港から少し離れた出店の横でペケモンが無言で踊っていて、お客が気づくだろうか。

「そうだ。代わりに夏海ちゃんに客寄せをお願いできないかな?」

「ええっ!」

「いらっしやいませー、とか。おいしいですよー。とかでいいから」

「えっと、でも」

「ほら、もうお客さんが通り始めたよ」

見ると、船はすでに着岸しており、続々と観光客が降り立ち始めていた。

「夏海ちゃん頑張つて。一回やったら、吹っ切れると思うから」

「俺も隣にいるぞ」

ずいっと前に出て、できるだけコミカルな動きを始める。

「…………ふー…………」

「で、できたての海鮮お好み焼き、いかがですかー!」

「おいしいですよー!」

一回深呼吸した後、吹っ切れた。

「え? なになに?」

「屋台があるぞ?」

「お好み焼きだって」

「どうぞ、見てってくださいー!」

凄い声だ。夏海ちゃん、こんな大きな声出せたのか。

夏海ちゃんの声に誘われてこっちを見れば、そこにはペケモン。

「見て、ペケモンがいるよ」

そうなると、子供たちは興味津々で寄つて来る。

もちろん一緒に親御さんもついてくるわけで、なんだかんだでお好み焼きが売れていく。

一度食べてもらえば、その味には自信がある。

加えて、周囲にはソースの香りが漂い、食べたい衝動に駆られる。

「二人とも可愛いねえ。姉妹かな？」

二人を目当てにやってくる野郎とか、孫を見るように目を細めて夏海ちゃんを見てくるおじーさんとか、次から次へとお客さんがやってきて、屋台の周りにはあつという間に人だかりができた。

「ねえ、仕事終わった後時間あるかな？」

「えっ」

お好み焼きを買った、見るからにチャライ男がしろはに絡んでくる。

って、あの野郎、何しろはを口説こうとしてやがる。俺の彼女だぞ。愛の力で、どつかのヘタレみたいにしばらく地上の人じゃなくしてやろうか。クマじゃないけど、着ぐるみだし。

「ごめんなさい。私彼氏がいるので」

しろはが笑顔で撃退。俺もあと一步のところまで踏みとどまった。チャラ男もバツが悪そうに去っていった。

その後も怒涛のように人が押し寄せる。焼くのが追いつかなくなり、俺と夏海ちゃんでは何とか時間を稼ぐ場面もあつたりした。

紆余曲折あつたが、結局お好み焼きは昼前には完売してしまった。

「ふう……」

さつきまでの騒ぎがウソのように静かになった港で、俺は着ぐるみを脱いで休憩していた。

「はふ。緊張しました」

隣に座ってる夏海ちゃんは、ちよつと声が枯れてる。相当頑張ったんだらうなあ。

「二人とも、おつかれさま」

しろはが缶ジュースを手渡してくれる。

「ありがとう」

「ありがとうございます」

とりあえず足が早い食材だけクーラーボックスに片付けて、三人並んで缶ジュースを飲む。

「はい、これ」

しろはは俺と夏海ちゃんに封筒を渡してくる。

「これは？」

「手伝ってくれたお礼。少ないけど」

中を見てみると、お札が何枚も入っていた。

「え、こんなにもらえませんかよ」

「手伝ってくれたんだから、当然だよ」

「別にお金が欲しくて手伝ったわけじゃないです」

「そうだぞ。俺達はしろはを手伝いたかったんだ。これはもらえない」

二人揃って封筒をしろはに返す。

「このお金は、食堂の経営資金の足しにしてくれたらいいよ」

「じゃあ、そうする……ごめん。変に気を使って」

しろはは申し訳なさそうな顔をしている。なんだかこっちも心苦しくなってしまふ。

「あれだ、また食堂で美味しいもの食べさせてくれたらいいから」

「そうですよ！」

「……それなら手伝ってくれたお礼に、今日の夜は二人に特別メニューを用意してあげる」

「おお、それは嬉しいな」

「楽しみにしてます！」

「うん。期待してて」

しろははに笑顔が戻った。やっぱり彼女には笑っていてももらいたい。

「なら、最後にもうひと頑張りするか」

後の楽しみが出来た所で、片づけを再開する。

屋台は三人で近くの倉庫へ運び入れる。骨組みだけな上に滑車もついていたので、動かすのは楽だった。

「そういえば、この屋台って朝はあの倉庫にしまわれてたんだろ？しろは一人で出したのか？」

「朝はおじーちゃんに手伝ってもらった。一人でぐいぐい運んできたよ」

滑車がついているとはいえ、あれを一人でか……相変わらずだな。

「この後、羽依里には調理器具と調味料をバイクで食堂の方に運んで欲しいんだけど」

「わかった」

指示されたものを段ボールに詰めて、それを荷台に固定する。段ボール二つつ分。結構な重さだ。

「そうだ、食堂って鍵は？」

「かけてないよ。昼間はやってないのを皆知ってるから、誰も来ないし」

そういう問題じゃないと思うけど……さすが田舎。

「調理器具は段ボールのまま入口に置いてくれてもいいよ。調味料だけ、カウンター奥の戸棚に入れておいて」

「ああ。しろはたちはこの後どうするんだ？」

「私と夏海ちゃんはこれ運ぶよ」

しろはの視線の先には、ペケモンの着ぐるみ。

「一度家に持って帰って、洗わないと」

元々しろはの家から持ってきたんなら、また家に持って帰ってもらうのがいいかもしれない。

「着ぐるみを運び終わったら、夏海ちゃんも帰ってもらうから。羽依里も荷物を置いたら、家に帰っていいよ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

そのまま二人と別れ、バイクを飛ばして食堂へと向かう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「えーっと、大体この辺でいいか」

持ってきた調理器具を適当な場所に置く。続いて調味料の入った段ボールを持って、カウンターの中に入る。

普段はしろはが料理を作ってる所で、女の戦場だからと言って入れてくれない場所だ。

乱雑になつてゐるようで、きちつと整理されている、しろはらしい。

「……あれ？ 戸棚って、どの戸棚だろう？」

カウンターに入ってみてわかったが、そこら中に戸棚がある。

特にラベルが貼つてゐるわけでもないのに、適当に開けてみるしかない。

「うーん、ここは違うな」

どういう時に使うのかわからない大きな皿や鍋、よくわからない道具がしまつてあるが、調味料の類は置かれていない。

「こつちのほうかな」

上の戸棚を開けると、一枚の写真と紙きれが落ちてきた。

「おっと」

慌てて落ちた写真を拾う。

「あれ、これって」

『神戸にて、エターナルなラブを誓います』

と書かれた、幸せそうな男女の写真だ。

たぶん、しろはの両親の写真だろう。

彼女の両親が亡くなつてゐるのは聞いてゐる。思い出の写真なんだろうか。

戸棚に写真を戻し、一緒に落ちてきた紙切れを拾う。

「なんだこれ」

『ヤーはんレシピ』

ヤーはんってなんだろう？

『胡椒、レタス、山菜、イノキング、川の主、よくわからないマーク……』

見る限り、何かのレシピなんだろうけど……後半がよくわからなかった。子供っぽい字だし、しろはの書いたものでもなさそうだ。

とりあえず写真と同じところにしまう。

その後、また別の戸棚を開けると、ようやく調味料が入つてゐる戸棚を見つけた。

「あった、ここだ」

そこに持ってきた調味料を戻して、しろはからの依頼達成だ。

「こんにちわー！」

しまった。鍵を開けっぱなしにしておいたからか、お客が来てしまったみたいだ。

「すみません。今は準備中なんです……って、鳴？」

「あれ、羽依里？　なんでここに？」

「ここ、しろはの店なんだ」

「うん。何度か来てるから知ってる」

「ちよつと頼まれて、色々と整理をしてたんだ」

「そうなんだ」

「で、お前は何しに来たんだ？」

「お店空いてるみたいだったから、お昼ご飯食べさせてもらおうと思ってる」

「あー……」

そりやそうか。食堂に食事以外の用事で来る奴なんていないよな。

思えば、入口に『準備中』の看板も出してなかった気がする。

「悪いけど、昼間はやってないんだ。また夜に来てくれ」

「昨日は空いてなかった？　入らなかったけど」

「昨日は、その……」

ホルモンうどん試食会だったから。

うう、昨日の辛い記憶がフラッシュバックする。

「どしたの羽依里、顔色悪いけど」

「だ、大丈夫だ。とりあえず、また夜に来てくれ」

「でも、お昼食べないと夜までもたない」

もつともな話だ。

「ねえ羽依里、どこかお昼ご飯食べさせてくれる場所知らない？」

「駄菓子屋に行ってみたらどうだ？　あそこならもんじやとかやってるかもしれないぞ」

「もんじや？」

「お好み焼きみたいなもんだよ。駄菓子屋によっては、奥の座敷に鉄板置いてあって、そこで焼いてくれるんだ」

「おお、それじゃ行ってみる！」

鴉は去っていった。

……はて、勢いで言ったが、あの駄菓子屋にそんな設備があったわけ？

「まあいいか。用事も済んだし、戻ろう」

荷物の片付けが終わった俺は、昼食をとりに加藤家に戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に戻ると、ちょうど家の前で夏海ちゃんと鉢合わせした。手にはラップのかかった皿を持っている。

「夏海ちゃん、それ何？」

「お土産にもりました。しろはさんが余った材料で作ってくれたみたいです」

そういえば、お好み焼きのタネはなくなっただけ、具材の魚介類は少し残っていたから、それを調理してくれたのかな。

「海鮮野菜炒めらしいです」

「美味しそうですね」

さっそく海鮮野菜炒めとご飯で昼食にする。

「美味しいですねー」

残り物とは思えない美味しさだ。特にこのエビがプリプリでうまい。

「そういえば、このエビの正体って聞いた？」

「はい。ザリガニだそうです」

ザリガニ……。

「あの、沼とかにいる赤いアレかな」

「たぶん、そうじゃないですか？ 凶鑑でしか見たことないですけど」

泥臭いイメージがあっただけ、全然そんなことはない。むしろ美味しいな。

「ふう。ぐちそうさま」

昼食後は、朝にできなかった宿題をした。15時頃にはそれも終わって、暇になる。

「夏海ちゃん、駄菓子屋に行かない？」

「あ、行きます！」

二人で歩いて駄菓子屋に向かう。

駄菓子屋に近づくと、異様な光景が目に見え込んできた。

「なんだ？ 駄菓子屋に凄い人ばかりができてる……」

「あ、羽依里」

しろはがいた。

「参加しようか悩んでたの」

「何に？」

「あれ」

「さあ、スイカバー早食い競争！ 参加登録受付中よー！」

見ると、蒼がベンチの上に立って、大声で呼びかけていた。

「なあ蒼、なにやってんだ？」

「あれ見て」

「え!？」

蒼が指し示したアイスケースの中には、大量のスイカバーが入っていた。10本や20本じゃない。

スイカバーは本来、一日数本程度しか入荷されないレアな品物のはずだ。入れても売れないし。

「えっとね、どうもおばーちゃんが誤発注しちゃったみたいで……スイカバー4本って書くところ、間違って40本って書きちゃったみたい」

「40本……」

おばーちゃん、どう書き間違えたらそんな誤発注するの……！

「そして運が悪いことに、このタイミングで壊れるアイスクリームストッカー！」

「アイスクリームストッカー？」

「ほら、あの店先に置いてる『アイスクリーム』って書いてある箱のことよ」

「あれ、アイスクリームストッカーっていうのか……」

「業者さんが夕方には修理に来てくれるらしいんだけど、さすがに溶けちゃうから」

「それで、こんなイベントを企画したのか」

「そう！ 他のアイスは人気あるから、家の冷凍庫に無理矢理入れたりしたんだけど、スイカバーはあまり人気ないからどうしようか悩んでたの」

「に、人気ない……おいしいのに……」

あ、スイカおねーさんが凹んでる。

「……決めた。蒼、参加費はいくらなの？」

「え？ 一人200万円よ」

「三人で参加する。はい」

しろはは真剣な目で蒼に600円を渡す。

「え、俺達も参加するのか？」

「皆で吊ってあげなきゃ。そうだよね？」

異論は許さない、といった表情だ。

「鷹原さん、しろはさんが恐いんですけど」

さすがのような目で見ってくる夏海ちゃん。大丈夫。俺も怖い。

アイス奢ってもらって食べ放題って聞くと魅力的だけど、選択肢はスイカバー一択だ。

「そういえば、優勝者に賞品とか出るのか？」

「出るわよ。うちの駄菓子屋で使える商品券1000円分」

かなり豪華だった。

しばらくすると、魅力的な優勝賞品もあってか参加人数は10人を超えた。

店にしてみれば、本来捨てるしかないスイカバーをさばけた上、参加者から200円ずつもらったとして2000円以上の収入。賞品は店の商品券とくれば、なかなかうまくやり方だ。

「ういんういん、ってやつだね」

いつの間にか隣に鴟の姿。こいつも参加するのか。

他にも子供たちに交じって、ずいぶん見知った顔がいる気がする。

「それじゃ、準備はいい？ 制限時間は5分よ！」

皆で1本目のスイカバーを手に持ち、蒼の合図を待つ。

「次のが欲しくなったら、蒼ちゃんの所に取りに来ててください」

「ちなみに、審判は私が勤めます。もし不正したりしたら、もれなくイナリの呪いをかけてあげますので、そのつもりで」

「ポン！」

いつの間にか蒼の横に藍とイナリが立っていた。二人は運営係ということ、今回は不参加らしい。

ところでイナリの呪いってなんだろう。すぐく気になる。

「それじゃ、行くわよー……よーい、どん！」

合図を待ってましたとばかりに、皆が一斉にスイカバーにかぶりつく。

「この暑い中待ってたしな。一本くらいあつという間だ！」

30秒足らずで1本目を完食した俺は、すかさず蒼の所に2本目を貰いに行く。

「ほう」

「やるなあ」

同じタイミングで蒼の元に辿り着いたのは、良一と天善。

「お前らも参加してたのか」

「当然だ」

「優勝で札がもらえるんだぞ。狙わないわけがない！」

「貰えるのはあくまで商品券だぞ？」

「ふ……鷹原、喋る暇があったら食べた方が良くぞ？」

「確かに」

俺は急いで2本目のスイカバーにかぶりつく。

その後、俺達3人が3本目に着手した時点で2分が経過。その頃から一部の参加者のペースが落ちてくる。

「むぎゆうう……頭がきーんとなります……」

「うーん。2本目になると飽きてくるわね。普段食べてないから、行けるかと思っただけぞ」

急いで食べ過ぎてアイスクリーム頭痛に悩まされている紬と、既に味に飽き始めてる静久の姿があった。

「うー、メロンバーが食べたい……」

「うくく……」

軽く現実逃避してる鴎と、冷たさに必死に耐えているのみきの姿も見える。

「……もくもく」

そんな中、しろはは一人黙々とスイカバーを食べている。さすがスイカバーを持たせたら右に出る者はいないな……。

やがて、残り時間が1分を切つてくると手が止まる参加者が多くなる。

「うぷ」

俺の腹の中でもスイカバーが暴れている。もう一玉分くらい食べた気分だ。

「どうした羽依里、ここまでか？」

まだ余裕のある顔をしているのは良一。いつの間にか上半身裸になっていて、見た目は暑苦しい。

「まだだ！ 5本目をくれ！」

ちなみに天善は4本目の所で強烈なアイスクリーム頭痛に襲われたらしく、卒倒して未だ復活してこない。

どうやら、優勝の行方は俺と良一で争うことになりそうだ。

もはや口の中の感覚はないが、ラストスパートだ！

「うおおおおっ！」

「——はい、そこまでー！」

終了の直前、俺はギリギリで5本目を完食した。

良一は5本目を三分の一程残し、膝をつけていた。これは俺の勝ちだ……！

「それじゃ、集計するから食べ終わった棒を持って来てー」

「残ってるのもそのまま持ってきてください。こっさり食べたり捨てたりしたら、どうなるかわかってますよね？」

「ポンポン！」

俺達はスイカバーの棒を提出し、集計が終わるのを待つ。

「ちくしょー、もう少しかったのに！」

隣では、良一が悔しそうに地団太を踏んでいた。

「ふ。俺の勝ちだな……うぷ」

「のみきに撃たれなきや、完食できてたんだよ！」

あ、さつき膝をつけていたのは、のみきに撃たれたからか。

「し、仕方ないだろう。反射的に撃ってしまったんだ。裸になっていた良一が悪い」

「まあ良一、お前は頑張った方だよ」

激戦を戦った好敵手と健闘を讃えあう。

「すごいね羽依里、5本も食べたの？」

2本と半分でギブアップした鴟が、俺の食べた数を聞いて驚きの声を上げる。

「むぎゅ……わたしは2本が精一杯でした……」

「私もよ……」

灯台の仲良しコンビも一緒に轟沈したみたいだ。なかなかこの二人がアイスをたくさん食べるイメージはない。

「これがワタアメだったなら……むぎむぎむぎ」

あ、なんかめちやくちや悔しがつてる。

「はい、集まってー。結果を発表するわよー」

やがて集計を終えたらしい蒼がメモ用紙を手に集合を呼びかける。

「スイカバー早食い競争、優勝者は――」

「しろはよ!」

「……どうも」

しろはが気恥ずかしそうな顔でベンチの上に立つ。

「嘘だろ、俺は負けたのか……!?!」

「記録は6本ね」

……俺より一本も多い。

「……しろはの奴、全然蒼の所に貰いに来てなかった気がするんだけど」

「一回だけ来たわよ。その時に5本持って行ったけど」

「え、そのやり方ありなのか?」

「別に一本ずつしか持って行っちゃいけないなんてルールないけど」

さすがのスイカバー好きもさることながら、見事な作戦勝ちみたいだ。

「おめでどう、しろは」

「え? うん。ありがとう……」

さすがに食べ物の早食い大会で優勝したというのが気恥ずかしいのか、しろはは1000円分の商品券を貰うと、そそくさと帰っていった。

「俺達も帰ろうか。うぶ」

「鷹原さん、大丈夫ですか?」

「スイカになりそうだ」

「し、しっかりしてください」

「ところで夏海ちゃん、何本食べたの?」

「3本です。好きなので」

意外と食べていた。

その後帰宅するも、陽が落ちるまで全く動けなかった……。

なんか、昨日も似たような状況になったような。

だいぶ酷使してるけど、大丈夫かな、俺の胃腸……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夜になり、俺たちは夕飯を食べにしろは食堂へ向かった。

しろはが料理を作ってくれている間、ちよつと気になったことを聞いてみる。

「そういうえば、結局ホルモンうどんはこの食堂に新メニューに加わるのか?」

「ああ、あれはね……」

背中越しに語るしろはの声のトーンが、明らかに沈んだ。

「私なりに頑張ったんだけど、どうやっても秘伝の醤油ダレが再現できなくて……諦めたの」

「そ、そうか……残念だったな」

「うん……本当に残念」

俺としては、嬉しいような悲しいような。

「……うん、完成。おまちどうさま」

どうやら料理が完成したらしい。

「今日手伝ってくれたお礼だから、しっかり食べてね」

そう言つて俺達の前に並べられたのは、チャーハンとミニラーメン。

「チャーハンセットだよ」

「チャーハンセットなんですか? ラーメンセットじゃなくて?」

「あくまで、チャーハンがメインだから」

夏海ちゃんが当然の疑問を投げかけるが、しろはははつきりと言い切る。それだけ自信のある品だからだ。

それにしてもしろはのチャーハン、どれだけ振りだろう。

「美味しいんだよ。しろはのチャーハン」

確か、夏海ちゃんはまだしろはのチャーハンを食べたことがなかったはずだ。

「しろはさんの料理美味しいですから、もちろん美味しいんでしょうけど……」

夏海ちゃんも加藤家チャーハン担当としての自負があるのか、複雑そうな顔をしている。

「ところでしろは、このラーメンは？」

「ホルモンおじさんからもらった小麦粉が余ってたから。作ってみたの」

あのホルモンうどん、うどんも手作りだったのか。

「スープは魚介ベースの塩スープだよ」

これも自信あり。という顔をしている。確かに魚介の出汁の良い香りがしてる。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます！」

「どうぞ、めしあがれ」

まずはもちろんチャーハンからいただく。

……ああ、これだよな。

最近夏海ちゃんのチャーハンも食べ慣れてきたけど、やっぱりしろはのチャーハンは格別だ。

隣を見ると、夏海ちゃんは目を丸くしていた。

「負けました……」

そしてがつくりと肩を落とす。

加藤家チャーハン担当としての自信は打ち砕かれてしまったようだ。心なしか、涙ぐんでいるようにも見える。

「なんですかね。なにかこう、美味しいんですよ。うまく表現できな

いんですけど。絶対隠し味ありますよね？」

「ふふ。秘密」

夏海ちゃんがなんとか味の正体を知ろうと必死になっているけど、しろははうまくはぐらかす。

そんな二人のやり取りを眺めながら、俺は更にチャーハンを口に運ぶ。うん。このレタスのシャキシャキ感もたまらない。

続いてラーメンの方も一口……と思ったところで。

「こんばんわー」

スーツケースをがらがら引きながら、鴎がやってきた。

「あ、羽依里のうそつき！ もんじや焼きなんてやってなかったよ！」

鴎は俺の姿を見つけるや否や、噛みつく声で言う。

「あ、やっぱりやってなかったか」

「やってるって言ったくせにー！」

「え、何の話？」

「聞いてよ、しろしろー！」

鴎はしろはに、昼間の食堂での俺とのやり取りや、駄菓子屋での出来事を話して聞かせる。

「羽依里から、駄菓子屋でもんじややってるって聞いたから、駄菓子屋に行っただの」

「もんじやって、もんじや焼き？」

「そう！ 駄菓子屋についてみたら奥の座敷で物音がしてたから、もうやってるのかなーって思って襖を開けたら」

「……いつも店番してる二人が着替えてた」

「そ、そうか」

「二人とも、おそろいの下着だった」

「お、おお」

「あの二人って顔もそっくりだけど、体つきもね……」

「鳴、ストップ。なんの報告会なの」

「おっと、失礼」

「それで反射的に飛び出しちゃって、結局お昼ご飯は食べられずじまいなんだよ……」

その時、タイミングを合わせたかのように鴎のお腹が鳴った。

「かわいそうな鴎、羽依里に騙されて、お昼ご飯食べられなかったんだね」

確かにあいまいな記憶で答えた俺も悪いかもしれないが、騙したとか人聞きの悪い事言わないでほしい。

「うん。もうお腹ぺこぺこだよー。開いてて良かったー」

鴎は夏海ちゃんの隣の席に座る。

「ところで、なつちゃんたちは何食べてるの？」

「チャーハンセットです」

「ラーメンセットじゃなくて？」

「チャーハンがメインだから、チャーハンセットなんです」

さつきしろはが夏海ちゃんにした説明を、得意げに鴎にしている。

鴎はメニューと俺達の料理を交互に見る。

「そんなメニューないけど」

「特別メニューなんだ」

「しろしろ、私にもそれお願いー！」

「うーん、でもこのメニューは……」

「……しろは、作ってあげてくれ。しろはのチャーハン、鴎にも食べさせてたい」

「わかった。羽依里が迷惑をかけたみたいだし、今回は特別だよ？」

「わーい！」

ほどなくして、鴎の前にも俺たちと同じチャーハンセットが用意された。

「おお、美味しそう！ いただきますーす！」

「お前、絶対驚くからな」

「うん、しろしろ、美味しいよー！」

鴎は満面の笑みでチャーハンを頬張っている。

「ここまでおいしいチャーハンって、私初めてかもー！」

空腹は最高のなんとやらというのを差し置いても、しろはのチャー

ハンはレベルが違うはずだ。

……おっと、俺たちも冷めないうちに食べないと。

久しぶりにしろはのチャーハンを堪能し、俺達は帰宅した。

「むむむ、どうすればあのチャーハンを超えられるんでしょう……むむむ」

帰宅してからも、夏海ちゃんはずっとしろはのチャーハンについて考えていたみたいだった。

第六話・完

第七話 7月31日

「鷹原さーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんに起こされる。これももはや日課になってしまったような。

それにしても、夏海ちゃんも早起きだなあ。鏡子さんも朝に強いから、岬一族の血筋なんだろうか。

ちなみにその鏡子さんは、今日も朝から寄合でいないらしい。

身支度を済ませて、今日もラジオ体操へ向かう。朝早いから蝉たちも起ききれしていない感じで、心なしか蝉時雨も小さ目だった。

神社に到着すると、その境内にはいつものメンバーが揃っていた。

「鷹原さん、何きよろきよろしてるんですか？」

「いや、ウシやネコやカモメはいないのかと思って」

「……さすがに今日はいないみたいですね」

別に会えるのを期待してるわけじゃないけど、いないとなると寂しい。

「あ、おはよー、羽依里ー」

「はあー……」

「ふうー……」

藍も蒼も、良一も天善も、揃いも揃ってもものすごく憂鬱そうな顔をしている。

「どうしたんだ？ なんかあったのか」

「あつたんじゃなくて、これからあるんだよ……」

良一はひときわ大きなため息をつく。

「どういうことですか？」

「今日は登校日なんだ」

のみきがやれやれ、と言った感じに他のメンバーを見ている。

「ああ、なるほどね……」

楽しい夏休みの真っ最中に突如としてやってくる登校日。これほど憂鬱なものはない。

島の外からやってきている俺や夏海ちゃんはあまり実感がないけど、良一たちにとっては鳥白島は地元だし、当然登校日がある。

「ラジオ体操が終わったら、すぐに帰って準備しなきゃいけないしね」
「蒼ちゃんは二度寝もできないですし、最悪ですよね」

「まったくよねー」

この島には小学校はあるけど、それより上の学校はない。必然的に良一たちは船に乗って本土の学校に行かねばならない。

「帰りの船の関係で、どんなに早くても戻ってくるのは15時くらいになるからな。半日以上潰れることになる」

「天善は良いじゃない。船の時間まで体育館で卓球してればいいわけだし。普段とやってること変わらないでしょ」

「俺達は港で時間潰すくらいしかできないからな。下手に動くと金かかるし、万が一船に乗り遅れたら悪夢だぜ」

もし乗り遅れたら、次の船までは数時間待ちか。都会でバス一本乗り遅れるのとはレベルが違うよな。

「よーしお前らー！ 今日も来てるなー！ ラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきて、今日もラジオ体操が始まる。

「第4の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐる〜！」

ラジオ体操大好きさんが頭を振り回す。

「ぐるぐるぐる〜！」

俺たちもそれにならって頭を振り回す。

「うえええ……」

「気持ち悪い……」

登校前の子供たちが続々ダウンしている。

こんなので三半規管が鍛えられるんだろうか。

「き、今日は登校日だから、体操はここまで——！」
ラジオ体操大好きさんも目を回してしまったのか頭を押さえてい
る。

そして登校日もあるということ、いつもより少し早めにラジオ体
操が終わる。

「さあ、スタンプを押すぞー」

続いてスタンプを押してもらい、ログボを受け取る。

ちなみに、今日のログボはシイタケだった。しかも乾燥シイタケ
じゃない、生シイタケのようだ。

「堀田のお爺さんが栽培されたシイタケだそうだ。岡山のシイタケ品
評会で金賞を受賞したこともあるらしい。味はお墨付きだぞ」

のみきが説明してくれる。堀田のじーさんといえば、何度か山菜取
りでお世話になったことがある人だ。あの人、本当に山が得意だな。

「ふうー……」

「あー、今日も空が青いわねー」

「……ほらお前達、いつまでも現実逃避するな。早く帰って支度しろ」
のみきに喝を入れられながら神社を後にする仲間達を見送った後、
俺達も加藤家へ戻る。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「夏海ちゃん、一つお願いがあるんだ」

「なんですか？」

俺は朝ごはんを作るために加藤家の台所に立った夏海ちゃんに進
言する。

「今日のシイタケは、バターで焼いてほしいんだ」

「シイタケバターチャーハンが良いんですか？」

「いや、チャーハンじゃなくて。普通にバター焼きにしてほしいんだ」
生のシイタケなんて、そうそう手に入るものじゃない。

それをラジオ体操で配るこの島もこの島だけだ。

「じゃあ、またじゃんけんんで勝負しましょう。私が勝ったら、シイタケ
チャーハンです」

「いいよ。準備はいい？」

「いつでもいいですよ」

「それじゃ、恨みつこなし！ じゃーんけーん！」

「ぼんー！」

「……俺の勝ちだね」

今日は俺の勝ち。これでバター焼きが確定した。

「しろはさんのチャーハンに勝つために練習したかっただのですが、負
けてしまったては仕方ないですね……」

夏海ちゃんは肩を落としながら、冷蔵庫を開けてバターを探す。

「……あれ？ 鷹原さん、バターありませんよ？」

「え、そんな馬鹿な」

確かあつたはずだけど。

夏海ちゃんに並んで冷蔵庫の中に顔を突っ込む。

「あ、ここにあるじゃない」

見慣れた黄色い箱を見つける。

「良く見てください。それ、マーガリンですよ」

……本当だ。

「シイタケのマーガリン焼きってどうなんだろう？」

「なんか、風味が落ちそうですね」

せっかくの生シイタケ。美味しく食べたいけど……。

「バターありませんねえ。マーガリンじゃ、美味しくないですよねえ」
隣ですごく嬉しいように言ってる。

「うーん。どうしようか……」

さんざん悩んだ結果、シイタケチャーハンにしてもらうことになった。

「美味しいですねえ」

「そうだね」

シイタケがチャーハンの旨味と油をしつかりと吸って、とつても美味しかった。

食後はいつものように宿題を……と思ったけど、時計が目に残まる。

もう少ししたら、船が出る時間。

登校日で本土に行く皆を見送るってのも、良いかもしれない。

「夏海ちゃん、港に皆を見送りに行かない?」

「良いですね。行きましょう!」

少しでも時間に余裕を持たせるために、バイクで港へ向かった。

港に到着すると、船に乗り込んでいく人々の中に、しろはたちの姿を見つける。

「おーい、しろはー」

「あれ、どうしたの」

しろはが驚いた顔で立ち止まると、一緒に乗り込もうとしていた他の皆も足を止める。

「登校日だって聞いたから、見送りに来た」

皆の制服姿も久しぶりを見る。

「いつも迎えに来てもらってばっかりだからさ。たまには見送りたい」

「あ、ありがとう」

「さすが彼氏さんは優しいわねー」

「本当ですね」

藍と蒼は元々そっくりだから、同じ制服を着るとますます似てる。

「ところで藍、いつもと髪型変えてるのはわざとか?」

「はい。通学スタイルってやつです」

藍は蒼と同じように髪をトンボ玉付きの紐で結ってる。トンボ玉の位置が反対なの以外は蒼とほとんど同じ。まるで鏡写しだ。

「藍のやつ、学校ではいい子ぶってるからな……いててっ！」

「天善ちゃん、聞こえてますよ？」

思いつきり足を踏まれてる。痛そうだ。

「それにしても、男の制服は初めて見たな」

「暑っ苦しいったらないぜ」

「そりゃ、普段の良一の格好からしたらな」

「でも、制服姿はかっこいいです」

「お？ そっか？ ありがとな、夏海ちゃん！」

「良一、勘違いするな。夏海ちゃんは制服『が』かっこいいと言ったんだぞ？」

そう話す天善も制服姿だ。これも違和感しかない。

「天善さんは制服姿でもラケット持ってるんですね」

「ああ、卓球部だからな」

「天善くんは、制服のまま素振りをするから、よく袖やわきが破れるの」

「もつと伸縮性に富んだ制服にして欲しいものだ。おちおち制服で卓球もできない」

「いや、普通は制服で卓球しないから」

『宇都港行き、間もなく出港いたします。お乗りの方はお急ぎください』

和気藹々とおしゃべりしていると、出港を告げるアナウンス。

「おっと。皆、急げ」

「おう、それじゃあな、羽依里！」

「皆、行ってらっしゃい」

「頑張ってきてくださいーい！」

「また後でね！」

「羽依里さん、わたし達が帰ってくるまで、暇しててください」

のみきの声を合図に、皆が次々とタラップを渡っていく。最後にしろはがタラップを渡りかけて、止まる。

「二人とも、見送りに来てくれてありがとう」

「……これまで何回も見送ってもらったけど、俺が港側に立ってるのは初めてだよな」

「あは、本当だね」

皆はただの登校日で、半日島を離れるだけのはずなのに……妙に感傷深いものがある。

港で別れる時は、いつも長い別れになっていたせいかな。

「……大丈夫だよ。15時の船で戻ってくるから」

顔に出てしまっていたのか、しろはが笑顔で安心させるように言うてくれる。

「ああ、待ってる」

「それじゃ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

……結局、船が島から離れるまで、ずっと見送っていた。

皆を見送った後、加藤家に戻って今日の分の宿題をやる。

結構長い間集中してやったはずなのに、時計はまだ10時にもなっていないかった。

「……夏海ちゃん、駄菓子屋に行かない？」

「はい！ 行きましようー！」

夏海ちゃんと二人で暇を持て余していたので、できるだけゆっくり歩いて駄菓子屋へ向かった。

「……いらっしゃい」

店にはおばーちゃんが一人。

いつものようにかき氷を注文して、いつものお約束をやって、ベンチに座って食べる。

「なんか……いつもみたいに美味しくないね」

「はい……」

でも、いつもほど美味しく感じなかった。

「おぼーちゃん、ごちそうさま」

かき氷を食べ終わり、また二人でぶらぶらと当てもなく歩く。

……気がつけば、皆を見送った港に戻ってきていた。

皆が帰ってくるまで、まだまだ時間があるのに。俺ってこんなに寂しがり屋だったっけ。

夏海ちゃんと二人、何をすることもなく日陰に座り、今しがた出港した船をぼーっと眺めていた。

「……あら、パイリ君に夏海ちゃん」

「え？」

声のした方を見ると、いつの間にか静久の姿があった。

「静久さん、いつからそこにいたんですか？」

夏海ちゃんが驚きの声を上げる。

「え？ 今の船で来たのよ？」

「そっか。静久は島の人間じゃないから、登校日は関係ないんだっかな」

「そう。二人と同じね。それに大学生だし」

しろは達のように島から出る人のことばかり考えていたけど、静久みたいに本土から来る人もいるわけだ。

「でも静久、今日はせっかく島に来て、紬に会えないな」

「え？ 今日は紬の手伝いに来たのよ？ ちよつと遅くなっちゃったけど」

「でも紬、今日は登校日じゃ……」

そう言いかけて、紬が皆と一緒にの船に乗ってなかったことに気がつく。

「紬、今日は屋台を出すから学校をサボったんですって」

「え、サボリですか？」

「そう、サボりよ。紬、不良なの」

どこまで本気かわからないが、とりあえず紬は島にいるらしい。「ところで紬、どこにお店出してるのかしら。港だつて聞いたんだけど」

その様子だと、静久も詳しい場所は知らないみたいだ。

「うーん……」

俺も思い当たる場所はない。三人で途方に暮れていると……。

「むーぎーぎーぎー……」

潮風に乗って、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あの声、紬さんじゃないですか？」

声のした方に行つてみると、昨日のお好み焼き屋台と同じ場所に、また違った形の屋台が出ていた。

その中で、むぎむぎと唸っている紬がいた。

「おーい、紬ー」

「むぎゆ？」

「あ、タカハラさんにシズク！ それにナツミさんです！」

ぱつと顔を上げ、こっちに走つてきた。

「学校サボってる人、発見ね」

「むぎゆ！ シズク、人聞きが悪いです！」

「それより紬、この屋台はなんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！ これはワタアメ屋さんです！」

太陽に負けない笑顔で屋台を指し示す。

「あれ……？」

ワタアメ屋の屋台にしては、何か違和感がある。妙に寂しい。

そうか。よく祭りとかで見るワタアメ屋は、ペケモンやらだんご大家族やらのキャラクターがプリントされた袋にワタアメを詰めて、それを店の周りにぶら下げて広告みたいにして売っているんだ。

この屋台には、そういうものがない。

「実は、朝からここでワタアメを売っていたのですが……まったく売れないのです」

紬はその手に真つ白いワタアメを持っていた。

「この手の店はキャラクターの袋がぶら下がってないと、寂しさが強調されるだけだもんな」

「そうですね……」

今の状況だと、ぶつちやけ営業しているのかも怪しいレベルだ。

「紬、ワタアメを入れる袋のようなものは用意してないのか？」

「ありません！」

胸を張って言い切った。

「袋とか見た目の可愛さより、しっかりと中身で勝負しようと思いましてー！」

心構えは立派だが、紬が手に持っているのはどこにでもある普通のワタアメだ。

しかも、午前中の船はさつき静久が乗ってきた便が最後。正直言つて商売のタイミングを完全に逃してしまったようだ。

「ごめんね紬。私がもう少し早くこれを持って来ていたら、売り上げも変わっていたかもしれないのに」

そう言つて静久がカバンから取り出したのは、箱に入ったカラフルな飴のようなもの。

「なんですかそれ」

「ザラメよ」

「ザラメって、ワタアメの材料だよな？　こんなカラフルなのがあるのか」

「はい！　白が普通のワタアメ、ピンクがイチゴ味、黄色がレモン味、緑がメロン味です！」

「まるでかき氷だな……」

「本土で買ってきたんだけど、なかなか見つからなくてね。おかげで朝の船に乗り遅れちゃったのよ」

あー、それであんな中途半端な時間に港にいたのか。

「せっかくだし紬、ひとつ作ってみたらどう？」

「はい！　ナツミさん、何味が良いですか？」

「え、えーつと……それじゃ、イチゴで」

「はい！ おまかせください！」

商売のタイミングは逃してしまっただが、紬のお手並み拝見という。

紬は機械を数分温めてから、中央の回転皿にピンク色のザラメをゆつくりと入れる。すると周囲に甘い香りが漂ってくる。

「わあ、イチゴの匂いです！」

「♪♪♪♪♪」

次に、わりばしを上下に動かしながら、くるくるとワタアメを作っていく。紬は鼻歌交じり。慣れたもんだ。

「へえ、うまいもんだな」

「しゅぎよーしましたので！」

「紬、ワタアメ作るの上手なのよ」

「はい、完成です！」

紬が作ったのは、ふわふわでまんまるなピンク色のワタアメ。とってもおいしそうだ。

ちょうどザラメ一袋で一人前のワタアメが作れるようになってみるみたいだ。

「ナツミさん、どうぞ！」

紬ができたてのワタアメを夏海ちゃんに手渡す。

「あ、お金払いますよ」

「いえ、お代は結構です！」

「え、でも……」

「シズクのザラメを使ったワタアメの、試食ということですよ！」

「次のお客さんから、お代をいただくことにします！」

「というわけでナツミさん、どうぞ！ ぐっといっっちゃってください！」

「い、いただきます」

夏海ちゃんは紬に気圧されるようにワタアメを受け取り、ちぎって口に運ぶ。

「あ、美味しいです！ 皆さんも食べてみてください！」

「それじゃ、遠慮なく」

俺たちもイチゴ味のワタアメを少しずつ摘ませてもらう。

……おお、まるで練乳イチゴのかき氷を食べているみたいだ。

「……あれ、皆で何やってるの？」

その時、いつものようにスーツケースを引きながら鴎がやってきた。暑いからだろう、今日は白い日傘をさしている。

「あ、カモメさん！ 今日ワタアメ屋さんをやっているのです！」

「おお、わたあめ！ ひとつくださいなー」

思わぬタイミングで一つ売れた。

「はい、100円です！ 何味にしますか？」

「え、わたあめに味とかあるの？」

「はい！ 白が普通のワタアメ、ピンクがイチゴ味、黄色がレモン味、緑がメロン味です！」

「じゃあ、メロン味ください！」

「はい！ 少々お待ちください！」

細がぐるぐるーと割り箸を回して、あつという間にワタアメを完成させる。

「はい！ どうぞ！」

「ありがとう」

「なあ鴎、お前メロン好きなのか？」

「え、なんで」

「駄菓子屋でメロンバー食べてたり、かき氷もメロン味食べてたからさ」

「そういえばそうだった。特に考えてなかったよ」

鴎はいつものようにスーツケースに座り、にこにこ顔でメロン味のワタアメを食べる。

「おお、本当にメロンだ！ おいしい！」

幸せそうなやつだなあ。

「そういえば駄菓子屋さん行ったんだけど、おばーちゃんしかいなかったよ」

「ああ、藍と蒼がいないのは登校日だからだ」

「え、この島に登校日なんてあるの？」

「いや、あるだろ登校日くらい」

「ずっと夏休みなんだと思ってた」

「まあ、他所から来てる俺たちからすれば、そんなイメージがあるけど。ちゃんと登校していったぞ」

「むぎっ」

「皆マジメだねー。私だったらサボっちゃうかも」

「むぎぎっ」

「そうよね。せつかくの夏休みなんだもの。登校日なんてサボりたくもなるわよね」

「むぎぎぎっ」

屋台の中で紬が精神的ダメージを受けている。

「うう、皆がイジメます……」

結局、お昼前まで紬で遊んだり、色々喋りながら粘ってみたが、お客はほとんど来なかった。

「まあ、船も来ないんじゃないでしょうもないよな」

「紬、今日は残念だったわね」

「また別の機会に頑張ってみます。幸い、ザラメは保存がききますので！」

「そっか。そういう考えもあるね」

「……次はかわいいキャラクターの袋も用意します」

「うん、そっちもあると売り上げアップに貢献すると思うよ」

俺も次の機会にはポケモンの着ぐるみを用意しておこう……昨日しろはが洗濯しちやっただから、今日は着れないし。

その後はお腹も空いたので、昼食をとりに加藤家に戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

昼食は大きなお揚げの入った、きつねうどんだった。カップうどんだけ。

「美味しいですねえ」

「うん」

このしつかりおつゆを吸ったお揚げのジューシーさが堪らない。

昼食を済ませた後は、また暇になってしまう。

でも、皆が戻ってくるまではまだ時間がある。

「やばい、暇だ……」

未だかつて、この島でここまで退屈を感じたことがあっただろうか。

「皆、早く帰ってきてくれ……」

何をしようか悩んだ結果、部屋で荷物整理をすることにした。

「えーっと、これはこつちで……」

あまり着ない服とか本とか、畳の上に広げて整理をする。

「鷹原さん、何してるんですか？」

そこに夏海ちゃんがやってきた。

「一度、荷物の整理をしつかりしておこうと思って」

「大変ですね」

夏海ちゃんが床に散らばっている本を見る。

「なんですかこれ」

「あ」

『恐怖のインカ文明』、『ライオン島の惨劇』、『優しい料理入門』、『釣りビギナー』、『卓球王国』

趣味のオカルト本の他に、後半は最近勉強してる料理や釣りの本だ。

「えーっとその、色々勉強しないとイケなくてさ」

「……鷹原さんも大変ですね」

何とも言えない目で見られてしまった。

「あれっ、これって」

夏海ちゃんの視線が、鞆から出しっぱなしになっていたMDの所で止まる。

「MDだよ。この島に来て、全然使ってなかったけど」

島に着くまでの旅路の間、使ったくらいだ。

「使っていないなら、少し借りてもいいですか？」

「え、いいけど」

「ありがとうございます」

なんだろう。音楽に興味あるのかな。

夏海ちゃんがMDを持って去っていったので、俺は荷物整理を再開した。

それも30分程で終わってしまい、きれいになった部屋で横になる。

すると、午前中歩き回っていたせいか、急に眠気が襲ってくる。

お腹も膨れているし、畳の感触は最高だ。眠気に抗えるはずもなく、俺は眠りに落ちてしまう。

「すうー……。すうー……」

「……里！」

「おい、いないのか！」

うーん。誰か来たのかな……。

「はーい！」

あ、夏海ちゃんが出てくれたみたいだ。それなら、いいか……。半分眠った頭で、その会話を耳を傾ける。

「……む。誰だ、お前は」

「まあいい。羽依里に、この魚を食堂に持って行くように伝えてくれ」
「食堂って、しろはさんの食堂ですか？」

「そうだ。しろはを知っているのか」

「はい」

「お前、名前は？」

「岬 夏海といます」

「夏海か。わしは鳴瀬小鳩。しろはの祖父だ」

「それじゃ、頼んだぞ」

「あの、こぼとおじーさん！」

「おじ……なんだ？」

「しろはさんのおじーさんなら、直接持って行ってあげた方が、しろはさんも喜ぶと思いますよー！」

「む……そういうものか？」

「はい！ そういうものです！」

「なら、直接持って行くでしょう」

「……ところでお前、子供のくせにわしが恐くないのか」

「お孫さんに魚を持って来てくれる人が、恐いわけないじゃないですか」

「ふっ……そうか」

……玄関の閉まる音がした。

「あの、鷹原さーん……って、寝てる……」

「もしもーしー！」

ゆさゆさと体をゆすられて、完全に目が覚める。

「……あ、ごめん。居眠りしちゃったみたい」

「しろはさんのおじーさんが来てましたよ」

「何の用事だったの？」

「魚を持ってきてくれたんですけど、鷹原さんが寝てるって言ったら、自分で食堂に持って行くって言ってました」

「そっか」

夢半分で二人の会話はよく覚えてないけど、夏海ちゃんはしろはのじーさんが恐くなかったんだろうか。

その後、ようやく皆が帰ってくる時間になったので、夏海ちゃんと一緒に港に皆を迎えに行く。

丁度船が到着した所で、皆が船から降りて来るのが見えた。

「皆、おかえり」

「おう、羽依里……」

「ただいま……」

……うわ、なんか皆生気を吸われたような顔になってる。

「人混みに酔った……」

「猫かぶるのって、疲れますね」

空門姉妹も揃ってげんなりしている。

「しろはもおかえり」

「ただいま、羽依里」

「しろはは元気だよなー」

「そりやそうでしょ。帰ったら彼氏が待ってくれてるんだもん」

「よ、よしてくれ」

帰って来るや否や、皆におちよくられる。けど、やっぱりこの空気が心地いい。

「よーし！ 俺も元気を出すぞ！ 午前中の分も遊ぶんだ！
パーーーーーッ！」

どうやって脱いだのか、一瞬で上半身裸になる良一。

「……今すぐに服を着ろ。さもないと、午後からは寝て過ごすことになるぞ？」

次の瞬間、のみきがハイドログラディエーター改を構えていた。朝は持っていないかったから、港のどこかに置いていたのだろう。

「待て待て待て！」

急いで制服の上着だけ羽織る。

「良一……いくら浮かれていたとはいえ、のみきの目の前で裸になるとはな。自殺行為だぞ」

そういう天善は船から降りた時から卓球フォームだった。

「船の時間まで体育館で卓球しているからな。学校が終わって、すぐに着替えたんだ」

「天善くん、船が出発するギリギリに駆け込んでくるから」

「直前まで卓球していたんだ」

さすがは卓球馬鹿だ。

皆が揃ったところで、駄弁りながら歩き、ゆっくりと住宅地へ向かう。

「ところで羽依里と夏海ちゃんは、夜の外出は大丈夫か？」

「鏡子さんから許可が必要だけど、俺も同伴ならたぶん大丈夫だと思う」

「今夜なんだけど、皆で天体観測しない？」

「天体観測……ですか？」

「今日のイベントです」

なるほど。どうやら学校に行っている間、皆で考えてくれてたみたいだ。

「どこでやるんだ？」

「秘密基地だ」

「へえ、あの辺で星が見えるのか？」

「秘密基地の山って、周りに明かりが全くないから。夜になると星がすごくきれいに見えるのよ」

確かに本土の光が見える浜辺よりは、綺麗に見えそうだ。

「あの、秘密基地ってなんですか？」

そういえば、夏海ちゃんは秘密基地に行ったことがなかったっけ。

「住宅地から南に行った山の間に、良一たちの秘密基地があるんだよ」

「天体望遠鏡もそこに用意してある」

良一が顎に手を当てながら、誇らしげに言う。

「天体望遠鏡……あの秘密基地、そんなものまであるのか」

「天体観測も楽しみですけど、秘密基地も見てみたいです」

「あー、あんまり期待しないほうがいいわよ……？」

「汚いし、教育に良くないかもしれないね」

秘密基地、という響きに心躍らせている夏海ちゃんとは対照的に、実物を知ってる空門姉妹は不安そうな顔を隠さない。

「安心しろ。これから準備がてら、掃除をさせる」

のみきは満面の笑みで、水鉄砲を良一の背中に突き付けている。

「……な？」

「はい！ 行きます！ 掃除させてくださいーい！」

「それじゃ、集合は夕食後でいいのか」

助けを求めような良一の視線をあえて流し、話を進める。

「良いんじゃない？ どうせしろは食堂でしょ？ 迎えに行くわよ」

「悪い、助かるよ」

そこまで話をしたところで、ちょうど加藤家の前に到着した。皆に別れを告げて加藤家に入る。

居間に行くところちょうど鏡子さんが居たので、夜間外出の旨を伝える。

「天体観測に行くの？」

「はい、良一が天体望遠鏡持つてるそう。山の秘密基地でなんですけど」

「了承（一秒）」

「わ、早い……」

「羽依里君がいるなら大丈夫だろうけど、あまり遅くならないうちに帰ってきてね」

「わかりました」

その後は天体観測の時間を考えて、いつもより少し早い時間に食堂に向かった。

「おーい、しろはー」

「あ、いらっしやい」

「む、鷹原達も来たのか」

「おじやましてまーす」

しろは食堂の扉を開けると、珍しく先客がいた。のみきと鷗だ。

結構早めに出たから、まさか先客がいるなんて思わなかった。

「鴎は昨日も会ったけど、のみきとここで会うのは初めてじゃないか？」

「のみきは常連さんだよ。最近は鴎と一緒によく来てるの」

「そうなのか？」

「うん。今は私、のみきさんの所に住んでるから」

「え、それどんな状況？」

前に港で別れたし、てつきり港のホテルに宿泊していると思ってた。

「最初は港のホテルに泊まってただけど……ほら、お金かかるし」

そりやそうだろう。

「もつと安いところないかなーって、役所に相談に行ったら、のみきさんが泊めてくれることになったんだよ」

「そうなんですね」

「ああ。私の住んでいる建物は役所の元社員寮でな。部屋数だけはあるから、鴎にも使ってもらったんだ」

「そういうこと」

そして、昨日のみきだけ居なかったのは役所で寄合があったからだそう。さすが少年団団長の美希様はご多忙みたいだな。

「ところで羽依里、今日は珍しくおじーちゃんが直接魚を持ってきてくれたの」

「え、珍しいのか？」

「うん。いつも冷蔵庫に入っていたり、他の人が持って来てくれることが多いんだけど」

「じゃあ、今日の活け造り定食は期待していいのか？」

「うん。期待してくれていいよ。今日はそれにする？」

「ああ、それで頼むよ」

「私も活け造り定食をお願いします！」

「わかった。少し待っててね」

しろはが調理に取り掛かったタイミングで、のみきが小さな声でつ

ぶやく。

「しかし……二人が活け作り定食だと、一人だけハンバーグ定食を食べている私が子供のようだな」

ちなみに、鵜の前には冷やし中華が置かれていた。

「いいじゃないか。しろはのハンバーグ、美味しいだろ」

「ああ、おかーさんの味みたいで、ほっぺが落ちそうだ」

「え？」

「あ、いや……美味しいぞ」

「そういえば羽依里達、この後天体観測に行くんでしょ？ のみきさんに聞いたよ」

「ああ、せっかくだし鵜も行くか？」

「うん、行く！」

誘われたのが嬉しいのか、ニコニコ顔で眼前の冷やし中華にとりかかる。

キュウリやハムが乗っていて、涼しげでおいしそうだ。

「はい。お待たせ」

そんな鵜の様子を眺めていると、活け作り定食が完成したらしい。

俺達の前に、ご飯やみそ汁のセットと一緒に慣れぬ刺身が出てきた。

「なんだこれ？」

「今日はキジハタだよ」

「キジハタ？」

「高級魚なんだよ。味わって食べてね」

「それじゃ、いただきます」

「いただきますーす」

さっそくキジハタの刺身を口に運ぶ。

どんな魚か想像もできないけど、白身魚特有の弾力のある身で、噛めば噛むほど甘味が溢れてくる。これは美味しい。

「……ぐちそうさま」

「ぐちそうさまでしたー！」

とつても美味しかった。

「こぼとおじーさんに、美味しかったって伝えてください！」

「あ、おじーちゃん知ってるんだ。うん。伝えておくね」

「こんばんわー」

夕食を終え、食後のお茶を飲んでいると……空門姉妹が迎えに来てくれた。

「あ、ちようど食べ終わったみたいね。迎えに来たわよー」

「ポーン！」

店の外にはイナリの姿もあつた。俺達も準備を整えて、一緒に食堂を出る。

ちなみに俺たち以外のお客さんもいなかったもので、しろは食堂のまま閉店になる。自由な店だ。

その後は皆で並んで歩き、山の入り口に到着する。

「夏海ちゃんや鷗は山道に慣れてないだろうから、足元気をつけてね」

「はい、ありがとうございます」

山に入る前に、しっかりと並んで隊列を作ること。

「先頭はあたしとイナリにお任せよ。イナリなら夜の山にも慣れてるから」

「出ないとは思いますが、野生動物と出会うこともあります。その時はイナリの出番ですね」

「ポーン！」

胸を張っているが、このキツネがイノシシやシカと対等に渡り合える力があるとは思えない。

「本当に大丈夫か？」

「しんがりは私が勤めよう。いざとなれば援護射撃する」

のみきがハイドログラディエーター改を構えている。

「私はのみきさんの隣を歩くよ。いざとなったらスーツケースのスイッチャンが皆を守る！」

鷗がスーツケースをぽん、と叩く。

心強いような、気休めのような。いや、万が一の時は俺がスーツケースを振り回せば、武器になるかもしれない。

「それじゃ、出発するわよー」

「待った、良一たちは？」

「良一達は先に秘密基地で待っている。掃除が予想以上に時間がかかってな」

「あー……なるほど」

結局、蒼とイナリを先頭に、俺としろは、夏海ちゃんと藍が続き、最後尾にのみきと鷗という並びで山に入る。

「けっこう暗いな」

「そりゃあね。懐中電灯も持ってるから大丈夫よ」

「……はっ、もしかして羽依里、闇夜に便乗してあたしのお尻とか触ったりするつもりじゃ……!」

「安心してくれ。俺はずっとしろはの手を握ってるから」

「あーそーですかー! 好きなだけ握ってなさいよー!」

「ああ、そうする」

俺はしろはの手を握る。

しろはは一瞬驚いたようだったが、すぐに優しく握り返してくれた。

「夏海ちゃんはわたしとくっつきましよう」

「わぷっ」

そんな俺達の後ろで、夏海ちゃんが藍に捕まっていた。

ちなみに、藍の髪型はいつものストレートに戻っていた。ちよつと残念なような。

山道に入って少し進むと、うっそうと生い茂る木々によって周囲は完全な闇に包まれる。

蒼は用意していたらしい懐中電灯で先の道を照らしながら進んでいく。

虫の声は一層大きくなり、闇の中に無数の生き物の気配を感じる。大勢で分け入ったとはいえ、夜の山はやっぱり不気味だ。

「……」

夏海ちゃんも俺と同じ様な事を感じているのか、藍にしつかり寄り添ってる。

「うう、夜の山ってやっぱり不気味だね」

その更に後ろの方で鷗の声が聞こえる。心なしか、皆より距離がある気がする。

「鷗、そんな大きなスーツケース引っ張って登るの大変だろ。持つてやろうか?」

「え? 大丈夫だよ。ちょっと夜は冷えてるだけ」

冷えてる? なんだらう。スーツケースの滑車の話だろうか。

「皆すまない。少しだけ速度を落としてくれないか」

「わかった」

のみきの言葉をそのまま先頭の蒼に伝え、少し登る速度を緩める。

「ごめんね」

「きつかったら言ってくれ」

「ありがとう」

山道をしばらく進んでいると、木々の間に小さな明かりが見えた。

一瞬、もう秘密基地にいたのかと思っただが、何か違う。

「なんだあれ」

木々の間を何か光るものが飛んでる。

「……蝶、か?」

「羽依里、どうしたの」

俺の変化に気づいたしろはが、声をかけてくれる。

「いや、蝶が飛んでてさ」

ひらひらと、光る蝶が飛んでいた。

「え? 何も見えないけど……夏海ちゃん、何か見えた?」

「いえ、そんな光る蝶なんて見てないです」

「そっか……」

俺は蝶が消えていった方に目を凝らす。うつそうとした森が広がるばかりで、何も見えない。

「気のせいだったのかな……」

変な感じだけど、俺以外の誰も見てないし。見間違いだらう。

俺は前方に視線を戻し、歩くことに集中する。

「……もしかして、見えてた?」

「え?」

眩くような声がして顔を上げると、蒼が肩越しに振り返って俺のほうを見ていた。

何か言われたような気がしたけど、よく聞き取れなかった。

「え? 何か言った?」

「……ううん。それより、もう秘密基地に着くわよ」

蒼が懐中電灯の光で指示した先には、小さな資材置き場を改造したような小屋があり、その小さな窓から明かりが漏れていた。

「良一、天善、入るわよー?」

「ポーン!」

先頭の蒼がひと声かけた後、扉を開ける。

「あ、いらっしやいませー」

むき出しの丸電球の明かりに照らされて、両手にワタアメを持ったネコが立っていた。

「つ、紬、何やってるの……?」

若干引いてる蒼を押しつけて、しろはと一緒に秘密基地の中を覗く。

秘密基地の中には昼間のワタアメ機が持ち込まれていて、大量のワタアメが作られていた。

「せっかくなので、ワタアメパーティーをしました」

小屋の中は甘い砂糖のにおいが充満している。

「まさか、紬に秘密基地を乗っ取られるとはな……」

「今なら脳みそもワタアメになりそうだけ……ぐふ」

良一と天善が息も絶え絶えに横たわっている。口の周りがベタベタのテカテカだ。どうやら大量のワタアメを食わされて、あまりの甘さに卒倒してしまったらしい。

「はい。ウエルカムワタアメです!」

あつけにとられている俺達の手には、紬からワタアメが渡される。

「ウエルカムワタアメよー」

ウシの着ぐるみを着た静久もしれっと混ざっていた。

結局その場の雰囲気の流れされ、休憩がてら皆でワタアメを食べた。夕飯を食べたばかりだと言うのに、甘いものは入ってしまうから不思議だ。

ちなみに夏海ちゃんは、秘密基地に置かれた卓球台やヨーヨー、ミニ四駆等のなつかしいおもちゃを不思議そうに見ていた。

「つたく、紬たちにしてやられたぜー」

復活した良一によると、掃除をほとんど終えた頃に突如として紬たちがワタアメ機を持って秘密基地に乱入し、あつという間に制圧されてしまったらしい。

まあ、静久が居た時点で一人は戦力外だろうし、為す術ないよな。

休憩を終え、良一や天善、ウシとネコも加えて天体観測を始める。

秘密基地の前はそれなりのスペースがある上に、秘密基地の明かりを消せば辺りは真っ暗。天体観測するにはうってつけだ。

「今夜はまた灯台に泊りね」

「はい！ シズク、また一緒に寝ましょう！」

紬と静久はどこか嬉しそうに話している。

……しばらくして暗闇に目が慣れると、俺達の頭上には満天の星空が広がっていた。

「わあ、すごいですー！」

「本当だね」

都会ではまずここまでの星空は見れないだろうな。

「あそこに見えるのがデネブです。それにベガと、アルタイルを含めた三つを繋いで、夏の大三角と呼びます」

「教科書で習ったことあるでしょ？」

「はいー！」

良一が天体望遠鏡をセッティングしている間、藍と蒼が夏海ちゃんに星座の説明をしてきている。

「他に、あの赤く輝いて見える星がアンタレスです。あれを中心に構成されているのがさそり座ですね」

「その近くにあるのが、いて座よ。あのひしゃく形の星の並びを、南斗六星って言うの」

「なあ、あの二人って星座にかなり詳しいんだけど、そういうの好きなのか?」

隣のしろはに聞いてみる。

「ううん。そういうイメージないけど」

もしかしたら、夏海ちゃんに教えるために勉強してくれたのかもしれない。

「夏海ちゃん、あそこに見えるのがこぎつね座です」

「イナリさんですね!」

「ポン?」

「あはは、違いないわね」

「星座に詳しいアオさん、パリングルス座はどこですか?」

「え? えーつと、さすがにその星座はないんじゃない?」

「むぎゅ……とても残念です……」

紬は心底残念そうに星空を見上げている。

その後は天体望遠鏡の準備が終わり、皆で交代しながら月や土星を見る。

「夏海ちゃん、アルビレオも見てみてください。綺麗ですよ」

「アルビレオ?」

「はくちよう座のくちばしの辺りです。えーつとですね」

藍が天体望遠鏡を操作して位置を合わせてくれる。

「はい。どうぞ」

「わあ……」

望遠鏡を覗き込んだ夏海ちゃんが歓喜の声を上げる。

「まるでしろはさんと鷹原さんみたいです」

「え、それどういうこと?」

「ほら、しろはさん、見てみてください」

「ど、どれ?」

夏海ちゃんに促されて、しろはが望遠鏡を覗く。

「……………?!」

すぐに見るのをやめたと思ったら、無言で顔を伏せていた。暗くてわからなかったけど、真っ赤になってた気がする。

「ほら、今度は鷹原さんの番ですよ?」

夏海ちゃんの笑顔が怖いんだけど。

「え、どれ?」

俺も促されて望遠鏡を覗く。

目に飛び込んできた星は、パツと見だと一つの星に見えた。

でもよく見ると二つの星が近くで寄り添っていた。

一つは金色、もう一つは青色に輝いていて、すごくきれいだった。

「ね、お二人にそっくりじゃないですか?」

もの凄い笑顔で言われてしまった。

「か、からかわないで……」

俺としろはの顔は真っ赤になってたと思う。闇夜で本当に良かった。

「それにしても、本当に綺麗な星空です……皆さん、連れてきてくれて、ありがとうございます」

そう言って喜ぶ夏海ちゃんの瞳も、星空に負けなくらいキラキラと輝いていた気がした。

第七話・完

第八話 8月1日

……朝。

今日は夏海ちゃんに起こされることなく、目が覚めた。

「あれ……？」

時計を見ると、いつもとほぼ同じ時間。俺が早く起きたわけじゃないみたいだ。

「つてことは、もしかして……」

夏海ちゃん、寝坊してる？

そりゃ、昨日は天体観測でかなりはしゃいでいたし、家に帰ったのは夜の10時近くだったけど。

「夏海ちゃんー！」

俺は身支度を整えてから、夏海ちゃんの部屋の前へ。そこからふすま越しに声をかける。

……反応がない。熟睡中みたいだ。

「どうしよう……」

いくら親戚の子だからって、女の子の部屋に入るのは問題あるよな。

そうだ、鏡子さんに起こしてもらおう。

「鏡子さーんー！」

居間や庭を探してみるけど、どこにも姿がない。

例によって今日も寄合だろうか。

これ以上時間がかかると、ラジオ体操に間に合わない。

「……ごめん、お邪魔します」

熟考に熟考を重ねた結果、一言謝ってからふすまを開け、夏海ちゃんの部屋に入る。

一番に飛び込んできたのは、先日灯台でもらった巨大なアクリイの

ぬいぐるみ。

そしてその近くに布団を敷いて、気持ち良さそうに寝息を立てる夏海ちゃん。

その枕元にはMDと絵日記帳、そして色鉛筆が置かれている。藍に言われた通り、毎日書いてるんだろうか。

岬一族は朝に強いと思っていたんだけど、夏海ちゃんはそうでもないらしい。

「もしかして、俺を起こすために毎日早起きしてくれてるのかな」
そう考えたら、もう少し寝かせてあげたいような。

……いや、ここは心を鬼にして。

「えっと、夏海ちゃん」

ゆさゆさを肩をゆすつてみる。

「……はっ」

がばっと上体を起こした。

「……」

寝ぼけ眼でこつちを見てる。

「えーっと、おはよう」

「……」

無言でまた布団に潜り込む。

……こうなったら、多少強引にでも起こさないと。

「夏海ちゃん、起きて！ ラジオ体操に遅れるよ！」

耳元で叫んでみる。

「ふにやつ!?!」

今度こそしっかりと起きたみたい。ちよつと変な声も聞こえたけど。

「夏海ちゃん、おはよう」

「……おはよー(じ)やいます……」

泳いでいた目が、時計を捉える。

「……はっ、ラジオ体操！」

直後、はねる様に飛び起きて、凄い速さで布団をたたむ。

そのままの勢いで絵日記帳と色鉛筆を片付けて、鞆から服を……。

「ちよつと待つて！ 外に出るから着替えるのは待つて！」

夏海ちゃんが身支度を始めたので、俺も慌てて部屋の外に出て準備が終わるのを待つ。

その後、一緒に神社に向けて全力ダツシユ。もうセミの鳴き声も気にならない。

「す、すみませーん！」

「いいよいいよ、それより急ごう！」

正直バイクで行こうかとも思ったけど、神社までの距離なら走った方が速い。石段もあるし。

息も絶え絶えに境内へ駆け込む。まだラジオ体操大好きさんの姿はないみたいだ。

「よかった。間に合った……」

「お、起きてすぐに全力ダツシユとか、どこかのオンユアマークみたいですね……」

夏海ちゃんも疲れてるんだろう。言ってることの意味がよくわからない。

「おはよう。パイリ君、夏海ちゃん」

皆にあいさつを済ませ、息を整えていると……ネコとウシに声をかけられた。

「おはようございます」

「おはよう。静久、紬」

「タカハラさんにナツミさん！ 遅刻ですよ！」

……昨日登校日をサボったネコに言われたくない。

この様子だと、二人はまた灯台に泊まったみたいだ。さすがに天体観測の後に船はないだろうし。

「そういうえ紬、灯台に干してあるパリングルスの空き容器はどんな感じ？」

「はい、良い感じに乾いています。あと数日と言ったカンジです」

「そっか。楽しみにしておくよ」

「はい、期待しててください！」

パリングルスの管理を任されているのが嬉しいのだろう。ニコニコ顔だ。

「お前らー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

そんな話をしていると、ラジオ体操大好きさんがやってきた。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

今日も元気にラジオ体操が始まった。

「よーし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「ありがとうございますー！」

いつもと同じ時間に終了。

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

今日のスタンプをもらって、ログボをバケツからもらう。

「ま、またバケツ……」

恐る恐る手を出すと、その手に乗せられたのは……ザリガニ。

「うわっ！ いてててっ！」

思いつきり指を挟まれた。思わず振り回したら、ハサミが取れてしまった。

「羽依里、ザリガニは背中から持つんだ」

見かねた天善がアドバイスをしてくれる。

「こ、こうでいいのか？」

「ああ、それでいい。それだと構造上、ハサミが届かないからな……既に片方のハサミはないけど。」

「ひええっ!?!」

俺と同じように夏海ちゃんもパニックになってる。

「夏海ちゃんも、こう持つのよ。慣れれば簡単だから」

「は、はい……」

夏海ちゃんの方は蒼に任せて大丈夫のようだ。

周りを見ると、島の子供たちは平気で持つてるし、さっそく戦わせ

たりして遊んでいた。

「島の子供たち、すげえ……」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

とりあえず、二人してザリガニを手を持ったまま帰宅した。

「それで、どうしましょう……このザリガニ」

「この間のうにより元気いっぱいだね」

先日のしろはの料理を見る限り、食べられるんだらうけど……。

「……下ごしらえとか、わからないよね？」

「はい……ザリガニなんて、見るのも触るのも初めてで」

「うーん……」

「……あ、ザリガニ？ 美味しそうね」

居間で途方に暮れていると、背後から鏡子さんの声。

「食べるの？」

「え？」

「食べるんでしょ？」

「ええ、まあ……」

何だろこの流れ。この前もしたような。

「夏海ちゃん、台所の流し台の下に大きいハサミがあるから持ってきて」

「は、はい」

夏海ちゃんが台所からハサミを持ってきて、鏡子さんに渡す。

すると、俺たちの目の前で豪快な音を立てながらザリガニがバラバラにされた。

「ひええ……」

ぐろい。切られた部分も動いてるし。ひたすらにぐろい。

「これで少し水につけてから殻をむいて、濃い目に味付けすれば美味

しいよ」

解体されたザリガニはザルに入れられて、台所で水につけられている。

……島の人間、たくましすぎる。

「……夏海ちゃん、今日はザリガニチャーハンがいいな」

「え」

俺は夏海ちゃんにできる限りの笑顔を向ける。

「……お願い」

そして、両手を合わせる。

どうしても、俺が手を出す気になれなかった。夏海ちゃんごめん。

「うー……今日は寝坊してしまった落ち目もありますし、頑張ってます」

エプロンという名の戦闘服を着た夏海ちゃんが、ザリガニへ挑む。

その後、いつもより時間をかけてザリガニチャーハンが完成した。

チャーハンの具材の一員となったザリガニは、カニとエビの間とどうか、不思議な食感だった。美味しかったけど。

食後はいつものように宿題。

「……あれ？」

お互いにノートと教科書を広げていると、夏海ちゃんが声をこぼす。

「どうしたの？」

「いえ、ちよつとド忘れしちゃいました」

「どこかわからないところがあるの？」

「はい。社会なんですけど……室町時代の、鷹原さんみたいな名前の組織なんですけど」

「え、俺みたいな組織？」

「えーと、あれです……たかはら……たかはらはいり……えーとえーと。ろくはらはいり……」

「……六波羅探題？」

「あ、それです！ 六波羅探題！」

ありがとうございます。と言いなからノートに書き記していく。たかはらはいいり……ろくはらたんだい……全然似てないと思うけどなあ。

そして、宿題を終えた後も二人で話し込んでいた。

お題はパリングルス工作大会で作るもの。

紬からパリングルスが乾くまでまだ時間がかかると聞いたので、今のうちにネタを決めておこうという話になったのだ。

「パリングルスを使ったスピーカーとかどうでしょうか」

「いや、それはもうやってる偉大な先人がいるよ。人の真似はダメだよ」

「そうですか……それでは、パリングルスを使ったタンバリンとかどうですか？」

「しゃかしやかへい？」

「はい。しゃかしやかへいです」

底の鉄の部分をたくさん使うのだろうか。できないことはなさそうだけど。

「そうだ。パリングルスの筒を半分に切って繋げて、流しそうめんをするとか……」

「できそうですけど、水漏れが心配ですね」

「そうだね……」

なかなかいい考えが浮かばない。

でも、こればかりは皆に相談するわけにもいかないしなあ。

……結局、良い案は出ずに時間だけが過ぎ、頭の使いすぎで甘いものが欲しくなった。

「夏海ちゃん、気晴らしに駄菓子屋に行かない？」

「はい、行きましょう！」

夏海ちゃんもアイデアが行き詰っていたんだろう。快く賛成してくれた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

駄菓子屋に行くと、また人だかりができていた。

その中心に居るのは、駄菓子屋の看板娘の蒼。

「蒼、今度はなにをしてるんだ？」

「あ、羽依里」

何やらメモを取っていた蒼に話しかける。

ちなみに、藍はそれから少し離れたベンチに座って、ラムネを飲んでいた。

今日は二人ともお揃いのワンピース姿。髪型もロングで揃えていて、トンボ玉はアクセサリーのように手首に巻いていた。

「今から昆虫採集大会をやるうかと思うんだけど」

「え、昆虫採集大会？」

「はい。今日のイベントです」

「ああ、そういう事なら……夏海ちゃん、参加してみる？」

「はい、やってみたいです！」

「参加費は無料よ」

「おお、今回は良心的だな」

無料であることに越したことはない。

「その代わり、虫取り網や虫かごは自前で用意してね？」

「え、持ってないんだけど」

「別に素手で捕まえて、持ってきてももらっても良いですよ？」

「無理です」

俺と夏海ちゃんは声を揃える。

「それなら、買ってもらうしかないんだけど……」

蒼が店の奥へ入り、すぐに色々な種類の虫取り網を持って戻ってきた。

「初心者用からプロ用まで、変わったところだと蝶特化タイプとかあ

るけど、どれにする?」

「いや、初心者用でいいよ。2つくれ。あと虫かごも」

「まいどありー」

……訂正。無料ほど怖いものはない。

俺達が虫取り網を選んでいる間にも、何人もの子供たちが参加登録にやってくる。

この後、ほとんどの子供が家に虫取り網や虫かごを取りに戻るそう
で、昆虫採集大会が始まるまではもう少し時間がありそうだった。

「なあ蒼、かき氷頼みたいんだけど……」

「かき氷? もうちよつと待ってね……」

蒼の周りにはまだ何人もの子供たちが集まっていて、その参加登録に忙しそうだ。

「あー、うん。ごめん……」

「……なんなら、私が作りましょうか?」

ラムネを飲み終わった藍がベンチから立ち上がり、かき氷機の方へ歩いていく。

「え、いいのか?」

「いいですよ。何味にしますか?」

「それじゃ、ブルーハワイ」

「氷レモンでお願いします」

「どれも同じ味ですけどね。200万円です」

俺と夏海ちゃんで100円ずつ渡す。

「199万9800円足りませんよ」

いつものお約束をした後、かき氷を受け取る。

「表は騒がしいですし、お二人とも奥の座敷で食べたらどうですか?」

「いいのか?」

「はい。扇風機もあって涼しいですよ」

かき氷を受け取った後、奥の座敷で食べる。うん。いつもと同じブルーハワイだ。

藍もついてきて、夏海ちゃんの隣に座っている。

「そうです。せっかくですから虫取りのコツでも教えましょうか?」

「え？ そんなの教えてくれるのか？」

「お二人にだけですよ」

その後、かき氷を食べながら藍から虫取りのレクチャーを受けた。「蝶を捕まえる時は、蜜を吸ってる時に花ごと網をかけて、すぐその網をひっくり返すんです。その時が一番油断してますから。他にも、蝶が好む花の色は……」

予想どおりというか、蝶の捕まえ方が主だったけど。

「二人とも——！ そろそろ始めるわよ——！」

しばらくして、蒼が呼びに来た。

表に出ると、駄菓子屋の前には十数人が集まり、結構な騒ぎになっている。

ぐるっと見渡すと、子供たちに混ざって良一にのみき、鷗、しろは、紬の姿も見える。

「鷗は面白そうとか言って参加しそうだけど、紬としろはが参加するとは思わなかったな」

「その鷗に誘われたの」

「同じくです！」

二人とも虫取り網と虫かごを持って、麦わら帽子を被っている。なんとというか、めちやくちや似合ってる。

「そういえば紬さん、静久さんははどうしたんですか？」

「はい、シズクはさすがに夜遊びが過ぎたので、今日は一度家に帰るそうです」

夜遊びって、これまた人間が悪い……。

ちなみに良一は変わった形のサングラスをかけていて、のみきも麦わら帽子を被っている。

「良一の格好はぶっちゃけどうでもいいけど、のみきは相変わらず麦わら帽子が似合うな」

「そ、そうか？ それは喜んでいいものなのだろうか……」

「それじゃ、昆虫採集大会のルールを説明をするわねー」

蒼と藍がベンチの上に立ち、皆にルール説明を始める。

「制限時間は12時まで。今からだど2時間半つてところね。時間までに虫を捕まえて、審査員のあたしに藍を見せてね」

「捕まえる虫の数や種類は問いませんが、私たちに提出できるのは一人一匹までです」

「島のどこで捕まえてもいいけど、12時までにあたし達に見せないと失格だからねー」

「皆さん、しっかりとルールを守って楽しくやりましょう」

「はーいー！」

「……言っておきますけど羽依里さん、バイクでの移動は禁止ですよ」

「わ、わかってるよ」

名指しで釘を刺されてしまった。バイクを使うつもりなんて最初っから無いけど。

「……皆、用意はいい？」

「おー！」

「それじゃ 昆虫採集大会、スタート！」

「それいけー！」

蒼のスタートの合図と同時に、皆思い思いに散らばっていった。子供たちはこの暑いのに、本当に元気が良いなあ。

「……あれ？」

……気が付けば俺と夏海ちゃん、鷗が残されていた。どうしよう。島に詳しくない3人が残ってしまった。

「ねえねえ、羽依里となっちゃんはどするの？」

鷗が困った顔で話しかけてきた。今日は白い帽子を被ってる。

「正直、俺達もどこに行けばいいのかわからなくてさ」

「鷗さん、どこか良い狩り場を知りませんか？」

夏海ちゃん、狩り場って……。

「ほうほう……なっちゃん。私の秘密の場所、教えてあげよっか？」

「秘密の場所、ですか？」

「うん」

「なんだ？ 穴場でも知ってるのか？」

「そんなところ」

「本当はしろしろやツムツムと一緒にっこうと思っただけ」

「あの二人、スタートと同時に物凄い勢いで灯台の方に向かっていったもんな」

完全に狩人の目になってたし、とても声をかけられる状況じゃなかった。

「……それじゃ鷗を信じて、ついていっていいか？」

「うん。いいよー」

「鷗さん、よろしくお願いします！」

どのみち行くあてもないし、ここは鷗の秘密の場所とやらの賭けのみよう。

「その秘密の場所はどこにあるんだ？」

「ここからだとなの方。ちよつと遠いから、三人で冒険だね」

「え、冒険ですか？」

「そう。冒険」

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

鷗は虫取り網と虫かごを片手に持ちながら、器用にスーツケースを引いて歩きだす。

どんな場所かわからないけど、あれだけガラガラと音を立てたら、虫もすぐに逃げそうな気もするけど。

俺達は鷗を先頭に、一路南へ針路をとる。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「鷗さん、この方角ってことは秘密基地のほうですか？」

少し歩くと、右手に秘密基地のある山が見えてきた。

「秘密基地の方には、のみきと良一が向かっていたぞ。確か」
「そつちじゃないよ。こつちこつち」

鴟が示したのは秘密基地のある山とは逆の、細い道。

「こつちなのか？」

「うん」

鴟に導かれ、秘密基地の山を迂回するようにさらに南下する。

しばらくすると、ため池に着いた。

「あれっ、こんな所があつたんですか？」

そういえば、夏海ちゃんはため池に来るのは初めてかもしれない。

島の案内をした時も、特に何かあるわけでもないからここだけ案内してなかったような。

「ここはため池だよ。島の貴重な水源なんだ」

「そうなんですね」

「それで、鴟の言っていた穴場つてのはこのことなのか？」

水の中に入ることができれば、アメンボやヤゴ、ミズカマキリといった水生昆虫をゲットできるかもしれない。それはそれで珍しいし、審査委員二人の意表をつけるかもしれない。

「ううん。ここじゃないよ」

「え、違うのか」

まあ、帰りにも通るだろうし、ここも選択肢の一つに入れておいてもいいだろう。

「こつちこつち。落ちないでね」

「それはこつちの台詞だ」

ため池の横を通り過ぎて、さらに南下する。

その後はしばらく、なだらかな道が続く。

「ねえ羽依里、こういう時にあれなんだけど」

「どうした？」

「……疲れた」

「マジか」

昨日の夜のこともあるし、万が一のことがあっても困る。

「なんなら、スーツケース乗っていいぞ。押すから」

「ありがとうございます」

その言葉を待つてました、みたいにスーツケースに飛び乗り、更には夏海ちゃんに隣のスペースを勧める。

「ほらほら、なっちゃんも」

「え、私もですか?」

「羽依里、いいよね?」

「いいよ。変わらないから」

俺は苦笑しながら了承する。

「ありがとうございます」

「よし、いくぞ」

二人が乗ったスーツケースをがらがらと押す。

手がふさがっていると押せないので、虫取り網は上手にスーツケースに固定している。

「……あれ?」

無言で進んでいると、また分かれ道に出くわした。

右の方に進むと、しろはの釣り場がある場所に行けそうだけど。

「あ、今度はこっち」

鴟はそこから左方向に見える小高い丘を指差す。

「この上に何があるんだ?」

「太陽が一杯なんだよ」

「太陽ですか?」

「そう!」

「これだけ暑いし、太陽は一つで十分なんだけどな」

「この丘を越えたらすぐだから。羽依里、頑張って」

「よし、もうひと頑張りするか」

丘の上を目指し、俺はがらがらとスーツケースを押す。

そこまで急な坂道じゃないけど、じわりじわり腰に来る。

「……きみーといっしょなーらー♪」

すると、突然鴟が歌いだした。

「なんですかその歌」

「ミディアンシャーロットのウイズ」

「結構古い歌だよな」

「うん」

「でも、何で突然歌いだしたんだ？」

「歌ったほうが、羽依里も元気出るかなーって思って」

「え？ ああ……ありがとうな」

元気出るかはわからないが、声が良いので悪い気はしない。

「きみーといっしょなーらー♪」

「どこでもいけるー♪」

「どこにもいなくてもいいー♪」

「良い歌ですよね」

「でしょー」

途中から夏海ちゃんも一緒に歌いだした。

二人の歌声を聴きながら、俺はスーツケースを押す。

そのスーツケースに固定された虫取り網が、まるで旗のように風になびいていた。

「……到着。ここだよ」

「わあ……」

夏海ちゃんが感嘆の声をあげる。そこは一面のヒマワリ畑だった。

「すごいですー！」

「一人でぶらぶらしてるときにね、見つけたの」

ぶらぶらして辿り着くような場所じゃないぞ、ここ。

「それにほら、蝶もいっぱいだし。昆虫採集にはもってこいだよ」

言われるまで本来の目的を忘れていた。ここまで昆虫採集に来たんだった。

ヒマワリの花の周囲には無数の蝶が飛んでる。どれもこの島じゃ見たことがないくらい大きい。

「よし、一匹捕まえさせてもらおう」

いい感じの大きさの蝶に狙いを定め、早速虫取り網を構える。蝶は全然逃げようとしなない。

ここにはほとんど人が入らないんだろうか。全く人を警戒している感じはない。

「ていー！」

藍に言われた通り、花の蜜を吸いに来たタイミングを狙って虫取り網を振るう。一発でゲットできた。大きなアゲハチョウだ。

「ごめんなさい……えいっ！」

夏海ちゃんも講座で教わった通りの動きで捕まえた。夏海ちゃんが頭につけているヘアピンと同じクロアゲハだ。

「えーいっ！」

その隣で、鷗も蝶を捕まえていた。

三人とも大きい目の蝶を一匹ずつゲットしたところで、そろそろ戻らないと時間がヤバイ。

「今度来る時は、皆でお弁当持って来ようよ」

「いいですねー」

そんな話をしながら、俺達は急ぎ足でヒマワリ畑を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

結局、12時ギリギリに駄菓子屋に戻る。他の皆は既に集合していて、虫かごを蒼達に提出していた。

俺達もゲットした蝶を提出し、結果発表を待つ間、他の皆と成果報告をする。

「しろは達は何を捕まえたんだ？」

確か、しろはと紬は灯台の方に向かったはずだ。

「トノサマバツタ。とびきり大きいの」

「紬さんはっ！」

「ヤマトタマムシです！」

「え、あの宝石みたいに輝いてる虫？」

「はい！」

「そんなのがこの島にいるんだ……」

「たぶん、本土から迷い込んだんだと思います！」

「どうやって迷い込んだんだろう。すごく気になる。」

「二人とも、なかなか個性的なのを捕まえたようだな」

「そう言うのみきは何を捕まえたんだ？」

「ミズカマキリだ。秘密基地の近くに、水が湧いている場所があつてな。そこで捕まえたんだ」

確かに昆虫であることに変わりはない。って、危なく同じ物を持つて来るところだった。

「そろそろ集まってー！ 結果を発表するわよー！」

蒼の号令を受け、皆がベンチ周りに集まる。

蒼達の前には、皆が持ってきたらしい様々な虫が虫かごに入つて並べられていた。

「それじゃ、さつそく三位から発表するわよー！」

「第三位は、ヤマトタマムシを捕まえてきた、紬！」

紬はベンチ上へと連れてこられ、皆からの拍手を受ける。

「む、むぎゆ〜……恥ずかしいです……」

紬は顔を真っ赤にして俯いていた。

「この虫は昔は装飾品として使われていたのよ。綺麗でしょ？」

蒼がヤマトタマムシを虫かごから出して、太陽にかざす。昆虫とは思えない輝きを放っていた。

「次に、第二位！ アサギマダラを捕まえてきた、鴟！」

「ええつ、うそ!？」

今度は鴟がベンチ上に上げられる。まさかの選出に戸惑っている様子だ。

「アサギ……聞きなれない名前だけど、その蝶って珍しいのか？」

「本来は初夏から秋にかけて長距離を移動する『旅する蝶』なんだけ

ど、今の時期にこの辺に居るのは珍しいのよ。どこで捕まえたの？」
「えーっと、ごめんなさい！ 教えてあげないよ！ じゃん！」
えー、と子供達からヤジが飛ぶが、鴟の秘密の場所だからしょうがない。

「それじゃ、最後に優勝を発表するわねー」

「昆虫採集大会、優勝は……」

「オオクワガタを捕まえてきた、良一よ！」

「よっしゃー！」

良一はベンチに上がり、四方から拍手喝さいを受ける。テンションも上がっているのか、上半身は既に裸だ。

「オオクワガタだって？ オオカマキリの間違いじゃないのか？」
にわかに信じられない成果に、俺は真相を確かめに行く。

「真正正銘オオクワガタですよ。ほら」

本当だ……。

藍の手のひらに乗ってるのは、まさしくオオクワガタのそれだ。

「紬や鴟のもすごかったけど、レア度で言ったらダントツじゃない？」
確かに、その点では誰からの文句も出ないだろう。

「良一も良く見つけたな。秘密基地の方に行ったのか？」

「ああ、秘密基地に行く途中の、高い木の上に行ったんだ」
「登って獲ったのか？ やるなあ」

「いや、のみきのハイドログラディエーター改で叩き落としてもらった」

良一は得意顔だ。

「あれ？ それってのみきが捕まえたんじゃないのか……？」
「へっ……っ？」

固まった。

「……ちよっと待って！ 再審議するから！」

捕まえるまでの経緯が明らかになり、急に物言いがつく。

藍と蒼が顔を寄せ合って、ひそひそと何やら話し合っている。

「……訂正！ 優勝は、のみきー！」

やがて審議が終わり、新たな優勝者としてののみきが発表された。

「そ、そりゃないぜー……」

のみきがベンチ上に祭り上げられる一方、ベンチから降り、がつくりと肩を落とすのは良一。いつの間にか上着も羽織っている。

「ぬか喜びだったな……良一、そう気を落とすなよ」

「優勝したのみきちゃんには、初代虫キングの称号をあげます」

「え、いや、それは……」

うわあ、あの称号は恥ずかしい……。

こうして、昆虫採集大会は幕を閉じた。

その後は人も掃けて、いつもの静けさを取り戻した駄菓子屋。

その前で、俺達は駄弁っていた。

しろはや紬といった皆も、その場の流れで留まっていた。

「ちくしょー、必死に捕まえたオオクワガタが、のみきのものになるなんてなー」

良一は怒りが収まらないのか、コーラを買ってやけ飲みしていた。

「あー……その、なんだか、すまない」

ちなみに大会終了後、捕まえた虫たちは全て逃がされた。

「あのオオクワガタ、せつかくだから島モンみたいに羽依里の蝶と戦わせたかったよなー」

「やめてよ。店の前で死人が出たらシャレにならないじゃない」

え、島モンってそんな危険ものだったっけ？

ちなみに俺達の蝶もとつくに逃がしてしまった。あの場所に無事戻れるかわからないけど。

「そうだ皆、昼から時間あるか？」

お昼も過ぎたし、そろそろ解散……と思っていたところで、良一が声を挙げる。

「あるにはあるけど、何かするのか？」

「こいつで遊ばないか」

良一が右手に持っていたのは、さつきまで飲んでいたコーラの空き缶。

「どうするんだ、その空き缶」

「これで缶ケリやろうぜ」

「缶ケリ？」

「ああ、懐かしいだろ」

確かに、子供の頃やって以来だ。

「へー、たまにはいいかもね」

「うん。皆でやると楽しいかも」

案外皆も乗り気だ。

「あのー、缶ケリってどういう遊びなんですか？」

あ、夏海ちゃん知らないのか。確かに、世代じゃないとわからないかも。

「かくれんぼみたいなものだよ。最初に鬼を決めて、他の誰かが缶を蹴る。鬼が缶を拾って戻ってくる間に、他の皆は隠れるんだ」

「戻ってきた鬼は皆を探すの。見つけたら缶の所まで走って戻って、名前を読んで、缶を踏む」

「羽依里を見つけたら、羽依里みつけ。ポコペンってね」

「ポコペンってなんですか？」

「よくわからないけど、それを言うルールなんだ」

「わかりました」

「見つけた人は缶の周りに集まるんだ」

「全員見つけたら終了ですか？」

「そうだけど、缶ケリの面白いところは隠れてる人が鬼より先に缶の所に行つて缶を蹴ったら、それまで捕まっていた人も逃げていいんだ。リスタートつてやつだよ」

「なんだか面白そうです」

夏海ちゃんもやる気になってくれたみたいだ。

「それじゃ、昼飯食ったらまた駄菓子屋に集合な」

「わかった」

一旦皆と別れ、加藤家へ帰る。

買わされた虫かごと虫取り網を適当な場所に片付けて、昼食をとることにした。

昼食は数あるカップうどんの中から、肉うどんをチョイス。

肉うどんと言っても、肉とは名ばかりの細切れのようなものしか入ってなかったけど。昆虫採集で散々歩き回った後だったし、とても美味しかった。

午後からは約束した通り、駄菓子屋に集合。

そこには言い出しっぺの良一の他、しろは、鷗、紬、蒼、藍、のみに天善と、午前中のメンバーがほとんどそのまま再集結していた。

「ん？　　そういえば天善、昆虫採集大会に参加して無かったよな？」

「ああ。今日は俺が出店を出す日だな。午前中は港に居たんだ」

……そういえば、今日は港に行ってなかったな。

「天善くん、何を売ってたの？」

港での出店経験のあるしろはが、興味津々で天善に聞いてきた。

「これを焼いていたんだが、売り上げはイマイチだった。ほとんど売れ残ってしまったてな」

そう言いながら、天善は持っていた大きな袋の口をあける。甘い匂いがふわっと広がり、皆がその袋の中を覗き込む。

「なんだこれ？」

「東京ケーキだ」

「東京ケーキ？」

中には一口サイズのお菓子が大量に入っていた。どっかで見たことあるような。

「つまるところのベビーカーカステラだな。東京ケーキはこっちの地方限定の呼び方らしい」

のみきがそう補足してくれる。

「ベビーカーカステラなら知ってるぞ」

「だろう。子供の頃によく食べたよな」

「ああ。安くておいしかったよな」

「あの、ベビーカステラってなんですか？」

「あー、これも夏海ちゃんくらしいの歳だと知らないかもしれない。」

「買ってあげるよ。天善、ひとついくらだ？」

「いや、どうせ売れ残り品だ。代金はいいいから、皆で食べてくれ」

「なら、いただこうかな」

「天善さん、いただきます」

「あたしもひとつもらうわね」

「私もー」

無料ということがわかると、皆も次々と手が伸びる。

お昼を食べた後のはずだけど、甘いものは別腹なんだろうか。ふつから甘いベビーカステラは大人気だった。

かくいう俺も、昼のカップうどんだけでは何か物足りないと思っていたところで、結構な数を食べてしまった。

……それでも袋の中にはまだ沢山のベビーカステラが量が残っている。

「なあ天善、たくさん焼きすぎたんじゃないか？」

「すまん。途中でこの形がピンポン玉に思えてきてな……焼く手が止まらなくなったんだ」

いわゆる天善ゾーンに突入してしまったらしい。

「それにしても、懐かしくてうまいよな。本当にピンポン玉みたいだし」

……言ってから、しまったと思った。

「そうだろう。さすが鷹原にはわかるんだな。もつと食ってくれていいぞ」

笑顔の天善から、次から次にベビーカステラが渡される。

「いや、俺もそろそろ腹が……」

「そう言うな。まだあるぞ」

俺の言葉を遮り、まだまだ手渡されるベビーカステラ。

否応なしに食べ続ける俺。

笑顔で渡されるベビーカステラ。

食べる俺。

……袋が空っぽになるまで、その状況は続いた。

「羽依里、大丈夫？」

苦しくてしばらくベンチに横になっていた俺を、しろはが心配そうに覗き込んでくる。

「長崎銘菓になりそうだ」

「しっかりして」

なんとか上体を起こすと、缶ケリの準備ができていた。

と言つても、缶を地面に設置するだけだけど。

「おっ、起きたな。缶ケリの準備は万端だぞ」

参加するかどうか考えたが、腹ごなしに運動するのもいいかもしれない。

なんとか体を起こして、しろはと共に皆の輪に加わる。

「それじゃ、隠れるのは駄菓子屋周辺ということにしよう」

「名前を間違えたりしたらリストार्टですよ」

細かいレギュレーションが決められていく。

「ところでしろは、食堂の準備は良いのか？」

「料理の下ごしらえは終わってるから。まだ平気」

「そっか。なら大丈夫そうだな」

「うん」

「それじゃ、最初の鬼を決めますよ」

藍の言葉に合わせて、皆が握りこぶしを作る。

「じゃーんけーんー！」

「ぼんー！」

「負けた……」

一番最初の鬼はしろはに決まった。

「それじゃ、誰か缶を蹴って」

「ぎゃー……！」

「しまったっ、つい反射的に撃ってしまった！」

こっちも条件反射になってるみたいだ。

「のみき、見つけた。ポコペン」

しろはが缶を踏む。

その後、上着を着た良一と水鉄砲を持ったのみきがとぼとぼと缶の周りにやってきて、救出されるのを待つ。

二人とも待ってるよ。しろはが他の皆を探しに行つて缶から離れたら、すかさず缶を蹴つて助けてやるからな。

「……マッチ・トウ・加納」

「シャアアアアア……！」

アイスクリームケースの陰に隠れていた天善が勢いよく飛び出す。

「天善くんみつけた。ポコペン」

またしろはが缶を踏む。

「つい、体が動いてしまった……」

天善も缶の所に歩いていく。

「……そういえば、この前秘密基地で食べたワタアメ、美味しかったな」

「またピンク色のワタアメ、食べてみたいな」

「はい！ また作ります！」

「紬、見つけた。ポコペン」

「むぎゅ……」

俺の近くの茂みに隠れていた紬が笑顔で飛び出し、捕まる。

「最近、都会ではいろんなシロップをかけたレインボーかき氷が流行ってるらしいの。美味しいのかな？」

「全部同じ味だけどね！」

「蒼、見つけた。ポコペン」

「あ……」

またまたしろはが笑顔で缶を踏む。蒼も捕まった。

「三角形の秘密。それはね……」

しろははそこままで言い留まる。

「お、教えてあげないよ！ じゃん！」

「鳴、見つけた。ポコペン」

「うう、つい……」

良一とは別の電柱の陰に隠れていた鳴も捕まった。しかし、どうやってあのスペースにスーツケースと一緒に隠れてたんだろう。

「そういえばこの間、蒼が知らない男の人と歩いてたの」

「は？」

「蒼ちゃん、詳しい話を聞きましょうか？」

駄菓子屋の裏から藍が出てきて、缶のそばにいる蒼に詰め寄る。

「ただの観光客よー！ 鳥白島まんじゅうが欲しいって言ってたから、駄菓子屋まで案内したただけですよー！」

「藍見つけた。ポコペン」

「不覚です……」

皆、面白いように捕まっていく。ちなみにしろはは缶の元から全く動いていないので、俺も救出に向かえない。

だが、残るは俺と夏海ちゃんだ。島の仲間たちのように簡単にはいかないはず……。

「夏海ちゃん、私のチャーハンの秘密、教えてあげよっか」

「え？ はい！ ぜひお願いします！」

近くのポリバケツから夏海ちゃんが出てきた。なんて所に隠れるんだ。

「……やっぱり駄目。夏海ちゃん、見つけた。ポコペン」

「えええー！」

夏海ちゃんも捕まった。

……あれ、気が付いたら残ってるの俺だけ？

「後は、羽依里だけだね」

……くそ、俺はそう簡単にはいかないからな。
しろはは大きく息を吸い込むと……。

「……しんそうおう！　してんのうスクワット！　すぎく！」

「ぎくぎく！」

「羽依里、みつけた。ポコペン」

「しまったあああ」

瞬殺だった。

「いつもおじーちゃん達と、楽しそうにやってるから」

「別に楽しんでやってるわけじゃないんだけど……」

結局しろはは缶の所から一步も動くことなく、俺たち全員を捕まえてしまった。

しろはが完勝してしまったので、今度はしろは以外のメンバーでじゃんけんをして、鬼を決める。

「じゃんけんけん！」

「ぽん！」

「くそ、俺か」

じゃんけんの結果、今度は俺が鬼になってしまった。

とりあえず、隠れてる奴を見つけたら、相手より早く缶のほうに戻ってポコペンと言えればいいわけだ。

「昆虫採集で鍛えた気配を消す力、見せてあげるわ」

「次は捕まらないよー！」

「夏海ちゃん、隠れるコツ、教えてあげる」

「はい！　よろしくお願いしますー！」

「今度は本気ですー！」

あれ？　さつき瞬殺されたせいかな、皆めちやくちややる気なんだけど。

「それじゃ、行くぜ！」

そして、今度は良一が代表して缶を蹴る。缶は綺麗な弧を描きながら、道路の向こうの方にすっ飛んでいった。

「良一の奴、思いつきり蹴りやがって……」

遠くに飛ばされた缶を拾って戻ってくると、もちろん皆の姿はない。

缶を地面に立てて、周囲を見る。隠れる範囲は駄菓子屋周辺だから、ある程度場所も限定されるはずだ。

茂みの中とか、電柱の陰とか。さつき見ていたおかげで、皆が隠れる場所は大体把握できた。

まず最初にしろはを捕まえたい。さつきのお返しというわけじゃないが、とにかく最初にしろはを捕まえたかった。

「……よし」

俺は大きく息を吸い込む。そしてできる限り大きな声で叫ぶ。

「しろはー！ 俺は大好きだー！」

「は、恥ずかしいこと大きな声で言わないで！」

すぐ近くの茂みに隠れていたしろはが、顔を真っ赤にして飛び出してきた。

「しろは見つけ！ ポコペン！」

「ああああ」

しろははわたわたした後、がっくりをうなだれて缶の近くにやってくる。

「……羽依里、たばかったな」

……すごい優越感。やったぜ。

背後からの恨めしそうなしろはの視線を受け流しながら、今度は少しずつ缶から離れていく。

一応いつでも缶の元に戻れるように準備はしている。離れすぎても蹴られるからな。

……その時。

「ここだぜ、羽依里！」

「ちよれええええい！」

「なに!？」

良一と天善が、同時に駄菓子屋の屋根から降りてきた。

いや、いくらなんでも屋根の上から降りて来るとは思わなかった。

「しろは！　すぐに助けてやるぞ！」

「くそ、いきなりあの二人と勝負か！」

急いで缶の元へ戻る。準備しておいたおかげで、俺の方が二人よりわずかに早く缶の元へ辿り着く。

「良一見つけ！　天善見つけ！　ポコペン！」

二人が滑り込んできたが、体重を乗せて缶を蹴られないようにした。缶は不動だ。

「くそおっ」

「予想以上に屋根から降りた時の衝撃が強かったな……ダツシユするタイミングが遅れた」

「危なかった……」

でも男子二人を同時に捕まえられたのは大きい。後は女子しか残ってないし。

というわけで、さつき以上に缶から距離を開ける。一応運動部だったし、足の速さで女子に負けない。

「せーの……いけ！　鷗！」

缶を挟んで反対側の路地から、のみきと紬に押されてスピードに乗ったスツケースが飛び出してきた。

その上には鷗が器用に乗っている。

「しろしろー！　今行くよー！」

「なにっ!?!　鷗!？」

まさか、スツケースに乗って飛び込んでくるとは思わなかった。

二人に押されたスツケースは結構なスピードだったので、俺は全力で戻る。

「鷗、紬、のみき見つけ！　ポコペン！」

なんとかスーツケースより早く缶の元に駆け戻り、名前を読んで捕まえる。

「わわわわー!」

しかし、鷗の乗ったスーツケースは途中でコントロールを失ったように、勢いそのままに電柱の方へ向かっていく。

「鷗、ブレーキ!」

「ついてない!」

……そうだった。このままだと鷗は電柱にぶつかってしまう。

「くそつ、鷗、手を出せ!」

俺は反射的に鷗の方へ走り、抱きかかえるように鷗を救出する。

「おわっ」

無人になったスーツケースは、電柱にぶつかって鈍い音を立てる。元々頑丈そうなので、壊れるようなことはないだろう。

「あ、ありがとう羽依里……」

「いや、気にしなくていいぞ」

「……そしてごめん」

「なに?」

次の瞬間、駄菓子屋の奥から飛び出してきた蒼が缶の方に突っ込んでいった。

……まさか、今の流れで鷗が囷なのか?

……女連中、チームワーク良すぎだろ。

俺は飛ぶように鷗のそばを離れ、缶の元へ。

「蒼みつけ! ポコペン!」

そして缶を踏む。蒼が滑り込んできたけど、俺の方が早い。

「作戦失敗か……」

「むぎゅ、捕まっちゃいました……」

「あとちよつとだったんだけど、面目ない……」

スーツケース作戦が失敗に終わった四人が、無念そうに缶の周りに集まってくる。

「蒼も残念だったな……」

俺は流れる汗を拭いながら、うつむき加減の蒼に声をかける。

「……ふふ。残念なのは羽依里さんのほうですよ?」

「え? 羽依里さん?」

「……よく見たら蒼と瞳の色が違う。

「……まさか、藍なのか?」

「そうですよ」

「引つかかったわね、羽依里!」

近くの塀の向こうから、今度こそ本物の蒼が顔を出す。

「名前を間違えたから、もう一度最初からですね」

「マジか……」

藍と蒼、今日に限って同じ服、同じ髪型なんだもん……双子ずるい……。

その後、今度は天善が代表して缶を蹴り、リスタートになる……。

しかし、一度切れた集中力はなかなか戻らず。

「スーツケースが見えてるぞ! 鷗見つけ! ポコペン!」

「ひーん」

これで鷗は捕まえた。他の皆はどこだろう。

じりじりと缶との距離を広げる。

「えーい!」

え、夏海ちゃんが大きなポリバケツから出てきた!?

急いで戻るけど間に合わず、スライディングで缶が蹴られ、またリスタート。

夏海ちゃん、結構運動神経良いんだけど……。

「ツインテールが見えてるぞ! 紬見つけ! ポコペン!」

「むぎゅ! みつかってしまいました!」

電柱の陰に隠れていた紬だが、ツインテールが風になびいていたのですぐに見つけた。

「藍蒼見つけ! ポコペン!」

そして、今度ははっきりと空門姉妹を捕まえる。

二人まとめて捕まえれば、名前間違える事もないし。

「今度は捕まってしまうでしたね……」

「惜しかったんだけどね……」

「ぜえ、はあ……二人とも、かなり足速くないか？」

「島の運動会だと、いつも一番ですよ」

「マジか……」

でも、二人ともスカートで全力疾走はやめてほしい。その、色々危ないから。

えーつと、あと何人だっけ……。

……あれ？ 空き缶の近くにいるの間にかスニーカーが……。

「イリユージョン！」

「何っ!? スニーカーから鷗が!?」

「さっきのお返しだよ！」

かこーん。と痛快な音がして缶が蹴られた。

「うああ、缶がー！」

……やばい、グダグダだ。

もう途中からリスタートした回数なんて覚えちゃいなかった。

俺はひたすらに仲間たちと缶を追いかけていた。

そして、だいぶ日も傾いた頃。

「皆、悪い……ギブアップだ。もう許してくれ」

俺は敗北宣言をし、缶の近くにへたり込んでしまう。俺は一体何時間鬼をやっていたんだろう。

「最初にしろはを捕まえるからいけないのよ」

「ああ、あれで俺たちの闘争心に火がついた」

「反省しましたか？」

隠れていた皆が集まってきてくれる。皆勝ち誇った顔だ。

「ああ、凄く後悔してる」

島民のチームワークを甘く見ていた。ここまでボコボコにされるとは。

「あはは、ちよつとやりすぎちゃったかしらねー」

身体はものすごく疲れてるけど、皆が楽しんでくれたならそれでいいかも……。

そんなことを考えながら唐立ち上がった矢先。

「あれ、いてて」

急な腹痛に襲われて再び膝をつく。

「……羽依里、どうしたの？」

「なんか腹が痛い。いてて……」

すぐにしろはが駆け寄ってきて、背中をさすってくれる。

「ちよつと、大丈夫？」

「どうした？」

他の皆も心配そうに集まってくれる。

「う、うん。いてて……」

正直ヤバイ。缶ケリの前に食べさせられた大量のベビーカステラが、今更胃袋で暴れていた。

「やれやれ、たくさん食べ過ぎた後に急な運動をしたからだろう。しろはと夏海ちゃん、鷹原を家に送ってやってくれ」

「うん」

「わかりました」

こういう時ののみきは本当に頼りになる……いてて。

缶ケリは自動的にお開きとなり、俺はしろはと夏海ちゃんに介抱されながら、なんとか加藤家に辿り着く。

そして玄関に着いたと同時に、安心感からか気を失ってしまった……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……やっぱり、診療所に連れて行った方が良いかしら」

部屋で横になっている鷹原さんを、鏡子さんが心配そうに見ています。

「……大丈夫だと思えます。食べ過ぎた上に、急に運動したのが原因だと思えますから」

しろはさんが半分呆れた様子で言っています。

「鏡子さん、胃薬とかないんですか？」

「夏海ちゃん、台所に救急箱があるから、そこから胃腸薬を持ってきてくれない？」

「わかりました」

鏡子さんの指示を受けて、私は台所へ向かいます。

炊飯器とか置いてある棚の横にそれらしい箱がありました。中を探すと、カップのマークの正論丸と、霧島印の聖腸剤がありました。

「鏡子さーん、二種類あるんですけど、どっちですか!？」

「もう、両方飲ませてあげていいんじゃないかな」

「わかりました!」

私は薬と水を持って、鷹原さんの部屋に戻ります。

「鏡子さん、持ってきました!」

「そう。それを羽依里君に飲ませてあげて」

「はい! 鷹原さん、しっかりとしてください! お薬ですよ!」

鷹原さんはうんうん呻きながら、なんとか薬を飲んでくれました。

「これじゃ、しばらくは動けそうにないね。最近は胃腸に良くないものばかり食べてたのかな?」

ホルモンうどんにスイカバー、今日のベビーカステラ……思い当たる節がいっぱいあります。

「ところでしろはちゃん、今日は食堂は?」

「一応、開店の準備はしてますけど……」

「なら、食堂に行った方がよいよ。羽依里君の面倒は私が見ておくから」

「……わかりました。よろしくお願いします」

しろはさんは一礼して、帰っていきました。

鏡子さんは鷹原さんにタオルケットをかけてあげた後、私の方を見て微笑みます。

「夏海ちゃんも心配しなくていいからね」

「はい」

顔を覗き込むと、鷹原さんはまだうなされていきます。長崎銘菓がどうとか、ブツブツ言っています。

「さすがに羽依里君は今日は無理だろうけど、夏海ちゃんはお腹空いたら食堂に行ってもいいから」

「はい。そうします」

……そして夜になりました。

鷹原さんは落ち着いたようで、今はぐっすり眠っています。

私はというと、お腹が空いたので一人でしろはさん食堂へ向かうことにしました。

虫の音を聞きながら、一人で坂道を歩きます。

もう学校の前を通っても何も感じません。余裕ってやつです。

そこから少し歩いたら食堂に到着です。相変わらず立派な看板が立っています。

「こんばんわー」

扉を開けて、一人でお店に入ります。思えば、こんなこと島に来て初めてな気がします。

「あ、夏海ちゃん。いらっしやい」

しろはさんが笑顔で迎えてくれました。今日はまだお客さんは来ていないようです。

「どうぞ。座っていいよ」

しろはさんは自分の前の席を勧めてください、お水を出してくださいました。

「羽依里の様子はどうか？」

「薬が効いてるみたいで、今は気持ち良さそうに眠ってました」

「そう……全く。羽依里ってば、時々子供なんだから……」

しろはさんが呆れたように言います。でも、怒ってません。

「それで夏海ちゃん、何食べる？」

しろはさんがメニュー表を渡してくれました。

「あ、今日の日替わりはなんですか？」

「今日はね、ザリガニ定食」

「……それは、やめときます」

朝の悪夢を思い出しちゃいました。

気を取り直して、メニュー表とにらめっこします。そういえば、昨日鷗さんが食べていた冷やし中華がおいしそうでした。でも、のみきさんの食べていたハンバーグもおいしそうでした。正直迷います。

「こんばんわー」

悩んでいると、扉が開いてお客さんが入ってきました。

「……あれ、夏海ちゃんじゃない」

「一人ですか？ 珍しいですね」

振り返ると、藍さんと蒼さんでした。相変わらずそっくりです。

「羽依里、お腹壊しちゃったから」

「あー、そういえばそうだったわねー」

「ベビーカステラ、たくさん食べさせられてましたからね」

お二人は、しろはさんとお話をしながら私の隣に座りました。

「しろは、せっかくだしお見舞い行ってあげたら？ 喜ぶんじゃない？」

「た、ただの食べ過ぎだし。そこまで大げさにしなくても……」

「良いじゃないですか？ 彼女さんなんですから」

「膝枕でもしてあげれば、すぐに良くなるわよ」

「も、もとはと言えば天善くんがベビーカステラをたくさん持って来るからあんなこと……」

「そうそう。天善もあれだけ売れ残っちゃうなんて災難よねー」

「しろはちゃんのお好み焼きくらいのインパクトがないと、なかなか売れませんよ」

「全くよねー」

「そういえば、今日の昆虫採集の時、紬がね……」

……話題がころころ変わります。

なんだか、鷹原さんと一緒にいる時とは皆さん違う顔です。これが女同士つてもものなんでしょうか。

つい、メニュー表を見るのをやめて、皆さんの顔を見てしまいます。……島の女の人、皆きれいですよね。

「夏海ちゃん、どうしかしましたか？」

「い、いえ」

「しろはー、あたしと藍は冷やし中華お願い」

別のメニュー表を見ていた蒼さんが、料理の注文をしています。

「あ、私も同じものをお願いしますー！」

お二人の注文に合わせて、慌てて私も冷やし中華を注文しました。

しばらくして、三人分の冷やし中華が運ばれてきました。

「おまたせ。こっちが夏海ちゃん、こっちが藍、こっちが蒼」

指定された冷やし中華を受けとります。

見ると、藍さんの冷やし中華にはキュウリが、蒼さんの冷やし中華には紅シヨウガが乗っていません。

「さすがしろは、わかってるわねー」

どうやら、藍さんはキュウリ、蒼さんは紅シヨウガがそれぞれ嫌いなようです。しろはさんは言われなくてもそれをわかっていたみたいです。すごいです。

「それじゃ夏海ちゃん、食べましょ？」

「はい！ いただきますー！」

三人で一緒に手を合わせて、冷やし中華を食べます。冷たくて美味しいです。

……晩ごはんを食べた後も、皆さんと楽しくおしゃべりしていました。た。

すると、すっかり遅くなってしまいました。

「夏海ちゃん、一人で帰れますか？」

「送ったげよっか？」

「いえ、一人で大丈夫です」

お二人が心配してくれてますが、この島に来て夜の道には慣れました。一人で大丈夫です。

「じゃあ、イナリを護衛につけてあげる」

「え、イナリさんですか」

「ポーン！」

蒼さんの足元を見ると、店の外で待っていたのか、イナリさんがいきました。

「都会と違って変質者は出ないけど、野生動物が出てくることもあるから」

「イノシシとか出てきますよ」

「……それはそれで怖いんですけど」

「昨日も言ったけど、イナリはその辺の野生動物なら負けないから」

「ポーン！」

イナリさんは小さくてかわいいのですが、どこにそんな力があるんでしょう。不思議です。

「それじゃあね。おやすみ、夏海ちゃん」

「おやすみなさい。夏海ちゃん」

「はい。おやすみなさいです！」

「イナリ、きちんと送ってあげなさいよー！」

「ポーン！」

手を振って蒼さん達とお別れして、イナリさんと二人で夜の道を歩きます。

時々タヌキとか飛び出してきましたが、先頭を歩くイナリさんの一声で逃げていきました。さすがです。

そうやってイナリさんと一緒に坂道を登った先。周りを畑と木に囲まれた一本道。

そこに……一匹の光る蝶がいました。

……七影蝶です。

「ポ、ポーン！ ポーン！ フー……！」

イナリさんはこの蝶が見えているみたいで、私の前に出て、威嚇し

てくれます。

「……イナリさん、大丈夫ですよ。ちゃんと見えていますから」

「ポ、ポン？」

困惑しているイナリさんを追い越して、私は光る蝶に近づいていきます。

確か、昨日の山にもいましたよね。私の他には、鷹原さんと蒼さんにはしか見えてないみたいでしたけど。

私はますます近寄って、右手を差し出します。

「ポンー！ ポンー！」

「大丈夫です。心配いらないですよ」

その七影蝶は、私の指先に触れて……

……崩れる様に、私のてのひらに吸い込まれて、消えてしまいました。

「ん……」

……ちよつとめまいがしましたが、大丈夫みたいです。

「ポ、ポン？」

さすがに私が七影蝶を取り込んだのを見て、イナリさんもびっくりしているみたいです。

「あはは……ほら、大丈夫ですよ？」

私は手足をぱたぱた動かしたり、軽くジャンプしたりして、イナリさんを安心させてあげます。

「あ、でもイナリさん、今のは皆さんには内緒でお願いします。変な子だと思われるので……」

私は口元に指を当てて、イナリさんをお願いをしておきます。

「ポンー！」

「それじゃあイナリさん、引き続き護衛をよろしくお願いします！」

「ポ、ポンポンー！」

ちよつとしたトラブルもありましたが、その後はまたイナリさん
を先頭に、家に向かって歩き出しました。

良い時間ですし、そろそろ鷹原さんのお腹の調子も良くなっていると
いいんですけど……。

第八話・完

第九話 8月2日

……朝。

いつもより少し早い時間に目が覚めた。

まだ薄暗い天井を見つめながら、昨日の出来事を思い出していた。

天善にされるがままベビーカーを食わされ、その後の缶ケリにボロ負けした後、急に腹が痛くなって、しろはと夏海ちゃんに支えられながら帰宅した。

「俺、情けない……」

全てを思い出したと同時に、ものすごい自責の念にかられる。

ゆっくりと体を起こし、布団から出る。

起き上がって腹をさすってみるけど、今のところ違和感はない。どうやら体調も回復したみたいだ。

「皆に迷惑かけちゃったし、せめて元気な姿を見せない」と

そう考えながら早めに身支度を整えていた、その時。

「鷹原さーん、お腹の調子はどうで……あ」

ちようどズボンを履き替えていたタイミングで、夏海ちゃんがふすまを開けて顔を覗かせた。

「きゃあああ……」

思わず叫ぶ俺。

「ご、ごめんなさーい！」

すぱあん、と綺麗な音を立てながらふすまを閉める夏海ちゃん。

「ご、ごめん。早めに目が覚めたから、着替えてたんだ」

「そ、そうだったんですね。お腹痛いの、治りましたか？」

「う、うん。もうバッチリ」

しばらく、ふすま越しに夏海ちゃんと会話していた。

「ごめんね。もういいよ」

着替えを終えて、改めて夏海ちゃんと顔を合わせる。

「夏海ちゃん、昨日は心配かけてごめんね」

俺は誠意を込めて頭を下げる。

「はい。本当に心配しました」

「これからはドカ食いは禁止ですよ」

「うん」

肝に銘じておこう……。

「あ、羽依里君。具合良くなった？」

さっきの騒ぎを聞きつけてか、鏡子さんもやってきた。

「はい。ご心配おかけしてすみません」

同じように頭を下げる。

「いいんだよ。それより、しろはちゃんも心配してたよ」

「はい。わかってます」

皆に迷惑をかけてしまったし、神社に着いたら皆に謝ろう。

「それじゃ夏海ちゃん、ラジオ体操行こうか」

「はい！」

その後は夏海ちゃんと一緒にラジオ体操へ向かう。

その道すがら、少し気になったことを聞いてみる。

「そういえば、昨日の晩ごはんはどうしたの？」

「はい。しろはさん食堂に行きました」

「一人で？ 大丈夫だった？」

「はい。蒼さん達が居て、お話ししました。楽しかったですよ」

「帰りはイナリさんが送ってくれましたし」

「そっか。それならよかった」

神社の境内に到着すると、いつもの皆が居た。昨日心配をかけてしまったので、同じように頭を下げる。

「いや、無理矢理ベビーカーを食べさせた俺も悪かった」

「天善は一度天善ゾーンに入ると、周りが見えなくなるからなー」

「まあ、体調が良くなったのなら何よりだ」

「これからは気をつけなさいよー」

「全くです。蒼ちゃんに心配かけないでください。実は朝一番にお見舞い行こうとか言ってたんですから」

「だから藍、バラさないで——！」

なんだかんだで、皆笑って許してくれた。本当にありがたい。

「よーしお前ら！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

そこにラジオ体操大好きさんがやってきて、今日もラジオ体操が始まる。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああ——！」

「うるあああ——！」

うう、空きっ腹に響く……。

「なんだかんだで、夕飯抜いてるもんなあ……」

「さあ、スタンプを押すぞー」

ラジオ体操が終わり、スタンプとログボを受け取る。

今日のログボはまたまたバケツから。元気に動いているホタテだった。

ホタテって冬のイメージなんだけど。鳥白島近海恐るべし。

「今日のログボも美味しそうですねえ」

「そうだね」

言ってから、どんなものもまず食材として見るようになってきた自分に気づく。

夏海ちゃんも順調に島に染まってるみたいだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

帰宅後、さっそくホタテの調理方法について夏海ちゃんと話し合う。

「いくらなんでも、このホタテを生で食べるのはどうかと思います。

鷹原さん、まだ病み上がりですし。そうですね?」

「うん。それは重々承知しているよ……」

「では、今日のホタテはホタテチャーハンにすると言うことで、良いですね?」

朝食がチャーハンなのは、もはや既定路線のようだ。夏海ちゃんもニコニコ顔だ。

「しつかり火を通しますから」

「いや、やっぱりバター焼きも捨てがたい……」

「まだそんなことを言ってるんですか? この家にはマーガリンしかないんですよ?」

「そ、そうだけど」

「近所でバターが余ってる家がないだろうか。と言っても、今から借りに行くわけにもいかないし。」

「とりあえずじゃんけんしよう」

「……意味がわからないんですけど」

「……何もしないで諦めるのはいやだからさ」

「格好いいこと言ってますけど、鷹原さんが勝ってもマーガリン焼きですよ?」

「うん、わかってる」

「わかりました。それじゃ行きますよ! じゃんけんけん!」

「……なにやってるの、二人とも」

「あれ?」

いざ勝負……というところで、玄関からしろはが覗いていた。

「その様子だと、お腹の調子よくなったみたいだね」

「ああ、心配させてごめん」

居間に着がっってもらって、とりあえず謝る。

「まったく。これからはドカ食い禁止だからね」

夏海ちゃんと同じ事を言われてしまった。

「それで、何でじゃんけんやってたの?」

「朝ごはんのメニューのじゃんけんです」

「え、意味がわからないんだけど」

とりあえず、これまでの経緯をしろはに説明する。

「……」

ジト目で見られてる。明らかに呆れられているような。

「羽依里、ちよつと台所貸して」

そして、俺達の手からホタテが奪い取られる。

「夏海ちゃん、エプロン借りるよ」

「は、はい」

普段は夏海ちゃんが使ってるフリフリエプロンを、今日はしろはがつけて台所へ向かう。

どうやら朝ごはんを作ってくれるらしい。

「チャーハンだつて油を使うんだし、お腹には優しくないんだから。病み上がりなんだし、もうちよつと健康を考えて……」

なんかブツブツ言ってる。

「しろは、調味料足りるか？」

「うん。あるもので作るよ。座つて待つて」

言われた通り居間で待つていると、すぐに食材を炒める音がし始めて、やがて良い匂いが漂ってきた。

「おまちどうさま」

数分後、俺たちの前には深めの皿に盛られた料理が出てきた。

「えつと、これは？」

「ホタテのリゾット風」

「リゾット風？」

「……冷たいご飯を使って作ったからリゾット風。洋風雑炊みたいなもの」

「美味しそうだな」

……この家にある調味料でこんなものができるなんて思わなかった。あまり意識しないけど、しろはは洋食も得意なんだな。

「少し牛乳も入ってるし、消化に良いように柔らかくしてあるから」

「羽依里は昨日の晩ごはん食べてないだろうけど、病み上がりだし。」

これくらいが胃に優しいと思う」

俺のことを思って作ってくれたのか……その愛情に嬉しさがこみ上げる。

「冷めないうちにめしあがれ」

「それじゃ、いただきます」

「いただきますーす」

ホタテの旨味がご飯全体を包み込んでいて味が良く、身の歯ごたえもアクセントとしてしっかりと残っていて、絶品だった。しろはの言う通り、胃に優しい料理だった。

「夏海ちゃん、今日一日は羽依里が脂っこいものや冷たいもの食べないよう、見張っててね」

「わかりました！」

「いや、そこまで徹底しなくても大丈夫と思うんだけど……」

「羽依里、何か言った？」

「いいえ」

しろはさん、顔が恐いです。

「……それじゃ、私はこれで」

俺達が朝食を食べるのを見届けると、しろはは帰っていった。もつとゆっくりしていけばいいのに。

食後はいつものように夏海ちゃんと向かい合って宿題をする。

「羽依里君、勉強中に悪いんだけど、ちよつといいかな」

「はい、なんででしょう？」

もう少しで今日の分が終わる……という所で、鏡子さんから声をかけられた。

「また買い出しを頼みたいんだけど」

「港ですか？ 構わないですよ」

「ありがとう。必要なものはこれに書いてあるから」

鏡子さんからメモを受け取る。メモの中身は、例によってインスタント食品とか、調味料の類だ。

「サラダ油とか、一升瓶のお醤油とかあるから、バイクで行った方が楽

だと思っようよ?」

「わかりました」

結構な荷物になりそうだし、バイクの荷台を使わないと運べないかもしれない。

「と言うわけで夏海ちゃん、宿題が終わったらちよつと港に行ってくるよ。留守番お願いできるかな」

「わかりました。MDでも聞いてます」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

宿題が終わった後、バイクで港に行って買い出しを済ませる。

大き目の段ボール箱をもらって、買った品物をその段ボールに入れてから、バイクの荷台に固定する。

さあ、戻ろうかな……と思ったところで、遠くに小さな店が出ているのが見えた。

いや、店と呼んでいいのかもわからない。申し訳程度の日よけが出ていて、その下にビニールプールが置いてある。

食べ物売っているような感じではないし、何より無人のように見える。

「なんだろ、あれ……」

気になったので、荷物を乗せたバイクを日陰に移動させてから、お店の方に行ってみる。

「ポン!」

「あれ?」

誰もいないと思っていたら、イナリが店番をしていた。

「お前、何売ってるんだ?」

近づいてみると、ビニールプールには水が張ってあって、その中にカラフルな丸い物体が大量に浮いている。

「ヨーヨー釣りが」

「ポン！」

良く見ると『釣り竿一本200円。紐が切れるまで何回でも取り放題』と書かれた看板も立てられている。

「せっかくだし、挑戦してやるよ」

「ポンポン！」

まいどありー、と言った感じで、器用に尻尾で小銭を受け取り、カゴに入れる。

続いて、同じように尻尾で小さな釣り竿を渡してくれた。

「お前、器用だよな……」

釣り竿はというと、縁日でよく見る、糸の部分が紙のコヨリで作られた釣り竿だった。

そして俺はビニールプールの前にしやがみ込む。

「よし、たくさん取ってやるぞ」

適当に目についた青いヨーヨーに狙いを定め、持ち手のゴムの部分に釣り竿の針を引っ掛ける。

「……それ！」

できるだけゆっくり持ち上げたつもりだったけど……ぷちん、と音がして糸が切れてしまった。

「あれ？」

「ポン！」

残念ー。と言われた気がした。

……力を入れ過ぎたのかな。子供の頃に比べて今は力も強くなってるから、微妙な力加減が必要なのかも。

「ポンポン！」

「え、今なら100円でもう一回チャンス？」

「ポン！」

「よし、やってやろう」

「ポン！」

再びイナリから釣り竿を受け取って、もう一度チャレンジ。

今度はできるだけ力を入れ過ぎないように……。

「よし、持ち上がった……」

ぽちやん、と再び水しぶきが起こる。今度のはさっきのと比べて、糸が弱かった気がする。

「くっそおおおおお」

「ポン？」

もうあきらめるのかい？　と言われた気がした。

「イナリ！　ワンモアだー！」

「ポンー」

……そんなこんなで、実に600円を費やして青いヨーヨーをゲットした。

「な、なにやってんだろう俺」

終わった後で、ものすごい後悔が襲ってきた。

お祭りテンションと言うんだろうか。冷静に考えたら割に合わないはずなのに、どうしてもやめられなかった。

「うあああー」

「ポン……」

頭を抱えている俺の右足に、イナリが前足を置いてくれる。慰めてくれてるんだろうか。

……こういう時はあれだ。思いつきり身体を動かしたり、大声を出して、気持ちを紛らわせるに限る。

折角だし、苦勞の果てに手に入れたヨーヨーにも一役買ってもらおうことにしよう。

俺は現実逃避を兼ねて、想像を膨らませる。

そう。さしずめ俺は……とある漫画の主人公だ。

宇宙からやってきた巨悪を打ち倒す、人類の希望だ。

ゴムでできた紐を右手の指に絡めた状態で、ヨーヨーを両手で上下に挟む。その両手を身体の右側に持って来る。

そして俺は必殺技の名前を叫ぶ。

「かめは……めー……めー……！」

「そこで撃っちゃうんだ!？」

……俺は両手を前方に押し出した格好で固まった。

そして声のした方を見ると、鷗がいた。

やばい……見られた……恥ずかしい……。

……穴があつたら羽依里たい。羽依里だけに。

「や、やっほー、羽依里」

鷗もしまったと思ったのか、努めていつも通りのあいさつをしてくれる。

「おう、かもめえ」

俺も格好を正し、務めて平静を装った。たぶんできてなかったと思うけど。

「こ、こんな所でどうしたんだ?」

「今日はね、おかーさんと役所に用事なの」

「おかーさん?」

見ると、鷗の隣には一人の女性が立っていた。

……あれ。この人どこかで……?」

「こんにちわ。この間は港でお世話になりました」

「……ああ、あの時の!」

……思い出した。何日か前に船に乗り遅れそうになってた人だ。

「おかーさん、羽依里を知ってるの?」

「あ、この人が羽依里さんなのね」

「どうも、鷹原羽依里です」

「久島鷺です。娘の鷗がいつもお世話になっています」

とりあえず自己紹介をする。

「あの、今日は妹さんはいないのですか?」

「え、妹?」

「ほら、この間港で一緒にいて、船を止めに走ってくれた子です」

あ、夏海ちゃんのことか。

「あの子は妹じゃなくて、親戚の子で」

「あら、ごめんなさいね。てつきり妹さんかと」

「そういえば、今日はなつちゃんと一緒にじゃないんだ。珍しいね」

「今日は港に買い出しに来てたからさ……」

その後はしばらく、久島親子とその場で立ち話をした。

おかげで、ヨーヨーがらみの恥ずかしい一件は俺の頭から吹き飛んでいた。

「それでは鷹原さん、失礼します」

「またね、羽依里！」

二人が仲良く並んで去っていった。

しかし、あの人が鴎の母親なのか。

港で会った時、誰かに雰囲気が似てると思ったんだけど……まさか鴎だったとは。

「……あれ？ 羽依里さんじゃないですか」

二人が去った方を眺めていたら、別の方向から声をかけられた。

「その声は、藍か？」

振り向くと藍が居た。

ラジオ体操の時は普通の髪型だったはずだが、今の藍は髪をトンボ玉と紐で結って、サイドポニーにしている。

そして肌を日差しから守るためか、白い日傘を傘を差していた。

「イナリ、きちんと店番してますか？」

どうやらイナリが店番できているかどうか、見に来たみたいだ。

「ポン！ ポン！」

イナリは満足げにカゴを指し示している。

蒼はそのカゴに入った小銭と、俺が手に持っているヨーヨーを交互に見て、一言。

「いいカモを見つけたみたいですね」

「なんだって？」

「なんでもありません。それより羽依里さん、向こうに怪しい人がい

るんです。ちよつと一緒に来てくれませんか？」

「え、怪しい人？」

「はい。男の子なんですから、お願いします」

「わ、わかった」

藍に案内されて港のはずれにやってくる。ヨーヨー釣りは無人販売にして、イナリも同行する。

見ると、カラスみたいな真つ黒い服を着た男が居た。かなり暑いだろうに、長袖だ。

「た、確かに怪しい」

この暑いのに長袖と言う時点で既に怪しい。やっぱりやめようか。

「ちよつと藍、押さないで。日傘の先で突かないで。痛いから」

藍はそんな俺の気持ちを察したのだろうか。激しく背後から押してくる。

そして俺はその男の前に立つ。

「あ、あの、何してるんですか？」

「ん……？」

男が顔を上げる。銀髪で目つきが鋭い。

「……何をしているように見える？」

いや、わかりません。

「これだ」

俺が返答に困っていると、男はズボンのポケットから赤い帽子をかぶった手のひらサイズの人形を取り出す。

「人形？」

「ああ。お前達、俺の人形劇で大いに笑っていかないか？ お代は見てのお帰りだぞ？」

「人形劇ですか？」

人形劇っていうとあれだろうか。糸で吊ったり、棒で動かす感じの。

「あんたは旅芸人か何かなのか？」

「ああ。一応な」

「……随分愛想のない旅芸人ですね」

「ほっとしてくれ。で、見るのか？ 見ないのか？」

『お代は見てのお帰り』と言うことは『見て気に入ったら後でお金を払ってください』と言う意味だ。

なんだかんだで藍も興味はあるみたいだし、見るだけ見てみるのもいいかもしれない。

「じゃあ、見せてくれ」

そういったものの、自称旅芸人の周囲には人形劇をやるような大がかりな仕掛けはない。どこか場所を移動するのだろうか。

「よし。驚くなよ」

するとその旅芸人はどこに行くこともなく、持っていた人形をそのまま地面に置く。

「……動け！」

そして、その人形に手をかざすと……力なく横たわっていた人形がむくつと起き上がり、ぴよこぴよこ歩き出した。

「おお!？」

「え?？」

「ポン!？」

俺達はそろって驚嘆の声をあげる。

「どうだ。すごいだろう」

「ポン！ ポーン！」

特にイナリは大興奮で、信じられないものを見るような目で人形を見ている。

「どうやって動かしてるんだ？ 電池でも入ってるのか？」

「法術だ」

「ほうじゆつ?？」

人形はとことこと歩いて、藍の足元までやってくる。藍はそれをのひらに乗せてじっくりと観察する。

「……糸もついてないのに不思議ですね」

「俺の家系は、代々これを生業にしているんだ。その人形は、俺の大事

な相棒で、商売道具だ」

「この人形、分解してみたいですか？」

「話を聞いてなかったのか。やめてくれ。大事な商売道具なんだ」

人形は藍の手から逃げる様に飛び降りて、旅芸人の足元へ戻る。

そこにイナリがちよつかいを出すが、人形はそれを機敏な動きで避け続ける。

「ところで、お前らはカップルなのか？」

「違います」

二人揃って、速攻で否定する。

「なんだ、違うのか……まあいい。面白かったろう。そろそろ見物料を払ってくれ」

「あー……その、確かにすごいとは思ったけどさ……」

「別段面白くはなかったです。むしろオチがないですし、中途半端な感じがすごいんですけど」

「タネも仕掛けもないのに動いてるんだぞ？　すごくないか？」

「いや、すごいだけで面白くない」

「全くです。糸で釣ってるのが見え見えでも面白い方がいいです」

面白おかしく動くわけでもなくただ歩くだけ。感動させるお話がついてるわけでもないし、人形を動かしている本人に愛想がないってのも問題だよな。

「マジか……」

男は大きなため息をついてうなだれる。それと同じように人形は力なく地面に横たわり、動かなくなる。

「ポニー」

イナリは寂しそうに、動かなくなった人形を前足でつついている。

「またダメだったか……俺はいつになったら船賃を稼いで、この島を出ていけるんだろうな」

遙か海の彼方を見つめ、黄昏てしまった。

「なあ、それってつまり……」

「ああ、この島に着いたところで金が底をついたんだ。帰りの船賃すらない」

「アホですね」

「……お前の彼女、めっちゃ口が悪くないか？」

「さつきも言ったけど、俺の彼女じゃないからな」

「それで、生業の人形劇で金を稼ごうとしたんだが……さつきみたいな調子でな。全く稼げないんだ」

「あの人形劇じゃそうだろうな……もつとこう、心から感動できるものじゃないと」

「そう言われてな……具体的にどうすりゃいい？」

「いや、俺にも具体案なんて……」

「そうだ、あんたはその人形以外のものは動かせないのか？」

「いや、大きさにもよるが、よほど大きくない限りは大体動かせる」

「マジックとかでよくあるだろ。観客の持つてる品物を使う手だよ」

「なるほどな。客の持ち物を動かせば、驚きもひとしおというわけか」

「そうそう。練習がてら、このヨーヨーでも動かしてみないか？」

「よし、まかせろ」

俺はずつと持ってたヨーヨーを渡す。旅芸人はそれを地面に置き、手のひらをかざす。

するとヨーヨーがひとりでに飛び跳ねだした。

「おお、やっぱりすごいな」

しかし、ヨーヨーが勝手にびよんぴよん飛び跳ねている光景は、かなりシニールだった。

「ストップ、どっちかって言うのと恐くなってきた」

「そうだな。動かしてる俺も妙な恐怖感を感じてたところだ。こいつはダメだな」

動かなくなつたヨーヨーは、再び俺の手元に戻ってくる。

「他に動かせそうなものは……その日傘はどうだ」

「良いですけど……壊さないでくださいよっ」

藍はいぶかしげな目をしつつ、旅芸人に日傘を渡す。

「よし……動け！」

旅芸人が手をかざすと、日傘も動き出す。

日傘が直立し、これもぴよんぴよん飛び跳ねる。どっかで見たこと

ある光景だと思ったら、お化け屋敷で出てくる傘お化けのそのものだった。

「夢に見そうです。返してください」

藍も同じものを想像したんだろう。これも駄目のようだ。

「そうだ、あんたのその髪留めとかどうだ？」

「は？ これは絶対触らせません」

両手で髪飾りを庇いながら、一気に数歩後ずさった。確かあのトンボ玉は蒼にもらったやつだって言ってたつけ。そりゃ無理つてもんだらう。

結局、人形以外のものを動かそうという取り組みは微妙な結果に終わった。

「それじゃ、旅芸人さんも頑張ってください。羽依里さん、帰りますよ」

「ま、待ってくれ」

そんな俺達を、旅芸人が必死に呼び止める。

「嫌です」

「どこかの甘党さんみたいなこと言わないでくれ。そうだ。せめてお客になりそうな奴を探してきてくれないか？」

「むー……仕方ないですね。少し待っていてください」

一度関わった手前、見捨てるのも酷に感じたのか……藍は俺とイナリをその場に残してどこかへ行ってしまった。

……あれ、これはもしかして、体よく逃げられたんじゃないか？

その後、旅芸人の男と二人、無言の時間が過ぎる。

時々旅芸人が気まぐれに人形を動かすと、それにイナリが反応して遊びだす。

「畜生に気に入られてもな……こいつが金をくれるわけじゃないし」

「ところで、なんであんたはこの島に来たんだ？」

沈黙に耐えかね、旅芸人に質問をする。

「もともと、旅をしていたんだ」

「自分探しでもしているのか？」

「まあ……探し物をしていることには違いないが」

言いにくいものなんだろうか。まあ誰にだって秘密はあるし、無理に詮索する必要もないよな。

「この島なら観光客がたくさん来るから、儲けられると思ったんだ」

「下心丸出しだったわけな」

「まあ……そうなるな。生活のためだ」

「それで、この島に着いたところで路銀が底をついたと」

「ああ。情けない話だがな……」

島の洗礼を受けたわけか。なんだかんだで、この島はよそ者に厳しい時があるからな。

この手の身の上話は信用できないものが多いって言うけど、この旅芸人の話からは何とも言えない危機感が感じ取れた。

ここが本土なら歩いてでも次の町に行けるだろうが、島だからそういうわけにもいかない。船に乗れないことには、本当にどうしようもない。

いつそ、船賃くらい出してやろうか……そんなことを考えていると、のみきがやってきた。

「役所の者だ。港で島民以外の者が無許可で商売していると聞いてな」

まさか藍の奴、通報したのか。

「港での無許可の商売は禁止をされている。やめてもらおう」

「止めたいのは山々なんだがな……」

「のみき、なんだか訳ありらしいぞ」

「つて、鷹原じゃないか」

警戒心むき出しだったのみきだが、俺の姿を見て少しだけ態度が軟化する。

その様子を見て、旅芸人はこれまでのいきさつを簡単にのみきに説明した。

「そうか、船賃を稼ぐために、人形劇をな……」

そして、のみきにも人形劇を見てもらう。

「しかし、これではな……」

のみきは憐れむような顔をしている。

「そうだ。のみきにもこの人形劇を面白くするために、協力して欲しいんだけど」

「なに、私もか？」

「そうだ。のみきの水鉄砲を人形が避けて回るのはどうだろう」

「なるほど。激スリリングな展開で観客を引き込もうって魂胆だな」

旅芸人の方も乗り気のようにだ。

「というわけで、早速練習しよう」

「し、仕方ないな……」

やれやれ、といった感じで、のみきは少し離れた場所からハイドログラディエーター改を構える。

俺はそんなのみきと人形の中間に立ち、指示役をかって出る。

「のみき、出力は最低にしておいてくれよ！」

「当然だ」

「ところで旅芸人、その人形はさつきみたい動いて避けてくれるんだらう？」

「もちろんだ。しかし、そこまで離れる必要があるか？」

「なに？」

「たかが水鉄砲だろ？ 仮に当たっても人形が水浸しになるだけじゃないのか」

「のみきの水鉄砲は特別だから。旅芸人は避ける事だけに集中してくれ！」

「わかった」

「では、行くぞ？」

「ああ。いつでも来い」

……のみきがハイドログラディエーター改の引き金を引く。

……ふつとばされる人形。

「マジか。なんつー威力だ……」

「イナリ！ 取ってこーい！」

「ポーン！」

俺はとっさにイナリに指示を出し、人形の回収を命じる。しばらくして、水浸しになった人形をくわえてイナリが戻ってきた。

「……すまない」

「いや、のみきは気にしなくていい。もう一度行くぞ、旅芸人！」

「ああ、リトライだ」

「よし、いくぞー！」

さっきの一撃で多少はコツを掴んだのか、今度は一回、二回とのみきの水流攻撃を回避していく人形。

「おお、いい感じじゃないか」

「あ」

……またふつとばされた。

「イナリ！」

「ポンポーン！」

再びイナリに指示を出し、人形を拾ってきてもらう。

「どんだん人形が水を吸って重くなってやがる。これは無理だな」

旅芸人が人形を思いつきり絞る。ボタボタと水がしたたり落ちる。

「うーむ」

のみきと人形の水鉄砲パフォーマンスは、極めれば最高のショーに成り得るポテンシャルを秘めてはいるが、一朝一夕でできるものではないなそうさ。

俺達は途方に暮れる。

……そこに藍が天善と紬を連れて戻ってきた。

「良かった。藍は逃げたわけじゃなかったんだな」

「何の話ですか？」

「いや、なんでもない」

やってきた二人にも事情を説明し、人形劇を見てもらう。反応はやっぱり微妙で、一様に真顔だった。

「ところで、どうしてこの人形は濡れてるんですか？」

藍はその場にしゃがみ込み、濡れて動きが悪くなっている人形を指でつついている。

「気にしないでくれ。そのうち乾くと思うから」

一度絞ってだし、これだけ暑ければすぐに乾くだろう。

「そういえば、紬ちゃんにぬいぐるみを持ってきてもらったんですけど」

「マジか」

「マジです。他のものも動かせるようでしたし、人形を変えてみてはどうですか？」

「人形を変える……その手があったか。どれだ？」

「はい、これです！」

紬が旅芸人に手渡したのは、妙に腕の長いナマケモノのぬいぐるみ。以前灯台で、夏海ちゃんを選ばなかったほうだ。

「さっそく動かしてみよう」

見た目はお世辞にも可愛いとは言えないが、案外動かしてみると愛嬌のある動きをするかもしれない。

「よし、動け！」

……ナマケモノが動き出すが、力の入り方がおかしいのか、ぐにょぐにょと妙な動き方をする。

「おおー、ナマケモノさんが動き出しました！ すごいです！」

紬は感動しているが、他の皆は明らかに引いている。

「なんだ？ 相性が悪いのか？」

「これもダメか……」

「悪いがお嬢ちゃん、返すぞ」

旅芸人はナマケモノを動かすのをやめ、紬に返す。

「いえ、お近づきの印に、このナマケモノさんは差し上げます！」

「いや、いらぬ」

「差し上げます！」

「いらぬ」

「差し上げます！」

どっちも引かない。

「わかったよ。受け取ってやる」

「はい！ どうぞ！」

「と、みせかけて！ とう！」

旅芸人がぬいぐるみを受け取った直後、どむ！と鈍い音がして、ナマケモノがはるか向こうに蹴っ飛ばされた。

「むぎゅー！」

「……イタリアサッカーリーグもびっくりだぜ」

「イナリ！ 取ってこーい！」

「ポンポーン！」

俺は反射的にイナリに指示を出し、ナマケモノのぬいぐるみを拾ってこさせる。

しばらくすると、ずるずるとぬいぐるみを引きずりながら戻ってきた。引きずったせいか、さつきより腕が伸びてしまった気がする。

「どうすんだこれ」

「自業自得だな。諦めて受け取ってやってくれ」

「わかったよ……」

のみきに言われた旅芸人は観念した様子で、今度こそナマケモノのぬいぐるみを受け取った。

「……結局、打つ手なしか」

ナマケモノを背中に背負った旅芸人が絶望に打ちひしがれている。かける言葉もない。

「ん、旅芸人。お前はどんなものでも動かせると言ったな」

「え？ ああ」

その時、一歩前に踏み出したのは天善。

「これは動かせるか」

そして取り出したのは卓球のラケット。

「……ああ、動かせるぞ」

旅芸人が受け取ったラケットに力を込めると、ひとりでに動き出した。

「おお」

相性がいいのか、元々が軽いからか、サクサクと機敏な動きを見せるラケット。

「良い動きじゃないか。行くぞ」

天善がもう一本のラケットと、ピンポン玉を取り出す。

そして卓球を始めた。

天善がサーブを打つ。旅芸人の無人ラケットが打ち返す。

「ほう。これは」

天善が返す。旅芸人が打ち返す。

再び天善が返す。また旅芸人が打ち返す。

段々とラリーのテンポが上がっていく。ピンポン玉の動きが激しくなるが、旅芸人が動かすラケットもしっかりついてくる。

「夢のラリーマシーンのようだ……天善天善天善天善！」

天善のテンションがどんどん上がっていく。

「……なあ、こいつはこんなキャラなのか？」

「ああ、天善はそんなキャラだ」

「マジか……」

「そうなたらなかなか元には戻らん。旅芸人、もう少し付き合っ
てやってくれ」

「わ、わかった」

よくまあコンクリートの上で卓球ができるもんだと、旅芸人と天善が卓球をする様子を眺めていた。

「そういえばタカハラさん、お腹の具合は良くなりましたか？」

「細も心配かけちゃったね」

「はい、いっばいっばい心配しました」

「ごめん」

細にも誠心誠意謝っておいた。

「カイキ祝いに、今度またシズクのザラメを使ってワタアメパー
ティーやりましょう！」

「え」

それはそれで胃に悪そうな。

「甘いワタアメばかりだといけないので、ブラックなコーヒーも用意します！」

「う、うん。楽しみにしているね」

「胃に悪そうなもののダブルパンチだ。実現しないことを祈ろう。」

「……奥義！ 舞卦処撥斗！ ちよれええええい！」

「ぐは……」

直後に物凄い音がした。どうやら旅芸人の方が動かしていたラケットが、天善の必殺技に耐えきれず破壊されたようだ。

……舞卦処撥斗って、そんな強力な技だったっけ？

「……はっ」

そして、天善が正気を取り戻した。

「ありがとう。いいトレーニングになった」

「そ、そうか……お代は気持ちでいいぞ」

旅芸人も肩で息をしている。法術とやらでラケットを動かすのも疲れるんだろう。

「ああ。せめてもの気持ちだ。受け取ってくれ」

俺の見間違えじゃなければ、漱石さんを渡していた。

「マジか」

「ああ、ほんの気持ちだ」

「なんにしても助かった。これで島を出られる」

「商売成立みたいになってるけど……のみき、良いのか？」

「この際、目を瞑ろう。この場所から離れてくれるなら、役所の人間としては何も言うことはないしな」

「タビゲーニンさん、これで帰れますね！」

ちなみに紬、タビゲーニンってのは名前じゃないからな。

「元気でな、旅芸人。また来ることがあったら是非トレーニングに付き合ってくれ」

「……次に来る機会があれば、きちんと役所の許可を取るんだぞ」

「むしろ、もう来ない事をおススメします」

「その……頑張れよ。色々」

「ああ。世話になったな」

皆に見送られ、旅芸人はお昼の船で帰っていった。随分と変わった奴だった。

「私達も帰りましょう。もうお昼ですし」

「そうだな」

俺たちも解散となり、俺はバイクで港を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー」

ヨーヨーと買い出しの荷物を持って帰宅すると、夏海ちゃんが居間で寝ていた。

「あれ？ 昼寝なんて珍しいな……」

お腹出しちゃってるし。あーあ。

タオルケット持ってきてかけてあげると、その拍子に目を覚ましてしまった。

「……あ、ごめんなさい。寝ちゃってました」

「いいよ。俺も今帰ってきたところだから」

「え、今ですか？ ずいぶん遅かったんですね」

「うん。まあ……色々とあってね」

「色々ですか？」

「そう。色々……人形とか、ヨーヨーとか」

「ヨーヨーって、手に持つてるそれですか」

「うん、イナリが売ってたんだ」

「え、イナリさんが？」

「ほとんど無人販売みたいなものだったけどね……」

「いくらで買ったんですか？」

「え、それ聞く？」

「……気になったもので」

「……600円」

「600円!?!」

夏海ちゃんも思わず大きな声が出る。

「鷹原さん、600円って言ったらあれですよ。かき氷6杯分ですよ？ しろはさん食堂なら、海鮮親子丼が食べられますよ?」

「うん……わかってるよ……」

「あれだよ。自分で自分を止められなくなっちゃったんだ。お祭テンションってやつ」

「あ、それわかります。蛍光塗料で光る腕輪みたいなので、買っちゃうんですよね」

「うんうん。そういう感じ。次の日には飽きて、部屋の隅に転がってるんだよね」

「ですです」

……そんな話をしていると、お腹が鳴った。

「夏海ちゃん、お昼ご飯は?」

「あ、まだです」

よし、気を取り直してお昼にしよう。

お昼は買ってきたカップうどんの中から、ちからうどんをチョイスする。

「ちよつと待ってください鷹原さん。まさか、しろはさんとの約束を忘れたわけじゃないですよ? 脂っこい食事は……」

「モチなら消化も良いし、胃腸に優しいんじゃないかと思って」

「……カップうどんの時点で色々と問題ありそうですね」

「他に食料もないしさ」

すでにお湯も入れてしまっている。後2分ほどで完成だ。

「うー……わかりました」

というわけで、ちからうどんを堪能した。大きなモチがおつゆと纏って、とつても美味しかった。

昼食を終えると、暇になる。

「ねえ、夏海ちゃん」

「行きましようー!」

「……まだ何も言っていないけど」

「え。駄菓子屋じゃないんですか？」

「そうだけど……先に言われて、なんか悔しい。」

「かき氷でも食べに行こうよ」

「いいですけど、鷹原さんはかき氷食べちゃダメですよ？　しろはさんの約束があるんですから！」

「冷たい物もダメなのか……それでも、駄菓子屋まで行けば何かあるだろうと思い、足を運ぶことにした。」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださーいなー」

「あ、いらっしやーい」

夏海ちゃんと一緒に駄菓子屋に到着すると、蒼が出迎えてくれた。

「あれ？　朝と髪型違わないか？」

ラジオ体操の時は普通だったのに、今見るとサイドポニーになっている。藍とはちょうど結ぶ位置が反対だ。

「藍にさせられたの。藍ってば、しょっちゅうあたしの髪弄ってくるの」

後ろの方を指さす。奥の座敷は入口が開け放たれていて、そこに藍が座っていた。

「だって、蒼ちゃんの髪はいい匂いがしますから」

「理由になってないーい！」

怒っているようで、どこか嬉しそうだ。やっぱり仲がいいよな。

「ところで蒼さん、かき氷一つ欲しいんですけど」

「いいわよ。何味？」

「それじゃ、氷メロンください」

「了解。ところで、羽依里はいいの？」

「ああ、ちよっと訳ありでさ。棒ゼリー3本もらっていいか？」

「ふーん……深くは聞かないようにするわね。全部で160万円よ」
代金を支払い、俺は棒ゼリーを探しに店の中へ。

「そういえば藍、結局午前中の出店ってどうだったの?」

蒼が氷をかき氷器にセットしながら、背中越しに藍と会話する。

「ヨーヨー釣りですか?」

「そうそう。さすがにヨーヨーは売れなかったでしょ?」

「一つだけ売れましたよ。売り上げは600円です」

「へー、一回200円だから、何回も挑戦したってことね」

「そのようですね」

「きつと熱くなつたのねー。わかるわー」

「わかってくれるか……」

「へ? 羽依里、なんか言った?」

「あ……いや、なんでもない」

俺は棚から棒ゼリーを3本を手取る。これならお腹に優しいだろう。

「イナリさん、昨日の夜はありがとうございました」

「ポン!」

店の外に出るとイナリが居て、夏海ちゃんが昨日のお礼を言っていた。

「イナリも無事に役目を果たしたみたいねー」

「はい! 頼もしかったです!」

「ポン!」

「蒼ちゃん、ついでに私にもかき氷もらえますか」

「いいわよ。何味?」

「抹茶みるくでお願いします」

「少し待っててねー」

「え、抹茶みるく? そんなメニューあるの?」

「まだ試作品なの。普通のかき氷と色々違うから」

「そうなんだな……」

抹茶みるく、気になる……今度頼んでみようと考えつつ、棒ゼリーを手にベンチに向かう。

「あれ？ なんだこれ？」

すると、ベンチには空の瓶と無数の木片、更に接着剤が置いてあった。

「どうしたんですか？」

俺の声に反応して、夏海ちゃんもやってきた。

「プラモデル……じゃないよな。木だし」

「蒼さん、これなんですか？」

「え？ ああ、それ？」

ちょうど蒼が氷メロンを持ってやってきた。

「問屋さんがサンプルに置いて行ったんだけど、プラモデルの一種みたいなの」

「あ、やっぱりプラモなのか」

「是非お店に飾って欲しいんだって」

「バラバラだけど？」

「そりゃ、未完成だしねー」

「蒼さんが作ってるんですか？」

「あー、えーっと、おばーちゃんに作るよう頼まれて……一応説明書もあるんだけど、その、難しくて……」

「蒼、もしかしてこういうの苦手？」

「……うん」

プラモデルとなると、女の子には難しいかもしれない。

「羽依里、男の子なんだし、こういうの得意じゃない？」

「えっ、俺？」

「得意よねー？」

すごい笑顔なんだけど。

「……おう、任せてくれ」

正直なところ自信はないけど、やれるだけやってみよう。あの笑顔で言われたら断れない。

……10分後。

「……これ、不良品だろ」

俺はゼリー食べるのもそこそこに、目の前の木片に取り掛かったが、結果は散々だった。

「……」

夏海ちゃんもベンチの反対側に座ってかき氷を食べながら、心配そうな顔をしていた。

「うーん、ここがこうだから、この部分がこうなって……?」

説明書片手に試行錯誤していくうちに、これが船の模型であることはわかった。

一応それらしい部品同士を接着剤でくっつけてみたけど、形がいびつだ。隙間だらけだし、すぐ沈みそうだ。

「……まるで沈没船か、幽霊船みたいですね」

船底の板の長さが違うからか、船全体が傾いてるし、マストもまっすぐ立ってない。夏海ちゃんの表現も言い得て妙だ。

「説明書見ても、組み立て方がよくわからないし……これ本当に作れるのか?」

「そーよねー……この空き瓶も意味が解らないし」

俺達の制作活動を見守っていた蒼も半分諦め顔で、空き瓶を太陽の光にかざして遠い目をしている。

ちなみに藍は我関せずと言った様子で、座敷の入り口で抹茶みるくを堪能していた。

「くーださーいなー」

作業が暗礁に乗り上げていたその時、スーツケースを引きながら鷗がやってきた。

「あ、いらっしやーい」

お客が来たので、蒼が仕事に戻る。

「かき氷ください」

「何味?」

「イチゴ。練乳もお願いします」

「あれ、今日はメロンじゃないのか?」

「たまにはメロン以外も食べるよ」

「はい。10円増しで110万円よ」

「はい、110円」

「109万9890円足りないわよ」

「足りない分は羽依里につけといて」

「わかったわ。すぐ作ってくるからちよっと待ってて」

至って自然な流れで、多額の借金を背負わされてしまった。

「羽依里もかき氷食べる？ おごっちゃうよ？」

「いや、俺はいいよ」

「あ、もしかしてまだお腹の調子悪い？」

……そういえば、鷗にはまだ謝って無かったっけ。

午前中に港で会ったけど、あの時は母親もいたし、タイミングを逃してた感じだ。

「いや、腹の調子はもう大丈夫……心配かけてごめんな」

「ううん。治ったんなら良いんだよ」

笑顔で許してくれた。

「鷗こそ、母親との用事は終わったのか？」

「うん。午前中で終わって、おカーさんは本土に帰ったよ」

「そうなのか」

「うん。忙しいからしょうがないよね……なつちゃん、隣いいかな？」

「はいー」

「……あれ？」

鷗が俺と夏海ちゃんの間座ろうとして……船の残骸に気が付く。

「悪い、すぐに片付けるよ……」

「これ、ボトルシップ？」

「ボト……何？」

「ボトルシップ。瓶の中に帆船模型が入ってるやつ。外国映画とかで見たことない？ パイレーツオブパリングルスとか有名だよ」

「あー、言われてみれば。これがそうなのか？」

鷗の言う映画は観たことないけど、ボトルシップはイメージできた。

「うん。初心者向けのキットみたいだけど……羽依里が買ったの？」
「いや、実は……」

俺はこれまでの経緯を鷗に説明する。

「そうなんだ。いきなり初心者にボトルシップ作りは厳しいかも」

「え、でも初心者向けのキットなんだろう？」

「そもそも帆船模型がプラモデルの中では上級者向けだから」

あー、そういうことか。

「ねえねえ、なんなら私が作ってもいい？」

「できるのか？」

「得意だよ」

「なら、是非頼む」

「それじゃ、さっそく……」

鷗はスーツケースから色々な道具が入った箱を取り出す。

「本格的だな……」

「これくらいは基本だよ……あ、かき氷の残りあげる」

「お、おう……」

半分ほど残ってるかき氷を手渡される。食べていいと言われても……。

「むー、羽依里。これ適当につけたでしょ」

「え、俺なりに考えて組み立てただけ。説明書読んでもよくわからないし」

「これ、つける場所が違うよ。こっちは逆さまだし、こっちは無理矢理張り付けてる」

「え、まじで？」

「うん。まじだよ。ほらここ。あとここも」

鷗が模型を手に寄って来て、説明してくれる。えーと、顔近いんだけど。

「それでね。しかるべき処置を施そうと思うんだけど」

「……えーとその、つまり？」

「一度、分解しちゃおうかと」

「どうぞ、やっちゃってください」

鴎はスーツケースから接着剤の中和剤を取り出すと、慣れた手つきで俺が作った出来そこないの船を解体していく。

一通り解体し終わった後は、再度部品を組んでいく。船体から組んでいた俺と違って、小さい部品をいっぱい作っていた。

「これは加工済みのキットだから、それなりに組み合わせるだけできれいに仕上がるよ」

「加工済みじゃないのとかあるのか？」

「ほとんど木の板で、自分で部品の形に加工するってのもある」

「そんなの、俺には手も足も出ないだろうな……」

いつの間にか説明書はベンチにたたんで置かれていた。もはや鴎は説明書を全く見ずに作っている。

俺はその説明書を手にとって、いくつか気になったところを鴎に質問してみた。

「この部分さ、説明書には部品を角に引っ掛けるって書いてるけど、現物には引っ掛けられそうな角がないんだ。どうやってつけるんだ？」

「引っ掛ける角は、自分で削って作るの」

「え、そうなのか？」

「うん」

「じゃあ、この帆を張る糸を固定する穴ってのは？」

「それもキリで自分で開けるの。そういうことは初歩だよ？」

「はい……ごめんなさい」

そんなこと説明書に書いてないんだもん。しょうがないじゃないか。

「そうだ、良かったら皆も手伝って？」

鴎は部品をあらかじめ組み終わり、今度はそれを紙ヤスリで擦っている。

「木材の角の部分が丸くなるくらいまで擦って欲しいんだけど」

「わかりました！」

俺や夏海ちゃん、蒼も加わって部品の形を整える。

その間に鴫は鼻歌交じりで帆にマークを描いていく。説明書にあるような十字のマークでも描くのかと思ったら、ひげ猫だった。

「うん。これで部品は全部完成」

「後は組み合わせるだけか」

「うん。組み合わせるって言っても、瓶の中でね」

「あ、そっか」

ボトルシップだったのを忘れていた。

「ここからは細かい作業だから、見ててね」

スツケースから長いピンセットを取り出し、部品を次々と瓶の中に入れながら、その中で接着させていく。

「すげえ……こうやって作るのか」

「フォアマストはこの位置でー、ジブの糸をマストに固定してー、マストを甲板にー」

すごい楽しそうに作ってる。時々専門用語みたいなのも聞こえるし。

最後に一番大きな帆を一旦たたんで瓶の中に入れ、瓶の中で器用に広げてから固定していく。全てピンセット一本だった。

俺達は瓶の中で帆船が組み立てられていく様子を、食い入るように見つめていた……。

「完成ー」

日が傾く頃に、ボトルシップは完成した。

鴫が完成を宣言すると、つい皆で拍手をしていた。

「鴫さん、手先が器用なんですね！」

「意外な才能よねー」

「……お見事でした」

「ポンー！」

いつの間にか藍やイナリも加わって祝福する。

「このまま明日まで乾かしたら、大丈夫だと思うよー」

完成したボトルシップは、慎重に店の棚の上に置かれた。

「鷗、ありがとね。このお礼は必ずするから」

「え、私も楽しかったし、気にしなくていいのに」

「鷗が気にしなくても、あたしがするのよ」

「じゃあ、お礼は三角形の秘密でお願いします」

「了解。入荷したら一番に持って行くわね」

「よろしくお願いします」

道具をスーツケースにしまい、ニコニコ顔で立ち上がる。

「それじゃあ、帰るね」

「鷗、またねー」

「またです」

鷗は手を振って、スーツケースを引いて数歩進んだところで……立ち止まる。

「鷗、どうした？」

「……疲れた」

……この流れは。

「というわけで羽依里、押して行って」

「どこまで？」

「役所までお願い。一度帰らなきゃ」

確か、のみきと同じアパートに住んでるんだったか。そこまで遠くないし、いいか。

「よし、出発進行だ」

「ありがとう」

「私、先に帰ってますねー」

夏海ちゃんに手を振って、俺は鷗の乗ったスーツケースを押し始める。

「ねえ羽依里、はたから見てると妙な主従関係に見えるんだけど」

「え、気のせいだろ？」

背後の蒼から意味深な発言がされたが、ここはあえて流しておく。

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

鴉を役所の方まで送った後、俺も加藤家に帰宅した。

「あれ？」

「あ、鷹原さん。おかえりなさい」

中に入ろうとして庭を見ると、夏海ちゃんが洗濯物を取り込んでいた。

「どうしたの？」

「帰ってから時間あったのでお風呂掃除をしてたんですが、そしたら洗濯物を取り込むのが遅くなっちゃって」

「ああ、それなら手伝うよ。水回りの掃除は本来俺の役目だったはずだし」

「ありがとうございます」

夏海ちゃんと一緒に洗濯物を取り込み、居間で手早くたたんでしま

う。
俺が夏海ちゃんや鏡子さんの衣服をたたむのは気が引けたので、そっちは夏海ちゃんにお願いして、俺は自分の分やタオル類をたたんでおいた。

洗濯物たたみも一区切りした所で、夕飯を食べに食堂へ向かう。

「あ、いらっしやい」

店に入ると、いつものようにしろはが迎えてくれる。そしてカウンター席を見ると、先客が居た。

「天善さん、こんばんわです！」

カウンターで食事をしていたのは天善だった。俺達二人もその隣に並んで座る。

すると必然的に天善が食べている料理が目に残る。なんだろう。

「天善、何を食べてるんだ？」

「これか？ あんぱん定食だそうだ。今日の日替わりだぞ」

見ると、メインの料理が乗るのであろう皿には一口サイズのあんぱんが4つほど乗っている。

「おじーちゃんが寄合でたくさんのおあんぱんを貰ってきたの」「ええー……」

貰ってきたはいいいけど、あんぱんにご飯って合うんだろうか。

「それにしても、天善が食堂にいるのは珍しいな」

人が食べてるものにとやかく言うのは気が引けたので、少し話題を変えてみる。

「ああ。徹卓する時は、たいていここで夕飯を済ますんだ」

「テツタク……って、なんですか？」

夏海ちゃんが思った疑問を口にする。

「秘密基地で徹夜で卓球するんだって」

しろはおしぼりを持ってきてくれながら、呆れたように話す。

「そういえば、秘密基地に卓球台ありましたよね」

「ああ。2日に一度はあそこに泊まっているから、興味があつたら見に来るといい」

「は、はあ……」

夏海ちゃんがちよつと引いてる。

天体観測の時に秘密基地には行ったけど、あの時は紬のワタアメパーティーのおかげでそれどころじゃなかったもんな。

「ところで二人は何食べる？ 羽依里は卵がゆでも作ってあげようか？」

なんだかんだで心配してくれるのは嬉しいけど、そろそろ力がつくものが食べたい。

「えーつと」

実は、お昼に夏海ちゃんと話をした時から、海鮮親子丼が食べたいと思っていた。

「じゃあ、俺は親子丼Bを……」

「羽依里。約束」

「食べたいんだけど……生魚だし、やめとこう、かな……」

カウンター越しに睨まれてしまった。こわい。

今日一日は油ものや生もの、冷たいものを食べない約束、まだ生きているみたいだ。

もうそこまで胃の調子が悪いわけじゃないんだけどな……薬だつて朝から飲んでないし。

「鷹原もあんパン定食にしたらどうだ？」

「うん。それにしよう」

あの、しろはさん、勝手に俺の声真似して注文決めないでくれませんか。

「すぐできるから待っててね」

そりやすぐできるだろうけど……天善のを見てる限り、ご飯とみそ汁に小鉢つけて、あんぱん盛り付けるだけだし。

「夏海ちゃんはエビフライ定食とかどう？ 美味しいよ」

「じゃあ、それをお願いしますー！」

って、俺の注文はあんぱん定食で確定？ 確定なの!?

「はい。おまちどうさま」

あつという間に、俺の前にあんぱん定食が用意された。

ごはんは味噌汁、ひじきの煮物。そしてあんパン。

確かに、胃に悪い要素は一切見受けられない……けど。

「あんぱんっ……」

「はい。夏海ちゃんのエビフライ定食もおまちどうさま」

「ありがとうございます」

夏海ちゃんの前にはおいしそうな揚げたてのエビフライ定食が置かれた。

俺の目の前には、何度見直しても、あんぱん。

つい、エビフライを横目で見てしまうと、夏海ちゃんが目で謝ってきた。

「どうぞめしあがれ」

「いただきます」

きちんと手を合わせてから、夏海ちゃんがエビフライにかぶりつく。サクサクと良い音がして、とつても美味しそうだった。

「い、いただきます」

俺も意を決してあんぱんにかぶりつく。普通のあんぱんだった。みそ汁を一口飲んだ後、恐る恐るあんぱんと一緒にご飯を食べてみた。微妙と言えば微妙だけど、若干おはぎみたいに感じる時もある、それなりに食べられた。

食堂から帰宅すると、鏡子さんが帰ってきていた。

「あ、二人とも、おかえりなさい」

「ただ今帰りました」

「お風呂沸かしちゃったから、先に入っていいよ」

「俺は後でいいよ。夏海ちゃん、お先にどうぞ」

「え。でも家主さんより先に入るのも悪いですよ」

「あら、夏海ちゃんたら。家主とか気にしなくていいのに」

鏡子さん、なんか赤くなってる。やっぱりそういう風に言われると、嬉しいものなんだろうか。

「そうだ。それなら夏海ちゃん、一緒に入ろっか？」

「え？」

「それなら一挙両得だと思うし。そうしよう？ 家主からのお願いだよ」

「え？ え？ え？」

有無を言わず、夏海ちゃんが鏡子さんに引っ張っていかれた。

居間に一人残される俺。

あれ、何この状況。

「……鏡子さん！ 脱がさないでくださいー！」

「ほらほら遠慮しないで。良いから良いから」

「ひゃー……！」

「……」

特に聞く気はないんだけど、お風呂場の方から二人の声が聞こえてくるし。

俺は気分を紛らわすためテレビをつけて、音量を上げる。

公共放送で、少し時代遅れの芸人が漫才をしていた。

『なんでやねん!』

「なんでやねん!」

真似してみたが、そこまで面白くなかった。

視線をそらすと、そこに何枚ものバスタオルが積まれていた。

「あ」

夕方、俺がたたんだやつだ。そういえば、しまい忘れていた。

しかも、脱衣所にはバスタオルがなかったような気がする。

「えー、どうしよう」

こういう時に限って二人一緒にお風呂に入っちゃってるし。

さすがにこの状況で俺が脱衣所に入るのは色々と危険だけど……

行動を起こすなら早い方が良いよな……。

しようがない。ひと声かけて入れれば大丈夫だろう。

俺は意を決し、バスタオルの束を持って脱衣所の方へ向かう。

「二人ともー、バスタオルがなかったから、置いておくよー?」

脱衣所の扉の前で、中の二人に声をかける。

「……なら……けど……」

「でも、時々は……しないと……」

……なんか中で話してるみたいで、こっちの声は聞こえないみたいだ。

それなら、今のうちにこっそりと置いて退散しよう。

少しだけ脱衣所の扉を開けて、そこからバスタオルを差し入れて……。

「それじゃ、一足先に出るね。夏海ちゃんはゆっくり入っていいからだめ……」

バスタオルを置いて、寸での所で脱出。視界の隅で扉が開きかけて

た。ギリギリセーフだった。

「な、何も見てない、何も見てない」

もし鉢合わせしていたら、間違いなく実家に電話されていただろうな……。

「ふう……」

居間に戻るとお笑い番組は終わっていて、代わりにお寺の特集が始まるどころだった。

なんとかいう位の高いお坊さんが出ていて、生きる道を説いている。

「おお、ちょうどいいや……」

俺は全てを忘れる様に、その番組に見入った……。

「良いお湯でしたー。鷹原さん、お風呂どうぞー」

「あ、うん。ありがとう。夏海ちゃん」

「……って、どうして座禅組んでるんですか？」

「うん。ちょっと煩惱をね」

「はあ……」

あんな番組を見たせいか、なんだか生まれ変わったように感じた。今日はぐっすり眠れそうだ。

第九話・完

第十話 8月3日

「鷹原さーん！ 朝ですよー！」

夏海ちゃんに起こされて、今日も一日が始まる。

「おはようございます」

「おはよう、夏海ちゃん」

身支度を済ませて居間に行く。今日も鏡子さんの姿はない。

「鏡子さん、今朝もいないんだね」

「ものすごく早い時間に起きて、出かけていったみたいです。朝の5時くらいだったかもしれません」

「まるで漁師さんみたいな生活だね……」

それから日課のラジオ体操に向かう。今日も暑くなりそうだった。

蝉の声に背中を押されるように歩き、神社に着くと、いつものメンバーに加えて鴬がいた。

「おはよう、羽依里！」

「おはよう、鴬」

「鴬さん、おはようございます！」

なんだろう。今日の鴬はやる気に満ち溢れている。

「今日は満を持しての参加だよ！」

そういう鴬の手にはラジオ体操のスタンプカード。

「あれ？ 初日以外はもらえないんじゃないかなかったつけ」

「昨日、役所から許可が下りた。特例だそうだ」

のみきが説明してくれた。え、スタンプカードって役所の許可制なのか？

「もしかして、昨日役所に行ったのって」

「あ、これのためだけじゃないよ？ きちんと別の用事もあったんだ

から！」

鴉がそう言うなら、信じることにしよう。

「お前ら——！ 準備はいいか——！ 今日もラジオ体操を始めるぞ——！」

その時、ラジオ体操好きさんがやってきて、今日のラジオ体操が始まる。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「ピクピク、ピクピク」

俺や夏海ちゃんも、だいぶ耳が動くようになった。

「羽依里、みてみて！」

鴉の耳がピクピクと動いている。

「練習したの！」

「そ、そうか……頑張ったんだな」

「うん！」

「第四の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐる——！」

「ぐるぐるぐる——！」

うう、気持ち悪い……。

この体操だけは未だに慣れない。慣れるものなのかわからないけど。

「さあ、スタンプはこつちだぞー」

ラジオ体操終了後、今日のスタンプとログボを受け取る。

「おお、これがログボ」

晴れてスタンプカードをゲットしていた鴉も、初のログボをゲットしていた。

今日のログボは二種類。小玉スイカと緑茶だった。

鴉は帰ってから食べると言いながら、嬉しそうに帰っていった。

そして俺達もログボを持って帰路につく。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

帰宅後、夏海ちゃんは朝食の準備に取り掛かってくれ、俺はその間にゴミ出しを済ませておいた。

「むーぎーぎー」

「どうしたの、細みたいな声出して」

ゴミ出しから戻ると、夏海ちゃんが台所で唸っていた。

「ログボで毎日朝ごはん！ をモットーにここまでやってきたのですが……」

え、そんなモットーあったんだ。

「これ、どうしましょう……」

そう言いながら、今日のログボを手にしている。

「スイカだね」

「さすがにこれはチャーハンにはできません……」

「そりやそうだろうけど……」

「ミキサーにかけてから、片栗粉で固めてみましょーか……あんかけチャーハンみたいになるかもしれない。いやむしろ、種を炒って具材として使いましょーうか……むぎぎぎぎ」

どうしよう。夏海ちゃんが悩みすぎて紬と化している。

「こつちのお茶を使ってみましょーうか。緑茶ーハンって語呂良いですし、健康に良さそうじゃないですか？」

「りよくちやーはん……」

語呂は良いけど、味は良くなさそうだ。

「極論を言ってしまうえば、お茶漬けと同じだと思いませんか？」

「いや、違うと思うけど……」

現実問題、スイカでも緑茶でもチャーハンは作れない。

「ねえ夏海ちゃん、たまには洋食が食べたいんだけど」

緑茶を戸棚へ、スイカを冷蔵庫へとしまいながら、夏海ちゃんに提

案する。

「洋食ですかー……」

夏海ちゃんがため息交じりに、俺と並んで冷蔵庫を覗き込む。

「あ、これなんか使えそうじゃない?」

立派なベーコンがあつた。真空パックに入ってるし、お中元の品かな。

そして、ドアポケットにも卵がいくつか入っていた。

「この卵、まだ大丈夫だよね?」

「はい、チャーハンに卵は必須食材ですから! 補充してもらってます!」

「これ使えば作れるんじゃないかな」

「チャーハンですか?」

「いや、だから洋食の……そうだ。ベーコンエッグとかどうかな」

「ベーコンエッグとか、そんなオシャレなものが食べたいんですか?」

「うん、食べたい」

「……わかりました。作ってみますよ」

夏海ちゃんがエプロンをつけて、卵とベーコンを持ってシンク台へ向かう。

特に手伝えることもなさそうだったので、居間に戻って完成を待つ。

しばらくすると、ベーコンを焼く良い匂いが漂ってきた。

「つて、わわわー!?!」

……突然、夏海ちゃんの叫び声が聞こえた。

同時に、どこかで聞いたことあるような騒音が混ざった気がする。

「夏海ちゃん、どうしたの?」

俺は台所へ向かう。

「あ、鷹原さん! 換気扇からセミが入ってきたんです!」

「え、セミ?」

見ると、一匹のセミが夏海ちゃんの頭上をみんみん鳴きながら飛び回っていた。

「鷹原さん、なんとかしてください!」

え、なんとかしてって言われても。

「手でバシツと、捕まえちゃってください！」

ごめん、そんなの無理。

「そうだ、ちよつと待ってて」

俺はいつたん外に出て、先日の昆虫採集大会の時に使った虫取り網を取りに向かう。

丁度台所の裏手を通った時、家の中から夏海ちゃんの声が聞こえた。

「あああ、鷹原さんのベーコンエッグが！」

え、俺のベーコンエッグがどうしたの？ 続きを言っ、夏海ちゃん。

「あー……うん。見なかったことにしよう」

「えええ」

俺は一抹の不安を感じながら、虫取り網を持って急いで台所へ戻る。

「早く、早くお願いします！」

あれ、夏海ちゃん……今、身体でガスコンロの方を隠した？

……いや、今はそれよりセミをなんとかしないと。

「えいー！」

素早く虫取り網を一振り。一発でセミを捕まえた。

「ありがとうございます。助かりました」

それを外に持って行き、網の口を開いてセミを大空へ解き放つ。セミはどこぞへと飛び去っていった……。

「もう入ってこないでくれよ……」

虫取り網を元の場所に片づけて、居間に戻って一息つく。

「……良く火を通せば大丈夫ですよね」

「え？ 夏海ちゃん、何か言った？」

「い、いえいえ！ なんでもないです！」

台所から声が聞こえた気がしたけど、よく聞き取れなかった。

「お待たせしましたー」

それから少しして、夏海ちゃんが完成した朝食を持って来てくれる。

「おお、美味しそうだね」

「はんとみそ汁。そして出来立てのベーコンエッグ。」

「あれ？ 俺のベーコンエッグ、多くない？」

「サービスです！」

夏海ちゃんは笑顔を崩さない。

「それでは食べましょう！ いただきますーす」

「いただきます」

一緒に手を合わせて、食べ始める。

「鷹原さん、美味しいですか？」

「え？ 美味しいけど」

「……セミっぽくないですか？」

え、なにそれ。

「大丈夫だけど……」

目玉焼きとベーコンを切り離して、ひっくり返したりしてみる。特に変わったところはない。

「それなら良いんです。美味しいですよね」

夏海ちゃんの言動は気になったけど、ベーコンエッグは美味しくいただいた。

食後はいつものように宿題。

「えーっと……」

向かい合って宿題をしていると、また夏海ちゃんが悩んでいた。

「どうしたの？ またわからないところがあるとか？」

「はい。また歴史なんですけど」

「どれ？」

「ほら、昔の人ですごい武将いたじゃないですか。反乱を起こして負けた後も、恨みを晴らすために首だけで飛んでいったとか……あの、蒼さんみたいな名前の」

「え、蒼みたいなの？」

「なんて言いましたっけ……そらかど……そらかど……」

「平将門？」

「あ、それです！」

ありがとうございます。とノートに書き記している。

たいらのまさかど……そらかどあお……。

蒼なら『全然似てないじゃない』とか言いそうだけど。

宿題を済ませると、例によって俺と夏海ちゃんは暇になった。

適当にテレビをつけるけど、旅番組くらいしかやってなかった。特に面白くもなかったなので、すぐにテレビを消す。

「ふう……」

時間は10時にもなっていないのに、今日も暑い。

扇風機を回しても体感気温がほとんど変わらないので、窓を開けてみた。

……熱風が入ってくるだけだった。

これなら外に出た方がいいかもしれない。

「夏海ちゃん、かき氷食べに行かない？」

「行きましょう！」

待つてました、という感じの反応を返してくれた。

というわけで、俺たちは歩いて駄菓子屋へ向かった。

「見てください鷹原さん！ 鷗さんが作ったボトルシップが飾られますよ！」

「あ、本当だね」

駄菓子屋に着くと、一番目に付くところに昨日鷗が作ったボトルシップが飾られていた。

ちようど太陽の光を受けて、瓶がキラキラと輝いている。その中の帆船模型も幻想的で、正直かっこいい。

「……いらっしやう」

ボトルシップに見惚れていると、店の奥からおばーさんが出てきた。

「すみませんおばーさん、かき氷ください」

「悪いね、今はかき氷はできんのお」

「え、どうしてですか?」

夏海ちゃんがショックを受けている。どうしたんだろう。まさか、かき氷器が壊れたのだろうか。だとしたら悪夢だ。

「今日は港に持って行って行ってるね。蒼ちゃんが出店をするらしくての」

「ああ、そういうことか」

それなら、港に行けばかき氷が食べられるわけだ。安心した。

「なら、港に行ってみます」

もう少しの辛抱だね、と夏海ちゃんと話しながら、俺達は港へ向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に着くと、いつも屋台が立っている場所にかき氷の屋台が出ている。中を覗くと蒼とイナリがいた。

「あ、いらっしやーい」

「ポーン!」

「蒼、売れてるのか?」

「今日は暑いし、結構売れてるわよー」

嬉しそうに話す蒼も、かなりの汗をかいている。

「蒼もしっかり水分補給しろよ、日射病になるぞ?」

「大丈夫よー。ちゃんと水筒持ってきてるし」

青色の水筒を持っていた。それなら大丈夫だろうか。

「私達もかき氷ください」

「いいわよー。何味?」

メニュー表を渡される。いつもの味の他に、見慣れない味も並んで

る。出店限定なんだろうか。

「見たことないメニューが並んでいますね」

昨日藍が食べてた抹茶みるくもメニューとして載ってる。250円とか、なかなかブルジョワな値段だ。

「蒼さん、一番人気はなんですか？」

「今のところ一番売れてるのはブルーハワイね。観光客の人が結構買って行ってくれるのよー」

「え、そうなのか？」

普段散々食べ慣れてる味だから、意外だった。

「おすすめの味を聞かれて、あたしがブルーハワイって答えてるものもあるけど、観光客の男の子達が何回も来て、その度にブルーハワイ買ってくれるのよー」

笑顔で話してくれる。

「折角だし、他の味も食べてくれたらいいのにねー」

蒼、それはたぶんかき氷じゃなくて、お前目当てで来てる客だぞ……とは、とてもじゃないが言える雰囲気じゃなかった。

蒼には純粋なままでいてほしい。

そんなことを考えながら、俺達は渡されたメニュー表とにらめっこしていた。

「藍は抹茶みるくが美味しいって言ってたけど、250円になるのよ
ね」

「他のが100円なのを考えると、やっぱり高いよな……」

「……あれ、そういえば藍は？」

「おかしさんと本土の方に用事だつて。お昼前には帰ってくると思うけど」

「そうなのか」

「あ。もしかして羽依里、藍に会えなくて寂しい？」

「いや、そんなことはないけど。なんで？」

「昨日、藍と一緒に人形劇観たんでしょ？ 楽しそうに話してたわよ
え、あれ楽しかったのか？ まあ、それならそれで良いけど。」

「あの一、このレインボー味200円と、ネオレインボー味210円の

「違いって何ですか？」

「全部のシロップがかかかっているのは一緒に、後は練乳がかかかっているか、かかかってないかかって違いだけよ。シロップは全部同じ味だしね」先日の缶ケリの時のしろはの言葉をヒントに生み出されたのだろうか。全部乗せみたいなかき氷だ。

俺は悩んだ挙句、結局ブルーハワイを選択した。

「私はレインボー味ください」

おお、夏海ちゃんが冒険した。

「はい、合わせて300円よ」

「あれ？ 今回はお約束じゃないのか？」

「……観光客相手に言ったら、戸惑われちゃって」

あー、それならしょうがないかもしれない。

俺と夏海ちゃんは蒼に300円を渡す。

「向こうに座って、少し待っててねー」

俺と夏海ちゃんは備え付けられたテーブルセットに座ってかき氷を待つ。

「おまたせー」

しばらくすると、蒼がブルーハワイとレインボーかき氷を持ってきてくれた。

「うん。うまい」

さすが安定のブルーハワイ。美味しい。

「美味しいです！」

夏海ちゃんも一口ごとに味が変わるかき氷を楽しんでいるみたいだ。

「おお、本当にかき氷屋さんがある！」

二人でかき氷を堪能していると、静久が鴟と紬を引き連れてやってきた。

「シズクの言った通りですね！」

「ほら、見間違いないよなかつたでしょ？」

静久が大きな胸を張る。どうやら港についた時に、この店を見つけ

ていたみたいだ。

「あ、いらつしやーい。珍しい組み合わせね」

蒼が対応し、三人もかき氷を選び始める。

「おお、見慣れないメニューがあるー！ どれにしようかなー。悩むなー」

鴎は鼻歌交じりにメニュー表とにらめっこしている。

「蒼ちゃん、今日は氷すいとみぞれはできるのかしら？」

「どっちもできますよー」

「え、なにそれ」

「うちの隠しメニューね」

俺はブルーハワイを持ったままメニュー表を覗き込む。もちろんそんなメニューは載ってない。

「氷すいは砂糖水のシロップね。うちのは和三盆の砂糖を使ってるから、高級なのよ」

「そんなのがあるのか……夏海ちゃん、知ってた？」

「いえ、初めて聞きます」

「みぞれはガムシロップなのよね。どっちも氷の味がわかるから、通好みのメニューなの。水織先輩や紬は、よく頼むのよねー」

へえ……さすが、かき氷は奥が深い……。

「それじゃ、二人合わせて160円よ」

「はいー」

あ、少し安いんだな。

それぞれのかき氷を持った二人がテーブルセットのほうに歩いてきた。手にしたかき氷は本当に無色透明で、何もかかって無いようにも見える。

「鴎は決まったー？」

「決めました。抹茶みるくくださいー！」

「お、頼んじやうのね。高いわよー？」

「望むところです。新商品に目がなくて」

「じゃあ、250円よ」

「はいー」

「なあ蒼、なんで抹茶みるくは高いんだ？」

「抹茶のシロップって、普段使わないじゃない。それに小豆や白玉も用意しなきゃいけないし」

なるほど、仕入れが別口になるとか、色々あるんだろうか。

「はい。抹茶みるく、おまたせー」

鮮やかな抹茶色のかき氷の上に、小豆と白玉乗っかり、練乳がかかっている。実物を見るとこれで250円は安いんじゃないかと思えるくらい豪華だ。

「わーい！ 美味しそうー」

鷗も笑顔でテーブルセットのベンチに座る。

「凄いわね」

二人が持つてる氷すいとみぞれのインパクトがあまりないせいとか、抹茶みるくはすごい迫力だった。

「せっかくだし、皆で食べようよー」

「では、カモメさんにみぞれも差し上げます！」

「そうね。見た目では勝てないけど、氷すいもなかなか美味しいのよ？」

「あの、レインボー味も良かったら！」

『すい』『抹茶みるく』『みぞれ』『レインボー』。女の子たちは皆で味を比べあつてる。どんな味なのか気になったけど、さすがに俺がこの輪に入るわけには行かない。一人で大人しくブルーハワイを食べることにする。

「タカハラさんも一口どうぞ！」

「え、俺も？」

紬は笑顔でみぞれの乗ったスプーンストローを差し出してくる。思わず貰って食べてしまった。

「うんうん、羽依里も白玉食べなよー」

「レインボー味もどうぞー！」

それを皮切りに、更に二人の分も味見させてもらった。

静久は笑顔で見守っている。色々気づいてるっぽいけど。

「……まったく、昼間から見せつけてくれるな」

「しろはに言いつけてやるぞ」

声が出た方を見ると、良一と天善がやってくるのが見えた。

「二人とも、いらっしやーい」

「今日は港に店を出していると聞いてな。首尾はどうだ」

「ご覧の通りよ。おかげさまで大盛況」

「知り合いばかりだけだな」

「失礼ね。朝のうちは観光客もたくさん来たって言ったでしょ」

「まあ、今の時間は船も来ないしなー」

二人はそれぞれ氷レモンと氷メロンを注文していた。

結構な人数が集まったこともあり、席に座れないくらいだった。良一と天善は座れずに、立ったままかき氷を食べていた。

「そういえば夏海ちゃん、今年の夏はもう泳いだ？」

皆がかき氷を食べ終わった頃、蒼が屋台の方から身を乗り出すようにして聞いてきた。

「え？ いえ。まだです」

「水着は持って来てるんでしょ？」

「はい。持ってます」

「じゃあ、今日のお昼から皆で海水浴しない？ 今日のイベントよ」

「はい、行ってみたいです！」

「大勢の方が楽しいから、藍やしろはにも声かけてみるわね」

そういえば、俺もこの夏はまだ一度も泳いでなかった気がする。海が身近すぎて気が付かなかったというか。

「海で泳ぐなら、袖も水着を用意してあげるわね」

「むぎゆ!? シズクが去年用意してくれた水着はその、大きすぎたのでイヤですー！」

「大丈夫よ。今年のはちゃんと袖のおっぱいに合わせてるから」

「そ、それは喜んでいいのでしょーかー……」

紬は顔を赤くしながら、むぎゅむぎゅと何か言っていた。

「それじゃ、お昼ご飯食べたら浜辺に集合ね」

「はい、楽しみにしてます！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後もお昼前まで港で過ごし、頃合いを見て昼食を食べに帰る。今日のお昼はカレーうどんをチョイスした。

服を汚さない様に食べるのがなかなか難しい曲者だ。

「美味しいですねえ」

「うん」

食べにくい一方で、味の方は他のカップうどんの中でも突出していると俺は思う。

食後はそれぞれの部屋で、海水浴の準備をする。

浜辺には着替える場所とかないので、あらかじめ服の下に水着を着ておく。

後はビーチサンダルとかタオルを持って、準備完了だ。ちなみにビーチサンダルは去年の蔵整理の時に出てきていたのを拝借していた。

「お待たせしましたー」

夏海ちゃんも準備出来たところで、二人で浜辺へ出発する。

「ところで夏海ちゃん、泳ぎは得意なの？」

浜辺へ向かう道すがら、夏海ちゃんとそんな話をする。

「えっと、それなりだとは思いますが。鷹原さんはどうなんですか？」

「俺？ 元水泳部だし、得意だよ」

「え、鷹原さん水泳部なんですか？」

「あれっ、言っただけじゃなかったっけ」

「初耳です」

「ちなみに『元』水泳部だから。今はやめてるんだ」

「そうなんです。きつと鷹原さん、しろはさんのことで頭一杯になつて部活どころじゃなくなつたんですね」

「あはは、そういうことにおくよ」

何か察してくれたのか、笑顔で受け流してくれた。

「ところで夏海ちゃん、浜辺には着替える場所とか無いから、服の下に水着着てるよね？」

「はい、バッチリですよ」

夏海ちゃんが襟首を広げて下の水着を見せてくる。いやそれ、男子校の俺には結構来ちゃうからやめてほしい。

「でも、鷹原さんはわざわざ服着なくても、水着のまま出発すればよかつたんじゃないですか？」

「あ、いや……男が住宅地の中で水着姿になつてると、撃たれるから」
「……意味が解らないんですけど」

いつそ説明するより、見せた方が早いかもしれない。

「じゃあ見せてあげるよ。夏海ちゃん、ちよつと離れててね」

「は、はい」

夏海ちゃんが距離をとつたのを確認してから、俺は上着を脱ぎ、上半身裸になる。

「ぶっ!」

その直後、遙か鉄塔からのみきによって狙撃され、ずぶ濡れになる。
「だ、大丈夫ですか!」

「うん。大丈夫大丈夫」

『鳥白島の夏休みを満喫している鷹原羽依里君。海水浴場以外で服を脱ぐのは禁止されている。速やかに服を着ろ』

そして、鉄塔に備え付けられたスピーカーからのみきの声が聞こえてきた。

「ほら、ね」

「ほ、本当に撃たれるんですね」

俺は用意しておいたタオルで身体を拭いて、素早く服を着る。

まだ若干濡れてるけど、これだけ暑いし、すぐに乾いてしまうだろう

う。

「今の声、のみきさんですよね」

「うん。良いわく、裸狩りなんだって」

『人聞きの悪いこと言うんじゃない』

また鉄塔から声。まさか、聞こえてるのか。

「のみきの射撃技術はすごいからね」

水鉄砲だけど。

「それにしても、のみきは海水浴に来るのかな」

『安心しろ。私も行く』

……やっぱり聞こえてるんだ。

俺は濡れた体を乾かしながら、浜辺への道を歩いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

浜辺に到着すると、皆はすでに浜辺に来ていて、思い思いに散らばって遊んでいた。

全員水着に着替えていたので、俺と夏海ちゃんもさっさと服を脱いで水着になる。

「あ、ナツミさんです!」

着替えた直後、夏海ちゃんの姿を見つけたらしい紬が凄い速さでやってきた。

「おおー、ナツミさんの水着もお似合いです!」

「あ、ありがとうございます。その、紬さんの水着も可愛いです!」

「紬の水着は私が選んだんだから、似合って当然よ」

静久の選んだらしい水着はワンピースタイプで、紬の髪の色と同じ黄色だった。

ちなみに夏海ちゃんもワンピースタイプの水着で、アクセントに少し蝶の柄が入ってる。ヘアピンもそうだけど、蝶が好きなのかな。

「ナツミさん! こっちで一緒に遊びましょう!」

「そうね。それがいいわ」

「えっ、えっ」

二人にがっしと手を掴まれて、そのまま引つ張っていかれてしまった。仲良いのは良いことだよな。

「よう、羽依里！」

「ようやく来たか」

一人残されていると、そこに良一と天善がやってきた。

天善も水着姿だが、相変わらずラケットを持っている。浜辺で見ると違和感しかない。

「相変わらずラケットを持ってるんだな」

「ああ。これで水中で素振りをする、水の抵抗があつて凄いとレーニングなるんだ」

「そ、そうか」

ラケットが塩水に浸かっても良いものか、心配になる。

「それに、砂浜で反復横跳びをすると、砂の抵抗のおかげで凄いとレーニングになる。鷹原も一緒にやらないか？」

「いや、俺は遠慮しておくよ……」

「惜しいよなー。男があと一人いれば、四天王スクワットができたのによ」

「いや、それもごめん被る」

動揺して変な受け答えをしてしまった。ここまで来て四天王スクワットはしたくない。

「よし羽依里！ それなら泳ごうぜ！ 沖のブイまで競争だ！ じっくりぞー……」

「待つてください。天善ちゃんにはやってもらう仕事があります」

全力で海に向かって駆け出した良一だったが、藍に足を引っかけられ、盛大に転んだ。

「後で皆でビーチバレーをするので、そのネット立てをお願いします」
「はい……」

良一は砂まみれになって起き上がると、藍からネットとポールを受け取って、とぼとぼと歩いて行った。

「ほら、羽依里さんはこっちです」

あまりに可哀想だったので、手伝いに行つてやろうとしたが、藍に別の場所に連行された。

連行されていく中、天善に目で助けを求めたが、既に一心不乱に反復横跳びを始めていた。これは助けてもらえそうにない。

藍に引つ張つていかれた先には、しろはと蒼が居た。

「そういえばしろは、かき氷食べに来なかつたわねー」

「だって私、スイカバー専門だし」

「あ、そう言われればそうだったわねー」

「もし、かき氷にスイカバー味が出たら考える」

「あはは、頑張つてみるわねー」

しろはは髪を三つ編みに結つていて、髪の色と同じ白色の水着だった。

そして、手に何か丸い物体を持っている。

「しろは、何持つてるんだ？」

「スイカ。後で皆でスイカ割りやろうと思つて」

なるほど、夏の海での定番だ。

「あれ、そういえば今日のログボはスイカだったような」

「そうなの？ 私、ラジオ体操行つてないから」

「そういえばいつもいないな。朝弱いのか？」

「うん……羽依里が起こしに来てくれたら、早く起きれるかも」

「よし、今度起こしに行く」

「え？ じよ、冗談だからね？」

「うわー、相変わらずラブラブよねー」

「そろそろ一緒に住んではどうですか？」

藍と蒼が同じジト目顔でこつちを見ていた。

「いや、まだ早いだろ……」

しろはと一つ屋根の下に住むということは、しろはのじーさんとも一つ屋根の下に住むということだ。さすがにその覚悟はまだない。そして良く見ると、蒼と藍は色違いの水着を着ていた。競技水着以外は詳しくないんだけど、パレオって言うんだっけ。

「やつほー、羽依里」

蒼たちと話をしていると、鷗がスーツケースを引いてやってきた。鷗も白い水着だった。というか、ビキニだった。

「鷗も砂浜だとスーツケース動かしくいんじゃないか？」

「大丈夫。ビーチ仕様だから」

「ビーチ仕様？」

見ると、スーツケースの車輪の部分がスキー板になっていた。あれって取り外し可能なんだな。

「ぜえはあ、ひどい目に逢ったぜ」

その時、ビーチバレーのネットを立て終わった良一が、へろへろになつて戻ってきた。

「……ごめんな。手伝いに行けなくて」

「まあ……ああいうのは男の仕事だしな」

俺も男なんだけど。

「よし、羽依里！ 勝負しようぜ！」

沖のブイまで競争だったっけ。付き合ってたってやってもいいな。

「いいだろう。泳法はバタフライで良いのか？」

「ああ、俺はバタフライしかできないからな！」

胸張って言うことじゃないと思うけど。

「いくぜ！ スタートだ！」

良一が飛び込む。

俺は遅れて飛び込んだが、少し進んだところで追い抜いた。

水をかき分けて一気にブイまで到達。そのまま水中でブイを蹴るようにターンを決めて、速度を殺さない様にそのままゴール。

「……ふう」

ゴールした後に振り返ると、良一とは大差がついていた。

「まるでイルカさんのようでした」

「鷹原さん、すごいです！」

丁度ゴールした場所には、夏海ちゃんと紬、静久が居た。スタート時点から若干潮に流されてしまったらしい。そこはプールとは違うところだよな。

「水泳部だったとは聞いてたけど、さすがに速いのね」

三人から褒められる。なんか気恥ずかしい。

ちなみに静久は青色の、その……非常に胸が強調された水着を着ていたので、目のやり場に困った。

「ちくしょー！ もう一回だ！」

ようやく良一がゴールして、再戦を申し出てくる。

「よし、何回でも相手になってやる」

俺は湧き上がってきた邪な感情を紛らわすため、良一との勝負に没頭した。

結局4回勝負し、いずれも完勝だった。

俺はまだ余裕があるが、良一は体力を使い果たして浜辺で倒れている。悪いことしたかな……。

「鷹原、皆がビーチバレーをやるそうだよ」

そんな良一を横目で見ていると、のみきがやってきた。

「のみき、来てたのか」

「すまない。遅くなった」

既に水着姿だったが、その姿に違和感がある。

「え、それってスクール水着……？」

「ああ、水着はこれしか持ってなくてな……」

ばつが悪いような、恥ずかしいような顔をしていたので、深くは突っ込まないことにした。

のみきと一緒にネットのそばに行くと、夏海ちゃん、しろは、藍、蒼、

鳴、紬、静久が集まっていた。

「あれ、天善はいないのか？」

「えっと、一度水織先輩が声をかけたんだけど」

しろはの指差す方を見ると……天善はラケットを握ったまま、肩ま
で砂の中に埋まって気絶していた。何があっただらう。

「急にすごい速さで反復横跳びを始めて、そのまま……」

「あーうん。みなまで言わなくても大体理解したよ」

どのみち、天善も良一も参加は無理そうだ。

というわけで、二人を抜いたメンバーでペアを組む。

くじ引きの結果、俺としろは、藍と蒼、夏海ちゃんと鳴、紬と静久
のペアができた。まるで強い絆で結ばれているかのような組み合わせ
せだった。

「あれ、のみきは出ないのか？」

「私は今回、審判を務めるとしよう。遅れてきた落ち目もあるしな」
そんなの気にしないでいいのに。

「試合は11点先取の1セットマッチ。サーブは成功失敗に関わらず
交互に行い、デュースはなしだ」

審判役ののみきがルールの確認を行う。デュースがいないなら、11
点先に取った方が勝ちだ。

「鷹原は男子だから、アタックとブロックは禁止だ。いいな？」

「わかってる」

「ところでのみきさん、優勝したら賞品出るの？」

「いや、特に考えてはいないが」

皆が気になっていた部分を、鳴が質問する。

確かに何も無いより、あつた方が皆のやる気も上がると思うけ
ど。

「それなら、優勝したらパイリ君とデートするのはどう？」

「駄目！」

悪戯っぽく提案した静久に対し、一番に声を張り上げたのはしろは
だった。

彼女権限で、俺と他の女の子とのデートは断固拒否。といった構え

だ。

「待ってしろはちゃん、こう考えるのはどう？」

そこは最年長者の静久。そこで折れずに説得しにかかった。

「しろはちゃんはパイリ君とペアなんだから、優勝すればそのまま二人で堂々とデートできるのよっ。」

「そ、それはそうだけど」

「べ、別にそこまでしなくても、羽依里とはいつでもデートできるし」「あれ。それじゃあ、羽依里が他の子とデートしても問題ないんじゃない？」

そこで鷗が追撃。

「え、だからそれは」

「あれですか。お二人の愛の力は私達に負けちゃうくらいなものなんですか？」

更に藍も追撃。

「そんなことないし！」

そこは言い切っちゃうんだ。嬉しすぎるんだけど。

その後も皆が色々な追撃を仕掛ける。皆絶対楽しんでるだら……。

一方のしろはは、元々弁が立つ方ではないのでタジタジだ。

「むむむ……わかった。認める」

そして、ついに折れてしまった。

ところで、俺の意志とか完全無視なんだけど。

「でも、絶対勝つから」

「それじゃ、優勝賞品も決まったところで、試合の組み分けをするぞ」砂の上にトーナメント表を書いて、くじを引いてチームを振り分ける。

結果、最初の試合は俺としろはのチームと、夏海ちゃんと鷗のチームに決まった。

「よし。それでは、さっそく最初の試合を始めろぞ」

のみきの指示で、俺達四人がコートの中に入る。そのコートも砂の上に線が引かれているだけの、簡単なものだ。

「羽依里、頑張ろう」

しろはの目は本気だ。

「羽依里は誰にも渡さないから」

「ああ、絶対優勝しないとな」

そうは言ったものの、俺はアタックもブロックも封じられている。しろはの攻撃に全てがかかっているわけだ。

「頑張ろうね、なっちゃん！」

「はい！」

「優勝したら、羽依里とデートだよ！」

「え。そ、そうですねっ」

なんで夏海ちゃんが赤くなるんだろう。

でも、鷗はスーツケース持ってコートに入ってるし、夏海ちゃんは明らかに身長が低い。どういう勝負になるのかな。

「それでは、試合開始だ！」

いつの間にか持っていたのか、のみきが笛を拭いて試合が開始される。

まずはしろはがサーブを入れる。

「えい！」

夏海ちゃんがそれを返し、同時にネット際へダッシュする。

「ほーいっ」

鷗が大きくトスを上げると、その位置を見て夏海ちゃんがスーツケースを動かす。ビーチ仕様というだけあって、軽い力でスムーズに動いている気がする。

「いっけー、なっちゃん！」

何をしているだろうと見ていると、夏海ちゃんは素早くスーツケースの上に乗る。

「はい！」

夏海ちゃんはそのからジャンプしてアタックしてきた。

「え、ちよつと」

予想外のアタックに二人とも動けず、ボールは俺達のコートに落ちる。

「ナイスアタックだな。0―1だ」

「……なあ審判、スーツケースに乗ってからアタックするのはありなのか？」

「身長差があるから、ちょうどいいハンデだろう。認める」
認められてしまった。

「そうなると、色々警戒しないといけないよな……おつと！」

鷗からのサーブを俺が受け止め、しろはに上げる。

「しろは、頼んだー！」

「うん」

俺はアタックできないので、俺達の攻撃は必然的このタイミングしなくなる。

「よろしく、なっちゃんー！」

「はい！」

対戦相手の二人もそれがわかっているのか、攻撃位置を見定めてスーツケースを移動させる。

そのスーツケースを足場に、ジャンプした夏海ちゃんがしろはのアタックをブロック。弾かれたボールは俺達のコートに落ちた。

「ナイスブロック。これで0―2だな」

「ま、またスーツケース……」

缶ケリの時もあったけど夏海ちゃんって運動神経良いよな。

それ以上に、鷗との連携がすごいんだけど。

「羽依里、次は羽依里の番だよ」

そして、俺にサーブの順番が回ってきた。

そろそろ点を取らないとやばい。許してくれ。二人とも。

「わわっ!？」

「ひゃっ!？」

少し強めに打ったら二人とも返せず、サービスエースになった。

「ナイスサーブだ。1―2だな」

その後も俺のサーブやしろはのブロックでなんとか点を取るのだが、鷗たちも見事な連係プレーからのスーツケースアタックで対抗してくる。

粘り強く守る展開が続いた。

「10―10。初戦からなかなか良い勝負じゃないか。次の1点で勝負が決まるな」

「羽依里、ここは集中だよ」

「わかってる」

「行きますよー！ えーいっ！」

最後は夏海ちゃんのサーブ。渾身のサーブを俺が受け止めて、しろはに渡す。

そのしろはを動きを見て、鷗がスートケースを移動させる。そこに夏海ちゃんが全速力で走ってきて、スートケースを足場にジャンプ。ブロックの体勢に入る。

「えいー！」

しろはの撃ったアタックは夏海ちゃんの手に当たり、軌道が変わるが……完全にはじき返されることはなく、ギリギリの所で夏海ちゃんたちのコートに落ちる。

「11―10。試合終了。しろはたちの勝ちだな」

「か、勝った……」

「やったよ、羽依里！」

俺としろはは勝利のハイタッチを交わす。

なんとか勝てたが、二人とも強敵だった。

「お二人も、あと少しでした」

「ナツミさん、惜しかったです！」

藍や紬が、破れた夏海ちゃんと鷗の健闘を称える。

「うーん残念、羽依里とデートしたかったんだけどなあ」

……本気で悔しがつてるように見えるけど、気のせいだよな。

それにしても、恐ろしいほどの連係プレーだった。

その後、俺達四人は麦茶をもらって休憩。

二試合目の藍と蒼のチームと、紬と静久のチームの試合を観戦する

ことにした。

「アオさん、アイさん、よろしくお願いします！」

「よろしくねー」

「手加減はしませんよ」

「のぞむところですよ！」

紬のサーブから試合開始。体全体を使ったサーブが繰り出される。それを蒼がうまく拾い、藍に渡す。藍は綺麗にトスを上げて、蒼がアタック。

静久がブロックに行つたけど、腕の間をうまく通してアタックを決めた。

「ナイスアタックだ。0―1だな」

「今度はわたしのサーブですね。行きますよ」

続いて藍のサーブ。結構強めのサーブが行くが、静久がうまく勢いを殺して拾う。そのボールを紬が上手に上げて、静久がアタック。

「おっばいアタック！」

「変な言い方するなあーっ！」

しかし、蒼がブロック。紬のフォローも間に合わず、ボールは紬たちのコートに落ちる。

「ナイスブロックだ。0―2だな」

「なあしろは。あの二人、うまくないか……？」

「藍も蒼も運動神経は抜群。おまけに双子だから、連携も完璧。強敵だよ」

「あの二人が決勝に上がってきたら、ヤバイな……」

「うん、ヤバイと思う」

「さすが双子ちゃんね……でも、私と紬の絆も負けてないわ！　いくわよー！」

続いて静久のサーブ。一見サービスミスかと思えるほど大きな軌道を描いていくが、途中で急降下して蒼達のコートギリギリに落ちる。

「……まさか、サービスエースですか？」

「うそ、絶対アウトだと思ったのに」

「ナイスサーブだな。1―2だ」

「なんだ今の……見たことないような独特の放物線を描いていたんだけど」

「名付けて、おっぱいサーブよ！」

名付けちゃうんだ……。

「さすが水織先輩、油断ならないわね……てえーい！」

次に蒼のサーブ。先程と同じように静久が拾って、紬が上げて、静久がアタックする。

「おっぱいアターック！」

うーむ。まさにおっぱいバレー。

その後も静久がサーブを打つと必ずサービスエースになるし。なんだこの試合。

しかし、試合経過とともに空門姉妹のスペックがそれを凌駕していく。

「6―11。試合終了。蒼達の勝ちだ」

結局、藍と蒼の勝利に終わった。

「むぎゅ……負けてしまいました」

「紬、惜しかったぞ」

なんだかんだ言っつて、紬のレシーブは上手だった。

そして、二人が奪った6点のうち、おっぱいサーブで4点。おっぱいアタックで2点。ある意味驚異的だった。

「優勝して、タカハラさんとデートしたかったです……」

「私もよ……パイリ君とデートしたかったわ……」

え、二人ともそれ本気？ 冗談だよね？

「よし二人とも、決勝戦を始めるぞ」

のみきに言われて、俺達は決勝戦のコートに入る。

「しろは、きつきの試合を見て、あの二人の弱点とか見つかったか？」
「ごめん。全然見つからない」

こうなれば、なるようにしかならない。

願わくば、あの二人に少しでも連戦の疲れが出てくれると良いんだけど。

「しろはー、羽依里ー、頑張れよー！」

「頑張ってくださいーい！」

「アオさん、アイさん、わたし達の分も頑張ってくださいー！」

「最近組んだ混合ダブルスか、長年組んだダブルスか。これは楽しみな勝負だな」

皆が声援を送ってくれる。いつの間にか、良一と天善も応援に参加していた。

「それでは、試合開始だー！」

試合開始の笛が吹かれ、今回は俺のサーブからゲーム開始になる。せっかくのチャンスだし、何が何でも先制点は欲しいところだ。

「いくぞ二人とも、それー！」

渾身の力でサーブを打つ。

できるだけ厳しい所を狙ったつもりだったが、蒼はそれを難なく拾う。

「ナイスです。蒼ちゃん」

そのボールを藍がもう一度上げ、絶好球を蒼に渡す。

「うりゃあつー！」

「ぶわっ！」

「あ、ごめん……」

蒼のアタックが俺の顔面を直撃した。

しろはがそれを拾うが、俺が行動不能のため強く返し切れず、藍にブロックされる。

「ナイスブロック。0ー1だ。鷹原も運がなかったな」

「ただのビーチボールのはずなのに、くちやくちや痛いぞ」

当たり所が悪かったのか、蒼のアタックが強力だったのか。前者だ
と思いたいけど。

「羽依里、藍のサーブが来るよ。しっかりして」

「お、おう」

気を取り直して、試合に集中する。

俺が藍のサーブを受け止めて、しろはに渡す。

しろはが速攻を仕掛けるが、蒼にブロックされてしまった。

「ナイスブロックだ。0―2だな」

「……やっぱり強い」

「次はしろはのサーブだぞ。なんとか糸口を見つけるんだ」

「うん」

今度はしろはのサーブ。かなり強いサーブが飛んではずだが、今度
は藍が受け止めて、蒼を経由して再び藍へ。

しろはがブロックに行くけど、弾かれながら押し込まれてしまっ
た。位置が悪くて、俺のフォローム間にも間に合わなかった。

「二人とも惜しかったぞ。0―3だ」

……やっぱりあの二人強いんだけど。

その後も一方的な展開が続き、気が付けば1―8。

ちなみに、俺達唯一の得点は蒼のサーブミスだ。

「なあ審判、せめてブロックだけでもやらせてくれないか？」

「うーむ。あまりに一方的だしな……どうだろうか、二人とも」

「いいんじゃない」

「構わないですよ」

のみきの問いかけに、二人は余裕の表情だ。

審判からの許可も出たので、ここからは多少貢献できるかもしれないな
い。

このまま負けたら俺は空門姉妹とデートする羽目になるし。

「てえーいーいー」

「ブロック！」

「えい！」

「ブローック！」

というわけで、それからの俺は全力でブロックし続けた。

「ちよれーい！ ブローック！」

「ナイスブロックだな。9-10だ。ついにここまで追い上げてきたか」

「……さすが男の子、ブロックの許可を出したのは失敗でしたね」

「愛の力っていうの？ 鬼気迫るものがあるんだけど」

マツチポイントは握られてるけど、あと1点差まで詰め寄った。

「も、もう少しだ。頑張るぞ、しろは」

「大丈夫？ 肩で息してるけど」

ビーチバレーの前に良一と泳ぎまくってたのを忘れていた。おまけにブロックでジャンプしまくってるし、結構足に来てる。

「大丈夫だって。ほら、しろはのサーブだぞ」

「う、うん」

しろはの打ったサーブを蒼が受け止め、藍に渡してから、蒼に戻してアタックを撃つ必殺の流れが来る。

……本当にこの二人はミスしないよな。

「だけど、この位置ならブロックできる！」

蒼のジャンプのタイミングに合わせて俺も飛ぶ。両手を広げてブロックの構えだ。

背だつて俺の方が高いから、余裕なんだけど……あれ？

今まで気づかなかつたけど、こうやって蒼とタイミングを合わせてネットの近くまで飛ぶと……その……。すぐ近くに蒼の谷間が……。

「うりやあつ！」

「ぶわっ!？」

意識がそつちに行つてしまつていて、蒼のアタックに全く反応できず……再び俺の顔面を直撃。

俺は大きくバランスを崩し……背中から地面に落下してしまった。ビーチボールはというと大きく跳ね、とても捕球できない距離まで吹っ飛んで行つてしまった。

「ナイスアタック。9―11。試合終了だな」

砂浜だから、対して痛くはなかったけど……色々とショックだった。

「……あとちよつとだったのに、惜しかったね」

仰向けにひっくり返つてる俺の元へ、しろはがやってくる。

「羽依里、顔に当たるとか、運がなかったね」

「う、うん……アンラッキーだった」

蒼の谷間に目が行つちやつたなんて、口が裂けても言えない……。

「これで、デート確定だね」

「うん……」

負けてしまった以上、俺はあの二人とデートする事が決まつてしまったわけだ。

「でも……蒼達となら、いいかな」

「え？　しろは、何か言った？」

「ううん。なんでもない。負けちゃったし、しょうがないよね」

しろはは渋々ながら認めてくれたみたいだ。

「あ、でもお泊りはダメだよ」

「いや、元からそんなつもりないから」

「お二人とも、最後にスイカ割りやるそうですよー！」

起き上がつて砂の上で休んでいると、夏海ちゃんが駆けてきた。

しろはと二人で夏海ちゃんについていくと、ちょうど紬が目隠しをして棒を持ち、スイカに誘導されているところだった。

「むぎゅー……！」

ぽこん。と良い音がしたが、腕力が足りないのか、弾き返されてし

まった。

「むぎゅ〜〜……」

紬が無念そうに目隠しを外す。

「次はナツミさんの番ですよ！」

そして、夏海ちゃんに目隠しと棒が渡される。

「仇を取ってください……むぎぎぎ」

「が、頑張ります……」

目隠しをした後、棒を軸にぐるぐると頭を回される。これも良く見る光景だ。

「あうあう……」

最初はふらついてたけど、なんとか体勢を立て直した夏海ちゃんは、右だ左だと皆に誘導されながらスイカの方へ向かう。

「えーいっ！」

夏海ちゃんが思いっきり棒を振り下ろす。腰の入った良い一撃だったけど、僅かに外れた。

「あ、おいしいー」

「おっぱい一つ分外れたわ」

「紬さん、私には無理でした……」

目隠しを外しながら、夏海ちゃんがかつくりと肩を落とす。

「いえ、ナツミさんは頑張ってくれました！」

紬が駆け寄って、二人して涙ながらに抱き合ってる。スイカ割りってこんな過酷な競技だったけ？

「あれ？ そういえば天善たちは？」

例によつて男連中の姿がない。周囲を見渡してみると、天善は我関せずといった感じで水中素振りをしているし、良一は黙々とビーチバレーのコートを片付けていた。

……二人とも、俺だけ楽しんでごめんな。

「さ、次は羽依里よー」

蒼から棒と目隠しを受け取り、目隠しをつける。

目隠しをして、ぐるぐると回される。

「いつもより余計に回してあげます」

藍の声がして、回転の速度が上がった気がした。さっきの二人の倍以上回された気がする。

「うおお……」

目隠しをしたまま、一応スイカの正面に立つ。

でも、視界が回ってる気がする。

ラジオ体操で三半規管鍛えてたはずなんだけどな……。

「前ですよー」

「左ですよー」

皆の指示を受けて前に進むけど、あつちにふらふら、こつちにふらふら。イマイチまっすぐ進めてない気がする。

そして、砂の凹凸に足を取られてバランスを崩す。

「あ、やばいー!」

慌てて足に力を入れるけど、ここに来て足の疲労がピークに達したみたいで力が入らない。これはまずい。

もし誰かに当たったら大変だと思い、一番に棒を地面に投げる。そつちに意識を集中してたこともあり、俺は受け身をとる事もできずにそのまま倒れ込む。

……まあ、頭から倒れても砂浜だし、いっか。

「ひゃああああっ!?!」

……あれ? 地面に倒れたはずなのに、砂の感触がない。なんかわからないけど柔らかい。色々と柔らかい。そして冷たくて気持ちいい。

「や……」

え、その声は蒼か?

「や、優しくお願いします……」

なんか、ものすごく近くで聞こえたような。

「え、優しくって何が?」

「な、なんでもない! 羽依里、どいてー!」

……どうやら、倒れた拍子に蒼を押し倒してしまったみたいだ。

どいてと言われても、目隠ししてるし、どこが地面でどこが蒼なのかわからない。

足も力入らないし、とりあえず両腕に力を入れて起き上がらないと

！

「あつ、そこだめ！」

え、どこ？　ここならいいのか？

「ひゃー！ー！」

「ほう」

「やるなあ」

いつの間に戻ってきたのか、良一と天善の声も聞こえる。ていうか俺、何やってるの？

「は、羽依里、だめ……」

「あわわわわ」

「なつちゃん、見ちゃダメ！」

「紬にもまだ早いわ」

「むぎゆ」

なんか皆の声をするし、色々とまずそうだ。冷静になれ、俺。

そ、そうだ。無理に起き上がろうとせず、横に転がろう。

俺は思いつきり体を横に転がす。今度こそ砂の上だ。助かった。

「……やつと離れたか。ハイドログラディエイター改、殲滅モード。ファイア！」

のみきの声が聞こえた。

どうやら助かってなかったみたいだ。

「はあ……蒼ちゃんが汚された」

俺はのみきの水鉄砲で散々撃ちまくられた後、今は三人の前で正座していた。

三人というのは、藍と蒼、そしてしろはだ。

「えーと、不慮の事故だし？　あたしはもう許してもいいと思うんだけど……」

「駄目です。わたしは許しません」

「うん。許しちゃ駄目」

蒼はなんか許してくれそうな雰囲気だけど、他の二人は怒りが収まらないみたいだ。

「ごめんなさい」

俺は心から頭を下げる。

ちなみに、他の皆は向こうでスイカを食べている。俺の後に静久が割ったらしかった。

「正直なところ、業腹です」

うう、いつもより余計に回したのは藍なのに。

「このまま日が暮れるまで、首から上を砂に埋めましょう」

「……ちよつと待って。首から上を砂に埋められたら息できないんだけど」

「それくらい怒っているということですよ」

「本当にごめんなさい」

俺はもう一度頭を下げる。

色々な偶然が重なったとはいえ、ああいう場合は男が悪いんだし。

「それでは、今から帰るまでの間、羽依里さんは首から下を砂の中に埋めて過ぐす。二人とも、これで良いですか？」

「うん。それでいいと思う」

「蒼ちゃんも、それで良いですね？」

「え？ あー、うん……二人の気が済むなら、それでいいけど……」

「決まりですね。さあ羽依里さん。自分の入る穴は自分で掘ってください」

「わかった……」

結局、俺は帰る直前に蒼が助けに来てくれるまで、砂に埋もれて反省していたのだった……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

海水浴が終わった後、帰宅して一番に風呂に入る。

塩と砂でベタベタだし、夕食の前にさっぱりしておきたかった。

「ぎゃー……！」

お風呂に入ったら、めっちゃめっちゃ体に染みた。

日焼けかと思ったら、それだけじゃないみたいだ。良く見ると所々みみずばれができてる。

「……水鉄砲恐るべし」

「ひゃー……！」

入浴後にテレビを見てみると、風呂場から夏海ちゃんの声が聞こえた。

日焼け止め、塗っておかなかったのかな……。

入浴を済ませた後は、いつものように夏海ちゃんとしろは食堂へ向かった。

「お腹空きましたねー」

「うん。いっぱい運動したしね」

「はい！ すごく楽しかったです！」

俺は後半悲惨な目に逢ったけど、夏海ちゃんが楽しんでくれたならいいか。

話ながら歩いていると、小学校を過ぎたくらいで顔に冷たい物が当たる。

「あれ、雨だ」

さっきまで星が出ていたのに、いつの間にか空は真っ黒い雲に覆われていた。

「夏海ちゃん、走ろう！」

「は、はい！」

俺達は食堂までの道のりを走る。その間も、段々雨が激しくなってきた。

土砂降りになる寸前で、しろは食堂の軒下に滑り込む。

「うひゃー……濡れちゃいましたね」

「通り雨だろうから、ご飯食べ終わる頃にはきつと止むよ」

「そうだと良いんですけど」

とにかく、お店に入ろう……そう言おうとした矢先、聞きなれた叫び声が聞こえてきた。

「むぎゅ〜〜!」

「あれ、紬?」

食堂前の道を、紬が頭を押さえながら走っていた。

「紬さん!」

「あ、ナツミさんです!」

それを夏海ちゃんが呼び止めて、一緒に軒先に入る。

「はあ、ヒドい目に逢いました」

俺達はそこまで濡れていないけど、紬は結構長い間雨に打たれたらしく、びしょ濡れだ。

「ちよつと待ってて。しろはを呼ぶから」

俺は食堂の扉を開けて、しろはに声をかける。

「え、どうしたの?」

通り雨のことを知らないしろはは、濡れてる俺たちを見て驚いていた。

「通り雨にあつてさ。大きめのタオルとかないかな」

「あるよ。三人とも、ひとまず中に入って」

しろはに導かれて3人で店の中に入る。

その後、しろはからタオルを借りて、髪や体を拭かせてもらう。

「むぎゅー……」

紬はツイントールを解いて、髪を拭いていた。

俺や夏海ちゃんに比べて髪の毛が多いので、大変そうだった。

「……」

「むぎゆ？ ごめんなさい。水が飛びましたか？」

「いや、大丈夫だよ」

普段ツインテールの紬しか見てないからか、髪を解いてる紬の姿は妙に新鮮だった。

「それにしても、ここはシロハさんのお店だったんですね」

店内を見渡しながら、紬が言う。

「なんだ、知らなかったのか？」

「時々前を通ることはありましたが、いかがわしいお店には入らないようシズクに言われていましたので」

「い、いかがわしい……」

シロハさんが沈んでる。確かに墨文字で書かれた看板を見たら、そう見えるかもしれない。

「せっかくだから、紬もここで夕飯食べていたらどうだ？」

「い、良いんでしょーかー……」

「しろは、何か身体が温まるような料理を出してやってくれないか」

「温まる料理……あるにはあるけど」

「頼むよ」

「……わかった。紬、座って。お代は良いから」

「は、はい……」

しろはが紬にカウンター席を勧める。紬はそれに促されるように席に座る。

「羽依里と夏海ちゃんは何にするの？」

「そうだな、俺は牛丼にしようかな」

「私は親子丼（B）をお願いします！」

夏海ちゃんが紬の隣に座り、その隣に俺が着席する。

紬は濡れたまま店に入ったことが申し訳ないのか、そわそわと落ち着かない。

「それにしても、この時間に紬がこの辺に居るなんて珍しいな」

「あ、港にシズクを送った帰りです」

「あー、なるほど」

思えば最終便が出る時間だった。

それで通り雨に打たれたと。運がなかったなあ。

「はい、牛丼と親子丼（B）、お待ちどうさま」

「ありがとうございます」

それぞれのメニューを受け取る。

夏海ちゃんが頼んだのは例の海鮮親子丼。鮭とイクラの共演は最強だろう。

「おお、牛丼もうまそうだ」

どこぞのチェーン店のとは違う、しっかりとした牛肉が乗っていて、紅シヨウガも大盛だ。

今日はいっぱい運動したし、そろそろ肉を食べたくなった。

ちなみに、丼物に必ずみそ汁と野菜サラダがついてるのは、この食堂の特徴だった。

「紬もおまたせ。日替わりの麻婆豆腐定食」

「おおー」

紬の前に真っ赤な麻婆豆腐とごはん、みそ汁、そしてほうれん草の白和えが置かれた。

熱々の麻婆豆腐は体が温まりそうだ。

「す、少し多いです。お二人も食べてくれませんか？」

確かに大盛だ。普段コッペパンとワタアメを主食にしている紬には厳しい量かもしれない。

「でも、これに乗っけてもらったら麻婆牛丼になるんだけど」

「それはそれで美味しそうですけど。私は麻婆海鮮丼ですよ？」

麻婆豆腐の風味に鮭とイクラが瞬殺されてしまいそうだ。

とりあえず取り分け用の皿を貰って、少しずつ麻婆豆腐をもらう。

「それじゃ、いただきまーす」

三人で手を合わせてから、それぞれの料理をいただく。

「うん、うまい」

牛肉も噛めば噛むほど旨味が出る。紅シヨウガも良いアクセントになってるし。

「美味しいですー！」

夏海ちゃんは海鮮親子丼を頼むのは二回目だった気がする。気に

入ったんだろうか。

「それでは、いただきます！」

紬も麻婆豆腐をレンゲですくって、小さ目の口で一口。

「~~~~~！」

……顔を真っ赤にして悶絶していた。耳から煙が出そうな勢いだ。「そ、そこまで辛かった？ どっちかっていうと甘口のほうなんだけど」

しろはが慌てて水を渡している。

「そこまで辛いのか？」

俺達も分けてもらった麻婆豆腐を口に運ぶ。

山椒やトウガラシが効いてピリツと辛いけど、そこまで辛くはない。

夏海ちゃんも同じような反応だ。

「紬さん、ワタアメばかり食べてるから辛いものが苦手なんですか？」

「むぎぎぎ……そ、そんなことはないと思うのですが……」

「紬、無理はしなくてもいいから。ダメそうだったら残していいよ？」

「いえ、せっかくシロハさんが作ってくれたのですから、頑張ります！」

むぎむぎ言いながら、麻婆豆腐との戦いを再開する。

「俺としては、もうちよつと辛い方がいいくらいだけだな」

分けてもらった麻婆豆腐を完食しながら、感想を漏らす。

「辛口になると、島特産の唐辛子が入るんだよ」

「それって辛いのか？」

「通称ヤバネ口って呼ばれてる。普通の舌の持ち主にはおススメしない」

「その唐辛子。名前からしてヤバそうなんだけど」

「ほとんど完食した人がいないの。昔、手袋した女の人に来て、完食していったくらい」

どこの誰かは知らないけど、世の中にはすごい人がいるもんだな。

しばらくして食事を終え、外に出る。雨はすっかり上がっていて、星空が見えていた。

「紬さん、大丈夫ですか？」

「ま、まだ口の中がひりひりします……」

あの後、紬は何とか麻婆豆腐定食を食べ終えた。

「紬はまたあの灯台に泊まるのか？」

「はい！ そのつもりで……くしゅん！ むぎゆ……」

言いかけて、くしゅんをしながら。同時に身体も振るわせる。

「むぎゆ……麻婆豆腐では、体は温まらなかったかもしれない……」

まあ……辛さを紛らわそうと、水もたくさん飲んでいたしなあ。

「紬さん、ちゃんとお風呂に入ってくださいね！」

「えっと、灯台にはお風呂はついてないので、着替えたらお布団にくるまって寝ます！」

「え、お風呂ないんですか？」

「はい！」

「ええ……」

夏海ちゃんが絶句する。

「大丈夫です！ 季節柄寒くは……くしゅん！ むぎゆ……」

そう言いながらまたくしゅん。確かに寒くはないだろうけど、夜は冷える時もあるし。それで風邪でも引いたら大変だ。

「……あの、鷹原さん」

「うん」

夏海ちゃんが俺の方を見て何かを言いかける。言われなくても分かっている。

「紬、うちのお風呂に入っていっていったらいいよ」

「むぎゆ、いいんですよ……」

「鏡子さんには俺から話すから。理由を知ったら、きつとダメとは言わないよ」

「というわけで紬さん、行きましよう！」

「は、はい！」

海水浴の時とは逆に、夏海ちゃんが紬の手を引いて走り出した。

帰宅した後、鏡子さんに訳を話すとおつさり了承。紬にお風呂に入ってもらった。

機械の使い方がわからないとか色々理由をつけて、夏海ちゃんも一緒に入ってみたいだけど。

夏海ちゃん、海水浴の後に一回お風呂入ったはずなんだけどな。

結局その場の流れで、紬は夏海ちゃんの部屋に泊まることになった。

夏海ちゃんの部屋からは、夜遅くまで楽しそうな声が聞こえてきていた。

第十話・完

第十一話 8月4日

「タカハラさーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんに起こされて、一日が始まる。

「ああ、おはよう夏海ちゃん……」

布団から出ながら、開け放たれたふすまの方を見ると……金髪の知らない女の子がいた。

「……えっと、どちらさま？」

「むぎゆ！ 紬です！ 紬・ヴェンダースです！」

「あ、そういえば昨日泊まってたんだっけ」

「はい！」

「ごめん。紬のイメージはツインテールでさ」

「センニューカンに捕らわれてはいけません！」

だってパジャマ姿だし。髪を解いたままだと、やっぱり見慣れない。

「まだ服乾いてないの？」

夜のうちに軒下に干しておいたはずだけど。

「今、ナツミさんが確認に行ってくれています」

「そうなんだ」

「紬も風邪とか引いてない？ 大丈夫？」

「はい！ 大丈夫です！」

昨日とか結構くしゃみしてたみたいけど。大事にならなくてよかった。

「それで、ナツミさんにタカハラさんを起こしてくるように頼まれました。というわけで、起きてラジオ体操に行きましょう！」

仁王立ちして、俺の方をびしっ、と指差す。紬がやる気だ。

見たことあるパジャマだと思ったら、夏海ちゃんのだった。かなりきつそうだ。おへそとか見えちゃってるし。

「それじゃ、着替えたいんだけど」

「むぎゆ！　そ、それでは部屋の方に戻っていますので！」
紬は顔を赤くしながら去っていった。
うーむ、やっぱり家に紬が居るのは新鮮だ。

「あ、鷹原さん。おはようございます」

身支度を済ませて廊下に出たところで、夏海ちゃんと会う。手に紬の服を持っていた。

「おはよう。なんとか乾いた感じ？」

「はい！　今、アイロンもかけ終わったところですよ！」

夏海ちゃんもパジャマ姿だったので、二人の準備が終わるまで外で待っていることにした。

空を見ると、朝から大きな入道雲が出ている。今日も暑くなりそうだ。

準備が終わった二人と合流して、神社へ向かった。

境内に到着すると、もうみんな集まっていて、あちらこちらで話をしていた。

「皆さん、おはようございます！」

三人そろって挨拶すると、紬が俺達と一緒にやってくるのは珍しいからか、皆の注目を集める。

「あれ、紬が水織先輩以外と一緒に来るなんて、珍しいわね」

「しかもキグルミじゃないですよ。これは何かあったんじゃないですか？」

「え。藍、何かあって何？」

「……お泊りでもしたんじゃないですか？」

「まさか、羽依里と一つ屋根の下で過ごしたってこと？　じゃあれって、朝帰りってやつじゃ……！」

蒼と藍が顔を寄せ合ってヒソヒソと話している。蒼の声が大きいので、ほとんど丸聞こえだけど。

「おい藍、蒼がマツハでピンク思考になったぞ。なんとかしてくれ」

「え？ 可愛いからいいじゃないですか」
「良くない」

「なら、本人に聞いてみましょう……紬は羽依里さんの家に泊まったんじゃないですか？」

「はい。泊めてもらいました！」

「ほら。間違っていないじゃないですか」

「やっぱり朝帰りじゃない！」

「その朝帰りって、意味が違うから！ 誤解を招くようなことを朝から大声で言わないでくれ！」

「ほう」

「やるなあ」

騒ぎを聞きつけてか、良一と天善まで寄ってきた。のみきの耳に入る前に事態を収束させたい。

「いや、泊めたのは認めるけど夏海ちゃんの部屋だから！」

「お前ら——！ 今日もラジオ体操を始めるぞ——！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。

「た、助かった……」

今日ほどラジオ体操好きさんの登場がありがたかったことはない。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああああ——！」

「うるあああああ——！」

体操をしている間に、お泊りの件はうやむやになった。

「さあ、スタンプはこっちだぞ——」

ラジオ体操終了後、スタンプを押してもらい、バケツから今日の口グボを受け取る。

「いてててて——！」

無造作に口グボの入ったバケツに手を突っ込んだ瞬間、指先に激痛が走り、思わず手を上げる。

見ると俺の右手の人差し指をカニが思いつきり挟んでいた。

「え、カニ!？」

反射的に手を振り回して、カニを振り払う。

「羽依里、カニはこう持つんだぞ！」

「こ、ことうか？」

良一に指導してもらって、なんとかカニを掴む。

以前のザリガニより掴みにくい。気を抜いたら逃げられてしまいそう。

「わわわわ……」

「夏海ちゃん、カニは甲羅を持つんだ」

「は、はい」

夏海ちゃんがのみきの指導を受けて、なんとかカニを掴んでいる。なかなかきつそう。

島の皆は普通に持つてるけど、やっぱり実際にやるとなると難しい。

「タカハラさん、ナツミさん、お世話になりました！ それでは！」

「はい！ またです！」

「じゃあな紬、気を付けて帰れよ！」

紬とは神社で別れ、夏海ちゃんと二人で加藤家に戻る。

「それで、どうしましょう。これ」

帰宅後、俺と夏海ちゃんは再び居間で立ち尽くしていた。

「カニだね」

「……中身を取り出したいのですが」

ログボでもらったカニはハサミをチヨキチヨキ動かしながら、元氣いっぱいだ。

「よし。ここはあの手を使おう」

「あの手ですか？」

「うん。夏海ちゃんは先に台所からハサミを持ってきてほしいんだ」

「ああ……わかりました。それじゃ、持っててください」

俺の意図を察した夏海ちゃんは、手に持っていたカニを俺に渡し、

台所にハサミを取りに向かった。

「鏡子さーん！」

「はーい！」

そして、俺は例によって鏡子さんを呼ぶ。

「あら、美味しそうなカニね。食べるの？」

「はい」

「貸して」

予想通りの展開だ。これならいけそうだ。

「よろしくお願いします。今、夏海ちゃんがハサミを……」

「あ、カニの場合はハサミはいらないんだよ」

「え？」

鏡子さんは俺の手から二匹のカニを持って台所に向かう。入れ違いでハサミを持った夏海ちゃんが戻ってきた。

「あれ、ハサミ使わないんですか？」

「うん、いらないうって言われたけど……」

その時、バキバキと何かをへし折るような音が台所から聞こえてきた。

「ひっ」

俺と夏海ちゃんは堪らず耳を押さえる。

「ねえ、これってチャーハンにするんでしょう？」

台所から顔を出した鏡子さんが聞いてくる。

「え？ はい。たぶん、そうです」

「なら、カニミソも出しておくれ」

「よ、よろしくお願いします」

再び何かをたたき割るような音が聞こえてくる。

「ひえええ……」

この音、何度聞いても慣れない。

「下ごしらえは終わらせておいたから。後はお任せしていいかな？」

「ありがとうございます」

数分後、タオルで手を拭きながら、鏡子さんが戻ってきた。

「……それじゃ夏海ちゃん、後は任せていいかな？」

「ええー……そうだ。たまには鷹原さんが作ってみませんか？
チャーハン、得意なんですよ？」

「……今日は夏海ちゃんの作ったカニチャーハンが食べたいな」

「そ、そんな言い方してもダメですから！」

「……お願い」

正直、今の台所には入れる気がしない。

「うう……わかりました。わかりましたよ」

夏海ちゃんがエプロンをつけて、涙目で台所へ向かう。ごめん、夏海ちゃん。

その後は鏡子さんも入ってもらって、三人で朝ごはんを食べた。カニの旨味をそのまま閉じ込めたような、絶品のカニチャーハンだった。

朝ごはんを済ませると、鏡子さんは役所の方に用事があると言って出かけてしまった。

俺達はいつものように、向かい合って宿題をする。

それが終わってしまうと、やっぱり暇になってしまう。

適当にテレビをつけるけど、チャンネルが4つしかない上に、ローカルな旅番組しかやってなかった。

「こういうのって、同じ時間帯に別のチャンネルで似たような番組やってることあるよね」

「そうですね。旅番組でも、海外旅行か国内旅行かの違いだけだったりします」

「放送時間をずらせば、どっちも視聴率取れると思わない？」

「思います」

そんなどうでもいいことを話しながら、ぼーっとテレビを見ていると、レポーターが港で漁師にインタビューする映像に変わった。

……そうだ。港と言えば、今日はなんの屋台が出てるんだろう。

「夏海ちゃん、ちよつと港に行ってみない？」

「港ですか？」

「うん。今日も何か屋台が出てくるかもしれないし」

「この間のヨーヨーみたいにですか？」

「そ、そう」

……一瞬、数日前のヨーヨー事件がフラッシュバックした。

そういえばあのヨーヨーはどこに行ったんだろう。確かその辺に転がってたはずだけど。

まさか、あの旅芸人の力が残っていて、勝手にどこかに行っちゃったってことは無いだろうし。鏡子さんがどこかに片づけてくれたんだろうか。

「あの、鷹原さん？ 港、行ってみたいんですけど」

「……ああ、ごめん。それじゃあ行こうか」

「はい！」

見当たらないヨーヨーのことをいくら考えてもしょうがないので、夏海ちゃんと二人で港に行ってみることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ほら、今日も出てる」

港に到着すると、いつも屋台が出てる場所に大き目の屋台が出ていた。

「ポン！」

そして、今日もイナリが居た。

「よう。またお前が店番してるのか？」

「ポン！」

「イナリさん、何を売ってるんですか？」

「ポンポン！」

見ると、日よけの下に色々な種類のお菓子が規則的に並べてある。

「これって、輪投げか？」

「ポン！」

イナリが尻尾で指し示す先には、例によって看板が立っていた。

『輪5つで100円。一番下まで入った商品だけお持ち帰りください』

「せっかくだし、やってみようか」

「はいー!」

「ポーン!」

まいどありー、と言った感じで、イナリが尻尾を出してくる。

俺が200円を渡すと、器用に受け取ってカゴに入れる。そして輪投げ用の輪っかを渡してくれる。

「イナリさん、器用ですね……」

イナリから輪っかを受け取った後、二人で並んで立つ。

「鷹原さん、せっかくだすから勝負しませんか?」

「え、勝負?」

「はい! どっちがたくさん取れるか勝負です!」

「いいよ。受けて立とう」

標的のお菓子の並びを見ると、手前の方はマーベルチョコやアファロチョコといった、狙いやすそうな小物が並んでいる。

少し奥にはパリングルスやコップスターズといった、ちよつとお高めのお菓子が並び、一番奥にはマンハッタンの高層ビルよろしく、お菓子の塔が築かれている。

この手のゲームの景品は、遠い程良い物が置いてあるんだよな。一番奥のお菓子は実際は見せ物のようなもので、子供が投げても届かない場合が多い。

「えーつと、どれを狙おうかな」

すぐ取りやすそうな位置に、瓶に入ったジャムのようなものがあったが、あれは取ってはいけないと本能が告げていた。

「えいー!」

品定めをしていると、夏海ちゃんが第一投。見事にアファロチョコをゲットしていた。

「ポーン！」

上手だ。俺もうかうかしてられない。

「よし、いくぞ」

まずは一投目。中ほどにあるパリングルスを狙うけど、力加減がわからず、大暴投だった。

「あれ？」

「ポーン」

残念ー。と言われた気がした。

気を取り直して二投目。今度は力が弱かったのか、品物まで届かなかった。前のヨーヨーの時もそうだったけど、子供の時の感覚で投げると全然違う。

「えーいー！」

続いて夏海ちゃんの二投目。今度はキャラメルをゲットしていた。

「夏海ちゃん、上手だね」

「えへへ、実は得意なんですよー」

その後の三投目、四投目はさすがに夏海ちゃんも外してしまつたが、最後の五投目でパリングルス（濃厚ピーチ味）をゲット。十分元は取った気がする。

俺も頑張らないと、このままじゃ負けてしまう。

「えーいー！」

俺は続く三投目で、ようやくキャラメルをゲットしたけど、残りの輪っかは2つ。一つずつゲットしたとしても、良くて夏海ちゃんとは引き分けた。

俺の手元に残された輪っかは2つ。一発逆転を狙うには、一番奥にそびえ立つ塔を狙うしかない。

……今の俺の腕力なら、あのお菓子の塔も狙えるはずだ。

「いくぞー！」

子供の頃は決して届かなかった高みへ向け、俺は輪を投じる！

「あ」

勢いはあったものの、高さが全然足りなかった。俺の投げた輪っかは勢いよくお菓子の塔にぶち当たる。

そして、その塔は大きな音を立てながら崩れてしまった。

「あちゃー……失敗しちゃった」

「ポン！ ポン！」

「え？ 倒したら、元通り立ててくれって？」

「ポン！」

言われてみれば当然だ。崩れてしまったお菓子の塔は、イナリでは立てられないのだから。

「よし、ちよつと待ってるよ」

俺は屋台の中に慎重に歩みを進め、崩れてしまった塔の再建に取り掛かる。

「誰が立てたのか知らないけど、うまく立てたもんだよな」

パリングルス、ベスコ……記憶を頼りにお菓子を積み上げていく。

「あ、危ないです！」

「え？」

夏海ちゃんの声が出たけど、遅かった。肘が当たってしまい、隣にあつた塔が倒れてしまった。

「し、しまった。お菓子が混ざって、どっちの塔のかわからなくなっちゃった」

「あ、鷹原さん！ お菓子踏んじやってますよ！」

「げ、やばい！」

思いつきりマーベルチョコを踏んでいた。この暑さで溶けたチョコが染み出して、足元が大変なことになってる。

「うわ、うわわわわ！」

「ポン！ ポーン！」

慌てて足をどけたらまた別の塔に当たって崩し、反対の足ではキラメルを踏んでしまっていた。もはや地獄絵図だ。

「た、助けてー！」

「……何をやってるんですか？」

聞きなれた声が出て振り返ると、そこには藍が腕組みをして立っていた。

「いや、えっと、これはその」

「とりあえず、屋台から出てもらえますか？」

「はい……」

「まったく。屋台の様子を見に来て正解でした」

「ごめんなさい」

俺はせめてもの誠意を見せるため、コンクリートの上に正座していた。

夏海ちゃんはそんな俺の様子を、少し離れた場所から心配そうに見ている。

最近俺、藍に怒られてばかりな気がする。

ちなみに、お菓子の塔は藍によつてあつという間に再建され、悲惨なことになっていた床も綺麗になった。

そして、俺が唯一取っていたはずのキャラメルは藍に没収されてしまった。

「ふんづけてしまったお菓子の分です」

「ごもつともだ。返す言葉もない。」

結局、夏海ちゃんとの輪投げ勝負は0―3の完敗だった。

「あの、鷹原さん。良かったら私のキャラメルあげましょうか？」

「あはは、ありがとう夏海ちゃん」

打ちひしがれていた俺を見て、夏海ちゃんがキャラメルをくれた。こういう時つて、他人の優しさが身に染みるよね。

「……そういえば、今日の夜に皆で花火大会をやるんですが、お二人も来ませんか？」

イナリにバイト代の油揚げをあげながら、藍が俺達の方に言う。

「え？ 花火大会ですか？」

「はい。今日のイベントです」

「ぜひ参加したいです！」

花火という言葉を聞いて、夏海ちゃんの目が輝いていた。花火、好

きなんだろうか。

「そういえば、今年はまだ花火をやってなかったな」

「花火の後もお楽しみがあると行ってましたし」

「え、何？」

「なんでもないです。それより花火は各自、自前で用意してくださいね」

「皆で持ち寄るんだな。わかった」

「駄菓子屋に色々な種類が売ってますので、お買い求めください」

「はい！」

ちやつかり店の宣伝していた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港で藍とイナリと別れ、加藤家に帰宅する。時計を見ると、ちょうどお昼時だった。

ちょうど鏡子さんが居たので、夜の花火大会についてお伺いを立てる。

「皆で行くなら大丈夫だね。あまり遅くならないうちに帰ってきてね」

「わかりました」

快くOKしてもらえた。

「そうだ。その代わりと言ったらなんだけど……」

交換条件として、鏡子さんから台所や洗面所といった水回りや、玄関と庭先の掃除をお願いされた。

元々俺達が受けていた家事ばかりだし、昼食を済ませたら手分けしてやってみよう。

「というわけで夏海ちゃん、家事が終わってから花火買いに行こうか」「はい！」

楽しみなのか、うきうきとした足取りで台所へ向かう。

「鷹原さん、今日はどのカップうどんにするんですか？」

「今日はわかめうどんにしようと思う」

わかめは食物繊維にミネラルも豊富。最高の食材だ。乾燥してるけど。

「わかめうどんでしたら、良い物がありますよ」

そう言っつて夏海ちゃんが戸棚を漁る。俺はその間にカップうどんのふたを開け、ポットのお湯を確認しておく。

「あ、ありました！」

しばらくすると、夏海ちゃんが戸棚から袋を取り出した。

「夏海ちゃん、それ何？」

「味噌汁に入れる乾燥わかめです！ これを入れたら、ポリウム増しますよ！」

「確かにポリウムは増すね。お願いするよ」

「はい！」

ザラザラと俺のカップうどんに乾燥わかめを足してくれる。まあ同じわかめだし、味が変わることもないだろう。

そしてお湯を入れて、3分待つ。

「うわっ!？」

3分後、蓋を取ってみると真っ黒だった。わかめがもの凄く増えてる。

そして、わかめの下の麺はまだ硬かった。そしてスープがもの凄く少ない。どうやらわかめの方に先に水分を取られてしまったみたいだ。

「……お湯、足しますか？」

その光景を見て、夏海ちゃんがポットのお湯を出してくれる。

「お湯を足してもスープが薄くなっちゃうだけだね」

「わ、私が乾燥わかめを足しちゃったせいですね……どうぞ、私のを食べてください！」

すごく申し訳なさそうに、自分の分のわかめうどんを差し出してくる。

「いや……乾燥わかめの追加を頼んだのは俺だし、気にしないでいい

よ。何とか食べるから」

笑顔で差し出されたカップうどんを押し返し、自分の真っ黒いうどんに取り掛かる。

わかめは磯の香りがして美味しかったけど、麺の方はコシが足りすぎだった。

食後は頼まれていた家事を終わらせてしまう。

俺が洗面所やお風呂、シンク台を掃除し、夏海ちゃんが玄関から庭先の掃除をした。

それも14時くらいには終わり、その後は花火を買いに駄菓子屋へ向かった。

「くーださーいなー」

「……あれ？」

しかし、いざ駄菓子屋についてみると誰もいない。

「くーださーいなー!」

もう一度、少し大きな声を出してみる。

「はーい! ちょっと待っててー!」

……奥の座敷から蒼の声がした。

「なんだ蒼、いるんじゃないか」

俺達は奥の座敷へ向かい、ふすまを開けた。

「……へっ?」

……そこには下着姿の蒼が居た。

「……」

「……」

俺たちは三人、無言で見つめあう。

ちりちりーん。と風鈴の音が聞こえた。

「……うわあああああつ!」

そして、俺は叫んでいた。

「だからなんであんなに叫ぶのよ！ 早く閉めなさいよ！ 夏海ちゃんも見てるし！」

「ぐ、ごめん！」

俺は急いで夏海ちゃんの目を隠す。

「なんでそつちを隠すのよ!？」

「きよ、教育に良くないと思って！」

「教育とかいいから、さっさと出てけー！ー！」

「いてて……ひどい目にあった」

去りに際にテレビのリモコンを投げつけられ、思いつきりこぶができてしまった。

「ひどい目にあったのは、蒼さんの方だと思えますけど」

「ああいう時、とっさに動けないんだ」

「それはわかりますけど……」

蒼が出て来るまで、二人でベンチに座って例のボトルシップを眺めていた。

「……おまたせ」

蒼がむすつとした顔で出てきた。客商売として、その表情はどうなんでしょう。

「で、何？ かき氷？」

「今夜、花火するって聞いてさ」

「ああ、今日のイベントね。藍から聞いてるわよ」

「こつちも自前でいくつか持って行こうかと思って」

「花火ね。こつちよ」

蒼についていくと、店の奥に花火コーナーがあった。

都会の店みたいに小綺麗にしてなく、ごちゃごちゃと寄せ集めたような感じがまたいい。

まるで宝探しでもするみたいに、夏海ちゃんと二人でその中を漁る。

「これなんですか?」

「ネズミ花火だよ。最近見ないよね」

「ネズミ花火?」

「こう、ネズミみたいにチヨロチヨロ動き回る花火なんだ」

俺は数本の指で円を描き、その様子を再現する。

「面白そうですね」

夏海ちゃんは早速ネズミ花火を手を取った。

その後も目を輝かせながら、花火コーナーを漁る。

「この束はなんですか?」

「線香花火だね」

「これ、どつちに火をつけるんです?」

……あれ、どつちだっけ?

「蒼、これってどつちだっけ?」

「つけてみてのお楽しみよ」

……きつと蒼もとつきには解らなかつたんだろう。

「この丸いのはなんですか?」

「……こつちがかんしゃく玉。こつちがけむり玉」

「あれ、しろは?」

蒼とは別の声が聞こえたと思ったら、背後にしろはが居た。

「しろは、どうしてここに?」

「スイカバーを買いに来たら、二人の声が聞こえたからなるほど。確かにスイカバーを持っている。」

「夜の花火を選んでの?」

「はい!」

「しろはも来るのか?」

「うん。皆でやった方が楽しいし」

「そうだ、しろはのおすすめの花火とかないのか?」

「私のおすすめは、これとこれ」

しろはが選んだのは、見慣れた打ち上げ花火と、円柱形の黒い物体。

「この変な形のも、花火なんですか？」

「ヘビ花火だな。後片付けが大変なんだぞ」

「というかしろは、こんなマニアックな花火が好きなのか？」

「によるよろしてて、見てると落ち着く」

「そ、そうなんですかねー」

少し引いてる。それでもちゃんとヘビ花火を買おうとしている辺り、夏海ちゃんはえらい。

「こつちのは打ち上げ花火ですか？」

「落下傘だな。打ち上げた後にパラシュートが落ちてくるやつ」

「そんなのあるんですか？」

「最近見ないかもね」

「落下傘がゴミになるとか、火がついて危ないとか、色々言われてるみたいだからな」

「最近はお噴水みたいな花火ばかりだもんねー。見た目は派手だけど、すぐ終わっちゃうし」

蒼がしろはからスイカバーの代金を受け取りながら、そう話す。

「あの、これも花火なんですよね？」

「あ、それは金魚花火だねー」

「鷗さん？」

「やつほー、なつちゃん」

いつの間にか、しろはの代わりに鷗が背後にいた。

「キンギョ？」

「水の上を走る花火だよー」

「浜辺でやるんだし、買って行ってもいいんじゃない？」

「はい！・ そうします！」

物珍しさもあってか、両手いっぱい花火を抱える夏海ちゃん。

「あれ、なつちゃんも花火の調達？」

「はい！」

「鷗もそうなのか？」

「それもあるけど……例のアレが入荷したって聞いて」

「例のアレ？」

鴉は俺の言葉を無視して蒼の方へ行き、耳打ちをする。

「……三角形の秘密、ありますか？」

「入荷してるわよー。昨日のボトルシップのお礼もあるから、好きなだけ持って行って」

「わーい！」

鴉は駄菓子屋の奥で、どつかで見たことある三角形のお菓子をいくつもスーツケースの中にしまっていた。

「皆が続々と花火の調達に来てるけど、良一たちは来たのか？」

俺はそんな鴉の様子を眺めながら、蒼に聞いてみる。

「良一と天善は午前中に来たわよー。ロケット花火やけむり玉をダースで買っていったけど」

「え、あれ危ないのに」

しろはがスイカバーを食べながら、心配そうな顔をする。

「海に向かって撃つんなら問題ないんじゃない？ もし危ない事しちゃうなら、のみきが止めるでしょ」

「そうだろうけど……」

「あおちゃん、私にも花火見せてー」

「いいわよー」

「あ、できればダースで欲しいんだけど……」

「鴉もなの？ 奥にあるから、好きなだけ見ていいわよー」

「はーい」

鴉は駄菓子屋の奥へ消えていく。

「そうだ羽依里。今日は食堂、早くに開けておくから」

しろははベンチに座りながら、店の中の俺たちに伝えてくれた。

「じゃあ、少し早めに見て行かせてもらおうよ」

「うん」

「あおちゃん、ひとまずこれだけお願い」

どすつ、という音がした方を見ると、ものすごい量の花火を持った鴉が会計をしていた。

「それだけの花火、どうするんだ？」

「教えてあげないよ！ じゃん！」

いらつ。

「いらつとしないですよ。今日の夜まで秘密」

よくわからないけど、夜まで楽しみにしておくことにした。

「……蒼さん、私もお会計良いですか？」

「いいわよー。たくさん買ったわねー」

蒼が夏海ちゃんから花火を受け取って、金額の計算をする。

「全部で1200円ねー」

……仕方ないとはいえ、結構な金額になってしまった。

「えーつと」

夏海ちゃんが財布の中身と相談している。

「俺も出すよ。一緒に楽しむんだし」

俺も半分は出そうと、財布を取り出す。

「あ、これ使っていいよ」

それを遮るように、しろはが一枚の紙を取り出す。

それは先日のスイカバー早食い競争で獲得した、この駄菓子屋の1000円商品券だった。

「え、悪いですよ」

「これ使うと、おつり貰えないらしいの。よく見ると使用期限もあるし、使いどころに困ってたの」

駄菓子屋で一度に千円以上の買い物って厳しいよな。その上使用期限有りって。

「私、駄菓子屋じゃスイカバーくらいしか買わないから」

誰が作ったのかわからないけど、たばかられたな。

「だから夏海ちゃん、使っていいよ。私も花火、一緒に楽しむんだし」

「それじゃあ……使わせてもらいます。しろはさん、ありがとうございます」

「うん」

花火を買い込んだ俺達は、一度加藤家に戻り、頃合いを見てしろは食堂へと向かった。

「しろはー」

「あ、いらつしやい」

「なんだ、鷹原たちも来たのか」

食堂に入ると、カウンターにのみきが座っていた。

「よう、のみき」

「のみきさん、こんばんわです!」

俺達二人もその隣に座る。

「のみき、何を食べてるんだ?」

人の食事を見るのは良くないけど、隣の席だからどうしても目に入る。定食みただけど、メインの皿には見慣れない天ぷらが乗っている。

「日替わりの山菜定食だそうだ。先日はハンバーグ定食で子供っぽい所を見せてしまったからな。少し背伸びをしてみた」

「気にしてたんだな……。」

「美味しいのか?」

「正直なところ、少し苦い」

「だから、苦いよって言ったのに……無理しちゃダメだよ?」

しろははあきれ顔で、ケチャップとマヨネーズをのみきの前に置いた。濃い調味料で味を誤魔化して食べる作戦らしい。

「羽依里たちは何食べる?」

「それじゃ、今日は親子丼(B)にしようかな」

「コロッケ定食ください!」

「うん。少し待っててね」

しろはが調理に取り掛かる。

待つ間、隣のみきと話をする。

「なあ、この店の日替わりは変わったメニューが多くないか?」

「そうか? 私が頼む時は普通だが」

「この間は日替わりで、あんぱん定食が出たぞ」

「そ、それは食べあわせ的にどうなんだ……?」

「それなりに食べられたけど……しろはのじーさんが寄合でもらって帰ったらしい」

「ああ……孫娘にあげると言って、寄合で余ったあんぱんを大量に持って帰っていたな。そういえば」

あ、のみきはいつも寄合に出ているらしいから、その現場も見ていたのか。

「しろはのじーさん、最近はしろはのために、そこまでするのか……？」

「寄合でも、鳴瀬爺はだいぶ丸くなったと言われている。孫娘もそうだが、その彼氏の影響もあるんだろうと噂だ」

「え、俺？」

「ああ。男同士にしかわからないものなんだろうが、張り合いがあると言っていたしな。鷹原も胸を張っていいと思うぞ」

「……二人で何の話をしてるの？」

「いや、こっちの話だ。ところで、のみきも今日の花火大会は来るんだろう？」

「私も行くぞ。鷗も楽しみにしているしな」

「そういえば、鷗と一緒に食べに来なかったのか？」

「色々と花火大会の準備をしていたな。食事は三角形の秘密で済ませるそうだ」

それって栄養的にどうなんだろうか。本人が良いならいいけど。

「はい、親子丼（B）とコロツケ定食おまたせ」

その時、海鮮親子丼とコロツケ定食が俺達も前に置かれた。

「美味しそうですねえ」

「うん」

俺も念願の海鮮親子丼だ。どんぶりに盛られたサケといくらの上に、海苔や葱といった薬味が乗ってる。美味しそうだ。

「それじゃ、いただきますーす」

二人揃って食事を始めた。

海鮮親子丼はワサビ醤油に生姜の隠し味が効いて、体を冷やし過ぎないよう工夫されていた。味もあっさりしていて、食べやすかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

日が暮れた頃、自前の花火を持って浜辺に到着する。

そこには良一に天善、藍と蒼、紬と静久、しろはとのみき、鷗と、いつものメンバーが集まっていた。

「遅いぞ二人とも」

「もう始めちゃうわよー?」

「お二人とも、持ってきた花火はここに置いてください」

藍に案内された場所に行くと、皆が持ってきたらしい花火がいか所に集められていた。どうやら、持ち寄った花火を一旦ここに集め、自由を持って行くスタイルらしい。

というわけで、俺も持っていた花火をここに置く。

「ナツミさん、シズクが花火セットを買ってきてくれたので、一緒にやりましょう!」

「はいー!」

浜辺に着くが早いか、夏海ちゃんが紬に引っ張っていかれた。本当に仲が良いな。

「鷹原も来たか」

一人になったところで、のみきが声をかけてくれた。

「あちこちに火のついたローソクを用意してあるが、一応マッチも用意してる。必要だったら言ってくれ」

「いざという時の水はあるのか?」

「ローソクと同じ場所に、水の入ったバケツを用意している。もしそれで消せない程の火が起きてても安心しろ。私が消す」

のみきはハイドログラフイーター改を構えている。頼もしい限りだ。

「皆、終わった花火は必ずバケツに入れて最後に持って帰るように。最低限のマナーだぞ」

のみきの指示が飛び、あちこちから返事が返ってくる。

真つ暗な浜辺のあちこちにローソクの小さな火が灯り、なかなか幻想的な光景だった。

俺も適当にブラブラしながら、皆の花火に混ざることにする。

「おーい、紬ー、静久ー」

「あら、パイリ君」

紬達は夏海ちゃんと一緒に、ススキ花火やスパーク花火を楽しんでいた。よく店で売ってるセット花火の一部らしい。一つの袋に色々な種類の花火が入ったアレだ。

そこまで派手さもないけど、手持ち花火の定番と言った感じで、大勢で楽しむにはちようど良い。

「タカハラさんも一緒にやりましょうー！」

俺も紬からススキ花火を貰って、夏海ちゃんの花火から火を分けてもらおう。

「綺麗ですねえ」

途中で色が変化するタイプみたいで、なかなか綺麗だった。

「ロケット花火！ いくぜー！」

続いてスパーク花火をやっていると、向こうの波打ち際の方で良一の声が聞こえた。

「二人とも！ やるなら海に向かってやりなさいよー！」

「わかってるよー！」

始めは言われた通り海に向かって発射していたけど、気になって見続けていたら、良一が天善を狙って発射していた。

危ないことをしてるなと思ったけど、よく見ると天善はそれをラケットを使ってうまく打ち返していた。高速で迫るロケット花火を撃ち返す光景は、なかなかにかっこいい。きつと凄いトレーニングになるんだろう。

「夏海ちゃん、ネズミ花火やるよ」

「はい！ 見たいです！」

ススキ花火が終わった頃を見計らって、しろはがネズミ花火に火をつける。地面に置かれたネズミ花火はものすごい速さで地面を走り

回る。

「わっ、わっ、わっ!？」

「むぎゆぎゆぎゆぎゆ!？」

二人が必死に踏まない様に飛び跳ねてる。微笑ましい。

「よし、次はしろはおススメのへび花火をみせてやろう」

ネズミ花火が大人しくなった頃、今度は俺がへび花火に火をつける。

「見たいです!」

そう言った夏海ちゃんだったが、少し離れて見ている。

「夏海ちゃん、もつと近くに寄っても大丈夫だよ」

「え、いいんですか?」

さっきのネズミ花火のせいもあるのか、警戒していたようだった。「そんな派手に爆発するものでもないし」

火をつけると、によるとよろよろと黒い物体が溢れてきた。

「な、なんですかこれ」

「へびっぽいでしょ」

「確かにそうですけど、ちよつと不気味ですね」

「ぶ、不気味……見ていると落ち着くのに」

おすすめの花火を不気味と言われて、しろはが凹んでいた。

そういえば天善たちはどうしてるんだろうと、浜辺の方を見ると……今度はかんしゃく玉やけむり玉を投げ合っていた。

例によって爆発したら危ないと思っていたけど、ギリギリのタイミングで天善がラケットで海の方に打ち出していた。きつとあれも良いトレーニングになるんだろう。

「なっちゃん、ちよいちよい」

鴉は手招きをして、夏海ちゃんを波打ち際に呼び寄せる。

「鴉さん、なんですか?」

「ほら、金魚花火!」

そして持っていたマッチで金魚花火に火をつけると、そのまま海へ投げ放つ。

一瞬の間の後、金魚花火は煙をあげながら、波打ち際を結構な速度で進んでいく。

「おおー、本当に金魚みたいに泳いでます!」

……そして、爆発した。

「さ、最後は爆発しちゃうんですね」

どうも爆発するタイプの花火だったみたいだ。夏海ちゃんが驚いている。

「金魚の一生は儚いもんねえ」

鳴はしみじみと言っているけど、金魚って結構凶たく生きるんじゃないかって思ったわけ。

「うおおおー!」

叫び声があったので、反射的に声のした方を見ると……天善の頭が燃えていた。どうやら、けむり玉とロケット花火を同時に使ってトレーニングをしていたようで、煙のせいでロケット花火を避けきれなかったみたいだ。

天善は直後に海に飛び込み、事なきを得ていた。

「落下傘、行きますよ」

そんな状況には見向きもせず、藍が落下傘花火に点火する。

大きな炸裂音の後、上空から小さな落下傘がフワフワと降ってくる。

「あの落下傘をゲットできた人は、羽依里とデートだよ!」

ちよつと鳴、勝手な事言わないでほしい。

しかし、落下傘は海風に流され、波打ち際で天善の介抱をしていた良一の頭の上にピンポイントで落ちた。

「なんだこれ?」

「おお。まさか羽依里とのデートは三谷君で決まり!」

いやいやいや、決まらないから!

「ひゃっほー!」

お前もなんで喜ぶ!?

「鷗、さっきの話は取り消してくれ！」

「か、鷗に二言はない！」

「それ使いどころ違うから！」

結局、なんだかんだといちやもんをつけて、良一とのデートはなしにしてもらった。

いくらなんでも、野郎とのデートは嫌だ。危ない危ない。

その後、最後の締めにと皆で線香花火をやっていると、鷗がスーツケースを持って立ち上がる。

「それじゃあ、最後にファイナーレといこう！」

鷗がスーツケースを開くと、中から無数の導火線で繋がれた大掛かりな仕掛け花火が出てきた。

「え、なにそれ？」

鷗はそのスーツケースを引っ張って、海の方を向ける。

「すぐ終わっちゃうと思うけど、すごい派手だから。皆しっかり見てね！」

皆がなんだなんだと集まってくる。

「まさか、スーツケースから花火を撃つのか？さすがに危ないんじゃない？」

「大丈夫だよ。耐熱仕様にしてあるし、いざとなったら、のみきさんにスーツケースごと海に吹き飛ばしてもらおうから！」

のみきの腕ならできるだろうけど、そこまでしてやるべきなのか。

「なあ鷗、どんな花火なんだ?！」

「駄菓子屋さんで買ったロケット花火30ダース分、トンボ花火20ダース分、合計600発を連結したの。名付けて、愛と勇気の600連発！」

花火の改造は本当に危ないのでやめましょう！

「それでは、点火！」

鷗が始点の導火線に火をつけて、こっちに急いで戻ってきた。

導火線に導かれ、端から順に着火していく。やがて次から次へと海に向けてロケット花火とトンボ花火が入り乱れるように撃ち出されていく。

なんだこれ。鷗の奴、夕飯もまともに食べずにこれ作ってたのか？

物凄い音と光。まるで迫撃砲みたいだ。

「海の方を見てください！ ものすごく綺麗ですよ！」

海にもウミホタルが集まっているんだろうか。ロケット花火が着水した所から、小さな光の粒が波紋状に広がって、とても綺麗だった。

「……すごい迫力だったな」

思わず見入ってしまった。

「すごかったわねえ」

「まだ耳がきーん、ってしてます」

「いやー、頑張って作った甲斐があっただってものだよ」

鴉のスーツケースは所々黒くなってるが、こすれば大丈夫なんだそうだ。さすが耐熱使用のスーツケースだ。

「楽しかったです」

夏海ちゃんという言葉で、皆も笑顔になっていた。

時間はまだ20時半と少し早いけど、そろそろお開きにするのもいいかもしれない。

「皆、今日はありがとう。それじゃ、そろそろ……」

「羽依里、ちよつと待て」

帰ろうか、と言いかけた俺を良一が制止する。

「え、どうしたんだ？」

「……第一回！ 肝試しでホラー！ 納涼大会ー！」

良一が高らかに次のイベントの開催を宣言していた。

「って、肝試し？」

「ああ。肝試しだ」

発案者らしい良一は得意げだ。

そういえば、花火大会の後もお楽しみがあるとか、藍が言ってたよな気がする。

この肝試しがそうなのか……。

正直、この手のイベントはあまり得意じゃないんだけど。

「えつと、どういうルールでやるんですか?」

夏海ちゃんも乗り気みたいだし、これは無下に断れそうもない。

「くじ引きでペアを決めて、ここから神社まで二人で歩くんだ」

神社か……夜の神社とか、絶対不気味だよな。

「賽銭箱の前にお札が置いてるから、それを持って帰ってくる。簡単だろ?」

「なあ良一、ペアを作るのはいいけど、ここに居るのは11人だぞ?

1人余るんじゃないか?」

「進行役として、私が残ろう」

そう言ったのはのみき。昨日のビーチバレー大会でも審判役を買って出てくれたのに。良いのだろうか。

「私はその、この手のものが苦手なんだ。取り乱して醜態を晒したくない」

少し恥ずかしそうに言う。取り乱すのみきも見てみたいと思ったのは、俺だけじゃないはずだ。

「……こほん。ともかく、まずはくじ引きだ。最初にしろはと鷹原に引いてもらう」

「え、俺達?」

「私、別に最後の方でも……」

「いや、ここは先に引いてくれ」

「うん……」

半ば強引に俺としろはが最初のくじを引く。二人そろって『5』の番号が書いてあった。

その後も皆がくじを引いていき、ペアを組んでいく。結果、俺としろは、良一と藍、天善と静久、紬と蒼、鷗と夏海ちゃんのペアが組まれた。

「よし、それじゃあ番号順に出発していくぞ。前のペアが出発してから5分後に、次のペアが出発するんだ」

参加者に組み込まれた良一に代わって、のみきが進行役となる。

「なあ、これって実は全部同じ番号が書いてあって、俺としろはが組む

のは仕組まれてた……とかじゃないよな？」

他の皆が、引いたくじの番号を全然見せてくれないのがすごく気になる。

「そんなことはないぞ。偶然だろ」

「そ、そんなことないわよ」

「そうそう！ そんなことないよ！」

皆、本当に嘘が下手な……。

夏海ちゃんも鷗に耳打ちされて以後は黙っちゃったし。これ絶対仕組まれてるよな。

「それより、今回も優勝賞品が出るぞ。最新式中華鍋だ」

「最新式……なんでそんなものがあるんだ？」

「少し前に役所でもらった品なんだが、この島の住人はほとんどが自前の中華鍋を持っているからな。宝の持ち腐れなんだ」

やっぱここの島民の中華鍋への情熱はおかしい。

「……羽依里、頑張ろう」

しろはが急にやる気になった。

「実は、そろそろ食堂の中華鍋が怪しいから」

「怪しい？」

「おとーさんの時代から使ってるから、そろそろ穴が開きそう」

「マジなのか」

「うん、マジ。だから、なんとしても欲しい」

「わかった。頑張ろう」

「それじゃ最初のペア、出発してくれ」

のみきの指示を受け、最初に良一と藍が出発する。

「ほら、天善ちゃん行きますよ」

「いてっ！ 脇腹引っ張らないで！」

「蒼ちゃんとが良かった……蒼ちゃんとなら、きっと可愛い悲鳴が聴けたはずなのに……ブツブツ」

なにやらブツブツ言いながら、闇夜に消えていった。

ちゃんと帰ってくるか心配だ。

もしたら、せつかくの雰囲気も台無しだろうに。

「これは、絶対何かある」

「うん。私もそう思う」

先に出発した皆が手を組んで、俺としろはと怖がらせようとしてくるのは明白だった。

俺達は自然に手を繋いでいた。

浜辺から左手に灯台を見ながら、田舎道に差し掛かる。左右を森と草むらに囲まれた一本道。仕掛けて来るならここだろう。

「んん、パーージ！ んん、パーージ！」

「出た————！」

右の草むらから、妙なボディペイントを施した謎の怪人があ———
！

「アオチャ————ン！」

「うわ————！」

左の森から、赤いマントを羽織った髪の長い女が———！

俺は恐ろしさのあまり、その場にしゃがみ込んでしまう。

「羽依里、しっかりして。良一と藍だよ」

「へっ？」

しろはに言われて顔を上げるが、そこには誰の姿もない。

「だ、誰もいないじゃないか……」

「凄い速さで森の中に走って行っちゃった」

俺はしろはと腕を組む。俺から組みにいった。

「……そういうのって普通、女の子からするんじゃないの？」

「こ、腰が抜けた」

「え、今ので？」

「……ああいうのに慣れてないんだ」

「シティーボーイさん、しっかりして」

しろはと腕を組みながら一本道を進んでいくと、大きな木が見えてきた。

「うわー！ー！ 木で首をつってる人がー！ー！」

「……よく見て。人形だよ」

「な、なんだ……驚かせやが」

「うけー！ー！ー！ー！」

「きゃああああー！ー！ー！ー！」

安心させといて、木の上からミイラ女が降ってきたー！

「ミイラでっせー！ 怖いでっせー！」

なんだか柔らかいけど怖い——！

「助けてー！」

「羽依里、しつかり……鳴だよ？」

「へっ？」

しろはに言われて我に返る。また誰の姿もなかった。

「凄く速さで森の中に入っちゃった」

「うう……なんでこんな目に……」

なんとか一本道を抜けて、住宅地に到着した。ここなら皆も何も仕掛けてこないだろう。

「チヨレー！ー！ー！ー！」

うわー！ー！ 電柱の陰から巨大なモンスターがー！ー！

「良く見て。ペケモンだよ」

良く見たらペケモンの着ぐるみに大量の洗濯バサミがつけられていた。色々な意味で怖い。

「シャアー！ー！ー！ー！」

……謎のペケモンは足早に逃げ去っていった。

「さっきの声、きつと天善君だよ」

「心臓がめちやくちや高鳴ってる」

「深呼吸して、深呼吸」

必死に住宅地を歩いていると、駄菓子屋の前を通りかかった。

「う、うらめしやー！ー！ー！」

うわー！ー！ 駄菓子屋の中から着物を着た女がー！ー！

「出たー！ー！ 妖怪ピンク！」

「誰が妖怪ピンクよ！ 雪女よ！ この！」

「つ、つめたー！ーい！ 助けてー！ー！ー！」

「蒼がかき氷をぶつけたただけだよ……ほら、このハンカチで拭いて」

「あ、ありがとう……」

俺はしろはのハンカチを頭に被って、少しでも視界に妙なものが入らないようにしながら進む。

「……羽依里も妖怪みたいだよ？」

「し、しろはは平気なのか？」

「家が山の方だし。色々と慣れてるから」

「そういえばそうだよな……」

同じ島に住んでいるとはいえ、俺の住んでいるのは住宅地だし。なんだかんだで夜になっても街灯があるし。

「ん……？」

ふと、電柱の近くに置かれた真新しいポリバケツが目に残る。こんなのあつたけ？

そして、なんかガタガタと動いて……蓋がゆっくりと開く。

「おっぱいがひとつ、おっぱいがふたーつ……ああ、足りないわー……」

うわー！ー！ これはあの有名な皿屋敷のお静さん!? まさか現代はポリバケツから出て来るなんてー！ー！

「ちよ、ちよつと羽依里!?!」

俺は思わず駆けだして、神社の入り口までたどり着いた。

そこまで距離はなかったからか、すぐにしろはも追いついてきた。

「羽依里、大丈夫……？」

「だめかもしれない」

「しつかりして。後はお札を持って帰ればいいんだから」

「そ、そうだな。よし」

覚悟を決めて神社の境内に足を踏み入れる。今のところ誰の気配もない。

向かい合ってる狛犬の間を抜けて、賽銭箱に近づ……。

「うん。私もショック受けてる……」

ちなみに俺が気絶する原因となった鈴は、いつの間にか元の場所に取り付けられていた。

「鷹原さん、オカルト物は得意なんじゃなかったんですか？」

夏海ちゃんも戸惑い顔だ。

「得意なんだけど……知識がある分、余計に想像力が働いちやつて」のみきが懐中電灯を持っていたので、今はそれなりに明るい。その明かりの下で見ると、皆の姿も滑稽なものだった。

「良一のボディペイントもすごいな。人体模型か」

良一の右半身には内臓や筋肉のイラストが描いてあった。暗がりで見るとこれは怖い。

「藍に描いてもらったんだ。リアルだろ」

「ああ、マジでビビった」

「羽依里さん、私の格好は何かわかりましたか？」

「藍は、もしかして赤マント？」

「そうです」

赤マントつてのは、赤が好きとか青が好きとか白が好きとか聞いてくる怪人だ。

藍が着てると、魔法のコスプレにしか見えないけど。

「ちなみに、私はもちろん蒼が好きです」

「俺もしろが好きだぞ」

「お熱いわねー。さつきまで気絶してたのに」

「う、うるさいぞ、妖怪ピンクめ」

「だーかーらー、雪女だつて言ってるでしょ！」

「夏だけど」

「う、うるさいわね。めちやくちや怖がってたくせに」

「ところで、あの雪……じゃない、氷はどうやって用意したんだ？」

「駄菓子屋のおばーちゃんに頼んで、かき氷器を借りたの」

そこまでやるとか、気合い入れすぎだろ……。

「それにその衣装、よく用意できたな」

「家で山の祭事に使ってる衣装なのよ。ちよつと借りてきちやつた」

良く見たら着物じゃない。なんて言うんだらうか、巫女服に近いよ
うな。

「蒼の家は、特別な、お役目があるからな……」

「天善は汗だくだな」

もはや海水なのか汗なのか、見分けがつかない。

「水織先輩に頼まれたとはいえ、あの着ぐるみを着て、全力疾走したか
らな……」

やっぱりあのペケモンの中身は天善だったのか。

「今日の午前中に私とツムツム、ズクズクの三人で着ぐるみに洗濯ば
さみをつけまくったしね！」

「はい！ 頑張りました！」

俺の知らないところで、皆動いてくれていたらしい。

「準備するのは楽しかったですけど、神社で待っている間は怖かった
です」

そういうのは紬。

夜の神社だもんな……蒼と出発する時の紬の恐がり様は、演技じゃ
なかったわけだ。

一緒に出発したはずの蒼が駄菓子屋でスタンバイしたんなら、そこ
から紬は一人で神社まで行かなければならなかったはずだし、夏海
ちゃんと合流するまでの間は一人。それは怖い。

「ナツミさん、来るのが遅かったですし。凄く怖かったです」

「ご、ごめんなさい。ちよっとお花を摘みに行っていて……」

そ、それなら仕方ないよね。

「ねえねえ羽依里。ところで私の衣装はどうだった？」

「鷗のミイラもマジで怖かったぞ。上から降ってくるとは思わなかつ
たし」

「木登りは得意だからね！」

「ところで鷗、その包帯の下って……」

「え、もちろん下着だけ」

「あ、だからか」

今思い返してみると、木から落ちてきたときにその、ものすごく柔

らかくて……む……む……ごっほ。

「むごっほ？」

「なんでもない。魔よけの呪文だ」

「ところでパイリ君、私のお静さんには何も言ってくれないのかしら」
「あーうん。今冷静になつて考えると、おっぱいが足りなくても別に怖くもなんともないような」

「本気で言ってるのパイリ君!? おっぱいが足りなかったら、怖いに決まってるじゃない！」

「そうです！ 怖いんですよ！」

静久だけじゃなく、紬からも怒られてしまった。何か逆鱗に触れたんだろうか。

「あれ？」

見ると、紬と夏海ちゃんはスプレー缶の他に、何やら袋を持っていた。

「紬、それなに？」

「実は、アオさんの提案でトイレのむぎゆ子さんになる予定だったのですが、あいにく肝試しのコースにトイレが無かったので、諦めたんです」

トイレのむぎゆ子さん……あれだろうか。夜な夜なトイレから『むぎぎぎぎぎぎ』と声がるんだろうか。それはそれで怖いかも。

大方、あの袋にはその為の衣装が入っているんだろうな。

「私は鷗さんから猫娘になれと言われて、これを渡されたんですけど、どうしても勇気が出なくて」

夏海ちゃんが持っていたのはネコミミのカチューシャだった。鷗のやつ、何用意してるんだ。

「なつちゃん猫娘と、ツムツムのむぎゆ子さん、見たかったなー」

鷗は心底残念そうだった。

「次やる時は、のみきもオバケ役で参加したらどうだ？」

「なに、私もか？」

「ピヤンシーとか似合うんじゃない？」

「そ、それは喜んでいいものか……」

その後もしばらくワイワイと話をしていた。
脅かし役をやってくれた皆も満足そうだし、そろそろ本当にお開きの時間だろう。

「そういえば、このお札は誰に渡せばいいんだ？ のみきか？」

「うん？ なんだ？」

「いや、だからこのお札なんだけど」

「……お札など用意していないぞ」

のみきの表情が強張っている。

「え？ 浜辺では持って帰って来いって言ってたじゃないか」

「あれは二人を神社に向かわせるための口実だ。実際には置いていない。散々怖がらせて、最後はここでネタばらししようと思っていたからな」

「……ちよつとパイリ君。それ見せて」

静久があまりにも真面目な顔でこつちを見てきたので、たまらずお札を渡す。

「誰かがここで供養してもらおうと、置いて行ったんじゃないかしら」

「……水織先輩、ちよつと見せてください」

「ええ」

お札が静久から藍に渡される。藍はそのお札をじつと見る。

「……蒼ちゃん、このお札、どう思いますか？」

「……嫌な力を感じるんだけど。これ、燃やした方が良いと思う」

ごめん蒼、真顔で言われたら笑えない。

「……えつと、これも冗談なんだろ？ 俺を怖がらせようとして……」

さ」

「……」

……皆、そこで黙らないで。本当に怖くなるから。

その時、神社の木々がザワザワと風で揺れた。急に背筋が寒くなった。

「か、帰りましょう！」

「そ、そうだな、もう夜も遅いし！」

「シズク！　一緒に灯台に泊まってください！」

「も、もちろんよ！」

「れ、れいげんいやちこなれ！　れいげんいやちこなれ！」

「皆、暗いから足元に気を付けるんだぞ！」

「蒼ちゃん、家に清めの塩がありましたっけ」

「あるわよ！　しっかりすり込まないと！」

「皆、帰るよ！」

「ダッシユ！」

「サー！」

皆急に怖くなって、そのまま足早に帰宅した。

ちなみにお札はのみきが持って帰り、しかるべき場所でお祓いをした後、焼いてもらったそうだ。

第十一話・完

第十二話 8月5日

……朝。

今日も夏海ちゃんの声で目が覚め……。

「……あれ？」

夏海ちゃんが起こしに来ない。

俺は布団から起き上がって、ふすまの方を気にしながら手早く着替えを済ませる。

それから布団をたたみ、廊下に出る。

隣の夏海ちゃんの部屋からは、物音ひとつしない。

時計を見ると、いつも夏海ちゃんが起こしに来る時間はとっくに過ぎていた。

「……これってもしかして」

また寝坊しちやってるかな。

「鏡子さーん！」

それなら、今日こそは夏海ちゃんを起こしてもらおうと、鏡子さんの名前を呼びながら家中を探すけど……例によつて、どこにもいない。

「ま、またこのパターン……」

そろそろ起きてもらわないとラジオ体操に間に合わない。俺は意を決して夏海ちゃんの部屋に向かう。

「えーっと、夏海ちゃーん」

例によつてふすま越しに声をかけるけど、全く反応がない。

夏海ちゃんってしっかりしてるように見えて、時々気が抜けたように寝坊しちゃうような。

昨日も花火大会に肝試しと夜のイベントが続いたから、寝付けなかつたんだろうか。

毎日絵日記も書き続けてるみたいだし。

「……ごめんなさい。お邪魔します」

俺はふすまをあけて、夏海ちゃんの部屋に入る。

相変わらず巨大なアクリクのぬいぐるみが目につく。その足元にMDや色鉛筆、日記帳がきちんと並べて置かれていた。

そんな部屋の真ん中に布団を敷いて、夏海ちゃんはずやすやと寝息を立てていた。

相変わらず気持ち良さそうに寝てるけど……ここは心を鬼にして。

「夏海ちゃん、朝だよ！」

以前より強めに肩をゆすつてみる。

「……はっ」

むくりと上体を起こし、俺と目があう。

「おにーちゃん、おはよう……」

上目使いでにへく、と笑った後、ぽすんと布団に倒れて……また寝息を立て始める。

聞いたことないけど、兄弟がいるのだろうか。それとも単に寝ぼけてるのだろうか。

……それより、また強引にでも起こさないと。

「夏海ちゃん、起きて！ ラジオ体操に遅れるよ！」

耳元で叫んでみる。

「ふにやつ!?!」

今度こそしっかりと起きたみたいだ。また変な声も聞こえたけど。

「夏海ちゃん、おはよう」

「……」

泳いでいた目が、時計を捉える。

「……はっ、ラジオ体操！」

直後、はねる様に飛び起きて凄い速さで布団をたたむ。

そのままの勢いで鞆から服を引っ張り出して……。

「だから、着替えるのは待ってー……」

俺は慌てて廊下に飛び出して、夏海ちゃんが着替え終わるのを待つ。

まるでへじやぶだ。この間とまったく同じやりとりだった。

その後、やっぱり神社に向けて全力ダッシュ。

「す、すみませーん！」

「いいよいいよ。それより急ごうー！」

慌てて飛び出ししてきたからヘアピンの位置がうまく決まっていなかったんだろうか。一生懸命走りながら、蝶の形をしたヘアピンの位置を整えている。

神社の境内に到着すると、ネコとウシが居た。

「ナツミさん、タカハラさん、おはようございます！」

「お、おはよう、二人とも」

「おはようございます、ます……」

「……パイリ君達、朝から疲れてるわね……?」

「オンユアマークでさ」

「……ごめんねパイリ君。意味が解らないわ」

「うん、気にしなくていいよ……」

「羽依里、どうせまた寝坊しちゃったんじゃないのー?」

呼吸を整えていると、悪戯っぽく笑いながら蒼がやってくる。その後ろには良一に天善、のみきの姿も見える。

「あれ? 今日藍さんはいないんですか?」

夏海ちゃんに言われて気づいた。言われてみればいつもいる藍の姿がない。

「あー、ちよつと藍は体調悪くて」

「え、大丈夫なのか?」

昨日の夜は肝試しで脅かし役をやっていたし、身体を冷やしてしまったのかもしれない。

いや、もしかしてあの時、お札の邪気にあてられたとか。直接接触していたし。

「本土の病院で見てもらうって」

「病院じゃなくてお寺や神社の方が良いんじゃないのか?」

「へっ?」

……しまった。ついオカルトチックな考え方が。

「いや、この島の診療所じゃだめだったのか?」

確か、この島にもそれなりの設備が整った診療所があったはずだけ
ど。

「あー、別に大したことないんだけど……その、あたしも藍も、この島の診療所って苦手なのよね」

「え、そうなのか」

先生が合わないとか、そういうのだろうか。

「お医者さんも看護師さんも皆いい人んですけど……なんて言うの、妙に不安になるっていうか」

よくわからないけど、そういうこともあるのかもしれない。

「それでわざわざ本土の病院に行ってるわけか」

「そーいうこと。念を押しとくけど、大したことないから。心配しなくていいわよ。お昼には戻ってくるだろうし」

実の妹が大丈夫って言ってるんだから、大丈夫なんだろう。余計な心配はしないでおこう。

「そいえば、皆さんにお知らせがあります!」

その時、紬が思い出したように大きな声を出す。

「紬、どうしたの?」

「今朝確認したら、灯台のパリングルスがすっかり乾いていました
!」

「おお、そうなんだ。良かったね」

「はい!」

灯台のパリングルスと言うのは、一週間ほど前に漂着した大量のパ
リングルスのことだ。

確か、完全に乾いたら皆で工作に使うって話になっていたはずだ。

「それですね。今日、パリングルス工作大会を開催したいと思います
す!」

「お、ようやくやるのか。待ちに待ったぜー」

「ああ、アイデアを練りに練っていたからな」

一番喜んでいたのは良一と天善だった。男子って工作が好きなものだけど、腕に覚えがあるんだろうか。

「そういえば紬。何日か前に通り雨が合ったけど、パリングルスは大丈夫だったの？」

「はい！ 夜露に濡れないように、毎日夕方にはブルーシートをかぶせていましたのでー！」

……毎日やってたのか。すごい努力だ。

「それじゃ、10時くらいに灯台でいいのかな？」

「そうですね。それくらいなら大丈夫と思います！」

「道具は私や天善が持って行こう」

そう言ってくれたのはのみき。いつも助かる。

「お前らー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操好きさんがやってきて、ラジオ体操が始まる。今日も頑張ろう。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「ピクピク、ピクピク」

「えええ!？」

唐突に夏海ちゃんの声が出たので振り返ると、ネコとウシの着ぐるみの耳が動いていた。見なかったことにしよう。

「よーし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「ありがとうございますー！」

相変わらず、今日も奇妙なラジオ体操だった。

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操終了後、今日の分のスタンプを押してもらい、ログインボーナスを受け取る。

本日のログボとして手渡されたのはドーナッツだった。

「何故にドーナッツ……?」

「木戸のおばーちゃんの手作りドーナッツね」

見慣れないログボに俺と夏海ちゃんが戸惑っていると、蒼が説明し

てくれた。

「あのおばーちゃんに、そんな特技があったのか」

手作り感たっぷり、油で揚げられた昔ながらのドーナツだ。粉砂糖がこれでもかとはかりに振りかけられていて、すごく美味しそうだ。

「最近あまり作らないんだけど、おいしいのよ」

「若い頃は神戸の老舗洋菓子店で修業したという噂だぞ」

そう話すのは天善。にわかには信じられない話だけど、それだけ美味しいのだろう。

木戸のおばーちゃんの特技に感心しながら、俺達は帰路についた。

「そうだ紬、ちよつといい？」

「なんででしょうか？」

「工作大会の時、しろはと鷗にも声をかけてね……しない？」

「……そうですね！」

石段を下っていると、背後で紬と蒼がなにやら話す声が聞こえただけ、上手く聞き取れなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺と夏海ちゃんはドーナツを持って帰宅した。

玄関に靴がないので、やっぱり鏡子さんは出かけてしまっているようだ。いつもどこに行ってるんだろう。

「それじゃ、朝ごはん作ってきますね」

「……ちよつと待って夏海ちゃん、当たり前のようにドーナツを持って台所に向かわないで」

「ドーナツツチャーハン……」

……目がうつろだ。

「れ、冷静になろう。夏海ちゃん」

夏海ちゃんの両肩を掴んで、左右にゆする。

「……はっ」

よかった。帰ってきてくれたみたいだ。

「このログボじゃ、チャーハンが作れません。朝ごはん、どうしましよ
うか」

ログボで毎日朝ごはん！ だっけ……この様子だと、ログボで毎日
チャーハン！ にすり替わってる気がする。

「いや、そのままドーナッツを食べたらいいと思うんだけど」

「えー、そのままですかー」

なんだろう、夏海ちゃんが珍しく不満を表に出している。

「そうだ、何日前にログボでもらったスイカも冷蔵庫に入ってるし、
このドーナッツとそのスイカで朝ごはんにしよう」

「……わかりました。チャーハンにできないもの同士。まとめて始末
しちやいましょう」

しぶしぶ了承してくれたようだ。ちよつとももの言い方にトゲが
あるけど。

「それでは、いただきます」

「いただきますーす」

木戸のおばーちゃんの手作りドーナッツはどこか懐かしい素朴な
味で、美味しかった。

小玉スイカは上の方だけを包丁で切って、中身をスプーンですくい
ながら食べた。冷蔵庫で何日間も冷やされていたこともあって、朝か
ら食べるのが勿体無いくらいキンキンに冷えていた。

朝食後はいつものように、二人で宿題をした。

夏海ちゃんが算数でわからないところがあるからと、いくつか教え
た。台形の面積の求め方とか、懐かしいな。

「……鷹原、居るか？」

ちようど今日の宿題が終わった頃、玄関から声がした。

「あれ、天善？」

誰かと思って玄関に出てみると、天善が来ていた。

「お前が来るなんて珍しいな」

「のみきに頼まれてな。これを持ってきた」

見ると、天善は真新しい中華鍋を抱えていた。

「なんだそれ」

「昨日の肝試しの優勝賞品だ」

あ、そういうえば優勝賞品があるとか言ってたっけ。

最後のお札のせいで、うやむやになってしまっていた。

「お前としろはに渡してくれとのことだ」

「俺達が貰って良いのか？」

「どのみち、お前達のペアに贈られるはずの品だったんだ。気にせず受け取ってくれ」

「ありがとう。しろはも喜ぶと思うよ」

そういうことなら、遠慮なく受け取ることにしよう。しろはは新しい中華鍋を欲しがっていたし、今夜食堂に行ったときに渡そうかな。

「ところで鷹原、夏海はいるか？」

「え、いるけど……」

天善が夏海ちゃんに用事？ それも珍しいな。

「ちよつと待っていてくれ」

とりあえず、居間にいる夏海ちゃんを呼ぶ。

「あ、天善さん！ おはようございます！」

「今朝、頼まれた品物が届いたぞ。なんとか間に合ったな」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

夏海ちゃんは天善から小さな箱を受け取っていた。

「え、それ何？」

「秘密です！」

「秘密だ」

二人から同時に秘密にされてしまった。

「後、これがあの曲の楽譜だそうだ。水織先輩に譜面に起こしてもらった」

「ありがとうございます！」

その次に、小さな紙のようなものを受け取っていた。

「え、楽譜？」

「だから秘密です！ 天善さん、ありがとうございました！」

夏海ちゃんは天善にお礼を言うと、すぐに家の中に戻ってしまっ
た。

なんだろう、すごく気になる……。

……その後、夏海ちゃんは自分の部屋に籠ってしまった。

ガサゴソ音がしているし、何やら作業してるみたいだ。

「私が作業してる間は、絶対に覗かないでくださいね！」

と、どこかの昔話みたいな台詞で釘を刺されてしまったし、手伝う
わけにもいかない。

時計を見ると工作大会の始まる10時までには、まだ一時間以上あ
る。

「どうしよう、やることがない……」

「アー、ワレワレハトオイホシカラヤツテキタ……」

扇風機に向かって懐かしい遊びを試してみるけど、たいして時間は潰
れない。

いっそ、少し早めに灯台に乗り込もうかと思った時、ふと今日の出
店のことを思い出した。

「そういえば、今日も何か出店が出てるのかな……」

時間もあるし、見に行ってみよう。

「夏海ちゃん、ちよつと港に行つてくるから」

「はい！ 気をつけて行って来てくださーい！」

「10時前には戻るからね」

「わかりました！」

ふすま越しにそう伝えると、俺は財布をポケットにねじ込み、港へ
向かう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に行くと、いつも屋台が出ている場所に蒼が居た。

「あ、いらっしやーい」

「蒼、今日は何を売ってるんだ?」

確か、この前のかき氷だったはず。

今日のかき氷器もテーブルセットも出ていないし、こじんまりとした感じだ。見た感じ品物らしいものも並んでいない。

「今日はこれよ」

蒼はそう言いながら、足元のクーラーボックスから何かを取り出した。

半分くらいに切られた割り箸の先に、透明な物体がついている。よく駄菓子屋に売ってる、あのお菓子だ。

「水あめかー」

「え、なんでそんなに残念そうなの?」

「食べても時間はつぶれないなーと思ってさ」

「え、そこ重要なの?」

「うん、今は重要なんだ」

「それなりに時間かけて食べれば、長持ちしそうな気もするけどねー」
そういう蒼も微妙な顔だ。

「これいくら?」

「50円よ」

出店価格としては安いけど、駄菓子屋価格としては高い。絶妙な値段だった。

「売れてるのか?」

「全然……」

先日のかき氷に比べたら、インパクトが無さすぎるしな。

「この調子だと、早くに店じまいかしらねー。なるべく早く、紬の所に行きたいし」

「早く行かないと、作る間に合わなくなるぞ」

「あ。あたしは元から作る気はないから」

「え、そうなのか」

「……手先が不器用なの、知ってるくせに」

「あー……」

鴉のボトルシップを作った時、散々だったことを思い出した。

「袖たちと一緒に、審査員役するのよ。厳しく採点するからね」

「お、お手柔らかにお願いするよ」

「どーしよーかしらねー」

あれ、蒼の笑顔が急に怖くなった。

「水あめ一つ買ってくれたら、採点が甘くなるかもしれないわねー」

「ひとつください」

「まいどありー」

さすが商売上手だった。

「せっかくだし、おすすめのお食べ方教えてあげる」

クーラーボックスから水あめを一つ取り出して、俺に手渡してくれる。

「え、そんな食べ方あるのか?」

「まず包みをはがして、割り箸で白くなるまで練るのよ」

「よし」

まず包みをはがして……あれ?

「なあ蒼、これ変に溶けちゃってて、うまく包みがはがれないんだけど」

「え? ちょっと貸してみて」

俺は一度受け取った水あめを蒼に返す。

「おかしーわね。あつたまると溶けちゃうから、ちゃんとクーラーボックスで冷やしておいたはずなんだけど」

この暑さだし、クーラーボックスに入れていても温まってしまったのかもしれない。

包みを外そうと試行錯誤しているが、どうもうまく外れない。

「あ、その麦茶はサービスだから、好きに飲んでいいわよ。水あめだけだと、喉乾くでしょ」

「おお、それじゃ遠慮なく」

俺は置かれていたヤカンから麦茶を紙コップに注ぎ、一口飲む。キンキンに冷えてて美味しい。

「割り箸で巻き取って、うまく引っ張り出してみるわね……っと、割り箸が割れない……」

蒼はその間も水あめと格闘してくれている。

「手伝おうか?」

「大丈夫よ。もうちよっと……びゃあああっ!」

蒼は力任せに割り箸を割ってしまったらしく、包みが破れて水あめが大量に蒼の顔に飛ぶ。

「んぷっ……わぷっ、顔がベトベト……」

反射的に手で拭うと、既に溶けかけているのか、半透明の糸を引いてその……エロい。

「うわあああああ……!」

俺は思わず、持っていた麦茶を放り投げた。

……蒼の顔に向けて。

「ひゃあああ……!」

「……ねえ、なんでこんなことしたの?」

蒼は髪をほどいて、タオルで拭いている。

「顔にその……糸引いてたし、エロかったから」

「へー」

「とっさに洗い流してあげようと思って」

「……あんた、しろはと恋人同士なんだから、こういうこと慣れてるんじゃないの?」

「こういうことってどういうことだろう。とりあえず、慣れてはいない。」

「うう、髪の毛が水あめでベタベタなんだけど」

「反省してます」

俺はせめてもの誠意を示すため、地面に正座していた。

「……それにしても、髪ほどいてると本当に藍と見分けがつかないな」

「え？ そりや、双子だしねー」

「声も似てるしな」

「羽依里さん、業腹です……みたいなの？」

「めちやくちや似てる。まさか藍なんてオチはないよな」

「……言つとくけど、そんなこと言っても誤魔化されないから」

「……はい」

笑顔の恐さは藍以上だった。

「それでその、責任を取りたいんだ」

「責任？」

「お、俺にも麦茶をぶっかけてください……」

そう言つて頭を出す。

「へー、そう来る？ そう来るのねー？」

蒼は笑顔を崩さないまま、ヤカンから紙コップに麦茶をなみなみと注ぐ。

「いい心がけじゃない。覚悟は良い？」

「い、いつでも来い！」

「せーの！」

……そして、勢いよく頭上から降り注ぐ麦茶。

「ぎよおおおおお！」

あまりの冷たさに、思わず叫び声をあげる。

冷たい。キンキンに冷えてる分めちやくちや冷たい。いや、もうくちやくちやだ。くちやくちや冷たい。

「あつはははははっ！」

蒼はお腹を抱えて笑っている。俺もずぶ濡れだし、これでおあいこだろう。

「あたしの気持ちがあつたか……へっくしゅん！」

蒼は途中で一度くしゃみをして、ぶるつと身体を震わせた。

「あー……大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫。ありがと……つて、もとはと言えば、羽依里のせいでしょう……！」

……まだ怒ってらっしやる。

「そ、そういえば家に夏海ちゃんを待たせてたんだ！ それじゃ！」
「逃げるなー！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

結局、俺は逃げる様に加藤家へ戻ってきた。

玄関に近づくと中から声が聞こえた。

「……それじゃあな。羽依里と食べるといい」

「はい！ こぼとさん、ありがとうございます！」

あれ、この声は。

直後、玄関からぬうつと大柄な男性が姿を現した。しろはのじーきんだ。

「む、羽依里か」

俺の姿を見つけると、なんだかばつの悪そうな顔をする。

「どこかに出かけていたのか」

「ええ。ちよつと港に」

「夏海に卵を渡しておいた。二人で食べるといい」

「え、卵ですか？」

「六代目キヤサリンの卵だ。味は保証する」

「ありがとうございます」

ところで、キヤサリンってなんだろう。しかも六代目って。

頭に浮かんだのは、子供の頃に友達の家でやった某配管工ゲームの敵キヤラだった。卵っぽいもので攻撃してきたし。

キヤサリンの卵があるということは、某スーパードラゴンの卵とかあるのだろうか。

「……夏海は、チャーハンでしろはに挑戦するそうだな」

「えっ、そうなんですね」

半分聴いてなかったけど、そんな話になってるの？

「せいぜい頑張ることだ」

さつきとは打って変わって、どこか嬉しそうな顔をしながら、しろはのじーさんは去っていった。

色々と気になることはあるけど、今は夏海ちゃんと灯台に行くことが先決だ。

「ただいまー」

足早に玄関に入る。

「あ、おかえりなさい……ひゃあ!?!」

夏海ちゃんが出迎えてくれたけど、ぐっしより濡れてる俺を見て、驚きの声をあげる。

「えーつと、なにがあったんですか?」

「うん、ちよつと麦茶をね」

「え、それ麦茶なんですか?」

「うん」

「……着替えます?」

「いや、戒めとしてこのままで行くよ」

「はあ……鷹原さんが良いなら、それでいいですけど」

最初は冷たかったTシャツも、炎天下の中を歩いて帰ってくると、汗を吸ったりぬるくなったりで気持ち悪い。

「そろそろ灯台に行こうと思うんだけど、夏海ちゃんの方は準備良いかな?」

「はい、バッチリですよ」

夏海ちゃんは既にリュックを背負っている。中に色々詰め込んでいるんだろう。

「なら、そろそろ出発しよう」

「はいー」

ガレージからバイクを引っ張り出して、二人で灯台へと向かう。

キラキラと輝く海と、大きな入道雲を横目に、バイクを飛ばす。

「そういえば夏海ちゃん、しろはのじーさんからもらった卵はどう

したの!？」

「あ、キャサリンの卵ですか!? 明日のチャーハンに使おうと思って、冷蔵庫に入れてます!」

「あ、それならいいんだ!」

バイクのエンジン音があるから、結構大きな声を出さないと後ろの夏海ちゃんと会話ができない。

「ところで、キャサリンって何!？」

「知らないです! もらった卵は、普通のニワトリの卵みたいでしたけど!」

しろはの家にニワトリ小屋があるのは知ってるけど、あのじーさんがニワトリにそんな名前をつけるなんて思えないし。

謎は深まる一方だった。

「ところで鷹原さん、あんまり飛ばさないでください!」

「この島は車もほとんど通らないから、平気だよ!」

「いえその、振り落とされそうで!」

「しつかり背中に掴まってよ!」

「え、いえ、その……まだ濡れていますし!」

そうだった。こればかりは、バイクで走ってる間に乾いてくれることを願うしかない。

俺は少し速度を落とし、灯台への道をひた走った。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「お、鷹原も来たか」

「ちーつす」

灯台に着くと、のみき、良一、天善、静久、鴟の姿があった。他の皆はもう少ししたら来るそうだ。

「道具はそこにあるものを好きに使ってくれて構わない」

のみきが灯台のそばに置かれた大きな箱を指差す。

箱の中にはハサミやカッター、のりや木工ボンドに加えて、のこぎりやハンマーまで入っている。かなり本格的だ。

「そういえば、主催者の袖はないのか？」

「少ししたら来るそうよ。勝手に作っていて構わないらしいわ」

そう言うのは静久。自前で持ってきたのだろうか。絵の具をパレットの上で混ぜ合わせていた。

「よーいどんで作り始めるのかと思ってたけど、結構自由なんだな」

「お昼から審査を始めるらしくて、それまでに作品を作っておいてほしいって」

「わかった」

とりあえず、俺も夏海ちゃんも適当にはさみやカッターを借りて、パリングルスの空き箱を手取る。

「夏海ちゃん、結局何を作るか決めた？」

「えっと……決めてますけど、内緒です！」

夏海ちゃんは手に2つのパリングルスを持って、向こうの方へ行ってしまった。

一人残されてしまったけど、実は未だに良いアイデアは浮かんでいなかった。

「……皆のを参考にしたいな」

そう思い、他の様子を見て回ることにした。

まず、石畳の一角に本格的な設計図を広げて、無数のパリングルスの空き容器と向き合っている天善に声をかけた。

「天善は何を作ってるんだ？」

「秘密だ。競争相手に手の内を知られたくないからな」

天善の言うことはもつともだった。

設計図から、何か大きめのテーブルのようなものだという事だけが読み取れた。

「まあ、天善だし。大体予想はつくけど……」

邪魔をしても悪いので、別の場所へ行くことにする。

次に、灯台の脇で作業をしていたのみきに声をかける。

「のみきは何を作ってるんだ？」

「秘密だ」

やっぱり教えてくれない。

見た感じ設計図のようなものはないけど、そこまでたくさんのパリ
ングルスを使っているようにも見えない。

そして、見慣れないスプレー缶が一つ置いてある。

「……防水スプレー？」

「こ、こら。見るんじゃない」

隠されてしまった。

どことなく気まずい雰囲気になってしまったので、俺は別の場所
に行くことにした。

「良一は何を作ってるんだ？」

天善とは遠く離れた石畳の上で設計図を広げている良一に声を
かけた。

「何を作っているように見える？」

なんだろう。細かい部品が一杯ある。歯車のようなものも見え
るし、底の鉄の部分を寄せ集めたらしい塊もある。

「悪い、わからない」

「だろうな。秘密だ」

予想通り、教えてはくれなかった。

それにしても、良一も天善も本格的に設計図を用意しているし、俺
とは気合いの入れようが違うようだった。

俺がその場においても邪魔になるだけなので、別の場所に移動するこ
とにした。

「設計図もなしに作ってるのか。ボトルシップの時のそうだったけど、さすが器用だな」

だから、そう慰めておいた。

「でしよー。ところで、羽依里は何を作るの？」

そして、純粹な疑問が返ってきた。

「こ、これから最後の仕上げに取り掛かるところだ。それじゃあな」

「うん。午後からの発表会、期待してるね！」

「あ、ああ」

……なんとか誤魔化し、道具の入った箱の所まで戻ってきた。

一通り見て回ったけど、皆自分の作ってるものは教えてくれなかった。

そして結局、自分が作りたいもののアイデアも浮かばなかった。

なんだかんだ言って、一週間以上考えても浮かばないのだから、今更浮かぶはずもないよな。

それでも何か作っておかないと示しつかないので、その後はお昼まで集中してパリングルスの空き箱と向き合った。

「一応、できたけど……」

12時を回った頃、俺の作品は完成した。気が付けば麦茶で湿っていたシャツも乾いていた。

夏海ちゃんも完成したらしく、小さな箱のような工作を隠すように持っていた。

「夏海ちゃん、一度お昼ごはん食べに戻ろうか」

「はいー」

一度帰宅しようとしてバイクにまたがった、その時。

「あれ、しろは？」

「紬さんに蒼さんも。どうしたんですか？」

しろはと蒼、そして紬が大きな荷物を持って灯台にやってきた。

「お昼ご飯、作ってきたの」

「はい！」

三人は三人とも、大きな重箱を抱えていた。

「皆でお昼にしましょ。どうせ羽依里達、帰ってもカップうどんなんですよ？」

「はい！ そうです！」

夏海ちゃん、正直すぎ。

「あれ、しろしろたちもお弁当？」

その様子を見た鴎は驚いた顔をしている。

「も??」

「実は、私も皆に食べてもらおうと思って、お弁当作ってきたの！」

そう言うと、鴎は灯台の中に入って、重箱を持って出てきた。

「とうか、あの灯台の扉って開いてたのか」

「はい！ 今日カモメさんに鍵をお渡しておきましたので！」

「中は涼しいから、お弁当を置いておくにはちょうど良かったんだよね」

鴎が持っていた重箱に触らせてもらおうと、ひんやりと冷たかった。

「皆さん、折角なので灯台の中でお昼ご飯にしましょ！ どうぞ！」

紬の提案で、灯台の中で昼食をとることになった。そういえば、この灯台の中に入るのは初めてな気がする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おお、涼しい」

灯台の中に足を踏み入れると、日差しが遮られているためか涼しい。

フローリングの床が広がり、目の前には螺旋階段。右手側には窓があり、日の光が降り注いでいた。

壁際には机があり、その横には木箱や段ボール箱が並べられてい

る。

箱の中には、昔灯台として使われていたころの書類のようなものから、紬が拾ってきたらしい漂着物と思われるものまで、色々なものが入っていた。

そして、机の上に置かれたクマのぬいぐるみに目が留まる。

「紬、このぬいぐるみは？」

「クマのツムギちゃんですー」

自分の名前を付けるなんて、余程気に入ってるんだろう。

紬がぬいぐるみ集めが趣味なのは知っているけど、そのほとんどは入って左側の壁際に並べられている。

一つだけ机の上に置かれたクマのぬいぐるみには、紬の特別な思いが感じ取れた。

「羽依里、ビニールシート敷くの手伝って」

「ああ」

しろはの持ってきたビニールシートを広げて、その上に全員が持ってきたお弁当をそれぞれ並べる。

「……壮観だな」

俺はしろはの隣に座りながら、思わず呟いていた。

目の前にはしろはの重箱。一つ目の重箱にはおにぎりがぎっしり。二つ目の重箱には卵焼きに唐揚げ、ウインナー、ミニトマトにひじきの煮物と、定番のおかずがぎっしりだった。

更に俺の左側には鳴の重箱、右側には蒼の重箱、そして一番奥に紬の重箱が所狭しと並べられていた。

ここに居る皆で、これだけの量を食べきれんのだろうか。

「お、男の子もいるし、たくさんあるに越したことないよね！」

「そうそう。なっちゃんも、しっかり食べてね！」

「は、はいー」

誰もが多すぎると思いつつ、誰も口に出さない。

「それでは皆さん、いただきますましょうー」

「いただきますーす」

紬の言葉を合図に、各々食べ始める。

俺も鴉の持つてきていたウエットティッシュで手を拭いた後、まずはしろはの重箱からおにぎりを一つもらって、かぶりつく。

「おお、昆布だ」

中には昆布が入っていた。塩気もちょうど良くて美味しい。

「具材は昆布と鮭。見た目は一緒だから、食べてからののお楽しみ」

その時、紙皿を持つてのみきと良一がやってきた。

「しろは、唐揚げを一つ貰っていいか?」

「うん、どうぞ。二人とも唐揚げ好きだもんね」

二人に便乗して、俺も唐揚げを一つもらう。揚げて時間が経ってるはずなのにべちゃつとして無くて、衣もサクサクだ。

「うん。美味しい」

「漬けダレと衣に秘密があるの」

次に卵焼きも一つ食べてみた。砂糖がたっぷり入ってる甘い卵焼きだった。

さすが食堂を経営してるだけあって、どの料理も絶品だ。

「しろはさん、私にも卵焼きください!」

「いいよ。後、これも美味しいから食べてみて」

「ありがとうございます!」

夏海ちゃんがしろはから受け取った紙皿には、卵焼きの他に見慣れないおかずが乗せられていた。

「しろは、今のおかずなに?」

「山菜のおひたしだよ。昨日の日替わりメニューのやつ。余らせたらもったいないし。甘辛く味付けしてるから美味しいよ」

「それじゃ少し貰おうかな」

山菜のおひたしに箸を伸ばす。なんていう山菜なのかわからないけど、シャキシャキして美味しかった。

「それじゃ、次は……」

「羽依里、せっかくだから他の皆のお弁当も食べてあげて」

もう一つおにぎりを貰おうかと思っていると、しろはからそう言われた。確かに、他の皆のも食べてみたい。

「わかった。そうするよ」

俺は紙皿を持って、鷗の隣へ行く。

「鷗、少し分けてくれるか？」

そう言ってから後悔した。

鷗の弁当は、皆に食べてもらおうと言っていただけあって、重箱三分。もの凄い量だった。

「うん。たくさん食べて！」

そう言いながら紙皿にわかめおにぎりとういんナー、鶏のトマト煮、そしてミニハンバーグを分けてくれた。このハンバーグも手作りみたいだ。

「上にチーズ乗っけてあるの。チーズ美味しいよね！」

確かに美味しい。ハンバーグも肉汁たっぷりだ。

「このういんナーも形が変わってるな」

しろはのにもういんナーは入っていたけど、ポピュラーなたこさんういんナーだった。

「ひまわりだよ！」

言われてみるとヒマワリの形をしていた。本当に手先が器用だな。

「この鶏のトマト煮が一番の自信作だよ」

そう言いながら、美味しそうに鶏のトマト煮を自分の口に運んでいく。

「ぐわあ」

「おのれ鷗、同族のくせにこの仕打ち」

「ぐわあ」

せつかくなので、鶏の気持ちを代弁してみる。

「やめてくれますか」

「ごめん、つい」

「鷗、あたしたちもポテトサラダもらっついていい？」

「もちろん！」

ちょうど静久と蒼がポテトサラダを貰いに来た。

「羽依里ももっと食べていいよ」

俺もポテトサラダにウズラの卵のフライと、おかずを一通り味見させてもらう。どれも美味しかった。美味しいんだけど、量が多すぎて

いくら食べても減ってる気がしなかった。

「ところで鷗」

「え?」

「洋食ばっかの中、このきんぴらごぼうがすごく浮いてるんだけど」

「野菜摂れるし、いいじゃない」

どさどさと紙皿にきんぴらごぼうが盛られる。

「……まあ、うまいけどさ」

「あ、ゆでたまごもあるの!」

きんぴらごぼうの次は、大量のゆで卵が入った袋を出してきた。

「ちゃんとアジシオもあるよ? 食べる?」

「あー、いや……」

ゆで卵を渡されそうになったけど、丁重に断った。そろそろお腹のことも考えないといけない頃合いだし。他の二人の弁当も味見させてもらわないといけない。

俺は再び紙皿を持って移動し、今度は蒼の隣に行く。

「蒼、お前の弁当も少し貰っていいか?」

「いいわよ。たくさん食べてー」

そう言っただ蒼が差し出した重箱には、いなりずしとおはぎが入っていた。

「おおいナリ、今日は姿を見ないと思ったら、こんな姿に」

「ちよつと、やめてよね」

いなりずしを一つ摘み、口に運ぶ。甘辛く煮たお揚げが酢飯とマッチして、最高だった。

「うん。うまい」

次におはぎも一つ貰う。これも甘すぎず、食べやすかった。

続いて、おかずの入った重箱に箸を伸ばす。カボチャの煮物に切り干し大根、卵焼き等の和風のおかずが並ぶ中、気になるものを見つけた。

「これ、ぬか漬け?」

「そうよ。駄菓子屋のおばーちゃんのぬか漬けなの。おいしーんだから」

「どれどれ」

一口食べてみる。何とも言えない旨味が口の中に広がった。

「うまいな」

「でしょー。200年ものぬか床よ」

「マジか……」

200年の歴史に思いを馳せながら、続いて卵焼きを食べてみる。しろはの甘い卵焼きと違って、だし巻き卵だった。

「おいしい」

「でしょー。その出汁巻き卵は自信作なのよ」

嬉しそうに話してくれる。本当に自信があるんだろう。

「あれ？ これってミートボール？」

「つくねよ」

「きつね？」

「つくね！」

鶏肉の旨味と軟骨の歯ごたえが絶妙で、これもうまい。

「あ、デザートにリンゴもあるわよ」

ビニール袋に入ったリンゴが出てきた。

「リンゴも塩水につけてれば色が悪くならないし」

リンゴもウサギの形に丁寧にカットしてある。手先が不器用って、嘘なんじゃないのか。

「一通り食べてみて思ったけど、蒼の弁当は見事に和食尽くしだな」

「こういうおかずの方が、作り置きがきくから」

「これだけの量、一人で作ったのか？」

「ラジオ体操の後に準備しておいて、出店の後にちやちやつと詰めただけよ。昨日からの余りも……じゃない。作り置きもあつたし」

蒼は簡単に言ってるけど、時間がない中でうまくやりくりしてお弁当を用意してくれたようだ。まるで主婦だな。

「蒼は良いお嫁さんになれそうだな」

「へっ？」

言ってから、しまったと思ったけど、もう遅い。

「そ、それってひよつとして……いやでもあんたにはしろはがいるし、そんなの……」

「おーい。帰ってこーい」

マツハでピンクになってしまった。普段なら藍がいるからストツプがかかるんだけど。

顔を赤くしながら両手で頬を覆って、煩惱を吐き出し始めてしまったので、俺はこっそりとその場を離れた。

最後に紬と静久のそばに行く。

「あ、タカハラさん！ いらっしやいませー！」

待ってましたと言わんばかりに、重箱を差し出される。

中には色とりどりの具材が挟まれたコツペパンが入っていた。それでも半分近くに減っている。

見ると、少し離れたところで口の中に大量のコツペパンを詰め込んで気絶している天善が見えた。静久に良い所を見せようと、相当無理をしたに違いない。

「えーっと」

正直、そろそろお腹が限界だ。食べるものは厳選したい。

重箱の中を見ると、卵が挟まれた卵サンド、焼きそばが挟まれた焼きそばパン、ジャムが挟まれたジャムサンド……定番と呼ばれるものの中に、見慣れないものがあった。

「紬、これ何？」

「タコサンドですー！」

良く見ると、コツペパンに茹でたタコの足が一本挟まれていた。見た目はホットドッグみたいだ。

「どうぞー！ 食べてくださいー！」

凄い笑顔でタコサンドを差し出してくる。これは無下に断ることはできなさそうだ。

「そ、それじゃいただくよ」

「はー！」

意を決して一口かぶりつく。コッペパンは柔らかくて食べやすかったけど、具のタコが噛み切れない。めっちゃ歯ごたえがある。

そしてタコはほとんど味がしなかった。

「ねえ紬、このタコって味付けは……？」

「はい！ タコそのもののおいしさを楽しんでいただくため、特に味付けはしていません！」

「そ、そうなんだ……うん。大海原の味がして、美味しいよ」

「そですか。良かったです！」

「……なあ鷗、さっきのアジシオ貸してくれ」

俺は紬に気づかれぬ様に、こっそりと鷗からアジシオを借りた。

「後、デザートにコットンサンドもありますので！」

「え、コットンサンド？」

「これです！」

紬から差し出されたコッペパンには、ワタアメが挟まれていた。コットン＝綿という意味だろうか。ワタアメは英語でコットンキャンディーというらしいし。

「じゃあ、一口分だけもらえるかな」

「はい！」

紬にちぎってもらって、一口だけ食べてみた。コットンサンドという名のワタアメサンドはひたすらに甘かった。

その後も、皆でわいわいと賑やかなランチタイムを楽しんだ。

昼食を終え、工作の発表会が始まる。

「蒼ちゃんのお弁当、食べたかったです……」

がつくりと肩を落としているのは、先程合流した藍。お昼の便で島に帰ってきたらしい。

「いいじゃねーか藍、本土でジャイフルに行ってきたんだろ？」

良一は羨ましそうに話している。ちなみにジャイフルというのは、

この地方を中心に展開しているファミレスチェーン店だ。

「ジャイフルなんかより、蒼ちゃんのお弁当の方がはるかに魅力的です」

藍は心底残念そうだ。

「それより藍、お前体調悪かったんじゃ……？」

「大丈夫です。注射一本で治りましたから」

「そ、それならいいけど」

見た感じは大丈夫そうだ。

「藍にはまた作ってあげるから！ それより今は工作大会でしょ！」

「……そうでしたね。それでは、私が審査委員長を務めましょう」

「あ、そこは細じゃないんだ」

「細は灯台番長だから」

「はい！」

もはや審査とはなんの関係もなくなってしまったけど、凄そうだった。

結局、藍を含めたしろは、細、蒼の4人が審査員を務めるようだ。

「審査員の皆さん、採点にはこれを使いましょう！」

続いて細が持ってきたのは、子供の頃に誰もが使ったことがあるお絵かきマシーン。

めちやくちや懐かしいけど、画面が半分欠けていたり、妙に汚れていたり、明らかに漂着物だった。

「大丈夫です！ 専用のペンもついてますので、採点に支障はありません！」

ある意味、奇跡の漂着物だった。

「それですね、そのお絵かきマシーンで……」

その後も細のルール説明が続いた。

一人ずつ工作の発表を行い、発表が終わる度に四人の審査員が採点をして評価を行う。

審査員の持ち点は一人10点。審査員が四人だから、最高で40点満点。一番評価が高かった人が優勝のようだ。

ちなみに優勝賞品は、例の缶コーヒースラッシュ。

「それでは一番手！ カノーさん、よろしくお願いします！」
「ああ。よっと」

最初に緋に指名された天善が、巨大な物体を持って皆の前に立つ。
「なんだそれ？」

「パリングルスの卓球台Version2だ！」
Version2ってことは、Version1があつたのだろうか。詳しく知りたくはないけど。

「カノーさん、この卓球台を作るとき、どのような点に頑張りましたか！？」

早速審査員の緋から質問が飛ぶ。

「うす塩からサワークリームまで、綺麗にグラデーションさせた。これにより錯覚効果を引き起こし、相手のレシーブタイミングをずらす！」

「敢えて欠点を挙げるなら？」

「俺もレシーブタイミングがずれることだ！」

蒼の質問に対し、天善は胸を張って答える。

それってどーなの、みたいな意見が出て、審査員の間で話し合いが持たれている。

「せっかくですし、デモンストレーションしてもらいましょうか」

そこで審査委員長の鶴の一声。

え、デモンストレーションって何？

「わかった。誰か相手をしてくれ」

「ここは羽依里さんが良いんじゃないですか？」

「俺？」

唐突に指名されてしまった。

「優勝できるかどうかは、鷹原のリアクションにかかっている。よろしく頼むぞ」

突然そんな重大な役目を任されても。

俺は渋々天善からラケットを受け取り、パリングルスの卓球台でラリーを始める。

「おおお!？」

天善からのサーブを受けようとすると、光の反射のせいかな高速で移動するピンポン玉が七色に見える。

そして目の錯覚か、ピンポン玉の大きさが変化しているようにも思える。

「うわっ!？」

更に表面が波打つようにボコボコしているせいか、ピンポン玉も普段ではありえないような動きをする。その動きについて行けず、返せなかった。

「天善、もう一度頼む」

「よし、行くぞ」

その後も天善からのサーブを何度か受けるが、まったく返せない。

「イマイチわかりにくいわねー」

「羽依里さんが下手なだけかもしれないし」

審査員達からは、散々な言われようだった。

「それなら審査員を代表して、しろはがやってみないか？」

「え、私？」

「しろはは卓球上手いからな」

しろはが返せなければ、この卓球台は本物というわけだ。何が本物なのかはよくわからないけど。

俺はしろはにラケットを渡す。

「よし。いくぞ、しろは」

「う、うん」

しろはがラケットを構えるのを確認して、天善がサーブを放つ。

「ほいっ」

しろははそのサーブを普通に返した。

そして変なカーブがかかって、ピンポン玉の軌道が90度変わった。

「ぬおおーっ!？」

天善が横っ飛びするけど、追いつけない。

「………すまないしろは、もう一度だ」

「い、いいけど」

「その前に、少し良いか」

天善が腕につけていたサポーターを外す。

サポーターが地面に落ちると、鈍い音と同時に砂ぼこりが舞った。

「な……まさか天善、そんな重たいものをつけて卓球を……！」

「フツ……こいつを外すのはいつ以来だろうか」

天善が素振りをする。めちやくちや早い。

「軽い……今なら空でも飛べそうだ」

……この間は砂に潜ってた気もするけど。

「天善の奴、まだあれをつけて卓球をしてたのか」

良一が呆れた様子で話す。

「女の子との試合でこれを外したのは初めてだ。許してくれ」

「う、うん……別に、いいよ」

なんとか平静を装っているけど、しろはも明らかに引いてる。

「行くぞ！ サー！」

天善が渾身のサーブを打つ。さつきとは速度が違う。

「ほいっ」

しかし、それをしろはが返す。

また変なカーブがかかる。今度はバックスピんがかかっていて、摩

訶不思議な動きをする。

「ぬおおおー……っ！」

天善が必死に食らいつくが、返せない。

「これって、しろしろが強いのか？ 卓球台が凄いのか？」

「どつちだろうな」

「うーん……」

下された評価は、しろはが4点、紬が10点、蒼が5点、藍が5点。合計24点だった。

実際に卓球台でプレイしたしろはを中心に入念な話し合いがもたれ、このような評価になったらしい。

「次はノミキさんです！」

細に呼ばれ、のみきが作品を持って皆の前に出る。

のみきの作品は、パツと見たとパリングルスそのままだ。

「私が作ったのは、パリングルスの水鉄砲だ」

シャキッと筒の一部が引き抜かれた。どうやらそこから水を入れられるようだ。

「先端に小さな穴を開け、発射口をつけてある。小さな穴なので、相手には気づかれにくい」

審査員に促されるまでもなく、作品の説明を始める。さすが場慣れしているようだった。

「一応小型のパリングルスに水を溜め、予備タンクにすることもできる。もちろん、全て防水スプレーで固めてあるので、水漏れを起こす心配はない」

そういえばのみきは廃材で水鉄砲を自作するらしいし、これくらいの作品は朝飯前なのかもしれない。

「見た目は完全にパリングルスなので、隠密性も完璧。問題は耐久性くらいのものだな」

「では、さっそくデモンストレーションをしてもらいましょう。天善ちゃん、脱いでください」

「妙な言い方するんじゃないやねーよ！ 撃たれるのがわかってて、誰が脱ぐか！」

藍に指名された良一は断固拒否の構えだ。

「……よし、ここは俺に任せてくれ」

「まさか、羽依里が脱ぐの？」

いや、脱がないから。しろは、変な目で見ないで。

「魔法の呪文がある」

そう言う俺は、大きく息を吸い込む。

「裸祭り！ んんー！」

「パーーッ！ んんんー！ パーーッ！」

良一はもの見事に裸になった！

「し、しまったー！」

「えーっと、撃つていいのか？」

「はい。どうぞ」

どうぞつて、藍。冷静なのが逆に怖いんだけど。

「とりあえず良一、離れてくれ」

のみきはパリングルス水鉄砲を構えながら、良一に提案する。

「へ？」

「……その場でもいいぞ？ 痛いと思うがな」

「え、あの見た目でそんなに威力あるの？」

「問題は耐久性だと言ったろう」

「ダッシュユ！」

そのやりとりを見て、良一は一目散に駆けだした。

「……ファイア！」

良一が十分に離れたところで、その背中に向けて強烈な水流が放たれた。

「ギャー……！」

直後、良一の断末魔が聞こえた。

藍が爆笑していた。どうやらツボに入ったらしい。

その後、パリングルス水鉄砲に下された評価は、しろはが7点、紬が5点、蒼が7点、藍が10点。合計29点だった。

「いてててて」

しばらくして戻ってきた良一の背中には、みみずばれができていた。夏海ちゃんが灯台にあったらしい救急箱から薬を出して、良一の背中に塗ってあげていた。

「紬ちゃん、次の審査に行きましょう」

冷静な審査委員長怖い……。

「はい！ 次はカモメさんです！」

「どうもー」

ガラガラとスーツケースを引いて前に出てきた鴉だったが、手にしているスーツケースがいつもと違う。二回りくらい小さい。

「私が作ったのは、パリングルスのスーツケースです！」

「おおー」

色々な種類のパリングルスが組み込まれていて、とてもカラフルなスーツケースだった。

「本当は海賊船を作りたかったんだけど、さすがに材料が足りなくて」海賊船って何だろう。ボトルシップクリエーターの血が騒いだんだらうか。

「どのような所を頑張りましたか!？」

「いくつものパリングルスを伸ばしては重ねて、できるだけ強度を増しました!」

「こんこん、とパリングルスのスーツケースを叩く。パリングルスらしからぬ音がしていた。

「他には、スムーズな移動を実現するために、パリングルスの鉄の部分をとくさん使って車輪を作りました!」

前後にスーツケースを動かす。なるほど、石畳の上で軽やかに動いている。

「欠点を挙げるとすればどこです?」

続いて藍が欠点を聞いてくる。どうやら紬は長所を、藍は欠点を聞いてくる審査スタイルのようだ。

「欠点は、上に乗れない事です!」

「え、それって欠点なの?」

しろはが思わずツッコむ。さすがに人が乗れるほどの強度は実現できなかったみたいだ。

「普通は乗りませんからね」

今回はデモンストレーションは十分と判断されたのか、すぐに評価が下された。

しろはが5点、紬が7点、蒼が6点、藍が7点。合計25点だった。今の所、のみきの水鉄砲が29点で暫定首位だ。

「次はシズクです!」

「審査員の皆、よろしくね」

静久が結構な大きさの作品を引っ張ってきた。覆い隠すように、ブ

ルーシートがかかっている。

「さあ、見てちょうだい！」

静久はそのブルーシートを一気にめくる。

「パリングルスでおっぱいを作ってみたわ！」

「うわあ……」

皆絶句していた。

なんていうのだろう。色まで塗ってあつて色々リアルなだけど。ところで、なんで3つ？

「……のみきちちゃん、撃つていいですよ」

「ああ。強制撤去というやつだな。早速パリングルス水鉄砲の限界を引き出すことになりそうだ。ファイア！」

いち早く我に返った藍が指示を出し、あつという間に撤去されてしまった。

「ぐすん。ひどいわ」

「すまない。子供もいるし、さすがに公序良俗に反する」

「あ、撤去したけど、一応評価は下すから」

そう言つて下された評価は、しろはが0点、紬が8点、蒼が8点、藍が0点。合計16点だった。

「0点つてのも分からなくもないけど、逆に紬と蒼はなんで点が高いんだ？」

「そりゃ、大きいおっぱいが好きだからだろう」

天善が至つて真面目に返してくれた。

「次はミタニさんです！」

「おう！ 見て驚けよ！」

そう言つて良一が披露したのは……自転車だった。

「パリングルスで自転車を作つたんだ」

「え、マジで？」

「大マジだ」

審査員を含めた皆も、思わず近づいてじっくりと観察してしまう。段ボールで自転車を作るといふ話は聞いたことがあるけど、これは

これですごい。

ハンドルにフレーム、タイヤからサドルにペダル。全部がパリングルスだ。切り取ったり繋げたり、重ねたりして強度を増したんだろう。

「へー、上手いもんね」

「三谷さん、これ乗れるんですか？」

「当然だ。試験走行はまだだけどな」

皆も興味津々だ。

「それでは、早速デモンストレーションをしていただきましょう！」

そして、紬は灯台から見える下り坂を指差す。ただ単に純粋な気持ちで、下り坂の方がスピードが出ると思っているの発言だろう。

「そ、そうだな……どうせなら、できるだけ小さい子が良いかな。夏海ちゃん、お願いでき」

「できるわけないでしょう。自分で乗ってください」

審査員長の冷たい一声。

「そ、そうだよなー……よし。いくぜー！」

良一は腹をくくったのか、明らかに身丈が合っていない自転車に跨り、坂を下っていく。

良一の体重もあつてか、パリングルス自転車はぐんぐん加速。あれだけのスピードが出せる時点で、十分すごい。

「ところで良一、ブレーキついているのか!？」

「二応、底の部分を使ってブレーキを作ったことは作っただけだよ!」

パリングルスの底の部分は鉄で、一番強度がある部分だ。そこをブレーキの部品に採用した良一のやり方は間違っていない。

「うおおおおー！」

良一がブレーキを作動させる。

「すげえ、火花が出てる」

「でも減速してないよ。逆に加速してるようにも見えない?」

嗚も心配そうな表情だ。

「あ、ブレーキ取れた」

先程まで火花を吹いていた部品が外れ、宙を舞っている。

だいぶ距離が離れてしまったので、良一の声は聞こえないけど、めちゃくちゃ慌てるのがわかる。

ハンドルを急に切って蛇行運転してみたり、なんとかスピードを抑えようと頑張っているみたいだ。

「あ、ハンドルが折れた」

「……万事休すだな」

直後、良一は盛大に転んだ。

「いててて……」

坂道を転がり落ちたため、良一はさっき以上に傷だらけになっていた。また夏海ちゃんが薬を塗ってあげていた。

「ごめん良一、面白すぎ！」

「お腹が痛いです。どうしてくれるんですか」

その隣では、空門姉妹が大爆笑していた。どうやらツボったらしい。

「笑ってないで、ちゃんと評価してくれよ？」

「わ、わかっているわよ。ちゃんと身体を張ったんだし、評価はしてあげるから」

良一の得点は、しろはが7点、紬が7点、蒼が10点、藍が10点。合計34点と高得点だった。

デモンストレーションで自転車はバラバラになってしまったけど、その性能は十二分に見せられた感じだ。

「次はタカハラさんです！」

「よし、俺か」

いよいよ俺の番だ。ここまできたら覚悟を決めるしかない。

「俺が作ったのは、パリングルスタンバリンだ！」

「おおー」

……紬以外の審査員の視線が一気に冷たくなったのは、きっと気のせいだろう。

「頑張った点はどこですか!？」

「底の鉄の部分を組み合わせて、結構いい音が鳴るようにできたはずだ!」

「それじゃ、欠点は?」

蒼は半分笑いをこらえているようにも見える。まだ良一の自転車の余韻が残ってるのだと信じたい。

「手抜き感が半端ない」

紬以外の審査員の視線が一層冷たくなった。

「それでは、デモンストレーションをどうぞ」

「え、デモンストレーション?」

「はい。どうぞ」

藍にそう促されて、同時に視線が一気に集まる。

「……」

受けたことないけど、圧迫面接ってこんな感じなんだろうか。

……ええい。ままよ!

俺は色々な物を捨てる覚悟を決めた。

「しゃかしやかかへいっ!」

「筋肉いいいいえーい!」

「しゃかしやかかへいっ!」

俺はパリングルスタンバリンを全力で振りながら、踊りまくる。

しゃんしゃん、と良い音がしている。我ながら上手くできてるとは思っただけだ。

「ボンバヘツ! それと便座カバー!」

「しゃかしやかかへいっ!」

「ひゃっほーう! 筋肉革命だ——!」

「……ごめんなさい。もう許してください」

俺は一分間ほど踊り続けた後、周りの空気に耐えきれなくなって全力で頭を下げた。

「反省しましたか？」

「反省しました」

「皆頑張ってるんだから、羽依里もうちよつと頑張らないと」

「俺の歌や踊りのセンスより、パリングルスタンバリンが楽器としていかに素晴らしいかを評価してほしい」

「はいはい」

最大限に取り繕ってみたが、軽く流されたみたいだ。

そして下された評価は、しろはが2点、紬が8点、蒼が5点、藍が0点。合計15点で最下位だった。

紬と蒼の採点が若干高かった。

紬は純粹に採点してくれたんだろう。蒼は水あめ買った分、甘く採点してくれたのかな。ほかの二人は散々だったけど。

「最後はナツミさんですー！」

「は、はいー！」

めちやくちや緊張してる。俺があんな評価を受けた後だし、悪い想像しちゃうてるんだろうか。

「わ、私が作ったのはこれですー！」

夏海ちゃんが取り出したのは、パリングルスで作られた小さな箱。

「むぎゅ？」

「えーっと……」

審査員たちも、どう反応しているのか悩んでいる様子だ。

「そ、それでは、デモンストレーションをどうぞー！」

紬が先を促すけど、デモンストレーションって言っても、あの箱で何をするんだらう。びっくり箱にでもなってるんだらうか。

「はいー！」

夏海ちゃんが箱のふたを開け、なにやら操作をする。

……しばらくすると、聞き覚えのある音色が聞こえてきた。

「……むぎゅー……これはあの歌ですー！」

一番に気づいたのは紬だった。それを皮切りに、他の皆もなんの歌かわかった様子だった。

「これってあれだよな。島に伝わる童謡」

「そうですね。間違いないです」

「うん」

島に住む皆なら誰でも知ってる、あの歌だった。

「その、この島の思い出になるものを作りたいと思ひまして！ パリングルスのオルゴールです！」

「夏海ちゃん、見せて見せて」

皆でパリングルスオルゴールの周りに集まる。俺も一緒になって覗き込む。

オルゴール本体はさすがにパリングルスではなく、組み立て式のキットのようだったけど、楽譜のカードは全部パリングルスで作られていた。

カードには所々に穴が開いていて、手動のレバーを回す事でカードがシリンダーに巻き取られて、穴が開いてる部分をコーム（櫛歯）が通過すると音が鳴る仕組みのようだ。

「この曲の楽譜なんて、よくあつたね」

「えっと、それは……」

「このハンドルを回すと音が鳴るのね。紬もやらせてもらったら？」

夏海ちゃんの言葉を遮るように、静久もその輪の中に入ってくる。

「はい！ ナツミさん、回してみいていいですか？」

「え……はい、どうぞー！」

紬が夏海ちゃんの手からオルゴールを受け取り、楽しそうにレバーを回しだす。

すぐにオルゴールの旋律に紬と夏海ちゃんの鼻歌が交じり、やがて他の皆にも伝播していったのだった。

「それじゃ、評価を発表するわよー」

ひとしきり皆で楽しんだ後、パリングルスオルゴールの評価が発表される。

「ナツミさん、カッコテキな発明でした！」

紬は一番に10点満点を掲示。

「うんうん。夏海ちゃんがそのオルゴールを島の思い出として持って帰ってくれるなら、あたしたちも嬉しいわ」

同じく蒼も100点満点。

「やっぱりこういうのが良いよね。羽依里にも見習ってほしい」
しろはも100点満点で続く。

ここまでで30点。最後の藍の評価で全てが決まる状況だ。

「……なんですか天善ちゃん。そんな泣きそうな顔で見つめても、私の評価は変わりませんよ」

というわけで、藍も100点満点。満場一致で夏海ちゃんの優勝が決まった。

表彰式の後、優勝賞品のブラックコーヒーは皆に配られていた。
理由は二つ。

一つは、缶が多すぎてバイクに積めず、数を減らさないと帰れないということ。

もう一つは、夏海ちゃんがブラックコーヒーを飲めない事だった。頑張って飲みますと言っていたけど、一口飲んだらものすごく苦そうな顔をしていた。ちよつとかわいそうだった。

この『ブラック黒田の缶コーヒー』は、他のブラックコーヒーに比べても苦い気がする。

やっぱり、ブラック企業の缶コーヒーだからだろうか。

「……誰かお砂糖持っていないですか？」

「あいちゃんごめん。アジシオしかないよ」

「むぎゆ、ワタアメを使ったコトトンサンドならあります！」

「少してください。さすがにきついです」

夏海ちゃんだけじゃなく、どうやら藍もブラックコーヒーはダメみたいだ。

「ちくしよー、結局2位かよー！」

昆虫採集大会に続いて、工作大会でも苦汁をなめた良一は、コーヒーをヤケ飲みしていた。後で胃を悪くしないといいけど……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夕方には灯台から帰宅し、夏海ちゃんと一緒に洗濯物を取り込む。取り込んだ洗濯物を居間でたたみながら、夏海ちゃんと話をする。

「あ、やっぱり今朝天善が持ってきたのはオルゴールキットだったんだね」

「はい。隠すようなこととしてごめんなさい」

「いいよいよ。気にしないで」

午前中部屋に籠ってたのは、それを組み立ててたのか。

「じゃあ、あの時受け取ってた楽譜ってのも」

「はい。静久さんに頼んで、この島の童謡を楽譜に起こしてもらったんです」

そういえば、静久は楽譜が読めるって話を細から聞いたような。

午前中に下準備をすっかりやって、灯台ではパリングルスを使ってボックス部分の組み立てと、楽譜通りにパリングルスに穴を開けるだけ。凄く計画されていた。

「水あめ食べに行ってる場合じゃなかったな……」

「え、なんですか?」

「ううん。なんでもないよ」

その後も、夏海ちゃんは身振り手振りを交えてパリングルスオルゴールの制作秘話を話してくれた。

本当に楽しそうで、聞いているこっちも自然と笑顔になった。

日が暮れた頃、しろは食堂へ向かう。

今朝天善に渡された最新式中華鍋も、忘れずに持って行った。

「あ、いらっしやい」

扉をくぐると、早速笑顔のしろはが出迎えてくれる。

「しろは、これ」

俺は早速中華鍋をしろはに渡す。

「え、どうしたのこれ」

「肝試しの優勝賞品だって。今朝天善が持ってきてくれたんだ」

「それじゃ、遠慮なく使わせてもらおうね」

しろはは中華鍋を受け取ると、棚の下にしまう。

「あれ、早速その中華鍋で何か作ってもらおうかと思ったんだけど」

「駄目だよ。新品の中華鍋って、空焼きしたり慣らし炒めをして、油を馴染ませないといけないの。いきなりは使えないんだよ」

「え、そうなのか」

「うん。そう」

知らなかった……残念だ。

夏海ちゃんも知らなかったような顔をしている。さすがしろはだ。

「それで、今日は何にする?」

しろはからおしぼりを受け取って、夏海ちゃんと二人でメニュー表を覗き込む。

「ちーっす」

その時、扉が開いて良一がやってきた。

「あれ、良一?」

「おう、二人とも」

良一が俺の隣に座る。どことなく漁師らしい、潮の香りがした。

「良一お前、釣りでもしてたのか?」

「ああ、大したものは釣れなかったけどな」

しろはからもらったおしぼりで手を拭きながら、満足そうな顔をしている。漁師って、たとえば大漁でも釣れてないって言うよな。

「というか、こいつはあの工作大会の後に釣りに行ってたのか? 元気な奴だな……」

「しろはー、エビフライ定食くれよー」

「うん。ちよつと待っててね」

良一が料理を注文したタイミングで、俺と夏海ちゃんもかつ丼とコロッケ定食を注文した。

料理を待つ間、隣の良一が話しかけてくる。

「なあ羽依里、今度夜釣り行かないか」

「え、夜釣り?」

「ああ、磯から釣っても良いし、時間があれば夕方のうちにマリッジェットで穴場に連れて行ってやるぞ?」

「良一、マリッジェット運転できるのか?」

「ああ、できるほうがモテるんだろ?」

モテるかどうかは知らないけど、かっこいいとは思う。

「あの、できたら私も行ってみたいです!」

俺を挟んで良一の反対側にいた夏海ちゃんが、身を乗り出すようにして良一に話しかける。

「あー……悪いけど夏海ちゃんはさすがに無理だな。夜の海は本当に危ないからな」

良一が真剣な顔で言う。めったに見せない表情だし、本当に危ないんだろう。

「そ、そうですか……」

「あー……夜の海は無理でも、マリッジェットに乗ってみたいなら、今度昼間に乗せてやるよ!」

「……はい! 楽しみにしてます!」

夏海ちゃんが気落ちしてるのがわかったのだろう。良一が慰めてくれていた。さすが兄弟持ちは違うな……。

「……夜の海なんて危ないし、落ちたりしたら大変だよ。夏海ちゃん は行かなくて正解だと思う」

途中から話を聞いていたしろはが、ため息混じりに言う。

「羽依里も行くなら、十分気をつけてね?」

「わ、わかってるよ」

この島には長い事通い詰めてるけど、夜の海には基本一人では近づかないようにしている。夜の山とはまた違った、得体の知れない怖さがあるし。

「はい、おまちどうさま」

その時、しろはが俺達の前に料理を提供してくれる。

良一の前にエビフライ定食、夏海ちゃんの前にコロツケ定食、俺の前にかつ丼がそれぞれ置かれた。

「おお、今日もうまそうだ」

今日のかつ丼は、トンカツの下に千切りキャベツが敷き詰められていた。更に色々な野菜となめこが入った味噌汁と、野菜サラダもついているので、すごく野菜が摂れる感じだ。

「それじゃ、いただきまーす」

良一と一緒に、騒がしくも楽しい夕食を過ごした後、加藤家に帰宅する。

入浴を済ませて居間に戻ると、鏡子さんと夏海ちゃんがテレビを見ていた。

『私は魔物を討つ者だから』

ちようどテレビドラマが始まったようだ。学校に出た魔物を退治する、女剣士の話だった。

女剣士の親友が魔物の攻撃で大けがを負わされ、女剣士自身も大ピンチに陥ったところで次回予告になった。

「凄い迫力だったわね」

「面白かったですねー」

鏡子さんと夏海ちゃんはご満悦だった。

「次も見ないとね」

「はい！」

俺も思わず、食い入るように見てしまっていた。

……面白かったけど、後半は戦闘シーンばかりで内容はほとんど頭に残らなかった。

ただ冒頭に主人公達が食べていた牛丼が、とても美味しそうだった。

ドラマを観終わり、時計を見るとちようどいい時間だったので、二人に挨拶をして部屋で休むことにした。

布団を敷いて横になってしばらくすると、隣の部屋からはパリングルスオルゴールの音色が聞こえてきた。

「夏海ちゃんも部屋に戻ったのかな……」

その音色に耳を傾けていると、いつの間にか眠ってしまった。

第十二話・完

第十三話 8月6日

「羽依里君、朝だよ」

今日も夏海ちゃんの声で目が覚める。

「おはよう、夏海ちゃん……」

「って、あれ?」

目の前にいるのは鏡子さんだった。夏海ちゃんはその後ろから顔を覗かせていた。

「えっと、おはようございます」

挨拶すると同時に素早く起き上がって、思わず布団の上に正座してしまっていた。まさか、鏡子さんが起こしに来るなんて。

夏海ちゃんに、これどういうこと? みたいな視線を送ってみる。

「たまには気分を変えようかと思いましたが」

「ちようど羽依里君を起こそうとした夏海ちゃんと、廊下で会ってね」

「せっかくだから、鏡子さんに起こしてもらったんです! 驚きましたか?」

「うん。驚いた」

鏡子さんの背後で、悪戯っぽく笑っている。見事にしてやられたようだ。

「昨日は鷹原さんに起こされちゃったので、仕返しです!」

「え?」

鏡子さんが笑顔のまま固まる。

「夏海ちゃん、起こされちゃったって、どういうこと?」

「そ、そのままの意味ですけど……」

「それじゃあ羽依里君、寝てる女の子の部屋に入ったの?」

「えっと、その……はい」

「ラジオ体操に遅れそうでしたし、前も一度入ったし、えっとその……」

「え、前も？　ということは、二回目？」

あ、しまった。

「しろはちゃんなら別にいいけど、それ以外の女の子の部屋に入るなんて……」

鏡子さんの顔がみるみる赤くなっていく。

「……お姉さんに電話しなきゃ！」

「待つてください鏡子さん！　話を聞いてください！」

電話が置いてある居間に走って行ってしまった鏡子さんを全力で追いかけて、必死に誤解を解く。

夏海ちゃんの部屋に入る前に一番に鏡子さんを探した事。結局不在で、俺が起こさなければ夏海ちゃんはラジオ体操に行けず、楽しみにしていた皆勤賞が無くなってしまった事等を話し、なんとか実家への電話は踏みとどまってもらおう。

「ごめんなさい。私ったら、羽依里君の夏海ちゃんを思う気持ちも知らずに」

「い、いえ。わかってもらえたんなら、いいです……」

朝から汗だくになってしまった。まずは着替えないと。

汗を拭きながら、自室に戻る。

「鏡子さん、ちょっとハサミ借りていいですか？」

「うん、いいよ」

部屋で服を着替えていると、既に準備を終えてたらしい夏海ちゃんが、鏡子さんからハサミを借りていた。

なんだろう。先日のパリングルス工作大会で、工作にハマっちゃったとかかな。

着替えを済ませた後、いつものようにラジオ体操へ出発する。

「それじゃ、今日も元気にラジオ体操、行ってらっしゃい」

「はい、行つてきます」

「行つてきまーす！」

夏海ちゃんと一緒に加藤家を出る。なんだか、本当に兄妹みたいだ。

鏡子さんに見送られて出発するつてのも、初めてかもしれない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おはよう、羽依里！」

神社の境内に着くと、いつものメンバーに加えて鴫がいた。

「せっかくスタンプカードもらったんだし、なるべく参加しないとね！」

びしつとスタンプカードを構えて、やる気満々だ。

「鴫つてば、朝から元気よねえ」

「だよなー」

蒼と良一は空を見上げている。既にセミたちは盛大な声で空を叩いていて、今日も暑くなりそうだ。

「お前たちは逆に鴫を見習え。ほら、ラジオ体操大好きさんが、今日も元気にやって来たぞ」

のみきが指さす方向から、今日もラジオ体操大好きさんがやってきた。

「お、おまえらー……準備はいいかー……？」

「……あれ、なんか元気ないですけど」

本当だ。なんか疲れてるように見える。

「実は、毎日続くこの暑さで夏バテ気味なんだ……」

まあ、無理もない話だった。

「ラジオ体操大好きさん、しっかりしてくださいー！」

「そ、そうだな……俺がしっかりしないと……よーし、お前らー……！
準備はいいかー……！ 今日もラジオ体操を始めるぞー……！」

自らを鼓舞し、今日も元気なラジオ体操が始まった。なんか少し声が裏返ってたけど。

「第二の体操！ 横隔膜の振動！ うるあああああー！」
「うるあああああー！」

ラジオ体操大好きさんの指示に合わせて、皆で大きな声を出して横隔膜を動かす。

「なあ良ー、この体操も結構続けてるけど、本当に横隔膜の運動になってるのか？」

「さーな。ラジオ体操大好きさんがそう言うんだから、なってるんじゃないか」

「第四の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐるー！」

ラジオ体操大好きさんが頭を振り回す。

「ぐるぐるぐるー！」

俺たちもそれにならって頭を振り回す。

「うう、気持ち悪い……」

この体操も、三半規管が鍛えられてる感じは全然しない。

「よーし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「ありがとうございますー！」

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

「はーい！」

元気良く、一番最初にスタンプをもらいに行く鳴。

俺たちもその後ろに並び、スタンプとログボを受け取る。

「おお、佃煮だ」

今日のログボは瓶に入った海苔の佃煮だった。

「これ、ごはんに乗せると美味しいよね！」

「炊きたてごはんに乗せると最高だよな」

「のみきさん、早速帰って食べよう！ 味噌汁と目玉焼き作るよ！」

「ああ、期待しているぞ」

鴫はのみきと一緒に帰っていった。俺達も他の皆にあいさつをして、帰宅することにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、羽依里君。ちょうどいいところに帰ってきてくれたね」

帰宅すると同時、玄関先で鏡子さんに呼び止められる。

「どうかしたんですか？」

俺は反射的に、海苔の佃煮の入った瓶とスタンプカードを玄関先に置いて振り返る。

「荷物が届いたって連絡が入ったんだけど、午前中でいいから取りに行ってくれないかな？　どうしても抜けられない寄合が入っちゃって」

「暇ですし、良いですよ。港ですか？」

「駄菓子屋なんだけど」

「え、駄菓子屋？」

「あのお店って、通販代行もしていてね。匿名で色々取り寄せてくれるの」

「は、はあ……」

匿名って所が恐いけど、そんなサービスもやってるのか。写真の現像もやってるって話だし、すごい店だよな。

「代金は先払いしてあるから、品物を受け取って来てくれるだけでいいからね」

「わかりました」

「それじゃ、よろしくね」

鏡子さんはそこまで話すと、慌ただしく出かけて行ってしまった。

「午前中で良いんなら、宿題終わった後に夏海ちゃんも一緒に……って、あれ？」

さつきまで玄関にいたはずの夏海ちゃんの姿がない。

そして、玄関先に置いたはずの海苔の佃煮も無くなっていた。

「この流れはもしかして……」

俺は急いで台所へ向かう。家に入った時点で、既に香ばしい匂いが漂ってきている。

「あ、もうすぐ朝ごはんできますから、座って待っていてください」

台所に入ると、夏海ちゃんがエプロンをつけて、フライパンを動かしていた。

フライパンの横には予想通りに、半分くらいに減った佃煮の瓶が置いてあった。

「夏海ちゃん、今日の朝ごはんって」

「はい。佃煮チャーハンです!」

炊きたてごはんに乗せて食べたかったけど、また先手を打たれてしまったみたいだ。

「はい、完成しました! どうぞ!」

数分後、佃煮チャーハンが俺の前に置かれた。

「それじゃ、いただきます」

とりあえず食べてみる。

所々焦げてるところがおこげみたいで美味しかったけど、それ以外はどうやってても海苔の佃煮の味しかなかった。しかも佃煮の水分で、せつかくのチャーハンがべちゃっとなってしまっていた。味は良いだけに、残念だった。

朝食後は夏海ちゃんと宿題をする。

国語の宿題だろうか。夏海ちゃんの口からケンコーハウシとか、マクラノソウシとか、久しぶりに聞く単語が出ていた。

宿題の後、鏡子さんに頼まれていた荷物を取りに駄菓子屋に行くことにした。

「夏海ちゃん、駄菓子屋に行くけど一緒に行く?」

「あれ、何か用事ですか?」

「うん。鏡子さんから用事を頼まれてさ」

「せつかくなので、ついて行っていいですか？」

「うん、一緒に行こう」

「はい！」

夏海ちゃんと一緒に駄菓子屋に到着すると、天善が居た。

「よう天善」

「天善さん、おはようございます！」

「鷹原に夏海か。どうしたんだ？」

「この店で通販代行をしてるって鏡子さんに聞いてき。荷物を受け取りにきたんだ」

「なるほどな。俺もついさつき、新しいラケットを注文したところだ。この店の通販代行システムは素晴らしいぞ」

見ると、天善は手に何も持っていなかった。いつもはラケットを握ってるのに。

「あれ、あのラケット壊れちゃったんですか？」

「ああ。長年の相棒だったが、ついにガタが来てしまってたな」

「海水につけたり、花火打ち返したり、最近は色々無理させてたっぽいしな」

「……いらつしやい」

そんな話をしていると、店の奥から店番のおばーちゃんが出てきた。

「あれ、そういえば今日は蒼はいないんですか？」

「蒼ちゃんは今日も港で出店じゃのお」

今日もやってるのか。後で行ってみよう。

「もう少ししたら藍ちゃんが来てくれるはずなんじやが」

おばーちゃんはゆつくりとした動作で駄菓子やアイスの補充をしていた。

「あの、鏡子さんが注文していた荷物が届いてるって聞いてきたんですけど」

「おお、そうじゃったな。少し待っていておくれ」

おばーちゃんはこれまたゆっくりとした動作で店の奥に消えていった。

「なあ天善、もしかして昨日のオルゴールキットもここで取り寄せてくれたのか？」

「ああ、実家が自転車屋をしている関係で、珍しい取り寄せ本がたくさんあってな。その中に曲を自作できるオルゴールキットがあったわけだ」

「自作？」

「付属の楽譜に穴を開けて、自分で曲を作れるタイプがあるんだ。夏海はパリングルスで代用していたけどな」

昨日夏海ちゃんが作ってた楽譜がそれだったわけか。

「楽譜の方は静久が作ってくれたんだっけ」

「ああ、俺は楽譜が読めないからな。水織先輩にも協力してもらったんだ」

裏で静久も動いてくれていたわけか……今度会った時にお礼言っておかないと。

「個人で注文しても良かったんだが、駄菓子屋に代行してもらった方が不思議と早く届くからな。ギリギリだったが、間に合って良かった」

「天善さん、色々とありがとうございます！」

「いや、昨日は喜んでもらえたようだし、思い出になったのならそれでいい」

……どうやら、本当に何もやって無かったのは俺だけらしい。

「ほい、これじゃの」

その時、おばーちゃんが奥から鏡子さんの荷物を持って戻ってきた。

「ありがとうございます」

受け取った拍子に、ふと気になって品物を見ると……商品名の所も、差出人の所も、マジックで塗りつぶされていた。

「うわ、怪しい」

「そりゃ、守秘義務があるからの」

……まさか、この島で守秘義務と言う言葉を聞くとは思わなかった。

「皆、色々な事情があるからの」

おばーちゃんの意味深な発言を噛みしめつつ、俺達は一度加藤家に帰宅する。

帰宅しても、例によって鏡子さんはいなかったので、受け取った荷物は居間に置いておく。

中身なんだろう。すごく軽かったんだけど。

一応任務は達成したんだけど、同時に暇になってしまった。

「鷹原さん、港に行ってみませんか？」

冷蔵庫から麦茶を出して二人で一休みしていると、夏海ちゃんがそう切り出す。

「駄菓子屋のおばーちゃんの話だと、今日も蒼が出店をしてるって話だしね。行ってみようか」

「はー」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

外に出て、港へ向けて歩く。

何日か前の肝試しの話とかしながら、二人でのんびりと歩いていると、田舎道にさしかかる。

「この道でも、左右の森と草むらから良一と藍が飛び出してきたね……こつちも心臓が飛び出るかと思つたよ」

「夜だったら、本当に怖そうですね」

「その先の木からも鷗が落ちて来るし、もう大変で……あれ？」

その時、田舎道に生えてる木の根元が目に残る。そこに蒼が寝ていた。

「え、蒼？」

確か港で出店をやってるはずなのに。

「あれ、藍さんじゃないですか？」

「え、うそ？」

夏海ちゃんに言われて近くで見直してみると、藍のようだった。

「髪の毛の巻き方、蒼さんと逆ですし」

俺の隣にやってきた夏海ちゃんが、その寝顔を覗き込む。

髪型もそっくりだけど、よく見たら巻き方が蒼と逆だった。前の登

校日の時にもやってたし、通学スタイルというやつだろうか。

お腹の上に手を置いて寝てるし、とことなく品があるような。隣にイナリもいないし。

「ううん……」

その時、藍が身じろぎしてバランスが崩れる。

「あ、危ない」

思わず、倒れかけた方の肩に手をやって、藍の身体を支える。

「……？」

その衝撃で、閉じられていた藍の目がゆっくりと開く。

「……は？」

藍は一瞬戸惑ったような顔をして、その後ものすごい目で睨みつけてきた。

「……羽依里さん、離してもらえますか？」

「え、でも」

今この状況で手を離したら、藍が痛い目にあうような。

「良いから離してください！」

「はい！……ごめんなさいー！」

さつきにも増して睨まれて、俺は思わず手を離す。

……ごちん。と音がして、木の根で藍が頭を強打していた。

「~~~~~！」

左のこめかみ辺りを押さえて、声にならない声をあげていた。

「だ、だから言ったのに……」

その後も、藍はしばらく悶えていた。足をバタバタさせて、凄く痛

そうだった。しかもスカートだったので、色々と危なかった。

「羽依里さん、最低です。女の子の顔に傷がついたらどうしてくれるんですか」

「だって、離せって言われたから離れたのに……」

俺は理不尽に怒られていた。

「ところで藍さん、どうしてこんな所で寝てたんですか？」

「港で蒼ちゃんの出店の準備を手伝った後、まだバイトの時間まで時間があつたので、ここで休んでいたんです。そしたら眠ってしまいました」

木の下はいい感じに日陰になっていて、藍の隣に座っている夏海ちゃんは快適そうだった。

ちなみに俺はそこに近づくこと許されず、直射日光に晒されている。

「羽依里さんはそれ以上近づかないでください。あやうく襲われかけましたし」

だからそれは誤解だつてば……。

「この場所、気持ちいいですね」

「そうですね。この場所はなぜか落ち着くんです。蒼ちゃんもよくここでお昼寝をしています」

「そうなんです」

「蒼ちゃんのおいがします」

「え、なにそれ」

どんなにおいか気になってしまった。ブルーハワイみたいな？

「だから近づかないでください」

「ぐぬぬ……」

「ところで藍さん、バイトの時間は良いんですか？ 駄菓子屋のお

ばーさん、待ってましたけど」

「ああ……そろそろですね」

藍はゆっくりと起き上がると、スカートについた草を払い落とす。

「夏海ちゃん、せっかくですから蒼ちゃんの出店にも行ってあげてください。きつと喜びますよ」

「はいー」

藍は背伸びをしながら、住宅地の方へ歩いていった。

「それじゃ、俺達も港へ行こうか」

その後ろ姿を見送った後、俺達も港へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、いらつしやーい」

港に行ってみると、いつもの所に蒼が出店を出していた。

「最近、ずっと蒼と藍が店を出してる気がするんだけど」

「そりゃあねー。なんだかんだで商売のノウハウ持ってるし」

「それじゃ、今日もウツハウハなんだな」

「ううん。全然……」

……正直でよろしい。

「それで、今日は何を売ってるんだ？」

「これよ」

クーラーボックスを開けると、中は氷でキンキンに冷やされていて、色とりどりの果物が入っていた。

更に、その一つ一つに棒が刺してあり、果物の周りは水あめでコーティングされている。

「なんて言うんだっけ、これ」

「あんず飴よ」

「そりゃ売れないよな……」

「え、なんで？」

「そりゃ、顔に飛ばないしさ」

氷でキンキンに冷やされている関係で、果物をコーティングしている水あめもかなり固い。これなら確かに顔には飛ばないと思う。

「どういう意味よそれ」

蒼、そんなジト目で見ないで。思い出させるようなこと言った俺も

悪いけど。

「藍みたいにイナリに任せて、無人販売にした方が良いんじゃないか？」

とりあえず話題を変えてみる。

「さすがに食べ物の出店をイナリに任せるのはねー」

「あ、そう言えばそうだよな」

なんだかんだで野生動物だし。

「とりあえず、夏海ちゃんと一つずつ貰おうかな」

「まいどありー。どれでも一つ50円だから、好きなもの取っていいわよ」

そう言っただけでクーラーボックスを俺達の方に向けてくる。色々な種類の果物があるので、結構悩む。

「それじゃ、このイチゴにします！」

「俺はこのパイナップルにするかな」

あんず飴を二つ買って、夏海ちゃんと一緒にその場で食べる。

「甘酸っぱくておいしいです！」

「うん。美味しい」

果物を飴でコーティングしたお菓子と言えばリングゴ飴が思い浮かぶけど、このあんず飴は食べてるうちに水あめが溶けてきて、良く言えば柔らかくて食べやすい。悪く言うと、急いで食べないと水あめが溶ける。

「……なあ蒼、おしぼりとかないか？」

正直なところ、パイナップルはその形状の関係か食べにくかった。別のを選べばよかった。

それにしても商品名はあんず飴なのに、実際にはあんずは使われていないのはいかがなものだろう。

「……そういえば羽依里、佃煮いる？」

悪戦苦闘しながらあんず飴を食べ終わった頃、蒼がそう切り出した。きた。

「え、海苔の佃煮なら朝食食べたけど？」

「もつと特別やつよ」

蒼はそう言うのと、別のクーラーボックスから包みを取り出し、俺に手渡してくる。

「なんだこれ」

「駄菓子屋のおばーちゃんからもらったの。おすそ分けしてあげる」

風呂敷に包まれている。手に持った感じは中にタツパーが入っているっぽい。

「ここだと暑いから、帰ってから開けてね」

「わかった。ありがとうございます」

「蒼さん、ありがとうございます！」

腕時計を見ると、ちょうどお昼時だった。さつそく昼ごはんにいただくとしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

帰宅して手を洗い、さつそく昼食の準備をする。

朝は夏海ちゃんに先手を打たれてチャーハンにされてしまったから、ようやくの佃煮だ。

ほかほかご飯を用意して、風呂敷包みを開いて、タツパーのふたを開ける。

「きゃあああーっ！っ！」

そして、俺は叫んでいた。

「……………」

夏海ちゃんはあまりの恐怖に、俺の数歩後ろに下がって震えている。

もらった佃煮……………佃煮は佃煮でも、蜂の子とイナゴの佃煮だった。完全に油断していた。凄まじいインパクトだった。

「蒼も貰ったのは良いけど食べれないから、俺達にくれたんだな……………」

もう一度だけ、ちらつと中身を見る。まんま虫だ。これを島の皆は普通に食べるのだろうか。田舎恐るべし。

「ていうか、どうしようこれ」

「と、とりあえずチャーハンにしましょうか？」

「……あまりにグロテスクすぎるからやめようか」

一瞬想像してしまった。慌ててそのイメージを打ち消す。

「鷹原さん、そういうの好きじゃないですか」

「好きだけど、それは本の中であって、こういうのじゃないんだ」

この島の生活で多少は虫に慣れてきているとは言っても、これは別問題だ。

とりあえず中身をできるだけ見ないようにしながら蓋をし、風呂敷で包みなおして冷蔵庫にしまう。

気を取り直して、お昼はキムチうどんを食べることにした。

お湯を注ぐと、すぐにキムチの良い香りが漂ってきた。これぞ現代人の食べ物という感じがして、安堵する。

そして、きつちり三分経ってからいただく。

「うん、うまい」

この辛さが夏の暑さにちようどいい。

「うう、ちよつと辛いです……」

辛み調節用の特製スパイス、俺と同じように全部入れちゃってたみたいだし。これだと夏海ちゃんには少し辛いかもしれない。

「ちよつとお水持つてきます」

「あ、トウガラシの辛さは水じゃ消えないから、牛乳飲むと良いよ」

「そうなんです。ありがとうございます」

しばらくして、コップに入れた牛乳を持って戻ってきた。俺も後で牛乳飲もう。

昼食後、今日はイベントも特に聞いてないのでまったりと過ごす。

そういうと聞こえはいいけど、ぶつちやけ暇だった。

「すみません鷹原さん。ちよつと出かけてきます」

「え？ 夏海ちゃん、どこか行くの？」

「はい。ちよつと用事です」

麦わら帽子をかぶってリュックを背負って、どこかに出かけていつてしまった。一人で外出とか、珍しいな。

一人残され、ますます暇になってしまった。

どこか出かけようかな……と思って立ち上がった時、冷蔵庫の佃煮を思い出した。

「そうだ。あの佃煮、しろはなら役立ててくれるかもしれない」

少なくとも、このまま加藤家の冷蔵庫で眠っているよりいいと思う。

というわけで佃煮を冷蔵庫から引っ張り出し、氷を入れたビニール袋と一緒にバイクの収納スペースに入れる。

「しろは、どこにいろだろう」

俺はしろを探すため、バイクを発進させた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

最初にしろはの家に行ってみる。

「しろはー」

名前を呼んでみるけど、誰かが出てくる気配はない。近くの鶏小屋から、ニワトリの鳴き声が聞こえてくるだけだった。

「留守なのか。ここじゃないとしたら……」

俺はバイクを走らせて、島の外れ……しろはの釣り場にやってきた。

「あれ、ここにもいない……」

ここにもしろはの姿はない。少し前に船が通ったのか、波の音がやたら大きく聞こえる。

「ここもないとしたら……あれ？」

周囲を見渡ししていると、見慣れた後ろ姿を見つけた。夏海ちゃんだ。

「夏海ちゃん」

「……………」

背後から声をかけたからか、夏海ちゃんが飛び上がるくらい驚いていた。

「た、鷹原さん。驚かせないでください……………」

「ごめんごめん」

…………あれ？　そういえば夏海ちゃん、バイクの俺より先にどうやってこの場所に来たんだろう？

「どうかしたんですか？」

「ううん。なんでもないよ」

きっと俺の知らない秘密の抜け道とかあるんだろう。しろはとかそういうの詳しそうだし。

「それより鷹原さん、何しに来たんですか？」

「え？　えつとね……………」

俺は夏海ちゃんに、しろはの所に例の佃煮を持っていこうとしている旨を伝えた。

「一緒に行つて良いですか？」

「いいよ。後ろに乗って」

「はいー」

夏海ちゃんと合流し、再びバイクを走らせる。

次にため池に寄ってみた。しろはの釣り場からだど道すがらだし。

「おお、涼しい」

水が近くにあるせいか他の場所より涼しいとは思うけど、しろははおろか、周辺には誰の姿もなかった。

「でも、なんで来たんだろう……………」

俺達はバイクから降りて、ため池の近くに寄っていく。

しろはのことを考えていたら、何故かここに来てしまっていた。先

の昆虫採集大会の時、鷗と来て以来だ。

「れいだーん」

両手を構えて、なんとなくやってしまっていた。
「え、なんですかそれ」

その様子を見た夏海ちゃんが少し引いていた。

「ごめん夏海ちゃん、気にしないで」

「は、はあ……」

俺は何の気なしにため池を覗き込む。岸に近い所では浅くなっているところもあって、池の底が見えていた。ザリガニ達がわしゃわしゃと元気に動いている。

「夏海ちゃん、別の場所に行ってみようか」

「れいだーん」

夏海ちゃんの方に振り向くと、こつそりやっていた。なんとというか、微笑ましい。

「ご、ごめんなさい。なんでかやってしまったんです！」

見られたのが恥ずかしかったのだろうか。顔を赤くしながらバイクの方に走って行ってしまった。

俺もあえて何も言わず、バイクにまたがった。

その次に、漁港の方に行ってみた。しろはのじーさんが漁から戻っていれば、しろはがどこにいるかわかるかもしれないし。

「……誰も居ませんね」

漁港には漁師はおろか、ネコの子一匹いなかった。

「ここも外れかな」

「あれ、羽依里？」

夏海ちゃんと二人バイクに乗ったまま、踵を返そうとしていると、背後から声をかけられた。

「鷗さん、こんにちわですー！」

「やつほー、なっちゃん」

いつものようにスーツケースを引いて、鷗が歩いていた。

「鷗、こんな所で何やってるんだ？」

「散歩だよ」

「え、この暑い中を？ 大丈夫か？」

「これがあるから大丈夫！」

見ると、鷗は白い日傘を持っていた。鷗の黒髪に映える感じで、似合っていた。

「ところで羽依里、しろしろと喧嘩したの？」

「え、別にしてないけど」

「なんかね、しろしろが羽依里と喧嘩して、怒って出て行っちゃったって噂を聞いたんだけど」

「誰から？」

「港であつたおばさん。若いっていいわねって言つてた」

いやいやいや、若い云々言う前に、喧嘩してないから。

「羽依里がバイクでしろしろを探し回ってるってのも、噂になってるんだけど。そのバイク違うの？」

「確かにバイクも乗り回してるし、しろはも探してるけど、喧嘩はしてないから」

「うーん。そうなんだね」

「もしその噂を流してる奴に会ったら、きちんと訂正しといてくれ」
「わかつた」

「ところで鷗、しろは見なかつた？」

「ごめん、見てないよ」

「わかつた。ありがとうな」

そのままバイクのキックスイッチでエンジンを起動させる。早い所しろはを見つけないと。

バイクをUターンさせて、住宅地を駆け抜ける。もしかしたらしろはとすれ違わないかと周囲に気を配りながら、そのまま一本道を通つて、灯台へと向かう。

灯台に着くと、そこには紬が居て、灯台の周りに水を撒いていた。

「おーい、紬―」

「紬さーん」

「むぎゆ！ タカハラさんとナツミさんです！」

バイクに乗ったまま紬に声をかけると、水道の蛇口を絞めて、こっちに走ってきた。

「紬、何してるんだ？」

「今日も暑いですから、打ち水をしていました！」

灯台の壁にはデツキブラシが立ってかけられていた。俺の知っている打ち水とは、だいぶ違うみたいだ。

「あれ。紬さん、今日は一人ですか？」

夏海ちゃんが周囲を見渡しながら言う。そういえば静久の姿がない。

「はい、シズクは課題の提出日だそうで、本土に戻っています！」

すっかり忘れていたけど、静久は大学生だった。

「全部完璧に提出したはずなのにー、って泣いてました。できるだけ早く提出して帰ってくるらしいです」

せっかくの夏休み、静久も一日も多く紬と一緒に居たいんだろう。

「そういえば、静久さんって何学部なんですか？」

夏海ちゃんがふとした疑問を口にする。言われてみれば、俺も聞いたことがない。

「むぎゆ、わたしも知らないです」

紬も知らないみたいだ。

楽譜が読めたり、パリングルス工作大会での絵の具の扱いとかを見てると美術系なのかもしれない。

一瞬、おっぱい学部という単語が浮かんだけど、さすがに無いだろう。

「ところでタカハラさん、シロハさんと喧嘩したんですか？」

「え？」

「潮風に乗って、そんな噂が聞こえてきました。新しい恋人ができてシユラバだとか」

え、なにそれ。

「大丈夫だよ。喧嘩なんてしてないから」

「そ、それならいいのですが」

「変に噂が独り歩きしてるみたいだね。早くしろはに会わないと」

「それじゃ紬、頑張ってね」

「はい！ ご武運をお祈りしています！」

紬は俺たちに笑顔で手を振りながら、打ち水の作業に戻っていた。
た。

「次はどこに行こうかな……」

俺と夏海ちゃんは灯台を後にした。

その後は住宅地まで戻り、駄菓子屋や神社にも足を運んでみる。神社には人つ子一人いなかった。

駄菓子屋には店番の藍がいたが、今日はしろはは来ていないのとどこだった。

……行く当てが無くなってきた俺たちは、気が付けば役所に来た。
た。

「しろは、来てないよな？」

「なぜ役所にいると思ったんだ？」

俺たちの前に立っているのみきは呆れ顔だ。

「後はここくらいしか残って無かったんだ」

「しろはと喧嘩したと聞いたが」

「いや、してないから」

「愛人2号に弁当を貰っていたと、噂になっていたぞ」

「いや、愛人2号って誰？」

「それはわからないな。結局は噂だからな」

「どうしてもしろはと会いたいと言うのなら、鉄塔から呼びかけてやろうか？」

「いや、それはやめておくよ」

そんなことをしたら、それこそ噂を助長しかねない。

「……もう少し探してみるよ」

「事情はわからないが、頑張れよ」

その後もあつちこつち走り回って見たが、ついにバイクのガソリンがなくなってしまった。

俺は結局しろはを見つけることはできず、バイクを押しながら、失意の元に加藤家へ帰宅した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里君、しろはちゃんと喧嘩したって本当?」

帰宅すると開口一番、鏡子さんにそう言われた。

「誤解ですよ。喧嘩する以前に、今日会えてもいないんですから」

「愛人からお弁当受け取ってるのをしろはちゃんに見られて、泣きながら逃げられたって。寄合でも噂になってたよ」

……噂がますます独り歩きしてる。だから愛人って誰。

「じゃあもしかして、しろはのじーさんの耳にも?」

「ううん。今日は鳴瀬さんは寄合に来てなかったから、まだ大丈夫だとは思うけど」

今日は漁に出てるんだろうか。なんにしても助かった。もし、あのじーさんの耳に入っていたら、間違いなく殴り込みに来られていただろうし。

「……あ、もしかしてお弁当って、あれじゃないですか?」

「え?」

その時、夏海ちゃんが思い出したように声をあげる。

「ほら、蒼さんから佃煮受け取ったじゃないですか」

夏海ちゃんに言われて、蒼から佃煮を受け取った場面を思い出した。受け取った佃煮は風呂敷鼓に包まれてたし、見ようによってはお弁当を受け取っていたように見えたかも。

「あの場面を誰かに見られたのか……」

それから噂が独り歩きしたのか……噂って怖い。

「今の時間なら、もうしろはちゃんも食堂に行ってるだろうし、行くな
ら早く行った方が良いよ」

「わ、わかりました」

鏡子さんに促されて、俺は食堂へと向かう。もちろん、問題の発端
となった佃煮を持って行くことも忘れない。

「夏海ちゃんは後からゆっくり来て良いからね！」

「はいー！」

俺は急いで外に飛び出すと、食堂へと走った。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろはー！」

バイクはガソリンが切れてしまっていたので、全力で走ってきた。

「え、いらっしやい。今日は早いね」

扉を開けると、カウンターの奥にいたしろはが驚いた顔をしてい
る。俺はそんなしろはに近づき、肩に手を置く。

「しろは、変な噂が流れてると思うんだけど、気にしないでくれ」

「え、噂？」

「俺はしろは以外に愛人なんていないし。弁当貰ったなんて事実はな
いからー！」

「え？ え？」

「俺が愛してるのはしろはだけだから。しよせん、噂は噂だから！」

俺はまくしたてるように話す。

「……ごめん、羽依里の気持ちはその、すぐくうれいんだけど……
えつと、言ってることの意味がよくわからない」

「えっ？」

しろはは顔を赤くしているが、どこことなく困ったような顔をしてい
る。

「……噂、知らない？」

「ごめん。今日は私、ずっと食堂に籠っていて」

「……へっ?」

しろはによると、今日は丸一日、昨日貰った中華鍋を油になじませたり、新しいメニューの開発をしたりと、食堂に入り浸っていたらしい。

よって、島中で囁かれている噂は全く耳にしていないとのことだった。

「な、なーんだ……心配して損した……」

一気に安心してしまった。身体から力が抜けて、カウンター席に座り込んでしまう。

「羽依里がそこまで慌てるって、どんな噂が流れていたの?」

「実はさ……」

俺は島で流れている噂について、しろはに話して聞かせた。

「……ぷ。変なの。私と羽依里が喧嘩するなんて、ありえないよ」

一笑に付してくれた。

「……羽依里を怒ることは、時々あるかもだけど」

「それは喧嘩じゃないもんな」

「そうだね」

しろはが笑う。俺もつられて笑顔になる。

「それで……騒ぎの発端になった、蒼からもらった佃煮ってのがそれ?」

「そう」

隣の席に置いていた風呂敷包みを、しろはに手渡す。

「わあ、美味しそう」

タッパーを開けて、中身を見る。全く動じる様子はない。

「味見していい?」

「ど、どうぞ」

カウンターに置いてある箸立てから箸を一膳抜き取って、イナゴの佃煮を口に運ぶ。

「うん。おいしい」

おおう、食べてる……。

何度も思うけど、島の人間は遅すぎる。

「これを使ったレシピ、考えてみるね」

「う、うん。期待してるよ」

しろははタッパーのふたを閉めて、佃煮を冷蔵庫へとしまう。

……しろはには悪いけど、しばらく食堂で日替わりはは頼まない様にしよう。

その後もしろはと今日の出来事を色々と話した。

どうやら、しろはも静久が何の大学に行っているかは知らないようだった。

「しろはさん、こんばんわー」

日が暮れた頃、夏海ちゃんがやってきた。

「ごめんね夏海ちゃん、取り越し苦労だったみたい」

「そうですか」

口には出さないけど、談笑している俺たちを見て、安心して様子だった。

「二人とも、そろそろ良い時間だし、晩ごはんにする?」

「そうしようかな。夏海ちゃんも座って」

「はい!」

セルフの水を用意して、夏海ちゃんも席に座るように促す。しろははおしぼりとメニュー表を渡してくれる。

「それじゃ、今日は何にする?」

「俺は活け作り定食にしようかな」

少し考えて、今日は魚にすることにした。

「私は日替わり定食ください!」

夏海ちゃんは日替わり定食を注文していた。

「うん。少し待っててね」

……そういえば、今日の日替わりって何だろう。さすがにさっきの佃煮は使われないだろうけど。

それからしばらくして、俺たちの前に料理が並べられていく。

「ご飯、豆腐のみそ汁、海藻サラダ、大豆の煮物。ここまでは二人とも同じだった。」

「はい、羽依里」

俺の前に刺身の乗った皿が置かれた。メインはイカとタコの刺身だった。美味しそうだけど、なんだろうこの組み合わせ。

「はい、夏海ちゃん」

そして、夏海ちゃんの前には大きなたい焼きが二つ乗った皿が置かれていた。

「え、たい焼き?」

夏海ちゃんも素っ頓狂な声を上げてしまっていた。

俺も思わず二度見してしまった。どう見ても、焼きたての美味しそうなたい焼きだった。

「うん。日替わりのたい焼き定食」

夏海ちゃんは何とも言えない顔をして、固まっていた。

「えーと、中身はあんこだよね?」

固まっている夏海ちゃんに代わって、俺が質問してみる。

「そう、だけど……」

もしかして、あんこ嫌いだった? みたいな顔をされた。

「お、美味しそうです!」

慌てて取り繕ってる。夏海ちゃんも大変そうだ。

「それじゃ鷹原さん、いただきます!」

「そ、そうだね。いただきます!」

気を取り直して、俺たちも食事を始める。

イカとタコの刺身は甘くて歯ごたえがあつて、最高だった。

一方で夏海ちゃんは、一生懸命みそ汁と大豆の煮物でご飯を食べていた。

やっぱりたい焼きとごはんは合わなかったらしい。

「ごめんね夏海ちゃん。今度はこしあんとか、カスタードたい焼きも用意しておくね」

いやしろは、そういう問題じゃないと思う。

時々、この島の住民の食文化が分からなくなる。

「いえ、カスタードたい焼きは邪道と、どこかの誰かも言っていました、これで大丈夫です！」

その後も夏海ちゃんは笑顔で食事を続け、たい焼き定食を完食した。夏海ちゃん、頑張ったね。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しろは食堂から帰宅した後、お風呂を沸かした。

食堂での労をねぎらって、一番風呂は夏海ちゃんに譲ってあげた。俺はお風呂の順番が来るまで、居間でのんびりテレビを見ていた。

『その人！ どいてどいて！』

またテレビドラマをやっていた。凄腕の食い逃げ師である女の子が、伝説のたい焼きを食い逃げしたのは良いが、追手にすぐそこまで迫られているという内容だった。

箸を持つ方に避けると主人公に言われて、左に避けて主人公とぶつかっていた。どうやら食い逃げ犯は左利きらしかった。

夏海ちゃんには悪いけど、時折出てくるたい焼きがとてもおいしそうだった。

「羽依里君、お友達が来てるよ」

「え、友達？」

その時、鏡子さんから声をかけられた。

誰だろうと思いつながら玄関に出てみると、良一がいた。

「よう」

「こんな時間にどうしたんだ？」

「釣りに行かないか？」

「え、それって」

「夜釣りだ」

昨日お願いしたばかりのはずだけど、もう準備してくれたんだらうか。

「いいな。夜釣り」

「行こうぜ、夜釣り」

「レツツゴー」

コツン、と良一と拳を合わせる。

ノリでそこまでやった後、ちゃんと鏡子さんに許可をもらって外出した。

夏海ちゃんはお風呂に入っていたし、今回は俺だけ出かけることにした。夜の海は危険だから、夜釣りには同行しない約束だし。

懐中電灯と釣り道具を持った良一と一緒に夜道を歩く。

「ところで夜釣りって、どこでやるんだ？」

「着いてのお楽しみだ」

良一はいたずらっぽく笑う。にやけるだけで教えてもらえそうにない。

「天善が先に言って準備をしてくれているはずだぜ」

「天善も来るのか」

「ああ、今回は男三人水入らずだな」

良一はどことなく嬉しそうだ。

まあ、たまにはこういう時があってもいいかもしれない。

「夜釣りって、昼間の釣りと何か違うのか？」

折角なので、釣り場に着くまで色々と質問させてもらうことにした。

「そうだなー。まず、夜は魚の警戒心が薄れて釣りやすくなる。入れ食いになったり、思わぬ大物が釣れたりな」

「へえ、そうなのか」

「そして、今の時期だと涼しく釣りができる」

確かに、この間皆とやった釣りは楽しかったけど、かなり暑かった。しろはの釣り場は風がそれなりにあるから、誤魔化せていたけど。

「後、近くに街灯とか光があると釣れやすい。集魚灯つてのものもあるしな」

「そうなのか？ 逆に逃げそうなもんだけど」

「光に集まるプランクトンがいてな。それを食いに小魚が集まる。すると、その小魚を食いに大物も寄ってくるわけだ」

「あー、そういうことか」

「この辺の海だと、メバルにスズキ、チヌ、カマスとかだな」

俺でも名前くらい聞いたことのある魚ばかりだった。その辺が釣れると言われると、やる気も出る。

「でも、時々ゴンズイやエイが釣れることもある。そいつらは毒針を持つてるからな。もし釣れたらすぐに逃がせよ」

「わかった」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よし、着いたぜ」

その後も色々なレクチャーを受けているうちに、釣り場に到着したようだ。

「あれ、ここって」

暗いからわかりにくかったけど、しろはの釣り場だった。

「お、鷹原も来たのか」

そして聞き慣れた声があった。天善がすでに来ていて、釣り糸を垂れているようだった。

「そういえば鷹原、愛人2号に弁当をもらったという噂は本当か？」

「ただの噂だ！ もらったのは佃煮だ！」

この二人もしっかり知っていたのか。噂って怖い……。

「ところで、こんなに暗いんじゃないじゃないか？」

「大丈夫だ。見てみろ」

天善の指差す先、真っ黒い海面を見ると、一点だけ淡い光を

放っている場所があった。

「え、なんだあれ？」

「電気ウキつてやつだよ。あれなら沈んでもすぐにわかるだろ」

良一がすぐ近くに釣り道具を置きながら、そう説明してくれる。

「羽依里の分もちゃんと用意してあるぜ」

「それは助かるけど、こう暗いと仕掛けを作るのも大変そうだな」

良一が懐中電灯を持つてはいるけど、それ以外の場所は本当に暗い。足元すら見えない。

「心配しなくても、秘密兵器がある」

そんな俺の心境を知ってか知らずか、良一はバッテリー式の投光器を用意していて、それを使って明かりを灯す。

「おお、すごいな」

一気に明るくなった。これなら足元の心配もいらなさそうだ。

「さっき言ったろ。光に魚は集まるって」

慣れた手つきで釣りの仕掛けを用意しながら、得意げに話してくれる。

明るくなって分かったが、全員分のバケツまで用意してあった。

「ここには元々光源がないから、こっちで用意してやるんだよ。イカ釣りの時には光でイカを集めるって話、聞いたことあるだろ」

確かにそんな光景をテレビで見たことがある気がする。

「ほれ、羽依里の釣り竿だ。エサは自分でつけろよ？」

「わかった」

良一から手渡されたタッパーに入っていたのは、見慣れた虫だった。これがエサなんだろう。

出来るだけ見ない様にしたし、これは虫じゃない！ 魚のエサだ！と自分を誤魔化しながら、エサを針につける。

「このエサが一番匂いがきついからな」

良一がそう言いながら、俺の隣で釣りを始めた。

「夜は暗いから、魚も嗅覚を頼りにエサを探す。必然的に匂いが強いエサの方が釣れるわけだな」

そう言う天善は、俺達二人とは防波堤を挟んで反対側の海に仕掛け

を沈めている。

投光器は防波堤のちょうど真ん中に設置され、全体的に明るい。これならやりやすいな。

「それじゃ、始めようぜ」

それからは時々適当に駄弁りながらも、釣りを楽しんだ。

「よし、ヒット！」

入れ食い……とまではいかないけど、短い間隔で魚が釣れる。

良一の秘密兵器の力は絶大で、様々な魚が光に集まってきているみたいだ。

「おっ、それはメバルだな」

俺が釣った獲物をバケツに入れるのを見て、良一がそう教えてくれた。

「刺身や煮付けにしてもうまいんだぜー」

そうなんだ。今度しろはに作ってもらおう。

「俺としては、スズキを釣りたいところだけどなー」

良一のバケツには俺の倍以上の数のメバルが入っているが、まだ満足していないみたいだ。

「うおおおー！… またエイだ！」

ちなみに、天善はゴンズイやエイばかり釣れているようだった。

「なあ天善、お前もこっちで釣らないか？」

「いや、これもトレーニングになると思えば……！」

確かに、エイがかかった時の引きつてすごいって言うし、トレーニングにはなるかもしれないけど。

……その時、ボンという音がして、防波堤の中央に置かれていた投光器の明かりが消えた。

「うわっ!？」

煌々と灯るライトに目が慣れてしまっていた分、それが消えてしまふと一気に真っ暗闇に逆戻りだ。

「やべ、バッテリーが上がっちゃったか」

「大丈夫か、予備は？」

「あつたはずだけどよ……確か、向こうの方に……」

隣にいた良一が動く気配がした。どうやら対応してくれているらしいが、真つ暗で何も見えない。

「羽依里、あぶねーから、そこ動くなよ!？」

「わかった」

「良一、懐中電灯はどうした？」

少し離れたところから、天善の声も聞こえる。

「上着のポケットだな……それも向こうに置きっぱなしだ。まいったぜ……」

え、ということは良一、今は裸なのか。いつの間に脱いだんだ……。

何はともかく、三人が三人とも目が慣れないと動けない状況になってしまった。

どうしようもないので、俺も一度釣竿を上げて、海の方を眺めていた。

やがて多少目が慣れ、お互いの輪郭くらいは認識できるようになってきた頃……。

「……あれ？」

視界の端に、小さな光が見えた。

目を凝らしてよく見ると、それは光る蝶だった。この前、秘密基地に行く途中に見た蝶とそっくりだ。

やっぱり見間違えじゃなかったんだ。

ゆっくりとふわふわ飛びながら、こっちに近づいてくる。俺はなぜかその蝶に触れようと、手を伸ばす。

もう少しで触れる……というところで、光る蝶は俺の手を避ける様に、ふわりと海の方へと逃げる。

俺はそれを追うように、一歩前へと足を踏み出す。

更にもう一歩。

……そして、自分が防波堤の上に行ったことを、一瞬だけ完全に忘れていた。

「……羽依里！」

良一の声がして我に返るけど、時すでに遅かった。俺は足を踏み外し、海へ落ちていく。

「やばいっ！」

真つ暗闇の中、風を切る感じで落ちていくのがわかる。昼間の記憶を思い出すなら、海から防波堤までの高さは4メートル前後と言ったところ。

今日は波はそこまでないけど、夜の海は未知数だ。落ちたが最後、上も下も分からなくなる可能性が高い。ものすごい勢いで恐怖心が襲ってくる。

……くそ、俺は元水泳部だぞ！

俺はできるだけ自分を鼓舞し、覚悟を決めた。

「……あいてっ!?!」

数メートル落下して、そのまま海に……と思ったら、妙な感触の上に落下した。

「……あれ?」

暗くて何も見えないけど、俺は確かに海に向かって落ちたはずだ。すぐ近くで海のおいがする。

手探りで回りの様子を探してみると、大量の網が敷き詰められた船の上だということが分かった。

この網がクッションになってくれたらしく、結構な高さから落ちたのに、怪我らしい怪我もしていなかった。

「羽依里！ 大丈夫か!?!」

船の上で呆然となっていると、懐中電灯の明かりで照らされた。良

一の声も聞こえる。

「……ああ、なんとかなー！」

「なんだその船?!」

「わからない。たまたま下にあっただんだ！」

明かりで照らされてわかったけど、船は防波堤の一部に残された杭にロープで結ばれていた。

「……ちよつと待ってろよー！」

懐中電灯の明かりが消え、良一の声も遠ざかっていった。

しばらくすると、遠くからエンジン音が聞こえてきた。目を凝らすと、良一がマリンジェットに乗って助けに来てくれたのだとわかった。

「怪我はないか？」

「……ひとまず大丈夫そうだ」

「だから夜の海は気をつけろって言ったろ。ほら、掴まれ」

「悪い。助かった」

この時ばかりは、良一の背中が頼もしく見えた。

「もし、あのまま夜の海に落ちてたらヤバかったぜ」

マリンジェットで防波堤の周囲をぐるつと半周する。暗いので距離感はわからないけど、かなりの距離を移動しているみたいだ。

「あの防波堤は結構古いからな。海の下は波に結構削られてて、ボコボコになってるんだ。夜にそんな場所に落ちたら、さすがの羽依里でも助からないぞ」

「……」

良一にそう言われて、改めて背筋が寒くなった。

「今回は本当に運が良かったな」

「ああ……それにしても、なんであんなところに船があっただらうな?」

船着き場でもない、ただの防波堤なのに。

「少し離れたところに船着き場があるからな。そこの船がたまたま流

れてきてたんだろ」

「でも、ロープで係留されていたような……いや、なんでもない」

今はそんな細かいことを気にしている場合じゃなかった。何事もなかっただけ、良しとしないと。

……そこからもう少し海上を走り、しろはの釣り場の入り口付近に戻ってきた。

釣り道具やバケツを持った天善もそこで待っていてくれ、俺の身を案じてくれた。

「鷹原、肝を冷やしたな」

「ああ、心配かけて悪かった」

「怪我をしてないのならなによりだ」

「まさか、今度夏海ちゃんを乗せてやろうと係留しておいたマリンジェットが、こんなに早く役に立つなんてな」

良一はマリンジェットを杭に固定しながら、安堵の声を上げる。

「おかげで助かった」

「さて、今日はもうお開きにしようぜ。さすがの羽依里も、もう釣りつて気分じゃないだろ？」

「しばらく夜の海がトラウマになりそうだ」

「そう言うなって。またやろうぜ」

「ああ、また誘ってくれ」

「今度は安全な所だな。港とかいい感じじゃないか？」

あそこなら常夜灯があるし、安全かもしれない。

「ところで二人とも、俺が海に落ちそうになったこと、他の皆には秘密にしておいてほしいんだ」

「わかってるよ。他の連中に余計な心配かけたくないんだろ」

「三人だけの秘密にしておこう」

快く了承してくれた。本当にありがたい。

「あとほれ、今日の羽依里の取り分だ」

そう言って良一からバケツを渡される。明らかに俺が最初に釣っていた量より増えている。

「え、良いのか？」

「量が釣れたから、早めに切り上げたってことにしておこうぜ」

「ありがとうな、二人とも」

「気にすんな。それより、気をつけて帰れよ」

「ああ、それじゃ、またな」

二人に別れを告げ、俺は一人で帰宅の途についた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、鷹原さん、おかえりなさい」

帰宅すると、夏海ちゃんが出迎えてくれた。

「ただいま。鏡子さんは？」

「急な寄合が入ったとかで、出かけていきました」

「そうなんだ」

「早かったんですね。夜釣りって、もっと遅くまでやるのかと思って
ました」

「予想以上にたくさん釣れちゃってね」

俺は努めて笑顔で、魚の入ったバケツを夏海ちゃんに渡す。

「わ、すごいですね」

「とりあえずビニール袋に小分けして、冷蔵庫に入れておいてもらえ
るかな」

「わかりました」

俺から受け取ったバケツを両手で持ちながら、台所へ向かってい
く。

「あ、お風呂沸かし直してますから、すぐに入っちゃってくださいね
！」

「うん、ありがとう」

なんとか誤魔化したみたいだし、ありがたくお風呂に入らせてもら
うでしょう。

涼しいとはいえ潮風に当たりまくったおかげで、身体はベタベタだ

し。半分冷や汗もあるかもだけど。

「鷹原さーん！ もうバスタオルなかったの、ここに置いておきま
すねー！」

お風呂に入っていると、ガラス戸越しに夏海ちゃんの声が聞こえ
た。

「うん、ありがとう」

「……怪我がなくて、良かったですね」

「え？」

ちょうどシャワーで頭を流していて、何を言ったのか聞き取れな
かった。

「……まあいいか」

日中の佃煮騒動からの夜釣り、動き回ったのもあって、入浴後は
すぐに自室に戻って眠りについてしまった。

第十三話・完

第十四話 8月7日

「鷹原さーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんの声で目が覚める。

「……夏海ちゃん、おはよう」

「おはようございます」

夏海ちゃんの方は既に着替えていて、準備万端みたいだ。

「うーん」

「鷹原さん、どうしたんですか？」

「いや、今朝は普通に起こされたからさ。何か物足りなくて」

「はい？」

昨日は鏡子さんに起こされたし、一昨日は俺が夏海ちゃんを起こしたし、その前は紬に起こされたし。

「平凡な朝に飽きてしまっているのかも。刺激を欲しているというか」

「……変なこと言っていないで、早く着替えてくださいねー」

夏海ちゃんは笑顔のまま、廊下の方へ消えていった。

「……うん、起きようかな」

布団をたたんで、服を着替える。洗面所で顔を洗って、身支度を済ませる。

その後、居間に行ってみただけど、鏡子さんの姿はなかった。今日も出かけてるみたいだ。

「おまたせ。行こうか」

「はいー」

夏海ちゃんと合流して、今日も一緒にラジオ体操へ向かう。

今日は時間に余裕もあるので、ゆっくりと歩きながら神社を目指

す。

道沿いの塀に、新しいセミの抜け殻を見つれたり、夏を感じながら神社へと辿り着く。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おはよー」

「おはようございます」

「蒼さん、藍さん、おはようございますー！」

神社の境内には、いつものメンバーが揃っていた。

それとなく覚悟はしていたけど、誰からも昨日の噂については言及されなかった。

広まるのも早いけど沈静化するのも早いんだろうか。

「あれ？ のみきは？」

いつものメンバーが揃っていると思ったけど、よく見たらのみきの姿がなかった。

「今日は朝早くから寄合が入っているそうだ」

そう教えてくれたのは天善。手にはラケットを持っていた。あれって壊れたんじゃないかなかったつけ。

「ああ、これはスペアだ」

俺の視線に気がついたのか、天善がそう説明してくれる。

「天善のやつ、確か三本くらいはラケット持ってるからな」

「そうなのか」

良一がそう説明してくれた。

よくわからないけど、ラバーの種類とかグリップの握り具合とか、色々あるんだろうか。

「よーしお前らー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

そこにラジオ体操大好きさんがやってきて、今日もラジオ体操が始まる。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああー！」

「くけー！ けえー！ けっけえー！ くええっけえー！」

「……羽依里、今のはなんだ？」

隣の良一が引いてる。

なんだろう。思いついた言葉を発したらそんな奇声が出てしまった。

「確か、ケツアルコアトルだったかな」

「なんだそりゃ」

……なんだっけ。オカルト本に載ってたんだっただけかな。

「まあ、気にしないでくれ」

「さあ、スタンプはこつちだぞー」

今日もラジオ体操が終わり、ログインボーナスを受け取る。

今日のログボは、袋に入ったナスだった。

「つて、普通のナスじゃないですよ？」

夏海ちゃんに言われてよく見ると、やけにシワシワだった。そして袋越しに変わった匂いがする。

「これ、駄菓子屋のおばーちゃんのぬか漬けね」

蒼がそう説明してくれた。

「この間、灯台で蒼の弁当に入ってた奴だな」

「そうよ。美味しかったでしょ？」

「ああ、朝ごはんが楽しみだ」

帰ったらごはんと一緒に食べようと楽しみにしながら、神社を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夏海ちゃんと二人で加藤家に帰宅した。まだ鏡子さんは帰って来てないみたいだ。

「それじゃあ、朝ごはん作ってきますね」

「うん。お願いするね」

至って自然に、ナスのぬか漬けを夏海ちゃんに渡す。夏海ちゃんは笑顔で台所へ向かっていく。

「……ちよつと待って夏海ちゃん。今日の朝ごはんって?」

「え、ナスチャーハンですけど?」

エプロンをつけながら、さも当然、と言った顔をしている。

「ちよつと待って夏海ちゃん。そのナス、ぬか漬けだよ?」

「それがどうかしたんですか?」

なに言ってるのこの人。みたいな視線を向けられた。あれ? 俺の感覚がおかしいのかな。

「いや、チャーハンにナスのぬか漬けは合わないと思うんだけど……」

上手くすれば味に深みが出るのかもしれないけど、塩辛くなるイメージが先行する。

「鷹原さんはチャーハンの可能性を信じてないんですか!?!」

「信じてるけど、ぬか漬けはそのまま食べようよ……」

その後、何がなんでもナスチャーハンを作らんとする夏海ちゃんを必死に止めた。夏海ちゃんのチャーハンに対する、この情熱はなんだろう。

どうしても引き下がってくれなくて、30分以上の激論の末、冷蔵庫庫にたくさんあったキャサリンの卵を使って卵チャーハンを作ってもらうことにして、ぬか漬けはぬか漬けで別に食べるということで落ち着いた。

「はあ、朝から疲れた……」

「おまたせしましたー」

俺がナスのぬか漬けを切って、味噌汁と一緒に居間のテーブルに並

べる。そこに笑顔の夏海ちゃんが卵チャーハンを持ってやってきた。

「おお、美味しそうだね」

「はい！ 良い感じにパラパラな、黄金チャーハンにできました！」

「それじゃ、いただきますいーいかな」

「はい、食べましょう！」

スプーンを手に取って、黄金色のチャーハンを口に運ぶ。

「うん、美味しい」

チャーハンはパラパラで美味しかった。具材は本当に卵だけみただい。

そして時々、ぬか漬けを口に運ぶ。きゅつきゅつと良い音がする。これも美味しい。

「美味しいですねえ」

夏海ちゃんも機嫌が直ったのか、ニコニコ顔でぬか漬けを食べていた。

きゅつきゅつ。ナスを噛む。良い音がしていた。

朝ごはんの後、いつものように宿題をする。

それが終わってしまうと、暇になる。

「また出店にでも行ってみようかな……」

そう考えていると、昨日の夜釣りで釣った魚が冷蔵庫に入っていたのを思い出した。

「そうだ、冷蔵庫に入ってる魚、しろはに届けてあげようかな」

うちの冷蔵庫に入っても、どうにもならないし。

「あれ、その魚、どうするんですか？」

冷蔵庫からビニール袋に入った魚を引っ張り出していると、夏海ちゃんから声をかけられた。

「しろはに持って行ってあげようと思って」

「食堂に行くんですか？」

「いや、午前中はたぶん家にいると思う」

「しろはさんの家って少し山を登ったところにある、あの家ですよね

？」

「あれ、夏海ちゃんってしろはの家に行ったことあったっけ？」

「はい。しろはさんと出店をした時に、ペケモンの着ぐるみを一緒に持って行きました」

「あ、そっか」

そういえばそうだった。あの時、海鮮野菜炒めをお土産にもらって帰ってきたっけ。

「せっかくだし、一緒に行く？」

「はい！ 行きます！」

ビニール袋に小分けされた魚は、結構かさばってしまっていたので、二人で持っていくことにした。

その道中、夏海ちゃんが話してくれる。

「しろはさんって、あの家にこぼとさんと二人で住んでるんですね」

「こぼとさん？」

「しろはさんのおじいさんです」

あ、そっか。普段名前で呼ぶことなんてないから、すっかり忘れていた。

「そういえば、しろはの両親のことなんだけど……」

楽しい話じゃないけど、一応話しておかないと。

「あ、しろはさんから聞いてます。大丈夫ですよ」

「あれ、聞いているの？」

「はい、ペケモンの着ぐるみを持って行ったときに教えてもらいました」

「そうだったんだ。それなら良いけど」

知ってるんなら、必要以上に話す必要もないよな。

しろはだって、自分のいないところであまり触れて欲しくない話題だろうし。

山道を少し登った先に、大きな家がある。そこがしろはの家だった。

「しろはー」

玄関を少し開けて、名前を呼ぶ。

「はーい」

家の奥から声が返ってきて、少し間を置いてしろはが顔を覗かせる。

「あれ、二人ともどうしたの？」

「昨日、良一と夜釣りに行ってさ」

「はい！ 魚のおすそわけです！」

二人して、両手に持ったビニール袋をしろはに差し出す。

「わあ、ありがとう」

しろはは笑顔で受け取ってくれた。

「せっかくだし、上がっていく？ お茶でも出すよ」

「それじゃ、お邪魔しようかな」

「しろはさん、お邪魔します」

しろはに招かれて、家に入らせてもらう。

「羽依里、魚を冷蔵庫にしまってくるから、夏海ちゃんを居間に案内してあげて」

「わかった」

両手いっぱいビニール袋を持って、しろはが台所の方へ向かう。

「持とうか？」

「ううん、大丈夫」

笑顔で断られてしまった。

「それじゃ夏海ちゃん、居間に案内するよ」

「はい！」

しろはの背中を見送った後、夏海ちゃんを居間へと案内する。勝手知ったる他人の家だ。

「夏海ちゃん、この家の中に入ったのは初めてなんだね」

「はい。この前は玄関先で待っていたので」

玄関から入って、長い廊下を進む。左手側にはガラス戸が続き、その向こうに広い庭が見えている。

その廊下の途中、ふすまの前で立ち止まる。

「ここが居間だよ」

引き手に手をかけ、ふすまを開ける。

「やー」

鴎が座卓について、お茶を飲んでいた。俺たちに気づいて、笑顔で右手をあげる。

……俺はふすまを閉めた。

「えー、ちよつとちよつとー!」

ふすまの向こうで、鴎が抗議の声をあげていた。

「家を間違えたかと思つて」

「そんなわけないでしょー」

再びふすまを開け、居間に足を踏み入れる。

念のために部屋を見渡す。畳の敷かれた和室。壁には立派な掛け軸がかけられ、部屋の真ん中には大きめの座卓が一つ。見慣れた鳴瀬家の居間だった。

「それで、鴎はなんでここにいるんだ?」

夏海ちゃんと隣り合わせに、居間の出口に近いところに腰を下ろす。

「昨日一晩泊めてもらつて、朝ごはんをぐちそうになったの!」

見ると、鴎の前には食器が重ねて置いてあった。

「え、しろはは食堂だけじゃなく、旅館まで始めたのか?」

「そんなんじゃないよ。昨日はたまたま!」

鴎はのみきと同じアパートに住んでるはずだけど、今朝はどうしたんだろう。

「鴎、部屋の鍵を落としちゃったんだって」

「しろしろ、言わないでー!」

しろはがお茶とお茶菓子の乗ったお盆を持って、居間に入ってきた。

「え、鴎さん、それ本当なんですか?」

「なっちゃん聞いてよ、それがね……」

鴎の説明を要約すると、昨日の夕方に自宅に戻ると、スーツケース

に入れて持ち歩いていたはずの部屋の鍵が無くなってたらしい。

同じ部屋に住んでいるのみきは寄合に出かけてしまっていて、いつ帰るかかわからない。結局誰にも相談できずに島をさまよい、食堂に晩ごはんを食べに行った時、しろはが助け舟を出してくれたらしい。

「なるほど、それで泊めてあげることになったのか」

「うん。その、あまりにかわいそうで」

鴫の食器を片付けたしろはが戻ってきたので、四人で座卓を囲んで、お茶をすすする。

「本当に助かったよー。地獄に仏って、こういうことを言うんだよね」

鴫は、ぼりぼりと海苔巻きせんべいをほおぼっている。

「もみみふあんふあら、ふあいふあぎをふおって……」

「……とりあえず、せんべいを飲み込んでから喋ろうな」

鴫はずすーっ、とお茶をすすって一息つく。

「のみきさんなら、合鍵を持つてるはずなんだけど」

「一応アパートのドアに、うちに泊まってることを知らせる張り紙はしてきたんだよね？」

「うん」

「それで、のみきから連絡はあったのか？」

「ううん。ないよ」

まさか、昨日の寄合から一度も家に帰っていないってことは無いだろうけど。

「私の方からも、朝一番にのみきの家に電話してみたんだけど」

「出なかったのか？」

「うん。朝早くから寄合に行ってるのかも」

あれで、のみきも色々忙しいもんな。

「あ、良かったら羊羹もどうぞ」

「わーい！ 端っこが美味しいよね！」

鴫のやつ、さつき朝ごはん食べたって言ってなかったっけ。よく食べるなあ。

「そういえばしろは、今日はじーさんは？」

「おじーちゃんは朝早くに漁に出かけていったよ。夕方までは戻らないんじゃないかな」

「そうなんだ。キャサリンの卵のお礼を言いたかったんだけど」

「キャサリン？」

「いや、なんでもないよ」

「……そう」

その後もしばらく談笑して、頃合いを見てお暇することにした。

「しろしろ、お世話になりました！」

玄関先で鴟がしろはにお礼を言っている。俺と夏海ちゃんは少し離れたところで、その様子を見ていた。

「ん……？」

その時、俺の視界の端に年季の入った小屋が見えた。例の鶏小屋だ。

……ああ、キャサリンってもしかして。

「なあしろは、あの鶏小屋なんだけど」

「どうしたの？」

「キャサリンって鶏がいる？」

「どうかな。でも鶏小屋の鶏には、それぞれ名前がついていたはずだよ」

「そうなのか。ちよつと見てこよう」

「待って。今は行かない方がよいよ」

鶏小屋の方に足を運ぼうとしたら、しろはに止められた。

「え、なんで？」

「この時期の鶏は殺気だつて危ないとか、そういうのだろうか。」

「鶏小屋のすぐ脇に、ハチの巣ができてるの」

「そうなのか？」

「アシナガバチだから、巣もそこまで大きくないけど、刺されたら危ないよ」

「……ちよつと、どんな感じか見てもいい？」

「良いけど、小屋に近づきすぎちゃダメだよ？」

「わかってる」

四人で安全な場所から、ハチの巣の様子を見てみることにした。

「あ。あれか」

「そう。最近ハチが多いなどは思っていたんだけど」

鶏小屋の外側、ちようど家の方からだど死角になつている軒下に、小さいながらハチの巣が見えた。

数は多くないけど、周囲をハチが何匹か飛んでる。

「危なくて、鶏小屋に近づけないの」

「でもしろはさん、一昨日ごぼとさんがたくさん卵を持ってきてくれたんですけど」

「おじーちゃんはハチとか気にしないから。たぶん蚊が飛んでるのと同じくらいにしか思つてないと思うよ」

「ええー……」

「あの人はなんというか、色々な意味で変わつてるからな」

あのじーさんがハチに刺されるのは構わないけど、しろはが刺されたりしたら大変だ。もし顔とか刺されたら、俺は刺したハチを絶対に許せそうにない。

「羽依里、なんとかしてあげて」

鳴に言われなくても、なんとかしてやりたい。

頭の中で戦略を考えてみる。殺虫剤を使って、ヒットアンドアウェイで数を減らしていくのが一番かもしれない。

「しろは、殺虫剤とかないのか」

「あるにはあるけど……」

そう言つてしろはが持つてきてくれたのは、一般的なカンチヨールだった。巣の大きさからして、これだとちよつと心許ないかもしれない。

「うーん……これじゃ火力不足だなあ」

「あの、役所に連絡して、駆除してもらつたらいいんじゃないですか？」

夏海ちゃんが真つ当な意見を述べる。

「役所に連絡はしてるから、そのうち来るとは思うけど」

田舎の『そのうち』ほど当てにならないものはない。

「そうだ鷗、一晩の宿のお礼に、駆除してくれないか？」

「え、どうやって？」

「ほら、スーツケースのスーちゃんだがぶりとき」

「うう……怖いけど、恩は返さないとね。いくよ、スーちゃん！」

「……羽依里、無理強いしないの」

意を決してスーツケースを構えた鷗だったが、しろはによって止められた。

「のみきだったら遠距離攻撃が得意だから、すぐに駆除してくれそうだけだな」

「……得意だが、私が駆除できるのは巣だけだぞ。帰る家を無くしたハチ達はどうすると思う？」

「そりゃ、家を壊した俺達に全力で襲い掛かって……って、のみき？」
いつの間にか、のみきが俺たちの背後に立っていた。

「まさか、もう駆除に来てくれたのか？」

「残念だが違うぞ。ようやく寄合が終わったから、鷗を迎えに来たんだ」

「ちようどいい。のみき、鷗を迎えに来たついでに、ハチの巣をハチの巣にしてくれ！」

「ハチの巣は最初からハチの巣じゃないか？」

「後半のは比喻だ」

「さつきも言ったろう。巣を壊すだけでは駆除にならない。専門の業者を頼んであるから。もう少し待つんだ」

確かに、巣を壊してハチたちが暴れ出したら元も子もない。下手なことをして、しろはや夏海ちゃんにも被害が及んだら最悪だ。

結局俺達では手出しできず、駆除業者に頼るしかないようだ。俺達は無力だ。

「近づかなければ危なくないし、そこまで気にしてくれなくても大丈夫だよ」

住民のしろはがそういうのなら、従うしかなかった。

「ところでのみき、昨日家に帰ってないとかないよな？」

そして今更ながら、しろはの家に連絡がないまま、のみきが鷗を迎えに来たことに疑問に感じた。

「帰るには帰ったが、どうした？」

「鷗がアパートのドアに伝言残してたと思うんだけど」

「ああ……寄合が長引いて、アパートに帰り着いたのは深夜だったんだ。当然ドアの張り紙には気がついたが、その時間に連絡を入れるのはさすがに失礼だと思ってな」

なるほど、そういうことだったのか。

「後、鷗が落としたという鍵はこれだろう。今朝、漁師が役所に届けてくれたぞ。港に落ちていたそうだな」

のみきが小さな鍵を鷗に手渡す。

「おお、これだよ！ のみきさん、ありがとう！」

「これからは気をつけるんだぞ」

「うん！」

その後、鷗は再度しろはにお礼を言っ、のみきと一緒に帰っていた。

しろはもこの後用事があるということなので、俺と夏海ちゃんもお茶のお礼を言っ、しろはの家を後にすることにした。

「夏海ちゃん、これからどうしようか」

坂を下って住宅地まで戻ってきたところで、腕時計を見る。まだお昼まで時間があるみたいだった。

「今日の屋台、何か出てるんでしようか」

「そうだね。気になるし、ちよつと港に行ってみようか」

「はいー！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「なあ。お前さん所の船が流されたって本当か？」

「ああ、使ってねえボロ船だったけどな。ロープも切れちゃってたし、修繕してなかった俺も悪いんだけどよ」

「そりゃ大損だな。エンジンや燃料も積んでたんだろ？」

「いや、エンジンは外してたし、古い投網を置いてただけだから、大して損してねえよ」

港に着くと、少し離れたところで数人の漁師が話をしているのが聞こえた。漁が終わってからの世間話をしているみたいだった。

「あれ、何だあの店……？」

そして、いつも屋台が出ている場所を見ると、見慣れない店が出ていた。

「竜太サンド……？」

頭上に掲げられた看板には『竜太サンド』と書かれていた。

カツサンドみたいに、竜田揚げを挟んだパンなんだろうか。あまり聞いたことがない。

妙に気になったので、夏海ちゃんと一緒に店の方に近づいてみる。

近づくにつれて、なんだか音楽も聞こえてきた。音が小さくて良く聞き取れないけど、少し時代遅れのヒップホップみたいだ。

「あの一、すみません」

「……あん？」

店員らしい男性に声をかけると、気怠そうな返事が返ってきた。

「あれ、もしかして客？」

屋台の奥に座っていたのは、金髪のにーちゃんだった。どう見ても島の間人じゃない。本土からやってきたんだろうか。

「絶対美味しいからさ、食べてってよ」

急に営業スマイルになった。すごい怪しい。

「夏海ちゃん、やっぱり帰ろう」

見れば見るほど怪しい。奥の方に土偶みたいな置物も置いてあるし。

「え、どうしてですか？」

「見るからに怪しいし、この店」

「え、なんでさ？ 今風のナウいお店だろ？」

俺の声が聞こえたのか、金髪のにーちゃんがショックを受けている。

「いや、むしろ怪しい」

「え、マジ？」

「ああ、マジで怪しい」

音楽とか流れてるし、店番は見慣れない金髪のにーちゃんだし、島の人間は近づかないと思う。

「むしろ、今すぐ役所に行って、通報してやろうかと思った」

「あんた鬼ツスね！」

その後話をしてみると、一応役所の許可はもらっているそうだ。

先の旅芸人よりは、きちんとした手順を踏んでいるらしい。見た目は怪しいけど。

「あの、おにーさんは何を売っているんですか？」

「え？ ああ、これだよ」

夏海ちゃんの質問に、金髪のにーちゃんは紙袋に入った食べ物を差し出してきた。

パツと見、コッペパンの間に揚げ物が挟まれていた。

「えーっと、これが竜田サンドですか」

「へへっ、違うんだよね。良く見てみてよ。『たつた』じゃないんだ。

『りゅうた』なんだ」

「え？」

言われてから、頭上の看板をよく見てみると『竜太サンド』の文字の上に、小さく『りゅうた』とルビが振ってあった。

「じゃあ、『りゅうたサンド』なのか」

「そうそう。僕の通ってる光坂高校の、隠しメニューみたいなものなんだよね」

聞いたことがないので、どこか遠くの高校なんだろう。それでも、

隠しメニューと言われると気になる。

「夏海ちゃん、食べてみる？」

「はい、食べてみたいです！」

「サンキュー、一つ200円だよ」

「それじゃ、一つくれ」

おかしいな。相手の方が年上だと思うんだけど、俺もいつの間にかタメ口になっていた。

「まいどー！」

見た感じ結構ボリュームがあるので、一つ買って二人で分けることにした。時間的にもお昼前だし。

「それじゃ、いただきますよ」

「おにーさん、いただきます」

とりあえず一口かじってみる。

「……」

なんだろう、今まで感じたことがないような食感。そして未知の味。

「……」

目の前の夏海ちゃんも、何とも言えない顔をしている。

「どう？ おいしい？」

金髪のにーちゃんは、笑顔で感想を聞いてくる。なんでだろう。本でも投げつけてやろうかと思える笑顔だった。

「えーっと……」

「と、とっても美味しそうでしたっ！」

俺が言い及んでいると、夏海ちゃんが笑顔でそう返した。

「へへっ、そりゃ良かった」

あまり美味しくなかったんだろう。夏海ちゃん、うまく逃げたね。

……それにしても、さつきからやけに夏海ちゃんにばかり話しかけている。

「……夏海ちゃん離れて。やっぱり通報しよう」

夏海ちゃんと金髪のにーちゃんの間割って入る。

「え、どうしたんですか？」

「だってその人、夏海ちゃんの方ばっかり見てるから」

最近は何歳の子供を狙った犯罪も多いと聞くし。

夏休みの間は一応夏海ちゃんの保護者を自負しているし、都会からの不埒なシティーボーイからは護つてあげないと。俺もシティーボーイだったけど。

「いや、僕にもその子と同じくらい妹がいるからさ、話しかけやすかっただけなんだけど……」

「え、そうなのか」

「そうだよ……これくらいで警察に通報とか、やめてくれよ……」

な、泣いてる……。

ちなみに、俺が通報するのは役所だ。最悪でも水鉄砲でメツタ撃ちにされて強制退去になるくらいだろう。

「おにーさん、気を落とさないでください！ この竜太サンド、とつてもおいしそうですよ！」

泣いている金髪にーちゃんを見かねて、夏海ちゃんがフォローを入れてる。

「そ、そう？ 実は、デザート向けのデーモンクワツサンもあるんだけど」

「……それはやめておきます」

そつちは笑顔で断っていた。

その後、夏海ちゃんと二人で竜太サンドを食べた。

挟まれている具材は、とりあえず鶏肉じゃなかった。そもそもお肉じゃない感じがした。

なんだろう。こんなにやくでもないし、練り物にしても妙な食感だった。

油っ濃い……わけでもないんだけど、なんというか、妙にお腹にもたれる感じがした。

「それじゃおにーさん、頑張ってくださいー！」

「うん、ありがとう！」

正直、けっこう無理をして食べ終わり、俺と夏海ちゃんは港を後に

した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うう……お腹が気持ち悪いです」

帰宅して開口一番、夏海ちゃんがそう言った。相当無理していたに違いない。

俺も最後の方は胃に来ていたし。竜太だかなんだか知らないけど、次はご遠慮願いたい。

「時間的にお昼だけど、夏海ちゃん、食べれそう?」

「な、何かあつさりしたのなら……」

居間に入るとすぐに、夏海ちゃんは座布団を持ってきて横になってしまった。かなりきつそうだ。

「あつさりしたものと言われても……」

俺は台所を探す。水屋の中には、見渡す限りカップうどんしかなかった。俺もそこまで濃い味のは食べられそうにない。

「あ、これならいけるかも」

見つけたのはカップのざるうどん。

説明書きを見ると、お湯を注いで三分待つてから湯切りをして、更に水で締めた後。付属のめんつゆをつけて食べるみたいだ。

油っぽさは微塵も感じられないし、今はこれが一番食べやすそう
だ。

ちょうど二つあるし、お昼はこれにしよう。

早速お湯を入れて、二人分のざるうどんを作り始める。

「夏海ちゃん、できたよ」

普段より少し手間はかかったけど、俺でも作る事ができた。

「ありがとうございます……」

夏海ちゃんに声をかけると、ゆっくりと起き上がって、手を合わせ

てから食べ始める。

顔色もあまり良くない。かなり無理して食べてくれてるみたいだ。あまり食欲はわかないけど、俺も食べよう。

インスタントとは思えない、見事なコシだった。できれば胃の調子が良い時に食べたかった。

昼食後、夏海ちゃんは再びダウンしてしまった。額には脂汗をかいてる。大丈夫かな。

「夏海ちゃん、大丈夫？」

「さっき、カツパのマークの正論丸を飲んだので、もう少し休めば大丈夫だと思えます……」

例の竜太サンド、食べた量は俺と同じだったと思うんだけど。夏海ちゃんの方が体が小さい分、影響が大きいんだろうか。まるで毒物だ。

その後、俺も夏海ちゃんと一緒に一時間くらい横になっていたけど、どうも調子が戻らない。

そして、腹ごなしに歩きなくなった。

「ごめん夏海ちゃん、ちよつと歩いて来ていいかな？」

「は、はい。いつてらっしやいです……」

息も絶え絶えだ。できるだけ早くに帰ってこよう。

家を出た後、一本道を通って港へ向かい、ぐるっと一周する。お腹は妙に重たいけど、歩いているだけでだいぶ気が紛れる。

少し気になって探してみたけど、もう例の竜太サンドの屋台はなくなっていた。

「さすがに売れなかったのかな……」

そんなことを考えながら、俺はきびすを返し、一本道の方へ戻る。

「……あれ？」

お腹をさすりながら一本道を歩いていると、ひととき大きな木の下

で、蒼が寝ているのが見えた。今度は隣にイナリも寝ているし、蒼で間違いないだろう。

「おーい。蒼ー」

道の方から話しかけてみるけど、無反応。熟睡しているみたいだ。「相変わらず、大らかな島だなあ……」

でも、蒼はもうちよつと警戒心を持った方が良いかもしれない。顔はかわいいんだし。この道は観光客だつて通るから、その……色々と危ないかもしれないし。

一応隣にイナリもいるから、大丈夫なんだろうか。そのイナリも寝てるけど。

起こすのも悪いから、そのまま通り過ぎようとして……ふと、とある考えが頭をよぎった。

そういえば夏海ちゃん、あの木の下は日陰になつてて気持ちいいとか言つてたっけ。

昨日は藍に近づかせてももらえなかった手前、すごく気になった。お腹の調子もあるし、一休みしたい気分だった。

「ちよ、ちよつと座つてみるだけ」

俺は足音を立てない様に近づいて、寝てる蒼の横に腰を下ろす。

「あー、これはいい塩梅だな……」

確かに涼しくて気持ちがいい。

蝉の声もどこか遠くて、風で木々の葉がそよぐ音がサワサワと耳に心地良い。まるで別世界にいるみたいだ。

蒼や藍が眠くなるのもわかる気がする。

「やばい、俺も眠くなつてきた……」

隣からは蒼とイナリの寝息が聞こえてくるし、俺も必然的に眠くなつてくる……。

「うーん……」

……意識が飛びかけたところで、隣の蒼がもそもそと動く気配がした。

「おつと、これはそろそろ逃げないと」

そう思つた瞬間、蒼が俺の膝の上に倒れ込んできた。

「おわっ」

「これはやばい。これは起きる。怒られる。」

「すうー」。すうー……」

「……あれ？」

「……と思っただけど、起きない。寝てる。」

「ちよつと待って。これってどういう状況？」

もしかしくなくても、膝枕ってやつじゃないだろうか。

しかも、これじゃ動けない。

「イ、イナリ、助けてー」

俺は近くのイナリに助けを求める。

「クウ、クウ……」

そのイナリ、爆睡中。

し、所詮は畜生か……。

「どうしよう……」

蒼は俺の膝に頭を乗せて、気持ち良さそうに寝てるし。

空は青いし。風は心地良いし。

俺は全力で現実逃避していた。

「ん……？」

その時、目の前の道を天善と良一が歩いているのが見えた。天の助けだ。

「おい二人とも、助けてくれ」

「……!!」

俺が声をかけると、二人は驚いた表情のまま固まった。

「……まさか、二股か!?!」

「違うんだ。わけありだ。助けてくれ」

「ほう。しろはという彼女が居ながら……チャレンジじゃないか」

「あばよ、ダチ公……」

「……どうやら、俺の声は全く聞こえていないようだった。」

「おい、違うんだ。話を……」

「耳をふさげ！ 目を瞑れ！ 俺達は何も見ちやいない！」

「ああ、そうだともし！」

「ダツシユ！」

「サー！」

あああああ。行かないでー！

二人はあつという間に、どこかに走って行ってしまった。

「う、うーん……？」

しかも間の悪いことに、今の騒ぎで蒼が目覚ましてしまった。万事休すだ。

寝起きの蒼が顔を上げると、俺と目が合う。

「あれ、羽依里……？」

「おはよう」

こゝなつたら腹をくくるしかない。とびきりの笑顔で向けてやる。

「……?!?!」

よゝやく状況が理解できたのか、めちやくちや驚いてる。目が覚めたら男に膝枕されてたら、そりや驚くよな。

「し、しろはって彼女が居ながら、まさかあたしを手籠めにするつもり?!」

……それやったら、俺本当に極悪人だから。

「本当に手籠めにするつもりなら、寝込みを襲ってるんじゃないか……？」

「そ、それもそうよね……うん。そうよね……」

蒼がその身を起こす。

あれ？ 思いのほか怒られなかった。理不尽に怒られた藍とは、えらい違いだ。

「しろはが信じてる人だし。変な気は起こさないと信じてるから」

それは信頼されると喜ぶべきなんだろうか。膝枕に關しても、全くのノータッチだし。

「というか、真昼間から外で寝てるのもどうかと思うぞ。ここは観光客だつて通るんだから」

「大丈夫よ。イナリもいるんだから」

そのイナリは、今の今に至るまで眠り続けてるんだけど。

「それに、気持ちいいのよ。こー」

まあ、それはわかる。藍も寝てたし。

「熟睡してみたみたいけど、最近寝不足なのか？」

「そういうわけじゃないけど、ここにいると落ち着くのよ」

「まあ、誰でもそういう場所あるよな」

「羽依里はそういう場所、ある？」

「俺は……やっぱり、しろは食堂かな」

「あー、やっぱりそうよね。聞くまでもなかったかも」

そういう目で見ると、見るのやめてほしい。言ってから、めちやくちや恥ずかしくなってきた。

「あれ、そういえば今日夏海ちゃんは？」

「色々あってね、家にいるよ」

得体の知れない屋台で、得体の知れない物を食べて体調不良になってるなんて、口が裂けても言えない。

「……そういえば、夏海ちゃんは最近どう？」

「どうって？」

「ほら、夏休み楽しんでくれてるかなって」

「楽しんでると思うぞ。釣りも、天体観測も、ビーチバレーも、花火も、肝試しもさ。時々疲れ果てて、朝寝坊するくらいだし」

「あ、時々ラジオ体操にギリギリの時間に来るもんねー。あれって、やっぱり寝坊してたんだ」

「細とも仲良いみたいだし、どのイベントも楽しんでると思うぞ」

「それならいいのよ。あたしたちもイベント考える甲斐があるってもんだしね」

やっぱり、あの辺のイベントって皆が一生懸命考えてくれてたんだ。蒼をはじめ、この島の皆には感謝してもしきれない。

「部屋に思い出の品も増えてるみたいだったし、藍に言われた絵日記もちゃんと書き続けてるみたいだぞ」

「あ、そうなんだ。今度藍にも教えてあげないと」

笑顔でうんうんと頷いている。

「それじゃ、夏海ちゃんの情報もゲットできたし、あたしはそろそろ行くわね」

「今日も駄菓子屋でバイトか？」

「今日のバイトは藍ね。あたしはちよつと別の用事」

すつと立ち上がって、スカートについた草をはらう。やっぱり双子だ。その仕草が藍そっくりだ。

「イナリ、いくわよ！」

「ポン！」

ご主人の呼びかけに、寝ていたイナリがようやくやく目を覚ます。

「それじゃね」

イナリを連れて、一本道を港の方へ走って行ってしまった。

俺もそろそろ家に戻ろうと思って立ち上がると……。

「あれ、夏海ちゃん？」

住宅地の方から、夏海ちゃんが歩いているのが見えた。

「あ、鷹原さん」

「気分、良くなった？」

「はい。だいぶ良くなったので、少し歩こうかと」

昼食の時に比べると、顔色はだいぶ良くなってる。正論丸が効いたみたいだ。

「なら、一緒に歩かない？」

「はい、よろしくお願いします」

夏海ちゃんと並んで、住宅地の方に向けて歩き始める。

「そうだ。せっかくだし、どこか行きたい所とかある？」

「それなら、秘密基地に行ってみたいです！」

「秘密基地か……」

あそこなら、誰かいるかもしれない。もし居なくても、二人で卓球してもいいし。

「それじゃ、行ってみようか」

「はいー！」

俺は夏海ちゃんと二人で、秘密基地へ向かって歩き出した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うわっ!？」

秘密基地の扉を開けるなり、俺は叫び声をあげていた。

中には、大量のスーツケースが所狭しと置かれていたのだ。

「な、なんだこれ? まさか、鷗のスーツケースコレクション?」

「残念だが違う。役所に処分を頼まれた品だ」

そう言うのはのみき。なんだか険しい顔をしている。その背後には、なぜか魂の抜けたようになってる良一と天善の姿も見える。

「港にしなびたホテルがあるだろう。そこに長年置きっぱなしになっているスーツケースがあつてだな」

「港のホテルは知ってるけど、何でスーツケース?」

「宿泊客が何故か忘れて行ったり、ホテルが所有していて古くなったものだな。その処分を役所に依頼されたんだ」

そうなのか。役所ってそういうこともやってるんだな。

「どう処分するかについて、緊急の寄合が開かれてな。激論が交わされたんだ」

「あれ、もしかして昨日、深夜までやった寄合って」

「ああ、このスーツケースの処分方法についてだ」

その程度で深夜まで……平和な島だなあ。

「だが結局、結論が出なくてな……しばらくこの場所に保管させてもらうことになったんだ」

「ああ……あの二人が死んだような顔をしてるのはそのせいかな」

大切な居場所である秘密基地を、大量のスーツケースによって突如として奪われる……良一と天善の受けたショックは計り知れないだろう。

「心中察するぞ、二人とも」

「おお、羽依里……」

声をかけると、二人がすがるような目で俺を見てきた。

「トラックが横付けしてきてな。あつという間の出来事だった」

「俺達にはどうする事も出来なかった……」

天善お気に入り卓球台は折りたたまれ、隅に追いやられている。ビーダマンやミニ四駆が入っていた段ボールも、奥の奥に押し込まれてしまっている。

「元々ここは倉庫だから、収納場所として使うのは問題はないのだが……その、少々可哀想な事をした」

二人のあまりの落胆ぶりに、のみきも罪悪感を感じているようだ。

「天善、そう気を落とすな……卓球台なら、パリングルスで作った奴が灯台にあるじゃないか」

「ああ、そうだな……」

天善は上の空だ。目の焦点も定まっていないう、これはだめかもしれない。

「……」

夏海ちゃんもかける言葉が見つからないようで、ただただ困惑している。

「お邪魔しまーす」

「あれ、鴫?」

重苦しい空気を打ち破るように、鴫が登場する。

良く見ると、その後ろにはしろはの姿もあった。

「おお、あった!」

鴫は目の前に並べられたスーツケースを指差し、何故か嬉しそうだ。

「良かったらこのスーツケース、おかしさんが全部買い取りたいって!」

「なに、本当か?」

突然の鴫の提案に一番に食いついたのは意外にも、のみきだった。

そりゃ、寄合で散々話し合っても解決しなかったスーツケース問題を一気に解決できるかもしれないのだから、食いつく気持ちもわかるけど。

「でも、こんなに沢山のスーツケース、買い取ってどうするんですか？」

「うん。外国に送って再利用するんだって」

「鷗が夏海ちゃんの質問に答えてくれる。そういう活動があるんだろ？」

「……ところで、鷗の母親って何者？」

「鷗の母親って言うのと、何度か会ったことがあるけど。」

「スーツケースを買い取って外国に送るとか、一般市民がやることじゃない気がする。」

「それはね……教えてあげないよ！　じゃん！」

「言うと思った」

「……まあ、無理には聞かないけど。」

「なんにしても、秘密基地からスーツケースが無くなるんなら、どんなことでもするぞ」

「ああー！」

「良一と天善の目に光が戻った気がする。」

「それでね。夕方5時の船に間に合わせてほしいんだって」

「え、今日の？」

「うん」

「俺は思わず腕時計を見る。船の時間まで、後2時間もなかった。」

「これだけの数のスーツケースを、今から港に……のみき、間に合うのか？」

「今から役所に戻ってトラックを手配してもらって……いや、とてもじゃないが間に合わないな」

「間に合わない場合、どうなるんだ？」

「向こうの業者さんの都合もあるから、たぶん……」

「鷗が顎に手を当てて、真剣に考えている。」

「交渉破談になって取引そのものが無くなって、スーツケースはまたこの場所に残ることになると思う」

「それは困る！」

同時に大きな声を上げたのは良一と天善。二人の気持ちは痛いほ

どにわかる。

「気持ちにはわからないでもないが、現状ではどうしようも……」
「ううん！ 一つだけ方法があるよ！」

二人をなだめようとしたのみきを制止し、鷗が割って入る。

「このスーツケース、皆で一気に港まで運べばいいんだよ！」

「えーっと、つまり……？」

「皆でスーツケースに乗って、港まで突っ走るの！ スーツケース
レースだよ！」

その後、鷗によってスーツケースレースの説明がされた。

秘密基地が山の中腹にあることを利用して、ここからスーツケース
に乗って加速。下り坂で勢いをつけた後、住宅地の中を突っ走って、
小学校のある一本道へ。

そこからしろは食堂の前の坂を一気に降りて、島の西側の港まで一
気に運んでしまおうという作戦らしい。

「鷗……いくらなんでも、そんなこと可能なのか？」

「この秘密基地から港まで、ずっと下り坂が続いているし、転びさえし
なければ5時までに行ける……はず」

「……はず？」

「試してる時間なんてないし」

そりやそうだ。

「それでね。できるだけ沢山の人に、手伝ってもらいたいんだけど
……」

「……さ、さよなら」

「しろしろ、ストップ！」

「うぐっ」

鷗からの視線を感じ、逃げようとしたしろはだったが、鷗に襟首を
掴まれていた。

「のみきさん、あともう少し人数を集めて欲しいんだけど」

秘密基地に置かれているスーツケースは全部で8個。

鴉はマイスツケースを使うとして、運搬役には最低8人必要だ。

「……わかった。あまりやりたくはないが、少年団の権限を使って召集しよう」

そう言うのみきの手には、トランシーバーが握られていた。

「……で、なんであたしや紬まで呼び出されるわけ？」

「一度に運ぶには、これくらいの人数が必要なんだ」

30分足らずで、秘密基地に蒼と紬が招集された。

これでこの場に、俺としろは、夏海ちゃん、天善に良一、のみき、紬に蒼と、なんとか運搬役の8人を揃えることができた。

「それじゃ皆、好きなスーツケースを選んでー」

そして各々、好きなスーツケースを選び、引いて表に出す。

そこで鴉からスーツケースの乗り方や操縦方法のレクチャーを受ける。

具体的にはスーツケースに座った状態でのバランスのとり方や、非常時の受け身の取り方などだ。

「なあ鴉、いくらなんでもスーツケースで公道を走るのは危険なんじゃないか？」

俺も茶色いスーツケースを選び、乗り心地を確認しながら、鴉に質問する。

「大丈夫！ レース中は公道に全部交通規制をかけてもらってるから！」

「ざらつと言ってるけど、それってすごいことじゃないの？」

青色のスーツケースに乗ってバランスをとる練習をしていた蒼が言う。なんだかんだで練習してくれている。

「むぎゆ……難しいです」

「紬さん、頑張りましょう！」

その隣でも紬や夏海ちゃんがバランスをとる練習をしている。二

人は体が小さい分、操作が大変そうだった。

「しろは、大丈夫そうか？」

俺は白いスーツケースに乗って体を左右に揺すっていたしろはに声をかける。

「……あまり自信ない。スーツケースとか、乗ったことないし」

「大丈夫だ。俺も押したことはあるけど、乗ったことはほとんどないから」

「……というか、ここにいるメンバーでスーツケースに乗ったことがあるのは、鷗と夏海ちゃんくらいだと思う。」

「……皆、喜べ。島民全面協力だ。道路沿いに出て、応援もしてくれるそうぞ」

さつきまでトランシーバーでどこかと連絡を取り合っていたののみきが戻ってきた。

「藍と水織先輩も、鉄塔から実況をやってくれるそうぞ」

「なんだって？」

静久はわからないけど、藍は確か駄菓子屋でバイトしてたんじゃないかなかったつけ。

「そろそろ、鉄塔から試験放送を始めるそうぞだ」

『えーっと、こほん。ただいま、マイクのテスト中よー……』

のみきがそう言った直後、島の鉄塔から静久の声が聞こえてきた。いつもよりボリュウムは抑えている感じもする。

『……住宅地の皆さん、間もなくスーツケーススレーズが開始されます。道路に飛び出たりしないよう、注意して応援してください』

続いて藍の声も鉄塔から聞こえてきた。その声に反応するように、住宅地の方から歓声が聞こえる。すごく大規模なイベントの装いを呈してきた。

「鷹原さん、なんだか大変なことになってきましたね」

夏海ちゃんもどこか不安そうぞだ。

俺としても、腹ごなしの運動のはずが、とんでもないことになって

しまった。

でもこうなった以上、腹をくくるしかない。

「とりあえず夏海ちゃん、楽しもう」

「はい！」

「なあ鷗よー、このレースは賞品があったりするのかな？」

鷗のレクチャーも終わろうとしていたその時、良一が誰もが気になっっていたところをストレートに聞く。

「二位の人には、お米券3000円分」

「え」

急に女性陣の目の色が変わった。

「なんだ、お米券かよー」

「何を言っているんだ良一、お米券だぞ」

「そうよ。まさか、お米券が賞品になるなんて思わなかったわ」

「うん。これは頑張らないと」

かなり残念そうにしている良一に対し、女性陣は急にやる気が出たみたいだ。お米券って、そこまで魅力的なものだった。

「鷹原さん、頑張りましょう！」

……なんだか、夏海ちゃんもやる気になってるみたいだし、まあいいか。

「それじゃ、おカーさんの待つ港へ向けて！ 皆、頑張ろう！」

「おー！」

お米券のおかげで一体感が生まれた感じだ。皆ノリノリだ。

「そろそろ準備完了の合図を送るよ！ 皆、スツケースに乗ってー！」

俺たちはそれぞれスツケースに乗り、一列に並ぶ。

「スタートしたら私が指示役を務めるから、皆はしっかりついて来てね！」

「あれ、鷗はレースに参加しないのか？」

「うん。私は皆に助言をするよ。一緒には走るけどね。ペースメーカーみたいなものかな」

鴉が助言をしてくれるなら、ありがたい。

「……私が参加したら、圧勝しちゃうからね！」

悪戯っぽく笑う。どこまで本気なのかわからない。

「それじゃ、準備完了の合図をするよー！」

鴉はポケットから打ち上げ花火を取り出して、火をつける。

一瞬の間をおいて、花火は上空へと飛び、大きな音を立てた。これが合図らしい。

『皆の準備も整ったみたいね。それじゃあ皆、位置についてー……』

その花火の音を合図に、再び鉄塔から声が聞こえ始める。

『あ、水織先輩、レースの前に一言良いですか』

『え？ ええ、いいわよ？』

『それでは……こほん。蒼ちゃん、愛しています。頑張ってください』
「ちよつと藍ー！ 島内放送で変なこと言わないでー！」

蒼は顔を真っ赤にして叫んでいた。さすがにここから鉄塔までは声が届かないと思うけど。

『それでは皆さん、スタート位置についてください』

そんなこつちの状況などつゆ知らず、藍の声が鉄塔から淡々と響く。

『では、よいい……』

一瞬の静粛、子供の頃の運動会を思い出し、緊張してくる。

『……どんー！』

スタートの合図を受け、俺達は足で一斉にスニーカーを下り坂へと押し出す。

「うおおおおおー！」

一番最初に飛び出したのは、オレンジ色のスニーカーに乗った良一と、黒いスニーカーに乗った天善だった。

「うらー！ 私より先に出ないでー！ 危ないよー！」

同時に、鴉の怒号が飛ぶ。

良一と天善は自ら狙って先頭に立ったというよりは、勢いがつきすぎて先頭になってしまった風だった。男の場合、体重があるからどうしてもスピードが出るんだろう。

その三人に俺とのみきが続き、その後ろに蒼、しろは、夏海ちゃん、
紬と並ぶ。

秘密基地からの下り坂は舗装されておらず、小石や木の枝も落ちて
いて、なかなかの悪路だ。

そんな中を、良一と天善は高速で突っ走っていく。

「おい二人とも！ 少しスピードを緩めたらだどうだ!?」

「緩められる方法があったら俺が知りたいところだ!」

……そうだった。スーツケースにブレーキなどついていない。

「皆、もうすぐ最初の難関だよ!」

「鷗いわく、スタートして最初の難関は山の途中にあるカーブらし
い。」

「ここを減速せずに通過するのは至難の業だよ!」

「鷗、そもそも減速できるのか?」

「上手く曲がれば減速できるよ! 曲がり方にコツがあるの!」

「うわあああああ——!」

その時、鷗より前を走っていた良一と天善が先にカーブへと突入
し、曲がり切れずに草藪の中に突っ込んでしまった。

「だから、私より先に行ったら危ないって言ったのに!」

……二人とも、安らかに眠れ。

俺は心の中で手を合わせていた。

「ここは体をカーブの内側に傾けて、うまくスーツケースを斜めにし
て減速しながら曲がるの! こう!」

鷗がお手本を見せてくれる。

「こ、こうか?」

「そうそう!」

俺も見様見真似でカーブをやり過ぎす。

背後の皆もなんとかカーブを曲がり切ったようだった。

「次はさっきと逆! こうだよ!」

何故か、鷗のスーツケースさばきは目を見張るものがあった。

「この先はさっきと同じ! こう!」

その後も鷗がお手本を示してくれ、山を下り切る頃には、俺達もそ

れなりにスーツケースをコントロールできるようになってきた。

教え方がうまいのか、習うより慣れろなのか、できるもんなんだな。

山を下る間にも、カーブの度にじわじわと順位変動が起こり、先頭を行く俺とのみきにしろはが並んできて、少し遅れて蒼と夏海ちゃん、その後ろに紬と続く。

「うおおおっ！」

「チヨレeeeeー！」

その時、ずっと後ろの方で叫び声が出た。振り返ると、紬の遙か後ろに良一と天善の姿が見えた。草藪に突っ込んだ二人だけど、早くも復帰してきたみたいだ。

転倒して順位こそ落としているけど、全てのスーツケースを港に運ぶという目的上、リタイヤはない。

やがて秘密基地の山を下り切り、舗装された公道に合流する。

山道ほどの急坂はないので、そこまでのスピードは出ないけど、道が舗装されている分、スムーズに進む。減速する気配はない。

『加納君と三谷君が、かなり後ろの方を走ってるわね。何かあったのかしら』

鉄塔から静久の声が聞こえた。俺達の位置関係を正確に把握しているところからして、双眼鏡でも使っているんだろうか。

「もうすぐ住宅地だよ！ 交通規制かけてくれるから、思いっきり飛ばしちやっつて大丈夫！」

飛ばしていいと言われても、変速機も動力もついていない、ただのスーツケースだ。慣性に任せるがままに進むだけだ。

『観客の皆さん。まもなくスーツケースが住宅地に到着します。沢山の声援を宜しくお願いします』

「……え、ちよつと、なにこれ」

住宅地に入ると、道の端を埋め尽くすほどの人。この島にこれだけ人がいたのかわつてくらしい、人が集まっている。

「お、三谷さんとかのせがれ、ビリじゃねーか！」

「加納さんとかの卓球坊主も似たようなもんだな！ もつと頑張れ

！」

「しろはちゃーん、がんばってー！」

「その彼氏も頑張れよー！」

近所のおばさんに漁師のおっちゃん、他にもすぐに名前は出ないけど、見知った人たちがばかりだった。

「どうしよう羽依里、すごく恥ずかしい」

「俺も恥ずかしい」

しろはとそんな話をする間にも、左右から声援が飛んでくる。恥ずかしくてしょうがない。これは、さつさと通り過ぎてしまうしかない。

そして住宅地は分かれ道や細い道が多くて紛らわしいけど、コースを間違えないようにロープが張ってあったり、矢印でルートを示してくれていた。

誰がやってくれたのかわからないけど、すごく助かった。

「皆、もうすぐ第二の難関だよー！」

「鳴がそう叫ぶ。」

「今度はなんだ？」

「この先は上手く左に曲がらないと、勢いそのままに駄菓子屋に突っ込んでんじやうよ！」

「そ、それは色々な意味でやばくないか？」

「もちろん、突っ込んでんじやったら駄菓子の弁償は個人負担！　ぷち最悪だよー！」

「全然プチじゃないぞ。中にはブルジョワなお菓子も混ぜてるからな」

駄菓子屋に突っ込まないように、細心の注意を払わなければならぬ。

……その後、いくつかの曲がり角を曲がると、駄菓子屋が見えてきた。

「がんばれ、ししよー！」

「あおちゃん、がんばるんだよー」

駄菓子屋の前では常連の子供たちや、駄菓子屋のおばーちゃんが看板娘の蒼を応援してくれていた。

「スキありー！ うりゃあっ！」

……その声援も力になったんだろうか。住宅地に入ってじわじわと順位を上げてきていた蒼が、駄菓子屋前のカーブでトップに躍り出した。

スーツケースが慣性で動く関係上、コーナーをいかにうまく曲がれるかが勝負の分かれ目になる。蒼はそこに気がついていたみたいだ。「やるな、蒼！」

続いて、俺としろは、のみきも駄菓子屋前のカーブをクリア。ちよつと大回りになったけど。

その後ろの紬と夏海ちゃんもなんとかクリアしていた。

「うわー！」

遙か後ろで天善の声がした。

『加納君、また転倒しちゃったみたいね』

距離の関係上、天善の様子はわからなかった。直後の放送によると、どうやらカーブを曲がり切れず転倒したみたいだ。

『自ら身体を投げ出したようにも見えました。駄菓子屋は無傷です』
駄菓子屋に突っ込んで損害を出してしまいうくらいなら、自らバランスを崩して転倒する道を選んだようだ。

駄菓子屋を通過すると、すぐに住宅地を抜け切る。

すると一本道に差し掛かる。ここは特に障害物もなく、見通しも良い。少し気を緩めることができそうだ。

『観光客の皆さん、スーツケースがご迷惑をおかけしています』

ここら辺までくると、ちらほらと観光客の姿も見える。スーツケースレースについては周知徹底されてるみたいで、観光客も道の端を歩いて、笑顔で手を振ってくれている。これはこれで恥ずかしい。

現在の順位は蒼が首位、その次が俺としろは、そのすぐ後ろに猛追

してきた良一、少し離れてのみき、夏海ちゃん、紬、天善が続いている。

蒼の背中は見えてるんだけど、平坦な一本道だから全く順位も動かない。

ここは彼氏として、ぜひとも優勝してしろはにお米券をプレゼントしたいところだけど。

……よし、こうなれば奥の手だ。

「蒼、パンツ見えてるぞー！」

「へっ？ うそ?！」

……慌ててスカートを押さえる。動揺してバランスを崩した。転倒はしなかったけど、失速してしろはの後ろまで順位を落とした。

ちなみにパンツが見えてるなんて、もちろん嘘だ。

『羽依里さん！ 蒼ちゃんのパンツを見るなんて許しませんよ！』

え、まさか今の声が藍に聞こえたのか？ そんな馬鹿な。

『自分だけ見るなんて！ 後でこっそり色を教えてください！』

「だから藍、島内放送で言わないでー！ー！」

「……よし、もらったー！ー！」

そんなことをしていると、良一に抜かれた。ずっと緩やかな下り坂が続いているので、体重のある男の方がどうしてもスピードが出る。まあ、カーブを曲がりにくいという欠点もあるけど。

一波乱あった一本道を抜けると、ゴールの港が見えてきた。

ペースメーカーの鷗を除外して、現在は良一が先頭、それに続いて俺としろは、蒼、のみき、夏海ちゃん、紬、天善と続く。

港が近づいてくると、また観客が増えてきた。半分くらいは観光客みたいだ。

「夏海ちゃん、がんばれー！」

「出店のおにーさん!？」

観客の中に、竜太サンドを売っていた金髪にーちゃんが居た。

「立つんじゃねえ！ 蒼さんが見えねえだろうが！」

「ひいひいっ！」

夏海ちゃんの応援してくれていたけど、直後に後ろにいた男性に怒鳴られていた。まるでラグビー部みたいなガタイの良い人だったけど、あの人も観光客かな。

「皆、この先が最後の難関！ 魔のカーブだよ！」

そんなおどろおどろしい名前を付けないでほしい。

しろは食堂を通り過ぎると、緩やかな下り坂。否が応にもスピードがつく。

そして、目の前には真っ黒な、謎の壁が立ちふさがっている。

目を凝らしてよく見てみる。カーブというか、ほぼ直角の曲がり角だった。ここを曲がればゴールの港は目の前だ。

それにしても、あの黒い壁はなんだろう。普段はあんなところに壁なんてなかったはずだけど。

「ここで全力で右に曲がって！ そうしないとー……おわー……っ！」

最後のレクチャーをしようとしていた鷗が魔のカーブを曲がり切れず、黒い壁に突っ込んでいった。

「ちよっ……鷗が曲がり切れないのに、俺たちが曲がり切れるわけが……う、うわあああー……！」

俺の前を行っていた良一が黒い壁に突っ込み、勢いが強すぎたのかスーツケースだけを残して、壁の向こう側へ吹っ飛んで行った。直後に波しぶきが上がる。

え、もしかしてあの壁の向こうって海なのか？

というか、あの壁って柔らかいのか？ 良一がはじかれたぞ？

「羽依里！ 曲がって——！」

鷗の声を受けて必死に曲がろうとするけど、直前の下り坂のせいで勢いがつきすぎている。

「うわあああー……！」

俺も努力むなしく、俺も黒い壁に突っ込んでしまった。

反射的に身を守ろうとしたけど、黒い壁は思いのほか柔らかく、クッションのように衝撃を吸収してくれた。

「あれっ？ 痛くない……！」

乗っていたスーツケースは盛大に地面を転がり、横転して止まる。自分がぶつかって分かった。この黒い壁、漁で使う網を一か所に集めて、壁みたいにしてあるんだ。

この向こうが海だとすると、このカーブを曲がり切れずに海に落ちることを防ぐために、誰かがこの網を設置してくれたことになる。本当にありがたい。

「えっ？… えっ？… えっ？…」

そんなことを考えていると、俺の後ろを付いてきていたしろはが驚愕の表情のまま突っ込んでくるところだった。しろはも魔のカーブを曲がりきれなかったみたいだ。

「しろは、跳べ！ 受け止めるから！」

「う、うん！」

しろはがスーツケースを乗り捨てて、俺の方に跳んでくる。俺はうまくお姫様だつこで受け止める。

「おおー、さすが羽依里！」

鷗が茶化してくる。ここまで完璧にしろはを受け止められるなんて、自分でも驚いたくらいだ。これも愛の力かな。

「どいてー！ー！」

直後、蒼もカーブを曲がり切れずに突っ込んでくる。俺たちは慌てて左右に避ける。

「ひゃー！ー！」

蒼が黒い壁に突っ込む。ぽよーんと弾かれていた。怪我はないみたいだ。

「わわわわー！ー！」

その次に夏海ちゃんが突っ込んでくる。もはや誰も魔のカーブを曲がり切れない。

「羽依里、夏海ちゃんも受け止めてあげて！」

「よしきた！」

しろはに言われて、網の中央で構える。直後、飛ばされてきた夏海ちゃんをうまく受け止める。

「あ、ありがとうございます……！」

続いて、のみきもカーブを曲がり切れず、飛んできた。

「よいしょー！」

「……すまない」

流れるに次は紬か。いつでも来いと身構えていると……。

「むぎゆぎゆぎゆー……」

「……あれ？」

紬はむぎゆむぎゆ言いながら、ギリギリのところまで魔のカーブを曲がり切った。

そして、蛇行運転しながら港へと辿り着く。

『ゴ——ル！ 紬が一番最初にゴールしたわ！』

鉄塔から静久の嬉しそうな声が聞こえた。

俺たちは全員で顔を見合わせる。まさかの大逆転優勝だった。

その後、俺たちは散らばってしまったスーツケースを各自で拾い集めて、港へと向かった。

「紬さん、優勝おめでとうございます！」

港に着くと、夏海ちゃんが一番に紬を祝福に行っていた。紬はむぎゆむぎゆ言いながら、すぐく照れていた。

ちなみに、俺が良一のスーツケースを持って行くと、港に全身ずぶ濡れの良一がいた。海に落ちた直後、港に待機していた係員に助けられたらしい。

「良一、大丈夫か？」

「ちくしょー、最近運がないぜ……」

良一は俺からスーツケースを受け取りながらも、頭を抱えていた。あと一歩で優勝を逃したのだから、悔しいのもわかる。さらに海に落ちたわけだし、踏んだり蹴ったりだ。

「皆さん、お手数をおかけしました」

その時、俺達の元に一人の女性が近づいてきた。鷗の母親の鷺さんだ。

「おかーさん、約束通り全部のスーツケースを持ってきたよ！」

「ありがとう。鷗も随分楽しんだみたいね」

「うん！」

あれだけ島を挙げて大騒ぎしていたんだし、そりゃ鷗さんも気づくよな。

「……あら、スーツケースは全部で8つと聞いていたんですが、7つしかないですね」

「あ」

そういえば、天善はどうなったんだろう。駄菓子屋の前で転倒して以後、音沙汰がない。

「えーっと、その……」

どう説明したものかと、俺が頭を悩ませていると……。

「……ふっ！ ふっ！ ふーっ！ ふーっ！」

遅ればせながら、天善が港にやってくるのが見えた。

「おお天善、待っていたぞ」

俺は天善に駆け寄る。

「駄菓子屋の前で転んだ時はどうなるかと思ったが、これはこれで良いトレーニングになったぞ」

完全に失速してしまったので、どうやら駄菓子屋の前からずっとスーツケースを押してきたらしい。確かに良いトレーニングになりそうだ。

紆余曲折あったけど、これで8つの全てのスーツケースを運ぶ事ができた。ミツシヨンコンプリートだ。

「それではお米券、進呈です」

全てのスーツケースが船に運び込まれた後、鷗さんから紬へお米券が進呈された。

「ありがとうございますー！」

紬が笑顔で受け取ったお米券は、なぜかそのまましろはへと手渡される。

「えっ？」

「シロハさん、この間の麻婆豆腐定食のお礼です！ どうぞ！」

「そんな、受け取れないよ」

「受け取ってください！」

困惑しているしろはに対して、紬は笑顔でお米券を差し出し続けている。

「シンターです！」

「しろは、紬がああ言いだしたら聞かないぞ。大人しく受け取っておいた方がいい」

「で、でも……」

「また紬に食堂に食べに来てもらえばいいじゃないか？」

「うーん……」

少し悩んで、しろははお米券を受け取る。

「それじゃ紬、今度はこのお米券を使って、おにぎり定食を用意しておくね」

「はい！ 楽しみにしていますー！」

お米券を受け取ってもらえて、紬も満足顔だ。ういんういんってやつだろう。

ところで、おにぎり定食ってどんなのだろう。気になる。

その後、しろはは食堂の準備があるからと足早に帰ってしまった。多少の恥ずかしさもあつたんだろう。

代わりに鉄塔の方からやってきた静久と藍が合流した。

ちなみに、鴎は定期船の近くで母親と何やら話をしている。親子水入らずの時間だし、邪魔はしないでおこう。

「それにしても、まさか紬が優勝するなんてねー」

「やっぱり、紬は小さかったから安定してたんじゃないか？」

軽くて必要以上にスピードが出なかったから、最後の魔のカーブも曲がり切れたんだろうし。

「紬はおっぱいが小さかったから安定してたんですって。良かったわね」

「タカハラさん、ゼッコーです」

静久、微妙に言葉を加えないでほしい。

「ところで夏海ちゃん、恐くなかった？」

「いえ、楽しかったです！」

夏海ちゃんも笑顔で答えてくれた。

突発的なイベントだったけど、楽しんでくれたなら、それに越したことはない。

「それはそうと羽依里さん、蒼ちゃんのパンツの色ですけど……」

「秘密！ 羽依里も言っちゃ駄目だからね！」

「あ、ああ」

二人とも鬼気迫る表情だった。見てないんだけどさ。

「仕方ありません。夜に脱衣所でチェックしましょう」

「やめてー！」

その後、日が暮れるまで皆と賑やかに喋っていた。結局仲間達と過ごせば、場所はどこでもいいのかもしれない。

……しろはもう少し一緒に過ごせば良いんだけどな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

日没後、皆と別れて、港から直接しろは食堂へと向かった。

「いらっしやい」

今日もしろはが笑顔で迎え入れてくれた。

スーツケースを終わって、少し前に食堂に向かったばかりのはずだけど、きちんと開店準備がされていた。さすがしろはだ。

「……二人とも、秘密基地の時から思ってたけど、もしかして体調悪い？」

しろはが俺達におしぼりを渡してくれながら、そう切り出す。

「え、なんで？」

「いつもより少しだけ顔色が悪いし、お腹の辺りを気にしてるし」
「う……」

実はスイーツケースレースを経ても、胃の調子が完全に元に戻ることは無かった。竜太サンド恐るべし。

他の皆は誤魔化せてたけど、しろはは誤魔化せないみたいだった。やっぱり敵わない。

「じ、実は……」

俺は観念して、昼間の屋台について、しろはに洗いざらい話して聞かせた。

「……竜太サンド？」

「うん。これくらいの大きさのパンに、これくらいの四角い物体が挟まれてただけ」

俺は両手で大体の大きさを示し、説明をする。

「どんな味だったの？」

「未知の味」

「食感は？」

「未知の食感」

「……ごめん。よくわからないんだけど」

「俺達もよくわからなかった」

「それが、胃にもたれたの？」

「たぶん」

「食べたの、半分なんだよね？」

「ああ、夏海ちゃんと半分こした」

「……」

あ、しろはさんが何とも言えない顔をしてらっしやる。

「そういう時は、先に羽依里が食べて、安全かどうか確かめてあげなきゃ」

「うん、次からはそうするよ……」

「それより、怪しい屋台の食べ物口にしなのが一番だから」

「はい」

「次からは気をつけます」

二人揃って怒られてしまった。心配かけてしまったんだし、仕方ない。

「二人とも、今日は軽いものにしようね」

そう言ってしろはが用意してくれたのは、冷やし中華だった。

甘酸っぱい中華ダレで味付けされた冷やし中華は、するすると食べる事ができて、とても美味しかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺はしろは食堂から帰宅した後、居間で一息ついていた。

夏海ちゃんが先にお風呂に入ってるので、俺の番が来るまでテレビでも見ることにした。

『あなただけは許さないから』

テレビをつけると、またテレビドラマをやっていた。

復讐劇だろうか。女の子が男に殴りかかっている。軽くあしらわれているけど。

『大きなおでん種……』

例によって、見てもよくわからなかった。

ただただ、女の子が食べていた肉まんが美味しそうだった。

……ぼんやりとテレビを見ていると、電話が鳴った。

「あれ……こんな時間に誰だろう」

鏡子さんの姿も見えないので、受話器を取る。

「はい。えーっと、加藤ですが」

「あ、あの、えーっと……た、鷹原さんはご在宅ですか？」

「……蒼？」

電話に出てみると、蒼からだった。

「えっ、あ、羽依里？」

「そうだけど」

電話口だからか、いつもと声の感じが違う。

「ほら、あんたんとこに電話するなんて初めてだし」

「確かに初めてだよな」

「普段は名字で呼ぶこともないから、ぱっと出てこなかったしねー」

蒼の声は明らかに緊張していた。

「それで、どうした？」

「えーつと、ほら、この前のビーチバレー大会、覚えてる？」

「あー、うん。あれだろ。蒼たちが優勝したから俺とデ、デ、デートするんだっけ」

デートなんて言い慣れない言葉を言ったせいか、俺も舌がもつれた。

「そ、そう！ それ！ それなんだけど……」

電話の向こうで、スー、ハーと深呼吸する音が聞こえた気がした。

「明日、空いてる……？」

「ああ、空いてるよ」

なんだろう。蒼が初々しすぎて、俺も意識しすぎないようにするのに必死だ。

「そ、それじゃ、明日の朝9時に、港で待ち合わせ、しない……？」

「いいけど」

「も、もちろん藍も一緒だからね！」

「ああ、わかってるよ」

「本土の方で、行ってみたいお店があるの」

「羽依里、あたし達よりは本土のお店に詳しいでしょ？」

「えーつと、まあ、それなりに」

「あ、勘違いしないでよ。あくまでその、ビーチバレー大会の賞品ついで、デートするんだからね！」

「わかってるって」

「……蒼ちゃん、お風呂空きましたよ」

その時、少し遠くで藍の声が聞こえた。

「……あれ？ どこかに電話してるんですか？」

「うん。ちよつとね！」

「そ、それじゃ！ 明日、楽しみにしてるから！」

……切れてしまった。

「明日の9時に、港か……」

蒼との約束を反芻した後、ひとまずしろはにも電話をして、一言伝えておく。

「……良いよ。行つてきても」

「ビーチバレーで負けたから、仕方なくだし」

「でも、羽依里の彼女は私だから」

「お泊りは絶対ダメ」

この辺りに念を押されて、ひとまずOKをもらうことができた。

「ふう……」

しろはとの電話を切った後、大きく息を吐く。

藍や蒼とデートつて、ビーチバレーの結果とはいえ、凄い約束してしまつたんじゃ……？

しろは以外のデートなんて、初めてだし。

なんだろう。変に緊張してきた。

俺、今夜眠れるかな……。

第十四話・完

第十五話 8月8日

……朝。

カーテン越しに日光が差し込んでくる。完全に夜が明けたみたいだ。

優しい光のはずなのに、すごく眩しく感じる。

「結局、ほとんど眠れなかった……」

デートの途中で藍に怒られる夢とか、何故かイナリに追いかけられる夢とか、妙な夢ばかり見てしまった。

とりあえず無言で布団をたたむ。

「さて、どうしよう……」

壁にかけられた時計を見る。まだラジオ体操までは少し時間があ

る。「……そうだ、筋トレをしよう」

俺は少し考えて、筋トレをすることにした。

所詮は夢だ。別のことに集中すれば、すぐに忘れる。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

まずは腹筋だ。回数なんて数えちゃいない。無念無想で続けるんだ。

「ふっ、ふっ、筋肉！ 筋肉！」

いいぞ。だんだんテンションが上がってきた。汗もかいてきたし、これは上着もいらさないな。

俺はパジャマの上着を脱ぎ捨てる。

「筋肉が唸る！ 唸りをあげる！」

程よく身体が温まったところで、次は腕立て伏せだ。この身体を苛め抜く感じが、むしろ心地良くなってきた。

「ふっ、ふっ、筋肉！ 筋肉！」

「鷹原さーん、朝ですよー！」

……その時、いつものようにふすまを開けて、夏海ちゃんが起こしに来てくれた。

「あ……」

腕立て伏せの姿勢のまま、顔を上げた状態で夏海ちゃんと目が合う。

夏海ちゃんは元々大きな目を更に大きく見開いて、驚愕の表情で固まっている。

「ぐ、ごめんなぎーいー!」

ぱしっ! と勢いよくふすまが閉められ、足音が廊下を遠ざかっていった。

……朝から衝撃的な姿を見せてしまったかもしれない。俺、いつの間にか上半身裸だし。

投げ捨てられた服を拾って、普段着へと着替える。

その後、洗面所で顔を洗い、身支度を整えてから居間へ顔を出す。

「えーっと。夏海ちゃん、おはよう」

「おはようございます」

夏海ちゃんは何事もなかったように挨拶を返してくれた。なんか、気を使わせてごめん。

「鷹原さん、今日もラジオ体操行きますよね?」

笑顔でスタンブカードを渡してくれる。

「うん。今日も行かなきゃね」

「はいー!」

俺と夏海ちゃんは朝のさわやかな空気の中、ラジオ体操へと向かう。日常に戻ろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神社の境内に着くと、皆に挨拶をして回る。

「おはよう、羽依里!」

「おはよう、パイリ君」

「タカハラさん、ナツミさん、おはようございます！」

いつもの皆の中に、ウシとネコ、そしてカモメが混ざっていた。非日常だった。

「羽依里。なんか私のこと、変な目で見てない？」

「いや、気のせいだろう」

カモメさんは指の先でスタンプカードを弄びながら、懐疑的な表情をしている。

「そういえば、鷗さんはスタンプカード持ってますけど、ネコさんとウシさんは持ってないんですか？」

「ええ、私と紬は初日に来れなかったしね」

……そういえば、鷗は特例だったな。

「でも、皆と一緒にラジオ体操をやるのは楽しいから、来れる時はできるだけ来るようにしているわ」

「はい！ 来てます！」

スタンプカードは無くても、ネコとウシはやる気満々だ。

「ところで紬、帰ったら灯台でおっぱい体操もやるわよ！」

「はい！ 今日頑張ります！」

今日も？ じゃあ、もしかして毎日やってるのかな。

「あの、静久さん。おっぱい体操って何ですか？」

え。夏海ちゃん、そこ聞いちゃう？

初めて聞く単語に、夏海ちゃんが思わず質問していた。

「夏海ちゃんも私と一緒に毎日続ければ、こんな立派なおっぱいになるわよ？」

静久がそう言いながら胸を張る。うーむ、物凄い説得力だ。

「でも、紬も毎日一緒にやってるんだよね？」

「はい！ 毎日気合いを入れてやってます！」

「……」

夏海ちゃんが静久の胸と紬の胸を交互に見た後、自分の胸元に視線を落とし、何とも言えない顔をしている。俺としてもかける言葉が見つからない。

「前も言ったけど、夏海ちゃんは紬と違って成長期だもの。まだまだ気にする必要はないわ」

「むぎゅ！ シズク！ それはどういう意味ですか!？」

ネコさんがご立腹だ。

「お前ら——！ 準備はいいか——！ 今日もラジオ体操を始めるぞ——！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もいつものラジオ体操が始まる。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

ネコとウシ、そしてカモメの耳がピクピクと動いていた。

何度見ても不思議な光景だ……。

「ねえ羽依里、やっぱり私のこと、変な目で見てない？」

「だから、見てないって」

「……なんか、えろいことされそう」

「いや、しないから」

「そこ——！ 私語は慎め——！」

……ラジオ体操大好きさんに怒られてしまった。

その後は黙々と、皆とラジオ体操にいそしんだ。

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操が終わり、スタンプとログボを受け取る。

「あれ、なんだこれ？」

今日のログボは藁に包まれていた。

「これは、佐藤さんちの自家製納豆だな」

天善がそう教えてくれた。

え、佐藤さんちってそんなこともやってるのか。

「なかなかうまいんだぜ」

良一も心なしか嬉しそうにしている。先日の海苔の佃煮と合わせたりすると、いくらでもご飯が食べられそうだ。

「確か海苔の佃煮も、まだ半分は冷蔵庫に残っていたはずだし……」

良一とそんな話をしていると、視界の端に空門姉妹の姿が映った。普段と変わらない調子で、のみきや鷗と話をしていた。

「さ、さすがに意識し過ぎだよな」

いくら今日デートするからって、考えすぎだ。デートくらい、しろはとはよくやってるんだから。

「あの、鷹原さん、帰らないんですか?」

「ああ、ごめん。帰ろうか」

一人で頭を抱えている俺を見て、夏海ちゃんが心配そうに声をかけてくれた。

……でも、帰ったら服選びくらいきちんとやっておこうと、俺は心に決めた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

帰宅した後、朝食の準備を夏海ちゃんにお願いして、俺は一度自室に向かう。

朝食後は船の時間に追われて慌ただしくなるから、その前に服の準備だけはしておこうと思ったんだけど……。

「うーん」

俺は普段着ないような服を靴から引っ張り出し、畳の上に広げて悩んでいた。

「大した服持ってきてなかったな……」

島ではそこまでの服はいらないし、まさか、こんな形でしろは以外の子とデートすることになるなんて思わなかったし。

「どうしようかな……むぎぎぎぎぎ」

「どうしたんですか鷹原さん、紬さんみたいな声出して」

唸っていると、背後から夏海ちゃんに声をかけられた。

「あの、朝ごはんできましたけど」

「ありがとうございます。今行くよ」

どうやら時間切れみたいだ。衣装選びはひとまず棚上げにして、居間に向かう。腹が減ってはなんとやらと言うし。

「あれ……？」

居間に近づくにつれて、独特な香りが漂ってきた。

「……これは、もしかして」

食卓には独特な匂いにするチャーハンが置かれていた。

「はい！ 納豆チャーハンです！」

佐藤さんちの自家製納豆は、チャーハンに姿を変えたみたいだ。

「海苔の佃煮を隠し味に入れてみたんです！ 自信作ですよ！」

納豆と佃煮の夢のコラボレーションだった。いい感じにおこげもできているし、美味しそうだった。

美味しそうだったけど……。

「ごめん夏海ちゃん。せっかくだけど、今日は納豆チャーハンを食べられない」

「え。どうしてですか？ 私のチャーハン、嫌いになりましたか？」

いや、そういうわけじゃないから、そんな目で見ないで。

「ほら、今日……蒼達とで、で、で、出かけるからさ」

デート、と言おうとして急に恥ずかしくなり、言葉を変える。

「……あ、そうでした。今日は蒼さんたちとのデートでしたね」

「うん。さすがにデートの日の朝に納豆食べるのはどうかと思うんだ」

「……ごめんなさい。配慮が足りませんでした」

エプロンをつけたままの夏海ちゃんが、申し訳なきような顔でうつむいてしまう。

「ううん、夏海ちゃんがそんなこと気にしなくて良いんだよ」

その肩に手を置いて、慰めてあげた。

その後、夏海ちゃんにも同意してもらい、納豆チャーハンの代わりに冷蔵庫に残ってたキャサリンの卵を使って、卵かけご飯を食べることにした。

「じゃあ、納豆チャーハンは冷蔵庫に入れておきますね」

俺が台所で卵と醤油を準備していると、夏海ちゃんがラップをかけた納豆チャーハンを冷蔵庫に入れてくれていた。納豆チャーハンは明日食べることにしよう。

朝食を流し込むように食べた後、また自室に戻って衣装選びを再開する。

時折夏海ちゃんにも相談しながら何度も着替えたけど、結局普段とあまり変わり映えのしない服装になってしまった。

「それじゃ夏海ちゃん、行ってくるよ」

「はい！ 楽しんできてください！」

夏海ちゃんに見送られて、加藤家を後にする。

腕時計を見ると、8時過ぎ。ゆっくり歩いても8時半には港に着くと思う。待ち合わせは9時だから、余裕だろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……結局、8時半より少し前に、港についてしまった。

「速足で歩いた記憶もないんだけどな……」

気持ち焦っていたんだろうか。でも、二人を待たせるよりはいいだろう。

「あ、羽依里」

「おはようございます。羽依里さん」

「おはよう……って、あれ？」

声をかけられて振り返ると、蒼と藍が居た。

どうやら、二人の方が先に来ていたみたいだ。

「ごめん、まさか俺の方が遅くなるなんて」

「気にしないでください。蒼ちゃんに急かされて、早く来過ぎただけ

ですから」

「あー、うん。ごめん……」

多少の申し訳なさもあるんだろう。いつもより声がしおらしい気がする。

「いくら早く来ても、船は来ないのでね」

確か、前の船が7時くらいで、次の船は9時半くらいだっけ。

「いや、気にする必要はないと思うぞ。むしろ、早く来るに越したことはないし」

「蒼ちゃんも楽しみで眠れなかったんです。大目に見てあげてください」

「藍もバラさないで——！」

「わかってる。蒼だもんな」

「羽依里も納得しないで——！」

良かった。いつもの調子が戻ってきたみたいだ。

「それに、眠れなかったのは俺も同じだし」

「ふ、ふーん。羽依里もそうなんだ……こういうの、慣れてそうなの」

いや、全然慣れてない。

ちなみに、蒼は普段と同じ髪型に、いつもの私服だった。

「やっぱりその恰好が蒼らしいよな」

「へっ？」

突然服装の話題を振ったためか、蒼が居を突かれていた。

「さんざん悩んだ挙句、その服に決めたんですよね」

「だ、だって、これが一番あたらしいじゃない？」

「そうだよな。一番蒼らしいと思う」

「そ、そう？　ありがと……」

蒼は小恥ずかしそうに頬を掻いている。

「実を言うと、俺もさんざん悩んで、いつもと似たような服装に落ち着いたんだ」

「ほんとね、いつもの羽依里だわ」

「はい。いつもの羽依里さんです」

そういう藍の方は、蒼とは逆向きの髪型。例の登校スタイルってやつみたいだ。

服装は蒼に比べると、露出が少なめのワンピースタイプの服だった。

「藍も似合ってるな」

「私を誉めても何も出ませんよ。誉めるなら、蒼ちゃんだけにしてください」

何故か睨まれてしまった。ちょっと怖い。

「藍はそこまで洋服に頓着ないもんねー」

そう言って笑う蒼の足元へ、どこからかイナリがやってきた。

「おおイナリ、お前は見送りに来てくれたのか？」

「ポーン！」

俺の方を向いて元気に返事をした後……何故か、大きく藍を迂回してから蒼の足元に収まる。

「あれ？もしかしてイナリは藍が怖いのか？」

「ポ……ポーン！」

首をぶるぶると振って、否定しているように見える。

「別に怖がらせているつもりはないんですけど。イナリ、お手」

蒼が少し横に動くと同時に、藍がイナリの前にしゃがみ込んで、手を差し出す。

「ポ、ポーン！」

イナリはその掌に右の前足を乗せる。心なしか、その前足が震えているように見える。

その後、藍はイナリに宙返りさせたり、二本足で歩かせたりしていた。

どうやら、普段から芸を仕込んでいるらしい。

……すごいけど、イナリの体が小刻みに震えてる気がする。

「なあ藍、そろそろ解放してやってくれないか？」

「そうですね。イナリ、もういいですよ」

「ポーン！」

イナリは藍から解放された後、そそくさと蒼の後ろに隠れてしまっ

た。

……やっぱり怖がつてるよな。

「……あれ？」

その時、いつものように港に出ている出店が目にとまった。

そこでは一人のおっちゃんがアメリカンドッグを売っていた。とりあえず知らない人だったので、たぶん本土の人だろう。変な噂が広がることもないだろうし、安心した。

「……!?」

次の瞬間、そのおっちゃんから、すごい笑顔で親指を立てられた。その目は間違はなく『にちちゃん、やるねえ』と言っていた。

「……羽依里、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ。それより昨日のスーツケースレース、盛り上がったよな」

さっきのサムズアップは見なかったことにして、俺は話題を変える。

「そうですね。いきなりでしたけど、あれだけ盛り上がりとは思いませんでした」

「でも藍、レース中に鉄塔から呼びかけないですよ。恥ずかしかったんだから」

「私は恥ずかしくなかったです」

「あたしが恥ずかしいのよー！」

その後も船が来るのを待ちながら、三人と一匹で喋りながら過ごした。

いつもと変わらないやりとりのはずなんだけど、これから三人で出かけるというだけで、心のどこかに何とも言えない恥ずかしさみたいなものがある。

「あ、船が来ましたよ」

やがて時間になり、船が入港してきた。

「それじゃイナリ、留守番よろしくな」

「ポニー！」

俺達はイナリに見送られながら、観光客たちに混ざって船に乗り込んだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「港では立ちっぱなしでしたし、少し座りましょう」

船に乗ってすぐ、そう藍に提案された。

船にはそれなりの数の乗客が乗っていたが、席には余裕があるみたいだった。

一人で船に乗る時は、いつもデッキで島が遠ざかっていく様子を眺めるのだけど、今回は藍に導かれるまま、座席に座ることにした。

「どうぞ、蒼ちゃん」

「ありがとう、藍」

「どうぞ、羽依里さん」

藍に言われるまま、三人掛けの座席に座る。

「……………って、あれ?」

気がつけば右に蒼、左に藍。

俺は二人に挟まれていた。右も左も逃げ道がないし。この座り位置はかなり恥ずかしい。

「えーっと、二人は行きたい場所とかあるのか?」

とりあえず話をして、恥ずかしさを誤魔化そう。

昨日の夜誘われたばかりで、目的の場所とか全く聞いてなかったし。

「まずはスタパでしょ」

「え、スタパ?」

スタパというのは、最近日本中にできているコーヒーチェーン店だ。確か、港から少し歩いた駅前にあったはずだ。

「羽依里さん、行ったことありますか?」

「えっと、一応」

「なら、安心ねー」

「次にウニクロと、矢印良品です」

「ほう、ウニクロ」

ウニクロというのも、最近日本中にできているアパレルショップだ。カジュアルウエアを中心に若者に人気の店らしい。

でも、こつちもあくまでチェーンストアで、そこまで珍しいものが売っているわけじゃない。

「本土でパートしてるおかーさんが、時々ウニクロで服を買ってるって聞いて、気になってたの」

「そういえば、二人の母親はまた本土でパートしてるのか。大変だな」
「うんうん。おとーさんの仕送りだけだと厳しい月とかあるしねー」

二人の父親は確か、昆虫学者で外国を飛び回っているんだっけ。

「島にスーパー徳田があるうちは、パート先が近くて助かっていたらいいです。でも、潰れてしまったので」

「確か、春先くらいに潰れたんだっけ」

「そうです。おかーさんもとでも残念がっていました」

左から右から話しかけられる状況が続く。

……なんだろう。他の乗客の視線が痛い。特に野郎たちからの。

見たところ観光客のようだし、昨晚島に泊まって朝の便で本土に帰ってるんだろうか。

騒がしいのが気になるのなら謝るから、こつち見ないでほしい。

本土の港に到着するまで、30分もの間、この状況が続いた。天国のような地獄だった。

『まもなく宇都。宇都港に到着いたします。お降りの方はお忘れ物ありませんようー』

アナウンスの後、ようやく本土の港に到着する。俺たちは他の乗客と一緒に、船から降りる。

「うわ」

港の建物から外に出ると、俺は思わず声を上げてしまった。半月ぶ

りに島から出てきたし、人の多さに圧倒されそうだ。

「それじゃ、さっそくスタパに行きましょう」

「そうだな。場所は……」

「駅前ですよ。場所は知ってるんです」

「あれ？ 知ってるのに入ったことないのか？」

「ああいうお店って、慣れてる人が一緒じゃないと入りづらいじゃないですか」

「そ、そうだよな」

「羽依里、頼りにしてるからね」

「お、おう」

まずい……夏休みに入る少し前に、男友達について入っただけ……とは、とても言えない状況になってしまった。

確か、注文してる様子がまるで呪文を唱えてるようだった記憶しかない。

「ああいうお店では、季節限定の商品があるんですよ？」

「え？ ああ。今くらいの時期だと、マンゴーミックスフラペチーノってのやってたな」

「マ、マン……フェ……」

……急に蒼が動揺しだした。どうしたんだらう。

「ほら蒼ちゃん、顔赤くしてないで行きますよ」

そんな蒼の手を取って、藍が歩き出した。俺もその隣に並んで歩き出す。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

本土の港から少し歩くと、駅前に辿り着く。

ここはこの辺りで一番賑やかな場所で、ウニクロや矢印良品の店舗も、この駅前周辺に集まっている。

藍に案内されて進むと、そんな通りの一角に、スタパがあった。

「いらつしやいませー」

俺を先頭に、三人で入店する。店員さんが営業スマイルで迎えてくれる。

店内は落ち着いた内装で統一されていて、コーヒーの良い香りが鼻をつく。

控えめに音楽も流れているし、島ではまず感じることはない雰囲気だ。

「私が席を確保しておきますので、二人で注文してきてください」

「いいけど、藍は何を頼むんだ？」

「私はマンゴーミックスフラペチーノをお願いします」

「わかった」

「あ、それと注文は蒼ちゃんにさせてください」

「え、なんで？」

わざわざ不慣れな蒼に注文させなくても。

「だって、そっちの方が面白そうじゃないですか」

藍はそう言い、にやりと笑って近くの席に座った。

蒼と二人で注文カウンターへ向かう。ちょうど、俺たちの前に学生っぽい女の子二人が注文をしていた。

「ワタシハトールアイスライトアイスエクストラミルクラテカナ！」

「グランデノンファットミルクノンホイップチョコチップバナナクリームフラペチーノニスル！」

……駄目だ。呪文にしか聞こえない。巨大な猫神様でもぬおーと出てきそうだった。

前の二人が注文した品物を受け取り、やがて俺達の番が来た。

「ご注文はお決まりですか？」

カウンターの女性店員が営業スマイルで話しかけてくる。

「え、えつと……この、マン……マン……」

「はいっ？」

……顔が真っ赤だ。頑張れ、蒼。

「マンゴーミックス、フェフェフェ……」

……蒼の耳から煙が出てる。これはやばいかも。

「こ、これを3つください！」

蒼はメニュー表のマンゴーミックスフラペチーノを指差して、大きな声で注文した。

そして、そのまま藍の待つ席に走って行ってしまった。

「……」

「マンゴーミックスフラペチーノ、3つで1350円になります」

「あ、はい」

おいてけぼりを食らった俺がそのまま代金を支払った。ちなみにサイズは適当にしておいた。

そして品物を受け取って、二人の元へ帰ってきた。

「ごめん、羽依里……」

蒼はまたへこんでいた。

「あーうん。気にしなくていいよ」

色々想像力が働いてしまうんだろう。うん。そういう事にしておこう。

蒼が落ち着くのを待つて、三人でマンゴーミックスフラペチーノを飲んだ。

実にトロピカルで美味しかった。

「次はウニクロだっけ」

「そうですね。よろしくお願いします」

スタパでお茶した後は、駅の方へ向かって歩く。

ウニクロなら、俺も場所を知ってる。駅構内のショッピングモールの中にあつたはずだ。

三人で並んで歩いていると、横で藍がぽそりと呟く。

「……なんか面白くないですね。もう少しデートっぽくしますか」
「えっ？」

次の瞬間、藍が俺の右手を取って、自分の腕を絡ませてきた。

「あの、ちよつと藍さん？」

驚きのあまり、思わず敬語になってしまった。

これはもしかして、恋人同士がやる腕組みというやつでは。「罰ゲームですから、これくらい恥ずかしい思いをしてもらわないといけません」

あれ、このデートってビーチバレーの賞品じゃなかったけ？
いつの間にか罰ゲームにすり替わってる？

「ほら、蒼ちゃんも」

「ふえ!? あ、あたしも!?!」

「もちろんです。私だけやってどうするんですか」

「ううう……えいつ!」

覚悟を決めたのか、蒼が俺の左腕に飛びついてきた。

両手に花って言葉があるけど、これはこれでいろいろと問題がありそうさ。

「デートですから、こうやって歩くものでしょう?」

「そ、そう! そうよね!」

蒼の方はかなり恥ずかしそうだけど、藍の方はむしろ楽しんでいるように見える。

うん、男子校の俺にこれはきついてもんじゃない。

右も左も柔らかいけど、頑張れ俺。気をしっかり持て。

すれ違う野郎達が全員羨ましそうな視線を向けてきたのは気のせいだろう。うん。そうに違いない。

結局ウニクロに到着するまで、腕は組まれっぱなしだった。

「へー、今年はこの柄が流行ってるのねー」

「この色なんて、蒼ちゃんに似合うと思いますよ」

ウニクロに到着すると、二人はさっそく夏物のブースで相談しながら服選びを始めた。

こんな風に女の子の服選びが始まると、男はとたんにやることが無くなる。

「ちよつと着てみるわねー」

蒼は何着か選んで、試着室に入っていた。

俺と藍はその試着室の前で待つ。

「なあ、藍は選ばないのか？」

「私ですか？」

「そう。せつかくウニクロに来たんだしさ」

「そうですね……」

藍はさつきとは違うブースへ向かい、何着か服を持ってきた。

色合いとか、さつき蒼が持っていたのと似ている。さすが双子、好みも近いんだろうか。

「それじゃ、私もちよつと行つてきますね」

そしてその服を持って、躊躇いもなく蒼と同じ試着室に入つていった。

え、ちよつと藍さん、何やってるんですか。

「ちよ、ちよつと藍!？」

当然、いきなり試着室に入ってきた藍に、蒼も驚いている。

「蒼ちゃん、これも着てみてください。きつと似合います」

「ちよ、ちよつと脱がさないで——!」

まさか、自分の服じゃなくて、蒼の服を選んでいたのか。

「羽依里さん、ちよつとこれ持っててください」

「お、おう……」

試着室のカーテンが少しだけ空いて、藍から服を渡された。値札はついてるけど、ちよつと温かい。

これってもしかして……。

「……ねえ藍、これでいいのー?」

「良い感じです。次はこっちはどうでしょうか」

「だから脱がさないで——! 自分で脱ぐから——!」

目隠し布を隔てた向こう側で、二人だけのファッションショーが行われているようだった。

「あの……お客様、もう少しお静かにお願いできますか」

「す、すみません」

ちなみに、表にいた俺は定期的に店員さんに笑顔で怒られていた。

……結局、ウニクロでは蒼が服を一着買ったただけだった。着ているのはちらっとしか見えなかったけど、藍が着ているワンピースに似ていたような気もする。

「せっかくだし、俺が出そうか?」

「しろはちゃんに怒られるので、結構です」

そこまで高い物でもなさそうだったので、俺が支払いを申し出たけど、藍にやんわりと断られてしまった。

「あたしだけじゃ悪いから、羽依里や藍も買えば良かったのに」

「私は蒼ちゃんのお下がりが良いです」

「あたしは良くなーい!」

最後まで賑やかだった。

買い物が終わった直後に腕時計を見ると、13時前。気が付けばお昼時だった。

スタパの飲み物でお腹が膨らんでいたせいか、三人ともそこまで空腹を感じていなかったみたいだ。

「そろそろお昼にしないか?」

「そうですね。行きましよう」

そう言うが早いのか、またがっしと俺の腕に掴まる藍。

「ほら、蒼ちゃんも」

「え、また!?!」

「当然です。早く掴まってください」

どうやら、両手に花状態はまだまだ続くらしかった。

昼食は、二人の希望でジャイフルに行くことになった。

ちなみにジャイフルというのは、この地方に展開しているファミレスチェーン店だ。この辺だと、駅から少し離れた建物の二階に店がある。

「ジャイフルへようこそ。こちらのお席にどうぞ」

店員さんに案内され、一番奥のボックス席に座る。俺の向かいに二人が並んで座る形だ。

ピークの時間帯を少し過ぎていることもあって、夏休みと言ってもそこまでお客さんも多くなかった。

「ご注文がお決まりになりましたら、奥のボタンでお呼びください」

おしぼりとお冷をもらった後、三人でメニューを覗き込む。

どの料理も写真付きで載っていて、美味しそうに見える。

「このお店って、鉄板焼きハンバーグが美味しいのよね」

メニューに色々な説明が書いてある。チーズが入っていたり、トマトソースが乗っていたり、わふうソースだったり、色々な組み合わせが楽しめるのがウリみたいだ。

「羽依里、おすすめってないの?」

「え、おすすめ?」

唐突に蒼にそう聞かれた。

「正直、全部おいしそうで決められない……」

普段見慣れてないだろうし、メニューの華やかさに圧倒されてしまふんだらう。

俺もそこまで詳しいわけじゃないんだけど……。

「そうだ、レギュラーハンバーグセットとかいいんじゃないか?」

「じゃあ、それにする」

鉄板と言えば鉄板だろう。鉄板ハンバーグだけに。

「私はこれにします」

藍はチーズインハンバーグセットに決めたまいたいだ。

「羽依里は何にするの?」

「俺はこれかな」

俺はわふうハンバーグセットにすることにした。

「それじゃ、注文するぞ」

ぴんぽーん。とボタンを押し、やってきた店員さんに注文を伝える。

しばらくすると、鉄板に乗った熱々のハンバーグのセットが3つ運

ばれてきた。

「それじゃ、いただきますしよう」

「いただきます」

「いただきます」

俺のはわふーハンバーグなので、箸でいただく。大根おろしを使った特製ソースが美味しかった。

でも、ハンバーグはしろはの作るやつより肉々しい感じだった。肉汁がたっぷりだけど、固めで味に深みがない気がした。

セツトの味噌汁もあまり美味しくなかった。島味噌で作ったしろはの味噌汁を飲み慣れちゃってるのもあるだろうか。

「どうしました？ やっぱりしろはさんのハンバーグの方が美味しいですか？」

「うぐ……」

藍に心の内を思いつきり読まれていた。

「蒼ちゃん、はい。あーん」

ナイフとフォークを手に、レギュラーハンバーグ相手に四苦八苦ししている蒼の口元へ、藍がチーズハンバーグを一口大に切って持って行く。

「あ、美味しい」

蒼も自然にそれを食べていた。

この二人って普段からこういうことやってるんだろなあ。まあ、姉妹だし。

「羨ましそうに見ても、羽依里さんにはあげませんよ？」

「いや、いらないから」

変な勘違いをされたらしい。

その後は二人の方をできるだけ見ないように、食事に集中をした。

「……蒼ちゃん、デザートにパフェ食べませんか？」

三人とも食べ終わったタイミングで、藍はデザートが載ってる卓上POPを見ていた。

「え、さすがに入らないわよ」

「なら、半分こにすればいいじゃないですか」

ぴんぽーん。と藍がボタンを押して店員さんを呼び、有無を言わずフルーツパフェを注文する。

しばらくすると、色とりどりの果物が乗ったパフェが運ばれてきた。

「はい。蒼ちゃん、どうぞ」

「へ？ 藍が頼んだんだから、藍が先に食べればいいのに」

「構わないです。お先にどうぞ」

「そ、それじゃ、少しだけ……」

少しだけと言いながら、結構な量を食べる。女の子には本当に別腹があるんだな。

「あ、羽依里も食べる？」

「え？」

食べると聞かれても、パフェ用のスプーンは一つだけだ。

「はい、羽依里。あーん」

「あーん」

ぱく。

……さっきの二人のやりとりを見ていたからだろうか、ものすごく自然に食べてしまった。

なんでやってしまったんだろう……しろはともほとんどやったことないのに。

「……は？」

蒼の隣で、藍がものすごく驚いていた。

これはやばい。怒られる流れだ。まさか今朝の夢が現実に……！

「……蒼ちゃん！ 私にもしてください！」

え、そっち!?

「べ、別にいいけど……」

蒼は圧倒されながら、パフェをスプーンですくって藍の口元に運ぶ。

「はい。藍も、あーん」

「あーん」

うわあ、ものすごい幸せそうだ。
なんにしても、藍の機嫌が悪くならなくて良かった。

パフェを食べ終えてからも、三人で談笑していた。

二人が同じように笑うと、二つのトンボ玉も同じように揺れる。

「そういえば、そのトンボ玉綺麗だよな」

二人がしている髪留めに目が留まった。

青色のガラスで作られたトンボ玉には、蝶の柄が入っている。改め
て見ると、どっちも手作りみたいだ。

「でしょー。子供の頃、藍に作ってもらったのよ」

「あ、やっぱり手作りなのか」

「私のは蒼ちゃんに作ってもらいました。一生の宝物です」

藍のつけてる方は、ちよつと形がいびつだった。

蒼は手先は不器用だって言ってたもんな……。

「羽依里さん、蒼ちゃんが作ってくれたトンボ玉に、何か言いたそう
ですね？」

「いや、そんなことはないぞ」

「ならいいです。ところで、最近しろはちゃんとの関係はどうなん
ですか？」

「え？」

「そうそれよ！ 夏休みに入って少しは進展したの？」

ずいつ、と二人が顔を近づけてきた。ち、近いんだけど。

「え、進展も何も……だってほら、夏海ちゃんもいるしさ」

「あ、親戚の子をだしに、はぐらかすつもりですか？」

「それこそ夏海ちゃんが寝た後、こっそりしろはの家に行つて愛を確
かめ合ってるんじゃない……！」

蒼、それお前のピンク思考だから！ というか、声大きい……一
番奥の席で助かった。

「ありえます。羽依里さんですし」

二人の中での俺のイメージって、どれだけ色情魔なんだろう。俺に

そんな度胸無いから！

「そ、それよりそろそろ矢印良品に行かないと。船の時間が……」

俺はそう言いながら立ち上がる。できるなら、この手の話は早めに打ち切りたい。

「矢印良品はまたの機会がいいです。むしろ、船の時間までじっくり羽依里さんの色恋話を聞きましょう」

「そうそう。座って、羽依里」

「う、うう……本当に何もしてないのに……」

……これは無理だ。逃げられそうにない。俺は観念して、再び座席に腰を下ろす。

「まず、毎晩しろはさんの食堂に入り浸っているようですが……」

その後、俺は船の時間直前まで二人に尋問されていたのだった……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「今日は楽しかったわ。ありがとうね、羽依里」

「色々と聞かせてもらいました。しろはちゃんに宜しく伝えてください」

「ポーン！」

島の港に帰り着くと、二人はそれぞれ笑顔と意味深な発言を残して、迎えに来たイナリと共に去っていった。

「ふう……」

無意識に気を張っていたのか、二人と別れたと同時にどっと疲れが出た。

「しろはと一緒にいる時にはこんな風に疲れることないんだけどなあ」

相手が二人だから、というのは理由じゃないだろう。やっぱり、しろはが特別なんだろうな。

でも、あの二人が楽しんでくれたなら、それでいいかな。

加藤家に帰宅して、まずはラフな格好に着替える。

家には誰の姿もなかった。鏡子さんも夏海ちゃんも、どこかに出かけているみたいだった。

夕飯まではまだ少し時間があるし、とりあえずテレビ出も見て時間をつぶすことにした。

『ようこそジプシー。我が神秘の部屋に』

居間に横になって、テレビをつける。

ちょうど占い特集をやっていた。いかにもな雰囲気的女性が黒いマントを羽織って男性スタッフを占っていた。

魔よけの品して、神秘の力を秘めるというクリップを渡されていた。挟む力しか秘めてないような気もするけど。

その他に、恐ろしいほど当たると噂のまじない喫茶『ゆきねえ』という店が紹介されていた。

お淑やかそうなおねーさんがインタビューを受けていた。

少しだけ気になったけど、店の場所が遠すぎて、とでも行けそうになかった。

「あれ……」

今日は駅前を結構歩いたし、急に眠くなってきた……。

「……ぐう」

横になったのがいけなかった。一瞬気を抜いた隙に、俺は眠りに落ちてしまった。

「オモイオモワレフリフラレ……」

「……はっ」

しまった。うたた寝をしてしまったらしい。

なんだろう。夢にしろはが出てきていた。詳細は覚えてないけど。

居間も薄暗くなっていて、窓の外を見ると、日が落ちかけていた。

「……そろそろ晩ごはんを食べに行こうかな」

夕方のニュース番組になっていたテレビを消して、立ち上がる。

鏡子さんも夏海ちゃんも戻ってないみたいだし、どこに行っちゃったんだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

日が完全に落ちた頃、しろは食堂に到着した。

「しろはー」

「いらっしやい」

扉を開けると、カウンターに夏海ちゃんが座っていた。

「あ、夏海ちゃん、食堂に来てたんだね」

「……」

あれ？　なんか、夏海ちゃんの視線が冷たい……？

とりあえず、夏海ちゃんの隣に座る。夏海ちゃんは無言でコロツケ定食を食べていた。

しろはも、いつもなら一番におしぼりをくれるのに、今日は俺の方に背を向けたまま、何やらカウンターの奥で作業をしている。

「しろはー、今日の日替わりって何？」

「……今日は、いの天定食」

なんだろう、心なしかいつもより声が低いような。

「え、いの天？」

「イノシシの天ぷら」

そんなのあるのか。おいしそうだ。

「じゃあそれで」

「……残念だけど、羽依里の晩ごはんはこれ」

注文もしてないのに、俺の前には出来立てのかつ丼が置かれた。

「え、かつ丼?」

いや、これも美味しそうだけど……何故にかつ丼?

「あちらのお客様からです」

「え?」

しろはが示す席には、良一が座っていた。いつの間に来てたんだろう。こつちを向いて、笑顔で親指を立てている。

「取り調べごっこだ」

そして自分の分の親子丼を持って、俺の隣に移動してきた。

「よう、モテ男君」

そして席に座るなり、そう言いながら肩に手を置いてきた。

「モテ男言うな」

「なんだ、違うのか? 今日蒼達とスタパやウニクロ巡って、ジャイフルで飯食ってきたんだろ」

「……ちよつと待て、なんでそこまで知ってるんだ?」

「木戸のおばーちゃんが見てたって」

しろは無表情のまま、そう呟く。

「おばーちゃん!」

俺は思わず叫んでいた。

「おばーちゃん、ちようど本土の病院に行く日だったんだって」

「ほ、ほお……」

しろはが続けて説明してくれる。

「そしたら、羽依里たち三人が船の中で『いちやらぶ』してたんだって」
「いちやらぶ……」

嘘だろ……おばーちゃん、あの船に乗ってたのか? 万一にも知り合に見られないように、細心の注意を払ってたはずなのに……。

「おばーちゃんはその三人が気になったから、病院そつちのけで、ずーっと後をつけてたんだって」

「おばーちゃん! 病院行ってよ!」

俺は思わず頭を抱えていた。

「木戸のおばーちゃんは15時過ぎの船で帰ってきてたからな、もう

島中に知れ渡ってるぜ」

おばーちゃん、帰りも俺たちと同じ船に乗っていたのか？ 信じられない……………」

「それでね、羽依里に色々聞きたいことがあるんだけど」

しろはさん、その笑顔ものすごい怖いのでやめてください。

「スタパで蒼に恥ずかしい思いさせたって本当？」

「語弊があるけど本当です」

「ウニクロで蒼の着替え覗いたって本当？」

「いや、それは冤罪です」

「蒼たちと腕組んで歩いてたつてのは本当？」

「ほ、本当です」

「蒼にあーんしてもらったつて本当？」

「ほ、本当です……………」

「帰りの船で藍と……………」

その後もかつ井を前に、しろはに質問攻めにされる。まさに取り調べだった。

良一はニヤニヤと笑っているし、夏海ちゃんは我関せずと言った感じで食事が続けているし。

誰にも助けってもらえそうになかった。

「……………さすがにサービスしすぎ。今後は慎んで」

「ごめんなさい」

取り調べの後、俺は誠心誠意頭を下げた。

俺もそんな気は無かったはずんだけど……………その場の流れって怖い。

「……………でも、お泊りせずに帰ってきたから、ギリギリセーフにしてあげる」

しろはの表情が緩んだのを見て、俺もようやく解放された気分になる。

「……………ちそうさまでしたー」

ちょうど取り調べが終わった時、夏海ちゃんもコロツケ定食を食べ終わっていた。

「そういえば夏海ちゃん、今日は一日何してたの?」

ようやく解放され、半分冷めたかつ丼を食べながら夏海ちゃんに話しかける。

「今日は良一さんにマリッジジェットに乗せてもらって、島めぐりをしました!」

あ、そういえば良一が近いうちに乗せてあげると話してたっけ。

「えへへ、海から紬さんに会いに行った時は、びっくりしましたよ」
そりゃ、驚くだろうなあ。

「見慣れた港も海から見ると新鮮でしたし、秘密の入江みたいな場所もあって、楽しかったです!」

「そっか。良一、ありがとうな」

「気にしないでいいぜ。俺も妹いるしな」

「そういえばそうだったな。一度会ったことあるような」

「昔は夏海ちゃんみたいに無邪気で良い妹だったんだけどなー、週一で本土の塾に通いだしたら、急にマセちまってさ」

なんともやりきれない、兄の顔になっていた。

「お昼は私と一緒に食べたんだよね」

「はい!」

「え、そうだったのか」

「うん。お昼前に港で会ったら、お昼は家でカップうどんだったって言うていたから、食堂に来てもらったの」

俺がいない間も、島の皆で夏海ちゃんを楽しませてくれていたみたいだ。本当にありがたい。

「お昼からは、しろはさんにずっと料理を習っていたんです。主にチャーハンですけど」

「夏海ちゃんは筋は良いんだけど、粗削りだから。もっと細かい技術を身につけないと」

なんだろう。しろはもついに夏海ちゃんを弟子として認めてくれたんだろうか。夏海ちゃんのチャーハンに対する情熱はものすごい

し。

「後、やっぱりフライパンより中華鍋を使った方が良いと思うよ？」

「ごめんなさい。加藤家にはフライパンしかなくて」

「それだと高温が期待できないから。フライパンを使うなら油を変えた方が良いよ。例えば……夏海ちゃん、ちよつと入って来て」

夏海ちゃんがカウンターの奥に呼ばれていく。俺ですら入れてもらったことないのに。

カウンター越しだから良く見えないけど、何やら料理のレクチャーを受けているようだった。

二人が並んでるのを見ると、何だろう。姉妹……というよりは、親子のように見えた。

「どうした羽依里、嫉妬か？」

「き、気のせいだろ」

しろはにカウンター内に入れてもらってる夏海ちゃんが羨ましいと思ったのは内緒だ。

なんにしても、先日の愛人2号の噂みたく、木戸のおばーちゃんの流した噂も明日の朝になったら消えていることを願うしかなかった。

第十五話・完

第十六話 8月9日

「タカハラさん、朝ですよ！」

「パイリ君、朝よ」

「起きてくださいー！」

……朝。

今日も夏海ちゃんに起こされて……。

あれ？ なんか声が多い気がする。

「……はっ!?!」

目を開けてみると、目の前にネコとウシがいた。

「はい。ネコさんです。にゃー」

「ウシよ。モー」

「……」

俺はまだ夢の中にいるんだろうか。

ほっぺたをつねってみるけど、普通に痛い。夢じゃない。

その二匹の間から、ひよこつと猫娘が飛び出してきた。

「わ、私もネコです。にゃー」

よく見ると、ネコミミをつけた夏海ちゃんだった。耳まで赤くして
るし、めちやくちや恥ずかしそうだ。

「え、えーつと」

……イマイチ状況が飲み込めない。

いつもの見慣れた部屋の中に、ネコとウシの着ぐるみを着た紬と静
久、そしてネコミミをつけた夏海ちゃん。

「夏海ちゃん、これは一体……?」

「鷹原さん、刺激的な朝を迎えたいって言ってたじゃないですか」

……そういえば、そんなこと言った気がする。

「それで、お二人に協力してもらったんです！」

「はい！ 協力しました！」

「協力したのよ！」

三人で並んで、がっしりと肩を抱き合っていた。すごい団結力だ。「ところで、紬と静久がどうしてここに？」

「昨日も紬に灯台に泊めてもらってね。ラジオ体操の前に、住宅地を散歩していたの」

「そしたらナツミさんに声をかけられました！」

「せっかくだから、手助けしたの」

「はい！ ナツミさんの頼みとあれば、断れません！」

もしかしなくても、二人ともその着ぐるみ姿で住宅地を散歩していたのだろうか。それはそれですごい。

「鷹原さん、驚きましたか？」

「うん、驚いた。まさか三人がかりだとは思わなかったから」

「その……一人でやるのは、あまりに恥ずかしかったの」

「あーうん。わかるよ……」

確かそのネコミミ、肝試しの時に鳴から渡されたって言ってたっけ。まだ持ってたんだ。

「それじゃ、早速顔を洗ってきてください！ それから着替えて、みんなと一緒にラジオ体操に行きましょう！」

「わ、わかったから紬、押さないで！」

ネコに背中を押され、強制的に洗面所へ向かわされる。

「さあ夏海ちゃん、私達は表で待っていますよ」

「待ってください！ 表に出る前に、せめてネコミミは外させてくださいー！」

「可愛いから駄目よ♪」

俺が洗面所へ連行される一方で、夏海ちゃんはネコミミをつけたまま、静久に表へ連れ出されているようだった。

「頑張れ、夏海ちゃん……！」

その後、俺も身支度を済ませて表に出る。

「来たわね。行くわよ、パイリ君！」

「行きましょう、ナツミさん！」

朝から元気いっぱい二人と合流し、そのまま四人でラジオ体操へ向かう。

ちなみに、夏海ちゃんは無事にネコミミを外していた。きつと決死のお願いがおっぱい神に届いたに違いない。

「今日も暑くなりそうだな」

神社へ向かう道すがら、適当に話をする。

「そうね。実は隠していたけど、この服は蒸れてしょうがないのよ」

「いや、隠さなくても普通にわかるから」

暑ければ、普通の服を着ればいいのに……とは、なんとなく言えなかった。

「ようにーちゃん、昨日は空門さんとの双子とイチャラブだったんだって？」

その時、近所のおっちゃんから声をかけられた。誰だったっけあの人。

「あら、加藤さんとの。昨日は頑張ったんだって？」

今度は庭先の花に水をあげていたおばさんに声をかけられた。顔は見たことあるけど、名前は出てこない。

……おかしいな。佃煮の時は一晩経ったら噂が消えてくれたんだけど。

「そういえばパイリ君、蒼ちゃんたちとデートしたのよね」

「は、はい……」

思わぬタイミングでばれてしまった。つい敬語になってしまう。

「おおー、ついにケツコーしたんですね！」

決行って、紬。

「確かビーチバレーの報酬よね。パイリ君も大変だったわね」

「そう言って慰めてくれるのは静久だけだよ……」

でもビーチバレーの時、優勝賞品は俺とのデートだと一番最初に言ったのも静久だった気がする。

「……昨日はお楽しみだったみたいですよ？」

夏海ちゃん、それは語弊があるよ……。

「むぎゆ！ タカハラさん、フタマタですか!？」

「ち、違うよ。今回のデートはしろは公認だったし、一種の罰ゲームみたいなもので……」

「まあ、罰ゲームだなんて。あの二人との関係は遊びだっていうの?」

「……タカハラさん、サイテーです」

静久は冗談半分なんだろうけど、紬は本気で信じてるっぽい。大丈夫かな。

……その後も、魚屋のおっちゃんに牛乳配達のおばちゃん等、行く先々で島民の皆に茶化された。もう許してほしい。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、おはよう」

「おはようございます!」

やっとの思いで神社の境内に到着した。

「来たわ、あの人よ」

「来ましたわね」

……子供たちの視線が、俺に集中したのがわかった。明らかに着ぐるみを着た二人の方が目立っているはずなのに。これは嫌な予感しかしない。

「なあにーちゃん、ししよーとデートしたのか?」

「あいさまとデートしたの?」

よく駄菓子屋で見かける子たちに、そう話しかけられた。話の流れから察するに、師匠というのは蒼のことだろう。

「こ、この件に関しては第三者機関に任せているので、コメントは差し控えさせていただきます!」

俺はとっさに訳の分からない事を言って、子供達から逃げた。

「あ、逃げましたわ!」

「までー!」

「岡山の仙人、まてー！」

「待たなーい！」

数人の子供達が追いかけてきた。俺は結構本気で境内を走って逃げ回った。

「ぜえ、はあ。朝から疲れた……」

子供たちが諦めるまで逃げ回った後、良一たちと合流する。

「よう、モテ男君」

「だから良一、その呼び方はやめろ」

「違うのか？」

「ち、違わない、かも、しれない……」

「鷹原、ビーチバレーの報酬でデートするという話は聞いていたが、色々やりすぎたみたいだな」

のみきも呆れ顔だ。どこまで噂が大きくなったんだろう。無駄に疲れてしまったし、聞く気力もなかった。

「蒼達と2対1で試合をしたんだろう。それなら勝てなくて当然だ」

こういう時は、天善の卓球例えでも救われた気分になる。

「……うかつでした。まさか木戸のおばーちゃんに見られていたなんて」

当事者の一人である藍が俺の隣にやって来て、そう呟く。さすがに少し元気がない。俺と同じように質問攻めにあっただろう。

「ってあれ？ 蒼は？」

いつもいるはずの蒼がラジオ体操に来ていなかった。

「蒼ちゃんは、恥ずかしさのあまり家から出られないそうです」

「まじか」

「大マジです。私も朝から色々な人に噂の真意を問われました。適当にはぐらかしておきましたけど」

藍はその辺うまくやり過ぎしそうだけど、蒼は正直に答えちゃいそうだしな。嘘つくの、すごく下手だし。

「お前らー！ 今日ラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。

ラジオ体操が始まれば、噂のことは忘れられそうだし。助かった。
「ところで、昨日空門さんちの二人とデートした鷹原君って、君？」
「……」

ラジオ体操大好きさんにまでそう聞かれてしまった。これは本格的にやばそうだ。

蒼じゃないけど、俺も早く帰って家に閉じこもりたい気分になった。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああー！」

「うるあああー！」

「第三の体操！ 一秒間！ 真剣な目！」

「星屑ロンリネンス……」

この目の運動つてのも、どうなんだろうか。

相変わらず、運動になってる気がしない。

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操が終わり、スタンプとログボを受け取る。

今日のログボは瓶に入った牛乳だった。

「お、さっそく飲もうぜ」

良一が腰に手を当てて、ごくごく美味しくそうに牛乳を飲んでいった。

周りを見ると、ほとんどの人がその場で牛乳を飲んでいる。俺たちもそれに倣うことにした。

「夏海ちゃん、俺たちも飲もう」

「はいー」

運動をした後の牛乳は最高だ。二人して喉を鳴らしながら、牛乳を飲む。程よく冷えていて、美味しい。

「ぷはー」

半分ほど飲んだところで、一息つく。夏海ちゃんとハモってしまった。

「むぎゆ、タカハラさん、おひげが生えてますよ」

「ヒゲ？」

「それです！」

紬が肉球で俺の鼻の下辺りを指し示す。

「ああ、乳製のヒゲなんだ」

「乳製なの!?! さすがパイリ君だわ！」

静久が過剰な反応を示した。うん。あえてツツコまないようにしておこう。

鼻の下を適当にぬぐって、残りの牛乳を飲む。

「うーむ、牛乳を飲んでみると、パンが欲しくなるよな。やっぱり朝はパンだよな」

「羽依里さんは朝はパン派なんですね」

独り言を言っていると、藍にそう声をかけられた。

「藍もパン派なのか？」

「はい」

「でも、この島だとパンを手に入れるのも大変だろ」

港の商店に総菜パンが売ってるけど、あれもいつも置いてるわけじゃないし。

「うちは大丈夫ですよ。作りますから」

「え、作る？ パンを？」

「はい」

「嘘だろ？」

「本当ですよ。なんなら、明日家に食べに来て下さい。きっと蒼ちやんも喜びますから」

「良いの？」

「はい。夏海ちゃんも一緒にどうぞ」

「え？」

「うん。夏海ちゃんも一緒に行こう」

「食べたいもののリクエストはありますか？」

「リクエスト？」

「はい。試しに言ってみてください」

「じゃあ、パンはパンでも、クロワッサン」

「いいですよ」

「後、フレッシユなオレンジ」

「いいですよ」

「後、カプチーノ」

「いいですよ」

「そしてポターージュ」

「いいですよ」

……かなりめちやくちや言ったんだけど、全部通ってしまった。

「本当に良いのか？」

「はい。用意できますよ。食べたいんですよね？」

「た、食べたい……」

正直に言ってしまった。全部、この島では無縁のものばかりのほず
だけど。

「夏海ちゃんもそのメニューで良いですか？」

「え？ はい……」

夏海ちゃん、何故か腑に落ちない顔をしてるんだけど。どうしたん
だろう。

「それではタカハラさん、ナツミさん、またです！」

「あ、はい！ 紬さんに静久さん、ありがとうございます！」

その時、紬と静久が俺達に一声かけて、灯台に帰っていった。

「夏海ちゃん、俺達も帰ろうか」

ログボの牛乳のおかげで、例のデートの話はここにいる皆の頭から
消えたみたいだ。また思い出されないうちに、早く帰ろう。

「……鷹原さん、もう私のチャーハンに飽きてしまったんですか？」

「え？」

ラジオ体操からの帰り道。唐突に夏海ちゃんからそう切り出され
た。心なしか涙目になつてる気がする。

「どういふこと？」

「だって鷹原さん、明日の朝は藍さん達の所に朝ごはんを食べに……」
あー……そういうことか。

俺が突然そんなこと言いだしたから、チャーハンに飽きたと思っ
ちやっただのか。

「違うよ。夏海ちゃんには毎日朝ごはんを作ってもらってるから、た
まには楽をしてもらおうと思っただけだよ」

……正直言うと、口に出した言葉半分、たまにはパンが食べたい気
持ちが半分だった。

「……そうだったんですね。ごめんなさい。一人で変な勘違いをして
ました」

「せっかくだし、明日は二人の厚意に甘えさせてもらおうよ」

「……はい！」

ほんの少しだけ後ろめたさはあったけど、機嫌も直ってくれたみた
いし。一安心だよな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あー……！」

加藤家に帰宅し、居間に上がったところで夏海ちゃんが大きな声を
上げる。

「夏海ちゃん、どうしたの？」

「ログボ、飲んじやいました！」

俺と夏海ちゃんの手には空になった牛乳瓶が握られている。神社
で飲んでしまったし、当然だ。

「毎日ログボでチャーハン！ の予定だったのに……」

夏海ちゃんがある場に崩れ落ちる。今更どうしようもない。

「え、じゃあ今日のログボだと……もしかして牛乳チャーハンの予定
だった？」

一緒に台所に向かいながら、恐る恐る聞いてみる。

「そうですけど……?」

……さすがに無理がある。飲んでおいてよかった。

「あ、もしかして、牛乳でチャーハンなんてできっこないって思ってますか?」

「うん。思ってる」

「鷹原さん、先入観に捕らわれてはいけませんよ!」

細みたくないことを言わないでほしい。

「昨日、しろはさんにチャーハンの極意その一を伝授してもらったので、水分の多い食材でも、きつと美味しいチャーハンにしてみせます!」

牛乳は水分が多い云々の前に、水分そのものなんだけど。

「外国にはお米と牛乳を使ったデザートとか、お粥みたいなのがあるって話ですし」

「スペインやトルコの料理だね……」

「目標はしろはさんが作ってくれたホタテのリゾットなんですけど」

「あれは美味しかったけど、もはやチャーハンじゃないと思う」

「牛乳リゾット風チャーハンって、行けそうじゃないですか?」

夏海ちゃんは熱弁をふるっていたけど、現実問題として、朝ごはんどうしよう。

「それで朝ごはんなんだけど、どうしようか」

「確か冷蔵庫に、海苔の佃煮が残ってましたよね。佃煮チャーハンにしますか?」

「そうだね。それにしようか」

「今度は卵も入れてみて、アレンジしてみます」

夏海ちゃんがエプロンをつけて、嬉々として冷蔵庫を開ける。

「そういえば、鷹原さんにはこれがありました」

そう言っただけで冷蔵庫から取り出されたのは、ラップがかけられたチャーハン。

「あ、それって昨日の納豆チャーハン?」

「です」

すっかり忘れていた。昨日は空門姉妹とのデートだったから、朝か

ら納豆つてわけにもいかなかったんだっけ。

「俺の分はそれでいいよ。せっかく夏海ちゃんが作ってくれたんだし、残したらもったいないしね」

「わかりました！ それじゃ、温めなおしますから、居間で待っていてください！」

「うん、お願いするね」

「はい、どうぞ！」

しばらくすると、温めなおされた納豆チャーハンが俺の前に置かれた。

なんだか、あの独特な香りが増しているような。

「これ、レンジで温めたんじゃないよね？」

「はい！フライパンで火を通しました！」

スプーンですくってみると、凄い粘りだった。

フライパンで適温で温められたせいで、納豆菌が息を吹き返したみたいになってる。

「うん。美味しい」

恐る恐る口に運んでみると、糸引く……いや、後引くうまさだった。熟成されていた。

「良かったです」

ちなみに夏海ちゃんの佃煮チャーハンは、この間の佃煮チャーハンよりパラパラになっているみたいだった。

すっかり水分も飛んでるし、香ばしさも増してるみたいだった。しろはの教えは、しっかりと生きているみたいだ。

朝食を終えると、いつもの宿題タイムがやってきた。昨日やってないから、今日は頑張らないと。

普段通りに夏海ちゃんと向かい合わせに座って、集中して勉強すること30分。

「わ、忘れてました!」

また突然、夏海ちゃんが大きな声を上げた。

「え、どうしたの?」

「あれですよ、あれ!」

夏海ちゃんはパタパタと部屋に走っていった。

しばらくすると、リュックを持って戻ってきて、がさがさと中身を漁っている。

「これです! 読書感想文!」

その中から数枚の原稿用紙を引っ張り出していた。

「読書感想文?」

あー、小学校の夏休みって、そういう宿題あったなあ。

「はい……こういうの、面倒くさくないですか?」

一気に元気がなくなつた。気持ちはわからないでもないけど。

「読む本が指定されてたりするの?」

「いえ、そうじゃないんですけど……本とか、何も持ってきてないんですよ」

「あー、それは問題だね」

旅行先に宿題持って来るのを忘れるパターンのそれだ。絶望的だった。

「鷹原さん、確かたくさん本を持って来てましたよね。見せてもらつていいですか?」

「え。俺の?」

「……お願いします」

拜まれてしまった。ここまでされてしまったら、なんとかしてあげたい。

なんとかしてあげたい、けど……。

「夏海ちゃん、前にも一度見せたけど、あまり期待しないでね」

俺の分の宿題を片付けた後、夏海ちゃんを自室に招き入れる。

その後、鞆から持ってきている全ての本を引っ張り出す。

『恐怖のインカ文明』、『ライオン島の惨劇』、『優しい料理入門』、『釣

りビギナー』『卓球王国』……」

夏海ちゃんが畳の上に座り込んで、タイトルを読み上げながら本とにらめっこしていた。

「鷹原さん、この手の本って面白いんですか？」

夏海ちゃんの手には、オカルト本二冊が握られている。俺の趣味全開の本だった。

「俺は面白いけど、夏海ちゃんにはその、かなり早いかな」

結構グロテスクな表現やイメージ写真もあるし。なによりこれで感想文描かれても困る。

「そうですね……こっちはどうなんですか？」

夏海ちゃんは次に料理と釣りの本を手にして、ページをパラパラとめくっている。

「料理の入門書なんて、夏海ちゃんには必要ないだろうしね」

「そうですね……」

反対の手に持っている釣りの本も、女の子が読むものではない気がする。

「こっちは卓球の情報誌ですか？」

「うん。初心者指南のコーナーがあるんだ。天善との差を少しでも埋めたくて」

料理と釣りの本を置いて、今度は卓球王国を手にする。

この手の雑誌の感想文とか、それこそ天善に書いてもらった方が立派なものが書けそうだ。全く意味はないけど。

「むー……」

夏海ちゃんは難しい顔をしていた。俺の持ってる本じゃ、どうやら敵しそうだ。

「……後は何かなかったかな」

俺はもう一度入念に鞆の中を調べてみたけど、電車の時刻表しか出てこなかった。

「時刻表の感想文とか、逆に面白そうですね」

面白そうだけど、提出しても評価されるかは教師次第な気がする。

「何かないかなあ……」

「……あれ、二人とも何してるの？」

俺達が考え込んでいると、部屋の前の廊下を鏡子さんが通りかかる。

「そうだ。鏡子さん、本持ってないですか？」

「本？」

「読書感想文を書かないといけないんです」

夏海ちゃんが理由を説明する。

「ダザイとか、ナツメとか、夏海ちゃんでも読めそうな本、持ってないですか？」

「本ねえ……島に関する古文書とかなら、私の部屋にたくさんあるけど」

「え、古文書？」

古文書を読んで、どんな感想文が書けるだろうか。

『この島に、イナリといふものありけり……』とかだろうか。

「でも、さすがに夏海ちゃんには読めないんじゃないかな」

「そりやそうですよね」

感想文以前の問題だった。

「そうだ、駄菓子屋さんに行ってみたら？」

「え、駄菓子屋ですか？」

「通販もしてるし、もしかしたら何かあるかもしれないよ」

「そうですね。夏海ちゃん、行ってみようか」

「はい！」

俺達は藁にもすがる気持ちで、駄菓子屋へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださいなー」

「いらつしやーい」

店の奥から、蒼が出てきた。どうやら復活したみたいだ。

「げ。羽依里……」

開口一番『げ』はやめてほしい。色々と傷つくから。

「こほん。えつと……昨日はありがとね」

「いや、俺こそ……それより、今朝は大丈夫だったか……？」

藍によると、恥ずかしすぎて家で悶えていたと聞いたけど。

「あーうん。イナリも一緒だったから、その……色々と頑張れたわ
「ポン！」

声がした方を見ると、ベンチの下にイナリが居た。

「バイト休むわけには行かなかったし、できるだけ人目を避けながら
駄菓子屋まで来たの」

「そ、そうなのか……大変だったな」

「……うん。今日だけは、あまりお客さんが来ないことを願うわ」

お互いに、今日一日は耐え忍ぶしかなさそうだった。自業自得だ
けど。

「それで二人とも、今日はどうしたの？ かき氷？」

「本を探してるんだ」

「……なんで駄菓子屋に本が売ってると思ったわけ？」

「やっぱ置いてないのか」

「……駄菓子屋だしねー」

もつともな話だ。

「日記帳置いてるのに、本は置いてないのか？」

「うーん、無いとは思うけど……ちよつと奥の方探してみるわねー」

蒼はそう言いながら、店の奥へ入っていった。

「くーださいな」

その時、良一としろはが駄菓子屋にやってきた。

「いらつしやい」

俺は反射的に来客対応をする。

「あれ、羽依里？」

「今日はモテ男君が店番か？」

「そのモテ男君って言うの、本当にやめてくれ」

その単語が噂の広がりをもたらし、助長している感じもするし。

「そこまで言うなら、やめてやってもいい」

「本当か？」

「……ただし、条件がある」

良一の視線が、アイスクリームケースを捉えている。

「……わかった。パビコで良いか？」

「ヨーグルトフロズン味な」

「まかせておけ」

俺はパビコをアイスケースから取り出し、代金をザルに入れる。

「ほら」

「よし、契約成立だな」

良一は俺からパビコを受け取り、満足げだ。

「夏海ちゃん、半分やるよ」

「あ、ありがとうございます」

「羽依里、私もスイカバーももらえる？」

「ほい、100万円な」

「うん」

しろはから100円を受け取り、ザルに入れる。その後、アイスケースからスイカバーを手渡す。

気がつけば、自然に駄菓子屋の店番をしていた。やったことなんてないはずなのにな……。

なんだろう。俺ってもしかして客商売に向いてるとか。

「……やっぱり、ないわねー」

その時、ため息交じりに蒼が戻ってきた。

「あれ？ お客さんが増えてる？」

「蒼、パビコとスイカバーの代金、ザルに入れといたから」

「え？ あ、ありがとね」

「蒼さん、本の通販とかやってないですか？」

「通販ねえ……ちようど、本のカタログはないのよー」

夏海ちゃんからのお願いに、蒼はカウンターの後ろでござござそやつ

てくれている。どうやらあの辺にまとめてあるみたいだ。

「……さつきから何の話をしてるの？」

ベンチに近づいてスイカバーを食べながら、しろはが聞いてくる。「読書感想文を書いたための本を探してるんです」

もらったパピコを食べながら、夏海ちゃんがそう返す。

「そうだ。しろはや良一は本を持ってないか？」

「……羽依里、俺が本を読むタイプに見えるか？」

「悪い、見えない」

良一には、聞くだけ野暮だったようだ。

「しろはとか、本を持ってないか？ 夏海ちゃんが読むような本で良いんだけど」

「ごめん。私、漫画くらいしか持ってなくて」

……そういえばそうだった。以前入らせてもらったしろはの部屋の本棚には、一昔前の漫画の単行本がギッシリだった気がする。

「最近は食堂が忙しくてあまり買えてないんだけど、少女漫画なら魔法の第三惑精クリーミー☆かがりんとかオススメだよ」

「俺は、れいだんで有名な祐一☆白書かな」

「そうそう。れいだーん」

「だな。れいだーん」

二人して指鉄砲を作って、何かを発射するようなポーズをとる。

正直、蒼と良一が引いていた。

「すごくありがたいですし、気になるんですけど、その……漫画では読書感想文は書けないので……」

夏海ちゃんが凄く申し訳なさそうに言ってる。そりゃ書けないよな。

「……そういえば、港に小さいけど本屋さんがあったはずだけど」

「え、そうなのか？」

「うん。昔はよく、そこで漫画を買っていたの。夏海ちゃん、行ってみる？」

「はい、行ってみたいです！」

「それじゃしろは、案内してくれるか？」

「うん。まかせて」

しろははそう言うや否や、ぱくぱくと残っていたスイカバーを食べ終わってしまった。さすがスイカバー早食い競争のチャンピオンだ。

「良一さん、パビゴごちそうさまでした！」

「ああ、良い本が見つかるといいな」

「蒼も手間かけたな」

「気にしないで。いい本が見つかるといいわね」

俺たちはそれぞれお礼を言うと、三人並んで港へ向けて歩き出した。

「あの三人、仲良いわよねー」

「まるでずっと一緒にいる家族みたいだな」

「それは言い過ぎじゃ……あれ？ ないかも……？」

去り際、背後で二人が何やら話していたけど、良く聞き取れなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……だよ」

しろはは案内されて辿り着いた本屋は、港の中心から少し離れた場所、例のしなびたホテルの裏手の方にひっそりと佇んでいた。

「こんな所に本屋があったのか……」

もう島の地理は知り尽くしていたと思っただけに、この本屋の存在は驚きだった。

「さっそく入ってみよう」

かなり年季の入った引き戸を開けて、三人で店内に入る。古い本独特の匂いが鼻をつく。

「いらっしやー」

すると、初老の男性が声をかけてくれた。この人が店主だろう。

「すみません。この子が本を探してるんですけど」

「ふむ。どんな本をお探しかな」

「夏休みの宿題で、読書感想文を書かないといけないんです。おススメの本とかありませんか？」

「どれ、ちよつと見てみようか」

店主が眼鏡をかけながら立ち上がり、本棚の方を見てくれる。

「うちは古本屋だし、ジャンルも作者も、全部ごちや混ぜに並んでるからね」

「あ、それなら俺達も探します」

「そうかい？ 悪いね」

「いえ！」

というわけで、俺たち三人も加わって本を探す。何か良い本が見つかるといいんだけど。

「お、こういうのってどうだろうか」

「羽依里、何かいいのがあった？」

「これなんだけど」

表紙には『花菱デパート今昔』と書かれていた。

ちよつど近くに来たしろはと一緒に、本のページを開いてみる。とあるデパートの完成から苦難を経て、営業が軌道に乗るまでの実話みたいだった。

「へえ、お客さんに来てもらうため、屋上にプラネタリウムを作ったんだって」

「なかなか思いつかないよな」

でも、内容はどつちかかっていうとビジネスマン向けの経営指南書類だ。夏海ちゃん向けじゃなかった。

「もつとこう、学問みたいなのが良いのかな」

しろはは少し上の段に置かれていた、厚めの本を手取る。

黒を基調とした重厚感のある表紙に、金文字で『ヘタレでもわかる

相対性理論 一ノ瀬名誉教授 著』と書かれている。

「これとかどう？ 結構わかりやすく書いてるけど」

「小学生に相対性理論はハードルが高そうな気がするな」

「い、言われてみれば、そうだね」

「なら、この辺は……？」

俺は近くの別の本を手取る。表紙には『フロイドの全て』の文字。

「なんだろう、フロイドって……」

パラパラとページをめくってみる。機械の専門書らしいけど、何が書いてあるのかすらわからなかった。さっきのより明らかにレベルが高い。

「うん。これはやめておこう」

俺は専門書を元の場所に戻す。

「これは……ちよつと違うね」

隣のしろはが、一冊の本を開いて首をかしげていた。

オレンジ色の表紙には『お菓子まっくす』と文字が書かれている。

「でも、このお菓子がかわいい」

「皆をシアワセするお菓子の作り方……か」

俺も一緒にその本を覗き込む。写真に写っている人は、皆幸せそうな顔でお菓子を食べていた。

「こういうお菓子とか、作ってみたいけど……」

「しろは、買ってやろうか？」

「えっ、ううん。いいよ」

遠慮しなくていいのに。

「それより今は、夏海ちゃんの本を探さなきゃ」

本を棚に戻してしまった。しろはがお菓子を作るイメージないから、ちよつと食べてみたかったんだけど。

「やっぱり、偉人伝とかいいんじゃないかな？」

直後、しろはが『大山サクセスストーリー』と書かれた一冊の本を持っていった。

「ところで、大山さんって誰だろうね」

「さあ」

本になつてくるくらいだから偉い人だとは思うんだけど、聞いたこと

がなかった。

さらに、一冊の本が目が付いた。

『マーテル教団の闇 井上晶 著』

「こういうの面白そうだな、買おうかな」

「それは羽依里だけ。今は夏海ちゃんの本を探して」

「ご、ごめん」

冷めた目で見られてしまった。

「趣向を変えて、こんなのはどうかだろう？」

表紙には『おおきなおでんだね』と書かれていた。

中を読んでみると、男の子と女の子、そして狐が出てくる絵本だった。

「これは夏海ちゃんよりもっと小さい子向けだね」

「うーん」

何か一つでもいいのがないかと、大量に並ぶ本の背を見ていると、ひととき目立つピンク色の本を見つけた。

「なんだこれ？」

引き抜いてタイトルを見ると『資料室のおまじない辞典』と書かれていた。

「あれ、この本の著者って、昨日テレビに出ていた女の子じゃ……？」

「羽依里、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

中身は気になったけど、読書感想文とは関係なさそうだったので、すぐ棚に戻した。

「ところで羽依里、これは？」

煌びやかな表紙だ。『美しきシャーロット彗星の世界』と書かれていた。

よくわからないけど、彗星に関する写真集みたいだ。

「綺麗だけど、これで感想文は難しいかもしれないな」

「天体観測の時、夏海ちゃん喜んでくれてたから、良いかと思ったんだけど」

ほとんど写真ばかりだし、これで原稿用紙2枚はきついかもしれ

ない。

「見て、凄く古そうな本があるよ」

かすれた表紙はかろうじて『翼人伝』と読む事ができた。

肝心の中身は、昔の文字で書かれていて全然読めない。タイトルからして古文書みたいだし。

「鏡子さんなら読めるのかもしれないな」

「羽依里、これ二万五千円って書いてある」

「た、高い……」

値段もさることながら、どのみち夏海ちゃんが読めそうな感じはしなかった。

かれこれ1時間以上は探しただろうか。時々それっぽいものは見つかるのだけど、夏海ちゃんが読むにはちよつと子供っぽかったり、逆に難しすぎたりと、なかなか丁度良い物がなかった。

「無いね」

「無いなあ」

「無いですねぇ」

夏海ちゃんも本屋の店主さんと相談しつつ、色々な本に目を通したみたいだけど、結果は芳しくないみたいだ。

「ねえ羽依里、今何時かな?」

「え? えーつと」

しろはに言われて、腕時計をしてみる。11時を少し回っていた。「11時を少し過ぎてる」

「そ、そう……」

あからさまに表情が曇った。何か用事でもあるのだろうか。

「しろは、何か用事でもあるのか?」

「うん……実は、午前中までに終わらせないといけない用事があって」
用事があるのに、ギリギリまで手伝ってくれたのか。

「ごめんね夏海ちゃん、最後まで手伝えなくて」

「いえ、しろはさん、ありがとうございました!」

しろはは心底申し訳なきそうにしながら、本屋から出て行ってしまった。寂しいけど、用事なら仕方ない。

その後、店主と夏海ちゃんの三人でもう少し本を探してみるけど、なかなか良い本には巡り会えなかった。

「夏海ちゃん、いったん休憩にしよう」

「はい……」

正直なところ、俺もずっと文字を追い続けたせいで、目が疲れてきていた。

店主に一言声をかけて、夏海ちゃんと二人で一度店の外に出る。そのまま港の中心まで戻ってきた。

「あれ？」

自販機はないけど、商店に行けばジュースくらい……と考えていると、港の一角が目に入った。いつも出店が出ている場所だ。

そこには小さな店が出ていてた。

「あれ、あそこにいるのってもしかして」

あの金髪のツインテールは遠くから見てもわかる。紬だった。

「あそこにいるの、紬さんですか？」

「みたいだね。せっかくだし、覗いてみる？」

「はい、行きましょう！」

二人で並んで、出店の方に近づいてみる。

「おーい、紬——」

「紬さーん！」

「むぎゆ、タカハラさんにナツミさんです！」

「二人とも、いらっしやい」

近くに寄ってみると、静久もいた。二人で何か売っているみたいだ。

「何を売ってるんだ？」

「リングアメです！」

日よけのテントの下に組み立て式の簡易テーブルが置かれ、その上に沢山のリングアメが並べられている。紅色に輝いていて、美味しそうだった。

「せっかくだし、夏海ちゃんの分も買ってあげるよ。紬、一ついくら？」

「200円です！」

小さいながらもリンゴを一つまるごと使っているはずなのに、お手ごろな値段だった。

「それじゃ、二つ貰えるかな」

「はい！ どうぞ！」

代金を支払い、紬からリンゴアメを受け取る。

「こちらでお召し上がりください！」

紬が示す先には、見慣れたテーブルセットが置かれていた。遠慮なく座らせてもらおうことにした。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

包みを開けて、一口かじりつく。

真つ赤な飴の中にはジュシーなリンゴの果肉がたっぷりだった。

「うん、美味しい。この甘酸っぱさが最高だな」

「美味しいです！」

一休みしながら、リンゴアメをかじる。至高の一時だった。

「そうだ。少し聞きたいんだけど、紬や静久は何か本を持ってないか？」

「むぎゆ？」

「急にどうしたの？」

「実は……」

俺は夏海ちゃんが本を探していることを、二人に伝えた。

「読書感想文用の本、ねえ……」

静久も顎に手を当てて、考えてくれている。

「むぎゆ……残念ですが、浜辺には流れ着いていないですね」

いや紬、漂着物の本を渡されても困るんだけど。

「私も参考書くらいしか持ってないわね」

「灯台を探せば、昔の灯台守さんの日誌くらいなら出てくるかもしれませんが」

「そ、それで感想文を書くのはさすがに悪い気がします……」

夏海ちゃんも微妙な表情をしている。さすがにそれは抵抗がある。

「そう……力になれなくてごめんね」

「すみません。ナツミさん」

「いえ、ありがとうございます……」

……さすがに夏海ちゃんも元気がなくなってきた。

読書感想文用の本くらい、なんとかなるだろうと安易に考えていたけど、なかなかに厳しい。

「……あれ、何かお店が出てる」

その時、ガラガラとスーツケースを引きながら鴎がやってきた。

「カモメさん、いらっしやいませー」

「ツムツム、何売ってるのー?」

「リングアメです!」

「おお、りんごあめ! ひとつください!」

「はい! 200円です!」

鴎は袖からリングアメを受け取ると、テーブルセットの方にやってくる。

「やつほー、羽依里、なっちゃん!」

満面の笑みだった。それにしても、リングアメが似合うな。

「よう、鴎」

「鴎さん、こんにちわです……」

「あれ? なんだか、なっちゃん元気ない?」

「はい、実は……」

……夏海ちゃんは鴎に、読書感想文用の本を探していることを話す。

「……というわけで、なえなえ星人なんです」

どうしよう。なっちゃんが疲れて、よくわからないことを口走っている。

「要するに、夏海ちゃんが読めそうな本があればいいわけだね」

あれ、なんだか鴎が自信ありげな顔をしている。

「ふっふっふ。お客さん、いい本があるよ」

「え、本当ですか？」

夏海ちゃんの目に光が戻った。

「うん、このスーツケースの中に入ってるよ」

ぽん、とスーツケースをたたいた。

「でかした鷗、お礼と言っちゃなんだけど、リンゴアメもう一つ買っていいぞ。俺のおごりだ」

「え、いいの？」

「ああ」

「ツムツム！ 一番大きいのください！」

「お前、容赦ないよな……」

その後は話の流れで、加藤家の方でゆっくりと本の紹介をしてもらうことになり、俺は鷗と夏海ちゃんが乗ったスーツケースを押していた。

「この間、実際にスーツケースに乗ってみてわかったけど、なかなか乗るのも難しいんだな」

「そうだよ。私の苦労が分かったか。安穩と乗ってるだけじゃないのだぞ」

道中そんな他愛のない話をしながら、家へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ごめん羽依里、ぞうきんとかないかな」

加藤家の玄関先まで着くと、鷗が申し訳なさそうにそう言う。

「えっ？」

ああそうか。家に持って上がるんだし、スーツケースの車輪を拭くのか。

「ちよっと待ってて」

適当な布巾を濡らして持つてきて、鷗に手渡す。

「ありがとう」

鷗が慣れた手つきで車輪を拭いている。あのスーツケースとは、ほとんど一心同体みたいなものだいな。

「あ。二人とも、お昼ご飯食べに帰ってきたの？」

その時、ちょうど中から鏡子さんが出てきた。

「あら、そちらの方は？」

そして、鷗の姿を捉える。

「どうも、愛人1号です！」

おい鷗、何を言ってるんだ。

「鏡子さん、この子はですね……」

「……お姉さんに電話しなきゃ！」

俺が訂正する間もなく、鏡子さんは血相を変えて、電話のある居間の方に走って行ってしまった。

「鏡子さん！ 誤解です！」

「じよ、冗談です！ なつちゃん、スーツケースお願い！」

「はいー」

俺と鷗も、急いでその鏡子さんを追いかける。

……結局、鏡子さんの誤解が解けたのは、それから15分も後の事だった。

「うう、ぐ迷惑をおかけしました」

全くだ。鷗も軽はずみな発言は控えてもらいたい。

「でも、鏡子さんを止められそうにないからって、電話線を引っっこ抜いた鷗さんの行動力にはびっくりしました」

「発想の転換ってやつだよ、なつちゃん」

俺達三人は居間に腰を下ろして、肩で息をしていた。

ちなみに、鏡子さんは誤解が解けた直後、寄合があるからと言って出かけてしまった。

「それにしても疲れたな。腹も減ったし」

その時、ぐうぐ、と夏海ちゃんのお腹が鳴った。

「あう……」

「そういえばお昼時だね。悪い時に来ちゃったかな」
時計を見るともう12時を回っていた。

「いや、鴟を家に呼んだのは俺たちだしな。どうせだし、一緒に食べるか?」

俺は立ち上がって、台所の方へ向かう。

「え、もしかして羽依里が作ってくれるの?」

「ああ、これだけだな」

俺は水屋からカップうどんを取り出し、鴟に見せる。

「……」

ものすごい目で見られた。それこそ、カモメのように鋭い視線だった。

「うーん、せっかくだし、私が作ろうか?」

「え、いいのか?」

「毎朝、のみきさんの分も作ってるから。冷蔵庫の中、見せてもらっていい?」

「ああ、いいぞ」

スーツケースからエプロンを取り出していた。でかでかと猫のキャラクターが描かれた、プリチーなエプロンだった。

色々出てくるな。トラエモンポケットか何かか? あのスーツケースは。

「鶏肉があるから、鶏の竜田揚げなんてどう?」

冷蔵庫を覗き込んでいた鴟が、振り返りながらそう提案してくる。

「…………うぶ」

竜田と聞いて、俺と夏海ちゃんは数日前の竜太サンドを思い出してしまった。

「え、どうしたの二人とも」

「なんでもないけど、竜田揚げだけは勘弁してくれ」
「嫌いな?」

「そ、そういうわけじゃないんですけど」

「じゃあ、酢鶏にするね」

「すどり？」

「酢豚のお肉が豚から鶏になったやつ」

それなら良さそうだ。甘酸っぱくてご飯も進みそうだし。

「鷗さん、野菜の下ごしらえ手伝います！」

冷蔵庫から色々な食材を取り出ししている鷗を見て、エプロンをつけた夏海ちゃんがその隣に並ぶ。

「鷗、俺も何か手伝おうか？」

「羽依里、甘酢タレ作れる？ 分量測って、混ぜるだけだけど」

「加藤家の血が入ってるからな、たぶん無理だと思うぞ」

「え、なにそれ」

「鏡子さんに代表されるように、加藤の人間が料理を作るとまともな味にならないらしいんだ」

「……お皿並べててもらえる？」

「まかせておけ」

鷗は少し悩んだ後、俺に皿並べを命じた。

20分後、完成した酢鶏はご飯にも合う、絶品中華だった。思わずご飯のおかわりまでしてしまった。

お昼ご飯を済ませた後、夏海ちゃんの部屋で本の紹介が始まった。

「なっちゃん、冒険は好き？」

「は、はい？」

鷗がスーツケースを開きながら、夏海ちゃんにそんなことを聞く。

夏海ちゃんも虚をつかれていた。

「血沸き肉躍る冒険だよ！」

「は、はあ」

戸惑っている夏海ちゃんを気にする様子もなく、鷗はスーツケースから一冊の本を取り出す。

「じゃーん！ ひげ猫団の冒険！」

鷗がスーツケースから出したのは、赤い表紙の本。タイトルには

『ひげ猫団の冒険・一の巻』と書かれていた。

「あれ、その本、俺も読んだことあるぞ?」

「10年くらい前に発行された本だしね。たぶん、羽依里も読んだことはあると思うよ」

表紙もタイトルも見えたことあるし、間違いなく読んできると思う。

内容は忘れたけど、子供向けの児童文学だった気がする。

てつきりダザイとか、ナツメとかのコテコテの文学作品が出てくると思ってたんだけど。

「どんな内容なんですか?」

「冒険だよ!」

答えになってなかった。

「確か、うる覚えだけど……確か、4つの鍵がついた宝箱があつて……その中に」

「羽依里! ストップ!」

思わず内容を話しかけたところで、鷗に止められた。

「絶対面白いから、読んでみて!」

鷗は目を輝かせながら、夏海ちゃんに本を勧めている。それだけ思い入れの強い本なんだろう。

「わ、わかりました。読んでみます」

「うんうん、絶対面白いよ!」

その勢いに気圧されるように、夏海ちゃんはその本を受け取る。

「二の巻と三の巻もあるから、ぜひ読んで!」

ドサドサと黄色と青色の表紙の本を畳の上に置く。なかなかの厚さだった。

「わ……」

「えっと……夏海ちゃん、頑張つてね」

「は、はい! 頑張ります!」

三冊の本を両手いっぱい抱えた夏海ちゃんに、励ましの声をかける。

色々あつたけど、読書感想文用の本が決まって良かった。鷗に感謝だ。

その後、夏海ちゃんがさっそく本を読み始めたので、俺は鴟を自室に招いて話をしていた。

「そういえば鴟、ひげ猫団の冒険・二の巻とか出てたんだな」

「え、出てるよ?」

「全く記憶にないんだよな」

子供の頃だし、二巻目が出た時は俺の中での熱が冷めてしまっていたのかもしれないけど。

「ちなみに、二の巻と三の巻ってどんな話?」

「それは秘密。教えてあげないよ!」

「せめて、あらすじだけでも」

「うーん、なつちゃんには秘密だよ?」

「わかってる」

「二の巻は、絶海の孤島に立つ塔の話。塔の頂上には天空の花園があつて、そこには伝説のお宝があるの。罨だらけの塔を、塔の女神や仲間と力を合わせて登るんだよ!」

「絶海の孤島に、どこまででも続く罨だらけの塔か。面白そうだな」

「三の巻は、海賊船が座礁して辿り着いた王国で、眠り続ける姫君を起こそうと奮闘する姫騎士のお話」

「まるで昔の童話みたいだな」

「……あれ? 読んだことないはずなんだけど、どこかで聞いたようなな。」

「羽依里?」

「あ、いや。なんでもないよ」

子供の頃ならともかく、今となつてはありきたりな話だし、どこかで似た内容の映画とか本を見たのかもしれない。

「それより、羽依里」

「え?」

鴟は俺の部屋の一角に乱雑に置かれている本をじっと見ていた。そういえば、今朝夏海ちゃんと一緒にひと騒動した時に引っ張り出して以来、そのままだった。

「羽依里も男の子だし、やっぱりあの本って……その、えっちな本？」
顔赤くしながら言うのやめてほしい。そんなんじゃないから。

「いや、しろはがいるからそういうのは持つてきてない」

「あ、そなんだ」

すぐに納得してくれたみたいで、そりやそうだよー。みたいな感じに、うんうんと頷いていた。彼女の存在って大きい。色々な意味で。

15時を回った頃、鴫が帰るといっているので、港まで送っていくことにした。

「それじゃ、鴫を送ってくるから」

「鴫さん、ありがとうございます！」

「感想文、完成したら見せてね！」

「はい！」

加藤家を出た後、いつものように鴫の乗ったスーツケースを押して、港へ向かう。

家から港は近いし、すぐに例のアパートが見えてきた。

「ありがとう。ここでいいよ」

「ああ、気をつけて帰れよ」

「うん。またね、羽依里」

鴫がスーツケースから降りて、その横に立った……その時。

「羽依里」

俺たちの背後から、野太い声が聞こえた。この声は間違いなく、しろはのじーさんだった。

「む、誰だ」

俺に声をかけると同時に、しろはのじーさんも、鴫の姿に気づいたみたいだ。声に警戒感が混ざる。

「ねえ、このお爺さん、羽依里の知り合い？」

その気配を感じ取ったのか、鴫が小声で聞いてくる。

「ああ、しろはのじーさんだよ」

「あ、そうなんだ」

俺は慌てて補足しておく。

「初めまして、久島鷗です」

鷗が姿勢を正して、しろはのじーさんに挨拶をする。

「その格好、旅行者か？」

しろはのじーさんは警戒を解かず、鋭い視線で鷗を見ている。

あ、そういうえばこの人、よそ者に厳しかったような。ちよつとまずいかも。

「しろしろ……えっと、しろはさんの友達です！」

「……友達？」

鷗の言っていることに嘘偽りはないのだけど、その傍らに大きなスーツケース。どうみても旅行者のそれだ。

「よく食堂に食べに行かせてもらってます！」

「食堂だと？」

「はい！ よく活け造り定食頼んでいます！ おいしいので！」

「……そうか」

その時、じーさんの警戒感が緩んだ気がした。

「しろはの食堂を、これからも鼻肩にしてやってくれ」

そう言いながら、手に持っていたビニール袋を鷗に渡した。

「羽依里に渡すつもりだったが、お前にやろう」

鷗の隣から袋の中を見てみると、たくさんのイカが入っていた。

「おじーさん、ありがとうございます！」

「礼ならいい」

しろはのじーさんは満足そうな顔をして、その場から去っていった。

「羽依里、どうしよう、これ」

「もらっていいんじゃないか？ 獲れたてだし、きつとうまいぞ」

「半分、羽依里にもあげるよ！」

「え」

あげると言われても、どうやって持って帰ろう。まさか、手に持つ

て帰るわけにもいかないし。

「あ、ビニール袋ならあるよ！ ちょっとこれ持って！」

鴎からイカの入った袋を受け取ると、鴎はスツケースから新品のビニール袋を取り出す。

本当になんでも入ってるな、あのスツケース。

「しかし、あのjeeさんが余所者にイカをあげるなんてな……」

「え、そんなに珍しいの？」

「うん。珍しい」

確か、俺が初めて会った時とか話も聞いてくれなかった気がするけど。

のみき曰く、最近はこちらのjeeさんも丸くなったって言ってたわけ。そういう事だろうか。

俺はイカを別の袋に分けながら、そんな事を思っていた。

そして鴎と別れた後、イカの入った袋を持って一度しろは食堂を訪れていた。

「しろはー」

「あ、いらっしやい。今日は随分早いね」

「これ、港でしろはのjeeさんからもらったんだ」

「あ、イカだね」

「これ使って、夕飯作ってくれないか？」

「まかせて。じゃあ、イカ定食にしておくね」

「楽しみにしてるよ、しろはの料理はおいしいから」

「……ほ、褒めても何も出ないよ」

すました顔してるけど、少し照れてる。

「ところで、夏海ちゃんの本は見つかった？」

「ああ、鴎が用意してくれた」

「そうなんだ。良かったね」

「スツケースの中から、何冊も本が出てきたんだ」

「……すごいね。この前は花火とかも出てきたし、本当に何が入って

るんだらうね」

「それを知ろうとしたら、スイーツケースのスーちゃんにがぶりとやられるらしい」

「え、なにそれ」

「恐ろしい怪物じゃないか」

「へ、変なこと言わないで」

「ごめんごめん」

「それじゃ、また夏海ちゃんと一緒に来るよ」

「うん、待ってる」

いったん食堂を後にして、加藤家の方に戻ってくる。

「ただいまー」

居間に行くと、鏡子さんがテレビを見ていた。

「あ、おかえりなさい」

「……」

夏海ちゃんは、そんな鏡子さんから座卓を挟んだ位置に寝っ転がって、鴎の本を読んでいた。

「ただいま、夏海ちゃん」

「うんー」

「……あれ？」

なんだか返事がそっけない。

「夏海ちゃん、晩ごはんだけど、もう少ししてから出発しようか」

「うんー」

……これ、ちゃんと伝わったかな。

「夏海ちゃん、今日のログボ覚えてる？」

「うんー」

これはだめかもしれない。俺の声は全く聞こえていないみたいだ。

目をキラキラさせて、本の世界に没頭してる。

「私が話しかけても、ずっとそんな感じなの」

「鴎から借りた本、よっぽど気に入ってるんですね」

「夏海ちゃん、ああいう本は読んだことないはずだし、きつと読むのが

楽しくてしようがないんじゃないかな」

「そうなんですネ」

俺も子供の頃は、あんな風に心から本を楽しんでいたっけ。

夏海ちゃんの邪魔しても悪いので、お腹が減る限界まで鏡子さんと一緒にテレビを見ていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、頃合いを見て夏海ちゃんに声をかけて、しろは食堂へ向かった。

「ポン！」

「……あれ、イナリ？」

食堂の入り口には、イナリがいた。

「つてことは、蒼が来てるのか」

昨日の今日だし、ちよつと店に入るのものはばかられるな。

下手をしたら昨日の二の舞になりかねない。

「しろはさん、こんばんわー」

そんな俺の胸の内を知るはずもなく、夏海ちゃんが元気良く扉を開けていた。

こうなったらその場の流れに身を任せるしかない。

「二人とも、いらっしやい」

「夏海ちゃん、こんばんわー」

「こんばんわ」

「藍さん、蒼さん、こんばんわです！」

俺たちがいつもより遅くなつたからか、二人は既に食事をしてた。夏海ちゃんが蒼の隣に座つたので、俺もその隣に座る。

「二人が食堂にいるって珍しいな」

俺が知る限り、初めてかもしれない。

「今日は蒼ちゃんが料理当番だったんですが、珍しく料理を焦がして

しまった」

「え、そうなのか」

「料理を焦がしながら、変にニヤニヤしてましたし、きつと昨日のデザートを思い出していたんでしよう」

だから藍、しろはの前でその発言はやめてくれ。スゴイ睨まれている。

「あれ？　ところで、二人は何を食べてるんだ？」

見るつもりはなかったんだけど、普段見ない器に盛られた料理が気になってしまった。

「うなぎのひまつぶし御膳よー」

「ひつまぶしな」

「こ、細かいことはいいじゃない」

「日替わりですか？　すごい豪華ですね」

「午前中の仕入れの時、港でうなぎをもらったから」

あ、午前中に終わらせなきゃいけないかった用事って、その仕入れだったのか。

それだとしろはの専門分野だし、俺たちがついて行っても荷物運びくらいしかできそうにない。

「はい、羽依里たちのイカ定食おまちどうさま」

「おお、もうできてたのか」

「うん」

まずイカの炊き込みご飯とみそ汁が俺たちの前に置かれ、それに続いてイカの刺身、イカとわかめの酢の物、大根とイカの煮つけが並べられた。見事にイカ尽くしだった。

「さすがしろはちゃんは料理上手ですね。真っ黒にしてしまった蒼ちゃんとはえらい違いです」

「だから、今日はたまたまだってばー！」

だから藍、こっそりと話題を戻そうとしないでくれ。

「それじゃ、夏海ちゃん、食べようか」

「はい！　いただきますーす」

なかなかのポリウムだ。夏海ちゃんと一緒に手を合わせてから、

食べ始める。

「ところで、なんでイカ尽くしなんですか？」

「そういえば、夏海ちゃんはこのイカをもらった経緯を話してなかったっけ。食べながら話すよ」

その後、イカの刺身や煮つけに舌鼓を打ちながら、夏海ちゃんに港での話をした。

「料理の時もそうでしたけど、鷗さんのスーツケースには、どれだけのものが入ってるんでしょうね」

「駄菓子屋で買った三角形の秘密も、結構な数入ってるはずよ。どういう構造になってるのかしら」

「夜にスーツケースに乗って空を飛ぶ鷗さんを見たという噂もあります」

しろはのじーさんより、話題はもっぱら鷗のスーツケースについてだったけど。

食事を終えた後、空門姉妹と一緒に食堂を出る。

「しろは、ごちそうさま」

「美味しかったですー」

「相変わらず美味しかったわよー」

「はい、ごちそうさまでした」

口々にしろはにお礼を言っ、それから帰路に着く。

店の外でイナリも合流し、三人と一匹で他愛のない話をしながら一本道を歩き、住宅地に来たところで別れる。

「それじゃ二人とも、またねー」

「夏海ちゃん、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさいですー！」

「ポンポーン！」

「あ、そうだ。イナリさん！」

「ポン？」

「実は、お願いがあるんです……明日ですね……」

「ポンポーン！」

その別れ際、夏海ちゃんがイナリに駆け寄って、なにやら耳打ちしていた。一体なんだろう？

「夏海ちゃん、イナリと一体何の話をしていたの？」

「えへへ、秘密です！」

……結局、教えてもらえなかった。

加藤家に帰宅した後、夏海ちゃんはお風呂の時間以外ずっと本を読んでいた。

よほど鴟から借りた本が面白いんだろう。

俺も夏海ちゃんが読み終わったら、久しぶりに読んでみようかな。

第十六話・完

第十七話 8月10日

……朝。

「ポーン！」

今日も夏海ちゃんの声で起こされる。

「おはよう夏海ちゃん、一晩で随分と青くなっちゃって」

「ポポポーン！」

「あれ、イナリ？」

寝ぼけ眼で枕もとを見ると、イナリがいた。

「ポーン！」

おはよう、とばかりに大きな声で鳴いている。何度見直しても夏海ちゃんじゃない。イナリだった。

「……もしかして、起こしに来てくれたのか？」

「ポポーン！」

そういえば夏海ちゃんが昨日、食堂からの帰りにイナリに何か頼んでいたけど。

「いつもと違う、刺激的な朝を迎えたい、とは言っただけど……」

まさか今朝はイナリに頼むなんて。

廊下へ続くふすまを見ると、イナリが通れるくらい開けられていた。きつと夏海ちゃんが開けたんだろう。

「えーつと、ありがとうな、イナリ」

「ポーン！」

布団の上に起きあがって、とりあえず起こしに来てくれたイナリにお礼を言う。

「今度、お礼に油揚げを用意するから」

「ポーン！」

俺は眠たい目をこすりながら起き上がり、布団をたたむ。

着替えを済ませた後に壁の時計を見ると、いつも起きる時間を少し過ぎていた。

「あれ、そういえば肝心の夏海ちゃんはどうしたんだろう」

昨日は紬たちと一緒に起こしに来てくれてただけど……今日はこの時間になっても姿を見せない。

これは、もしかして。

「イナリ、ちよつと一緒に来てくれないか？」

「ポーン？」

俺はイナリを連れて、隣の夏海ちゃんの部屋の前にやってくる。

「夏海ちゃん」

一応、ふすま越しに声をかけるけど、例によって返事はない。これはあれかな。昨日の夜遅くまで鴟の本を読んでいて、寝坊したパターンだろうか。

「イナリ、ちよつと夏海ちゃんを起こしてきてくれない？」

「ポーン？」

「……お礼の油揚げ、倍にするからさ」

「ポーン！」

了解、と言った感じで尻尾を振る。

「それじゃ、頼んだぞ」

俺は夏海ちゃんの部屋のふすまを少しだけ開ける。イナリはその隙間から、するりと部屋の中に入っていった。

夏海ちゃんにも、いつもと違う刺激的な朝を迎えてもらおう。

「ポーン！」

「うーん……ポテトお、あと五分……」

「ポーン？ ポンポーン！」

夏海ちゃんも寝ぼけてるんだろうか。頑張れイナリ。

「ポーン！ ポーン！」

ぼすつぼすつ、つと布団の上でイナリが飛び跳ねる音が聞こえる。なかなか起きないので、多少強引な手段に出たようだ。

「ポーン！ ポーン！ ポ……キユウ」

その時、むぎゅつと音がして、静かになってしまった。

あれ？ どうしたんだろう。

これは、状況を確認しないと。

「夏海ちゃんごめん、お邪魔します」

一応断りを入れてから、部屋に入ってみると、夏海ちゃんの枕元には鴉の本が置かれていた。やっぱり本を読んで夜更かしをしてみたいだ。

「ポ、ポ……ン……」

そして布団が跳ねのけられていて、イナリはその下敷きになってしまっていた。

「イナリ、今助けるぞ」

俺は布団の隙間から、イナリを引つ張り出してやる。

「思わぬ反撃を食らったわけだな。大丈夫か？」

「ポン……ポンポン！」

イナリが起き上がって、気合いを入れている。どうやらリベンジに燃えているようだ。

「おお、もう一度挑戦してくれるのか？」

「ポン！」

イナリは意を決したように動き出し、夏海ちゃんの顔の上に乗って、丸くなる。

あれって、完全に鼻と口をふさいでるような。

「……!? ～～～!?」

しばらくすると、夏海ちゃんが呻きながら手足をバタつかせはじめた。めちやくちや苦しそうだ。

「ポーン！」

「……ぷはっ！」

夏海ちゃんが大きく跳ねるようにして上半身を起こした。直後、肩で息をしていた。

顔に乗ってたイナリは夏海ちゃんが起き上がった拍子に、その膝の上に着地する。

「えっと、夏海ちゃん、おはよう」

「おはようございます……」

目が泳いでるし、凄い汗だ。

「なんでしよう、大きなくまんに押しつぶされる夢を見ました」

「それはきつとイナリの呪いだね」

「え、なんですかそれ」

「秘密」

「ポン！ ポーン！」

「あ、イナリさん、おはようございます」

ようやく膝の上のイナリに気づいたみたいで、挨拶をしていた。

「夏海ちゃん、毎度のことだけど、そろそろ準備しないとラジオ体操に遅れるよ？」

「あ、そうでした！」

夏海ちゃんが布団をたたみ始めたので、俺とイナリは廊下で待つておくことにした。

ふすまを閉めた後、目の前のガラス戸が目に入る。少しだけ開いていた。

「あれ、どうしてここだけ開いてるんだろう？」

閉めようとガラス戸に近づくと、足の裏に違和感があった。

「なんだこれ」

見ると、廊下にタオルが一枚敷かれていた。いつもはこんな置いてないはずだけど。

「もしかして、夏海ちゃんはここからお前を招き入れたのか？」

「ポン！」

タオルを拾い上げてみると、無数の足跡がついていた。どう見ても、イナリの足跡だった。

「このタオルでしっかりと足を拭いて上がってきたのか。お前、頭良すぎな……」

「ポン！」

それほどでもー、と言っている気がした。

「俺もちよつと顔を洗ってくるから、イナリも玄関で待っていてくれ」
「ポン！」

イナリを廊下に残し、俺も身支度を整えることにした。

「おまたせしましたー」

準備を終えてイナリと一緒に玄関先で待っていると、夏海ちゃんが出てきた。

「それじゃ、行こうか」

「はい！」

「ポンポンー！」

今日も段々と強くなる日差しの中、俺たちは神社へと向かう。

「そういえば、ガラス戸を開けたりタオルを準備したのは、やっぱり夏海ちゃん？」

「はい！ 今日はいナリさんに鷹原さんを起こしてもらおうと思っていましたので、夜のうちに鏡子さんに許可をもらって、準備しておきました！」

鏡子さんに許可までもらってたのか。めちやくちや用意周到だった。

「えへへ、驚きましたか？」

「うん、驚いたよ」

まさか俺も、目が覚めると目の前にキツネがいるとは思わなかったし。

俺は足元を走るイナリを見やる。きちんと足を拭いて家に上がる知能の高さから見て、こいつは本当に野生動物なんだろうか。宇宙生物だったり、どこかの組織が作った魔物だったりするんじゃないだろうか。

「ポン？」

まさか、そんなわけないよな……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神社の境内に到着すると、いつものメンバーが居た。

「え、イナリ?」

「ポニー!」

イナリは蒼の姿を見つけると、その足元へと駆け寄っていった。

「時間ギリギリだな。もうすぐラジオ体操大好きさんが来るぞ」

良一や天善にあいさつをしにいくと、そう言われた。

「このラジオ体操、もし遅刻したらどうなるんだ?　すごく怒られるのか?」

「いや、一日ラジオ体操大好きさんの役が回ってくる」

「え、なにそれ」

「ラジオ体操大好きさんの代わりに、一日ラジオ体操大好きさんをやるんだ。なかなかきついんだぞ」

なんだかわけがわからないけど、色々大変そうだ。できればやりたくない。

「今年はまだ誰もやってないが、去年は一度蒼がやったよな」

「やめて、思い出させないで」

だいぶ気温も上がってきているというのに、蒼は肩を抱いて震えている。それほど嫌な記憶なんだろう。

「そうだ蒼、後でイナリに油揚げをやってくれないか?」

「え、なんで?」

「色々あつてさ。お礼をしたいんだ」

「よくわかんないけど、あげとくわね」

「4枚な。代金はあとで払うから」

「りよーかい」

「お前ら――!　準備は良いか?　今日もラジオ体操を始めるぞ――!」

そんな話をしていると、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第一の体操!　耳介筋の鍛錬!」

「ピクピク、ピクピク」

俺や夏海ちゃんもだいたい動かせるようになってきた。喜んでいいのかわからないけど。

「ポン！ ポン！」

一方で、イナリの耳はめちやくちや動いていた。当然と言えば当然だけど。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああああー！」

「うるあああああー！」

「ポポポポポポーン！」

イナリも頑張って発声していた。キツネに横隔膜の鍛錬が必要なのか疑問だけど。

「さあ、スタンプはこつちだぞー」

ラジオ体操の後は、いつものようにスタンプとログボを受け取る。

今日のログボは冷凍肉だった。

「なんだこれ。牛肉？」

「これは猪肉だな」

同じように袋に入った肉塊を受け取った良一から、そう教えてもらう。

「イノシシですか？」

「沢田さんの獲った猪なのよ。おいしーんだから」

「沢田さんって？」

「通称イノキングと呼ばれている、凄腕の猟師だ。沢田さんは昔、岡山で行われた猪の品評会で金賞を獲ったこともあるらしいぞ」

「へえ、そうなのか」

蒼や天善も皆詳しい。島では有名な人みたいだ。

「しかし、猪肉というのは少し独特の臭みがあるからな。それさえなんとかできれば、美味しく食べられるんだが」

そう付け足してくれるのはのみき。言い方からして、ちよつと猪肉が苦手なんだろうか。

「蒼ちゃん、今日は少し早く帰りますよ」

皆とイノシン談義をしていると、藍がそう告げに来た。

「羽依里さん、例の件ですが、8時くらいになったら来てください」
例の件というのは、昨日言っていた朝食のことだろう。

「なあ藍、本当にパンを食べさせてくれるのか？」

「言い出しつぺは私ですから。ちゃんと用意していますよ」

他の皆に聞かれたくないのか、少し小さな声でそう言う。

「そうです。夏海ちゃんも一緒に来てくださいね」

「はい、後でお邪魔します」

「それじゃ、待ってるわよー」

二人は手を振りながら去っていった。

「おい羽依里、デートの次は何やるんだ？」

「秘密だ」

俺は黙秘権を行使し、良一の非難を受けながら神社を後にする。

そのままの足で一度帰宅し、ログボの猪肉を冷凍庫へしまう。さすがに持っていけないし。

その後時間を見て、空門家へ向かった。

「そういえば夏海ちゃん、ひげ猫団の冒険はどこまで読んだの？」

その道すがら、ちよつと気になったので夏海ちゃんに聞いてみる。

「一巻はもう読み終わっちゃいました」

「え、もう?」

「はい。その、面白くて」

「それだけ早く読み終えたんなら、鷗もきつと喜ぶよ」

「早く二の巻を読みたいんですけど、もったいない気がして」

「ああ、その気持ちわかるよ」

「今度は夜だけ読むようにします」

「それが良いよ。でも、今日みたいに寝坊しないようにね」

「わ、わかってます!」

頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。微笑ましい。

「と、ところで鷹原さんは蒼さん達の家に行ったことあるんですか?」
「何回か家まで送ったことはあるから場所は知ってるけど、上がらせ

てもらったことはないかな」

「そうなんですね」

「結構大きな家だから、きつと驚くよ」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……お待ちしていました。どうぞ」

玄関先に備え付けられたインターホンを押すと、エプロンをつけた藍が出迎えてくれた。

「お邪魔します」

「お邪魔します」

その藍に案内されて、夏海ちゃんと一緒に家の中に入る。

「そういえば藍、今日は家の人は？」

こんな朝早くからお邪魔するのも、悪い気がする。

「おとーさんは元々日本に居ません。おかーさんは朝一の連絡船で、本土にパートに行っています。心配はいりませんよ」

「そ、そうなんだ。それなら安心だね……」

言った俺自身、何が安心なのかわからないけど。

そのまま廊下を抜けて、空門家のリビングに通される。

加藤家と違って床は全面フローリング。思いつきり洋風の作りだった。部屋の中央にはテーブルが置かれ、四つの椅子が備え付けられている。また、壁際には重厚そうな金庫や戸棚が並び、大量の書類が詰まっているのが見える。

何より目を引いたのは、壁一面に飾られた蝶の標本だった。物凄い数だ。

「すごいな」

「壁の標本ですか？ おとーさんが昆虫学者ですから。これでも一部みたいですよ」

夏海ちゃんも蝶の標本が入ったケースを物珍しそうに覗き込んで

いる。

「今から用意しますので、向こうのソファアにでも座つていてください」

藍が示す先、入口から見て右手の壁沿いに大きなソファアが置いてあつた。

促されるがまま、夏海ちゃんと一緒にそのソファアに座つて待つ。すごいふかふかで座り心地の良いソファアだった。ここに座りながら温かい飲み物とか飲んだら、すごいリラックスできそうだ。

「見てください鷹原さん、変わった置物がありますよ」

ソファアの横には小さな台が置いてあつて、その上に明らかに日本ものじゃない置物が鎮座していた。

「それですか？ おとーさんが買ってきた、パプアニューギニアのお土産です」

藍が深めの皿に盛られたオレンジを持ってリビングに戻ってきた。程よく皮が剥かれている。

「あれ、それって」

「はい。フレッシュなオレンジですよ」

テーブルの真ん中にオレンジが置かれ、それぞれの席の前にカラフルなランチョンマットが敷かれた。

「もしかしてそのランチョンマットも？」

「はい。確か東南アジアのお土産だったと思います」

藍はそう言いながら一度キッチンへ向かい、すぐに四つのマグカップを持って戻ってきた。

「あれ、そういえば蒼は？」

家にお邪魔してから、一度も蒼の姿を見ていない気がする。

「蒼ちゃんはまだ寝ています」

「え、寝てるんですか？」

「羽依里さん、起こしてきてもらえますか？」

「え、俺？」

さ、さすがにそれは……なんだかんだで男だし。

「でも蒼さんって、ラジオ体操来てませんでしたっけ」

夏海ちゃんが当然の疑問を投げかける。

「蒼ちゃんはラジオ体操から帰ったら、必ず二度寝するんです。ゆる程度じゃ置きないので、毎日朝ごはんの前は苦勞するんです」

「それでも、俺が起こしに行くのは良くないと思うんだけど」

それ以前に、俺は蒼の部屋を知らなかったりする。

「蒼ちゃんにも、いつもと違う刺激的な朝を味わって欲しかったんですけど」

何それ。最近この島じゃ、その手の起こし方がブームなの？ 加藤家だけと思つてたけど。

「それじゃ、私が行きますー！」

夏海ちゃんが拳手した。やる気満々みたいだ。

「寝起きの蒼ちゃんは手強いですよ。頑張ってください」

「はい！ 頑張りますー！」

藍に部屋の場所を教えてもらい、夏海ちゃんが蒼を起こしに向かった。

その夏海ちゃんを見送った後、藍も早足でキッチンへ戻つていった。すごく忙しそうだけど、さすがに俺が手伝うわけにもいかなかった。

「おはよー……」

……10分後、夏海ちゃんに連れられて、凄く眠たそうな蒼がリビングに出てきた。長い髪もあつちこつち跳ねてるし、本当に寝起きみたいだ。

「大丈夫か？ だいぶ眠そうだな……」

「だいじょうぶ……」

左右に揺れてる。これは駄目そうだ。

「藍さん、洗面所つてどっちですか？」

「廊下に出て右ですよ」

キッチンの藍からそう声が返ってきた。

「蒼さん、顔洗いにいきましょう！ 後、髪も整えないと！」

「ふあ〜い〜……」

夏海ちゃんに引つ張られて洗面所の方へ向かう蒼。どっちが年上かわからないんだけど。

蒼が身支度を整えてリビングにやってくる頃、キッチンからクロワツサンの焼ける良い匂いが漂ってきた。

「蒼ちゃん、コーヒー入れてもらえますか？」

藍がキッチンから何やら見慣れない道具を持ってきた。

「りょかい」

蒼がその道具を受け取って、それぞれのマグカップにコーヒーを注いでいく。あれってコーヒーポットだったのか。

「蒼、うまいもんだな」

「おとーさんがコーヒー好きでね。この道具も、イタリアで買ってきた本格的なやつなんだって」

そのコーヒーに泡立てたクリームを入れて、あつという間に四人分のカプチーノが完成した。

「さすがにシナモンパウダーは手に入らなかったけど、勘弁してね」

「いや、十分だよ」

「カプチーノには砂糖が入ってないから、夏海ちゃんの分には砂糖入れておくわね？」

「はい、ありがとうございます！」

「クロワツサンも焼きあがりましたよ」

直後、藍が焼きたてのクロワツサンが盛られたバスケットを持ってやってきた。

「クロワツサンは二種類焼きました。一つはクルミ入り、もう一つはサツマイモ入りです」

「おお、すごいな」

「後、ポタージュですけど」

「そうだ、調子に乗ってスープまで頼んでたんだっけ。」

「さすがに本物は用意できなかったので、ポタージュはインスタント

で勘弁してください」

最後の仕上げにと、粉末が入ったスープカップにお湯が注がれ、ポタージユも完成した。

昨日、俺が勢いで提案したメニューは全部そろってしまった。すごい光景だ。まるで鳥白鳥じゃないみたいだった。

「それでは、いただきますしよう」

エプロンを外した藍に続いて、俺たちも席に着く。

「ありがとう、本当にここまでの品を用意してくれるなんて」

「だって、食べたかったんでしよう?」

「そ、それはそうだけどさ」

「なら、お礼は言いつこなしです。私達も食べたかったですし」

「そうよー。冷めないうちに食べましょ。藍のパンはおいしーんだから」

「それじゃ、遠慮なく」

「いただきますーす」

四人で手を合わせた後、食べ始める。

まず、カプチーノを一口飲む。コーヒの苦みの中に、ミルクのコクが合わさって美味しい。コーヒも豆から抽出しているみたいで、スタパ顔負けだった。

次に焼きたてのクロワッサン。クルミ入りの方は香ばしく、サクサクもっちりとしていて美味しかった。

「うん。美味しい」

「でしよー」

クロワッサンを作った藍より、蒼の方が嬉しそうだった。

まさか、この島で焼きたてのクロワッサンを食べられるなんて思わなかった。

その後、ポタージユやオレンジも堪能した。

「美味しいですー!」

夏海ちゃんもクロワッサンを満喫しているみたいだ。俺も今度はサツマイモ入りの方を食べてみる。

こっちはほんのりと甘い。優しい味だった。

「サツマイモ入りも美味しいな」

「いくら誉めても、これ以上は何も出ませんよ」

「藍も昨日のうちから、一生懸命準備してたもんねー」

「……さて、何のことでしょう」

そういえばパンって、生地を発酵させたり冷蔵庫で休ませたりと、すごい手間がかかるんじゃないかなかったっけ。

「藍、クロワッサンもう一つもらっていい？」

「どうぞ。沢山ありますから、好きなだけ食べてください」

藍の苦労が少しでも報われるように、クロワッサンをできるだけ頑張って食べた。

皆と一緒に食べたってこともあるけど、普段と違う朝食はやっぱり美味しかった。

「ありがとう、美味しかった」

「藍さん、蒼さん、ごちそうさまでした！」

「お粗末さまでした」

「二人とも、またねー」

俺たちは二人にお礼を言って、空門家を後にした。

「美味しかったですねー」

「皆と一緒に食べるご飯って、おいしいよね」

「はいー」

「今度、こっちもお返しをしたいところだけど……」

「……あのクロワッサンを食べた後だと、気が引けてしまいます」

「そうだね」

俺と夏海ちゃんが作れるものと言えば、チャーハンくらいだし。

「……今度、しろはにでも相談してみるよ」

「はい。よろしくお願いしますー！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

帰宅後、いつものように夏海ちゃんと二人で宿題をする。

「あ、そういえば鷹原さん！」

「え、何？」

「お昼はあの猪肉を使って、チャーハン作っていいですよね？」

「うん、お願いするよ」

「はい！ 頑張ります！」

夏海ちゃんは握りこぶしを作って、気合いを入れていた。これはお昼も楽しみだ。

「それじゃ、頑張ってくださいます」

宿題を済ませた後、夏海ちゃんはすぐに台所へ向かい、猪肉の下処理を始めた。

さすがに早すぎるんじゃないかとも思ったけど、下処理は早めに終わらせておきたいらしい。

俺はというと、特に手伝えるようなこともなかったので、居間でテレビを見ていた。

『ホモ・サピエンスの個性風情が、自然現象に倫理を問うな』

地方の放送でよくある、昔の人気ドラマの再放送みたいだった。

途中の話を全く見てないので話の内容はさっぱりだったけど、バトル物のようなだった。

真っ黒い衣装を着た、やけに無口な女の子が、沢山の狼を召喚していた。

その女の子と対峙しているのも、周りに赤いリボンみたいなのを纏った、これまた女の子だった。

『……………いけ』

無口の女の子にけしかけられた無数の狼がリボンの女の子に飛び

かかっっていく。リボンの子は事も無げに、その狼達を処理していく。続いて、無口の子がでっかい恐竜を召喚して立ち向かわせていると、リボンの子の背後にどこかで見た別の少女の姿があった。

『私は魔物を討つ者だから』

かなり前のテレビドラマで見た、女剣士だった。まさか、あのドラマと繋がっていたのかな？

「うーん、うーん、むぎむぎむぎー」

その時、台所から夏海ちゃんのうめき声が聞こえてきた。

俺は反射的にテレビを消して、台所へ向かった。確か猪肉の下処理をするって、張り切っていたはずだけど。

「夏海ちゃん、どうしたの？」

「あ、鷹原さん」

台所では、一度冷凍庫に入れられていた猪肉が解凍され、ボウルに入れられていた。夏海ちゃんはその前で、悩んでいるようだった。

「この独特の匂いが、どうしても消せないんですよ」

「え、どんな匂い？」

俺もちよつと鼻を近づけて、匂いをかがせてもらう。何とも言えない、癖のある匂いがした。

「色々試しては見たんですが」

肉の入ったボウルの周囲には、塩コショウからみりんまで、加藤家にあるあらゆる調味料が並べられていた。

「この辺の調味料じゃ、消えないの？」

コショウとか、効果ありそうなもんだけど。

「はい。どうしても残ってしまうんです。これだと、とてもじゃないですがチャーハンにできません」

夏海ちゃんは頭を抱えてしまった。ログボで毎日チャーハンを目指す夏海ちゃんにとっては死活問題だ。

「そうだ、しろはなら良いやり方を知ってるかもしれないよ？」

「本当ですね。しろはさんなら、きっと良い方法を知ってるはずです！ 探しに行きましょうー！」

猪肉をいったん冷蔵庫に戻して、俺と夏海ちゃんは歩いてしろはの家に向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろはー」

二人でしろはの家を訪れ、玄関から声をかけてみる。

「……居ないみたいですね」

「……あれ、この流れはもしかして」

「どうしたんですか？」

「いや、前も同じような流れから、しろはを島中探し回ったような……へじやぶかな」

「へじやぶですか？」

「そう、へじやぶ」

「それって、デジャヴじゃないんですか？」

「なんだったけ、この島の方言か何かだったかな」

よくわからないけど、そう口走ってしまった。

「とりあえず、別の場所を探してみようか」

「あ、その前に一ついいですか」

「どうしたの？」

「ちよつと気になることがありますよ」

夏海ちゃんはそう言うのと、鶏小屋の方へ駆けて行ってしまった。なんだろう。

「鷹原さん、見てください。ハチの巣がなくなってますよ」

夏海ちゃんに言われて、俺もハチの巣のあった場所を見ると、ハチの巣は跡形もなくなっていた。

「本当だ。きつと業者が来て駆除してくれたんだね」

「これで、しろはさんもごぼとさんも安心ですね」

しろははともかく、あのじーさんを心配する必要はないと思うけ

ど。

大方、業者じゃなくて、しろはのじーさんが素手でハチの巣を叩き破壊した可能性も捨てきれない。

「心配事が一つ減りましたし、しろはさんを探しに行きましょう！」

「うん、そうしようか」

一度加藤家へ戻り、バイクに乗り換える。

前回の出来事を教訓に、一番にしろは食堂へ行ってみたけど『準備中』の札がかかったまま、無人だった。

「しろはさん、ここにもいませんね」

「そうだ、漁港ならどうだろう」

俺は先日のしろはの話を思い出し、もしかして漁港に食材の仕入れに行っているのではと考えて、バイクを走らせた。

「おお、いた」

漁港に行くと、ようやくしろはの姿を見つけた。

ちようど漁師さんと話していたので、少し離れたところにバイクを止める。

漁師さんとの話が終わるのを待ってから、しろはに話しかける。

「よう、しろは」

「あ、羽依里に夏海ちゃん」

「仕入れに来てたのか？」

手に何も持っていないけど、打ち合わせ程度だったんだろうか。

「旬の食材の話をしてただけ。日替わりメニューの関係もあるし」

「そうなんだ」

「あの、しろはさんに聞きたいことがあるんですけど」

「え、何？」

夏海ちゃんが早速本題を切り出していた。

「しろはさんに、猪肉の匂いの取り方を聞きたいんです」

「猪肉？ 急にどうしたの？」

「実はですね……」

夏海ちゃんが、これまでのいきさつをしろはに話す。

「そうなんだ、猪肉をチャーハンに……」

「はい。それで匂いを消そうと試行錯誤してるんですけど、どうしても消せなくて」

「イノキングの沢田さんのことだし、絞めた後の処理は完璧にしてくれてるはずだけど」

それでも、匂いを完全には取り除けないんだろう。

「コショウとかいろいろ試してみたんですが、ダメなんです。しろはさん、何か良い方法を知りませんか？」

「うーん、そうだね……」

しろはも腕組みをして、その場で考え始める。

「私が匂いがきつい食材を調理するときには、香味野菜で匂いを消してるけど」

「香味野菜？」

「生姜やニンニク、ネギとか」

「ニンニクやショウガは試してみました。チャーハンですから、ネギも使ってます」

「駄目だった？」

「はい……」

「そう……」

二人して考え込んでしまっている。料理の話だし、俺が口を挟む余地はなさそうだ。

「他の料理なら、強めの味付けで誤魔化せるけど。赤味噌や醤油、カレーとかね」

「カレーですか……いのカレーチャーハンはどうでしょうか？」

「良いと思うけど、チャーハンじゃ使うカレー粉の量が少ないし、猪肉の匂いを完全に消すことはできないかも」

チャーハンを前提にした場合、もつと抜本的に、猪肉そのものから匂いを取らないといけないらしい。

「チャーハンが良いんです。チャーハンにしたいんです」

夏海ちゃんの意志は固いようだ。それこそ猪肉のように。

その後も二人の話し合いは続いたけど、結果は芳しくなく、揃って頭を抱えてしまっていた。

「そうだ、その猪を獲った猟師さん……沢田さんなら、別の方法を知ってるじゃないか？」

俺はふと、そんなことを思いついたので、二人に提案してみる。

「おじーちゃんが言ってたけど、今日は沢田さん、猪の品評会で本土の方に行ってるらしいよ。夕方にならないと戻ってこないって」

「え、そうなのか」

……こういう時に限って。

「名誉会長だから、参加しないといけないんだって」

「名誉会長なら、仕方ないですね……」

一瞬見えた希望が潰え、夏海ちゃんががっくりと肩を落とす。

「……む？　こんな所で突っ立って、何の話をしているんだ？」

その時、俺たちの背後からのみきが声をかけてきた。頭の麦わら帽子が、ものすごく似合っていた。

「ああ、のみき……」

「ど、どうした。三人が三人とも元気が無いように見えるが」

「実はですね……」

夏海ちゃんがさつきと同じように、のみきにこれまでの経緯を話して聞かせる。

「そうか、猪肉の臭みの消し方か」

「はい……」

とりあえず話をしては見たものの、のみきが料理をするという話は聞いたことがない。

「それなら、天善に聞いてみたらどうだ？」

「え、天善さんですか？」

「ああ。天善の家は沢田さんの家と昔から付き合いがあるらしくてな。よく一緒に猟について行って行っていたらしいぞ。下処理のやり方も、教わっていたはずだ」

「ありがとうございます。のみきさん！」

夏海ちゃんがのみきの手を取って、ぶんぶんと上下に激しく振っていた。よほど嬉しかったんだろう。

「それじゃあ、次は天善を探さないかね」

「はい！」

天善が居るとしたらどこだろう。やっぱり秘密基地だろうか。

「天善君なら、今日は島の反対の港で、出店をやってるんじゃないかな」

「え、そうなのか？」

「うん。商店のおばーさんが、そう言ってたよ。色々なお肉を仕入れていたって」

「わかった。ちよつと行ってみるよ」

しろはとのみきから有力情報を得る事ができたし、天善は港で間違いないだろう。

俺は夏海ちゃんを促して、バイクにまたがる。

「二人とも、ありがとうな」

「気にするな。力になれたなら、なによりだ」

「うん。夏海ちゃん、いい結果になることを祈ってるから」

「はい！ ありがとうございました！」

二人にお礼を言った後、キックスイッチでエンジンを始動させて、一路島の反対側の港を目指した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に到着し、適当な所にバイクを止める。同時に、どこからか食欲をそそる匂いが漂ってきた。

匂いの元を探すと、いつもの場所に鉄板焼きの出店が出ていた。見ると、中で天善が肉を焼いている。しろはの情報は間違っていないかったみたいだ。

「よう、天善」

「天善さん、こんにちわです！」

「む、鷹原と夏海か。まあ見ていってくれ」

「鉄板焼きか？」

「ああ。こうして暑さに耐えながら、あえて重くした鉄ヘラで肉を素早く動かしながら焼く。これがすごいトレーニングになるんだ」

「そ、そうか」

トレーニング談義は軽く流しておいて、本題に向かわせてもらおう。

「なあ天善、それって何の肉？」

焼きあがった肉は、透明なフードパックに入れて売られていた。よく見ると、牛や豚バラ、鶏肉に混じって見慣れない肉があった。

「猪肉だ。今日のログボでも配られていたが、うちの家も沢田さんから結構な量を貰ってな。こうして売ってるわけだ」

「ところでその肉、きちんと処理してるんだよね？」

「もちろんだ。獣肉は下処理が大事だからな」

「天善さん、そのやり方、詳しく教えてください！」

夏海ちゃんが天善にぶつかりそうな勢いで、全力でお願いしていた。

「ああ、猪肉で良いのか？」

「はい！ お願いします！」

「そうだな。猪肉は独特の臭みがあるが、茹でた後にお湯で洗うと臭みや脂を洗い流せる」

「え、一度茹でちゃうんですか？」

「茹でる前に醤油やんにくを使って匂いを消そうとしても、脂の膜に弾かれて、匂い消しの効果が薄い。一度茹でてからやるのがポイントだ」

「勉強になります！ あと、もう一つ教えてもらっていいですか？」

「ああ」

いのチャーハンの完成に光明が見えてきたためか、夏海ちゃんが積極的になっていた。

「天善、この牛肉のやつを二つももらえるか？」

「ああ、二つで300円だ」

話を聞かせてもらっただけじゃ悪いので、俺の方でいくつか品物を買っていくことにしよう。

「おまけもつけてやろう」

「いいの？」

「どのみち、午前中で営業は終了だ。余らせてももったいなからな。気にせず持って帰ってくれ」

「ちなみに、それって何の肉？」

「鹿肉だ。きちんと下処理をして熟成させているし、特製のタレに漬けて匂いも消してある。うまいぞ?」

「ありがとう。遠慮なく貰うよ」

「天善さん、もうひとつ質問良いですか？」

「ああ、何でも聞いてくれ」

その後、天善は夏海ちゃんの気が済むまで質問させてくれた。本当に助かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

帰宅後、天善から猪肉の下処理についての知識を授かった夏海ちゃんは、意気揚々と台所へと向かっていった。

「できた! できました! いのチャーハンの完成です!」

ちょうど昼食時。良い香りと共に、いのチャーハンが運ばれてきた。

「皆さんのおかげで完成しました! ぜひ食べてみてください!」

夏海ちゃんは満面の笑みだ。よほど嬉しいんだろう。

「それじゃ、いただきます」

「はい、どうぞ!」

出来立てのいのチャーハンをスプーンですくって、口に運ぶ。

長ネギとすりおろしニンニクの風味が効いていて、猪肉のあの独特の匂いも全く感じない、美味しいチャーハンだった。

ちゃんと天善から教わったやり方を守って、お湯切りをして匂いを取っているみたいだった。

「うん。美味しいよ」

「良かったです」

俺の感想を聞いて安心したのか、夏海ちゃんも座っているチャーハンを食べ始める。

「美味しいですねえ」

「……あ、お昼ご飯食べてるの?」

ちやうどその時、外から帰ってきたらしい鏡子さんが居間にやってきた。

「はい! せっかくなので、鏡子さんも一緒に食べませんか?」

「それじゃ、御相伴にあずかろうかしら」

その後、三人でいのチャーハンを堪能した。鏡子さんもいのチャーハンを褒めてくれて、夏海ちゃんも喜んでいた。

「あら、この袋は何?」

「あ、出店で買ったお肉ですよ。食べませんか?」

俺は袋を開け、フードパックに入ったお肉を取り出す。おまけに買った分もあるから、並べてみるとなかなかの量だった。

「私はチャーハンだけでお腹一杯だから、羽依里君、頑張つてね」

「頑張つてください!」

二人から笑顔でお肉の処理を任されてしまい、なんとも肉々しい昼食になってしまった。全然かまわないけど。

昼食を済ませて、片付けも終わらせてしまうと途端にやることになくなった。

「夏海ちゃん、久しぶりにかき氷食べに行かない?」

「はい、行きましょう!」

夏海ちゃんも快諾してくれたので、二人で駄菓子屋へと向かう。お昼がお肉だったのもあって、久しぶりにブルーハワイが食べたい気分

だった。

※※※※※※※※※※

駄菓子屋に着くと、近くのカーブミラーの柱にもたれかかるようにして、良一がアイスを食っていた。

「良一さん、こんにちわです」

「夏海ちゃん、ちーっす」

続いてベンチの方を見ると、紬と静久、そしてのみきの三人が並んで座り、かき氷を食べていた。

「ナツミさん、タカハラさん、こんにちわです！」

「あら、パイリ君たちも来たのね」

「ああ、今日はなんだか大所帯だな」

「最初は三谷君だけだったんだけどね。ベンチも譲ってもらっちゃって、悪いことしたわ」

「いいんツスよ。水織先輩」

良一は柱に背中を預けながら、軽く手を振っている。

「天善ちゃんは柱の陰で十分です。このベンチは女の子優先です」

そう言いながら、店の奥から駄菓子の箱を持った藍が出てきた。

「今日は藍が店番なのか？ 蒼は？」

「蒼ちゃんなら、あそこにいますよ」

藍が指差す先には、子供たちの輪ができていた。その中から蒼の声が届く。

「ししよー、このきれいな石はいくら？」

「んー、20円ね」

「そ、そんなー！」

「ししよー、こっちの貝殻はー？」

「いいとこ30円ねー」

「あれ、何やってるんだ？」

「カンテーらしいです」

紬がみぞれを食べながら、そう教えてくれた。

「鑑定？」

「はい、カンテー大会らしいです」

よくわからないけど、そういう遊びなんだろうか。

「そうだ藍、かき氷貰えるか？」

とりあえず、近くで駄菓子屋の補充をしていた藍にかき氷を注文することにした。

「いいですよ。何味にしますか？」

「俺はブルーハワイで」

「私は、紬さんと同じみぞれにしますー！」

「はい、二つで180万円ですよ」

あ、そういえばみぞれは少し安いんだっけ。

俺は藍に180円を渡す。

「179万9820円足りませんよ」

「いつも思うんだけど、それよく瞬時に計算できるよな」

「駄菓子屋のバイト面接では、計算力を図るテストがあるんです」

「え、まじで？」

「冗談です」

……悔しい。オリジナルのオチが待っていた。

「では、ちょっと待っていてください」

藍が手早く駄菓子の補充を終えて、かき氷器の方へ向かっていった。

ベンチもいっぱいなので、適当な場所で待つことにした。

「ポーン！」

「まさか、あのサーブを返しただと！」

その時、聞き慣れた声が出た。

「あれ、イナリと天善？」

声のした方を見ると、駄菓子屋から少し離れた路上に、先の大工作大会で作られたパリングルス製の卓球台が設置されていて、それを使って天善とイナリが卓球をしていた。

「あの卓球台、見ないと思ったたらこんな所にあつたのか」

軽いから持ち運びしやすいってのは、あの卓球台最大の利点だと思う。

「あれだけ活用してもらって、きつとパリングルスも喜んでいます！」

その様子を眺める紬も喜んでるようだった。

「ポポーン！」

「ぐはっ、また負けた！」

「11―1で、またイナリちゃんの勝ちね」

「ポーン！」

どうやら静久が得点係を務めているらしかった。

「天善、圧倒されていたみたいだが、一点取ってるじゃないか」

「その一点、イナリのサーブミスみたいよ」

その時、ようやく子供達から解放されたらしい蒼がこっちにやってきた。

「イナリ、少しは手加減してあげないと、あいつ自信なくしちゃうわよ？」

「ポーン」

キツネに手加減されるってのもどうかと思うけど。

「あ、そういえば天善、新しいラケット届いてるわよ」

「おお、助かる」

そういえば何日か前に、例の通販代行で頼んでいたよな。

「代金は後日でもいいけど？」

「いや、今払おう」

「それじゃ、代行手数料込みで二万三千円ねー」

え、にまんさんぜんえん？

「た、卓球のラケットって、結構するんだな」

「ああ、プロ用だからな」

「イナリ、このラケットを使って、もうひと勝負どうだ？」

「ポーン！」

天善はそのラケットを受け取るや否や、イナリとのリベンジマッチを始めた。

「相変わらず賑やかですね……はい。ブルーハワイとみぞれ、おまちどうさまです」

そのタイミングで、藍が俺たちの分のかき氷を持ってきてくれた。「えーつと、どこで食べようかな……」

かき氷を受け取った俺達が、どこで食べようか悩んでいると……。

「くーださーいなー」

鴎としろはがやってきた。

「あれ、なんか人多い？」

「本当だね」

駄菓子屋に来るなり、人の多さに驚いているようだった。

この場所にこれだけの人数が集まるなんて珍しい。俺も驚いてる。

「二人ともどうしたんだ？」

「私はいつものスイカバーを買いに」

「私はいつものメロンバーを買いに」

「しろははわかるが、鴎はいつもメロンバー買ってないだろ」

「良いじゃない。美味しいんだから」

なぜか怒られてしまった。

「あ、いらっしやーい」

「あおちゃん、スイカバーとメロンバーを一本ずつ！」

蒼にアイスを注文しながら、二人は鴎のスイーツケースと一緒に座っていた。こういう時って便利だよな。あのスイーツケース。

その後、しろはと鴎がアイスを食べ終わったのと時を同じくして、天善とイナリの卓球も終了した。

ちなみに、結果は1ー2でイナリの圧勝だった。

「新しいラケットでも、あまり結果は変わらなかったな」

「まだ手に馴染んでないだけさ。また特訓だ」

「そ、そうか。頑張れよ」

そんな天善を、俺は応援することしかできなかった。

「羽依里、ちよいちよい」

その時、鷗に手招きされる。呼ばれた方に行ってみると、鷗がスーツケースから折りたたまれた布を引っ張り出しているところだった。

「羽依里、そっち持って」

「え、なんで俺」

「男の子だから！」

鷗に言われるがまま、俺はその布の端を持つ。

「いくよ、せーのー！」

反対側を持った鷗とタイミングを合わせて、その布を大きく広げる。

「出張！ なんでも鑑定隊！ in 鳥白島！」

鷗と蒼が同時にそう叫ぶ。俺が広げた布にも、でかでかと同じ文字が書かれていた。

「いえーいー！」

「やつほー！」

周りにいた子供たちが盛り上げてくれる。

「なんでも鑑定隊？」

なんでも鑑定隊って言うのとあれだろうか。よくテレビでやってる、お宝の鑑定番組だろうか。

「そう。今日のイベントよ」

「あの、蒼さん。鑑定隊って何ですか？」

夏海ちゃんがおずおずと手を上げて質問する。今どきの子だと、知らないのかな。

「時々、駄菓子屋でやってるんだけどね。皆が持ってきてくれたお宝を、あたしが鑑定するイベントなの」

「どんなものを持ってきてもいいんですか？」

「島にあるものなら、なんでもいいわよー。一見ガラクタでも、ひよつとしたら驚きの鑑定結果が出るかも知れないしね」

「なあ蒼、今回も賞品出るのか？」

例によつて一番気になるところを聞く良一。男らしい。

「うーん……それじゃ、駄菓子屋で使える商品券500円分！」

「おお、マジかよー！」

良一をはじめ、会場が一層盛り上がる。

「蒼ちゃんの自腹ですよ。感謝してくださいね」

「あと、副賞として羽依里とデートね」

……ってあれ？ 今何か、聞き流してはいけない単語が聞こえたよ
うな気が。

「鑑定大会、面白そうです！」

「それじゃ、俺たちも参加しようか」

夏海ちゃんも乗り気だし、参加しない選択肢はない。今日のイベントだし。

「あ、そういえば蒼、参加費とかは？」

「もちろん無料よ」

「わたしも参加する！」

「ぼくも！」

参加費無料と聞いて、次から次に参加者が増える。結局子供たちを含め、その場にいたほぼ全員が参加することになった。

「制限時間は今から一時間！ 島が一番価値がありそうなものを探して、ここに戻ってきてね！」

その後、鑑定士役の蒼がルールの説明をする。

「なあ、鑑定士役が蒼だけだと、誰が優勝するかは蒼のさじ加減一つじゃないのか？」

「あ、そう言われればそうね」

何か裏があるとかじゃなく、純粹に気付いてなかったみたいだ。

「じゃあ皆が戻ってくるまでに、もう一人鑑定士役の人を呼んでおくわ。誰が来るかは、その時のお楽しみってことで」

それだと公平だし、何より面白みが増す気がする。

「それじゃ皆、頑張つてね！ よーい、スタート！」

「よしいけー！ー！」

蒼のスタートの合図と同時に、子供たちが一斉に散っていった。

「よし、いくぜー！」

「しゅっぱーっ！」

それと時を同じくして、良一や鷗たちも四方に散っていった。神社の方に向かう良一とのみき、秘密基地に向かう天善、灯台へ向かう紬と静久、夏海ちゃん。

住宅地の方へ向かうしろはと藍、港へ向かう鷗。

……気がつけば、俺は一人だけが駄菓子屋の前に残されていた。

「ほら羽依里、早く行かないと後れを取るわよー？」

「ポーン！」

「わ、わかつてる！」

蒼とイナリに急かされるように、俺も駄菓子屋を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

気がつけば、俺はため池にやってきた。

「れいだーん」

ここに来ると、必ずこれをやらないといけない気がした。

「さて、何か珍しいものがないかな」

さっそく俺はお宝探しを開始する。

ため池周辺にはうっそうと雑草が生い茂り、中を探したところでバツタやコオロギが飛び出してくるだけで、特にめぼしいものは見つからない。

「さすがに、この辺にはないよな」

続いて池の中を覗き込む。水面を滑るアメンボや、池の底を元気に動き回るザリガニが目についた。

「でも、ザリガニを持って行っても大した評価額は望めないよな」

昔テレビで有名になった人面魚みたいなのがいれば、話は違うんだろうけど。そんなものが居る気配はない。

……その時、近くの茂みからガサガサと物音が聞こえた。

「な、何かいる!?!」

俺は思わず、れいだんの格好で身構える。草をかき分けながら、その音はだんだんと近づいてくる。

「ぶっひー!」

「な、なんだこいつ?!」

次の瞬間、茶色くて丸っこい動物が飛び出してきた。

「なんだ、ただの偶蹄目かよ……」

つまるところのイノシシの子供。ウリボウだった。

「待てよ。子供がいるってことは、親もいるんじゃないか?」

俺は急に怖くなり、周囲を警戒する。

「……あれ?」

しばらく様子を見ていたけど、親イノシシが出てくる気配はなかった。

「ぶひぶひ。ぶひぶひ」

その間も、ウリボウは俺の足に鼻をスリスリと擦り付けてくる。よく見ると、すごくプリチーだった。

もしかして、お昼に食べた猪肉のおかげで匂いがついて、仲間と思われるんだろうか。

「ぶひぶひ」

「なんだか可愛いなお前」

試しにひよいっと持ち上げて、そのまま抱いてみる。暴れることもないし、気持ちよさそうに腕の中に納まる。

そうだ。イノシシの子供とか、なかなか珍しいんじゃないだろうか。

「なあお前、俺と一緒に大宝鑑定隊に出してみないか?」

抱きかかえたまま、そう聞いてみる。

「ぶっひー!」

了承してくれた気がした。この島には人語を理解するキツネだっているんだし、こんなイノシシもいるのかもしれない。

俺はウリボウを抱きかかえたまま、駄菓子屋へと戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

駄菓子屋に戻ると、時間ギリギリだった。他の皆は蒼を中心に集まり、輪を作っていた。

「うん？ あの人って……」

そしてよく見ると、その蒼の隣に見慣れた人の姿があった。

「紹介するわ。鳥白島の歴史や古物品に造詣が深い、岬鏡子さんよ」
「皆、よろしくね」

ちやうど集まった皆に、鏡子さんの紹介をしていたみたいだ。

「まさか、もう一人の鑑定士役って、鏡子さんなんですか？」

その輪に加わりながら、そう口にしていた。

「ちやうど駄菓子屋さんに荷物を受け取りに来たら、捕まっちゃってね」

鏡子さん、また駄菓子屋で何か通販をしたんだろうか。

「それじゃ、あたしと鏡子さんと相談して鑑定結果を出すわね。その金額が一番高い人が優勝よ！」

「よーし、やるぞー！」

「オレが一番だー！」

子供たちを含めて20人は集まっている。それぞれがお宝と思うものを持ってきたみたいだ。

「きちんと並んでー。まずは小さい子から順番に持ってきてねー」

「はいー！」

そして鑑定大会が始まった。

「わたしのお宝は、綺麗な貝殻！」

「うーん。鑑定結果、80円！」

「えー、もうちよつとー」

「ぼくのお宝は、セミの抜け殻！」

うん、実に子供らしくていい感じだ。いかにも夏の思い出って感じ

だし。ポケットに入れて持って帰りたいくらいだ。

「鑑定結果、90円!」

蒼と鏡子さんも、笑顔でそれなりの鑑定結果を下していく。

「はい、次の子ー?」

「オレは、ヒマワリ畑で見つけたロボットのおもちゃ!」

「うーん、かなり古いし……鑑定結果は100円ね!」

結構高額な方だったけど、ヒマワリ畑って。あの男の子、一時間であんな場所まで行ったんだらうか。

その後も着々と鑑定は進んでいく。

「わたしはこれ! はなよめさんのベール!」

ベール? 花嫁ってことは、結婚式で使うアレ?

「ものみのおかにおちてたの!」

ものみの丘ってどこだろう。そんな場所、この島にあったっけ。

「鑑定結果は400円だね」

「やったー!」

結構高めの査定結果だった。一気にトップだ。

「オレはこれ! かーちゃんのへそくり!」

「これは3万円ね」

鏡子さんが冷静に鑑定額を示す。というか、金額そのままだった。

「やったー! 最高額だ!」

「うん、返してきなさい。ちゃんと元の場所にね」

「ちえー……」

続いて蒼に笑顔で怒られていた。男の子はうなだれながら、へそくりを持って家へ帰っていった。

「持ってきちゃいけないものだから、鑑定結果は0円ねー」

まさか、へそくりを持ってくるなんて。確かにお宝だけど、こういう時って子供の純粋さが逆に怖い。

「……ところで鷹原さん、さつきから抱いてるその動物はなんですか?」

夏海ちゃんが興味津々で、俺の腕に抱かれているウリボウを覗き込む。

「ぶっひー！」

「ウリボウだよ。珍しいでしょ」

「なんだ、親とはぐれたのか？」

「ぶ、ぶひぶひー！」

天善が手を伸ばすと、急に暴れ出した。どうしたんだらう。

ひとまず地面に下ろしてやると、すぐに俺の後ろに隠れてしまった。

「……ポン？」

そこにイナリが寄ってきた。

「ぶっひー！」

「ポンポーンー！」

「ぶひぶひー！」

俺たちには理解できないけど、謎の会話が成立している。島モン同士、謎の絆が生まれているみたいだ。

「かわいいですね」

イナリと別れたウリボウを、今度は夏海ちゃんが抱きかかえる。全然暴れる様子はない。

夏海ちゃんも俺と同じように猪肉を食べていたし、きっと仲間と思われたんだらう。

「羽依里たちも、そろそろ準備してねー」

やがて子供たちの鑑定が一通り終わり、俺たちの番になる。

「それじゃ、誰から鑑定する？ 誰からでもいいわよ？」

「僭越ながら、私から行きますー！」

そう言っただけに出たのは鷗だった。

「鷗はどんなお宝を持ってきたの？」

「これですー！」

鷗が取り出したのは変わった形の石だった。

「港に流れ着いてたの！」

「これ、サンゴよね」

「そうね。色合いは悪くないと思うけど」

それを蒼と鏡子さんが真剣な目で見ている。本物の鑑定みたい

だった。

「もしかして、驚きの鑑定結果はCMの後!？」

「いや鷗、CMとかないから」

俺は思わずツツコミを入れていた。

「うーん、鑑定結果は300円ね」

「思ってたより低いー!」

「本当に低いな……サンゴも宝石になるっていうけど」

「うん。全体の形がうまく残っていればね」

「あー、なるほどな」

「うう、もつと修行してきます……」

鷗はスーツケースを引いて、すぐごと退散していった。

「よし、次は私が行こう」

そうやって歩みを進めてきたのは、のみきだった。

「のみきはどんなお宝を持ってきたの?」

「これだ」

そう言つてのみきが出したのは、小さなクワガタだった。確か神社の方に行つたはずだけど。

「神社の裏手の木に、こいつがいたんだ。あまり大きくはないが、恐らくオオクワガタじゃないか?」

「本当ね、これはオオクワガタだわ」

鏡子さんが掌に乗せて、じっくりと観察している。

「こういうものはミリ単位で値段が変わるから、一概には言えないけど……本土のデパートなら、そうね……」

鏡子さんが顎に手を当てて考えている。蒼の方はこういうのには疎いみたいで、一歩引いてる。

「じゃかじゃん!」

「鑑定結果、5000円!」

「い、5000円!?!」

思わぬ高額鑑定に、会場がざわつく。

「すっげー、だんちよー、みせてみせて!」

「オレも見たい！」

「わ、わかったから引つ張らないでくれ……」

鑑定終了後、のみきは男の子たちに引つ張って行かれた。金額はもとより、オオクワガタを捕まえたとなると子供たちのヒーローだもんな。

「はい、次は誰かしら」

「それじゃ、私が行くよ」

のみきが続いて鑑定に挑んだのは、しろはだった。

「お、しろはなのね。お宝は何かしら？」

「これ」

しろはが取り出したのは『当たり』と書かれたアイスの棒だった。

「え、これ……何？」

さすがの蒼も戸惑っている様子だった。

「スイカバーの当たり棒」

「へっ？」

「しろは、当たり付のスイカバーとかあるのか？」

少なくとも、この駄菓子屋に売ってるスイカバーで当たりが出たなんて話は聞いたことがない。

「だって、実際に出たの。スイカバー食べたら、当たりって」

「そのスイカバー、もちろんこの店で買ったのよね？」

「うん」

「……それっていつの話？」

「もう5年くらい前になると思うけど……」

「うーん……」

蒼がしろはから当たり棒を受け取って、じつと見る。どう見てもただの当たり棒だ。ものすごく返答に困っているようだった。

「もしかして、スイカバーの製造過程で別の当たり付きアイスの棒が混ざったんじゃないかしら」

一時の沈黙の後、鏡子さんがそう答えを導き出していた。

「なるほど、そういうことか」

会場の皆も頷いていた。確かに、それなら納得だ。

「しろは、それで鑑定結果だけど」

「じゃかじゃん！」

「残念だけど、1000円ね」

「ひゃ、1000円……」

「……だつてスイカバーだし」

もつともな理由だつた。

「ものすごいお宝だと思つたのに。1000円……」

スイカバー大好きさんはブツブツ言いながら、ものすごく残念そうな顔をして戻つていった。

「ところで鷗、さつきから言つてる『じゃかじゃん！』つて何？」

「効果音みたいなもの。あつたほうが盛り上がるでしょ？」

よくわからないけど、本人が楽しそうだから、それ以上は何も言わないことにした。

「次は私が行くわ！ これはすごいお宝よ！」

意気揚々と蒼達の元へ向かつたのは静久だつた。

「水織先輩、すごい自信ですね。さつそくお宝を見せてもらえますか？」

「これよ！ 灯台に干してあつた、紬の水着のブラ」

「むぎゅ〜〜〜！」

静久が言い終わるより早く、紬が光の速さでそれを奪い取り、走つて行つてしまった。

「ああん！ 私のお宝が……！」

いや、あれ紬のだから。

静久のおっぱいに対する情熱というのも、時々暴走しちゃうよね……。

「えーっと。鑑定結果だけど、対象物がなくなつたつてことで、0円ね」

まあ、しょうがないよな。

「次は私です！」

次は夏海ちゃんの番だった。

手には小さい小瓶を持っていて、中には小さい何かがいっぱい詰まっていた。

「私が見つけた宝物は、これです！」

小鬢の中には、沢山のさくら貝が詰まっていた。

「灯台近くの浜辺で、頑張って集めました！」

「えーっと、そうね……」

鑑定士の二人が小瓶からさくら貝を出して、チェックしている。

「夏海ちゃんだし、色目をつけてあげたいけど……」

「蒼ちゃん、鬣は駄目よ。鑑定道の基本は平等からよ」

鑑定士二人の間で何やら小声で話している。ところで鑑定道って何だろう。

「じゃかじゃん！」

「鑑定結果、30円」

「無念です……」

夏海ちゃんがつくりと肩を落としている。

「確かにきれいだけど、この島じゃそこまで珍しいわけじゃないからね」

「でも、せっかく集めたので島の思い出として持って帰ります！」

「うん、それがいいわよ」

夏海ちゃんは蒼から小瓶を返してもらって、笑顔で皆の列に戻っていった。

「次は俺だぜ！」

そう言っただけに出たのは、良一だった。

手には彫刻が彫られた、丸く平べったい物体を持っていた。

「良一、それなんだ？」

「神社の周りを探してたら、社殿の脇に落ちてるのを見つけてな。この彫刻のとか見ると、かなりのお宝だぜ」

薄汚れたその物体を、鑑定士の前に置く。

「えーつと……つ!?」

その物体に触ろうとした蒼が、びくつと肩を震わせる。

「あれ。蒼、どうした?」

「あーうん。ちよつとね……」

努めて笑顔だが、冷や汗をかいている。どうしたんだろうか。

「これ、ずつと昔に神社に奉納された鏡じゃないかしら」

「え、鏡?」

鏡子さんもなるべく手を触れないようにしながら、その物体を鑑定している。

言われてみれば、彫刻が彫られている面の反対は光沢を放っていて、鏡と言われれば鏡っぽい。随分古いものみたいだけど。

「昔読んだ文献に、これにそっくりな鏡の話が載っていたよ。いろんな人の手を渡り歩いて、その持ち主全員に不幸をもたらしたついで、いわくつきの鏡だとか……」

「……」

話を聞いているうちに、良一の顔がみるみる青ざめていく。

「きつと、社殿の中に納められていた鏡が、何かの拍子に外に出ちやつたんだろうね」

「良一、戻してこい」

「断る! もう触りたくない!」

オカルトの観点から見ても良い感じはしなかったので、良一に返却を勧めるが、本人は断固拒否の構えだ。

「天善ちゃん、後でお祓いしてあげますから、さつさと返ってきてください。さもないと後が怖いですよ?」

「わ、わかったよ……うう……」

藍に一睨みされ、良一はしぶしぶ鏡を持って、神社へと向かっていった。

結局、いわくつきの品物に値段をつけるわけにもいかず、鑑定結果は0円だった。

それにしても、藍のお祓いってどんなことするんだろう。オカルト好きとしては気になる。

「次は俺が行こう」

続いて天善が前に出た。手には予想通りというか、ピンポン玉を持っていた。

「えーつと天善、一応聞いておくけど、お宝はなに？」

「これだ。秘密基地で見つけた、スタースリーだ！」

スタースリー？ なんだろう。必殺技を発動する時の消費MPが1にでもなるんだろうか。

「このピンポン玉を見てくれ。スタースリーだから本来描かれている星は3つだが、これは4つも描かれているんだ」

「えーつと、だから何？」

「レアなんだ」

「そ、そう」

鑑定士役の二人も意味が分からないようで、頭の上に疑問符が浮かんでいた。

「えーつと、いわゆるミスプリントっていうものなのかな。でも、こういうのは……切手とかならわかるんだけど、ピンポン玉のコレクターって聞いたことないし……その」

鏡子さんが言葉を選んでいるのがわかる。大変そうだった。

「……鑑定結果、30円」

そんな鏡子さんをよそに、蒼が冷たく言い放つ。

「そ、そんな……俺のスタースリーが……！」

天善はその場に膝をつくが、鏡子さんも何も言わない辺り、その金額で決まりのようだった。

「天善ちゃん、終わったならさっさとどいてください。次は私の番ですよ」

そう言いながら天善を押しつけてやってきたのは藍だった。手には一冊のノートを持っている。

「えつと、もう既に嫌な予感しかしないんだけど、藍のお宝って何？」

蒼は顔を引きつらせながら、おっかなびつくりに聞いている。

「もちろん。蒼ちゃんの観察日記ですけど」

あ、前に言ってたあれか。

「私のお宝です」

「ちよつと藍、そんなもの持ってこないで！」

「どうぞ、鑑定してください」

そんな蒼の言葉を無視して、藍が観察日記のページを開きながら、鑑定士二人のそばへ寄っていく。

「パサーー！ 鑑定不能ですー！ だめー！ー！」

蒼は断固拒否の構えだった。

「……それじゃ、私が見て、鑑定します」

一方の鏡子さんは覚悟を決めたらしく、蒼の観察日記を受け取る。

「それじゃ、検閲」

そして、ページをめくっていく。観察日記って言っても子供の頃の話だし、そこまで大したことは書いてなさそうな……。

「……まっ」

数ページ読んだところで、顔を真っ赤にして固まってしまった。

「……これは、ちよつと刺激的ね」

そう言って、パタンと観察日記を閉じてしまった。

……なにが書いてあったんだろう。

「……鑑定結果、500円」

そして、鑑定結果も地味に高かった。

「次は羽依里よー」

「よし、いくぞウリボウ」

「ぶっひー！」

俺とウリボウは腹を決めて蒼達の前に出る。

「俺の見つけたお宝はこいつだ！」

「ぶひぶひー！」

俺はウリボウの顔が二人の方を向くようにして、差し出す。

「へー、どこで見つけたの？ かわいいーわね」

「ぶひぶひー」

蒼がそのウリボウを受け取り、抱きしめる。

「んー、このつぶらな瞳で見つめられると、たまらないわよねー」
ウリボウもスリスリと蒼の頬に鼻をこすりつけて、猛アピールしている。

「……ごめん、この子に値段はつけられないわ！ 可愛すぎ！」

……あれ？ これって逆効果じゃないか？

「なあ蒼、そこをなんとか……」

「ごめん、無理！」

……その後、結局蒼は査定放棄してしまった。

「それじゃ、私が評価するね」

蒼に代わって、鏡子さんがウリボウの鑑定をすることとなった。

「食べ頃になるまでの飼料代と、ゆくゆくは食べるんでしょ？」
みるわね？」

「ぶひっ？」

「あの、鏡子さん？」

「え、だってゆくゆくは食べるんでしょ？」

「食べません！」

夏海ちゃんが叫んでいた。

「そうなの……じゃあ、私も鑑定額は出せないわね」

二人の審査員が査定放棄したことで、俺の鑑定額は0円となってしまうった。

「ぶひっ」

しかし、ウリボウは安心した表情で、再び夏海ちゃんに抱かれていた。

「っ、疲れました……」

その時、紬が戻ってきた。

もしかして、今の間に灯台まで行って来たんだろうか。

「ちようど良かったわ。紬が最後よ」

「はい！ わたしが持ってきたのは、これです！」

紬がスカートのポケットから小さな石を取り出して、蒼に渡してい

た。

「漂着物の中に綺麗な石がありました!」

「素晴らしいと言えば素晴らしいけど、小石程度じゃ大した値段もつかないだろう。」

「あら、これってコーパルね」

「え、コーパルって?」

「琥珀のことね」

「琥珀って宝石?」

「樹液が固まったものね。人工的に作られたものもあるけど、これはもしかして」

「鏡子さんはそこまで話すと、眼鏡をかけた。どうやら本気モードみたいだ。」

「やっぱり天然ものね。それにここをよく見て。中に虫が閉じ込められているわ」

「あ、それは気づきませんでした!」

「あれ、これってもしかして高額査定の流れじゃ?」

「最後の鑑定ということもあって、会場の皆が集まってくる。」

「サイズも5センチはあるし、これだけの大きさで天然ものだとすると……」

「……CMの後、灯台の女神が持ってきたお宝に驚きの鑑定結果が——!」

「だから鷗、CMとかなないから」

「そうね……5万円くらいするんじゃないかしら」

「はっ」

「まんえん? あの小さな欠片が?」

「鑑定結果、5万円!」

「鑑定結果が確定し、蒼がそう宣言する。」

「おお、すごいよツムツム!」

「ということは、紬の優勝ね!」

「紬の手を取って、まるで自分の事のように喜ぶ静久。」

「むぎゆ、まさかの逆転優勝です!」

なにが逆転なのかよくわからないけど、紬も飛び上がって喜んでた。

「おめでとう紬。これ、優勝賞品の500円商品券」

「はい！ ありがとうございます！」

蒼から商品券を受け取って、満面の笑みを浮かべる。

「副賞のデートの日程は、二人で決めてね」

「むぎゆ……？」

続けてそう言われ、紬はキョトンとしていた。

「蒼、副賞って何だっけ？」

蒼から送られている視線も気になったので、俺も聞いてみた。

「何って、羽依里とのデートって言ったはずだけど」

「……」

そういえば、しれっと言っていたような気がしないでもない。

「え、でも、それって、その、あの……」

俺はしどろもどろになりながら、しろはと鏡子さんに視線を送る。

「……私は、しろはちゃんに一任します」

鏡子さんは笑顔でそう言い、その場を立ち去ってしまった。

そのままの流れで、しろはに視線を送る。

「……いいよ。行ってきたも」

予想外にも、しろはからはすぐにOKが出た。

「え、いいの？」

「相手は紬だし。変な間違いは起こらないと思うし」

まあ……確かに。

「それに、鑑定結果100円の私が5万円の紬に文句は言えないし」

あ、そこ重要なんだ。

「ツムツム、デート頑張ってるね！」

「む、むぎゆ……」

鴉が紬に声援を送っているけど、当の本人は顔を真っ赤にしている。

「無理です！ 恥ずかしすぎて、死んでしまいそうです！」

「……おっと、しろはちゃん公認なので、逃げられないですよ」

先程と同じように走って逃げようとした紬を、藍がしっかりと捕まえていた。

「そ、それでは一人だと不安なので、シズクも一緒をお願いします！」

「え、私も!？」

「はい！　お願いします！」

「わ、わかったわ。紬のお願いなら断れないし」

あれ、また女の子二人とデートする流れかな、これ。

「鷹原さん、また両手に花ですね！」

夏海ちゃんも、笑顔で火に油を注がないで。

「せっかくなので、ナツミさんも一緒に行きましょう！」

「え、その、せっかくだですけど遠慮しておきます！　30円でしたし

！」

そんなこんなで、大騒ぎの鑑定大会はお開きとなった。

紬たちとのデートの日程はまた後日決めることにしなった。二人には悪いけど、一難去ってまた一難とまらない事を願うばかりだった。

その後、誰から話を聞いたのか、沢田さんが駄菓子屋に来てくれ、ウリボウは沢田さんの家に引き取られていった。

親イノシシとはぐれたウリボウは自分で餌を取れず、飢え死にする場合がほとんどらしく、沢田さんの所で面倒を見てもらった方が良いという判断だった。

沢田さんに事情を話すと、ある程度大きくなるまで世話をしてくれ、その後は山に放してくれるそうだ。

「……」

別れ際、夏海ちゃんは涙目になっていた。泣かないように必死に我慢しているみたいだった。ウリボウもずっと鳴いていたし。

「沢田さんもいつでも会いに来ていいって言ってくれてたし、また会いに行けばいいよ」

「……はい、そうします」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

駄菓子屋から帰宅し、干していた洗濯物を取り込んだり、お風呂を洗ったりと家事をこなした。日が暮れる頃には、夏海ちゃんも多少元気を取り戻しているみたいだった。

俺たちは頃合いを見て、しろは食堂へと向かう。

「しろはー」

「いらっしやい」

夕食を食べに食堂に行くと、いつものようにしろはが出迎えてくれた。

「そういえば夏海ちゃん、いのチャーハンはうまくできたみたいだね」
鏡子さんに聞いたんだろうか。俺たちにおしぼりを渡してくれながら、しろはがそう切り出していた。

「はい！ 美味しく食べてもらえました！」

「そうなんだ。今度、私にも作り方教えてね」

「もちろんです！」

しろはも夏海ちゃんも、嬉しそうに笑っていた。

「こんばんわー」

その時、扉が開いて鴉がやってきた。

「おお、二人とも来てたんだね」

「鴉さん、こんばんわです！」

「こんばんわ、なっちゃん」

挨拶を交わし、鴉は夏海ちゃんの隣に座る。

「それじゃ三人とも、今日は何にする？」

鴉におしぼりを渡しながら、しろはが聞いてくる。

「えっと、私は活け造り定食でお願いします」

夏海ちゃんがメニューを見ながら、活け造り定食を注文していた。

「俺もそれにしようかな。さっぱりしたのが食べたい」

お昼がすごく肉々しかったので、晩ごはんはさっぱりしたものが食

べたかった。

「さっぱりしたのがいいのなら、日替わり定食がおすすめだよ」

「そうなのか。それじゃ日替わり定食にするよ」

「しろしろ、私もその日替わりでお願い！」

「うん。少し待っててね」

三人の注文が確定すると、しろはが調理を始める。すぐに味噌汁のいい香りが漂ってきた。

そういえば、この間の佃煮ってどうなったんだろう。少し気になったので、料理を待つ間にしろはに聞いてみた。

「あの佃煮？ もう全部なくなっちゃったよ」

「あ、そうなのか」

なんだかんだで、島の皆は普通に食べるのかもしれない。

「羽依里や夏海ちゃんも美味しそうに食べてくれていたし」

「え？ 食べた記憶なんてないんだけど」

隣の夏海ちゃんも、同意するように頷いていた。

「ふふっ」

……なんだろう、しろはの笑顔が怖い。

「イナゴの佃煮は細かく刻んで、パン粉と混ぜて衣に使ったよ」

「え？」

「この間羽依里が食べてた、かつ丼のトンカツの衣とか、夏海ちゃんのコロツケとか」

「……」

カラッと揚がってる上に半熟卵が絡んでいたし、あれはわからない。

「蜂の子も細かく刻んで、夏海ちゃんが食べたコロツケの中に入れておいたけど」

「……！」

夏海ちゃんが思わず手を口元にやっていた。シヨックだったみたいだ。

「クリームコロツケ。おいしかったでしょ？」

「美味しかったです……」

「二人とも、見た目で判断しちゃダメだよ」

俺たち二人はしろはに見事にしてやられたみたいだった。

「よくわからないけど、二人ともシヨックなことがあったんだね」

事情を知らない鴎は、俺たちに慰めの言葉をかけてくれながら、おしぼりでヒヨコを作っていた。相変わらず手先が器用だな。

「はい、活け造り定食お待たせ」

しばらくすると、料理が完成したみたいだ。まずは夏海ちゃんの前
に活け造り定食が置かれた。

メインの皿にはアジとイセエビの刺身が盛られていた。これはなかなか豪華だ。

「はい、日替わりの海藻定食お待たせ」

「え、海藻定食？」

俺と鴎の前に出されたのは、ひじきご飯に、ワカメの味噌汁、海藻
サラダに、海藻とささみの生春巻きだった。

「さっぱりしてるでしょ」

「確かにそうだけど……」

「どうぞ、めしあがれ」

「それじゃ、いただきます」

「いただきますーすー！」

さっそくメインの生春巻きを食べてみる。

ポン酢をつけて食べるみたいで、めちやくちやさっぱりしていた。

「うん。美味しい」

「よかった」

ひじきご飯も素朴な味だけど、磯の香りがすごい。

「鴎もどう？」

「うん、凄く美味しいよ！ 美味しい、けど……」

そこで鴎が言いよどむ。

「なんだか、カモメになった気分」

「お前は元から鴎だろ」

しかも確か、鳥のカモメは肉食で、海藻は食べなかったような気がする。

溢れんばかりにワカメの入った味噌汁をすすりながら、そんなことを考えていた。

「しろは、ごちそうさま」

「ごちそうさまー！」

食事を終えて、先に鴬と二人で表に出る。夏海ちゃんは店の中で、何かしろはと話していた。

「あの、明日お願いがあるんですけど……」

「え、明日？」

「はい、実はですね……」

何か耳打ちしていた。一体何の話をしているんだろう。

「うん。いいよ」

「ありがとうございます！ それじゃ、ごちそうさまでした！」

いい話ができただろうか。ニコニコ顔で夏海ちゃんが表に出てきた。

「夏海ちゃん、しろはと何の話をしていたの？」

「えっと、秘密です！」

笑顔で秘密にされてしまい、俺は首をかしげる他なかった。

「それじゃ、またねー」

住宅地まで戻ったところで鴬と別れ、加藤家に帰宅する。

帰宅するなり、夏海ちゃんはまた読書をしていた。黄色い表紙の本だったし、二の巻に手を出したようだった。

「夏海ちゃん、俺もひげ猫団の冒険を借りてもいいかな？」

「うんー」

例によって本の世界に没頭してるみたいだ。ここは了承してくれたと判断して、一の巻を借りた。

「寝る前に、俺も少しだけ読んでみようかな」

自室に戻った後、俺も鴬の本を広げ、久しぶりに冒険の旅に出たのだった。

第十七話・完

第十八話 8月11日

……朝。

今日も夏海ちゃんに起こされ……。

「羽依里、朝だよ」

……いや、この声は確実に夏海ちゃんじゃない。

目を瞑ったまま、まどろみの中で思考を巡らせる。

俺を羽依里と呼ぶのは鴟か蒼、そしてしろはだけだ。

「羽依里、早く起きないとラジオ体操に遅れるよ?」

蒼はこんな優しい声で起こしてくれないだろうし……。

「……ねえ夏海ちゃん。羽依里、起きないんだけど」

鴟の声とも違うし……わかった。この声の主はしろはだ。

「こうなったら、イナリ作戦で行くしかありません!」

「え、イナリ作戦って何?」

「えっとですね……」

なにやらごにごによごによと声小さくなった。何だろう。

「え、無理。恥ずかしすぎるよ」

「ええっ、恥ずかしいんですか?」

「うん……さすがにちよっと」

イナリ作戦って何だろう。俺も気になる。

「でも彼女さんですし、頑張ってください!」

ぱたん。とふすまが閉じる音がして、周囲が静かになる。どうやら

夏海ちゃんが部屋から出て行ったみたいだ。

「……ふー」

なんだか自分を落ち着かせているみたいだ。深呼吸が聞こえる。

「……」

そして畳が擦れる音がして、しろはがすぐ近くまで寄ってきたのがわかった。

「……」

続いて鼻先にしろはの吐息を感じる。あれっ、これってもしかして。

俺の意識は完全に覚醒していた。けど、今このタイミングで起きるわけにもいかないし。必死に寝たふり続ける。

「……や」

……や？

「……やっぱり無理！」

「ぶっ!？」

何か固いもので、思いつきり顔を叩かれた。油断しきっていたし、めちやくちや痛い。

「いってて……」

思わず鼻を押さえながら上半身を起こす。見ると、すぐ近くに赤い表紙の本が落ちていた。

もしかしなくても、この本で思いつきり顔面を叩かれたみたいだ。これ、鷗の本なのに。

「えっと、おはよう、羽依里……」

声のした方を向くと、ものすごくばつが悪そうな顔で、しろはが座っていた。

「……おはよう」

「えっと、鼻、赤い、よ……?」

「そりゃあ、本で思いつきり叩かれたらな……」

「ごめん。さすがにイナリ作戦は無理だったの」

「結局、そのイナリ作戦って何？」

「それはその、キ、キ、キ……」

「キ？」

「なんでもない！」

しろはは顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

「あの一、ものすごい音がしましたけど、大丈夫ですか？」

少しだけふすまが開かれ、そこから恐る恐る、と言った感じに夏海ちゃんが顔を覗かせていた。

「えつと……イナリ作戦、うまくいきましたか？」

「ごめん。無理だった」

「そうですか……でも、鷹原さんも起きたみたいですし、結果おーらいですよね」

夏海ちゃんは笑顔で取り繕ってしてくれた。

「ところで夏海ちゃん。これってやっぱり、例の……」

「はい。鷹原さん、いつもと違う朝を味わいたかったんですよね？」

「そ、そうだけど……」

夏海ちゃんの純粋な笑顔を前に、そろそろやめてほしい。とは、とてもじゃないけど言えなかった。

「とりあえず、起こしに来てくれてありがとう、しろは」

「う、うん。別に、いいよ」

朝に弱いはずなのに、わざわざ起こしに来てくれたしろはにお礼を言う。

「それじゃ、玄関で待ってるから、早く準備して来てね。ラジオ体操に遅れるよ？」

「わかった」

しろはと夏海ちゃんが部屋を出ていくのを確認して、俺は布団をたたみ、身支度をする。

その後、三人で神社へ向かった。

「しろは、ところでイナリ作戦って何？」

住宅地を抜け、もうすぐ神社というところで、やっぱり気になったのでしろはに聞いてみた。

「ま、まだ気にしてたの？」

「うん。気になる」

「秘密」

しろはからは教えてもらえそうにない。

「夏海ちゃん、イナリ作戦って何？」

だから、聞く相手を変えてみた。

「えっと、この前のイナリさんみたいに、鼻や口をふさいで起きてもらう作戦……だったんですけど」

「そういえばこの前、イナリが夏海ちゃんの顔に乗って起こしていったっけ。それかな。」

「え、キスじゃなかったの?」

その時、しろはが思わず口に出していた。

「キ、キスとか、にやにを言ってるんですか!?!」

夏海ちゃんも驚きの声を上げていた。驚きのあまり、口が回ってないけど。

寝てる人の口をふさいで起こす方法……確かにキスでも口はふさげるけど。

なんだろう。しろはも変に勘違いちゃったのかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、三人並んで神社に到着し、皆にあいさつをする。

「あれ、今日はしろはも一緒なの? めずらしーわね」

「本当ですね。これはもう朝帰りですよ」

空門の二人に話しかけた途端にこれだ。人聞きの悪いこと言わないでほしい。

「というか、しろはは俺の彼女なんだから、朝帰りしても問題ないはずだけど。」

「違う。しろはは色々あって、俺を起こしに来てくれたんだ」
「とりあえず誤解を解いておく。」

「夏海ちゃん、本当ですか? 正直に話してくれていいんですよ?」
「俺じゃなくて夏海ちゃんに真意を聞いていた。」

「はい! 本当です!」

「ほう、あの朝に弱いしろはがな……」
その時、のみきが会話に入ってきた。

「らしいわよ。彼氏の力って、偉大よねー」

「本当に、朝からお熱いですよね」

結局、誤解が解けたような、そうでないような。皆の言葉は優しいんだけど、視線が痛い。

「なんにしても、しろはも久しぶりのラジオ体操だろう。楽しむといい」

いい感じに天善が話題を変えてくれた。あのラジオ体操を楽しめるかはわからないけど。

「うん。折角早く起きたし、頑張らないとね」

「おまえらー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

ちようどその時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日も頑張ろう。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「ピクピク、ピクピク」

俺や夏海ちゃんの耳が動く。

「むむむ……！」

しろはも一生懸命動かそうとしているけど、普段やってない分、微動だにしてない。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるああああー！」

「うるああああー！」

「う、うるあー……」

第二の体操も、しろはは恥ずかしさからか、声が小さめだった。

「こらー！ その子！ 声が小さいぞー！ 本気を出せー！」

ちようどそれをラジオ体操大好きさんに見られてしまい、しろはが注意されていた。ついてないな。

「れ、れいだー！ んん！！」

……直後、しろはのヤケクソに近い声が神社に響き渡っていた。

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操終了後、いつものようにスタンプをもらい、ログボを受け取る。

今日のログボはバケツからだった。

「出た、久々のバケツ……」

しかも、バケツの上には大きめの蓋がされている。

「何で蓋？」

思わず、ログボを配っていた良一に聞いた。

「ああ、蓋をしておかないと『逃げる』からな」

「え、逃げる？」

「ほら、しつかり持てよ？」

良一がバケツの蓋を僅かに開けて、素早く手を突っ込む。そして何かを引っ張り出して、俺の手に渡してきた。

「うわ!？」

海老だった。生きてる。

反射的に思いつき握る。そんな俺の握力をものともせず、海老は手の中で元氣よく動いている。

「ひえええ!？」

同じように海老を渡された夏海ちゃんも、両手でそれを掴んで、四苦八苦していた。

「夏海、海老はこう持つんだ」

「慣れれば簡単だぞ。いくら暴れても逃げられない」

「こ、こうですか!？」

直後に天善とのみきから持ち方を教わっていた。

「海老ねー。どう食べようかしら」

少し離れたところでは、空門姉妹が話をしていた。暴れる海老を、片手で掴んでいる。さすが島育ちだ。

「アヒージョにでもしますか?」

あひーじよ? 聞いたことのない単語だった。

「でも、海老ってセミっぽくない?」

「蒼ちゃん、変なこと言わないでください」

「ほら見て。ひっくり返したらすごいわよ?」

なんだろう。今、聞こえてはいけない表現が聞こえたような気がした。

「羽依里たちも、早く持って帰ったほうが良いよ。海老は体温が上がると、一気に鮮度が落ちるから」

しろはが料理人の視点からそう教えてくれた。

「わかった。夏海ちゃん、早く帰ろう!」

皆への別れの挨拶もそこそこに、俺は夏海ちゃんに声をかける。

「あ、ちよつとだけ待ってください!」

神社の石段を降りかけたところで、夏海ちゃんがしろはの元へ駆け戻っていった。

「しろはさん、今日はありがとうございます!」

「ううん。夏海ちゃんこそ、毎日羽依里を起こしてくれてありがとうね」

「えへへ……この間も紬さんに手伝ってもらったり、毎日楽しく起こしています!」

「え、紬にも?」

「はい!」

「それも羽依里が、いつもと違う朝を味わいたって言ったから?」

「そ、そうですけど……?」

「ふーん……そうなんだ……」

なんだろう。しろはがチラチラと俺の方を見ている。二人との距離が離れているので話の内容まではわからないけど。

「……他の皆に迷惑をかけるのは駄目だね。明日はうちのおじーちゃんに起こしに行ってもらおうことにするよ」

「え、良いんですか?」

「うん。あ、羽依里には内緒だよ?」

「わかりました! よろしくお願いします!」

夏海ちゃんがしろはに頭を下げて、こっちに戻ってきた。どうやら話も終わったみたいだ。

手の中で暴れている海老の鮮度が落ちないうちに、帰ることにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅すると、すぐに夏海ちゃんが二人分の海老を持って台所に向かった。

「これは、今日の朝ごはんは海老チャーハンかな」

俺は特に手伝えることもないので、居間でテレビを見ていることにした。

「羽依里君、ちよつといいかな」

チャンネルを回していると、鏡子さんから声をかけられる。

「はい、なんででしょう？」

「宿題終わってからでいいんだけど、港に買い出しをお願いできないかな」

「もちろん構わないですよ」

夏休みに入ってから、俺たちもカップうどんを食べることが多いし。食糧調達にはできる限り協力しないと。

「ありがとう。買ってきて欲しいのは、これなんだけどね」

鏡子さんから買い物メモを受け取る。相変わらずインスタント食品ばかりだった。

「はい、海老チャーハンの完成です！」

その時、夏海ちゃんがおぼんに海老チャーハンを乗せて、居間にやってきた。

「あら、美味しそうね」

良い香りが居間に広がって、嫌が応にも食欲をそそられる。

「せっかくなので、鏡子さんも食べませんか？」

「そうね。ちよつどカップうどんも切れていたし、ごちそうになろうかな」

「はい！ すぐに持ってきますね！」

夏海ちゃんは台所に戻ると、すぐに鏡子さんの分もチャーハンを持ってきた。

「それでは、いただきませう！」

夏海ちゃんがエプロンを外して、食卓に着く。

それから手を合わせて、三人で海老チャーハンを食べ始める。

「うん。美味しい」

しっかりと海老の風味がチャーハンに浸みこんでいた。

ぶつ切りにされた身もプリプリで、しっかりと背ワタも取られているみたいだ。

「美味しいよ。しっかりと下処理もできてるしね」

鏡子さんもお気に召したようだ。

「えへへ、しろはさんに色々と教えてもらいました！ 海老チャーハンって鉄板ですけど、奥深いんですよ！」

俺もお茶を一口飲んで、再びチャーハンに取り掛かろう……と思っただころで。

「ーでも、海老ってセミっぽくない？」

「うっ」

神社での蒼の一言が頭をよぎった。反射的に食事の手が止まってしまう。

「あれ、鷹原さん、食べないんですか？」

「あ、うん……」

俺は自分のスプーンに乗る海老の身をじっと見つめる。

「……あのさ、海老ってセミっぽくない？」

俺は一瞬考えて、蒼と同じセリフを口にしていった。

「!？」

直後、夏海ちゃんは自分の海老チャーハンに視線を落とす。

「……どうしてそういうことを言うんですか！」

やがて顔を上げた夏海ちゃんは涙目だった。

「ごめん。俺一人でトラウマを抱えたくなくてさ」

「この間のベーコンエッグ、思い出しちやっただじやないですか！」

え、あの時のベーコンエッグってそんなトラウマものなの？

「あら、セミは海老みたいな味がするのよ？」

「……！」

鏡子さんが笑顔で追い打ちをかけていた。夏海ちゃんは思わずスプーンを落としてしまう。

「な、夏海ちゃん……ほら、勇気を出して食べないと」

落ちたスプーンを台所で洗ってきて、夏海ちゃんに渡す。

「ほら、鏡子さんも何か言っておいてあげてください」

「アブラゼミよりクマゼミのほうが美味しいよ」

……違う、そうじゃない。

その後は黙々とチャーハンを食べた。

夏海ちゃんは海老をどけて食べていた。さすがに悪いことしたかな……。

朝食の後は気を取り直して、夏海ちゃんと向かい合って宿題をする。

自分の宿題を終えた後、まだ原稿用紙に向かっていた夏海ちゃんに声をかける。

「それって読書感想文？」

「はい、もう少しで書きあがりそうなんです」

見ると、原稿用紙は三枚目に突入していた。

「今朝、鏡子さんに買い出しを頼まれてさ。今からちよつと港に行つてくるよ」

「わかりました。私もこの宿題が終わったら、沢田さんの所に行つてきます」

「沢田さん？」

ああ、あのウリボウの所に行くのか。

「そうなんだ。気をつけてね」

「はい！ 鷹原さんも気をつけてください！」

夏海ちゃんに見送られて、家を後にする。時間があるので、歩いて港へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港の商店で鏡子さんから頼まれた買い出しを済ませる。量は多いけどインスタント食品ばかりだし、そこまで重くはない。

「さて、戻ろうかな」

まだ午前中だけど、今日もかなりの暑さだ。帰っても夏海ちゃんもいないだろうし、駄菓子屋にでも行こうかな……。

そんなことを考えていると、いつもの出店が出ている場所に、見慣れない店が出ているのが目に入った。

「飴細工……？」

近づいてみると、飴細工の出店みたいだった。乳白色の飴で、色々なものが作られていた。

ひとつ気になったのは全部が全部、猫の形をしていることだった。

「いらっしやい」

物珍しさに惹かれて商品を眺めていると、店番の男性から声をかけられた。茶髪で背の高いにーちゃんで、どうも本土の人らしい。

「これ、にーさんが作ったのか？」

「ああ、よくできてるだろ？」

少年っぽい笑顔だった。

「すごいな」

ずごく上手だった。この猫とか、今にも動き出しそうだし。

「お、レノンに興味があるのか？」

「え、レノン？」

「ああ、レノンだ」

この猫の名前だろうか。なかなかにかっこいい。

「その隣の猫はヒョードル、その奥のがシューマツハだ。その右のが……」

どうやら全部の猫に名前がついているらしかった。よく見ると、模様や大きさが微妙に違う。

「せっかくだから、一つ買って行こうかな」

読書感想文を頑張ってる夏海ちゃんのお土産にちようどいいかもしれない。夏海ちゃん、どこか猫っぽいし。

「どれにしようかな」

「そうだ。せっかくだし新しいのを作ってやるよ」

「それじゃ、お願いするよ」

「どんな猫がいい？」

あ、やっぱり基本は猫なんだな。

「親戚の……小学生の女の子にあげるから、可愛らしいのをお願いしますよ」

「よし、まかせとけ」

ゴルフボールよりちよつと大きいかなと思えるサイズの水飴を取り出して、それを固めながらハサミや手で形を整えていく。見事な手際だった。

「すごいもんだな」

俺と大して歳も変わらなそうなのに、すごい手際の良さだった。

「基礎を習えば、誰でもこれくらい作れるようになる」

そんな話をしていると、飴は四本足の動物とわかるところまで形作られていた。

「ところであんた、この島には詳しいのか？」

「えっと、それなりに」

定期的に長期滞在しているし、ほとんど住人みたいなものだけど。

「なら、色々聞きたいことがあるんだが、教えてくれないか？」

「俺にわかることなら」

「ああ、構わない。立ち話も何だし、その椅子に座ってくれ」

にーさんは飴細工を続けながら、出店の脇に置かれた椅子を勧めてきた。俺はそこに腰を下ろす。

「まず、この島に野球チームはあるか？」

「え、野球チーム？」

「ああ、野球チームだ」

「たぶんあるんじゃないかな」

水球のチームがあるくらいだし、野球のチームもありそうな気がする。

「野球ができる場所もあるわけだな？」

「一応、小学校のグラウンドがある」

「そうか、広い場所もあるんだな」

何かで使ってるって話は聞いたことないような。俺が知らないだけかもしれないけど。

「この島に宿泊できる施設や、食事処は？」

「港にホテルがあるぞ。しなびてるけどな」

「泊まれる場所があれば十分だ」

「食事処も食堂があるぞ。夜しかやってないけどな」

しれっとしろは食堂の宣伝もしておいた。

「すごいな。予想以上に充実してるんだな」

その後も色々な話をしてしまった。このにーさん、聞き上手というか、他人と打ち解けるのが上手だ。

「……良い人たちが多いんだな。想像通り、良い島だ」

「ああ。ここは良い島だぞ」

俺もすっかり話し込んでしまい、話が終わるころには昼前になってしまった。

なんか、色々話してしまった気がする。詳しく覚えてないけど、色々。

いつの間にか飴細工は完成していて、袋に入れられていた。

「おっと、もうこんな時間かよ。羽依里、長々と引き留めて悪かったな」

笑顔のにーさんから飴細工を渡された。

「あれ、お代は？」

「いや、色々と為になる話を聞かせてもらったし、お代はいい」

「そうか。悪いな」

「羽依里、また会おうぜ」

「ああ、ありがとな」

「夏海ちゃんによろしくな」

にーさんは港の入り口まで俺を送ってくれ、そのまま手を振って別れる。

「……あれ、そういえば俺、いつの間に名前教えたっけ」

よく思い出すと、名前以外にも色々と話してしまった気がする。

「俺、夏海ちゃんの名前まで教えちゃってたみたいだし」

彼の子供っぽさというか、独特の雰囲気飲まれてしまったみたいだ。

「何というか、すごいカリスマ性のある奴だったよな……」

置きっぱなしにしていた荷物と、もらった飴細工を手にして、俺は港を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港から帰る途中、静久と紬が住宅地の方から歩いてきた。

「あら、パイリ君」

「タカハラさんも、お買い物ですか？」

俺の荷物を見て、紬が言う。

「うん、ちよつと港に買い出しにね」

「パイリ君も大変ね」

「なんだかんだで居候の身だし、これくらいはやらないとね」

「むぎゆ、タカハラさんはイソーローですか？」

「うん、イソーローなんだ」

なんだろう、なんとなく納屋で寝泊りしている、とつぽいにーちや

んが浮かんでしまった。

「そういう私と紬も、よく灯台に居候してるわね」

「そうですね。イソーローしてます!」

笑顔で話す紬の手には、大きな袋が握られていた。

「紬たちも面白い物?」

「はい! 駄菓子屋でサンザイしてきました!」

「散財?」

「ふふ、昨日貰った駄菓子屋の商品券でね。いろいろ買い物してきたのよ」

静久がそう説明してくれる。

「かき氷を注文したんだけど、藍ちゃんから『商品券ではおつりが出ませんよ』って言われてね。結局、500円分ワタアメを買ったのよ」

「はい! これでしばらくはワタアメに困りません!」

二人が両手いっぱいにつけてる袋の中身はワタアメだったのか。そりゃ500円分も買えばかさばるだろうな。重くはないだろうけど。

「そいえばタカハラさん、昨日いただいた、副賞についてなんですが」

「え、副賞?」

「パイリ君とのデートの権利よ」

静久が笑顔でそう続ける。

「むぎゆ、そ、そうです!」

デートって言われると、なんとなく小恥ずかしい。

「さつそくなんです、明日はどうでしょうか……?」

「明日?」

「はい! 明日です!」

恥ずかしいのは紬も同じなんだろう。耳まで真っ赤になってる。

静久も一緒なんだし、そこまで意識しなくても。

「うん。明日は用事もないし、いいよ」

「そですか。良かったです!」

顔を赤くしていたと思ったら、すぐに安堵の表情を浮かべていた。ころころ表情が変わって楽しい。

「紬は、どこか行きたい場所ある？」

「えつとですね」

紬は顎に手を当てて、考えている。

「せっかくだし、紬は本土の方に行ってみたいのよね？」

「そでした！ 本土で行きたいお店があります！」

「行きたいお店？」

「ぬいぐるみの専門店よ。一度、紬を連れて行ってあげたかったの」

ぬいぐるみ専門店。なんというか、すごく細らしい。

大きくまのぬいぐるみに『むぎゆ〜』している、紬の姿が容易に想像できた。

「紬も、今度は遅刻してきちや駄目よ？」

「だな」

……ん、今度？

「お昼前に港に集合して、ご飯は向こうで食べましょ」

「そうですね！」

何かが引つかかったけど、すぐに忘れてしまった。

その後も、三人で明日の予定を考えていた。こういうのって予定を立てる時が、一番楽しかったりするよね。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

紬たちと別れ、加藤家に帰宅する。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい。遅かったですね」

荷物を持って帰宅すると、夏海ちゃんが居間の掃除をしていた。

「まさか、私より遅いとは思いませんでした」

そういえば夏海ちゃんは、あのウリボウの所に行ってたんだっけ。

「色々な人と話し込んでさ」

「そうなんです」

「あ、これお土産」

俺は持っていた飴細工を夏海ちゃんに渡す。

「ありがとうございます……なんですかこれ？」

「飴細工だよ。確かレノンだってさ」

「白猫ですね。可愛いです！」

夏海ちゃんは飴細工を受け取った後、すぐに冷蔵庫にしまっていた。あの見た目だし、すぐに食べるのは勿体無かったんだろう。

「もうちよつとで掃除終わりますから、それからお昼ご飯にしましよー！」

「あ、手伝うよ」

俺も鏡子さんから頼まれた荷物を台所に運んだ後、すぐにデスキンモップを持って、掃除に参加した。

掃除の後、昼食の準備に取り掛かる。港で買ってきたカップうどんの中から、天ぷらうどんをチョイスした。

俺と夏海ちゃんは具の天ぷらを取り出して、カップの中にかやくと粉末スープを入れる。悲しきかな、手慣れたものだった。

「夏海ちゃん、お先にお湯どうぞ」

「はい！」

夏海ちゃんは一度取り出した天ぷらをカップに戻してから、お湯を注ぐ。

「あれ、そのままお湯入れちゃうんだ？」

「はい、そうですけど……？」

「それだと、せつかくサクサクの天ぷらがびたびたになっちゃうよね？」

おつゆも減っちゃうし。

「この、おつゆを限界まで吸った感じが美味しいんじゃないですか」

「そんなものかなあ」

「です。一度やってみたら、絶対ハマりますから」

夏海ちゃんには悪いけど、俺は後乗せサクサク派だ。あの歯ごたえ

を楽しんだ後、少しずつおつゆに浸して食べるのが良いんだ。

それからきつちり三分後、二人で思い思いに天ぷらうどんを堪能した。

昼食後、高校野球を見ながら、夏海ちゃんとまったり過ごしていた。『白熱の第二試合も、いよいよ終盤です。2―1で迎えた9回裏、ツーアウト2塁。国崎高校は一打同点、ホームランが出ればサヨナラのチャンスを迎えています。対する尾根高校のエース折原は、このピンチを抑えきれるか』

テレビから試合状況を知らせるアナウンスが流れていた。どっちも知らない学校だった。

「夏海ちゃんは、どっち応援してるの？」

「今攻撃してる方です！　すごいバッターがいるんですよ！」

「へえ、そうなんだ」

「ほら、今ちようど打席に立ってるのがそうです！」

夏海ちゃんは食い入るように画面を見ている。

『迎えるバッターは4番田淵。ピッチャー折原、第一球……投げた！』次の瞬間、快音が響き、バッターが打ったボールはぐんぐん伸びていく。

『これは大きい！　センターを守る斉藤はボールを見送るしかありません！』

そしてフェンスを軽々と超えた。すごい、ホームランだ。

『田淵やりました！　サヨナラホームランです！』

「へえ、本当にすごいバッターだね」

「はい！　たぶち、すごいんですよ！」

夏海ちゃんは応援している方が勝ったからか、大興奮だった。もしかして野球好きなのかな。

「あの一、ごめんくださいーい」

高校野球の興奮冷めやらぬ中、玄関から声がした。

「あ、はいーい！」

返事をしながら出てみると、鷗が居た。

「やつほー。羽依里」

「鷗?」

「なっちゃんもいる? 二人に聞いて欲しい話があるんだけど」
「話?」

何だろうと思いつつ、夏海ちゃんを呼ぶ。

「鷗さん、こんにちわです!」

「こんにちわ、なっちゃん」

挨拶すると、すぐに鷗が俺達の方に顔を寄せてくる。

「……ねえねえ二人とも、キャプテンカモーメツの財宝に興味ない?」

「え、なんの財宝?」

「キャプテンカモーメツ。今日のイベントだよ。皆に声をかけて回ってるんだけど」

「ああ、そういうことか」

「あの、どういうイベントなんですか?」

「それは来てのお楽しみ。教えてあげないよ!」

やっぱりか。財宝とか言われると、すごく気になる。

「夏海ちゃん、参加してみる?」

「はい! 参加してみます!」

夏海ちゃんも乗り気だし、参加しない手はない。

「鷗、場所は駄菓子屋か?」

「ううん、役所前に集合」

「え、役所?」

「うん。色々あるんだよ。場所代とか」

何それ、駄菓子屋ってそういうの取るの?」

「14時になったら始めるから、それまでに役所に来てね」
「わかった」

「それじゃ、また後でね」

鷗はスーツケースを引きながら去っていった。

「役所でイベントとか珍しいけど、行ってみようか」

「はい、行きましよう!」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

14時少し前に役所前に到着する。

しろは、良一、天善、紬、静久……いつもの見知ったいつものメンバーの他に、そこにはたくさんの子供たちが居た。

さらに、一番目立つ場所にホワイトボードが出されていて、いくつか文章が書かれていた。

『ぼじりすくが ひしめく さばくに』

『かいじんが しゅごする かいていに』

『ばんけんが ねむる めいふの いりぐちに』

『きゆうけつきを しりぞける おおくの ねもとに』

読んでみるけど、さっぱり意味が解らない。今日のイベントに關係しているのだろうか。

そして場所柄、蚊も多いんだろう。ホワイトボードの近くには、ブタの形の入れ物に入った蚊取り線香まで用意されていた。

「それでは、ただ今より鳥白島宝探しイベントを始めます！」

時間となり、ホワイトボードの前に鴉とのみきが立つ。

「ここに取り出しましたは、古ぼけた一つの宝箱！」

鴉がスーツケースから、大きな宝箱を取り出し、どすつと地面に置いた。

ちよつと待て。あの宝箱、サイズの絶対スーツケースに入らないぞ。どうやって入れてたんだ？

「この中には、孤高の大海賊キャプテンカモーメツが生涯を賭けて集めた財宝が入ってるの！」

子供相手ということもあってか、鴉はノリノリだった。隣のみきは笑顔でその様子を見ている。

「だけどよく見て！ この宝箱には、大きな鍵が4つもついているの！」
「ほんとうだよー！」

「あれじゃ、あけられないよー」

子供たちの声が飛ぶ。確かに目の前の宝箱には、4つの南京錠がつけられていた。

「キャプテンカモーメツは、この宝箱の鍵を、島のあちこちに隠したの！ 今から皆で力を合わせて、その鍵を見つけ出そう！」

「えー、そんなのむりだよー」

「ねー」

唐突にそんなことを言われても、子供達だけだと難しいかもしれない。

「大丈夫！ 頼りになるおにーさんたちもいるし、とっておきのヒントもあるんだよ！」

そう言いながら鴟とのみきが配り始めたのは、ホワイトボードに書かれているのと同じ文章が書かれた紙と、この島の地図だった。

「ところで頼りになるおにーさんたちって、もしかしなくても俺たちのことかな？」

「そうなんだろうね。力になれるかはわからないけど」

隣のしろはも地図とヒントの書かれたメモを受けとりながら、何とも言えない顔をしている。

「そういうえば、蒼さんたちも来てないですね」

夏海ちゃんに言われて周囲を見渡すけど、空門姉妹の姿がない。駄菓子屋のバイトを抜けられなかったのかな。

「無事に四つの鍵を手に入れた暁には、財宝はここにいるカモメ団の皆で山分けだよー！」

財宝、山分け……すぐく冒険心をくすぐられる言葉が並ぶ。

「なんだか羽依里、楽しそうだね」

「なんか年甲斐もなくわくわくしてる」

「やっぱり男の子だね」

そういうしろはもどこか楽しそうだった。

でも、キャプテンカモーメツの財宝を探す、カモメ団……なかなか

にカオスだった。

「ただし、制限時間は今から2時間！ 16時までだよ！」

そんな中、鷗のルール説明は続いていた。

「もし、時間までに宝箱を開けられなかったらどうなるの？」

「陽が沈んだら、キャプテンカモメツの亡霊が財宝を守りに来るから、それまでに撤収だよ！ つまりはゲームオーバー！」

今度はお化けのようなポーズをして、子供たちを怖がらせる。本当に演技が上手だな。

「それじゃ皆、頑張ろう！ カモメ団、しゅっぱーっ！」

「それいけーっ！」

ルール説明の後、鷗の号令を合図に皆思い思いの場所に散っていった。これだけの人数が居るし、なんだかんだで鍵もすぐに見つかりそうだ。

「……あれ？」

気がつけば、俺一人だけ取り残されていた。

俺はもう一度、手元の地図とヒントを見る。

「うーん……」

この四つの言葉をヒントに、地図を見ながら島中に隠された鍵を見つける……分かりやすく言えば、子供向けのウォークラリーのようなものだった。

子供向けだから、ヒントもひらがなで書かれてるんだろう。

「とりあえず、俺も探そう」

ヒントを見て、わかりそうなやつから探してることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

『かいじんが しゅごする かにいていに』

まずはこのヒントに的を絞り、住宅地を歩く。

「うーん、かいじん、カイジン、怪人……」

ぶつぶつ言いながら、住宅地を歩いていると、前からしろは達が歩いてきた。

「あ、羽依里」

「しろは、何か見つかったか？」

「ううん。番犬を探してるんだけど」

「番犬……ああ」

この『ばんけんが ねむる めいふの いりぐちに』ってヒントか。番犬っていうくらいだから、犬だとは思うんだけどね。パイリ君、この辺りで犬を飼っている家、知らないかしら」

「いや、俺もよくわからない」

どうやら紬や静久と一緒に、しらみつぶしに探しているみたいだった。

「羽依里は何を探しているの？」

「怪人を探してるんだ」

「かいじん？」

「そう、チュパカブラとかいるのかもしれないし」

「チュパ……なに？」

「ウシとかの家畜を襲って血を吸う怪物だよ」

「そ、そんなのいるですか!？」

しまった。紬が本気で怖がってる。

「ウシを襲うっていうことは、私も襲われてしまうの!?! チュパイカブラって恐ろしいわ!」

隣の静久も、ものすごく取り乱していた。例の着ぐるみさえ着てなきや大丈夫だとは思うけど。それ以前に、なんか名前が違うような。

「羽依里、変なこと言わないで。ほら二人とも、行くよ」

「もしチュパイカブラに襲われたら思いっきり叫ぶから、パイリ君助けに来てね」

「あ、ああ、任せてくれ」

冗談なのか本気なのかわからないかったけど、とりあえず返事だけ

はしておいた。

「よう、羽依里」

しろは達と別れ、住宅地をさすらつてしていると、今度は前方から良一と天善が歩いてきた。二人ともウエットスーツを着ていた。

「二人とも、その格好はなんだ？」

「鍵を探しに行こうと思っただけ」

「え、どこに？」

「海神が守護する海底に決まってるだろ」

なるほど、怪人じゃなく、海神なのか。

二人とも水中銃とモリを持っている。どうやらあれで海神と戦うつもりみたいだ。

「それじゃ、行ってくるぜ」

「ああ、頑張つて来いよ」

二人は意気揚々と海へ向かっていった。俺はその背中を見送るところしかできなかった。

『鳥白島宝探しツアー、鍵の発見状況をお知らせするぞ』

直後、鉄塔からのみきの声が聞こえた。

『番犬が守護する鍵は発見された。繰り返し。番犬が守護する鍵は発見された。残りの鍵は3つだ』

しろは達の人海戦術が功を奏したんだろうか。鍵の一つが発見されたらしい。

今思えば、役所前に出されていたホワイトボードも恐らく役所のものだろうし、このヒントが書かれた紙も役所のコピー機で出したんだろう。

鉄塔からの経過報告といい、しつかり準備されたイベントだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺は結局怪人の正体が掴めず、目標物を変更することにした。

「よし、次はこれだ」

『ばじりすくが ひしめく さばくに』

バジリスクっていうと、あれだよな。ニワトリの体に蛇の尻尾を持った化け物だ。

こういう時、オカルトの知識が生きるよな。

そんなことを考えながら歩いていると、役所前に戻ってきていた。見ると、鍵が発見された鍵のヒントには、赤いペンで大きく丸印が書かれている。獲得済みという意味だろう。

「あ、羽依里」

声が出した方を見ると、鴟が何やら作業をしていた。のみきは鉄塔の方に行っているんだろう。姿がなかった。

「裏方も大変そうだな」

「皆が楽しんでくれてたら、それでいいよ」

場所が場所だけに、大粒の汗をかいているけど、鴟は笑顔だった。

「ところで鴟、バジリスクなんだけど」

「え、まさか羽依里、バジリスクを知ってるの?」

「空想上の生き物で、口から吐くガスで石にしてくるんだ。うけーってな」

「うけーって?」

「そう。うけーって。大きなニワトリみたいな見た目で……」

……ん? ニワトリ?」

「あれ、どうしたの?」

「いや、ちよつとな」

ニワトリのひしめく砂漠……となると、あそこかな。

鍵のありかの目星がついた俺は、しろはの家に向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しろはの家に着くと、その門の影に隠れるようにして、数人の男の子がいた。

「あれ、皆どうしたの」

「あ、にーちゃん」

「ほら、あの鶏小屋を見てくれよ」

ちよつと太つちよな子が示す先……鶏小屋の天井に近い所に、精巧な装飾が彫られた鍵がぶら下がっていた。

「おお、鍵だ」

「どうやら、俺の予測は間違ってたみたいだ。」

「皆、取りに行かないの?」

ハチの巢もないし、今は安全のはずだけど。

「ラスボスが目を光らせてるんだ」

「え、ラスボス?」

子供たちの指差す先を見ると、そこにはしろはのじーさんがいた。何やら、鶏小屋の掃除をしているみたいだった。

「ああ、あの人が恐いのか」

「うん、こわいおじーさんって有名で」

だから皆、この場所で尻込みしてたわけか。確かに、しろはのじーさんは顔も声も怖いしな。

「よし、それじゃ俺がお前達を守ってやるからな」

「やったー! なら、にーちゃんは俺たちのガーディアンだ!」

「よし、俺がラスボスを引き付けるから、その間に鍵を奪取するんだ」

「わかった!」

「がんばれ、ガーディアン!」

「ギギギ、まかせておけ。ギギギ」

子供たちの声援を背に、俺はしろはのじーさんの前に躍り出る。

「む、羽依里。どうした」

「じーさん! 四天王スクワットだ!」

「何?」

そう言ったのは良いものの、二人では四天王スクワットはできな

い。

「えつと……俺が白虎以外の全ての役をやってやる！」

「ほう、良い度胸だ。そこまでしてわしと四天王スクワットをしたいのか」

そういうわけじゃないけど、ここまで来たら後には引けない。

「いくぞ！ しんそうおう！ 青龍！」

そして、じーさんと二人つきりでの四天王スクワットが始まった。

「せい！ せい！ 白虎！」

「びゃこ！ びゃこ！ 玄武！」

「げん！ げん！ 朱雀！」

俺としろはのじーさんが四天王スクワットをやっている間に、子供たちは駆け込んできて無事に鍵を入手。

一目散に役所の方に走り去っていった。

よし、作戦成功だ。せい！ せい！

俺も頃合いを見て逃げ出さないと。げん！ げん！

このままじゃいくら体力があっても足りない。せい！ せい！

段々と足の間がなくなってきた。ざく！ ざく！

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ぜえ、はあ、ひどい目にあつた」

ようやく解放された俺は、足を引きずりながら役所に戻った。

途中、鉄塔から二つの鍵が見つかったとの放送があった。残る鍵は一つみただい。

役所前に戻ると、そこにはほとんど全員が集まっていた。

腕時計を見ると、終了時刻まであと30分もない。あと一つとはいえ、鍵を見つけないのは難しいかもしれない。

「くそ、四天王スクワットで時間をかけすぎたみたいだな……」

「おお、ガーディアンのお戻りだ！」

「おかえり、ガーディアン！」

その時、さっきの子供たちが俺の帰還を祝福してくれた。

「ガーディアン……？」

しろはが怪訝な目で俺を見ていた。

「た、ただの子供の遊びだよ。ギギギ」

「そ、そう」

「それよりタカハラさん、ナツミさんはすごいんですよ！」

その時、紬がすごく嬉しそうな声で話しかけてきた。

「え、どういうこと？」

「隠されていた鍵のうち、二つを見つけてしまったんです！ それはもう、鮮やかでした！」

バジリスクの鍵は俺が見つけたけど、怪人と老犬の鍵は夏海ちゃんが見つけたのか。

「そうなんだ。夏海ちゃん、よくわかったね」

「本と同じでしたから！」

「本？」

「はい、ひげ猫団の冒険です！」

「ああ、四つの鍵のついた宝箱……そっか」

今回のイベント、どこかで見た記憶がある思ったら、あの本の内容に沿ってたんだ。

本だと確か、長い時を生きた犬……ケルベロスが鍵を守っていたんだっけ。

「だから、この島で一番長生きをしている犬を探したんです！ その犬小屋の中にありました！」

「……じゃあ、怪人は？」

「それは、神社です！」

「え、神社？」

「はい！ 海神を祭る神殿です！ 本の中に、そっくりな描写がありました！」

夏海ちゃんによると、この島で神殿と言えば神社だろうと思い神社に行ってみると、社殿の所に鍵がぶら下がっていたらしい。

「本でも、間抜けな仲間が海の中を探していたみたいですが、頭の切れる主人公は神殿で鍵を見つけてるんですよ！」

夏海ちゃんは身振り手振りを交え、熱弁をふるっていた。あれだけ夢中になって読んでた本だし、当然だろう。

「間抜けな仲間……か。言い得て妙だな」

そう呟くのは、ずっと海底を探していたらしい良一と天善だ。相変わらずウェットスーツ姿で、疲れた顔をしている。

「あ、違うんです！ そんなつもりで言ったわけじゃ……」

「いや、気にしないでくれ。正論だからな」

なんにしても、夏海ちゃんの功績は大きい。俺も一つ見つけたけど、ほとんど偶然だった。あの本との関連性には全く気付いてなかったし。

「でも、あと一つだけわからないんです」

夏海ちゃんも手元の紙に視線を落とし、考え込んでしまう。

『きゆうけつきを しろぞける おおくの ねもとに』

「夏海ちゃん、これって確か」

「はい、違うんですよ。本の内容と違うんです」

これは覚えてる。本に乗ってたのは確か『おおわしがすむ てんくうの しろに』だったはずだ。

「あ、そこは変えたんだよ」

そういうのは鷗。

「ほら、それっぽいこと書いて、子供たちが木に登ったりしたら危ないじゃない？」

「あー、確かにそうだな」

「だから、最後の一つはオリジナルなの。全部が全部本の通りだと、わかる人にはすぐにわかっちゃうからね」

なるほど、他の鍵が見つかったても、結局この最後の鍵を見つけないと、宝箱は開かないわけだ。

そして、制限時間は刻一刻と迫ってきている。

俺たちは鷗の策に見事にはまってしまっていた。その場の皆でヒントを前に考え込んでしまう。

「うーん、吸血鬼……退ける……多くの……根元……」

なんだろう。ニンニクの事だろうか。吸血鬼は退けるし、地面に埋まってるし。

「むぎゆ、おーくってなんでしょーか」

「そりや紬、多く……沢山ってことじゃ……」

……ちよつと待てよ。これはもしかすると。

「……そうか、おおくって、オークのことか」

「羽依里、オークって何？」

「オークってのは、豚の怪物なんだ」

「豚？」

「そう、豚」

「吸血鬼を、退ける、豚の、根元……わかった。たぶんこれだよ」

しろはは何かに気付いたらしく、ホワイトボードの近くに置かれていた蚊取り線香入れに近づいていく。その蚊取り線香入れは、ブタの形をしていた。

それを下の台座ごと持ち上げると、その下に鍵があつた。

「おお、あつた」

「しろはさん、すごいですー!」

その場にいた皆から驚きの声上がる。まさか、こんな所にあつたなんて。

「むぎゆ! まさに灯台下暗しですね!」

紬が言うことやけに説得力のあることわざだった。

「でもしろは、なんでわかつたんだ?」

「吸血鬼ってのは、蚊のことだよ」

ああ……蚊は確かに血を吸うもんな。

「その蚊を退けるってことは、蚊取り線香のことだよね」

鍵を手にしたしろはは、どこか得意げだった。

腕時計を見ると、制限時間の5分前だった。

「これで4つの鍵が揃ったね! ギリギリセーフ! ミッション達成だよー!」

鳴がそう宣言すると、会場全体が歓喜の渦に包まれた。

「それじゃ、開けるよー。皆、もっと寄ってー」
その後、鴟が宝箱の鍵を一つずつ外していく。

鍵を全て外した後、宝箱のふたを開ける。

「おおーい！」

中には溢れんばかりの金貨が入っていた。

「約束通り、中の財宝は皆で山分けだよ！」

「やったーい！」

「いえーい！」

宝箱から顔を覗かせた金貨も、それを見つめる子供達の顔も、夕日に照らされてきらきらと輝いていた。

やがて、鴟の言う通りに財宝は山分けされ、一人頭2枚ほどの金貨が行き渡った。

手元にあるコインはおもちゃという感じではなく、ずっしりと重量感のある本格的なものだった。

「きれいですねー」

夏海ちゃんはもらった金貨を陽の光に当てながら、嬉しそうだ。

「ふっふっふ。これはただの金貨じゃないんだよ」

「え、どういうことですか？」

「実はこの金貨一枚と、駄菓子屋のお菓子、どれでも一つと交換できちゃう！」

「ほんと!？」

「すげー!！」

「やったー!！」

鴟の発言を聞いて、子供たちは大喜びだった。

お菓子と交換できるシステムは、鴟らしいと言えば鴟らしい。鴟の意図が分かった俺たちは、割り振られた金貨を小さな子たちに渡してあげた。

「ねえ皆、悪いんだけど子供たちを駄菓子屋まで引率してあげてくれないかな」

「ああ、いいよ」

鴉は俺たちの方を向いてそうお願いしてきた。もちろん断る理由もないので、快諾する。

「ありがとう。私とのみきさんはここの後片付けをしなくちやいけなくて」

「わかった。子供たちは私たちにまかせてくれていいよ」

その後、子供たちを連れて駄菓子屋へ向かう。俺たちは引率者として同行することにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ぼくはこのベイビースターー！」

「わたしは、うめジャムがいい！」

駄菓子屋に到着すると同時に、すごい騒ぎになる。

「はいはい。ちゃんと並んでねー」

「金貨はこつちに入れてください」

あらかじめ話は通してあったんだろう。藍と蒼は大拳として押し寄せた子供達に動じることなく、金貨を受け取って、駄菓子を渡していた。

「だめだよ、ちゃんと並ばなきゃ！ ほら、小さい子と女の子が先だよ！」

聞きなれた声がすると思つて、よく見てみると、夏海ちゃんが子供たちを並ばせていた。

「おおー、ナツミさん、えらいです！」

「助かるよな。俺たちじや、あの中に入っただけで邪魔になるだろうし」

それにしても、夏海ちゃんのタメ口とか初めて聞いたかも。俺たち

相手だと、いつも敬語だもんな。

「あれが本来の夏海ちゃんなのかも」

「そうかもね」

俺たちは少し離れた場所から、微笑ましい気持ちでその様子を眺めていた。

「すごいですね。鷗さんのイベント、大成功じゃないですか？」

騒動の波が落ち着いたころ、笑顔の夏海ちゃんがこっちにやってきた。

「夏海ちゃんは駄菓子、なに選んだの？」

「えへへ、私が一番年上つぽかったので、他の小さな子にあげちゃいました」

今日は大活躍だったんだから、一つくらい貰っても誰も文句言わないと思うけど。

「あ、羽依里君。ちょうど良い所に」

夏海ちゃんの労をねぎらっていると、鏡子さんから声をかけられた。

「ちよつと大きな荷物が港に届いてるんだけど、バイクで家まで運んでおいてくれないかな。急な寄合が入っちゃって」

「わかりました。運んでおきますよ」

「ごめん。よろしくね」

鏡子さんはそう言いながら、役所の方に歩いて行ってしまった。あの人、何か役員でもやってるんだろうか。

「とういうわけだから、夏海ちゃんは皆と一緒にゆつくりしていてね？」

「わかりました。気をつけて行ってきてください！」

「うん。ありがとうね」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺は一度家に戻って、ガレージからバイクを引つ張り出す。

そのまま港へ行つて、言われた荷物を受け取る。その場で借りたロープで荷物を荷台に固定して、そのまま帰路に就く。

「あれ？」

その帰り道、ふと空を見上げると真つ黒だった。これは一雨来るかもしれない。

一本道を抜けた頃には、バケツをひっくり返したような激しい雨が降り出していた。俺は瞬く間に全身ずぶ濡れになる。

「これは参つたなあ……」

既にバイクは住宅地に入っている。雨の中、子供たちが走って帰っているのがちらほら見える。きつと駄菓子屋から慌てて帰っているんだろう。

もう少しで加藤家だ。一刻も早く帰り着きたくて、無意識のうちにスピードを出してしまっていた。

……その時。

「はしれー！ー！」

「もー！ 危ないから、走っちゃダメだよ！」

すぐ目の前の小路から、数人の子供たちが飛び出してきた。

「やばいー！」

俺はとつさにハンドルを切る。

子供たちの集団とギリギリの所ですれ違う。なんとかぶつからずに済んだ。

でも、普段は出さないスピードと、雨で濡れた路面のせいもあつてバイクのコントローラを失う。俺は大きくバランスを崩し、転倒する。

その衝撃で俺の体はバイクを離れ、勢い良く浮いた。大きく一回転するように、なすすべなく空中へ放り出される。

……やばい、これはまずい。

俺の体は無防備に宙を舞い、道路沿いのガードレールへと向かっていく。

いくらヘルメットをつけてるとはいえ、このまま鉄の柱にぶつかったら怪我どころじゃ済まない。下手したら……。

俺はまもなく来るであろう衝撃からできるだけ身を守ろうと、必死に体を丸め、目を瞑る。

「……あれ？」

……相当な衝撃を覚悟していたけど、いつまで経っても衝撃は訪れなかった。そればかりか、雨に打たれて冷え切っていたはずの身体が、妙に温かい気もする。

「……!？」

恐る恐る目を開けると、俺の体は無数の光に包まれていて、ゆっくりと浮いていた。

「な、なんだこれ？」

事故に遭う時は、周囲の動きがスローモーションに感じるとは言うけど、これはそんなじゃない。それじゃ、この無数の光の説明がでない。

俺はその光を凝視する。よく見ると、それは蝶の形をしていた。

「え、蝶……?？」

心地良いぬくもりに包まれながら、俺の意識はそこで途絶えてしまった。

「……依里！」

「……さん！」

「……羽依里！ 羽依里！」

「鷹原さん！」

……どれくらい時間が経ったんだろうか。俺の名前を呼ぶ二人の声で、目が覚める。

目を開けると、既にヘルメットは外されているようで、鉛色の空が見えた。あれだけ降っていた雨も、嘘のように止んでいた。

俺は道路にあおむけで横たわっていて、そんな俺をしろはと夏海ちゃんが左右から覗き込んでいた。

「どうやらふたりが、ずっと手を握ってくれていたらしい。」

「あ、れ……」

俺はゆっくりと上体を起こす。あれだけの盛大に転倒したのに、痛みはなかった。

「……間に合って良かったです」

俯いた夏海ちゃんの口から、消え入りそうな声が聞こえた。良く聞き取れなかった。

「えっと、ふたりとも、心配かけてごめん……」

「本当だよ……羽依里もどこかに行っちゃうかと思った」

「え？」

とっさに聞き返したけど、しろははそのまま黙ってしまった。雨は止んでるはずなのに、手のひらに滴が落ちてきている気がした。

「鷹原、大丈夫か？」

その時、しろはと夏海ちゃんの間からのみきが顔を覗かせた。その後ろに何人もの人間を連れている。どうやら役所の人達みたいだ。

「ああ、なんとか大丈夫みたいだ」

「その、色々と状況を確認したいん、だが……」

のみきは戸惑いながら、俺の手を掴んだままの二人を見る。

「しろはに夏海ちゃん、俺は大丈夫だよ。だから心配しないで」

そう話しかけると、二人ははっと顔を上げる。周囲には人だかりが出てきて、皆心配そうな顔で見ている。

「えっと、ごめんなさい」

二人がほとんど同時に手を離し、ごしごしと目元を拭いていた。

「鷹原、立てそうか？」

その直後、良一と天善がやってきて、俺を立ち上がらせてくれる。

「二人とも、悪いな」

「気にするな。しかしこれはまた、派手にやったな」

立ち上がって周囲を見渡すと、かなり離れた道路上に相棒のバイクが転がっていた。サイドミラーも折れて、ボディも大きく凹んでしまっていた。

バイクがああ状況なのに、俺の体にはかすり傷一つない。慎重に手足を動かしてみるけど、全く痛みはなかった。

「あれだけの事故で怪我一つないのか。不幸中の幸いだな」

俺が怪我一つしていないのがわかると、その場にいた皆が安堵の表情を浮かべてくれていた。しろはと夏海ちゃんも、ようやく安心してくれたみたいだ。

「皆、心配かけてごめん」

俺はその場で頭を下げた。

「いや、目撃者の話によると、お前は子供たちを避けようとしただけだ。何も落ち度はない」

「でも、こういう事故って、色々と」

のみきはそう言ってくれたけど、警察に行ったり、色々やらなければいけないことがあるはずだ。

「心配するな。ここは鳥白島だぞ」

既に役所の人と思われる人たちが、壊れたバイクや、周囲に散らばった部品の回収を始めてくれていた。

「バイクの修理にはそれなりの日数がかかると思うが、なんとかしよう」

そう言ってくれたのは天善。ありがたい話だ。

「見たところ、怪我の一つもしていないようだが、一応診療所へ行つて診察を受けろ。この後始末は私達がやっておく。何も心配するな」
笑顔でそう言ってくれるのみきたちに促され、俺はしろはや夏海ちゃんと一緒に近くの診療所へと向かった。

歩いても特に違和感もない。本当に不思議だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

診療所に到着すると、あらかじめ電話で連絡が行っていたらしく、すぐに診察室に呼ばれた。

問診に始まり、打撲や捻挫のチェック、骨折の有無を調べるためのレントゲン撮影、頭部のCT等、色々な検査が行われた。

検査が終わると、診察室にしろはと夏海ちゃんも呼ばれ、一緒に検査結果の説明を受けた。

「ふむ、外傷も全くないし、血圧も、レントゲンも、頭部CTも全く異常はない。本当に事故をしたのかと疑いたくなるほどだよ。心配はないさ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

「もし数日中に何か異常を感じるがあれば、また来なさい。何も無いと思うけどね」

「わかりました」

本当に異常がないみたいで、一安心だった。

「……鳴瀬さんもこれで安心したかな？」

「は、はい……」

「ふふ、彼氏さんがなんともなくて良かったわね」

「ど、どうも……」

先生や看護師さんに、しろはが茶化されていた。わざわざ二人を診察室に呼んだのは、一緒に説明を聞いてもらって、安心させるためだったんだろう。

その後、特に薬が出るでもなく、そのまま帰された。

すっかり日が落ちてしまった住宅地を、加藤家に向かって三人で歩く。

「二人とも、心配かけてごめんな」

「本当。彼女に心配かけちゃダメ」

「本当にごめん」

「何の異常もなかったみたいだし、良いよ」

暗いからよく見えなかったけど、しろはの目はまだ少し赤かった気がする。

「でも、しばらくバイクは禁止」

「わかってる」

禁止も何も、そもそもしばらくは修理から戻ってこないだろう。

「こういう日はお風呂も禁止だよ。急に血圧が上がっちゃうと危ないっていうし」

「わかってる。今日は軽く身体を拭くくらいにしておくよ」

「あと、晩ご飯だけど、できるだけ消化の良いもので……」

その後も加藤家の前に着くまで、しろはに色々と言われた。異常はないと言われたけど、やっぱり心配なんだろう。

「もし気分が悪くなったら、すぐに診療所に行くんだよ？」

「ああ。ありがとうな」

最後まで心配してくれるしろはをなんとかなだめて、加藤家の前で別れた。

その間、何故か夏海ちゃんはずっと黙っていた。

帰宅後、すぐに鏡子さんに頭を下げる。

「役所の方から話は聞いてるよ。怪我がなくて良かったね」

「すみません、ご心配をおかけしました」

「ううん。いいんだよ」

「それであの、荷物……」

「それも気にしなくて良いよ。少し前に役所の人が持ってきてくれたし、別に壊れたりしてなかったから」

すぐに笑顔で許してくれた。本当にこの島の皆の優しさには感謝してもしきれない。

「夏海ちゃんも、心配かけちゃったね」

その次に、夏海ちゃんにも謝った。

「……」

「夏海ちゃん？」

「……へっ?」

どうやらぼーっとしていたみたいだ。

そういえば、診療所に行った時くらいから元気がなかったし、もし

かして雨に打たれて体調悪くしちゃったとか？

「夏海ちゃん、大丈夫？」

「は、はい！ 大丈夫です！」

「夏海ちゃんも、心配かけてごめんね」

「ほ、本当ですよ、凄く心配しました。無事で良かったです」

話しかけた後は普段と変わらない感じだった。杞憂だったのかな。

「それじゃ、晩ご飯にしましょう！ しろはさんに言われましたし、今

日の晩ご飯は油控えめにしたチャーハンですよ！」

あ、やっぱりチャーハンなんだ。

「じゃあ、よろしくお願いするね」

「はい！」

夏海ちゃんは台所へと走っていった。

晩ご飯の後、風呂代わりに身体を濡れタオルで拭いた。夏海ちゃんが手伝いしようと言ってくれたけど、丁重に断った。

入浴が終わった頃、役所の人に来て色々と説明をしてくれた。心配こそされたけど、咎められることはなかった。

その後、大事を取って早めに休むことにした。

部屋に戻って布団を敷いて、その上に横になる。目をつむると、脳裏に事故の様子が蘇ってきた。

……それにしても、ガードレールに叩きつけられる寸前に俺を包んでいた、あの光る蝶たちは一体何だったんだろう……。

温かくて優しい。そんなぬくもりだった。

「やっぱりあの蝶たちに、助けられたのかな……」

そんなことを考えているうちに、俺は深い眠りへと落ちていった。

第十九話 8月12日

……朝。

昨日の夜は早くに寝たせいか、いつもより30分ほど早い時間に目が覚めてしまった。

布団の上で上体を起こし、首や手足を動かしてみる。

……うん。問題ない。

昨日の事故が夢だったんじゃないかと思えるくらい、快調だった。ちよつとした運動も兼ねて、朝の新鮮な空気の中をジョギングしてみてもいいかもしれない。

カーテンを開け放ち、窓の外を見ながらそんなことを考えていた……その時。

廊下をドタドタと音を立てながら、何かが近づいてきた。

「え、何？」

次の瞬間、部屋のふすまが勢いよく蹴り倒される。

「羽依里！ 起こしに来てやったぞ！」

「鳴瀬爺のためとあらば、我ら協力を惜しまん！」

「右に同じ！」

そして、三人の筋骨隆々のおじーさんたちが俺の部屋に踊り込んできた。その中には、しろはのじーさんの姿も見える。

「ひい!？」

俺は突然の出来事に腰が抜け、その場にへたり込んでしまった。

「いくぞー！ モーニングスクワットだ！」

そんな俺は、二人の逞しいじーさんに両腕を掴まれ、無理矢理立たされる。

「よし、お主は朱雀だ！」

「いくぞー！ ししんそうおう！ 青龍！」

そして、モーニング四天王スクワットが始まった。

「せい！ せい！ 白虎！」

「びゃこ！ びゃこ！ 玄武！」

「げん！ げん！ 朱雀！」

「ざく！ ざく！ 青龍！」

「……羽依里、バイクで事故を起こしたそうだな！」

「げん！ げん！ 朱雀！」

スクワットの合間に、しろはのじーさんが話しかけてきた。

「ざく！ ざく！ 青龍！ ああ、悪かったと思ってる！」

「しろはに心配をかけおつて。いっそ、わしがバイクなど乗れんよう、その腕をへし折つてやろうか？」

……そんなことされたら、より一層しろはに心配をかけてしまいそうな気がする。

「せい！ せい！ 白虎！」

「びゃこ！ びゃこ！ 朱雀！ バイクに乗るのは良いが、しろはに心配をかけるな。わかったか！」

「もちろんだ！ しろはは大切な人だからな！ ざく！ ざく！ 玄武！」

「げん！ げん！ 白虎！」

「若造が。一丁前に言いおつて！ びゃこ！ びゃこ！ 青龍！」

「せい！ せい！」

……その後はお互い黙々とスクワットを続けた。

「ようやく目が覚めたようだな」

「これで、しろはからの頼みも終わらせたぞ」

「名残惜しいが、さらばだ」

たつぷり30分以上続けた後、三人のじーさんは去っていった。

いや、目は最初から覚めていたんだけど。なんか途中からテンションが上がって、普段は言わないようなことを口走ってた気もする。

「はあ、朝からひどい目にあつた」

俺は蹴り倒されたまま放置されていったふすまを元通りにしながら

ら、大きなため息をついていた。

せめて、ふすまは直して帰って欲しかった。

でも、これだけ身体を動かしてもなんともないということは、本当に事故の影響は何もないっていう証明になったんじゃないだろうか。そういう意味では、あのじーさんたちには感謝しないといけないかも。

「鷹原さん、おはようございます」

「え？ ああ、おはよう、夏海ちゃん」

ふすまの最後の一枚をはめ込んでいると、背後から夏海ちゃんに声をかけられた。

「今日も、いつもと違う朝を迎えられましたか？」

「あ、うん……」

背中越しでも、夏海ちゃんが笑っているのがわかる。本当に悪気はないんだろうけど。

「……夏海ちゃん、明日からは、いつも通りの朝を迎えたいかな」

「え、そうですか……？」

なんだろう。その声は少し落胆の色を含んでいた。

「うん。いつも通りに夏海ちゃんに起こされる朝を迎えたいかな」

ここ数日の朝の出来事は全て俺の自業自得なんだけど、これから毎日あのじーさんたちが起こしに来るかも……という、謎の不安が俺の頭をよぎっていた。

正直なところ、朝からの四天王スクワットは、もう二度と嫌だ。

「わかりました！ 明日からは、私がしっかりと起こします！」

「うん。よろしくね」

その後も二人で話をしながら、居間に顔を出す。そこでは鏡子さんが朝のニュースを見ながら、カップうどんを食べていた。

「あ、ふたりとも。おはよう」

「おはようございます。今日はゆっくりなんですわね」

あえて、カップうどんには突っ込まないでおいた。

「今日は特に寄合とかも入ってないしね。家でゆっくりしようかと

思って」

多忙を極めてる人だし、たまにはゆっくりしてもらいたい。

「そういえば鳴瀬さんたち来てたけど、何かあったの？」

「モーニングスクワットです」

「え？」

「いえ、気にしないでください」

「よくわからないけど、朝からスクワットしてたってことは、身体の調子は良いってことだね？」

「はい、大丈夫です。ご心配をおかけしました」

「いいんだよ。それより、今日もラジオ体操行くんでしょ？」

「はい。そのつもりですけど」

「遅れるよ？」

鏡子さんに言われて居間の時計を見ると、結構いい時間だった。

「やばい、夏海ちゃん、急ごう！」

「は、はい！ 行ってきまーす！」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

笑顔の鏡子さんに見送られて、加藤家を後にした。今日も一日が始まる。

夏海ちゃんと並んで、神社へ向かう道を歩く。朝も早くから、セミたちは元気よく鳴いている。

「そういえば夏海ちゃん、今朝は起こしに来てくれなかったんだね」

しろはのじーさんたちは踊り込んできたけど。

「えっと、いつもと同じ時間に一度様子を見に行っただんですが……その、あまりに楽しそうにされていたので」

「あー、スクワット中だったのか」

一度俺の部屋までは来たけど、そのまま何も見なかったことにして、居間でじーさんたちが帰るのを待っていた……と。

「はい……」

その時の状況を思い出してしまったんだろうか。夏海ちゃんが何

とも言えない表情を浮かべながら、右手でスタンプカードの紐を弄っていた。

「えーっと、男の子の遊びは、女の子にはなかなか理解できないものだろうし、ね……」

そこでふと、気になったことがあった。話題を変える意味も含め、夏海ちゃんに質問してみる。

「ところで、もし俺が今日何も言わなかったら、明日はどうやって起こすつもりだったの？」

「鏡子さんにメイド服とか用意してもらっていたので、蒼さんか鷗さんにそれを着てもらって、鷹原さんを起こしてもらおうと思ってました」

……今日で止めておいて本当に良かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「パイリ君、おはよう」

「ナツミさん、おはようございます！」

境内に着くと、そこにはいつものメンバーに加えて、静久と紬がいた。

「おはよう、ふたりとも」

「おはようございます！」

夏海ちゃんと二人で挨拶を返した直後、何か違和感を感じる。

「むぎゆ？ タカハラさん、わたしの顔に何かついてますか？」

「夏海ちゃん、私のおっぱいに何かついてる？」

……違和感の理由がわかった。今日の紬たち、着ぐるみじゃなかった。

「ふたりとも、今日は私服なんだな」

「そうよ。お昼からのお出かけもあるし」

「はい！」

二人とも笑顔だった。今日の外出を楽しみにしてくれているらしい。

「え、お出かけって何ですか?」

「あら、パイリ君だったら夏海ちゃんには何も話していないの?」

そう言えば、話してなかった気がする。

「ほら、この間の鑑定大会の優勝賞品だよ。お昼前から、ちよつと出かけるんだ」

「あ、デートですか」

「うん、そう。デ、デートだよ」

無垢な笑顔でそう言われ、返しに困る。

「紬さん、良かったですね!」

「むぎゆく……デートと言われると、急に恥ずかしくなってきました」
夏海ちゃんと紬が話をしていると、俺のすぐ近くに静久が寄ってくる。

「……ところでパイリ君」

そして、俺にしか聞こえないくらいの声で聞いてきた。

「昨日、バイクで事故をしたって聞いたけど、身体は大丈夫なの?」

静久のことだし、島の誰かから聞いたんだろう。

「ああ、奇跡的に怪我の一つもないんだ。診療所で見てもらったけど、異常はないってさ」

「そう……私たちに構わず、お出かけを別の日にずらしてもらっても良いのよ?」

「いや、大丈夫だよ。朝から全力のスクワットもできたし、紬も楽しみにしているだろうから」

「わかったわ。それなら、私も何も言わないから」

紬が昨日の事故を知ったら、間違いなく今日のお出かけは中止になつていたと思う。

その後も、他の皆は誰も事故については聞いてこなかった。一番に聞いてきそうな空門姉妹も素知らぬ顔で、まるで箝口令でも敷かれているみたいだった。

もしかして、俺から口に出さない限り、皆触れないようにしてくれ

ているんだろうか。

「よしお前らー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「ピクピク、ピクピク」

今日も皆で一緒に耳を動かす。正直、異様な光景だった。

「むーぎーぎー」

「ずーくーずーくー」

紬と静久の耳もピクピクと動いていた。あの二人、着ぐるみの耳じゃなくてもちゃんと動かせるのか。

「第四の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐる〜！」

「ぐるぐるぐる〜！」

うう、目が回る……。

でも、この体操にもだいたい慣れてきた気がする。目が回りにくくなったというか、すぐに元に戻るようになってきた。

フィギュアスケート選手の気持ちがあわかってきた気がする。

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操が終わった後、今日の分のスタンプとログボを受け取る。

今日のログボは、美味しそうなみかんだった。

「この時期にみかんとか、珍しいよな」

「島の特産なのよ。夏みかんね」

「なるほど、夏みかん」

「はい！ なんですか？」

蒼と話していると、俺の後ろにいた夏海ちゃんが会話に入ってきた。

「え、呼んでないけど?」

「あれ? そうですか?」

夏海ちゃんは首をかしげながら、俺の後ろに戻っていった。

周囲を見渡すと、ほとんどの人がその場で夏みかんを食べていた。運動した後の果物は格別だろう。

「夏海ちゃん、俺たちも食べようか」

「はい!」

良一の隣が空いていたので、二人でそこに腰掛けて、夏みかんを食べることにした。ちょうど木陰になっていて涼しい。

「うん、美味しい」

「だろ。甘いしな、夏みかん」

「あの、良一さん。呼びましたか?」

「いや、呼んでないぞ?」

「そうですか……」

夏海ちゃんが、また首をかしげている。

「夏海ちゃん、夏みかん美味しいよ。食べないの?」

「食べます、けど……なんだか、そこらじゅうで名前を呼ばれているよ
うな……」

「え?」

……なつみちゃん、なつみかん。口にしてみると、確かに語呂が似
てる気がする。

「美味しそうね、夏みかん」

「夏みかん、持って帰ってジュースにしますか? ミキサーもありま
すし」

「えっ、あの、その」

皆も俺の言葉の意図に気づいたんだろう。笑顔で乗ってきた。

「夏みかん、ピンポン玉とそこまで大きさも変わらないぞ。色も似て
いるし、一発打ってみるか」

「やめなさいよ。夏みかんがつぶれちゃうじゃない」

「そうだぞ、夏海ちゃんて遊ぶな」

「うう……やめてくださいーい!」

両方の拳を突き上げて、夏海ちゃんが怒っていた。すぐく微笑ましい。

その後もしばらく、夏みかんで遊んだ。

「はあ……」

疲れた顔をしている夏海ちゃんと一緒に、帰路につく。

「あ」

石段を降りきったところで、夏海ちゃんが小さく声を上げる。

「夏みかん、どうしたの？」

「そのネタはもういいです！ それより、朝ごはんどうしましょう？」

「ロクボ、食べちゃいましたし」

「あ、そう言えばそうだね」

その場の流れで、皆と一緒に夏みかんを食べてしまっていた。俺たちの手元にあるのは皮だけだ。

「みかんの皮って、確か食べられますよね」

「確か、陳皮（ちんぴ）っていう漢方薬だっけ。」

「多少強引にでも、夏みかんチャーハンに……」

……夏海ちゃん、みかんの皮をまじまじと見つめないで。仮に食べずに残っていたとしても、夏みかんチャーハンとか恐ろしい物を創造しないで。

「お？ どうしたんだ二人とも、帰らないのか？」

「あ、良一さん」

「ちょうどその時、良一が石段を降りてきた。」

「このままだと、朝ご飯がないんです」

「え、どういうことだ？」

「実は……」

夏海ちゃんが良一に、これまでのいきさつを説明する。

「つまり、チャーハンの具になる食材があればいいわけだな」

「はい、そうです」

あれ？ いつの間にか、チャーハンの具材の話になっていた。

「そういえば、港に出店が出ていたぞ」

「え、もう?」

いつもより早い気がする。

「素潜りを生業にしてるおつちゃんが、朝から獲れ過ぎたとかでな。高級食材だぜ」

「高級食材?」

「詳しくは秘密だ。けど、一回300円は格安だと思うぜ?」

良一は意味深な笑顔を残し、去っていった。

「よくわからないけど、夏海ちゃん、行ってみる?」

「はい! 行きましょう! 朝ご飯のために!」

握りこぶしを作っていた。やる気満々みたいだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

ぐーぐーと鳴く腹の虫を抑えつけながら、港に到着する。

神社からだとは結構な距離があるので、本来ならバイクを使いたいたいところだけど、昨日の今日でバイクの修理が終わるはずがなかった。

「あ、鷹原さん。あのお店がそうみたいですよ?」

夏海ちゃんの指差す方を見ると、ビニールプールが出ていて、その上に看板が出ていた。

「サザエすくい?」

俺は思わず看板を二度見してしまった。金魚すくいみたいなものなんだろうか。

不思議に思いながら出店に近づいてみる。ウェットスーツ姿のおじさんが店番をしていた。

「いらっしや〜」

顔は見たことあるけど、名前は知らない人だった。

「お、加藤さんとこの二人かい。どうだい、やってみるかい?」

「えーっと」

夏海ちゃんと二人でプールの中を覗き込む。中は浅めの海水で満たされていて、4〜5センチくらいのサザエが生きたまま入っていた。

「ほ、本当にサザエだ」

「本物とか、初めて見ました」

「一回300円。金魚と違って、逃げ回らないからすくいやすいよ」

いや、逃げない代わりに思いつきり重そうなんだけど。使うアミが特別なんだろうか。

「それじゃ、二人分ください」

俺はそう言って、600円をおじさんに渡す。

「ほいよ。たくさんすくいな」

渡されたのは二つのお椀と、ごくごく普通のポイだった。

「アミが破れるまで、何個すくってもいいよ」

いや無理だろ。どう考えても。

とりあえず代金を支払った以上、挑戦してみるしかない。

「ていー」

できるだけ小さいのに狙いを定めて、持ち上げようと試みる。サザ

エはほとんど浮くことなく、アミが破れてしまった。

「……これ、すくえるの?」

「はは、島の子なら一回で2〜3個は持って行くんだがな」

「え、うそだろ?」

……島の子、恐るべし。

「上手くフチの部分を使うのがポイントだ」

「フチですか。むむむむ……えい!」

おじさんに言われた通り、夏海ちゃんはフチの部分を使って何とかすくおうとしたけど……やっぱ無理だった。一度は水面から出たけど、そのままアミを破って転がり落ちてしまった。これは相手が強靱すぎる。

「あう……」

「残念だったね、お二人さん。ほいよ」

残念賞ということで、おじさんは小さめのサザエを袋に入れて、何個かくれた。縁日の金魚すくいとかで、すくえなかつたら一匹くれる時があるけど、その流れだろうか。

「手元に残しても、どうしようもないからねえ」

おじさんは笑っていた。漁師の感覚なんだろうなあ。

何にしても、無事に朝ご飯の食材を手にした俺たちは、加藤家へ帰宅する。ちよつと小さいけど、朝からサザエのつぼ焼きとか、贅沢過ぎじゃないだろうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいま帰りましたー」

「おかえり。随分と遅かったんだね」

帰宅すると、鏡子さんが居間でお茶を飲みながらテレビを見ていた。これだけまったりとしている鏡子さんを見るのは初めてかもしれない。

「ちよつと港の方に行つてまして」

「港？」

「はい、ちよつと高級食材を……」

『私は魔物を討つ者だから』

そんな話をしていると、テレビから聞いたことのある台詞が聞こえてきた。俺はサザエの入った袋を横に置いて、反射的にテレビに目をやる。

『食らいやがれ！ ロイヤーズン！ ハイヤーズン！』

『ミラクルリボーン！』

『あぶなーい！ おさげでいふえんすー！』

例のテレビドラマをやっていた。例のリボンを纏った女の子と、魔物使いの女の子、剣士の女の子に加えて、筋肉マッチョの男とサイドテールをした女の子が加わっていた。

「このドラマ、面白いよね」

「ええ。時々ですけど見てます」

「リボンの子が飲むコーヒーがおいしそうなのよ」

え、そんなシーンあるんだ。いつもバトルしてるイメージしかないけど。

その後も、つい区切りの良い所まで見てしまった。

「ところで、港で何してたの?」

テレビが終わったタイミングで、鏡子さんが唐突に話を戻す。

「はい、このサザエを……あれ?」

さつきまで横に置いていたはずのサザエが無くなっていた。

ついでを言うと、夏海ちゃんの姿もない。

「しまった。この流れは」

「はい、サザエチャーハンの完成ですー」

急いで台所へ向かおうとしたけど、遅かった。笑顔の夏海ちゃんがおぼんにチャーハンを乗せて、居間にやってくるどころだった。

「あれ、鷹原さん、どうしたんですか?」

「ううん、なんでもないよ……」

どうやらサザエチャーハンにされてしまったみたいだ。つば焼き……。

「私は早い時間に食べたから、二人で食べるといいよ」

鏡子さんにそう促され、夏海ちゃんと二人で食卓を囲む。

「それでは、いただきますーす」

「いただきますーす……あれ?」

二人で手を合わせた……その時、夏海ちゃんの左手に包帯が巻かれているのに気が付いた。

「夏海ちゃん、その左手どうしたの？」

「あ、これですか？ サザエを茹でていた時、熱湯がかかってしまったんです。不覚です」

夏海ちゃんは申し訳なさそうな顔で、右手で左の甲をさすつていた。

「え、大丈夫なの？」

「薬も塗りましたし、すぐに治ると思います」

「それならいいけど」

「はい、心配はいりません！ それより、食べましょう！ 今日自信作ですよ！」

夏海ちゃんがそう言うので、包帯の話はそこまでになった。

俺もスプーンを持って、サザエチャーハンに取り掛かる。

「うん、美味しい」

サザエチャーハンは、磯の香りとサザエの歯ごたえが抜群の、至高の一品だった。

その後、いつものように宿題を片付ける。

宿題を終えた後、夏海ちゃんは部屋にノートや筆記用具を片付けに行った。

「あ、宿題終わったんだね」

ちょうど夏海ちゃんと入れ違いで、鏡子さんが居間にやってきた。

……そう言えば、一番重要な人に伝えてなかったような。

「あの、鏡子さん、急な話で申し訳ないんですけど」

「え、どうしたの？」

「今日のお昼の船で、本土の方に出かけてきてもいいですか？」

「本土に？ 珍しいね」

「例の鑑定大会の副賞で、紬とデートすることになったんです」

「ああ、しろはちゃんの許可は取れたんだね」

「はい、許してくれました」

「まあ、相手は紬ちゃんだものね」

なんだろう。すごく意味深な顔をされた気がする。

「すみません。昨日のうちに予定は決まっていたんですが、伝えるのが遅くなってしまっただけ」

「ううん、いいんだよ。色々あったしね」

事故とか、スクワットとか。サザエとか。確かに昨日から今日にかけて、色々ありすぎてる。

「行ってきたもいいよ。その代わりに、もし体調が悪くなったらすぐに帰ってきてね」

「わかりました。夕方の船で戻ってきますんで」

「うん。それじゃ、楽しんできてね」

「ありがとうございます」

鏡子さんにお礼を言っただけ、俺は部屋で外出の準備を始めた。

「それじゃ、行ってらっしゃい」

「頑張ってくださいー！ー」

11時。二人に見送られて、俺は加藤家を出発する。

ゆっくり歩いても、船の時間まではまだ余裕があるし。

空門姉妹とのデートの時は妙に緊張していたけど、今日は静久という年長者が同行することもあって、なんとなく心に余裕があった。

「今回は楽しまないとな」

そんなことを口走っていた。あの二人と出かけるなんて、これが初めてのはずなのに。

朝からスクワットなんかやったから、疲れてるんだろうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に到着すると、俺以外に人影はなかった。この時間帯だと、島か

ら出る人間はいないのかもしれない。

そう思いながらも、キヨロキヨロと周囲を見渡してしまう。

「タカハラさん、どしたですか?」

「いや、万が一にも木戸のおばーちゃんがいたらどうしようかと思つて」

「むぎゆ? おばーさんがいると、何かあるですか?」

「うん。色々あるんだ……つて、紬?」

「タカハラさん、お待たせしました」

いつの間にか、隣に紬がいた。朝と同じ私服姿で、胸元にリボンのついた、かわいらしい感じの服装だった。

でも、その場にいたのは紬だけだった。

「あれっ、紬だけ?」

「はい! わたしだけです!」

「静久は?」

「シズクは朝の船で一度家に帰りました。向こうで合流するらしいです」

向こうつていうのは、もしかしなくても宇都港のことだろう。

「じゃあ、行きは紬とふたりつきりだね」

「……そうですね。そうなります」

えつと紬、そこで顔を赤くしないでほしいんだけど。こつちも変に意識してしまうし。

「むぎゆ……」

変な空気になつてしまった。まだ船が来るまで時間があるし、何か話をして場を持たせないと。

「そういえば紬、最近パリングルスの調子はどう?」

焦るあまり、わけのわからない話題を振ってしまった。

「浜辺にはあまり流れ着かなくなりました。たぶん人気のなかったフレーザーの販売が終了したんだと思います」

「え、そうなんだ」

「でもシズクによると、新しくマンゴーミックスフラペチーノ味とか出てるそうです。コラボ商品とかで、これまたキワモノのにおいが

します」

駄菓子屋に入荷したら、間違いなく蒼が悶えそうなフレーバーだ。「フホートーキされないことを願うしかありません」

「そうだね」

……そこで会話が途切れてしまう。

やばい、また変な空気に。

「むぎゅ〜……」

どうやら、紬も何を話したらいいのかわからないみたいだ。俯いて、もじもじしている。

……思えば紬と話をする時は、常に静久も一緒にいたっけ。静久の存在って偉大だ。

内心困っていると、港に船が入ってくるのが見えた。まさに助け船だ。

「紬、船が来たみたいだし、行こうか」

「はい！」

紬はそう言いながら、俺の手を握ってきた。

「はっ!？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げて、固まってしまった。

「あのー、紬さん？ これはどういうことでしょうか？」

そしてつい、敬語になってしまった。

「その、逢引きとか初めてなので」

いやえっと、紬。逢引きって言わないで。

「シシヨーに色々と聞いたんですが、間違ってたでしょうか……？」

「え、シシヨーって？」

「アオさんです」

「あー、それは聞く相手を間違っていたかもね……」

「むぎゅ……とても恥ずかしいです……」

勢いで手を握ったまでは良いものの、ものすごく困っているみたいだ。うん、俺も恥ずかしい。

とりあえず、見ているのは船員さんくらいだし。ここは開き直って

手を繋いだまま船に乗り込んだ。

乗船してしばらくすると、船が宇都港へ向けて出港する。不思議と船内に入ろうという気は起きず、俺たちはデッキの柵のところで並び、離れていく島を眺めていた。

「……実は、島を出るのはこれが初めてだったりします」

控えめな波音に耳を傾けていると、紬がそう呟く。

「あ、そうなんだ」

静久と一緒にどこかに出かけてそうなイメージがあっただけけど。

「はい。なので、もうドキドキです」

海風を受けて、紬のツインテールが揺れる。その横顔を見るのがなぜか恥ずかしくて、俺は視線を海へと向ける。

海面は陽の光を受けて、キラキラと輝いていた。

「ほら紬、灯台が見えるよ」

「おおー、本当ですね！」

海面と同じように、陽の光を受けて輝く白い灯台が見えた。

「そういえばこの間、灯台の掃除をしてたんだっけ？」

「はい、打ち水をしていました！ 壁もご覧の通りピカピカです！」

「本当だ。すぐきれいになってるね」

打ち水の意味が違ってる気がするけど、丁寧に掃除をしたんだろう。

「昨日はシズクと、灯台の中を掃除していました！」

「え、二人でやってたの？」

「はい！ 二人でしてました！」

昨日会った時は、その掃除の途中で買い出しに出ていたわけか……呼んでくれたら手伝ったのに。

「床磨きとか、大変だったでしょ？」

「フローリングの床はお米のとき汁で拭くと、簡単にツヤが出るんです。ラクシヨーでした！」

「へえ、そうなんだ」

「窓ガラスも、新聞紙で磨くと綺麗になります！」

「あ、それ聞いたことあるね」

まるで、おばーちゃん知恵袋だった。

でも、二人の間に流れていた空気が少しだけ変わったような、そんな気もした。

『まもなく宇都。宇都港に到着いたします。お降りの方はお忘れ物ありませんようー』

そんな調子で紬と掃除談義をしていると、やがてアナウンスがあり、船は宇都港に到着する。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「紬ー、パイリ君ー、こっちよー」

宇都港に着くと、笑顔の静久が出迎えてくれた。静久も朝と同じ私服姿で、白と黒を基調にした、落ち着いた服装だった。

「むぎゅ、シズク！ ようやく会えました！」

紬がその大きな胸に飛び込んでいた。俺も静久に会えて、多少なりとも安堵している。

「あら、せっかく紬とパイリ君を二人つきりにしてあげただけど、嬉しくなかった？」

「……嬉しいかったような、恥ずかしかったような」

「恥ずかしかったです！ 今度はシズクもミチヅレです！ むぎぎぎぎ」

道連れって、紬。

でも、紬もいつもの調子に戻ってくれたみたいで良かった。

「それじゃ、さっそくお昼にしましょ」

合流してすぐ、静久がリードをしてくれる。この感じ、ものすごい安心感だ。

「行きたい店があるんだっけ」

「昨日のうちに紬と相談して決めてたんだけど、思い切ってジャイフルに行こうと思って」

「ああ、あの店」

でもジャイフルって、そんな思い切っていくお店だっけ？ ただのファミレスチェーンなんだけど。

「えーっと、場所はどこだったかしら……」

静久が港に設置されている周辺地図を見ていた。

「ジャイフルの場所なら、俺が知ってるから案内するよ」

「おおー、さすがシティーボーイなタカハラさんです！」

紬、そのシティーボーイも意味違うから。

「それならパイリ君、道案内よろしくね」

「よろしくお願いします！」

「ああ、任せておいて」

俺を先頭にして、ジャイフルへ向かう。

港を出て、人波をかき分けるように歩き、一度駅へ向かう。そこから少し離れた建物の二階が目的地だ。

店に入ると、ちょうどお昼時ということもあって、結構な数のお客さんで賑わっていた。

「ジャイフルへようこそ。こちらのお席にどうぞ」

営業スマイルの店員さんに、一番奥のボックス席に案内された。あれ、この席って。

「想像はしていたけど、すごい人ね」

前来た時と同じ席だな……とか考えていると、俺の向かいに紬と静久が並んで座る。

「ご注文がお決まりになりましたら、奥のボタンでお呼びください」

俺たちにおしぼりとお冷を提供して、店員さんは去っていった。

「むぎゆ、きんちよーします……」

「え、緊張？」

「ふふ。このお店、鳥白島の皆の憧れらしいの」

「そうなのかな？」

何度も言うけど、ただのファミレスチェーンなんだけど。

「ドリンクバーとか、島にはないものもあるし、家族で本土で食事っていうと定番らしいわ」

「そういえば、良一も藍がジャイフルに行ったのを羨ましがってたっけ。」

「むぎゆ……三人でなら、なんとかなると思ったのですが」

「紬もどこか落ち着かない様子だ。確かに、島だとこれだけ盛況なお店に入ることもないだろうし。」

「紬、心配しなくても俺たちがついてるから。俺とかほら、毎日外食してるし」

「だから、できるだけ安心できるように言葉をかけておく。」

「ごめんなさいパイリ君。実は私も、こういう場所には慣れてないの」「え、そうなの？」

「静久はこういうところ詳しくそうだけど。」

「と、とりあえずメニューを選ぼうか」

「ああ言ったものの、俺もそこまで慣れてるわけじゃない。外食専門とは言っても、しろは食堂だし。」

「三人でメニューを開く。相変わらず煌びやかなメニューが並んでいた。」

「むぎぎ、美味しそうな料理が一杯です」

「確かこのお店、ハンバーグがおいしいのよ？」

「そですか。なら、ハンバーグにします！」

「紬、聞いて驚け。ハンバーグでもこれだけ種類があるんだぞ」

「むぎゆ!? 多すぎます! 選べません!」

「紬は目を白黒させながらメニューを見ていた。これは決めるのに時間がかかりそうだ。」

「……つと、紬をからかうのもいいけど、俺も早いとこメニューを決めてしまおう。」

「あれ？」

その時、メニュー表の中に前回はなかったメニューを見つけた。

「……ハンチャーハンセットに、ハッピーセット？」
半チャーハンセット？ ファミレスで？」

ほとんどのメニューにはおいしそうな写真がついているのに、ハンチャーハンセットだけ写真がなかった。

……めちやくちや気になる。

「パイリ君、どうかしたの？」

「いや、なんでもないよ」

ちなみに、ハッピーセットの写真はどうみても親子丼だった。おもちゃでもついてくるのかと思っただけど、そんな感じじゃない。

さらにその横には『開発部長一押しメニュー、ついに解禁！』とでっかく書かれていた。

結局、何がハッピーなのかいまいちわからなかったけど、きつとその開発部長つてすごく変わった人なんだろう。

「……私は決めたけど、紬とパイリ君も注文は決まったかしら？」

「はい！ 決めました！」

「え？ ああ、決めたよ」

新メニューについて考察しているうちに、皆の注文も決まったみたいだ。

「それじゃ、店員さんを呼ぶわね」

静久がボタンを押して、しばらくすると店員さんがやってきた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

紬と静久が注文したのはそれぞれ、わふうハンバーグセットと、パイ包みハンバーグセットだった。

「あの、すみません」

注文の前に、どうしても気になったので、俺は店員さんにハンチャーハンセットについて聞いてみた。

「ジャイフル自慢のハンバーグとチャーハンが一緒に食べられる、大変お得なセットとなっています」

あ、ハンってハンバーグのハンなのか。そりやそうだな。

「鉄板の高火力で調理したチャーハンは、当店おススメの一品ですが、

いかなさいますか?」

「あー……いや、俺はイタリアンハンバーグセットで」

謎は解けたけど、さすがに二食続けてチャーハンというわけにもい
かない。

鉄板チャーハンってのも気になるけど。興味本位で注文しなくて
良かった。

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文の確認をして、店員さんは去っていった。

「……でも、こうやって三人でお出かけをするのは初めてかもね」

一時の間を置いて、静久が呟くように言う。

「はい、許可してくれたシロハさんには、いくら感謝してもしきれませ
ん」

「なんでも鑑定大会で、紬が自力で勝ち取った権利なんだから、別に気
にする必要ないと思うけど」

「そ、そーゆーわけにはいきません。一日タカハラさんをお借りして
ますので、色を付けてお返ししませんと!」

「そうよね。借りたものは返さなきゃ。おっぱいだってそう」

「えええ」

なんだか話に変な方向に行ってしまったような。

それにしても紬、色を付けるって意味わかってるんだろうか。

「というわけで、シロハさんにお礼をしたいのですが」

「お礼?」

「はい! シロハさんが好きなものとか、タカハラさんなら知ってま
すよね?」

「え? 急に言われても」

「知ってるわよね? パイリ君は鳴瀬さんの彼氏なんだから」

「え、えーっと……スイカバー、とか?」

「さ、さすがにそれは軽すぎるんじゃないかしら。他のものはないの
?」

「他のもの……えーつと……」

その後も料理を待ちながら、しろはへのお礼について意見が交わされた。場所こそ違うけど、俺たちの周りの空気はいつもと何ら変わらなかった。

「おまたせしましたー」

やがて、注文したメニューが運ばれてきた。

「二人とも、しろはへのお礼の件はまた後で考えることにして、せっかくだし温かいうちに食べよう」

「……そうですね。腹が減ってはイクサはできないと言いますし」

お礼の件は棚上げにして、とりあえず食事をすることにした。俺、なんでファミレスに来て疲れてるんだろう。

「それじゃ、いただきます」

三人で手を合わせてから、食べ始める。

俺もイタリアンハンバーグを口に運ぶ。上にかかったトマトソースの酸味が絶妙で、付け合わせのほうれん草のソテーとよく合う。とっってもボーノな一品だった。

「むぎぎぎぎぎ」

声がる方を見ると、紬がわふうハンバーグを前に苦戦していた。どうやらナイフとフォークがうまく扱えないらしい。

「紬、わふうハンバーグは柔らかいから、箸で食べられるぞ?」

「そですか。それは助かります」

近くに置かれていたカラトリーボックスから割り箸を取り出し、綺麗に割ってからわふうハンバーグを食べ始める。

「紬、美味しい?」

「はい。とってもわふう! です!」

「そう。良かったわね」

そう言う静久の方を見ると、ナイフとフォークで器用にパイ包みハンバーグを食べていた。

元々肉汁たっぷりのジヤイフルのハンバーグを、パイ生地で包むこ

とでその肉汁を逃がすことなく堪能できるらしい。パイ生地を使うあたり、なかなか家で作ろうと思っても難しそうだ。

「美味しいわよ。オツパイ包みハンバーグ」

……うん。何も聞かなかったことにしよう。

「シズクのハンバーグも美味しそうですね」

静久のハンバーグはパイ生地を使ってるのもあって、見た目も変わっている。紬も気になったみたいだ。

「紬、一口あげるましようか。ほら、あーん」

「はい！ あーん」

静久がパイ包みハンバーグを紬が食べやすい大きさにカットしてあげてから、紬の口へ運んであげていた。

なんとというか微笑ましい。親友同士というより、母親と娘みたいに思えてしまうのは何故だろう。

「ねえ紬、パイリ君のハンバーグも気にならない？」

「はい！ 気になりますー！」

「え？ じゃあ一口どうぞ」

俺は鉄板の位置をずらして、紬が取りやすいようにしてあげる。

「はいー！」

……えつと紬、そこで笑顔で口開けないで。

「ふふ。ほら、パイリ君」

「わ、わかってる」

シズクは笑顔でこつちをを見る。こういう流れになるのがわかっていたんだろう。

俺はハンバーグを小さ目にカットして、紬の口に入れてあげる。

「おおー、タカハラさんののも美味しいですー！」

紬はニコニコ顔で俺のハンバーグを食べてくれた。俺がいろいろと意識しすぎなんだろうか。

「むぎゆ……美味しいですけど、その、タカハラさんに食べさせてもらうとか、ものすごく恥ずかしくなってきました……」

「え、今更!？」

「……シシヨーからは、デートの時はこうするものだと言ったのです

が……むぎゆぎゆぎゆぎゆ……」

だから蒼、何教えてるの——!?!

その後、恥ずかしさでむぎゆむぎゆ言いだした紬を静久と一緒に楽しみつつ、食事を済ませた。

ジャイフルを出した後、次の予定について静久に確認する。

「この後はぬいぐるみの専門店に行くんだっけ？」

「そうよ。あそこは一度、紬と一緒に行ってみたかったの」

「その店って、どこら辺にあるんだ？」

「駅の中にショッピングモールがあるでしょ。その中なんだけど。ウニクロの少し先よ」

「そうなんだな」

ウニクロにはこの前も行ったけど、そんな場所あったっけ。

「私知ってるから、ついて来てね」

「わかった」

静久が場所を知っているなら安心だな……と、三人並んで歩きだそうとした、その時。

「あ、そう言えば忘れていました」

紬が思い出したようにそう呟く。

「紬、何か忘れ物？」

「いえ、そのですね……むぎゆ〜っ!」

……次の瞬間、紬が俺の右腕に抱きついてきた。

「ちよつと紬、ついさつき恥ずかしいとか言っておきながら、今度は何!?!」

「こ、これもシシヨーです!」

「え、また蒼?」

「はい! アオさんから、デート中はこうやって歩くものだと言われました!」

だから蒼、ステップアップさせすぎ! 何教えてるの!

「あの、シズクも一緒をお願いします!」

「え、私も!？」

「そです! ミチヅレです!」

あ、ミチヅレってこれのこと。

「し、死んじやいそうなくらい恥ずかしいけど……紬の頼みとあれば断れないわ! パイリ君、覚悟してね! むぎゅ〜っ!」

そして、静久が俺の左腕に抱きついてきた。

紬と静久に両サイドから抱きつかれてしまった。

「ま、またこのパターン……」

というか、左側がその、柔らかすぎる。天善ごめん。これは色々とやばい。

「えっと、パイリ君、お店はこっちよ。し、しっかりついて来てね」
ついて行くも何も、逃げられません。誰か助けて。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

せわしなく行き交う人々の間を縫って駅へ入り、そこからエスカレーターでショッピングモールへ向かう。

多種多様な店が軒並ぶその一角、以前行ったことのあるウニクロから少し離れた場所に、その店はあった。ちようど曲がり角の先になっ
ていて、ウニクロからだちようど見えない位置だった。

「ついたわ。ハニーよ」

店に到着したタイミングで、ようやく両腕が解放された。色々な意味で注目を浴びてしまっていた気がする。なんのへじやぶだろう。

「おおー、すごくきれいなお店ですね!」

入り口横に設けられたショーウィンドーには、外国産のカラフルなクマのぬいぐるみが並んでいた。この一角だけ雰囲気が違う。

「さあ、入りましょ」

「はい!」

二人に続いて店へ入る。外見と同じように店内もメルヘンチック

な色合いで統一されていて、棚にはバラエティに富んだぬいぐるみが所狭しと並べられていた。

「……これは、すごすぎです!」

紬の目の色が変わった。ぬいぐるみ集めが趣味だし、やっぱりこういうものが好きなんだろうな。

「せっかくだし、三人でゆっくり見て回りましょう」

「はい!」

テンションの高くなった紬を落ち着かせながら、近くにあった棚から順番に見てみることにした。

「なんだこれ? でっかい鷗だな」

「本当ね。ジヨナサンという名前らしいわ」

見ると、天井から大きなカモメのぬいぐるみが吊るされていた。空を飛んでいるイメージだろうか。

「こつちにも大きな星があります! 可愛いです!」

紬が目の前の棚にあった、星形のぬいぐるみを抱きしめていた。

「紬、説明によると、それはヒトデみたいよ」

「むぎゆ!」

「ヒトデのぬいぐるみとか、女の子が貰って嬉しいのかな……」

「どうかしら。好みも色々だと思っけど」

「こつちはどうでしょうか」

紬はヒトデのぬいぐるみを棚に戻し、近くにあったピンク色の丸い物体を手取る。なんだか目のようなものもついている。

「え、なにそれ」

「だんごみたいですよ」

「え、だんごのぬいぐるみ?」

「はい。何種類かあるみたいです」

「どうやらシリーズ化されているらしい。なんだろう。餡だんごとか、草だんごとかあるんだろうか。」

「二人とも、このぬいぐるみを見て。何に見える?」
「え、どれ?」

次に静久が差し出してきたのは、ピンク色の犬のようなぬいぐるみだった。

「犬じゃないのか?」

「私にはゾウに見えるんだけど」

「え、ゾウ?」

「わたしにはイノシシさんに見えます」

「え、猪?」

人によって見え方が違う、不思議なぬいぐるみだった。

「タカハラさん、このぬいぐるみを見てください!」

棚の並びに沿うように移動していると、絨がまた別のぬいぐるみを持ってきた。

「なにそれ、ワタアメみたいなぬいぐるみだね」

「これも犬みたいよ」

「え、これが犬?」

その見た目では、とても犬には見えない。

「これはなかなか可愛いです!」

絨が抱きしめると、ピコピコと妙な音がしていた。

さらに奥に進むと、少し開けたスペースがあり、その中央に大きなクマのぬいぐるみが置いてあった。座ってるから分かりにくいけど、のみきと同じくらいの大きさはあるんじゃないだろうか。

「これ、専用のトランク別売りって書いてあるわ」

トランク? なんのトランクだろう?

「ねえパイリ君、このぬいぐるみの値段、凄いわよ」

静久が値札を見て驚いていた。俺もその横に立って、値札を見ている。

「32万円!」

「娘さんへのプレゼントに是非、ですって」
それにしてもさすが外国製。高すぎる。

「タカハラさん、これを見てください！」

大きなクマが置いてあった広場から少し歩くと、絨が大きなスイカのぬいぐるみを持ってきた。これはクッション代わりになるかもしれない。

「シロハさんにいかがですか？」

「確かに、しろはとか喜びそうだよな」

「パイリ君、せっかくだし買ってあげたら？」

「でも、これ持って帰るのはちよつと」

「あら、夏にスイカを持って外を歩くのは普通よ？」

それは島の中の話だから。本土だと色々と問題がある。それ以前にこれはぬいぐるみだし。

「それにしろはは、スイカと言うよりはスイカバーが好きだからな」

「スイカバーなら、あつちに抱き枕があるわよ」

「え、抱き枕？」

「はい！ これですよ！」

絨がふらふらしながら、巨大なスイカバーを持ってきた。

「うわ、こんなのあるのか」

「すごいけど、値段もすごいわね」

「え、値段？」

静久に言われて、俺は恐る恐る値札を見てみた。

「おお。28000円……」

俺は何も見なかったことにして、絨にスイカバーの抱き枕を棚に戻してきてもらった。

その後も店内を見て回る。当たり前だけど、店内にいる客のほとんどが女性だった。

うーん、絨たちと一緒にじゃなかったらまず入ることのない店だっただろうな。しろはもぬいぐるみって感じじゃないし。

「なかなか紬のハートを射止めるぬいぐるみはないな」

大きな首長竜のぬいぐるみとか、ステゴザウルスのぬいぐるみとか、気になってはいたみたいだけど。

「紬の感性は独特なところがあるものね」

確かに、カツパのぬいぐるみとか持ってるし。

「そういえば、この店に来た目的って？ 買い物？」

「そんなものないわよ？」

「え、ないの？」

「私は紬と、ここに来たかっただけなの。目的とか二の次のよ」

「そうだったのか」

「もちろん、紬が買いたいものがあるなら、それが一番だけどね」

「確かに紬、すごく楽しそうにしてるもんね。テンションも明らかに高いし」

「これに決めました！」

静久とそんな話をしていると、紬がレジの近くのワゴンから、二つのクマのぬいぐるみを手を取っていた。

「では、ちよつと買ってきます！」

紬は小走りでレジの方へ行ってしまった。俺たちはそんな紬を見守りながら、ワゴンの中を見てみた。

『半額セール品。どれでも一つ1000円』

ワゴンの側面には、カラフルな文字でそう書かれていた。いわゆるワゴンセールだった。

ショーウィンドーに並んでるとそこまで違いはなさそうだけど、型落ち品だったりするんだらうか。

「お待たせしましたー」

しばらくすると会計を終えた紬が戻ってきたので、そのまま店を出ることにした。

「それじゃ、そろそろ別のお店も見てみましょうか」

「そうだな」

ショッピングモールの中を、三人で歩く。

紬も二つのぬいぐるみが入った袋を大事そうに抱えて、ニコニコ顔だった。

「紬、その二つが気に入ったんだね」

並んで歩きながら、紬にそう声をかける。

「えっと、少し違います」

「え、どういうこと？」

「それはですね……はい、どうぞ！」

次の瞬間、紬は二つのぬいぐるみを袋から出し、俺の方に差し出してきた。

「えっと、これは？」

「こっちの白いクマさんは、シロハさんへのお礼の品です！」

「あ、ジャイフルで言っていたお礼だね」

「はい！ それで、こっちの茶色いクマさんは、ナツミさんへのお土産です！」

「夏海ちゃんに？」

「はい！ 今日は一緒に来れなかったので、せめてものお詫びの品です！」

そういえば、今日は夏海ちゃんも誘われていたけど、なんだかんだで辞退したんだっけ。

「ありがとう。二人とも喜ぶと思うよ」

「はい！」

「でもせっかくだし、そのぬいぐるみは紬から二人に渡してほしいな」
「ですか。それなら、帰ってからお二人に渡すことにします！」

紬はクマのぬいぐるみを袋に戻し、再び歩き出した。

その後、静久の強い勧めで水着専門店にも入ってみた。紬は静久に言われるがまま、新作水着の試着をさせられていたけど、俺に見せるのは恥ずかしいみたいで、試着室の中で二人だけのフアツションショーが行われていた。これもへじやぶだった。

俺はというと、試着室の前で待っていて、また店員さんに怒られる

のも嫌だったので、競技用水着コーナーに逃げていた。さすがに試着はしなかったけど。他に逃げれそうな場所がなかった。

「むぎゆぎゆぎゆ〜……」

「どうしたのかしら紬、疲れちゃってるみたいね」

さっきのファッションショーがその一因を担ってるなんてことは、口が裂けても言える雰囲気じゃなかった。

もうすぐショッピングモールの出口というところまで歩くと、気になる店を見つけた。

「紬、あれ見て」

「おおー、すごいですー！」

ガラス張りの向こうで、職人さんが大きなワタアメを作っていた。とっってもカラフルなワタアメだった。

「レインボーワタアメですって」

ガラスにメニュー表が貼られていた。さすが街の出店だけあって、種類が豊富だった。

「スイカ味や、ブルーハワイ味とかあるのか」

「おお、シロハさんやアオさんとの夢のコラボレーションですね！」

そのうち、三角形の秘密味とかが出てきそうだ。

「この間私を買ったザラメも、ここに売っていたのよ」

よく見ると、奥の方にザラメの販売コーナーもあった。

「あら、いらっしやい」

店の前にいる俺たちに気づいて、髪を三つ編みにした店員さんが小窓から顔を覗かせる。

「おひとついかが？」

「むぎぎぎ……本場の味を試してみたいところですが」

紬はちらちらと財布の中を見ている。ぬいぐるみを買った後だし、予算がないんだろうか。

「紬、私をごちそうしてあげるわ」

「いえ、それは悪いですー！」

「気にしないの。どれにする？」

「むぎゆ〜……それでしたら……」

紬はメニユー表を前にして、振り子のように左右に揺れていた。どうやら迷っているみたいだった。

静久は少し後ろから、その様子を笑顔で眺めていた。

「……あれ」

何の気なしに道の反対側を見ると、ワタアメ屋の向かいにヘアアクセサリーの専門店があるのが見えた。

「……そうだ。ふたりとも、ちよつとここで待ってて」

二人にそう言い残して、俺は向かいのお店へと足を運ぶ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うわ」

しろはにお土産までもらっちゃったし、紬にお返しのプレゼントでも……と軽い気持ちで店に入ったけど、その品数に圧倒される。

「ステイック、コーム、クリップ、シユシユ、バレツタ、カチューシャ、ヘアピン……」

やばい。全くわからない。どう使うのかすらわからないものも多い。

俺は軽い気持ちで入ったことを、激しく後悔していた。

「カチューシャくらいなら、聞いたことあるけど」

それっぽいコーナーに行き、大量のカチューシャを前に悩んでいた。

「この黒いのって、鷗がつけてる奴に似てるよな」

こつちの赤いのかつけると、たい焼き食べながらうぐうとか言いそうだし。

でも、よく考えたら紬ってカチューシャのイメージじゃない。

「うーん、うーん」

悩みながら隣のバレッタのコーナーに行ってみる。これも細らしくないよな。

ちなみにこの店も、お客は女性ばかりだった。皆怪訝な表情で俺を見ていた。

「パイリ君、突然どうしたの?」

その時、背後から静久に声をかけられた。

「あれ、紬は?」

「お店の前のベンチで、ワタアメを食べて待ってもらってるわ。せつかく買ったしね」

確かに、ワタアメを持ってこういう店には入れないだろう。

「それにしても助かったよ。店に入ったのはいいけど、どれがなんだかさっぱりわからなくて」

俺は安堵し、紬へのプレゼントを探している旨を伝える。

「うーん、その心構えは立派だと思うけど、いきなり男の子一人でこういうお店に入るのは無謀よ」

入店してから最初の数分間で、それは痛感していた。

「先走ったことは反省してるよ。だから是非、静久にも紬へのプレゼント選びを手伝ってほしいんだ」

「いいわよ。その代わり、私にも少し出させてね?」

「え?」

「二人からのプレゼントってことにすれば、紬も断れないでしょう?」
「確かにそうだろうな」

「それじゃ、あまり紬を待たせても悪いし、手早く行きましょう。紬に似合うのは、こういうアクセサリーじゃなくて、こつちね」

そう言っつて静久が向かったのは、リボンのコーナーだった。俺も後に続く。

「紬だと、こういうシンプルなのが似合うんじゃないかしら。髪も綺麗だしね」

「後は、色だな」

「そう、ね……」

リボンと一口に言っても、壁一面にももの凄い種類が並べられてい

た。まるで虹の雨だ。

「パイリ君、色はあなたに一任するわ」

「なら……これなんかどうかな」

「こういう時は直感が大事だ。」

俺が選んだのは、シンプルな青いリボンだった。なんとなくだけで、これが紬に似合っている気がした。

「うん、良いんじゃないかしら。きつと紬、喜ぶわよ」

「よし、これに決めた」

二人からつてことで、半分ずつ支払いをして、足早に店を出た。

「むぎぎぎぎぎぎぎぎ」

外に出ると、そこには大変ご立腹な紬がいた。

「一人で食べるワタアメはあまりおいしくありません」

「ごめんね、紬」

「これを買ってたんだ」

「紬へのプレゼントなの」

二人で矢継ぎ早に謝りながら、包装された箱を紬へ渡す。

「むぎゆ？ 二人からですか？」

「うん」

「開けてみてもいいですか？」

「もちろんよ」

紬は焦る気持ちを抑えながら、丁寧にその包みを開いていく。

「おおー、綺麗なりボンです！ シズク、ハイリさん、ありがとうございますー！」

「いますー！」

笑顔の花が咲く。一気に機嫌も直してくれたみたいだ。

「紬が喜んでくれて、私も嬉しいわ」

「だな」

「……うん？ ハイリさん？」

「帰ったら、さっそく結び方を教えてあげるわね」

「はい！ シズク、よろしくお願いしますー！」

……なんだろう。今一瞬だけ、胸が締め付けられるような感じがしたんだけど。

「むぎゆ？ タカハラさん、どうかしましたか？」

「ううん、なんでもないよ」

なんだか妙な違和感を感じたけど、それは紬の笑顔の前に、溶ける様に消えていってしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、宇都港から船に乗って、16時頃に島に帰ってきた。

「二人はこれからどうするんだ？」

「私は紬と一緒に灯台に行くわ。リボンの結び方を教えてあげないといけないし」

「夜にはシロハさん食堂に行きますので、ぬいぐるみもその時にお渡しします！」

「ありがとう。きつと喜ぶと思うよ」

「いえ、タカハラさん、今日はありがとうございました！」

「楽しかったわ。パイリ君」

「ああ、それじゃあ」

最後に軽く挨拶をして、二人と別れた。

「ただいまー」

加藤家に帰宅し、居間に行く。

「……あれ？」

居間には鏡子さんの姿はなく、夏海ちゃんが一人で昼寝をしていた。

「あーあ、扇風機つけっぱなしで寝てるし」

身体が冷えても悪いので、とりあえずタオルケットを持ってきて、

かけてあげる。

寝てる夏海ちゃんの手には、青い表紙の本が握られていた。どうやら鴟の本を読んでいて、そのまま眠ってしまったらしい。

「青い表紙ってことは、三の巻だっけ」

夜にしか読まないって言ってたような気もするけど。

「面白いから、つい読んじゃったのかも」

俺はそつと居間を後にして、自室で着替える。

そして一息つこうと、畳の上に横になった拍子に……疲れが出てしまったのか、そのまま眠ってしまった。

「……く……しちやダメよ」

「はい、ごめ……さい」

……あれ？ なんだか声が聞こえるような。

「でも、まだ半……」

「一緒に……から。お願いね」

「はい……」

誰だろう。どっちも聞いたことあるような声だけど……。

「……あれ」

気がつくと、部屋の中はすっかり暗くなってしまっていた。

「……しまった、寝てた」

俺は起き上がると、すぐに居間へと向かう。

「あ、鷹原さん、起きましたか？」

居間では夏海ちゃんと鏡子さんが一緒にテレビを見ていた。

「玄関に靴があったので、帰ってきてるんだと思って部屋に行ったら、寝てますし」

なんとなくだけど、夏海ちゃん是不機嫌そうだった。

「もう少し起きるのが遅かったら、晩ご飯食べに行っちゃう所でしたよっ。」

「あー、うん。ごめん」

「あら、女の人とデートをするって、男の人はすぐく気疲れするのよ。夏海ちゃんも察してあげてね」

「そ、そうなんですか……？」

鏡子さんが笑顔で夏海ちゃんをそう論じていた。夏海ちゃんにはまだちよつと早いと思うけど。

「でも、さすがにお腹空きました」

居間の壁にかかった時計を見ると、19時前だった。この時間までずっと待つててくれたのか。さすがに悪いことしたな。

「それじゃ夏海ちゃん、晩ご飯食べに行こうか」

「はいー」

待つてましたとばかりに立ち上がった夏海ちゃんと一緒に、夕飯を食べにしろは食堂へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろはー」

「しろはさん、こんばんわー」

「あ、いらっしやい」

しろは食堂の扉をくぐると、紬と静久がいた。二人の前には空の食器が置かれているので、既に食事は終えているらしい。

「羽依里、今日はお楽しみだったみたいだね」

開口一番、しろはにそう言われた。どっかのゲームの宿屋みたいなこと言わないでほしい。

「相手は紬だし、静久もいたし、蒼たちみたいなことにはならないと信じていたけど……」

どうやら俺たちが来るまでの間に、紬たちと今日の外出について、いろいろ話をしたらしい。

「しろは、もし気になることがあったら、弁解をさせてもらえる」と

……」

「……ううん。今回は良いよ。お土産までもらっちゃったし」

しろはの視線の先、カウンターの隅に白いクマのぬいぐるみが飾られていた。どうやら紬の純粋な気持ちが届いたようだった。

「はい！ ナツミさんにもお土産です！」

俺たちがカウンター席に座ると同時に、紬が夏海ちゃんにもお土産を渡していた。

「え、私が貰っちゃっていいんですか？」

「はい！ ズツ友ですから！」

そういえば、ズツ友宣言していたね。

「あ、ありがとうございます……」

「ふふ、夏海ちゃんの髪と同じ色ね」

「えへへ。本当ですね！」

ぬいぐるみを受け取った夏海ちゃんは本当に嬉しそうで、紬のプレゼントは大成功だったみたいだ。

ちなみに、紬の髪型はいつものツインテールだった。まだリボンは使っていないらしい。

「それで、二人は今日は何にする？」

しろはがおしぼりを渡してくれながら、注文を聞いてきた。

「俺は日替わりかな」

「私はコロッケ定食をお願いします！」

「わかった。少し待っててね」

注文を受けると、しろははすぐに調理を始めた。

俺たちが料理を待つ間も、紬はぬいぐるみ専門店やレインボーワタアメの話等、今日の出来事をこと細かく夏海ちゃんに話していた。

「はい、コロッケ定食お待ちどうさま」

しばらくして、俺たちの分の料理が並べられる。

「はい、日替わりのしろな定食」

「え、しろは定食？」

思わず聞き返してしまっていた。

「え、なんで定食に自分の名前を付けるの」

「だって、しろは食堂だし」

「しろ菜。関西から島に戻ってきた人が栽培しててね。おすそ分けでもらったの。あっさりしてて、どんな調味料とも合うんだよ」

そう説明をしてくれながら、俺の前にはご飯、しろ菜の味噌汁、しろ菜のおひたし、しろ菜を使った肉野菜炒めが並べられる。どれも美味しそうだった。

「それじゃ、私と紬はそろそろお暇するわね。鳴瀬さん、ごちそうさま」

「そうですね！ タカハラさん、ナツミさん、またです！」

俺たちの料理が出揃うと同時に、二人は帰っていった。

「……夏海ちゃん、今度また改めて紬にお礼を言っておいてね。そのぬいぐるみを渡すために、ご飯食べた後もずっと待っていてくれてたんだから」

「そうだったんですか……わかりました。今度またお礼を言っておきます」

「うん。それじゃあ二人とも、冷めないうちにめしあがれ」

「はい、いただきます！」

しろはに促されて、それぞれの食事に箸を伸ばす。

「あれ、この野菜炒めの肉って、豚肉？」

「ううん、猪肉。昼間に夏海ちゃんから匂いの消し方を教わったんだよ」

「あ、そうなんだ」

「えへへ、一緒にお昼ご飯も作ったんですよ！」

「そうなんだ。頑張ったね」

ちなみにお昼は練習も兼ねて、猪肉と豚肉の合挽き肉でハンバーグを作ったらしい。

まさか、しろはたちもハンバーグだったなんて。

「でもこの猪肉、全然臭みもないし食べやすいよ。大成功だね」

「一度茹でて匂い消しをした後、辛味噌で炒めてあるの。味噌はしろ

などの相性もいいし」

野菜炒めはピリ辛の味付けで、いくらでもご飯が食べられそうだった。

「羽依里、そんなに慌てて食べなくても」

「ご飯に合うから、つい」

続いて、おひたしを食べてみる。鰹節とポン酢であっさりとしていて、これもいくらでも食べられそうだった。

「しろなおひたしも癖が無くておいしいね」

「うん。ほんのちよつとのごま油が隠し味なの」

「しろなの味噌汁も、出汁が染みてて美味しい」

「……なんだか、自分の名前を何度も呼ばれてるみたいで恥ずかしいんだけど」

「気のせいだよ。しろなの話をしているんだ」

「……うん、そう。そうだよね」

「ところで、しろはの味噌汁、おかわり貰える？」

「うん。いいよ」

「鷹原さん、そのしろなお味噌汁、そんなにおいしいんですか？」

「うん、あっさりしていて美味しいんだ。さすがしろなだよ」

「なるほど、さすがしろはですね！」

……なんか、朝も何か似たようなやりとりをしたような気もするけど。

俺は更にご飯までおかわりして、しろな定食を堪能した。

「美味しかったよ、しろは定食」

「うん。お粗末さま」

ついついゆっくりと食事をしてしまった。時計を見ると、20時半近くになっていた。

「夏海ちゃん、俺たちもそろそろ帰ろうか」

「あの、鷹原さん。もう少しだけ、しろはさんとお話してもいいですか？」

「良いけど……何の話？」

「チャーハンの極意・その5」

しろはがそう続けてくれた。

「え、極意?」

「猪肉の匂いの消し方を教えてもらう代わりに、私からは夏海ちゃんにチャーハンの極意を教える約束をしていたの」

「はい! チャーハンの極意は私としろはさんだけの秘密なので、残念ながら鷹原さんには教えられません!」

「うん。教えられないよ」

二人の息はピツタリだった。二人はチャーハンという強い絆で結ばれているみたいで、俺の入る余地は微塵もなさそうだった。

「そういうことなら、俺は先に帰るよ。夏海ちゃんも、あまり遅くならないようにね」

「わかりました!」

「しろはも、夏海ちゃんをよろしくね」

「うん」

夏海ちゃんをしろはに任せて、俺は一足早く加藤家へと戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……鷹原さんが先に帰って、だいぶ時間が経ちました。

「本当に一人で大丈夫? 暗いし、送ってあげようか?」

「いえ、しろはさんは食堂の片付けがあるでしょうし、一人で帰れます!」

「そう……」

「それじゃ、しろはさん、ありがとうございました!」

しろはさんにチャーハンの極意を伝授してもらったお礼を言って、食堂を出ます。

もちろん、紬さんからもらったぬいぐるみを持って帰るのも忘れま

せん。

人気のない一本道を、一人で歩きます。

いつからか、学校を見ても何も感じなくなりました。これも島の皆さんのおかげだと思えます。

そして、そのまままっすぐ加藤家に……は帰らず、途中で道を逸れて、山の方へ向かいます。

「……夜遊びなんて私、悪い子ですよね」

誰に言うでもなくそう呟いて、躊躇うことなく山の奥へ入って行きます。

すぐに真っ暗になりました。時々、木々の隙間から時々入ってくる月の光だけが頼りです。

晩ご飯を食べに出た手前、懐中電灯を持って来るわけにもいきませんでしたし。

耳に入ってくるのは、左右に生い茂る草の中で鳴く虫の声。そして風が木の葉を揺らす音だけです。

こんな時間に山に入る目的は一つ。七影蝶です。

この前は、たまたま住宅地の近くに七影蝶がいましたが、普段は山の方がたくさん逢えます。

神域のある場所ですし、当たり前ですよね。

「むー……」

サンダルの中に小枝や落ち葉が入って歩きにくいです。どうせならスニーカーであれば良かったと、後悔しています。

相変わらず視界は悪いですが、だいぶ土の匂いが強くなったので、森の奥の方に入ってきたことだけはわかりました。

「あ」

皆さんの秘密基地を少し超えた頃、目の前を一匹の七影蝶が飛んでいました。

「……おいで」

私はゆっくりと右手を前に差し出して、七影蝶を誘います。

七影蝶は引き寄せられるように指先に触れて、崩れるように私の手のひらの中に吸い込まれていきました。

もうすっかり見慣れた光景です。

「んく……」

直後にめまいに襲われて、その場にしゃがみ込んでしまいます。こっちはまだ慣れません。

「でも、まだ足りない……後、二匹は探さない」と

私は頭を振って、立ち上がります。

「鷹原さん、ごめんなさい。家に帰るの、もう少し遅くなりそうです」

私はその後も、一時間くらい山の中で七影蝶を探し歩いています。た。

第十九話・完

第二十話 8月13日（前編）

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

……朝。

今日も夏海ちゃんの声で目が覚める。

「夏海ちゃん、おはよう」

「おはようございませす」

ふすまを半分だけ開けて、そこから顔を覗かせていた夏海ちゃんに、朝の挨拶をする。

「居間で待ってますから、準備しておいてくださいね」

「うん」

ぱたん、とふすまが閉じられ、静寂が訪れる。

「いつもと変わらない朝を迎えられるって、素晴らしいね」

俺は噛みしめる様にそう口に出してから、手早く布団をたたんで、着替えを済ませる。

「……あれ？ 羽依里さん？」

なんとなく違和感を感じていたけど、呼び方が変わっていた。

夏海ちゃん、昨日までは俺のこと『鷹原さん』って呼んでいた気がするけど。

「うーん？」

毎日顔を合わせてるのに、いつまでも苗字つてのもあれだし。夏海ちゃんとの距離が縮まったと思えば、それでいいか。

俺は特に深く考えることもなく、顔を洗おうと洗面所へ足を運んだ。

身支度を整えた後、居間で夏海ちゃんと合流して、ラジオ体操へと向かう。

「夏海ちゃん、昨日の夜は遅かったんだね」

その道すがら、昨日の話をしてみた。

「ごめんなさい。昨日はしろはさんと盛り上がりすぎてしまいました」
チャーハンの極意だっけ。しろはも料理のことになると、あれで結構熱くなるからな。

「ううん、いいんだよ。俺は料理でしろはと熱く語るなんてことはできないからね」

「あれ、羽依里さんもチャーハン作れるんですね?」

「うん、でも俺は時々教えてもらってるだけだから。直接指導できるレベルにないとも言われたし」

「そ、そうなんですな」

「だから、しろはと料理トークしてくれる夏海ちゃんには感謝してるよ」

「えへへ、私もとても勉強になってますから!」

夏海ちゃんはすごく楽しそうに話してくれていた。

帰宅が遅くなったことを鏡子さんから咎められている様子もなかったし、問題なかったんだろう。

「そういえば、紬からもらったぬいぐるみは?」

「はい! しつかりとアrikuiさんの隣に置いてます!」

アrikuiとクマのぬいぐるみ、オルゴール、桜貝の入った小瓶……

夏海ちゃんの部屋も、段々とカオスになっていくなあ。

「あ、もしかして、羽依里さんも欲しかったんじゃないですか?」

「え、ぬいぐるみ?」

「はい!」

悪戯っぽく笑っていた。心なしか、最近本当に距離が縮まってきている気がする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おはよう、なつちゃん!」

「鳴さん、おはようございます!」

「パイリ君、おはよう」

神社に到着すると、いつものメンバーに加えて紬や静久、鳴の姿があった。今日は大集合だった。

「タカハラさん、おはようございます!」

そして、紬の髪型がいつもと違っていた。ツインテールじゃない。

「おはよう紬。そのリボン、使ってくれたんだね」

「はい! シズクと特訓しました!」

まだ慣れていないのか、ちよつと横にずれてる気がしないでもないけど、立派なポニーテールが結われていた。

「紬、似合ってるよ」

「む、むぎゆ……ありがとうございます」

視線を泳がせながら、耳まで赤くなってしまった。

「紬、頑張ったのよ。半分徹夜よ」

「はい。もう目もジューケツしちやってます」

確かに顔や耳だけじゃなく、目まで赤かった。

「あれ、そう言えば」

今日の紬は珍しく制服姿だった。見慣れた制服の上に、サマーセーターを着ている。

「紬が制服なのは珍しいね」

ちなみに、紬の隣に立つ静久はウシの着ぐるみ姿だったりする。

「その、パジャマで来てしまうと、せつかくのリボンが見えませんで……」

ああ、そう言えばそうか。ネコの着ぐるみだと、頭もすっぽり被っちゃうし。

「おおー、ツムツム髪型変えたんだー。綺麗なリボンだねー」

その時、さつきまで夏海ちゃんと話していた鳴がこっちにやってきた。

「はい! 昨日、タカハラさんとシズクからいただきました!」

「羽依里からもらったんだー。いいなー」

羨ましがる鴟の台詞からは、静久の存在が消されていた。

「……そういえば羽依里、昨日ジャイフルにいたでしょ？」

その時、蒼がこっそりと耳打ちしてきた。

「え、なんで知ってるんだ？」

「うちのおかーさんが言ってたのよ。パートのお昼休憩でジャイフルに入ったら、ちょうど羽依里たちの姿が見えたんだって」

そういえば、蒼の母親は本土でパートしていると聞いた記憶がある。

でも、俺は空門姉妹の母親の顔なんて覚えちゃいない。というか、面と向かって話したこともほとんどないはずだけど。

なんで俺の顔は覚えられてるんだろう。

「ちよつと待って。これってまた噂が独り歩きする流れじゃ？」

「大丈夫ですよ。おかーさんには誰にも言わないよう、きつーく言っておきましたから」

すかさず、反対側の耳に藍が耳打ちしてきた。

「二人とも、信じてるからな……」

「噂が広がる恐ろしさは身に染みてるから、きつと大丈夫よ。たぶん、恐らく。メイビー」

後半になればなるほど説得力に欠けていたけど、ここは二人を信じるしかなかった。

「お前ら——！ 準備は良いかー？ 今日もラジオ体操を始めるぞー

！」

そしてラジオ体操大好きさんがやってきて、今日もラジオ体操が始まる。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああああー！」

「うるあああああー！」

ラジオ体操大好きさんの指示に合わせ、皆で大きな声を出して横隔膜を動かす。

「うけ——！」

「むぎゅー！ー！」

「おっぱーい！」

今日はいろいろな意味でにぎやかだった。

「ねえ羽依里、この体操って本当に横隔膜の運動になってるの？」

「さあ。ほとんど実感らしい実感はないけど」

「第四の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐる〜！」

ラジオ体操大好きさんが頭を振り回す。

「ぐるぐるぐる〜！」

俺たちもそれにならって頭を振り回す。

「うう、気持ち悪い……」

俺たちはだいぶ慣れてきたけど、鴟は駄目のようだった。左右にふらふらと揺れている。終わった後は、まさに千鳥足だった。鴟だけだ。

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操終了後、いつものようにスタンプとログボを受け取る。

「お、今日はどろり濃厚だぜ」

「え、何だって？」

俺の前に並んでいた良一が、ログボを受け取るなり嬉しそうにそう言っていた。

「これ、朝食代わりになるんだよなー」

俺と夏海ちゃんは、頭にクエスチョンマークを浮かべながら、ログボを受け取る。

「なんだこれ？」

手渡されたのは、パックジュースだった。

「どろり濃厚、ピーチ味……？」

ピンク色のパッケージに、でかでかと桃が描かれていた。その見た目もさることながら、その重量に驚く。見た目の割に、ずっしりと重い。

「うー、これではチャーハンにできません……せつかくしろはさんに、

チャーハンの極意を教わったというのに」

隣では、パックジュースを受け取った夏海ちゃんが頭を抱えながら、ぶつぶつと何か言っていた。あんかけ桃チャーハンとかいう単語が聞こえたような気もするけど、聞かなかったことにしよう。

「あー、どろり濃厚、ねー……」

空門姉妹が全く同じ動きで、手のひらでパックジュースを弄んでいた。

二人とも、俺たちより先にログボを受け取っていたはずだけど。

「蒼も藍も、そのジュース飲まないのか？」

良い感じに冷えているし、他の皆はその場で飲んでいる。

「ちよつとウマトラがねー」

「トラウマな」

「そうそう、トラウマがねー」

なんだろう。腹壊したりしたんだろうか。

「駄菓子屋に一度だけ入荷してね。試しに飲んでみたんだけど、その……」

「その？」

「全然吸えなくて、力任せにパックを握ったら……」

「握ったら……？」

「見事に吹き出ちゃって、顔から髪からまっピンクで、ベタベタのドロドロ」

「うあー、それは確かにトラウマものだな」

「でしょ？ というわけで紬、あたしのログボあげるわ」

「むぎゆ？ 良いんですか？」

「おっぱいさん、私のログボあげます」

「あら、いいの？」

結局、二人は紬と静久にパックジュースをあげていた。

ジュースをもらった二人が適当な場所に座つたのを見て、俺たちもその隣に座らせてもらい、一緒にジュースを飲むことにした。

ストローを刺して、まず一口。

「……あれ？」

いくら吸つても口の中に入って来なかった。液体のはずなのに、硬い。

「んんんんー！」

隣の夏海ちゃんが顔を真っ赤にしながら頑張ってるんだけど、全く吸えないみたいだ。

「これは普通の肺活量じゃ吸えないからな。パックをつぶしながら押し出すように飲むんだ」

通りかかった良一がそう教えてくれた。けど……。

「なんの、元水泳部の肺活量を舐めるなよ」

俺はそう言い放ち、渾身の力を込めてジュースを吸い込む。

「お」

すると、パックの中身が口の中に入ってきた。

……ものすごく、どろっとしていた。

そして濃い。甘い。喉が渴く。

飲んで喉が渴く飲み物ってどうなんだろうか。もはや飲み物の意味を成してない気もする。

「美味しいですけど……喉乾きませんか？」

夏海ちゃんは良一に言われたように、パックをつぶしながら少しずつ飲んでいた。

それでも俺と同じ感想のようだった。

「相変わらずこれは……すごいトレーニングになるな」

パックジュースを飲みながら、息も絶え絶えに天善が歩いてきた。肺活量のトレーニングにでもなるんだらうか。

「そういえば天善、バイクの修理代なんだけど」

「そんなもの気にするな。ありあわせの部品で何とか修理できそうだしな」

天善と修理代金の話をしようとしたけど、どうやら受け取ってもらえそうになかった。

「もう数日すれば修理も終わる。もう少しだけ待っていてくれ」

「ああ、ありがとうな」

今度、何かしら現金以外のお礼を考えておこう。

「むぎぎぎぎぎぎ」

声が出た方を見ると、夏海ちゃん隣の隣で紬と静久がパックジュースと格闘していた。やっぱり二人も、いくら吸ってもジュースが口の中にやってこないらしい。紬のポニーテールもふるふると揺れている。

「なあ紬、一回で良いから『がお』って言ってみてくれないか？」

「むぎゆ？　がお、ですか？」

金髪ポニーテールの紬に、なんでかそんなお願いをしてしまっていた。

「ちよつとパイリ君、紬に何を言わせてるの」

「ごめん、ちよつと出来心で」

なぜか静久に怒られてしまった。

「それより二人とも、わざわざ吸わなくても良一が教えてくれたみたいにパックをつぶしながら飲めば……」

「紬、これはクーパー靱帯の特訓になるのよ！　頑張つて吸うの！」

「はい！　頑張ります！　むぎぎぎぎぎぎ」

よくわからないけど、特訓中のようなだった。これは俺が口を挟んで良い問題じゃなさそうだ。

その後は黙ってジュースを飲んだ。

ちなみに鴉は、俺たちが苦戦しているのを見て、パックジュースは持つて帰って、冷凍庫で凍らせることにしたらしい。

あれを凍らせたら変わったシャーベットのようになるだろう。どういう食感になるのか、ちよつと気になった。

「羽依里さん、そろそろ帰りませんか？」

ジュースを飲み終わって、横隔膜の疲れの余韻に浸っていると、先にジュースを飲み終わっていた夏海ちゃんから声をかけられた。

「そうだね。そろそろ帰ろうか」

飲み干したパックを用意されていたゴミ袋に入れた後、皆にあいさつを済ませて、神社を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ところで夏海ちゃん、朝ごはんどうしようか？」

加藤家の居間で、俺は夏海ちゃんにそう尋ねていた。

「うーん、実は私も悩んでるんです。さっきのジュース、なんだかお腹にずっしり来てまして」

「やっぱり？俺も同じなんだ」

俺も夏海ちゃんと同じ気持ちだった。今は全然お腹が空いていなかった。

どろり濃厚は飲み物とは言い難かったけど、朝ごはん代わりにしたったかもしれない。

「この状況だとチャーハンを作っても、美味しく食べられないかもしれないですね」

「どうやら、朝ごはんにチャーハン以外の選択肢はないらしい。」

「鏡子さんもないみたいだしさ、今日は朝ごはんは抜いて、先に宿題をしない？」

「そうですね。先に片づけちゃいましょう！」

そう結論つけて、お互いの部屋に勉強道具を取りに向かった。

その後、ノートと参考書を広げ、夏海ちゃんと向かい合って宿題をした。

「羽依里さん、ちょっと質問いいですか？」

「え、うん。いいよ」

「算数なんですけど……」

……この呼ばれ方、どうもまだ慣れないな。

その宿題が終わったところ、結局小腹が空いてきた。所詮はジュースだし、消化も早いんだろう。

「夏海ちゃん、また変わった出店が出てるかもしれないし、港に行ってみない？」

「そうですね、行きましょう！」

夏海ちゃんも同じようにお腹が空いていたみたいで、勉強道具をリュックにしまい込みながら、了承してくれた。

適当に財布をポケットに入れて、二人で港へと向かう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に着くと、昨日とはまた違う店が出ていた。

「えーっと、なんだこれ」

近づいてみると、頭上に掲げられた看板には『えびすくい』の文字。「お、いらっしやい」

昨日と同じおじさんが、同じようにウェットスーツを着て座っていた。おじさんの奥に、黒い板のようなものが見えるけど、あれは何だろう。

「あの、えびすくいって、あの海老ですか？」

夏海ちゃんがおずおずと聞いていた。

「ああ、魚の群れを網ですくうと、小さな海老が大量に獲れることがあるんだ。漁港に持って行くわけにもいかないし、こうして売っているわけだ」

例によってビニールプールが置かれていて、浅く海水が張っている。よく見ると、小さな海老がうごめいていた。

「で、お二人さん、挑戦するかい？ 一回100円だ」

おじさんが意味深な笑顔を向けてきた。昨日のリベンジを期待さ

れているんだろうか。

俺はもう一度ビニールプールを覗き込む。本当に小さな海老だし、昨日のサザエよりは勝算があるかもしれない。

「それじゃ、二人分お願いします」

「まいどあり」

俺が200円を渡すと、2つのポイとお椀が渡された。また何の変哲もない、普通のポイだ。

俺は左手にお椀、右手にポイを持って海老の群れに向かい合う。海老のインパクトこそあるけど、基本は金魚すくいと同じじゃないだろうか。

「それじゃ、私から行きます」

最初に夏海ちゃんが挑戦する。ゆっくりとポイを水中に沈め、一匹だけ離れていた海老に狙いを定めて、気づかれないように背後から近づける。

「あ」

次の瞬間、身の危険を感じた海老は勢いよく後ろに向かつて跳んだ。結局、その勢いで夏海ちゃんのポイは破られてしまった。

「あう……難しいですよ」

あの海老、なかなかのテクニシャンだ。

「はっはっは。海老は危険を感じたら後ろに逃げるんだ。今のポイの位置だと、どうぞ破ってくださいって言ってるようなもんだぞ」

「そうなんですな。海老は後ろに逃げるとか、知りませんでした……」

「これも、島の子なら5匹は持つて行くぞ」

相変わらず、この島の子供たちはすごすぎる。

「よし、夏海ちゃん、仇は取るからね」

「はい！ 羽依里さん、頑張ってくださいー！」

夏海ちゃんの声援を受けて、今度は俺が挑戦する。

「さて、どいつを狙うかな……」

俺は獲物を吟味しながら、ポイを水中へ沈める。

次の瞬間、ポイの周囲を泳いでいた海老たちが一斉に俺のポイの上に乗ってきた。

「え、なんで？」

よくわからないけど、俺のポイはあつという間に無数の海老でいっぱいになった。

「お？ にいちちゃん、やるねえ」

「おつとつと、ゆつくり、ゆつくり上げない」と

俺はそのまま、できるだけゆつくりとポイを持ち上げる。上に乗った海老たちは特に暴れる事もなく、左手に持ったお椀へとすくわれた。

どういうことだろう。夏海ちゃんの時とはえらい違いだ。

もう一度……とポイを沈めると、また同じように大量の海老が、自ら乗ってくる。

それを慎重にすくって、お椀に入れる。

「羽依里さん、すごいですー！」

なんだろう。ものすごく簡単だ。どうなってるんだろう。

更に3回目というところで、さすがにポイが破れてしまった。

「あちゃー」

それでも、俺のお椀の中には、大量の海老でひしめき合っていた。手に持っているのが怖いくらいだった。

「すごいな。にいちちゃんの方は、海老の好きな匂いでも出してるんじゃないのか？」

え、それはそれで嫌だ。

というか、ビニールプールに残った海老のほとんどが俺の方に群がってきていた。やつぱり、何か匂いが出てるんだろうか。

お椀の中の海老たちも、なんだか幸せそうな顔をしているようにも見える。こいつら、見ようによつては結構かわいいじゃないか。

ひととき大きな一匹の海老が目についた。よし、お前の名前はピエールだ。

夏の間だけ、家で飼ってやるのも良いかもしれない。

「それじゃ、貸してみな」

おじさんが笑顔で手を出してきたので、反射的に海老の入ったお椀を渡す。

「早速調理してやるよ」

「え？」

次の瞬間、おじさんはお椀に入った生きたままの海老たちを一掴みしながら後ろを向くと、そのまま黒い板に向かって投げ放つ。

「うわああああああ！ ピエールー！」

ジュジューという良い音がして、海老たちが香ばしく焼かれる。

「よいしょっと」

一瞬逃げようとした海老たちの上に、容赦なく重い蓋がされた。

もしかしなくても、あの黒い板は熱せられた鉄板だったみたいだ。

「あわわわわ」

あまりの光景に、夏海ちゃんも言葉を失っている。

「ほいよ。熱いから気をつけな」

やがて海老は良い感じに焼けたようで、軽く塩を振った後、二人分のカップに分けてから手渡された。

「……ピエールエビ、美味しいですね」

夏海ちゃん、オマールエビみたいに言わないで。

「これが命を戴くということか……」

俺たちは命を噛みしめながら帰宅した。ピエール、とつても美味しかったよ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

海老のおかげでお腹も落ち着いたので、加藤家に帰宅した後は、セミの声を遠くに聞きながら、夏海ちゃんと居間で高校野球を見ていた。

なんだろう、これはこれで夏休みって感じだ。

「あー、ここで打てれば同点だったのにー」

夏海ちゃんは相変わらず熱中している。やっぱり野球好きなのか

な。

「ごめんくださいーい」

ちやうど攻守交替のタイミングで、玄関から声がした。

「あれ、誰だろう?」

二人で玄関に出てみると、のみきがいた。

「あれ、のみき?」

もしかして、この間の事故のことで何かしら問題でもあったんだろうか。

「ああ、夏海ちゃんも一緒か。ちやうど良かった」

おっかなびっくりしている俺とは裏腹に、のみきは笑顔だった。

「え、ちやうど良いって?」

「今日の午後から、水鉄砲大会を開催しようと思っただけ。参加者を募っていたんだ」

「水鉄砲大会?」

「今日のイベントだ。二人も参加しないか?」

「やってみたいです!」

夏海ちゃんは目を輝かせて、乗り気だった。こうなると俺も断る理由がない。

「面白そうだし、参加するよ」

「そうか。色々と賞品も出るし、楽しんでくれ」

「ところで、場所はどこでやるんだ? 水がある場所っていうと、浜辺か?」

「いや、あそこだと隠れる場所がないからな。ため池で開催しようと思っ」

確かにため池だと、周辺の草むらとか木陰とか、隠れる場所がいっぱいありそうだった。

「どういうルールで遊ぶんだ?」

「それぞれ、体的につけてもらってな。それを狙って水鉄砲を撃ち合うんだ」

ため池という場所柄、サバゲ―要素も強そう。これは燃える。

「こちらでも水鉄砲は用意するが、自前で何か道具を用意してもらっ」

ても構わない。基本的に相手の的を濡らすことができれば、手で触れても良いルールだ」

なるほど、変わった道具を用意してくる奴もいるかもしれないな。でも、俺たちは水鉄砲を自作するようなスキルはないし、向こうでのみきが用意してくれたものを借りる他なさそうだ。

「詳しいルールはもう一度、向こうで説明する。それより、ため池には濡れても良い格好で来るようにな」

「え、どうして？」

「水鉄砲で撃ち合うんだぞ？ 無傷で優勝する自信でもない限り、最低でも服の下に水着くらいは着ておけ」

確かに、下着まで濡れてしまったら気持ち悪いなんてもんじゃない。いい。

「わかった。お昼を食べたら、ため池に行くよ」

「ああ、13時には始めるから、それまでに来るようにな」

そこまで話すと、のみきは去っていった。

「水鉄砲大会か……あまり聞いたことないイベントだけど、楽しそうだね」

「はい！ 楽しみです！」

夏海ちゃんと午後の予定を楽しみにしながら、お昼はカップのためきうどんを食べた。

天かすがどっさり入ったうどんで、一見ポリューミーだったけど、所詮は天かす。文字通り狸に化かされたようなうどんだった。さすが狸。陰湿すぎる。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

昼食を済ませた後、俺たちはそれぞれ着替えを済ませて、ため池へと向かった。

俺は上に濡れてもいいような適当なTシャツを着て、下は水着をはいた。動きやすいし、これでいいだろう。

夏海ちゃんはというと、さすがに水着だけだと恥ずかしいのか、鏡子さんの古いTシャツを借りて、その上に着ていた。

だぶつとしていたので動きやすそうだけど、なんだろう、妙な色気を感じる。

「あ、二人も来たのね」

「待っていたぞ」

良一、天善、しろは、蒼、藍、紬、静久、のみきに鳴。

ため池のダムの上には、いつものメンバーが集まっていた。

「すまない。もう少し準備に時間がかかるから、先に水鉄砲を選んでいってくれ」

のみきはポリタンクに入った水を運んでいた。

「あれ、その水は？」

「これか？ これは水鉄砲の予備の水だ。詳しくはルール説明の時に話すさ」

そう言うのみきは、スクール水着の上にTシャツを着ている。

周囲を見渡してみると、女性陣は皆、水着の上にTシャツを着ていた。考えることは皆同じらしい。

そして、そのTシャツは色こそ違うものの、皆同じデザインだった。

「鳥白島Tシャツ……？」

大きな船のようなものが描かれていて、その中央に大きく『鳥白島』と書かれていた。

「どうしたの羽依里、じろじろ見て」

俺の視線に気づいたのか、蒼たちと水鉄砲の品定めをしていたしろはが、振り返って声をかけてきた。

「いや、そのTシャツが気になってさ」

「のみきからもらったの。役所で余ってたから、使ってくれって」
シャツの端っこを摘みながら、しろはがそう言う。

まあ、女性は服の準備とか大変だろうし、それを考慮してのみきが

用意したんだろう。

「夏海ちゃんにも用意してあげたかったんだが、その、サイズがなくてな」

今度は何か青い紙の束のようなものを用意しながら、のみきがそう付け加えてきた。

「いえ、気にしないでください！」

夏海ちゃんもいつの間にか、紬や鷗と一緒に水鉄砲選びに参加していた。俺も選ばないと。

「よし皆、ルール説明をするから、皆集まってくれ」

全員が水鉄砲を選び終わった頃、のみきが集合をかける。

そののみぎを中心に、俺たちは円を作って集まる。

「今日の水鉄砲大会はバトルロワイヤル方式。つまり、最後まで生き残った一人が優勝だ」

「一発でも打たれたら終了なのか？」

「いや、判定にはこの紙を使う」

のみきがそう言いながら取り出したのは、先程用意していた青い紙の束だった。

「この紙は特別な紙でな。普段は厚紙程度の強度があるんだが、水に濡れるとその部分が赤色に変わり、非常に破けやすくなるんだ」

のみきが足元のポリタンクから少量の水を出して左手を濡らし、右手に持っていた紙に触れる。

すると、その紙は赤色に変色し、すぐに破れてしまった。

「皆には、この紙を身体の前と後ろに一枚ずつ張り付けてもらう。その紙が両方破れたら失格だ。すぐさま武装解除して、この場所で大会終了まで待つていてもらう」

この場所というのは、このコンクリートで舗装されたダムのことだろう。ここなら見晴らしは良いし、セーフティゾーンとして最適かもしれない。

「ちなみに、この紙を濡らして破く事ができれば、攻撃手段は水鉄砲で

なくてもいい。自信があるのならば、濡らした手で相手に直接触れて紙を濡らしてもらっても構わない」

そう説明しながら、のみきは皆にその紙を配る。

水鉄砲じゃなくても、方法は何でもいいわけだ。まあ、遠距離から攻撃できる水鉄砲が一番安全だろうけど。

「後、皆が持っている水鉄砲は種類こそ違うが、公平を期すために中に入る水の量は同じにしてある。予備の水はこのポリタンクに入れて、ここに置いておくから、水切れを起こした場合はここまで戻って補充するように」

のみきは先程手を濡らすのに使ったポリタンクを指差した。

「そしてルールとして、水を補充をしている者を見つけても攻撃してはならない。補充し終わった後ならいいがな」

確かに、ここは見晴らしも良いし、水を補給していたら良いだろう。

「そしてもう一つ。所持者が失格となって放置された水鉄砲は、他の者が使っても構わない」

「へえ、良いのか」

「ああ。水鉄砲自体が不要なら、タンクから水を抜き取るだけでもいいぞ」

なるほど、勝者は敗者の水鉄砲を使うことができるわけだ。これはこれで面白い。

「それと個人戦ではあるが、チームを組んでもらっても構わない。だが、最後に生き残るのは一人だけだ。一人だけだからな」

のみきは笑顔でそう念を押していた。なぜか怖い。

「……のみきさんが怖いんだけど」

ライフル型の水鉄砲を手に行っている鴉が、俺に耳打ちしてきた。

「のみきは水鉄砲のことになると性格変わるからな……」

「ところでのみきさん、私ってスーツケースって使っていないの？」

「ああ。好きに使ってもらって構わない」

「ありがとう。戦術の幅が広がるよー」

盾にしたりでもするんだろうか。でもあのスーツケース持ってた

ら機動力はめちゃくちゃ下がるだろうし、プラマイゼロだろう。

「なあのみき、今日も優勝賞品はあるんだろ？」

その時、良一が一番気になるところをさらっと聞いてくれた。相変わらず頼もしい。

「ああ。一応参加賞も用意してあるし、優勝賞品はしろは食堂全面協力による、お食事券500円分だぞ」

「お食事券!?!」

しろは食堂のメニューはほとんど600円前後で食べられるんだけど、さらに500円引きは嬉しい。

そしてお食事券とか言われると、ものすごく豪華な気がする。

「しろは、いいのか？」

「うん。普段から皆にはお世話になっているし、たまにはお返ししたいと」

さすがしろはだ。その気配りに感動してしまう。

「……それに、私が優勝すれば、払わなくて済むし」

……あれ、今何か本音が聞こえたような。

「また副賞として、パイリ君とのデートの権利をつけましょ」

「そですね！ ナツミさん、今度こそ頑張ってください！」

「ふえ!? なんで私なんですか!?!」

また何か勝手に言われてる気がするけど、もういいや。気にしないでおこう。

ちなみに、紬はいつものツインテールに戻っていた。さすがに水鉄砲大会に新しいリボンはつけてこないよな。

「ルール説明は以上だ。15分後に花火を打ち上げるから、それがゲーム開始の合図だ」

そう言い残し、のみきは森の中へ溶けるように消えていった。

なんだろう。のみきがものすごく本気に見えるんだけど。

「……なあ羽依里、ちょっといいか」

装備の最終確認をしていると、良一と天善から声をかけられた。

良一は見慣れた、いつもの格好だった。野郎にしてみれば、水に濡

れるなんて大した問題じゃないのかもしれない。

「天善もその格好でいいのか？」

天善もいつもの、卓球のユニフォーム姿だった。

「ああ、これなら濡れても構わないからな」

構わないんだろうか。まあ、本人が言うんなら良いんだろうけど。

「それで二人とも、どうした？」

「女連中はチームを組んでいるみたいだし、俺たちも組まないか？」

良一が親指で指し示す先では、鷗や空門姉妹を中心に勧誘が始まっていた。のみきはああ言っていたけど、やっぱりチームを組んだ方がやりやすいよな。

そして皆、思い思いの水鉄砲を持っている。ここから見えるだけでも、静久はバズーカのような巨大な水鉄砲を持っているし、藍はマシンガンタイプ、紬はパリングルス水鉄砲と、十人十色だった。

「せっかくだし、男は男同士で組んで戦おうぜ」

そう言う良一は二丁拳銃のように二つの水鉄砲を持っていた。

「ああ、目にももの見せてやろう」

天善は自前で用意したんだろうか、ラケット型の水鉄砲だった。どうやって撃つんだろう。

ちなみに俺が選んだのは一般的な両手持ちの、中距離タイプの水鉄砲だ。

「よし、やってやろうぜ！　いくぞー！」

「おー！」

野郎三人で拳を突き合わせていた時、どこか遠くで花火が炸裂する音がした。こうして水鉄砲大会が始まった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

花火の音がした直後から、ダム周辺には俺たちだけを残し、誰もいなくなっていた。恐らく、左右どちらかの森に入っていたんだろ

う。

俺は大会会場となつてゐる、ため池周辺を改めて見渡す。

目の前に広がるのは、失格者のセーフティゾーンを兼ねたダム。障害物らしい障害物もなく、見晴らしが良い。

そんなダムの先端、ため池の近くに水補給用のポリタンクが置いてある。

その先に広がるため池は、ここしばらくまともな雨が降っていないせいか、だいぶ水が減っていた。岸に近い所は特に水が少ない。これならもし、一番背が低い夏海ちゃんが落ちたとしても、水は膝上くらいまでしかなさそうだ。

そして、他の皆が潜んでいるのであろう左右の森に視線を送る。ため池をぐるっと囲むように広がる森には、隠れる場所がたくさんありそうだ。恐らくここが主戦場になるだろう。

「さて羽依里、どう動く?」

「そうだな。まずは右側から森に入ろうぜ」

「お、確か、蒼たちもそっち側から森に入つていったよな。先制攻撃を仕掛けるのか」

俺の意図を察したのか、良一がほくそ笑む。

「まあな」

「羽依里も、俺たちのやり方がわかつてきたじゃないか」

良一たちのやり方というのはよくわからなかったけど、確かしろはも蒼と一緒にだったので、あわよくばしろはと合流したいと気持ちはある。

「よし、それならさっそく行こうぜ」

初動を決め、右側の森の入り口に向かって歩き出そうとした俺たちだったが……。

「えいー!」

「ぐわっ!」

……その時、天善の背中に右側の森から攻撃が放たれた。

「や、やられた……」

濡れた背中を見ながら、天善は驚愕の表情だ。

「くそ、誰だ!？」

良一が片手に一丁ずつ水鉄砲を持ち、攻撃が跳んできた方向を睨みつける。

俺も同じように水鉄砲を構え、森の方を見る。ちらつと森の中に逃げ込む白い姿が見えた。恐らくしろはだろう。

「あそこだな！ 羽依里、天善！ 続け！」

良一もその姿を確認したんだろう。逃げるしろはを追いかけ、俺たちも森へと駆け込む。

「引つかかったわね！ うりやあつ！」

「げ、蒼!？」

森に入るや否や、近くの木陰に隠れていたらしい蒼が飛び出してきて、側面から俺たちを急襲してきた。

「皆、散れ！ 木の陰に隠れるんだ！」

良一の言葉を合図に、俺たちはとっさに蒼と距離を取るように散開し、近くの木の陰に隠れる。

「天善、覚悟しなさい！」

蒼はそんな中、先に背中をやられていた天善に狙いを定め、水鉄砲を撃ってきた。

ここから見ると、蒼の装備はハンドガンタイプの水鉄砲で、それを両手に一丁ずつ持っていた。

射程はそこそただけで、火力がやばい。無数の水流が真っ正面から天善に襲い掛かる。

「なんの！ このくらい、良いトレーニングだ！ うおおおおおっ！」
対する天善は両手にラケットを構え、蒼の攻撃を正面から全て防いでいた。前面の的は、まったく濡れていない。

「げ、ちよつとウソでしょ!？」

「ふ、イナリの放つピンポン玉に比べれば、まだまだ遅いさ！」

そう言う天善だが、防御に必死で攻撃に転ずる余裕はなさそうだ。

状況は拮抗していた。

「くそっ、これじゃ手出しできないぜー！」

良一の水鉄砲は蒼と同じタイプなので射程も同じだ。この距離だと天善の援護射撃はできない。

俺の水鉄砲は中距離もいけるけど、この位置からだとな善の背中が邪魔だった。

「……悔しいけど、これは無理ね。撤退！」

俺たちが尻込みしていると、真つ向勝負は分が悪いと判断した蒼は、素早い身のこなしで森の中へと逃げていった。

「やられっぱなしでいられるかよ！ 羽依里！ 天善！ 追うぞ！」

「わかったー！」

例によって先陣を切る良一に続いて、俺と天善も森の奥へと逃げる蒼を追う。

「……あれ？ 蒼のやつ、どこいったんだ？」

ため池に沿うように森の中を進み、だいぶ奥の方まで入ってきたはずだ。木々の間から見えるダムの位置から考えると、ちょうど対岸の少し手前といった感じだ。

「完全に見失ったな」

「だな。しくじったぜ」

俺は周囲の気配を探る。草木が風にそよぐ音が聞こえるくらいで、静かなものだった。しろはもこつちの方に逃げたはずだけど、姿は見えない。

「……なあ、静かすぎやしないか？」

「まさか、蒼たちが何か仕掛けて来るのか？」

「わからないけどな。用心するに越したことはない……っ!?」

三人で横一列に並び、そんな話をしていると……俺の背中に硬いものが当たる。ついでに少し上の方に、柔らかいものも当たってる。

「……これは、まさか。」

「ふっふっふー。まんまと引つかかったわねー」

振り返って肩越しに見ると、笑顔の蒼が俺に水鉄砲を突き付けていた。

えーつと蒼、銃口以外のものも当たってるんだけど。

「良一も動かないでね」

「天善さんもですよ!」

直後、隣にいた二人の背中にも同じように水鉄砲が突きつけられていた。声から察するに、後ろにしているのはしろはと夏海ちゃんだろう。

「三人とも、失格になりたくなかったら、武器を捨ててください」

そして目の前の茂みから藍が現れた。マシンガンタイプの水鉄砲を持っていて、その銃口は天善の的を捕えている。

どうやら、俺たちは一瞬で四人に囲まれてしまったらしい。唐突過ぎて、自分たちの水鉄砲を構える暇もなかった。

「返事はどうしました?」

前後から水鉄砲を突き付けられ、降伏を迫られる。この位置関係だと、藍がその引き金を引けば俺たちはたちまちハチの巣だろう。

「……くそー、まんまとはめられたぜ」

良一が武器を投げ捨てるのを見て、俺と天善もそれに倣って、武器を捨てる。

「まだ動いちゃダメですよ。そのまま両手は頭の上で、ゆっくりとひざまずいてください」

俺たちは藍に言われるがままにするしかない。屈辱だ。

「しろはちゃんと夏海ちゃん、今のうちに水鉄砲を回収してください」

「うん」

「はい! じゃなくて、あいあいさー!」

びしっと敬礼をしていた。夏海ちゃんもノリノリだった。

そうしているうちに、三人分の水鉄砲が回収された。俺たちは丸腰になってしまった。

どうしよう。開始早々、捕虜になってしまった。

「さすが藍ね。作戦通り事が運びすぎて、怖いくらいなんだけど」

「天善ちゃんたちのことですから、絶対に追いかけて来ると踏んできましたから」

「くそ、俺たちをどうするつもりだ!？」

藍に水鉄砲を突き付けられたまま、良一が叫ぶ。

「そうですね。三人には囷になってもらいます。この水鉄砲大会、どう考えても一番の強敵はのみきちちゃんですのぞ」

確かに一番実力があるのはのみきだろう。今日もしつかりとハイドログラディエーター改を持っていたし。

「それにほら、いざとなったら盾にもなりそうだしねー」

蒼、笑顔でそんなこと言わないでくれ。俺が盾になるのは、しろはただだぞ。

「でも隊長、羽依里さんたちを使って、どうやってのみきさんをおびき出すんですか？」

「ちゃんと作戦を考えてありますよ。まず、現在の位置関係ですけど……」

やっぱり藍が隊長なのか。なんとなく、ベレー帽とか似合いそうな気もする。

「ため池を中央として、ダムの位置を南とすると、私たちが居るのがここ、東の森です」

藍は俺たちの前に立ったまま、木の枝を使って地面に地図を描いて説明を始めていた。

なんだろう。表情には出さないけど、藍も楽しそうだ。

皆が小さい頃の遊びも、こんな風に藍が仕切っていたのかもしれない。

「……というわけで、のみきちちゃんをはじめ他の皆さんは、この西の森にいる可能性が高いです。ところで羽依里さん、聞いてますか？」

「え？ うん。聞いている聞いている」

一睨みされてしまった。藍隊長怖い。

「とりあえず、捕虜の三人を連れてダムへ移動しましょう」

「あいあいさー!」

「三人とも、両手は頭の上に置いたままだからねー。少しでも降ろしたら撃つわよー」

「く、くそー」

「せ、せめてラケットは持たせてくれ……」

「これは、屈辱だな……」

それぞれ、良一後ろに夏海ちゃん、俺の後ろに蒼、天善の後ろにしろはがついて歩く。

藍は天善の前の的に照準を常に合わせつつ、周囲に気を配っていた。

俺たち、一体どうなってしまうんだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺たちは身体の自由を奪われたまま、ダムへと連れてこられた。

そして、西の森の方を向いて一列に並ばされる。

「羽依里、なんとかして逃げられないか？」

「無理だろ、この状況だぞ」

隣の良一は泣きそうな声を出していた。

ちなみに、藍たち四人は少し離れた場所で水鉄砲を構えている。当然、俺たちの水鉄砲もその足元だ。

「鴟たち第三勢力が攻めて来てくれることを願うしかないだろ」

確か、鴟たちは西側の森に入ってしまったのを見たけど。

今のところ、その可能性はかなり低そうだった。

「それではオペレーション・パージを開始しましょう」

藍の一言で、俺はこの後何が起るのか大体理解した。

「現在、のみきちちゃんは姿をくらませています。天善ちゃんが服を脱げば、のみきちちゃんは条件反射的に水鉄砲で撃つて来るでしょう。そうすればのみきちちゃんの位置がわかります。そこに一斉攻撃を仕掛けます」

藍はのみきが潜んでいるであろう西の森に注意を払っていた。一度尻尾を掴んだら絶対離さないつもりだろう。

「というわけで天善ちゃん、脱いでください」

「誰が脱ぐかよ！ それに俺は良一だ！」

「いいから良一ちゃん、脱いでください」

「断る！ 撃たれるのがわかってて、誰が脱ぐか！」

良一の対応は当然だろう。

それにしても、会話だけ聞いてると、とても怪しげだった。

「……仕方ないですね。しろはちゃん、お願いします」

「気は進まないけど、わかった」

そう言うと、しろはが大きく息を吸い込む。この流れは。

「裸祭り。んんんー！」

「……パーージ！ んん、パーージ！」

しろはの掛け声に応えるように、良一は上半身裸になってしまった。本当に条件反射になってるんだらうな。

次の瞬間、ものすごい速さで水弾が飛んできた。

「ぶわっ!？」

良一が大きく横に吹き飛ばされる。もんどりうつて倒れたところへ、すかさず第二次攻撃が飛んできて、前面の的を撃ち抜かれていた。

一発目は反射的に撃ってしまったにしても、二発目での確的を射抜く正確な射撃。撃ってきたのは間違いなくのみきだろう。

「え、ちよつと」

「うそですよね?」

その光景を見ていたしろはたちは目を丸くしていた。俺も自分の目を疑ってしまう。

水弾が飛んできたのは、皆が注視していた西の森じゃなく、ため池を挟んで対岸の、北の森からだった。

「まさか、向こう岸から撃ってきたんですか?」

さすがの藍も驚いていた。

そういえばのみき、いつも鉄塔から俺や良一を狙撃してるよな……それに比べれば、対岸からここまで距離なんて、朝飯前なんじゃないか?」

「……皆逃げろ！ このままこの場所に居たら、良一的だぞ！」

俺は思わず叫んでいた。

それを合図に、その場にいた全員が慌てふためく。同時に、対岸からのみきの追撃が来た。

「うおおおおっ！」

現状、一番ため池に近い俺と天善が慌てて横に飛ぶ。

ギリギリの所で水弾に当たらずに済んだが、目標を失った水弾はダムのコンクリートを激しく叩く。

「一度、森に逃げ込みましょう！」

「しろはに夏海ちゃん！ 撤退するわよ！」

俺たちより奥にいた四人は藍の指示の元、一目散に東の森の方へ戻っていく。

俺はというと、たまらず近くにあつたポリタンクを背に座り込んでしまった。

「ひゃー！ー！」

「あ、夏海ちゃん！」

しろはの声があった方を見ると、夏海ちゃんが背中の中の的を撃たれて、地面に倒れていた。のみきの水鉄砲、なんて威力なんだろう。

「待ってて、今行くから！」

既に森の入り口にさしかかっていたしろはが救出に向かおうとするけど、のみきの水弾が途切れることなく飛んでくるので、下手に動けずにいた。

「夏海ちゃん、うつ伏せのまま、ゆっくりこっちに来て！」

「は、はい！」

そんな中、俺は夏海ちゃんに声をかけて、こっち側に誘導する。

「しろは！ 夏海ちゃんは俺が守るから、しろはは逃げてくれ！」

俺はポリタンクで背中の中の的を隠しながら、その声をかける。

「わ、わかった。羽依里、夏海ちゃんをお願いね」

しろはが森の中へ消えていったのを確認して、俺は夏海ちゃんの手を取る。

「うわっ!？」

それと同時に、俺の背を守っていたポリタンクが、のみきの一撃を

受けて横にひっくり返った。だから威力高すぎだろ、ハイドログラ
デーエーター改！

こうなったらイチかバチか逃げるしかない。俺は意を決して立ち
上がる。

「羽依里、受け取れ！」

その時、良一が俺の水鉄砲を投げ渡してくれた。どうやら、藍たち
に置き捨てられた水鉄砲を奪還してくれたらしい。

「ほら、天善のだ！」

続いて、良一はラケット型水鉄砲も天善に投げ渡す。

「よし、これでなんとかなる！」

水鉄砲を取り返したところで、対岸から更なる攻撃が放たれた。そ
の攻撃に対し、天善がラケットを構える。

「これさえあれば、水弾など怖くはない！ チョレeeeeeeee！」

次の瞬間、天善は高速で迫る水弾を見事に撃ち返していた。

「おお、これは凄いトレーニングだ！」

その後も、何発もの水弾を撃ち込まれるが、天善は天善ゾーンを展
開しながら、その全てを弾き返していた。天善すごい。

「俺が引き付けている間に、森へ向かえ！」

「悪い天善、助かるぜ！」

「夏海ちゃん、走れる？」

「はい！」

武器を取り戻したところで、俺たちの攻撃は対岸まで届かない。こ
こは逃げるが勝ちだ。

俺たちは全力で走り、辛くも西の森の中へ逃げ込んだのだった。

「ぜえ、はあ、なかなかきついレシーブ練習だったな」

最後に天善が森の中に逃げ込み、ようやく一息つく。気がつけば、
のみきの攻撃も止んでいた。

それにしても、開始直後に捕虜になるわ、その後はのみきに一方的
に攻撃されるわで、まともに水鉄砲撃ってない気がする。

「それで、これからだけど」

四人全員で背中を合わせて、できるだけ広い範囲に気を配りながら会話を続ける。

「藍のパージ作戦のおかげで、のみきの居場所はわかったけど、どうする？ 勝負しに行くか？」

このままため池に沿って北上すれば、のみきのいる北側の森に行けるだろう。

「でも、のみきさんの水鉄砲、ものすごく痛かったですよ」

夏海ちゃんも自然とその輪に加わっていた。

「ああ、わかるぜ、夏海ちゃん……」

良一はうんうんと頷いている。あれは撃たれた者にしかわからない痛みだ。

「だけど、天善のラケットがあれば、なんとかかなりそうだけどなー」

「やるなら早い方が良いよな。のみきもいつまでも同じ場所に留まっているとは思えないし」

反対側の東の森には、しろはや藍たちがいるし、うまく事が運べば挟み撃ちにできるかもしれない。

「……よし、行こう」

協議の結果、俺たちは目標をのみきの撃破と決め、一路北の森を目指すことにした。

最初は四人並んで移動していたけど、小石や木の根のせいで結構な悪路だ。段々と間延びしてくる。

「……あれ？ 夏海ちゃん早くない？」

そして、いつの間にか先頭を歩いていたのは、俺でも良一でもなく夏海ちゃんだった。なんだろう。森の中は歩き慣れているのかな。

「夏海ちゃん、前に出過ぎだよ？」

「あ、ごめんなさい」

夏海ちゃんは軽い身のこなしで戻ってきた。やっぱり慣れてる気がする。

「夏海ちゃん、もしかして森とか歩き慣れてる？」

「え、えーっと、その」

「……二人とも、静かにしろ」

その時、良一に制止されて会話が唐突に終わる。背後を振り返ると、良一は俺から見て左側の草むらに水鉄砲を向けていた。

「……誰かいるぞ」

その水鉄砲が向けられた先の草が、風もないのに不自然にカサカサと音を立っている。確実に何かいる。

俺たちは隊形を組み直し、真ん中に俺、右に天善、左に良一が立ち、背後に夏海ちゃんを守るようにする。

「夏海ちゃん、後ろに下がってね」

「は、はい！」

夏海ちゃんにそう声をかける一方で、俺と良一は水鉄砲の引き金に手をかけ、いつでも撃てるように準備していた。

「……ポン！」

……その直後、茂みをかき分けて出てきたのは、イナリだった。

「え、イナリ？」

「なんだ、イナリかよ……」

思いつきり警戒していた俺たちは一気に緊張の糸が切れてしまった。

「ポンー？」

イナリは、こんなところで何やってるの？ みたいな顔をして、首をかしげていた。

「お前は野生動物だし、この辺に居ても何の不思議もないもんな」

イナリにしてみれば、俺たちがこんな森の中にいる方が妙かもしれない。

「水鉄砲大会の真っ最中なんだ。邪魔してごめんな」

俺がしゃがみ込んで、イナリにそう話しかけていると、再び目の前の茂みが揺れた。

「むぎゅ……イナリさん、本当にこつちなんですか？」

そして、紬が四つん這いになりながら顔を覗かせた。どうやらイナリの後ろをずつついて来ていたらしい。

「へ?」

「むぎぢゅ!」

俺と紬は目が合った状態で、一瞬固まる。

「テ、テキシユーです!」

紬はそう叫ぶと同時に、水鉄砲を構えた。ダムでも持っていた、パリングルス製の水鉄砲だ。

「げ、これはまづい!」

俺は反射的に後ろに飛びのくけど、木の根に足が引っかかって、思いつきり尻もちをついてしまった。

「やばい!」

「くそ、紬、来るなら来い! 俺が相手だ!」

その刹那、右側にいた天善が俺の前に飛び出して、ラケットを構える。絶対防御の構えだ。同時に左側の良一も、一歩前に出た。

「むぎぢゅ!」

直後にパリングルス水鉄砲から強力な水弾が放たれるが、天善はそれを見事に一直線に弾き返す。

「むぎぢゅ!」

跳ね返された水弾は、そのまま紬の前の的を直撃した。

「おお、さすが天善。助かったぞ」

あの防御術がある限り、俺たちの身は安全だろう。

「まあ、加納君、紬に手を出すなんてひどいわ!」

すると、紬の隣の茂みから静久が飛び出してきた。どうやら静久も紬の後ろをずつついて来ていたらしい。

「み、水織先輩! いえ、これはその」

静久は紬を下がらせて、天善の前に出る。その手には、ものすごく大きな水鉄砲が握られていた。

「問答無用よ! おっぱーい!」

謎の掛け声とともに、静久の水鉄砲から大量の水が噴出される。それこそバズーカみたいだった。

「ぐわあああつ!!」

「うおおおつ!!」

その水量はラケットで防げる量ではなく、至近距離でそれを受けた天善は前のを一撃で濡らされ、失格となってしまった。

同時に良一もその水しぶきに巻き込まれる形となり、全身ずぶ濡れ。背中の的もやられてしまい、失格となる。

二人よりはだいぶ離れた場所にいた俺も、跳ね水で前のをやられてしまった。ものすごい威力だった。

「あわわわわ」

俺たちのかなり後ろにいた夏海ちゃんは、口に手を当てたまま固まっていた。四人の中で無傷なのは、その夏海ちゃんだけだった。

かなり接近していたとはいえ、一撃で二人を葬り去るなんて。おっぱいバズーカ、恐るべし。

「くそ、失格か……」

「ちくしょー！ お食事券、本気で狙ってたんだけどなー！」

脱落が決定した二人はその場に水鉄砲を投げ出し、うなだれながらダムの方に戻っていった。

「ところでパイリ君、降伏してもらえるかしら」

一緒に二人を見送った直後、静久が笑顔で水鉄砲を向けてきた。

反射的に水鉄砲を構えるけど……おっぱいバズーカの前には分が悪すぎる。

「ナツミさんも、コーフクしてくださいー！」

更に紬も加わって、万事休す。俺は両手をあげて降参の意を示す。

俺のその様子を見て、夏海ちゃんもそれに続く。

「降伏するのはいいんだけど、二人に提案があるんだ」

「むぎゆ、提案ですか？」

俺は二人に、北の森にのみきを倒しに行く途中だったことを伝える。

「そうだったのね。確かに美希ちゃんは強敵だと思うけど……」

「シズク、どうしますか？」

「……とりあえず、ボスの所に連れて行きましょう」

「え、ボスって誰？」

「それはついてのお楽しみよ」

笑顔の静久に促され、俺たちは歩き始める。でもこの流れ、また捕虜になるのかな。

まあ失格にならなかつただけ、幸運だと思っしかない。

ちなみに、良一と天善が残っていた水鉄砲はその場で回収した。ルール上問題ないし。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ようこそ、カモメ団へ！」

静久と紬に案内されて辿り着いた場所には、スーツケースにとっかかりと腰を下ろした鷗がいた。

「ボスってお前か！」

「いやー、皆でチームを組んでたら、いつの間にかそう言うことになっちゃって」

本人は笑っているし、まんざらでもないみたいだ。

スーツケースの傍らにはライフル型の水鉄砲が立てかけてあるし、近距離用の水鉄砲も持っているようだった。かなりの重装備だ。

「成果の報告だけど、加納君と三谷君を仕留めたわ」

「おおー、二人ともやるね！」

「それと、パイリ君と夏海ちゃんを捕まえたわ」

「じゃあ、二人を新しい団員として歓迎するよ！」

「あれ、俺たちは捕虜じゃないのか？」

「え、捕虜って何？」

「いや、気にしないでくれ」

「羽依里になっちゃん、よろしくね！」

鷗はそう言いながら、笑顔で俺たちの水鉄砲を返してくれた。

こんなところで俺たちに水鉄砲を返して、いきなり攻撃したらどう

するつもりだったんだろう。そんなことしないけど。

「入団の記念に、チョコレートあげるよ！」

スーツケースからマープルチョコを取り出して、俺たちに渡してくれる。同じチームでも、藍たちのチームとは雰囲気がるで違うような。

「ダンチョー、その代わりに、重大な問題が発生してしまいました！」

その時、紬が唐突にそう切り出す。

「え、ツムツムどうしたの？」

「実はさっきの戦いで、ほとんどの水を撃ち尽くしてしまいました！」

「ええー！」

話を聞いていると、元々紬のパリングルス水鉄砲は残量が少なかつたみたいだ。静久のバズーカは強力な分、一度発射したらタンクの水を全てを撃ち尽くしてしまうタイプらしい。

「……あれ？ それじゃさっき降伏を迫られた時って」

「ええ、実は水は全く残って無かったの」

「そ、そうだったのか……」

てつきり、まだ水が残っていると思って全面降伏してしまった。やられたな。

「使う時期を見極めに見極めて、いざという時に使う。それがおっぱいバズーカよ」

すごく誇らしげに言っていた。俺はあえて突っ込まない様にした。

「うーん、ダムに行けば水の補給ができるけど、水がない状態で森の中を歩き回るのは危険だよね……」

確かにルール上、水の補給中は攻撃できないけど、ダムに行くまでに誰とも出会わないという保証はない。

「嗚ん、危険な目を合うのは慣れてるからな。」

「なあ、せっかくだし、俺が水の補給に行つてこようか？」

「え、いいの？」

「ああ、危険な目に合うのは慣れてるからな」

「じゃあ、羽依里が戻ってくるまで、なっちゃん是人質だからね！」

「ふえー！」

鴫はそう言いながら夏海ちゃんを抱きしめていた。全然人質って感じじゃないし、半分冗談だろう。

「逃げたりしたら、イナリの刑に処するよ!」

「必ず戻ってくるから心配しないでくれ」

ところで、イナリの刑ってなんだろう。すごく気になる。

「あ、そういえばさ……紬たちには話してるんだけど、提案したいことがあるんだ」

「え、何?」

「森の北にのみきがいるんだ。俺が水の補充から戻ったら、皆で倒しに行かないか?」

「うーん……確かにのみきさんは強いし、皆で戦えるなら心強いけど……うーん。うーん」

鴫は顎に手を当てて、何やら考えている。

「ごめん。少し考えるよ」

「わかった。俺が戻ってきたら返事を聞かせてくれ」

俺は鴫にそう告げると、おっぱいバズーカとパリングルス水鉄砲、鴫のライフル型水鉄砲を持って、ダムへと水の補給へ向かった。

ちなみに、俺や良一の水鉄砲はカモメ団のアジトに残してきたので、もし鴫たちが襲われても対抗できるだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺はため池が見渡せるダムまで戻ってきた。幸いなことに、道中は誰とも遭遇しなかった。

失格者の集合場所にもなっているんだけど、現時点では良一と天善の二人しかいなかった。

その二人はため池で泳いだり、岸に近い浅瀬でラケットの素振りをしていた。いくら日照り続きで水の量が少なくなっているとはいえ、危なくないのかな。

「とりあえず、水を入れるか」

俺はポリタンクのふたを開けて、中の水を水鉄砲へ補充していく。タンクの大きさは皆同じという制約があるからか、バズーカ型の水鉄砲には心許ない量しか水が入らなかつた。

「ん？　なんか変な臭いがするぞ……？」

水を入れてみると、妙な臭いが鼻をつく。昔、長いこと変えてなかつた金魚鉢の水を替えるときに、良く感じた臭いだ。

……どうやらこのポリタンクから臭ってくるみたいだ。

「なんだこれ」

よく見ると、ポリタンクの水は緑がかった。

「これってもしかして、ため池の水なんじゃ……？」

大会が始まる前、のみきが手に出していたのは、明らかに真水っぽかつたけど。

「うおおおー……！」

「ふーっ！　ふーっ！　ふーっ！」

「……なあ、二人とも」

俺は池の中ではしゃいでいる二人に、思わず声をかけた。

「このポリタンク、ため池の中に落としたりしたか？」

「……さーて、もうひと泳ぎするかなー！」

「悪いが、トレーニング中に話しかけないでもらえないか？」

二人はあからさまに俺と話をするのを避けていた。目も合わせようとしてないし、これは凶星みたいだ。

「うう、臭い……」

文句を言ってもしようがないので、俺はとりあえず全ての水鉄砲を満タンにして、アジトに戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいま」

「あ、羽依里さん、おかえりなさい」

水鉄砲を持って帰ってくると、夏海ちゃんは紬と一緒に、イナリと遊んでいた。なんだろう。平和だ。

「おかえり、羽依里！」

鴟たちに持って帰った水鉄砲を渡す。これで俺の任務は完了だ。

「ところで鴟、のみき討伐の話、考えてくれたか？」

「うん、それなんだけどね……」

鴟は少し困ったような顔をしていた。

「実は、羽依里がいない間に、ちよつとだけ北の方に偵察に行ってきたんだけど」

「え、そうなのか」

「うん、なっちゃんやイナリポンと一緒にね」

……あえて、イナリポンには突っ込まないでおこう。

「それでね、そこでソラカドファミリーが怪しい動きをしていたの」

「え、ソラカドファミリー？」

間違いなく蒼たちのことだろうけど。なんだろう。ギャングの抗争みたいになってきた。

「うん。どこをどう通ったのかわからないけど、私たちよりのみきさんに近い所にいるみたいだよ」

なんにしても、俺たちがここから北上するための最短ルートを通れば、高い確率で藍たちと遭遇することになりそうだ。

一度ダムの方まで戻って、大回りして北を目指すルートもあるけど、道中に藍たちに背後を突かれる危険性もある。

「それで、こつちから先に打って出ようって思うんだけど、羽依里やなっちゃんも協力してくれないかな？」

鴟の目は真剣だった。チームリーダーとして、考えに考えて出した結論なんだろう。

「ああ、いいよ」

「私も構わないです！」

乗りかかった船だし、このチームの雰囲気は好きだった。

「うまくソラカドファミリーの皆を説得できれば、協力してのみきさんと戦えるかもしれないけど……」

「それなら、俺に良い作戦があるんだけど」

「え、そんなのあるの？」

「詳しい内容は、向こうに行きながら話すよ。その代わりに、一つお願いを聞いて欲しいんだ」

「うん。いいけど……お願いってどんなの？」

「向こう……ソラカドファミリーにしろはがいるはずなんだ。その、助けてほしくて」

「おおー、捕らわれのファイアンセ、救出大作戦ですね！」

いや紬、ファイアンセって意味わかってる？

「燃える展開だねえ。なっちゃん」

「そ、そうですね」

カモメ団の皆も各々水鉄砲を持ち、やる気満々だ。

「それじゃ、カモメ団、しゅっぱーっ！」

鷗の号令の元、俺たちは北に向けて歩き出した。

第二十話・完

第二十一話 8月13日（後編）

「……いた。ソラカドファミリーだよ」

鷗の情報を頼りに北へ進むと、藍としろはがこちらに背中を向けて何やら作業をしていた。

俺たちは少し離れた茂みの中に身を隠し、その様子を見ていた。

「まだ俺たちには気づいていないみたいだけど」

「それなら、あまり乗り気はしないけど、羽依里の作戦で行くしかないね」

俺の作戦というのは、こちらの人数にものを言わせて複数人で一気に取り囲み、武装解除をさせたうえで話し合いへ持ち込むというものだ。

ぶつちやけ、俺が藍たちにやられた方法だった。今度はこつちの番だ。

相手に対し、こつちは俺に鷗、夏海ちゃんに紬、静久。人数は倍以上だし、十分可能だと思う。

「やっぱり、それが一番平和的だよね。しょうがないよね」

鷗のポリシーに反するのだろうか。なんとか自分を納得させている感じだった。

「もし嫌だったら、俺が白旗あげて出て行ってもいいぞ？」

たぶん、速攻で撃たれそうだけど。

「ううん、鷗に二言はないよ。皆、準備はいい？」

「はいー！」

「いつでもいけるわよ」

鷗のスーツケースを持った俺を先頭に、その後ろに鷗と静久と紬が横並びの陣形。そして俺から見て左側、少し離れたところに夏海ちゃんがスタンバイしている。

万が一、気づかれて攻撃されたとしても、スーツケースで多少なりの防御はできる。スーツケースを持っている関係上手がふさがるの

で、俺は攻撃はできないけど。

「皆、身を低くして！ 背中の的が残ってる人は、絶対に背中を向けちゃ駄目だよ！」

俺と紬は背中の中の的を撃ち抜かれたら終わりなので、鴟の指示通りに背中を守る。紬はパリングルス水鉄砲とは別に、良一が使っていた水鉄砲を持っていた。

「緊張するわね」

静久はその隣で、紬と同じく良一の水鉄砲を持っている。

「……皆、それじゃ、行こう！」

鴟の声を皮切りに、俺たちは一斉に茂みから飛び出す。

その時、藍が俺たちの存在に気がつく。

その藍は、突然現れた俺たちを見て驚いて……いない。むしろ、薄笑いを浮かべていた。

「……何!？」

「……かかりましたね。蒼ちゃん、やっっちゃってください！」

「食らいなさい！ てりゃー！」

藍の声に合わせるように、俺たちの頭上から蒼の声が聞こえた。どうやら真上の木にいるらしい。

ずっと姿が見えないとは思っていたけど、まさか隠れていたのか？

そして間髪入れず、頭上から青い球体が降り注ぐ。

「げ、これはもしかして」

その青い物体の正体に気づいた俺は、反射的にスーツケースを地面に置き、それに背中を預けるようにして背中を守る。

「きやあっ!？」

「むぎゅー……！」

「ひええー……！」

その青い物体の正体は、水でぱんぱんに膨らんだ水風船だった。それは地面に落ちると同時に破裂し、周囲に大量の水をまき散らす。

静久、紬、鴟の三人は完全に虚を突かれ、揃って背中を濡らされてしまう。これにより、既に前を撃ち抜かれていた紬が失格になってしまう。

まった。

「ひええええ」

そんな中、俺たちより少し前を走っていた夏海ちゃんは水風船の被害範囲から逃れていた。

「ふっふーん。作戦勝ちね!」

蒼が得意顔で、木からするすると降りてきた。

確かにスーツケースがOKなんだから、水風船くらい使ってもいいんだらうけど。これは完全にしてやられた。

「一気に勝負をつけるわよ!」

蒼は地面に降り立つと、すぐに鷗に向けて二丁拳銃を乱射する。

「おわわわっ」

鷗に残されている的は前面のみ。四つん這いになりながら蒼の攻撃を必死に避けて、俺のすぐ近くの木陰に逃れた。

「むー、どうしてこうなるかなあ」

鷗は木の陰に隠れながら、ライフル型の水鉄砲を構える。

こうなると、もはや武装解除してもらおうどうこうの話じゃない。全面戦争だ。

「えーいー!」

鷗は木の幹を盾にして蒼の攻撃を防ぎながら、少し離れた所にいる藍を狙い撃つ。その攻撃に気づいた藍が素早い身のこなしでその場を離れる。

「えっ、わひゃー!」

「あ」

藍が避けた結果、鷗の水鉄砲は勢いそのままに、その先にいたしろはに命中。前の的を射抜いてしまう。

「しろしろ、ごめん」

「鷗、よくも、やってくれたな」

顔にかかった水をぬぐいながら、水鉄砲を構える。どうしよう。しろはまだで攻撃参加してしまった。なんだか少し楽しそうだけど。

「しろはちゃん、その場所からだとどうしても……わぷっ!?!」

しろはに助言をしようとした藍の顔に、夏海ちゃんの放った水弾が

命中した。それにより、藍の動きが一瞬止まる。

「よし、今だ！」

俺は紬が落としていた良一の水鉄砲を拾い上げ、藍の前の的を射抜く。

「むむむ。元捕虜のくせに、やりますね。覚悟してください！」

藍は一瞬だけ夏海ちゃんの方を見たけど、自分の水鉄砲の射程じゃ届かないと判断したんだろう。すぐさま俺に攻撃目標を切り替え、引き金を引く。

「うおおおおっ！」

俺は即座にスーツケースの反対側に回り込む。これによって藍の攻撃は全てスーツケースが引き受け、俺は無傷だった。

「ちよつと、そのスーツケース反則じゃないですか？」

藍は不満そうな顔をしているけど、のみきの許可は出てるし、ルー上問題はないはずだ。

その後はスーツケースを挟んで、藍と膠着状態になる。お互いに背中を狙われるとアウトな分、動けない。

鳴もしろはに狙われているので、木の陰から動けない状況だ。

……そう言えば、静久と蒼はどうしたんだろう。さつきからあまり声も聞こえないけど。

そう思つて二人の姿を探し始めた、その瞬間。

「紬の仇よ……おっばいに、乾杯！」

「びゃあああああっ!？」

直後に謎の掛け声と悲鳴、そしてものすごい水しぶきが起こった。どうやら静久のおっばいバズーカが炸裂したらしい。

タンクに入っていた全ての水が超至近距離で発射され、蒼と静久はその水圧で吹き飛ばされていた。

二人は揃って全身ずぶ濡れになって地面に倒れた。どう見ても双方ともに失格だろう。

まさか静久、あれだけの火力を持つ蒼と同士打ちに持ち込んだのか？

「あ、蒼ちゃんー!?」

その状況を見た藍の注意が俺から逸れる。俺はその隙を突いて、スーツケースの陰から一気に飛び出した。

俺は飛び込むように藍の背後を取る。藍の持つ水鉄砲は連射が効く代わりに大きく、急な方向転換ができない。その欠点を突く。

「もらったあー!」

俺は振り向きざまに藍の背中の的を射抜く。これで藍も失格だ。

「うぐぐ……まさか、羽依里さんにやられるなんて……」

状況を把握した藍は、がっくりを膝を落とす。これにより、ようやく事態は収束へ向かう。

「あーあ。負けちゃったわねー」

空門姉妹は割れた水風船のゴミを片付けながら、苦笑いしていた。

「……蒼ちゃん、ごめんなさい。優勝させてあげられませんでした」

藍はものすごく申し訳なさそうな顔をしていた。確かに藍なら、蒼以外の参加者を全員倒した後、蒼を優勝させるためとか言っただけで、躊躇いもなく自決するプランとか立ててそうだし。

「へっ? ベ、別にいいのよ。藍も頑張ってくれたんだしね」

結んだ髪をほどいて水を絞りながら、蒼は笑顔で返していた。

「蒼ちゃん、このタオルで顔を拭いてください」

「うん、ありがと……って、あたしたちってTシャツと水着しか着てないんだけど。このタオル、どこに持ってたの?」

「さあ、どこでしょうか」

藍が悪戯っぽく笑う。すっかりいつもの調子だった。

「あ、タオルがまだ必要だったら言っただけ!」

声が出た方を見ると、鳴がスーツケースから何枚ものタオルを出していた。なんだ、鳴のタオルだったのか。

「盾にはなるし、タオルは入ってるし、便利なスーツケースだな」

俺は空門姉妹のそばを離れて、鳴に話しかける。

「むー。人のスーツケース、勝手に盾にしないでよー」

「それは悪かった。でも、おかげで助かったよ」

「まあ、それならいいけどね」

「鴉はそこまで話すと、またスーツケースから数枚のタオルを取り出す。」

「羽依里、ツムツムとズクズクにもタオル持って行ってあげて！」

「よし、任せろ」

「鴉からタオルを受け取って、紬たちの所へ行く。そこには二人の他に、しろはと夏海ちゃんの姿もあった。」

「紬さん、もつと一緒に冒険したかったです！」

「むぎぎぎぎ、空からの攻撃はヨソクフノーでしたー……」

「紬さんの分まで、私が頑張ります！」

二人はひしつと抱き合っていた。なんだろう、この状況。

「さつきから、ずっとあの状態なの」

しろはが戸惑っていた。

ズツ友だし、しばらくあのままにしておいてあげよう。

「静久はその、壮絶だったな」

というわけで、隣の静久にタオルを渡しながら話しかける。

「あら、紬とおっぱいのためなら、この命、捧げる覚悟はできていたわ」

……紬以外になんか増えていたけど、気にしないことにした。

「でもしろはちゃん、これからは彼氏のパイリ君と一緒にに行けるわね。嬉しいでしょ？」

「べ、別に嬉しくないしー！」

「え、嬉しくないのか？」

それはそれでシヨックなんだけど。

「羽依里さんも、ファイアンセを奪還できましたし、後はラスボス戦を残すのみですね！」

「ファイ、ファイアンセ!？」

いつの間にか夏海ちゃんがこっちを見ていて、冗談っぽく笑っていた。

それでも、本人を前にその発言はやめてほしい。

「既成事実作ろうとしてる……?」

「し、してないから!」

それから少し休憩を挟んだ後、残った皆で協力してのみきと戦うことが取り決められ、しろはをメンバーに加えた新生カモメ団が結成された。

失格となった四人から、装備の一部と水を譲ってもらっていると、俺は草むらの陰に転がっている水風船を見つけた。どうやら蒼が木の上から落とされたものの一つが、割れずに残っていたんだらう。いわゆる不発弾だ。

「何かの役に立つかもしれないし、持って行こう」

俺はその水風船を手にとると、ポケットに入れておいた。

「タカハラさん、ナツミさん、後はお任せました!」

「私たちを倒したんですから、絶対のみきさんを倒してくださいね」

「しろは、頑張んなさいよー」

「鳴さんも、頑張つてね」

「ありがとう、頑張るよー」

手を振る皆に見送られ、俺たちはのみきがいるであろう北の森へ向けて歩き出した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

皆と別れた後、俺たちは森の中を突き進む。

俺が先頭を歩き、その後ろにしろは、鷗、夏海ちゃんが横並びで続く。

ちなみに、のみきと戦う上での切り札として、パリングルス水鉄砲を用意してある。

これは紬との別れ際に受け取ったもので、おっぱいバズーカやマシン

ンガンタイプより遠距離に特化している。

「……これで、少しでものみきとの戦いを有利に進められたらいいんだけど」

そのパリングルス水鉄砲はスーツケースにくくりつけられ、一番腕に自信がある鷗がすぐに使えるようにしてある。

「あれ、ここは……?」

しばらくすると、急に開けた場所に出た。

「こんな場所があつたんだね」

隣に並んできたしろはと鷗も、珍しそうに周りを見ている。

「ここ、ちょうどダムから見えないみたいですね」

一番ため池に近い位置にいた夏海ちゃんがそう声を上げる。

言われて見ると、確かに草木に隠れてダムがほとんど見えない。

「ようやく来たか」

聞きなれた声がして反射的に振り返ると、奥の草むらから、のみきが姿を現したところだった。

「のみき、隠れないんだな」

のみきの武器の特性上、隠れて狙い撃ちにした方が戦いやすいと思うけど。

「ああ、せっかくだし、正面から相手をしてやろうと思ってな」

既にハイドログラディエーター改を構えていて、ラスボス感が半端ない。

見たところ、前後の的もまだ健在のようだ。本当にこのまま俺たち四人を一人で相手にするつもりなんだろうか。

「安心しろ。例え4対1でも、負けるつもりはない。この水鉄砲も省エネ設定で、まだ残りの水も十分だしな」

のみきは笑顔だが、周囲に向けられている殺気はまさに、抹殺者モードのそれだ。

でも、新生力モメ団でラスボスののみきに挑む。これはこれで、なかなか燃える展開だ。

「よし、皆、準備はいいか？」

「……羽依里、それ私の台詞」

「あ、悪い」

つい、それっぽい台詞を言ってみたけど、鴎に睨まれてしまった。

「頼んだぞ団長」

軽口を叩いているけど、俺たち全員がのみきの動向を注視していた。

同時に陣形も整えて、決戦に備える。

俺としろは背中を撃たれたら終わりなので、のみきに正面を向けたまま、並び立つ。

その隣に鴎と夏海ちゃんが、スーツケースに隠れるように前の的を守っている。

鴎はスーツケースを前に据えて鉄壁防御の構えだ。そのスーツケースの上にライフル型水鉄砲を置いて、安定性も高めている。

夏海ちゃんはその鴎の隣で、一番ため池に近い位置だ。

しろはと夏海ちゃんの手には、中距離用の水鉄砲。一方で俺の手には蒼のハンドガン型の水鉄砲と、天善のラケットが握られている。

ちなみにこのラケット、持ってみてわかったけど、水鉄砲でもなんでもない、ただのラケットだった。

「ところで鷹原、そのラケットはなんだ？」

「俺の防具だ。チョレイなんだ」

「言っている意味が解らないんだが」

「のみきがダムにいる俺たちに攻撃してきた時、天善がこれで水弾を打ち返していたろ。見てなかったのか？」

「もちろん見てはいたが……いや、今は何も言うまい」

のみきは出かかった言葉を飲み込み、再び抹殺者モードに。

「さあ、いよいよラスボス戦だよ！ 皆、行くよー！」

その時、鴎の口上が述べられ、俺たちは覚悟を決めた。

俺たちの作戦は単純だ。俺がこのラケットを使ってのみきの攻撃を防ぎつつ、他の三人の援護射撃を受けながら、のみきに近づく。近づいてしまえば、左手の水鉄砲でも十分に戦えるはずだ。

俺に対抗するため、のみきが隙を見せれば、鷗がパリングルス水鉄砲ですかさずのみきの的を狙う算段になっている。

「……よし、のみき、勝負だ!」

右手に持ったラケットを胸の前に構え、いつでも水弾を迎え撃てるようにしつつ、一気に飛び出す。

「少しでも、のみきとの距離を詰めておかないと……ぶつ!」

その時、ひゅん、と音がしたと思うと、ラケットにもすごい衝撃が加わった。

「どわああ!?!」

俺は大きく後ろに吹き飛ばされ、もんどりうって倒れる。

「羽依里さん!?!」

「は、羽依里、大丈夫!?!」

「いてててて」

なんとか起き上がる。前的是に既に撃たれていたので支障はないけど、防御に使ったラケットが柄の部分からポツキリと折れていた。

「あああ、チョレeeeeー!」

天善ごめん。まさか折られるなんて。

「……ダムでの出来事だが、あれは天善の卓越した技術と根性と卓球愛があつてこそ可能な技だ。鷹原が持ったところで、色々無理があるぞ」

全くもってその通りだった。直接水弾が当たってはいないのに、手が痺れている。

そしてどうしよう、のみきに接近するための盾をいきなり失ってしまった。

倒れた衝撃で、左手に持っていた水鉄砲も俺の手を離れて、どこかに転がって行ってしまったみたいだし。

ポケットに入れておいた水風船が割れなかっただけ、奇跡だった。

「さて、今度はこちらも動くでしょう」

俺たちの次の一手より早く、のみきが動き出した。俺もなんとか起き上がって、しろはの隣に並び立つ。

「まずは、そのスニーカーが邪魔だな」

のみきはそう言いながら、俺たちの足元を狙って横一閃に水弾を飛ばしてくる。

「やばい！　しろは、跳ぶぞー！」

「う、うんー！」

俺たちとはとつさに手を繋いで、タイミングを合わせてジャンプする。水鉄砲の水圧で、土の地面に跡が残っていく。

これはもう水鉄砲の威力じゃない。

「おわーっ!?!」

俺たちが避けきった直後、隣で鷗がスーツケースごと薙ぎ倒されていた。

「鷗、大丈夫か？」

「うう、あの水鉄砲反則だよ……」

的こそ撃ち抜かれていないようだけど、俺たちは実力の差を痛感する。

「夏海ちゃんも大丈夫……あれ？」

鷗の隣にいたはずの夏海ちゃんの姿がない。

「なっちゃんもジャンプして避けたんだけど、そのまま草むらの中に転がり込んだじゃったの」

鷗が指し示す先には、夏海ちゃんの水鉄砲だけが落ちていた。夏海ちゃん大丈夫だろうか。

「上手く避けたようだが、これはどうだ」

のみきが水鉄砲を構え直す。

直後、二発目の水弾が放たれた。

「……あれ？」

そのあまりの速さに俺は一切反応できなかつたけど、水弾は俺としろはの間を抜けていったようだ。

外したのか？　のみきにしては珍しい。

「羽依里、危ない！」

そう思っていた矢先、しろはが背後から抱きついてきた。え、どうしたんだろう。

直後、後ろの木に水弾が当たり、周囲に激しく水しぶきが飛ぶ。跳

弾ならぬ跳水だった。それが俺たちを背後から襲う。

しろはが庇ってくれなかったら俺が失格になっていたところだ。

「二人同時に仕留めたと思ったんだが、さ、さすが恋人同士と言ったところだな……」

のみきは悔しそうな顔をしている。

「なあしろは、もう少しこうやってくっついててくれるか？」

「えっ、どうして？」

「こうしてもらえると、しろはを感じられるし」

「えっ、な、何言ってるの」

背中の方にも、しろはが顔を赤らめているのがわかる。

「それに、俺の背中も狙われないし」

「そ、そう言うズルは駄目！」

ぱっ、と身体を離されてしまった。しろはのぬくもりが消えて、少し寂しい。

でも俺を庇ったせいで、しろはが失格になってしまった。こうなったら、俺も覚悟を決めた。

そして俺は、ポケットからこっそりと水風船を取り出す。

「のみき、これでも食らえー！」

そしてその水風船をのみきへ向け、素早く投じる。

「む!？」

元々が不発弾だ。炸裂しなくても、届かなくても構わない。

でも人間、どうしても速く動く物体に意識が行ってしまう。一瞬だけ、のみきの意識を俺たちから逸らせればいい。

のみきは反射的に水風船に標準を合わせ、ちょうど俺たちとの中間点でそれを撃ち抜く。さすがの腕前だった。

でもその隙に、俺はスーツケースに括り付けておいたパリングルス水鉄砲を素早く取り外し、構える。

「……紬、使わせてもらうからな！」

……元々作ったのはのみきだけど!

がら空きになっていたのみきの前の的に狙いを定め、その引き金を引く。

「くっ……」

俺の撃ち放った一撃は、のみきの的を一発で撃ち抜いていた。のみきが作っただけあってなかなかの威力らしく、のみきは水圧に負けて膝をついていた。

「……まさか、自分の作った水鉄砲に撃たれるとは」

「おお、羽依里、すごい！」

スーツケースに隠れながら、鴎が称賛してくれる。俺も、あそこまですて綺麗に当たるとは思わなかった。これも、愛の力だろうか。

しかし、のみきはすぐに立ち上がると、ため池に近くへと移動する。

「あー、のみきさん、それはずるいよー！」

鴎が抗議の声を上げる。のみきはため池に背を向け、こちらの動きを警戒している。

「すまない。これも作戦なんだ」

確かにあの位置だと、どうやってものみきの背中を攻撃できない。水風船は割られてしまったし、パリングルス水鉄砲は使い切ってしまったし。

のみきの後ろはため池だから、跳水させるための木もないし。何気ない位置取りに見えて、完璧な守りだ。

……こうなればイチかバチか、飛び込んでみるしかない。

「うおおおおおっ！」

俺は落ちていた夏海ちゃんの水鉄砲を拾うと、ジグザグに移動しながらのみきとの距離を詰めていく。

「え、なにあの動き」

しろはがちよつと引いてる気がしたけど、今はそんなことを気にしている時じゃない。

卓球王国の本に載っていた、新しい反復横跳びらしい。松下五段のおススメだとか何とか。ところで、松下五段って誰だろう。

でもこれなら、のみきの攻撃を回避しながら接近する事ができるはずだ。

「ハイドログラディエーター改、超広域モード！」

直後、銃口がなんか変形した。なんだあれ。

気にはなつたけど、今更止まれない。俺とのみきとの距離はますます縮まっっていく。

「……ファイア！」

次の瞬間、ハイドログラディエーター改から発射されたのは、広範囲に広がる、まるで霧吹きのような細かい水だった。

「え、なんだこれ!？」

その細かい水はあつという間に俺の周囲を覆い、背中の的を濡らす。

「鷹原、悪く思うな」

「くそ、やられた……」

俺はがっくりとその場に膝をつく。もう少しだったのに。

……その時、のみきの後ろに手が見えた。

何かと思ったら、夏海ちゃんがため池のふちに手をかけて、這い上がってくるどころだった。

どうやら草むらの中に飛ばされた後、気づかれないように一度ため池の端の方に降りて、そこからずつとチャンスをつかっていたみたいだ。今のため池、岸の近くはすぐく水が少ないし。

「えーいー!」

夏海ちゃんはそのまま勢いよく、背後からのみきに抱きついた。

「え、な、夏海ちゃん!？」

「えへへ、のみきさん、お返しですよー!」

同時に、ため池の水で思いつき濡れた手で、のみきの背中の的に触れていた。

これにより、のみきも失格となる。まさかの位置からの攻撃だった。

「まったく、してやられ……たつ、とつ、とつ」

「えっ、わっ、わっ、わっ」

直後、夏海ちゃんが抱きついたことで後ろに重心がかかってしまったのか、のみきは大きくバランスを崩し……。

「わーーーーー!」

夏海ちゃんもろとも、ため池に落ちてしまった。

「え、ふたりとも、大丈夫か？」

俺としろはは、慌ててため池を覗き込む。

「あ、ああ。すまない」

「えへへ、大丈夫です」

二人とも、全身ずぶ濡れになってしまっていたけど、怪我はないみたいだった。

「ほら、しつかり手を持って」

その後、二人を岸まで上げる。

「全身ずぶ濡れですし、私も失格ですね」

夏海ちゃんは苦笑いを浮かべながら、岸が上がってきた。

「まさか、夏海ちゃんにしてやられるとは……救済措置として『濡らした手でのに触れて破いても良い』なんて、言わなければよかった……」
のみきはなにやらぶつぶつ言っていた。よくわからないけど、言葉の節々に悔しさが感じ取れた。

「でも私、ため池の水で手を濡らしたんですけど、それは良かったんでしょうか」

「ああ。ポリタンクの水を使わなければいけないのは、水鉄砲の場合だけだからな。合法だ」

「なら、よかったです！」

失格にはなったけど、あののみきと相打ちに持ち込めたのが嬉しいんだろうか。夏海ちゃんは笑顔だった。

「あれ、そういえば優勝者って誰になったの？」

しろはは気付いたように呟く。言われてみれば、俺としろはも既にやられているし、のみきと夏海ちゃんも全身ずぶ濡れだった。

「えーっと、もしかして私、かなあ、なんて……」

何とも申し訳なさそうに、鴫が手を挙げていた。確かに前的是は無傷で残っていた。

どうやら、ハイドログラディエーター改の超広域モードによる攻撃も、鴫のいる場所までは届かなかったらしい。

「……そうだな。これは鴫の優勝だな。鴫、おめでとう」

のみきがその的確を確認し、その場で鴫の優勝が宣言される。

「鴫さん、おめでとうございませす！」

「おめでとう、鴫」

「ど、どうも……」

皆で口々に祝福を送る。鴫は慣れてないのか、苦笑いをしていた。

「ふふ。鴫はどうやら祝福されることに慣れていないようだな。戻ったら改めて表彰式だぞ？」

ハイドログラディエーター改を片付けながら、のみきが笑顔で言う。

その後、俺たちはお互いの健闘を称え合いながら、ダムへと戻った。全身ずぶ濡れだったけど、なんとも言えない満足感に溢れていた。とにかく、楽しかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

激戦だった水鉄砲大会が幕を下ろし、俺たちはダムの前に集合していた。

散々森の中を歩き回ったから当然疲れてはいるんだけど、心地いい疲労感だった。

「で、誰が優勝したんだ？」

のみきとラストバトルを行った場所はダムから見えないし、良一の疑問も当然だった。

「ども、優勝者です」

鴫がスーツケースを引きながら、申し訳なさそうに前に出てきた。「おお、ということは、今度はカモメさんがタカハラさんとデートですね！」

紬は笑顔だ。純粹にお祝いしているらしい。

「え。でそもれは……しろしろ、えつとその」

鳴はしどろもどろになりながら、しろはの方に視線を送る。

「……いいよ。三回目だし、もう慣れちゃった」

しろはは苦笑いだった。

「日程については、当事者の二人で話し合って決めるようになる」
のみきはそう言いながら、一枚の紙を鳴に手渡す。

「少々濡れてしまったが、しろは食堂のお食事券500円分だ。鳴、改めて優勝おめでとう」

「のみきさん、ありがとう！」

続いて、皆から祝福の言葉と、惜しみのない拍手が送られた。

「どもー、どもどもー」

鳴も照れ隠しなのか、えらくかしくまっていた。

「それにしても鳴、お前もなかなかの射撃の腕だな」

「冒険に銃撃戦はつきものだからねー。さすがに、のみきさんには敵わないけど」

確かに、この大会ののみきの強さは異常なくらいだった。

「あそこまで真剣だったってことは、もしかしてのみきさん、本気で羽依里さんとデートしたかったんじゃないですか？」

夏海ちゃんが笑いながら言っていた。いくらなんでもそれはないだろう。

「そ、そんなことは、ない……ないぞ。まったく。妙なことを言うんじゃない」

あれ。ちよつとのみき、含みありげな反応返さないで。

「……それにしてもこれ、洗濯も大変そうだね」

しろはがTシャツの端を摘んでいた。気がつけば全員が全員、服がカピカピになっていた。

……あれ？　いくら水鉄砲で撃ち合ったからって、ここまでカピカピになるものかな？

「……ねえ、何か臭わない？」

同時に、蒼が自分の体のおいを嗅ぎながら、怪訝な顔をしていた。
言われてみれば、ドブのような、嫌な感じの臭いがする。

皆も自分の体のおいを嗅いで、一様に嫌な顔をしている。

「……これは、もしかして」

俺も改めて自分の体を嗅いでみる。間違いなく俺からも同じ臭いがしていた。

「この臭い、もしかしてため池の水？」

しろはが何とも言えない表情をしていた。

「あ、えーつと、これはさ……ポリタンクの水が……」

俺は元凶である良一と天善に視線を送る。すると二人が俺の方を向いて、必死に拝んできた。

頼むから黙っていてくれ。ということなんだろうか。

「あのさ、実は俺が水を補充しに行った時なんだけど……」

俺は二人の願いに応え、ポリタンクはいつの間にかため池に落ちていたことにした。

不慮の事故により、ポリタンクにため池の水が混入していたと。そういうことにした。

「えー、それじゃあ、私のライフルも」

「私のおっぱいバズーカも」

「パリングルス水鉄砲も」

「全部ため池の水……？」

「そ、そうなるな」

「ちよつと待って。あたしの水風船も、あのポリタンクの水を入れたんだけど」

「私のマシンガンもですよ……？」

皆の話を統合すると、ほとんどの水鉄砲にあのため池の水が使われていたらしい。

「俺たち、ため池の水で打ち合いをしたのか……」

ちらり、とため池を見る。水は緑色に変色しているし、雨が降らないせいか自然浄化も進んでないように見える。正直、汚い。

そりゃ、皆臭うわけだ。

「どうしよう、髪まですごく臭うんだけど」

シヨックを受けてるのは鷗だった。女の子たちは皆髪が長いし、この臭いが髪につくのは絶えられないだろう。

「うあー、帰ったらすぐにお風呂入らなきゃ」

蒼は自分の身体を両手で抱きしめている。それくらい嫌なんだろう。

「蒼ちゃん、水道代も馬鹿にならないですし、またいつものように一緒にシャワー浴びますか?」

「いつも一緒に浴びてないですー!ー! いつも一緒に入ってるみたいに言わないでー!ー!」

蒼が叫んでいた。

でも、帰ったら本当にシャワー浴びないと。この臭いはやばい。男の俺でも嫌だ。

「そうだ。タイミングが良いかはわからないが、参加賞として渡そうと思っていたものがあるんだ」

悲壮感が漂う中、のみきが出したのはチケットの束だった。

「なんだそれ」

「役所の近くに共同浴場があるだろう。そこの無料入浴券だ。しかも、ドリンク一本サービスらしい」

のみきはそう説明しながら、全員に一枚ずつチケットを渡す。

「おおー。この島、共同浴場とかあったんだ」

鷗は知らなかったようで、受け取ったチケットを興味津々に眺めていた。

そういえば、そんな施設があった気がする。ほとんど使ったことないから、忘れてたけど。

「あそこの風呂は広いからな。ゆっくりくつろげるな」

「そうだな。それに確か、あそこには卓球台があったはずだ」

いや、温泉場に卓球台はつきものだけど……さすが卓球脳だ。

「元々はこのチケットも、夏休みの子供向けのイベントの景品として用意したんだが……その、子供が入浴券をもらっても喜ばないだろう?」

確かに。俺たちもこのタイミングじゃなきゃ、喜ばなかったかもしれない。

「お風呂沸かす手間も省けるし、たまにはいいかもねー」

「そうですね！ 灯台にはお風呂がありませんし！」

通り雨に打たれた時、そんなことを言っていた気がする。紬も女の子なのに、普段はどうしてるんだろう。

「共同浴場ね……しばらく行ってなかったし、久しぶりに入ろうかしら」

「はい！ シズクも一緒に入りましょう！」

なんだかんだで皆乗り気のようにだし、たまには良いのかもしれないな。

「それじゃ着替えだけ持って、また共同浴場の前に集合しましょう」

「そうだな、そうしよう」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、俺と夏海ちゃんは加藤家に戻った後、適当に着替えを持ってから、共同浴場へ向かう。

共同浴場は役所の近くにあつて、かなり年季の入った建物だった。

「お、来たか」

「二人が最後だぞ」

その入り口前に、着替えを持った皆が集まっていた。

「ここに来るのも久しぶりよねー」

「そうですね。一年振りくらいじゃないですか」

「うん。確かあの時は、島中でお風呂のお湯が出なくなったんだよね。

原因はわからなかったけど」

「そういえば、そんなこともあったっけ」

あの日、俺はどうしたっけ。確か、一回くらい入らなくても良いと思つて、そのまま寝たんだっけ。

あの時は、その一年後に島の皆やしろはやと今みたいな関係になっているなんて、想像もできなかったな。

「よし、鷹原たちも来たことだし、入ろうか」

そんなことを考えていると、のみきが先頭を切って中に入っていた。俺たちもその後が続く。

ガラス戸を開けて建物の中に入ると、目の前には板張りの待合所が広がっていた。

中央には畳の張られた長椅子が並び、奥には番台。その番台の上には、飲み物のフリーザーも見える。

天井近くの壁に取り付けられた扇風機が回っていた。その対角線上には、これまた古めかしいテレビが吊るされている。

古き良き時代の銭湯、と言った感じだった。

「すごいですね」

夏海ちゃんが珍しそうに周囲を見渡していた。たぶん、こういう場所に入ったことがないんだろう。

「あれってなんですか?」

「ああ、あれはマッサージチェアだよ」

「え、あんな形があるんですね」

夏海ちゃんが驚くのも無理はない。壁際には、俺もほとんど見たことがないような、古いマッサージチェアが置かれていた。これ、動くのかな?

「お風呂から出たら、動かしてみましよう」

「そうですね!」

静久や紬も興味津々と言った様子だった。普段は見ないだろうしな。

「おお、卓球台だ」

そして温泉場ではお馴染みの卓球台がある。天善はそこしか見ていない。

「はいはい天善。そーいのはお風呂の後よー」

天善は目を輝かせていたけど、他の皆は完全スルーの流れだった。奥にある番台には、おばーさんが座っていた。本当に開店したばか

りのようで、俺たち以外に客はいなかった。

「おばーさん、無料券で悪いが、入らせてもらっても構わないか？」
のみきが代表して、人数分のチケットをおばーさんに渡す。

「はいよ。サービスのドリンクはお風呂上がりでいいかい？」

「ああ、構わない」

「それにしても、この時間にお客さんがたくさん来るなんて珍しいね」
チケットを受け取りながら、番台のおばーさんは嬉しそうに話していた。

「ところで鷗、お前まさか、風呂までそのスーツケース持って入るのか？」

「失礼な。さすがに脱衣所までだよ」

それでも脱衣所までは持つていくんだな……。

「お風呂で背中流してあげるね、なっちゃん」

「え?」

「団員の労をねぎらうのは、団長の務めだしね」

あ、まだそのネタ続いてたんだ。新生カモメ団。

「それじゃ、また後でね」

「ああ」

番台の前で女性陣と別れ、俺は天善や良一と一緒に青いのれんをくぐる。

男湯の脱衣所には、俺たち以外の姿はなかった。こんな早い時間から風呂に入るって人もいないだろう。

正直汗もかいているし、気持ち悪い。さっさと服を脱いで、かごに入れる。

「スーパーパーパーパージ！」

どうやったのか、良一は一瞬で裸になっていた。深く考えないでおこう。

扉を開けると、目の前にはタイル張りの空間が広がっていた。

お湯が張られた大きな浴槽があり、開放感がすごい。こういう広い

風呂っていうのも、良いもんだよな。

「本当に誰もいないな。貸し切り状態だ」

隣でそう言うのは天善だ。眼鏡を外しているせいか、いつもと感じが違う。

「というか天善、眼鏡は外しても、ラケットは持つてるんだな」

「当然だ。何か問題があるか？」

「いや、ないけど……」

湿気とかお湯とか、ラケットに悪いんじゃないだろうか。

とりあえず本人が良いというのだから深くは考えないことにして、まずは体を洗ってさっぱりしよう。

……なんだろう。男湯のお前らはいいいから、早く女湯の方を見せろという謎の圧力を感じる気がする。

悪いけどもうしばらく、男湯に付き合ってくれ。

「おおー、すごく広いお風呂です！」

「絨、走ったら危ないわよ！ ほら、タオルタオル！」

その時、壁の向こうから絨と蒼の声が聞こえてきた。二人とも声が大きいし、どちらも人がいないせいか、よく響く。

声のした方を見ると、当然壁があるのだけど、換気の関係だろうか、上のほうに隙間が空いていた。

だから声が良く聞こえるのか。

これは早いところ身体を洗って、湯船に浸かろう。この洗い場の位置だと、嫌が応にも声が聞こえるし。

他の二人も同じような心境だったのか、さっさと身体を洗うと、黙って湯船に浸かる。

少し熱いくらいだけど、俺はこれくらいの湯加減が好きだ。

男同士の風呂ってのも良いもんだよな。裸の付き合いって言葉もあるし。うん、良いもんだろう。

「蒼ちゃん、ちよつと胸揉ませてもらっていいですか？」

「良いわけないでしょー！ー！ 両手をワキワキさせながら近づいて来ないでー！ー！ー！」

そうだ、確か周囲の音が気にならなくなるおまじないとか無かつたっけ。

「スピードノキアヌリーブスノゴトク……」

なんか違う気もするけど、ここは別のことを考えて気を紛らわせないと。

「天善天善天善天善……」

隣の天善も同じ気持ちなんだろう。自分の名前を呪文のように呟いている。

「藍ちゃん、蒼ちゃんの代わりに、私のはどう？」

「……静久さんのは遠慮しておきます。そのおっぱいに触れたら、私のもので吸い取られてしまいそうなので」

「ひどいわ！ 人をおっぱいの妖怪みたいに言わないでくれる!?!」

「ぐはっ」

なんか天善がダメージを受けていた。イッタイドウシタンダロウ。

その後も壁の向こうから声がする度に、どうしてもその、想像してしまう。

だって、健全な男の子だもの。お年頃だもの。いろいろと考えるよ。ねえ？

そんな中、俺は無意識にできるだけ壁から離れようとしていたらしい。じわじわと後ろに下がり、背中が誰かとぶつかった。

「あ、すみません」

誰か他にも入っている人がいたのか。気づかなかった。

「……むう？ なんだ、羽依里か」

「げっ」

聞き覚えのある声だと思って振り返ると、全身傷だらけの恰幅の良

い男性……見間違えるはずもない、しろはのじーさんだった。

この人も、この時間に風呂に入りに来るのか。

「じーさんも、いつもこの時間に入りに来るのか？」

「ああ。大体この時間だ。帰ってから風呂を沸かしても良いが、そうすると夜にしろはが入る時には湯が冷めてしまう。二度手間だ」

話を聞いてみると、どうやら漁から帰った後には、大体ここでひと風呂浴びに来るらしい。

「なあ羽依里、さつきから誰と話してるんだ？」

その時、ようやく俺が誰かと話をしているのに気づいたのか、良一と天善が俺の方を向いて……驚愕の表情のまま、固まった。

「何だ、お前たちも一風呂浴びに来たのか」

「いえ！ 僕たちはその！」

「ちよっとお邪魔しただけで！」

なんだろう。良一と天善がめちやくちや動揺してる。こんな二人、見たことがない。

「それじゃ、俺たちは先に出るからな！ 羽依里、後は任せたぞ！」

まだそこまで湯船に浸かってないだろうに、二人は一目散に浴場から出ていこうとする。

「待てい！」

「ひいっ」

その様子を見たしろはのじーさんが一喝。二人は走りかけの格好のまま固まる。

「ここで会ったのも何かの縁だ。あいさつ代わりに四天王スクワットでもやっていけ」

ちよっと待って。どうしてそうなるの。

「ちよっど四人だからだ！」

じーさん、心を読まないで。というか、俺の腕を放してください。

「……………」

二人は死んだような目をして戻ってきた。そして、湯船の中で四人で向かい合って立つ。

当然、風呂の中なので、格好はその……あれだ。生まれたままの姿だ。

「よし、加納のせがれは玄武、三谷の小僧は青龍だ」

「は、はい！」

「わかりました！」

「羽依里、お前は変わらず朱雀だ！」

「ああ、わかった」

「いくぞ！ 四天王スクワットだ！」

「ししんそうおう！ 青龍！」

そして、四天王スクワットが始まった。

「せい！ せい！ 白虎！」

「びゃこ！ びゃこ！ 朱雀！」

「ぎく！ ぎく！ 玄武！」

「げん！ げん！ 白虎！」

俺も部活の関係上、男の裸の中にいるのは慣れてるけど、この状況はひどい。悪夢だ。

「びゃこ！ びゃこ！ 青龍！」

「せい！ せい！ 玄武！」

「げん！ げん！ 朱雀！」

良一たちは半泣きだった。

「ちよつと男子、さつきからうるさいわよ！」

「羽依里も、お風呂は静かに入って！」

盛り上がってきたところで、壁越しに蒼としろはに怒られてしまった。

これにより四天王スクワットが止まる。助かった。

「しろは、お前も入っていたのか」

「え、その声は……おじーちゃん!？」

「ちようどいい。四天王スクワットをやってくれた礼に、羽依里をそっち側にくれてやろう」

「え、ちよつと何言ってるの」

本当だよおじーさん。何言ってるの。

「まだお前たちは、一緒に風呂も入っていないそうじゃないか。ちよ
うどいい機会だ」

しろはのじーさんの視線を追うと、例の天井近くに空いた隙間が目
に入った。俺、あそこから投げ込まれるんだろうか。

「いい、いい機会じゃないよ！ それに、こつちには他の子だっているん
だから！ 絶対駄目！」

壁の向こうから、しろはの必死の抗議が続いていた。なんだ、この
状況。

「…………ふっ、冗談だ」

「ほっ…………」

どうやら冗談だったみたいだ。このじーさん、どこまで本気がわか
らない。

「お前たちも、ゆっくり入るといい」

しろはのじーさんは俺たちにそう告げると、浴室から出て行った。

「た、助かった…………」

気を取り直して、ゆっくりとお湯につかることにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「まったく、しろはのおじーさんにも困ったものねー」

「うん。おじーちゃんったら、何を言い出すかわからないんだから」

…………私は鷗さんに背中を洗ってもらいながら、お二人の話を聞いて
いました。

「はい、おわりだよー」

「鷗さん、ありがとうございました！」

「いいよいいよ。先に私の背中、流してもらったしねー」

「では、次は私が前を洗ってあげます」

「え。えっと、前はその」

なんでしよう。藍さんがものすごい笑顔でこっちにやってきたんですけど。笑顔なのに怖いです。

「ふふ、冗談ですよ」

藍さんはそう言いながら、洗い場に座って髪を洗い始めました。でも、さっきの目は本気の目でした。

「ごめんね夏海ちゃん、おじーちゃんが変な冗談言うから、驚いたでしよ」

いつの間にか、私の隣にしろはさんが座って身体を洗っていました。

「は、はい。ちよつとだけですけど」

私も体を洗いながら、何の気なしに隣のしろはさんを見ます。

やっぱりその、すごくきれいです。肌も真っ白です。日焼け止めとか使ってるんでしょうか。

「……ところで夏海ちゃん、その左手どうしたの?」

「えっ?」

しろはさんは、包帯の巻かれた私の左手を見ていました。

「えっと、この間料理をしていて、ちよつと火傷しちゃいました」

「え、大丈夫なの?」

「はい、包帯はしてますけど、大したことはないですよ!」

「じゃあ、後で包帯取り換えてあげるね」

「い、いえ! 替えの包帯を忘れてきてしまったので、帰ってから自分で取り替えます!」

「そ、そう……? それならいいけど」

「はい! 大丈夫です!」

私は身体を洗うのもそこそこに、逃げるように湯船に入ります。

少し熱いですけど、疲れが取れる気がします。のぼせるといけないので、長湯はできそうにないですけど。

温まりながら、皆さんの様子を眺めます。皆さん髪が長いので、お手入れが大変そうです。

髪が短いのは、私とのみきさんくらいです。

「ふう。気持ちいいが、その、少し熱いな」

ちようど私の向かいに、そののみきさんがやってきました。でも、髪は同じくらいですけど、その……。

私はのみきさんの顔を見た後、視点をゆつくりと下げます。

「ん？ どうした？」

「い、いえ」

……当たり前ですが、おっばいは比べ物になりません。

私は何とも言えない気持ちになって、鼻のところまでお湯に浸かります。

そんなことをしているうちに、のみきさんは顔を赤くしながら向こうの方へ行ってしまいました。

「良い湯加減。極楽だねえ、なっちゃん」

声が出た方を見ると、鷗さんが今にもとろけそうな顔をしながら、湯船に浸かっていました。

「水炊きになりそうだねえ」

カモメ鍋でしょうか。いいお出汁が出そうですね。

それにしても、やっぱり鷗さんも……。

「え、なっちゃんどうしたの？ 私の胸なんか見て」

「いえその、む……ごっほですわね」

「出た。謎の発作むごっほ」

よくわからない言葉で誤魔化してしまいました。

「あら、夏海ちゃんもおっばいに興味があるの？」

「ひえっ!？」

いつの間にか背後に静久さんがいて、両肩に手を置かれていました。

「別に恥ずかしがらなくてもいいのよ。夏海ちゃんくらいの年だと、おっばいに興味があつて当然なもの」

あ、当たってます。背中に大きいのが。

「ここのお風呂は貸し切りみたいで気持ちいいわね」

「そ、そうですね」

「本土の共同浴場は時々利用するけど、ここまで人がいないなんてことはないもの」

静久さんはそう続けます。その、気分が良いのはわかりますけど、少し離れて欲しいです。

「ところであのー、なんで私にくつついてるんですか？」

「だって、紬が構ってくれないのよ」

「え、どういうことですか？」

「むぎぎぎぎぎぎ」

その時、前の方から聞きなれた声がしました。

「つ、紬さん、どうしたんですか？」

「お風呂にいる間は、シズクとはゼッコーすることにしました。むぎぎぎぎぎ」

見ると、紬さんがご立腹みたいでした。何があっただんでしょう。

「あ、もしかしてその、おっぱいですか？」

「むぎゆ！今はその言葉は言ってはいけません！」

心なしか、紬さんが泣きそうな目をしています。

「え、えつと、紬さんの気持ちはわかります。私もその、小さいので」

「……わたしの仲間はナツミさんだけです！」

「ひゃー！」

紬さんが抱きついてきました。

前から後ろから抱きしめられて、とても苦しいです。

「胸の大きさなんて、二人はまだ気にしなくてもいいじゃない。そのうち大きくなるわよー」

そう言うのは蒼さん。なんでしょう。勝者の余裕を感じてしまいます。

その後ろには藍さんが居ます。

お二人とも、さすが双子です。全く見分けが付きません。髪もまとめていますし、喋っていないと、どっちがどっちかわかりません。

「それでは蒼ちゃん、触診の時間ですよ」

「わひゃ!？」

その時、蒼さんの胸を、藍さんが後ろから鷲掴みにしました。どうやらずっとチャンスをうかがっていたみたいです。

「ちよつと藍！なにやってるのー！？」

「これは触診と言つて立派な検査なんですよ。動かないでください」

「なんの検査よー！？」

「こらー！女子もうるさいぞー！」

お返しとばかりに、今度は羽依里さんから怒られてしまいました。でも、皆さんと一緒のお風呂は凄く賑やかで、楽しかったです。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ふうー」

入浴を済ませた後、俺たちは待合所の長椅子に座つて、まったりと過ごしていた。

ちなみに、天善は隅に置かれた卓球台で、番台のおばーちゃんと風呂上がりの卓球をしていた。せっかく風呂に入ったのに、また汗をかくというのもどうなんだろう。

「必殺！ドラゴンスレイブ！」

「なんの！秘技！竜殺し！」

「ぐあああつー！」

それにしても、おばーさんのテクニクがすごい。天善と互角か、それ以上の動きをしていた。

そんな天善を見ると、せっかくの気分が台無しなので、反対側を見る。

静久がマッサージチェアにかかっていた。アスリートだった俺は肩こりとかもないし、マッサージ機のありがたみはイマイチわからない。

「シズク、気持ちいいんですか？」

ういんういんと動く椅子に腰かける静久を、紬は興味深そうに見ていた。

紬も髪を結んでいないせいも、時折その金髪が扇風機の風でサラサラと舞う。綺麗だった。

「胸が大きいとね、肩が凝るものなのよ」

「むぎゆ、よくわからないです」

「いつか紬にもわかる日が来るわ」

「そ、そうでしょうか」

紬は何とも言えない顔をしていた。

「そうだ。おばーさんに許可は得ている。各自、好きな飲み物を選ぶといい」

のみきにそう促され、皆で飲み物を選ぶことにした。

色とりどりの牛乳が入ったフリーザーには、大きく『長森牛乳』と書かれていた。聞いたことないけど、地方のメーカーなんだろうか。

一番近くにいた俺が、まずは自分のコーヒー牛乳を取り出す。

「そうだ。せっかくだし、皆の分も出してあげよう。」

「なあ蒼、どれ飲むんだ？」

「蒼ちゃんはあっちですよ」

「あ、悪い」

近くにいたので話しかけたんだけど、間違えてしまった。だって同じ服着てるし、髪も結んでないし、見分けつかないんだもん。

「蒼ちゃんには、マンゴーミックスフラペチーノ味でお願いします」

「そんな味ないから。蒼、フルーツ牛乳でいいか？」

「うん。ありがとねー」

蒼がやってきて、フルーツ牛乳を受け取る。

「それで藍は？」

「私はコーヒー牛乳でお願いします」

「メロン牛乳とかもあるけど」

「コーヒー牛乳が良いです」

「ほい」

リクエスタのコーヒー牛乳を藍に手渡す。本当に蒼と見分けつか

ないんだけど。

「あ、メロン牛乳は私でもらってもいいかな」

そう言っって手を伸ばしてきたのは鷗だった。

風呂上がりだからか、髪型がポニーテールになっていて、一瞬誰かと思っった。

「やっぱりメロン味が良いよね」

鷗はメロン牛乳を受け取った後、上機嫌で長椅子に戻っていった。やっぱりメロン好きなんじゃないか？

「静久は何が良いんだ？」

俺はマッサージチェアに腰かけた静久に声をかける。

「ありがとうパイリ君。普通の牛乳でいいわ」

「普通のでいいの？」

「余計なものは何も入っていない方が、おっぱいには良いのよ」

「タカハラさん！ わたしも牛乳をくださいー！」

「あ、ああ」

妙に気合の入った紬に少し気圧されながら、俺は二人分の牛乳を渡す。

そして、夏海ちゃんがそんな紬を何か言いたそうな目で見ていた。お風呂で何かあったんだろうか。

「すまない、いちご牛乳を貰えるか」

その次に、のみきがやってきた。

「ああ、いいよ」

俺はフリーザーから、いちご牛乳を取り出してのみきに手渡す。

「ほい、いちご牛乳」

「なんだ？ 子供っぽいとか思っているのか？」

「いや、別に思っってないぞ。のみきらしいと思っただけだ」

「むう、それはそれで反応に困るな……」

のみきが何とも言えない顔をして去っっていったので、次はしろはに声をかける。

「しろは、何飲む?」

「それじゃ、フルーツ牛乳」

「ほいよ」

しろはにフルーツ牛乳を手渡す。

「ありがとう」

しろはからは、良い石鹸の匂いがした。

「……まだお前たちは、一緒に風呂も入っていないそうじゃないか。」

その時、しろはのじーさんの言葉が頭をよぎる。

「……というか、この島では恋仲になったら、まずは一緒に風呂に入るのが習わしなんだろうか。」

島の誰かから、そんな話を聞いたことがあるような、ないような。

「ええい、俺たちにはまだ早い!」

頭を振ってその言葉を打ち消す。

「え、何が早い?」

その様子を見ていたしろはが不思議そうな顔をしていた。

「いや、なんでもないよ」

俺が適当にはぐらかすと、しろはは首をかしげながら長椅子の方へ戻っていった。

「ところで、天善は何を……」

「チヨレ……」

「……どうやら天善ゾーンを展開しているようだったので、適当にコーヒ―牛乳を選んでおいた。」

「良一はどうする?」

「俺はレモン牛乳だな」

「え、そんなのあるのか?」

「奥の方を見てくれ。たぶんあるはずだぜ」

良一に言われるがままにフリーザーの奥を探すと、一本だけレモン牛乳が見つかった。

変わった味を選ぶんだなと思いつながら、レモン牛乳を取り出して、良一に手渡した。

「羽依里さん、私もフルーツ牛乳もらっていいですか？」

最後に夏海ちゃんがやってきた。髪を拭くのに使ったんだろうか。首元にネコの柄が入ったタオルを巻いている。

「はい、フルーツ牛乳」

「ありがとうございます。羽依里さんも一緒に飲みませんか？」

「うん。そうしようかな」

その後は皆で長椅子に座って、一緒に飲み物を飲む。風呂上がりの牛乳って、どうしてこうも美味しいんだろう。

「ぶはー」

夏海ちゃんとハモってしまった。

水鉄砲大会であれだけ動き回った後の風呂あがり。子供の頃、プールで思いつきり遊んでから帰宅した後の感じに似ていた。

天井に取り付けられた扇風機の風が心地いい。天国だった。

その時、天井から吊るされたテレビの映像が偶然目に入った。どうやらキャンプ特集をしているらしかった。真っ黒に日焼けした子供たちが、インタビュウを受けていた。

「……」

隣の夏海ちゃんは、フルーツ牛乳を飲む手を止めて、その番組に見入っているみたいだった。

「なんだ夏海ちゃん、もしかしてキャンプ行きたいのか？」

その様子を見てか、良一が夏海ちゃんに声をかける。

「え、キャンプですか」

思いがけない提案だったのか、夏海ちゃんがキョトンとしている。

「いいんじゃない？ せっかくだし、皆で行きましょうよ」

そんな中、蒼が一番に賛同してくれる。

「でも、皆さんに迷惑をかけてしまうんじゃない」

「誰も迷惑だなんて思わないわよ。ね？」

「うん！ キャンプ、面白そう！」

「皆で島の自然を満喫できるとか、最高よね。紬？」

「はい！ サイコーですね！」

「夏海ちゃん、外で食べるご飯は美味しいんだよ」

「なんなら、バーベキューの用意もしてやろう」

「また、天体観測もやりましょう」

蒼、鷗、静久、紬、しろは、天善、藍……いつの間にか、皆が話に乗ってきてくれていた。こういう空気は大好きだった。

「俺も行きたいな。もちろん、夏海ちゃんも行くよね？」

だから、俺もこの流れに乗ることにした。

「は、はい！ 行きたいです！」

「よし、決まりだな！ 明日は皆でキャンプだ！」

良一が一番喜んでる気がする。なんでだろう。

「でも、キャンプってその、色々と道具が入りますよね？」

「大丈夫だ。テントならあるぜ」

夏海ちゃんの問いに対し、良一はそう言っただけで胸を張る。凄い笑顔だった。

「良一はテントコレクターだからねー」

「まあな。普通のテントからピンクのテントまで、何でもある」

凄いやる気だ。コレクションを披露できる千載一遇のチャンスだからかな。

「キャンプ道具は確か、おとーさんが納屋にたくさんありますよ。まだ使えるはずですよ」

藍がそう付け加える。

「え、なんでキャンプ用品が空門家に？」

「うちのおとーさんは昆虫学者だって言ったでしょ。蝶を捕まえるために、南米のジャングルで寝泊まりすることもあるのよ」

「あ、そういうことか」

なるほど。納得の理由だった。

「役所への届け出は、私がやっておこう」

「食材は俺に任せておいてくれ。現地での食材調達をするなら、釣り竿も必要だな」

のみきも天善も、こういう時は本当に頼りになる。

「料理は私にまかせてね」

「しろはちゃんに任せておけば安心ですね」

もちろん、しろはもだ。

「そうだ。冒険に行くなら、おやつも用意しておかないとね！」

そう提案したのは鷗だった。ちなみに鷗、冒険じゃなくて、キャンプだからな。

「あの、ワタアメはおやつに入りますか!？」

「大丈夫だよツムツム。明日、一緒に買いに行こう！」

「はい！」

「後、必要なものだけど……」

その後も皆で、キャンプでやりたいことや必要なものについて、わいわいと話し合った。

夕方になり、それなりにお客さんも増えてきたころ、いつまでも待合所を占拠するのも悪いということ、その場は解散となった。

「もし気になることがあったら、明日のラジオ体操の時に最終確認をすればいいし」

「そうですね！」

夏海ちゃんはものすごく嬉しそうだった。ニコニコしてるし、明日が楽しみで仕方ないみたいだ。

「明日は遠出するし、今日はできるだけ早く寝て、疲れを取らないとね」

「はい！」

二人で笑い合いながら、俺たちは帰路についた。

……ちなみに、今日は食材の準備ができていないとかで、しろは食堂はお休みらしい。こればかりは仕方がない。

加藤家に戻ると、ちょうど鏡子さんが居たので、明日キャンプに行く許可をもらおう。

「皆で行くんならいいよ。気をつけてね」

「はい！ありがとうございます！」

どうやら、快諾してもらえたみたいだ。

その後、夕飯は三人でカップうどんを食べることにした……のだけ
ど。

「のおおおおおお！」

キムチうどんを一口食べた俺は、もだえ苦しんでいた。

「は、羽依里さん！ しっかりしてください！」

「のおおおおおお！」

「大変です！ 羽依里さんが『のお』しか言えなくなってます！」

な、な、なんでこんなに辛いんだろう。この間食べたキムチうどん
は、ここまで辛くはなかったはずなのに。

「あら。このキムチうどん、パッケージに『獄辛・島唐辛子使用』って
書いてあるね」

「それってもしかしてヤバネ……のおおおおおお！」

一瞬収まったかと思ったら時間差で第二波が来た。

「羽依里さん、牛乳です！ これを飲んだら楽になりますよ！」

「のおおおおおお！」

「羽依里さん、しっかりしてくださいーい！」

……その後、牛乳を飲んでようやく落ち着いた。ヤバネ口恐るべ
し。

「カップうどん、一口しか食べてないのに」

結局、胃へのダメージを考えて、俺の夕飯は残っていた白ごはんを
使ったお茶漬けになってしまった。普段は食堂でしっかり食べてる
分、物足りなかった。

そして入浴は共同浴場で済ませていたので、夕食後は早めに休むこ
とにした。

それにしても、島でキャンプとか、いかにも夏休みらしい。夏海
ちゃんじゃないけど、俺も明日が楽しみになってきた。

布団を敷いて横になり、目を瞑る。

昼間の水鉄砲大会の疲れもあり、俺はすぐに眠りに落ちていった。

第二十一話・完

第二十二話 8月14日（前編）

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんの声で目が覚める。

「おはよう。夏海ちゃん」

「はい。おはようございます」

夏海ちゃんに挨拶をした後、布団をたたみ始める。

「あの、お腹の調子はどうですか？」

「え、お腹？」

夏海ちゃんが心配そうな顔で聞いてきた。特に調子の悪さは感じないけど。

「ほら、夜中に苦しんでたじゃないですか」

「え、夜中？」

晩ごはんの時には苦しんだけど、その後は大丈夫だったはずだけど。

「夜中にお手洗いに起きたら、羽依里さんの部屋からうめき声が聞こえたんですけど」

「え、なにそれ」

「ヤバネロガー。ヤバヤバー。しろはー、たすけてー。とか、言ってみただけ」

「ええー……」

全く記憶にないけど、うなされてたらしい。夢を見た記憶もないけどな。

「大丈夫だとは思うけど」

自分の腹をさすってみる。特に違和感はない。

「なら、いいんですけど。あの時は、本気で鏡子さん起こそうかと思っちゃいました」

確かにそんな状況を見たら、俺でも鏡子さんを起こしていたかもしれない。

「それじゃ、表で待ってますね」

夏海ちゃんはそう言いながら、部屋から出ていった。

ヤバネ口症候群……?」

変な単語が浮かんだけど、すぐに頭から消した。

いつまでも夏海ちゃんを待たせても悪いし、俺は手早く着替えを済ませ、洗面所へ向かった。

「夏海ちゃん、おまたせ」

「はい!・ それでは行きましょう!」

身支度を済ませた後、玄関で夏海ちゃんと合流して、神社へと向かう。

今日は普段より暑い気がする。蟬の声も、いつもより大きい気がするし。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里、なっちゃん、おはよう!」

「鳴さん、おはようございます!」

境内に到着すると、いつものメンバーに加えて鳴と紬、静久がいた。

「よし、これで大方揃ったな。ラジオ体操大好きさんが来る前に、キャンプの打ち合わせをするぞ」

良一が音頭を取り、皆が一か所に集まる。

「あれ、しろはは?」

一緒にキャンプに行くはずのしろはの姿が無かった。

「しろはちゃんは朝に弱いんですよ。心配しなくても、ここで聞いた内容はきちんとしてしろはちゃんにも伝えておきます」

そっか。藍に任せておけば大丈夫かな。

「ところで今日のキャンプ、目的地はどこになるんだ？」

「七ヶ浜だ」

「え、どこ？」

聞いたことのない場所だった。

「秘密だ。夏海ちゃんは一度行ったことあるぜ」

「え、そうでしたっけ？」

夏海ちゃんの頭にもクエスチョンマークが浮かんでいるようだった。

「一度、マリンジエットで行った入り江なんだが」

「あ、あそこですか」

そう言われて、夏海ちゃんにはピンときたらしい。俺たちは相変わらずわからない。

「他の皆は、ついてからの楽しみだな」

良一は含み笑いを見せる。どんな場所かわからないけど、楽しみにしておこう。

「昨日も言ったが、俺は全員分のテントを持って行くからな」

確か、テントコレクターなんだったか。それなら良一に一任した方が良さそうだ。

「キャンプ用具は、俺が後で蒼の家に取りに行こう。構わないか？」

「いいわよー。適当に表に出しておくわねー」

どうやらキャンプ用具の担当は天善みたいだ。

「向こうでバーベキューをするからな。米や野菜、肉といった食材も俺と天善が用意しておく」

「そうだな。任せておけ」

なんだろう。良一が生き生きとしている。すごく楽しんでいるみたいだ。

「後、しろには調理を担当してもらいたくてな。必要な調理道具を持ってきて欲しい」

「わかりました。そう伝えておきます」

天善の提案を受け、藍が快諾する。

「ねえねえ良一君、個人で用意するものとかあるかな？ 本格的な

キャンプとか、久しぶりだし」

鴎がメモを手には質問していた。

「必要なものは着替えやタオルくらいだな」

「ふむふむ」

鴎はあのスーツケースも持って行くんだろう。あれならなんでも入りそうだった。

「後、水筒も必要だな。こっちも水は持って行くが、自分でも用意してくれよ」

「水筒だね。了解したよ！」

「あ。そう言えば鴎、向こうで花火をやるんだろ？」

昨日、共同浴場で言っていたことを思い出して、そう聞いてみた。

「うん！ 花火も用意していくからね！」

「後は、やっぱりおやつも必要よねー」

そこで蒼が会話に入ってきた。

「後で駄菓子屋に買いに行くよ！」

「待ってるわよー」

結果的にバイト先に貢献していた。さすが看板娘だった。

「わたしは、ワタアメとパリングルスを持ってきます！」

「おっぱいも忘れずに持っていくわね！」

紬と静久も楽しみにしているみたいだ。ちなみに、最後の一言は聞かなかったことにしよう。

「なっちゃんも、後で一緒におやつ買いに行こうね？」

「はい！ よろしくお願いします！」

具体的な話がどんどん出ているせいか、夏海ちゃんがワクワクしているのがわかる。

「夏海ちゃん、天善ちゃんは夏海ちゃんをだしに、テントのお披露目をしたいただけなんです。騙されてはいけません」

「え、そうなんですか？」

「全然そんなことないぞー！ キャンプ楽しみだなー！」

「……白々しいですね」

藍が冷たい視線で良一を見ていた。でも、皆もキャンプが楽しみな

ことに変わりはないだろう。

「集合時間は13時。集合場所は役所前な。遅れたら置いていくぞ！」

「はい！ 遅刻しないように気をつけます！」

「おまえらー！ 今日もラジオ体操を始めろー！」

その時、打ち合わせが終わったのを見計らったかのように、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ 筋肉わっしょい！ 筋肉わっしょい！」

「わーっしょい！ わーっしょい！」

なんだかいつもと掛け声が違うような気もするけど、これはこれで賑やかだし、いいんじゃないかな。筋肉筋肉ー！

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操が終わった後、いつものようにスタンプをもらい、ログボを受け取る。

今日は小さな壺が大量に並んでいた。そして、その全てにふたがされている。

「え、壺？」

なんだろう。梅干しでも入ってるんだろうか。それにしても、数が多。

首をかしげながら壺を受け取る。

「なんだろうこれ」

何の気なしにふたを開けてみる。

すると、吸盤のついた無数の足が目飛び込んできた。タコだ。これはタコつぼだった。

「ひいっ!？」

俺は反射的にふたを閉めた。

小さいながらもタコを一人一匹くるとか、いくら島とはいえ凄すぎる。

「というか、生きたタコをもらってもどうしようもない。皆、持って帰ってどうするんだろうか。」

「朝一番で港に揚がったみたいねー。どうやって食べようかしら」

「たこ焼きにしますか？ キャンプ用品を整理していたら、納屋からたこ焼き器が出てきましたし」

「あ、それいいわねー」

「一度作っておけば冷凍庫で保存できますよ」

「うんうん。帰ったらさっそく茹でて、ぶつ切りにしておかなきゃね」

空門姉妹がそんな話をしていた。なんだかんだで二人も島育ちと、言うのを実感する会話だった。

「ひ、ひええええー！ー！ー！」

その時、タコつぼを受け取った夏海ちゃんが聞いたことのないような悲鳴を上げながら、ふたを閉めていた。若干涙目になっているように見える。

「うひゃー」

同じくログボを受け取った鷗も一瞬だけふたを開けて、すぐに閉めていた。

「ツムツム、これあげる」

そして、笑顔で紬にタコつぼを渡していた。鷗の癖にタコが嫌いなんだろうか。

「むぎゅ!? いいんですか?」

「うん!」

一方で、紬はそのタコつぼを嬉しそうに受け取っていた。

「あれ、紬ってタコ好きなの?」

「はい! ワタアメとパリングルスも好きですが、タコとコツペパンも好きです!」

「そっか、だったら俺のも……」

「紬さん! 私のタコもあげます!」

俺のも渡そうと思った矢先、先に夏海ちゃんが紬にタコつぼを渡し

ていた。

夏海ちゃん、持ってるのも嫌だったんだらうか。

「おおー、ありがとうございますー！」

紬は両手にタコつぼを抱え、嬉しそうだった。

「ところで紬、そのタコどうするんだ？」

「このままだと日持ちしないので、灯台に戻ったらヒモノにしますー！」
タコにも言葉の意味が分かったんだらうか。紬の持っているタコつぼのふたがカタカタと震えていた。

なんだかんだで紬もこの島の人間だ。遅しかった。

ところで俺のタコどうしよう。さすがに紬にはこれ以上渡せそうにないし。

しろはに渡してもいいけど、朝一番に家を訪ねるというのも……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

そんなことを考えているうちに、加藤家に帰りついてしまった。

「えーっと」

とりあえずタコつぼを持ったまま、居間までやってくる。

さて、鏡子さんもないみたいだし、どうしたものか。

俺の手には、カタカタと動くタコつぼ。タコも身の危険を感じているんだらう。ふたを押さえていないと、すぐにでも逃げ出してしまいうさだ。

もし逃げ出されて、居間でスミでも吐かれようものなら、目も当てられない。

「夏海ちゃん、今日の朝ごはんだけけど」

「羽依里さん、たまには羽依里さんが作ってみませんか？」

「え」

夏海ちゃんにお願いしようとしたら、思わぬ返しが来た。

「タコライスでもたこめしでも、お刺身でも、朝から好きなもの作れま

すよ？ 良かったですねえ」

凄いい笑顔だ。そして少し離れている。もしかして夏海ちゃん、ぬめぬめしたの駄目だったりするんだらうか。

「良かったね夏海ちゃん。今日のログボなら、立派なチャーハンが作れるよ」

「うぐっ」

だから俺も笑顔で切り返してみた。そしてタコつぼを夏海ちゃんの方に差し出す。

「せっかくしろはに教わったチャーハンの極意、生かすチャンスだよね？」

「ううう……」

夏海ちゃんは頭を抱えて唸っている。ちよつと酷だっただらうか。

ゴム手袋どこでしたっけ……とか、洗剤で洗っても大丈夫でしょうか……とか、ぶつぶつ言ってるのが聞こえる。

ゴム手袋はわかるけど、洗剤は本当にやめて。

「……あらっ？」

その時、鏡子さんが居間にやってきた。よかった。出かけたわけじゃなかったみたいだ。

「それ、何？」

「ラジオ体操でもらったんです。タコなんですけど」

俺はそつとタコつぼのふたを開けて、中身を見せる。

「あら、美味しそうね」

この流れを待っていた。鏡子さんに後光が差しているように見える。

「食べるんでしょ？」

「はい」

「貸して」

「よろしくお願いします」

俺はタコつぼごと、鏡子さんにタコを渡す。

鏡子さんはそれを持って台所へ向かい、しばらくして戻ってきた。

「今茹でてるから、もう少ししたら食べ頃だと思うよ」

「ありがとうございます」

「茹でたらぬめりもなくなるし、大丈夫だと思うから。頑張つてね」
鏡子さんは夏海ちゃんにそう言つて、玄関から出て行つてしまった。今度は本当に外出してしまつたみたいだ。

「茹でたらぬめりもなくなるし、大丈夫だと思うから。頑張つてね」
「ええー……」

俺は鏡子さんと同じセリフを、夏海ちゃんに投げかける。

「はあ……わかりました。頑張つてきますよ」

夏海ちゃんはエプロンをつけて、重い足取りで台所へと向かつていった。

十数分後、良い香りと共にタコチャーハンが居間に運ばれてきた。

「おお。美味しそうだね」

「食べられなくはないと思うんですけど」

夏海ちゃんがエプロンを外しながら、俺の向かいに座つた。

あれ。そう言えば、今日は自信作と言わなかつた。

「こうなれば、イチレンタクシヨです。食べましょう！」

細みたくない言い方しないでほしい。

「それじゃ、いただきますーす」

手を合わせた後、さつそくスプーンを手にして、目の前のタコチャーハンに取り掛かる。

「うん。美味しい」

一口食べると、磯の香りが口の中に広がつた。十分に美味しいと思うけど。

具材に使われているタコの弾力も良い。噛めば噛むほど味が出るし……。

……その時、ガリつと音がして、何かが口に当たつた。

「……っ？」

何だろうと思つて出してみると、タコのかちばしだつた。

「あ、やっぱり入っちゃつてましたか？」

その様子を見て、夏海ちゃんが申し訳なさそうな顔をする。

「タコとか、さばいたことないので……気をつけてはいたんですけど。どうにも小さくて」

ああ、間違つて入っちゃったんだらうなあ。

「いいよいいよ。無理強いののは俺だしね」

どうやら、しろはのチャーハンの極意には、タコのさばき方までは記されていなかったみたいだ。

くちばしの部分だけ目をつぶれば、タコの風味もしっかりと出ていたし、美味しいチャーハンだった。

朝食後、俺たちはキャンプの準備を始めた。

それぞれ部屋に分かれて、大きめのリュックを引つ張り出し、それに着替えやタオルを詰める。

天善たちにだけ沢山の荷物を持たせるわけにはいかないの、俺のリュックにも入るよう、余裕を持たせておく。

「だいたいこんなもんかな」

「……鷹原、居るか？」

ある程度準備を終えた頃に、玄関から声がした。

「あれ、誰だろう？」

玄関に出てみると、そこには天善がいた。

「天善か。どうしたんだ？」

「ラジオ体操の時に言い忘れてしまったが、バイクの修理が終わったぞ」

天善が指さす先に、俺のバイクが止められていた。

まるで新品同様……とまではいかないけど、すごくきれいになっていた。

「まさか、ここまで持ってきてくれたのか？」

「ああ。ここまで押してくるのも、良いトレーニングになったからな」

天善も、今日はキャンプの準備で忙しいはずだ。電話でもくれたら、取りに行ったのに。

「それで天善、修理代は……」

「この間も言っただろう。修理代は不要だ」

「いや、でも……」

「ここまでしてもらって修理代も出さないとか、あまりに申し訳ない。」

「そうだ天善、食材の買い出しって終わったのか？」

「いや、ついさつきキャンプ用具を運んだところだ。食材の調達はこれからだな」

「なら、手伝わせてくれないか？」

「何、良いのか」

「ああ。バイクを直してくれた、せめてものお礼だよ」

「そういう事なら、遠慮なく頼むことにしよう。メモ用紙とペンはあるか？」

「ああ、ちよつと待っていてくれ」

俺は一度自分の部屋に戻り、適当な紙とペンを持って戻る。

「すまないな」

それを受け取った天善は、素早く紙の上にペンを走らせる。

「とりあえず、食材はこれだけあればいい。港の商店に行けば、大方揃うはずだ」

天善からメモを受け取る。そこに書かれていたのは、水や肉、調味料だった。

「米や野菜は良一が用意する手はずになっている。俺は水と肉の係だな。頼めるか？」

「ああ、任せてくれ」

天善からお金と、バイクのキーを受け取る。

「買い出しが終わったら、天善の家に行って行けばいいのか？」

「それでいい。待っているからな」

天善はそこまで話すと、軽く手をあげてその場を立ち去っていった。なんだかんだで、忙しいんだろう。

「……あれ、天善さん来てたんですか？」

天善が帰った直後、玄関から夏海ちゃんが顔を覗かせた。

「バイクの修理が終わったから、持ってきてくれたんだよ」

「直ったんですか。良かったですね」

「うん。それでバイクのリハビリがてら、ちよつと港に行ってくるよ」

「港ですか？」

「うん。天善の買い出しを手伝うことになってね」

「そうなんです。気をつけて行ってきてください！」

「安全運転で行ってくるよ。夏海ちゃんは水筒の準備をお願いね」

「わかりました！」

夏海ちゃんが家の奥に引つ込むのを確認してから、俺はバイクにまたがって、セルスイッチを押す。

「……あれ？」

……相変わらずセルスイッチは駄目っぽい。

「こっちは直してくれなかったんだな」

例によってキックスイッチを試すと、問題なくエンジンが起動した。

「よし。行くぜ相棒！」

俺はゆっくりアクセルを回す。修理したとは思えない、快調な走り出しだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に到着した後、適当な場所にバイクを止める。ここまで走らせたけど、バイクの動作には何も問題はなかった。

ちなみに、港には今日も出店が出ていた。気にはなつたけど、今は買い出しが優先だ。

「お、いらっしやい」

港の商店に入ると、店番のおじさんが笑顔で対応してくれた。

こじんまりとした店内には、小さなレジスターが置かれ、食料品か

ら日用雑貨まで、様々なものが所狭しと並べられていた。

「すみません。えつと、豚肉と鶏肉……あと、調味料をください」

「調味料はこれだな。肉は……ちよつと待つてな」

おじさんは塩コシヨウやサラダ油を出してくれ、奥のフリーザーからトレイに入つた肉を持って来てくれた。

「あ、それとペットボトルの水をください」

「はいよ。その棚の下に入ってるから、引つ張り出してくれ」

言われた場所からペットボトルを引つ張り出す。結構な重さだつた。

「ほい。まいどあり」

そんな感じに必要な買い物を済ませ、荷物をバイクに乗せる。

「あれ」

調味料や肉は、なんとか収納スペースに入つたけど、ペットボトルの水だけはどうしても入らない。

「夕飯の分だけだけど、行く人数が人数だもんな……」

天善の家と港を何往復かしようか。とか考えていると……。

「にいちゃん、この箱を貸してやるよ」

その様子を見ていたのか、商店のおじさんが店の奥から箱を持ってきてくれた。

『鳥白島漁協』と書かれた、プラスチック製の黄色くて大きな箱だった。これならペットボトルも全部入りそうだ。

「後で返しに来てくれたらいいからな」

紐でバイクの荷台に箱を固定しながら、おじさんはそう言ってくれた。

「ありがとうございます。お借りします」

「おう、気をつけて走れよ。また転んだら、彼女が悲しむぞ」

あ。やっぱり皆、口にしないだけで事故のことは知ってるんだな。

「はい、気をつけます」

その後は普段以上に安全運転をしながら、天善の家へと向かった。というより、後ろの荷物が重すぎて、そこまでスピードが出なかつた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

天善の家に到着すると、ちょうど当の本人が家の前でキャンプ用具を整理していた。

「天善、買い出しを済ませてきたぞ」

「おお、悪いな」

すぐ近くに取り付け、天善に荷物とおつりを渡す。荷物の方は結構な量だ。これを全部持って行くんだろうか。

「水は良一と分けて持つし、調味料も小分けにするから大丈夫だ」

「もしあれだったら、俺のリュックにも入るようになっておくぞ？」

「気持ちだけ受け取っておくさ。これは良いトレーニングになるからな」

なるほど。トレーニングならしやうがない。

「じゃあ、俺はこの箱を港に返してくるから」

「そうか。鷹原、助かったぞ」

「お互い様だよ。それじゃ、また後でな」

「ああ」

天善に荷物を渡した後、俺は軽くなったバイクに乗って、箱を返すに港へと戻る。

商店のおじさんに箱を返し、お礼を言った後、俺は再びバイクに乗って、加藤家を目指す。

……その途中。

「……あれ、蒼？」

一本道に差し掛かったところで、例の木の下に座っている蒼を見つけた。

「よう」

俺は近くにバイクを止めて、蒼に近づきながら声をかける。

「あ、羽依里ー」

声は返ってきたけど、なんだろう。ぼーっとしているような。「なあ蒼、どうかしたのか？」

「んー、ちよつとねー。暑さにやられちゃった……かも」

「え、大丈夫なのか？」

今日はいつものより暑い気がするし。まさか日射病だろうか。

「だからちよつとだけ、この木の下で休んでただけどねー」

近寄ってよく見てみると、蒼の顔は少し赤いような気もした。

「早く帰った方が良くないんじゃないか？」

「うん、そのつもりなんだけどー」

蒼が立ち上がる。ふらついてはいないけど、本調子じゃなさそうだ。このまま歩いて帰ってたら、悪化してしまうかもしれない。

「なあ蒼。バイクの後ろに乗っていくか？」

「え、いいわよー。悪いし……」

「こんな暑い中を歩いて帰っていたら、余計に体調悪くなるぞ。遠慮なんかせず、ほら乗れ」

俺は反射的に蒼の手を引いて、バイクの近くに連れて行き、収納スペースからもう一つヘルメットを取り出して、被らせてやる。

夏海ちゃんも一緒に乗ることがあるからと、ヘルメットをもう一つ入れておいてよかった。

「うーん。それじゃ、お言葉に甘えようかしらねー」

「それじゃ、しっかり掴まれよ」

「うんー」

俺が先にバイクに乗ってそう声をかけると、後ろに乗ってきた蒼は俺の首に手を回して、ほとんど抱きつくようにしてきた。そ、そこまですくつかなくても。

でも、俺の首に回された蒼の腕は少し熱く感じた。これは本当に日射病になりかけてるかも。

「できるだけゆっくり進むからな」

「うん、よろしくー」

ぼうつとなってるんだろうか。なんとなく元気がない。

早く連れて帰ってあげないと。
俺はゆつくりとバイクを発進させた。

「なあ、家に帰ったら、誰かいるんだろう？」

「うん、藍がいるー……」

走り出してすぐ、確認のために背中に向かって話しかけると、力の無い声が返ってきた。

「というか、大丈夫か？」

「うんー」

「まだ寝ないでくれよ……？」

「ん、がんばる……って、さすがに寝ないわよ？」

「あれ？ そうだよな」

……何を言ってるんだろう、俺。

走り出して数分後、空門の家の前に到着すると、呼び鈴を鳴らす前に藍が飛んで出てきた。

バイクに乗って、少し風に当たったのが良かったのか、蒼はさつきよりは具合が良さそうだった。

少し休んだら良くなるわよー。とか、藍と話しているのが聞こえたり、そこまで気にしなくても大丈夫かもしれない。

藍からお礼を言われた後、俺は再びバイクを走らせ、加藤家へと帰宅した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー」

バイクをガレージに入れて、加藤家の門をくぐる。居間に行くと、夏海ちゃんが二人分の水筒を用意してくれていた。

「羽依里さん、おかえりなさい」

夏海ちゃんはその水筒に、やかんから冷たい麦茶を注いでくれた。
た。

「麦茶まで準備してくれたの？　ありがとう」

「えへへ、これで準備は万端ですよ！」

道中にかぶるつもりなんだろうか。夏海ちゃんは麦わら帽子まで用意していた。

すごく楽しみなんだろう。夏海ちゃんはものすごくテンションが高かった。

「ごめんくださーい！」

その時、玄関から声がした。

「はーい！」

二人揃って玄関に出てみると、そこには鴎と紬が居た。

「やつほー、羽依里」

「ナツミさん、こんにちわですー！」

「あれ、二人ともどうしたの」

「なつちゃんたち、もうキャンプの準備終わった？」

「はい。ちょうど今終わったところですけど」

「じゃあさ。お菓子、買いに行かない？」

「え、お菓子ですか？」

「そう！　せっかくキャンプに行くんだし、おやつは必須だよね！」

そういうえば、ラジオ体操の時にそんな話をしていた気がする。

「もし、遭難した時には非常食にもなるしー！」

ちよつと、縁起でもないこと言わないでほしい。

「それじゃ、さっそく行こう！」

鴎は夏海ちゃんの手を取って、今にも外に連れ出さんとしている。

「あ、鴎さん、ちよつと待ってくださいー！」

「え。どうしたの？」

鴎が手を離れた拍子に、夏海ちゃんはぱたぱたと自分の部屋の方に戻って行ってしまった。

「なんだろうね」

鴎が首をかしげていると、すぐに夏海ちゃんが戻ってきた。

「鷗さん、お借りしていた本です！」

戻ってきた夏海ちゃんの手には、三冊の本。もしかしくなくても、ひげ猫団の冒険だった。

「え、もう読み上げちゃったんだ!？」

「はい！　すごく面白かったです！　ありがとうございます！」

夏海ちゃんは深々と頭を下げながら、鷗に本を返す。

「それじゃキャンプの間、たっぷり感想を聞かせてほしいな！」

「はい、わかりました！」

鷗はスーツケースを開けて、その中に三冊の本をしまう。

「それじゃ改めて、駄菓子屋さんにしゅっぱーっ！」

その後、四人で駄菓子屋に向けて出発した。

駄菓子屋へ向かう道中、気になったことがあったので聞いてみた。

「そういえば、静久は？」

「一度家に帰って、準備をしてくるそう。お昼前の船で、また来るそうです」

ということとは、今は本土に帰っているわけか。

静久は俺たちと違って、色々準備も大変そうだな。

「それよりカモメさん、タカハラさんにあの話をしなくていいんですか？」

「え」

袖に話を振られて、急に鷗の目が泳ぎ始める。

「もう、ツムツム、そう言う話はまた別の機会に……」

「そんなことではいけません！　うじもじしていると、すぐに夏休みは終わってしまいますよ！　女はドキョーですよ！」

え、度胸？　一体何の話だろう。

「えーっと、羽依里。その、デ、デートの件なんだけど」

「え、ああ」

何かと思えば。昨日の水鉄砲大会の副賞だっけ。

「明日はまだキャンプだから……明後日はどう？」

「ああ、いいぞ」

特に予定はないし。

「つ、都合悪くなったら言っただけ」

「大丈夫だとは思っただけ」

「もし明後日が駄目でも、明々後日があるさ」

「なんというか、ポジティブな奴だ」

「待ち合わせの時間と場所なんだけど、港に朝九時でいいかな」

「構わないぞ。でも港に集合ってことは、鷗も本土に行きたいのか？」

「ううん。島に行きたいの」

「え、すでに島にいると思うけど」

「そうじゃないよ。近くの別の島に行きたいの」

別の島？ よくわからないけど、鷗が行きたいと言っただけなら任せよう。

「でも、どうやって行くんだ？」

「あのね、マリンジェットを借りたんだけど。羽依里、確か運転できるよね？」

「ああ。できるぞ」

確か今年のゴールデンウィークに、マリンジェットが運転できる男はモテると良一に言われて、無理矢理免許を取らされたんだっけ。

「確かマリンジェットも、良一が持っていたな」

「できたら、大きいのが借りたんだけど。スーツケースも乗せたいし」

その辺は、本人に聞いてみないとわからない。

「また後で良一に聞いてみるよ」

「うん、よろしくね！」

そんな話をしているうちに、駄菓子屋に到着した。

「いらっしやいませ」

駄菓子屋には藍しかいなかった。というか、店番のくせにチューベを食べていた。

「あれ、あおちゃん居ないんだ」

「ちよつと体調不良です」

「え。大丈夫なの？ 今日にはキャンプがあるのに」

「大丈夫だとは思いますがよ。念のために午前中はゆっくり休むと言っ
ていました。蒼ちゃんも、キャンプは楽しみにしているみたいです
し」

確かに、蒼もバイクから降りた時は、だいぶ体調良さそうだったし
な。

「それに、蒼ちゃんが本当に悪ければ、私もバイトに来ていませんよ
それもそうだ。藍のことだし、つきつきりで看病するだろう。

裏を返せば、大したことないのかもしれない。

「それで、今日はどうしたんですか」

「あ、そうそう。キャンプ用のおやつを買いに来たの」

「おやつを買うのは構わないですが、金額は300円までですよ？」

「え、そんなルールがあるのか？」

「当然です。300円を超えた場合は、イナリの刑ですよ」

「ええー！」

鴟と夏海ちゃんがショックを受けていた。だからイナリの刑って
何。

「むぎぎぎぎぎぎぎ……300円までなら、パリングルスが一本、パリングル
スが二本……」

紬もその話を聞いてから、両手にパリングルスを持って、ぶつぶつ
言ってる。まるでトイレのむぎゆ子さんだ。

「とりあえず、おやつを選ぼうかな」

俺たち四人はそれぞれ店内に散らばり、駄菓子とにらめっこする。

「えーと」

俺はぎつと駄菓子のラインナップを見てみた。

一本10円のうんまい棒や、20円の酢昆布、そして5円チョコに
10円チョコに100円チョコ。

フライダーポテトやビックリンガムに代表される30円スナック、
チョコビックリバーやイカラーメンに代表される60円スナック、そ
して90円のネタもの。

そして金額では群を抜いている、250円のブルジョワチョコ。こいつらを上手い具合に組み合わせるのがコツだ。適当に選ぶだけじゃ、良いチームは作れない。

目指すはマンチエストーシティーか、リアル・マダリードのような名門チームだ。

「まずはワタアメははずせません！」

「そうですね！」

少し離れたところで、紬と夏海ちゃんが二人で楽しそうにお菓子を選んでいた。ここは邪魔しないでおこう。

「うーん、まずは三角形の秘密でしょ」

鴉は俺の隣で、好きなお菓子を選んでいった。

確か三角形の秘密はネタもの扱いで、90円のはずだ。

「後はこのチョコかなー」

次に鴉が手を伸ばしたのは、250円のブルジョワチョコだった。

「鴉、ストップ」

「え。いいじゃない。食べたいんだから」

「違う。すでに300円を超えたぞ」

「あ、ほんとだ」

「超えたらイナリの刑ですよ？」

速攻で金額が超えたのを見て、カウンターの方から藍が睨みを利かせてくる。すごく怖い。

「うー、食べたいんだけどなあ」

鴉はしぶしぶブルジョワチョコを棚に戻す。

「食べたいんだけどなあ」

もう一度言っていた。その後も余程末練があるのか、鴉は三角形のお菓子とブルジョワチョコを交互に見ながら、メトロノームのように揺れていた。300円という上限の関係で、どちらか片方しか選べないのが悩ましいらしい。

……なんというか、可哀想になった。

「仕方ない。俺がチョコを買ってやるよ」

「羽依里、ありがとう！」

俺はブルジョワチョコを手に取る。パッケージを見ると『神戸小鳥シヨコラ』と金色の文字で書かれていた。でも駄菓子屋で250円とか、明らかに子供が手を出せる金額じゃないよな。

鴟が喜んでくれたのは良いけど、これで俺の残金は50円になってしまった。こうなると選手選択の余地はほぼなく、30円のスナック菓子一つと、5円チョコ4枚で手を打つしかなかった。

地方クラブが奮発して目玉選手を取ったのは良いものの、すぐに負傷して長期離脱された感じだ。

「それじゃ、私はこれとー」

鴟は笑顔で別のお菓子を選んでいった。見ると、三角形の秘密が2つに増えていて、後はチョコだらけだった。この暑い中、溶けないといけど。

「ありがとうございました」

俺たちが会計を終えると、すぐに夏海ちゃんと紬も会計を終えて駄菓子屋から出てきた。

「紬や夏海ちゃんも終わった？」

「はいー」

「終わりました！」

二人は笑顔で袋の中身を見せてくれた。

紬の袋は予想通りというか、パリングルスとワタアメが詰まっていた。すぐくかさばりそうだった。

夏海ちゃんは60円のスナック菓子をつとっくに、30円のグミやガムが両脇を支え、酢昆布に5円チョコと、良い感じのメンバー選考だった。

「どうですか？」

「うん。FCバレソウナみたいだね」

「え、なんですかそれ」

「なんでもないよ。バランスよく選んだね」

「えへへ。皆さんで分けて食べましょう！」

すごく嬉しそうだった。見ているこっちも笑顔になりそうだ。

「あ、そうだった。花火も買わないと！」

買ったお菓子をスーツケースにしまいが早いか、鴉は再び店の中に戻っていった。

「鴉、またスーツケース花火にするのか？」

「失礼な！ 今度は違うよ！」

俺もそんな鴉を追って、再び店内に入る。鴉は手持ち花火をいくつか選んでいた。

そういえば、火をつけるのに必要になりそうだし、チャツカリマンも買つていこうかな。

その後、鴉が花火を買い終えるを見届けてから、その場は解散となった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅すると、ちょうどお昼時だった。俺たちは適当なカツプうどんをチョイスして、お湯を注ぐ。

「今日は変わったうどんですね？」

完成したうどんを見て、夏海ちゃんが不思議そうな顔をしていた。

「けんちんうどんだったってさ。東北地方のご当地うどんだったってさ」

うどんのパッケージには『ご当地うどん・東北編！』と大きく書かれていた。

人参や厚揚げ、ゴボウ等の具材がたっぷり入った味噌ベースのうどんだった。

「美味しいですねえ」

味は良かったけど、俺としては心なしか麺の量が少なかった気がする。具だくさんな分、コストの問題だろうか。

でも、スタミナがついたような気がした。

昼食後、荷物を持って役所前に集合する。

「お、来たな」

「二人が最後だぞ」

「遅いわよー」

「ポポーン！」

役所前には、既に俺たち以外の全員が集まっていた。中には蒼やイナリの姿も見える。

「蒼、体調はいいのか？」

「大丈夫よー。ごめんね、心配かけて」

麦わら帽子をかぶって、笑顔だった。顔色も変わりないし、心配ないみたいだ。

「いや、大丈夫ならそれでいいんだ」

「もし蒼ちゃんが気分悪くなったりしたら、私が背負ってでも連れて帰ります」

そう言う藍は真顔だった。ごめん藍、冗談に聞こえないんだけど。「あおちゃん、もし気分悪くなったりしたら言ってね。薬とかも持ってきてるから」

鴎は例によってスーツケースを持っていた。

「鴎、やっぱりそのスーツケース持って行くんだよな？」

「もちろん！」

「重くないか？」

「大丈夫！ 変速ギアに電動アシストもついた、マウンテン仕様にしてあるー！」

まるで自転車みたいだった。

「まあ、お前が良いって言うならいいけどさ」

「パツと見だと、鴎の方が俺たちより荷物持ってそうだな」

そう言うのは、一際大きなリュックを背負った良一と天善だ。

「なあ二人とも、食材やキャンプ用具、良かったら持つぞ？」

「気持ちだけでもらっておくぜ。キャンプ用品の中には、扱うのに専門知識がいるのもあるしな」

「俺も気持ちだけでもらしておく。一度言ったが、これは凄いトレーニングになるんだ」

なんだかんだと理由をつけて、断られてしまった。

「そうだしろは、荷物持ってやろうか？」

「ううん。いい」

そのままだと引っ込みがつかないので、しろはに声をかけてみただと、こっちもきつぱりと断られてしまった。

「せっかくだし、しろはちゃんもパイリ君に荷物持ってもらったらいいのに」

「そですよ！ 彼女さんですし、良いと思います！」

「でも、そこまで重くないし。必要な物しか入ってないから」

「それならいいけどさ……」

静久や紬の援護射撃も、効果はないみたいだった。

「はあ、タカハラさんはカイシヨーナシですね」

なんだろう。紬にそれを言われると、すごく傷つく。

「あー、話に水を差して悪いが、全員揃ったところで、ルートの確認をしたいんだが」

その時、皆と同じように麦わら帽子を被ったのみきが声を上げる。

「ああ、これだよ」

良一は一枚の地図をのみきに手渡していた。

「島の南側に向かって道なりに進むのか。ちょうど、山を迂回する感じだな。皆も見てください」

その地図を広げ、のみきが皆に説明をしてくれる。

「だいたい1時間半くらい歩いてから横道に逸れて、そこから30分ほど山道を進めば、入り江に辿り着ける予定だ」

良一によると、どうやら途中まではそれなりに舗装された道が続いているらしい。

「うむ。島の南側には採石場があつて、普段は立ち入り禁止なんだが……山を迂回するこのルートなら、まあギリギリセーフだろう」

自警団の団長から許可も出たことだし、出発の準備が整った。

「よし、それではしっかりと列を組んで出発するぞ」

「はいー」

なんだろう。鷗がやる気満々だった。冒険っぽいし、楽しみなんだ

ろうか。

良一とのみきの二人を先頭に、二人一組で列を作る。

先の二人の後ろに紬と静久、藍と蒼が続いて、鴟と夏海ちゃん、その後ろに俺としろは。しんがりにはイナリと天善が務めていた。

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

鴟の号令を合図に、皆で並んで舗装された道を進んでいく。

時々海風が山のすそに沿うように通り過ぎるので、それなりに風はあった。

でも、一番暑い時間帯だし、雲一つない快晴だ。頭が暑かった。俺はたまらず持っていたタオルを頭に巻いて、帽子代わりにした。

女性陣は皆麦わら帽子をかぶっていた。俺も何か持つてくればよかった。

「わかるよー。やっぱり、海賊船を手に入れて、大海原に漕ぎ出すシーンが一番だよねー！」

「はい！ あのシーンは胸熱でした！」

一方、前の方では鴟と夏海ちゃんが本の話題で盛り上がっていた。

「前の二人、すごく楽しそうに話してるね」

しろはも麦わら帽子をかぶっていた。これまた似合っている。

「ところでしろはのリュックは何が入ってるんだ？」

さつきからしろはが歩くたび、かちやかちやと音が聞こえる。

「藍から言われた通り、タオルと着替え、それに水筒と調理道具」

「うんうん」

さすが、藍はしっかりと伝えてくれたみたいだ。

「あと、四文字熟語辞典」

「え、四文字熟語辞典？」

「うん。藍がいるって言ってたけど」

「いや、辞書なんてキャンプじゃ絶対使わないだろ」

「よく考えたら、確かにキャンプと関係ないかも。支離滅裂だね」

藍も冗談で言ったんだろうけど、しろはもそれに気づかなかったん

だろうか。

「きつと藍、前の方で捧腹絶倒してるね」

「まんまと騙されたな」

「無駄に重いし……切齒扼腕だね」

しつかりと四文字熟語を勉強しているらしかった。

「よし、ここで一度休憩にしようぜ」

1時間ほど歩いた頃、少し広めの空き地があったので、良一の提案でそこで休憩を取ることにした。

「もう少ししたら、山道に入るからな。しつかり休もうぜ」

各々、適当な日陰に腰を下ろして、持ってきていた水筒の水を飲む。

「羽依里、チョコレートあげる」

鴉が用意していたおやつの中から、ブルジョワチョコを皆に配っていた。上品な甘さが、疲れた体に染みわたる。

「それにしてもこのチョコ、これだけ暑い中でよく溶けてなかったな」「ブルジョワだからね！」

まったく理由になって無かったけど、そういうことにしておいた。

「羽依里さん、私のお菓子も食べませんか？」

「わたしのワタアメもどうぞ！」

夏海ちゃんや紬からも、お菓子をもらってしまった。なんだか懐かしい。子供の時の遠足を思い出した。

「よし、ここから少し山道に入るぞ」

休憩をはさんで少し歩くと、先頭に行く良一は舗装された道を逸れて、山の中へと入っていく。

「距離は短いけど、ご覧の通りの道だからな。足元に気をつけてくれよ」

かろうじて道らしいものがある。けもの道ってこんな感じなんだろうか。

ここからは結構大変かもしれない。こういう道を通ってこそその、

キャンプだけど。

「うう、疲れた……」

しばらく山道を歩いていると、俺の前に行く鴫の歩みが遅くなってきた。

スニーカーはマウンテン仕様でも、本人はノーマル仕様だったみたいだ。

「羽依里、押してあげて」

それを見かねたしろはが、俺にそう提案してきた。

「それが良さそうだな。鴫、乗れ」

「ごめん。ありがとう」

いつもの流れで、鴫にスニーカーに乗ってもらい、俺が押すことにした。

悪路のはずなのに、なんだかんだでスニーカーは動かしやすい。本当にマウンテン仕様みたいだ。

「快適、快適」

さつきまでの疲れた顔はどこへやら。鴫は笑みまで浮かべていた。

「あ、なっちゃんも乗る?」

「い、いえ! 今日は大丈夫です!」

例によって他の人をスニーカーに誘っていた。押すのは俺なんだけど。

「それじゃ、しろしろが乗る?」

「えっ、何で私?」

「さつきから歩きにくそうにしてるし」

ああ、きつと例の四字熟語辞典が無駄に重たいんだろうな。

「乗ったら、羽依里が押してくれるよ?」

「そ、それじゃ……少しだけ」

しろははちよつと悩んだ後、鴫のスニーカーにゆっくりと腰を下ろす。

「羽依里、大丈夫? 重くない?」

「いや、全然大丈夫だぞ」

さすがに夏海ちゃんが乗ってる時よりは重いけど、それでも動かさない重さじゃない。マウンテン仕様万歳だった。

「呉越同舟」

「え？　しろしろ何か言った？」

「ううん。なんでもない」

その四文字熟語、どういう意味だったっけ。まあいいか。

その後も、がらがらとスーツケースを押す。なかなかの悪路だし、他の皆もけっこう疲れてしまっているみたいだ。歩くペースが遅くなり、無言になる時間も増えてきた。

「きみといっしょーなーらー♪」

その時、スーツケースに乗った鴫が突然歌いだした。

「え、いきなりどうしたの？」

隣に座っていたしろはが驚きの声をあげる。

「ただ押しでもらってるのも悪いし、せめて歌でもうたって皆を元気づけようかと思って」

「そ、そう」

「うん！　しろしろも一緒に歌わない？」

「い、いいよ。私、歌下手だし」

全力拒否していた。確かにしろはが歌ってるところは見たことないけど。

「それじゃ、私が代わりに一緒に歌います！」

そして隣を歩いていった夏海ちゃんが、しろはの代わりに鴫と一緒に歌いだした。

「君と一緒になーらー世界のどこにでもー♪」

「いけるー♪　いけなくてもいいー♪」

なんとというか、不思議と元気の出る歌だった。

「そうよ紬、私たちも歌いましよー」

「そうですね！」

時を同じくして、前の方では紬と静久が島の童謡を歌い始めていた。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

二か所で別々の歌を歌うものだから、歌が混ざって、なんとも力才スな状況になってしまった。

まあ、これはこれでいいか。皆の疲れも吹き飛びそうだし。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よし、到着だ」

最後に草やぶを抜けると、目の前に白い砂浜と青い海が広がっていた。

「……すごいな」

「ここが七ヶ浜。この島に、こんな場所があつたなんて。凄い景色だ。」

「おおー、きれいな海です！」

「すごいわねー」

他の皆も思い思いの場所に散らばって、その景色を眺めていた。

「山の間から、ここに抜けれちゃうんですね。驚きました！」

「ふっふっふ。俺しか知らない道ってやつだ」

喜ぶ夏海ちゃんに対して、良一は得意顔だった。

「向こうを見てください。洞窟がありますよ」

「え、洞窟？」

藍に言われた方を見てみると、確かに小さいながら洞窟があつた。

「なんだこれ。入れるのかな」

「その洞窟は立ち入り禁止だぞ。私有地なんだ」

俺たちがその洞窟の周辺に集まっていると、のみきがそう釘を刺す。

「え、私有地ってどういうこと？」

「言葉の通りだ。この洞窟は、とある会社が保有している採石場に繋がっている。厳密に言くと、この入り江も私有地なんだぞ」

「それじゃあ、勝手に使ったら悪いんじゃないのか？」

「心配するな。今回は特別に許可をもらってある」

「おおー、それなら安心ですね！」

のみきの言葉に、俺たちも安堵する。

「普段なら入り江に会社の船を停泊させているそうだが、今はその船も別の場所に移動させてくれているらしい」

なるほど。採石場に繋がっているなら、ここから船で資材を運び込んだりしているのかもしれない。

「今日と明日、入り江は好きに使ってくれて構わないそうだ。ただし、この洞窟にだけは立ち入らないようにと、社長直々に通達があった」
洞窟は入り組んでて危ないだろうし、社長からそう言われてる以上、無理に入る必要もないよな。

「後、娘をよろしくお願いします。ともな」

なんだろう。のみきは笑顔だけど、最後の一言はよく意味がわからなかった。

「……あれ？」

そういえば、今洞窟を見ている皆の中に、鷗の姿が無かった。

輪の外を見ると、鷗は少し離れた場所で一人、海の方を見つめていた。

「……鷗、どうした？」

何故か鷗がそのまま消えてしまいそうに感じて、俺は慌てて声をかけた。

「……えっ？」

鷗もぼーっとしていたのか、虚を突かれたような返事をしてきた。
午前中の蒼じゃないけど、日射病にでもなったんじゃないだろうか。

「大丈夫か？」

「うん。ちょっとぼーっとしちゃって。なんでだろうね」

「しつかりしてくれ」

「ごめんごめん。でも……なんだかこう、モヤモヤする」

「そうなのか？」

「羽依里はそんなことない？」

「俺は別にそんなことは……」

「……バイバイ。」

あれ？　なんだろう今の。

一瞬、声が聞こえた気がした。

でも、それは俺の記憶から零れ落ちる様に消えてしまった。

「ちよ、ちよつと羽依里？」

「え？」

気がつけば、俺は鷗の肩を抱いていた。まるで、どこにも行ってほしくないみたいに。

「あ、悪い」

「わ、私は別に良いけど、しろしろに見られたら怒られるよ？」

「そ、そうだな」

お互いに微妙な空気になって、俺は手を離す。

でも、そのまましばらくの間、鷗と一緒に青い海を眺めていた。

まるで、忘れた何かを思い出そうとするかのように。

第二十二話・完

第二十三話 8月14日（後編）

「おい二人とも、こっちに来てくれー」

しばらくすると、良一から声をかけられた。

鷗と二人で声のした方を見ると、その良一を中心に皆が集まっていた。俺たちも慌ててその輪に加わる。

「それじゃ、キャンプの役割分担を発表するぜ」

良一は手にメモを持っていた。移動中もそうだったけど、このキャンプは良一がまとめ役をやってくれているようだった。

「まず、俺と羽依里はテントの組み立てだ」

良一が指差す先には、丸まったテントが六つ置かれていた。これを二人で組み立てるんだろうか。

「天善は飯を炊いたりするのに使うかまどを作ってくれ」

「わかった。石はそこら中に落ちているからな。本格的な物を作つてやろう」

「天善、かまどを作ったことあるのか？」

妙に慣れてる風に聞こえたので、思わず聞いてみた。

「山籠りの時に必要になることもあるからな。10分もあればできるぞ」

そんな簡単にできるのか。俺は作り方すら知らないけど。

「藍と蒼はバーベキュー用の炭をおこしてくれ。うちわや着火剤もあるから、好きに使ってくれていい」

「りょーかい」

「天善ちゃんに指示をされるのは不本意ですが、仕事を任されたからには頑張ります」

炭おこしの役を引き受けた空門姉妹は、組み立て式のバーベキューコンロと炭が置かれた場所へと歩いて行った。

「しろはと夏海ちゃんは、食材の下ごしらえを頼む。肉はクーラーボックスの中、野菜や調味料は俺と天善のリュックの中に入ってる

ぜ」

「わかった」

「はい！・頑張ります！」

夏海ちゃんも役目を貰えたのが嬉しいんだろう。小走りで食材の方へ向かっていった。

「残りの皆は米を洗って飯ごうに入れて、いつでも炊けるように準備しておいてくれ。水はそのペットボトルを使ってきていい」

「任せておいて！ のみきさん、行こう！」

「ああ」

「紬、頑張りましょう」

「はい！・妖怪お米洗いになります！」

全員に仕事が割り振られ、各々の場所へと散っていった。キャンプって普段やり慣れない事ばかりだけど、こうやって皆で協力してやるから楽しいんだよな。

「よし。やろうぜ、羽依里」

皆が持ち場についたのを確認して、俺と良一はテントの組み立てを始めた。

目の前には、丸くたたまれたテントが置かれていた。それぞれ黒、白、緑、赤、青、ピンク色をしている。

「並べてみると、結構な数だな……」

二人で組み立てたら、それなりに時間がかかりそうだ。

「最初は教えてやるから、一緒に作ろうぜ。どのテントも作りは同じだし、一度やれば覚えられるはずだ」

「わかった。よろしくな」

「おう。期待してるぜ、羽依里」

俺と良一はまず、白いテントを一緒に組み立てることにした。

「この辺に立てるのか？」

「いや、もう少し上の方だな。ここだと波が来る危険性がある」

「え、そうなのか」

見た感じ、波が来そうな感じはしないけど。

「一見安全そうに見えても、潮の満ち引きの関係もあるしな。この浜辺だと、あの流木より上が安全地帯だ」

良一からそうレクチャーを受けて、テントをその安全地帯まで移動させる。

「夜になって急に波が荒くなったり、風が強くなったりな。海辺でのキャンプはポピュラーに見えて、実は難易度が高いんだ」

手際よくテントの骨組みや布を地面に並べながら、良一がそう続ける。

「だが、そういう状況だからこそ、燃える」

なんだろう。良一がすごく頼もしく見える。

「よし、始めるぞ。まず、その骨組みをこの穴に通すんだ。その後、反対側も通して、持ち上げる」

「ああ、こうか？」

「そうだ。この時、しっかりと交差する部分を止めておかないと、風が吹いたりしたらバランスが崩れて倒れる危険がある」

「わかった」

「あとは杭打ちだが、普通の杭だとこういう砂地だと抜けやすくなる。そこで、これだ」

そう言いながら良一が取り出したのは、大きくて幅の広い杭だった。

「サンドペグって言ってな。砂地専用の杭なんだ」

「そんな便利なものがあるんだな」

「ペグの摩擦を大きくして固定力を上げるんだ。これでダメだったら、砂袋を使って固定する。そのための袋も持ってきてるから、必要そうだったら言ってくれ」

「なるほどな。勉強になるよ」

「……よし、これで完成だ」

良一の指示を受けながら作業をしていたら、あっという間にテントが完成してしまった。四人用テントらしく、結構な大きさだった。

「次の黒いテントは羽依里一人で組み立ててみな。完成したらチェツ

クしてやるからさ」

「わかった。やってみる」

「さっきのテントとは色違いなだけだから、組み立て方は同じだぜ」

良一はそこまで言っつて、別のテントを立てに向かった。

「よし、やるか」

俺は良一に教わったことを反芻しながら、テントを組み立てていった。

「よし、できた」

特に詰まるようなこともなく、テントが完成した。たぶん、こんな感じで良いと思うけど。

「……あれ？ でも、なんか小さいような」

少し離れて全体を見てみると、なんかテントが小さい気がする。

「ちよつと良一に聞いてみようかな」

良一に声をかけにいくと、既に赤と青、そしてピンクのテントを完成させていた。さすがの手際だった。

「あれ、その赤と青のテント、やけに小さいな」

「これか？ これはトイレ用のテントだ」

「そんなものもあるのか？」

「今回みたいに、トイレの確保が難しい場所で使用するためのテントだ。青が男用、赤が女用な」

さすがはテントコレクター。しっかりと準備されていた。

「ところでどうした？ 任せておいたテント、もうできたのか？」

「ああ、できたことはできたんだけど……」

俺は良一を連れて、黒いテントの所へ戻ってきた。

「本当だな。やけに小さいな」

「なるべく良一とやった通りに組み立てたはずなんだけど、どこか失敗してるのかな」

「いや、見た感じそんな失敗してる風には見えないんだけど……」

良一が黒いテントを調べ始める。話では、白いテントと同じ大きさ

のはずだけど、これはどう見てもその半分しかない。

「あ。あー、そういうことか。しまったな……」

テントを調べていた良一が、そう言っ頭を抱え始める。

「やっぱりどこか失敗していたのか？」

「いや……違う。これは俺のミスだ。どうやら間違えて、同じ色の小さいテントを持ってきちゃったみたいだ」

「え、そうなのか」

「……これ、男用のテントの予定だったんだけどな」

良一が困った顔をしている。確かにこのサイズでは男三人が寝るのはきつそうだった。

「うーん。しかし、今更どうしようもないよな。とりあえず、最後のテントも立ててしまおうぜ」

「そ、そうだな」

今更別のテントを用意できるわけでもないし、俺たちは小さなテントの問題は棚上げにして、緑のテントを組み立てることにした。

このテントも白いテントと基本は同じで、サクサクと組み立てることができた。

「ふう。これで完成だな」

全てのテントを組み立て終わると、良一は一休みすると言ってどこかへ行ってしまった。

一人残された俺は、他に手伝えることがないかと浜辺を見渡す。

「お」

見ると、少し離れたところに立派なかまどができていた。さすがは天善だな。

ちなみに、その近くには飯ごうが並べられていた。お米の方も準備万端らしい。

「あと、残ってそうな仕事はというと……」

俺は視線を巡らせる。すると、バーベキューコンロの周りで四苦八苦している空門姉妹の姿を見つけた。

「よいしょ。よいしょ」

どうやら炭おこしをしている最中らしい。椅子代わりの流木に座りながら、火のついた炭をうちわで扇いでいた。すごく、暑そうだった。

手伝いに行こうと思つて少し歩を進めると、その二人の話し声が聞こえてきた。

「それにしても、炭おこしって思つた以上に大変よねー」

「そうですね。なんだかんだで暑いですし。夏には拷問です」

「なんかこう、良いやり方がないものかしら」

俺の姿に気づいていないのか、蒼は空いてるほうの手で胸元をパタパタやつてた。み、見なかったことにしよう。

「二人とも、首尾はどうだ」

その時、天善がそんな二人の様子を見にやってきた。かまども完成しているし、手持ち無沙汰なんだろう。

「もうちよつとだと思ふんだけどねー。風が足りないのかしら」

「思いつきり強く風を送らないと、なかなか上手くいかないものだぞ」

「さつきからやってるんですが、二人がかりでこれですよ」

藍が額の汗をぬぐいながら、うちわを動かす。どうしても女の子だと風の勢いが足りないみたいだ。

「あ。そうだ天善、このうちわを持って素振りをする、空気抵抗があつて凄いトレーニングになるわよ?」

「なに、本当か?」

「試してみない?」

「よし、うちわを貸してくれ」

天善は蒼からうちわを受け取つて、バーベキューコンロの前で素振りを始める。

「ふーっ! ふーっ! ふーっ!」

「おー、すごい風ね」

「いい感じに炭に風が当たっています。これなら、すぐに炭おこしできるとは思いませんか?」

藍も扇ぐ手を止め、天善の素振りを見ている。

「ふーっ！ ふーっ！ ふーっ！」

「ふーっ！ ふーっ！ ふーっ！」

「……ねえ。これもう、あたしたちがやることないんじゃない？」

「……本当ですね。蒼ちゃん、向こうの日陰でちよつと休憩しましよ
う」

「そうねー。ちよつとお茶でも飲もうかしら」

そんなことを話しながら、二人は近くに置いてあった水筒を持つて、向こうの木陰の方に行ってしまった。

「ふーっ！ ふーっ！ ふーっ！」

天善はその様子に全く気付いてないらしく、一心不乱に素振りを続けていた。頑張れ、天善。

全力でトレーニング……じゃない、炭おこしをしている天善に別れを告げ、俺は食材の下ごしらえをしているしろはと夏海ちゃんの方に行ってみた。

「しろはに夏海ちゃん、下ごしらえは順調？」

「むー……」

「……あれ？」

しろはは大量の食材を前に唸っていた。見た感じ、下ごしらえは終わってるみたいだけど。一体どうしたんだろう。

「うーん。ないです。ないですよー」

近くにいる夏海ちゃんもリュックサックをひっくり返して、何かを必死に探している様子だった。あのリュック、良一のだけ。

「二人とも、どうしたの？」

「あのね、野菜が全然ないんだけど」

「え、足りなかったの？」

「ううん。全然入ってないの。あったのは、お肉とお米だけ」

「え、なにそれ」

どういうことだろう。野菜は確か、良一が担当していると聞いたけ

ど。

「お、どうした?」

休憩を終えたのか、ちょうど良一がこっちにやってきた。

「実はさ……」

俺は良一に、食材の中に野菜が入って無かった旨を伝える。

「え、そんなはずは……」

良一は夏海ちゃんからリュックサックを受け取って、中身を確認する。

「本当にないな……まさか、忘れたのか……」

良一はリュックサックを地面に置いて、がっくりとうなだれる。

「道中、なんかリュックサックが軽いと思ってたんだよな……」

ものすごい凹みようだった。それだけ準備に自信があっただろう。

「ねえ、どうかしたの?」

「ミタニさん、問題発生ですか?」

俺たちの様子に気が付いたのか、他の皆も続々と集まってきた。

ほどなくして、良一の失敗は他の皆知ることとなってしまった。

「ええー、お肉しかないの!?!」

「最悪ですね」

鴉はショックを受け、藍は怒りのあまり良一を睨んでいた。

「お肌とおっぱいのためには、野菜は重要なよ」

静久は意味ありげに、そう呟いていた。お肉も重要そうだけど……いや、深くは考えないようにしよう。

でもやっぱり、肉と米だけの夕食ってのは女性陣にはきついかもしれない。

「シロハさん、パリングルスのハニークリームオニオン味では野菜代わりにならないでしょーか」

紬は自分のリュックから緑色のパッケージのパリングルスを取り出していた。おやつに持ってきたやつだろうか。パリングルスの原材料は一応野菜だけど、抜本的な解決にはならないと思う。

「ありがとう舩、気持ちだけもらっておくね」

しろはも丁重に断っていた。

「そうだ。この辺に食べられる野草とか生えてないのかな？」

俺はそう言っつて、比較的草が茂っているところを見てみる。

「ほら、これとか」

「それ、アサガオだよ」

しろはは呆れ顔だ。言われてみれば、確かにアサガオだった。

「朝顔のタネには毒があるのよ。花は食べられない事もないけど、専門知識もなしに食べるのは危険ね」

静久がそう言う。言われてみれば、何かのテレビで『乾かして嚙まなきゃ平気！』みたいなことを、髪長い自称敏腕庭師の女の人と言っつていたような。

なんにしても、さすがに野草を食べるのは無理そうだった。

「いざという時のために、釣り竿を持ってきておいてよかった」

天善はそう言いながら、リュックから釣り竿を引っ張り出していった。ここは天善の腕を信じるしかなさそうだ。

……その時、遠くの方から船のエンジン音が聞こえてきた。

「え、船？」

「しーーーーろーーーーはーーーー！」

聞いたことのある声だと思っつたら、もしかしなくてもしろはのじーさんだった。

「おじーちゃん!？」

思わず走り出したしろはに続いて、俺たちも波打ち際まで走り寄る。

しろはのじーさんは巧みな操船技術で、座礁しないギリギリの位置まで船で近づき、碇を下ろす。

そして大きな袋を二つ持った格好で、浜辺に飛び降りてきた。

「お前たちに、これを届けに来た」

じーさんから渡された一つ目の袋には、たくさんの野菜が入っつていた。

「おおお、この野菜は」

袋の中身を見た良一が歓喜の声を上げていた。その喜びようから、これが忘れてしまった野菜なんだろう。

「でも、どうしておじーちゃんがこの野菜を？」

しろはが当然の疑問を投げかける。

「たまたま役所の前を通りかかったら、三谷の子がこの袋を持って途方に暮れていてな」

三谷の子？　もしかして、良一の妹だろうか。

「話を聞けば、兄にこの野菜を届けに来たらしいじゃないか」

なるほど。兄が野菜を忘れたことに気づいて、集合場所の役所まで持ってきたけど、俺たちは既に出発した後だったと。

「そして役所にお前たちの行き先を聞いてみれば、七ヶ浜というじゃないか」

そういえば、キャンプの行き先はのみきが役所に届け出てくれたはずだ。役所に聞けばすぐにわかるよな。

「七ヶ浜ならば船で行った方が早いと、わしがその役を買って出たわけだ」

まさか、しろはのじーさんがお使いをしてくれるなんて。一年前だったらとても考えられない出来事だった。

「鳴瀬翁、手を煩わせてしまつてすまない」

「気にするな。どうせ、これも差し入れようと思つていたところだ」のみきがお礼を言った直後、別の袋が俺に手渡された。

中を覗いてみると、たくさんのエビやイカ、ホタテなどの魚介類が入っていた。

「聞いた話によると、バーベキューをするそうじゃないか。皆で食べるといい」

「おじーちゃん、ありがとう」

「ありがとうございます」

俺たちは口々にお礼を言う。

「礼などいい。どうせ、あまりものだ」

しろはのじーさんは照れ隠しのように後ろを向くと、そのまま船に

乗り込もうとする。

「あの、こぼとさんも一緒に食べませんか？」

「なに？」

その声をかけたのは夏海ちゃんだった。寝耳に水だったのか、振り返ったじーさんは驚いた顔をしていた。

まさか、誘われるとは思わなかったんだろう。

「……いや、若い者同士で楽しむといい。おいぼれは帰るとしよう」

しろはのじーさんはどことなく嬉しそうにそう言い、船に乗って帰ってしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、もらった魚介類や野菜を皆で手分けして下ごしらえし、バーベキューが始まった。

当初、肉だけのバーベキューを覚悟していたのに、しろはのじーさんのおかげで、色とりどりの野菜に加えて海産物までが並ぶ、豪華なバーベキューになった。

海に向こうに太陽も沈みかけているし、夕食にはちようどいい時間だった。たくさん動いた分、お腹も空いていた。

「ほいよ、夏海ちゃん」

「良一さん、ありがとうございます！」

良一が美味しそうに焼けたトウモロコシを一片と、数枚の肉を紙皿に盛って、夏海ちゃんに手渡していた。どうやら、良一が肉焼き係らしい。

「あつふ。あちち……」

夏海ちゃんはさっそくトウモロコシにかぶりついて……熱かったらしく、ふーふーと冷ましていた。落ち着いて食べなきゃね。

俺も焼けた肉やキャベツを紙皿にもらって、焼き肉のタレを絡めていただく。うまい。

「ナツミさん、おにぎりもありますよ！」

「あ、ひとつください！」

「どうやら、飯ごうで炊いたお米は、食べやすいように全ておにぎりにしたみたいだ。」

妖怪お米洗いから、おにぎり娘にランクアップしたらしい紬が、おにぎりを配っていた。

「紬、俺ももらっていいかな？」

「はい！ どうぞ！」

紬からおにぎりを受け取り、これも焼き肉のタレをちよつとつけて食べてみる。良い感じにおこげもついているし、美味しかった。

「紬、こつちにももらえるー？」

「はい！ もちろんです！」

蒼や藍もおにぎりを受け取っていた。どうやらおにぎり娘は大好評のようだった。

「ポンー」

イナリも蒼の足元で、特大の油揚げを貰って食べていた。さすがお稲荷様だった。

「おいふいいね〜」

鴉はそんな蒼たちの隣で、焼きたてのエビをほおばっていた。食べるか喋るかどつちかにすればいいのに。

「鷹原、悪いが焼き肉のタレを取ってもらえないか？」

「ああ、いいぞ」

ちようど俺の前にあったボトルを天善に渡す。もうタレがなくなったのだろうかと思っていたら、鉄網の上に置いたおにぎりにタレを塗って焼いていた。皆、色々と考えるな。

「パイリ君、このホタテ、もう焼けてるみたいよ。取ってあげましょうか」

「あ、それじゃあもらおうかな」

ホタテを紙皿に受け取ると、いい感じにバターの香りがした。

「おお、バター焼きだ。マーガリンじゃない。」

「でも、この時期にホタテとか獲れるのかな？」

「さあ？ あるんだから、獲れるんじゃないかしら？」

「静久とそんな話をする。ホタテというと、どうしても冬のイメージがあるんだけど。まあいいか。美味しそうだし。」

俺は詳しく考えるのをやめて、念願のバター焼きを堪能した。

「良一、焼き係代わるよ」

「おお。悪いな」

気がつくと、良一に代わって、しろはがトングを持っていた。

「いやしろは、ここは俺が代わるよ」

俺はしろはの隣に行つて、そう声をかけた。しろはもずっと食材の下ごしらえをしていたし、少しはゆっくりしてもらいたい。

「ダメ。羽依里は加藤家の血が流れてるし、火加減を間違えて焦がしちゃいそう」

「う……」

それを言われてしまうと、何も反論できない。

「でも、それだとしろはが食べられないんじゃない？」

「時々食べてるから大丈夫。それよりほら、羽依里も食べて」

「そう言つて、程よく焼けたイカやカボチャを紙皿に乗せられてしまった。」

「イカもカボチャも、タレはつけないほうがおいしいよ」

「言われた通り、そのまま食べてみる。イカは自然の塩味が効いて美味しかった。噛めば噛むほど旨味が出るし。」

カボチャもホクホクだった。自然の甘味が体に優しい気がした。

「はい、夏海ちゃん。ピーマン焼けたよ」

「え。私、ピーマンはその、あんまり得意じゃ」

「好き嫌いはダメ。大きくなれないよ」

しろはが笑顔で、夏海ちゃんの紙皿にピーマンを乗せていた。

「それ食べるまで、お肉はあげないからね」

「そ、そんなー……」

夏海ちゃんはがつくりとうなだれていた。もしかしなくても、ピーマン苦手なんだろうか。

「そうだぞ夏海ちゃん、好き嫌いは良くない」

うんうんと頷いているのはのみきだった。

「のみきにもピーマンあげるね。たくさん余っちゃってるから」

「あ、ああ。えっとその、ありがとう」

のみきは複雑そうな顔でしろはから焼きたてのピーマンを受け取っていた。上手く取り繕っているけど、のみきもピーマン苦手なかな。

「なっちゃんものみきさんも、災難だねえ」

「そう言う鷗も、紙皿にタマネギ残ってるけど？」

「え。これはあとで食べようと残してるだけで……」

「タマネギもたくさんあるから、いっぱい食べていいよ」

先程の二人と同じように、しろはは笑顔で鷗の紙皿に大量のタマネギを乗せていた。

「お奉行さま、ご勘弁をー！ー！」

「ダメ。しっかりと食べないと。礼儀だし」

しろはは鍋奉行ならぬ、焼肉奉行だった。これは自由奔放に焼いていた良一より、ある意味怖いかもしれない。

「……あれ？」

皆がバーベキューを楽しむ中、焼き係から解放された良一だけが、かまどの方で何やら作業をしているのが見えた。

ちょうどデザートで使うマリンジェットについて聞きたいこともあったし、俺は紙皿を持ったまま、かまどの方へ移動する。

「良一、何やってるんだ」

「お、ようやく気がついたか？ 飯を炊き終わった後くらいから、こっそりと準備をしていたんだ」

見ると、良一は中くらいの鉄鍋を火にかけていた。

「なんだこれ」

「シメを作ってるんだ」

「シメ？」

よくわからないけど、何か料理をしているらしかった。

鉄鍋の中身も気にはなつたけど、今はそれより大事な用事がある。「なあ良一、頼みがあるんだけど」

「お、なんだ？」

「明後日、マリンジエツトを借りたいんだ」

「ああ、いいぞ」

「できたら、大きいのがいい」

「大きいのなら、タンDEM型がある。親父のだけだな」

「借りてもいいのか？」

「ああ、構わないぜ。壊さないでくれよ」

「もちろんだ。ありがとうな」

快諾してもらえたし、これで一安心だ。俺は持ってきていた紙皿から、イカを一切れつまんで、口に運ぶ。

「それで、マリンジエツトで島にデートにでも行くのか？」

「うっぐ！ ごほごほ！」

凶星過ぎて、食べていたイカが変な所に入りかけた。

「……まさか、凶星か？」

「ち、違う。断じて違うぞ。むごっほごほ」

「まあ、使う目的は聞かないでおいてやる」

「そ、そうしてもらえると助かる。むごっほ」

「……よし、そろそろ良い頃合いだな」

良一はニカッと笑った後、何事もなかったかのように鉄鍋のふたを開け、四角くて茶色い物体を投入していた。何を入れたんだろう。すると、すぐに嗅ぎ慣れたスパイシーな香りがしてきた。

「あ、カレーか」

「ああ、キャンプと言えば、カレーだろ？」

確かにカレーといえば、バーベキューと並んでキャンプ飯の定番中の定番だ。

「よし、完成だな」

それから少し煮込んで、出来上がったみたいだ。

「やばい。めちゃうくちゃうまそうだ」

色々食べたはずなのに、この匂いを嗅ぐと食べたくなくなってしまった。

「何？ この匂い？」

湧き立つ香りが気になったのか、蒼たちがこっちの様子を見にやってきた。

「え、カレーなの？」

「おう。おにぎりも残ってるし、皆も食べないか？」

「もう結構食べちゃったんだけど、少し貰おうかしらねー」

「私も欲しいです！」

「私も食べたい！」

蒼に続いて、夏海ちゃんや鷗も飛んできた。二人とも、お奉行さまからは解放されたのだろうか。

「羽依里もどうだ？」

「ああ、貰っていいか」

「よしよし、たとえ食べ」

俺も別の紙皿にカレーを分けてもらって、おにぎりをつけて食べる。うまい。

このカレーにエビやイカを絡めてみても良さそうだ。なんちゃってシーフードカレーだ。

「三谷君、カレー作っていたの？」

「キャンプと言えば、定番だね」

「先のテントといい、人間何かひとつは取り得があるものだな」

「ミタニさん、いただいてもいいですか？」

「いいぞ。たくさん食ってくれ」

その後も皆がやってきて、良一のカレーを堪能した。

バーベキューの後ということで、さすがに全部は食べきれなかったけど、概ね好評のようだった。いかにもキャンプって感じで、楽しい時間だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

やがて日は完全に沈み、夜の帳が下りた。

バーベキューの炭は砂をかけて始末をして、かまどは小さな火だけ残しておく。

「いっくよー!」

海に近いところでは、鷗をはじめ、夏海ちゃんや紬、そして静久が花火をしていた。元気だなあ。

他の皆はそれぞれ好きな場所に腰を下ろし、その様子を眺めているようだった。

そして俺はかまどの近くで、しろはと並んで座っていた。

「たまにはいいよね。こういうのも」

しろはがほそりと呟く。

「本当だよな」

同じ島にいるはずなのに、知らない場所に来ているような。不思議な感覚だった。

「おお」

何の気なしに空を見上げると、満天の星空だった。

「しろは、星がすごいぞ」

「わあ、本当だね」

使い古された表現だけど、空から星が降ってきてそうだった。秘密基地の山で天体観測をした時より、空気が澄んでいるかもしれない。

俺としろはは一緒に星空を見上げながら、どちらからとなく手を握っていた。

ああ、俺はこうやって、近くにしろはを感じられるだけで幸せかもしれない。

それにこの夏休み、なんだかんだでしろはとこうやってゆっくり過ごす時間がなかった気がするし。

「あのさ、しろは……」

「え、どうしたの」

俺は静かに身体を近づける。

「あ、うん……」

しろはもその意図を察したのか、俺の肩に身体を預けてきてくれた。

そして、俺たちの距離はお互いの吐息を感じられるくらいまで近づいて……。

「楽しかったねー」

「はい！ サイコーでした！」

……その時、鷗たちが花火を終えて戻ってきた。

「っ!？」

俺としろはは握っていた手を離し、反射的に距離を置く。

「……あれ？ 二人ともどうしたの？」

「な、なんでもないから！」

思わずハモってしまった。

何を見られたわけでもないのに、妙に恥ずかしかった。

「海風に当たってたなら、ちょっと寒くなってきたわねー」

「蒼ちゃん、少し火にあたりましょう」

その後、他の皆も続々と火の周りに集まってきた。

この感じだと今日はもう、しろはと手をつなぐチャンスすらないかもしれない。少し悔しい。

その後、小さくなりつつある火を囲みながら、皆で色々な話をした。先日のスーツケースレースや、宝探しの話、紬たちとのデートの話、水鉄砲大会の後の共同浴場の話。楽しい夏の思い出話だった。

「……そういえば、こんな話があるんだけど」

その話題も尽きかけた頃、急に鷗がおどろおどろしい口調で語りだした。この流れはもしかして。

「え、もしかして怖い話ですか？」

「そうだよ、なっちゃん。キャンプの夜と言ったらこれだよね」
「ひえっ」

鴉は夏海ちゃんの肩に手を回して、ガツチリと捕まえていた。これは逃がさない構えだ。

皆で囲んでいるとき火も心許なくなっていて、程よい暗闇。怪談話を始めるにはうってつけだった。

「それじゃ、まずは私から。世にも恐ろしいスツケースの話ね」

先の宝探しイベントで、鴉が口達者なのは知っている。どんな話だろうか。

「とあるかわいい女の子が、自分と同じくらい大きなスツケースを持ってただけどね……」

鴉が隣に置いていたスツケースを正面に置いて、語り始めた。

「ひみつでっせー。こわいでっせー」

時折、鴉の語りに合わせてカタカタとスツケースが動いて、一緒にだみ声が聞こえていた。

なんというか、スツケースを使った腹話術を見ているみたいだった。

「めでたし、めでたし」

やがて、鴉の話が終わった。

場の雰囲気はその、何とも言えなかった。正直、怪談話をした後の空気じゃない。

「……あれ、皆恐くなかった？」

その場の空気を察したのか、鴉が不思議そうな顔をしている。

「お前の語り部としての手腕は認めるが、話の構成に問題がある。結局、スツケースのスーちゃんとけるぴーの勝負はどうなったんだ」
俺はたまらずつつこんでいた。

「それはまた次の機会に」

最初はいかにも怪談という口調で語りだしたけど、途中からアクションものになっていた。

「むー、自信あったんだけどなあ」

皆の反応がイマイチなので、鴎はしよげていた。

いや正直、続きは気になるけどさ。

鴎は本当に皆を怖がらせようとして、この話を用意したんだろうか。

「それじゃ羽依里、何か怖い話知らない？」

「え、俺？」

「うんうん。オカルト、好きなんだよね？」

鴎に期待の目を向けられた。まあ、あるにはあるけど。

「じゃあ血の伯爵夫人と呼ばれた、エリザベートの話でも……」

「やめて。そういうぐろいのは求めてないから」

いざ語り始めようとしたら、しろはからストップがかかってしまった。

「それならパイリ君、この間のチュパイカブラの話は？」

「チュパカブラな」

なんか名前が変わっていて、新しい怪物が創造されていた。

「……なんかエロそうな名前の怪物ね」

蒼、それはお前がピンク脳だからだ。

「チュパカブラも駄目。牛の……ぐろいから」

話の内容を知っているんだろうか。この話もしろはからストップがかかってしまった。

「そうだ。俺の代わりに、静久は何か怖い話を知らないのか？」

俺は語れそうにないので、静久の方に話題を投げる。

「そうね……朝、目が覚めると、だんだんとおっぱいが減っていく話とかどう？」

「むぎゅー！ 怖すぎますー！」

「やめてくださいー！ 悪夢ですー！」

紬と夏海ちゃんをはじめ、女性陣が胸を抑えて青ざめていた。怖いんだろうか。男の俺にはイマイチ怖さがわからなかった。

「そうだ。怖がってばかりいないで、ツムツムも何か話してみない？」

「むぎゆ？」

鴟に話を振られ、キョトンとしていた。紬が怖い話をするイメージはないけど。

「えーつと、神隠しに逢った女の子の話とかでも、いいんでしょか」
「紬、それは駄目よ」

静久に笑顔で止められていた。少し気になるんだけど。

「無理強いはできないよね……それじゃ、良一君は何か知らない？」

鴟はその様子を見て、今度は良一に話を振る。

「怖い話か。あるぞ」

良一はニヤリとして、自信満々に語りだした。

「……海難法師の話だ」

カインアンホウシ？ オカルトは詳しいと自負してるけど、知らない話だった。

「東の島に伝わる話だ。どういう話かというとな……」

良一によると、海難法師というのは遙か昔、村人に騙されて荒れた海に出た結果、海難事故に遭って死んだ役人たちの怨霊らしい。

その身体は海藻やフジツボで覆われた、世にもおぞましい姿をしているらしく、今日みたいなお盆が近くなった夜に海からやってきて、手に持ったナタで襲い掛かってくるんだとか。

「あわわわわ」

「むぎゆぎゆぎゆ」

良一の話術は、個人の想像力に働きかけるやり方だった。この暗闇だし、どうしてもイメージが浮かぶ。やばい。怖い。

「以上だ」

良一が語り終わると、場が静まり返る。静かに響く波の音が、一層恐怖心をあおる。

「つ、次、次！ 次に行こう！」

鴟も怖くなったのか、努めて明るく次を促す。

「それじゃ、俺は夜の山で徹卓していた時の遭遇した金縛りの話をす

るとしよう」

「私は鉄塔で夜の見張りをしていた時に見た、不思議な光の話でも……」

その後は、天善とのみきが怪談話を披露した。

二人の話も怖かった。良くあるまた聞きの話じゃなく、本人の体験談だから、めちやくちや臨場感があつた。

この手の話に慣れているはずの俺も、さすがに背筋が寒くなってきた。それくらい、皆は話が上手い。

「……」

そんな中、隣のしろは平気そうな顔をしていた。肝試しの時も平気っぽかったし、この手の話には強いんだろうか。

「あおちゃんやあいちゃんは、怖い話とか知らない?」

鴉が次の語り部を探して、空門姉妹に声をかけていた。

「うーん。怖い話、苦手なのよねー」

蒼はそう言つて苦笑いを浮かべていた。

「短いのもいいから、あおちゃん、お願い!」

鴉が拜んでいた。

「うーん。それじゃ、少しだけよ?」

そんな鴉に根負けしたのか、蒼が渋々と語りだす。

「駄菓子屋で出会つた小さな女の子の話なんだけど……」

駄菓子屋が舞台になるところからして、天善やのみきと同じく実体験系の話みたいだった。

「ある夏の日の夕方、あたしは駄菓子屋で商品の整理をしたの。するとそこへ、小さな女の子がやってきたのよ。駄菓子くださいな〜つて」

「ふがし?」

「そ、駄菓子。今時の子はあまり買わない駄菓子なんだけど……それより気になったのが、その女の子の服装ね」

「むぎゆ? 服装ですか?」

鴉や袖も興味津々で聞いていた。駄菓子屋っていう身近な場所と

いうのも、なかなか効果的みたいだった。

「うん。すごい昔の服を着てたの。モンペって言うの？ 戦争の時の服」

「え、なにそれ」

「でも、あたしは特に気にも留めずに後ろを向いて、商品棚から麩菓子を取ってあげたの」

「うんうん」

「それで、10円よーって言いながら振り返ったら……そこにはもう、誰もいなかったの。一匹の蝶が居て、そのままどこかに飛び去って行っちゃったわ」

「え、蝶？」

「どうしてこのタイミングで蝶が出て来るんだろう。よくわからなかった。」

「なるほど、その子は七影蝶だったわけか」

「わかったように頷くのは、のみぎ。」

「その、七影蝶って何？」

「俺や夏海ちゃんをはじめ、鷗や静久もわかっていないみたいだった。どうやら、島の皆にはそれで伝わっているみたいだけだ。」

「七影蝶っていうのはね……なんて言えばいいのかしら。死んだ人の想いの残滓っていうか、幽霊みたいなものかしらねー」

「幽霊」

「口に出してみると恐怖と一緒に、なんとも言えないモヤモヤした気持ち押し寄せてきた。」

「そう。毎年何人かは、見たって人が出て来るのよ。この島の伝説みたいなものねー」

「蒼は笑顔で言ってるけど、なんだろう。不思議な感じだった。」

「でもその、七影蝶ってさ……」

「……そこまでです。これ以上その話をすると、寄ってきますよ」

その時、藍が手をパンと叩いて話を遮る。というか、寄って来ると何が？

「あー、やっぱり？ 藍に止められるくらいだし、やめとくわねー」

意味深な発言を残して、蒼の話はそこで打ち切りとなった。オカルト好きとしては、いくつか聞きたいこともあったけど、今は無理そうだった。

「えーっと、それじゃあ次はなっちゃん……は、無理っぽいね」

夏海ちゃんは半分鷗に抱きつくようにして震えていた。とても話せるような状況じゃない。

一瞬話を振りかけた鷗も、よしよしと頭を撫でてあげている。

「それじゃあ、私が話しましょうか。ちょうど良い時間ですし、これで最後にしましょう」

そう言って顔を上げたのは藍。満を持して、という感じだった。

「陰湿な狸の話とかどうでしょうか」

「え、何それ」

「それはですね……」

藍が語り始めたのは、それはそれは陰惨で、悪知恵の働く狸の話だった。

その狸はある登山隊のメンバーに紛れ込み、物を盗んだり、偽りの愛をささやいたりして、メンバーを疑心暗鬼に陥れる。

下山する頃には、登山隊の人間関係はメチャクチャになってしまふという、それまでの話とはまた違うテイストの話だった。

「……おしまいです」

藍の話が終わった後は、怪談の恐怖とは別の、何とも言えない感情が俺たちを包み込んでいた。皆無言だった。

「あううう……」

そんな中、いつも間にかしろはが俺に抱きついて、がくがくと震えていた。

「え、しろは？」

「た、狸、怖すぎる。やり方が陰湿すぎるよ」

よくわからないけど、しろははえらく怖がっているみたいだ。

「ううう、狸、陰湿すぎるよ」

「しろはちゃん、これで終わりだと思いますか？」

「え？」

「ポポポーンー！」

その時、申し合わせたように、しろはの背後でイナリが鳴いた。

「ひゃあああああ！ た、たぬき!？」

しろはの絶叫が周囲にこだました。下手したら気絶しそうな勢いだった。

「い、イナリだよ。しろは、しっかり」

藍はしてやったり。といった感じでほくそ笑んでいた。イナリとハイタッチまで決めていたし、なんて関係プレーだろう。

「さて鴟さん、良い時間ですし、そろそろお開きにしませんか？」

「そ、そうだね！ そうしよう！ 皆、解散！」

そのタイミングで、鶴の一声ならぬ、鴟の一声で怪談話もお開きになった。

「よーし皆、もう寝ようぜ！」

「賛成ですー！」

後半のハイレベルな怪談話で、皆の恐怖も最高潮だったんだろう。ここぞとばかりに立ち上がり、次々にテントへと向かう。

「ううう……」

そんな中、しろはだけ立ち上がらない。

「しろは？」

「こ、腰が抜けた……」

「え、大丈夫か？」

狸の話のラスト、イナリアタックが効いてるみたいだ。顔もイナリばりに真っ青だった。

「しろは、しっかり」

俺の肩に掴まってもらいながら、なんとかしろはに立ってもらおう。

「羽依里さん、こっちですよー！」

その後、夏海ちゃんのいる白いテントの方までなんとか連れて行

く。

「お、お願い羽依里。今日、一緒に寝て」
するとテントの目の前で、しろはにそう懇願された。

「え、さすがにまだ一緒に寝るわけには」

俺たち、一緒のお風呂もまだだし。

「じゃあ夏海ちゃん、一緒に寝よう！」

「ふえっ!? 私ですか!?!」

「うん！ お願い！」

しろはその場でしつかりと夏海ちゃんの手を握る。心なしか、涙目になってる気がする。

でも、夏海ちゃんも同じテントだし、それなら可能かもしれない。

「夏海ちゃん、俺からもお願いするよ。俺がしろはと一緒に寝るわけにもいかないしき」

「わ、わかりました」

夏海ちゃんに了承してもらった後、二人でしろはを支えながらテントへと入ってもらった。

ちなみに、同じテントには夏海ちゃんとしろはの他に、鷗も寝ることに became たらしい。

また、同じサイズの緑色のテントには静久、紬、のみきが寝るらしく、三人の楽しそうな声が聞こえていた。

「良一ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「え、どうした？」

そんな中、藍が良一に詰め寄っていた。というか、珍しく正しい名前を呼んでいる。あれは絶対裏がある。

「あのピンクのテントのことなんですけど」

「ああ、あれか。あれはな……」

なんか色々話を聞いた後、取扱説明書みたいなものを受け取っていた。テントに取扱説明書？

「ほら蒼ちゃん、行きますよ」

「え、藍、ちよつと待って。なんか嫌な予感しかしないんだけど」

「それでは皆さん。おやすみなさい」

「離してえー……！」

蒼は藍に手を引かれ、ピンクのテントへと引きずり込まれていった。見ると、よくわからないヒラヒラもついているし、謎なテントだった。

「さて、と……」

あの蒼たちの入っていったピンクのテントも気になるけど、問題は俺たちのテントだった。

……試しに、男三人で横になってみる。

「いてててて！ 良一、もうちよつと詰めてくれ！」

「無茶言うな！ もう既に端っこだぞ！」

なんだかんだ言っつて、本来は二人用のテントだ。狭い。狭すぎる。ちなみに俺は、流れで真ん中に寝る羽目になった。右に良一、左に天善。ほぼ密着状態。

動けば動くほど、三人とも汗だくになっていくし。これは地獄だった。

「うう、狭い！」

「いてて！ 羽依里、肘打ちはやめてくれ！」

「俺だってやりたくてやってるわけじゃないぞ！」

「こら！ お前たち、消灯時間はとうに過ぎているぞ！ 静かに寝ろ！」

三人で大騒ぎしていると、テントの入り口が開けられて、のみきが覗き込んできた。見回りが来るなんて、まるで修学旅行だった。

「……これは駄目だ。二人とも、一回起きてくれ！」

のみきが去った後、俺たちは堪らず起き上がり、三人であぐらをかいて向かい合う。

「このテントで三人が寝るのは、物理的に無理があるぞ」
「だな……」

これは、何か対策を考えなきゃいけない。
「こうなったらあれしかないな」

俺の肘打ちで左の頬を赤くした良一が、意を決したように言う。

「え、あれ？」

「極めて公平な、男の勝負をしようぜ」

「なんだそれ？」

「……じゃんけん。負けた一人は外で寝る」

じゃんけん。確かに公平な勝負だった。

「なるほどな。二人ならこのテントでも、なんとか寝れそうだ」

「だろ」

「……乗ったぜ。二人とも、俺に負けて吠え面かくなよ！」

「その台詞、そっくりそのまま鷹原に返そう」

「よーし！　いくぜ！　じゃーんけーん！」

「ぼん！」

「負けてしまった……」

男の勝負に敗北した俺は、なけなしのタオルを片手に、外で途方に暮れていた。

かまどの火も完全に消えてしまっていた。月は出ていたので、それなりに明るいけど。

よく考えたら、テントを間違えたのは良一なんだから、良一が外で寝るべきだったんじゃないか？　今更だけどさ。

思えば、じゃんけんの言い出しっぺは良一だった気がするし。

「うう、たばかられた……」

せっかくキャンプに来たはずなのに、まさか野宿する羽目になるなんて。

とりあえず、少しでも寝心地の良さそうな地面を探して歩く。

「え、羽依里？」

その時、背後から声をかけられた。振り返ってみると、Tシャツに半ズボン姿と、ラフな格好の鷗がいた。

「あれ、鷗？ どうしてここに？」

「え。私はその、ちよつとお花を摘みに……」

「ああ」

鷗の視線の先には、小さな赤いテントがあつた。どうやらそういうことらしい。

「それより、羽依里はどうしてこんなところにいるの？ 眠れないの？」

鷗はスーツケースを引きながらこつちにやってきた。まさか、トイレに行くのも一緒なのか。

「えつと、実は……」

俺は黒いテントでの経緯を鷗に話して聞かせた。

「それはなんというか……ご愁傷様だねえ」

ものすごく可哀想なものを見るような目で見られてしまった。

「ところで鷗、そのスーツケースに寝袋でも入ってないか？」

いくら夏とはいえ、夜の海風に直接当たったら体が冷えてしまいうだし。

「さすがに寝袋はないけど、ハンモックならあるよ」

「え、あるの？」

「うん。あるよ」

鷗はそう言つて、スーツケースからハンモックを取り出ししてくれた。

「木に結んだら、ちよつどいい感じで眠れるよ？」

「さんきゅ。確かに、映画とかで使っているシーンを見るよな」

「あと、これもあげる」

鷗は黄色いスプレー缶を手渡してくれた。

「なんだこれ？」

「虫よけスプレー。ここ、蚊がたくさんいるしね」

言われてみれば、蚊がぶんぶん飛んでる気がする。たぶん、奥の森

からやってきてるんだろう。

「ありがとう。使わせてもらおうよ」

「うん。吸血鬼対策はバッチリしておかないとね」

「そ、そうだな」

蚊に出血大サービスするわけにはいかないし。助かった。

「それじゃ、おやすみー」

鷗は手を振りながら、がらがらとスーツケースを引いて自分のテントに戻っていった。

さて、せつかくだしハンモックを使わせてもらおうことにしよう。

「……あ」

俺は周囲を見渡して……あることに気づいた。

「この入り江、全然木が生えてない……」

ハンモックは木に結ばないと使えない。せつかく借りたけど、これは使えそうになかった。

「……吸血鬼め！くらえー！」

ぷしーと、振り返り際にスプレーを一閃。

ガードスキル：インセクトバリアーって感じだ。

「……さて、現実逃避はこのくらいにして、寝るか」

俺は適当に自分の体にスプレーを振りかけて、ハンモックに包みりながら、その場に横になる。

こうなったら、どこで寝ても変わらない気がした。

海の方を向いて、目をつぶる。波の音が良い感じにリズムを刻んでいて、心地良い。

「……ん？」

いい感じにウトウトしてきた頃、波音の間に足音のようなものが混ざって聞こえだした。間違いない、俺の方に向かってきている。

え、足音？

ー海難法師の話だ。

……その時、良一の怪談話が頭をよぎる。よりによって、こんな時に。

「鷗みたいに、誰かトイレにでも起きたのかな」

その正体を見てやろうと、意を決して目を開けると、月明かりに照らされて、長くてざんばらな髪をしたシルエットが映し出された。

……え、そんなまさか。

さらに右手に赤黒いものを持っているのが見えた。それは月明かりに反射して、鈍く光っている。

……ちよつと待ってくれ。本当に海難法師!?

そしてついに目の前にまでやってきた時、ふいにその眼がギラリと光る。

「で、でたー！ー！　れ、れいげんいやちこなれ！」

俺は恐怖のあまりに飛び起きる。

右手に虫よけスプレー、左手にハンモック。出来る限りの武装を整え、戦闘体勢を取る。

「……む？　何が出たんだ？」

俺の声に驚いたのか、シルエットの動きが止まった。そして、聞き覚えのある声が聞こえた。

「て、天善!？」

その姿をよく見てみると、天善だった。なぜか、頭にわかめを被っている。

そのわかめのせいで、ざんばらな髪の毛に見えたのか……なんとも紛らわしい。

「鷹原、こんな所で寝ていたのか」

「ま、まあな。そう言う天善こそ、何やってるんだ？」

「夜の鍛錬だ」

手元で光っていた赤黒いものは、卓球のラケットだった。確かに赤と黒のラバーだし、いい感じに月明かりで光るよな。

眼がキラリと光ったのも、眼鏡に月の光が反射したんだろう。

「ところで、なんでわかめを被ってるんだ」

「これを被っていると、頭が冷えて集中力が高まるんだ」

「そ、そうなのか」

よくわからないけど、海難法師の正体がわかって良かった。

「それじゃ、俺は向こうで寝るよ。トレーニングの邪魔をしても悪いな」

「ああ、気を遣わせてしまつてすまないな」

俺は天善に一声かけて、俺も寝る場所を変えることにした。

「よし、ここら辺でいいかな」

俺は適当に場所を移動し、海に背を向けるようにして横になった。ちようど、少し離れたところにピンクのテントが見える。

「密着モードだそうですよ。これはしょうがないですね。しょうがないですよね」

「いーいやーいやー！ だから藍、なんでそんなに嬉しそうな
のー！？」

「大人しくしてください。ぽちっと」

「ひゃー！ー！ー！ 何この甘いにおいー！ー！ー！」

そのピンクのテントから、何やら賑やかな声が聞こえてきた。

……誰だ？ さつきからもっと近づけと言っているのは。俺はしろは一筋だから、その誘惑には負けないぞ。

俺はハンモックに頭からくるまって周りの音を遮断すると、そのまま眠りに落ちていった。

第二十四話 8月15日

……朝。

波の音と、海鳥の鳴き声で目が覚めた。

そして、ものすごく眩しかった。

たまらず目を開けると、ちやうど朝日が昇ってきたところらしい。

朝日と共に起きるなんて、なんて健康的なんだろう。

「う、うーん……」

身体に巻き付いていたハンモックを引きはがして、反射的に横を向く。

すると、目の前に天善の顔があった。

「どわあああああ!」

俺は反射的に、その天善を思いっきり蹴っ飛ばしてしまった。

「なんで天善のやつ、俺の横で寝てるんだ……う？」

昨日寝た時は、確かに一人だったはずだけど。

俺に蹴飛ばされても、天善は変わらず眠っているようだった。

「全く、朝から心臓に悪い……」

俺は一度深呼吸した後、全身についた砂をはたき落としながら起きあがる。

……身体があっちこっちが痛い。

背伸びをしたらパキパキと良い音が鳴った。砂の上だし、なんだかんだで布団の上とは違う。

「とりあえず、顔を洗おうかな……」

この際、海水でも構わないや。俺は波打ち際に座り込んで、顔を洗う。

「あいててー!」

しまった。つい寝ぼけて、いつものように目も洗ってしまった。海水が染みて、目が痛い。

「まあ目は覚めたし、結果オーライかな……」

「あ、おはよー。羽依里ー」

声がした方を見てみると、俺より少し陸に近い場所で蒼が体育座りしていた。なんか、朝から黄昏ている。

「ああ、おはよう」

俺は挨拶を返しながら、蒼の方に近寄ってみる。なんだか元気がない。

「どうした蒼、体調悪いのか？」

昨日のこともあるし、心配なんだけど。心なしか、やつれているようにも見えるし。

「あはは、そう言うわけじゃないんだけどねー。元々朝弱いし」

「そういえば前に空門家へお邪魔した時、藍がそんなことを言っていた気がする。」

「髪も爆発してるな」

「ホントねー。もうちよつとしたら直すわー」

言われて気づいたんだろうか。蒼は恥ずかしそうに笑いながら、髪に手櫛をかけていた。言われてみれば、ここに鏡なんてないもんな。

「でもねー、ひとつだけ気になることがあるのよー」

「気になること？」

「うん。なんていうの、昨日の夜の記憶がないのよねー」

「え、なにそれ」

「藍と一緒にテントに入ったところまでは覚えてるんだけど、そっから先の記憶がないのよねー」

「そう言えば蒼は、藍と一緒にピンクのテントに入ったんだっけ。」

「藍がテントのボタンを押したのまでは覚えてるんだけどねー」

「え、テントにボタン？」

「うん」

「ますますわけがわからない。」

「あたし、あのテントで何をしたのかしら……」

蒼はそのまま頭を抱えて、うんうん唸りだしてしまった。ここはそっとしておいてあげよう。

俺は砂浜を歩いて、皆のテントの方へ向かう。

道中、天善が朝日をバックに素振りをしていた。どうやら絶賛朝練

中らしい。

「さっきまで寝てたのに、いつ起きたんだろう」

朝練の邪魔しても悪いし、俺は何も見なかったことにして、皆の元へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

テントの並ぶところまで来ると、いい匂いが漂ってきた。

見ると、良一がかまどに火をおこして、コーヒーを淹れているようだった。

「良一ちゃん、ピンクのテントは最高でしたよ！」

そして、良一の背後から藍が話しかけていた。

なんか、ものすごく嬉しそうだ。あれだけ笑顔の藍を初めて見たかもしれない。

「そ、そうか。喜んでもらえて、俺も嬉しいぞ」

話しかけられた良一も藍の異変を感じているのか、顔が引きつっていった。

「また貸してくださいね？」

良一の首に手なんか回しちゃってるし、めちやくちや浮かれているのがわかる。普段の藍だと、絶対あんなことはしない。よくわからないけど、よほど嬉しいことがあったんだろう。

「お、おお……」

固まっている良一をよそに、藍は満面の笑みを浮かべて、その場を離れていった。

笑うと蒼にそっくりだった。さすが双子だ。

「む、鷹原も起きたのか」

立ち去っていく藍の後ろ姿を眺めていると、のみきから声をかけられた。見ると、静久と紬、イナリも一緒にみたかった。

「ああ。皆、おはよう」

「タカハラさん、おはようございます！」

「おはよう、パイリ君」

この二人は相変わらずネコとウシの格好だった。そういえばその服、元々パジャマだって言ってたっけ。

そのまま四人と一匹で並んで、良一の元へと歩み寄る。

「ところで、藍は何か悪いものでも食ったのか？」

「朝からずっとああなんだ。一緒にいたはずの蒼は疲れ切った顔をしているし、私たちもよくわからなくてな」

「くわばらくわばら。触らぬ藍に祟りなし」

良一は藍が立ち去った後、自分の体に塩を振っていた。なにもそこまでしなくても。

「そうだ、とりあえず朝飯の準備はしておいたぜ」

一通りお清めが終わったらしい良一が指し示す先には、コーヒーに加えて袋に入った食パンが用意されていた。

「昨日の夜に余ったカレーも温めてある。食パンも一人二枚まで食べてくれて良いぜ」

「まさか、朝から一人で準備してくれたのか？」

「ああ、簡単なもんで悪いけどな」

「いや、十分だよ。ありがとうな」

「気にするな。俺も楽しいからな」

良一は笑顔でそう言いながら、紙コップにコーヒーを注いでくれた。た。

「それじゃ、さっそく」

俺は鉄鍋に残っていたカレーを二枚の食パンに挟んで、かまどの火で軽くあぶる。あつという間に、カレーサンドの完成だ。

良一からもらったコーヒールと合わせれば、最高のモーニングセットだった。

「こうやって余ったカレーを食べながらコーヒールを飲むのがたまらんだ」

良一は至極幸せそうな顔をしていた。なんかわかる気がする。

「ポン！ ポン！」

「お？ どうしたイナリ」

その時、足元にイナリが寄ってきた。その口には、大きな油揚げをくわえている。

「まさか、これもパンにはさんで焼いてくれっていうのか？」

「ポポーン！」

「わかった。オイナリサンドだな」

俺はイナリに言われるがまま、油揚げをパンにはさんで火であぶる。

完成品をイナリに渡すと、美味しそうに食べていた。

さすがに俺は手を出さなかったけど、香ばしく焼けた油揚げから、良い匂いがしていた。

「あ、朝ごはんの準備してくれたのねー」

「さすが良一ちゃんです。気が利きますね」

その後、藍や蒼をはじめとした皆も合流して、各々パンを焼き始めた。

「紬、残っているワタアメを食パンに乗せて、溶かしてみない？」

「そうですね！ コットントーストにしましょう！」

「蒼ちゃん、実はマシユマロ持ってきていたんです。焼きませんか」

「あ、いいわねー」

「パンに乗せても美味しそうですよ」

皆、創作意欲に溢れていた。

直後、砂糖を焦がしたような匂いが漂ってきた。美味しそうだけど、凄く甘そうだった。

よく考えれば、ワタアメもマシユマロも主原料は砂糖だった気がする。

「はい、ノミキさん、どうぞー！」

「え。ああ、すまないな」

ちなみに、完成したコットントーストはのみきが受け取っていた。

「まあ、コーヒールと一緒に食べればちょうどいいか……」

良一が淹れたのはもちろんブラックコーヒーだった。のみきにはちよつと苦いかもしれない。

「パリングルスサンドも良さそうね」

「おおー、カツキテキですね！」

その隣では、また新たなメニューが考案されていた。

まあパリングルスの原材料はジャガイモだし、パンに挟んでも良さそうだけど。

「……あれ？」

その時、まだ未開封の食パンの袋があることに気づく。

「これってもしかしなくても、しろはたちの分だよな？」

他の皆にそう聞きながら、周囲を見渡す。

改めて確認すると、しろはと鷗、夏海ちゃんの姿がない。思えば、白いテントを使っているメンバーだけがいなかった。

「あー……実は、その三人はな……」

のみきはコットントーストを片手に持ったまま、困ったような表情でその理由を話してくれた。

「え、まだ寝てる？」

「そうなんだ。私たちも起こしに行ったんだが……その、全く起きてくれなくてな」

のみきは心底申し訳なきような顔をしている。朝に弱いしろははしようがないとして、夏海ちゃんや鷗も起こせなかったんだろうか。

「わたしも全力でむぎゅーつとしたんですが、ナツミさんは起きてくれませんでした……」

「私もおっぱい作戦を実行しようとしたら、のみきちゃんに止められちゃったわ」

紬と静久も無念そうな顔をしていた。静久におっぱい作戦とかやられたら、下手したら二度と目覚めなくなりそうで怖い。

「というわけで、もう鷹原にしか頼めないんだ」

「え、なんで俺？」

のみきは一転、笑顔だった。

「俺や良一が行くわけにはいかないからな」

朝練を終えたらしい天善もいつの間にか合流していて、良一からもらったコーヒーを飲んでいた。

「しろはをいつも起こしている鷹原なら、他の皆も起こせるだろう?」
のみきからはそう言われたけど、実際にしろはを起こしたことなんてない。

「夏海ちゃんとも一緒に暮らしてるんだし、大丈夫よねー」

蒼はそう言いながら、にへらと笑う。まあ、言ってることに間違いはないけどさ。

「10分経つても無理そうだったら、私たちも応援に行くからな」

「タカハラさん、ファイトです!」

皆からの声援を受けながら、俺は白いテントの方へ追いやられる。これはやるしかなさそうさ。

「……あれっ、何だこの線」

よく見ると、白いテントを囲むように、砂の上に線が引いてあった。「それはUBラインと言ってな。もし男子があこの線を超えたら、私が警告なしに撃つことになっているんだ」

背後からの声に振り返ると、のみきがハイドログラディエーター改を構えていた。そんな話、初耳なただけだ。

「鷹原には、今回特別にUBラインを超える許可を出そう。頼んだぞ」
「わかった。やるだけやってみるけど……10分経ったら、本当に応援に来てくれよな」

俺はそう言い残し、白いテントへと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「お、お邪魔します……」

「くー。すぴー」

白いテントに入ると、入口に一番近いところで鴟が丸くなって寝て

いた。

その奥では、夏海ちゃんがしろはに抱きつくようにして寝ている。しろはは、ものすごく暑そうだった。

「さて、どうしよう」

しろはが朝弱いのはもちろん知ってるし、夏海ちゃんもああ見えて、時々朝に弱いことがある。昨日は特にはしゃいでいたし、爆睡してても不思議はない。

……少し考えて、まずは一番近くにいる鴫から起こしてみることにした。

「おーい、鴫ー」

とりあえず近寄って、耳元で声をかける。

「むにやむにや……おかーさん、あと5分だけ……」

……お決まりの台詞が返ってきた。

というか、あと5分って言う奴ほど、その時間通りに起きてこない気がする。

「おーい、鴫ー。朝だぞー」

声かけ程度じゃ効果がないので、今度は軽くゆすってみる。

「くー。すびー」

……反応変わらず。

「うーむ」

聞いたことなかったけど、鴫も朝弱いのか。

相手が男なら、のみきから水鉄砲でも借りてぶっ放すんだけど。そういうわけにもいかない。何かいい手段はないものか。

「鴫ー。朝ー、朝だぞー。朝ごはん食べて、学校行くぞー」

「くー」

「朝ごはん、俺が食べていいかー？ 美味しいトーストがあるぞー」

「くー」

……食欲に訴えかける作戦も駄目か。食いしん坊の鴫なら、起きて来るかと思っただけだ。

「……よし」

俺は鴫の横に置かれたスーツケースに手をかける。

「嗚ー、スーツケース開けていいかー？」

「……それは駄目！」

がぼつと起き上がって、嗚はスーツケースを抱きしめる。よし、起きた。

「つて、羽依里!?!」

「よう。おはよう」

「え、えーつと、これってもしかして」

嗚はスーツケースを抱きしめたまま、顔をみるみる赤くしていく。

「えろいことされた!?!」

「どうしてそうなる!?!」

「だって、これって夜這い……じゃない。朝這いだよね!?!」

嗚は自分の身体をあつちこつちを触って、何かを確認していた。

「誓って何もやってないから、さっさと顔を洗ってこい」

「う、うん……本当に、本当に何もしてないよね?」

「してないって」

嗚は俺に訝しげな視線を送りながら、テントを出て行った。正直、傷つくんだけど。

「さて」

なんだかんだで嗚は起こせだし、気を取り直して次に行こう。

「おーい、ふたりとも、朝だぞー」

嗚と同じように、夏海ちゃんとしろはに声をかける。

……無反応だった。やっぱり声をかける程度じゃ駄目みたいだ。

「しろはー、夏海ちゃん」

今度は二人同時に揺すってみる。

「うろう、れいげんいやちこなれ……」

「あーうー。地震、ですー……」

なんだかぶつぶつ言ってるけど、起きない。

「夏海ちゃん!」

それならばと、耳元で名前を呼びながら強めにゆする。

「えへへ……チャーハンをつくるときは、てくびのスナップをきかせ
て……むにやむにや……」

「……だめだこりゃ」

夏海ちゃんも何回か起こしたことがあるけど、この子も結構起きないんだよな。

「幸せそうにチャーハンの夢とか見てるっぽいし」

夢の中で、しろはにチャーハンの極意でも教わってるんだろうか。

……うん？　チャーハン？

「……よし、この手で行こう」

俺は考えを巡らせた後、大きく息を吸い込む。

「夏海ちゃん起きて！　今日はチャーハン祭りだよ！」

「え、チャーハン祭り!?!」

次の瞬間、夏海ちゃんは跳ねるように飛び起きた。よし、作戦成功だ。

「……あれ、羽依里さん？」

「おはよう、夏海ちゃん」

「おはよーございます……」

状況把握に時間がかかっているみたいだ。目が泳いでいる。

「あの、なんだかすごく魅力的な単語が聞こえた気がするんですけど……っ」

「夢でも見てたんじゃない？　それよりほら、もう皆起きてるから、顔を洗ってきなよ」

「わふ……わかりました」

夏海ちゃんはあくびを噛み殺しながら、テントを出て行った。

「さて、これで残るはしろはだけだけど……」

正直なところ、夏海ちゃん以上の強敵だ。どうやって起こそう。

「うーん、確実にしろはを起こす方法……」

俺はその場で腕組みをして、何かいい方法はないか考える。

「……よし、ここはイナリ作戦を試してみよう」

考えに考えた結果、俺はその結論に辿り着く。

ちなみにイナリ作戦とは、以前しろはが俺を起こしに来た時にやった方法だ。

……つまるどころの、目覚めのキスというやつだ。呂の字だ。

「あの日は、しろはが勇気を出せなかったみたいだから、今度は俺が勇気を出す番だ」

思い立ったがなんとやら。俺は四つん這いになりながら、しろはの方に近づいていく。

「き、昨日も結局、何もできなかったし、今日こそは」

しろはの寝息を鼻先に感じるくらいまで近づいたところで一旦呼吸を落ち着かせる。

お、俺は一度やると決めたらやりきる男だ。やるぞ。鷹原羽依里！なにを怖気づいてるんだ！しろはとのキスくらい、何回もやってみるじゃないか！

心の中で、そう自分を鼓舞する。

「……ほう、具体的にはいつだ？」

「え？ 年明けに告白した時と、ゴールデンウィークの時と……6月末に島に来た時に……」

背後からの問いかけに、思わず答えてしまっていた。というか、心の声がダダ漏れだったみたいだ。

「……って、ちよつとまって！」

一気に視線が集まった気がして振り返ると、皆がテントの入り口に集まり、俺の動向を注視していた。

そう言えば、後で応援に行くとか言ってたっけ。

「そ、そうか。お前たち、やることはしっかりやっているんだな……」

真つ正面に立っていたのみきは、反射的に水鉄砲を構えながらも、顔を真つ赤にして震えていた。相変わらずこの手の話題に耐性がないらしい。

「目覚めのキスカ。やるなあ」

「ファーストサーブとしては、良いチョイスじゃないか」

「やるわね。パイリ君」

「うひゃー。本当にするのか？ するのか？」

さらに、のみきの左右から良一や天善、静久と鷗がそれぞれ顔を覗

かせて、俺の方をちらちらと見ていた。

「シズク、さつきから何も見えないのですが」

「鷗さん、急にどうしたんですか？」

ちなみに紬は静久が、夏海ちゃんは鷗が、それぞれ目隠しをして、過激なシーンを見ないようになしてくれていた。粹な心遣いをありがとう。

「べ、べべ別にいんじゃない？ こ、恋人同士なんだし。ねー」

鷗の隣でそう言う蒼も、顔が真っ赤だ。お前が動揺してどうする。

「それでは羽依里さん、ぐつとやつちやつてください」

「誰がするか！」

そんな蒼の横で、努めて冷静な藍から続きを促されるけど、俺は断固拒否する。

「その場の雰囲気つてもんがあるんだ！ 出てけー！ー！」

そして、近くに置いてあったタオルケットを入口の方に向かって投げられる。

「わ、羽依里が怒った！」

「皆、逃げろ！」

俺の行動を見てか、皆はクモの子を散らすように逃げていった。

「はあ。まったく、朝から賑やかな奴らだ」

「……あれ、羽依里？」

誰も居なくなった入口を見ながら、俺がため息交じりにそう呟いていると、すぐ後ろから声がした。

「ああ、しろは。起きたのか」

視線を戻すと、しろはが寝ぼけ眼で上半身を起こしていた。

「うん。おはよう」

「ああ、おはよう」

さすがにあれだけ大騒ぎしたら、目を覚ましてしまったらしい。これは、イナリ作戦失敗だな。

「もしかして、わざわざ起こしに来てくれたの？」

「え？ まあ、そんなところ……」

……今更、キスなんて雰囲気じゃないしなあ……。

「どうしたの？」

残念な気持ちでいっぱいになりながら、しろはの顔を見つめていると、不思議そうな顔をされた。

「な、なんでもないよ。それより、しろはも顔を洗ってきなよ。髪の毛、すごいことになってるぞ」

俺は急に恥ずかしくなって、慌てて誤魔化す。

「うん、そうする……」

しろははゆつくりと起き上がって、ふらふらと顔を洗いに向かった。蒼ほどじゃないけど、髪があつちこつち跳ねていて、まるでハケのようだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

色々あつたけど、全員を起こすという任務を貫遂した俺は、しろはと一緒にかまどのある場所に戻ってきた。

「せつかくだし、10円チョコを挟んで焼いてみよう！ おやつ在庫一斉処分だよ！」

「美味しそうですねえ」

そこでは、鷗や夏海ちゃんが食パンにチョコを挟んで焼いていた。チョコもいい感じに溶けているみたいで、美味しそうだった。

「あ、羽依里も食べる？ オーダーメイドで、色々作ってあげるよ？」
「いや、俺はもう先に食べたから、しろはに作ってやってくれないか？」

「それならシロハさん、パリングルスサンドをどうぞ！」

紬が笑顔でパリングルスサンドをしろはに手渡していた。なかなかボリユームーミーだ。

「ジャーマンな感じがブラックコーヒーと相性抜群ですよ！」

夏海ちゃんが力説していた。ドイツにコーヒーのイメージはない

んだけど。

「鳴瀬さん、このコッソントーストも美味しいわよ？」

更に静久から、しろはの空いている方の手にコッソントーストが手渡される。

「甘すぎる感じがブラックコーヒーとの相性抜群ですよ！」

「これまた、夏海ちゃんが力説していた。」

「あ、ありがとう……」

しろはは紬や夏海ちゃんから勧められるがまま、何枚ものトーストを受け取っていた。一番最後に起きてきた分、残りのパン全てをあてがわれたみたいだ。

「しろは、食べきれるか？」

「食材を余らせちゃ悪いし、食べなきゃ。礼儀だし」

しろはは意を決したように、トーストを口に運んでいた。

「よし、それじゃ皆、そろそろ帰る準備を始めようぜ」

少し食休みした後、良一の号令で帰宅の準備を始める。

火の始末をして、かまどを解体する。テントをたたみ、バーベキューで使った炭を処理する。

「あれ、その炭、持って帰るのか？」

見ると、しろはが炭を大きめの缶に入れていた。

「うん。持って帰って畑にまくの、肥料になるんだよ」

「あ、なんか聞いたことあるな」

「後は、この辺も肥料になるのよ」

蒼が水気を切りながらビニール袋に入れていたのは、料理で余った野菜のくずだった。

他にもホタテの貝殻とか、一見自然に還りそうなものも全部持って帰るみたいだ。

「自分たちが出したゴミは、全部持って帰る。来た時よりきれいにして帰るのが、キャンプのルールだからな」

そう言う良一のリュックには、先程しろはが炭を詰めた缶が収まっ

ていた。来た時に比べて食料や水が減ってる分、余裕があるんだろう。

「ふう。こんなもんかな」

きちんと役割分担をしたおかげで、30分もしないうちに片づけは終了した。

皆も荷物をまとめ終え、浜辺の一角に集まって満足そうな顔をしている。

「俺たちが来る前と変わらないくらい、綺麗になったな」

「よし皆、帰ろうぜ！」

「いいえ、まだよ！」

「まだですよ！」

良一がそう言った時、紬と静久が異議を唱えた。二人の手には、ゴミ袋が握られている。

「紬、そのゴミ袋は？」

「皆さん、これに少しずつでいいので、ゴミを拾いましょう！」

「え、ゴミ拾い?」

紬は灯台でもよくゴミ拾いをしている。それをここでもやるつもりなのだろうか。

「ミタニさん、来た時よりきれいにして帰るのが、ルールなんですよね!？」

「ルールなのよね!？」

紬と静久が良一を笑顔で見つめている。これは逃げられそうにな

い。

「……そうだな。紬の言う通りだな」

良一が一步前に出て、ゴミ袋を受け取る。

「私も手伝います！」

「しよーがないわねー。最後にもう少しだけ、やりますかー」

それを皮切りに、他の皆も次々と紬からゴミ袋を受け取っていく。俺もゴミ袋を手に、周囲のゴミを拾い始めた。

「うわ、こんなところにも」

「そこまで汚れてないだろうと思っていただけけど、波打ち際や森の近くには空き缶やビニール袋といったゴミが結構落ちていた。」

「波で流されたり、風で飛ばされてきたのかな」

俺はそれらのゴミをさっさと袋に入れていく。

「うあー！ー！ 誰よ、こんな本捨てたの!?!」

「アオさん！ それも持って帰らないとダメですよ!」

「ええっ、持って帰るの!?! これ!?!」

少し離れたところで、蒼と紬が何やら揉めていた。少し気になったけど、今は自分の作業に集中しよう。

「それじゃツムツム！ 帰ったら捨てておくね!」

「カモメさん、よろしくお願いします!」

皆で集めたゴミは結構な量だった。でも、それは全部まとめて鷗のスーツケースの中に納まってしまった。

正直、良く入ったと思う。圧縮装置でもついているんだろうか。あのスーツケース。

ちなみに、蒼は鷗に黒い袋に入った何かを手渡していた。中身を見ずに焼いてね。って言っていたけど、どういう意味なんだろう。

「よし、それじゃ皆、帰ろうぜ!」

「来た時と同じように並ぶんだ。帰り着くまで、気を抜くんじゃないぞ」

ゴミ拾いも終え、のみきや良一の指示の元、俺たちは来た時と同じように隊列を組んで、帰路についた。

野菜を忘れたり、野宿したり、色々あったけど、楽しいキャンプだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

役所前まで帰り着いたところで解散となり、俺と夏海ちゃんは加藤家に帰宅する。

「あ、ラジオ体操!」

帰宅するや否や、夏海ちゃんが玄関先でそう叫んでいた。

夏海ちゃんの視線の先には、いつも玄関先に置きっぱなしにしてあるラジオ体操のスタンプカードがあった。

「そういえば、今日はラジオ体操に行けなかったね」

「そうなんですよ……」

夏海ちゃんがうなだれていた。皆でキャンプに行ってたし、しようがないと言えましょうがないのだけど。

「はあ……温泉の素、狙ってたんですけど……」

「え、温泉の素って何?」

「何って、ラジオ体操の皆勤賞ですよ」

「そんなのあるんだ。知らなかったよ」

「登別から別府まで、全国津々浦々の温泉が味わえるセットなんですよ」

夏海ちゃんは嬉々としてそう話していた。温泉好きなのかな。

「でも、こればかりはしょうがないですよ。キャンプもすごく楽しかったですし、後悔はありません! 明日からは、準皆勤賞の温泉の置物を目指します!」

「うん、その意気だよ」

夏海ちゃんはそう開き直っていた。ポジティブさは大事だよな。

……それにしても温泉の置物ってなんだろう。

「それじゃ、荷物を片付けてきますね!」

その答えを聞く前に、夏海ちゃんはリュックを持って自分の部屋の方へ行ってしまった。まあいいか。

「俺も荷物を片付けなきゃ」

玄関に鏡子さんの靴もないし、また出かけているんだろう。俺も自分のリュックを持って、自室へと向かった。

「えーっと、だいたいこれで終わりかな」

使ったタオルや汚れた衣服も洗濯に出したし、水筒やらの道具も片付け終わった。

「ふう……」

荷物を片付け終えて綺麗になった畳の上に腰を下ろすと、途端に眠気が襲ってきた。

「うわ、これは……」

帰宅して気が抜けちゃったんだろうか。思えば、昨日の夜は快適に眠れたとは言い難い状況だったし。

となると、今このタイミングで眠気が襲ってくるのは自然の流れというわけで。

「す、少しだけ、休もう……」

俺はそのまま仰向けに寝そべり、眠りに落ちていった……。

「うーん……?」

しばらくして、自然と目が覚めた。どのくらい寝ていたんだろう。時計を見ると、12時を少し回ったところだった。

同時に、腹の虫が鳴く。

「腹が減ったから、目が覚めたのか……」

「これぞ自然の摂理。」

「とりあえず、何か食べよう……」

もう夏海ちゃんはお昼を済ませちゃっただろうか……とか考えながら、俺は起き上がり、居間へと向かった。

居間に行くと、夏海ちゃんが鏡子さんに膝枕されていた。

「あれ？ どうしたんですか？」

「あ、羽依里君も起きたんだね」

鏡子さんは苦笑しながら、夏海ちゃんをぱたぱたと団扇で仰いであげていた。

「もしかして夏海ちゃん、そこで寝ちやっってたんですか」

「うん、少し前までキャンプの話聞かせてもらってたんだけどね」

鏡子さんがテーブルの上へ視線を送る。そこには、飲みかけの麦茶が二つ置かれていた。夏海ちゃんも、せっかくのキャンプの思い出話を、鏡子さんに聞いて欲しかったんだろうな。

「話の途中でずっと眠たそうにしてたから、少し寝たら？ って聞いたら、返事をした後、そのまま倒れ込んできちやっつて」

ああ、疲れているのになしやべり続けて、ふいに限界が来ちゃったと。「なんだかんだで、疲れちやっつたんだろうね」

鏡子さんは笑顔だった。

「でも、それだと鏡子さんも動けないですよ？ お昼ご飯も食べられないですし」

「私は外で遅めの朝ごはんを食べてきたから、まだお腹減ってないの」

「あれ、そうなんですか？」

「うん。今日は夕方まで寄合もないから、このままでも全然平気だよ。羽依里君だけ、先にお昼ごはん食べたらいよいよ」

「申し訳ないですけど、そうさせてもらいます」
腹が減っているのは事実だし。

俺は台所へ向かう。水屋の奥を探すと、かしわうどんが出てきた。これもご当地シリーズみたいで、パッケージには『ご当地うどん・九州編！』と大きく書かれていた。

「あ」
さて、お湯を入れよう……と思ったところで、ポットにお湯が入ってないことに気づいた。

例えば、いつも朝一番に夏海ちゃんがお湯を沸かしてくれてたっけ。

「あの子も、気付かないところで色々やってくれてるんだよな」

そんなことを考えながら、ポットに水を入れて、湯沸しボタンを押す。

お湯が沸くまでの間、ずっとポットの前で待つわけにもいかないの
で、一度居間に戻ることにした。

「お湯が無かったので、沸かしてます」

そう言いながら、鏡子さんの隣に静かに腰を下ろす。

夏海ちゃんが寝ているせいか、テレビもついていない。蟬の声も遠
くに聞こえるし、静かな時間だった。

「……そういえば、鏡子さんと夏海ちゃんってどんな関係になるん
ですか?」

なんとなく沈黙が気になったので、そんな話題を振ってみた。

「親戚だよ」

「そ、それは知ってるんですけどその、続柄というか」

「姪っ子になるの」

姪っ子ということは、鏡子さんの兄弟の子供になるんだっけ。

「夏海ちゃん、普段は本土の大きな街に住んでるんだけどね。都会は
都会で、色々大変みたいで」

……そう言えば夏海ちゃん、学校でいじめられてたって言ってたっ
け。

最近ハマったく気に入ってないみたいだけど、島に来た当初は学校の
校舎を見るだけで体調が悪くなっていったような。

鏡子さんは、どこまで知ってるんだろう。

「大変って……もしかして、学校のことですか?」

「……羽依里君も、夏海ちゃんから聞いてたんだね」

「ええ」

「……なんでこの子がいじめられるんだろうね。理不尽だよね」

鏡子さんはそこまで話すと、優しく夏海ちゃんの頭をなでる。その
様子は叔母というより、母親みたいだった。

「夏海ちゃんをこの島に呼んだのも、そんな都会のことは忘れて、楽し

「い夏の思い出を作ってもらいたかったからなの」

「その辺は大丈夫だと思いますよ。島の皆のおかげで、毎日楽しそうに過ごせてるみたいですし」

「皆がイベントを考えてくれたり、色々夏海ちゃんに気を回してくれてるからそこだと思う。」

「それに、最初は夏海ちゃんもすごく緊張してたから。羽依里君ともうまくやっていけるか不安だったんだよ」

「確かに、初日はガチガチだった気がする。俺も変に緊張していた気がするし。」

「でも、最近は本当の兄妹みたいに仲が良いものね」

「さ、さすがにそれは言い過ぎじゃないですか」

「ふふ。夏休みもまだ二週間以上あるし、二人とも楽しんでね」

「もちろんですよ」

鏡子さんに言われて、ふと現実的な考えが頭をよぎる。ずっと続きそうに思える夏休みも、気付けば残り二週間だった。

毎日毎日、楽しいイベントが続いてるからか、あつという間だな。

「あ、そういうえば鏡子さん。明日なんですけど」

「え、どうしたの?」

「実は……」

イベント……ということじゃないけど、唐突に思い出した。

「うっかりしていて、明日の鷗とのデートの話を鏡子さんに伝えてなかった。」

「え、今度は久島さんとデートするの?」

俺は明日、鷗と島の外に出かける旨を伝えた。

「……水鉄砲大会の結果、そうなってしまいました」

「いつものことだけど、しろはちゃんは了承してくれてるんだよね?」

「はい、そこは大丈夫です」

「なら、いいけど……気をつけて行ってきてね」

「ありがとうございます」

「ふふ。羽依里君も、あんまりしろはちゃんを困らせないようにね」

「わ、わかってますよ。一番大切なのは、しろはだけです」

「うんうん。しろはちゃん、愛されてるね」

「ちや、茶化さないでください」

俺も言ってから、急に恥ずかしくなった。

……その時、ポットの電子音が聞こえた。

「あ。お湯、沸いたみたいだよ」

「そ、そうですね。入れてきます」

俺は恥ずかしさを隠すため、足早に台所へと向かったのだった。

昼食後、特にやることもないので、居間で過ごしていた。

その時、夏海ちゃんのヘアピンが目に残った。いつもつけている、蝶のアクセントのついたやつだ。

「夏海ちゃんのヘアピンって、よく見るとたくさん色がついてるんですね」

ずっとクロアゲハだと思っていた髪飾りだけど、近くで見ると光の加減で赤や緑、青色といった光沢が入って見える。

そして、どことなく形がいびつだった。

「昔、工作か何かで作ったんだって。世界にひとつだけのオリジナルなんです。って言ってたよ」

「ああ、そういうことですか」

空門姉妹のトンボ玉しかり、自分で作ったものには愛着がわくし。そういうものがあるのは良いことだと思う。

その後は、鏡子さんと他愛のない話をしながら過ごした。

鏡子さんが昔、仙台を旅行した時に食べた牛タン弁当の話とか、そこで出会った謎の青年の話とか、興味津々で聞いていた。

「う、うーん……」

15時近くになって、夏海ちゃんが目を覚ました。

「おはよう。良く寝てたね」

「あ、ごめんなさい。こんなところで寝ちゃって」

覗き込むように鏡子さんに笑いかけられて、ようやく事態を飲み込めたらしい夏海ちゃんが慌てて飛び起きる。

「ごめんなさい。まさか鏡子さんに膝枕してもらってたなんて」

夏海ちゃんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「疲れてたみたいだし、気にしなくていいよ」

「でも……」

夏海ちゃんが顔を上げると同時に、そのお腹がくうと可愛らしく鳴く。

「あ、あう……」

「ふふ。そういえば、お昼ごはんも食べずに寝ていたもんね」

「はい……」

恥ずかしそうにお腹を押さえている。

でも、今からごはんを食べたら、間違いなく晩ごはんが入らないんじゃないかと思う。

「そうだ。二人で駄菓子屋さんに行ってみたら？ 私もそろそろ寄合

に行かなきゃいけないし」

「そうですね、そうします」

鏡子さんにそう提案されて、俺と夏海ちゃんは駄菓子屋へと出かけることにした。

顔だけ洗ってきます。と言って洗面所へ向かった夏海ちゃんを玄関先で待っていると、一足先に鏡子さんが家から出てきた。

「それじゃ、私も出かけてくるね」

「はい。気をつけて行ってきてください」

「あ、そうそう羽依里君」

「はい？」

出発しかけた鏡子さんが、慌てて俺の方を振り返る。

「明日のデートだけど、マリンジエットに乗る時は、きちんと救命胴衣つけないきゃ駄目だからね」

「え？ ええ、わかってます」

「それじゃあね」

それだけを言い残し、鏡子さんは出かけていった。

……あれ？ そう言えば俺、鏡子さんにマリッジジェットを使うって話したっけ？

島の外に行くって話はしたけど。

まあ、マリッジジェットの件は良一にも話してあるし、鷗とデートの予定を決める場に夏海ちゃんや紬だっていたし、誰かから話が行っていたのかもしれない。この島、噂が広まるのも早いし。

「おまたせしましたー」

その時、麦わら帽子をかぶった夏海ちゃんが玄関から出てきた。

「鏡子さんとの会話が聞こえてたんですけど、羽依里さん、マリッジジェットでどこか行くんですか？」

「ほら、この間の水鉄砲大会の副賞だよ」

「ああ、今度は鷗さんとのデートでしたっけ。頑張ってくださいね！」
「あ、ありがとう」

夏海ちゃんは笑顔で応援してくれてるけど、しろはという彼女がいる身としては、嬉しいような修羅場のような。複雑な心境だった。

「それじゃ、俺たちも駄菓子屋に行こうか」

「はい！ お腹にたまるお菓子、食べたいです！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださいな」

「いらっしやい」

駄菓子屋に到着すると、今日はおばーさんの姿しかなかった。

「あれ、今日は蒼も藍も居ないんですか？」

「今日は二人とも来てないね」

「そうなんですな」

「たぶん、キャンプで疲れたんじゃないかね」

俺たちもついさつきまで休んでいたし、その理由はもつともだつ

た。

「それじゃ夏海ちゃん、好きなお菓子選んでいいよ」

「羽依里さん、おススメの駄菓子とかありませんか？」

駄菓子の棚の前に立っていた夏海ちゃんから、そんな質問が飛んできた。

「え、おススメ？」

「はい。お腹にたまるのが良いです」

「えーっと、そうだなあ」

夏海ちゃんにそう言われて、一緒に駄菓子の棚を見る。

イカラーメンとか、カンデーはよく噛むから、お腹にたまる感じがするけど、女の子が食べるものとしてどうなんだろう。

「それじゃ、これなんかどうかな」

俺が選んだのは、チョコビックリバーだった。子供の頃、チャンバラ代わりに遊んだりもした、大きなチョコバーだ。

「すごく大きくて、美味しそうですね」

「実は、この大きさと一本30円なんだよ」

「え、すごく安くないですか？」

製造方法とか原材料とか詳しく知らないけど、とにかく安いのがこのチョコビックリバーの特徴だった。まさにビックリだ。

「それじゃ、これにします！」

夏海ちゃんはそれを二本選んで、カウンターへと向かっていった。

「おばーさん、このお菓子ください」

「はいよ。二本で60万円」

「はい！ 60円です」

「59万9940円足りんの」

「明後日くらいに、きつと羽依里さんが払ってください！」

夏海ちゃんとおばーさんがお約束をやっている間、俺は駄菓子屋の中を眺めていた。

そういえば、今日はお客さんが少ない気がする。いつもなら、この時間でも何人か子供たちが居るんだけど。

「今日はお客さんが少ないんですね」

何の気なしに、おばーさんに聞いてみる。

「今日は港に出店が出ているらしいからの。皆そっちに行つたんじやろう」

「え、なんの出店ですか？」

「さあ？ 本土から人が来ておるらしいの。珍しいのか、盛り上がつとつた」

なるほど、それでお客さんがいないのか。

いつもなら、出店は午前中で終わる場合がほとんどだ。裏を返せば、今日の店はそれだけ賑わっているということだ。

「夏海ちゃん、ちよつと港に行つてみない？ お菓子食べながら良いからさ」

ちよつと興味を引かれたので、夏海ちゃんにそう提案してみた。

「そうですね、行つてみましょう！」

両手に一本ずつのチョコビックリバーを持って、夏海ちゃんはお満悦の様子だった。

駄菓子屋のおばーさんにお礼を言つて、俺たちは港へと向かつて歩き出した。

その道すがら、夏海ちゃんはチョコビックリバーを開封する。

サクサクのパフの上に、刻んだピーナッツを混ぜ込んだチョコレートがコーティングされている。30センチ近い大きさがあつて、それだけで30円。絶対価格設定がおかしい。

「あのこれ、すごくドロドロなんですけど」

その最大の弱点は、食べにくいことだった。

しかもこの暑さで、パフ全体をコーティングするチョコが溶けてしまつている。

「美味しいですけど、すごく食べづらいですね」

夏海ちゃんのは口をいっぱいにかけて、チョコビックリバーにかじりついている。確かに食べるにこそうだった。

「あ、羽依里さんも食べますか？」

「いや、俺は良いよ」

食べにくいと言いなながらも、なんだかんだで結構なペースで食べてる。お腹は減ってるんだろう。

「あ、チョコがほっぺについてるよ」

その時、夏海ちゃんの左のほっぺたにチョコの欠片がついているのに気が付いた。

「え、どこですか」

左手はもう一本のチョコビックリバーでふさがっているので、右手の甲で器用に右の頬をぬぐっていた。残念だけど、チョコがついているのは左側の頬だった。

「ごっちごっち」

俺は反射的に右の人差し指で夏海ちゃんの頬をぬぐう。

「あ、ありがとうございます……」

「おお。懐かしい味だね」

そしてそのまま、何の気なしにチョコの欠片を口に運ぶ。子供の頃に食べたのと、何ら変わらない味だった。

「ふえっ!？」

素っ頓狂な声が聞こえた方を見ると、夏海ちゃんが顔を真っ赤にしていた。

「あ、ごめん。つい」

無意識に食べちゃった。別にしろはとそういう事してるわけでもないんだけど……なんだろう。慣れって怖い。

「いえその、べ、別に良いですけど……食べますか？ と聞いたのは私です」

夏海ちゃんはうつむいて、ごによごによと何か言ってる。俺としても、こんな形で食べるとは思わなかったけど。

その後、俺たちは微妙な空気のまま、港へと向かって歩いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「わ、すごいですね」

港に到着すると、かなりの数の子供たちが出店の前に集まっ
て、結構な騒ぎだった。

あれだけ盛り上がるっていうと、なんだろう。射的とかだろ
うか。俺たちは子供たちの間を抜けて、出店の中を覗き込んで
みる。

「あ、これって」

学校の運動会とかでよく見るパイプテントの下に、水の張ら
れたビニールプールが置かれている。その中には無数の金魚が
泳ぎ回っていた。この出店は、金魚すくいだった。

それにしても、暑さで水温が上がっているのか、ここの金魚
たちはやけに元気だった。

「この金魚たち、半分茹でられてないか……?」

何というか、生への必死さが伝わってくる。

「あ、ガーディアンだ!」

「ついに来たぞ、オレたちのガーディアンが!」

「おっちゃん、今度こそ目にもものみせてやるからな!」

俺の姿を見つけて、なぜか子供たちが一斉に歓喜する。一
体何なんだろう。

「おお、羽依里も来たのか」

声のした方を見ると、子供たちに交じって、良一や天善、
紬と静久、そして鳴がいた。紬の腕の中には、イナリの姿も
ある。

「あれ、もしかして皆も金魚すくいをやってるのか?」

「当然だ」

「もちろん!」

何故か、良一も鳴もやる気満々だった。金魚すくいって
子供の遊びのイメージがあるけど、どうしてここまで盛り上
がってるんだろう。

「お、新しい挑戦者か?」

その時、店の奥から声がした。

見ると、そこには茶髪の、いかにもガラの悪そうなオッ
サンが座っていた。サングラスをかけてタバコまで吸って、
思いつきり怖い。ま

さか、この人が店主だろうか。

「なんだ？ ガーディアンとか呼ばれてるから、どんな野郎かと思ったら、ただの冴えねえ小僧じゃねえか」

「こ、小僧……？」

初対面の人間から、いきなり小僧呼ばわりされたんだけど。

「待ってください！ 羽依里さんは冴えない小僧じゃないですよ！」

夏海ちゃん、そこにフオローいらないから。

「かつ、どうせ、歌を忘れたカナリアとか、ウォーターソルジャーの異名を持ったこととかあんだろ？」

うぐつ、なんだろう。この心の傷をえぐられるような感じは。

「それにしても teme、俺様のこの店を『伝説の金魚すくい屋』と知って、やってきやがったんだろ？」

「え、伝説？」

伝説ってどういうことだろう。この中に高級金魚でも混ぜてるんだらうか。

よく見ると、実際に金魚すくいに挑戦しているのは良一や天善だけみたいだ。集まっている子供たちは、そのほとんどが野次馬みたいだった。

「羽依里、落ち着いて聞いてくれ。この金魚すくいにはな、ボスがいるんだ」

「ごめん良一、言ってることの意味が分からない」

「あそこを見てくれ」

そう言っつて良一の指さす先を見ると、ビニールプールの中に、他の金魚とは比べ物にならないくらい大きな金魚が泳いでいるのが見えた。

「なんだあれ？」

「あれだ。あれがボスなんだ」

「でもどうして、あんな大きな金魚が入ってるんですか？」

「フツ。そこでクイズだ！」

夏海ちゃんが疑問を口にしたタイミングで、オッサンが立ち上がる。なんと言うか、ものすごく筋骨隆々でたくましい人だった。

「見事あのボスをすくうと、賞品として何が貰えるでしょうか？」

「1. 金一封！ 2. 金一郎！ 3. キンリンポー！ さあ、どれだ？」

「いや、その額縁に『金一封』って書かれた封筒がこれ見よがしに入ってるし、普通に金一封じゃないのか？」

「ブー。正解はキンリンポーでした。テメエは一人でキンリンポーしてな」

「えええ」

全く持つて意味が解らないけど、ものすごい敗北感だ。何だろうこの人。いい年のはずなのに、俺たちと同年代に思えてしまう。

ところで、キンリンポーって何？

「で、ガーディアン小僧は金魚すくいやるのか？ やらねえのか？」

なんだろう。今までの話の流れをぶった切って、店員モードに戻ったし。すごく疲れるんだけど。

「一回いくら？」

「ポイ一つ100円だ。びた一文まけねえぞ？」

伝説の店の割には、値段は普通だった。

「よし、やってやる」

よくわからないオッサンだけど、なんとなく、この人の鼻を明かしてやりたくなったし。

「夏海ちゃんはとうする？」

「私もやってみます！ 金魚すくいは自信があるんですよ！」

「ほう。ヘタレ小僧より、そっちのお嬢ちゃんのほうが度胸があるんじゃないかね？」

次から次に俺の呼び名が変わっている。すごいレパートリーだった。

俺と夏海ちゃんはオッサンに代金を支払って、ポイとお腕を受け取る。

「俺たちも行くぜー！」

「ああ！」

「リベンジだよー！」

俺たちが続いて、良一と天善、嶋も代金を支払っていた。この三人もやる気のようにだ。

そして俺たち5人はビニールプールの半分を囲むように配置につく。

「がんばれ、ガーディアン！」

「夏海ねーちゃんも、がんばれ！」

「キャプテン、がんばってー！」

背後から子供たちの声援が飛んでくる。先の宝探しイベントのこともあるし、キャプテンつてのは嶋のことだろう。

ちなみに、少し離れたところで静久と紬が状況を見守っている。あの二人は今回は静観するみたいだった。

「そうそう。別にその辺の金魚をすくってもらってもかまわねえぞ？
だが、その程度で満足して、キャツハウフフと楽しむのは、小学生までだよな」

オッサンが俺たちを一瞥して、挑発するかのように言う。夏海ちゃんは一応小学生なんだけど。

「どんな手を使っても、あのボスをすくうことができりや、文句なしで金一封はお前たちのもんだ。せいぜい頑張るんだな」

オッサンは新しいタバコに火をつけて、どっかりと腰を下ろす。

これまで散々、さぎえやエビに足元をすくわれてきた俺たちだ。今更、金魚相手に怯むはずがない。

「まあ、見ててくれ……いくぞー！」

周囲を泳いでいる無数の金魚は無視して、俺たちはボスだけに狙いを定める。

ボスは俺たちの様子が見えているのか、プールの奥の方からゆっくりとこちらに向かって泳いでくる。

まだ、俺たちの間合いじゃない。

「……そういえば、ここにも空門姉妹は来てないんだな」

俺はボスの動きを見極めながら、隣の天善に話しかける。

「寝不足だと言ってたな。まあ、あの二人は昨日も良く眠れていなかったようだし、仕方ないんじゃないか」

天善は卓球のラケットよろしく、ポイで素振りをしていた。あの動きでボスを一気にすくい上げるつもりなんだろうか。

「しろしろは食堂の準備があるらしいよ。のみきさんは寄合だつて」
鴉はまるで鳥が獲物を狙うような鋭い眼光で水面を睨みつけたまま、この場にはいない二人の動向を教えてくれた。

鏡子さんも少し前に寄合に出かけていったし、また何か話し合いがあるんだろう。

「まあ、ライバルは少ないに越したことはない」

良一はニヤリと笑う。本気で金一封を狙っているみたいだ。

その時、ボスがこっちに向かってきた。いよいよ勝負の時だ。

「よし、今だー！」

俺は素早くポイを動かし、ボスを狙う。

しかし、ボスは俺の攻撃をあざ笑うかのようにかわし、逆に尻尾の一撃でポイを破っていった。

「な、なに!?!」

間合いに入った瞬間、急にボスの動きが速くなった。あいつ、実力を隠していやがったな。

「あー！」

「うひゃーー！」

「なんだと!?!」

「マジかよつ!?!」

俺に続いて、他の皆も同じようにやられているようだ。水面が波打つたび、悲鳴と絶叫が聞こえる。

「くそ、なんて化け物だ……」

正直、すくうとかどうこうの問題じゃなかった。完敗だった。

というか、間近で見てわかった。あれは金魚じゃない。コイだった。動きが金魚のそれと違いすぎる。

しかも、このお椀にギリギリ入るかどうかの、巨大サイズだった。

「これ、無理ですよ……」

「かつ、そうだろそうだろ。そう簡単にすくわれるようじゃ、ボスじゃねえよな」

金魚すくいには自信があると言っていた夏海ちゃんだけど、その自信は粉々に打ち砕かれてしまったようだ。対するオッサンは得意顔だった。

「ウオーターソルジャーも残念だったな。今ここでやめて帰るなら、残念賞として金魚を一匹くれてやろう。だがそれだと、てめーはただのヘナチンだ！」

「へ、ヘナチン……！」

なんだろう。初めて聞いた言葉なのに、すごく情けない気分になってくる。

「しかし、5人も居て瞬殺かよ……金魚すくいに対しては、この島の連中は強者揃いと聞いてきたんだな」

確かに、先日のさざえすくいやエビすくいに関しては、島の皆はすごく上手だと店の人が言っていた気がする。

「こりゃ、とんだ思い違いだったかもしれないねえな」

オッサンが紫煙を吐きながら、ため息混じりに言う。なんだろう。まるでこの島を馬鹿にされたみたいで、妙な怒りを覚えた。

「……オッサン、リベンジさせてくれ」

俺はオッサンの前に歩み出て、そう進言する。他の皆も同じ心境みたいで、同じように前に出ていた。

「あ、なんだ？ まだやるのか？」

「もちろんだ！ オッサン、島白島の島民を舐めるなよ！」

俺を含め、一部は一時滞在者だけど！

「皆、作戦会議だ！ あと、できるだけ人手が欲しい。紬と静久も参加してくれ！」

「わかったわ！」

「はい！」

俺が全員分のポイを購入した後、出店から少し離れたところで作戦会議を始める。

もう金一封がどうこうじゃない。これは意地だった。

「よしよし。なんだかんだで、これは良い副収入になるもんだな。最近は汐の学費も必要になってきたし、パン屋だけじゃ厳しい月もある

「からな」

オツサンが向こうの方で何か言ってるけど、今の俺たちの耳には入らない。

……俺の立てた作戦は、こうだ。

まず最初に、女性陣にボスを囲い込んでもらって、逃げ道を限定してもらおう。

ボスはその包囲網を突破した所で、俺や良一、天善が力にもの言わせてボスを水中から水面へ打ち上げる。

なんだかんだで相手も魚だ。空中に打ち上げてしまえば、身動きが取れなくなるだろう。

そして、無力になったボスが落下してくるタイミングに合わせて、全員でお椀を構えてキャッチしてしまおうというのだ。

「……こんな感じの作戦にしたいんだけど、大丈夫かな」

「いいだろう。今こそ、トレーニングの成果を見せる時だな」

「頼りにしてるわよ。加納君」

「は、はい！ お、お任せください！」

天善は静久に声援を送られたからか、ポイを持った手でもものすごい勢いで素振りを始めた。あこがれの人だからしょうがないけど、風圧で先に紙が破れてしまわないか心配だった。

「女性陣にはボスの追い込みをお願いしたいんだ。初動が大事だけど、頼めるかな」

「了解したよー！」

「任せて。パイの使い方は心得てるわー！」

静久、ちなみにその手に持つてるのはパイじゃなくて、ポイだからな。

その後も入念にお互いの動きを確認する。一発勝負だし、失敗は許されない。

「羽依里さん、この作戦、上手いききますかね？」

一回目の敗北を引きずっているのか、夏海ちゃんが弱気だった。

「皆の力を合わせれば、きっと何とかなるよ」

「そ、そうですよね」

夏海ちゃんの手前、そう言ったけど……正直、微妙なところだった。できれば、あと一人くらいバックアップ人員が欲しいところだけど……。

「ポン！」

その時、青い前足が俺の右足に置かれた。

「イナリ？」

「ポン！」

どこに持っていたのか、イナリが俺に300円を渡してきた。

「まさか、お前も手伝ってくれるのか？」

「ポンポン！」

「オツサン、イナリも参加していいか？」

俺はイナリから受け取った300円を持ってオツサンの所へ向かう。

「あ？ そのタヌキもやるか？」

「ポン！」

「まあ、好きにきな。ほらよ」

俺はオツサンからポイを3つ受け取って、それをそのままイナリへ渡す。

「ポン！」

イナリはそれを尻尾で器用に掴み、気合を入れていた。

「そうだよな。お前の立派に島の一員だもんな」

「ポン！」

当然！ と言われた気がした。ここは野生の力に頼らせてもらおう。

「よし。それじゃ、皆、やるぞー！」

「おー！」

皆で拳を突き上げてから、作戦開始だ。

「よーし、なっちゃん！ ここはチームプレーだよ！」

「はい！」

「紬、挟み撃ちにしましよー！」

「わかりました！」

鷗や夏海ちゃん、紬と静久の四人が四方からボスを囲い込み、逃げ道を限定していく。

数秒後、痺れを切らしたボスが鷗のポイを破り、包囲網を突破してくる。ここまでは想定内だ。

「いくぜー！ うりゃあああ！」

その包囲網の外で待っていた良一が打ち上げ攻撃を仕掛ける。しかし、さすがに初撃はかわされてしまった。

「よし、食らえー！」

回避動作の途中で動きが止まったところに、俺がすかさず追撃を仕掛ける。

「……あれ？」

一瞬手ごたえはあったんだけど、水面から持ち上げたと同時に、ポイが軽くなってしまった。

思わず手元を見ると、俺のポイが根元からポツキリと折れてしまっていた。

「まさか、ポイが折られた!？」

どれだけ重たいんだ、あのボス。

「フ……残念だったな。惜しかったぜ」

その様子を見ていたオッサンは勝ち誇ったような顔をする。

「……いや、ここからが真打登場だ」

そう言ったのは、いつもつけている重たいサポーターを外した天善だった。

「チョレーーーーーイ！」

次の瞬間、巨大な水柱が立ち昇った。天善が渾身の力で、ボスを空中へと打ち上げたらしい。さすが、卓球で鍛えた腕力だった。

「よし！ 皆、お腕を準備してくれ！」

仲間たちの連携攻撃で、ボスを水から叩き出すことには成功した。あとは、落ちてくるボスをお腕でうまくキャッチするだけだ。

「ちよつと、遠すぎない!？」

鷗がそう叫ぶ。言われて見てみると、ボスはパイプテントの天井近くにまで打ち上げられていて、そこから放物線を描きながら、俺たち

のお椀が届かない方向へ飛んでいく。

さすがに天善の力が強すぎたんだろうか。これじゃキャッチできない。万事休すだ。

「ポーーーーーン！」

その時、甲高い声と共にイナリがプールのフチから大きくジャンプした。その尻尾には、三枚に重ねられたポイが握られていた。

「ポポポーーーーン！」

イナリは空中で狙いを定め、その小さな体を回転させながら、ボスを俺たちの方へ弾き飛ばす。野生動物のイナリだからこそできる動きだった。

空中で完全に動きを封じられていたボスは為す術なく吹き飛ばされ、夏海ちゃんのお椀の中に飛び込んだ。

「わっ、わっ、わっ！」

さすがに夏海ちゃんも驚いたみたいで、ボスの入ったお椀を両手で押さえながら、慌ててプール脇から立ち上がる。

「や、やりました！ すくいましたよ!？」

夏海ちゃんはお椀を抱えるようになりながら、オッサンに見せる。

「……」

そのオッサンは口をあんどりと開けて固まっていた。まさかの出来事に、動揺を隠しきれない様子だった。

「やったあああ！」

誰からともなく歓声上がる。俺たちの勝利だった。

「……ほらよ。受け取りな」

「あ、ありがとうございます……」

夕日に染まる港で、オッサンは金一封を夏海ちゃんに渡していた。最終的に夏海ちゃんのお椀にボスが入ったから。という判断らしい。

「それで、うまいもんでも食いな」

オッサンは震えている。サングラスの下に、光るものが見えたよう

な気もする。

ちなみに、勝負が決したということで、野次馬の子供たちもいつの間にか帰ってしまった。

そして、すくったはいいものの、さすがに誰の家でも面倒見きれないということ、ボスはオッサンの元に返されていた。

「でもあの、これですけど」

夏海ちゃんは受け取った封筒をじつと見つめた後、おずおずと口を開く。

「私より、イナリさんが受け取った方がいいと思うんです」

「え、イナリに？」

「ポン？」

俺の足元にいたイナリが不思議そうに顔を上げていた。

ちなみに、そのイナリはびしょ濡れになっていた。ジャンプして最後の一撃を放った後、プールの中に落ちてしまっていたらしい。

「でも、なんで？」

「やっぱり、イナリさんの協力がなかったら、ボスを捕まえられなかったと思うんですよ」

確かに、最後のイナリのフォローが無かったら、ボスを捕まえることはできなかったと思う。

「えつと、ダメですか？」

「……うん。いいんじゃないかな。皆もそれでいい？」

「そうだね！ イナリも大活躍だったし！」

「夏海が決めたんなら、いいんじゃないか？」

「はい！ イナリさんにトクベツコーローションをあげましょう！」

今回はイナリの功績が大きいのは明白だし、皆笑顔で了承してくれた。

「はい、イナリさん。これで高級油揚げでも買ってもらってくださいね」

「ポン！」

そして、金一封は夏海ちゃんからイナリへと渡された。

「ポンポーン！」

イナリはお礼を言うかのように何度か飛び跳ねた後、封筒を口にくわえて、走り去っていった。

イナリのことだから、帰って蒼にでも渡すのだろうか。

「さて、俺たちも帰ろうぜー」

「そうだな」

「楽しかったねー」

良一の一言を皮切りに、俺たちも帰宅の途に就くことにした。

なんだろう。珍しく熱くなってしまった。なんだかんだで、まだキャンプのテンションを引きずっていたんだろうか。楽しかったし、全然いいけど。

ちなみに、帰り際にオツサンの方を見ると、海の方を向いて黄昏ていた。かける言葉が思いつかなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

日が暮れた頃、俺と夏海ちゃんはしろは食堂を訪れていた。

思えば、数日振りの食堂のような気がする。

「しろはー」

「しろはさん、こんばんわー」

「やー」

扉を開けて食堂に入ると、鴎がいた。

「鴎さん、こんばんわです！」

「なっちゃん、羽依里、こんばんわー」

鴎はカウンターの一番端に、隣にスイーツケースを据えて座っていた。

「今日は鴎も食堂なのか？」

「うん。作ろうかとも思ったんだけど、なんだかんだで疲れちゃって」
「キャンプであれだけ歩いた後に、金魚すくいまでやってたし。そ

りや疲れるよな。

「のみきさんも寄合で遅くなるって言ってたし、料理もサボっちゃったんだよねー」

鴎はカウンター席の下で足をばたつかせながら、笑っていた。そういえば、鏡子さんもまだ寄合から戻っていなかったし、のみきも遅くなるんだらう。

「いらっしやい。二人は何にする？」

俺がセルフの水を二つ持って、鴎の隣に座ると、すぐにしろはがおしぼりを渡してくれ、注文を聞いてくれる。

「それじゃ、たまにはコロツケ定食にしてみようかな」

「あ、私もそれでお願います！」

「わかった。少し待っててね」

しろははそう言うのと、奥の方で調理を始めた。すぐにコロツケを揚げる良い匂いが漂ってきた。

「そういえば、しろはは疲れてないか？」

キャンプから戻ってから食堂の開店準備なんて、大変だったはずだ。

「午前中はちゃんと寝てたし、大丈夫だよ。開店準備だって、いつもやってることだし」

「それならいいけどさ」

「心配してくれてありがとう。はい鴎、日替わり定食おまちどうさま」
「ありがとう！」

どうやら先に鴎の料理が完成したらしい。ごはんのみそ汁、サラダと小鉢に加えて、メイン料理が乗った皿が鴎の前に置かれた。

「俺たちのことは気にせず、食べてくれていいぞ。せつかくのしろはの料理が冷めちゃうし」

「ごめんね。それじゃお先に。いただきまーす」

鴎は笑顔で手を合わせた後、さっそくごはんを口に運んでいた。

見るつもりはないのだけど、すぐ隣だし、どうしても鴎の食べている料理が目につく。どうやら、今日のメインは唐揚げみたいだった。

「今日の日替わりは唐揚げ定食なのか？」

「みたいだね。変わった味だけど、ハーブが効いてて美味しいよ」

もぐもぐと、鷗は笑顔で唐揚げをほおばっている。小鉢には半熟の煮卵もついていて、美味しそうだった。

「それにしてもメインの唐揚げ、ちよつと少なくないか？」

「私はこれくらいでちょうどいいけど。女の子だし」

自家製ドレッシングのかかったサラダを口に運びながら、鷗が言う。

「今日のは鳥はお肉も少ないし、癖が強いから」

「え、癖が強いつてどういうこと？」

「あ」

その時、しろはが口元を手で押さえて固まった。どうしたんだろう。

「え、それつてどういうこと？」

鷗が箸で唐揚げを摘んで、しげしげと眺めていた。俺や夏海ちゃんもつられて見てみる。言われてみれば、まるで竜田揚げのような色合いをしていた。

「もしかして、この唐揚げつて鶏じゃないとか？」

「お、教えてあげないよー!」

「それ私の台詞!」

しろは明らかに動揺していた。それはもう、鷗お得意の台詞を奪ってしまうくらいに。

「……ねえしろしろ、今日の日替わり定食の食材つて何？」

鷗が箸を置いて、真剣な顔でしろはを見ていた。

「し、知らないほうが良いよ。絶対後悔するから」

対するしろはも真顔で即答していた。そういう風に言われると、余計気になる。

「俺も気になるんだけど」

「わ、私も気になります」

俺たちも食材が気になったので、同じようにしろはを見つめてみる。

「……それじゃ、羽依里にだけこっそり教えてあげる」

観念したのか、しろはがそう言つてカウンターから身を乗り出してくる。

俺も立ち上がつて、しろはの口元に耳を向ける。

「実は、あれはね……(づ)によ(づ)によ」

「え、カモメの肉!?!」

俺は思わず声に出してしまつていた。

「ふぎやー!」

直後、鷗がカモメのような悲鳴を上げていた。

「こ、声大きいよ! 思いつきり聞こえちやつてるし!」

今日の日替わりは、まさかのカモメ定食だった。

「まさか鷗、共食いしていたとはな」

夏海ちゃんも驚いたみたいで、口元を隠したまま、鷗と唐揚げを交互に見ていた。

「羽依りもなつちゃんも、そんな可哀想な物を見るような目で見ないで……」

鷗は頭を抱えていた。俺も思わず口に出してしまつたけど、知らないほうが良かったかもしれない。

「ところでしろは、この島の人間は日常的にカモメの肉を食べるのか?」

「た、食べないよ。今回はたまたま」

「たまたまつて、どういうことですか?」

「えっと、実はね……」

しろはは料理作りを再開しながら、カモメ定食を作ることになった経緯を話してくれた。

「この食堂で使う魚は、いつもおじーちゃんが獲つてきてくれるのは知ってるよね」

「ああ、ちよくちよく持つてきてくれてるよな」

「おじーちゃんが沖で投網を引き揚げてるとね。網にかかった魚目当てに、カモメが網に飛び込んでくることあるんだって」

「え、そうなんですな」

なるほど、カモメにしてみれば、海面に大量の獲物があるように見えるだろうしな。

「それで飛び込んだのは良いけど、そのまま網に絡まっちゃって死んじゃうカモメもいるらしくて」

「うう、なんだか背筋が寒くなってきた。昨日のどの怪談話より怖いかも」

鴉は自分の肩を抱くような仕草をしている。同類の死を憐れんでいるんだろうか。

「もしかして、しろはのじーさんはそのカモメを持って帰ってきたのか？」

「うん。さすがにびっくりしたけど、やっぱり礼儀だし、食べてあげない」と

「それで、カモメ定食を思いついたと」

「そう。色々と味付けしてみたんだけど……美味しいよね？」

「うーん……」

鴉は再び箸を取ると、恐る恐る、カモメの唐揚げを口に運ぶ。

「美味しいけど、正体知っちゃったら物悲しい……」

「あの、しろはさん。もしかして、あの煮卵もカモメの卵だったりするんですか？」

「あ、それは普通の鶏の卵だよ」

さすがに違ったみたいだ。さすがに投網の中に、卵は飛び込んでこないだろうし。

ところでカモメってどこに巣を作るんだろう？ 考えたことが無かった。

鴉は何とも言えない表情のまま、カモメの唐揚げを頬張っていた。

「……お腹壊さないか心配」

「そ、その辺は大丈夫だと思っけど」

「……はっ。まさか、明日の私と羽依里のデートを中止にするために……!？」

「そ、そんなことしないし！ そんなことしなくても、どのみち羽依里は私のものだから！」

うおお、しろはさん、言い切った。

「うう、あついあつい！ 焼き鳥になりそう！」

鷗はカモメ定食の仕返しとばかりに、両手でわざとらしく扇いでいた。

しろはも言ってから、しまったと思っただろう。顔を真っ赤にしていた。夏海ちゃんも顔真っ赤だし、なんだろうこの状況。

「お、おまちどうしやまー！」

その時、しろはが舌を噛みながら、俺たちの料理を運んできてくれた。味噌汁、こぼれそうな勢いだっただけ。

「お、美味しそうだね！ いただきます！」

俺はその微妙な空気から逃げるように、食事に没頭した。島味噌の味噌汁、美味しい。

ちなみに俺たちが食事をしている間、しろははカウンターの奥に引っ込んで、頭を抱えながら小さな声でぶつぶつ言っていた。さすがに距離が離れすぎていて、聞き取れなかったけど。

「それじゃ、明日はよろしくね、羽依里！」

鷗は一足先に食事を終わると、そう言っただけで食堂から颯爽と去っていった。本当にさっぱした性格だよな。

「ふう。ぐちそうさま」

「しろはさん、ぐちそうさまでした！」

それからしばらくして、俺たちも食事を終えて、席を立つ。

「……ねえ羽依里、明日はちゃんとお泊りせずに帰ってきてね」

お代を受け取ったタイミングで、隣に夏海ちゃんがいるのも気にせず、しろはは上目遣いでそう言ってきた。本人は気づいていないようだったけど、抱きしめたいくらいに可愛かった。

……そろそろ、しろはと一緒にどこかに出掛けて、安心させてあげないと。

……そのためにも、明日を無事に乗り切らないと。
そんなことを考えながら、俺は夏海ちゃんと一緒に加藤家へと戻っ
ていった。

第二十四話・完

第二十五話 8月16日

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

がららと音を立てて、ふすまが開け放たれた。朝日と共に夏海ちゃんの声が飛び込んでくる。

「おはよう、夏海ちゃん」

「おはようございます」

「あれ？」

逆光でよく見えないけど、夏海ちゃんは朝からほうきを持っていった。

「なんでほうきなんて持つてるの？」

「……実は、朝からコップを割ってしまいました」

夏海ちゃんは申し訳なきそうに頭をうなだれる。

「台所で水を飲もうとしたら、手が滑っちゃいました。ごめんなさい」

「別に謝る必要はないけど……大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「あ、それは大丈夫です！」

右手にはほうきを持っているので、夏海ちゃんは左手をひらひらと振っていた。

「小さい欠片とかあるんじゃないの？ 手伝おうか？」

「ありがとうございます。あと少しで終わるので、先に玄関で待っていてもらえませんか？」

「わかったよ。くれぐれも気をつけてね」

「はい！」

夏海ちゃんはほうきを持ち直して、ぱたぱたと台所の方に駆けていった。朝から元気だなあ。

俺は背伸びをして、布団から立ち上がる。

昨日の夜はぐっすり寝たせいとか、キャンプの疲れも残っていないみたいだ。

「今日は鷗とのデートもあるし、へばってる場合じゃないしな」

俺はそう考えながら布団をたたみ、洗面所へと向かった。

「おまたせしましたー」

身支度を整えて玄関で待っていると、夏海ちゃんがやってきた。

「今日からまた心機一転、頑張りましょう！」

夏海ちゃんはそう言いながら、笑顔でラジオ体操のスタンプカードを持っていた。

キャンプに行った関係で皆勤賞は途絶えてしまったけど、ラジオ体操は元々健康に良い。行けばログボももらえるし、行かない理由はなかった。

「それじゃ、行こうか」

「はいー」

俺たちはいつものように並んで、ラジオ体操へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里、なっちゃん、おはようー」

神社の境内に着くと、いつものメンバーに混ざって、鷗が居た。

「鷗さん、おはようございますー！」

「おはよう、鷗」

「羽依里、今日はよろしくね！」

「ああ、こつちこそ……」

清々しいほど笑顔の鷗に、俺も笑顔でそう返そうとして……周囲の視線がふと気になる。

「なあ鷗、今日のデートについては、あまり大きな声で言わないでくれ。変な噂になったりしたら大変だし」

「え、良いじゃない。デートに行くのは本当なんだからー！」

「だから、声が大きいつてー！」

「えー、しろしろ公認だし、別に良いでしょ？」

「何というか、あまり事を大きくしないで欲しいんだ。島ではすぐに噂が広まるし。尾ひれもすぐに付くし……はっ!?!」

気が付けば、俺と鴎の周りに人だかりができていた。皆、一様に生暖かい目で見ていた。

「夏海ちゃん、他人の迷惑を考えない、あんな大人になってはいけませんよ」

「はい。胸に刻んでおきます」

藍がジト目でこつちを見ながら、夏海ちゃんをそう論していた。というか、夏海ちゃんもいつの間にかそつち側に行っていた。

「あーうー、とにかく羽依里、9時に港でね!」

島民たちの視線が痛すぎて、さすがにその場にいられなくなってしまったんだろうか。鴎はきびすを返し、神社から去っていった。

「逃げたな……」

その間にも、ひそひそ声が聞こえる。

聞こうとしなくとも、小奇麗な格好をした三人組の女の子たちの会話が耳に入ってきた。

「あの人、フィアンセがいるくせに、あいさまだけじゃなく、キャプテンともデートするらしいわ」

「むぎゆ姉ともデートしたって話よ」

「さすがはシティーボーイね」

むぎゆ姉ってのが紬のことだろう。キャプテンってのは鴎のことかな。

「本土のホテルに、あいさまたちをつれこもうとしたとか」

空門姉妹とのデートの話も、尾ひれがついてすごいことになってるし。

「うう、皆の視線が痛い……」

だけど、俺は逃げられない。ラジオ体操大好きさん、早く来ないかな……。

「よし、今日のラジオ体操はここまでー!」

「ありがとうございますー!」

あの後、すぐにラジオ体操大好きさんがやってきた。一心不乱にラジオ体操をして、色々と忘れることができた。

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

いつものようにスタンプを押ししてもらい、ログボを受け取る。

「おお、今日のログボはパンだ」

『徳田製菓』と書かれた茶色いコンテナに、透明な袋に入ったパンが並んでいた。先に貰った子供が食べているのを見ると、どうやらあんばんみたいだった。

「あんばんっ……」

夏海ちゃんがどつかの演劇部部长みたいな台詞を口にしながら、あんばんを見つめていた。どうも、チャーハンの具材にできないことを嘆いているみたいだ。

「それにしても、徳田んところはスポーツ用品の販売だけじゃなく、色々やってるんだな」

「ああ、スーパーは潰れちまったが、パン屋は港の商店にパンを卸しているみたいだし、それなりに順調なんじゃないか?」

良一があんばんを食べながら、そう教えてくれた。

「……ねえのみき、封筒の落とし物とか、役所に問い合わせが行ってない?」

「いや、特に来ていないが。どうした?」

もらったあんばんを食べようか考えていると、すぐ近くで空門姉妹とのみきの声が聞こえた。

「昨日イナリがね、『金一封』って書かれた封筒を持ってきたのよ」

「な、なんだそれは」

「よくわかりませんが、『金一封』とだけ書かれていたんです」

「おかーさんは、臨時収入が入ったーって、喜んでたけどねー」

「へそくりにするには、ちよっと多すぎる金額が入っていたので、もし落とした人がいたら、返したいんですけど」

「わかった。紛失物届が出ていないか、調べてみよう。もし落とし主

が現れたら、知らせる」

「よろしくねー」

あー、これは、教えてあげた方が良いかも。

「あのさ、二人とも……」

「羽依里さーん、帰りますよー!」

二人に教えてあげようとしたとき、神社の入り口から夏海ちゃんに呼ばれた。

「もー、置いてっちやいますよー!」

ログボがチャーハン素材じゃなかったからだろうか。夏海ちゃんは明らかに不機嫌そうだった。

「え、もしかして羽依里、夏海ちゃんの尻に敷かれてる?」

蒼が口元に手をやりながら、何とも言えない顔で俺を見ていた。

「え? いや、そんなはずはないけど」

「ほとんど毎朝起こしてもらっていて、朝ご飯も食べさせてもらってるって噂も聞きましたが、本当なんですか?」

「うわ、それってヒモってやつじゃないの?」

蒼、その言い方はいろいろと語弊がある。噂はほぼ合ってるけど。

「え、それは、えーっと」

「羽依里さーん!」

俺がしどろもどろになっていると、再度夏海ちゃんが俺を呼んだ。

「あ、すぐ行くよー!」

これは好機とばかりに、俺も夏海ちゃんを追って、神社を後にした。

結局、金一封の件は俺から伝えることはできず、うやむやになってしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅すると、夏海ちゃんは笑顔で俺の手からあんばんを奪い取り、台所へ向かっていった。

その覚悟を決めた背中に、俺はかける言葉が浮かばなかった。

「もしかしくなくても、あんぱんチャーハンが出てくるのかな……」
俺は自分の無力を痛感しながら、居間に座って朝ごはんが出来るのを待っていた。

沈黙が嫌で、適当にテレビをつける。

画面の向こうでは、科学部部隊によるNYP講座という、なんだかよくわからない番組が放送されていた。

「いやでも、あんぱんチャーハン……」

適当に画面を見ながらも、やっぱり、台所の様子が気になる。

そういえば少し前、しろはがあんぱん定食つてのを作っていた気がする。

あれはあれで美味しかったけど、お皿は別々だったし。

「あんぱんを直接ごはんと混ぜてチャーハンにしちゃうなんて……！」

いくらあんぱんが和洋折衷の食品だからって、そこに中華も混ぜるなんて駄目だ。混ぜるな危険だ。

「……やっぱり、止めに行こう」

俺は意を決して立ち上がり、台所へと向かう。

「おまたせしました！ あんチャーハンです！」

その時、おぼんにチャーハンを乗せた夏海ちゃんが居間にやってきた。

「……しまった。間に合わなかった」

「え、何が間に合わなかったの？」

「あれ、鏡子さん？」

夏海ちゃんに続いて、鏡子さんが台所から顔を覗かせた。いつの間に台所にいたんだろう。

「朝から姿が見えなかったんで、いないのかと思ってましたよ」

「用事で港に行ってたんだよ。家に帰った時は、二人はまだラジオ体操に行っていたかな」

ああ、そういうことだったのか。

「でも、鏡子さんがどうして台所に？」

「ちょうど港で魚を貰ってね。下ごしらえをしたの。そしたらそこに、夏海ちゃんがやってきてね」

思えば、鏡子さんは手に大き目のバケツを持っていた。同時に、妙な魚臭さも感じる。

「下ごしらえって何の？」

「アンコウだよ」

「アンコウ？」

もしかしくなくても、あのグロテスクな深海魚だろうか。でもアンコウって、冬のイメージなんだけど。夏も獲れるんだ。

「それで、せっかくだから夏海ちゃんにチャーハンにしてもらったの」「はい！ 鏡子さんのおかげで、立派なあんチャーハンができました！」

俺は居間のテーブルに置かれたチャーハンをよく見てみる。どれだけ見ても、あんこもパンも入って無かった。

「そ、そうなんだ。良かった……」

俺は安堵のあまり、その場に座り込んでしまった。

「座り込みじゃうくらいお腹空いてたんですか？ せっかくですし、三人で食べましょう！」

「そうだね。ただこうかな……」

その後、鏡子さんも含めた三人で食卓を囲む。

アンコウを使ったあんチャーハンは、鏡子さんの下ごしらえが良かったのか臭みもなく、美味しかった。

「おいしいですねえ」

夏海ちゃんの機嫌も直ったみたいで、笑顔でチャーハンを口にしていた。

「俺はてつきり、今日はあんぱんチャーハンが出てくるのかと思ったよ」

「まさか羽依里さん、私があんぱんをチャーハンに入れるとも思ってたんですか!？」

「うん。思ってた」

俺の手からあんぱんを奪い取った時の夏海ちゃんの目は、それを予感させるに足る迫力があつたし。

「ひどいです……私は羽依里さんが鳴さんとのデートを前に、精がつくようにですね……」

「ぶっ!？」

あやうく、チャーハンが変な所に入りそうになった。

「な、夏海ちゃん、さすがにそれは気を回しすぎだと思うよ……」

朝食を済ませた後は、慌ただしく出かける準備をした。

鳴曰く、島に行きたいとのことだし、マリンジエツトも使うということで、濡れても良いような服装を選ぶ。

特に何をすることも聞いていないので、財布に時計と、適当に必要なものだけを持って、加藤家を後にする。

「それじゃ、行ってくるよ」

「はい、気をつけて行ってきてください!」

夏海ちゃんが玄関から見送ってくれる。鏡子さんは朝食を食べるとすぐに、また出かけてしまったらしい。

「夏海ちゃん、今日はどうするの?」

俺は出かけるからいいけど、島に残る夏海ちゃんは退屈してしまうんじゃないだろうか。

「今日は久しぶりに沢田さんの所に行ってみようと思います」

「ああ、あのウリボウのところだね」

「はい! 最近、会いに行けてなかったですし!」

あのウリボウも本当に夏海ちゃんに懐いてるし、良いんじゃないかな。

「あとは、駄菓子屋さんに入り浸ってもいいかもしれませんね。いざとなれば、羽依里さんから借りたMDもありますし」

夏海ちゃんもすっかり島ライフを満喫しているみたいだった。

「とうわけで、羽依里さんも楽しんできてください！」

「うん。ありがとう」

「あ、救命胴衣だけは、きちんとつけてくださいね？」

「うんうん。わかってるよ」

笑顔の夏海ちゃんに見送られて、港へ向けて歩き出す。

蝉たちは今日も朝から元気よく空に向かって鳴いている。今日も暑くなりそうだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よし、到着」

港に着いて腕時計を見ると、8時50分。

鷗と約束した時間の、ちょうど10分前だった。

ちなみに港は港でも、俺が鷗と待ち合わせしたのは住宅地近くの、漁港の方だ。

なんでも、こっちのほうがマリンジエツトを泊めやすいらしい。

「えーっと」

港をぐるっと見渡してみるけど、まだ鷗の姿はないみたいだ。

男の俺が遅れるわけにはいかないし、ひとまず安堵する。

「どの辺で待っていいのかな……」

そんなことを考えながら、歩いていると……。

「あれ。なんでこんな所に、鷗のスーツケースが？」

建物の陰に、鷗のスーツケースがぼつんと置かれていた。

この色合いに、目印のシール。散々押しているし、今更見間違えるはずがない。

「……トイレでも行ってるのかな」

改めて周囲を見渡してみても、鷗の姿はなかった。

俺はそのスーツケースの横に立って、本人が現れるのを待つことにした。

「イリユージョン!」

「どわああああ!?!」

そのタイミングでスーツケースが開き、中から鷗が飛び出してきた。

俺は思わず、その場に尻もちをついてしまった。

「な、なんてところに隠れてるんだ!?!」

「びつくりさせようと思って」

驚きすぎて、心臓が飛び出るかと思った。

「というか、わざわざ隠れたりしないで、そのまま待ってれば良かったのに」

俺は起き上がりながら、ため息交じりにそう言う。

「だって、水着姿で待ってるとか、恥ずかしいじゃない」

言われてみれば、鷗は白い水着の上に、薄いパーカーを羽織っていた。

普段の格好からのギャップのせいか、目のやり場に困る。

「というか、何で水着なんだ」

「だって海に出るんだし、濡れても良い格好って言ったら水着でしょ?」

「まあ、そうだけどさ」

「心配しなくても、スーツケースの中に普通の服も入ってるから」

「そうなのか。なら安心だな」

何が安心なのか、よくわからないけど。

「それで、今日は島に行くんだよな」

「うん! 羽依里、今日はよろしくね!」

もの凄く眩しい笑顔で言われた。元々可愛いとは思っていたけど、服装のせいもあってか、より一層可愛く見えてしまう。

「し、しろには勝てないけどな!」

「え、何が?」

「い、いや、なんでもない。なんでもないぞ」

最後の方、心の声が口から出たみたいだ。危ない危ない。

「それより、マリンジェットはどこだ？」

「向こうに泊めてあるよ。はいこれ、鍵」

どこに持っていたのかわからないけど、鴎からマリンジェットの鍵を受け取る。

「それじゃ、さっそく出発しよう」

「あ、羽依里待つて。その前にあれ、見てみない？」

「え、あれって？」

「あそこあそこ。出店が出てるよ」

鴎が指し示す先には、二つの出店が出ていた。同時に二店舗とか、珍しいな。

「まあ、いいけど」

時間はたつぷりとあるし、鴎が見たいというんなら、一緒に見てみよう。

そう考えながら、二人並んで出店の方に近づいていく。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ひとつはたこ焼き屋さんだね」

一店舗目は、頭上に見慣れたタコの看板がついていた。どう見ても、たこ焼き屋だった。

「もしかして鴎、朝飯食べてないのか？」

「ううん。しっかり食べたよ」

俺も朝からアンコウチャーハンを食べたし、正直たこ焼きという気分じゃない。

『『モーニングセット販売中！』って書いてるけど、どうなんだろうね』
「どうなんだろう」

たこ焼きにモーニングも何もないと思うんだけど。

結局、たこ焼き屋はスルーして、次の店舗を見てみることにした。

「なにこれ、アクセサリーショップ?」

出店のテーブルに淡い色のクロスが敷かれ、値札のついたペンダントやブレスレットが並んでいた。

都会にあるような小洒落た感じの店じゃなく、手作り感溢れるハンドメイドショップのようだった。本土から来てるみたいだけど、変わった店だな。

「いらっしやいませ。どうぞ、試着して頂いてかまいませんよ」

「あ、どうも」

店員のお兄さんに声をかけられて、俺も思わず返事を返してしまった。男女だし、カップルと思われたんだろうか。

「おおー、色々とききれいな石があるー!」

宝石……じゃないみたいだ。小さな欠片みたいなのもあるし、天然石って奴だろうか。

「せっかくだし鷗、何か一つ買ってやるよ」

「え、ホント?」

言ってから、しまったと思った。とんでもなく高いのを選ばれたらどうしよう。

「どれがいいかなー」

嬉しそうに品定めを始めた。これは後戻りできそうにない。

「あの一、これって?」

しばらくすると、鷗は青紫色の石を手にとって、店員さんに質問していた。

「それはタンザナイトです」

「タンザクイモ?」

「食べないでくれよ。頼むから」

ちなみに鷗は、この手のものには詳しくないみたいだった。そりやそうか。光るものを集めたがるのはカモメじゃなくてカラスだしな。

「羽依里、なんか失礼なこと考えてない?」

「いや、全然そんなことないぞ」

「ならいいけど……あ、こっちの石も綺麗だねー」

何か惹かれるものがあつたんだろうか。続いて、鴎はいくつかのペンダントを手に取っていた。

「それはアクアマリンです」

「おお、なんか聞いたことある」

「航海のお守りとして、船乗りに人気がある石ですね」

「キャプテン・カモーメツにはピッタリだな」

「やめてくれますか」

「こちらのラリマーも、カリブ海の宝石と言われ、人気がありますよ」

「おお、カリブ海と言えば、海賊だよね」

店員さんの説明を受けながら、鴎はうんうんと唸っていた。アクアマリンとラリマー、どっちにするか悩んでいる様子だった。

「それじゃ、このアクアマリンください」

「ありがとうございます。こちらは1万円になります」

「やっぱりやめます」

俺は思わず断っていた。

「ええー」

「ごめん、ちょっと高すぎる」

学生の身分で、さらば諭吉するのはちよっと。

「大丈夫ですよ。少し質は落ちますが、同じアクアマリンでもお安いものもご用意できますから」

店員さんは、奥からケースに入った大小様々な天然石を出してきてくれた。よくわからないけど、大きさや透明度によって、結構値段が違いうらしい。

俺たちがその中から手頃な値段の石を選ぶと、その場でペンダントに加工してくれた。さすがの手際だった。

「お買い上げ、ありがとうございます」

支払いを済ませて、出店を後にする。

「羽依里、ありがとうね」

鴎は購入したペンダントを手のひらに乗せて、嬉しそうにしていた。

「別に良いぞ。気にしないでくれ」

念のために財布を持ってきていて、本当に良かった。

「それじゃ、行こっか」

鴉はそのペンダントをスーツケースにしまい、歩き出す。

「あれっ、せっかく買ったのに、つけないのか？」

「え。つけないよ。今から海に出るんだしね」

確かに。俺としても、せっかく贈ったものを海に落とされたらシャレにならないし。

その後は鴉に案内されて、魚港の端の方に移動する。そこにはマリンジエツトが泊められていた。

「これが良一君のマリンジエツトだよ。昨日のうちに、ここまで運んでもらってたんだ」

「……大きいな」

いつも乗っている奴の倍はある。これ、俺に動かせるかな。

試しに乗り込んでみる。ランナバウト型って言うんだっけ。エンジンを起動させずとも、安定して浮いている。

「デートから戻ったら、またここに係留しておいてくれたらいいって」
「わかった」

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

「待て鴉、出発前に救命胴衣を着ろ」

「あ、そっか」

さっそく乗り込もうとする鴉を制し、マリンジエツトの中に置かれていた救命胴衣を手渡す。

「……これって、どうやってつけるの？」

「以前、良一に教わったことがある。俺と同じようにやってくれ」
「うん。わかった」

やり方を思い出しながら救命胴衣を装着する。確か、こんな感じではないはずだ。

「鴉、準備が出来たら乗っていいぞ」

「あ、先にスーツケースをお願い」

「よしきた」

そう言う鷗からスーツケースを受け取って、マリンジエットの後部に紐で固定する。

「スーツケースの次は鷗だぞ。間が空いてるから、気をつけろよ」

「ありがとう」

俺がそう言いながら手を差し出す。鷗はその手を取って、慎重にマリンジエットに乗り込んできた。

「おお、思ったより安定してる」

「それでも、実際動き出したらかなり揺れるからな。しっかり掴まれよ」

俺は操縦席に座りながら、背後の鷗にそう注意を促す。

「えつと、こんな感じ?」

次の瞬間、鷗が俺の首に手を回すようにして、思いつきり抱きついてきた。背中がとても柔らかい。

「きやああ!」

「え、なんで羽依里が悲鳴上げるの?」

「いや、なんでもない。大丈夫だ」

冷静になって考えたら、柔らかいと思ったのは救命胴衣だった。安全のためとはいえ、ちよつとだけ救命胴衣を恨む。

「ちよつとむごつほと思っただけだ!」

「出た! 謎の発作むづ……」

「発進!」

鷗の言葉の後半は、起動したエンジン音によってかき消されていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

あつと言う間に漁港を離れ、島から少し離れた海上を進んでいく。

このマリンジェットは、サイズが大きい分パワーがあり、扱いやすかった。

「それで鷗、どこに行くんだ？」

パワーがある分エンジン音も大きいので、かなり大きな声を出さないと後ろの鷗と会話できない。

「島だよ！」

「それはわかってる！ どの島だ!？」

なんだかんだで、鳥白島の周辺には小さな島がたくさんある。

「キャンプで行った入り江の方！ 島の南だよ！」

「南だな！」

「赤い屋根の建物と、桟橋があるから、すぐにわかるよ！」

「了解だ！」

鷗の指示を受けて、島をぐるっと半周するようにしながら、南へ向けてマリンジェットを走らせる。太陽の光を浴びて、キラキラと輝く海面が目の前いっぱい広がる。

「すごく綺麗だね！」

「だな、これは岸や連絡船からじゃ味わえない！」

「見て、カモメがいるよ！」

「鷗なら、俺の後ろにいるぞ！」

反射的に振り返る。海風に鷗の黒髪がなびいているのが見える。

「違うよ、鳥のカモメ！」

「うまそうだよな！」

「昨日の夕飯思い出すから、そういうこと言うのやめて！」

その後も鷗と会話をしながら、海の上を進む。

波や風、潮の香りを身体全体で浴びて、海を本当に近くに感じるこ
とができた。すごく、冒険している気がした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、あの島だよー！」

キャンプをした入り江……七ヶ浜の先、300m程の場所にその小島はあった。

先に鷗が言っていたように栈橋があったので、そこにマリンジエツトを係留してから、島に上陸する。

「こんな島があったのか」

学校の校庭くらいの小さな島だった。でも、これだけ立派な建物があれば気付きそうなものだけ。

連絡船の航路からも外れてるみたいだし、周囲の雑木林に隠れていたのかもしれない。

「それで、この島で何をするんだ？」

先に降りた鷗に、マリンジエツトからスーツケースを渡してやりながら、そう聞いてみる。

鷗のことだし、ただ単にバカンスに来たというわけじゃないだろう。

「お宝探し」

「え、お宝？」

「そう！この島には、お宝があるんだよー！」

この小さな島に？ あの雑木林のどこかに、地下洞窟でもあるんだろうか。

俺は木々の間に目を凝らしてみる。何か隠してあるようには見えないけど。

「もしかして、一緒に宝探しするために、俺を呼んだのか？」

というか、一応デートって名目なんだけど。

「ちよつと違うかな。羽依里にそのお宝を見つけてほしいの」

「え、俺？」

ひよつとして、そのお宝は鷗が隠したものなんだろうか。

「じゃあ、鷗は手伝ってくれないのか？」

「頑張つて。羽依里」

笑顔で応援された。まあ、こういう遊びの延長みたいなのも鷗らしくて良いかもしれない。

「でも、せめてお宝のヒントくらい欲しいんだけど」

闇雲に探して見つかるものでもないだろうし。

「ヒントは……そうだね。それは小さくて古いもので、一見お宝じゃなさそうなものなんだよ」

なんだろう。テレビのお宝鑑定隊で出てくるような、古いソフビ人形みたいなものが浮かんだ。

「でも、人によつてはとても大切なものなんだよ」

それは、思い入れがあるつてことでいいんだろうか。親から見たらゴミにしか見えない石ころが、子供にとっては大切な夏休みの思い出になつているように。

「……全然わからない」

「とりあえず立ち話も何だし、入ろつか」

悩んでいる俺を楽しそうに眺めた後、鴉はどこからか鍵を取り出して、建物の方へと歩いていく。

「なんだその鍵」

「何つて、この建物の鍵だよ」

そしてさも当然のように鍵を開けて、扉を開く。

「はい、どうぞー」

「ちよつと待て。お前、なんでこの建物の鍵を持つてるんだ？」

「え？ だつてこの島、おかーさんの島だから」

「なにそれ」

「あれ、言つてなかったっけ？」

「初耳なんだけど」

というか、小さいながらも島一つ持つてるとか、鷺さんつて何者？

「そんな細かいこと良いから、ほらほら入つて」

「待つて鴉、俺にとつては細かいことじゃないんだけど」

「ちゃんと許可は取つてあるし、おかーさんは今日は本土に行つてて、一日戻らないから大丈夫！」

大丈夫つて。男と二人つきりでこんな所に来たとか知られたら、それこそ色々と問題になるんじゃないのか？ 俺、後で謎の組織に狙われたりして。

頭の整理が追い付かないまま、俺は鴉に背中を押され、建物の中へ足を踏み入れることになった。

「お、お邪魔します……」

建物の中は、掃除が行き届いている感じで、綺麗だった。

中に入ると、左手側に小さなキッチン、その奥にドアが見えた。右手側は広めのリビングスペースのようで、窓際に立派なソファが鎮座している。

それ以上に気になったのが、向かい側に見えるリビング奥の壁だった。色とりどりの本がびっしりと並べられた本棚があり、その上に沢山のボトルシップと、小さな金庫が置かれている。

「うわー、塩でベタベタだねー」

その時、羽織っていたパーカーを脱ぎながら、鴉がそう呟く。マリッジエツトで移動してきたし、知らず知らずのうちに塩をかぶっていたみたいだ。

「ちよつとシャワー浴びて来るよ」

「え、シャワー?」

鴉が左手側のドアを開ける。そこには立派なユニットバスがあった。

「ここって、お湯出るの?」

「うん。電気にガスに水道、全部完備してるよ!」

こんな小さな島なのに。扉の奥に見えるユニットバスは、加藤家より数段上の設備のように見える。

「あ、羽依里も入る?」

「ま、まさか一緒に!」

「ち、違うよ! 私の後!」

「そ、そうだよな」

何を言ってるんだらう俺。

「当たり前だよ……どうしてそう言うこと言うかなあ。まったく……」

鴫は顔を赤らめながら、スーツケースから着替えを取り出ししていた。

「宝探しはシャワーの後だな」

「あ、先に探してもいいよ。見られて困るものはないしね」

笑顔で俺にそう告げると、鴫はバスルームへ入っていった。

「たぶん、見つけれないと思うけどねー」

扉の向こうから、そんな言葉が聞こえた。

「よし鴫。吠え面かくなよ」

鴫がシャワーを浴びて出てくるまでに、華麗にお宝を見つけてやろう。

俺はそう決めて、意気揚々と宝探しを始めた。

「小さくて古いもので、一見お宝じゃなさそうなもの……」

鴫のヒントから思い浮かぶお宝と言えば、さつきも思い浮かんだ玩具とか、もしくは骨董品の類だった。

これ見よがしにおいてある金庫に入ってる可能性とか高そうだけど、あの手のものを開けるには暗証番号とかが必要だろうし。

「まさか、この本のどれかに暗証番号を書いたメモが挟んである……なんてことはないよな」

並んでいる本は十数冊なんてもんじゃない。その可能性は考えたくなかった。

ちなみに置いてある本は、何故か児童小説が多かった。ひげ猫団の冒険も、当然のように置いてあったし。

「適当に探してみるか」

俺は当たり障りのない程度に、ソファの下とか、本棚の上を見てみる。この綺麗に並べられたボトルシップは、もしかしなくても、全部部鴫が作ったんだろう。

「やつぱり、うまいもんだよな」

俺は顔を近づけて、ボトルシップを見てみる。マストの先端の旗とか、帆に細かく絵が描いてあった。

……全部ひげ猫だったけど。

その後もあちこち見てみたけど、それらしいものは見つけれなかった。

「くそー、わからないな……」

そもそも、ヒントがあいまい過ぎる。

小さくて古いもので、一見お宝じゃなさそうなもので、人によってはとても大切なもの。一体なんだろう。

「少し休もう……」

目を皿のようにして探し回ったせいか、変に疲れてしまった。

俺は本棚の近くの壁にもたれかるように座り、少し休憩をすることにした。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

……目を瞑っていると、壁越しに鴉の鼻歌が聞こえてきた。思えば、ちょうどこの裏が浴室だっけ。

「これ、ウイズだよな」

鴉が良く歌ってるあの歌だ。あいつ、浴室で鼻歌歌う癖があるのかな。

同時にシャワーの水の音も聞こえてくるし……あ、やばい。

健全な男子学生の想像力が働いてしまう。この薄い壁一枚隔てた先で、鴉が……。

「……しっかりしろ、鷹原羽依里！ 負けるな！」

俺は大きな声を出して自らを叱責した後、両手で自分の頬を叩く。

「え、どうしたの？ 大きな声出したら、近所迷惑だよ!?!」

その時、浴室の方から鴉がそう注意してきた。どうやら聞こえてしまったみたいだ。

「ご、ごめん」

思わず謝ってしまった。島だし、近所なんてないけど。

「ところで羽依里、バスタオル取ってくれない？」

「え、バスタオル？」

鴉が浴室のすりガラス戸を少しだけ空けて、そう声をかけてきた。「ソファーに置いたまま、持って入るの忘れちゃって」

鴫に言われた場所を見ると、確かにソファアの端にバスタオルがかかっていた。

「よし、待ってろ」

俺は立ち上がって、ソファアにかかっていたバスタオルを手に取り
る。

「ほれ」

「ありがとう」

できるだけ鴫の方を見ないようにしながら、バスタオルを手渡す。

……俺は何も見てない。俺は何も見てないぞ。

でも鴫、しろはより大きいんだよな……むごっほごほ。

鴫が出た後、俺もシャワーを浴びさせてもらった。

ここのシャワーは急に熱くなったり冷たくなったりしない、最新式のやつだった。至福の一時だった。

その後、鴫も合流して宝探しを再開する。

と言っても、宝を探すのはやはり俺だけだった。鴫はTシャツと短パンというラフな格好でソファアに座っている。

「頑張って、羽依里」

俺が苦戦している様子を見て、鴫は楽しんでいるようだ。そんな彼女のTシャツにはでかでかとひげ猫のイラストが描かれていた。

「やっぱり、お前が何か隠したんだな？」

「さあ、どうだろうねえ」

鴫は意味深な笑みを浮かべながら、三角形の秘密を食べていた。あれもスーツケースに入っていたんだろうか。

「なあ鴫、そのお宝ってあの金庫の中に入っていたりするんじゃないのか？」

「いつもは入れてるけど、今日は入れてないよ」

お、ある意味これもヒントなんじゃないか。あの小さな金庫に入るくらいの大きさのものってことがわかったし。

「それに金庫の中に入れてたら、それこそ『ここにお宝があります

よー』って言ってるみたいなものでしょう?」

「まあ、確かに」

でも、金庫以外にそれらしいものがありそうな場所というところ……。俺は整然と本が並べられた棚に目をやる。

「実は、あの本棚の本を決められた順番で入れ替えたなら、隠し通路が現れるとか」

「そんな仕掛けがあったら、私が見てみたいよ」

鴉の反応からして、どうやら違うつぽい。

「でもそれが出来たら、秘密基地みたいだねー。今度、お願いしてみようかな」

誰にお願いするのかわからないけど、俺からしたら、この島自体がすでに秘密基地みたいなものなんだけども。

「……だめだ。わからない」

その後も鴉の許可を貰いながら、壁にかけられた絵画の裏や、カーテンの上の方とか見てみたけど、それらしいものは見つけれなかった。

「いったん休憩にして、お昼にしよっか」

鴉はそう言って、スーツケースに手をかけながら立ち上がる。

「え、まさか作ってきてくれたのか?」

「あたりまえじゃない。お昼ごはん、どうするつもりだったの?」

何も考えてなかった……。とは、とてもじゃないけど言えなかった。

「ほら、せつかくだし、外で食べよう!」

言うが早いのか、鴉はスーツケースを引きながら表に飛び出していき。俺も慌ててその後を追った。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「この辺でいいかなー」

鷗は建物から少し離れた雑木林の中で立ち止まる。この辺りは木陰が広く、涼しかった。

「羽依里、ビニールシート敷くの手伝って」

「よし、まかせろ」

スーツケースからカラフルなビニールシートを取り出し、二人で地面に敷く。

「よいしょっと」

それに続いて、スーツケースから大きなランチバスケットが出てきた。

「え、それスーツケースの中に入ったのか？」

「そうだけど？」

「サイズ的に絶対入らないと思うんだけど……まあいいか。」

「朝から頑張ったんだよー」

にこにこ顔で言いながら、綺麗に包まれたサンドイッチや、保存瓶をビニールシートの上に並べていく。

「……すごいな。これ全部作ったのか？」

「そうだよー。はい、おしぼり」

「あ、さんきゅ」

鷗から手渡されたおしぼりは、冷たくて気持ちよかった。

「おお、冷たくて気持ちいいな」

「保冷機能付きだからねー」

詳しくは知らないけど、最近のバスケットも進化してるんだな。

もらったおしぼりで手を拭きながら、目の前に並べられた品々を眺める。

さつきも目に付いたサンドイッチの他、保存瓶に入ったサラダやフルーツ、野菜と一緒にペーパーボックスに詰められたミニハンバーグと、ものすごく手が込んでいた。

ちなみに、メインは鶏のトマト煮込みだった。

「それじゃ、食べよっか。いただきますーす」

「いただきます」

二人で同じように手を合わせてから、まずはサンドイッチを口に運

ぶ。

「おお、ツナだ」

俺が食べたサンドイッチにはツナが入っていた。細かく刻まれたタマネギがアクセントになって、美味しい。

「美味しいねー」

鵜の食べているのは、ジャムとマーガリンが挟まれているようだった。他にもハムとチーズを挟んだものや、ローストビーフを挟んだものまである。ローストビーフとか、島のどこで手に入れたんだろう。

「この辺も細かいな」

ミニハンバーグに付け合わせられたウズラの卵も、花の形にしてあった。鵜は手先が器用だし、ものすごく凝っている。

「可愛いでしょう。おかずも色々あるから、いっぱい食べてね！」

そう言いながら、ミニハンバーグを口に運んでいた。俺は鶏のトマト煮込みをフォークで刺して、口に放り込む。

「これ、うまいよな」

得意料理なんだろうか。確か、皆と灯台でお弁当食べた時も入っていたし。

「ぞ、そう?」

「ああ、このトマト煮込みは、正直しろはが作ったやつよりうまいぞ」
「も、もう! しろしろより料理がうまいなんて! 誉めても何も出ないんだからね!」

あれ。料理全般がしろはよりうまいって話になってる? そうは言っていないんだけど。

「はい、羽依里。あーんしてあげる!」

「は?」

鵜は笑顔で、フォークに刺したトマト煮込みを俺の方に向けている。

まさか、そういう流れになるとは。

「あ、あーん……」

俺も思わず口を開けてしまう。なんだろう。もはや条件反射になっている。

「……あ。やっぱりあげない！」

目の前まで来たところで、トマト煮込みは鷗の口に放り込まれた。不意を突かれた俺は、思いつきり空振りしてしまった。おのれ鷗。

「よく考えたら、羽依里にはしろしろがいるんだから、節度は守らないとね」

顔を背けながら、ぶつぶつとそんなことを言っていた。ごもつともです。はい。

その後は普通に食事を楽しんだ。なんだかんだで、鷗の料理はおいしかった。

昼食の後は、腹ごなしに歩く。さすがに、探しているお宝が外にあるなんてことはないよな。

俺は近くにあった木をじつと眺める。どれかの木に数字が彫ってあって、それが金庫の暗証番号になったりしないだろうか。

「言っておくけど、木に番号なんて彫ってないからね？」

「わ、わかってるよ」

しっかりと心の中を読まれていた。

「それにしてもこの木、ここら辺じゃ見ない種類だよな」

「余所から持ってきて植えたみたいだよ。強い木だから、ハンモックだってかけられるし。気分転換に、少しお昼寝する？」

「いや、やめておくよ。ハンモックはキャンプの夜の、嫌な思い出しかないし」

雑木林を探索した後、念のために砂浜の方も歩いてみた。

砂浜は猫の額ほどの広さしかなく、特にお宝のヒントになりそうなものは見つからなかった。

波打ち際に、無数の貝殻やヒトデが打ち上げられているくらいだった。

「とりや！ ヒトデライズド！」

俺が悩む中、鴉は妙な技名を叫びながら、ヒトデを海へ放り投げていた。よくわからなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

腹ごなしの運動の後、建物の中に戻って宝探しを再開する。と言っても、それらしい場所は大方探し尽くしてしまった気がするけど。

「じゃあ、もう一つヒントをあげる」

部屋の中心で考え込んでいる俺を見かねてか、ソファアに座っていた鴉がそう言い放つ。

「そのお宝は、思い出の中にあります」

思い出？ ヒントをもらったのはいいけど、これまたよくわからない。

「もう少し頑張ってみて」

鴉は笑顔で麦茶を飲み始めた。どうやらこれ以上のヒントは望めそうにない。

「お宝は思い出の中に……」

貰ったヒントを思い出しながら、俺は本棚の周りを探していた。

仮に、そのお宝を隠したのが鴉本人ということなら、お宝は鴉の思い出の中にあるということだ。

そういうことなら、この辺のボトルシップとかどうだろうか。いかにも鴉の思い出っぽいし、中に何か入ってそうだし。

少しでも引つかかる部分がないかと、目を凝らして、棚の右端から舐めるように見ていく。

「……あれっ！」

その棚の左端に、一冊の本が出っっぱなしになっているのに気づい

た。無数のボトルシップの奥に、隠すように置いてあった。

「この本は？」

出しっぱなしにはなっていたけど、全然汚れていないし、放置されていた感じじゃない。敢えて、そこに置いていたような感じだ。

俺はその本を手に取り、表紙を見てみる。

「……アルバムだ」

「やっと見つけてくれたね」

そう声がして振り返ると、鴎がソファから立ち上がって、ニコニコ顔でこつちを見ていた。

「このアルバムがそうなのか？」

「うん。この中に、本当の私がいるから」

確かにアルバムの中には、思い出が詰まってるだろうけど……。

「羽依里、そのアルバム貸して」

「あ、ああ」

俺は半信半疑のまま、そのアルバムを鴎に手渡す。

「隣に座って。一緒に見てほしいの」

鴎に導かれるまま、俺もソファに腰を下ろす。

「じゃあ、いくよ」

俺の隣で、鴎が静かにアルバムを開く。

最初のページには、若い鷺さんと、父親と思しき男性に抱かれた赤ちゃんの写真があった。

「この赤ちゃんが私。どう？　かわいいでしょ」

「赤ちゃんのうちは皆可愛いもんな」

「むう、なんか引つかかる言い方なんですけど」

「気のせいだろ」

鴎がページをめくる。

次のページには、お宮参りをしたときの写真や、七五三の写真、家の庭で撮ったらしい写真と、幸せそうな家族写真が並んでいた。

「あれ、この写真って」

さらに次のページ。親子三人で写っている写真が目についた。細かい所は違うけど、これは鳥白島の港だった。

「おとーさんは大学で植物の研究をしていてね。時々、家族で鳥白島に来ていたの」

「そうなのか」

「うん。鳥白島には珍しい植物が生えてるんだって言ってたよ」

……そしてしばらくすると、あれだけ頻繁に写っていた父親が、唐突に写真に現れなくなった。

聞いてみようかとも思ってたけど、隣の鴎の表情は明らかに曇っている。これは聞かない方が良さそうだ。

「また鴎がページをめくる。」

次のページには、幼い鴎が病院のベッドの上で、たくさんのぬいぐるみに囲まれている写真があった。

中央にケーキが写ってるし、誕生日なんだろうか。日付から見ると、6歳くらいかな。

「誕生日に具合でも悪くなったのか？　ついてないな」

「この写真はね……」

そこまで言って、鴎が言いよどむ。心なしか、涙目になっているようにも見える。

「……あのね羽依里、驚かないで聞いてね」

「あ、ああ」

一瞬、何とも言えない不安が襲ってきた。俺はそれを振り払うように鴎を見つめ、次の言葉を待つ。

「……私、病気なんだ」

「え？」

一瞬、いつもの冗談かと思った。でも鴎の表情を見ると、そんな雰囲気じゃない。本当のことなのか。

「そ、その……悪い病気なのか？」

突然の告白に、そんな言葉しか出てこない。

「生まれつき、体の中の酵素が足りないんだって」

「コウソ。よくわからない。」

「子供の頃はよく寝込んだり、長く入院することもあったの。それこそ、誕生日でも家に帰れないくらい」

なるほど、さっきの誕生日の写真は、そういうことだったのか。

「身体のあちこちが痛くなるの。特に足とかね」

「足？」

「うん。夏はほとんど症状が出ないんだけど、冷えると悪いみたいだね。時々痛くなるの」

「……もしかして鷗、あのスニーカースって」

「……うん。杖代わりみたいなものかな。あれに体重かけてると楽なんだ」

だから鷗はいつもスニーカースを肌身離さず持っていたのか。正直、杖の方が楽だろうけど、それだと皆に病気を悟られてしまうし。

そういえば天体観測の時、歩くのが遅いと思っていたけど、夜だから足が冷えて、痛みがあったのかもしれない。

そして思い返してみれば、鷗が海に入ってるところを見たことがない。それも、必要以上に足を冷やさないためだったのかな。

「……羽依里。突然そんな目で見ないでよ」

「え、ああ。ごめん」

自分でも無意識に、鷗に対して憐れむような目で見ていたかもしれない。最低だ。

「普段はこんな感じで、全然元気なんだから！」

未だ混乱している俺に、鷗は笑顔で言っていた。

「その病気のこと、島の皆は……？」

「のみきさんしか知らないよ。他の皆には、内緒にしてもらってる」

鷗の性格からして、島の皆に心配かけたくないだろう。のみきは一緒に住んでいるということもあって、事情を話したんだろうか。

「それに、今は薬も良いのがあるから、夏の間は症状も減多に出ないし」

「……夏は良いけど、冬はどうするんだ」

「え？」

「冷えると痛いんだろ？」

「新素材でできた、熱を逃がしにくいタイツとか履いてるよ。後はめちゃくちゃ厚着して、ホツカホカイ口をいっぱい貼るの！」
「……ぷっ」

不謹慎とは思ったけど、全身もっこもこになった鷗を想像してしまつて、つい吹き出してしまった。

「変な想像して笑わないでよー。こっちは死活問題なんだから！」

鷗は不機嫌そうな顔をして、頬を膨らませていた。

「ごめん、つい。その、すごく鷗らしいと思つたんだ」

「私らしい……？」

「お前はすごく前向きだもんな。忘れてたよ」

病気のことなんてすぐに忘れさせてくれそうな、ものすごいポジティブ思考の持ち主だし。

「羽依里……」

「えっと鷗、ありがとうな」

「え？」

「病気のこと、教えてくれてさ」

「それは、羽依里には知つてて欲しかったし」

鷗はどこことなく、安堵したような表情だった。

「でも、他の人には言つちや駄目だからね？」

「わかつてるよ」

このアルバムの中に、本当の私がいる。あの言葉は、そういう意味だったんだな。

「それじゃ、この話は終わりね」

鷗はアルバムをめくる。いよいよ最後のページみたいだった。

そこには、一通の古い封筒が挟まっていた。

「なんだそれ」

「うん。これが私のお宝なの」

「その封筒が？ てつきり、このアルバムがそんなのかと」

「お宝は思い出の中になって、ヒントだったはずだけど？」

「あー……」

思い出＝アルバムと言うことなら、その間に挟まっていたその封筒

こそが、お宝なのか。

「ところで羽依里。この封筒、見覚えはない？」

鴉は俺に見えるように、封筒をヒラヒラと揺らして見せる。特に何の特徴もない、茶封筒なんだけど。

「……悪い。全く記憶にない」

「ええっ、うそでしょ？ ほら、差出人の所をよく見て！」

「え、差出人？」

言われた通りに差出人の所を見ると『たかはらはいり』と平仮名で書かれていた。小学生が書いたような、不格好な字だった。

「これ、ずっと昔に羽依里からもらったんだよ。中に手紙が入っていたの」

手紙……なんだっけ。

小学生で手紙を出すなんて、滅多にないだろうし。何か思い出せそうなんだけど。

「手紙……手紙……」

「……ほう。頑張つて書いた手紙を覚えてないど？」

鴉はアルバムを閉じ、封筒から古めかしい手紙を取り出して、手のひらで弄ぶ。

「じゃあ、中身を聞いたなら思い出すかもね」

え、ちよつと待って。なんだか少しずつ、思い出してきたかも。確かあれって……。

「えーつと、ぼくはカモメちゃんのことかー」

「うわー！ ストップ！ やめろー！ 読むなー！」

思い出した。確かあの中身は、俺が子供の頃に書いた、ひげ猫団の感想の手紙だ。

当時は純粋な気持ちで書いたんだろうけど、今となつては黒歴史みたいなものだった。

「返してくれー！」

「駄目！ 私の宝物なんだから！」

そのまま胸に抱くように隠されてしまった。ああなると、さすがに

手が出せなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「で、なんで10年も前に俺が書いた手紙を、お前が持つてるんだ？」

「当たり前だよ。私のおかーさん、ひげ猫団の冒険の作者だから」

「え、作者？」

「ほら」

鴉が奥の本棚から、ひげ猫団の冒険を抜き出して、その表紙を俺に見せる。

そこには『久島鷺 著』と書かれていた。

「……本当だ」

「まだ信じられないなら、おかーさんが賞をもらった時の写真もあるよ？ 見る？」

「いや、もういい。十分に分かった」

母親である鷺さんが作者なら、俺の送った手紙が鴉の元にあったとしても、何ら不思議はなかった。

「あれっ、それじゃ、ひげ猫団の冒険の主人公『カモメ』って」

「うん。私がモデル。もしかして、今気づいた？」

「ああ……今気づいた。そういうことか……」

俺は頭を抱える。俺が送った手紙は、その主人公に対する熱い思いをぶちまけていたはずだ。

まるで鴉へのラブレターだった。

「えへへー」

鴉は手紙を見ながら、満面の笑みだった。

「でも羽依里からの手紙、一番覚えてるよ。すごく情熱的だったし。名前も変わってたし」

名前が変わってるとか、鴉に言われたくない……。

「あ、それでお前、最初から馴れ馴れしかったんだな」

「え、馴れ馴れしい？」

「ほら、初めて会った時」

「そうそう。あの時、他の人に名前を呼ばれてるのを聞いて、ピンと来たの。あの手紙をくれた男の子だ！　ってね」

確かに羽依里なんて名前、そうそうあるもんじゃない。

俺はこの夏、初めて鴎と出会ったつもりでいたけど、実はあの手紙を通して、既に出会っていたんだな。

「……やっぱりあの時、声をかけなきゃいけない気がしたの」

「え、何？」

急に鴎の声が小さくなって、聞き取れなかった。

「な、なんでもないよー」

鴎は急に立ち上がって、俺の手紙を金庫の中に放り込んでしまった。

「なにも、そこまで嚴重にしなくても」

「たとえば、大嵐でこの島が沈んだとしても、手紙だけは無事なようにしておかないとね」

鴎の目は本気だった。

「羽依里の手紙もそうだけど、他の皆からの手紙も大切だからね。もちろん、手紙くれた人の名前は全部覚えてるよ」

「え、うそだろう？」

ひげ猫団の冒険、当時は本当にたくさんの子供たちが読んでいたはずだ。当然、何百通ものお礼や感想の手紙が来たはずだ。

「本当だよ。ベッドの中で何回も読んでんだからね」

そっか。幼い頃の鴎にしてみれば、長い入院生活の中で、それが唯一の楽しみだったのかもしれない。

「すっかり忘れちゃってるみたいだけど、あおちゃんやあいちゃん、しろしろからの手紙もあつたんだよ」

「……それはそれで、ちょっと見てみたいような」

「個人情報だから、ダメー」

俺は金庫の方へ手を伸ばしかけるけど、鴎から拒否されてしまった。

その後はソファアに座って、いつもの調子で鴎と話をしていた。気がつけば日も沈みかけ、背後の窓から西日が入ってきていた。

「私ばっかりだと不公平だし、いつか、羽依里の写真も見せてね」
「ま、まあそのうちな」

子供の頃の写真なんて部活の集合写真とかばかりで、まともな写真が無かったような気もするけど。

「そう言えば羽依里の子供の時って、どんな感じの子だったの」
「え、えーっと」

やばい。この調子だと新たな黒歴史が明るみに出かねない。

「そうだ鴎、暗くなる前に、そろそろ帰るか」

俺は誤魔化すようにソファアから立ち上がる。

「あ、ちよつと待って。最後に見せたいものがあるの」

「え、何？」

「いいから、座って！」

その時、鴎が俺の右腕を掴んで、無理矢理座らせようとしてきた。

「どわあっ!？」

変な位置から力任せに引っ張られたせいで、思いつきりバランスを崩してしまった。

俺はそのまま顔の右半分を鴎にうずめるような形で、ソファアに倒れ込む。

「やばっ、む、むごっほー！」

やばい、目の前に鴎の谷間が。

「ほら羽依里、もつと近づかないと見えないよ！」

「いやもう、しっかり見えてるけど！」

「どこ見てるの!？ そっちじゃないよ、窓の外！」

鴎に怒られながら、なんとか体勢を立て直し、俺は窓の外を見る。

ちようど太陽が海面に沈みかけていて、空も海も、所々に見える島々も、なにもかもが茜色に染まっていた。

「……すごいな。まるで宝石みたいだ」

「おお、言うね。羽依里」

茜色の世界の中心にある太陽は、まるで巨大な宝石みたいだった。

「この場所からじゃないと、見えないんだよ」

確かに。鳥白島からだ、ちようど山が陰になって見えない。

「……羽依里」

「うん？」

名前を呼ばれた気がして隣を向くけど、鴎はまっすぐ前を見ていた。

「……私と友達になってくれて、ありがとうね」

「……俺も、鴎と友達になれて良かったよ」

俺たちは、太陽が海と空の間に消えるまで、静かに見つめていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ごめんね。すっかり暗くなっちゃったね」

夕日が沈むまで島にいた俺たちは、真っ暗になってからようやく帰宅の途に就いた。

マリンジェットにも当然ライトはついてはいたけど、それでも夜の海は怖かった。魚港の常夜灯を頼りに、何とか戻ってこれた感じだ。

「ある意味、冒険だったね」

「俺は今日ほど、島の灯台に明かりが灯っていてほしいと思ったことはないぞ」

元の場所にマリンジェットを係留し、鴎と一緒に港を後にする。

「そうだ鴎、家まで送るぞ？」

「いいよいいよ。すぐそこだしね」

言われてみれば、宿泊先に行っている役所の社員寮が目の前に見えていた。確かに、ここから送るってのも妙な話だった。

「早く帰って、しろしろを安心させてあげてね。それじゃー」

鴎は手を振りながら、夜の闇に消えていった。最後まで元気だっ

た。

「……食堂に行く前に、一度帰ろうかな。夏海ちゃんにも声をかけないといけないし」

漁港から住宅地へ向かい、一度加藤家に戻ってみたけど、無人だった。鏡子さんはわからないけど、夏海ちゃんは時間的に食堂に行つてるのかもしれない。

少し考えて、俺もしろは食堂に向かうことにした。

「しろはー」

食堂の扉を開ける。店内を見ると、やっぱり夏海ちゃんがいて、カウンターの座って晩ごはんを食べていた。

「ごめん二人とも。ちよつと遅くなっちゃって」

俺は二人にそう謝りながら、夏海ちゃんの隣に座る。

「……」

夏海ちゃんは黙々と、どんぶりものを食べていた。

「それ、うに丼?」

「そうです」

元々のメニューにはないし、今日の日替わりなんだろう。

「そういえば夏海ちゃん、朝のあんぱんってどうしたの?」

「冷凍庫に入れてますよ。お腹空いた時に食べればいいんじゃないですか?」

なんだろう。うに丼を食べているからか、妙に言い方にトゲがある。

「それより羽依里さん、しろはさんに言うことがありますか?」

その時、夏海ちゃんがそつと耳打ちをしてきた。

カウンターの奥を見ると、しろはは俺に背を向けたまま、なにやら作業をしていた。いつもなら、一番におしぼりを持ってきてくれるのに。

もしかして遅くなったから、怒ってるんだらうか。

「その……しろは、遅くなってごめん」

俺は立ち上がって、もう一度きちんとしろはに謝る。

「違う。別に怒ってない」

ようやく振り返ってくれたしろの目は、少し赤かった。

「……あれだけ言ったのに夜遅いし。お泊りしちゃうのかと思って、不安になってただけ」

「え、お泊り!？」

どうしてそういう流れになるんだらう。よくわからないけど、島の風習なんだろうか。

「泊まるわけじゃないじゃないか。相手は鷗だぞ」

「だ、だって。鷗は可愛いし、二人だけで島に行ったって聞いたし、浜辺であーんしてたって聞いたし、窓から仲良く夕陽を見てたって聞いたし」

「しろは、ちょっと待って。その辺の話、誰から聞いたの」

「えつとね。あの島の周りを漁場にしてる漁師さん」

なるほど。連絡船は近くを通らなくても、漁場にいる漁師さんはいると。

というか、さすがに噂が広まるのが早すぎるんじゃないだらうか。

「今回のデートは鷗と二人きりだって聞いたから、不安になっちゃって」

「あー……」

言われてみれば、最初のデートは空門姉妹と三人だったし、その次のデートも紬たちと三人だった。

今回の鷗だけ、二人つきりで外出してしまったわけだ。その辺り、全然気にしてなかった。

「だって、羽依里は格好いいし、人当たりも良いし、鷗もまんざらでもなさそうだったし」

なんだろう。本音がダダ漏れしている気がする。聞いてるこっちが恥ずかしくなるくらい、べた褒めされてる。

「万が一、つてことがあったらどうしようって思って」

しろはは顔を真っ赤にしたまま頭を抱えている。やばい。可愛い。俺たちの間にカウンターが無かったら、そのまま抱きしめてたかもしれない。

「だから、他の皆とは遊びに行っただけだって。俺が本当にデートするのは、しろはだけだ」

「本当？」

「本当だって」

「……えっと、しろはさん、ごちそうさまでした！」

その時、夏海ちゃんが食事を終えたらしい。そのまま代金を置くと、足早に食堂を出て行ってしまった。もしかして、気を使ってくれたんだらうか。

……なら、この機会を逃す手はない。

「その……しろは。明日、時間あるか？」

「えっ？ あ、あるけど」

「その、本土に遊びに行かないか？」

「そ、それって」

「デ、デートしないか？」

誘った俺も、たぶん顔が真っ赤だったと思う。

「……やっと私の番」

「え？」

しろはが俯き気味に何か言っていたけど、声が小さすぎて聞き取れなかった。

「なんでもない。それより明日、時間と場所はどうしよつか」

「それじゃ、朝9時に港は？」

「うん。いいよ」

「それで、行きたい場所とかある？」

「うん。行ってみたいお店があるの」

「しろはの行きたいところなら、どこでも行くぞ」

「あと、お昼ごはんもね。気になってるお店があって」

しろはがぐいぐいと前に出てくる。す、少し落ち着いて欲しい。

「あ……でも、食堂の準備があるから、15時には島に戻らなきゃ」

「明日くらい、休んでもいいんじゃないか？」

「そ、そう言うわけにはいかないよ。羽依里たちも晩ごはん食べられなくなるし」

「う、確かにそれは困る」

「それとね……」

その後、しろはと明日の予定を詰めながら、ハンバーグ定食を食べた。家庭の味という感じで、美味しいハンバーグだった。

「それじゃ羽依里、また明日ね」

「ああ。明日は楽しもうな」

「うん」

嬉しさを隠しきれないしろはに見送られて、俺は食堂を後にした。

それにしても、しろはと二人で出かけるのは久しぶりだった。

もっと早く、こうしてあげればよかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅すると、ちょうど居間に鏡子さんと夏海ちゃんがいたので、明日しろはと外出する旨を伝える。

「いいよ。楽しんできてね」

「楽しんできてください！」

二人とも申し合わせたように了承してくれた。先に帰った夏海ちゃんが、それっぽく話をしておいてくれたのかな。

「お泊りしてもいいからね」

「いえ、さすがに日帰りしますからー！」

鏡子さんつてば、夏海ちゃんも居るんだし、そう言う発言はやめてもらいたい。

「しろはちゃん、喜んでたでしよう?」

「それはもう。隠しきれないくらいに」

「それじゃ、明日も頑張らないとね。お風呂も沸かしてあるから、先に入っちゃっていいよ」

「すみません。それじゃ、お言葉に甘えさせてもらいます」

正直なところ、島から戻る道中でまた塩をかぶってしまったので、全身ベトベトで気持ち悪かった。

明日も外出するんだし、すっかり体力も回復させておかないと。

そう考えながら、いつもよりもゆっくりと湯船に浸かることにした。

「ふう。良いお湯だった」

入浴を済ませて居間に行くと、夏海ちゃんがテレビを見ながら、座布団を抱きしめていた。

「あれ、夏海ちゃんどうしたの」

なんか震えてるし、もしかして体調悪いんだろうか。

「夏海ちゃん?」

背中越しに声をかけるけど、反応がない。

「ねえ」

心配になって、背後からその肩を叩く。

「わひゃああああああっ!?!」

次の瞬間、夏海ちゃんが絶叫した。座ったまま、間違ひなく数センチは飛び上がった。

「し、心臓が止まるかと思いました……」

「え、えーつと、よくわからないけど、ごめん」

俺も驚いて、思わず尻もちをついてしまった。一体どうしたんだろう。

『……おわかりいただけただろうか』

その時、テレビからおどろおどろしい声が聞こえてきた。

画面を見ると、なにやら恐怖番組をやっていた。ある意味、夏

の定番だった。

この時期になると、大抵やるよね。この手の番組。

「夏海ちゃん、すごく怖がつてるのよ」

そう言いながら、お盆に麦茶を乗せた鏡子さんが台所からやってきた。

「夏海ちゃん、怖い話苦手なの？」

「に、苦手です。羽依里さんはこういうの、怖くないんですか？」

「うん。オカルト好きだし。慣れてるよ」

『もう一度ご覧いただけよう』

「うううう」

夏海ちゃんは座布団に顔をうずめながら震えていた。怖いんなら、見なければいいのに。

画面には、キャンプ場でたき火を囲む男女が映っていた。映像の所々に、異形のもものが映り込んでいる。

「キャンプが明日とかじゃなくて、良かったね」

「ほ、本当です、絶対思い出してると思います」

涙目だった。こういう映像に映っちゃった系のものは、いくらでも編集できそうだけど。

「ところで二人とも、お風呂空いたけど……」

「それじゃ、私が入ろうかな」

俺の発言を聞いて、鏡子さんが麦茶を置いて立ち上がる。

「まっ、待っててください！ 鏡子さん、もう少し一緒にいてください！」

立ち上がった鏡子さんを、夏海ちゃんが慌てて呼び止める。

「私よりも、羽依里君と一緒に見てもらったら？ オカルト詳しくそうだし、色々と解説してくれるよ？」

「解説なんてしてもらいたくないです！ よけい怖くなるじゃないですか！」

だから、怖いんなら見なければいいのに。

結局、鏡子さんは笑顔でお風呂へ行ってしまった。俺は成り行き上、夏海ちゃんの隣で一緒に恐怖番組を見ることになってしまった。

「うづうづ」

俺の隣では、夏海ちゃんが妙な声をあげながら、テレビを見ていた。時々びくつ、と身体を震わせている。

いつの間にか、俺のTシャツを掴んでるし。これは逃がさない構えだ。

そんな時、番組内容が幽霊屋敷の再現映像に切り替わる。

家主が風呂呂に入っていると、窓や鏡に小さな手形がペタペタとつくという内容だった。

「あれは水子の霊じゃないかな。水のある所に出やすいんだよ」

「だから、解説しないでください!」

「ところで夏海ちゃん、鏡子さんと一緒にお風呂入らなくて大丈夫?」

「え、なんでですか?」

「だってこのままだと、この番組が終わった後、夏海ちゃん一人でお風呂に入らなきゃいけなくなるよ?」

「……はっ」

「それこそさっきの手形のシーンとか、思い出しちゃうかも……」

「きょーこさーりーん! 私も入りますりーん!」

夏海ちゃんは、持っていた座布団を放り投げて、ばたばたとお風呂場の方へ走っていった。

「え、どうしたの?」

「何も言わず、一緒に入ってください!」

遠くから、そんな会話が聞こえてきた。キャンプでも怪談話を怖がってたし、本当に苦手なんだろうな。

「さて、少し早いけど、俺は寝ようかな」

鏡子さんたちに先に休むことを伝え、俺は自室へと戻って、布団を敷く。

明日はしろはとのデートだし、体調は万全にしておきたい。

それにしても、しろはが行きたいところって、どこなんだろう。

全国チャーハン博覧会とか、変わったイベントでもやってるんだろ

うか。

なんにしても、しろはと一緒なら、どこに行っても楽しいと思う。
俺はそんなことを考えながら、眠りについた。

第二十五話・完

第二十六話 8月17日（前編）

「羽依里、朝だよ。起きて」

……朝。

いつものように、夏海ちゃんに起こされる。今日は心なしか、声が近いような気がする。

「ああ、夏海ちゃん……おはよう」

「え、夏海ちゃんじゃないし」

「……え？」

目を開けてみると、目の前にしろはの驚いた顔があった。

「あれっ、しろは？」

俺の顔を覗き込むしろはは、いつもより少しお洒落な服を着ていた。髪も念入りに梳いているみたいで、いつも以上に綺麗だった。

「もしかして、相変わらず夏海ちゃんに起こしてもらってるの？」

「え。それは、その」

正直なところ、凶星だった。何も言い返せない。

「今日外出した時、目覚まし時計でも買う？」

しろはは呆れたような顔で、そう続ける。

「……どうせ買うなら、録音できるタイプが良いな。毎朝、しろはの声が入った目覚ましで起きたい」

なんだか悔しかったので、そう言い返してみた。

「へ、変なこと言っていないで、さっさと起きて」

顔を赤くしたしろはに、がばつと掛け布団をはぎ取られてしまった。こうなったら起きるしかなく、俺も上体を起こす。

「できるなら私も毎朝起こしに来たいけど、どうしても起きれないし。それにしたって目覚まし時計に声を入れるなんて……」

はぎ取った掛け布団を抱きしめながら、しろはは俺に背を向けて、なにやらぶつぶつ言っていた。あえて聞かなかったことにしよう。

「ところでしろは、今日は早いんだな」

それこそ、さつき言つてみたいに朝に弱いはずなのに。

「きよ、今日はたまたまね。早く目が覚めちゃったの」

待ち合わせは朝9時に港のはずだし、もしかして、あまり眠れなかったのかな。

「それでね。せつかくだから、朝ごはんを作りに来たの」

しろはは廊下の方からビニール袋を出してきた。中にはネギや豆腐、卵が見える。

「後で少し、台所貸してね」

「ああ、いいよ」

「それじゃ早く着替えて、顔を洗つて。ラジオ体操に遅れるよ?」

「わかった」

しろはに返してもらつた布団をたたんでみると、壁に掛けられた時計が目に入る。

「そうだしろは、夏海ちゃんを起こしてもらえないかな?」

この時間に俺を起こしに来ないということは、また寝坊しちやつてるんだろう。

「いいよ。隣の部屋だったよね」

しろはは食材の入った袋をいったん廊下に置いて、隣の部屋に向かつていった。

俺はその間に、手早く着替えを済ますことにした。

「……夏海ちゃん、朝だよ」

「おかーさん、あと5分だけ……」

俺の部屋のふすまが半分くらい開いているせいか、しろはと夏海ちゃんの話し声が小さいながらも聞こえてきた。

「駄目だよ。うみちゃん。早く起きて」

「あれ、しろはさん!」

「おはよう、夏海ちゃん。早くしないと、ラジオ体操に遅れるよ?」

「……は、はい! すぐに準備します!」

今日は珍しく、夏海ちゃんも一発で起きたみたいだ。なんか妙な違

和感があるけど。

「あわわわ、遅れる遅れるー」

その後、俺が着替えを終えて洗面所に向かってしていると、パジャマ姿のままの夏海ちゃんと廊下ですれ違った。

歯ブラシをくわえたままだったし、すごく慌ててるみたいだ。大丈夫かな。

「それじゃ二人とも、いつてらっしやい」

「いつてきまーす!」

俺と夏海ちゃんはお互いに準備を終えた後、しろはに見送られて加藤家を後にする。まるで母親に見送られる兄妹みたいな気分だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、おはよう」

「おはようございます!」

俺たちは小走りで神社へ到着する。幸いにも、ラジオ体操大好きさんはまだ来てないみたいだった。

「夏海ちゃん、パイリ君、おはよう」

「おふたりとも、おはようございます!」

今日はお馴染みのメンバーに加え、紬と静久がいた。

二人とも、着ぐるみじゃなかった。紬に至っては例のリボンで髪を結って、ポニーテールにしている。

「お二人とも、おはようございます! 昨日はありがとうございました!」

その二人の元へ夏海ちゃんが駆け寄って行き、お礼を言っていた。

話を聞いていると、昨日一緒に遊んでいたらしい。仲が良いことは良い事だよね。

「そういえば羽依里さん、昨日は鷗さんと島デートをしたそうですね」
「二人仲良く海の上を走ってたって、島中の噂になってるわよー？」

そんな三人の様子を眺めていると、空門姉妹から声をかけられた。
今日は二人とも髪を下ろしていて、トンボ玉は紐で手首につけられていた。

「誰にも見られてないと思っていたのに、なんで二人が知ってるんだ？」

「お前たちの姿を見たのは、皆漁師だ。漁師は目が良くないとやってられないからな」

空門姉妹の後ろから、良一がそう続けた。そういえば昨日、しろはも似たようなことを言っていた気がする。

「お前たちはその、昨日は楽しんだようだな。帰ってきた鷗が色々と話してくれたぞ」

良一に続いてのみき話の輪に入ってきて、顔を赤くしながらそう言う。

「オウムじゃないんだから、鷗も色々喋らないでくれ……」

「え、オウムが何？」

俺が頭を抱えていると、当事者である鷗がスーツケースを引いてやってきた。どうやら今日は、鷗もラジオ体操に参加するらしい。

「羽依里、昨日はありがとね」

鷗はそつと近づいてきて、俺にしか聞こえない小さな声でそう言う
と、襟元からアクアマリンのついたペンダントを見せてくれた。どうやら、つけてくれていたみたいだ。

「いい夏の思い出になったよー」

笑顔でそう言って、すぐに俺のそばから離れていった。鷗としても、これ以上事を大きくするつもりはないらしい。

「あ、そういえば羽依里、今日はしろはとデートするんでしょ？ 聞いたわよー？」

蒼が唐突にそう言ってきた。満面の笑顔だけど、一体誰に聞いたんだろう。夏海ちゃんと鏡子さんくらいにしか話してないんだけど。

「なあ蒼、それ誰に聞いたの？」

「へ？ ああ。それがねー」

「お前ら、準備は良いか？ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。噂の出どころは気になっただけど、蒼との会話はそこで打ち切りになってしまった。

「よし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「ありがとうございますー！」

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

今日も無事にラジオ体操を終え、スタンプとログボを受け取る。

「おお、うなぎだ」

今日のログボは真空パックに入った、うなぎのかば焼きだった。これなら冷蔵庫に入れておけば、しばらくは大丈夫だろう。

「夏海ちゃん、帰ったらこのうなぎ、冷蔵庫にしまっておこうか」

「はいー」

いつもはログボで朝ごはんを熱望する夏海ちゃんも、今日ばかりは何も文句を言わなかった。なにせ、今朝はしろはの朝ごはんが待ってるんだし。

「よし、お昼はこれでひまつぶし作ろう」

鵬はうなぎのかば焼きを、嬉しそうにスーツケースにしまっていた。

「ちなみに鵬、正しくはひつまぶしだからな」

「そう、それ。美味しいよね」

「確かに美味しいけどさ……」

「それじゃナツミさん、お昼に灯台でお待ちしていますー！」

「はい！ よろしくお願いしますー！」

俺と鵬が話をしていると、袖が夏海ちゃんとそんな約束を取り付けていた。どうやら、午後から一緒に遊ぶ約束をしたらしい。

「昨日に続いて、また新しいお友達を紹介しますー！」

「はい！ 楽しみにしています！」

「また三人で、夕日に向かっておっぱい体操をやりましょう！」

「そ、そうですね。それも楽しみにしてます！」

努めて笑顔で返していたけど、体操の方は正直、あまり乗り気じゃない感じだった。

「それではー」

その後、紬と静久は鷗と連れ添って、神社から去っていった。

「夏海ちゃん、紬たちと本当に仲が良いね」

「えへへ、ズツ友ですから！」

夏海ちゃんは純粹な笑顔だった。紬たちと遊ぶのを、すごく楽しみにしているみたいだ。

「でも、午前中は何をしようか悩んでるんです」

「また沢田さんの所に行ってみたら？」

「えっと、沢田さんは今日からしばらく岡山の品評会に参加するので、島を留守にするそうなんですよ」

「あ、そうなんだ。それじゃ無理だね」

家主がいなのに、勝手に家の敷地に入るわけにもいかないし。

「……夏海ちゃん、暇なら俺たちの秘密基地に来ないか？」

「え、秘密基地ですか？」

そこで話に入ってきたのは、良一と天善だった。

「ビーダマンとかミニ四駆とか、見たことないだろ？」

「はい、見たことないですけど……」

「来るなら歓迎するぞ」

「それじゃあ、午前中は秘密基地にお邪魔させてもらいます！」

「秘密基地に行くなら、イナリを護衛につけたげよつか？」

「ご、護衛ですか？」

その会話の中に、空門姉妹が割って入る。

「そうですね。明らかに遊ぶ人を間違えているとしか思えません」

「俺たちって、どれだけ信用ないんだろうな……」

「だって、良一の性癖見てたら、ねえ……」

蒼が何とも言えない顔をする。

「ど、どういうことですか？」

「それがね夏海ちゃん。昔の話なんだけど、良一が駄菓子屋に注文してたエ……」

「蒼ちゃん、その話は夏海ちゃんにはまだ早いですよ」

何か言おうとしていた蒼を、藍が制止する。

「そ、そうよね。ごめん」

「えっと、凄く気になるんですけど……？」

「いくらなんでも、さすがに大丈夫、よね……でも……」

蒼が何か言っていたけど、よく意味が解らなかった。

「とにかく、秘密基地の前にイナリを待機させておきますので、何かあったら大きな声で呼んでくださいね」

「は、はあ……」

夏海ちゃんは半信半疑だったけど、藍はいたって真剣な表情だった。

「そんなふうに言われたら、変に不安になるんだけど」

「まあ、イナリが守ってくれるなら大丈夫でしょ。あの子が本気になれば、あの秘密基地くらい軽く吹き飛ばせるから」

え、なにそれ。本気のイナリ怖すぎるんだけど。イナリビームでも出すんだらうか。

「それでも状況によっては、私たちが夏海ちゃん奪還作戦を実行しますよ。今日一日、羽依里さんの代わりに夏海ちゃんを守る義務がありますので」

藍が胸の前で腕組みをしながら、そう言ってきた。

なるほど。言い方には問題あるけど、俺が出かけている間は、いつもこうやって夏海ちゃんを見守ってくれているのかもしれない。

「というわけで、羽依里さんも今日はしろはちゃんとデート、楽しんできてくださいね」

「そうそう。楽しんできなさいよー」

藍も蒼も、そっくりな笑顔をこっちに向けてくる。

「な、夏海ちゃん！ そろそろ帰ろうか！」

その笑顔に謎の恐怖を感じた俺は、早足で加藤家に帰宅することにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー」

加藤家に帰宅すると、同時に味噌汁の良い香りが鼻を抜ける。

「二人とも、おかえりなさい」

手を洗って居間に行くと、先に鏡子さんが座っていた。俺たちがラジオ体操に行っている間に、帰ってきたみたいだ。

「あ、おかえり」

直後に、エプロン姿のしろはが台所から顔を出す。

「しろはさん！ 今日のログボですー」

そのしろはに夏海ちゃんが駆け寄って、ログボを手渡していた。

「おいしそうなうなぎだね。冷蔵庫に入れておけばいいかな？」

「はい！ お願いしますー」

「うん。それじゃ、もうすぐ朝ごはんができるから、座って待っていてね」

「わかりました！」

そのまま夏海ちゃんが鏡子さんの隣に座ったので、俺はその向かい側に座る。しばらくして、しろはが朝ごはんを運んできてくれた。

「おお、おいしそう」

食卓には炊きたてのごはん、ネギと豆腐の味噌汁、卵焼き、そしてほうれん草のおひたしに、焼いたアジの干物が並んだ。

毎日チャーハンもいいけど、こういう朝ごはんも嬉しい。むしろ、憧れかもしれない。

「私までごちそうになっちゃって、ごめんね」

ごはんを受けとりながら、鏡子さんが申し訳なさそうに言っていた。

「いえ、いつも羽依里がお世話になってるので、ごちそうさせてください」

しろはがそう言いながらエプロンを外して、俺の隣に座る。

「それじゃ、いただきますしよう」

「いただきます」

四人一緒にあいさつをして、食べ始める。

俺は最初に味噌汁を飲む。相変わらずの美味しさだった。

「うん、美味しい」

朝からしろはの味噌汁が飲めるなんて、幸せだ。

続いてほうれん草のおひたしを食べてみた。鰹節の風味がきいて、これも美味しい。

「うん。この卵焼きも美味しいよ」

「はい、美味しいですねえ」

鏡子さんと夏海ちゃんは卵焼きを口に運んでいた。しろはの卵焼きは甘くておいしい。俺も楽しみで、まだ食べずに取つてある。

「しろは、どれも美味しいよ。ありがとう」

隣で黙々と食べていたしろはに、率直なお礼を言う。

「そ、そうかな……普通だと思うけど」

しろはは平静を装っているけど、少しだけ赤くなっていた。

「まるで新婚夫婦みたいだね。夏海ちゃん、私たちお邪魔かな」

「そ、そうですね」

夏海ちゃんははずーつ、と味噌汁をすする。こつちも平静を装ってみたいだった。

まったく鏡子さんも、変なこと言わないでほしい。

続いて、アジの干物を食べてみる。どうやらこれは自家製らしい。程よい塩味で、ごはんがどんどん進む。

「羽依里、慌てて食べないの。ほら、頬にごはんつぶ付いてる」

その時、隣のしろはからそう声をかけられる。

「え、ごめん」

「こつちこつち」

次の瞬間、しろはが俺の頬についていたごはんつぶを指先で取って、そのまま自分の口に運んでいた。

「……まっ！」

「ひゃー……」

妙な声をした方を見ると、向かいに座る鏡子さんと夏海ちゃんが顔を真っ赤にしたまま、俺たちの方を見て固まっていた。

「さ、最近の若い子って、大胆なのねー」

「……はっ！」

二人の反応で、ようやくしろはも自分がやったことに気づいたみたいだ。

「い、いやー、本当に新婚夫婦みたいだな」

その場の空気に耐えられず、俺はそんなことを口走っていた。

「……夏海ちゃん、羽依里の卵焼き食べていいよ」

「はいー！」

その時、夏海ちゃんが俺の皿から卵焼きをかつさう。

「あー！ 最後に食べようと思って取っておいたのに！」

「……羽依里が変なことさせるから悪いんだよ」

え、俺が悪いの？ しろはが自爆したようにしか見えなかったけど。

「でもさ、卵焼き……」

「いいから、ごはんは静かに食べないと。食事中に騒いだらお行儀悪いよ」

「うう……」

卵焼きの件は納得いかないけど、どうしようもない。覆水盆に返らずって言うし。

でもやっぱり、こういう食卓もたまには良いもんだよな。一家団欒って感じで……。

「……あれ？」

……なんだろう。同じような食卓を、いつかどこかで囲んだことがあるような。

「……羽依里さん？」

「……えっ、何？」

「なんだか、ぼーつとしているようでしたので。私に卵焼き取られたの、そんなにショックだったんですか？」

「いや、別にそういうわけじゃないんだけど」

「なら、いいですけど」

「うんうん。大丈夫だよ」

その後、俺は一瞬感じた違和感をどこかへ追いやるように、黙々と箸を進めた。

「それじゃ夏海ちゃん、15時くらいには戻ってくるから」

「はい！ 楽しんできてくださいね！」

朝食の後、俺としろは夏海ちゃんに見送られながら、加藤家を出発する。

夏海ちゃんも今日は色々と約束を取り付けていたみたいだし、帰ったらまた思い出話を聞かせてもらおう。

「しろは、今日はよろしくな」

「うん。それじゃ、いこっか」

俺たちは並んで港へと歩き出す。今日も大きな入道雲が出てるし、暑くなりそうだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港に到着して腕時計を見ると、船が来るまでは少し時間があつた。

どこかで時間をつぶそうと考えていると、例によって出店が目に入った。今日も二軒出ている。

「しろは、少し時間があるし、出店でも見てみない？」

「うん。いいよ」

近づいてみると、一軒目の出店はカラーひよこ釣りだった。

「うわ、懐かしいな」

俺は思わず出店の前にしやがみ込む。

昔、縁日とかでよく売っていたやつだ。最近は何物愛護がどうか言われるからか、めつきり見なくなっただけ。

「本当だ。懐かしいね」

しろは俺の隣でしやがみ込んで、色とりどりのひよこたちを眺めていた。

「私も子供の頃はよく釣って帰ったよ」

しろはの家には鶏小屋があるし、しれつと混ぜても問題なさそうでもない。

「キャサリンとか名前つけてたの。いつの間にかいなくなっただけだ」

「キャサリン!?!」

思わず大きな声を上げてしまっていた。確か最近、しろはのじーさんが六代目キャサリンの卵を持ってきてくれたような。

そしてよく見ると、カラーひよこ釣りの隣には、これ見よがしに唐揚げの出店が出ていた。

この組み合わせ、何とも言えない悪意を感じる。

周囲には唐揚げの良い匂いが漂っているし、ひよこたちも感じるものがあるのか、ものすごく悲しみに満ちた瞳をしている。

「やれやれ、ようやく帰れるなー。なんか、疲れてしもた」

「お母さん、ずっとホテルにいたのに」

ひよこたちと視線を交らわしていると、背後から声が聞こえてきた。関西弁が聞こえるし、観光客みたいだ。

「待ちくたびれたって意味や。あの居候追いかけてこんな島まで来るなんて、あんたも物好きやなー」

「でも、お母さんも楽しんでたよね。なんかかいうお酒、買ったし」
「小鳩殺しやな。けったいな名前やけど、美味いらしいで。晩酌が楽

しみやわー」

「にはは。お母さん、お酒のことばかり」

「ええやん。旅行の楽しみはこれに尽きるんやで」

「わたしも烏白島まんじゅう買った。帰ったら、一緒に食べよ」

「せやな。そうしよか」

「あ」

その時、ぱたぱたと足音がして、俺たちの隣に女の子がやってきた。

「ヒヨコさん」

そう言つて俺たちの隣に座り込み、売られているひよこたちを覗き込む。

女の子が頭を上下に動かすと、その度に金髪のポニーテールも一緒に揺れる。

年の頃は俺たちと似た感じだけど、その仕草のせいとか妙に子供っぽい。

「こらー！ 何一番に出店に走つて行つてんねん！」

女の子が続いて、関西弁の女性もこっちに走ってきて、その女の子の頭を叩く。

「イタイ……お母さん、すぐ怒る」

「あんたが変なことするから怒るんや」

「が、がお……」

ぽかっ、と再び叩かれていた。

「イタイ……」

「あと、その口癖言うた時もや」

お母さんと呼ばれた関西弁の女性は、握りこぶしを作りながら不機嫌そうな顔をしていた。見た感じ、かなり若く見える。その髪と同じような、深紅のバイクスーツを着ていた。

「でも、お母さん。見て見て、ヒヨコさん」

その子は何度叩かれても、めげずにひよこをアピールしていた。あの意味強い子だった。

「あんたな、ひよこは大きくなってニワトリにしかならんのやで？」

「そ、それくらいわかってるよ。さすがにもう子供じゃないんだし」

「いや、まだまだ子供や」

「そうかなー。そんなことないと思うけどなー」

女の子は立ち上がった、首をかしげていた。海風に金髪が揺れて、キラキラと輝いている。

「それにしても、カラーひよこ釣りなんて珍しいな。最近めつきり見んようになつたしな」

「うんうん。珍しいよね」

「……なあ、あんた欲しいんか？」

「……うん」

「……そか。なら早く船の切符買わな。荷物持ちい。行くで」

「うん」

女の子は恐竜の柄が入ったナップザックを手に持つと、大きなバイクを押す母親と並んで、出店から離れていった。

「……でも往人さん、この島に居なかったね」

「……おつた言うても、いつの話かわからんのやろ？ また探し？」

「うん。今度は見つけたいな」

話の内容はよくわからなかったけど、女の子の肩に手を当てて、なにやら慰めているみたいだった。

その親子を見送っていると、海の方こうから連絡船が港に入ってくるのが見えた。

「しろは、船が来たみたいだし、俺たちも行こうか」
「うん」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

船に乗り込んだ俺たちは、デッキの端の方に立って、遠ざかっていく鳥白島を眺めていた。

外だから日差しは強いけど、いい感じに海風が吹いていた。

「涼しくて、ちようどいいね」

そう言うしろはの髪が風になびいて、きらきらと輝いていた。あまりに綺麗で、見入ってしまった。

「どうしたの？」

「い、いや。なんでもないよ」

急に恥ずかしくなつて、視線を逸らす。

すると、ちょうど視線の先に、船の近くを群れで飛ぶ海鳥が見えた。

「あれ」

その群れから離れて飛ぶ二羽の海鳥がいるのに気付いた。お互いに励まし合っているようにも見える。

「あの鳥、なんだか励まし合つて飛んでるみたいだね」

どうやら、しろはも同じものを見ているみたいだった。

群れという大きな流れから離れながらも、励まし合つて飛ぶ二羽の海鳥。

「あの光景、いつかどこかで見たことあるかも」

「え、何？」

「いや、なんでもない。きつとへじやぶだ」

「へじやぶ？」

「そう。へじやぶ」

「へじやぶ……」

その後、しろはは首をかしげなら、へじやぶ、へじやぶと呟いていた。

上手く誤魔化せたけど、何言ってるんだらう俺。久しぶりのしろはとのデートで、浮足立ってるのかもしれない。

「ところでしろは、今日行きたいお店っていうのは？」

「うん。まずね、矢印良品に行きたいの」

確か、ショッピングモールの中にあつたはずだ。空門姉妹と行く予定だったから、場所だけは把握してる。

「じゃあ、最初は矢印良品だな」

「次に、お昼ごはんなんだけどね」

しろはは鞆から街角情報誌を取り出して、折り目のついたページを開いて見せてくれた。そこには本格イタリアンの店が紹介されてい

た。

「蒼がここのランチがおいしいって言ってたんだけど、一人じゃ入れなくて」

写真を見た限り、いかにもと言った感じの、小洒落た店だった。これは一人じゃ入れないかも。

「本場イタリアで修行したシェフが焼くピザが絶品……なんだって」

「確かにおいしそうだな」

「でしょう」

紹介記事の中には料理の写真もあつて、瀬戸内海の新鮮な海産物を使ったピザやパスタが載っていた。

値段も手ごろだし、お昼はここで決めて良さそうだ。

「このお店も、シヨップピングモールの近くなんだな」

「そうみたい」

一緒に掲載されている地図を見ると、どうやらそうらしい。

「矢印良品もシヨップピングモールの中にあるし、色々な店を見て回った後、時間を見てからのイタリアンって流れでいいかな？」

「うん。それでいいよ」

シヨップピングモールの中にも多種多様な店があるし、どこに行くか迷うよな。

その後も、しろはと街角情報誌を見ながら、色々な話をした。

「え、全国チャーハン博覧会？ そんなのあるの？」

「いや、そんなイベントがあつたらいいなっと思ってただけだよ」

何の気なしに、昨日の夜思いついたイベントの話もしてみた。

「でも本当にあつたら、行ってみたいかも」

「確かに、島の皆のチャーハンに対する情熱は凄まじいもんな」

一家に一つは中華鍋があるとか、未だに信じられないし。

「過去には、鳥白島チャーハン暗黒武道会ってイベントが開かれたこともあるんだよ」

「チャ、チャーハン暗黒武道会？」

何故か、良一が裸でパーシチャーハンを作っているという、おぞま

しい場面を想像してしまった。俺は慌ててそのイメージを打ち消す。

「羽依里、遠い目をしてるけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫」

『まもなく宇都。宇都港に到着いたします。お降りの方はお忘れ物のありませんようー』

……その時、もうすぐ港に到着するというアナウンスが流れた。俺たちも下船の準備をする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

宇都港についた俺たちは、まずショッピングモールを目指すことにした。

「えっと、どっちだったかな」

しろはは港に設置された周辺地図を見ていた。以前、静久が見ていたやつだ。

「しろは、ショッピングモールなら、こっちだぞ」

「羽依里、場所知ってるの？」

「ま、まあな。駅の方だよ」

ある意味、過去のデートが生きていた。

俺としろはは港を離れ、駅構内を歩いていた。

目的のショッピングモールはもう少し歩いて、エスカレーターを登った先だ。

今日は何かイベントでもあるんだろうか。やけに人が多い気がする。

「ひ、人が多いね……」

人混みに慣れていないしろはは、ほとんど俺にくっつくようにして歩いていた。

俺はある意味定期的に來ているし、歩き慣れていた。

「そうだしろは、そこまでくつつくんなら、腕組まないか？」

だからつい調子に乗って、そんなことを言ってしまった。

「え、何言ってるの。人がたくさんいるし、恥ずかしいよ」

言ってから、俺もめちやくちや恥ずかしくなった。でも俺から言い出した以上、引き下がれない。

「実は、蒼や紬はやってくれたんだ」

「え、うそ」

さらに、悪戯っぽくそう付け加える。

「ううう……」

しろははその場に立ち止まり、頭を抱えて悩んでいる。さすがに無茶振りだっただろうか。

「……出して」

「え？」

「腕、出して」

「あ、ああ」

「や、矢印良品に着くまでだからね」

しろははそういうと、顔を赤らめながら、がっちり腕を絡めてきた。

「お、おお」

まさか、してもらえるとは思わなかった。頼んだ俺の方が、逆に緊張してしまっている。

「ううう、恥ずかしい……」

しろは、安心してくれ。俺もめちやくちや恥ずかしいから。その、色々と柔らかいし。

「み、皆に見られてる気がする……」

「そ、それはきつと、しろはが綺麗だからだ」

「そ、そんなことないし。羽依里、たばかったな……」

その後、恨めしそうな声を出すしろはと一緒に、シヨツピングモールを目指して歩みを進めた。

しろはが緊張しているせいか、バランスが悪くて左右にふらふら揺

れる。逆に注目されてしまったような気がする。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

15分ほど歩いて、俺たちは矢印良品に到着した。

「や、やっとなついた」

しろははそう言いながら、組んでいた腕を離す。ようやく慣れてきた感じだったんだけど。

シヨップピングモールの一番奥にある矢印良品は、家具や雑貨をはじめ、衣料品から食品に至るまで、様々なオリジナルブランド商品を扱うお店だった。

この店は場所柄、インテリア用品に力を入れているみたいだ。ベッドやソファ等、大きな家具が展示されているのが見える。

「このお店で家具を買おうと送料が無料になるから、島の皆もよくここで買ってるみたいなの」

「そうなんだな」

しろは曰く、鳥白島だと船を使う関係で、どうしても送料が割高になるらしい。そんな島民にとって、送料無料というのはありがたい話だろう。

「それで、ここで何をかうんだ？」

「一応、探してるものはあるんだけど……時間もあるし、色々見てみようと思うの」

「そうだな。一緒に見て回ろうか」

「うん。それじゃ、行こう」

俺としろはは、一緒に店内を巡ってみることにした。

適当に歩いていると、寝具のコーナーに辿り着いた。

寝心地の良さそうなベッドとか、それに付属する枕やライト、アロ

マオイルといった快眠グッズまで並んでいる。

「さて、目覚まし時計のコーナーはどこかな」

「え、もしかして羽依里、本気で録音機能付きの目覚まし時計買うの？」

「買ったなら、声入れてくれる？」

「入れないし！」

全力で拒否されてしまった。

「それなら、要らないかな」

俺としても、無機質な電子音で起こされるくらいなら、別に目覚まし時計はいらない。

「実家に居ても、毎朝しろはの声で朝起きたいんだ」

「そんな風に言っても、駄目なものは駄目だよ」

毎日のラジオ体操で鍛えた真剣な目でしろはを見つめてみるけど、効果はないみたいだった。

というか、予想以上にしろはが大きな声を出したせいで、さつきから他のお客さんに注目されていた。これは別の場所に行こう。

次に辿り着いたのは、キッチン用品のコーナーだった。

野菜の芯を一瞬で抜ける便利グッズの他、普段台所に立ち入らない俺には用途すらわからない道具がたくさん並んでいた。

そんな中で、一際目を引くものがあった。

「見ろしろは、スイカバーのスポンジがあるぞ」

「あ、本当だね」

本物のスイカバーを模した形をしていて、細部まで細かく作ってあった。妙にリアルだった。

「安いし、買ってやろうか？」

「えっと……ごめん。いい」

「え、いいの？」

「うん。使っていくうちにボロボロになっていくスイカバーを見たくない……」

確かに。もつともな話だった。

他にもしろはは、調味料の収納に使う便利グッズとかを見ていたけど、目的のものはここには無かったみたいだ。

キッチン用品に続いて、お風呂グッズのコーナーにやってきた。

お風呂マットやバスタオルなどの鉄板商品に加えて、様々な種類の石鹸や入浴剤が所狭しと並べられていた。

「しろは、スイカの香りがする石鹸や入浴剤があるぞ」

「そんなのあるんだ……でもこれ、お風呂で使った後、色々寄ってきそう。かぶと虫とか」

あー、なんかわかる気がする。

その後、しろははシャンプーとか、浴室で使うヘアブラシを見ていた。確かにしろはの髪は綺麗だし、やっぱり手入れが大変なのかな。でも、ここでも何も買わなかった。

「うーん。やっぱり、この辺りにあるはずなんだけど」

一通り店の中を回った後、再びキッチン用品のコーナーに戻ってきた。

「あった。これだよ」

しろはが目的のものを見つけたのは、キッチン用品の中でも、小分け容器のコーナーだった。

「何それ」

「はちみつ容器」

言われてみれば、町の食堂とかで見たことがあった。はちみつやマスタード、ドレッシングやらが入っている入れ物だった。

「これはさすがに駄菓子屋に売ってないし、通販代行してもらおうと割高だから」

「それって食堂で使うのか」

「ううん。浜辺」

「え、浜辺!？」

浜辺で使うはちみつ容器。全く想像できない。

「中に塩を入れてね。貝を獲るの」

「え、貝?」

「うん。マテ貝」

マテ貝。なんだろう。わからない。

「今度見せてあげるね。マテ貝、美味しいんだよ」

そう言いながら、笑顔ではちみつ容器を持って、レジへ向かっていった。

納得のいく買い物だったのだろう。矢印良品を後にするしろはは、ご機嫌だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

矢印良品を出て、二人並んでショッピングモール内を歩く。

「あのさ、しろは」

「……もうしないよ」

それとなく腕を出してみたけど、ダメだった。睨まれただけで、腕は組んでももらえなかった。

「……こつちなら、いいよ」

しろははそう言つて、代わりに手を握ってくれた。これで十分だった。

その後は、腕時計で時間を確認しながら、色々な店を見て回っていた。

何の気なしに右の方を見ると、ケータイショップが目に入った。

店頭で新規勧誘を行っていて、いくつも立てられた派手なほりには『真夏の0円キャンペーン実施中!』とか書いてあった。

「ケータイとかあると、便利だよな」

実家からしろはの家に電話すると、時々じーさんが出るからビビるし。しろはから実家にかかってきた時も、先に母親が出て『島の彼女からよー』と言われるのは、けっこう恥ずかしい。

「うちは無理だと思う。おじーちゃんが許してくれないだろうし」

確かに、あの人はそう言うの許してくれなさそうだ。

「急ぎの電話がしたければ、その辺の家で電話を借りろ。とか言いそうだよな」

「ぷっ」

しろはが噴き出していた。

「ごめん。似すぎてて、つい」

お腹を押さえて笑っていた。どうやらツボに入ったらしい。

でもそういうことなら、俺だけ携帯電話を持ったところで、電話口でじーさんが出ることに変わりはない。しろはとのホットラインを用意したかったんだけど。

この件はまだまだ先延ばしになりそうだった。

賑やかなケータイショップを通り過ぎて、しばらく歩く。その間、俺はあることを考えていた。

……折角のデートだし、何か記念になるものが欲しい。

「なあしろは、せっかくのデートだし、記念になるものを買わないか？」

「え、記念になるもの？」

独りよがりでも困るので、しろはにも確認する。

「た、例えば？」

「ペ、ペアグッズとか」

「ペ、ペア!?!」

ボンツと、しろはの顔が赤くなった。たぶん、言った俺の顔も赤くなってると思う。

腕時計で時間を確認する。お昼まではまだ時間があるし、大丈夫だ

ろう。

というわけで、未だ困惑しているしろはを連れて、それらしい店をいくつか覗いてみた。

でもペアグッズとなると、明らかに狙ったような商品ばかりだった。指輪とかだと重いし。Tシャツとかだと、しろはは絶対着ないの一点張りだったし。

悩んだ末、たまたま目についた和食器の店にも入ってみた。

「おそろいの箸とか、茶碗とか、買ってみないか？」

「そ、そういうのって、普通は一緒に住んでからだよね!？」

「しよ、食堂に置いといてくれるとか、さ」

「逆に恥ずかしいし!」

言い争いをする俺たちを、店主のおじーさんがすごく微笑ましそうに見ていた。その視線に耐えられなくなって、そそくさと店を後にした。

「いきなり夫婦茶碗は色々問題があるというか、飛躍しすぎというか、将来を見据え過ぎというか」

手を繋いで歩きながら、しろはは小声でずっとぶつぶつ言っていた。

心なしか俯いてるし、もしかして怒らせてしまったんだろうか。

ペアグッズは諦めて、しろはだけに贈り物をするのがいいかもしれない。

「うーん。何かないものか……」

結局、なかなかいい店が見つからないまま、ショッピングモールの出口付近まで来てしまった。

「あ」

その時目に入ったのが、例のアクセサリーショップだった。

確か静久と一緒に、紬のリボンを買ったお店だ。

そうだ、ここなら。

「しろは、ちょっとこの店に入ってみないか」

「え、なんか高そうなお店だけど」

「大丈夫だつて」

一度入ったことあるし。

俺は困惑するしろはの手を引いて、アクセサリーショップに入店する。

「いらつしやいませー」

以前と同じ店員さんが、カウンター越しに対応してくれた。

そして一瞬、何故か驚いたような顔をされた。

もしかして『あらこの男の子、前と違う女の子連れてるわ……』とか、思われたんだろうか。誤解しないで欲しい。こっちが本命です。「す、すごいね」

こういうお店に入ったことがないんだろう。壁や棚一面に並べられた多種多様なアクセサリーを前に、しろはが圧倒されていた。

「それで、こっちなんだけどさ」

そんなしろはを連れて、俺は髪飾りのコーナーに向かう。

「え、なに？」

慣れた足取りで店内を進む俺を見て、しろはが困惑していた。

「その、ペアグッズはさすがに早すぎたみたいでさ。反省してる」

「そ、そう」

「でもせめて、しろはにプレゼントがしたくて」

「ええ!? いいよ、そんなの」

「そう言わないでさ。これとか、似合うと思うんだけど」

俺は無数に並ぶ髪飾りの中から、桜色の髪留めを選んでしろはに見せる。バレッタと言うやつだった。

「料理をする時、しろはは髪を結っているしき。その時に使ってもらえると嬉しいんだけど」

この色合いなら、しろはの綺麗な髪に絶対映えると思うし。

「すごく綺麗だけど……でも、やっぱり駄目」

「そ、そっか……」

しろはは断固拒否の構えだった。俺としても、彼女が嫌がるものを無理矢理贈るわけにもいかない。

「……どうせなら、こっちがいい」

そう言うと、しろはは別の棚に並んでいた小さなアクセサリーを手取る。

「え、それがいいの？」

「うん。これがいい」

重なり合う二匹の鳥がデザインされたアクセサリーだった。正直、さっきのバレッタより数段見劣りする。

「これ、変わってるんだよ。見てて」

しろははそう言って鳥のアクセサリーを弄る。かちりと音がして、重なっていた鳥がふたつに分かれた。

「あ、外れるんだ」

「うん。こうすれば、二人で持つておけるんだよ」

なるほど、そういう商品なのか。

商品説明を見ると、これは二つのアクセサリーが鍵のように組み合わせさせてあるらしい。

それぞれ個体差があつて、最初のペア同士じゃないと、上手く重ならないんだとか。

「なるほど。つまり、俺の鳥はしろはの鳥以外とはくつつかないわけか」

「そ、そういうことです」

別々のアクセサリーに見えて、実はペアという。なんというか、俺たちらしいと思った。

「これも、い、一応、ペアグッズじゃないかと」

どうやら、これが彼女の最大限の譲歩だったみたいだ。

「じゃあ、これにしよう」

「よ、よろしくお願いします」

なんだろう、さっきから、しろはがやけに緊張していた。

俺は鳥のアクセサリーを持って、レジへ向かった。

「すみません。これをお願いします」

「はい。お預かりします」

この店員さん、ちょうど他に客がない時間帯だったせいか、カウンターの向こうから、ずっと俺たちの様子を見ていたっぽい。

営業スマイルだけど、その顔が『若いっていいわねー』と言っていた。

「こちらのアクセサリーでしたら、サービスでキーホルダーやネックレスに加工することもできますよ。加工代金はサービスさせていただきます」

「しろは、ネックレスにしようか」

「い、いえ！ キーホルダーでいいです！」

しろはが全力で拒否していた。やっぱり、さりげなくペアグッズにしようとしたけど、無理だった。

店から出ると、すぐに包みを開けて、鳥のアクセサリーをしろはと分ける。

「それじゃ、しろは。いくぞ」

「うん。セーの」

二人で左右の鳥を持って、同時に動かして切り離す。

なんだろう。同じような動作を、いつかどこかでしたような気がする。

「ありがとう。大切にするね」

しろははアクセサリーを手のひらに乗せて、嬉しそうにそう言ってくれた。

「キーホルダーだし、食堂の鍵につけても良いよね」

「そうだな」

大切にしまわれるより、使ってもらった方が良い。食堂に鍵がかかっているとかが、あまり見たことないけど。

俺は自分の鞆か、バイクのキーにでもつけることにしよう。

「それじゃ、お昼ごはんに行こうよ。そろそろ、いい時間だよ」

しろはに言われて腕時計を見ると、12時をとうに回っていた。ちよつと遅くなつてしまった。

「本当だな。それじゃ、行こう」

自然にしろはの手を取つて、歩き出した。次の目的地であるイタリアンレストランはショッピングモールの近くだし、時間的には大丈夫だろう。

第二十六話・完

第二十七話 8月17日（後編）

「ここだね」

街角情報誌の地図を頼りに、目的のイタリアンレストランに辿り着いた。駅前の大通りから少し路地を入った場所にある、こじんまりとした店だった。

「……あれ？」

でも、お昼時だというのに、全然お客さんの姿がなかった。

「まさか」

嫌な予感がして、俺は駆け足で入り口のほうへ近づいてみる。

見るからに重厚そうな木の扉は固く閉ざされていて、イタリア語で閉店や準備中を意味する『CHIU SO』の札がかかっていた。どうやら、まさかの休みのようだった。

「え、そんな」

しろはもショックを受けていた。定休日とかじゃないはずだけど。そう思いながら、もう一度情報誌に目を通す。すると、この店の定休日の欄には『不定休』と書かれていた。

「よ、よりによってこんな時に……」

「うん、残念だったね……」

せっかくのしろはどのランチの予定だったのに。

「それより、お昼ごはんどうしようか」

「そ、そうだよな」

この店が駄目なら、他の店を探すしかない。切り替える、俺。

俺たちは大通りの方に戻り、何か良いお店がないかと周囲を見渡してみる。

……その時、回転寿司の看板が目に入った。

最悪、あれでもいいかも……。

一瞬、そんな考えが頭をよぎる。でもよく考えたら、しろはの家は漁師だった。さすがに鮮度が違う。無謀だった。

「あのね羽依里。もう一軒、行ってみたいお店があるんだけど」

「いいぞ。どこだ?」

俺が思い悩んでいると、しろはがそう提案してくれた。これは願ってもなかった。

「ジャイフルなんだけど」

「え、ジャイフル?」

「うん、ジャイフル」

そういえば、島民の憧れの店だと言っていたっけ。しろはもその例に漏れない感じなんだろうか。

「それじゃ、ジャイフルに行こう」

「場所は……わかるよね?」

「ああ、わかるぞ」

……三度目だからな。

「それじゃ、案内お願いね」

「まかせてくれ」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

通り慣れた道を歩き、ジャイフルに到着した。

お昼時を少し過ぎているということもあって、お客さんはそこまで多くない。

「ジャイフルへようこそ。こちらのお席にどうぞ」

店員さんに案内されて、一番奥のボックス席にしろはと向かい合って座る。

「あれっ、この席ってもしかして」

「羽依里、どうかしたの?」

「いや、なんでもないよ」

まさか、三回が三回とも一番奥のボックス席に案内されるなんて。偶然とは思えないんだけど。

「ご注文がお決まりになりましたら、奥のボタンでお呼びください」

店員さんは俺たちにおしぼりとお冷を提供してくれた後、お決まりの言葉を残して去っていった。

「えーっと、何にしようかな……」

二人でメニューを開いて料理を選ぶ。

「このお店、鉄板焼きハンバーグが美味しいよね」

しろははハンバーグのページを見ていた。確かにハンバーグはこの店の一押しメニューだし。同じ飲食店を経営する身として、気になったのだろうか。

俺も同じページを見てみる。ページ一面に様々な種類のハンバーグが載っていて、迷ってしまう。

「このチーズインハンバーグとか、変わってるよな」

ハンバーグの上じゃなく、中にチーズが入っているものなんて、聞いたことがなかった。

「島だと、チーズも貴重だもんな」

以前、大雪印のスライムチーズが港の商店に売っていたけど、割高だった気がする。

「昔は島でもチーズを作ってるおじさんがいたけど、身体を悪くしてからは作ってないの」

「すごいな。酪農してる人がいたのか？」

「ううん、ヤギのチーズだったよ」

「え、ヤギ!？」

どんな味がするんだろう。機会があれば、食べてみたかった。

「よし、俺はこれに決めた」

結局、俺はチーズインハンバーグセットを選んだ。一方で、しろははまだ悩んでいた。

「ねえ、このハンチャーハンセットって何かな？　これだけ、写真がないんだけど」

しろはがメニューを俺の方に見せてくる。このメニューって確か。「ジャイフル自慢のハンバーグとチャーハンが一緒に食べられる、お

得なセットらしいぞ」

「あ、ハンってハンバーグのハンなんだ。羽依里、詳しいね」

「ま、まあな。鉄板の高火力で調理したチャーハンは、当店おススメの一品らしいぞ」

紬たちと来た時、俺も気になつて店員さんに聞いたから、覚えていた。聞いただけで頼まなかったら、現物は見てないけど。

「じゃあ、それにしてみる」

「え、それにするの？」

「うん。鉄板チャーハンっていうのが、どういうものか気になるし」

しろはもチャーハン研究に余念がないし、何か惹かれるものがあったんだろう。俺がとやかく言うものじゃない気がした。

「このハンバーグも、久しぶりに食べてみたかったし」

「じゃあ、それで注文するよ」

「うん。お願いね」

ぴんぽーん。とボタンを押して、店員さんと呼ぶ。やってきた店員さんに注文を伝えると、もう一度注文を確認した後、一礼して去っていった。

「それにしても、しろはがジヤイフルが良いなんて意外だな」

「うん。小さい頃。よくおとーさんやおかーさんと来てたから」

「そうなんだな」

そういえば、鳥白島の島民にとってこの店は憧れで、特別な時に行く店なんだっけ。

「やっぱりしろはにとつても、特別な店ってことなのか」

「うん。誕生日とか、入学式とか、特別な日のお祝いは、ほとんどこのお店だったの」

しろはは当時のことを懐かしむように、そう話してくれた。

「小さい頃は、おとーさんの買い出しについて行ってね。帰りはいつもこのお店で……あ」

その時、しろはの瞳から一筋の涙がこぼれる。

「……しろは」

「ご、ごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど」

意図せずとも、両親と一緒に居た時の思い出が蘇ってしまったんだろう。しろはは慌ててハンカチを取り出して、その涙をぬぐう。

「いや、妙な話題を振った俺が悪いんだ」

俺は思わずしろはの隣へ行つて、その肩を抱く。

「頼りないかもしれないけど、今は俺がいるから」

「うん。今は羽依里がいるし、大丈夫。大丈夫だから」

しろはは涙を拭いて、すぐに笑顔になる。

「……いつか子供が生まれたら、このお店に連れてきてあげたいね」

「そうだな……って、え!？」

「あ、えつと……は、羽依里とそういう関係になるって決めたっわけじゃないから！ まだ！」

「まだ？ まだってことは、ゆくゆくは可能性があると思っっている!?」

「……どすこいっ！」

顔を真っ赤にしたしろはに、思いつき突き飛ばされた。あまりに恥ずかしすぎたみたいだ。

一瞬不安になったけど、どうやらしろはは大丈夫みたいだ。

「ごめん。どすこいは言い過ぎた」

「いいよ。気にしてないから」

その後は元の席に戻つて、落ち着いたしろはと他愛のない話をする。

「そういえば、しろはたちの通ってる学校、ここから近いんだっけ」

「うん。駅の反対側から坂道を少し上ったら、学校なの」

「今度案内してくれないか。まだ行ったことないし」

「夏休みでもそれなりに人がいるし。その前に羽依里、部外者だよね？」

「良一か天善から制服借りて行けば問題ないだろ」

「大ありだから」

話をしている限り、すっかりいつものしろはだった。

「それより今度、私が羽依里の家に行ってみたいな」

「え、俺の家？」

「うん。まだ行ったことないし」

「俺の家は狭いから、寝るときは同じ部屋になるぞ」

「えっ、そ、それはまだちょっと、困るよ……」

同じ部屋で寝ているのを想像したんだろうか。しろはは顔を赤らめながら困惑していた。

「って、なんで泊まることになってるの」

「あれ、泊まっていつてくれないの？」

「泊まらないし！」

なんだろう。しろはをからかうの面白い。

でも正直、いつかしろはを実家に呼んであげたいな。

……あれ、でもそれって間接的に両親に紹介することになるんじゃないか？

「しろは、やっぱりその件はよく話し合ってから決めよう」

「え？ そ、そう……」

「おまたせしましたー」

その時、注文した料理が運ばれてきた。

俺のチーズインハンバーグセットも迫力満点だったけど、それ以上に気になったのが、しろはのハンチャーハンセットだった。

鉄板の上でハンバーグとチャーハンがジュージュー言ってる。油も跳ねまくってるし、なかなかの迫力だった。

「それでは、ごゆっくりどうぞー」

「それじゃしろは、食べよう」

「うん。いただきます」

店員さんが去った後、さっそく各々のハンバーグに取り掛かる。

俺のハンバーグはパツと見、普通のハンバーグと変わらなかった。ところが切ってみると、中に入っているチーズが肉汁と一緒に鉄板の上にあふれ出してきた。これは見た目も美味しそうだ。

一口サイズに切って、そのチーズと肉汁、ソースを絡めていただく。
「羽依里、どう?」

「美味しいけど、昨日食べたしろはのハンバーグには及ばないな」
「え、そうなの?」

「なんていうか、硬い」
牛肉100%と書いてあったけど、なんだろう。つなぎの違いだろうか。

「チーズが入ってるのも、一口試してみたいんだけど」
「ほい。どうぞ」

俺はハンバーグを適当な大きさにカットして、フォークに刺し、しろはの方に差し出す。

「うん。ありがとう」

しろはは少し身を乗り出して、ぱくつと俺のフォークからハンバーグを食べる。

「あ、チーズが入ると風味が変わって美味しいね」

「し、しろは」

「……はっ」

直後、しろはは自分の口元を抑えて固まる。

至って自然にしろはに『あーん』してしまった。

「な、なにをするの」

にやにやってるんだらう俺。

というか、しろはも普通に食べちゃってるし。この席、自然と『あーん』をしてしまう呪いでもかけてあるんだらうか。

「そ、それよりしろは、チャーハンの味はどうなんだ?」

妙に恥ずかしくなってしまうたので、慌てて話をすり替える。

「え? チャーハンは……えつとね……」

一転、しろはは何とも言えない顔をしていた。最初に一口食べてからは、ハンバーグの方に専念しているみたいだけ。

「こういう提供の仕方をする、ハンバーグの脂がチャーハンにも回っちゃう。それを考えてチャーハンの油を少なめにするか、別のお皿にしない」と

自身も食堂を経営しているだけある。料理人としての目線も入った的確な感想だった。

「ハンバーグのソースも工夫しないと、チャーハンの味を邪魔してるし。これじゃチャーハンが可哀想だよ」

しろはの中では、ハンバーグより、チャーハンが主役のようだった。というか、ものすごく饒舌だった。さすがチャーハンのことになると、熱い気持ちを抑えられないんだろうか。まるでチャーハンの申し子だ。

「ハンバーグは美味しいのに、残念」

しろはは悲しそうな目でチャーハンを一瞥した後、残りのハンバーグに取り掛かった。

まあ、ファミレスのチャーハンにそこまでのものを求めちゃいけないのかもしれないけど。

「ふう。ぐちそうさま」

俺が自分の料理を食べ終えた頃、しろははハンバーグを綺麗に食べあげて、残ったチャーハンに取り掛かっていた。

「……」

あからさまに表情が曇っている。

鉄板もだいぶ冷めてしまったようで、ますます油が回っているように見える。

正直、美味しくないんだろう。

「ねえ羽依里、お願いがあるんだけど」

そして、しろはが申し訳なきように言ってきた。

「その、食べてくれない?」

「え?」

「だから、羽依里、チャーハンあげる」

「ええええ」

まさか、あのしろはが食事を残すなんて。

それくらい、このチャーハンが許せなかったんだろうか。

「わかった。食べるよ」

お腹は結構限界だったけど、他ならぬしろはの頼みだし。

「でも、どうせなら食べさせてほしい」

「え、何言ってるの」

「さつき食べさせてあげたら？ そのお返しってことで」

「あ、あれはその、なりゆき。なりゆきです」

どうやらしろはは、緊張すると敬語になるらしい。

「しろはが食べさせてくれなきや、食べないぞ」

「ううう……い、一回だけだからね」

しろははそう言うと、スプーンでチャーハンをすくって、俺の方に向けてくる。

「あ、あーん……」

半分涙目だし、スプーンの先も震えてるし、顔真っ赤だし、これは、色々とやばい。

「あーん……」

このしろはの表情をずっと見ていたけれど、そういうわけにもいかない。少しでも早く楽にしてやろうと、俺はスプーンに食らいつく。

「……あー。これは確かに」

一口食べてみてわかったけど、しろはの言う通りだった。

鉄板チャーハンっていうコンセプトなんだろうけど、その鉄板のせいで、しつこいくらい油が回ってしまっている。これは30点ってところだった。

「しろはの言う通り、あまり美味しくないな」

「でしょう。具材も冷凍だし。今時ミックスベジタブルを使ってるなんて言語道断だよ。火力も足りてない感じだし。極論を言うと、これはチャーハンじゃなくて焼き飯だよ」

二人して厳しい評価を下すことになった。俺も最近、すっかりしろはや夏海ちゃんのチャーハンに慣れてしまってるからなあ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しろはと約束した手前、俺は残りのチャーハンをかき込むように食べ終えて、ジャイフルを後にした。

時間を気にしながら、港へ向けて歩く。今からなら、余裕をもって船に間に合うはずだ。

「ごめんね。大丈夫？」

しろはと並んで歩きながらも、俺は胃を押さえていた。

「そのうち良くなると思うけど、油がしつこくて」

「うん。わかる。わかるよ」

しろははうんうんと頷いて、同情してくれた。やっぱり、持つべきものは気持ちをつかち合える彼女だ。

「それよりしろは、さすがに食べた量が少なかったんじゃないのか？」
実際に食べたの、ハンバーグだけだし。いくら女の子とは言っても、少ないと思う。

「うん……でも、あのチャーハ……焼き飯だけは許せなかったの」
言い直した。

きつと、しろははこれからジャイフルでは絶対にチャーハンは頼まないだろう。

「でも、しろはももう少し何か食べた方がいいんじゃない？」

何か軽く食べられるものでも売ってないかと思渡すと、おあつらえ向きにクレープの屋台が出ていた。

「しろは、あんなところに、クレープ屋があるぞ」

「え、クレープ？」

「うん。まだ入るよな？」

「入る、けど……」

「チャーハ……焼き飯の口直しにさ、食べないか？」

「それじゃあ、食べようかな」

「よしきた」

というわけで、二人で一緒にクレープ屋の屋台へ近づいていく。

「いらっしやいませー」

藍色の髪をツインテールにした女の子が対応してくれた。アルバイトだろうか。

「しろは、奢るから好きなの頼んでいいぞ」

「え、悪いよ。お昼だって出してもらったのに」

「いいからいいから」

こういう時は男が出すもんだし、気にしないでほしい。

「こつちにサンプルがありますので、好きな物をお選びくださいませー！ トッピングも選べますよー！」

透明ガラスの中にサンプルが並べられていた。チョコバナナクレープのような定番のものから、期間限定品、おかずのようなもので、レパートリー豊富だった。

「げ、なんだこれ」

サンプルが並んだガラスケースの一番端に、他のクレープの数倍はあろうかという大きさのクレープが鎮座していた。

「これは当店おススメの、プリンセスクレープですっ！ 美味しいですよっ！」

「え、2000円とか高すぎるよ」

本当だ。奢るとは言ったけど、さすがに高すぎる。

「こつちのこれ、これでいいです」

直後にしろはが選んだのは、果物がたくさん乗ったクレープだった。

「トロピカルスペシャルですねっ。少々お待ちくださいませー！」

注文を受け、店員さんが手際よくクレープを作り始める。

しろはその様子を物珍しそうに眺めていた。

「あれ？」

その時、屋台の壁に貼られた一枚の広告が目に残った。

『竜太サンド 200円』

「え、竜太サンド!?!」

思わず声が出てしまった。

「あ、竜太サンドに興味がありますか？ うちの兄が最近販売を始め

たもので。良かったらいかがですか?」

「いや、せっかくだけどやめておくよ」

島の出店で買った竜太サンドの悪夢は忘れていない。さすがに今回は手を出さずにおこう。

「はい、トロピカルスペシャル、お待たせしましたー。500円になりまーす!」

そんな話をしていると、クレープが完成したらしい。俺が代金を支払って、しろはがクレープを受け取る。

しろはが受け取ったのを見ると、ブルーハワイみたいなソースがかかっていて、全体的に青い。そこに多種多様な果物が乗ってるから、めっちゃくちやカラフルなクレープだった。

「ありがとうございますー!」

店員さんの元気いっぱいの声に見送られて、俺たちは再び港へ向けて歩き始める。

「ねえ羽依里、どこかに座って食べたいんだけど」

「そのまま歩きながら食べたらいんじゃないのか?」

「えっ、歩きながら? 行儀悪いよ」

「でもしろは、どこかで座って食べてたら船の時間が厳しいかも」

俺は腕時計をしろはに見せる。

「あ、本当だ。船に乗り遅れるわけにはいかないし。それなら、しょうがないよね」

しろはも納得した様子で、歩きながらクレープを食べ始めた。慣れていないようで、どうも足取りがぎこちない。

「どつかにぶつかりそうになったら、教えてやるからな」

「うん」

やっぱりお腹は空いていたんだろう。黙々と食べていた。

それにしても、美味しそうにクレープを食べるしろはを見ていると、俺も一口欲しくなってきた。

というか、しろはの代わりに油ギトギトの焼き飯を完食したのも

あつて、無性に口直しがしたい。

かと言つて、一口くれ、なんて言つたらまた動揺されそうだし。

……よし。ここはあの手で行こう。

「しろは、あれを見ろ。バニ山バニ男だぞ」

「え？」

俺が指差した先には、風船を配るウサギの着ぐるみがいた。

……よし、今だ。

しろはがそつちを向いている隙に、クレープを一口かじる。

クリームと一緒に、ブルーハワイの味が広がって美味しかった。

「あれ、なんか減ってる？」

「え、気のせいだろ」

「そ、そう……？」

「お腹空いてるから、勢いよく食べちゃってるんじゃないか」

「確かにお腹は空いてる、けど……」

しろはは自分のクレープを見ながら、首をかしげていた。

「ところでしろは、あれを見ろ。アウトローのヨッシーノだぞ」

「え？」

先程と同じように、しろはがそつちを向いているうちに、もう一口。

今度はクリームと一緒に、パイナップルやマンゴーといったフルーツも口に入ってきた。実にトロピカルだった。

「ただの不良じゃない。目が合っちゃったらどうするの」

しろはが視線をクレープに戻す。

「あれ、やっぱり減ってる」

「きのふえいだろ」

「え？」

時間がなくて、口の中に入ってたパイナップルを飲み込めなかつた。

た。

「羽依里、食べたでしょ」

「た、食べてない」

急いで飲み込んで、素知らぬ顔をする。

「嘘。クリームついてるよ」

「え、嘘だろ？」

俺は慌てて自分の口の周りをぬぐう。

「嘘だよ。ついてない」

しろはは悪戯っぽい顔で笑う。してやられた。

「しろは、たばかったな……」

「やっぱり食べてたんだ。食べたいならそう言えばいいのに。もう……」

口をとがらせて、なんかぶつぶつ言っていた。かわいらしいので、そのまま見ていることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ごちそうさまでした」

港に到着する頃には、しろはもクレープを食べ終わっていた。

「羽依里、あれ何かな?」

そのクレープの包み紙をゴミ箱に入れながら、しろはが聞いてきた。

「なんだろう、あの人だから」

しろはに言われた方を見てみると、なんかイベントをやっていた。朝通った時は、ちょうど道の反対側だったから、気付かなかったみたいだ。

そして、ものすごく嗅ぎ慣れた香りが周囲に漂っていた。

「この匂いは、もしかして」

入口と思われる場所には大きな看板が立っていて『全国チャーハン博覧会』と書かれていた。

え、ちよつと。そのイベント、本当にあるの? ラーメンやカレーとかなら聞いたことあるけど、チャーハンって。

「もしかして、羽依里が言ってたのって、このイベント?」

「いや、俺のは何というか、口から出まかせだったんだけど……」

でも現に、目の前で全国チャーハン博覧会は開催されていた。この

イベントがあったから、駅構内にも人が多かったのか。

「しろは、ちよつと覗いてみる?」

「で、でも、もう帰らないと。食堂の準備しないと……」

口ではそう言ってるけど、視線は全国チャーハン博覧会に釘付けだった。うん。すごくわかりやすい。

「二本くらい船を遅らせてもいいんじゃないか。全国チャーハン博覧会、俺も見てみたいし」

「う、うん……羽依里がそう言うなら」

最後まで葛藤していたしろはの手を取って、俺は会場へと足を踏み入れた。

会場内はチャーハンの出店が立ち並ぶ飲食ブースと、各企業に関連商品が並ぶ展示ブース、全国のグルメ&スイーツが購入できる物販ブースに分かれていた。

最初に飲食ブースを見てみる。

どうやら入り口近くのチケット売り場でチャーハンチケットを買って、出店のチャーハンと交換するシステムみたいだ。

でも、チケット売り場には『本日分のチケット完売』の張り紙があった。さすがに15時を回っているし、これはしょうがないと思う。

「どれか一つでも食べられれば良かったんだけどな」

「もうさすがに入らないよ。それに食べなくても、チャーハンなら材料と香りだけで、大体の味は想像できるから」

「え、そうなの?」

さすがしろはだった。

ずらつと並んだ出店では、北は北海道のタラバガニチャーハンから、南は沖縄県のイラブーチャーハンまで、各都道府県を代表するチャーハンが並んでいた。見ているだけでも楽しい。

「熊本県のいきなりチャーハンだって。何が入ってるんだらう」

「具材は見た感じ、サツマイモなんだけど。どうしていきなりチャーハンなんだろうね」

しろはも首をかしげていた。匂いはとてもおいしそうだったけど。「え、いちごチャーハンって何？」

俺の視線の先に、やけに赤いチャーハンがあった。どうやら栃木県代表のチャーハンらしい。

「真つ赤なイチゴとチャーハンのハーモニーが絶妙……らしいけど」

しろはも顔が引きつっていた。さすがにこの組み合わせでは味が想像できない。

その後も、食べることはできないけど、目と香りで全国津々浦々のチャーハンを堪能した。

個人的に、広島のお好み焼きチャーハンと和歌山のみかんチャーハンが気になった。なんでみかんチャーハンなんだろう。和歌山なら南高梅もあるし、うめチャーハンとかにすればいいのに。

京都の京風チャーハンには『京風って言っても、あたし風って意味じゃないだからね!』と注意書きがされていた。よくわからないけど、これも美味しそうだった。

次に、企業の展示ブースに行ってみた。博覧会のマスコットキャラなんだろうか。チャーハンマンとかいう謎のキャラクターが愛想を振りまいていた。

「へえ、IHクッキングヒーターだつて」

一番目立つ場所に、新製品のIHクッキングヒーターが展示されていた。奥の方では同型の機械を使って、調理実演も行われていた。

「こういうのってどうなんだろうな。ガス代がかからなくて経済的って言うけど」

「うーん」

しろはが商品説明を読みながら、難しそうな顔をしていた。

「チャーハンを作るには、全然火力が足りないね。家庭用として焼き飯を作るくらいならできるんじゃないかな」

島一番のチャーハン食堂を経営するしろはから、シビアな評価が下されていた。

その隣では、全自動チャーハンマシンのデモンストレーションが行

われていた。

「業務用チャーハンマシン。わずか2分で一人前のチャーハンを作ります。だつてさ」

二人で並んで説明書きを読んでいると、ぐるぐると奥の中華鍋が回転し始め、係員がその中に油を適量注ぐ。続けて、解いた卵とごはんを投入すると、アームが下りてきて、ぐるんぐるんと鍋の中をかき回す。

「すごいなこれ」

「邪道」

興味津々に見ていた俺に対し、しろはは未だ回転し続けているチャーハンマシンを一瞥すると、その場から離れていった。

「あんなの、にやが谷園の具入りチャーハンの素と変わらないよ。魂がこもってない」

どうやら、しろははにとってチャーハンは全て手作りであつてこそ、らしい。チャーハン愛ともいうべきか。

その後もしろはと、色々な場所を見て歩いた。

企業ブースには、他にもチャーハンの噴水とか、チャーハンアートとか、よくわからないものがたくさんあつたし、なんだかんだで楽しめた気がする。

最後に物販ブースに立ち寄って、しろはが夏海ちゃんと鏡子さんへのお土産を買ってくれた。

「気を遣わせて悪いな。しろは」

「いいよ。いつも羽依里がお世話になつてるんだし」

そう言つてしろはが手渡してくれたのは、水瀬印のミックスジャムサンドだった。北国の名物らしい。

「それじゃ、そろそろ帰ろうか」

「うん」

港の近くのイベントということが幸いして、次の船の時間ギリギリまでイベントを楽しむことができた。

俺たちは全国チャーハン博覧会を堪能して、帰宅の途に就いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、帰ってきましたよ」

「おかえりー」

鳥白島の港に到着すると、なぜか空門姉妹が出迎えてくれた。

「え、なんで二人がいるの？」

「暇だったのよねー」

「はい。暇だったんです」

二人とも笑顔なんだけど、何故かすごい恐怖を感じる。絶対に何か裏がある。

「きよ、今日はありがとうございます。それじゃ、お疲れさまでした」

その時、しろはは簡単に挨拶だけ済まして、全速力でその場から逃げて行ってしまった。急に敬語になってたし、何か良からぬ気配を感じ取ったんだろう。

「しろは、何で逃げたのかしら」

「本当ですね」

いや、もしかしなくても二人のせいだと思うけど。

「まあ良いです。片方からだけでも話を聞くとしましょう」

「じゃあ、俺もこれで」

俺も危険を感じた。逃げるとしよう。

「羽依里さんは逃がしません」

片手を挙げて、颯爽とその場を離れようとしたけど、二人に両サイドから取り囲まれてしまった。

「しろはと今日、どこまでいったのか、気になってねー」

「羽依里さん、洗いざらい話してもらいますよ」

多少強引な感じもするけど、二人ともしろはの親友だし、デートが成功したかどうか気になったのかな。

「で、どこまでいったんですか？」

「全国チャーハン博覧会だよ」

だから、俺も正直に答えておいた。

「またまたー。そう言っつて誤魔化すんだからー」

「いや、本当なんだけど」

「はいはい。そう言うイベントがあつたら面白いわねー」

「それで、どこまでいったんですか？」

「しろはとキスくらいしたんでしょ？」

それ、男の俺に聞く？

なんかメモ帳みたいなの持ってるし、なんの取材だろう。

というか、ぐいぐい来る。その、やめてほしいんだけど。右も左も

同じ顔だし、双子パワーやばい。

「ほらほらー、正直に言っちやいなさいよー」

「そうすれば、すぐに楽になりますよ」

というか、キスなんてする勇氣ないし。ここはボロが出る前に、何が何でも逃げるしかない。

「あ！ あんなどころで良一が下半身裸になってるぞ！」

「え!？」

「今だ！ ダツシユ！」

「あ、逃げた！」

二人の注意が俺から逸れた一瞬の隙を突いて、俺は包囲網を脱出。そのまま全力疾走で港を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「はあはあ、なんとか帰り着いた」

船を一本遅らせたのもあって、加藤家に到着した時には16時を過ぎている。正直言うと、もう少しだけデートの余韻に浸っていたかったんだけど

「正直言うと、もう少しだけデートの余韻に浸っていたかったんだけど

どな……」

「余韻がどうした?」

玄関先で一人黄昏していると、背後から声をかけられた。振り返ってみると、しろはのじーさんが仁王立ちしていた。

「ひえっ、ごめんなさい!」

「む? なぜ謝る?」

「いえその、しろはの帰宅が遅くなったことを怒られるかと思って」
帰りの船を一本遅らせたのは、俺にも責任があるし。またシティー
ボーイと罵られる覚悟はできていた。

「……何を今更。しろはも楽しそうに帰ってきたし、何も言うことない」

半分呆れたような顔で、そう言われた。どうやら許してもらえたみたいだ。

「それで、どうしたんですか?」

「これを届けに来た」

しろはのじーさんは俺にビニール袋を手渡してくれる。

「これ、なんです?」

「うなぎだ」

「え、うなぎ?!」

カモメに続いて、なんてももの捕まえてくるんだろう、この人。

「馬鹿を言うな。海にうなぎがいるものか。うなぎだ」

「あ、うなぎ……」

でもこの島の近海なら、うみうさぎとかいう生物がいそうだ。ポントなくキツネだっているんだし。

「何を考えている?」

「いえ。ところで、うなぎって海で獲れるんですか?」

「当たり前だ。余計な心配かもしれんが、お前たちに夏バテしてもらっては困るからな。かば焼きにでもして、食べるといい」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃあな」

そこまで話すと、しろはのじーさんはきびすを返し、帰っていった。

気が付けば俺は、右手にジャムサンド、左手にうなぎを持っていた。なんとも力オスな組み合わせだ。

いつまでも玄関先にいても仕方ないし、とりあえず家の中に入ろう。

「ただいまー」

そう声をかけながら、玄関をくぐり、居間までやってくる。

家には誰もいないみただった。鏡子さんはもとより、夏海ちゃんの姿もない。午後からは紬と遊ぶって言ってたし、まだ灯台から帰ってきてないみたいだ。

「とりあえず、ジャムサンドとうなぎは冷蔵庫にしまっておこう」

ところで、このうなぎどうしよう。当然、俺は下ごしらえなんてできないし。鏡子さんならできるだろうか。

もし夕食時まで帰って来なかったら、しろは食堂に持って行くことにしよう。

そんなことを考えながら、居間で夏海ちゃんが帰ってくるのを待っていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「遅くなって、ごめんなさい……」

そして、夏海ちゃんが帰ってきたのは、19時を回った頃だった。

「紬さんとその、おっぱい体操をしていたら、こんな時間になってしまいました」

そういえば、紬たちと夕日に向かっておっぱい体操するって言うってたっけ。その夕日が沈んでから灯台を後にしたのなら、このくらいの時間になるよね。

「気にしなくていいよ。俺も昨日は遅くなっちゃったし、おあいこだよ」

「ありがとうございます」

それじゃ、そろそろしろは食堂も開いてるだろうし、ご飯食べに行こうか」

「はい！ 行きましよう！」

その後、しろはのじーさんにもらったうなぎを持って、夏海ちゃんと一緒にしろは食堂へ向かう。

道中、夏海ちゃんから今日の思い出話を聞かせてもらった。

「へえ、秘密基地で卓球やったんだ」

「はい。良一さんや天善さんといっしょに勝負したんですよ！」

夏海ちゃんは運動神経良いし、卓球も楽しめたみたいだ。

「でも、途中で天善さんがヒートアップして『ちよれーい』って叫んだら、水鉄砲を持った蒼さんたちが飛び込んできたんです。驚きました」

「え、なにそれ」

「お二人とも、藍さんに『夏海ちゃん奪還作戦です！』とか言われながら、水鉄砲でめった撃ちにされてましたけど」

その情景がまざまざと浮かぶ。天善の気合の入った叫び声が、何かと勘違いされたんだらうか。哀れだった。

「それで、私はそのまま藍さんたちのお家に連れていかれたんです」

奪還作戦と言えば聞こえはいいけど、半分拉致だった。

「そういうえば、お昼ご飯どうしたの？」

「えっと、そこで藍さんの手料理をぐちそうになりました」

「あ、そうなんだ」

「はい。断ろうとしたんですけど『どうせカップうどんですよ？』って、笑顔で言われちゃいました」

奪還作戦にかこつけて、藍も夏海ちゃんと遊びたかったんだろかなあ。

今思い出したけど、良一は妹好きなのがあるし。

……あれ？

可愛い女の子が好きな藍と、妹好きな良一。よく考えたら、どっちも危険な気がした。

「……夏海ちゃん、よく無事に帰ってきたね」

「はい？」

つい、そんな言葉が出てしまっていた。夏海ちゃんは言葉の意味が飲み込めないようで、目をぱちくりさせていた。

「なんでもないよ。そう言えば、冷蔵庫にお土産のジャムサンドが入ってるんだ」

「え、お土産買ってきてくれたんですか？」

「うん。しろはからだから、食堂に行ったらお礼を言っておいてね」

「はい！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろはー」

「しろはさん、こんばんわですー！」

「あ。二人とも、いらっしやい」

いつもより開店準備の時間がなかったはずなのに、しろはは普段と変わらぬ様子で出迎えてくれた。

「これ、しろはのじーさんが持ってきてくれたんだ」

俺は席に座る前に、ビニール袋に入ったうなぎを渡す。

「わあ、立派なうなぎだね」

しろはは袋の中を覗き込みながら、顔をほころばせる。

「それじゃ、今日の夕飯はこのうなぎを使うね」

「うん、お願いするよ」

「よろしくお願いしますー！」

しろはは専用のうなぎ包丁と、目打ち用の穴がついたまな板を取り出して、うなぎをさばき始めた。あんなものまで揃っているなんて、さすがだった。

「下ごしらえからやるから、ちよつと時間かかるけど待っててね」

「全然構わないよ」

もらったおしぼりで手を拭いて、セルフの水を飲みながら待つ。

「あの、しろはさん、お土産ありがとうございます!」

その時、夏海ちゃんがしろはにお土産のお礼を言っていた。

「気にしないで。美味しいと思うから、羽依里や鏡子さんと一緒に食べてね」

「はい!」

確か、水瀬印のミックスジャムサンドだっけ。ちらつと見ただけだけど、色々な種類のジャムが挟まれていて、とってもカラフルでおいしそうだった。

「ところで、このうなぎだけど、スタミナをつけて頑張ってほしいから、うなぎにするね」

「え、頑張るって、まさか夜!?!」

「ち、ちがうし! 帰ってもらうし!」

今日何度目かの赤面をした後、しろはは先にお新香と野菜サラダを俺たちの前に出してくれた。

「もう、なんでそんな冗談言うの。夏海ちゃんも居るのに」

しろははぶつぶつ言いながら、うなぎの調理に取り掛かる。

「あのー、お二人にちよつと聞きたいことがあるんですけど」

「え、夏海ちゃんどうしたの?」

席に座り直した夏海ちゃんは、紙とペンを持っていた。改めてどうしたんだろう。宿題でわからないところでもあったのかな。

「私たちが良ければ、なんでも答えてあげるよ?」

「あの、お二人は今日、どこまでいったんですか?」

「ぶっ」

俺は飲んでいたお冷を吹き出してしまったところだった。

「な、夏海ちゃん、唐突に変なこと言わないで」

カウンターの向こうでは、何か食器が割れる音がしたし。しろはも明らかに動揺しているみたいだ。

「すみません。藍さんから、今日のお二人について、詳細なレポートを作成するように言われました」

……藍、気持ちはわかるけど、それ夏海ちゃんに実行させないで。

それにしても港での尋問、うまくかわし切ったと思っていたのに……。

「それで、本土のどこに行つたんですか？」

夏海ちゃんは笑顔でそう聞いてきた、

「あ、どこまで……って、そういうこと？」

「そうですけど……？」

たぶん、藍は俺たちの関係がどこまで進んだかをチェックしたかつたんだろうけど。夏海ちゃんが純粹で助かった。

「そうだね。最初は矢印良品に行つただけど……」

しろはが調理してくれている間、俺は今日の出来事を夏海ちゃんに話して聞かせた。

ちなみに、しろはが気にしそうなペアアクセサリーの部分は、なんだかんだではぐらかした。

「それで帰ろうとしたら、全国チャーハン博覧会ってイベントをやつていてね。少し遅くなっちゃつたんだ」

「羽依里さん、その『全国チャーハン博覧会』の部分、もつと詳しくお願いします！」

夏海ちゃんのテンションが急に上がった。しまった。ここにもチャーハンの申し子がいた。

「えつとね、全自動チャーハンマシンとかあつて……」

「全自動!？」

ものすごく食いついてきた。興味津々みたいだった。

でも全自動チャーハンマシンとか、俺にはうまく説明できない。あのインパクトは実物を見ないと分からないと思う。

「後は、飲食ブースには日本全国のチャーハンが集まつてたの」

「日本全国!？」

あーあ。目が輝いちゃつてるよ。

残念だけど藍、夏海ちゃんのレポートは多分、チャーハンレポートになると思うよ。

「はい。うな井、おまちどうさま」

その時、出来たてのうな井が俺たちの前に並べられた。

「おお、おいしそう」

「山椒もあるから、必要だったら言ってね」

最後にしろはが吸い物を渡してくれる。今日は朝から晩まで豪華な食事だった。

「羽依里さん、ごはんを食べ終わったら、もっと詳しい話を聞かせてもらってもいいですか？」

「うんうん。いくらでも話してあげるよ」

全国チャーハン博覧会のイベントをやってるって最初から知ってたら、夏海ちゃんもつれて行ってあげれば良かったな。

そうなると、もはやデートじゃないと思うけど。

「みかんチャーハンがあっただんですね。ううう、レシピが気になります。作ってみたいです！」

ホクホクのうな井を堪能した後も、しろはと二人で大興奮の夏海ちゃんを眺めながら、この日の夜は更けていった。

どんなチャーハンレポートができるのか、少しだけ楽しみだった。

第二十七話・完

第二十八話 8月18日

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

今日も今日とて、夏海ちゃんに起こされる。

「夏海ちゃん、おはよう」

「おはようございます」

いつものようにあいさつを交わして、背伸びをしてから起き上がる。

「あれ？ 夏海ちゃん、スカートとか珍しいね」

「えへへ、鞆の奥に入れっぱなしにしていたので、久しぶりにはいてみました！」

スカートの端をつまみながら、笑顔だった。

夏海ちゃん、普段は半ズボンみたいな動きやすい服装が多いんだけど。たまにはお洒落したくなっただらうか。

「それじゃ、ラジオ体操に遅れないように、準備してきてくださいね！ 表で待ってますから！」

夏海ちゃんはそこまで言うのと、廊下をパタパタと走っていった。相変わらず、朝から元気だなあ。

「さて、俺も準備しないと」

俺もそう言っただけで布団をたたみ、出かける準備を始めた。

「夏海ちゃん、おまたせ」

準備を終えて表に出る。目を細めながら空を見上げると、遠くに大きな入道雲が見えた。

「今日もラジオ体操日和だね」

「はい、今日も頑張りましょう！」

意気揚々と先頭を切って出発する夏海ちゃんの背中を見ると、何故かリュックを背負っていた。

ラジオ体操に行くだけなのに、どうしてリュックなんて背負ってるんだろう。

「夏海ちゃん、そのリュック何？」

「えーっと、秘密です！」

聞いてみたけど、そのリュック越しに笑顔を返されただけだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神社に到着すると、いつものメンバーが揃っていた。

「皆さん、昨日はありがとうございました！」

開口一番、夏海ちゃんが皆にお礼を言っていた。昨日一緒に遊んでもらっていたし、俺も一緒にお礼を言っておいた。

「お礼なんていいわよ。夏海ちゃん、すごく日焼けしてるしねー」

「夏休みを楽しんでる証拠じゃないですか？」

空門姉妹が笑顔でそう言う。言われてみれば、俺も夏海ちゃんもいい感じに日焼けをしていた。これは夏休みを楽しんでいる証みたいなものかもしれない。

「……ところで夏海ちゃん、例のものは？」

「はいー…これです！」

そして藍に促されるまま、夏海ちゃんはリュックから数枚のレポート用紙を取り出して、手渡していた。

「夏海ちゃん、お手柄ですよ」

藍はそれを嬉々として受け取っていた。もしかしなくても、あれって昨日書いてたチャーハンレポートかな。

「藍、それはなんだ？」

「卓球の奥義でも載っているのか？」

「内緒です」

のみきや天善がその紙を覗き込もうとするけど、藍はそれを素早く折りたたんで隠してしまった。

「お前らー！ 準備はいいかー？ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

「ほら、ラジオ体操大好きさんが来ましたよ。皆さん、今日もラジオ体操が始まりますよ」

藍は天の助けと言わんばかりに、皆に整列を促す。今日もラジオ体操が始まる。

「さあ、今日のスタンプはこつちだぞー」

ラジオ体操が終わった後、いつものようにスタンプを押ししてもらい、ログボを受け取る。

今日のログボは、氷水の中に入っていた。

「これって、スイカバー？」

氷水の中には、大量のスイカバーが入っていた。

スイカバーは駄菓子屋でも、日に数本しか入荷しないレアアイテムのはずだ。それがこんなにくさんあるなんて。どうしたんだろう。

「おばーちゃん、また誤発注しちゃったみたいなのよねー」

「ほう。あのおばーちゃんが珍しいな」

スイカバーを受けとりながら、天善がそう言っていた。

「朝一番の船で大量に届いちやっただけでね。ログボに使ってもらおうと思って、急いで氷水につけて、ここまで持ってきたのよねー」

「そ、そうなんですわ……」

なんだろう。夏海ちゃんがスイカバーを見つめて、何やら悲しそうな顔をしている。

「本当なら、今日のログボはトウモロコシだったんだけどねー。それは日持ちするからって、明日にしてもらったのよ」

「……トウモロコシが良かったです」

あれ。珍しく夏海ちゃんがログボに不満そうだ。

「そっか。もしかして、スイカバーだとチャーハンにできないから？」
「そうです」

毎朝ログボでチャーハン、最近は実行できてないもんね。

「羽依里さん、今日のチャーハンはどうしましょう?」

夏海ちゃん、そんな涙目で見ないで。

「そうだ、昨日のうなぎでチャーハンを作ったらいんじゃないかな」
確か、冷蔵庫に真空パックに入ってたうなぎのかば焼きが入っていたはずだ。あれなら特別な処理をしなくても、料理に使えそうだし。

「あ、うなぎの存在を忘れていました!」

良いレシピが思いついたのか、夏海ちゃんの表情が明るくなった。
一安心だね。

「……ところで羽依里さん、聞きたいことがあるんですけど」

「え、何?」

後ろから藍に声をかけられて、思わず振り返る。

「この、チャーハンマンってなんですか?」

「え?」

「昨日の夏海ちゃんからのレポートに書いてあるんですが」

「えーっと、それはその」

「……全自動チャーハンマシンってなんですか?」

「えーと、えーっと」

「みかんチャーハンが気になります。って、なんですかー!」

藍はレポート用紙を持ったまま、わなわなと震えていた。

「はあ、しろはちゃんの甘々デートレポートの予定だったのに……」

そして、がっくりと肩を落とす。藍の落胆っぷりからして、やっぱりチャーハンレポートになっていたみたいだ。

「羽依里さん、たばかりでしたね……!」

やばい。藍の目つきがいつも以上に鋭い。これは怒っている。

「な、夏海ちゃん! スイカバーが溶けちゃまずいし、帰ろうか!」

「は、はい! 帰りましょう!」

そのあまりの迫力に気圧されて、俺たち二人は逃げるように神社を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

走って帰ったのもあって、スイカバーは何とか原形を保っていた。帰宅してすぐに冷凍庫に入れて、事なきを得る。

「さっそく、うなチャーハンに取り掛かりますね！」

そう言うのと、夏海ちゃんはエプロンをつけて、調理の準備を始めた。邪魔しても悪いので、俺は居間でテレビを見ていることにした。

『プラネタリウムはいかがでしょう』

『どんな時も決して消えることのない、美しい無窮のきらめき』

テレビをつけると、どこかのデパートに夏休み限定でオープンしたプラネタリウムの特集がされていた。

レポーターの問いかけに、夏休み真っ最中の子供たちが笑顔で答えている。

その奥にはプラネタリウムの案内人っぽい女の人がいて、ニコニコと笑みを絶やさないうまま、子供たちを見ていた。

「お待ちせしました！ うなチャーハンです！」

しばらくして、夏海ちゃんがおぼんに乗せたチャーハンを持って居間にやってきた。

入ってきた瞬間にそれとわかる、とてもいい匂いがした。

「良い香りだね。かば焼きのタレを使ってるの？」

「えへへー。それもありませんけど、隠し味に柚子胡椒を入れてるんですよー！」

言われてみれば、柚子の香りも混ざっている。うなぎと言えば山椒のイメージがあるけど、これはこれで美味しそうだ。

「それじゃあ、食べましょうー！」

エプロンを外して食卓に着いた夏海ちゃんと一緒に手を合わせた後、うなチャーハンを食べ始める。

「うん。美味しい」

かば焼きのタレがごはん一粒一粒にしつかりと絡んでいるし、うな

ぎも細かく刻んであつて食べやすい。

夏海ちゃん一押し of 柚子胡椒も良いアクセントになっていて、昨日のうな井とはまた違った美味しさだった。

そして朝食を食べ終わると、途端にやる事がなくなった。

「夏海ちゃん、一緒に筋トレする？」

「はい!？」

洗い物を終えて居間に戻ってきた夏海ちゃんがハニワ顔になっていた。俺も何を言ってるんだらう。

「そ、それは冗談として、また港に行ってみない？」

「港ですか？」

「そう。また出店が出るかもしれないし」

「確かに最近行ってませんね。久しぶりに行ってみましょう!」

「うん。それじゃ、行こうか」

ズボンのポケットに適当に財布をねじ込んで、俺たちは港へ向けて出発した。

それにしても、今日は鏡子さんの姿を見ていない気がする。朝から忙しいんだらうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺たちが港に到着すると、ちょうど船が着いたばかりのようで、大勢の観光客が荷物やスーツケースを持って、港に降り立っているところだった。

「到着したよー」

「きれいな港なのですー」

なんだろう。その観光客の中に、やけに賑やかな一団が居た。

「よし、さつそく泳ぎに行こうぜ！」

「こらこら、その前に荷物を預けないと駄目よ！」

「おねーちゃん、そんな固いことは言いつこなしですよ」

「とういうわけで理樹、荷物任せたぜ」

「いやいやいや、自分の荷物はちゃんと管理してよね!？」

「なんだよ。固いこと言うなって。今度筋肉で返してやるから」

「意味が解らないから！」

「……すぐく賑やかな人たちですね」

確かに騒がしい。夏海ちゃんも唾然としていた。

鳥白島は観光に力を入れてることもあって、この時期は観光客がたくさんやってくる。

あの集団は仲良しグループの旅行と言った感じだった。

「なんだあいつら、部活か何かの合宿か？」

「違うんじゃないか？ 引率の先生もいないみたいだし」

「とりあえず、卓球部ではないな」

「いや、それは見ればわかる」

「こんな何もない島に来るなんて、物好きな連中だよなー」

気がつくのと、俺たちの隣に良一と天善が立っていて、自由奔放な集団を眺めていた。

「二人とも、いつからそこにいたんだ？」

「気にするな。それより羽依里たちも、天使の麻婆豆腐の噂を聞きつけてきたのか？」

「え、何だって？」

「とぼけやがって。あれだよ」

良一が指差す先には、小さな店が出ていた。香辛料の香りが凄し、看板を見た限り、どうも麻婆豆腐の店らしい。

それにしても天使の麻婆豆腐って。なかなかのネーミングだ。

「……美味しいんでしょうか」

その独特の名前に引かれたのか、夏海ちゃんも気になっているみたいだ。

「俺たちも気になってはいるんだが、値段がな」

「え、値段？」

「見てみたらわかるぜ」

「どれどれ……？」

せつかくだし、ちよつと見てみることにした。四人で出店の方に近寄ってみる。

そこには『麻婆豆腐 800円』と値札が出ていた。確かに、出店の値段としては高い。

でも、これだけ高いとすごく美味しいんじゃないかと思つてしまう。まして『天使の麻婆豆腐』だし。

「豆腐が変わっていて、フワツ、フワツしてるのかもしれないな」

「ふ、ふわつ、ふわつですか？」

手作りの豆腐は高いつて言うし、それならこの値段も納得かもしれない。天善の表現は妙な感じだけだ。

「……いらつしやい」

俺たちが出店の前で相談事をしていたせいか、店員さんが声をかけてきた。金色の瞳に銀髪の女の子で、なんというか、不思議な雰囲気纏っていた。

「……試食あるけど、食べてみる？」

そう言うのと、紙の器に一口分の麻婆豆腐をよそつて、俺に渡してくれた。

「そうだ。気にしてたし、夏海ちゃんが食べてみる？」

「え、いいんですか？」

「うん」

「……あ、かなり辛いから、気をつけて」

その時、店員さんがそう忠告してくれる。

「あ、私辛いのが苦手なので、羽依里さんが味見してください！」

「……そう？ それじゃ、いただくね」

本当に一口分しかない麻婆豆腐を、一緒についてきた紙のれんげですくつて、口に運んでみる。

「……羽依里、どうだ？」

「どうですか?」

「フワツ、フワツしているか?」

三人が俺の顔を覗き込むようにして感想を待っている。夏海ちゃんはいいけど、野郎二人に覗き込まれるのはちよつと。

「うん、美味しい。見た目の割にそこまで辛くないぞ。深みの……のおおおお!」

感想を言おうとしたその時、喉の奥から強烈な辛みが炎のように上がってきた。

「のおおおおおおお!」

そのあまりの辛さに、俺はコンクリートの地面に両膝をついて、大量の汗をかきながら悶え苦しむ。

「あわわわわ」

その余りの状況を見て、夏海ちゃんをはじめ、三人が固まっている。「……なあ、店員さん。この麻婆豆腐でもしかして、ヤバネロ使ってる……?」

「名前はわからないけど、この島特産の唐辛子を使ってるわ」

「だから、それがヤバネのおおおおおおお!」

辛さが引いたと安心させといて、第二波が来た。

「なあ、ヤバネロは本気でヤバいから、使ってるなら使ってるって明記した方が良いと思うぜ」

「わかった。次からそうする」

良一と店員さんが話をしているみたいだけど、俺の耳には何も入ってこない。

「それより、羽依里さんが! 羽依里さんが!」

「さつきからのおお、しか言っでないしな」

「滝のように汗をかいているぞ。どうする?」

「だ、誰か水を」

俺は声を振り絞って水を求める。しかし、ここは港。水はあるにはあるが、海水しかない。

このままだと喉を焼き切られそうだった。

「そうだ羽依里、パージだ! Tシャツを脱げ!」

その時、良一の声が聞こえた。俺は必死に意識を保ちながら、Tシャツを脱ぐ。

「ぶわっ!？」

直後、どこからか水弾が飛んできた。

『その露出狂。速やかに服を着ろ』

そして、鉄塔から聞き慣れたのみきの声。

そうか。この手があったか。

俺はもちろん服を着ることはせず、もつと撃てとばかりにのみきにアピールをする。

『ほう。あくまで着るつもりはないんだな。思い知れ』

次の瞬間、矢継ぎ早に水弾が飛んできた。俺はその全てを全身で受け止める。結構な威力だけど、今の俺にとっては最高の回復魔法だった。

その後も何発の水弾を浴びて、ようやく辛さが多少落ち着いた。

俺はTシャツを着こみ、鉄塔にいるであろうのみきに向け、最高の笑顔でサムズアップをしておいた。

ちなみに、そんな騒動をしているうちに、先の集団はどこかへ行ってしまったみたいだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里さん、大丈夫ですか？」

帰宅した後も、規模は小さいながらも辛さの波が幾度となく襲ってきた。

「……うん。夏海ちゃんが食べなくて本当に良かったと思うよ」

「唇真っ赤ですよ？ 牛乳持ってきてまししょうか？」

「そうだね。トウガラシの辛み成分は牛乳で消せるはずだし、お願い

していいかな」

その後、夏海ちゃんから牛乳を貰って飲んでみたけど、牛乳成分に抵抗するかのようになり、逆に辛さが強くなった気がする。ヤバネ口恐るべし。

「の、おおお……」

「ほ、本当に大丈夫ですか？」

「う、うん。ちよつと横になってれば良くなると思う」

俺はそう言い、少し居間で横になって休むことにした。

「うう、やっぱりヤバネ口はヤバヤバなんですね」

夏海ちゃんの憐れむような声を最後に、俺は半ば気絶するように眠りに落ちていった。

「おかーさーん、みてー！」

「ちやんと見てるわよ」

「すべるよー！」

……誰だろう。小さな女の子がウォータースライダーを滑ってる。

「わー！……」

……元気よくプールに着水した後、満面の笑みを浮かべながら水の中から出てきた。

……それにしてもこのウォータースライダー、手作り感満載だな。

……でも、楽しそうだった。

さすが、皆で作っただけある……。

「……はっ」

なんだろう。何か夢を見ていた気がするんだけど。

「あ、羽依里さん、起きましたか？」

体を起こすと、ちょうど夏海ちゃんがお湯の入ったカップうどんを持って居間にやってきているところだった。

「あまりに起きないので、先にお昼ごはん食べようかと思ってたん

です」

「え、お昼？」

身体を起こして壁の時計を見ると、ちょうど12時半だった。どうやら、結構な時間寝てしまったらしい。

「体調が戻っていたら、羽依里さんもカップうどん食べますか？ 鏡子さんが新しい味をいろいろ買ってきてくれたみたいですよ」

「それじゃあ、一つ食べておこうかな」

正直辛さが完全に抜けたわけじゃないし、そこまで食欲はないけど。無理してでも食べておかないとお昼から大変そうだし。

起き上がって台所に行く。真新しい袋が置いてあったので、その中からごぼ天うどんをチョイスして、お湯を入れてから居間に戻る。

「あ、やっぱり後乗せサクサク派なんですね」

ふたの上にごぼ天を乗せてやってきた俺を見て、夏海ちゃんが言う。

「そう言う夏海ちゃんも、相変わらずのびたびた派なんだね」

俺と同じごぼ天うどんが食卓の上に置いてあったけど、そのふたの上にごぼ天の姿はない。つまりはそういうことだろう。

「何度も言いますが、このおつゆを限界まで吸った感じが良いですよ。では、いただきますーす」

もう三分経つたみたいだ。夏海ちゃんは手を合わせた後、一足先に食べ始める。

「そうです。びたびたのごぼ天、一口食べてみませんか？ ハマリますよっ。」

「えーつと……」

一瞬考えたけど、せっかく夏海ちゃんがそう言ってくれてるんだし。

「それじゃ、一口だけもらおうかな」

「はい！ あーんしてくださいー！」

夏海ちゃんは自分の器からごぼ天をつまみ上げると、片手を添えながら俺の方に差し出してくる。

「えっ？」

なんか唐突に来たんだけど。

「早くしてください！ 崩れちゃいますよ！」

「あ、うん、じゃあ。あーん……」

躊躇する暇もなく、夏海ちゃんからびたびた仕様のごぼ天を食べさせてもらおう。

「あ、美味しいかも」

「ですよ。ですよ」

本当にしつかりとおつゆを吸っていたごぼ天は、サクサクの時とはまた違った食感で美味しかった。

でも、今のつて……。

「これを期に羽依里さんも是非、びたびた派になってくださいね！」

夏海ちゃんはご機嫌な表情で、ずずーつとうどんをすすっていた。特に気にしていないみたいだし、いつか。

その後、俺もきつちり三分待つてから、ごぼ天を浸しながら食べた。うーん、やっぱりサクサクも捨てがたい。

お昼ご飯を済ませた後も、なんとなく口の中がひりひりしていた。おのれヤバネロ。まだ抗うか。

「ねえ夏海ちゃん、駄菓子屋に行かない？」

なんとなく口の中を冷やしたくて、夏海ちゃんにそう提案する。「いいですよ。かき氷でも食べに行きます？」

夏海ちゃんも俺の様子を察したのか、そう返事を返してくれた。「そうだね。今日は練乳かけてもらいたいかな」

そんな話をしながら準備をして、俺たちは駄菓子屋に向けて出発した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

駄菓子屋に到着してみると、ものすごく賑やかだった。

「あれ？」

見ると、店の前に凄い人だかりができています。

「どうやら、午前中に港で見かけた集団が駄菓子屋を訪れているみたいだ。」

「蒼ちゃん、かき氷11個。イチゴが4つ、そのうち2つに練乳多め、メロンが3つ、うち1つに練乳、ブルーハワイが3つ、レモンが1つです」

「ごめん、ちよつと紙に書いてもらって。覚えられない……」

「どうやらかき氷の大量注文を受けているらしい。店の中では、空門姉妹がてんやわんやしていた。」

「それにしても、どれも同じ味なんだから、シロップいちいち分けなくても良くない？」

身もふたもない会話も聞こえてくる。大丈夫なんだろうか。

「おつ、スーパーボールがあるじゃないか。これは懐かしいな」

「すこんぶください、なのですー！」

「やはは。来るべき戦いに備えて、ビー玉補充しておくのもいいかも」
「おお、ニツキ水にかばやき太郎、ベイビースター。子供の頃、よく食べていたな」

「ビッグカツがあるぜ。箱買いして、皆で食おうぜ！」

ざっと見、10人以上いるだろうか。年の感じは俺たちと同じくらいだけど、何というか、ひたすらに騒がしかった。

「皆、きちんと並ばなきゃ！ 店員さんも困ってるよ！」

ひ弱そうな少年が必死に場を取りまとめようとしているけど、どうもうまくいっていないみたいだ。ほとんど無法地帯だった。

「駄菓子の金額はそれぞれ箱の所に書いてあるので、この籠に代金を入れてください！」

藍がカウンターの前に籠を出していた。そして、反対の手にはイチゴとブルーハワイのシロップを持っていた。

「藍ー！ー！ 予備の氷、冷凍庫から出してー！ー！」

蒼も必死にかき氷器を回しながら、叫んでいた。ものすごくきつそ

うだ。

「……羽依里さん、お二人とも、なんだかすごく大変そうなんですけど」

「うん。これはしばらく近寄れそうにないね。ちよつと向こうで待つていよう」

「え、手伝わなくていいんですか？」

「……ここは素人が手を出していい状況じゃないと思うんだ」

「そ、それはそうですけど……」

夏海ちゃんは何とも言えない表情で駄菓子屋の方を見ていた。

「いいから、こつちに隠れていよう。危なそうだし」

その後、俺たちは謎の集団がいなくなるまで、電柱の陰に隠れていたのだった。

「くーださーいな」

謎の集団が立ち去ったのを見計らって、何食わぬ顔で駄菓子屋に入る。

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ……」

見ると、奥のふすまが開け放つてあり、蒼が座敷で仰向けに倒れていた。藍は疲れた顔でカウンターに腰を下ろして、先程の売り上げを確認をしている。

「二人とも、大変だったみたいだな……」

「み、見てたんなら手伝いなさいよ……」

「いや、下手に近づかないほうが身のためだと思って」

「どういう意味よ！」

蒼ががばつと起き上がる。というか蒼、スカート履いてるんだからそんな勢いよく起き上がらないで。危ないから。

「でも、今日はかなりの売り上げがあったんじゃないか？」

「そりゃあ、正直数日分の売り上げだけど。なんだったのかしら、あの人達」

「ある意味営業妨害じゃないですか？ 嵐のように去っていききましたけど」

その時、売り上げ計算を終えたらしい藍が、二本のラムネを持ってこっちにやってきた。

「蒼ちゃん、お疲れ様です」

「ありがとう、藍」

蒼は藍からラムネを受け取り、その栓を抜こうとするけど……。

「あいたたた……」

蒼は右手を押さえながら、苦悶の表情を浮かべる。どうやら、かき氷器を回しすぎたらしい。

「どれ、貸してみろ」

俺は蒼からラムネを受け取り、代わりに栓を抜いてやる。

「ありがとうねー」

蒼は笑顔でラムネを受け取り、ごくごく美味しく飲んでいった。

「すごい汗かいてるけど、大丈夫か？」

「そりゃあ、あれだけかき氷作ったらねー。手動が一番おいしくできるとっていうけど、さすがに疲れたわよー」

蒼は自分の腕を揉みながら、心底疲れた顔をしている。

「あー、それにしてもこれ、明日絶対筋肉痛になりそう」

「ものすごいトレーニングになったろ？」

「天善みたいなこと言わないでくれる？」

「それでさ、蒼に一つお願いがあるんだけど」

「え、何？」

「ラムネ飲んだ後で良いからさ、俺と夏海ちゃんにもかき氷作ってもらえないか？」

「……あんた達、まだあたしをこき使う気？」

さっきの話聞いてなかったの？ みたいにジト目で睨まれてしまった。だけど、俺も今日は譲れない。未だ喉の奥でくすぶっているこのヤバネ口を、早くなんとかしたい。

「頼むよ」

「はあ……しよーがないわね。ふたつで200円よ」

もはやお約束を言う気力も残ってないみたいだ。

「だけど、本当にもうちよつとだけ休ませて」

「わかった。夏海ちゃんとベンチに座って待ってるから、復活したら声をかけてくれ」

「りよーかい」

その後、十五分ほどで蒼が復活したので、改めて練乳多めの氷イチゴを注文した。

しゃこしゃこ氷を削る音が響く中、周りを見してみる。

さつきの集団、駄菓子屋の前でも結構騒いでいたみたいだけど、ゴミはきちんと持って帰ったみたいだし、良識はあるみたいだ。

「はい、氷イチゴの練乳多め、お待たせー」

その時、ふたつのかき氷をおぼんに乗せて、蒼がやってきた。普段はおぼんなんて使わないのに、本当に右手に力が入らないらしい。

「蒼さん、ありがとうございます」

二人で氷イチゴを受け取って、口に運ぶ。うん。この甘さがヤバネ口の辛さを浄化してくれてる気がする。

「くーださーいなー」

その時、鴉がやってきた。

「あ、いらつしやーい」

「例のアレ、入荷してますか?」

「ちゃんと届いてるわよー。2つで良かったのよね?」

「うん!」

視界の隅で、鴉が蒼から赤黒いパッケージのお菓子を受け取っているのが見えた。

「鴉、それなに?」

「三角形の秘密、ヤバネ口風味」

「ヤバ……」

「期間限定販売なんだって。気になっちゃって」

「もしかして、それをわざわざ通販代行で買ったのか？」

「そうだよー」

よりによって、ヤバネロ風味を……。

「鷗、頑張れよ」

ヤバネロの恐ろしさを知っている身として、そう声をかけてやることしかできなかった。

「え、何が？」

「いや、なんでもない」

鷗が首をかしげながら、ヤバネロ味の三角形の秘密をスーツケースへしまっていた。

「そうだ。せっかくだし、私もかき氷食べて行こうかな」

鷗は俺と夏海ちゃんが食べているかき氷を見ながら、そう呟いた。

「あおちゃん、氷メロン一つ！ 練乳多めで！」

「は？」

蒼はまるで藍みたいな声を出していた。顔もひきつってるし。

「ちよ、ちよつと待っててねー」

慌てて取り繕って、代金を受け取ってかき氷器へと向かう。頑張れ、蒼。

「くーださーいな」

直後に、良一と天善もやってきた。

「蒼ー、かき氷食べさせてくれー。氷レモンで」

「俺にも氷イチゴを貰えないか？」

「ほいほーい」

今度は蒼はこっちに振り向くこともなく、注文を受けていた。諦めの境地というか、投げやりになったというか。

それにしても今日に限って、やけにかき氷の注文が多い気がする。

「くーださーいなー」

それからほとんど時間を開けずに、紬と静久もやってきた。

「アオさん、みぞれをお願いします！」

「こっちは氷すいをもらえるかしら」

「うあああぁー……」

二人も当然のようにかき氷を注文した所で、蒼が声にならない叫び声をあげていた。さすがに可哀想になってきた。

「くーださーいな」

紬たちにかき氷を提供した直後、しろはまでやってきた。

「え、なんでこんなに人が多いの」

しろはが驚くのも無理はない。店の前のベンチには紬と夏海ちゃんと静久が座り、その隣に置かれたスーツケースの上に鷗、少し離れた路上に良一と天善と俺がいる。まさに大集合だった。

「あ、もしかしてしろはもかき氷ー？」

蒼つてば、笑ってるんだけど笑ってない気がした。たぶん、心の中で泣いてる。

「ううん。スイカバーを買いに来たの」

「ああ、スイカバーね。アイスケースから取っていいわよ」

蒼が安堵の表情をして、カウンターに座り込む。

「そういえばしろはちゃん、いつもこの時間にスイカバー買いに来ますね」

アイスケースを覗き込むしろはの元へ藍が寄って行って、そんな話をしていた。

「うん。食堂の開店準備をする前に、スイカバーを一本食べてから食堂に行くのが日課なの」

まるで栄養ドリンクだった。

まあ、しろはにとっては、スイカバーは栄養ドリンクみたいなものなんだろうけど。

「そういえばしろは、今日のログインボーナス、スイカバーだったぞ」
がさごそとアイスケースを漁るしろはに、そう教えてあげる。

「え、そうだったの?」

「ああ、家の冷蔵庫に入れてるから、今度食べに来ないか?」

「うん。そうする」

しろははそう言うと、アイスクースを閉じる。

「じゃあ、今日は久しぶりにかき氷にしておこうかな。蒼、ブルーハワイお願い」

「うそ……あのしろはまで、かき氷だなんて……」

安心しきっていたところに不意打ちを食らった蒼は、ショックのあまり天を仰いでいた。

「え。私、何か悪いことした?」

「ううん。なんでもないのよー」

蒼はしろはから100円を受け取った後、がつくりとうなだれながら、かき氷器の方へと向かっていった。

「蒼ちゃん」

その時、そんな蒼に藍が近づいて行って、優しく声をかける。

「……もしかして藍、氷削る役を代わってくれるの?」

「いえ、私も宇治金時をもらえますか?」

「さっきラムネ飲んでたでしょー!ー!。なんでわざわざかき氷注文するのよー!ー!」

本日何度目かわからない、蒼の絶叫が響き渡った。

ちなみに本日出たかき氷は、なんと20杯。予備の氷まで使い果たしてしまったらしい。

その後、食堂の準備があると言ってしろはが去っていき、残った俺たちは、結局夕方近くまで駄菓子屋で過ごしていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただ今戻りましたー」

皆と別れて、加藤家に帰宅する。一応声をかけてみるけど、鏡子さんの姿は無かった。

のみきも駄菓子屋に顔を見せなかったことから察するに、何か重要な寄合でも開かれているのだろうか。

「夏海ちゃん、少し時間もあることだし、家事を済ませてしまわない？」

そして時間があつたので、夏海ちゃんと二人で家事をこなすことにした。

「そうですね！　せっかくですし、ちやちやつと終わらせてしまいましょう！」

夏海ちゃんは言うが早いか、サンダルを履いて庭に出て、洗濯物を取り込み始めた。

俺はその間に、風呂や洗面台をはじめとした、水回りの掃除をする。ついでに廊下もお米のとき汁で磨いて、ピカピカにしておいた。確か、紬に教えてもらった知恵だった。

「……よし、こんなもんかな」

台所のシンクをきれいに掃除したところで、時計を見ると18時を回っていた。

夏海ちゃんの方はというと、ちようど冷蔵庫の整理が終わったようだった。

「夏海ちゃん、今日はこのくらいにして、そろそろ晩ごはん食べに行こうか」

「はい！　ちようどお腹が空いてきたところだったんです！　行きましょう！」

頷ぐが早いか、夏海ちゃんはすぐに表へ出ていく。俺もその後を追って、玄関へと向かう。

……その時、電話が鳴った。

「あれ？　誰だろう」

俺はきびすを返し、受話器を取る。

「もしもし、加藤ですが」

「……あ、羽依里？」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、しろはの声だった。

「そこに夏海ちゃんいる？」

「うん、いるけど」

「お願い、今すぐ夏海ちゃんと一緒に食堂に来て」

「ちょうど今から行こうと思っていたところなんだけど……なんかあったのか？」

「大変なの！」

「わ、わかった。すぐに行くよ」

俺は受話器を置くと、急いで外に出る。

「羽依里さん、どうしたんですか？」

いつもと違う様子を感じ取ったのか、夏海ちゃんが心配そうに声をかけてきた。

「よくわからないけど、しろはの食堂が大変らしい」
「え」

「それで、夏海ちゃんにも一緒に来てほしいんだって」

「わ、わかりました！ 急ぎましょう！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夏海ちゃんの走るスピードに合わせながらも、できるだけ急いでしろは食堂に到着した。

「しろはー」

「しろはさーん！」

名前を呼びながら扉を開けて、俺たちは驚愕する。

店内は、これまで見たことないくらいの大勢のお客さんで埋め尽くされていた。

カウンター席は元より、普段は使うことのない座敷まで解放していたけど、そこもいっぱいだった。

お客さんの顔を見た感じ、昼間駄菓子屋にいた集団らしかった。

「は、はい、かつ丼ふたつ、おまちどうさま。他はその、もうちよつと待つて」

そんな中、座敷の一番近くに座る青年二人へ、しろはが料理を提供していた。

もしかしくなくても、この大人数からの注文をしろは一人で受けているのだろうか。いくらなんでも無理がある。

「あ、羽依里、夏海ちゃん！」

その時、俺たちの存在に気が付いたのか、しろはが表情が明るくなる。

「しろは、これは一体どうしたんだ？ 大変な騒ぎじゃないか」

ぎゅうぎゅう詰めのカウンターの僅かな隙間を見つけ出し、その中のしろはと会話する。

「うん。急にたくさんのお客さんが入ってきたの。とりあえず、注文は取ったんだけど」

しろはのメモを見せてもらう。さっき提供したかつ丼には横線が引いてあったけど、その他にもすごい数の注文が入っていた。

「冷やし中華³つ、牛丼、親子丼A、親子丼B、エビフライ定食にコロツケ定食、活け造り定食……」

これだけの料理を一度に提供するには、色々なものが足りなさそうだった。明らかに、この食堂のキャパシティを超えてる。

「しろはさん！ 手伝います！」

その時、状況を察した夏海ちゃんが予備のエプロンをつけて、厨房の中に飛び込んでいった。頼もしい限りだった。

「ありがとう。揚げ物をしてるんだけど、活け造り定食も作らなくちゃいけないくて。夏海ちゃんは油の様子を見てもらえるかな」

「わかりました！」

「後、冷やし中華の麺も茹でないといけないの。隣のコンロで良いから、お湯を沸かしてほしいんだけど」

「はい！ この鍋ですか？」

「うん。お願い！」

「この厨房で何度かしろはにチャーハンを習ったというだけあつ

て、夏海ちゃんも勝手知ったるといった感じだった。

料理のできない俺が厨房に入るわけにもいかないし、他の誰かに応援の電話を……とも考えたけど、思えば今は夕食時だ。さすがに電話して回るわけにもいかない。

「見ろよこのカツ。すげえうまそうだ」

「本当ですネ。私も親子丼じゃなくてかつ丼にすれば良かったかなー」

「こら葉留佳。店員さんに迷惑がかかるから、冗談でもそんなこと言わないの」

「わ、わかってますヨ。もう、おねーちゃんは厳しいなあ……」

例の集団は雑談に花を咲かせてはいるものの、料理が遅いからと怒っている様子はなかった。

でも料理が遅くなってるのは事実だし、店主の彼氏として、せめて謝っておかないと。

「すみません。食事の提供が遅くなってしまつて」

「ほら、葉留佳が変なこと言うから、店員さんに気を使わせちゃつてるじゃない」

「えええ、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったけど」

なんかそっくりな髪飾りをした女の子二人が逆に謝ってきた。顔もそっくりだし、双子なんだろうか。

「俺たちこそ、大勢で押しかけて悪かった。まさか、女性一人で切り盛りしている食堂だとは知らなくてな」

そう言つて謝ってきたのは、茶色い髪的青年だった。どうも彼がこの集団のリーダーらしい。

「……つて、羽依里じゃないか」

「え？」

その青年に急に名前を呼ばれた。反射的に顔をよく見てみると、格好こそ違うけど、見覚えがあった。

「……もしかして、以前港にいた飴細工屋!？」

「ああ、あの時は世話になつたな」

……俺何かしたっけ。確かに飴細工を買った記憶はあるんだけど、あの時話した内容とか、ほとんど覚えてない。

「約束通り、野球の試合をしに来たぜ」

……え、なんの試合だった？

周りが騒がしくて、良く聞き取れなかった。

「こ、これは一体どうした？」

その時、入口の方からのみきの声が出た。ごった返している食堂を見て、驚いている。

この状況だし、悪いけどのみきの相手をしている余裕はなかった。のみき、どこか空いてる席に座って待っていてくれ！」

「あ、空いてる席と言われても……」

そう言いながら、のみきは目を泳がせていた。

「お嬢ちゃん、ここ空いてるぜ」

「お、おじよ……」

「能美に来ケ谷、悪いがもうちょっと詰めてくれないか？」

「うむ。歓迎しよう」

「こちらにどうぞなのですー」

座敷に座っていた背の高い黒髪の女性と、亜麻色の髪の女の子が少しずつ横に詰めて、のみきの座るスペースを確保してくれた。

「あ、ああ。すまないな」

亜麻色の髪の子と茶髪の青年の間に座ったのみきは、そのまま質問攻めにされているようだった。

「羽依里！ 配膳手伝って！」

「お願いします！」

その時、カウンターの向こうからしろはと夏海ちゃんに呼ばれた。とりあえず、今は食事を提供することに注力することにしよう。

俺は料理はできないけど、配膳くらいは手伝わないと。

「羽依里、コロッケ定食あがったよ！」

「こつちも冷やし中華完成しました！」

「よし、コロッケ定食のお客様！」

「はい、私です！」

ライトブラウンの髪を特徴的な髪飾りでショートボブに纏めた女の子へ、コロッケ定食を提供する。

「冷やし中華のお客様！」

「それは私だな」

どうやら、さっきの黒髪の女性の分らしい。

「悪いのみき、前を通してくれ」

手際よく座敷に上がり、冷やし中華を配膳する。

なんだかんだで、俺もウェイター姿も板についてきたような気がする。

ゆくゆくしろはと結婚したら、こんな風に家族で食堂を切り盛りしてもいいかもしれない。そうなったら俺も、せめてチャーハンくらいはできるようにならないと。思い出の味だし。

「羽依里さん、親子丼Bも完成です！ 配膳お願いします！」

……って、俺は何を考えてるんだろう。変な妄想しないで、今はしっかりと手伝わないと。

「よしきた！ 親子丼Bのお客様！」

夏海ちゃんが加わったことにより作業効率が上がったのか、続々と料理が完成していく。

「ほう。野村はこの島の執行部の取り仕切っているのか」

「小さな風紀委員みたいなものですネ」

「いや、そんな大したものじゃないぞ」

「それでも、みきちちゃんはすごいですよー」

「えっへん……」

そんな中、のみきは変わらず質問攻めにされていた。悪いけどのみき、もうちょつと頑張ってくれ。

「はい、牛丼のお客様！」

「お、サンキュー」

出来立ての牛丼を茶髪の青年へ提供する。子供っぽい笑顔を浮かべて、割り箸を手を取っていた。

「ところで、お前たちは何の集まりなんだ？」

青年の近くに行つたついでに、何の気なしに聞いてみた。

「俺たちか？」

茶髪の青年は一度持ち上げたどんぶり箸を置いて、俺の方をじつと見つめ返してきた。

「俺たちは……リトルバスターズだ！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その場の全員が食事を終えたのは、それから1時間も経つた頃だつた。

ようやく戦争のような時間が終わり、俺は食後のお茶を配りながら、ずっと気になっていたことを聞いてみた。

「……ところであの、リトルバスターズって？」

「ああ、俺たちのチーム名みたいなものだな」

熱々の緑茶をすすりながら、茶髪の青年が答えてくれる。

「つ、疲れた……」

「終わりましたー」

そしてその時、簡単に片づけを終えたしろはと夏海ちゃんも合流してきた。

「……ちようど揃つたな。鷹原、せっかくだし、お互いに自己紹介をしてはどうだろう」

「そうだな。そうしようか」

なりゆきでだいぶ砕けて話をしていたけど、正直初対面だし。自己紹介はしておかないと。

というわけで、のみきを皮切りに、俺、しろは、夏海ちゃんと順番に自己紹介を済ませる。

「羽依里に、その彼女のしろはに、親戚の夏海に、執行部ののみきだな。よし、覚えたぜ」

赤いシャツの上に学ランを着た筋骨隆々の青年が、指折りながらそう言っていた。

「じゃあ、今度は俺たちが自己紹介をする番だな。お前たち、並んでくれ」

茶髪の青年の合図で、各々の場所に座っていたリトルバスターズのメンバーが整列した。こうやってみると、ものすごく個性的なメンバーだった。

「まずは俺からやろう。俺は棗恭介。リトルバスターズのリーダーをやっている」

やっぱり彼がリーダーらしい。言われてみれば、いかにもリーダーといったオーラをまとっている。

「で、こっちが次期リーダー候補の理樹だ」

「いやいやいや、そんな紹介のされ方困るからっ」

「本当のことだし、別に良いだろ。いいから理樹、挨拶しろ」

「とほほ……えっと、直枝理樹です。その、よろしくお願いします」

見た感じ、普通の少年のように見える。特徴のないのが特徴というか。顔立ちも中立だし。なんとなく、恵を思い出した。

「で、こっちが井ノ原真人。リトルバスターズの筋肉担当だ」

「井ノ原真人だ。真人でいいぜ」

どうやら、赤いシャツの上に学ランを羽織っていた青年は、真人というらしい。

「すごい筋肉だな」

つい、そんな感想が口から出ていた。

「お、さすが目の付け所が違うねえ。オレの筋肉が必要になったら、いつでも言いな」

さつきもかつ丼を食べていたし、身体も鍛えてそうだった。これはいざという時、頼りになるかもしれない。

「でも、真人はばかだぞ」

その時、真人の隣にいたポニーテールの女の子がそんなことを言っていた。つまりは筋肉馬鹿ということなんだろうか。

「言ってくれるじゃねえか。触りまくって馬鹿うつすぞー!」

「うっさい！ 触るな！」

「おいおい、頼むから店の中で暴れないでくれよ」

今にも掴みかからんとする二人の間に恭介が割って入り、そうなだめる。

「ほら、お前も自己紹介しとけ」

恭介がそのポニーテールの女の子の腕を引いて、俺たちの前に引き出す。

「う……な、棗鈴だ」

なんだろう。めちやくちや緊張してるのがわかる。真人とのやりとりは普通だったのに、人見知りするタイプなんだろうか。

「えっと、ナナツメリンダさん？」

しろは、外国人になってるんだけど。

「ち、違うっ。鈴だ。鈴でいい」

「じゃあ、よろしく。鈴」

こくん。と頷いた。同時に髪飾りについてる鈴がちりんと鳴った。まるで猫みたいだった。

「次に、こっちのジャンパー野郎が宮沢謙吾」

「ジャンパー野郎とは、ご挨拶だな」

恭介が言うように、なぜかジャンパーを着ている人がいた。真人程じゃないけど、良い体をしている。

って、何を考えてるんだろう俺。

「宮沢謙吾だ。俺のことも呼び捨てで構わない」

「謙吾は元剣道部なんだぞ」

鈴がそう言う。元ってことは、今は違うんだろうか。

「あの、なんで夏なのにジャンパーなんですか？ 暑くないですか？」

そこで、夏海ちゃんが当然の疑問を投げかけていた。袴の上にジャンパー。色々と季節を間違えているような格好だった。

「確かに暑い。だが、その程度で俺のリトルバスターズへの熱い思いは揺るぎはしない！」

びしっ、と背中を向ける。そこには大きな猫のイラスト共に『Little Busters!』と書かれていた。

「謙吾ってば、そのジャンパーを徹夜で作ってたもんね」

「おうとも！」

え、あのジャンパーってもしかして手作り？ 手作りなの？

よくわからないけど、この話題は下手に掘り下げないほうが良さそうだった。

「やはは。謙吾くんは真人くんとベクトルの違うバカですからネ」

「こら。貴女が他人を馬鹿言わないの」

そんな謙吾の隣に並んでいた二人は、さつきも少し話をした二人だった。髪型こそ違うものの、やっぱり同じ顔だった。

「二人って、もしかして双子？」

「ええ。珍しいでしょう？」

いえ、正直そこまで珍しくありません。ほぼ毎日会ってる双子がいますし。

「こっちの騒がしい方が、リトルバスターズのトラブルメーカー。三枝だ」

双子の片方を指し、恭介がそう紹介してくれた。

「三枝葉留佳ですヨ。好きに呼んでねー、羽依里くん」

左手を軽く挙げながらも、不規則なサイドポニーをその身体と同じように左右に揺らしていた。落ち着きがなさそうなのは、良く分かった。

「こっちの愛想がないのが二木だ。リトルバスターズの風紀を担当している」

「二木佳奈多よ。葉留佳の姉になるの。呼ぶ時は佳奈多でいいわ。よろしくね。鷹原君」

夏らしく、露出多めの服を着ている葉留佳に対して、佳奈多は長袖の服を着ていた。双子と言っても、服装の好みに関しては結構違いがあるみたいだ。

「それで、こっちがリトルバスターズのツツコミ役。西園だ」

「西園美魚です。よろしくお願いします」

影が薄いというか、このメンバーの中ではすごく物静かな印象を受ける。青い髪と、それに映えるような赤いカチューシャが特徴的だった。

た。

……それにしてもツツコミ役っていうのはどういうことだろう。

「で、その隣のちっこいのが能美だ」

「能美クドリヤフカですつ。よろしくお願いしますつ」

亜麻色の髪と、その髪につけられたコウモリの形をした髪留めが印象的な子だった。なんだろう。子犬みたいだった。

「こう見えて、クドはクオーターなんだ」

「クオーター？」

一瞬何のことかと思っただけど、本人の説明によると、クドの祖父はロシア出身で、祖母が日本人らしい。よってハーフじゃなく、クオーター。ということらしい。

「珍しいですよね。驚かせてしまつてすみません」

「ううん、全然気にしないよ。この島にもドイツ人とのハーフの女の子がいるしね」

「わふ？ この島にも、そんな子がいるですか？」

「うん。しばらく滞在するんなら、近いうちに紹介するよ」

「おおー。どんな子でしょうーかー。楽しみなのですーっ」

両手を挙げて、喜びを全身で表現していた。ますます犬みたいだった。

「それでこつちが……」

「来ヶ谷だ。よろしく頼む」

先程冷やし中華を食べていた、黒髪の女性だった。背が高いせいか、かなり大人びて見える。

「姉御は、リトルバスターズのお色気担当と言つたところですよ！」

「葉留佳君、妙な二つ名をつけるのはやめてくれ」

「じゃあ、リトルバスターズのゆいちゃんというのはどうですかー？」

その時、さつきコロツケ定食を食べていた女の子が横から口を挟む。

「え、ゆいちゃん？」

「うんー。くるがやゆいこだから、ゆいちゃんなのです」

来ヶ谷さんは凜としていて、とてもそんなイメージじゃないんだけ

ど。仲間内では、そう呼ばれてるんだろうか。

「いや、決してゆいちゃんではないぞ。鷹原少年、今の発言は忘れてくれ。私のことは、来ヶ谷ちゃんと呼んでくれ」

「えー。ゆいちゃんはゆいちゃんなんだよー」

「ええい黙れコマリマックス。抱きつくなっ」

口調は嫌そうだけど、抱きつく女の子を無理に振り払うようなことはしなかった。なんだかんだで、仲が良いんだろうか。

その後の自己紹介によると、リボンの女の子は神北小毬さんと言うらしい。

驚いたことに、さっきの来ヶ谷さんとは同級生らしい。明らかに来ヶ谷さんのほうが年上に見えるんだけど。

「さしずめ、小毬はリトルバスターズのお菓子担当といったところだな」

「食後のキシリトールガムをどうぞー」

確かに、お菓子を配っていた。

というわけで、予想以上に賑やかな自己紹介が終わった。

そして自己紹介の中で、このリトルバスターズという集団は思っていた以上に仲の良い集団だということがわかった。

「そうそう、彼らは今日から5日間、この島に滞在するそうぞ」

のみきがそう言う。散々質問攻めにあっていたし、その時に聞いたんだろうか。

「ああ。悪いが、しばらく世話になるぜ」

「それは構わないけど……あなたたちはこの島に、何しに来たの？」

しろはが純粹な疑問から、そう聞いていた。

「しいて言うなら、野球だな」

「え、野球？」

「ああ。俺たちリトルバスターズは、野球をするために、この島に来た」

野球とこの島と、どんな関係があるんだろう。

「この島に野球チームがあると聞いてきた。ぜひ練習試合をお願いしたい。のみきも役所の関係者なら、調整を頼めないか？」

恭介はそう言いながら。のみきの方を見る。

「いや……手伝ってやりたいのは山々だが、島には野球チームなんて無いぞ？」

「え……!？」

のみきは言いにくそうにそう告げる。恭介は目を大きく開けて、ショックを受けていた。

「水球部ならあるが。野球部は何年も前に解散してしまつて、今はないはずだ」

「……おいおい羽依里、話が違うぞ？」

「え、俺？」

今度は、恭介がすぎるような眼で俺を見てきた。それを追うように、その場にいた皆の視線が俺に向けられる。

「羽依里がこの島に野球チームがあると教えてくれたから、俺たちはこの島にやってきたんだぞ？」

「え、でも俺、そんなこと言つた覚えは……」

――まず、この島に野球チームはあるか？

――え、野球チーム？

――ああ、野球チームだ。

――たぶんあるんじゃないかな。

……よく思い出してみれば、飴細工を作ってもらつた時に、そんな話をしたような気がする。

「えつと……言つた、かもしれない……」

「ええー、それじゃ羽依里さん、よく確かめもせずにそんなこと言つ

「ちやつたんですか?」

「無責任にもほどがあるよ……」

しろはと夏海ちゃんに両サイドから責められる。普段は怒らない二人の言葉だけに、心にグサグサと突き刺さってくる。

でも、リトルバスターズの皆が、俺が良く考えずもせず発した言葉が発端になってこの島に来てしまったということは間違いないみたいだし。

彼らの苦労を考えると、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「……じゃあ責任を取って、俺が野球チームを用意するよ」

俺は思わず、そう言ってしまうていた。

「……羽依里、本気か?」

「恭介たちはしばらくこの島に滞在してるんだろ? それなら、その間に試合ができるように、俺が野球チームを用意するよ」

「いや、俺たちにとっては願ってもない話だが……そんなことが本当に可能なのか?」

「そうだよ羽依里、無理な約束はしちや駄目だよ」

「正直、できるかわからないけど……俺の軽はずみな発言のせいで、リトルバスターズの皆に迷惑をかけてしまったのは事実だし」

「いや、鷹原少年。別に我々は迷惑だとは思っていないぞ」

「そうですヨ。この島、遊ぶ手段には困りませんからね」

「いや、それでもさ……のみき、島にやってくる旅人は歓待するのが、島の習わしなんだよな?」

「まあ、そうだが……」

「なら、俺はリトルバスターズの皆を野球でもてなしてあげたいんだ。俺の大好きなこの島で、悲しい思いをして帰って欲しくない」

野球でもてなすって、なんか変な表現だけど。言いだしたら止まらなくなっていた。

「……すげえ感動した」

「え?」

見ると、恭介は肩を震わせ、涙を流していた。

「わかったぜ羽依里。その挑戦、受けて立つ」

恭介が握手を求めてきた。俺も反射的にそれに応じて、がっちり握手を交わす。どうやら、俺の思いは彼らに通じたみたいだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「本当に、練習場所は小学校のグラウンドを使わせてもらっているのか？」

「ああ、数日なら問題ないだろう。役所に使用申請を出しておくよ」

その後は、のみきに練習場所の手配をお願いしておいた。野球が出来るような場所は島に一ヶ所しかないし、リトルバスターズと練習時間を調整する必要があるらうけど。

「それじゃ、俺たちはそろそろ帰らせてもらおうとしよう。しろは、代金はいくらだ？」

「えっと、全部で6800円になります」

減多に出さない計算機まで持ち出して、しろはが慎重に計算をしていた。あれだけの人数になると、結構な金額だった。

「悪いが、細かいのがないんだ。諭吉でいいか」

「はい、諭吉でいいです。えっと、おつりおつり」

どうやら、リトルバスターズの財布は恭介が握っているようだった。しろははカウンター裏から細かいお金が入った袋を取り出して、おつりを渡していく。

「しろはさーん、ごちそうさまでしたー！」

「美味しかったですヨ！」

「また来るぜ！」

「しろちゃん、またねー」

「ど、どうも……」

支払いが終わると、リトルバスターズの皆は口々にしろはにお礼を言っ、食堂を後にしていく。お礼を言われた本人は気圧されている

のか、妙に緊張しているみたいだった。

俺としては、彼女の料理を気に入ってもらえたみたいで、嬉しかったけど。

「あ、あの」

「む？ どうした、しろは君」

その時、最後に退店しようとしていたゆいちゃ……来ヶ谷さんを、しろはが呼び止めていた。

「明日の夜も来てくれて構わないんだけど、できればその、何人かに別れて、時間をずらして来て欲しい」

「わかった。そう伝えておこう」

「それと、うちは夜しかやってないの。朝は港の商店にパンが売ってるし、お昼は港に食堂があるから、そこで済ますといいよ」

「そうか。貴重な情報をすまないな。それも伝えておくとしよう」

「うん。お願いします」

しろはからの伝言を受け取った来ヶ谷さんが店を出て行って、ようやく静粛が訪れる。

「ふう……」

残された四人、糸が切れたようにカウンター席に座り込む。なんと言うか、どつと疲れが出た。

「それにしても羽依里、本当にどうするの？」

「え、何が？」

テーブルに突っ伏しながら、しろはの質問に応える。

「野球チーム。本当にメンバーを集めるの？ 道具だってないと思うけど」

「そうだよなあ……」

「いや、道具はあるぞ」

そこで唐突にのみきが会話に入ってきた。

「え、あるの？」

「ああ。運動部としては存在していないが、野球道具なら去年、加藤さんちの蔵から一式出て来たらしい。まとめて小学校の方で預かってもらっているはずだぞ」

まさかの所から野球道具が出てきた。そういえば去年の夏に蔵を整理した時、色々なものが出てきた気もする。ビリヤード台とか。

「そっか。なら、道具の問題は解決だな……」

「しかし鷹原、しろはと同じ言葉を言うようだが、本当に野球チームを作るつもりなのか？」

「一度言ったことを変えるつもりはないよ。鷹原に二言はない」

「鷗みたいなこと言わないでよ」

「それで出来ることなら、しろはたちにもメンバーに入って欲しいんだ」

「え、私たちも？」

「うん」

最悪メンバーだけでも揃えて、形だけでも彼らと試合をしたい。それが礼儀だと思うし。

「お願いできないかな」

「うーん……」

しろはは困った顔をしている。

「今日や明日でメンバーを揃えて、それから練習して、数日後には試合をするとか、無計画で、めちゃくちゃな話だと思うけど」

しろはは冷静に状況を分析していた。確かに、相手の実力も分からないのに急造チームで試合を挑むとか、無謀も良いところだ。

「……でも、いいよ」

「え、いいの？」

「うん。いいよ。そういうのも、夏休みっぽいし」

「ありがとう、しろは」

まさか、ここで快諾してもらえるなんて。俺は思わずしろはの手を取っていた。

「べ、別に羽依里のためじゃないし。羽依里が言ってみたみたいに、私もこの鳥が好きだから、あの人たちに悲しい思いをして帰って欲しくないだけ」

「それでも、ありがとう」

「う、うん……えっと、運動とかそこまで得意じゃないけど、頑張るか

ら」

「ああ、よろしく頼む」

「あの、私もやりたいです!」

「ありがとう、夏海ちゃん」

続いて、夏海ちゃんも参加表明をしてくれた。俺を含めると、これで3人目だ。

「のみきは？ 忙しいだろうし、無理にとは言わないけど……」

「……ずるいぞ。この流れで私が断れば、一人だけ悪者じゃないか。

あまり自信はないが、協力させてもらうよ」

「ありがとう、のみき」

俺はのみきの手を握って、お礼を言う。

「あ、ああ。構わない……ぞ」

のみきは視線を泳がせて、どことなく恥ずかしそうにしていた。なんでだろう。

「三人とも、本当にありがとう」

俺は改めてお礼を言っ、頭を下げる。

「羽依里、安心しちゃだめだよ。まだまだ人数は足りてないんだからね?」

「ああ。明日のラジオ体操の時にでも、皆にお願いしてみるよ」

今現在で4人。野球は9人必要だから、残りは5人。皆の力を借りることができれば、行けそうな気もした。

「ところでしろは、その……」

光明が見え、少し安堵したタイミングで、のみきが申し訳なさそうに切り出す。

「非常に言いにくいんだが、私も食事を注文していいか……?」

「えっ?」

そう言えば、リトルバスターズの皆へ食事を提供するのにいったいっばいで、のみきからの注文を受けてなかった気がする。

同時に、俺と夏海ちゃんも急に空腹を覚える。そういえば俺たちも食べてなかった。

「そうだしろは、俺と夏海ちゃんにも何か作ってくれないか?」

「私もコロッケ定食が食べたいです！」

食堂の壁にかけられた時計を見ると、既に20時近くになっていた。これはお腹が空くわけだ。

「…………ごめん。今日は、もう材料がないの」

「なに？」

「え」

のみきと夏海ちゃんが驚愕の表情を浮かべたまま固まってしまった。

確かに、あれだけの料理を提供したら、店の食材を全て使い切ってしまうっても不思議はないけど。

「じゃあ、俺たちの晩ごはんは…………？」

「…………ごめん。無理」

しろはが俺たちに向けて手を合わせてきた。精一杯の誠意を表してくれているみたいだ。

「そ、そうか…………それなら、いつまでも食堂に居るわけにもいかないな。帰って鷗にお茶漬けでも作ってもらうことにするよ」

「うん。ごめんね」

「いや、また今度よろしく頼む」

のみきはそう言いながら、食堂から去っていった。

「それじゃしろは、俺たちも帰るよ」

「うん。何のお返しもできないけど、二人とも、手伝ってくれてありがとう」

「いいよ。気にしないで」

「はい！ 私も楽しかったです！」

入口まで見送ってくれたしろはとそう言葉を交わして、俺たちは加藤家へと帰宅した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅した後、昨日お土産用に買っただけのミックスジャムサンドと、冷蔵庫のあんぱんを夏海ちゃんと二人で食べた。

夜もまたカップうどんというのも考えたけど、さすがに二食続けてインスタント食品というのはどうかと思うし。

「このジャムサンド、おいしいですねえ」

「うん。なんというか、今まで食べたことのない味だね」

色とりどりのジャムが挟んであるサンドイッチは、一つとして同じ味がなく、飽きが来なくて美味しかった。

その後はお風呂に入って、少し早いけど部屋で休むことにした。

夏海ちゃんも食堂を手伝って疲れたのか、お風呂を済ませたら、すぐに部屋の方に行ってしまったし。

俺も知らず知らずに気疲れしていたのか、自室に戻って横になると、一気に眠気が襲ってきた。

「明日のラジオ体操の時、忘れずに皆を野球チームに勧誘しないと……」

俺はそんなことを考えながら、眠りに落ちていった。

二十八話・完

第二十九話 8月19日（前編）

「羽依里君、朝だよ」

朝。今日も今日とて、夏海ちゃんの声で……。

ちよつと待った。夏海ちゃんは『羽依里君』なんて呼ばない。思わず布団から飛び起きると、枕元に鏡子さんが座っていた。

「つて、鏡子さん!？」

「おはよう」

「お、おはようございます」

反射的に挨拶は返したものの、いまいち状況が飲み込めない。

「今日は二人揃って良く寝てたみたいだから、私が起こしに来たんだよ」

ああ、そういうことなのか。

「すみません。わざわざありがとうございます」

「いいんだよ。夏海ちゃんもあの調子だし」

「えっ？」

「羽依里さん、おはようございます……」

その時、夏海ちゃんがあくび交じりの挨拶をしながら、前の廊下を通り過ぎていった。寝癖もすごかったし、どう見ても寝起きだった。

「昨日はしろはちゃんのお店を二人で手伝ったんだってね。疲れたでしょう?？」

「ええ。慣れないことはするもんじやないですね」

俺は起き上がって布団をたたむ。なんとなく、疲れが残っている感じがした。

ところで鏡子さん、どこでその情報を仕入れたんだろう。昨日はほぼ一日家に居なかった気もするけど。

「朝早くに港に行ったら、ついに同棲を始めたんだなって漁師さんたちが噂してたよ」

ちよつと待つて。昨日つてリトルバスターズ以外、お客さんは来てなかつたと思うんだけど。どこからそんな噂が出たの。

「いつかはそういう日が来るとは思っていたから、私は驚かないけどね」

「え、えーつと、その」

鏡子さん、子供の成長を喜ぶ親の顔になってますけど、誤解ですからね！

「……それはそれとして、羽依里君」

「え？ はい。なんでしよう？」

唐突に話題が変わったみたいだ。

「今日の13時から小学校のプールで灯籠作りがあるんだけど、夏海ちゃんと一緒に行ってみない？」

「灯籠ですか？」

「うん。21日……明後日なんだけど、この島のお祭りがあるの。そのお祭りで海に流す灯籠を、島の子供たちが作るんだよ」

そういうえば、島のパンフレットに写真が載っていたような気がする。夜の海に明かりのついた無数の灯籠が浮かんでいて、すごく幻想的だった記憶がある。

「じゃあ、後で夏海ちゃんに話をしてみますね」

「うん。良い夏の思い出になると思うよ？」

鏡子さんはそこまで話すと、ゆっくりと立ち上がって部屋を出ていく。

「ところで、そろそろ急がないとラジオ体操に遅れるんじゃないかな？」

「……はっ!？」

鏡子さんに言われて壁の時計を見ると、かなり危ない時間になっていた。

「羽依里さーん！ まだですかー？」

そして、それと同時に玄関から夏海ちゃんの声が出た。いつの間にか、準備を終えていたらしい。

「す、すぐに準備するから、待つててー！」

鏡子さんが部屋から出て行ったのを確認してから、俺は手早く身支度を済ませて、夏海ちゃんと一緒に足早に神社へ向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「お、加藤さんよこの。昨日からやってきてるリトルバスターズってのは、どういう連中なんだ?」

「すみません、急いでるので!」

「ちよつと夏海ちゃん。昨日からなんとかいう人たちが島に来てるって聞いたんだけど、知ってるかい?」

「知ってますけど、後にしてください!」

神社に向かって走っていると、その道すがらに色々な人から声をかけられた。

「どうやら、小さな島にリトルバスターズという謎の集団がやってきたという噂は、一晩のうちに島の隅々まで広まったみたいだ。」

全力で走って、なんとか遅刻せずに神社に到着した。

そこにはリトルバスターズのメンバーも集まっていて、島の皆と輪になって話をしていた。

「よう、羽依里」

「鷹原さんに夏海さん、おはようございますー!」

「二人とも、おはよう」

「えっと、恭介さんにクドさん、おはようございますー!」

恭介やクドと挨拶を交わして、俺たちもその輪に加わる。

ところで、神社でラジオ体操があるなんて、リトルバスターズの皆は誰から聞いたんだろう。

「あんたたちも、わざわざこんな島に来るなんて、物好きよねー」
「本当だな。卓球の合宿にでも来たのか?」

「いや、残念だが違う」

「なんだ？ この島は野球じゃなくて、卓球が強いのか？」

棗兄妹が蒼や天善をはじめとした、島の皆と話をしていた。

輪の中心にはのみきがいるし、どうやら一足早くお互いに自己紹介は終えたみたいだ。さすが島の皆は打ち解けるのが早い。

「むぎゆ……。これだけの人が来るのを知っていたら、ちゃんとした服装で来るんでした……」

「本当ね。ちよつと恥ずかしいわ」

「ううん。ネコさんとウシさんもかわいいですよー」

いつものキグルミを着た紬と静久がいたけど、思わぬ来客にとっても恥ずかしそうにしていた。そんな二人を、小毬さんがニコニコ顔で慰めている。

「ところでもかもめちん、そのスニーカーには何が入ってるの？」

「お、教えてあげないよー！」

その隣では、葉留佳が鴉のスニーカーに興味津々だった。隙あらば中身を見ようと思っているのか、スニーカーの周りをくるくると回っていた。

なんというか、人数が一気に増えたこともあって、ものすごく賑やかだった。

「そういえば、今日は紬たちも来てるんだな」

「むぎゆ？ 来てますよ？」

加えて鴉もいるし、これはまとめて野球のメンバーを勧誘する、絶好のチャンスなんじゃないだろうか。

「皆、ラジオ体操が終わった後に話があるんだけど、いいかな」

ラジオ体操大好きさんが石段を登り切って神社にやってくるのを見ながら、俺は皆にそう伝えておいた。

「よーし、今日のラジオ体操はここまで――！」

「ありがとうございます！」

やがて、今日のラジオ体操も盛況のうちに終了した。ラジオ体操大

好きさんは急に参加者が増えたせいか、すごく張り切っていた気がする。

「ううー、まだ目が回ってるううー」

どうやら三半規管の鍛錬でやられたらしい。葉留佳は特徴的なツインテールを揺らしながら、フラフラだった。

「は、葉留佳、あれくらい運動で、だらしないわよ……?」

そう言う佳奈多も声が枯れていた。こっちは横隔膜の振動で声を出し過ぎたらしい。

俺たちはすっかり慣れてはいるけど、本土から来たリトルバスターズからすれば、この島のラジオ体操はやっぱり変わっているみたいだ。

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

その後、俺たちはスタンプとログボを受け取る。

昨日蒼が言っていた通り、今日のログボはトウモロコシだった。

これ、たっぷりの醤油をつけて、焼きもろこしにしたら最高だろうな。

「それで羽依里、話って何？」

その時、鴟や紬を筆頭に、皆が集まってくる。

リトルバスターズの皆も俺の意図を察したんだろう。誰一人帰ることなく、その場に残っていてくれた。

「もしかして、いよいよしろはちゃんと同棲でも始めるんですか？」

「いや、こんなところでわざわざそんな発表しないから！」

「えっ、同棲って……それってつまり、夜には……」

ほらー！ 純粹な妹は信じちゃってるじゃないか！ マッハでピンクになってるし！

「おーい蒼、帰ってこーい」

「ふむ。さしずめ、妹さんの方はピンク大王のようだな」

「ピ、ピンク大王ちゃうわっ！」

帰ってきた。というか、来ヶ谷さんの言い方も見事に的を得ている。

「ちなみに、同棲はしない」

「わかってます。冗談ですよ」

本当に冗談なんだろうか。もしかして、同棲の噂を流したのは藍なんじゃないかとも思えてしまう。

「それじゃ、話進めていい?」

「はい。どうぞ」

藍は悪びれる様子もなく先を促してくる。初対面の人がいようとも、藍は自分のペースを崩さなかった。

「それで、話ってというのは……」

俺はリトルバスターズの皆がこの島に来ることになった経緯からはじめ、彼らのために野球チームを作りたいという、熱い思いをぶちまけた。

「野球チーム……?」

突然の提案に、少なからず戸惑いの声が出る。

そこで俺だけじゃなく、のみきやしろは、夏海ちゃんも参加表明をしてくれていることや、道具や練習場所も既に確保できている旨も伝える。

「俺のわがままだったことはわかってるけど、皆の力を貸してほしい」
そして、俺は深々と頭を下げる。

「いいぞ」

一番に返事をしてくれたのは、良一だった。

「良一、良いのか?」

「ああ、どうせ暇だからな」

「俺も参加しよう。同じ球技だし、良い特訓になりそうだし」
続いて天善も参加を表明してくれた。

「二人とも、ありがとう」

「ねえ羽依里、私もやりたい!」

鷗も自分を指差しながら、参加表明をしてくれる。

「良いのか?」

「うん! 野球のルールはよくわからないけど、皆で一緒に何かやるのって、面白そうだし!」

「鳴、ありがとう」

会話の前半の部分が少し気になったけど、ルールなんて覚えればいいんだし。

「蒼たちはどう？　お願いできないかな」

「祭りの準備もあるんだけど……いいわ。参加したげる」

「え、いいのか？」

「道具に練習場所もあるんでしょ？　そこまで準備されてたら、やらないわけにはいかないじゃない？」

もしかして蒼は腕に覚えがあるんだろうか。頼もしい限りだった。

「蒼ちゃんができるんだったら、私もやりますよ」

「ありがとう、藍」

二人は身体能力も高いし、何より双子ならではのコンビネーションに期待したい。

「紬さん、私と一緒に野球をしてください！」

俺の隣では、夏海ちゃんが紬に頭を下げていた。まさか、そこまでしてくれるなんて。

「……わかりました！　ナツミさんの頼みとあれば、断れません！」

「紬がやるのなら、私も参加するわ！」

「お二人とも、ありがとうございます！」

紬に続いて、静久も参加表明してくれた。本当にありがたい。

……終わってみれば、その場にいた全員が参加を了承してくれていた。

「皆、ありがとう」

俺は改めて頭を下げる。皆には感謝しかない。

「……チームの心配はいらなみたいだな。さすが、良い仲間を持っているな」

そう言いながら、恭介が近づいてきた。

「ところで恭介、お互いの練習時間についてなんだけどさ」

「ああ、俺たちはいつでも構わないぞ。普段から鍛えているからな」

「今日は灯笼作りがあるから、俺たちは15時から練習しようと思うんだ」

いきなり練習と言っても、皆も色々と準備があるだろうし。

「皆も、それでいいかな？」

「ああ、いいぜ」

「それで構わないぞ」

「15時ね。それまでに行くようにしておくわ」

皆、口々に快諾してくれた。

ラジオ体操に参加していかないしろには、のみきから練習時間を伝えてもらうことにしよう。

「なら、俺たちは昼から15時までの間、少しだけ練習させてもらう。お前らもそれでいいか」

「えー」

「練習なんていらねえですよー」

俺たちとは打って変わって、リトルバスターズからはブーイングが飛んできていた。なんだろう。本気で嫌なのか、それともそれだけ自信があるのか。

「午前中は好きに遊んでいいから、午後からは練習だっ！ いいな、ちゃんと集まれよ!?!」

恭介は半ば涙目だった。グループとしては強固みただけど、野球チームとしては大丈夫なんだろうか。

「そうだ恭介氏、野球道具は小学校の倉庫にしまつてある。午後までには鍵を開けておくよ」

「あ、ああ。悪いな」

そして同時に、8/22に試合を行うことが取り決められた。つまりは3日後だ。

確かその日は、リトルバスターズが滞在する最終日だ。どうやら、ギリギリまで待つてくれるみたいだ。

「ところで、トーロー作りってなんだ」

「あ、私もそれが気になっていました!」

大方の話し合いが終わった頃、鈴がそう質問し、夏海ちゃんが続く。

「この島の祭りですらう灯笼を、島の子供たちが作るのよー」

その質問には、蒼が答えていた。

「あ、それってもしかして、これでしょーか？」

クドが持つてきていた鞆から島の観光パンフレットを引っ張り出して、皆に見せていた。

「わあ、綺麗ですね」

「せっかくだし、夏海ちゃんも灯笼作りに行かない？」

「はい！ 行きたいです！」

となると、今日のイベントはそれになるのかな。良い夏の思い出になりそうだし。

「そういえば、21日にはこの島の祭りがあるらしいな」

謙吾が言う。さっきのパンフレットもそうだけど、さすがに島について色々と下調べをしてきているみたいだ。

「ああ。観光客も集まるし、盛り上がるんだぜ」

良一は得意顔だ。島の皆にとって、祭りは特別なものなんだろう。

「できたら、花火も見えたかったんだけどなー」

葉留佳が口をとがらせて、不満そうな顔をしていた。

「葉留佳、よく知ってるわねー。今年の花火大会は確か、8/29なのよ」

「へえ、花火大会とかあるのか」

俺も祭りの話は知っていたけど、花火の件は失念していた。

「でも葉留佳さん、そんなに長く滞在してたら、お金がいくらあっても足りないよっ。」

「理樹くんと言われなくてもわかってますよー」

「それに、三枝さんは宿題もやらないといけませんよ。井ノ原さんに次いで、進みが遅いんですから」

「みおちん、島まで来て宿題の話はやめてー」

そう言う西園さんは真っ白い日傘を差していた。早朝とはいえ、日差しが強いからかな。

「よし、良い感じに話もまとまったし、そろそろ解散しようぜ。朝飯が売り切れちまう」

恭介がそう言つて、輪から抜ける。確かに、そろそろ頃合いだった。確かに腹減つたな。よし理樹、帰ろうぜ」

「うん。ホテルに戻る前に、港の商店で朝ごはん買わないとね」

その恭介に続いて真人と謙吾も歩き出し、それに付き従うように理樹が歩いていく。

「それじゃあ夏海ちゃん、俺たちも帰ろうか」

「はい！ それでは皆さん、またです！」

残つていた皆に挨拶を済ませて、俺たちも神社を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里さん、ログボのトウモロコシください！」

加藤家に着くなり、夏海ちゃんが凄い笑顔で手を差し出してきた。

「チャーハンにしますのー！」

そういえば、今日のログボはトウモロコシだし、久しぶりにチャーハンが作れそうな気がする。

でも、やっぱり焼きもちしも捨てがたい。

「ねえ夏海ちゃん、一本は残しておいて、後で焼きもちしにしない？」

「ダメです」

夏海ちゃんは笑顔を崩さなかった。なぜか怖い。

「焼きもちしがダメなら、せめてコーンバターとか」

「ダメです。それにこの家、マーガリンしかありませんよね？」

「う……」

言われてみればそうだった。この家に、バターなんてものはない。「と言うわけで、観念して渡してください！」

ぱしっ、と手からトウモロコシを奪い取られてしまった。怖かった。夏海ちゃんもチャーハンのことになると、性格変わるよね。

鼻歌混じりに台所へ向かう夏海ちゃんを、俺はただ見送ることしか

できなかった。

「お待たせしました！ コーンチャーハンです！」

しばらくして、夏海ちゃんがコーンチャーハンをおぼんに乗せてやってきた。

予想はしていたけど、明らかにコーンとごはんのバランスがおかしい。圧倒的にコーンの量が多い。

まあ、二本分のコーンを全部チャーハンに使えば、こうなっちゃうよね……。

「今日のは自信作です！ 食べましょう！」

エプロンを外して食卓に着いた夏海ちゃんに促されるまま、俺は全体的に黄色く染まったコーンチャーハンに取りかかる。

「あ、美味しい」

シャキシヤキとしたコーンとパラパラのごはんが絶妙にマッチしている。そして、時々鼻に抜ける醤油とバターの香りが最高だった。

「あれっ、バター？」

念のためにもう一口食べてみる。やっぱり、ほのかにバターの香りがする。

「夏海ちゃん、このチャーハン、バター使ってる？」

「はい！ 実は、いつものサラダ油の代わりに、バターを使っています！ 美味しいですよね？」

「美味しいけど……夏海ちゃん、バターはないって言ってなかった？」

「あれー？ そんなこと言いましたっけー？」

夏海ちゃんは含みのある笑顔を向けてくる。うん。これはもしかして、たばかられたかも。

「えへへー。実は昨日冷蔵庫を整理していたら、こんな小さなバターの欠片を見つけたんですよ！」

夏海ちゃんは親指と人差し指で、その大きさを示してくれる。普段、冷蔵庫を覗かないのが仇になったみたいだ。

「って、そのバター大丈夫だったの？ 賞味期限とか」

「本当に切れはしだったので、書いてなかったです。でも、すっかり熱は通しましたし。美味しいですよね？」

「美味しいけど……」

改めてコーンチャーパーンを口に運ぶ。バター醤油風味で本当に美味しい。

「もしお腹に当たったら、羽依里さんも一緒です！ イチレンタクシヨーですよ！」

だから、細みたいに言うのはやめて欲しい。

朝食を済ませた後は、特にやることが無かった。

灯籠作りも野球の練習も午後からだし、午前中は暇だった。

「そうだ夏海ちゃん、久しぶりにバイクで島を回ってみない？」

「え、バイクですか？」

「うん。もしかしたら、リトルバスターズの皆に会えるかもしれないよ。」

俺としても、折角島に来てくれたお客さんだし。野球以外でも、親交を深めたい。

「そうですね。行きましょう！」

ぼんやりと見ていたテレビを消して、夏海ちゃんが玄関に向かっていった。

俺も手早く準備を済ませて、表に出る。今日も雲一つない。良い天気だった。

「あれ？ 羽依里さん、そのキーホルダーはなんですか？」

俺がガレージからバイクを引っ張り出していると、夏海ちゃんがそう聞いてきた。

「ああ、これ？」

「はい。可愛い鳥がついてますね」

先日、しろはとのデートで買ったペアグッズだ。せっかくだし、島

に在る間はバイクのキーにつけることにしたんだ。

「な、なんでもいいじゃない。ほら、早く後ろに乗って」

「もしかして、しろはさんからのプレゼントですか？」

ヘルメットをかぶった夏海ちゃんが、後ろでにやにやしているのがサイドミラー越しに見える。

「教えてあげないよ！」

俺はそのままバイクを発進させた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

なんだかんだで、久しぶりのバイクだった。時間もあるということ
で、海沿いをゆっくり走った後、灯台の方へ行ってみた。

「いーーーーーやっほおおう！」

そこでは、恭介がパリングルス自転車を乗り回していた。

あのパリングルス自転車、確か工作大会の時にバラバラになったん
じゃなかったっけ。

「三号機、行くぜー！」

声がした方を見ると、良一も別のパリングルス自転車にまたがつて
いた。三号機と言ってるあたり、どうやら何台か新しいパリングルス
自転車を作ったらしい。

「すげえなこの自転車。変速機までついてるのか」

「ああ、三段だけな」

どういう仕掛けになってるのかわからないけど、良一は得意顔だっ
た。

「良一、お前すげえよ」

恭介は目をキラキラと輝かせていた。思いっきり少年だ。とても
年上とは思えない。

「よーし恭介！ 競争しようぜ！」

「おう！ いくぜー！」

「レツツゴー！」

二人は勢い良く走り去っていった。めちやくちや楽しんでた。そんな二人を見送って、灯台の近くにバイクを止める。

「あ、タカハラさんにナツミさんです！」

俺たちの姿を見つけて、紬がやってきた。その後ろには静久をはじめ、葉留佳や来ヶ谷さん、クド、小毬さんが連れ添っていた。どうやら、皆で灯台で遊んでいたらしい。

「お二人とも、いらっしやいませー」

「はい、いらっしやいました！」

夏海ちゃんと挨拶を交わす紬の手には、大量のビー玉が握られていた。

「紬、そのビー玉は何？」

「はい！ ハルカさんからいただきました！」

紬は俺たちによく見えるように両手を上げてくれる。色とりどりのビー玉は、太陽の光を浴びてキラキラと輝いていた。

「綺麗ですねー」

「はい！ キラキラです！」

「ふっふっふっ。むぎゆ子、そのビー玉はただのビー玉じゃないのですヨ」

葉留佳が紬の後ろから顔を出しながら、悪戯っぽく笑う。

「むぎゆ？ どういうことでしょうか」

「これはですネ。追っ手が来た時にばらまくのですヨ。それで追っ手を足止めするのです」

「おおー、さすがハルカさんです！」

「やはは。むぎゆ子、褒めても何も出ないぞー」

「むみゆみゆみゆ」

葉留佳は紬の両方の頬を、むにゅむにゅと揉んでいた。

「葉留佳君。そろそろ交代だ。今度はおねーさんが紬君をむぎゆーとしてやろう」

「え、エンリヨします！ ユイコさんからは、ヨコシマなオーラを感じ

ます！」

直後、紬は葉留佳の手を振りほどいて逃げ出すと、そのまま静久の後ろに隠れる。

「シズク、助けてください！」

「まかせて！ 紬に手出しはさせないわ！ おっぱいバリアー！」

直後、静久が胸を張って立ちふさがる。

「ぎゃふん！」

「わふー!?!」

そして、葉留佳とクドが静久のおっぱいパワーを受けてその場にひっくり返る。

「ううう。なんというおっぱいぼーん。神々しくて近寄れない」

「うふふ。三枝さんも理想的な大きさだけど、もう少しね」

「うう……私では何人束になっても、あの人には敵いそうにないです。ないです。ないです。すす……すす」

よくわからないけど、クドが一人ドツプラー効果で悲しみを表現していた。

でも確かに、胸の大きさでは静久に軍パイ……じゃない、軍配が上がる。

「くっそー。姉御、お願いしやすー！」

「うむ」

ノックアウトされた葉留佳に代わって、来ヶ谷さんが前に出る。

静久ほどじゃないけど、この人の胸もなかなかのサイズだ。

というか、皆揃っておっぱいトークはやめてほしいんだけど。ここに一応男子も居るんだし。

「いやー、羽依里くん。この二人が並んできると迫力が半端ないですよネ」

「そ、そうデスネ」

そこで俺に話を振らないでほしい。ただでさえ、目のやり場に困ってるんだから。

「でも、本当につむちゃんはお人形さんみたいで可愛いよねー」

そう言うのは小毬さんだった。

「いえ、わたしはどちらかというどぬいぐるむぎゅ」

「フハハハハハ」

「ああ、紬ー！」

言い終わる前に、紬が来ヶ谷さんに捕まっていた。あの人、いつの間に静久の背後に移動したんだらう。

「みゅみゅみゅー！ みゅみゅみゅみゅー！」

紬が何か言ってるけど、来ヶ谷さんに抱きしめられてるせいかな、何を言っているのかわからない。

「とりあえず、お菓子をどうぞー」

駄菓子屋で買ったんだらうか。紬で遊んでいる来ヶ谷さんを尻目に、小毬さんがお菓子を配り始めた。

「あおちゃんにおススメを教えてもらったんだよー。はい、どうぞー」
そう言いながら、ベイビースターを手渡された。ちらつと見えた袋の中には、あまり買ったことのないようなお菓子もある。

「はい、クーちゃんになつちゃんもどうぞー」

「あ、ありがとうございます」

「小毬さん、ありがとうございます」

ちなみに、二人はうめジャムと水あめを受け取っていた。

「ゆいちゃんもはるちゃんも、うんまい棒をどうぞー」

「キムチ味を選んでくれるとは、さすがコマリマックスだな」

ぱつと紬を解放し、代わりにお菓子を受け取る。

「むぎゅぎゅぎゅ……」

紬は目を回している。大丈夫だらうか。

「むぎゅぎゅぎゅ、やつぱりユイコさんは危険人物です！ あやうく白いお花畑が見えましたー！」

「そう怒らないで。紬ちゃんもワタアメをどうぞー」

小毬さんは釣り目の紬に動じることなく、袋に小分けにされたワタアメを手渡す。

「むぎゅ!? ありがとうございますー！」

そのワタアメを見た紬の表情がぱつと明るくなる。お菓子の力は偉大だ。

「紬はワタアメが大好きだもんな」

「はい、大好きです！」

「それは良かったよー」

小毬さんはニコニコ顔だ。なんというか、周りに幸せを振りまいている感じだった。

「お菓子を食を見ると、ちよつと幸せな気分になるよね。皆が幸せな気分になると、私も幸せな気分になれるのです」

「うむ。小毬君の幸せスパイラル理論だな」

確かに、笑顔でワタアメを食べている紬を見ると、こつちも幸せな気分になってくるな。

「あいてててて……」

「おい良一、大丈夫か」

その時、良一と恭介が灯台に戻ってきた。

「り、良一さん、どうしたんですか？」

夏海ちゃんが驚いた声をあげる。戻ってきた良一は、何故かずぶ濡れだった。

「テンション上がりすぎて服を脱いだら、のみきに狙撃されたんだよ」
なんでテンション上がって服を脱ぐんだろう。良一の思考が良くわからなかった。

それにしても、のみきがいる鉄塔からこの灯台まで、かなり距離があるんだけど。そこから狙撃してくるなんて、さすがのみきだった。
「つたく、警告なしに撃って来るなんてよー」

水鉄砲の一撃を受けて転倒したんだろうか。良一のパリングルス自転車はバラバラになっていた。

「ほら良一くん、水もしたたるなんとかって言うじゃないですか」

「葉留佳、お前それ、絶対褒めてないだろ……」

その後、良一と恭介にも小毬さんからお菓子が配られて、奇しくもお菓子パーティーの装いを呈してきた。

クドと紬は灯台が作った日陰に腰を下ろして、水あめとワタアメを

食べながらまったりしている。

「わぎゅー」

……その時、二人が同時に口癖を発する。なんか混ざっていた。

亜麻色と金色の髪を風に泳がせる二人は、まるで童話の登場人物のようで、なんとも独特の雰囲気醸し出していた。

「ゲホゴホ。いやー、みそかつ味のうんまい棒も美味しいけど、何か飲み物が欲しくなりますネ」

その時、葉留佳がむせながらそう言った。こっちは雰囲気も何もあつたもんじゃない。

「そうですねー。この辺りは自動販売機もありませんし。あそこの水道の水は飲めるんでしょーか」

ねりねりと水あめを練りながら、クドがそう言葉を返す。

「あ、飲み物ならありますよー」

その話を聞いていた紬がぴよんと立ち上がって、灯台の中へ入っていった。

そして、大量の缶コーヒーを持って戻ってくる。確かあれ、漂着物じゃなかったつけ。

「お近づきの印に、どうぞー」

紬はそう言いながら、皆に缶コーヒーを配っていく。

「うむ。この濃くて苦い感じがガツンと来るな」

来ヶ谷さんはさっそく飲んでいた。その飲みっぷりからして、ブラックコーヒーは好きみたいだ。

「……」

その隣では、葉留佳が押し黙りながら、必死に飲んでいった。たぶん苦いの苦手なんだろうけど、自分が催促した手前、頑張つて飲んでいるみたいだ。

「うえええ、苦いいい……」

一方で、小毬さんは泣いていた。お菓子好きということもあつて、やっぱり苦いものは苦手なんだろうか。

「ナツミさんも、どうぞー」

「え、私ももらっちゃっていいんですか？」

「はい！ まだまだたくさんありますので！」

「ありがとうございますー！」

夏海ちゃんは笑顔で受け取っていたけど、飲む様子はなかった。確か、苦いの苦手なんだっけ。

「こ、これは……まるでカラスにでもなりそうだな」

独特な言い回しだったけど、恭介や良一もブラックコーヒーは大丈夫そうだな。

「そう言えば、恭介たちはどこに泊まってるんだ？」

俺もコーヒーを飲みながら、そう聞いてみた。

「港にホテルがあるだろ。あそこだよ」

そういえば、港にしなびたホテルがあっただけ。確かに、島であれだけの人数を泊められる場所はあるかもしれない。

「食事なしの素泊まりの上、団体割引もしてもらってな。格安だったぞ」

「いやー、でもいくら安くするためとはいえ、部屋の掃除も自分たちですることになるなんて思わなかったですヨ」

どれくらいの金額になったのか分からないけど、すごいやり方をするなあ……。

「そういえばあなたたち、朝食はどうしたの？」

パイの果実とブラックコーヒーをたしなみながら、静久が聞いていた。

「港の商店でパンを買わせてもらったよ。昨日の夜、しろは君に場所を聞いてな」

「たこ焼きパンは美味しかったけど、売ってるパンの数がなくて、私達の後を買う人に悪い気がしましたネ」

「あの店は徳田パンから仕入れているからな。ここ数日は入荷するパンを増やしてもらえるよう言っておくぜ」

ここはそう言う良一に任せよう。徳田とはあまり話したことないけど、売り上げが増えるのなら悪い話じゃないはずだし。

「昼飯はどうするんだ？ しろはの食堂は夜しか開いてないぞ？」

飲み終わった缶コーヒーをゴミ箱に入れながら、良一がそう続けて

いた。

「それも、しろは君から話を聞いている。お昼は港の食堂を使わせてもらうつもりだ」

そう言えば、港にも食堂があるんだっけ。行ったことないけど。

コーヒーを飲んだ後は、夏海ちゃんが恭介と話す様子をなんとなく眺めていた。

「例えば、学校の中で缶ケリをしたり、職員室の前でバトルをしたりな。遅刻しそうになって、真人と謙吾で鈴を三階の教室に投げ入れたこともある」

どうも、恭介からリトルバスターズの武勇伝を聞かせてもらっているみたいだった。

「それで、屋上超えちゃった鈴さんはどうなったんですか!？」

「うまく真人と謙吾が受け止めたさ。その後、思いつきりすぎだと真人が蹴られてたけどな」

夏海ちゃんは目を輝かせてその話を聞いていた。隣で聞いている限り、かなり破天荒な内容なんだけど。

「恭介おにーさん、ありがとうございます!」

どうやら話が終わったらしい。夏海ちゃんがお礼を言っていた。

それにしても、夏海ちゃんがいきなりおにーさんと呼ぶなんて。恭介の人心掌握術って、どれだけなんだろう。

「その……夏海ちゃん」

その時、恭介の後ろから良一が言いにくそうに言う。

「俺のことも『良一おにーちゃん』って呼んでくれても良いんだぜ」
「え、良一おにーちゃん……?」

思わず口走ってしまったんだろう。言ってから、少し引いていた。

「うおおおー!ー!ー! 妹よー!ー!ー!」

それでも、良一は嬉しかったみたいだ。感極まったのか、泣きなが

ら夏海ちゃんに抱きつこうとしてくる。

「ひええっ!?!」

「……下がれ。夏海君」

その時、来ヶ谷さんが夏海ちゃんの前に飛び出す。

「食らえ外道。ドラゴンサマーソルト!」

瞬時に屈んで勢いをつけてからの、鮮やかなサマーソルトキックが決まる。すごい。カッコいい。

「ぐわあああっ!?!」

強烈な蹴りが顎を直撃した良一は、そのまま卒倒してしまった。

「おおー、姉御、さすがです」

「フ……。安らかに眠れ」

仰向けに倒れた良一は全身を痙攣させている。大丈夫だろうか。

……それにしても、良一があそこまで取り乱すなんて。妹に対して、特別な思い入れでもあるんだろうか。

「あの、良一さん、大丈夫でしょうか」

危うく襲われそうになったっていうのに、夏海ちゃんは良一を心配していた。優しいね。

「急所は外しておいた。そのうち目が覚めるだろう」

本当に外してくれたんだろうか。泡吹いてるけど。

「そうだ夏海ちゃん、良一には悪いけど、そろそろ他の場所にも行ってみよう?」

「はいー!」

少し考えて、良一が目覚める前に逃げ……いや、移動しておくことにした。

「それでは皆さん、またです!」

夏海ちゃんと一緒にあいさつを済ませた後、俺はバイクに乗って、灯台を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

灯台の皆と別れた後、俺たちは港の方へ向かっていた。運転しながら腕時計を見ると、まだまだお昼までは時間があるし、のんびり行こう。

「夏海ちゃん、港に何か出店が出てるといいね！」

「はい！ 楽しみです！」

後ろの夏海ちゃんとそんな話をしながら、田舎道を通りかかると真っ白い傘と、見慣れたスーツケースが目飛び込んできた。

「あれ？ あの二人つてもしかして」

俺は反射的にバイクを止める。見ると、いつも蒼が寝ている木の下に、西園さんと鴎が座っていた。

「そういえばみおちん、なんで日陰で傘差してるの？」

「ずっとスーツケース引いてる人に言われたくないです」

なんか話していた。言われてみれば、確かに日傘も気になるけど……鴎のスーツケースみたいに、何か理由があるのかもしれない。ここは変に突っ込まないようにしよう。

適当な場所にバイクを停めて、その二人のそばに行ってみる。

「よう」

「えっと……西園さん、鴎さん、こんにちわです！」

「羽依里、なつちゃん、やつほー」

「こんにちわ」

夏海ちゃんと一緒に近づいてみると、鴎たちは膝の上に本を開いていた。二人で読書会でもしていたのかな。

「どうした鴎、お前が本なんて。明日は雨だな」

「誤解を招くような発言はやめてもらえますか」

鴎はぱたんと本を閉じる。その表紙を見ると、やっぱりひげ猫団の冒険だった。

「西園さんはえーつと……なんの本を読んでるんですか？」

「若山牧水の歌集です」

「え、えー？」

夏海ちゃんが反応に困っていた。さすがに知らないみたいだ。俺もよくは知らないけど。

「みおちゃんは文学少女だからね！」

確かに物静かだし、そんなイメージがある。

「ところで、二人は仲良いのか？」

と言うか、出会って初日からみおちゃん呼ばわりもすごい。鴎の性格もあるかもしれないけど。

「うん。実は、ずっと前からの知り合いだったんだよ」

「え、そうなの？」

「久島さん、その言い方には語弊があります。子供の頃、手紙を送っただけです」

「あ、それってもしかして」

「うんうん。色々話を聞いていたらね、みおちゃんも昔、ひげ猫団の冒険の感想を私に送ってくれたの！」

「ああ、そういうことなのか」

「え？ どういうことですか？」

夏海ちゃんの頭上にはハテナマークが浮かんでいた。

詳しく話すことはばかれたので、二人は幼馴染ということにしておいた。

「……それで、どこまで話したっけ？」

「皆で海賊船を見つけて、大海原に第一歩を踏み出したところですよ」

「あ、ひげ猫団の冒険ですか？」

「そうそう。なっちゃんも混ざってる？」

「はい！ 混ざります！」

その後は夏海ちゃんも加わって、三人でひげ猫団の冒険の感想を話していた。

それにしても、西園さんは記憶力が良いんだろうか。十年も前の本の内容をよく覚えてるな。

作者の娘である鴎は元より、最近読み上げたばかりの夏海ちゃんとも、そつなく感想を言い合っていた。

「ところで、羽依里たちは何か用事があったんじゃないの？」

「え？」

「ほら、バイクで走ってたじゃない」

「あー……」

まあ、用事があると言えばあるけど。

「そうでした！ 羽依里さん、港に行きましょう！」

直後、鴟の隣に座っていた夏海ちゃんが、ぱっと立ち上がる。

「鴟さん、西園さん、お邪魔しました！」

夏海ちゃんは二人にその声をかけて、足早にバイクの方へ向かう。

俺もそんな夏海ちゃんに続いていき、バイクにまたがる。

「それじゃ二人とも、ごゆっくり」

「うん。ありがとう」

元気よく手を振ってくれた鴟に手を振り返して、俺たちは港へ向かって再びバイクを走らせた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よし、到着だね」

「はい。出店、どこでしょうか」

俺たちは適当な場所にバイクを停めて、出店を探す。

すると、向こうの方に何か小さな店が見えた。なんだろう。店の規

模の割に、店員さんが多いような……。

「ふっ、ふっ、筋肉っ、筋肉っ」

「ふっ、ふっ、筋肉っ、筋肉っ」

そんなことを考えていると、どこからか謎の声が聞こえてきた。

「お前ら、こんな所まで来て筋トレするのか」

「鈴、真人たちには真人たちなりの楽しみ方があるんだよ。何も言わないであげてよ」

見ると、港の端の方で真人と謙吾、天善の三人が並んでスキップをしていた。

「なあ、あの三人は何やってるんだ？」

呆れ顔の鈴と理樹に近づいて、そう聞いてみる。

「あれは絆スキップだよ」

「え、何？」

「絆スキップ。昔、僕と真人と謙吾で編み出した……その、絆を確かめ合うスキップなんだ」

「なんだろう。よくわからないけど、リトルバスターズにはそういうものがあるんだろうか。」

「あほだな」

「そう言う鈴の足元には、港のネコたちが集合していた。なんだろう。鈴もどこかネコっぽいし、仲間だと思って寄ってきてるんだろうか。」

「これはシンプルだが、なかなかいいトレーニングになるな！ ふっ！ ふっ！」

「筋肉！ 筋肉！」

「……夏海ちゃん、帰ろうか」

「え、真人さんたちには、声かけないんですか？」

「うん。ここはそつとしておこう」

「楽しんでるみたいだし、ここは邪魔をしちゃ悪いよね。」

「困惑する夏海ちゃんの手を引いて、バイクの方に向き直った……その時。」

「……これは何の騒ぎだ」

「……聞き慣れた声でした。」

「思わず振り返ると、真人に見劣りしないほどの体格の男性……しろはのじーさんが、真人たちの前に立っていた。」

「あ？ じーさん、どうした？」

「絆スキップをしていた三人の動きが止まる。特に天善は、顔が真っ青になっている。」

「お前たち、余所者か」

「じーさんはぎろり、と三人を見やる。そして、その中の見知った顔に気がついたみたいだ。」

「加納のせがれ、こいつらはお前の友達か」

「い、いえ、その、あの」

じーさんとしては、ただ尋ねただけなんだろうけど、天善は完全に動揺して、しどろもどろになってる。これは駄目っばい。

「あ、あのー」

「むっ？」

「……っ!?!」

その状況を見て、理樹が勇気を出して声をかけていたけど、じーさんに一睨みされて、鈴と揃って黙り込んでしまった。鈴の足元にいたネコたちも一目散に逃げ去ってしまったし、あのじーさん、相変わらず色々怖すぎる。

「じーさん、待ってくれ!」

俺は急いでしろはのじーさんの元に駆け寄る。このタイミングで島の住民との間に荒波を立ててほしくないし、ここは身を挺してでも、何とかしないと。

「なんだ、羽依里か」

「真人、謙吾、ちよつとこっちに来てくれ」

「お? どした?」

だから俺は、咄嗟に思いついた作戦を実行することにした。

「良いから二人とも、俺に合わせてくれ」

俺たち三人は横並びとなって、しろはのじーさんの前に立つ。

「じーさん、実はこの二人、ずっと、この島の文化を学びたいと言っていたんだ」

「ほう。余所者にしては、見上げた連中だ」

「そこでぜひ、彼らに四天王スクワットを伝授してほしいんだ」

「いいだろう。本土から来た連中に、この島伝統の四天王スクワットを叩き込んでやる」

じーさんの表情が心なしか和らいだような気がする。これはいけるかもしれない。

「よし。まずはわしと羽依里が手本を見せる。よく見ているようにな」

か。……しまった。この流れだと、確実に俺もやる羽目になるじゃないか。

「羽依里、お前は朱雀だ」

「あ、ああー」

こうなったら乗り掛かった舟だ。足腰が立たなくなるギリギリまで付き合うしかない。

心配そうな顔でこつちを見ていた夏海ちゃんたちへ『大丈夫だから』と手で合図をして、俺は筋肉二人と四天王スクワットに没頭していった。

「……よし、今日はこのくらいにしておいてやる。また習いたくなったら、いつでも呼ぶがいい」

みつちり30分はスクワットをしただろうか。ジーさんは満足したのか、帰っていった。

「ぜえ、はあ、ひどい目に遭った」

俺は両ひざに手をつけて、肩で息をしていた。久しぶりの四天王スクワットだったから、ダメージが大きい。

「変わったスクワットだったな。だが、良い筋トレになったぜ」

「あれだけ動けるとは、あのジーさん、一体いくつなんだ？」

「ジーさんとは思えない、逞しい筋肉だったよな」

そう言う真人と謙吾は大した疲れも見せず、涼しい顔をしていた。さすが、あの筋肉は伊達じゃないらしい。

「それにしても、寿命が縮んだよ……」

「こわかった……」

一睨みされた理樹と鈴も、それなりに堪えていたみたいだ。

「あの人は、しろはさんのおじーさんなんですよ」

未だ呼吸が整わない俺の代わりに、夏海ちゃんがそう説明してくれていた。

「なに……しろには、あんなこわいおじーさんがいるのか」

「見た目はあんな感じですけど、とっても優しい人なんですよー」

夏海ちゃんが必死にそうフォローしていた。それでも、あのイメーヂを払しよくするには、相当な時間がかかりそうだけど。

「やれやれ、動きすぎて汗かいたぜ」

その時、真人が上着を脱いで上半身裸になる。

「ふう。潮風が気持ちいいぜ」

「「あ」」

その様子を見て、俺と夏海ちゃん、天善の三人が同時に声をあげる。

「ちよつと真人、鈴以外の女の子も居るんだし、脱いじゃ駄目だよ！」

「別に良いだろ、ちよつと筋肉見せるくら……ぶわっ!？」

次の瞬間、どこからか強烈な水弾が飛んできて、真人を直撃した。

『その筋肉、この島では海水浴場以外で服を脱ぐことは禁止されている。速やかに服を着ろ』

そして、鉄塔から聴き慣れた声を台詞が聞こえてきた。

「あの声、のみきか？」

リトルバスターズの皆は揃って鉄塔を見る。

「まさか、あそこから撃ってきたのか？」

「裸狩りだ。真人、早く服を着ろ！」

俺は思わずそう叫んでいた。

「お、おう！ 何が何だかさっぱり分からねえが、わかったぜ！」

真人はのみきの第二次攻撃を避けながら、慌てて服を着る。

……あのスクワットの後に、あれだけの動きができるのか。さすがとしか言いようがなかった。

「くそー、ずぶ濡れだぜ」

のみきの攻撃が止んだ後、真人は苦々しい顔をしていた。服が中途半端に濡れてしまって、気持ちが悪いらさう。

「むしろ、真人も水に濡れて涼しくなつたらう。良かったじゃないか」

「なんだと？ 水に濡れた筋肉は太陽の光が反射して眩しいから、さっさと服を着て日陰で大人しくしてろとも言いたげだなっ!？」

なんだろう。ものすごい言いがかりだった。

「まあ、真人もそう怒らないですよ。水も滴る筋肉って格好いいよね」
「ありがとう」

理樹が間に入って取り繕っていた。この三人、いつもこんな感じなんだろうか。

「……ところで、謙吾もそのジャンパーは暑いだろう。脱いだらどうだ？」

汗だくでもなお、ジャンパーを着たまままの謙吾を見かねたのか、天善がそう提案していた。

「……なんだと？」

しかし、天善の言葉を聞いた途端、謙吾の言葉に怒気が混じった。

あ。そういえば、謙吾はあのジャンパーに人並みならぬ思い入れがあるんだっけ。

理樹曰く、一晩徹夜で作ったとか言っていたし。

「悪いが、これを脱ぐ気はない。どうしても脱がせたければ、俺を負かしてみろ」

「ほう。男同士の勝負というわけか。良いだろう」

「いやいやいや、どうしてそう言う流れになるのさっ」

二人のやり取りを見ていた理樹が、たまらず止めに入る。

「安心しろ理樹。さすがに竹刀を使わないさ。天善、お前の得意な分野でかかってこい」

「言ったな。ならば、卓球だ！」

「なに、卓球だと？」

「ああ、山の中に俺たちの秘密基地がある。そこで卓球勝負だ」
「いいだろう」

直後、二人は山の方へ向けて走り去ってしまった。

「うわあ……謙吾もすぐ熱くなっちゃうからなあ」

「馬鹿だねえ、あいつら」

「あの二人も、真人にだけは言われたくないと思うよ……」

理樹はため息交じりにそう言う。

できたら、天善も15時までには戻ってきてほしいんだけど。野球の練習があるし。

「それじゃあ、俺たちはそろそろ別の場所に行くよ」

「うん。それじゃあね」

「羽依里、夏海、またな」

「はい！ またです！」

港に残っていた理樹と鈴、そして真人に手を振って、俺と夏海ちゃんは港を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

バイクに乗った後、腕時計を見ると、お昼までもう少し時間がある。悩んだ末、俺たちは駄菓子屋へ向かうことにした。

「くーださいな」

「あ、いらつしやーい」

「あら、鷹原君」

夏海ちゃんと二人で店に入ると、そこには店番の空門姉妹の他に、佳奈多が居た。

よくわからないけど、ベンチに座ってパビコを食べていた。藍も奥の方で同じものを食べているし、二人で分けたんだろうか。藍も奥

「ちようど良かったわ。二人に聞きたいことがあるのだけど」

「えつと、なんでしよう」

確か、葉留佳の双子の姉だっけ。すごい威圧感なんだけど。つい、敬語になってしまう。

「……同い年なんだから、別にかしこまらないで。普通で良いわよ」

「え？ ああ、うん……」

双子の姉って、皆こんな性格なんだろうか。なんというか、怖い。……羽依里さん、何か言いたげですね？」

「いや、なんでもないよ」

考えが顔に出てたんだろうか。駄菓子屋の奥にいた藍から睨まれた。

「……というか藍、パビコをくわえたまま凄まないで。」

「そ、それで佳奈多、どうしたの？」

「二人とも、葉留佳を見なかった?」

「あ、灯台に居ましたよ」

その質問には、夏海ちゃんが答える。

「灯台? ここからだ、歩くと遠いの?」

「うん。歩いて行く場所じゃないと思う」

「そう……」

「もしかして、佳奈多は灯台に行くの?」

駄菓子子の補充をしながら、蒼がそう質問する。

「行かないわ。葉留佳のことだし、きつとそのうち、このお店に来るんじゃない?」

なんだろう、双子だし、やっぱり以心伝心というものがあるんだろうか。

「そうねえ。大方、昨日補充したビー玉を人にあげちゃって、それを補充しに来るとかね。ありえそうじゃない?」

ありえそう。というか、実際に絨にビー玉をあげていたし。見ていたんじゃないかってくらい、具体的だった。

「くーださーいなー」

そんな話をしていたら、本当に葉留佳が来た。

「やはー。あおちん、新しいビー玉……うわあぁー!」

店に入ってくるなり佳奈多の姿を見つけ、葉留佳は派手にひっくり返った。

「おねーちゃん、どうしてここに!」

「葉留佳が来ると思って、見張っていたのよ」

「そ、それってもしかして、ストーカー!?! はるちんのストーカー!?!」

駄菓子屋の中が急に騒がしくなった。声の大きさは、下手すると蒼以上かも。

「ところで葉留佳、お前、少し前まで灯台に居なかったか?」

歩いて戻ってきたにしては早すぎる気もしたので、ちよつと聞いてみる。

「うん。いたよ」

「もしかして、走って戻ってきたんですか?」

同じく気になっていたのか、夏海ちゃんがそう続ける。

「ちつちつち。なつちゃん、それは少し違うかな」

「え、違うんですか？」

「うん。恭介くんのパリングルス自転車借りてきたから」

なるほど、それなら納得だ。良一の二号機は壊れてしまったけど、恭介の三号機があつたはずだし。

「ところで、その自転車はどこですか？」

夏海ちゃんが興味津々だった。以前は危ないと言って止められたけど、やつぱり気になってるんだろうか。

「えーっと、実はですネ」

なんかもじもじしている。やがて一度店の外に出て、俺たちの視界から消えた。

「見て驚けー！」

そして、半壊したパリングルス自転車を引きずって戻ってきた。

「うわあ、なんでこんなボロボロに？」

「やはは。最初はいい感じに走ってたんだけど、住宅地に入ったくらいでワイリーでも決めようとしたら、いきなりハンドルが折れちゃつて」

「ええー……」

パリングルスに無茶させるなあ。

「そのまま派手に転んで、最新技術の粹を集めたパリングルス自転車は、見るも無残な姿に」

「それは、何というか……」

なんだかんだで原材料は紙だし。色々と限界だったのかもしれない。

「でもそれ以上に、転んだ場所が問題だったの」

「え、場所？」

「私さつき言ったよね。住宅地でこけたって」

あ、そう言えばそんなこと言っていたような。

「思わず叫び声をあげながら転倒する私！　そして集まる、通行人たちの、視線、しせん、シセンー！」

「うわ……それは恥ずかしい」

「うん。穴があつたら入りたくなるくらい」

「ウィリーしようとしてこけたんでしょ？ 自業自得じゃない」

そんな葉留佳の英雄譚を、佳奈多はバツサリと切り捨てていた。

「おねーちゃんヒドい……可愛い妹が全身傷だらけになつたっていうのに」

言われてみれば、葉留佳はすり傷だらけだった。

「というわけであおちん、ここに傷薬って売ってない？」

「……ここ、駄菓子屋なんだけど」

蒼がため息交じりにそう言う。

「確か、座敷奥の棚に置き薬がありますよ。特別に分けてあげましよう」

いや藍、いかにもな感じで言ってるけど、その薬っておねーちゃん
のだから。

「はい、どうぞ」

そう思っている間に、藍はさつさと座敷へと上がり、傷薬を持って戻ってきた。

「あいちん、ありがとう」

「藍、代金払うわよ？」

薬を受け取って、早速塗り始める葉留佳に対し、代わりに代金を払おうとする辺り、佳奈多は律儀だった。

「結構ですよ。実は使用期限切れてますので」

「ええええー！ー！」

また葉留佳がひっくり返った。恭介曰く、騒がし乙女とはよく言つたもんだ。本当に騒がしい。

「ほら葉留佳。さつさと起きて、薬を貸してみなさい。首の後ろとか、塗りにくいでしょ」

「ぎゃー！ー！ー！ 染みるうー！ー！ー！」

「そういえば、置き薬の中に湿布もありましたよ。蒼ちゃん、今日は腕が痛いつて言っていましたし、貼ってあげます」

「ありがとう」

そういえば蒼は昨日、かき氷20杯も作ったんだっけ。やっぱり筋肉痛になつたらしい。

「よいしょ」

「ひええ、冷たっ……」

気温と湿布との温度差があるからだろうか、蒼はものすごく冷たそうにしていた。

それにしても、双子が二組もいると、なんだか目がおかしくなってくる。

「蒼ちゃん、もう一枚貼つてあげます。動かないでくださいね」

「い、一枚で良いわよー」

「駄目です。お昼から野球の練習もあるんですから。ペたつと」

「あ、ひゃ……!」

ちよつと蒼、声がいやらしいんだけど。

「鷹原君、なんで顔を赤くしているの」

「本当ですね。何か良からぬことでも考えてるんじゃないですか?」

「いや、そんなこと考えてないから」

だから、二人揃つて睨まないで。本当に怖いから。

「だったら何を考えているの?」

「いやその……やっぱり双子は仲が良いんだなって思つてさ」

「当たり前じゃない」

「当たり前ですよ」

双子たちの声がほとんど重なつた。ごめん。もう許してください。

「やはは。でも時々、過保護すぎることもありますけどネ。買うジュースまでチェックされるし」

「それは葉留佳が変なジュース買ってきたりするからでしょ。何よ。

レッドポーシヨンって」

「あたしは気を抜いたら、普通にお風呂覗かれるわー」

「妹の成長を見守るのは、おねーちゃんとして当然の務めですから」

「だからって、観察日記まで書くのはやめて! アサガオじゃないんだから!」

うん。やっぱり仲が良かった。

その後、目的のビー玉を購入したらしい葉留佳が佳奈多と一緒に帰るといっているので、俺たちも帰宅することにした。

「夏海ちゃん、そろそろ俺たちもお昼ご飯食べに帰ろうか」

「はい！ それでは皆さん、またです！」

「二人とも、安全運転で帰りなさいね」

「羽依里くん、なつちゃん、またねー」

「またお昼からですね」

「またねー」

笑顔で手を振ってくれる双子たちに手を振り返しながら、俺たちは駄菓子屋を後にした。

第二十九話・完

第三十話 8月19日（後編）

駄菓子屋から加藤家へと帰宅すると、急に疲れが足に來た。

なんだろう、移動はバイクだったはずなのに。港での四天王スクワットが効いてるんだろうか。

「羽依里さん、お昼はどのカップうどんにしますか？」

居間であぐらをかいて、適当に足の筋肉を揉んでいると、夏海ちゃんが台所から色々な種類のカップうどんが入った袋を持ってきた。変わらず元気だね。

「じゃあ、今日はこれにしようかな」

なんとなくスタミナをつけたくて、今日はとろろうどんをチョイスした。どうやったらカップでとろろうどんができるのかわからないけど。最近のフリーズドライ技術ってすごい。

「夏海ちゃん、灯籠作りは13時からだから、お昼ご飯食べたら出発しよう」

「わかりました！」

ちなみに、とろろうどんは一つしかなかったので、夏海ちゃんはキムチうどん（甘辛）を食べていた。お互いにスタミナをつけて、午後からも頑張らないとね。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

昼食後、俺たちは灯籠作りのため、小学校へ向かっていた。

「そういえば、どんなお祭りなんですか？」

「え？」

その道すがら、夏海ちゃんからそんな質問をされた。

「この島のお祭りですよ。羽依里さん、去年も見たんですよね？」

「いや、俺は去年は蔵の虫になっていたから」

「はい？ なんの虫ですか？」

「去年の夏休みは、ずっと蔵の整理をしていたんだ」

「じゃあ、お祭り見てないんですか？」

「うん」

「えー、もったいないですよ。せつかくのお祭りなのに」

「じゃあ、今年は皆で見ようかな」

「はい！ そうしましょう！」

明後日なら、まだリトルバスターズの皆も居るだろうし、賑やかに
なりそうだ。

そんな話をしていると、小学校に到着した。

「ついた。ここだよ」

「え、ここなんですか？」

目の前には小学校の正門が広がっている。普段は柵が閉まってる
けど、今日は灯籠作りがあるからか、門は開け放たれていた。

「ここ……ですか……」

「うん。敷地を抜けた先のプールサイドで……って、夏海ちゃん？」

急に夏海ちゃんの元気がなくなつた気がした。思わず顔を見ると、
表情が明らかに曇っている。

「……あ」

しまった。夏海ちゃんは学校にトラウマがあつたんだ。

最近は小学校の前を通るくらいじゃなんともないみたいだけど、中
に入るとなると話は別だと思う。なんで気が付かなかつたんだろう。
俺もかつて、水に入るのすら駄目だった時期がある。夏海ちゃんの
気持ちは痛いほどわかるはずなのに。

「夏海ちゃんごめん。気がつかかなかつたよ」

「い、いえ。羽依里さんは悪くないです……」

そう言いながらも夏海ちゃんはすごい汗をかいてる。心なしか、体
が震えてる気もするし。

これは、灯籠作りは諦めて帰った方が良いかもしれない。そう思っ

た時……。

「やつほー、なっちゃん！」

「夏海ちゃんも灯籠作りに来たのねー？」

声がして振り返ると、そこには鴟と蒼、そして紬としろはがいた。この四人も、灯籠作りに来たんだろうか。

「あのさ、夏海ちゃんなんだけど……」

確か、夏海ちゃんのトラウマについては島の皆に伝えてなかったはずだ。この期に及んで、なんて説明しよう。

「夏海ちゃん、大丈夫だよ」

俺が言いよんでいると、しろはたちは四人でそつと夏海ちゃんを囲む。

「夏海ちゃん。灯籠作り、やりたいよね？」

そして、しろはが夏海ちゃんの正面にしゃがみ込んで、ゆつくりと優しく問いかける。

「や、やりたい、です……」

夏海ちゃんは、泳がせていた視線を前に戻し、しつかりとしろはを見ていた。

「うん。それじゃ、行こう」

その返事を聞いて、しろはは夏海ちゃんの手を取る。

「決まりねー」

「なっちゃん。大丈夫だよー」

「ナツミさん、わたしたちがついてますー」

そのまま夏海ちゃんを守るようにしながら、一緒に学校の敷地の中へ入っていった。

「ほら、羽依里も行くよ」

呆気にとられていると、しろはからそう呼ばれた。俺も慌てて後を追う。

ゆつくりと学校の敷地内を通って、プールサイドへ到着した。

そこでは既に沢山の子供たちが集まっていて、学校の先生と思われ

る人がお祭りの謂れや、灯笼の作り方を説明していた。

「に、賑やかですね」

皆の協力のおかげか、プールサイドに着いた頃には、夏海ちゃんもだいぶ落ち着いていた。

俺たちは子供たちの邪魔にならないように、一番後ろに並んで座った。子供の授業参観にやってきた親が見る景色って、こんな感じなんだろうか。

「はい、それではさっそく灯笼を作ってみましょう！」

説明が終わると、先生から材料の木材や和紙、接着用のノリが配られて、皆で灯笼を作り始めた。

「よーし、やるぞー！」

「オレが一番だー！」

島の子供たちは毎年のことで慣れているのか、競争するように組み立てていく。とても上手だった。

鳴やしろはもサクサクと組み立てている。鳴はもともと手先が器用だし、しろはも昔から作っているのか、慣れている様子だった。

「むぎぎぎぎぎ、思ったより難しいです」

「あ、ここはこうなんじゃないですか？」

一方、紬と夏海ちゃんは初めてながらも、協力しながら灯笼を組み立てていた。少しずつだけど、確実に完成に近づいている気がする。

「あ、あれ？ この骨組み、短いんじゃない？」

「蒼、それは下じゃなくて、右の骨組みになるんじゃないか？」

「……あ、ホントだ」

そして思っていた通り、蒼が四苦八苦しているようだった。

「お前、子供の中から参加してたんじゃないのか？」

「う、うるさいわね。昔はなんだかんだで藍に手伝ってもらってて

……って、そう言う羽依里はどーなのよ？」

「見ての通り、もう完成したぞ。余裕だ」

……ちよつと傾いてる気がするけど。

「羽依里の灯籠、このまま海に浮かべたら一番に沈むと思うよ?」
「うぐつ」

隣のしろはからツツコまれた。だって、思ったより難しかったんだもん。

「羽依里、相変わらず下手だね」

「そうかな。初めてにしては良くできた方だと思っただけだ」

「もうちょっとしつかり組まないか。一度分解するよ?」

「お、おう……」

しろはが慣れた手つきで灯籠を分解していく。俺はその様子を、ただただ眺めていた。

「あ。そうだ……しろは」

その時しろはの耳元で、夏海ちゃんのトラウマについて、こつそりと打ち明けた。

途中まで話を聞いたしろはは、静かに微笑みながら、口元に指を立てた。

「……知ってるよ」

「え、知ってるの?」

「うん。夏海ちゃんの友達は、羽依里だけじゃないんだよ」

「あ……」

なるほど。俺が鷗や紬たちと外出している間にも、夏海ちゃんは島の皆と過ごしていたわけだし。その時に、トラウマについても皆に話したんだろう。

「えつと……しろは、ありがとうな」

「気にしなくていいよ。私たちも夏海ちゃんが好きだからね」

しろははそう言って微笑んでくれる。すごく安心できる笑顔だった。

「それじゃ、灯籠もちやちやつと作っちゃおうね」

「うん。よろしく頼むよ」

周囲を見てみると、ほとんどの皆が灯籠を完成させていた。ここは、しろはに任せよう。

手持ち無沙汰になってしまった俺は、何の気なしに金網フェンスの

向こうのグラウンドに目をやる。

「……あれ？」

「よし、バッティングと守備練習スタートだ！」

そこでは恭介の指示のもと、リトルバスターズのメンバーが野球の練習をしていた。

「いくぞっ……しねっ！」

「ふんっ！」

鈴が投げた剛速球を、真人が容易く打ち返していた。というか、めちゃくちゃ飛ばしてるんだけど。やっぱりあの筋肉、伊達じゃないらしい。

「ジャンプ！」

その後、理樹が打ったボールは内野の守備をやっていた葉留佳が大ジャンプをしてキャッチしていた。すごい運動能力なんだけど。

あんな人たちと勝負するのか……正直、勝てるんだろうか。

「……はい。完成したよ」

「え、もう?！」

俺が野球の練習を見ている間に、しろはは灯籠を完成させてしまった。本当にあっという間だった。

「それでは皆さん、組み立てが終わったら後ろに集めますよ！ お祭りの当日まで、しっかりとノリを乾かしましょうー！」

先生からそう指示されて灯籠を一ヶ所に集めた後、その場はお開きとなった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

灯籠作りが終わった後、俺たちはそのままグラウンドに出る。

練習を始める前に、道具の確認をする。先にリトルバスターズの皆が使ったはずだけど、綺麗に整理整頓されていた。

グラウンドもちゃんとトンボがけされていたし、もしかしてこれ、草取りまでしてくれてるのかな。抜かりがなかった。

やがて約束した時間になると、良一や天善をはじめとした、勧誘したメンバー全員がやってきてくれた。

「よし、それじゃ集まってくれ」

各自で道具を手にした後、俺を中心にして輪になってもらう。

ちなみに、練習場所のグラウンドは小学校の敷地内だけど、島の皆が揃っていることもあってか、夏海ちゃんの様子はいつもと変わらなかった。

「そういうえば、練習を始める前に、皆に聞いておきたいことがあるんだ」

「え、どうしたの？」

「この中で、野球経験がある人っている？」

……ダメもとで聞いてみるけど、誰も手を挙げない。

「ルールを知っている程度だな。俺は卓球部だからな」

うん。悪いけど天善には最初から期待していない。

「野球なー。遊びでやったことはあるけど、バッターと内野しかやったことないぜ。なにせ同級生が少ないからなー」

ローカルルールで、外野まで飛んだらホームランになる感じだったんだろうか。

でも、良一の言うことはもっともだった。島だと子供も少ないし、野球をやる人数をそろえるだけで大変だろう。まして、ちゃんとした試合なんて、もつての他だ。

「私や蒼ちゃんも、きちんと野球をやったことはないです。時々、男の子たちに混ざって一緒に遊んでいたぐらいですね」

「そうねー。藍とか、その辺の男の子より足速かったもんねー」

俺は皆が子供の頃を知らないけれど、藍なら『遅いですよ、良一ちゃん』とか言いながら、先の塁を走っていた良一を蹴り倒して、追い抜いて行きそうだと思った。

「……なあ羽依里、まさかとは思いますが、変な想像してるんじゃないよな

？」

「し、してない。してないぞ」

良一が哀愁に満ちた目で俺を見ていた。こいつ、読心術でも使えるのか？

「そう言う鷹原は野球をやったことあるのか？」

「いや、ないけど」

のみきに聞かれたので、正直にそう答えておいた。俺は子供の時から、ずっと水泳一筋だったし。

「うーん。やっぱりいいいな……」

俺が諦めかけた、その時。

おずおずと、小さな手が上がった。

「あれ、夏海ちゃん？」

「あの、私、野球してました」

「え、してたの？」

「はい。リトルリーグで、その、春までやってました」

「そうだったんだ」

知らなかった。高校野球が好きだったり、運動神経が良いとは思っていたけど。思わぬところに経験者がいた。

「ところで、ポジションは？」

「ピッチャーです」

「おお、ピッチャー」

他のポジションと違って、一朝一夕でやれるようになるポジションじゃない。これは大きいかも。

「でもなっちゃん、あんな人達を相手に投げられる？」

「あ、あう……」

鷗の問いかけに対し、言葉を詰まらせる。きっと真人とか謙吾をイメージしたに違いない。

「が、頑張ってみます。ちよつとブランクありますけど」

夏海ちゃんはグローブとボールを手に、気合いを入れていた。持ち方も様になっているし、経験者というのは本当だろう。

「それじゃあ皆、まずはキャッチボールから始めよう！」

その後は、適当に二人組を作ってもらい、練習を始めることにした。

「うーん」

集まったのが11人ということもあって、ちょうど溢れた俺は皆が練習する様子を眺めていた。

経験者という夏海ちゃんは元より、良一や天善にのみき、空門姉妹はキャッチボールをそつなくこなしていた。そして予想外に、静久が上手い。

問題はそれ以外の3人だった。

「えいー！」

「いてっ!？」

「あ、良一、ごめん……」

しろはの投げたボールは、相方ののみき……ではなく、その隣にいた良一の頭を直撃していた。

「むむむむむ」

しろはは悔しそうな顔をしながら、戻ってきたボールをじっと見つめている。しろは、悪いのはボールじゃないと思う。

「とりやー……!」

鷗は元気は良いのだけど、ボールが明後日の方向に飛んでいってしまっていた。なんとというか、力みすぎだった。

「鷗さん、もっと力を抜いて投げればいいんです！　こんな感じですよ！」

夏海ちゃんが必死にレクチャーしていたけど、なかなかボールの軌道が定まらない。鷗、味方に揺れる魔球投げてどうするんだ。

「むぎいー……!」

その隣では、紬が静久とキャッチボールをしていた。

紬も力任せに投げている感じで、大暴投だった。あれを続けている

と、肩を傷めないか心配になる。

「紬、こうよ。クーパー靱帯を軽くゆする程度で良いの」

そんな紬には、静久が優しくおっぱいで教えていた。伝わるかはわからないけど。

「……うん。次はバッティング練習をしよう」

ピッチングの問題はいったん棚上げにして、次に皆のバッティングセンスを見てみることにした。

夏海ちゃんに緩めのボールを投げてもらいながら、皆で代わる代わる打席に立ってもらおう。

ちなみに、誰もやる人がいないということで、キャッチャーは俺がやることになった。

「うーん……」

結論から言うと、ここも良一や天善やのみき、空門姉妹は文句なしで上手かった。全く、島育ちの身体能力の高さには驚かされる。

……俺？俺はまあ、普通だと思う。一応、運動部だったし。

「うりやー！ー！ー！　てりやー！ー！ー！」

それにしても、鷗が予想以上にバッティングが上手で驚いた。やってこないって言ってたけど、天性のものがあるんだろうか。飛ばしまくっていた。

でも、バッティングフォームもタイミングの取り方も独特だった。カモメ打法とでも名付けようか。

そして、このバッティング練習も、しろはと紬は苦手みたいだった。

「むっぎゅっぎゅ……全然当たりません……」

紬は目をつぶってバットを振っていた。振った勢いで身体がくるくると回転してしまっているし、あれでは当たらないと思う。

「紬、しっかり目を開けて、おっぱいを意識して腕を振るのよ！　おっぱい打法よー！」

男の俺にはよくわからないから、紬の指導は静久に任せよう。静久はバッティングもコンスタントにこなしているし、きつとなんとかなると思う。

そして、しろははバッティングも苦手みたいだった。

「むむむむむむむ」

だからしろは、悪いのはバットじゃないと思う。

なんて言うんだろう。バッティングフォームの基本ができてない。

「えつとしろは、腕の振り方が変なんじゃないか？」

豪快に空振ったしろはを見ていられず、キャッチャーマスクを外して声をかける。

「え、どうやるの?」

「えつと、腕の位置はこんな感じで……」

「ちよ、ちよつと、羽依里」

「あ、ごめん……」

思わず、しろはを背後から抱きしめるような形になっていた。

「おいお前たち、どきくきに紛れて何をやっているんだ?」

その様子に気づいたのか、のみきが鬼の形相でハイドログラディエーター改を構えていた。

「いや、これは不可抗力で」

「そ、そう。そうなの。フカコーリヨクで」

俺としろはは揃って両手をあげて、身の潔白を証明する。

「お二人とも、マジメに練習しないとダメですよ!」

「そうだよ! 練習しないと、レギュラーになれないよ!」

紬と鷗にも怒られてしまった。うう、わざとじゃないのに。

……それにしてもどうしよう。ボールの投げ方に関しては、ある程度夏海ちゃんから教えてもらえそうだけど、打ち方に関しては専門外だろうし。

ここはいつそ、恭介に相談した方がいいだろうか。今日明日中にはポジションも決めなくちゃいけないし。これは予想以上に大変かも

……。

「あ、こんなところで野球の練習やってますよ。秋生さんっ」

そんなことを考えていると、グラウンドの隅の方から声が聞こえた。

「小学生……じゃねえな。なんで高校生くらいの連中が野球やってんだ？ 甲子園ももう終わったってのによ」

「ここ、小学校だよな」

「はい、朋也くん。どう見ても小学校です」

声のする方を見てみると、数人の男女が俺たちの様子を見ていた。おそらく旅行者だろう。

別に野球の練習なんて珍しくもないだろうに……なんて思っていると、その中の一人に見覚えがあった。

「あれ？ あんたはもしかして、金魚すくいのオッサン!？」

「そう言うお前は、あの時のヘナチン小僧!？」

あの茶髪にサングラス。間違いなく、先日港で金魚すくいの出店をしていたオッサンだった。

「悪い皆、ちよつと集まってくれ!」

俺たちは一旦練習を取りやめて、その人たちの周りに集まる。

なりゆきで、俺が最初に自己紹介をして、他の皆がそれに続くれる。

「俺様は古河秋生だ。よろしくな」

俺たちが続いて、オッサンも自己紹介してくれた。

それによると、このオッサン……古河秋生さんは、家族旅行がてら、この島にパンを売りに来ているらしい。

「今回は金魚じゃなくて、パンなんだな」

「そうだ。俺様は元々パン屋なんだよ。この前の金魚すくい屋は、旅行の下見を兼ねた飯の姿ってわけだ」

下見は良いけど、こんなヤンキーみたいな人が営むパン屋。あまり

近寄りたくないんだけど。

「じゃあ今度は、俺様の連れを紹介する番だな」

オツサンの隣には、二人の女性と一人の男性、それと小さな女の子がいた。

「紹介するぜ。こつちがマイワイフの早苗、こつちがマイドーターの渚だ」

秋生さんの隣にるのが、奥さんの早苗さん。そして、その隣が娘の渚さんらしい。二人とも、すごい美人だった。

「古河早苗です。皆さん、よろしくお願いしますねっ」

「岡崎渚です。よろしくお願いしますっ」

「で、こつちがマイドーターオブドーターの汐だ。汐、あいさつしな」

「こんにちわ」

えっと、マイドーターオブ……娘の娘って事は、孫になるのか。

「え、孫!?!」

思わず、声が出てしまっていた。うそだろ。めちやくちや若々しいのに、おじーさんなのか。このオツサン。

「羽依里……いや、ヘナチン小僧。何か文句でもあるのか?」

「いや、文句なんてないけど」

一度名前を呼びかけて、言い直された。なんか傷つく。

「ほら小僧。テメエも挨拶しろよ」

その次に、オツサンが青い髪の青年に話を振る。どうも、タイミングを逃したみたいだった。

「……岡崎朋也だ。よろしく頼む」

改めて顔を見てみると、すごいイケメンだった。どこかオツサンと雰囲気似てるような気がしないでもないけど。

苗字が同じだし、どうやら朋也さんと渚さんが夫婦で、汐ちゃんがその娘さんらしい。

「でもお義父さん、せめて渚と汐の紹介は俺にさせてくださいよ」

「悪いな、息子よ」

「うわあーーーーー!」

「うおおおーーーーー!」

なんだろう。よくわからないけど、急に男性二人が地面を転がって、悶え苦しみだした。

「いつものことですから、気にしないでくださいねっ」

「うん。いつものこと」

呆気にとられる俺たちを尻目に、早苗さんと汐ちゃんがそう言っただけで笑っていた。

「お父さんと朋也くんがお見苦しい姿をお見せしてしまって、すみませんっ」

一方で、渚さんはペコペコと頭を下げている。なんだろうこの状況。

「で、てめえらはなんで野球やってんだ？」

その後、オッサンはタバコに火をつけながら、何事もなかったかのように話を進める。

「えっと、実は……」

俺はこれも何かの縁かと思い、リトルバスターズと野球をやることになった経緯を説明した。

「……なるほどな。それにしても、試合が出来る状況じゃねえ気もするんだが」

俺たちの練習風景を見ていたんだろうか。何かを思い出するように、オッサンはそう言っていた。

「それはその、今日チームを結成したばかりだからさ」

俺は正直に答えていた。だって、本当のことだし。

「それで、三日後には試合すんのか？ さすがに厳しいだろ？」

「そ、それは……」

俺たちは揃って黙り込んでしまう。

確かに人数だけは揃ったけど、所詮は素人の集まりだし。

「……秋生さん、ここで会ったのも何かの縁ですよ。教えてあげてはどうですかっ？」

「そうです。お父さん、ここは腕の見せ所ですっ」

早苗さんと渚さんが、オッサンにそう提案していた。

「え、どういうことですか？」

「秋生さんはこう見えて、近所の子供たちに野球を教えているんです。きつと皆さんの力になってくれますよっ」

……つまり、この人は少年野球の指導経験があるのか？ 正直、信じられない。

「……確かに、俺様は野球の指導経験がある。だが、いくら早苗や渚の頼みでも、タダというわけにはいかねえな」

「え。もしかして、お金を取るの？」

「当然だ。俺様の指導料は安くはねえぞ。そうだな。試合までの数日間の指導でも、軽く見積もって……」

その時、渚さんが汐ちゃんをオッサンの目の前に抱き上げる。

「ほら、しおちゃんも一緒にお願いしましょうっ」

「あつきー、おねがい」

「……軽く見積もって10万円と言いたいところだが、今回は特別サービスだ。タダで教えてやる」

汐ちゃんに頼まれた瞬間、見事な変わりようだった。

「孫に頼まれると、嫌と言えねえ。おじいちゃんの性だよな」

「そ、そういう人ばかりじゃないと思うけど」

ニコニコ顔になってるオッサンに対し、しろはがそう返していた。しろはも孫だし、何か実体験があるのだろうか。

「でもオッサン、本当にいいのか？」

年上なのは分かったんだけど、なぜかオッサンに対して敬語を使う気になれなかった。何というか、あの人の雰囲気がそうさせるんだろうか。心は少年、みたいなの。

「一度言ったことを変えるつもりはねえよ。俺様が手取り足取り教えてやる。泥船に乗ったつもりでいな」

ちよつと待って。泥船だと、すぐに沈んでしまいそうなんだけど。

「ただし練習の間、俺様のことは監督か、秋生様と呼べっ！」

「よろしく、監督」

「秋生監督、よろしくお願ひしますー！」

「カントクさん、よろしくお願いします！」

「監督さん、よろしくねー」

……秋生様とは、誰も呼ばなかった。

でも、思わぬところで指導者を見つけることができた。これは本当に助かった。

そしてオッサンの指導のもと、改めて練習が始まった。

「よし、テメエら、まずは千本ノックから行くぞー」

俺たちは適当にポジションについて、オッサンのノックを受ける。

「オラオラ、しっかり取れよー！」

でも、せめて100本くらいにしておいてもらいたい。真面目に千本もやってたら、日が暮れてしまう。

「お、卓球野郎はなかなか良い反射神経してるじゃねえか！」

「当然だ。トレーニングの成果だ！」

「後は、もうちよつと集中力が続きやいいんだがな！」

「な、しまったっ……」

言った直後、天善はボールをトンネルしていた。確かに、天善は集中力が足りないような気がする。

「そっちの双子は、なかなか筋が良いな！」

「当然です。これくらいなら朝飯前ですよ」

「もうすぐ夕飯だけだな！」

「う、うるさいですね。言葉のあやですから！」

空門姉妹は安定した動きでオッサンの打球を捕球していた。あのノックについていくなんて、さすが島育ちは違うな……。

でも、二人揃ってスカートなのはやめてほしい。どうしてもその、危ないし。

「羽依里さん。ご期待に沿えず残念ですが、私も蒼ちゃんも、下はスパッツはいてますから」

藍は勝ち誇った顔をしていた。べ、別に何も期待してないし。

「……なあお前、足でも悪いのか？」

「えっ？」

何度目かの打球が鷗の所に飛んでいったとき、オッサンがそう問う。

「えっとそのー、実は足をくじいちゃって」

「……そうか。まあ無理はすんなよ」

「はい！」

なんだろう。心なしか、オッサンの口調が優しくなった気がする。もしかして、何か気がついたんだろうか。

「……カモメ嬢の次はつむぎゆだ！ 行くぞ！」

内野にいた紬に向け、ボテボテのゴロが転がっていった。

「むぎゆ!？」

紬はへっぴり腰だった。結果うまく捕球できず、グローブに当たってボールの方向が変わる。

「むぎゆぎゆぎゆ……」

そのままボールを見失ったらしく、ツインテールをデンデン太鼓みたいになりながらボールを探していた。

「つむぎゆはすっかりボールを見ろ！ あと、怖がるんじやねえ！」

ボールは友達だ！」

なんか競技が違う気もするけど、紬に対してはかなり優しくノックをしていた。普段は小学生に教えてるって言っていたし、初心者への指導方法も心得ているみたいだ。

言葉は乱暴だけど、その指導は全てが的を得ていた。なんだかんだで、この人は教えるのが上手い。

「よし、次はバッティングフォームを見てやるぜ！」

ノックの後はオッサンがピッチャーを務め、俺たちは順番にバッテリーボックスに立つ。打席に立つ人以外は適当に守備位置について、

守備練習も兼ねる。

ちなみに、キャッチャー役に抜擢されたのは、やはり俺だった。

「時速160キロのストレートを受けてみるおぉおー！」

次の瞬間、目にも止まらぬ剛速球が俺のミットに納まる。

「そんなボール、打てるかよ!?!」

良一の言うとおりだ。ボールを受けた俺の手も痺れるくらいの衝撃だ。

「次は、落差1メートルのフォークを受けてみるおぉおー！」

続くボールは途中で思いつき軌道が変わった。

「ちよつとー！ー！ 打てるわけないでしょー！?!」

蒼の言うとおりだ。ボールを受けた俺も、ほとんど地面にボールを押しさえつけるようにして捕球していた。

「というかオッサン、プロに行け。」

「ん……お前、金属バットきついんじゃないかね?」

「えっ?」

オッサンがそう声をかけたのは、蒼の次にバッターボックスに立った夏海ちゃんだった。

「はい……実は、金属バットは使ったことが無くて」

確かに、なんとか金属バットを持っている感じだ。明らかに安定していない。

「お前、小学生だろ。それならカーボンバットが使えるな。明日までに調達してきてやるよ」

「あ、ありがとうございます」

「オッサン、夏海ちゃんはリトルリーグで、ピッチャーの経験があるんだ」

その様子を見て、俺はオッサンにそう伝える。

「そうか。なら、今日のところはピッチャーに集中しろ。ほら、交代だ」

そこでオッサンは夏海ちゃんにボールとグローブを投げて渡す。

「わかりました!」

そしてオツサンに代わって、夏海ちゃんがマウンドに立つ。

「まずはバッターを立たせずに、ヘナチン小僧に向けて何球か投げてみな。持ち球があるんなら、それを織り交ぜて構わねえ」

「はい！ それじゃあ羽依里さん、行きますよ！」

その後、夏海ちゃんからの投球を受ける。変にブレるボールとかあったので、何度か取り損ねてしまった。

ちなみに、オツサンは少し離れたところから、夏海ちゃんの投球を見ていた。

「……なるほどな。持ち球はストレートと、フォークと、ナツクルか」

「そ、そうです！」

オツサンは即座に夏海ちゃんの球種を言い当てていた。やっぱりこの人、凄い人なんじゃないだろうか。

「だが、まだ球筋が定まってねえな……よし夏海、今日そのまま投げ続けて、肩を作りな」

「はい！」

「ヘナチン小僧も、しっかり捕球練習をしておけよ」

オツサンはそう言うと、のみきをバッターボックスに立たせる。

「……えい！」

夏海ちゃんが投げたボールを、のみきが打つ。ボールは内野を転がり、三塁を守っていた蒼が捕球する。

「お、のみき。お前は小学生の割にボールをミートするのが上手いじゃねえか」

「えっへん。動体視力には自信がある……って、私は小学生じゃないぞ!？」

のみきは小学生と間違えられていた。確かに身長は夏海ちゃんときほど変わらないし、仕方ないのかもしれない。

次にバッターボックスに立ったのは静久だった。

「あー、あんたはその、胸にサラシでも巻いたらいいんじゃないか?」
オツサンは何とも言いにくそうだった。確かに静久、あの胸だと、

すごく打ちにくそうなんだけど。

「た、確かにすごいな……」

「……朋也くん、どこを見てるんですか？」

「……渚、お前のその顔、ものすごく怖いからやめてくれ」

汐ちゃんを膝の上に乗せた渚さんに、朋也さんが睨まれていた。いやまあ、健全な男子なら一度は見入っちゃうよな。うん。

静久に続いて打席に立ったのは、紬だったけど……。

「むぎぎ……」

「だから、つむぎゆはもつとしっかりボールを見ろ！ 足を踏ん張れ！」

オッサンの指導力をもつてしても、紬のバッティングフォームの改善はなかなか難しそうだった。

「やっぱり、紬はおっぱい打法を極めるしかなさそうね……紬、灯台にいる間は特訓するわよ！」

「わ、わかりました！」

「……よくわからねえが、二人に任せる」

オッサンも悩んでいる様子だった。こうなったら、彼女たちの友情に賭けるしかない。

「とりや…… てりや……」

その次に打席に立ったのは、鷗だった。

出鱈目にバットを振り回しながらも、ヒットを量産する。

「うーむ。鷗はあえてフォームはいじらねえほうが良さそうだな。そのままカモメ打法で行きな」

「はい！ コーチ！」

オッサンも太鼓判を押ししてくれたし、打撃に関しては鷗は大丈夫そうだった。人間、何か一つは取り柄があるみたいだ。

残るは、しろはだけど……。

「あー、もうちよつと腕を振ったらいんじやねーか？」

「え、こっ、かな？」

「いや、重心がブレてやがる。バット構えたら重心は真ん中だ。で、撃つ時は右足に体重を乗せんだよ」

オッサンがバットを持って、丁寧にしろはにバッティングフォームの手本を見せてくれる。

「よし夏海、直球投げてみな」

「はい！ しろはさん、行きますよ！」

夏海ちゃんにボールを投げてもらって、それをしろはが狙う。

「えい！」

……空振りだった。

「……それにしてもしろは、変わった動きでタイミングを取るんだな」

「え、そうかな？」

俺は捕球した直後、しろはにそう声をかける。

本当に変わった動きだ。小刻みにバットを動かしている。あの動き、どこかで見たことあるような。

「よし、もう一球！」

「はい！ しろはさん、行きますよ！」

「う、うん」

夏海ちゃんが直球を投げる。しろはがそれに合わせてバットを振る。

……掠った。

「あ、惜しいです！」

夏海ちゃんの言うように、段々とタイミングがあってきたような気がする。

「しかし、変わったタイミングの取り方をしやがるな……」

オッサンも気になったようで、顎に手を当てながら、何やら考えている。

その時、俺は一足先に理解した。

「……そうか。チャーハンだ」

「あ？ チャーハンがどうした？」

「しろはがタイミングを取るときの手の動き、チャーハンを作るとき

の動きと同じなんだ」

「本当ですね。まるで、チャーハン打法です！」

夏海ちゃんもマウンドの方から大きな声でそう言っていた。良いな。チャーハン打法。

「まあ、タイミングの取り方は人それぞれで決まりはねえから、好きにしてもらっていいけどよ。チャーハンねえ……？」

オッサンは首をかしげながら頭をかいていた。そんな中、しろは何かを掴んだのか、その後もずっとチャーハン打法を練習していた。

「よし、集合！」

一時間ほど練習した後、オッサンの号令でグラウンドの一角に集まる。

結局、今日はひたすらに基本練習だけに終始し、ポジションについては一切話さなかった。

「なあオッサン、今日はポジションは決めないのか？」

「大体目星がついてるポジションもあるけどな。詳細は明日だ」

良一の疑問に対し、オッサンはそう返していた。

今日の流れから見ると、夏海ちゃんのピッチャーと俺のキャッチャーは決まりっぽいけど。

「それで、練習を頑張ったお前らに、早苗から差し入れがあるそうだし心して受け取れよ」

「え、差し入れ？」

「皆さん、お疲れさまでしたっ」

その時、オッサンの後ろから『古河パン』と書かれた箱を持った早苗さんが出てきた。

「どうぞ、召し上がってくださいっ」

そして箱の中からパンを取り出して、俺たちに配ってくれる。

「え、もらっちゃっていいの？」

「はいっ」

手渡されたパンを眺めながら、鷗が言う。

「今日の出店の売れ残りだ。気にせずもらってくれ」

オツサンはタバコに火をつけながら、ため息交じりに呟いていた。売れ残ったということは、その分赤字ということだろうし。

「ありがとう！ いっぱい運動したから、お腹空いてたの！」

「それじゃ、遠慮なくいただきます」

全員にパンが行き渡った後、俺たちは一斉にパンにかぶりつく。

「……??」

一口かじってみると、なんか中が硬かった。俺だけじゃないらしく、あちこちでぼりぼりと音がする。

「……せんべい？」

かじって出来たパンの断面をよく見てみると、そこからは普通のせんべいが顔を覗かせていた。

「おせんべいパンですよっ。見事な和洋折衷ですよねっ」

確かに和洋折衷だけど、このパン、色々とやばい。パンとせんべいのダブルパンチで、口の中の水分をがつつり持っていかれる。

「美味しいですよねっ？」

早苗さんは笑顔で聞いてくる。

「わ、悪いけど、これは水分泥棒、だと思う……むごっほ」

喋ろうとすると、むせそうになる。これはお年寄りや小さな子供には危険な食べ物だ。

「わ、わたしのパンは、わたしのパンは……」

「あ、やべ」

……あれ？ どうしたんだろう。俺の感想を聞いた早苗さんはその瞳に涙をためて、ふるふると震えている。

「水分泥棒だったんですねえ……」

次の瞬間、早苗さんは泣きながら脱兎のごとく走り去ってしまった。

「くそっ、俺は大好きだ……」

その様子を見たオツサンは、箱に残っていたせんべいパンをひつつかむと、口に放り込みながら早苗さんを追いかけていった……。

「……なに、あれ」

蒼が小さな声でそう言う。それが限界なくらい、俺たちはあっけに取られて固まっていた。

「ぜえはあ……お前ら、今日の練習はここまでだ」

それから数分後、恥ずかしそうにうつむいた早苗さんを連れて、オッサンが帰ってきた。

結局、今日はこのまま解散となってしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ふう……」

加藤家に帰宅した時には、なかなかの疲労感だった。この感じ、久しぶりかもしれない。

「よいしょ……っ」と

その時、夏海ちゃんは抱えていた袋を玄関先に置く。袋の中からは、グローブやボールが顔を覗かせていた。

「あれ。夏海ちゃん、その野球道具どうしたの？」

もしかして、小学校からずっとあれを持って帰ってきてたんだろうか。気がつかなかった。

「はい！ のみきさんに許可をもらって、借りてきました！」

「ああ、あそこの道具、借りれるんだ」

「しろはさんや紬さんも、バットを借りて帰ってましたよ。自宅や灯台で練習するそうです」

「それじゃ、夏海ちゃんも練習用に借りたの？」

「はい。朝練しようかと思いましたが」

朝練。久しぶりに聞いた言葉だった。

「それですね……羽依里さん、良かったら付き合ってもらえませんか？」

「え、朝練に？」

「はい！」

夏海ちゃんは笑顔だった。なんとというか、やる気に満ち溢れている。

「いいよ。俺もキャッチャーの練習しておかないといけないしね」

「ありがとうございます！ それじゃ私、洗濯物取り込んできますね！」

夏海ちゃんは嬉しそうにお礼を言って、そのまま庭に出て行ってしまった。

それにしても、道具も全部用意してからお願いするなんて、ずるいと思う。きつと、しろはか藍の入れ知恵なのかな。

「……あ、羽依里君。帰ってたんだね」

そんなことを考えていると、夏海ちゃんと入れ違いになるように、鏡子さんが居間の方からやってきた。

「野球の練習、頑張ってるみたいだね」

「はい。まだ始めたばかりですけど」

俺たちが練習してるのを見たんだろうか。あれだけ騒がしくやってるし、見られていてもなんの不思議もないけど。

「それで、夏海ちゃんはどうか？」

「夏海ちゃんですか？ ピッチャーやるって、意気込んでいますよ」

俺は夏海ちゃんが置いていった野球道具を鏡子さんに見せながら、そう告げる。

「うんうん。その様子だと、無事小学校の中にも入れたみたいだね」

鏡子さんは笑顔だった。

そういえば今朝、小学校での灯籠作りを夏海ちゃんに勧めたのは、他ならぬ鏡子さんだった気がする。

「鏡子さん、もしかしてわざと夏海ちゃんを小学校に行かせたんですか？」

「うん。トラウマを克服してほしくてね。少し不安はあったんだけど、話を聞いていると結果オーライみたいだったし、良かったんじゃない？」

「まあ……それはそうですね」

「しろはちゃんや、島の皆に感謝だね」

「そうですね」

……あれ？ 鏡子さん、しろはたちが夏海ちゃんの手助けをしてくれたこと、なんで知ってるんだろう。

「しろはちゃんと言えば、冷凍庫にスイカバーが入ってたんだけど、あれってしろはちゃんの忘れ物？」

「あ。そういえば、ログボでもらったのを冷凍庫に入れっぱなしでしたね」

「せっかくだし、今日食堂に行くときに持って行ってあげたら？」

「はい、そうします」

一瞬、違和感を感じたけど……鏡子さんと話しているうちに、その違和感もどこかに行ってしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

というわけで、夕食時。冷凍庫から取り出したスイカバーをビニール袋に入れて、しろは食堂へと向かった。

「しろはー」

「しろはさん、こんばんわですー！」

食堂に扉を開けると、その脇に金属バットが置かれていた。食堂には似つかわしくないけど、しろはが練習用に持ち帰ったやつだろう。

「あ。二人とも、いらっしやい」

「鷹原さん、こんばんわなのですー！」

「やはー、なっちゃん、羽依里くん」

声が出た方を見ると、カウンター席にクドと葉留佳が座っていた。二人は振り返って、俺たちの方に手を振ってくれる。

「二人とも、こんばんわ」

「こんばんわですー！」

夏海ちゃんと一緒に挨拶を返して、俺たちもカウンター席へ向かう。

「葉留佳さん、隣いいですか?」

夏海ちゃんはカウンターに近寄って、葉留佳の左の席に座ろうとする。

「あ、なっちゃん、私の左側には座らないほうがいいよ?」

「え? ご迷惑でしたか?」

「違う違う。ほら、私って左利きだから。隣でご飯食べてると、肘が当たっちゃうんだよね」

そういうことか。確かに、右利きの夏海ちゃんが隣に座るとぶつかっちゃうかも。

「夏海さん、こちらにどうぞなのですー」

その様子を見たクドが、隣の席を促してくれたので、俺と夏海ちゃんはそちら側に座らせてもらう。

「そうだしろは、これ」

そのタイミングで、俺はスイカバーの入った袋をしろはに手渡す。

「えっと、これ何?」

「スイカバー。この間言っていた、ログボのやつだよ」

「あ。わざわざ持ってきてくれたんだ。ありがとう」

しろはは笑顔でそれを受け取って、奥の冷凍庫へしまいに行った。

「しろはさんはスイカバーが好きなんですか?」

クドがその様子を見ながら、俺に聞いてきた。

「しろはにとつて、スイカバーは心の癒しなんだ」

「わふ? 小毬さんのお菓子みたいなものでしょーか」

「うん。きつとそんな感じ。食べると幸せな気分になるんだって」

「そうですかー」

「……クドはスイカバー好き?」

しろはが戻ってきて、今度はクドに質問していた。

「夏の風物詩なので、時々食べますが……その、とりたてては」

クドは少し申し訳なさそうにそう言う。

「葉留佳は?」

「私はメロンバーの方が好きかなー」

「そう……」

しろはも新しいスイカバー仲間の獲得とはならなかったみたいだ。好みは人それぞれだし、しようがないとは思うけど。

「あの、お二人は何を食べてるんですか？」

しろはからおしぼりを受け取りながら、夏海ちゃんがクドたちのお膳を覗き込んでいた。普段、この食堂では見かけないメニューだったし、俺も気になっていた。

「はい、焼肉定食ですよー」

あれ？ この店にそんなメニューあったっけ？

「あ、しばらくは一日一品だけの提供になるの」

困惑している俺たちを見て、しろはがそう教えてくれた。

言われてみれば、いつも置いてあるメニュー表が無くなっている、その代わりに壁に大きく『本日焼肉定食のみ』と書かれた紙が貼ってあった。

「……さすがに、時間が無くて」

いつもは15時くらいから食堂の準備をするしろはも、今日は午後から灯籠作りや野球の練習に忙しかったはずだし。

「いや、店を開けてくれただけでもありがたいよ。じゃあ、俺と夏海ちゃんも焼肉定食をもらおうかな」

「うん。すぐに用意できるから、待っててね」

そう言って、しろはが調理に取り掛かる。すぐに肉を焼く、いい匂いが漂ってきた。

「ところで、葉留佳さんたちは野球の練習したんですか？」

セルフで用意した水を飲みながら、夏海ちゃんがクドと葉留佳に話しかけていた。

「まあ、それなりかなー。ほら、私たちって日頃から鍛えてるし」

確かに真人や謙吾は飛ばしまくってたけど、葉留佳は守備の時以外、大した活躍はしていなかった気がする。打席でも思いつきりセンターをバックさせておきながら、ショートゴロだった気がするし。

「野球の練習もいいけど、せっかく島に来てるんだし、色々楽しまない

とねっ」

味噌汁を飲みながら、葉留佳は楽しそうに話していた。俺としても、島を楽しんでくれるに越したことはないけど。

「でも葉留佳さん、宿題もやらないとダメですよー?」

「んー? ミニ子、そんなこと言ってるのはこの口かー? この口なのかー?」

「わ、わふふふふ……」

葉留佳は空いていた右手でクドの頬をわざとらしくつつねっていた。すごく柔らかかそうなほっぺだった。

「ふたりとも、ごはんは静かに食べないと。お行儀悪いよ」

「そうだぞクド公ー、お行儀悪いぞー」

「な、なんで私が怒られるんでしょーかー」

しろはに注意されていたけど、葉留佳はそのままクドに責任転嫁していた。

「ところでしろはちゃん、サラダのミニトマト、残していい?」

「駄目。きちんと食べないと。礼儀だし」

「えー、許しておかーさーん!」

うん。本当に朝から晩まで騒がしい子だ。

「それじゃーねー。ごちそうさまー」

「しろはさん、ごちそうさまでしたー」

そろそろ俺たちの料理が完成しようかという頃、食事を終えたクドたちが帰っていった。

「リトルバスターズの皆は、ちゃんと時間をずらして来てくれてるんだな」

「うん。あの二人の前には、小毬と来ヶ谷さんが来てたよ」

「そうなんだ」

「うん。あのふたり、あれで結構仲良いみたいだし」

まあ、ゆいちゃん、コマリマックスと呼び合う仲みたいだし、仲は良いんだろう。

「はい、焼肉定食、おまちどうさま」

俺たちの前に、ごはんのみそ汁、それにサラダと冷奴が並べられた。続いて出てきたメインの皿には、焼肉がこれでもかと盛られ、存在感を放っていた。

焼肉には豚肉だけじゃなく、ニンジンやキャベツといった野菜も添えられていて、栄養バランスも良さそうな一皿だった。

「おお、おいしそう」

焼肉にかけられたタレの香りも、ものすごく食欲をそそる。そしてこのタレもどうやら手作りらしい。

「この緑色の野菜は何ですか？」

「ニンニクの芽だよ。スタミナもつくし、シャキシャキして美味しいよ」

「すごいな。そんなものまで入ってるのか」

「うん。島でニンニクを作ってる人がいてね。おすそ分けしてもらったの」

すごいなこの島、なんでも自給自足できるんじゃないだろうか。

「ほら二人とも、冷めないうちにめしあがれ」

「それじゃ、いただきますよ」

「はい！ いただきますー！」

しろはに促されて、夏海ちゃんと一緒に手を合わせてから、焼肉定食に箸を伸ばす。昨日はなんだかんで食べられなかったし、2日ぶりのしろはのご飯だった。

「うつつ」

「こ、こんばんわ」

食事を始めたその時、恭介と鈴がやってきた。

「あ、いらっしやいませ」

「なんだ、今日は焼肉定食だけなのか。親子丼Bとやらが気になっていたんだが」

恭介は店に入るとすぐに、例の張り紙に気がついたみたいだ。

「ごめんなさい。今日は、そういうことになります」

恭介が年上だからだろうか。しろはが緊張して敬語になっている。

「じゃあそれでいい。二つ頼めるか？」

「わかりました。しばらくお待ちください」

恭介からの注文を受けて、しろはがそそくさと厨房の奥へ入っていった。

「……それにしても、なんできよーすけとご飯食べに行かにならんのだ」

「だから、小毬と行けと言ったんだ」

「きよ、今日はこまりちゃんは、くるがやと一緒にいくって言った」「そんなの気にせずついていけよ。親友なんだから」

二人は立ったまま、そんな話をしていた。確か、小毬さんたちは俺たちの前に来てたんだっけ。

「あの、恭介おにーさん、こちらにどうぞ！」

そんな立ちっぱなしの二人に気を使ったのか、夏海ちゃんが食事の手を止めて、隣の席を恭介に勧める。

「ああ、悪いな」

「いや、きよーすけはこっちだ」

夏海ちゃんの横に座ろうとした恭介だったけど、鈴に制されて、もう一つ離れた席へと移動させられていた。

「あれ？ どうしたんですか？」

「きよーすけは（21）だからな。なつみが危ない」「な、なんですかそれ」

夏海ちゃんが不思議そうな顔をしていた。

「なんでもないさ。気にしないでくれ」

俺もすぐく気になる。なんだろう。（21）って。

「それより聞いたぞ。夏海がピッチャーをやるんだってな」「え？」

席に着くなり、恭介がそう切り出していた。

「ちなみに、我がリトルバスターズのピッチャーは鈴だ。ライバルだな」

「あ、はい。えっと、よろしく願います……？」

夏海ちゃんは混乱しているみたいだった。今日の練習の様子からして、夏海ちゃんがピッチャーをやるのは確実だろうけど、まだ決定事項じゃない。

「恭介、確かに夏海ちゃんは投球練習はしていたけど、まだ本決まりじゃないんだ」

「あれ、そうなの」

「はい。私もまだ監督から正式な指名を受けたわけじゃないので」

正直言うと、夏海ちゃんだけじゃなく、全員のポジションがまだ決まっていない。恭介は一体どこからその噂を聞きつけてきたんだろう。

「しまった。そうとは知らず、こっちの情報を流しちゃった」

「あほだな」

まあ、プールサイドからリトルバスターズの練習風景を見た時も鈴が投げていたし、おおよそ見当はついていたけど。

「そうだ恭介、明日の練習時間についてなんだけど」

「ああ、俺たちはいつでもいいぞ。むしろ、無くてもいい」

「え、練習しなくていいんですか？」

「わざと練習をさせないのは、アウェイの洗礼というやつだろう。そっちの方が燃えるからな」

「ええー……」

「いや、そんな卑怯なことしないけどさ」

練習させなかったらさせなかったで、さっきの調子だと葉留佳とかは喜んで海に行きそうだけど。

「気を悪くしないでくれよ。冗談だ」

「ああ、わかってる」

「そうだな……なら、リトルバスターズは明日の午前中に練習させてもらっていいか？」

「わかった。じゃあ、俺たちは13時から使わせてもらうよ」

しろはの食堂の準備もあるし、明日は早めに練習を始めることにしよう。

「……あ」

その時、俺はあることに気づき、思わず声が出る。

「羽依里さん、どうかしたんですか？」

「夏海ちゃん、どうやってあのオッサン……監督に練習時間伝えよう？ 明日の予定何も決めないまま、別れちゃったし」

「……ああっ!？」

夏海ちゃんは思わず立ち上がった。確かに、俺たちはあのオッサンがどこに泊まっているのかも知らない。

「どうしましょう……?」

「うーん……」

古河秋生という名前は分かってるし、いざとなればのみきに頼んで、明日の午前中に鉄塔から練習時間を放送してもらうのも手かもしれない。

「……なあ羽依里、そのオッサンってのは、妙なサングラスをした、茶髪の人か?」

「え?」

「そうです! その人です!」

思わぬ恭介からの言葉に、夏海ちゃんが身を乗り出して返事をしていた。

「その人なら、俺たちと同じホテルに泊まっているぞ。夏海がピッチャーをやるという話も、その人たちが廊下で話してるのが聞こえたんだ」

「あ、そうなんですね」

「ああ。その慌てようから察するに、何か事情があるのか?」

「えっと、実は……」

そこまで事情を知っているのならと、俺は恭介に、オッサンから野球の指導をしてもらっていることを伝える。

「……なるほどな。そういうことなら、夜のうちに伝えといてやるよ。伝えるのは練習時間だけで良いのか?」

「ああ。時間だけでいいよ。ありがとう」

「気にしないでくれ」

「羽依里、時々抜けてることがあるよね……はい。焼肉定食、おまちど

うさま」

その時、しろはが恭介たちの分の食事を提供してくれた。話はそこで一旦打ち切りとなり、その後は四人で食事を楽しむことにした。

「……うん。昼間の定食屋よりおいしい」

鈴はごはんに乗せた焼肉を食べながら、ご満悦だった。

「そうそう。女の子には、おまけでカップゼリーをつけてるんだよ」
そう言っつて、しろはが鈴と夏海ちゃんにカップゼリーを渡す。言われてみれば、クドや葉留佳にもついていた気がする。

確かに、今日のメニューは少し油っこいし、ニンニクは使われてるし、女の子はやっぱりおいとか色々気になるだろう。

油っこさはともかく、カップゼリーでニンニクのおいがどうにかできるなんて話は聞いたことないけど。

「しかし、焼肉定食一つとってもこれだけ美味しいのなら、昼間もやればいいんじゃないか？」

鈴と同じように、焼肉をご飯の上に乗つけて食べていた恭介がそう言う。

「元々、少ないお客さんの取り合いになっちゃうから、うちは夜だけなのです」

「なるほどな。島で生計を立てるのも、大変というわけだ」

「うん。そうなのです」

なんか、しろはの敬語が色々とおかしいような気がするけど。焼肉定食美味しいし、まあいいか。

「それじゃしろは、ごちそうさま」

「しろはさん、ごちそうさまでしたー！」

「恭介たちも、ゆっくりしていつてくれな」

「ああ、サンキューな」

「練習時間の件、オッサンによろしく伝えておいてくれ」

「ああ、任せてくれ」

俺たちは恭介たちより一足早く食事を終わると、それぞれ挨拶をして、食堂を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅して入浴を済ませると、すぐに睡魔が襲ってくる。

夏海ちゃんもテレビを見ながら船を漕いでいるし、野球の練習で疲れたのかもしれない。

「夏海ちゃん、少し早いけど、今日はもう休んだほうがいいと思うよ？」

「は、はい。そうしまふ……」

必死にあくびをかみ殺しながら立ち上がる。妙にふらふらしてるし、大丈夫だろうか。

「大丈夫？　ちゃんと部屋までいける？」

「だいじょぶです……おやすみなさい……」

とてとてと自室へ向かっていった夏海ちゃんを見送った後、俺も部屋で休むことにした。

「今日はなんだかんだで、疲れたな……」

今思い返せば、慣れない野球の練習を炎天下でやったんだし。疲れはないはずがない。

部屋の網戸の向こうから聞こえてくる虫の声に耳を傾けていると、俺はすぐに眠りに落ちていった。

第三十話・完

第三十一話 8月20日（前編）

……朝。

今日も夏海ちゃんの声で起こされ……ない。

というか、なんだろう。布団の中がいつも以上にあったかいような。

そう思つて布団をめくつてみると……何故か俺の布団の中に、夏海ちゃんがいた。

「はっ!？」

なにこれ。どういう状況？

夏海ちゃんは俺にくつつくようにして、ぐっすり眠っていた。どうしようこれ。

「えーっと」

うん。一度布団から出よう。夏海ちゃんを起こさないように慎重に布団から出て、顔でも洗つて、冷静になるんだ。

「ふー……」

一度深呼吸をして、ゆっくりと布団から抜け出そうとすると……俺の右足が夏海ちゃんの足に当たつてしまい、結構な勢いで夏海ちゃんの身体が揺れた。

「ん、ん……」

一瞬身じろぎした後、ゆっくりとその目が開く。これはやばい。

「……」

夏海ちゃんの目が泳いでいる。状況を把握できてない感じだった。いやまあ、俺も把握できてないけど。

「えっと、おはよう。夏海ちゃん」

「おはよーございませす……?」

とりあえず、挨拶をしておいた。朝の挨拶って大事だね。

「……え、ええええ!？」

そこでようやく状況が理解できたのか、夏海ちゃんは布団を跳ね飛ばしながら上体を起こす。

「な、なんで羽依里さんが私の布団にいるんですか!？」

夏海ちゃん、そんな目で見ないで。何もしてないから。地味に傷つくから。

「いや、ここは俺の部屋なんだけど……」

改めて部屋の中を見渡してみろ。ここ一ヶ月、すっかり見慣れた俺の部屋で間違いなかった。部屋の隅に置いてある鞆も、間違いなく俺のものだし。

大きなアリのクイのぬいぐるみも絵日記帳もないし、少なくとも、夏海ちゃんの部屋じゃないと思う。

「あ、あれっ？ あれ？ 本当にすね……っ？」

夏海ちゃんも同じように見渡して、不思議そうな顔をしている。

「夏海ちゃん、もしかして夜のうちに一回起きたとか？」

「うーん、えーっと。どうでしたっけ……」

夏海ちゃんは寝癖のついた頭を抱えて、記憶の糸を手繰り寄せている。

「……あ、思い出しました！ 私、夜中にお手洗いに起きたんですよ！」

そういえば昨日は暑かったし、夏海ちゃんは麦茶をたくさん飲んでいた気がする。

「その後部屋に戻るとき、寝ぼけて俺の部屋の布団に入っちゃったと？」

「はい！ それですー！」

夏海ちゃんは後ろ頭をかきながら、ばつが悪そうに笑っていた。部屋が隣同士だし、間違えても無理はないけど。

「目が覚めたら、目の前に羽依里さんの顔があったので、びっくりしました」

「うん。俺もものすごく驚いたよ」

夏海ちゃんは顔を赤くしていた。何にしても、変な誤解をされずに良かった。

「じゃあ、夏海ちゃんも自分の部屋に戻って、ラジオ体操の準備を……」

……その時、静かな音を立てて、俺の部屋のふすまが開いた。

「羽依里君、そろそろ起きないと、ラジオ体操に遅れる……よ」

その隙間から鏡子さんが顔を覗かせて……笑顔のまま、固まった。

「……えーつと……」

俺は今一度冷静になって、自分の置かれた状況を見てみる。

俺と夏海ちゃんは二人揃って同じ布団の中。夏海ちゃんは顔を赤面させているし、誤解を生むには十分だった。

「……お姉さんに連絡しなきゃー!」

ほら。やっぱりこの流れだ。

「鏡子さん! 誤解です!」

「待ってくださーい!」

俺と夏海ちゃんはほとんど同時に起き上がり、鏡子さんを止めに行った。今日も賑やかな朝の始まりだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「はあ、朝から疲れちゃいました」

「本当だね……」

あの後、二人がかりで鏡子さんの誤解を解いたものの、かなりの時間を使ってしまった。

それから急いでラジオ体操の準備をして、全力ダツシュ。俺たちは朝からへとへとなりながら、なんとか神社に到着していた。

「皆、おはよう」

「おはようございますー!」

神社に集まっていた皆に挨拶をする。今日もリトルバスターズの面々が参加していて、すごく人数が多い。

「うおおー！ 筋肉ゴーカートが通りまーす！」

「すげえー！ 筋肉すげえー！」

「筋肉のにーちゃん！ 次オレね！」

「順番なんて言わずに、二人一緒にやってやるぜ！ 筋肉のメリー
ゴーランドだ！」

「わーいーい！」

その集団から少し離れたところで、真人が島の子供たち数人と遊んでいた。あの筋肉にもものを言わせた交流はすごい。まさに筋肉外交だった。

「よーし、いつくぞー！」

「こーい、はるちん！」

「オレたちに負けて、吠え面かくなよ！」

その向こうでは、葉留佳が島の子供たちとビー玉やメンコで遊んでいた。

「リトルバスターズの皆、朝から本当に元気よねー」

いつの間にか隣に来ていた蒼が、しみじみと言っていた。俺も確かにそう思う。

「ところで蒼、今日はポニーテールなのな」

「そうよー。珍しーでしょ」

ちなみに、例のトンボ玉は髪留めの中に括られていた。あの髪留めも、色々なバリエーションがあるんだな。

「今日も野球の練習あるんでしょー？ この髪型のほうが、やりやすいしねー」

島の子は皆髪が長いし、確かに髪を纏めてる方が動きやすいと思う。

「……それにしても、やけにネコが多くないですか？」

その時、蒼の隣に藍がやってきて、訝しげに周囲を見渡していた。言われてみれば、今日の境内にはネコが多い気がする。いつもはほとんど見かけないのに。

「あ、それってもしかして、鈴さんのせいじゃないですか？」

「え、鈴?」

「ほら、あそこです!」

夏海ちゃんが神社の一角を指さす。そこには、鈴の後ろをついて歩く無数のネコの姿があった。

「……すごいですね。あれって、元々は港のネコたちですよ? 鈴さんはしま猫団のボスですか?」

藍、ひげ猫団みたいな言い方しないで。

「しま猫団か……鴫のひげ猫団と、良いライバルになりそうだな」

その時、恭介がそう言いながら、こっちにやってきた。

「よう」

「ああ、おはよう恭介」

「恭介おにーさん、おはようございます」

恭介に挨拶を返した直後、昨日の食堂でのやり取りを思い出した。

「そうだ恭介、昨日の食堂での件だけ」

「安心してくれ。練習時間の件、あのオッサンにしっかり伝えたぜ」

「そっか。ありがとう」

「それで、余計な心配かもしれないが、紬や静久、鴫には練習時間を伝えなくていいのか? 見たところ、今日は来ていないみたいだが」

「あ、本当だ」

恭介に言われて気が付いた。今日の練習時間はラジオ体操の時に伝えればいいと思っていただけ、鴫や紬等、その日の都合でラジオ体操に参加しない時もあるんだった。

昨日の練習中に、今日の予定を決めておくべきだったと、つくづく思う。

「なら、今日のところはのみきに鉄塔から練習時間を放送してもらったらどうだ? 可能だろう?」

恭介からそう提案された。確かに、それが一番確実かもしれない。

「おーい、のみきー」

俺と恭介は空門姉妹や夏海ちゃんのそばを離れ、クドや天善と話をしていたのみきの方へ行く。

「む? 鷹原、どうした?」

「実は……」

俺は恭介と一緒に、お昼前に鉄塔から練習時間の放送をして欲しい旨を伝える。

「なるほどな。そういうことなら構わないぞ」

「のみき、よろしく頼むよ」

よし、これで問題が一つ解決した。正直、恭介が気付いてくれなかったら、危なかったかも。

「ああ、そういえば恭介氏。ひとつ言っておかなければならないことがある」

「お？ なんだ？」

立ち去ろうとしていた恭介を呼び止め、のみきが続ける。

「この島のならわしでな。祭り当日と、その翌日。つまり明日と明後日の二日間は釣りが禁止になるんだ」

「え、そうなのか？」

俺と恭介の声がハモってしまった。俺も知らなかったからついで、そう聞いてしまった。

「悪いが、そう言う決まりなんだ。それにしても、鷹原が知らないのは意外だったな」

「去年の祭りの時期、俺は蔵の虫だったからさ」

「ああ……そういえば鷹原は当初、加藤のおばーさんの遺品整理でこの島に来たんだったな」

「そうそう。蔵の整理、一度始めたらハマっちゃってさ」

「ある意味、鷹原はそういう作業が向いているのかもしれないな」

「色々出てきて楽しかったしな。ビリヤード台に、卓球台に、紙飛行機に……」

「……あれ？」

……なんだろう。紙飛行機を見つけた時、一緒に何か見つけたような。

いや、正確には『物』じゃなかったかもしれない。なんだっけ。思い出せない。

「だがのみき、明日からは駄目でも、今日は釣りをしても良いんだろ

？」

「ああ。今日までは釣りをしてもらって構わない」

……一瞬、何か妙な感じがしたけど、すぐ霧散してしまった。

慌てて、恭介とのみきの会話に意識を集中する。

「祭りの前日と言うことで人も増えるし、静かに釣りというわけにはいかないがな」

「それは当然だよな。やっぱり、祭りは島民にとって一大イベントなんだろ？」

「ああ、祭り当日とその翌日は大きめの臨時船も出てな。船の本数も増えるんだぞ」

心なしか、のみきも嬉しそうに言っていた。

「なら、今日は午後時間に時間を見つけて、浜辺で海釣りとしやれこむしよう。フィッシュ斉藤の本領発揮だぜっ！」

よくわからないけど、恭介は釣りの趣味があるんだろうか。浜辺だって言ってたし、時間があつたら見に行ってみようかな。

「お前らー！ 準備は良いかー？ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第四の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐる〜！」

ラジオ体操大好きさんが頭を振り回す。

「ぐるぐるぐる〜！」

俺たちもそれにならって、頭を振り回す。

「うう、きもちわるい……」

「ろーりんぐおぶざわーると、なのですー……」

小毬さんもクドも左右にふらふら揺れながら、涙目だった。あの運動は、なかなか慣れるもんじゃない。

「よし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「ありがとうございますー！」

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

ラジオ体操が終わり、今日のスタンプとログボを受け取る。

「おお、今日のログボはリンゴジュースだ」

ラジオ体操大好きさんから、パックに入ったリンゴジュースを受け取る。日陰に置いてあったんだろうか、ほどよく冷えている。

「ところで、ログボってなんですか？」

今日も白い日傘をさしていた西園さんが不思議そうな顔をしていった。

「スタンプカードを持つ人だけがもらえる、参加賞みたいなものだよ。今日はリンゴジュースだけど、日によってはタコまるごと一匹だったり、野菜だったりするんだ」

「……変わった風習ですね」

まさかの風習呼ばわりだった。確かに、俺の地元のラジオ体操にはログボなんてないけど。

とりあえず喉も乾いてるし、飲もう。横についていたストローをパックに刺して、飲み始める。

「おお。美味しい」

さすが果汁100%ジュースだ。爽やかなリンゴの香りが鼻に抜ける。

喉が渴いていたし、一気に半分くらい飲んでしまった。

「夏海ちゃん、運動の後のジュースは最高だよね」

「そ、そうですね……」

夏海ちゃんはリンゴジュースを飲むことなく、じっと見つめていた。

「……羽依里さん、家に粉ゼラチンありましたっけ」

「いや、なかったと思うけど」

「みかんチャーハンやいちごチャーハンが実際にあるくらいですし、リンゴチャーハンがあっても……」

なんかぶつぶつ言ってる。この流れはまずい。夏海ちゃんが

チャーハンモードになる。

「たまにはシンプルに卵と塩コショウのチャーハンが食べたいな。夏海ちゃんのチャーハン、美味しいし」

「そんなのダメです！ 具なしのチャーハンなんて、チャーハンへの冒瀆です！」

「いや、俺は卵も十分チャーハンの主役になると思うけど……」

「いえ、卵はあくまでチャーハンの引き立て役です！」

夏休みの最初のほう、黄金の卵チャーハンがどうか言ってたような気がするけど。

「このままでは、まともなチャーハンが作れません。何かいいアイデアがないでしょうか……！」

天を仰いでいる。どうしよう。チャーハンスイッチ入っちゃった。

俺は残ったジュースを飲みながら、頭を抱えるしかなかった。

「さつきから、なにを騒いでるんだ？」

その時、その騒ぎを聞きつけて、恭介たちリトルバスターズのメンバーがこつちにやってきた。

「ちようど良かったです。皆さんに聞きたいことがあるんですけど」

夏海ちゃんが俺を押しつけて、リトルバスターズの前に立つ。

「皆さんはチャーハンの具、何が好きですか？」

夏海ちゃんが物おじすることなく、そんなことを聞いていた。なんだろう。皆の好みから、今日のチャーハンのヒントを得ようという魂胆だろうか。

「そりゃ、チャーハンと言えば焼き豚だろう。あの焼き豚のゴロゴロした感じが良い」

「だよな。がつつり筋肉になりそうだしな」

「なにより、腹が膨れるからな」

「僕も焼き豚チャーハンかなあ。一応、男だし」

男性陣は満場一致で焼き豚チャーハン推しだった。

「男性陣には悪いが、私はキムチチャーハンを推そう。栄養価は焼き豚の比ではないぞ」

そう言うのは来ヶ谷さんだった。確かにキムチの方が体には良さ

そうだけど。

「小毬さんはどうですか？」

「私はチャーハンはそこまで食べないけど、あんかけチャーハンはおいしいよねー」

「あんかけリンゴチャーハン……」

だから夏海ちゃん、リンゴを前提にしないで。

「私は麻婆チャーハンかなー。中華料理同士、最強のコラボレーションだと思うけど」

「私はレタスチャーハンね。なんかヘルシーっぽくない？」

がつつり系とあっさり系。葉留佳と佳奈多は双子なのに、かなり好みが違うみたいだ。どっちも美味しそうだけど。

「……たつぷりの油を使っていますし、レタスチャーハンもヘルシーとは思いますが」

その時、西園さんがそう口にしていた。もしかしてこの人って、ツツコミ役なのかな。

「じゃあ、そう言う西園さんは何チャーハンが好きなの？」

ツツコまれたことが悔しかったんだろうか。佳奈多がそう聞いていた。

「私はカニチャーハンですね」

ポピュラーなエビじゃなく、あえてカニなところが通っぽい。

「鈴さんはどうですか？」

「あたしはツナだ」

「え？」

「ツナチャーハンが美味しい」

「ツナチャーハンですか……クドさんはどうですか？」

「しいてあげるなら、五目チャーハンですね。あのハーモニーは最高なのですー」

「三種のリンゴチャーハン……」

もはや、どこかの牛丼屋のメニューみたいになってるし。夏海ちゃん、しっかりして。

「うーん。うーん」

皆の意見を聞いた後、夏海ちゃんは悩んでいた。

「俺たちの好みのチャーハンを聞いて、そこから更に悩んでいるみたいだが、一体どうしたんだ？」

「何か、良いチャーハンのレシピが思い浮かばないかと思ひまして」

「およ？ なっちゃん、チャーハン作るの？」

「はい。実は毎朝チャーハンを作ってます」

「なんだそれは、何かの罰ゲームなのか？」

葉留佳に続いて、鈴が不思議そうな顔をしていた。

「いえ、うちの朝ごはんはチャーハンと決まっています！」

ちよつと待つて。別に決まってるから。

「この島のチャーハン愛はすごいですよ！ 一家に一つ、チャーハン専用の中華鍋があるくらいなんです！」

中華鍋は一家に一つあるかもしれないけど、チャーハン専用ってのは言い過ぎだよ。他の料理にも使うだろうしよ。

「チャーハン暗黒武闘会や、全国チャーハン博覧会というイベントも開催されていたんですよ！」

なんだろう。夏海ちゃんがチャーハンについて熱く語りだした。やっぱり、しろはどの修行の影響だろうか。

というか、暗黒武闘会っていうイベントを俺は知らないし、博覧会の方はこの島じゃなくて、宇都の方なんだけど。

どんだん話が大きくなる。誰か夏海ちゃんを止めて。

「……というわけで、チャーハンは万能なんです！」

……最終的に、叫んじやった。

もしこの場に、しろはがいたら止めただろうか。それとも賛同しただろうか。

「……すげえ感動した」

余韻が残る中、恭介は涙を流しながら、夏海ちゃんの手を取っていた。

「ぜひ協力させてくれ」

恭介はそう言うと、財布の中から諭吉を取り出した。

「俺たちじゃ調理を手伝うこともできないし、せめてこの金でチャーハンの具を買わせてくれ！　さらば諭吉い！」

「え」

「待って恭介！　それって、僕たちの帰りの旅費だよね?!」

「やべえ、皆、恭介を止めろ！」

そんな恭介を、リトルバスターズの皆が必死に止める。

「きよ、恭介おにーさんの気持ちはありがたいですけど、それを受け取るわけには……」

一方の夏海ちゃんも、まさかの諭吉が出てきたせいだろうか、正気に戻って、戸惑っていた。

「夏海ちゃん、帰ろう」

これ以上この場に居ても騒ぎが大きくなるだけだろうし、今が好機だ。俺は夏海ちゃんの手を引いて、そそくさと神社を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それにしても、朝ごはんどうしましょう」

住宅地まで戻って来たところで、手に持ったままのリンゴジュースを見ながら、夏海ちゃんが寂しそうにつぶやいていた。

やっぱり具なしチャーハンっていうわけにはいかないだろうし、先日のバターみたく、冷蔵庫に何か食材が残ってないだろうか。

夏海ちゃんが悲しむ顔は見たくないし、多少変わったチャーハンが出てきても、頑張つて食べないと……。

そんなことを考えながら加藤家の前まで帰り着くと、玄関のところに見知った人が立っていた。

「あれ？　玄関にいるの、こばとさんじゃないですか？」

夏海ちゃんの言う通り、家の入り口にしろはのじーさんがいた。朝

から来るなんて珍しい。

「こぼとさん、おはようございますー！」

「む、夏海に羽依里か」

俺たちが声をかけると、ゆっくりと振り返る。

「家の中に声をかけてみたが、誰もいないようだな。お前たちはラジオ体操に行っていたのか」

「はい！ ちょうど今、帰ってきたところです！」

「そうか。ちょうどいい。お前たちにこれをやろう」

じーさんはそう言うと、手に持った袋を俺たちの方へ差し出してくる。

「あの、これは？」

「カレイの一夜干しをたくさん貰ってな。食べるといい」

「ありがとうございます！ これで、チャーハンができます！」

「チャーハン？」

じーさんは訝しげな顔をしていたけど、夏海ちゃんは大喜びで袋を受け取っていた。何か良いレシピを閃いたんだろうか。

「そうです。こぼとさん、お礼と言ってはなんですけど、このリンゴジュースあげますー！」

「ラジオ体操のログボか。気にせず、お前たちで飲むといい」

「いえ、受け取ってください！」

夏海ちゃんは無理矢理、じーさんの手にリンゴジュースを握らせる。

「む、むう……」

その迫力に気圧されたのか、じーさんは押し黙ってリンゴジュースを受け取る。

それにしても、島の子供たちはもとより、天善や良一でさえビビるのに、なんで夏海ちゃんはしろはのじーさんと対峙しても平気なんだろう。

「そうだ。羽依里」

「え、なんででしょう？」

直後、唐突に話しかけられて、俺がビビった。

「お前たち、あのなんとか言う余所者たちと野球の試合をするそうだな」

「え？ ええ。まあ」

まさか、じーさんの口からその話題が出るとは思わなかった。

「昨日、漁から戻ってみると、しろはが庭先でバットを振り回しているな」

じーさん、その言い方には語弊があると思う。しろはも練習を頑張ってくれているみたいだけど。

「祭りの準備で忙しいこの時期に、何をしているのかと聞いたら、野球の試合をするとな」

……あれ？ この流れ、まさか試合するのを止められたりしないよな？

「あの余所者に負けぬよう、せいぜい頑張ることだ。お前たちはこの島を代表して戦うのだからな」

「え……はい、頑張ります！」

良かった。どうやら、じーさんなりに応援してくれたんだと思う。少しだけ、冷や汗が出た。

「それじゃあな」

しろはのじーさんはそこまで話すと、帰っていった。

「ごぼとさんに応援されたら、頑張らないといけませんね！ 羽依里さん、私たちも朝ごはん食べたら、練習しましょう！」

そうか。そういうえば、朝練やるんだっけ。

カレイの一夜干しを持って意気揚々と家の中に入っていく夏海ちゃんを追って、俺も加藤家へと入っていった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「お待たせしました！ カレイチャーハンです！」

しばらく居間で待っていると、夏海ちゃんが今日のチャーハンをお

ぼんに乗せてやってきた。

同時に、なんだかスパイシーな香りも漂ってくる。

「えへへ、カレーとカレーを合わせてみたんです！ 今日自信作ですよ！」

テーブルに置かれたチャーハンを見てみると、全体的に黄色い。どうやら、カレー粉で味付けしてあるみたいだ。

「これ、カレー粉？」

「はい！ メインの具がカレーだと、塩コショウしても味が薄いので、カレー粉を使って仕上げました！」

結果的に、しろはのじーさんからもらった食材で立派なチャーハンが作れたみたいだ。良かった良かった。

「それじゃあ、食べましょう！」

夏海ちゃんはエプロンを外して、俺の向かいにに座る。

「それじゃ、いただきます」

俺もスプーンを手にとって、カレーチャーハンに取りかかる。

「うん。美味しい」

パラパラのごはんとフレークにされたカレーの身のバランスが絶妙だった。鈴が言っていたツナチャーハンって、こんな感じなのかもしれない。予想以上に美味しかった。

朝食を済ませた後は、野球道具を持って庭に出る。そこまで背は高くないけど竹製の塀があるし、外にボールが飛び出したりはしないと
思う。

「それじゃ、朝練スタートです！」

夏海ちゃん、恭介みたいなこと言わないでほしい。

記憶を頼りに、マウンドとホームベースくらいの間隔を開けて、夏海ちゃんと対峙する。

「羽依里さん、行きますよー！」

「うん。いつでもいいよ」

マウンドに立ったら、夏海ちゃんの表情が変わった。あれだけ真剣

な表情、初めて見るかも。

「えいー！」

そのまま振りかぶって、第一球を投じる。

……投げられたボールは、俺が構えるミットの位置を大きく外れ、文字通り斜め上の方向に飛んできた。

「おっとー！」

反射的に手を伸ばすけど、ギリギリのところでは捕球できない。むしろ、ミットに掠ったせいで更に弾道が変わって、ボールは塀を超えて隣の家に飛び込んでしまった。

「うわ、しまった」

反射的に背後を振り返ると、それとほぼ同時に何かが割れるような音がした。

「あわわわわ」

口元に手を当てて驚愕の表情を浮かべる夏海ちゃんと一緒に、慌てて路地の方に飛び出し……ボールが飛び込んでいった家へと向かう。

「すみませーん！ ボール取らせてくださーい！」

やってることは、まんま小学生だった。ものすごく恥ずかしい。

「ありや、ボールかい？」

玄関口から声をかけると、家の中から温和そうなおじさんが出てきて、庭の方に案内してくれる。

「加藤さん家からだど、こっちの方だと思っただけどねえ」

おじさんについて行くと、庭先に置いてあった植木鉢が割れていた。もしかしなくても、俺たちのボールのせいだろう。

「あの、ごめんなさい」

俺と夏海ちゃんは同時に謝っていた。

「ああ、全然構わないよ。もう古くて、ほとんど枯れたような植木だったしねえ」

おじさんはひらひらと手を振って、笑顔で許してくれた。

「それより今度、島を代表して野球の試合をするんだって？ 頑張つてね」

「え？ はい。頑張ります」

「当日は島の皆で応援に行くからね」

「あ、ありがとうございます」

いつの間にか、噂がどんどん広がっているみたいだ。なんだか大事になってきた。

その後はせめてもの償いにと、植木鉢の片づけだけでも手伝わせてもらった。

加藤家に戻ってきた俺たちは、今度は場所を変えて、蔵がある方の庭で練習をすることにした。

ここなら木製の立派な塀があるし、万が一にもボールが敷地の外に飛んでいくことはないだろう。

「……さつきはすみません。なんだか昨日と感覚が違って、すつぽ抜けてしまっ」

「うん、わかるよ」

俺も水泳をやっていた頃は、一日泳がなかつただけで身体が妙に重たく感じるがあったし。

「少しずつ、ゆっくりでいいからね」

「はいー」

その後は夏海ちゃんも感覚を取り戻したようで、充実した投球練習をすることができた。

「ふう、良い汗かいたね」

「はいー」

朝練を終えて、庭から玄関先に戻ると、そこに鏡子さんが立っていた。いつの間に帰ってきたんだろう。

「あれ？ 鏡子さん、どうしたんですか？」

「あ、羽依里君」

近くに寄ってみると、鏡子さんは台座に登って、頭上に設置された玄関灯をいじっていた。

「その電球、切れちゃったんですか？」

「うん。少し前から、なんとなく調子悪かったんだけど、今朝見たら消えてたんだよ」

鏡子さんの『朝』ということは、たぶん4時から5時くらいなの、まだ暗い時間の話なんだろう。

「それで、電球も新しいのに変えてみたんだけど、点かないんだよね」「え、変えても点かないんですか？」

俺は玄関脇のスイッチを押ししてみるけど、無反応だった。

「古いし、もしかして配線がダメになっちゃったのかもね」

「天善とか、直せないんですか？」

「こういうのって、確か免許がいるはずだからね。電気工事士だったかな」

よくわからないけど、バイクや自転車とは勝手が違うんだろうか。

「この島にも直せる人はいるけど、今はちようど本土に行っちゃってるんだよ」

じゃあ、その人が戻ってくるまでこのままなのか。まあ、数日玄関先が暗いだけだし、大した問題じゃないけど。

「ちーつす」

「おはようございますっ」

その時、俺たちの背後から声がした。

声のした方を見ると、加藤家の門のところ、オッサンをはじめ、早苗さんと渚さんが立っていた。その後ろには、朋也さんに肩車された汐ちゃんの姿の見える。

「役所のハイドロ嬢に家の場所を聞いたら、ここだって言うからよ。なかなかでけえ家じゃねえか」

オッサンは腰に手を当てながら、加藤家を眺めていた。

「そういえばオッサン、野球の練習時間についてなんだけど」

「あ？ ああ、同じホテルに泊まってるってヤツに教えてもらったぜ。恭介とか言ったか」

「うん……その、ごめん」

その恭介のおかげで事なきを得たわけだけど、ここは謝っておく。気にすんな。俺様も昨日は早苗ダツシユで疲れ切つてて、確認するのを忘れてたしな」

「わたしがなんですかっ?」

その時、早苗さんが笑顔で話に入ってきた。

「早苗、好きだぞ」

「はい、わたしも好きですよっ」

オツサン、うまく誤魔化していた。

「それで、ここには何をしに?」

「正直、暇だからよ。ヘナチン小僧と夏海の練習でも見てやろうと思つたんだが……」

そう言うオツサンの目は、俺と夏海ちゃんが持っている野球道具に注がれていた。

「言われるまでもなく、練習はしたみてえだな」

「はい! それなりですけど!」

「普段やり慣れてねえんだから、無理して怪我するんじゃないぞ。試合に出られなくなったら、元も子もねえからな」

「ありがとうございます!」

オツサンは夏海ちゃんの心配をしてくれていた。やつぱりこの人、顔はアレだけどすごく心配りができる人だ。

「で、練習も終わったってのに、玄関先に集まって何やってんだ?」

「えっと、実は……」

俺はオツサンたちに、玄関灯が壊れてしまっている旨を伝える。

「……そうか。そういうことなら、ここは小僧の出番だな」

オツサンはそう言いながら、朋也さんの肩を叩いていた。

「あんたに言われなくても、やってやるさ。汐、ちよつと降りてくれな」

「うん」

朋也さんはゆつくりとしゃがんで、汐ちゃんを肩から降ろす。何をやってくれるんだろう。いまいち状況が飲み込めない。

「朋也くんは普段、電気工事の仕事をしているんですっ」

汐ちゃんの手を取りながら、渚さんがそう教えてくれた。

「一応、免許も持ってる。ちよつと玄関灯を見せてもらっていいか？」

「それじゃ、お願いしちやおうかな」

そう言いながら鏡子さんが台座から降りる。代わって朋也さんが台座に登って、玄関灯を調べてくれる。

「これはソケット奥の配線が切れてるな。カバーを開けられれば修理できるけど、工具が必要だな」

「えーつと……」

工具ってというと、ドライバーとかだろうか。家のどこかにあっただけ。

「あ。そういえば、前に蔵から本格的な工具が出てきてたんだよ」

俺が考えを巡らせていると、鏡子さんがそう言って家の裏の方へ歩いていき、しばらくして大きな工具袋を持って戻ってきた。

「これ、少し古いけど、使えるかな？」

「ちよつと見せてくれ」

鏡子さんから袋を受け取って、中の道具を確かめる。俺が見たところで、何に使う道具なのかさっぱりわからなかった。

「……これだけ揃ってれば、十分だ」

朋也さんはそう言うと、すぐに修理に取りかかってくれた。

「お客さんに直してもらって、なんかすみません」

「気にしないでくれ。いつもの仕事に比べれば、楽なもんだ」

朋也さんはそう言いながら、慣れた手つきで玄関灯のカバーを外し、配線部分を引っ張り出す。続いて断線しているらしい部分を切り取って、袋に入っていた新品の配線とつなぎ合わせる。すごい手際だ。さすがプロだった。

他の皆も、一様に並んで朋也さんが修理する様子を眺めていた。

「パパ、かっこいい」

「はい、朋也くん、かっこいいですっ」

「汐はともかく渚まで……人前だぞ、よしてくれ」
修理をしながら、朋也さんは明らかに照れていた。この人も色々大変そうだ。

「くそー……俺様も渚や汐にかっこいいって言われてえー……！」
ジェラシイイー……！」

その様子を見て、オッサンが叫んでいた。
なんだろうこの人、自分の息子に嫉妬してるんだろうか。

「……え、なんでこんなに人が多いの？」

その時、門のところからまた声がした。

振り返ってみると、しろはが立っていた。

「あれ、しろは、どうしてここに？」

「午前中に時間ができたから、一緒に野球の練習をしようかと思ったんだけど……」

よく見ると、手にはバットとスイカを持っていた。島だからいけど、都会でこの格好で歩いていたら色々危なさそうだ。

「あ、このスイカはおすそ分け。朝から小川で冷やしておいたから、冷たくておいしいよ」

「しろは、練習なんていいから、皆でスイカ食べよう」

……オッサンが妙な声色で、なんか言っていた。

「なあオッサン、もしかして今のって、俺のマネ？」

「ああ、そっくりだったろ」

「全然似てないから。それに、私の羽依里はそんなこと言わないし」

俺より先に、しろはがツツコミを入れていた。ところで、その言い方はちよつと。

「かつ、若えな……」

「お熱いですねっ」

皆が俺たちを笑顔で見ている。どうしよう、めちやくちや恥ずかしい。穴があつたら入りたい。

「そ、それなら私、スイカを切ってきますね！」

その時、夏海ちゃんがそう言い、しろはからひつたくるようにスイ

力を受け取って、家の中に入っていた。微妙な空気に耐えきれなくなっただらうか。

「皆さんも、良かったら家に上がってください。麦茶で良かったら、用意しますよ」

「暑くてかなわねえし、お言葉に甘えさせてもらうぜ。修理は小僧に任せた。お前ら、行くぞ」

鏡子さんの提案に一番に賛同したオッサンが、近くにいた女性陣二人の手を取って、家の中に入っていく。

「ほら汐、お前も来いよ」

「ううん。いい」

オッサンが、家の中から声をかけるけど、汐ちゃんは玄関先から頑として動かなかった。

「汐ちゃん、ここは暑いし、皆と一緒に中に入った方がいいよ？」

その様子を見てか、しろはは汐ちゃんの近くにしゃがんで、その声をかけていた。汐ちゃんは麦わら帽子をかぶってるとはいえ、結構な汗をかいているし。日射病にでもなったら大変だ。

「パパのおしごと、みてたい」

汐ちゃんはそう言って、修理を続ける朋也さんの方を見上げる。確かに、父親が仕事する姿とか、普段は見れないものだしね。

「……そっか。なら、おとーさんの仕事、しつかり見てあげてね」

「うん」

汐ちゃんの言葉で事情を察したのか、しろはは納得したような表情を見せる。

「私たちも一緒に居てあげるから。もし、おとーさんが失敗したら、怒ってあげるんだよ」

「うん」

「……なあ。さつきから、ものすごくやりにくいんだが」

手元は玄関灯に集中しながらも、俺たちのやり取りをずっと聞いていた朋也さんが、ひきつった表情を浮かべていた。

「パパ、がんばって」

「お、おう」

朋也さんは視線はずらさずに、一瞬だけ汐ちゃんの方に手を振って、修理作業に戻る。

「まったく、初めて芳野さんと一緒に仕事をした時より、汐に見られる今の方が緊張するな……」

……結局、俺たち三人は朋也さんが修理を終えるまで、その場を動くことなく見守っていたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、気がつけば俺としろは二人だけで縁側に座って、スイカを食べていた。

なんでこんなことになったんだっけ。玄関灯の修理が終わった後、朋也さんや汐ちゃんと一緒に居間に行って、そこで皆で談笑していたはずなのに。

話の流れで誰かが『お若い二人は別室でどうぞ』って言って。

また誰かが『それなら縁側が良いんじゃないですか?』って言って。気がついたら、こんなことになっていた。

どうしよう。まさかの展開だ。

しゃくしゃくとスイカを食べる。冷たくて美味しい。でも、冷えるのはお腹だけで、頭は冷えそうにない。

無言でスイカを食べていると、口の中に種がたまってきた。

「ぷんぷん」

俺はつい、その種を庭に向かって飛ばしてしまっていた。

「ちよつと羽依里、お行儀悪いよ」

直後、隣のしろはに怒られてしまった。

「ごめん、久しぶりにやってみたくなくて」

「まったく、子供なんだから」

しろははスイカの種をそのまま飲み込んでるみたいだった。スイカバーが好きなくらいだし、やっぱりスイカも種まで好きなんだろう

か。

「……ふう、ぐちそうさま」

スイカを食べ終わり、何の気なしに空を見上げる。

……大きな入道雲が出ていて、ものすごく、夏だった。

「ここ、なんでかそこまで暑くないね」

「そうだよな」

ここの縁側は内縁という種類で、直射日光が当たりにくい作りになっている。

それでいて、庭には草木が茂っているし、目の前の塀は竹製だ。涼しい風が通りやすいのかもしれない。

さらには軒下に風鈴がぶら下がっていて、時折涼しげな音が聞こえてくる。そのせいか、普段はうるさい蝉の声も、どこか遠くに聞こえるし。

……気がつけば、俺としろははそつと手を重ねていた。

この夏をしろはと一緒に過ごせている。それだけで、すごく幸せだった。

「……しろは、ひとつお願いがあるんだけど」

「え、なに？」

……でも、幸せがずっと続いていると、人間はそれ以上のものを求めてしまうものだ。

「……膝枕してほしいんだけど」

「ぶっ」

しろはが噴出していた。

「い、いいい、いきなり何を言い出すの」

「駄目かな」

この夏陰の中で、しろはに膝枕してもらえたら、至福の一時になりそうなんだけど。

「むむむむむ……」

ダメもとで頼んでみたけど、なんか悩んでるみたいだった。これは脈ありかも。

「ここなら、誰にも見られないとは思うけど？」

さつきも言ったように、庭の周囲は草木と竹塀で囲まれている。縁側も良い感じに隠れているから、誰かに見られる心配もない。

「ほ、本当に膝枕してほしいのっ？」

「うん、してほしい」

「……こういうのって、男の夢だから。」

「……そ、そこまで言うなら……ど、どうぞ」

しろははもじもじしながら、スカートのしわを整える。

「そ、それじゃあ遠慮なく」

俺はできるだけゆっくり身体を傾けて、しろはのふとももに頭を預ける。

「……うわ、柔らかい」

「わ、わざわざ声に出さないで」

しろはは涙目で、俺の顔を覗き込んできた。

「お、お願いだから、横向いて」

「え、なんで？」

俺としては、このまましろはの顔を見つめていたいんだけど。

「見つめられると、恥ずかしいから！」

確かに、顔が真っ赤だった。たぶん、俺もだろうけど。

「ほら、あっち向いて！」

しろはは身体を前後に揺らして、俺の方向転換を促す。でもしろは、そうやって揺さぶられるとその、ふとももの触感がより一層伝わってくるんだけど。

「わ、わかった。わかったから」

言われるがままに横を向くと、今度は俺の右耳がしろはの身体と密着する。うわ、めっちゃ心臓の音が聞こえるんだけど。

「~~~~~……」

その後、しろはは黙り込んでしまった。死ぬほど恥ずかしいに違いない。

でも、良いなこれ。すぐ近くにしろはを感じられるし。安心感からか、いい塩梅に眠くなるし……。

……そのまま眠りに落ちようかという時、塀の向こう側から小さな話し声が聞こえてきた。

「ちよつと奥さん、見てごらんよ」

「うわー、らぶらぶねえ」

「あの様子だと、同棲するって噂もあながち嘘じゃないかもしれないねえ」

……なんの話をしてるんだろう？

不思議に思つて、うつすらと目を開けると……塀に目があった。

「……え!？」

正確に言うと、塀の隙間から通行人がこっちを見ていた。どうやら、竹製の塀は経年劣化による隙間が何か所も空いているらしい。風が良く通るといふことは、そういうことなのに。なんで気づかなかつたんだろう。

「え? 羽依里、どうした……の?」

しろはも俺の視線を追つて、竹塀の方を見て……状況を理解したみたいだ。その顔から、みるみる血の気が引いていく。

「ひゃあああああー!」

次の瞬間、しろはが横に飛びのいた。

「え、ちよつと」

枕を失つた俺の頭は為す術なく落下して、廊下の板で思いっきりこめかみを打ってしまった。

「うおおお……」

目から火が出た。まさに、天国から地獄だった。

「あ、ごめん……」

「だ、大丈夫。とりあえず逃げよう」

まだじんと痛む頭をさすりながら起き上がり、俺はしろはと一緒居間に戻った。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あら、もつとゆっくりしてたら良かったのに」

居間に戻るが否や、鏡子さんが笑顔でそう言ってきた。

「いえその、ちよつと色々ありました」

どうやら、鏡子さんは麦茶を飲みながら、オツサンや早苗さん、岡崎夫妻と談笑していたみたいだった。

「かつ、大方膝枕でもしてもらって、途中で恥ずかしさに耐えられなくなって逃げて来たんだろ」

……大体当たっていた。

「オツサン、実は見てたんじゃないのか？」

「フ……付き合い始めたばかりの渚と小僧も、そんな感じだったからな」

「えっ、そ、そうでしたっけ。あまり朋也くんに膝枕をした記憶はないんですが」

「今も時々してやってるじゃねえか。部屋だよ」

「あ、あれは朋也くんが耳掃除をしてほしいと言って来るので、ちよつと積極的になっちゃってるだけです！」

「ぶっ!?!」

渚さんの一言で、朋也さんが、飲んでいた麦茶を吹き出しそうになっっていた。

なんだろうこの夫婦。子供もいるのに、今もラブラブなんだろうか。それはそれで羨ましいような気もするけど。

「……あれ？　そういえば汐ちゃんは何？」

その時、しろはが部屋を見渡しながら、そう問いかける。言われてみれば、夏海ちゃんの姿もない。

「はい、しおちゃんなら向こうの部屋で、夏海ちゃんと一緒に絵を描いていますっ」

渚さんが示す先、半分開いたふすまの向こうで、夏海ちゃんと汐ちゃんが畳の上に寝そべりながら、一緒に絵を描いていた。

なんとなく気になったので、俺はしろはと一緒に隣の部屋へと向かう。

「汐ちゃん、何を描いているの?」

「だんご」

「え、だんご?」

だんごって何だろう。

「……これ」

汐ちゃんが描いた絵を見せてくれた。丸い物体に、二本の線で目が描かれている。どこかで見たようなキャラクターだった。

「だんご、可愛いですよね」

夏海ちゃんも同じような絵を描いていた。どうも、汐ちゃんに合わせているみたいだ。

「汐ちゃん、上手だね」

「えへへ」

しろはが誉めると、汐ちゃんは嬉しそうに笑っていた。

「……できれば、汐には小さい時から絵心を身につけておいて欲しいからな」

「はい。それはわたしも思います」

隣の部屋から娘が絵を描く様子を眺めながら、岡崎夫妻が揃って意味深な顔をしていた。

「……あの、何か絵に嫌な思い出でもあるんですか?」

それが気になったのか、夏海ちゃんが絵を描く手を止めて、二人にそう質問する。

「……ほら、小学生の頃、授業で自画像って描くだろ?」

「はい。描きますね」

「わたしや朋也くんも小学生の頃、授業で自画像を描いた思い出があるんです。ただ……」

「ただ……?」

「一生懸命描いたのに、美味しそうなカレーライスですねって言われまじった」

「俺は頑丈そうなキャッチャーミットだなと言われたぞ」

「ええー……」

自画像描く授業なんだから、教師もわかっていそうなものなのに……カレーライスとキャッチャーミットはひどい。

つまり、両親揃って絵心がないから、せめて娘は……と言うことなのか。

お、俺としろはの場合は大丈夫だよな。しろはは絵が上手いし。

「……どうしたの羽依里、私の方を見て」

「いや、なんでもないよ」

「かつ、どうせ自分たちの場合は大丈夫だよとか、考えてたんじゃねえのか?」

「そ、そそそんなことはないから」

思いつきり動揺してしまった。やっぱりこの人、読心術でも使えるんだらうか。

「すっかり長居してしまって、すみませんでした」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

その後は結局、お昼近くまで談笑をして、オッサンたちは帰っていた。

「……なんて言うか、すごく幸せそうな家族だったね」

「本当だな」

俺としろはは玄関先に出て、笑い合いながら遠ざかっていく五人を見送っていた。

「……私たちも、ゆくゆくは……」

「え?」

「な、なんでもないし! 帰る。お邪魔しました!」

しろはは何か言いかけて、そのまま逃げるように走り去っていた。

俺は首をかしげながら、そんなしろはを見送っていた。

第三十二話 8月20日（中編）

「ぐう」

皆が帰ったと同時に、お腹が鳴った。

普段、家にお客さんを迎えることがないせいかな、知らず知らずのうちに気疲れしてしまったのかもしれない。

「夏海ちゃん、ちようどお昼だし、ご飯にしようか」

「はい！ どのカップうどんにしますか？」

「えーっと、そうだね……」

買い置きのカップうどんと相談した結果、今日のお昼は肉玉うどんにすることにした。

肉玉と言っても、お肉はフリーズドライのやつだし、卵はよくカットプラーメンとかにも入ってる黄色いアレだ。

「これで、お昼からの野球の練習に耐えられるかな……」

つい、そんな言葉が出てしまっていた。確かにお腹は膨らむけど、栄養価的には微妙なところだった。

「栄養面に不安があるなら、オクラや納豆を入れてみない？ お昼から、また野球の練習するんだよね？」

「はい、そのつもりですけど」

でも、オクラや納豆はカップうどんに合うんだろうか。

ちなみに、今日のお昼は鏡子さんも一緒だった。三人で一緒にお昼を食べるとか、久しぶりかもしれない。

「それじゃあ夏海ちゃん、何か良いトッピングがないか、一緒に探してみよう？」

「はい！ そうしましょう！」

そう言うと、二人は冷蔵庫の中や水屋の引き出しを漁り始めた。

「あの、俺も……」

「あ、羽依里君は居間で待っていていいよ。できたら、人数分のお箸を用意しておいてもらえるかな？」

「は、はい……」

俺も手伝おうとしたけど、笑顔で断られてしまった。まあ、台所の中なら二人の方が詳しいだろうし。

結局、俺は人数分の箸を用意して、大人しく居間で待っていることにした。

「……あら、乾燥ワカメがあつたわ」

「本当ですね！ これを入れれば、ポリューミーなカップうどんになりますよー！」

「夏海ちゃん、チューブのショウガもあつたよ」

「こっちは、チューブのニンニクが出てきました！」

「本当ね。スタミナがつきそう」

「……でもこれ、賞味期限が一年くらい過ぎてますよ？」

「賞味期限は美味しく食べられる期限だし、温めたらきつと大丈夫よ」

「そうですね！」

居間で待っていると、台所から楽しそうな声が聞こえてくる。

でも、賞味期限が切れたのはちよつと怖い。仮に熱を通したとしても不安だ。

というか、乾燥ワカメは前に地獄を見たから、できれば入れたくない。もし持つてきてくれた時は、断固拒否しよう。

「そういうえば夏海ちゃん、明日……だけど。どうするの？」

「あ……えーつと……」

……その時、二人の話し声が急に小さくなった。

「……まだ……りません」

「本当に……いの？ 後は私……とかできる……」

「……い。まだ……ませんから」

反射的に聞き耳を立てるけど、声が小さすぎて聞き取れなかった。

明日と言えばこの島の祭りの日だけど、何か二人だけの用事でも入ってるのかな。

気になったけど、今更台所に顔を出すわけにもいかず、俺は一人居

間で悶々としていたのだった。

「おまたせしました！ カップうどん、スペシャルトッピングですー！」
しばらくして、おぼんに三つのカップうどんを乗せた夏海ちゃんがやってきた。

三つのカップうどんには既にお湯が入れられているようで、完成間近といった感じだった。

「あれ？ トッピングはどこにいったの？」

確か、スペシャルトッピングとか言ってたけど。お盆の上にはふたがされたカップうどんが乗っているだけで、それらしい物の姿はない。

「はい！ もう全部入れちゃってますー！」

「え、全部!？」

「実はね。一つ一つ、入っているトッピングが違うの。どれに何が入っているかは、開けてみてのお楽しみだよ」

夏海ちゃんに続いて、鏡子さんが台所からやってきて、そう付け加える。

「それでは羽依里さん、好きなカップうどんを一つ選んでください！」

テーブルの上にカップうどんを横一列に並べて、夏海ちゃんが笑顔で選択を迫ってくる。なんとというか、ロシアンルーレットみたいで怖い。

「え、えーっと」

俺の前には、三つのカップうどん。どれもパッケージは同じだ。ぱっと見、違いはない。

「早くしないと、麺が伸びちゃいますよ?」

確かに、そろそろ3分経ってしまう。俺は覚悟を決める。

「じゃあ、これにするよ」

そして、真ん中のカップうどんを選んだ。

「なら、私はこれにしようかな」

「私はこれです！」

あとの二人も、それぞれのカップうどんを選んで食卓につく。

「それじゃ、いただきますーす」

三人揃って挨拶をして、同時にカップうどんのふたを取る。

「……うわ」

なんか、黒くて、緑で、茶色かった。そして匂いがすごい。

「おめでとうございます。それ、全部乗せですよ」

夏海ちゃんが笑顔でそう言っていた。全部乗せて、まさか。

乗せられているトツピングをよく見てみると、本来入っている肉玉の他に、ワカメに納豆、そしてオクラの姿が確認できた。そしてこの匂いの正体はニンニクだろう。納豆の匂いと相乗効果で、もの凄いことになってる。

先のトツトツプには負けてるけど、僅かに生姜の匂いもするし、本当に全部のトツピングが入ってるみたいだった。

「き、きつとスタミナはつくと思いますよ。栄養満点ですし、頑張って食べてくださいね」

夏海ちゃんはそう言いながら、自分のカップうどんをすすっていった。夏海ちゃんの中には、オクラとショウガが入っているみたいだった。

「うんうん。好き嫌いしちやだめだからね」

……鏡子さん、あなたがその台詞を言いますか。

確か、加藤家で一番偏食なのは鏡子さんだった気がする。

「食べないの？ 美味しいよ？」

そう言いながら、鏡子さんもカップうどんを口に運んでいた。

ちらりと見えた鏡子さんのトツピングは、納豆とワカメだった。

「男の子なんだし、しっかり食べないと」

……そうだ、俺も男だ。

「……いただきます」

俺は意を決して、スタミナうどんに成り果てた肉玉うどんに取りかかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

昼食を済ませ、俺たちは野球の練習のため小学校へと向かっていた。

ちなみに、ちょうど俺がカップうどんと格闘している頃、のみきが打ち合わせ通りに鉄塔から練習時間を放送してくれていた。これで練習時間に関しては問題は無いだろう。

「……うっぷ」

「羽依里さん、大丈夫ですか？」

むしろ、問題があるとすれば、俺の体調かもしれない。

「たぶん、大丈夫だと思う」

無慈悲に増え続けるワカメの海をかき分けて、無限に伸びる納豆の糸を振り切って、なんとかスタミナうどんを完食したまでは良かったんだけど。

それから今に至るまで、どんどんお腹が苦しくなってる気がする。たぶんこれ、乾燥ワカメがお腹の中で、まだ増えてるんじゃないだろうか。

「ぜえ、はあ」

一度立ち止まり、両膝に手をつけて息を整える。もう少しで住宅地を抜けられそうなんだけど。

「あ、羽依里ー、夏海ちゃんー」

その時、後ろから声をかけられた。振り向くと、そこには空門姉妹の姿があった。

「お二人とも、今日もよろしくお願いしますー！」

夏海ちゃんが元気よく挨拶をする。今日は姉妹揃って、体操服にポニーテール姿だった。

あの学校の体操服、初めて見たかもしれない。

「……なんですか羽依里さん、そんな目で蒼ちゃんを見て。視姦って

やつですか」

ちよつと藍、出会って早々変なこと言わないで。

「え、シカンって何？」

「蒼ちゃんは知らなくて良い言葉ですよ」

藍は蒼の肩に手を置いて、優しく論するように言っていた。というか、藍も自分の発言には責任持って欲しい。

「視線が気になったのなら謝るよ。ふたりの体操服姿って珍しいと思ってさ。やつぱり野球の練習用なのか？」

「そうですね。夏休みの間は、体操服も使いませんからね。どうせ汚れるなら、洗いやすいほうにしようと思ひまして」

「え、洗いやすい？」

「昨日の練習で、服が泥だらけになってねー。帰ってからおかーさんに、二人揃って怒られちゃって」

「あー、そういうことか」

二人は同じように疲れた顔をしている。あの練習の後、色々大変だったみたいだ。

「……それより羽依里さん、なんだか顔色が悪くないですか？」

その時、藍がそう言いながら近寄ってきた。

「うん、ちよつとワカメ地獄が……って」

ちよつと藍、顔近いんだけど。正直、今は口臭気になるから、あまり近づかないでほしい。

「羽依里さん、ちよつと張り切ってお昼ごはんを食べ過ぎてしまったみたいで」

「ああ、自業自得というやつですか」

夏海ちゃんの手を聞いて、藍は何か納得したみたいだ。

「……羽依里さんのために、ゆっくり歩いて行きましょう」

そう言って、藍が先頭に立って歩き出した。会ってすぐにイニシアチブを握られている辺り、俺も鳥白島少年団のヒエラルキーに組み込まれ始めたのかもしれない。

そして田舎道にさしかかると、例の木の下に誰かが座っているのが見えた。

「あれ。美魚ー、何してるのー?」

近づいてみると、木陰に西園さんがいた。日陰に座っているのに、何故か日傘をさしている。

「美魚ちゃん、また読書ですか?」

「はい。ここは気持ちが良いので」

確かにこの場所はこの時間帯でも涼しいし、過ごしやすいと思う。

「それ、お気に入りの歌集でしたっけ?」

藍が美魚の隣に座り込んで、その膝の上に広げられた本を覗き込む。

「はい。面白いですよ」

「やっぱり、お気に入りの歌とかあるのー?」

蒼が西園さんを挟んで、藍の反対側に座り、そう質問をしていた。

「そうですね。やっぱり……これです」

そう言つて、西園さんがゆっくりと歌集のページをめくる。やがて葉が挟まれたページで手が止まり、一つの歌を指し示す。

『白鳥は かなしからずや 空の青 海をあをにも 染まずただよふ』

「えーつと」

歌の意味が解らないんだろうか。蒼が反応に困っていた。俺もよくわからないけど。

「……空の青色にも海の青色にも混ざれずに、一人で漂っている白鳥は寂しくないのだろうか。という歌です」

俺たちの沈黙の意味を悟ったのか、西園さんが解説を入れてくれた。

「なんとなくだけど、寂しい歌だな」

「そうですね」

夏海ちゃんも俺と同じような印象を持ったんだろう。神妙な面持

ちで頷いていた。

「そうですねか？ 私は寂しい歌とは思いませんけど」

一方で、そう言うのは藍だった。

「だって、四方八方を蒼ちゃんに囲まれてるんでしょ？ そんなの、寂しいはずがないじゃないですか。むしろ、最高に幸せですよ」

そう言いながら移動し、蒼に後ろから抱きついていた。

「……ぷっ」

次の瞬間、西園さんが噴出していた。

「なるほど、そう言う捉え方もありますね」

自分のお気に入りの歌の、新たな一面を見つけた感じだろうか。西園さんは嬉しそうに笑っていた。

「ちなみに、この歌の『白鳥』はカモメを意味しているらしいですよ」

「ほう、鴟」

そう聞いた途端、俺の頭の中では、スーツケースに乗った鴟が海の真ん中で途方に暮れている場面しかイメージできなくなってしまった。

いや、鴟なら途方にくれたりせずに、何故か持っていた釣り竿で魚釣りとか楽しんでそうだな。ポジティブだし。

その後もいくつか気になる歌を見つけては、その意味を美魚に聞いたりしていた。なんだかんだで、すごく勉強になった。

……そんな会話の中で、思わぬ事実が発覚した。

「え、美魚は野球の試合に出ないの？」

「はい。私は運動が苦手なので」

そういうえば、西園さんが野球の練習をしているという話を聞いたことがない。

「その代わり、当日は実況を務めさせてもらいます」

「ちよっと待って。実況？」

物静かな感じだし、とても実況が出来るようには見えないんだけど。あれだろうか、マイク握ったら性格変わるタイプなんだろうか。

「意外な才能を持つてるんですね」

「ほんとよねー」

空門姉妹が揃って感心していた。

……はて。そういえば、何か忘れているような。

「そういえば、蒼さんたちはどうして体操服なんですか？」

「あ」

西園さんにそう言われて、俺たちは本来の目的を思い出した。

「そういえばあしたたち、野球の練習に行く途中だったわね」

「そ、そうでした。すっかり忘れていました」

「西園さん、今の時間ってわかる？」

「今の時間ですか？」

俺の問いかけに、西園さんはシンプルなデザインの時計を見て、時間を見てくれる。

「……13時ちようどですね」

……しまった。遅刻だ。

「そ、それじゃ、あしたたちは行くわね！」

「はい。野球の練習、頑張ってください」

「ありがとねー！」

「西園さん、またです！」

西園さんに手を振りながら、皆で一斉に駆け出す。

「……まったく、今更走っても遅刻してることには変わりはありません。遅れたからと言って怒る人もいないですし、いつそのこと、ゆっくり歩いて行っても……」

最後尾の夏海ちゃんの走る速度に合わせてながら、藍がぶつぶつ言っていた。確かにそうかもしれないけど、遅刻するのは事実だし、急がないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「てめえら、時間を指定しておきながら遅刻してくるとは、いい度胸だ

な。ああ？」

……めちやくちや怒ってる人がいた。持っているバットとサングラスも相まって、かなり怖い。

「まあまあ、そう怒らないであげてください。秋生さんも、ついさつき来たところじゃないですかっ」

「あー！　こら早苗、バラすんじゃないっ！」

いや、この人も同類だった。まさに五十歩百歩だった。

「よし。さっそく練習始めるぞ……と言いたるところだが、実はお前らの他にも、まだ来てねえ奴らがいやがるんだよな」

「え、そうなのか」

「っわけで、ヘナチン小僧たちは少し自主練してな。夏海、ちよつと来い」

「はい！　監督！」

俺たちは自主練を言い渡された一方で、夏海ちゃんはオッサンに呼ばれていった。

俺はついでに行くわけにもいかず、誰か練習相手でもないかとグラウンドを見渡す。

「よし、いっくぜー！ー！」

「おおおー！ー！」

「わふー！ー！っ！」

賑やかな声が見てみると、スーツケースに乗った鷗とクドを真人が押していた。

「くーちゃん、しっかり掴まってないと振り落とされるよー！」

「わーふー！　マッスルスーツケースなのですー！」

「筋肉が通りまーす！　相当な筋肉が通りまーす！」

砂埃をあげながら、ガラガラとスーツケースがゆく。すごく楽しそうだったので、邪魔をしないようにした。

ちなみに真人やクドの他にも、グラウンドには恭介や葉留佳、佳奈多といったリトルバスターズメンバーが目につく。

元々彼らの練習時間じゃないのもあって、自由気ままに遊んでいる

のかと思いきや、葉留佳や佳奈多は空門姉妹とキャッチボールをしていた。なんと言うか、走りながらキャッチボールをするという、変わった練習をしていた。

「うーん」

しろははのみきとキャッチボールしているし、良一は天善とバットでピンポン玉を打ち合っていた。

特に練習相手も見つけられなかったので、俺はキャッチャーミットを弄びながら、オッサンと夏海ちゃんのやりとりを眺めることにした。

「夏海、テメエは唯一の経験者で、ピッチャーだ。つまり、リトルバスターズの連中とまともに試合をするには、テメエの力が必要不可欠なわけだ」

「はい！」

「昨日見せてもらった球種の中なら、決め球はナツクルでいきな」

「え、ナツクルですか？」

「そうだ。相手は野球部じゃねえとはいえ、高校生だろ。だったらストレート勝負はやめとけ。鍵を握るのは不規則に変化するナツクルだ」

ナツクルっていうと、あのブレ球かな。それにしても聞き慣れない球種だ。俺の世代だと、ナツクルっていうと赤いハリモグラが浮かぶんだけど。

「いいか。ピッチャーってのは、球が速けりや良いってもんじゃねえ。重要なのはコントロールド」

「はい！」

「できるだけインハイとアウトローに集めるんだ。これなら打たれても、そこまで飛ばされねえ。内野で処理できる」

オッサンが地面に図を描いて、夏海ちゃんに説明をしていた。俺にはよくわからないけど、経験者の夏海ちゃんには理解できるんだろう。

「もしくは、低めのボールゾーンから捕球直前にストライクゾーンに

浮き上がる魔球を教えてやってもいいが、あれはサブマリン投法か、最低でもサイドスローじゃねえとな。今更投球フォームを変えるのも無理があるしよ」

よくわからないけど、やっぱりオッサンはプロに行った方がいいと思う。

「……でもナツクルってブレるので、正確な位置に投げにくいんですよ」

夏海ちゃんもそこを気にしていた。もしかして、朝練で俺が捕球しそこなつたのって、ナツクルだったのかな。

「かつ、それがこっちの狙いだ。ピッチャーだつてどこに飛ぶかわからねえボールだぞ？ バッターも簡単にコースを予測できねえ。だからこそ、ストライクかボールかギリギリの場所に投げられるよう、練習するんだよ」

「そ、それはそうですけど……」

「うじもじ言つてねえで、練習だ！　そこで暇してるへナチン小僧！　キャッチャーをやれっ！」

「え、俺!？」

「そうだ！　パンダのようにキリキリ働け！」

いつの間にか見られていたみたいだ。その後は言われるがまま、夏海ちゃんのボールを受けることになった。

「むぎゆ、遅れてしまいましたー」

しばらく夏海ちゃんと投球練習をしていると、紬と静久がグラウンドに姿を現した。まだ来てない二人って、紬たちのことだったのか。

今思えば、あの二人は元々練習時間を知らなかったわけだし、放送を聞いてから準備を始めても、灯台からやってこなきやいけない。多少の遅れは仕方ないよな。

「ようやく来やがったな。これで全員だな。よし、集合ー」

なんにしても、これでメンバー全員が集まった。オッサンの号令で集合した後は、夏海ちゃんがピッチャー、俺がキャッチャーを務めて、

バッティング練習が始まった。

「よしお前ら、しっかりボールを見て、合わせていけよー！」

昨日に引き続き、紬やしろはを中心にオツサンが指示を出していた。

「……あ？ しろはお前、急に上手くなってね？」

そんな中、オツサンがそう言って驚いていた。

どうやら、しろははチャーハン打法を完全にマスターしたみたいで、時折外野の方まで飛ばしていた。

「しろは、すごいな」

「え？ そう、かな……」

夏海ちゃんの投げる球に対して、タイミングは完璧に合っていた。僅か一日でここまで上達するなんて。チャーハン打法恐るべしだ。

「えいー」

「むぎいー……」

一方の紬も、夏海ちゃんのボールを器用に左右に打ち返していた。長打ではないけど、一塁や三塁を強襲するようなライン際の当たりを連発していた。結構な確率でフェアになっているし、なんであることができるんだろう。

「すごいな紬。それがおっぱい打法なのか？」

「そうです！ 昨日も夜遅くまで、灯台でバットを振り続けました！」

紬は笑顔だった。髪が邪魔にならないように結われたポニーテールが、すごく似合っている。

「紬、すごいわ。特訓の成果が出ているわね！」

少し離れたところから紬の打席を見ていた静久も、ごく満悦だった。「でも紬、おっぱい打法の神髄はまだだよ。完全にマスターすれば、バットを振る度にクーパー靱帯が鍛えられるようになるの。つまり、おっぱいが大きくなるのよ！」

「はい！ 頑張りますー！」

色々と言いたいことはあったけど、二人が楽しそうにしていたので野暮なことは言わないことにした。

「よし、次は夏海がバッティング練習してみる。ほら、カーボンバットだ」

「ありがとうございますー！」

紬たちの次に、オッサンは夏海ちゃんにカーボンバットを渡していた。小学生の夏海ちゃん専用の、軽くて扱いやすいバットらしい。

「オッサン、そのバットはどこにあったんだ？」

「最初、ハイドロ嬢に聞いたら駄菓子屋に行けって言われてよ。その駄菓子屋で店番のばーさんに聞いたら、店の奥からすぐに出てきたぜ」

さすが、この島の駄菓子屋だった。その時必要なものは大抵揃うらしい。

「イーストンのBXハイブリッドでいいかと言われたから、即OKしといたぜ」

バットのメーカーとかよくわからないけど、すごく使いやすそうなバットだった。

「でも私だけ、こんなの使っちゃって良いんでしょうか？」

「心配すんな。ちゃんと恭介から使用許可をとってある。全然構わねえってよ」

昨日の夜、恭介から練習時間を聞いた時に、ついでに使用許可を取ってくれたんだろう。

よく見ると、グラウンドの隅で恭介が親指を突き立てていた。OKというサインだろう。

「それじゃあいくぜ。まずは全部直球だ。打ち返してみな」

「はいー！」

オッサンはそう言うと、グローブをつけてマウンドに立つ。

「……えいー！」

数回の空振りを経て、夏海ちゃんはオッサンの球を上手く打ち返し始めた。

カーボンバットのおかげもあるんだろうけど、結構飛んでいた。さすがは経験者だった。

「……なかなかいい素材のようだな」

バッテリーボックスの斜め後方から練習の様子を見ていたのみきが、そうこぼしていた。恐らくカーボンバットのことだろう。

「……うまく水鉄砲の素材に転用できないだろうか。ハイドログラデーターBXハイブリッド。なかなかかっこいい気がするぞ……」

ちよつとのみき、心の声が漏れてるんだけど。

「ハイドロ嬢、なんならお前もカーボンバット使っても良いんじゃないかね？ 身長は小学生並みだろ？」

「そ、それは……いや、せっかくだが、遠慮しておこう」

一瞬躊躇して、のみきは去っていった。なんだろう。ちよつとだけ試してみたかったんだろうか。その、素材的な意味で。

その後はピッチャーが夏海ちゃんに戻り、良一や蒼といった実力者の打撃練習に入る。

「ヘナチン小僧、しっかりボールを取りやがれ！ キャッチャーが獲れなきゃ、話になんねえぞ！」

いわゆる強打者相手になってからというもの、オッサンの指示で夏海ちゃんはナックルばかり投げていた。

だいぶ慣れてはきたけど、やっぱりブレるから捕球しづらかった。もう少し慣れないと。

「うりやー！ー！ てりやー！ー！」

「あ、そういえば鷗」

「……え、羽依里、何？」

その後、ナックルボールが相手でも相変わらずヒットを量産していた鷗を見ていると、ふと疑問が浮かんだ。

「お前、打撃はすごいんだけど、走塁の時どうするんだ？」

「え、スリットケースに飛び乗って、その勢いでガーって滑っていくつもりだったんだけど。ダメかな？」

「たぶん駄目じゃないかな」

確かに鴫は足が悪いし、普通に走るよりかは速いかもだけど。ルー的にどうなんだろうか。

というわけで、恭介に相談してみることにした。

「え、走塁の時はスツーカーに乗る？」

守備妨害なんてレベルじゃないし、さすがに無理だろうか。

「OKだ。理由は簡単。面白すぎるからだ」

「わーい！」

「足を怪我してるんだったな。野球好きなのはわかるが、悪化させないように気をつけてくれよ」

「うん！ きよーすけさん、ありがとう！」

ちなみに、恭介は鴫が素早く動けないという理由で、俺たちの守備の時に鴫のスツーカーにボールが当たったら問答無用でアウト、という特別ルールも設けてくれた。

彼曰く、そのほうが面白いから、らしい。なんにしても、ありがたい話だった。

「……よし、15分休憩だ！」

バッティング練習の後、オッサンからそう指示が出て、場の空気が少し緩む。

グラウンドの隅には日陰もあるので、そこに皆で集まって休むことにした。

「ようやく休憩か。古河氏の指導はなかなかハードのようだな」

「皆さん、お疲れ様です」

休憩時間になったのを見計らってか、リトルバスターズの皆がスपोर्टドリンクを差し入れてくれた。これは嬉しい。

そしてこの頃になると、グラウンドにいるリトルバスターズの顔ぶれもだいぶ様変わりしていた。

恭介や真人といった男性陣がいなくなり、西園さんや来ヶ谷さん、

小毬さんといった女性陣が増えていた。

……気がつけば、何故か俺の周りは女子だらけになっていた。

右にしろは、左に夏海ちゃん。それからまるで円を描くように、女性陣が勢ぞろいしていた。

「恭介さん×直枝さんの組み合わせが鉄板なんですけど、この島に来て三谷さん×鷹原さんの組み合わせも良いのでないかと思うようになりました」

「ごめん。あたしには理解できないわー」

「むさくるしいです。獣の絡み合いですね」

藍は呆れ、蒼は額に手をやりながら頭を抱えていた。あの辺は一体何の話をしているんだろう。

「どうせなら来ヶ谷さん×小毬さんとかどうですか。男の子同士より、女の子同士の方が美しいですよ」

「うむ。私は構わないが、小毬君がどうかかな」

「ふええ、何の話!?!」

もう、どっちもどっちだった。

「あの人たち、さつきから何の話をしてるんでしょう?」

「夏海ちゃん。世の中には知らない方が良いこともあると思う」

「は、はあ……?」

でも、このままだと夏海ちゃんに悪影響を及ぼしかねない。ここは話題を変えてもらわないと。

「ごめん皆。できればまともで一般的な話をして欲しいんだけど。夏海ちゃんもいるしさ」

俺はおずおずと手をあげて、そう進言する。

「……仕方ないですね。この話はここまでにしましょう」

さすがに内容が悪いと気づいたんだろう。さすが藍おねーちゃんだ。

「……じゃあ、コイバナでもしますか?」

「は?」

「まともな話でしょう?」

「た、確かにそうだけど」

「あ、ガールズトークってやつねー」

さつきまで敬遠気味だった蒼も、その話には食いついてきた。この辺は大好物だろう。

「ちよつと待って。お願いだから」

「そういえば、クドちゃんと井ノ原さんって、仲良さそうですね？」

さつきも一緒に遊んでましたし」

「わふ？」

俺の訴えも空しく、ガールズトークとやらが始まってしまった。どうしよう。逃げたい。

「クドリヤフカ、正直なところどうなの？ 答えによっては、ルームメイトの元風紀委員が黙ってないわよ？」

「佳奈多君、安心しろ。見たところ能美女史と真人少年はそんな関係ではない。良く見えて兄妹だろう」

「まあ、言われてみればそうね……」

来ヶ谷さんの発言に、佳奈多は納得顔だった。

「じゃあほら、謙吾とか、学校で人気あるんじゃない？ ちよつと頭のネジ飛んでる部分もあるっばいけど、見た目はいいし」

蒼、なんかさらつと失礼なことも言ってる気がするけど。

「うむ、謙吾少年にはソフトボール部と弓道部に彼女がいるという噂だ」

「え、それってもしかして二股!? 修羅場じゃない!? ということは、行きつく先は……!」

「うむ。蒼君は今日も相変わらずピンクだな。おねーさん安心したぞ」

来ヶ谷さんは頬を赤く染める蒼を、頷きながら見ていた。おーい蒼、帰ってこーい。

「そう言う来ヶ谷さんは、浮いた話はないんですか？ 見たところお綺麗ですし、すごくモテそうですけど」

……どうも、ここの女性陣には俺の姿が見えていないらしい。それくらいのガールズトークが展開されていた。

そういえば、天善たちはどこに行っただろう。

気になつて周りを見てみると、天善は良一と遙か向こうの日陰で駄弁っているようだった。俺もそつちに行きたい。

「私の事より、この島の恋愛事情はどうなんだ？」
「は？」

「どこことなく近寄り難い、ミステリアスな雰囲気を持つ少女に、美人双子姉妹、癒し系金髪ハーフ少女、スーツケース少女に水鉄砲少女……見ろ。よりどりみどりだぞ」

「……ちよつと待って。私つて近寄りにくい？」

来ヶ谷さんの例えに対して、しろはがツツコんでいた。

「そうだな。鷹原少年と居る時はそうでもないが、それ以外の時だと『私に関わらないほうが良いよ』オーラが出ているぞ」

「そ、そんなことないと思うけど……」

なんか納得いかないようで、むにやむにや言っていた。近寄りがたしいイメージなんてないけど。

「それはそれとして、これだけ美人揃いだと、我々以上に色恋話が多いことだろう。島には好色男が多いというのが通説だしな」

来ヶ谷さん、その通説はこの島には当てはまらないと思う。男は変わり者だらけだし。

「え、えつと……その、残念ですが、私たちにはそんな浮いた話はないですね。あるとすれば、しろはちゃんくらいじゃないですか？」

振った話題を見事にブーメランされた藍だったけど、そのままうまく受け流した。

「おー、そういうえば、しろはちゃんと羽依里くんつて付き合ってるんだよね？」

……つて、やばい。結果的に矛先がこつちに向いた。これは、いよいよ逃げないと。

そう思つて立ち上がろうとするけど、何故か右側のシャツが掴まれていた。

「え、しろは？」

「……お願い、行かないで。ここに一人残されたら、恥ずかしくて死んじゃいそう」

俺にしか聞き取れないような小さな声でそう言われた。それに、思いつき涙目だった。

「わ、わかった。わかったから」

しろはにそう言われたら、ここは観念するしかないさそうだ。

「さあ鷹原少年にしろは君、洗いざらい喋ってもらおうぞ」

「喋ってもらいますヨー」

どうやら急に俺の姿が見え始めたみたいだ。なんて都合のいい。

その後は休憩時間が終わるまで、ひたすらしろはと一緒に質問攻めにされることになった。

ちなみに、俺はその多くの質問に対し、黙秘権を行使した。

さまーあばんちゅーるって言葉、便利だよな……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

休憩を終えた後は、守備練習を行った。

オツサンがノックした球を、その都度捕球する。

定期的なポジションを変えるように指示が出され、内野から外野まで、全員がまんべんなく守備をした。

ちなみに、俺は練習を免除されていた。ノックの時にはキャッチャーはいらないって言われたし、俺のポジション、ほぼ決まりだろうか。

「オラオラ、紬もしつかり捕れよー！」

それにしても紬、ゴロの処理には手間取ってるみたいだけど、フライは獲るの上手だ。逆にしろははゴロを取るのが上手だった。

オツサンの指導のおかげか、皆エラーの回数が減ってきてる気がする。

「……よし、そろそろいいか。お前ら、ちよつと集まれ！」

しばらくして、オツサンから号令がかかった。

「今から、お前らのポジションを発表する！」

どうやら、オツサンは俺たちの適性を考慮したうえで、独自にポジションを決めてくれたらしい。

「だが、今から発表するのは、あくまで俺様の独断だ。文句がある奴は言え。いくらでも変えてやる！」

オツサンはそう前置きをしたうえで、発表に移る。オツサンの指導力の高さは身をもって感じたし、誰も文句は言わないだろう。

「まずは投手。ピッチャーは夏海だ！」

「はい！」

これはもう、夏海ちゃん以外に該当者はいないと思う。このチームのエースとして、頑張ってもらわないと。

「次に捕手。キャッチャーはヘナチン小僧、テメエだ！」

「わかった」

キャッチャーに指名されたのはやっぱり俺だった。もう何度となく夏海ちゃんのボールを受けているし、これも予想できていた。

「次は一塁手、ファーストは蒼だ！」

「いいわよー」

「そしてセカンドは藍だ！ 双子のコンビネーションを見せてみる！」

「任せてください」

一塁と二塁周辺を守るのは空門姉妹だった。二人の高い身体能力は、内野でボールを処理する時の要になるだろう。

「次は遊撃手。ショートは卓球野郎だ！ お前の身体能力を買ってやったんだからな。ハマすんじゃねえぞ!」

「ああ、任せてくれ」

二塁ベースを挟んで、藍と反対のポジションだ。ショートは一番ボールが多く飛んでくる場所でもある。日々のトレーニングで鍛えた天善の反射神経に期待したい。

「そして、三塁手。サードはしろはだ！」

「うん。頑張る」

さっきの練習を見ていたら、しろははゴロの処理が上手かったし、適正なポジションかもしれない。

「次に外野だ。まずは左翼手、レフトは紬だ！」

「むぎゆ!？」

練習を見ていたら、紬はフライを取るのが上手だった。外野を任せられるのも良いかもしれない。

「ということは、紬の近くには加納君が控えてくれているわけね。頼もしいわ」

「は、はい！ お任せください！」

静久に期待されてか、天善がびしっとラケットを構える。悪いけど天善、ここはバットかグローブを持ってほしかった。

でもこれ、状況によっては、天善はショートからレフト方向全般を守るんだろうか。それはそれで頼もしいけど、体力が保つのかな。

「次に中堅手。センターは良一だ！ 外野のど真ん中。一番花形のポジションだからな。頼んだぞ？」

「ああ、目立ってやるぜ！」

センターが一番守備範囲が広いし、体力のある良一に任せるのが適切かもしれない。

「最後は右翼手。ライトは鷗だ」

「え、私なの？」

「聞いた話によると、スーツケースにボールが当たったらアウト扱いなんだろう。これを生かさないと手はねえ」

「でもオツサン、それなら鷗を内野に置いたらいいんじゃないか？」

そっちのほうがスーツケースにボールが当たる確率は高いと思うんだけど。

「ショートの天善とライトの鷗を入れ替える手も考えたんだが、それだと天善の反射神経を活かせねえからな」

なるほど、確かにデメリットも大きい。

「ま、気になるようなら状況に応じて守備位置をコンバートすりゃいい」

そういえば、守備位置の入れ替えてのもできるんだっけ。野球っ

て奥が深い。

「鷗も最悪、ボールを取れそうになけりや、イチカバチかスーツケースをぶん投げな。それにボールが当たりや、アウトにできる」

「うんー」

そっか。こつちが守備の時なら、投げたスーツケースにボールが当たってもアウトになるのか。それはそれで、すごいルールだけど。

「……ポジション発表は以上だ」

あれ、のみきと静久の名前が呼ばれなかった。

……そうか、野球は9人でやるスポーツだし、11人いると、どうしても余っちゃうわけだよな。

「あー、選ばれなかった二人もへこむなよ？ お前らは攻守に活躍できるしな。代打や代走要員として待機しておけ。いわば切り札だぜ」
「ああ、例え試合途中からでも、しっかりと実力を発揮できるように努めよう」

「ええ、パイ打はいつでも任せてね！」

うんうん。二人とも気落ちした感じはない。代打で呼ばれた時は、是非おっぱい打法の神髄を見せてほしいところだ。

その後は各自、与えられたポジションを中心に守備練習を行う。

気がついたら、リトルバスターズのメンバーは誰もいなくなっていた。どうやら帰ったみたいだ。

「よし、集合！」

それぞれのポジションに良い感じに慣れた頃、オッサンから集合がかかる。

「テメエらよく聞け。もう少ししたら、早苗が売れ残りのパンを持ってくる」

「え、パン？」

まさか、昨日と同じ流れだろうか。

「いいか。どんなパンが出て、残さず食え。絶対に食え」

オツサンの顔が怖かった。正直、野球の指導をしている時より怖かった。

「もし残したら、明後日の試合に出られない体にしてやるからなっ！
覚悟しとけよっ！」

それは本末転倒になるので、本当にやめてください。

「皆さん、練習お疲れさまでしたっ」

それから五分と経たないうちに、昨日と同じように『古河パン』と書かれた箱を持った早苗さんがグラウンドにやってきた。

今日は午後から姿を見ていなかったけど、やっぱり港でパンを売っていたのだろうか。

「すみません。今日もまたこれだけ売れ残ってしまいました。また食べたいだけでも良いですかっ？」

そう言いながら、早苗さんは俺たちの方に箱を差し出してくる。

「あの、これは？」

「だんごパンですよっ」

……だんごパン。

真っ白い生地に、線のような模様が描かれていた。午前中、加藤家で汐ちゃんを描いていた絵にそっくりだった。

「どうぞ、召し上がってくださいいっ」

「ありがとうございます」

俺たちは努めて笑顔でそのパンを受け取る。何故なら、早苗さんの後ろに立っていたオツサンが、鬼のような形相で俺たちを睨んでいたからだ。

「それじゃ、いただきます」

見た目も蒸しパンみたいだし、昨日ほどの衝撃はないと信じたい。

もし何かあっても、皆一緒だ。イチレンタクシヨーというやつだ。

そんなことを考えながら、覚悟を決めてだんごパンにかじりついた。

「む、ぐうっ！」

食べると、パンの中に本物のみたらしだんごが大量に入っていた。

ものすごくその、もっちもちだった。

「お味はどうですかっ？」

「と、とっってもおいしそうでした！」

夏海ちゃんが上手に切り返していた。

「む、むごっほ！　ごほ！」

俺は頑張つて飲み込もうとしたけど、無理だった。

美味しいけどその、やっぱり口の中の水分を持っていかれる。リトルバスターズからもらったスポーツドリンク、残しておけばよかった。

「わ、わたしのパンは、わたしのパンは……」

「あ」

「むごっほだったんですねええー！　！」

あああ、またどこかに走って行ってしまった。

「くそっ……お前ら、今日の練習はここまでだ！　明日は祭りもあるし、朝9時にはここに集まれよ！　今度は遅刻するんじゃないぞ！　わかったな！　俺は大好きだ——！　！」

オッサンは俺たちにそう伝え残すと、だんごパンを手を取って、そのまま早苗さんの後を追ってグラウンドから走り去っていった……。

結局、練習は強制終了となってしまうたので、俺たちも解散することにした。

「羽依里さん、これからどうしますか？」

小学校の正門前で皆と別れた後、夏海ちゃんと二人、暇になる。

「うーん、そうだね……」

小学校の壁につけられた時計を見ると、14時半を少し過ぎたところだった。練習内容が濃かったせいかな、そこまで時間が経っていない。

……そうだ。そういえば恭介が浜辺で釣りをするって言ってたっけ。

「夏海ちゃん、ちょっと浜辺に行ってみない？」

「え、浜辺ですか？」

「うん。恭介が釣りをしてると思うんだ」

「ここからだ、少し南の方に行けば浜辺にたどり着けたはずだ。
「良いですね。行ってみましょう！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

浜辺についてみると、少し離れた岩場のところで、恭介が釣り糸を垂らしていた。その近くには、鈴と理樹の姿も見える。

「皆さん、こんにちわです！」

「恭介、調子はどう？」

近寄って声をかけてみると、恭介はがっくりと肩を落としていた。

「羽依里と夏海か……見ての通りだ。フィッシュ斉藤の名が泣くぜ」

恭介がそう言いながら指差す先には、大量のワカメが入ったバケツがあった。もしかして、ワカメしか釣れなかったのだろうか。

「なあ理樹、恭介って釣りが上手いんじゃないのか？」

「ううん。そこまで上手いわけじゃないよ……好きなのは好きみたいだけどさ」

「こんなに暑いんだ。魚も夏バテして、食欲無いんだろう」

鈴が腕組みをしたまま、恭介にそう言葉をかけていた。彼女なりの慰めみたいだ。

ちなみにそんな鈴の周りには、釣りのおこぼれを狙っていたのか、数匹のネコがたむろしていた。本当にしま猫団のボスだな。

「悪いが食べさせてやる魚もないな。ワカメでいいか」

恭介はバケツから適当な大きさのワカメを取り出して、ネコたちの前に置く。

「いやー」

相当腹が減っていたのだろうか、何匹かのネコがワカメをかじり始めた。

「おー、ワカメ食ったぞこいつら」

「こら、変なもん食わすなっ」

「別に良いじゃないか。ワカメはうまいぞ。なあ羽依里」

「そ、そうだな……うっぷ」

ほとんど忘れかけていた、お昼のスタミナうどんを思い出ししまった。確かにワカメは美味しいけど、勝手に増えるのは勘弁だった。

「やれやれ、ちよつと場所を変えてみるか」

深いため息をつけてから、恭介は釣り竿とバケツを持って立ち上がる。そしてふらふらと岩場と砂浜の境目にある、小さな突堤の先へ歩いて行った。

「どうだ？　ここなら海が近いし、少しは釣れそうぞ」

「あ。恭介、そこだけど」

「……ぶわっ!？」

時々高い波が来るから気をつけて……って言おうと思ったけど、間に合わなかったみたいだ。

「……しまった、ずぶ濡れだ」

恭介はしたたる海水を拭いながら、急ぎ足で突堤から戻ってくる。

「恭介おにーさん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。夏だし、風邪をひくこともないだろ」

「でも恭介、いったん着替えに戻った方が良いよ」

夏海ちゃんに続いて、理樹が心配そうにそう言う。恭介はTシャツに短パン、それに麦わら帽子というラフな格好だけど、このままだと生乾きになって気持ち悪いと思う。

「そうだな。これは一度着替えに戻ることにするか。鈴も帰るぞ」

少し離れたところでネコたちと遊んでいた鈴にも声をかけてから、恭介たちは帰っていった。

目当ての人もいなくなったし、俺たちも戻ろうかと話をしていると……浜辺の方に見知った顔を見つけた。

「あれって、汐ちゃんたちですよね？」

「本当だ。この暑い中、浜辺で何をしてるんだろう」
気になったので、声をかけてみることにした。

「朋也さん、どうも」

「ん……ああ、鷹原と夏海か」

「おふたりとも、こんにちわですっ」

「こんにちわ」

朋也さんに続いて、渚さんや汐ちゃんともあいさつを交わす。

さすがに暑いようで、朋也さんは首に濡れタオルをかけているし、渚さんは日傘、汐ちゃんは麦わら帽子に水筒と、しっかりと暑さ対策をしていた。

「そういえば朋也さん、朝方はありがとうございました」

その時改めて、朋也さんに玄関灯を直してもらったお礼を言う。

「気にしないでくれ。もし今日明日中に不具合が出るようなら、また言ってくれな」

お礼を言われ慣れていないのか、朋也さんは恥ずかしそうに視線をそらしていた。

「朋也くんは、もつと自分の腕に自信を持っていきたいと思いますっ」

「うん。じしんもって」

「よしてくれ。俺なんてまだまだだ」

渚さんと汐ちゃんが左右から朋也さんを励ましていた。本当に仲のいい家族だと思う。

「あの、ところで汐ちゃん、そのヒトデはなんですか？」

その時、夏海ちゃんが不思議そうな顔をして、汐ちゃんが持っていたヒトデを見ていた。

「ふうちゃんのおみやげ」

「お土産、ですか？」

よくわからないけど、ヒトデが好きな友達がいるんだろうか。

うのようによと動いているし、どう見ても生きている。

「わざわざ本物じゃなくても、ぬいぐるみとかの方がお土産らしいと

思うけど……」

紬とかなら、ヒトデのぬいぐるみとか持っていきそうだし。

「ヒトデのぬいぐるみは、わたしたちの街でも買えますけど……生き
てるヒトデはこの島じゃないと見つけられないですし」

「うん」

なるほど。お土産だし、この島ならではのものが良いんだろう。そ
う言われてしまうと、返す言葉がなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、朋也さんたちは夕食の準備があるからと、港の方へ行つて
しまった。

再び暇になった俺たちは、駄菓子屋にやってきていた。

「ポンー！」

「よう、イナリ。今日も元気そうだな」

「ポンポンー！」

ベンチの下にいたイナリに声をかけてから、夏海ちゃんと二人で駄
菓子屋に入る。

「くーださいな」

店内には、店番の空門姉妹と……鈴がいた。

恭介たちと一緒にホテルに帰ったと思ったんだけど。いつの間に
駄菓子屋に来たんだろう。

俺は疑問に思いながらも、カウンター前の鈴に声をかける。

「鈴も何か買いに来たのか？」

「……ねこじやしを買いに来た」

「え、ねこじやし？」

「……、駄菓子屋なんだけど。」

「浜辺に居たら、ねこたちが暑さでへばってしまったんだ。元気の出
るやつが欲しい」

鈴が指差す先、駄菓子屋から道路を挟んで反対側の民家の軒下に、何匹ものネコたちが力なく寝そべっていた。

「あー、ねこじゃらしとか、そのへんに生えてるのじゃダメなのかしら」

鈴からの注文を受けた蒼が、ぶつぶつ言いながら棚の奥を探していた。

「この道六十五年の匠がこりこりにこだわった、ねこじゃらしが欲しいんだ」

「そんなレアモノ、この店にあつたかしらねー」

「この店に来れば買えると、道で会ったおばーさんが言っていた」

「そう言われても……あ、あつた」

何か見つかったみたいだ。蒼が高級そうな黒い箱を持って、カウンターに戻ってきた。

「6500円って書いてあるけど」

「ね、ねこじゃらしで6500円……」。

「……さすがに高いな。こつそり払ってもいいが、そうすると帰れなくなる」

鈴は腕組みをして考え込んでいた。朝の恭介じゃないけど、兄妹揃って旅費に手を出すつもりだろうか。

「ちよつと羽依里さん、手伝ってもらっていいですか」

そんな鈴の様子を眺めていると、奥の倉庫にいた藍から声をかけられた。

「え、俺？」

「はい。実は、おばーちゃんから倉庫にある古新聞の処分を頼まれたんですけど、棚の上の方に積み重ねられていて、私だと手が届かないんです」

「ああ、そういうことなら手伝うよ」

俺は藍に呼ばれるがまま、倉庫に足を踏み入れる。

駄菓子屋の倉庫とか、初めて入ったかもしれない。左右に大きな棚が並び、お菓子やら花火、おもちゃ等が入った段ボール箱が所狭しと

積まれていた。

「あれなんですけど」

「うわ、すごいな」

そんな倉庫の一番奥の棚に、結構な量の新聞紙が積まれていた。その上の棚にも、その上の棚にも、ぎっしりと詰まっている。もしかしてこれ、全部処分するのだろうか。

「脚立もありますし、羽依里さんでしたら手が届くでしょう？ 下ろしてくれたら、私がビニールひもで適当に束ねますから。全部束ね終わったら、まとめて表に運び出しましょう」

「わかった」

藍から説明を受けて、俺はさっそく脚立に登る。

まずは一番上の棚から終わらせてしまおう。俺は手を伸ばして一番上の新聞紙を掴み、藍に渡す。ある程度溜まったところで、藍がそれをビニールひもで結び、束ねていく。

「すごい昔の新聞とかあるんだけど」

見てみると、中にはものすごく古い時代の新聞もあった。神隠し事件がどうか書かれていたし、文字の感じからすると、戦前のものかもしれない。

「中身を読んでないで、さっさと渡してください」

「あ、うん。ごめん」

怒られてしまった。ちやうど一番上の棚が綺麗になったので、続けて一つ下の棚から新聞紙を抜き取る。

「うわっ、でっかいクモだ!?!」

引っ張つたと同時に、大きなクモが落ちてきた。でも床に落ちたクモは、動かない。

「あれっ、死んでるの?」

「これは死骸ではなく、抜け殻ですよ。そんなものでいちいち大きな声を出さないでください。男の子でしょう」

てしっ、と隅の方に抜け殻を蹴り飛ばした後、俺を睨みつけてきた。藍はまったく動じる様子もないし、さすが島育ちだった。

……待てよ? 今のクモが抜け殻だとしたら、もつと大きくなった

クモがこの倉庫のどこかに潜んでいるんじゃないだろうか。正直、怖いなんてもんじゃやない。

「……さっさと終わらせて、ここを出よう」

その後はできるだけ急いで、新聞紙を下に降ろし続けた。

棚から降ろす作業が終わった後は、俺も藍に加勢してビニールひもで新聞紙をまとめていく。

「これって、結構な量だよな」

「駄菓子屋のおばーちゃんも、昔は加藤のおばーちゃんに負けず劣らず蒐集家だったらいいですからね。これはその一部なんじゃないですか?」

束ねた新聞紙を足で押さえて圧縮しながら、藍がそう話していた。駄菓子屋のおばーちゃん、昔は新聞記事の蒐集家だったのかな。

「……あれ? なんだこれ」

その時、ある新聞記事が目にとまった。

『摩訶不思議な幽霊蝶、烏白島で目撃相次ぐ』

随分古い新聞で、載ってる写真も文章も掠れてほとんど読めなかったけど、見出しだけは辛うじて判読する事ができた。

この幽霊蝶って、以前キャンプの時に蒼から聞いた七影蝶と関係があるんだろうか。あの時は藍に話を遮られてしまったし、もしかして、藍も何か知ってたりするのかも。

「なあ藍、この記事って……」

「……はい? 何か言いました?」

「ぶっ!」

藍はちやうど俺の目の前で、前かがみになってビニールひもを結んでいた。それで顔を上げたものだから、その、谷間が……。

「い、いやその、むごっほ!」

「……変なこと言ってるんで、さっさと作業を続けてください」

「う、うん……」

……よかった。気づかれてないみたいだ。藍ってば、野球の練習が終わった後、ワンピースに着替えてるんだもん。そんな胸元開いてる

の着るなんて、ずるいと思う。

「くーださーいなー」

「邪魔するぞ」

その時、駄菓子屋の入口から葉留佳と来ヶ谷さんの声がした。どうやらお客さんみたいだ。

「お客さんが増えてきましたね。蒼ちゃん一人だと大変でしょうし、ちよつと手伝ってきます」

藍はそう言うと、俺一人を倉庫に残して、店の方へ戻っていった。

一人残された俺は黙々と作業を続けることにした。うん。妙な煩惱は打ち消さなきや。

「あ」

あと少しで作業が終わるところで、ビニールひもが足りなくなっていることに気づいた。

「くそ、あと少しなのに」

俺は新しいビニールひもを調達するべく、店の方に戻ろうとすると……。

「……そうですよ。ああ見えてあの二人、毎日ラブラブなんです」

……あれ。なんか藍の声が聞こえる。ラブラブってなんだろう。

俺は思わず足を止めて、倉庫入口の陰に隠れながら、その声に耳を傾ける。

「それに、羽依里さんとしろはちゃん、毎日一緒の布団で寝ているとの噂です」

……空門姉妹に来ヶ谷さんと葉留佳を加えた四人が、俺としろはの話題で盛り上がっていた。少し前のガールズトークの続きだろうか。

「おおー、通い妻つてやつですネ」

「いや葉留佳君、それはもう同棲と言って良いレベルじゃないか？

既に一線を越えている気がしないでもないぞ」

「夜はしろはが上つて噂もあるわよ」

「ほう。しろは君は見かけによらず大胆なんだな」

ちよつと蒼、あることないこと勝手に喋らないでほしい。というか、まだしろはと一緒の布団で寝たことなんてないから！

……まあ、今朝はある意味で、夏海ちゃんと寝てた気もするけど。「そういえば、近所のおばさま方に聞いたんですが、今日もお二人はいちやらぶしていたとか」

「え、そうなの？」

藍の言葉に、蒼が興味津々だった。

「縁側で膝枕をして、キスマまでしていたと噂になっています」

文字通り、噂に尾ひれがついていた。膝枕はしてもらったけど、キスはしてない。

「……夏海君、その辺どうなんだ？」

「え、えつと。その、あの」

その色恋話に夏海ちゃんが巻き込まれていた。でも、俺が助けに出るわけにもいかないし。

「夏海ちゃん、無理に答えなくていいからね。そーいうのって、偶然でも見ちゃったら、トラウマになるものだし」

だから蒼、後ろから優しく夏海ちゃんを抱きとめないで。それ以前に、夏海ちゃんが見てる前提で話を進めないで。夏海ちゃんは何も見えないから。

というか、誰かお客さんでも来ないかな。そうすれば、この話も終わりそうなんだけど。

俺はそう考えながら駄菓子屋の入り口を見る。

「……お前は犬なのか？　ねこじゃないしな」

「ポン？」

その入り口では、鈴がその手の話題に興味なし、といった感じでイナリと遊んでいた。

「まあいい。ぐるーみんぐしてやろう。そーらそーら」

「ポキユ~~~~……」

鈴はどこに持っていたのかブラシを取り出して、イナリのお腹を撫でてやっていた。すごく気持ち良さそうな鳴き声が聞こえる。

俺はそんなイナリの声を聞きながら、会話が終わるのを待つことに

した。

その後、俺は四人の会話がひと段落した時を見計らって、何食わぬ顔でビニールひもを貰いに行った。

倉庫へ戻り、もらったビニールひもで手早く残りの新聞を束ねると、今度は駄菓子屋の前に運び出す作業に移る。

この作業は空門姉妹や他の皆も手伝ってくれ、あつという間に運び終える事ができた。

「ふう。これで最後かな」

「ご苦労様でした。こうして表に出しておけば、後で業者さんが持つて行ってくれて、トイレットペーパーまでもらえるんですよ」

「へえ、そう言うシステムなのか」

なんか昔は、チリ紙交換とか言つてトラックがやってきていた気がする。最近めつきり見なくなったけど。

「ねーねー、この新聞紙、ちよつともらつていい?」

藍とそんな話をしていると、葉留佳が好奇心に満ちた目でその新聞の束を見ていた。

「別に良いけど、何に使うの?」

「うん、ちよつとねー」

蒼から了解を得た葉留佳は、その束の中から適当な枚数の新聞紙を抜き取り、くるくると棒状に丸める。

「新聞紙ぶれえーどっ!」

そして、その筒状の新聞紙を頭上に掲げて、そう叫んでいた。

「え、なにそれ」

突然の行動に、俺たちは一様に固まってしまった。

「いやー、昔、リトルバスターズの皆で新聞紙ブレード大会をやったことがあつてですネ」

「新聞紙ブレード大会?」

「要は、新聞紙を使ったチャンバラごっこのようなものだ。皆でやると、なかなか盛り上がるぞ」

「……なんだか面白そうですね」

来ヶ谷さんの説明を聞いた夏海ちゃんは、興味津々といった様子だった。

「……なら、今日のイベントとして、その新聞紙ブレード大会とやらをやってみないか？」

「え、のみきっ？」

いつの間にか、俺たちの背後にのみきがやって来ていた。

それにしても、今日のイベントって表現、久しぶりに聞いた気がする。

「最近、夏海ちゃんにそれらしいイベントを用意してやれてなかった気がしてな」

「え、野球の練習も毎日楽しいですし、全然そんなことはないと思いますけど」

「それはそれ、これはこれだ。鷹原だって、最近すっかりと夏海ちゃんと遊んであげてないだろう？」

「いや、そんなことは……」

……と言いかけて、言葉に詰まる。

確かに、キャンプから戻って以後、それらしいイベントはやってない気がする。俺自身が鳴やしろはとのデートで島の外に出かけたりしていたせいもあるけど。

「というわけで、新聞紙ブレード大会をやろうと思う」

のみきはずっと笑顔だけど、どうも譲れない部分があるみたいだ。

「でものみき、いくらなんでも唐突過ぎるんじゃないか？」

「いや、問題ない。見たところ、新聞紙もたっぷりあるようだしな。ルールの方も、恭介氏を呼べば説明してくれそうだし」

確かにリトルバスターズは一度、その新聞紙ブレード大会とやらをやったことがあるって言うし、恭介なら詳しそうだけど。

「新聞紙はあっても、人がいないと思うんだけど」

「いないなら、集めればいいだけだろう」

え、それってもしかして。

「鉄塔を使って呼び出してやろう。集合場所は、駄菓子屋でいいな」「ちよつと待って、そこまでの？」

いくら夏海ちゃんのためとはいえ、のみきがすごく乗り気だった。「まあ、良いんじゃないか。それとも、ここに居る皆は参加したくないのか?」

「夏海ちゃんがしたいっていうなら、あたしは参加してもいいわよー」
「同じくです」

空門姉妹は快諾してくれた。こういう時、この二人は本当に頼りになる。

「私は言い出しっぺだし、やらない理由がないですネ。姉御も鈴ちゃんもやるよねー?」

「そうだな。私も久しぶりに童心に帰るとしよう」

「あたしはやらない」

葉留佳の問いかけに、来ヶ谷さんはすぐに参加表明してくれたけど、鈴は乗り気じゃないみたいだ。

「鈴、参加してくれたら、このモンペチあげる」

「……わかった。やる」

よくわからないけど、蒼が猫缶を見せたら態度が一変した。ねこじやしを探しているときに見つけたみたいだけど、何か特別な猫缶なんだろうか。

「まあ、これは客人をもてなすことにも繋がるんじゃないか? それじゃ、少し待っていてくれ」

のみきはそう言うと、嬉々として役場の方へ向かっていった。

『……一昨日から島に滞在しているリトルバスターズ。直ちに全員、駄菓子屋に集合してくれ。後、次の者も同じく、駄菓子屋に集まってくれ。三谷良一、加納天善……』

しばらくして、鉄塔からのみきの声が島に響く。リトルバスターズだけじゃなく、俺たちの仲間の方も集めてくれるみたいだ。

「……なんだか、大事になりそうですね」

「まあ、こうなった以上、楽しもうよ。夏海ちゃん」

「はいー」

急転直下で開催が決まった新聞紙ブレード大会。

どうやら、予想以上に大きなイベントになりそうな気がする。俺たちは楽しみなような怖いような、複雑な気持ちで、皆が集まるのを待つことになった。

第三十二話・完

第三十三話 8月20日（後編）

のみきが鉄塔から皆に呼びかけて、僅か十数分後。

駄菓子屋の前には、リトルバスターズ全員に加え、良一、天善、しろは、紬、静久と鷗が集まっていた。元からいた俺たちを含めると、総勢22名。なかなかの大人数だった。

「ねえ紬、新聞紙ブレード大会って何かしら」

「むぎゆ、初めて聞く単語です」

ところで、紬たちは灯台以外の場所に居たんだろうか。やけに集まるのが早かった。

「新聞紙ブレード大会とか、久しぶりだねえ」

「うう、私は葉留佳さんにボコボコにされた記憶しかないのですー」

一方で、小毬さんとクトが懐かしそうに言っていた。やったことあるのかな。

「なあ理樹、やっぱりリトルバスターズの皆はやったことあるのか？」

「うん。たぶん皆やったことあるんじゃないかな」

「待ちな。俺や謙吾、恭介はやったことないぜ？ 聞いた話じゃ、理樹は結構力入れてたみたいだけだよ」

「全くだ。どうしてあの時、俺たちを呼んでくれなかった」

「それは、お前らが入ったら力が強すぎて怪我するからだ」

不満そうに話す真人と謙吾の間に、恭介が割って入る。

確かに、理樹くらいなら女子に混ぜてもいいけど、この二人が入ったら怪我人が出そうだ。

「まあ、私もやったことないけどね。あの頃は取り締まる側だったから」

佳奈多がため息混じりに言っていた。元風紀委員だって言っていたし、こういうのをやるタイプじゃないのかな。

「おねーちゃん、これもほら、リサイクルだと思って。一緒にやりましょー」

「そうだよー。かなちゃん、資源は大切にしないと。救済が始まっちゃうよー」

救済って何だろう。小毬さんがよくわからないことを言っていた。「べ、別にやらないなんて言っていないわよ。もちろん、やるわよ」

「うむ。佳奈多君も無邪気に皆と楽しんだらいい。これは、なかなか燃えるぞ」

どうやら来ヶ谷さんも経験者みたいだ。

「ほらほら、みおちゃんも参加参加ー」

「あの、こういうのはあまり得意ではないのですが」

「またまたー、経験あるくせにー。皆でやったら楽しいよー」

西園さんまで引つ張り込まれていた。葉留佳の口ぶりから、やったことあるみたいだけど。

「なあ羽依里、呼ばれて来てはみたが、今から一体何をするんだ？」

「卓球大会でも始めるのか？」

「残念だけど、新聞紙ブレード大会だよ。チャンバラみたいなゲームだつてさ」

俺は葉留佳が作った新聞紙ブレードを、良一や天善に見せる。

「面白そう！ なっちゃん、頑張ろうね！」

「はいー」

鴉は相変わらずノリが良い。こういう時、彼女の性格は本当に助かる。

「こんな感じに振り回すのかしら。紬、これは良いおっぱいのトレーニングになるわよー！」

「はいー」

紬や静久も新聞紙ブレードを作って振り回していた。というかあれ、おっぱい打法なんだけど。

「……なんか、危ないんじゃない？」

一方で、しろはが不安そうな顔をしていた。ブレードって言っても新聞紙だし、そこまで痛くないとは思うけど。

「そういえばしろは、食堂の準備はいいのか？」

「うん。準備はお昼前に終わらせてあるから、大丈夫だよ」

たぶん昨日と同じ一品だけの提供になるんだろうけど、それにしても早い。普段からやり慣れている、しろはだからこそだろう。」

「ところで、このゲームってどういうルールで遊ぶの？」

「いや、俺にもよくわからないんだ」

「ええー……」

「恭介が知ってるみたいだし、そのうち詳しいルール説明があるとは思うけど……」

「……よし、状況は大体理解した。皆、集まってくれ」

その時、タイミングよく恭介が場を仕切り始めた。こういう時、彼は本当に頼りになる。

「まず、早急に会場を決める必要がある。ゲームを始めるなら早い方が良いしな」

同時に、恭介が腕時計で時間を確認していた。それによると、今は16時過ぎ。いくら夏で日が長いとは言っても、あまり遅い時間までは遊べない。

「当然、俺たちはこの島の地理に明るくない。そこで、場所は羽依里たちに決めてほしい。良い場所を知らないか」

「うーん……」

その問いかけに、俺は首をひねる。

これだけの人数で遊ぶんだし、結構広い場所が必要だよな。

ため池とかだと大丈夫そうだけど、あまり遠い場所だと移動するだけで時間が無くなってしまいそうだ。どこか近場に良い場所があればいいんだけど。

「なあ恭介、広い場所ならいいのか？」

その時、良一が恭介にそう聞いていた。

「そうだな。できるだけ広くて、ごちやごちやしたところがいい。隠れる場所が多い方が、このゲームは盛り上がるからな」

「なら、すぐ近くにおあつらえ向きな場所があるぜ」

良一はニヤリと笑いながら、誇らしげに言っていた。

「なにか心当たりでもあるのか？」

「ああ。せつかく地の利をくれるっていうんだしな。良い場所があ

る。こつちだ」

得意顔の良一を先頭に、俺たちは大量の新聞紙を持って、駄菓子屋近くの細い路地に歩みを進めた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ついた。ここだぜ」

狭い路地に入ってから、いくつもの角を曲がり、辿り着いたのは住宅地の奥の奥。

かなり古い民家の前に、広い空き地があった。

「すごいね。住宅地の真ん中に、こんな場所があったなんて」

理樹が感嘆の声を上げていた。島に通い詰めてるはずの俺も、こんな場所があったなんて知らなかった。

「謙吾、ここなら四天王スクワットやり放題だぜ！」

「本当だな。良一、天善、さっそくやるか！」

「……お前ら、本来の目的を忘れんなよ？」

今にもスクワットを始めようとする真人たちを、恭介が制する。

というか、良一たちは真人や謙吾と四天王スクワットをする仲にまでなったんだろうか。それはそれですごいけど。

「あの家は空き家なのか？ 随分ボロボロのようだが」

来ヶ谷さんが民家の方を見ながら言う。民家の周囲は塀に囲まれているけど、正面にある門は壊れていて、玄関が見えている。

「一応管理してる人がいるんですネ。立派な鍵がついてますヨ？」

続けて葉留佳がそう言っていた。確かに、扉には立派な南京錠がついていた。

「それで、ここでチャンバラごっこするんですか？ 確かに楽しそうですね、相手が見えすぎてスリルに欠けますね」

お手製の新聞紙ブレードを器用に片手で回しながら、藍が空き地を見渡す。

「実はな、あの古い家を挟んだ反対側にも、ここと同じような空き地があるんだ」

その言葉を待っていたかのように、良一がそう切り返す。

「え、そうなのか？」

「ああ、試しに行ってみようぜ。家の両脇に裏庭へ行ける道があるんだ」

よく見ると、民家の左右には細い路地が通っている。良一に導かれるまま、俺たちはその右側の路地へ歩みを進める。

「……この壁、やけにボロボロだね」

その路地を通りながら、鷗がそう呟く。

かなり朽ち果ている木製の塀で、所々に穴が開いていた。どうも、民家の周りをぐるっと囲っているらしく、高さは2メートルくらいはある。下手に触ったりしたら、トゲとか刺さってしまいそうだ。

「ほら、見てみる」

少し歩くと、民家の裏側に抜けた。そこには、先程の空き地と似た広さの空き地があった。

「へえ、変わった作りになってるな」

「どっちの空き地も、元は小さな畑だったんだぜ。今は荒れ果てて、見る影もないけどな」

良一がそう続ける。言われてみれば、カチカチになっているけど、土の地面だった。

「それとな、あそこに見えるのはこの家の裏戸なんだが、完全に壊れているんだ。表の門も壊れていたろ？　つまり通ろうと思えば、庭を突っ切ることもできるわけだ」

親指で示す先には、斜めになって倒れかけた木製の戸があった。これも長年雨風に晒されてきたのか、鉄の留め具が完全に錆びて、折れてしまっていた。

「ところで良一、お前はなんでそんなに詳しいんだ？」

その時、誰もが疑問に思っていたことについて、のみきが追及する。

「へっ？　そ、それは……」

「まさか、不法侵入して遊んでいるのではあるまいな？ 返事によつては……」

良一の態度を見て、鬼の形相となったのみきがハイドログラディエーター改を構える。

「ち、違う違う！ ここは俺の家だ！」

「なに？」

良一が両手を挙げながら、そう弁解していた。予想外の答えに、のみきが驚きの表情を浮かべる。

でも確かに、それってどういうことだろう。

「正確には、俺のじーさんが昔住んでた家なんだ！ 今は使っていないが、所有権だけは俺んちが持つてるんだ！ 正門の方には『三谷』と書かれた表札だってある！」

良一は必死だった。あそこまで言うんだし、嘘ではないだろう。

「……そういうことなら、信じよう」

どうやら疑いが晴れたのだろう。のみきは水鉄砲をしまう。

「というわけだから、この家の周りの土地は自由に使つてくれて構わないぜ」

「なるほど。これだけの場所なら、大掛かりなチームバトルができそうだ。最高の場所だな」

それまで黙って様子を見ていた恭介は、うんうんと頷きながらそう提案していた。

「それじゃ、会場も確保できたところで、ルール説明に移らせてもらう。構わないな？」

恭介がそう続ける。彼の言葉には、反論を許さない力強さを感じる。

再び民家の正面前に戻った後、恭介を中心にリトルバスターズからルール説明を受ける。

「まずは基本ルールの説明だな」

「はいはい」

恭介が合図をすると、筒状の新聞紙……新聞紙ブレードを持った葉留佳と小毬さんが前に出てきた。

「まずは、相手を攻撃する時は『かたじけのうござる』、逆にやられた時は『無念なりー』』と言って倒れること。コレ、重要ですヨ」

そう説明しながら、葉留佳さんが小毬さんの頭を新聞紙ブレードですぱーんと叩いていた。音は良いけど新聞紙だし、小毬さんの様子を見た限り、そこまで痛くないみたいだ。

でも、掛け声は意味が解らない。直訳すると『ありがとうございませー!』『残念ですー!』なんだけど。

「狙っていいのは頭だけですか?」

藍が蒼より大きな胸の前で腕を組みながら、そう聞いていた。

「同性同士が戦う場合は、基本的に頭しか狙えない。ただし、男女が戦う場合は、女は男のどこを攻撃しても良い事とする」

「それは面白いルールですね」

「なんだよそれ、差別じゃねえ!?!」

ほくそ笑む藍とは裏腹に、真人は怒りの声をあげる。確かに、男にとっては結構なハンデなんだけど。

「一様に差別とは言えないぞ。これを見ろ、どうやってもクドの攻撃が真人の頭には届かないだろ」

「かたじけのうございますー!」

その時、新聞紙ブレードを持ったクドがびよんぴよんと飛び跳ねて、真人の頭を狙おうとする。でも、どう頑張っても届かない。

「ちなみに、夏海だけ特別ルールな。夏海は男女関係なく、相手のどこを攻撃してもいい」

「え、いいんですか?」

「ああ、小学生だしな。女連中を相手にしても身長差があるだろ」

「そ、そうですね……」

確かに、この中だと夏海ちゃんがまともに頭を狙えそうなのは、クドぐらいかもしれない。

「まあ、良いじゃないか。このゲームを熟知している恭介氏がそう言うんだ。もらえるハンデはもらっておくべきだぞ」

のみきが笑顔でそう言う。

「はい……」

「そうだ。のみきも夏海と同じルールにしてやろう。理由は簡単。背が似たようなものだからだ」

「せ、せつかくだが私は通常のルールで構わない。背はないが、私にもプライドがあるからな……」

「わかってる、冗談だ」

恭介は軽く手を振って、また話を続ける。

「あと、もう一つ重要なルールだ。使用する武器は新聞紙であれば、形状は問わない。今はわかりやすく、棒状にしてあるけどな」

つまりは、例の台詞さえ言えば、丸めて投げたりしても武器としては使えるわけだ。もっとも、棒状の新聞紙が一番扱いやすいだろうけど。

「では次に、チームについて説明しよう。今回は人数が11人ずつということ、二つのチームによるチーム戦とする」

リトルバスターズが11人。対する俺たちも11人。確かにちようどいい。

「同じチーム同士で連携を図りながら、相手の陣地に置かれた旗の奪取を目指す。どうだ。燃えるだろう」

まるでサバイバルゲームみたいだった。男子としては、確かに燃える。

「ふたつの空き地にそれぞれのチームの旗を立て、それを相手に奪われるか、チームが全滅したら負けだ」

うんうん。単純で分かりやすいルールだ。

「やられた奴は速やかに武装解除して自分の陣地に戻り、旗から離れた場所で大人しく待つこと」

「わかりました!」

「ところで恭介君、そのチームの旗はどうやって用意するの?」

そこで気になったのか、静久がそう質問していた。

「俺の学ランでもくりつけとくか? かつこいいだろ?」

それを聞いた真人がどこからか木の枝を見つけてきて、それに自ら

着ていた学ランを結びつけていた。

「そんなもん守りたくないわ！ 汗臭いし、あほかっ！」

どうやら不服だったようで、鈴はその学ランを木の枝から引きはがすと、そのまま真人へ蹴り返す。

「あー、人の筋肉制服蹴るんじゃねえよ！」

筋肉制服って何だろう。気にするだけ野暮かもしれないけど。

「なら鈴、これを結ぶのはどうだ」

その様子を見ていた謙吾が、自ら着ていたジャンパーを脱いで、その背面を見せる。

「猫だぞ」

「いやじゃー！」

基本的に何も変わらないし、鈴は断固拒否の構えだった。

「鈴もそうカッパするな。ちゃんと旗も用意してある。鷗、例のものを」

「はーい！」

恭介に指名され、鷗がスーツケースを開けてその中身を漁り始める。

「じゃーん！」

スーツケースから取り出されたのは、折りたたまれた二枚の布だった。

あれっでもしかして旗なんだろうか。恭介はどこまで用意周到なんだろう。

「まず、私たちのチームの旗がこれね！」

鷗がそのうちの一枚を広げる。そこには、見慣れたひげ猫が描かれていた。

「なんだそりや、猫か？」

「ひげ猫だよ」

訝しげな目で見える真人に対し、鷗が満面の笑顔でそう言う。というか、どうしてあんなものがスーツケースの中に入ってるんだろう。

「どう？ 結構様になってると思うんだけど」

そうこうしているうちに、鷗はさっきまで学ランがかかっていた木

の枝にひげ猫団の旗を結び付けて、そのまま地面に立てていた。

「へえ、なかなか格好いいじゃないか」

「でしょー。それで、こっちはリトルバスターズ用!」

続けて、鴉がもう一枚の布を広げる。そこには、謙吾のジャンパーと同じ絵柄の猫が描かれていた。

「なんですかそれは。すごくかっこいいのですー」

「これも鴉が描いたのか?」

「ひげ猫は私だけど、そっちの猫はしろしろが描いたの!」

「え、しろはが?」

「もう鴉、内緒にしてって言ったのに……」

しろはは恥ずかしそうに俯いていた。絵が描けるのは知っていたけど、これはすごい。

「ちようど野球の試合で使おうと思って、二人に旗の制作を依頼していたんだ。各チームの旗は、これを使おう」

「いやー、こういうのがあると、俄然やる気が出ますネ」

「ああ、俺たちの魂がこもった、リトルバスターズの旗だぞ。指一本触れさせん」

葉留佳と謙吾が旗を見ながら、決意を新たにしていた。確かに俺も自分たちの旗を見てみると、なんだかやる気がわいてくる。ひげ猫だけだ。

「ルールは以上だが、何か質問はあるか?」

そう言われて、俺は頭の中でルールを反芻する。

この民家を挟んだ二つの空き地をそれぞれの陣地として、そこに立てた旗を奪い合うゲーム。旗が残っていても、チームが全滅したら負け。

攻撃するときには『かたじけのうごごる』、やられたら『無念なり』。基本、狙えるのは頭のみ。でも男女が戦う場合や夏海ちゃんには例外がある。

やられた者は速やかに武装解除して、自分の陣地で大人しく待つこと。そして武器である新聞紙の形や大きさに決まりはない。

「……うん。大丈夫だと思う」

他の皆も何も言わないし、ルールは浸透した感じだろう。

「よし。なら十分後に花火を打ち上げる。それがゲーム開始の合図だ」

「わかった。お手柔らかに頼むよ」

「それは約束できないな。勝負だからな」

恭介は不敵な笑みを残し、民家の向こうへ消えていった。

「チーム戦だし、皆との連携が重要になってくるよな」

「うん。三つある通路のどこに誰を配置するかも大切だよな」

ゲームが始まるまでの間、俺たちは地面に書いた図を囲んで、簡単に作戦会議をする。

相手の陣地へ通じるルートは三つ。民家の左右にある狭い路地を通るルートか、民家の正門から庭を通り、裏門に抜けるルートだ。

「私はスーツケースがあるから、守りに徹するよ」

鷗は自らそう提案してくる。移動力ではどうしても劣ってしまうから、迷惑をかけないようにしてるんだろうか。

「なら、わたしと静久も残ります！」

「そうね。本陣の守りも必要よ？」

その考えをくみ取ったのか、紬と静久も本陣の守りを買って出てくれた。

「そうだな。いざという時の守りは重要だ。頼んだぞ、三人とも」

「うん！」

「任せて」

「ここは絶対にシシユしてみせます！ 敵さんが来たら、ちみどろにしますー！」

紬、その表現は怖いからやめて。

そんな三人は元気に返事をした後、それぞれの新聞紙ブレードを持って、夕日に染まる旗の近くで配置につく。

「……後は攻撃メンバーなんだけど、俺に作戦があるんだ」
「作戦？」

「のみきと良一にも、ここに残ってほしい」

「これ以上に守りを増やすってのか？ そりゃ守りは重要だけだよー」

「いや、二人には旗の所じやなく、正門前で待機しておいてほしいんだ。でも、絶対に庭に入らないでほしい」

「それは構わないが……なんでまた？」

「この庭さ、やけに草が生い茂ってるし、下手に中を歩き回れば、必ず草がすれる音がすると思うんだ」

「まあ、そうだろうな」

「俺たちの中で誰も庭に入らなければ、草がすれる音がする時は、リトルバスターズの誰かが入った時だけだよな？」

「なるほど。相手が正面突破を試みてきた場合、その動きがわかるということですね」

藍が口元に手を当てながら、頷いていた。

「うん。そういうこと」

「男の子って、こういう遊びの時、ホント楽しそうよねー」

蒼が少し離れたところで笑っていた。それは自分でも思う。こういう作戦を考える時が楽しいんだ。

「相手の動きがわかれば、優位に進められるし……よし羽依里、その作戦乗ったぜー！」

意図を察して、良一が俺の作戦を快諾してくれた。

「それで、他の皆なんだけど……」

残りのメンバーのうち、俺としろはと夏海ちゃんの三人で左側の路地を、天善と空門姉妹の三人で右側の路地を進んでもらうことにした。

中央をあえて捨てることで、左右に戦力を集中する感じた。

土地勘のないリトルバスターズが、大勢で中央突破を図ってくる可能性は低いと思うし。もしやってきたとしても、少数だろう。それなら、良一たちで対応できるはずだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しばらくして、ゲーム開始の花火が上がった。

「よーし、やってやるわよー」

「天善ちゃん、せめて盾くらいにはなっってくださいね」

「そういうことは良一に言ってくれ」

わいわい言いながら、右側の通路に消えていった。さっきの蒼の台詞を返すようだけど、蒼たちも楽しそうだ。

「それじゃ、俺たちも行ってくるよ。鵬たち、守りは任せたからな。何かあったら、大きな声で知らせてくれな」

「うん、おっきな声でふぎやーって鳴くよー!」

「わたしもむぎゅーって鳴きます!」

「私もおっぱーいと叫ぶわね!」

想像するとすごくカオスな状況だったけど、状況を知らせてくれるなら、それでいいや。

「良一とのみきも、頼んだぞ」

「ああ、何か動きがあればすぐに知らせよう」

その返事を聞いた後、俺たちも新聞紙ブレードを持って、左の通路へ侵入する。

ほとんど一直線に相手の陣地へと続く路地は、改めて観察すると電柱やゴミ箱があつて、その陰に誰かが隠れていてもおかしくない。

俺を先頭に、しろは、夏海ちゃんと並び、ゆつくりと進んでいく。

「な、なんだか静かですな」

「夏海ちゃん、しろはから離れたら駄目だよ」

「は、はい……」

夏海ちゃんはしろはのスカートをしっかりと握りしめている。確

かに静かすぎる。

「……フハハハハ！」

「うわ、出た！」

通路を半分くらい進んだところで、電信柱の陰から来ヶ谷さんが飛び出してきた。

「出たとはご挨拶だな。人を妖怪か何かみたいにな」

……神出鬼没なのは、妖怪と変わらないとも思うけど。

そんな来ヶ谷さんは先制攻撃を仕掛けてくるでもなく、通路の中央に仁王立ち。余程自信があるんだろうか。

「二人とも、下がって」

しろはと夏海ちゃんの二人に下がってもらって、俺は来ヶ谷さんと対峙する。

灯台での動きを思い出すと、この人の身体能力はかなり高い。強敵だ。

「ふむ。では鷹原少年、まずはキミから片付けるとしよう」

来ヶ谷さんはそう言うのと、まるで日本刀のように長い新聞紙ブレイドを構える。

「そうだな。キミを倒した後は、後ろの二人は捕虜として陣地に連れて帰り、しつぽりムフフといかせてもらおうことにしよう」

……二人を守らないと。何が何でも、二人を守らないと。

「……かたじけのうごぎるー！」

俺は居ても立ってもいられず、先制攻撃を仕掛ける。

「甘いぞ。かたじけのうごぎる」

対する来ヶ谷さんは俺の攻撃を軽くないなして、そこから俺の肩を狙って新聞紙ブレイドを振り下ろす。

「うわっ!？」

俺はとつさに扉にへばりつき、なんとかその攻撃を回避する。

しかし来ヶ谷さんはすぐに体勢を整え、今にも追撃の構えだ。これはまずい。次は避けきれない。

「ゆいちゃん、やめてくださいー！」

「ぐはっ……!？」

その時、夏海ちゃんがそう言葉を発する。すると、謎のダメージを受けて、来ヶ谷さんの動きが止まる。

「今です！ かたじけのうごぎるー！」

そして、夏海ちゃんはしろはの横をすり抜けて、来ヶ谷さんに攻撃を仕掛ける。

「……チツ」

来ヶ谷さんは寸でのところでその攻撃をかわし、俺たちから大きく距離を置く。

「夏海君の攻撃はどこに当たっても失格になるんだつたな……なかなか凶悪なルールじゃないか。これではうかつに近寄れんな」

「危なかった……夏海ちゃん、助かったよ」

俺は壁に張り付いたまま、夏海ちゃんにお礼を言う。

おかげで来ヶ谷さんも離れたし、今のうちに落ち着こう。

……そう考えた、その瞬間。

「かたじけのうごぎるだよー」

「かたじけのうごぎりまするっ」

「えっ？」

背後……壁の向こうから、聞いたことのある声が聞こえた。そして、背中に二つの小さな衝撃。

振り返ってみてみると、穴だらけの塀の隙間から、二つの新聞紙ブレードが伸びていて、俺の背中に当たっていた。

「ああああー！ー！ やられたー！ー!？」

「鷹原さん、セリフを言ってくださいーい！」

……そうだった。ショックでつい、忘れていた。

「無念なりー！」

声の感じからして、塀の向こうにいるのはクドと小毬さんだろう。

それにしても、目の前の来ヶ谷さんに意識を集中していたら、文字通り横やりを叩き込まれてしまった。本当に無念だった。

「……隙ありだ。かたじけのうごぎる」

そしてその直後、来ヶ谷さんの姿がブレた。

「えっ」

そしてヒットアンドアウェイで、一瞬でしろはの頭を叩いていった……。

「ルールだ。台詞を言ってもらおう」

「うう、無念なり」

そんなまさか。しろはがこうも容易くやられてしまうなんて。

「ゆいちゃんすごいー」

「夏海君もそうだが、小毬君もゆいちゃんはやめてくれ……」

塀の向こうでクドたちの喜ぶ声が聞こえる。

あんな場所から攻撃されたら、ほぼ反撃できない。なんて作戦だろう。

「キミたちは、ある意味最強キャラである夏海君の使い方を間違っているぞ。例えば……」

「くらえー！ ビー玉攻撃ー！」

「うおおおー！？」

「えっ、ちよつとちよつと！ ひゃー！？」

来ヶ谷さんが何か言いかけていたけど、途中から別の声でかき消されてしまった。

聞き耳を立ててみると、蒼や天善の叫び声だった。向こうの路地で一体何が起こってるんだろう。

「あははははっ！ かたじけのうごぎる、かたじけのうごぎる、かたじけのうごぎるー！？」

「む、無念なりー！」

「無念なりー！」

天善、蒼の無念が聞こえた。どうやら向こうでもバトルが始まっているらしい。

「さすが三枝さん、やり方がえげつないです」

なんか葉留佳と西園さんの声も聞こえる。少なくとも二人に襲われているみたいだ。

「くっ、そう言う西園さんは頭ががら空きですよ！かたじけのうごぎるー！」

どうやら藍は葉留佳のビー玉攻撃をかいくぐったらしい。反撃に

移ったみたいだ。

「……甘いです」

「は？ 傘とか反則じゃないですか？」

「別にそんなルールはありませんが」

「そ、それはそうですが……ぐぬぬ」

「藍さんごめん！ かたじけのうござる！」

直後、理樹の声と共にすばーんと良い音がした。藍もやられてしまったみたいだ。

それにしても、開始数分で5人がやられてしまった。一方的すぎる。リトルバスターズの皆、チームワークが良すぎるんだけど。

「よーし！ みおちゃん、理樹くん、このまま一気に本陣を制圧するよー！ー！」

「合点です」

「えええ、本当に行くの!?!」

「私たちも続きますよー！ 進軍なのですー！」

「おっけーですよー」

左側の通路を制圧した葉留佳たちは、どうやら一気に俺たちの陣地に攻め入るみたいだ。

同時に、庭にいたクドたちの声も草をかき分ける音と一緒に遠ざかっていった。

「ふむ。攻めの方は理樹君や葉留佳君に任せて、私は一旦報告に戻るとうしよう」

「来ヶ谷さん、待ってくださいー！」

背中を見せた来ヶ谷さんに対し、生き残った夏海ちゃんが一步前に出る。

「夏海君、私を追うより、自分たちの陣地を守りに戻った方がいいと思っとうぞ？」

来ヶ谷さんはそう言い残し、リトルバスターズの陣地へと戻っていった。

「夏海ちゃん、確かに来ヶ谷さんの言う通りだよ。ここは陣地に戻って、紬たちを守ってあげよう」

「わ、わかりました!」

俺としろはは速やかに武装解除して、生き残った夏海ちゃんと一緒に自陣へと戻ることにした。

「あははははー!ー!ー! 待て待てー!」

「むぎゆー!ー!ー!」

俺たちが陣地に戻ると、葉留佳が紬を追いかけまわしていた。

「紬、もう少し頑張つて!」

そう言う静久はのみきと一緒に、理樹や西園さんと対峙していた。すぐには動けなさそうだ。

ちなみに、良一は女性相手だと分が悪いので、静久たちの戦いを気にしつつ、正面からの攻撃に備えていた。

さつきからずつとガサガサと音がしてるし、いつクドと小毬さんが飛び出して来てもおかしくない。

「追い詰めたぞー! むぎゆ子、悪く思うなー!」

「むぎゆぎゆぎゆぎゆ……」

その時、塀際に紬が追い込まれていた。

「勝負の世界は非情なのですヨ。まさに取るか取られるかの世界! 弱い者は崖の上から叩き」

「かたじけのうござる!」

……余裕綽々に口上を述べていた葉留佳の背中に、夏海ちゃんの一撃がクリーンヒットする。

「ぎゃー!ー!ー! なつちゃん、後ろから卑怯だぞー!」

「ごめんなさい。スキだらけだったので」

「いや、良いと思うよ。葉留佳さん、本当にスキだらけだしさ」

「理樹くんひどい!ー!ー!」

「葉留佳さん、台詞を言ってください!」

「むーねーんーなーりいい!ー!ー!」

葉留佳は頭を抱えながら、その場に座り込んでしまった。余程ショックだったんだろう。

俺としろはは、同じようにやられて戻ってきた空門姉妹や天善たちと一緒に、その様子を眺めていた。

「紬さん、大丈夫ですか!？」

「はい! ナツミさん、助かりました!」

その後、夏海ちゃんはそのまま紬の隣に立って共闘の構えを取る。さすがズツ友だった。

「私も頑張らないとね……直枝君、かたじけのうござる!」
「うわっ」

その時、びしつと音がして、静久の新聞紙ブレードが理樹の脇腹を捕えていた。やっぱり女尊男卑のこのルール、鬼畜だ。

「うう、無念なり……もうちよつとだったんだけどなあ」

理樹を撃破した静久が夏海ちゃんたちと合流し、一気に反撃の度合いが高まった……その時。

「手加減は無用だ……いつくぜええ!」

「うおらああああー!」

なんだろう。民家の向こう側から、謙吾と真人の叫び声が聞こえる。

「うわああああー!」

その直後、その民家を飛び越えて、鈴が目の前に降ってきた。うそだろ。

「え? え? え?」

突然目の前に敵が現れた鷗は、完全に混乱してしまっている。あれでは防御もままならない。

「かもめ、かたじけのうござるっ!」

「ひええー!?! 無念なりー!」

……軽快な音と共に、鷗の絶叫が響き渡った。

「えっ?」

「はい?」

「むぎゅ?」

その音を聞いて、ようやく夏海ちゃんたちも背後で起こっているこ

とに気づいたらしい。

「ただ、後の祭りだ。あの位置からだ、どんなに急いでも旗を守れない。」

「……完全勝利だ」

鈴は鷗を一蹴した後、俺たちの陣地の中央に置かれたひげ猫団の旗を取り上げる。俺たちの完敗だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

最初のゲームが終了し、リトルバスターズの面々が続々と俺たちの陣地へやってきた。

「いくら勝つためとはいえ、思いつきりすぎじゃ、こらーっ！」

「うっ！ うっ！ 次は手加減します！」

「次なんてあるかーっ！」

なんだろう。勝利したにもかかわらず、真人が鈴に蹴られていた。民家を飛び越えてやってきたし、色々と無茶な作戦だったんだろうか。

「まさか、鈴ちゃんが空を飛んでくるとは思わなかったよ……」

鷗がため息交じりに言っていた。確かに、あれは予想できない。

「よう、おつかれ」

そこへ恭介がやってきた。

「もう少ししたら2ゲーム目を始めようと思うんだが、やる気はあるかい？」

先の完勝の報告を受けたんだろう。恭介の口調からはかなりの余裕を感じ取れた。

「……もちろんだ。次は負けないぞ。皆もそうだよな？」

それが悔しくて、俺はそう言っていた。

「はい！ まだやりたいです！」

「夏海ちゃんに同じくです。あんなやられ方、絶対認めません」

「まだまだ不完全燃焼だ！」

「次は勝つよ！」

他の皆もすぐに賛同してくれた。やっぱり、このまま引き下がれるわけがない。

「オーケー。そう言ってくれると思ってたぜ。だがさすがに日が落ちてきたし、次が最終ゲームになると思う。もう一戦、よろしく頼むぜ」

「ああ、次こそ勝たせてもらおうからな」

確かに、太陽はもう少して山の陰に隠れてしまいそうだ。暗くなったら危ないし、次が最後だろう。

「例によって、10分後に花火を打ち上げる。それまで念入りに準備しておいてくれな」

「ああ、わかった」

恭介は俺たちの方にもう言い残すと、仲間たちと一緒に自分たちの陣地へと戻っていった。

俺たちはゲーム開始までのわずかな時間を使って、作戦を立て直すことにした。

「そういえば羽依里、さっきのバトルでなんだけど……」

その時、右側の路地で葉留佳たちと交戦した空門姉妹から、興味深い話が聞けた。

「葉留佳のビー玉でこかさされたところに、頭上から小さく丸めた新聞紙が雨あられと降り注いだの」

なんだそれ。そんなの避けられるわけない。

ルール説明の時に、新聞紙の形状は問わないとは聞いていたけど、そこまでやっていいのか。

来ヶ谷さんみたいに、ちよつと長い程度なのかと思っていただけ。どうやら、発想の転換が必要みたいだ。

「後、来ヶ谷さんが言ってた事も気になるね」

「え、何か言っていましたっけ？」

しろはの発言に対して、夏海ちゃんが首をかしげていた。

「ほら、夏海ちゃんの使い方がどうこう」

「あ、そういえば何か言っていましたね」

「それなんだけど。俺が思うに、たぶんさ……」

……その後、俺たちは時間ギリギリまで作戦会議を行った。

今回は本陣に静久だけを残し、他のメンバーは思い切って全員攻撃に割り振る作戦を取ることにした。

いくらなんでも、さつきみたいに鈴は飛んでこないだろうし。

攻撃メンバーの配置はまず、左の路地に鷗と俺、そしてのみき。

次に、庭を通って正面から相手の陣地を目指す役目を、土地勘のある良一と天善。その二人の護衛を蒼と夏海ちゃんにお願いした。

そして右の路地にしろは、藍、紬。遭遇する相手にもよるけど、こっちは藍が冷静に指揮を執ってくれると思う。

「羽依里さん。余ってる新聞紙、もらっていいですか？」

「うん。ここにあるのなら持って行っていいよ」

「ありがとうございますー！」

夏海ちゃんが新聞紙の束を持って行った。どうやら他の皆も新聞紙を加工して、扱いやすい武器を用意しているみたいだ。

「よし、準備はこんなものかな」

やれるだけのことはやったし、俺たちとしても、二連敗するわけにはいかない。

「皆、最後は勝って終わらせよう！」

「おーーーーー！」

皆で円陣を組み、気合いを入れたところで……最終戦の開始を告げる花火が上がった。いぎ、ラストファイトだ。

「よし、行くぞ二人とも！」

「あ、ああ」

「思いつきり飛ばしちやっついていいよ！ かたじけのうござるー！」

最終ゲーム開始と同時に。俺は鴟とのみきが乗ったスーツケースを押し、左の路地を全力で進む。気分は戦車だった。

がらがらとスーツケースを押し、中ほどまで進んでくると……前方に真人の姿が見えた。

「マジかよ、スーツケースごと突っ込んでくるなんて聞いてねえぞ!」
「真人君邪魔だよ！ どいて!」

鴟が手にしているのは新聞紙を何枚も繋げた、槍のように長い新聞紙ブレード。明らかに真人の新聞紙ブレードより射程で勝っている。
「その槍で突こうってか!? そうは筋肉が卸さねえぜ!」

目の前に迫った鴟の槍を、真人は素早くしゃがんでかわす。

「よし、のみき、今だ!」

「わかっている! かたじけのうござる!」

真人の動きが止まったタイミングを見計らって、のみきが丸めた新聞紙を輪ゴムで飛ばす。飛ばされた新聞紙は真人の巨体に命中し、真人は失格となる。

「あああー!」

「真人くん、台詞! そしてどいて!」

「くそつ、無念だぜ……!」

真人がめちやくちや悔しそうな顔をしながら、道を明け渡す。

「……向こうは始まったみたいですね。しろはちゃん、私たちもやりますよ」

「うん」

俺たちが真人を倒した頃、反対側の藍たちも動き出したみたいだ。ズレてしまったスーツケースの位置を調節しながら、その声に耳を傾ける。

「ほわあつ、あいちゃんたちが来たー!」

「ごまりん、ここははるちゃんにお任せあれ! ビー玉攻撃ー!」

「お二人とも、左右に避けましょう」

ばらばらとビー玉がばらまかれる音がしたけど、今度は誰の悲鳴もなかった。

「ちよつとー！　なんで避けるのー!?」

「一度食らった攻撃を二回も食らうはずがないでしょう。アホですか?」

「むむむ……こうなったら、りきこみ隊長！　よろしくおねしやす!」
「え、僕!」

りきこみ隊長？　切り込み隊長みたいなものだろうか。

「理樹君、頑張つてー」

「理樹くんがんばれー」

「えつと、どうせなら葉留佳さんも前に出てきて欲しいんだけどさ」

「えー、か弱い女の子に前線に立てとか、ひどいこと言うなあ」

「いやいやいや、一戦目の時は自ら進んで先陣を切つてた気がするけど!」

「うー、そんな細かいこと気にしてたらでっかい男になれないぞー!」
「なんで逆ギレされるのかわからないけど、期待されている以上は、頑張ってみるよ……」

「それでは、直枝さんが私たちに負けたら、後で罰ゲームを受けてもらうというのはどうでしょう」

「ええつ、ちよつと藍さん、そんないきなり……」

「問答無用です。かたじけのうござる!」

「あぶなっ!」

「ナオエさん、かたじけのうございます!」

「うわああつ!?　無念なりいー!」

どうやら藍の攻撃は避けたみたいだけど、紬の追撃は防げなかったみたいだ。

「……やっぱり、女の子相手だと、男は分が悪いね……」

「罰ゲーム確定ですね。今から楽しみです」

「トホホ……なにをさせられるんだろう……」

「さあ、次は小毬ちゃんの番ですよ！　覚悟してください!」

藍はなんだかんだでノリノリだった。

「ようし！ 謙吾君直伝、真剣白刃どり！」

「む、やりますね」

「……真剣白刃取り？ 小毬さんってそんな特技があつたんだろ
うか。」

「そっか、女の子同士なら別に手でつかんで防御してもいいのか。男
はアウトだけど。」

「そう来ると思っていました。しろはちゃん、お願いします」

「うん。かたじけのうござる」

「ふえええーっ!? む、無念なりい〜……」

「すぱーんと心地のいい音が聞こえた。たぶん、藍が小毬さんの動き
を止めている間に、しろはがその頭を叩いたんじゃないかな。」

「……さて、残りは葉留佳ちゃんだけですな」

急に藍の語気が強くなった。

「いやー、多勢に無勢って言葉があつてですネ」

「さつきはよくも蒼ちゃんを」

「ますます語気が強くなってる。怖い。」

「ふっふっふ。あいちゃん、勝負の世界は非情なのですヨ」

「は？」

「ま・さ・に！ 取るか取られるかの世界！ 弱いものは崖の上から叩
き……っであぶなっ！」

「避けましたか。隙だらけだったので、行けるかと思つたんですが」

「葉留佳のさつきの台詞、一戦目の時も言つてなかつたっけ。言いた
いのかな。」

「紬ちゃん、しろはちゃん。三人で葉留佳ちゃんをボコボコにしま
しょう」

「はい！ ボコボコにします！」

「……なんか紬らしからぬ台詞が聞こえた気がする。」

「くっそー！ こうなったら！ おさげでいふえんすー！」

「おさげディフェンス？ 一体何だろう。」

「説明しよう！ おさげディフェンスとは！」

「うんうん教えて。すごく気になる。」

「総攻撃です。かたじけのうござる」

「はい！ かたじけのうございますー！」

「ぎゃー！ー！ー！ あいちゃん、最後まで言わせてー！」

「おさげは頭の一部ですから無理ですよ。はい。台詞」

「無念なりのー！ー！」

よくわからないけど、葉留佳をボコボコにしたみたいだ。そろそろ、俺たちも前進しよう。

「羽依里、全速前進！」

「アイアイサーー！」

鴟とのみきの乗ったスーツケースをがらと押す。もうすぐ通路を抜けるし、そうなれば相手の陣地は目の前だ。

でも、そろそろ誰かと遭遇してもおかしくないんだけど。

「おっと。お前ら、そこまでだぞ」

「ふむ。スーツケースで特攻とは、なかなか面白い手を考えるじゃないか」

その時、目の前に謙吾と来ヶ谷さんが立ちふさがった。

「のみき、頼む！」

「ああ。かたじけのうござる！」

俺がスーツケースを停止させると、のみきがその上に立ち上がり、小さく丸めた新聞紙を二人に向けて撃ち放つ。先制攻撃だ。

「……フ。甘いぞ」

「ンメーン！」

のみきの攻撃は的確に二人の頭を捕えていたけど、来ヶ谷さんは目にも留まらぬ動きでその弾を避け、謙吾は手にしていた極太の新聞紙ブレードで、その弾をはたき落としていた。

「そ、そんな馬鹿な」

のみきが驚愕の表情を浮かべる。俺も驚いている。あの二人の動き、人間離れしている。

「敗走してきた真人少年から報告を受けている。我々に同じ手は通用しないぞ」

来ヶ谷さんは元より、確か謙吾は元剣道部なんだっけ。さすがにこ

の手の小細工は通用しないのかも。

それなら、俺たちは個々の力で劣る分、力を合わせるしかない。

そう覚悟を決め、イチかバチかスーツケースで突っ込んでいこうかと考えていた……その時。

「今だ！ 乗れ、天善！」

「ああ！」

ガサガサと草をかき分ける音がして、塀の上から天善が上体を覗かせる。どうやら塀の向こうで、良一が天善を肩車しているみたいだ。

「……む!?」

「な、なんだとう!?!」

思わぬ場所から姿を見せた天善に、来ヶ谷さんと謙吾は完全に虚を突かれていた。

「行くぞ、かたじけのうごぎる!」

その隙を逃さず、天善は丸めた新聞紙を空中に放り投げる。あの動き、まるで卓球のサーブみたいだ。

「チョレーーーーイ!」

そして、その新聞紙をラケットで高速で打ち放ち、見事に来ヶ谷さんの頭にヒットさせる。

「……しまった。どうやらやられてしまったようだな。おねーさん無念だよ」

上空からの攻撃に一瞬反応が遅れたらしい。来ヶ谷さんは失格となる。

「なかなか考えられた作戦だな。その位置からなら相手の頭も狙いやすいし、飛び道具がない限り反撃される恐れもない。敵ながらあつぱれだな」

来ヶ谷さんはそう言って、武装解除する。

「くそつ、俺は飛び道具など持っていないぞ!」

そう言うのは謙吾。素早く頭上に新聞紙ブレードを構え、天善の攻撃に対して防戦一方となる。

俺たちから注意が逸れているし、今がチャンスだ。

「のみきも一旦座ってくれ! 鷗、スーツケースごと突っ込むぞ!」

「ああ、わかった!」

「うん! 突撃だよ!」

俺は再びスーツケース戦車を発進させ、謙吾との距離をどんどん詰めていく。

「鷗、攻撃用意!」

「わかった! かたじけのうござる!」

鷗は長い槍のような新聞紙ブレードをしっかりと携え、攻撃のタイミングを計る。

「うりやー! ガトツ!」

そして射程に入った瞬間、鷗が思いつきり謙吾の脇腹を突く。

「し、しまったああああ。無念っ!」

「よし、勝った!」

「急造のダブルスだったが、なんとか結果を残せたようだな」

相変わらずの卓球例えだけど、天善たちとの連携攻撃で強敵二人を倒すことができた。これは大きい。

「やれやれ、敗者は去るとするか。鷹原少年、頑張れよ」

「え? えつと、ありがとう」

来ヶ谷さんたちはそう言い残し、自分の陣地へと戻っていった。

「天善に良一、二人ともありがとう、助かったよ」

「ああ」

「き、気にするな……俺も勝利に貢献できて、嬉しいぜ……」

天善に続いて良一の声が聞こえるけど、ものすごくきつそうだ。そういうえば結構長い間、天善を肩車してる気がする。

「悪い天善、ちよつと降りてくれ……!」

直後、天善の姿が塀の上から消えた。さすがに疲れたんだろう。

「そう言えば、蒼や夏海ちゃんを護衛につけておいたはずだけど」

少し気になって、塀越しに良一たちに話しかける。

「二人にはちよつと離れた場所で作業をしている。無事だから心配するな」

「そっか、それなら良かった」

塀の内側にリトルバスターズがいる場合を考えて、蒼や夏海ちゃん

を護衛につけたけど、今のところ大丈夫みたいだ。

良一じゃないけど、俺も少し息を整えたい。リトルバスターズの陣地まではもう少し距離があるし。さすがにスーツケースを押しすぎた。

「……葉留佳は泣きながら戻ってきたし、こっちも騒がしいから様子を見に来てみたけど……すごいわね。宮沢君の言っていた戦車って、そのこと?」

声が出た方を見ると、佳奈多とクドがやって来ていた。

え。ちよつと待つて。少し休ませてほしいんだけど。

「何、敵襲か?」

「よし。良一、戦闘体勢だ! また足場になってくれ!」

「いや天善、今度はお前が下になれよ!」

「断る。お前では、このラケットは扱えないだろうからな」

どうやら、二人は塀沿いに立って言い争いをしているみたいだった。

「クドリヤフカ。あのうるさい二人を黙らせなさい」

「ラジャーなのですー!」

クドは持ち前の身軽さで素早く塀に近づいていき……。

「三谷さん、加納さん、かたじけのうございますー。えいえいつ」

ボロボロの塀の隙間から見えていた良一と天善の足を、新聞紙ブレードで突く。

「し、しまったー!?!」

「うおおおー!?! マジかー!?!」

「お二人とも、台詞を言ってくださいー!」

「無念なりー!?!」

内輪もめをしている間に、二人がやられてしまった。どうしよう。貴重な遠距離攻撃手段がなくなってしまった。

「羽依里、良一君たちの吊い合戦だよ! スーツケース戦車、発進!」

「わ、わかった!」

その時、塀から緊急発進の指示が出された。正直、体力は全然回復してないけど、キャプテンの命令には逆らえない。俺は渾身の力を込

めて、スーツケースを押す。

「かなちゃん覚悟！ ガトツーーー！」

そのまま勢いに任せて、鴎は長い新聞紙ブレードで佳奈多の頭を狙う。

「動きが見え見えよ……かたじけのうござる！」

佳奈多は逃げるどころか、その槍を右手の新聞紙ブレードで軽く受け流した後、鴎の懐に飛び込み……左手の新聞紙ブレードで鴎の頭を一閃。

「ふぎやーーー！」

鴎が断末魔の鳴き声をあげる。

「ううう、無念なりい……」

佳奈多はまさかの二刀流だった。しかも、ものすごい動きだった。「言ってなかったけど、私は風紀委員をやる前は剣道をやっていたの。他にも、槍術や薙刀も習っていたことがあるし。悪いけど相手にならないわね」

佳奈多は二本の新聞紙ブレードで華麗にのみきの反撃を受け流しながら、次第に距離を広げていく。

「さしずめ私は、宮沢君の上位互換ってところかしら」

時々意味の分からないことを言うあたり、さすが葉留佳と双子なんだなと思う。

「状況は把握できたし、一旦退いた方が良さそうね。クドリヤフカ。行くわよ」

「はい！ 戦略的撤退なのですー！」

佳奈多はそう言うと、クドを引き連れて陣地の方へ戻っていった。ちやうどのみきも弾を打ち尽くしてしまっていたらしい。ある意味助かった。

「うう。負けちゃったし、陣地で大人しく待ってる……」

「いや、鴎のおかげで相手の出鼻はくじけたと思う。ありがとうな」

「うん。二人とも、頑張ってたね！」

鴎はそう言い残し、スーツケースを引きながら路地を戻っていった。

「皆さん、大丈夫ですか!？」

その直後、塀の向こうから聞こえたのは、夏海ちゃんの声だった。『塀はやられちゃったけど、俺とのみきは無事だよ。そっちは?』

『良一さんと天善さんがやられちゃいましたけど、私と蒼さんは無事です。リトルバスターズの皆さんとは、誰とも出会っていません』

向こうの路地では藍たちが少なくとも小毬さんと葉留佳、理樹を倒してくれたみたいだし、リトルバスターズはかなり減っている。さっきの佳奈多の台詞から察するに、一旦退いて守りを固めている感じかな。

『じゃあ、俺たちはこのまま前進するよ。夏海ちゃんたちは例の作戦でバックアップをお願いね』

『わかりました!』

『だいぶ有利みたいだけど、気をつけなさいよー』

『わかってるよ。そっちも気をつけてな』

木塀の隙間から手を振ってくれる二人と別れて、俺とのみきはゆっくりと歩みを進めた。

さて、これでリトルバスターズの残りは5人。対する俺たちは、専守に回ってもらってる静久を除いても7人残っている。人数的にも有利になったし、まずは相手の陣地前で集合したいところだけど。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

というわけで、通路を抜けた先、リトルバスターズの陣地の目の前で藍やしろはたちと合流する。

『すぐく賑やかでしたけど、大丈夫だったんですか?』

合流するや否や、藍にそんなことを言われた。

『そっちこそ、葉留佳をボコボコにしてみたみたいだな』

『蒼ちゃんの仇でしたから』

庭を通っている分、合流が遅れている蒼たちを抜かしても、この場にいるのは5人。人数では、すでにリトルバスターズと同数だ。

「お。おいでなすったな」

陣地手前に現れた俺たちを見てか、恭介がそう口にする。その声は、心なしか嬉しそうにも聞こえた。

それにしても、ようやく恭介の姿を見た気がする。旗の前に陣取って、陣形を整えているみたいだ。

「ところで、どうすんだよ」

奥の方には失格になったリトルバスターズのメンバーも見えない。その中で、真人が唐突に口を開く。

「相手はかなりの数が生き残ってるぜ。対するこっちはどうだ？ 鈴に恭介に西園、それに二木にクー公に鈴。結構やばいんじゃないか？」

「なんだ？ あたしが二人いるのか？」

「真人なりに意味があるんだよ。気にしないであげてよ」

「単なる数え間違いだよっ！ ごめんなさいでしたあーっ！」

なんかよくわからないけど、真人が自爆していた。

「井ノ原君、ちよつとうるさいから黙っていてもらえるかしら」

「やはは、真人君怒られたー」

「葉留佳、貴女もよ」

「むぎゅーぎゅー」

「……紬の真似をしたって駄目よ。ここが勝負所なんだから」

メンバー同士で軽口を叩いているけど、佳奈多は全く気を抜いていない様子はない。間違いなく強敵だ。

他のメンバーはどうだろう。恭介の実力は未知数だけど、女性陣で束になってかかれば、なんとかなるかもしれない。

クドはすばしっこそうだけど、そこまで脅威に感じない。西園さんは専守みたいで、旗の前で日傘をさして、動く気配がない。

となると、残る問題は鈴だろうか。あの運動能力の高さは、一戦目で思い知らされたし。

「羽依里、どう戦うの？」

しろはが近づいてきて、耳打ちする。

とりあえず、数的不利な相手が取ってくる戦法として考えられるのは、一つだけだった。

「たぶん恭介たちは俺たちの隙を見て、路地の方へ向かおうと思うんだ。守ってジリ貧になるよりは、多少強引にでも突破口を見出しにくると思う」

「え、そうなの？」

「うん。恭介、佳奈多、鈴がキーパーソンになるはずなんだ。彼らを止めよう」

その三人のうち、誰か一人でも俺たちの包囲網を突破されれば、そのまま一気に路地を抜けられしまう。そうなると静久の守りがあるとは言え、旗が危なくなる。何が何でも阻止しないと。

でも、さすがの彼らも庭には向かわないと予想する。ごちゃごちゃしている上に、夏海ちゃんや蒼がどこに潜んでいるのかもわからないわけだし。向こうとしても、夏海ちゃんとの鉢合わせだけは避けたいはずだ。

相手の作戦をそう読んだうえで、右の路地の守りに俺、紬、のみき。左の守りに藍としろはをそれぞれ配置する。

「なるほどな。わかってるじゃないか」

恭介は俺たちの配置を見て、納得したような顔をしている。

俺たちの当面の目的は、リトルバスターズの皆をここに押し込みつつ、蒼や夏海ちゃんの到着を待つこと。二人が合流したら、一気に勝負を仕掛けるつもりだ。

「なら、今こそリトルバスターズの力を見せてやる」

恭介はそう言うと、何かを取り出した。妙な形に折りたたまれた新聞紙だった。なんだろうあれ。

「……ミッシェンスタート！」

その瞬間、その場にいたリトルバスターズの皆が両手で耳栓をした。直後、耳をつんぎくような音が鳴る。しまった。あれ、紙鉄砲だ。

俺たちが一瞬ひるんだ隙に、佳奈多が俺たちの方に、鈴とクトが藍としろはの方へ向かってきた。恭介と西園さんは旗の元に残り、専守の構えだ。

「やばい。皆、注意して！」

慌てて皆に注意を促すけど、既に佳奈多はのみきに肉薄している。

「野村さん、かたじけのうごぎるー！」

「ふぎやつー！」

のみきはとつさに自分の新聞紙ブレードで頭を防御するけど、二刀流の佳奈多は左右からの攻撃でその防御を崩し、一撃を加える。

「うう、かたじけのうごぎる……！」

あのみきが一瞬でやられてしまった。元々射撃が専門分野だし、身長の手元も含め、分が悪かった。

俺は背後に紬を庇いつつ、佳奈多と対峙する。

「タカハラさん、これを使ってくださいー！」

その時、紬は自分が持っていた新聞紙ブレードを俺に手渡ししてくれる。目には目を、二刀流には二刀流を、ということだろうか。

でも、俺に武器を渡したことで紬は丸腰になってしまった。これは、紬は絶対守らないと。

「鷹原君、私と勝負する気？ 後悔させてあげるから。かたじけのうごぎるー！」

次の瞬間、佳奈多が一気に距離を詰めてくる。女性特権ということ、頭以外の場所をがつつり狙ってくる。

「うおおおっ！」

左右から来た初撃をなんとか防御するけど、それだけで新聞紙ブレードが歪んでしまった。これは、次の攻撃は防げないかもしれない。

「……タカハラさん、少し右に避けてくださいー！」

その時、背後の紬からそう声をかけられた。俺は言われた通り、少しだけ右に移動する。

「ハルカさん直伝です！ むぎゅー！」

紬はそう言うが早いか、ポケットに入れていたらしい大量のビー玉を地面にばらまく。

「え!？」

不意を突かれた佳奈多は、そのビー玉を踏んずけて盛大に転んでし

まう。

……これは、紬の作ってくれた千載一遇のチャンスだった。

「佳奈多、かたじけのうごござる!」

俺は無防備にさらされていた佳奈多の頭を新聞紙ブレードで一撃。

「……ちよつと、うそでしょ!?!」

佳奈多は信じられないといった顔をしていた。悪いけど、台詞を言ってもらわないと。

「無念なり……うう、葉留佳つてば、紬に何教えてるのよ……」

佳奈多はがつくりと肩を落としていた。まさか、自分の妹が数日前に教えた戦術で敗れるとは、思わなかったんだろう。

「ありがとう紬、おかげで助かったよ」

「お役に立てて何よりです!」

俺は紬に借りていた新聞紙ブレードを返しながら、周りの様子を見つめる。

「あい、かたじけのうごござる!」

少し離れた場所で、鈴が藍やしろはと交戦していた。

鈴は軽く跳躍して、上から勢いをつけて藍を攻撃する。藍が新聞紙ブレードを折られながらも、その一撃を受け流すと、鈴はそのまま身体を反転させて、しろはの頭を狙って一撃。

「ひえっ」

しろははギリギリその攻撃を避ける。攻撃が外れたと分かった鈴は、着地するとすぐに間合いを広げ、二人からの反撃をさせない。

というか鈴、二人を相手に直角以上の戦いをしてるんだけど。まるで猫だ。

すぐ近くにクドも控えているし、助けに行きたいところだけど……今この場を離れると、右の路地の守りがなくなってしまう。

そのタイミングで恭介と西園さんに動かれたら、一卷の終わりだし。

「もらった! かたじけのうごござる!」

「あうっ……蒼ちゃん、ごめんなさい……」

その時、鈴相手に善戦していた藍がついにやられた。これは本格的にまずい。しろはが二人に襲われてしまう。イチかバチか、動くしか……。

「行くわよ夏海ちゃん、準備はいい!?!」

「はい! いつでも行けます!」

その時、しろはに近い塀の裏から、蒼と夏海ちゃんの声が出た。

「せーのっ!」

そして蒼の掛け声と同時に、塀の上から夏海ちゃんがひよつこりと顔を覗かせた。

その場にいた全員が、何事かと夏海ちゃんに視線を向ける。たぶんあれ、天善と良一の時と同じように、蒼が夏海ちゃんを肩車してるんだらう。

「かたじけのう(ぎ)ざるー!」

次の瞬間、夏海ちゃんがそう言いながら、両手に持っていたものを空へ投げ放つ。

……それは新聞紙で折られた紙飛行機だった。

上手に重ねて折ってあるみたいで、安定して飛ぶその紙飛行機は、リトルバスターズの陣地を飛行し、啞然としていた鈴の肩に当たって地面に落ちる。

「ん? なんだこれは?」

「鈴さん、台詞を言ってください!」

「なに?」

夏海ちゃんがそう宣言する。鈴は一瞬何が起こっているのかわからない顔をしていたが、すぐにはつとなる。

そういえば、夏海ちゃんの攻撃は男女問わず、どこに当たっても失格になるんだっけ。そんな夏海ちゃんが飛ばした紙飛行機。よく考えたら、最強の兵器なんじゃないだらうか。

「むねんだ……まさか、あたしがきよーすけより先にやられるなんて」

あ、問題はそっちなんだ。

「かたじけのう(ぎ)ざるー!」

夏海ちゃんは続けざまに、いくつもの紙飛行機を投じる。あれだけの数の紙飛行機、いつの間に折ったんだろう。

「まずい、お前ら気をつけろ！」

「わふーっ！ でんじやーなのです！」

音もなく忍び寄る紙飛行機による攻撃を受け、リトルバスターズのメンバーはパニックに陥っていた。

クドは帽子を押さええながら逃げ惑い、西園さんはその身を低くして、日傘で絶対防御の構え。頭以外に当たってもアウトだし、うかつに動けなさそうだ。

「うむ。夏海君もようやく自分の戦い方がわかったようだな」

そんな中、来ヶ谷さんだけが陣地の奥の方で一人、うんうんと頷いていた。

なんにしても、この混乱に乗じない手はない。

「紬、しろは、旗を狙おう！」

「うん」

「わかりました！」

残った二人に声をかけて、旗の方に向けて駆ける。

「おっと。悪いがここから先は通さないぜ」

そこに、恭介が立ちはだかる。

「しかし、この状況は予想して無かった……なっ！」

恭介は、向かってきた紙飛行機を新聞紙ブレードで華麗にはたき落とす。体に触れてはいないので、セーフだろう。

俺たちもすでに動き出してしまったし、ここは三人で同時攻撃を仕掛けて、多少強引にでも旗を狙うしかない。

「恭介、かたじけのうごぎるー！」

「かたじけのうごぎるー！」

俺が恭介に向かって斬りかかると、紬としろはもそれに続いてくれる。

「羽依里、受けて立つぜー！ かたじけのうごぎるー！」

恭介は最初の俺の攻撃を防ぐと、流れるように移動して紬としろはの追撃をかわす。

そのまま紬の横へと動き、その頭をすれ違いざまに叩く。
「むぎゆ!? やられてしまいました! ムネンなりーです!」

紬が自分の頭を押さえながら、ショックを受けていた。
「ただ、上手く恭介をかわすことができた。これで俺たちの方が旗に近くなった。」

「くそっ、行かせるかっ!」

それに気づいたのか、恭介は一気に方向転換。再び俺たちの前に回り込もうとするけど……。

「……おっと!」

その時、恭介の目と鼻の先を夏海ちゃんの紙飛行機がかする。思わず恭介の足は止まり、完全に振り切ることができた。

よし、後は旗まで一直線……と思った矢先、その旗の前に西園さんの姿が見えた。今は日傘の代わりに新聞紙ブレードを持っている。さすがに守りに来たみたいだ。

けど、結構な速度が出ているし、俺はもう止まれない。

「鷹原さん、かたじけのうござる」

西園さんの攻撃が来た。俺は身を低くしてそれを避ける。

「あ」

「……きゃー!」

その攻撃には当たらずに済んだけど、さすがに走りながらだと体勢に無理があったのか、足がもつれた。そのまま西園さんを巻き込む形で倒れ込んでしまう。その拍子に、お互いの新聞紙ブレードはどこかに飛んで行ってしまった。

「あいてて……西園さん、ごめん」

慌てて体を起こそうとすると、前の方に伸ばしていた手の先に硬いものが触れた。旗だ。

「リトルバスターズの旗……これさえ取れば!」

西園さんには悪いけど、俺はとっさにその旗を掴み、引っこ抜く。これで、俺たちの勝利だ。

「よし皆、やったぞー!」

俺はうつ伏せになったまま、手に取った旗を高く上げる。なんだか

下が柔らかい気がするけど、そんなの気にならないくらいに、嬉しかった。

……直後、怒号とも悲鳴ともつかない声が上がった。どうしたんだろう。勝ったのに。

俺が不思議に思っただけ顔を上げると、目の前にしろはがいた。

「しろは、やったぞ。俺たちの勝ちだ」

「そ、そうだね。よかったね」

……あれ。しろはの声に感情がこもってない気がする。

「……あの」

「え？」

不思議に思っていると、俺の胸のくらいの位置から遠慮がちな声が出た。

視線を下げてみると、顔を赤くした西園さんと目が合った。

え、なにこれ。もしかして、旗を取ることに夢中で、西園さん押し倒したのに気づかなかったんだろうか。

「はっ」

気がつくと、皆が俺を見下ろしていた。

「ち、違うんだ。これは事故だから！」

「へー」

「彼女さんの目の前で、確信犯ですネ」

「久しぶりに風紀委員モードになろうかしら。良いわよね？ 鷹原羽依里」

皆の目が怖い。特に女性陣の。

「皆落ち着いて。誤解だから。ほら、西園さんも説明して」

「……責任、取ってくださいね」

「そこで火に油を注ぐような発言しないでー！ー！」

※※※※※※※※※※

最終ゲームが終了したことにより、鷗や良一といった失格になったメンバーも、リトルバスターズ側の陣地に集合していた。

「皆さん、本当にありがとうございました！」

その中で、夏海ちゃんが皆にお礼を言っていた。

俺もリトルバスターズの皆のおかげで、子供の頃を思い出しながら遊んでしまった。

「いや、楽しんでくれたなら、それでいい」

「はい！ 本当に楽しかったです！」

「まあ、おねーさんたちも年柄にもなくはしゃいでしまったからな」
来ヶ谷さん、あなたははしゃぎ過ぎです。自重してください。

でも色々あったけど、夏海ちゃん的笑顔を見ていたらやって良かったって思う。

「それにしても、今回の勝負は一勝一敗。引き分けだな」

「うん。鳥白島の皆も、二戦目の連携はすごかったよね」

「そうだな。正直、お前たちの絆を見くびっていた。すまない」

恭介と理樹が、俺たちをねぎらってくれていた。改めてそう言われると、照れる。

「でもまさか、紙飛行機が飛んできるとは思わなかったわ」

「えへへ。あの紙飛行機は、蒼さんが折り方を教えてくれたんですよ！」

「へえ。蒼、お前あんな紙飛行機が折れるのか？」

「すごいでしょ……って言いたいところだけど、あの紙飛行機って、昔しろはに教わったやつなのよね」

「あ、言われてみればそうかもしれないね。ウルトラホークホライゾン・ウイング・エクストラのプロトタイプに形が似てる気がするし」

しろはは落ちていた紙飛行機の一つを掴み上げ、まじまじと見ながら言っていた。

「でもこれ、中心がしつかりと折られていないよ。ミリ単位で正確に折らないと軸が安定しないし、完成品はもっと飛ぶはずだから」

「し、しよーがないでしょ。もともと手先は不器用だし、二人で急いで折ったんだから」

蒼がなんとも恥ずかしそうに言ってた。それでも、最終戦に勝てたのは蒼の助力によるものが大きい。

「それと夏海ちゃん、今回は大目に見るけど、紙飛行機は人に向かって投げちゃダメだからね？」

「あ、はい……」

「しろは、反省してるみたいだし、良いじゃないか。夏海ちゃんの援護が無かったら、多分あのまま鈴に押し切られて負けてただろうしさ」
しろはにやんわりと怒られて、夏海ちゃんがしよげていた。俺はたまらず、助け船を出していた。

「……そう言う羽依里は、反省したの？」

「……はい。俺も反省してます」

ちなみに、俺は最終ゲーム終了から今に至るまで、西園さんを押し倒した罪でずっと地面に正座をさせられていた。あれ、わざとじゃないのに。

地面は熱いし、石がごつごつしていて痛いし、蚊は寄ってくるし。助けてほしい。

「もう少し反省させましょ。自分がどれだけ悪いことをしたのか、骨の髄まで教え込むのよ」

「そうですね。私も賛成です」

佳奈多は完全に風紀委員モードになってるし、なぜか藍も怒ってる。やっぱり双子の姉って怖い。

「土下座までしてくれましたし、私は許して良いと思うのですが」

西園さんもああ言ってくれてるし、本当にそろそろ許して……。

「あのー、皆にちよつと聞きたいことがあるんだけど」

遠くを見ながらそんなことを考えていると、葉留佳がおずおずと左手をあげる。

「葉留佳ちゃん、どうしたんですか？」

「この、散らかりに散らかった新聞紙、誰が片付けるのかなーって思ってます」

「「あ」」

言われてみれば、紙飛行機をはじめ、のみきや天善が使った弾丸な

ど、大小様々な新聞紙がそこら中に落ちていた。通路の方に行けば、もつと落ちてそうだった。

「うわー、すごいなこりゃ」

「よし、皆で片付けよう」

「そうですねー」

「ゴミ袋ならたくさんあるよ！ 使って！」

鳴がスーツケースの中からいくつもゴミ袋を取り出していた。何でも入ってるな、あれ。

「皆でお掃除だねー」

「はい！ 綺麗にして帰りましょう！」

「なっちゃん、最後の仕事だねー」

「はい！ 頑張りましょう！」

「ほら羽依里さん、いつまでも座ってないで手伝ってください」

その時、藍からゴミ袋を渡された。どうやら許してもらえたと思っ
ていいんだろうか。

その後、皆で手分けして後片付けをした。

陽もほとんど落ちた頃、沢山の新聞紙を抱えながら、俺たちは心地
いい疲労感の中で帰路についたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に戻った後、洗濯物を取り込んだりと、家事を済ませた。

少し休憩をした後、いつもより少し遅い時間にしろは食堂へ向かっ
た。

「しろはー」

「しろはさん、こんばんわですー！」

夏海ちゃんと二人でしろは食堂に入ると、カウンターに葉留佳と佳
奈多、そして空門姉妹が座っていた。皆お風呂あがりで食事に来て
るんだろうか。全員が髪を下ろしていて、後ろからだほとんど見分け

がつかない。

「あ、羽依里たちも来たのねー」

「なっちゃん、やはー」

「皆さん、こんばんわです！」

挨拶を返しながら、四人の中で一番端にいた蒼の横に夏海ちゃんが座り、俺がその隣に座る。

「ふたりとも、いらっしやい」

席に着くと、すぐにしろはがおしぼりを手渡してくれた。

「はい。冷やし中華、おまちどうさま。葉留佳と佳奈多は、もう少し待ってて」

そして、空門姉妹の方に冷やし中華が提供されていた。

「しろは、今日のメニューは冷やし中華？」

「うん。あらかじめ下ごしらえしておけば、麺を茹でて、具材を盛り付けるだけだから」

厨房の奥を見ると、大きな鍋と茹でる前の中華麺が大量にスタンバイしていた。隣にはキュウリやトマトといった具材も見えるし、確かに簡単そうだ。

「じゃあ、私たちも冷やし中華をお願いします！」

夏海ちゃんが元気に注文していた。さっぱりしてて美味しいし、暑い日にはピッタリだよね。

「うん。少し待ってて。はい、葉留佳と佳奈多もおまちどうさま」

空門姉妹に続いて、葉留佳たちにも冷やし中華が提供された。本当に早い。

「そう言えば蒼、今日はイナリは一緒じゃないのか」

昼間駄菓子屋にはいたけど、新聞紙ブレード大会の時から見てない気がする。

「あー、今日は山にいるんじゃない？」

わりばしを割りながら、そう言っていた。

「そうなのか。あいつも男一匹、一人になりたい時があるのかもな」

「失礼ね。イナリは女の子よ？」

「え、メス？」

知らなかった。衝撃の事実だった。

「蒼ちゃん、キュウリあげます」

その時、藍が自分の冷やし中華に乗っていたキュウリを蒼にあげていた。

「じゃあ、あたしも紅シヨウガあげる」

二人はそう言いながらお互いの具材を交換していた。急に彩りが悪くなったような。

「おねーちゃん、トマトあげる」

「じゃあ、私も葉留佳にキュウリあげるわ」

葉留佳と佳奈多も具材を交換していた。お互いに苦手な物があるんだらうか。

「佳奈多がキュウリ嫌いって、なんか意外なんだけど」

なんとなく、好き嫌いとかなさそうないメージだし。

「冷やし中華のタレに漬かったキュウリって、すっぱくてピクルスみたいじゃない?」

「え、そんなもんかな?」

「そうよ。だから苦手なの」

でも、好き嫌いはしろはが許さないはずだけど。葉留佳とか、前に思いつきり怒られていたような気がするし。

「……」

あれっ、しろはが何も言わない。

今、アンバランスになった蒼たちの冷やし中華を明らかに見たはずなのに。

むしろ、見ないふりしてる?

「ふっふっふ。羽依里くん、同じ轍を踏むはるちんではないのですヨ!」

そんな考えが顔に出ていたのか、葉留佳が誇らしげにそう言ってきた。

「え、それってどういうこと?」

「実はお土産として、しろはちゃんにスイカバー渡したの。人数分」
「あ、それって賄賂」

「人聞き悪いぞー。日頃のお礼!」

「いや、嘘だろ」

まだこの島に来て、三日目のはずだし。

「ひごろのおれいなのです」

葉留佳、笑顔が恐いんだけど。

でも貴重なスイカバーを四本も。どうやって手に入れたんだろう。空門姉妹が駄菓子屋に根回ししたんだろうか。

「はい、二人も冷やし中華おまちどうさま」

その時、俺たちの冷やし中華が提供された。今日はいっぱい運動してお腹も空いているし、いただくことにしよう。

「こんばんわー」

食事をしていると、西園さんと小毬さんがやってきた。

「こ、こんばんわ」

それともう一人、見知らぬ女の子が一緒だった。年格好は俺たちと同じくらいなんだけど、あんな子いたっけ？

「……大盛況ですね。出直してきましようか?」

カウンターに座ってる六人を見て、西園さんがそう声をあげる。

「いらっしやい。今日の料理はすぐにできるから、座って待ってて」

「あ、今日は冷やし中華なんだねー。じゃあ、三人分お願いするよー」
「うん」

しろは注文を受け、厨房の方に入っていった。カウンター席はちょうど三席しか空いてなく、一番端に西園さん、その隣に小毬さんが座り、俺の横にはその女の子が座った。

「……」

カウンター席は狭いし、嫌が応にもその顔が目に入る。どこかで見たことあるような、ないような。

ちゆるちゆると中華麺をすする。このタレも手作りなんだろうか。のどごしも最高だ。

「えーつと……」

でも、やっぱり隣の女の子が気になる。なんでだろう。

「むー?」

俺の隣で冷やし中華を食べている夏海ちゃんも、時折不思議そうな顔でその女の子を見ていた。何か引つかかるものがあるみたいだ。

「……あれ?」

気がつけば、俺と夏海ちゃん以外の全員がニコニコと俺たちの方を見ていた。

「ねえ藍、そろそろネタばらししてあげたら?」

「……そうですね。このままだと、罰ゲームの意味がないですし」

罰ゲーム? 何の話だろう。

「直枝さん、そろそろ正体を明かしていいですよ」

「え、直枝さん?」

俺と夏海ちゃんは反射的に女の子の顔を見る。リボンをして髪型も変わっているけど、よく見たら理樹だった。

夏海ちゃんも開いた口が塞がっていない。よっぽどショックだったのかな。

「やっぱり、羽依里には気づかれなかったねー」

「なまじバレてくれた方がよかったよ……」

正体を明かされ、理樹子はがっくりとカウンターに突っ伏す。

いや、もともと女顔だとは思っていたけど、まさか女装していても気づかないなんて。

「うう……藍さん、ここまでバレなかったんだから、わざわざバラさなくとも……」

「だから、それだと罰ゲームの意味がないじゃないですか」

「さっきから言ってるけど、罰ゲームって何?」

気になったので、理樹本人に聞いてみた。

「新聞紙ブレード大会で藍さんに負けたら罰ゲームってことになってたんだけど、まさか女装させられるなんて思わなかったよ……」

そう言えば、そんな会話が聞こえていたような気がする。

「直枝さん、食事が終わったらホテルに戻って、撮影会が待っていますからね」

「トホホ……」

西園さんはデジカメを持っていた。学生が持つには高いだろうに。本気度が伝わってくる。

「その……理樹、強く生きろよ……」

頭を抱える理樹に慰めの言葉をかけながら、俺たちは食事を続けたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

そんな理樹たちに別れを告げて、食事を終えた俺たちは空門姉妹と一緒に帰宅することにした。

ちなみに同じタイミングで食堂を出た葉留佳と佳奈多は、港の方へ帰っていった。

「見てください。星がすごくきれいですよ！」

住宅地へと続く一本道に差し掛かった時、夏海ちゃんがそう言う。確かにここは周りに民家が少ないせいか、星がすごく綺麗に見える。

「そういえば、なんとなく虫の音も変わってきたような気がするな」

「そりゃ、夏も終わりが近いしねー」

確かに。そろそろ秋の虫が変わってきてるんだろうか。

「明日はお祭りですし、忙しくなると思いますよ」

「今年の夏鳥の役は誰がするのかしらねー」

「あれ、蒼ちゃん聞いてないんですか？」

「聞いてないわよー。のみきも何も教えてくれないし」

夏鳥の役ってなんだろう。お祭りの役職か何かだろうか。

去年の祭りを見ていないから、二人の話について行けない。こんなことなら、去年の祭りを見ておけばよかった。

そんなふうに考えながら歩いていると……夏海ちゃんが足を止める。

「……あれ？ 夏海ちゃんどうしたの？」

色々あつたし、疲れちゃったのかな。なんだか目も泳いでるし。

……いや、まるで何かを目で追うように、視線を動かしている。

その視点がある一点で止まり、そのままゆつくりと、右手を何も無い空間へを差し出す。

「……ちよつと、夏海ちゃん？」

さすがに心配になって、肩を叩こうと手を伸ばした、その時……。

「夏海ちゃん。それ、触っちゃ駄目だからね」

「……あ」

蒼が笑顔でそう言う。夏海ちゃんはまるで、その言葉で我に返ったような反応だった。

なんだろう。俺や藍には見えなかったけど、刺す虫でも飛んでいたんだろうか。

「す、すみません。少し疲れちゃったみたいで」

夏海ちゃんは、ぱしぱしと自分の両頬を叩いていた。どうやら大丈夫そうだ。

「……夏海ちゃん。手、握ったげる」

「え？」

蒼がそう言つて、夏海ちゃんの手を握る。

「あ、ありがとうございます……」

「じゃあ、私は蒼ちゃんの手を握ってあげます」

「ちよつと藍、意味が解らないんだけど」

「良いじゃないですか。減るものじゃないですし」

「まあ、いいけどね……」

「じゃあ、せつかくですし、羽依里さんも私と手をつなぎましょう！」

「え、俺も？」

「はい！」

夏海ちゃんがそう言つて左手を差し出してくる。

「……そうだね。いいよ」

……なりゆきだし、良いよね。夏海ちゃんだし。

その後は、なんとなく元氣のない夏海ちゃんを励ますように、皆で

手を繋いで帰宅した。

明日は島の祭りの日。忙しくなりそうだった。

第三十三話・完

第三十四話 8月21日（前編）

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんの声で目が覚める。

「夏海ちゃん、おはよう」

「おはようございます」

眠たい目をこすって起き上がり、布団をたたむ。開け放たれたふすまの向こうからは、優しい朝日が差し込んできていた。

「表で待つてるので、早く準備してきてくださいね！」

「うん。すぐ行くよ」

「はい！」

夏海ちゃんは俺の返事を聞くと、すぐに廊下をパタパタと駆けていった。うん。いつも通りの元気な夏海ちゃんだった。

たぶん、昨夜はちよつと疲れてただけだろう。野球の練習に新聞紙ブレード大会と、ハードな一日だったし。

「夏海ちゃん、おまたせ……あれ？」

身支度を整えて玄関を出ると、夏海ちゃんは門の陰に隠れるようにしながら、表の様子を眺めていた。

「どうしたの？」

「いえ、今日はなんだか、人が多いなと思ひまして」

「え、人？」

夏海ちゃんと並んで外をしてみる。そこには、いつもは見えないような都会的な格好をした若者や、大きなスーツケースを持った観光客が往来していた。

「本当だね。あの人たち皆、旅行者かな」

「みたいです。やっぱり、お祭りの日は人が多くなるんですね」

確か、のみきが連絡船の数も増えるとか言っていたし。始発便がい

つもより早かったりするのかもしれない。

「なんだか緊張してしまいますね」

いつもと島の様子が違うからだろうか、控えめな声でそう言っていた。だから、門の外に出るのを渋ってたのかな。

「それに、格好もこんなのですし」

自分の服の端を摘みながら言う。今日の夏海ちゃんは、有名なネコのキャラクターがプリントされたTシャツと、青色の半ズボンだった。

「似合ってるし、可愛いと思うけど」

そりゃ、旅行者は着飾ってくるのが当たり前だろうし、そこまで気にする必要ないと思う。俺だって普段着だし。

「……羽依里、なっちゃんも複雑なお年頃なんだよ。わかってあげなきゃ」

「あれ、鳴?」

聞き慣れた声が出た方を見ると、いつからいたのか、鳴が門のところから顔を覗かせていた。

「羽依里になっちゃん。おはようー」

「鳴さん、おはようございます!」

「おはよう。この時間ってことは、鳴もラジオ体操に行くのか?」

「うん、そうだよ!」

昇ってきたばかりの太陽に負けないくらいの眩しい笑顔で返された。鳴も正直食いしん坊だし、ログボが楽しみなんだろうか。

「でも、いつもより遅い気がするけど」

「ちよつと港に用事があつてね、遅くなっちゃったの」

てへへと笑いながら、後ろ頭を搔いていた。その時に羽織っていたケープがふわりと舞う。毎回思うけど、鳴もなんだかんだでオシヤレだよな。

「それにしてもそのスーツケース姿。この状況で見て、ようやく自然に見えるよな」

周りはスーツケースを持った旅行者だらけだし。今だと俺たちの方が浮いていた。

「ええー、そんなことないよ。いつも自然だし」

そうかな。鴫の事情はもちろん理解してるけど、神社や小学校のグラウンドで見るスーツケースには、違和感しかないんだけど。

「そうそう！ それより聞いてよ羽依里！」

そんなことを考えていると、鴫がただならぬ表情で迫ってきた。

「ちよ、ちよつと鴫。朝から近いんだけど」

「港にいたらね、出店をやった男の人から声かけられたの！」

「え、何それ」

「金髪の若い人だったんだけど、僕とナウいヒップホップ聴いていかない？ って口説かれた！」

鴫が途中声色を変えて、くねくね踊りながら言う。

もしかしなくても、ナンパってやつだった。鴫はなんだかんだで美人だし、声をかけたくなる気持ちもわかるけど。

「ええー……今時、ナウい……？」

そして夏海ちゃんが思いっきり引いていた。うん。こっちの気持ちも分かる。

「これからは、怪しげなお店には近づかないことにするよ……」

「ああ、それがいいと思うぞ」

……やっぱり、旅行者が増えるとそれに混じって、変な人もやってくるんだろうか。怖い話だった。

それにしても、金髪のにーちゃんがやってるお店。どこかで聞いたことがあるような。それと便座カバー。

「それでね羽依里。港からここまで歩いてきたら、疲れちゃったんだけど」

鴫がスーツケースに腰掛けながら、じつと俺の方を見ていた。あれ？ この流れはもしかして。

「というわけで、押してくれないかな」

「……ちよつと待って、この状況で!？」

俺は改めて周囲を見渡す。何度も言っているように、今日の住宅地には沢山の旅行者がいる。

「これだけの人が行きかう中を、スーツケースを押していけど？」

正直、勘弁してほしい。なんの罰ゲームだろう。

「羽依里、ようやくスーツケースが自然に見えたって言ったじゃない」「いや、確かに言ったけどさ……」

それはスーツケースを持つ姿が自然に見えたのであって、人が乗ったスーツケースを押す姿が自然だなんて、一言も言っていない。

「早くしないと、ラジオ体操始まっちゃうよ！ ほら、なつちゃんも早く！」

鴉はそう言うと、てしてしと隣の空きスペースを叩く。どうやら、夏海ちゃんも乗せる気満々みたいだ。

「え、私はその、少し離れて歩こうかなーと……」

自分たちがスーツケースに乗って運ばれている場面を想像したんだろうか。夏海ちゃんが後ずさっている。

「ほら、なつちゃん乗ろ？」

鴉が笑顔で夏海ちゃんを誘惑している。笑顔なんだけど、なんか怖い。

ところで、スーツケースを押す俺に拒否権はないんだろうか。あの感じだと、たぶんないだろうけど。

「……うん。夏海ちゃんも乗せてもらったらいいよ。俺が押すから」

だから、俺も鴉に便乗しておいた。鴉と一緒にあって、夏海ちゃんの肩を掴む。こうなったら逃がさない。イチレンタクショーだ。

「うろうろ……」

二人掛かりで誘われて、夏海ちゃんもついに諦めたらしい。力なくスーツケースに腰を下ろす。

「は、羽依里さん、できるだけ急いでくださいね」

「うんうん、わかってるよ」

急いだからそれだけ目立ちそうな気がしなくてもないけど。

「それじゃ、神社目指して、しゅっぱーっ！」

その後は鴉の号令の元、旅行者の間を縫うようにスーツケースを押していった。

……うん。予想はしてたけど、もの凄く恥ずかしかった。けっこう二度見されたし。

俺たちは自然と早足になりながら、神社へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、おはよう」

「おはようございます！」

三人一緒に境内に到着した後、ぐるっと境内を見渡す。

ここには天善やのみきといった、いつものメンバーが揃っていた。見知った顔ばかりで安心する。

「よし、筋肉のジェットコースターだ！」

そして当然、リトルバスターズのメンバーもラジオ体操に来ていた。

真人は相変わらず筋肉アトラクションをやって子供たちと遊んでいる。すっかり人気者だった。

「おはよう」

「おはようございます」

その時、空門姉妹から声をかけられた。今日も相変わらずそっくりだった。

「道中人が多くて、びっくりしたでしょー」

「ああ、まさかあれだけ人がいるなんて思わなかった」

「お祭りの時は毎年これくらい人が来るんです。これから夕方にかけて、もっと増えますよ」

右手でスタンプカードを弄びながら、藍がそう言う。困っている感じではなく、むしろ誇らしげな顔だった。

「……あれ？ そういえば、今日は紬さんや静久さんは来ていないんですね」

「ああ。二人は用事があるらしくてな。だが、野球の練習には遅れずに行くと言っていたぞ」

夏海ちゃんの疑問に、のみきが答えていた。二人がラジオ体操に来

ないことはよくあることだし、野球の練習に来てくれるなら、問題ないかな。

「もしかして、お祭りの準備で忙しいんでしょうか？」

「いや……まあ、準備が忙しいのは忙しいが、あの二人は違うようだぞ」

「そうなんですね」

「そういえば、良一の姿もないな？」

「良一の方は朝早くから祭りの準備に借り出されているらしい。漁に出られないのもあって、親父さんがやる気満々でな」

俺の疑問に答えてくれたのは天善だった。

「良一のところは準備大変そうよねー。漁師の家だし」

「だが良一も、野球の練習にはなんとか抜け出してくると言っていたぞ。それとこれは話が別らしい」

良一も祭りの準備で忙しい中、俺たちのために時間を作ってくれるみたいだ。それを知ってしまうと、俺たちもどうにかしてお返ししたい。

「ねえ夏海ちゃん、せっかくだし、俺たちも祭りの準備を手伝わせてもらわない？」

「そうですね！ 手伝いたいです！」

そう夏海ちゃんに耳打ちすると、どうやら俺と同じ考えだったらしく、すぐに同意してくれた。

「なあのみき、その祭りの準備、俺や夏海ちゃんにも手伝わせてくれなにか？」

「なに？」

俺はすぐにその旨をのみきに伝える。突然の申し出に、のみきは鳩が水鉄砲……じゃない、豆鉄砲を食らったような顔をしていた。

「申し出はありがたいが、鷹原たちは客人だから……」

「客人だなんて、今更水臭いことを言わないでくれ。少しでも人手は多い方がいいだろ？」

「そうですね！」

俺は夏海ちゃんと一緒にのみきに詰め寄る。周りの皆は、それを笑

顔で見つめていた。

「わ、わかったわかった。午前中は青年団や役所の職員で事足りるよ
うだから、二人には午後から手伝ってもらいたい。それでいいか？」
「わかった。よろしく頼むよ」

「よろしくお願いします！」

「ああ。私たちとしても助かるよ」

「……その話、俺たちも便乗させてもらっていいか？」

俺たちの話がまとまったのを見計らって、恭介をはじめとしたリトルバスターズの皆が話に入ってきた。

「なに、お前たちもか？」

「ああ。せっかく島にいるんだ。雑用でもなんでもいいから、手伝わせてくれないか？」

そう言う恭介の表情は真剣そのものだった。意志は固いようだ。

「いや、しかしな……」

「言っておくが、客人だから駄目というのは、俺たちにも通用しないぜ？」

「うむ。我々も、もてなされているだけは性に合わん」

「だな。いつでも俺の筋肉を呼んでくれ」

「力仕事は苦手ですが、頑張らせてもらいます」

「やはは、皆で一緒にやれば楽しいよねー」

それを悟ったように、来ヶ谷さんや真人、西園さんたちが次第にのみきを取り囲んでいく。

「わ、わかった。わかったから、集団で取り囲むのはやめてくれ」

多勢に無勢。さすがののみきも観念したらしい。

「……なら、手伝ってくれる者は13時に役所前に集まってくれ」

最後に集合時間と場所を取り決めたところで、ようやくのみきが解放された。

「はあ……私は背が低いからな。あれだけの人数に見下ろされると、その、押しつぶされそうな錯覚に陥るんだ」

のみきがそう言って大きく息を吐く。なんにしても、リトルバスターズの皆が手伝ってくれるのは心強い。

「よーしお前らー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」
その時、ラジオ体操好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「ピクピク、ピクピク」

今日も皆で一緒に耳を動かす。

「うおおおーっ！」

気合いを入れた真人の耳が動いている。確か、昨日までは動かなかったはずなのに。さすが筋肉の申し子だった。筋肉と名のつくものは全て操るみたいだ。

「むむむむ……どうだっ！」

真人に負けまいと、鈴の耳も動いていた。あれっでどう見てもネコミミだよな。なんで生えてるんだろう。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああーっ！」

「筋肉！ 筋肉！ 筋肉！ 筋肉！」

「ちよつとそこの筋肉！ うるさいわよ！」

「え、好きな掛け声でやって良いって聞いてんだぜ？」

「井ノ原、あまり騒ぐようなら、島内放送で筋肉禁止令を出すぞ？」

「う、うわああああ……！」

のみきの発言を聞いた真人が、その場に崩れ落ちる。

「いやその……すまない。半分冗談だったんだが。そこまで落ち込まれるとは思わなかった」

「真人しっかり！ ラジオ体操の後は、筋肉体操が待ってるよ！」

理樹が真人のそばに駆け寄り、そう励ましていた。うん。今日も賑やかなラジオ体操だった。

「さあ、今日のスタンプはこっちだぞー」

スタンプを押ししてもらった後、ログボを受け取る。

ちなみに、今日のログボはキュウリだった。氷水を張ったバケツの中に入っていて、冷えてて美味しそうだ。

「おおー、今日は冷やしキュウリみたいだね！ いただきまーす！」
鴉はログボを受け取ると、すぐに食べ始める。パキツと心地いい音が聞こえた。

「うん。おいしー。羽依里も食べなよー」

言われてみれば、ほとんどの皆がその場でキュウリを食べていた。せつかく冷えてるんだし、俺もこの場でいただこう。

「……おお、美味しい」

一口かじると、甘さが口いっぱい広がる。そしてすごく瑞々しい。

キュウリには味噌が合うとか聞くけど、これにはそんなもの必要なくらいに美味しい。

「あ、食べちゃったんですか？」

キュウリを堪能していると、夏海ちゃんが驚いた顔で俺の方を見ていた。どうしたんだらう。

「チャーハンの具にするので、食べずに持って帰ってもらおうと思っていたんですが……」

「あ、ごめん。うっかりしてたよ」

そう言われて気がついたけど、時すでに遅し。もう半分くらい食べてしまっていた。

「いえ、その、しょうがないですよね……」

夏海ちゃんが目に見えて落ち込んでいた。どうしよう。ものすごい罪悪感だ。

その後、自分のキュウリを見ながら、ぶつぶつと何か言っていた。一本で足りるでしょうかとか、胡麻油が合いそうですとか聞こえる。これはまた、チャーハンモードかな。

「蒼ちゃん、このキュウリあげます」

その時、藍が蒼にログボのキュウリを渡していた。そういえば、藍はキュウリが苦手だっけ。

「え、いいわよ。二本も食べられないし」

「……じゃあ、恭介さん、食べますか」

そう言いながら、キュウリを恭介に差し出す。

「いや、俺より夏海にやっつけてくれないか」

「夏海ちゃんですか？」

「ああ。夏海はログボでチャーハン作るんだろ？」

「は、はい！ そうです！」

夏海ちゃんの笑顔が輝いた。

「そういうことでしたら。はい、どうぞ」

恭介からそう促された藍が、夏海ちゃんにキュウリを手渡していた。

「ありがとうございます！」

「構わないですよ。美味しいチャーハン作ってください」

「はい！ 頑張ります！」

夏海ちゃんは二本のキュウリを持って、嬉しそうだった。キュウリのチャーハンとか、ちよつと怖い気もするけど。

「……そうそう。明日までで良いんだが、野球の試合で使うんで、お前たちのチーム名を決めておいてくれ」

夏海ちゃんがキュウリを受け取った直後、恭介が俺たちにそう告げてきた。

「え、チーム名？」

「そうだ。俺らにだけチーム名があるのも不公平だろ」

なにがどう不公平なのかわからないけど、確かにチーム名があった方が一致団結できそうな気がする。

「じゃあ、皆で相談して決めておくよ」

「ああ、良い名前を期待してるぜ」

でも、唐突にチーム名を考えてくれと言われても、正直悩む。島の皆も同じように考え込んでいた。

「鳥白島ピンポンズ……これしかないな」

ちよつと天善、野球チームだから。それだと卓球チームになるから。

無難に鳥白島スポーツ少年団とかで良いと思うんだけど……。

「それともうひとつ。これは時間に余裕があればなんだが」

「……え？ ああ、何？」

考え込んでいると、恭介がそう続けた。俺は慌てて恭介の話に耳を傾ける。

「11時くらいに駄菓子屋に来てくれ。面白いものを見せてやる」

「え、面白いもの？」

リトルバスターズの皆が、何かゲリラ的なイベントでもやってくれるのだろうか。

「でも駄菓子屋ってことは……蒼、何か聞いてないか？」

「鳥白島ブルーホエールズ……って、え？ なに？」

「いや、何でもない。続けてくれていいよ」

どうやら、チーム名を考えるのに必死になっているみたいだった。まあ、11時なら野球の練習も終わってそうだし、余裕があったら見に行ってみよう。

「……さて、それじゃ俺たちも帰って朝飯にするか」

話が終わると、恭介はリトルバスターズの皆を引き連れて、神社から去っていった。

「それじゃあ夏海ちゃん、俺たちも帰ろうか」

「鳥白島チャーハンズ……」

……こつちもチーム名を考えるのに没頭していた。

「夏海ちゃん、帰るよー！」

「わひゃい！ な、なんですか!?!」

耳元で名前を呼んでみる。ようやく帰ってきてくれたみたいだ。

「えっと、そろそろ帰ろう。チーム名は帰りながらも考えたらいよいよ」

「そ、そうですね。帰りましょう！」

もうほとんど人がいなくなった境内を後にして、俺と夏海ちゃんも帰宅の途に就いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、さっそく作ってきますねー！」

加藤家に帰宅すると、夏海ちゃんはいつものエプロンをつけて台所への消えていった。

玄関に靴が無かったので、鏡子さんはまた出かけているらしい。今日は祭りだし、朝から準備に忙しいんだろうか。

夏海ちゃんが朝ごはんを作ってくれている間、居間に座って待つ。

「うーん……」

……暇だったので、テレビをつけてみた。

「オーオーオオー♪ ヨーシノー♪」

なんか朝から珍しく、歌番組をやっていた。

……しばらく見ていたけど、特に知ってる曲でもなかったのので、チャンネルを変えてみる。

ニュース番組、旅番組、情報番組。この島のテレビは、4つしかチャンネルがない。

「……消そう」

一通りザツピングした後、どれもパツとしなかったのでテレビを消す。

その後は卓上に頬杖をついて、夏海ちゃんが調理する音を聞くことにした。目を閉じて、聞き耳を立てる。

「♪♪♪♪♪」

食材を切る音に交じって、鼻歌が聞こえる。これは島の童謡だけ。絃が良く歌ってる歌だ。

「♪♪♪♪♪」

しばらくすると、調理音が食材を炒める音に変わった。同時に鼻歌の感じも変わる。これはウイズだな。鶯が好きな歌だっけ。

胡麻油の良い匂いがしてきたし、そろそろ完成かな……。

「……あれ？」

何の気なしに目を開けると……目線の少し上を、光る蝶が横切つて

いった。

それはひらひらと舞いながら居間を抜け、玄関の方へ飛んでいく。「なんだろう、今の」

俺は立ち上がって、その後を追うように廊下に出る。そのまま玄関の方を見てみるけど、さっきの蝶の姿はなかった。

「……確か、こつちの方に飛んでいったと思うんだけど」

でもあの蝶、前に釣り場や山の中で見たのと同じ蝶だよな……？

「お待たせしました！ キュウリチャーハンです……って、あれ？」

……不思議に思っていると、居間の方から夏海ちゃんの声がした。

「ああ、ごめん」

俺は慌てて居間に戻る。夏海ちゃんができたてのキュウリチャーハンを食卓に並べてくれていた。

「お客さんでも来てたんですか？」

「ううん。なんでもないよ」

「それでしたら、冷めないうちに食べましょう！ 今日自信作ですよー」

笑顔で話す夏海ちゃんに続いて、俺も食卓につく。予想以上に美味しそうだった。

「それじゃ、いただきます」

挨拶をして、キュウリチャーハンをいただく。

「……なんだか、いつものチャーハンと風味が違うね」

一口食べて、そう思った。

「えへへ。いつものお醤油の代わりに、めんつゆで仕上げてみたんですよー」

なるほど。だからあの独特の青臭さが消えてるのか。それでいて、キュウリの歯ごたえは残っていて、シャキシャキしてて美味しい。

「美味しいよ。全然青臭くないし。胡麻油も効いてるね」

「ありがとうございます！ おかわりもあるので、たくさん食べてくださいねー」

その後は夏海ちゃんに促されるまま、結構な量を食べってしまった。具材はキュウリだし、ヘルシーと言えばヘルシーだったけど。

朝食を終えた後、夏海ちゃんはせっせと野球道具を準備していた。
「夏海ちゃん、今日も朝練するんだよね?」

「はい! またお願いできますか?」

「いいよ。でもせっかくだし、今日は庭じゃなく、グラウンドでやらな
い?」

「え、グラウンドですか?」

「うん。9時には皆も来るだろうしさ。一足早く行って、朝練しながら待ってようよ」

「そうですね。そうしましょう!」

「それじゃ、行こうか。荷物持つよ」

「はい、お願いします!」

夏海ちゃんから野球道具を受け取って、二人一緒に加藤家を出発する。

表に出てみると、住宅地を行き来している旅行者の数はますます増えて
いる。藍の言う通り、夕方にかけてもっと増えそうだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、朝練スタートです!」

誰もいないグラウンドに到着した俺たちは、さっそくキャッチボール
を始める。

明日が試合本番ということもあって、夏海ちゃんもマウンドに立
ち、ナツクルからフォーク、ストレートと、一通りの球種を試す。

うん、安定してストライクゾーンに収まってる気がする。着実にコ
ントロールが良くなってる。

「夏海ちゃん、良い感じだよ」

「ありがとうございます!」

夏海ちゃんは笑顔で返してくれるけど、時折右肩を揉んでは首をかき上げていた。何か違和感でもあるのかな。

「よう。朝から精が出るな」

そんな様子を気にしていると、背後から声をかけられた。

「あれ、恭介に理樹、それに鈴も」

ボールを捕球した後に振り返ってみると、そこには恭介たちがいた。

「三人とも、何か用事？」

俺がマスクを外して恭介たちに近寄ると、夏海ちゃんもそれを察してマウンドから走ってきた。

「俺たちだけじゃないぞ。来ヶ谷や三枝もいる」

恭介が指差す先には、グラウンドの隅に植えられた木が見える。その木陰に来ヶ谷さんと葉留佳が座っていて、手を振ってくれていた。

「……あれ？」

その木の上にも、金髪の子がちらちら見える。あんな子いたっけ。

「それで用事があるのは、俺じゃなくて鈴の方なんだ。どうも、夏海に話があるらしい」

「え、私にですか？」

「ああ、皆の前だと恥ずかしいから……ほら鈴」

恭介はそう言いながら、自分の背後に隠れていた鈴を前に押し出す。

「わ、わかってるっ」

鈴がおずおずと夏海ちゃんの前に出てくる。なんだろう。まだ緊張してるんだろうか。

「えっと、なつみ、ボールを投げるときは、こうだ。こうすると、肩が楽になるぞ」

「え？」

呆気にとられる夏海ちゃんをよそに、鈴は投球フォームを見せていた。

「さつき、いたそうにしていたからな」

もしかしなくても、さつき夏海ちゃんが肩を気にしていたのを見て

たのかな。

「こ、こうですか？」

「もう少し力を抜くんだ。こうだ」

その後も何度か投球フォームを確認した後、夏海ちゃんは改めてマウンドに立つ。

「よし夏海、投げてみろ」

マスクをかぶった恭介が、いつの間にかバッターボックスでミットを構えていた。

「はい！」

恭介に指示されるまま、ボールを投げる。

「あ、本当です。だいぶ違います！」

俺が見ても何がどう変わったのかわからないけど、夏海ちゃん曰く、だいぶ楽しい。

「まだだ。まだなんか、かたいぞ」

「え、そうですか？」

夏海ちゃんの投球を近くで見ていた鈴は、まだ納得していない様子だった。

「……なつみ、お前練習の後、きちんとストレッチしてないだろ。あたしが肩をもんでやろう」

「え？ いえその」

突然の提案に困惑する夏海ちゃんを気にも止めず、鈴はマウンドへ行き、夏海ちゃんの肩を揉み始める。

「ほれ、ぐーりぐーり」

「ふみやつ、わひやつ」

やつぱり、気持ち良いんだろうか。夏海ちゃんから変な声が出る。

「ふむ。鈴君、次はおねーさんの番だぞ」

気がつくのと、鈴の後ろに来ケ谷さんが並んでいた。さっきまで木の下にいたと思ったんだけど。いつの間に来たんだろう。

「だ、誰がくるがやに渡すかつ。あっち行けっ」

「むぎゆっ」

鈴は来ヶ谷さんを警戒するあまり、夏海ちゃんを抱きしめていた。

「……鈴は人見知りが激しいから、普段はあんな風に抱きついたりしないはずなんだけど」

そのやりとりを少し離れた場所から眺めていると、いつの間にか俺の隣に理樹がいた。

「夏海ちゃんはどこか猫っぽいいし、仲間意識が芽生えてるとか?」

「あはは、それあるかもね」

理樹がその場に腰を下ろしたので、俺も一緒になってその横に座る。

「それにしてもさ……理樹も、まさか島に来て野球をするなんて思わなかったんじゃないか?」

「そうだね。たぶん、リトルバスターズの皆、誰一人思ってたなかったんじゃないかな。恭介を除いてさ」

「それって、恭介一人だけがやる気満々だったってこと?」

「うん。というか、恭介はずっと秘密にしてたよ。島に来る目的」

理樹は苦笑いを浮かべていた。確かに、夏休みに島に野球をやりに行こうなんて提案、普通は誰も賛成しないだろう。まあ、その原因を作ったのは、俺なんだけど。

「でも、今はこの島に来て良かったって思ってるよ。学校の課題や勉強に追われて、いつの間にか忘れていたもの、思い出させてくれたような気がするしさ」

確かにこの島には、都会の喧騒や日々の生活の中で忘れてしまったものを思い出させてくれる何かがある。それは、定期的に島にやってくる俺が何度も感じているものだ。

「……こんな楽しい日々が、いつまでも続いてほしいと思ってるよ」

……同じだった。俺もいつの間にか、この夏休みがいつまでも続いてほしいと願っていた。

「けどさ、終わりがあるから全力で楽しめるんだよな」

「そうだね。区切りをつけるためにも、明日の試合、お互い頑張ろう」

「ああ」

どちらとなく、握手を交わしていた。夏海ちゃんと鈴みたく、俺と理樹の間にも仲間意識が芽生えたのかもしれない。

しばらくすると、蒼やしろはといった島の仲間たちもグラウンドに集まってきた。

「頑張ってるわねー」

やってきた蒼が、マウンドから投球練習を続ける夏海ちゃんを見ながら笑顔で言う。

「ああ、うちのエースだからな」

「そんなこと言って、あんまり夏海ちゃんにプレッシャーかけちゃ駄目だからね」

「わ、わかってるよ」

直後、しろはに睨まれた。すごく怖いんだけど。

「ところで、どうして恭介さんが夏海ちゃんのボールを受けているんですか？」

「えっと、それはなりゆきで」

「まったく、女房役のあなたがボールを受けないでどうするんですか」しろはに続いて、藍に睨まれた。だから怖いって。

「ところで、何故恭介たちがいるんだ？　もしかして、今日も一緒に練習するのか？」

「いいわね。私も来ヶ谷さんと、おっぱいと世界平和について熱く語りたいたいと思っていたところだし……」

いや静久、お願いだから何も語らないで。

「違うよ。恭介たちは夏海ちゃんにちよつとアドバイスをしに来てくれただけでさ」

「つてことは、リトルバスターズは鈴がピッチャーなんだな。どんな球を投げるのか、興味があるぜ」

そういうのは良一だった。うちのパワーヒッターだし、腕試ししたくなっただらうか。

「よし鈴、せっかくだ。お前の剛速球を良一に見せてやれ」

俺たちのやり取りを聞いていたんだろうか。恭介が鈴にそう促す。「す、少しだけだぞ」

一瞬躊躇した鈴だったけど、すぐに夏海ちゃんからボールを受け取ってマウンドに立つ。対する良一は打席でバットを構え、準備万端みたいだ。

「おっと、さすがにあの球は俺じゃ受けきれないな。理樹、キャッチャー変わってくれ」

「ええつ、僕も受けきれない自信ないんだけど!？」

「そんなこと言って、いつも受けてるじゃないか。頼んだぜ、正捕手」
「トホホ……」

理樹はマスクとミットをつけると、ポジションにつく。一体どんな剛速球が飛んでくるんだろう。

「……くらえ、ライジングニャットボール!」

鈴が投球した直後、一筋の光がミットに収まった。え、何だ今の。「ボ、ボールが消えた!？」

良一がバットを持ったまま硬直していた。同じように、鈴のボールを見た俺たち全員も固まっていた。

「130キロ……相変わらずの球速だな」

そんな中、恭介だけが冷静にスピードガンで球速を測っていた。待って。なにその速度。

「なあ恭介、鈴って普段からあんな球を投げるのか?」

「いや。普段は80キロくらいだな。今のは必殺技って奴だな」

よくわからないけど、そういうものらしい。

「くらえ! ニャーブだ!」

「ボ、ボールが曲がる!？」

二球目は緩急をつけて、変化球だった。良一は思いつきり空振っていた。

「ちなみに、夏海のボールをスピードガンで計ってみたら、75キロだったぞ。その年で、すごいじゃないか」

「え? あ、ありがとうございます……」

さすがに鈴には負けるけど、夏海ちゃんも頑張っていた。リトル

リーグの球威ってわからないけど、速い方なんじゃないだろうか。

「……おもいしかったか」

「ちくしょー!」

そして最後までライジングなんとかボールで良一を三球三振に仕留め、鈴は誇らしげな顔をしていた。

俺たち、明日あんな投手を相手にしないといけないのか。打てるのかな。

……それにしても、リトルバスターズはなんでわざわざ手の内を晒すようなことをしてくれたんだろう。

夏海ちゃんのため、って言われればそれまでかもしれないけど。こっちのチーム状況も多少なりとも伝わってしまうから、イーブンといえどイーブンなのかな。

「あ? あいつら何やってんだ?」

「なんだか楽しそうに練習してますねっ」

「うん。たのしそう」

その時、グラウンドの入り口にオッサンたちの姿が見えた。

「……おっと、そろそろ頃合いだな。例のイベントの準備もあるし、お前ら、帰るぞ!」

オッサンの姿が見えるや否や、恭介たちは一目散にグラウンドから去っていった。昨日も一緒に練習したんだし、別に逃げ帰らなくても良いと思うけど。

「ところで、さっきまでやけに人が多かった気がしたんだけどよ」

オッサンは俺たちを集めるなり、そう口にしていた。

「気のせいだよ。リトバス効果って言って、この島ではよく起こる現象なんだ」

俺はとっさに頭に浮かんだ言葉を並べて言い訳をしていた。

「……まあいい。それより練習を始める前に、テメエらに伝えておくことがある」

「昨日のポジションに続いて、今日は打順の発表でもしてくれるんで

すか？」

藍がそう聞いていた。明日試合だし、そろそろ発表されても不思議はない。

「残念だが違うぜ。それより、もっと重要な話だ」

打順より重要な話って何だろう。俺たちはオッサンに注目して、次の言葉を待つ。

「……テメエらの試合は明日に迫っているが、俺様たちは今日の最終便で本土に帰る」

「え」

一瞬、耳を疑った。

「……そ、それじゃあ監督、明日の試合の指揮はどうなるんですか!」
夏海ちゃんも思わず声を上げる。寝耳に水で、俺たちも驚いていた。てつきり試合当日も指揮を執ってもらえるものと思っていたのに。

「明日はテメエらだけの力で頑張ってほしい。伝えなきゃとは思ってたんだが、言い出せなくてよ」

オッサンはこれまで見たことないような表情をしていた。本当に申し訳なく思ってるんだろう。それを見て、夏海ちゃんも口をつぐんでしまう。

「……悪く思わないでくれ。元々、俺たちの滞在予定は今日までだったんだ」

そこで朋也さんが助け舟を出していた。言われてみれば、オッサンたちが鳥白島に来た本来の目的は家族旅行。恐らく、今日の祭りが目当てだったはずだ。

俺たちの指導こそがイレギュラーだったんだし、これ以上迷惑はかけられない。

皆も同じ気持ちなのか、誰一人として言葉を発しなかった。

「……テメエら、しんみりするんじゃないねえ! 今から俺様が最後の指導をしてやるからな! まずはノックだ! さっさとポジションにつきやがれ!」

その重い空気を吹き飛ばすように、オッサンの声が飛ぶ。俺たちは

反射的に各ポジションへと散らばっていった。

「オラオラしっかり取れよー!」

オッサンのノックを、ポジションについた皆が受ける。これも見慣れた練習風景だった。

ちなみに、俺と夏海ちゃんはポジションの関係上、守備練習の時はやることがないので、主に球拾いをしていた。

その時、オッサンが打ち損じた打球が早苗さんたちのいる方へ転がっていった。近くにいた俺は、慌ててそのボールを拾いに走る。

「はい」

足元に転がってきたボールを汐ちゃんが拾って、俺に渡してくれた。

「あ、汐ちゃん、ありがとう」

「うん」

本当にかわいい子だな。俺も子供を作るなら、女の子がいいな。

「おいへナチン小僧! 汐と遊ぶ暇があったら、さっさとボールを拾いやがれ!」

妙なことを考えていたからか、オッサンに怒られてしまった。うう、厳しい。

「お父さん、本当に楽しそうですっ」

「だな。なんだかんだで、あの人は野球してる時が、一番生き生きしてるな」

「うん。あつきーかっこいい」

「かつ、そうだろそうだろ。もっと褒めやがれ!」

「かっこいいですよっ、秋生さんっ!」

家族に良い所を見せられているからだろうか、オッサンは上機嫌だった。

このやりとりを見る限り、この家族は本当に仲が良いんだと思う。

守備練習の後半は、併殺を取るための塁間の連携や、外野からの中継プレーを中心に練習が組まれた。

最終日ということもあってか、いつも以上に細かい指示が飛ぶ。

その後は夏海ちゃんがピッチャー、俺がキャッチャーを務め、打撃練習を行った。

その際に、バッテリー間で最低限必要なサインについて、オツサンに細かく教えてもらった。俺と夏海ちゃんはそのサインを必死になって覚えた。

「そういえばオツサン、打順は決めなくていいのか？」

「打順は直前の様子を見て決めんだよ。今日の夜にでも、お前が決めなくてやれ。打順決めの基本はわかんだろ？」

「それはわかるけどさ……」

「なら心配ねえ。お前に一任するぜ」

オツサンはそう言ってくれたけど、そんな重要なことを俺が決めていいんだろうか。どうしても不安になる。

「……それより、なんか夏海のやつ、球が速くなってね？ 朝練の成果か？」

夏海ちゃんが投げるボールを見ながら、オツサンがそんなことを言っていた。たぶん、鈴から教えてもらった投球術が役に立っているんだろう。

「よし、集合！」

練習開始からちょうど一時間後、オツサンから号令がかかり、練習終了が告げられた。今日はものすごく密度の濃い練習だった。

「それで、だ。練習最終日の今日も、早苗からパンの差し入れがある。心して受け取れよ」

そう言うオツサンの隣には、ニコニコ顔の早苗さんが立っていた。予想通り、パンの入った箱を持っている。

「今日はリトルバスターズの皆さんも居たらと思い、多めのパンを用意していたんですが……渡すことができず、残念です」

……今更になって分かった。恭介たちが足早にグラウンドから去っていった理由はこれだ。

「あの方たちの分まで、たくさん召し上がってください。どうぞっ」
そして早苗さんは前に出てきて、俺たちに変わった形のパンを渡してくれる。

「えっと、何これ？」

俺はもらったパンを、思わず二度見してしまった。なんというか、蓋をしたどんぶりのような形をしたパンだった。

「これは、うどんパンですよっ」

待って。うどんもパンも同じ小麦粉だよ。中身がどうなってるのか、確認するのがすごく怖いんだけど。

例によって、早苗さんの後ろではオッサンが鬼のような形相で睨んできていた。これは、また残すなっていう指示かな。

そして、気がついたら朋也さんたちの姿が消えていた。汐ちゃんも一緒だったし、ジュースでも買いに行っただらうか。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

俺たちはつとめて明るく挨拶をして、うどんパンにかじりつく。

「……うぶっ!？」

かじりついた瞬間、魚介の出汁が効いたスープが口の中に流れ込んできた。この展開は予想外だ。

「わぶっ!？」

「ぶわっ!？」

皆も同じように、思わぬスープ攻撃に慌てふためいている様子だった。これは驚く。

パンの中を見てみると、中には細かく切ったネギとなると、そして半玉より少し少ないくらいのおどん麺が入っていた。まさか、本物のうどんが入ってるなんて。

でも、スープたっぷりだけど何故か麺は伸びていないし、どうやって作ってるんだらう。

「んんっ……ちゆるっ」

疑問に思っていると、隣から何とも言えない音が聞こえてきた。

「ぶはっ。あたしこれ好きかも。鰹の出汁が効いてて美味しいし」

誰かと思えば、蒼だった。その後もちゆるちゆると音を立てながら、うどんパンを食べていた。パンだからかぶりつくしかないんだけど、できたらもう少し静かに食べてもらいたい。その、なんかえろいから。

「わ、わたしのパンは、わたしのパンは……」

「え？」

「えつちだったんですねえー！ー！」

……早苗さん、恒例の全力ダッシュ。

ところで、なんで心の声が聞こえてるんだろう。謎だった。

「くそっ……テメエら、俺様が教えてやれるのはここまでだ！ 明日の試合、負けんじやねえぞおおー！ー！ 俺は好きだー！ー！」

オッサンはそう言い残すと、うどんパンを手に取り、そのまま早苗さんの後を追ってグラウンドから走り去って行ってしまった。

俺たちは呆気にとられながら、その様子を眺めていた。予想はしていたけど、やっぱり最後までこのパターンなんだなあ。

「……あ、そういえば皆、チーム名についてなんだけど……」

その後、俺たちは気を取り直して、うどんパンを食べながらチーム名について話し合った。

色々な意見が出たけど、結局最後は『鳥白島チャーハンズ』に落ち着いた。

いかにも俺たちらしい、鉄板なチーム名だった。チャーハンだけに。

「それじゃあ皆、また駄菓子屋でな」

チーム名を決め終わった俺たちは、11時に駄菓子屋に集まる約束を交わして、いったん別れた。

リトルバスターズの皆が見せてくれる面白いもの。一体何だろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……羽依里さん、本当に着替えなくていいんですか？」

「うん。実はキャッチャーって防具の関係で、そこまで服は汚れないんだよ。それに、男だしね」

「わかりました。それじゃ私、ちよつと着替えてきますね！」

「じゃあ、俺は先に駄菓子屋で待っているね」

駄菓子屋の近くに来たところで、一度夏海ちゃんと別れる。夏海ちゃんは駆け足で加藤家に戻っていった。

約束の11時にはまだ少し時間があるけど、俺は先に駄菓子屋で待っていることにした。

「……あれ？」

駄菓子屋に着いてみると、店の前のベンチに朋也さんと汐ちゃんが座っていた。いつの間にかグラウンドからいなくなってたけど、駄菓子屋に来てたんだ。

「二人とも、こんにちわ」

「こんにちわ」

見ると、汐ちゃんは朋也さんの膝の上に座って氷イチゴを食べていた。

「よう。さすがに今日は島も賑やかだな」

駄菓子屋の前を往来する旅行者を見ながら、朋也さんがそう言っていた。

「ええ、お祭りですからね。夕方には、もつと増えるんじゃないですか」

俺は朝に藍から言われたことをそのまま伝えていた。

「……なあ羽依里、ちよつと座っていかないか？」

「え？ それじゃあ、少しだけ」

朋也さんに促されて、俺はベンチの空いている場所に腰かける。元々駄菓子屋に用があったし、別に構わないけど。

「……ちよつと妙な話になるが、この島には変わった蝶がいるのか？」
「え？」

座るとすぐに、朋也さんは少し控えめな声でそう聞いてきた。

「もしかして、何か見たんですか？」

「……昨日の夜、夕涼みに家族三人で浜辺を歩いていたらな。妙な光る蝶を見つけたんだ」

「光る、蝶……？」

俺はすぐに朝の出来事を思い出した。居間をひらひらと飛んでいた、あの蝶。もしかして、朋也さんも同じものを見たんだろうか。

「俺も今朝、同じような蝶を見たんですよ」

「……そっか。実際にいる蝶ならいいんだ」

俺の言葉を聞いて、朋也さんは安心したような顔をした。

「その蝶、一番最初に見つけたのは汐だったんだけどな。俺と汐には見えたのに、なぜか渚には見えなかったんだ。不思議に思っていたんだが、考えすぎだったか」

朋也さんはそう言いながら、イチゴシロップで汚れた汐ちゃんの頬をティッシュで拭いてあげていた。

一方で、俺はキャンプの時に蒼から聞いた、島に伝わる七影蝶の話を思い出していた。この話、朋也さんにしてあげるべきだろうか。

「あれっ？ そこにいるのは……まさか岡崎!? こんなところで会えるなんて思わなかったよ！」

そんなことを考えていると、頭の上から声がした。顔をあげてみると、そこには金髪のにーちゃんがいて、俺たちを見下ろしていた。

「……お前誰だ？ 知らないやつだな」

声をかけられた朋也さんは一瞬だけ目線を上げて、すぐに下げた。なんだろう。知り合い……なんだろうか？

「僕の顔と声を忘れたとは言わせないよ！ 岡崎の親友、春原だよ！」

「スノハラ？ 知らないな。子供もいるし、不審者は通報しないと。」

羽依里、この島に交番はあるのか」

「あんた鬼っスね！」

春原と呼ばれた金髪さんが叫んでいた。悪いけど、この島に交番は無かった気がする。

「……わかったから、いちいち大声で騒がないでくれ……変に注目されるだろう」

言われてみれば、通行人が何事かそこつちを見ていた。それを見て、さすがの朋也さんも観念したらしく、春原さんの存在を認めていた。

「……で、なんでお前がこの島にいるんだよ？ 地元の会社に就職したんじゃないのか？」

「あんな待遇の悪い会社、こつちから願ひ下げだねっ。今は露天商をしながら、芽衣と二人で気ままな旅暮らしさ」

「お前一人なら野垂れ死んでも構わないが、芽衣ちゃんを巻き込むなよ」

「……芽衣の方から手伝うって言ってくれたんだよ！」

「わかったから大声を出すな。汐も驚くだろう」

「えっ、ああ、ごめんね汐ちゃん。僕の事、覚えてるかな？ 去年も会ったよね」

「うん。こんにちわ。ヘタレさん」

「……ちよつと、お父さん？ 娘さんに何教えてるんスか」

「いや、俺じゃないぞ。たぶん、幼稚園で杏が教えたんじゃないか？」

「う、うう……あいつめ。僕のイメージが……」

さつきからのやり取りを聞いて、ようやく思い出した。この春原つて人、以前港で竜太サンドを売ってた人だ。露天商って言ってるし、たぶん間違いない。

ということは、今朝方港で鴟をナンパしたつても、この人なのか。金髪だし。

「よし汐、そろそろ帰るぞ」

「うん」

そんなことを考えていると、朋也さんが汐ちゃんの手を取って立ち上がる。

「羽依里、変な話をして悪かったな」

朋也さんは俺に軽く手を振ると、そのまま住宅地に向けて歩き出した。

「ちよつと岡崎、どこ行くんだよ？」

それを見て、春原さんはすぐに朋也さんを追いかける。何かスポーツでもやっていたんだろうか。予想外の身のこなしだった。

「もうすぐ昼になるから、ホテルに帰って飯にするんだよ。汐もお腹空いたよな？」

「うん。すいた」

「なあ、岡崎が来てるってことは、渚ちゃんも来てるんだろ？一言挨拶したいんだけど」

「挨拶なんでもいいぞ。ついてくるな」

「いいじゃん。挨拶くらい」

「……お前、出店はいいのかよ。準備あんだろ」

「芽衣に任せてあるよ。時間を見て昼飯食べに来ただけど、どこもいっぱいでき。良かったら一緒に……」

……俺は賑やかに消えていく三人を、呆気にとられて見つめているしかなかった。

朋也さんと春原さん、一体どういう関係なんだろう。見た感じ、悪友つてやつなんだろうか。

「……お。羽依里、気が早いな。もう来ていたのか」

その時、朋也さんたちと入れ違いになるようにして、恭介をはじめとしたリトルバスターズの皆がやってきた。

駄菓子屋の壁にかけられた時計を見ると、11時だった。ちやうど恭介に指定された時間だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それで恭介、これから何が始まるんだ？」

「ああ、これから始まるのは、バトルトーナメントだ」

「え、バトル……？」

「普段はバトルランキングと呼んでいるんだが、今回は人数が……」

まあ、詳しいルール説明はメンバーが揃ってからにしよう。良一たちも、もう少ししたら来るんだろ？」

「え？ ああ。一応それなりの人数は来てくれると思うけど……」

よくわからないけど、リトルバスターズのメンバーだけでやるイベントじゃないみたいだ。

「そうだ。どうせ先に来てるし、羽依里にだけ少しネタばらしをしてやろう」

恭介によると、これから行うのは16人参加のゲーム。参加者の半分はリトルバスターズが埋めるとして、残りの8人は俺たちの中から参加者を募るらしい。しかも先着順で、強制参加という話だった。

「ちよつと待って。先着順の強制参加ってことは、俺は？」

「おめでどう。羽依里は鳥白島からの参加者、第一号だ」

リトルバスターズの皆、もの凄い笑顔だった。同時に左右から謙吾と真人に肩を押さえつけられてしまったし、これは逃げられそうにない。

「他の連中は先着順なんて知らずに来るわけだ。誰が来るか、今から楽しみだぜ」

「うむ。おねーさんとしては可愛い女子ばかりがいいのだが」

「やはは。どんな称号をつけるか、今から楽しみですネ」

「お前ら、余裕ぶっこいて返り討ちになるなよ？ 後、絶対逃がさないように捕まえる準備もしておけ」

「がつてんです」

「誰も逃がしません！ わーふーっ！」

一体どんなイベントなんだろう。俺はなす術なく、うなだれていることしかできなかつた。誰がやってくるのかな……。

「くーださいな」

やがて駄菓子屋にやってきたのは、なんとしろはだった。

「しろはちゃん、いらっしやーい」

「いらっしやいませなのですー」

「えっ、いつから駄菓子屋はいかがわしいお店になったの!？」

しろははドーナツツ目になりながら、速攻で葉留佳とクドに捕まっていた。

そしてそのまま、俺の隣へ連れてこられる。

「羽依里、これってどういうこと？」

「うん。バトルトーナメントだって」

「ええ……なにそれ？」

「よくわからないけど、先着順で強制参加なんだってさ。諦めた方が
良いよ」

「そ、そんな……私、ちよつとスイカバーを買いに寄っただけなのに
……」

言われてみれば、しろはは恭介が告知をしたラジオ体操に来てい
なかった。小学校のグラウンドで一応話は通していたけど、時間があ
ればって話だったし。運が悪かったみたいだ。

「……ねえちよつと。なんでこんなにお客さん多いの？」

「これは様子が変ですよ。蒼ちゃん、逃げましょう」

「おっと、この二人は逃がさん」

「ほーるどあつぷなのですー!」

その次にやってきたのは空門姉妹だった。いち早く危険を察知し
たものの、来ヶ谷さんとクドに捕まってしまったみたいだ。

「私としたことが、うかつでした……!」

「うう、何をさせられるのかしら……」

二人は全く同じポーズで頭を抱えていた。クドはともかく、来ヶ谷
さんに狙われたら逃げられないよな。

「くーださーいなー」

続いて鴉がやってきた。

「かもめちんゲットー! もう離さないぞー!」

「かもめ、おとなしくお縄につけ!」

「ひえええー!?! お奉行さま、お慈悲をー!」

そして速攻で捕まった。珍しく、鈴も乗り気みたいだった。なんだか、入れ食い状態になってきた。

「くーださーいな」

「よし！ 良い筋肉二人発見だ！ 謙吾、逃がすなよ！」

「おうとも！」

「な、なんだ!？」

「は、離してくれー！」

直後に良一と天善が、真人と謙吾に捕まった。何にしても、良い筋肉を二人同時にゲットだった。

「羽依里、しろは、空門姉妹、鷗、良一に天善……あと一人か」

恭介が人数を数えながら、そう言っていた。最後は誰だろう。

「すまないおばーちゃん、注文していたナノカーボン樹脂を……」

絶好のタイミングで、のみきがやってきた。

「よし、のみき君ゲットだ」

「これで最後だー！ー！」

「な、な、なんだ!？」

そのまま速攻で来ヶ谷さんと葉留佳に捕まっていた。やり方はめちゃくちゃだったけど、これで8人。ミッションコンプリートだった。

参加者が全員集まったということで、俺たちは駄菓子屋の前の道路で輪になっていた。

「皆、今日は集まってくれてありがとう」

その輪の中心に恭介が立ち、皆に説明を始めていた。

「集まったというか、強制的に集められた感じなんですけど」

「うう、私たちどうなるの……」

藍はご立腹し、鷗は悲しみに暮れていた。なんだろうこの状況。

「言っておいただろう。駄菓子屋で面白いものを見せるから参加してくれと」

「あのさ恭介、見せるとは言われたけど、参加してくれとは一言も言われてない気がするんだけど」

「なんだ羽依里、男なんだから細かいことを気にするなよ……よし、真人に謙吾、その布の端を持ってくれ」

そんな俺たちをよそに、恭介の指示で真人たちが大きな布を手に持ち、一気に広げる。

「第一回バトルトーナメント！ in鳥白島！」

「はい拍手——」

恭介が大々的に発表し、拍手を促すけど……拍手はまばらだった。

「本来ならバトルランキングと呼んでいるんだが、今回は人数が多いからな。バトルトーナメントに変更したんだ」

トーナメントってことは、勝ち抜き戦なんだろうか。でも、何をどうやって勝ち抜くんだろう。

「よし、それじゃあルール説明だ」

広げた横断幕をたたんでから、恭介がそう続ける。

「まずバトルの方法だが、観客が投げ込んでくれたものを武器にして戦うこと」

「ちよつと待って。観客って誰？」

「既にいっぱいいるじゃないか。周りをよく見てみる」

恭介に言われて、はつとなった。俺たちの周囲には既に多くの観光客や旅行者が、何事が始まるのかと集まっていた。

「というわけだ。観客の皆、俺が合図したら、何か武器になりそうなものを投げ込んでくれないか。それは、くだらないものほどいい」

恭介の提案に応えるように、観客たちが湧く。ここまで来たら、やめるなんて無理そうだ。

「ところで、勝敗はどうやって決めるの？」

蒼が質問していた。俺もそれは気になってた。

「本人からのギブアップ宣言、または選んだ武器が壊れたり、紛失してしまっても負けだ。選んだ武器以外のものを使用しても、反則負けに

なる」

結構厳しいルールだった。どんな武器が投げ込まれるかわからないし。

「そして、身体能力の差が出るから、相手の攻撃を避けては駄目だ。選んだ武器で防御すること。明らかに逃げようとした場合は、これも原則負けにする」

避けちゃ駄目なのか。それだと相手の隙を伺う戦法とかも取れないわけだよな。武器によつては、先手必勝になるかも。武器選びが重要だ。

「ちなみに、男女のハンデとして、女子は投げ込まれた武器から好きなものを選んで使つていい。男は目をつぶつて、適当に拾うように」「ちよつと待て！　また男女でハンデがあるのか!?!」

良一が堪らず声を上げていた。新聞紙ブレード大会の時もそうだったけど、彼らが設定する男女のハンデって結構大きいから。

「そう言うルールなんだ。悪く思わないでくれ。それでも、女子も同じ武器を二試合続けて選ぶことはできない。理由は、それだと面白くないからだ」

確かに、毎回得意な武器を選ばれたら、男としてはたまったもんじゃない。

「そして重要なルールをもう一つ。バトルに負けた者は敗退すると同時に、勝者から称号が贈られる」

「え、称号って何?」

「そうだな……過去には『クズ』とか『最初に死ぬキャラ』などの称号が贈られた」

来ヶ谷さんが懐かしむように言っていた。これだけたくさんの観客の前でそんな称号を贈られるなんて、絶対嫌だ。

でも、負けたら称号を贈られるつてことは、不名誉な称号を回避するには、優勝するしかないつてことだ。

「それで、バトルの組み合わせだが……公平にくじ引きで決めようと思う」

恭介はろう石で地面にトーナメント表を書きながら、そう言う。そ

れぞれヤマガタの下には1〜16までの数字が書いてあった。

「一回戦ではリトルバスターズ同士は対戦しないように組んである。さあ引け」

順番にくじを引いていった結果、一回戦は第一試合から順番に、真人と藍、恭介と俺、葉留佳と蒼、鈴と天善、謙吾とのみき、クドとしろは、来ヶ谷さんと鷗、西園さんと良一という組み合わせになった。

「……あれ、皆さん何やってるんですか？」

組み合わせも決まり、いよいよバトルが始まろうかとしていた時、夏海ちゃんがやってきた。どうやら、着替えるのに時間がかかっていたらしい。

朝のことを気にしていたのか、いつもよりちよつとお洒落な服装になつていた。

「あ、夏海ちゃん、ちょうどいい所に」

「え、何がですか？」

「今からバトルトーナメントが始まるんだけど、俺の代わりに出てみない？ 面白いよ」

「あ、えーつと……今回は遠慮しておきます。見てる方が面白そうですし」

「ええー……」

いつもの夏海ちゃんなら、喜んで参加してくれると思ったのに。俺も夏海ちゃんとの交代をだしに、逃げられると思ったのに。

「だって、変な称号とかつけられそうですもん。燃えるチャーハン娘とか」

「夏海ちゃんにぴったりじゃない」

「嫌ですよ！ というわけで、私の代わりに羽依里さんが頑張ってくださいー！」

そこまで言つて、人混みの中に飛び込んでしまった。あの様子だと、きつとルール説明の辺りから話を聞いていたに違いない。夏海ちゃん、うまく逃げた。

「それでは、さっそくバトルを開始する。選手前へ！」

夏海ちゃんと話を終えた直後、恭介の声が飛ぶ。ついに始まるみたいだ。

最初の対戦カードは真人と藍。二人は意気揚々と前に出てくる。

「藍ー、頑張りなさいよー！」

「藍ちゃん、頑張つてー！」

「フアイトです。井ノ原さーん！」

「真人くんも頑張れー」

各々の仲間から応援が飛ぶ。

「悪いが、俺は女だからって手加減できねえ。降参するなら今のうちだぜ」

「は？ まさかとは思いましたが、頭蓋骨の中まで筋肉なんですか？」

二人して売り言葉に買い言葉だった。否が応にも、観客は盛り上がる。

「へっ……後でアホ面かくなよー！」

真人が吼える。

「かくのは吠え面であつて、アホ面じゃないですよ」

藍が冷静に切り返して、観客から失笑が漏れる。

「笑うんじゃねえ！ いいからお前ら、さっさと武器をよこせ！」

そして真人の言葉に応ずるように、観客から様々な武器が投げ込まれる。

「では、私はこれにします」

投げ込まれた無数の武器の中から、藍が選び取ったのはテニスラケットだった。

「恭介さん、これで叩いていいんですよね？」

「ああ、それが本来の使用方法だからな」

「よし、俺はこれだ！」

対する真人はルールに従い、目をつぶって武器を選ぶ。

「な、マジかよ……」

そして、真人は小さなカナブンを手に持っていた。

「……………ぷっ」

藍が噴出していた。

「真人よ……どうしてお前は、カナブンなんて持つてるんだ？」

その様子を見て、謙吾が憐れむ目で真人を見ていた。

「これが俺の武器だよ。わりーか！」

真人は開き直っていた。男は目をつぶって武器を選んだし、こうなるよな……。

「良いから早く、バトル開始の宣言をしろ！」

「ああ言ってますけど、本当に始めちゃっていいんですか？」

「まあ、本人が良いって言うんだから良いだろ。それじゃ、バトルスタート！」

誰が用意したのか、ゴングが打ち鳴らされた。いよいよ試合開始だ。

「いけえ、我が支配にあるカナブンよ！」

先手必勝とばかりに、真人がカナブンを飛ばす。ぷくんと羽音を響かせながら、藍に向かって飛んでいく。

「へっ、虫嫌いの女子には効果抜群だぜ！ 逃げ惑うがいい！」

しかし、藍は眼前に迫ったカナブンを左手で容易く打ち払う。

「……島育ちを舐めないでください。虫なんてそこら中にいますよ。アホですか」

そう言うのと、素早く真人との距離を詰め、テニスラケットを振るう。「うおおおっ!？」

真人はとっさにしゃがんで、その攻撃を避ける。

「こら真人、避けるな」

思わず避けてしまった真人を、恭介が注意していた。

「自分の選んだ武器で防御しろ。今なら、カナブンだ」

「よし、カナブンなら防御していいんだな！ カナブンよーい！ どこだー！」

真人は地面に這いつくばって、カナブンを探し始めた。なんとというか、哀れだ……。

「お探しのカナブンはここですよ」

藍にそう言われて、真人が顔を上げる。見ると、左の人差し指に、カ

ナブンが止まっていた。

「ああつ、俺の武器！」

「どうやら、彼は私の方についてくれるようです」

彼つて言うくらいだし、あのカナブンはオスなんだろうか。

「藍、そいつは俺の武器なんだ。返せっ」

「お断りします」

直後、藍の足元にいる真人に向けて、テニスラケットが振り下ろされた。縦に。

「ぐ、ぐふっ……」

「うわ、脳天直撃だ」

「藍のやつ、容赦ねえ……」

どさり、と音がして、真人が倒れた。どうやら勝負がついたみたいだ。

「勝負あり！ このバトル、藍の勝ち！」

「なあ、テニスラケットのガットじゃない部分で殴られていたけど、真人は大丈夫なのか？」

「まあ、筋肉だし大丈夫だろ」

さすがに心配になったけど、恭介たちはあつけらんかんとしていた。いつもの事なんだろうか。

「ではあいちゃん、負け犬めに称号をどうぞ」

バトル終了と同時に葉留佳が出てきて、藍にそう促す。

「そうですね……では『アンニユイな筋肉さん』で」

真人は『アンニユイな筋肉さん』の称号を手に入れた！

アンニユイって、気怠い、退屈って意味だよな。退屈な筋肉ってなんだろう。謎だった。

「それでは、続けて二試合目を開始するぞ。選手は前に出てくれ」

今度は俺の番だった。対戦相手は恭介。一体どんなバトルになるんだろう。

ちなみに、恭介が前に出ているので、司会は謙吾に代わっていた。

「羽依里さん、頑張ってくださいーい！」

「羽依里、ファイター！」

島の皆が声援を送ってくれる。これは頑張らないと。

「それにしても、初戦で俺と当たるなんて、羽依里も運がないな」

「その言葉、そのまま恭介に返すよ」

一応、俺も売り言葉に買い言葉で返しておいた。良い感じに場が盛り上がる。

ところで、午後からは祭りの準備もあるっていうのに、何やってるんだらう俺たち。

「よし、お前ら、武器を投げ込んでくれ！」

恭介がそう言うと、観客たちから様々な武器が投げ込まれる。

俺たちはお互いに目をつぶって、武器を掴み取る。

「……よし、俺はこれだっ！」

そう言っただけで恭介が持っていたのは、ミニ四駆だった。

「ああっ！ それは俺の夏の思い出！」

直後に叫んでいたのは良一だった。そういえば以前、同じようなマシンを秘密基地で見たような。誰が投げ込んだんだらう。

「……って、なんだこれ」

そして俺が手にした武器は、小さな箱だった。一瞬何かわからなかったけど、よく見ると名刺入れだった。

「恭介、これも本来の使用方で戦わなきゃ駄目なのか？」

「ああ、本来の使用方で戦うこと」

名刺でどうやって戦うんだらう。交換すればいいのかな。ところで、この名刺に書かれている『橘啓介』って誰だらう。

「では、バトルスター！」

「よし、いくぜっ！」

謙吾の試合開始宣言と同時に、恭介がミニ四駆を走らせる。

「あいてー！」

天善が改造したミニ四駆は、結構な速度で俺の足にぶつかってきた。当たり所にもよるけど、これは痛い。

「くそ、橘啓介と申します！」

俺は名刺交換をするように名刺を突き出して、恭介に攻撃を仕掛ける。でも、お辞儀をしないとイケないから、うまく恭介に当たらない。「それっ！」

恭介が再びミニ四駆を走らせる。今度はマシンが飛び跳ねるように走り、むこうずねに当たってきた。

「うおおお……」

痛い。俺は思わず名刺入れを放り投げ、しゃがみ込んで足を押さえる。急所狙いは反則だ。

「あれ、それは僕の名刺入れじゃないか」

その時、頭の上から声がした。見ると、スーツを着たサラリーマン風の男性が俺の武器を拾っていた。

「落としたと思ったら、君が持っていてくれたのか。悪いね」

その男性は名刺入れを拾うと、そのまま急ぎ足で去っていった。今の人が橘啓介さんなのかな。

「あ」

しまった、俺の武器が無くなってしまった。

俺は立ち上がって恭介の方を見る。これ、もしかして俺の負けになるのかな。

「そうだな……結局、今の武器は落とし物だったわけだからな。今回は特例だ。もう一度、武器を投げ込んでやってくれ」

恭介が観客に向かってそう言うと、再び観客から武器が投げ込まれ始める。

天の助けだ。俺は目をつぶって、再び武器を取る。

「え、何これ」

俺の手には、にやが谷園のチャーハンの素が握られていた。

「あ、それ私が投げ込んだやつです！」

人混みの中で、夏海ちゃんが何か言っていた。

「それって邪道ですし、使わないので！」

確かにこれを使ったところは見えないけど、これでどう戦えっというんだろう。

「とりあえず、振りかけたらいいんじゃないか？」

俺の心中を察したのか、恭介がそうアドバイスしてくれた。

「それしかないよな……」

とりあえず俺はチャーハンの素を振りかけることにした。

封を切ると、小分けされていない、昔ながらの商品だった。これなら思いっきり振りかけることができそうだ。

「くらえ、目つぶし！」

直後にスパイシーな香りが周囲に広がる。

でもその瞬間、強めの風が吹いて、チャーハンの粉が全部俺の方に戻ってきた。

「ぶわっ!? しまった！」

俺はその粉をまともに受けてしまう。これはまずい。目も鼻も口の中も、チャーハンの素まみれだ。

「うう、げっほっほ！」

俺はあまりの息苦しさと目の痛みに、思わずその場で四つん這いになって悶え苦しむ。チャーハンの素を疎かにした、罰が当たったのかな。

「羽依里、もらったぜ！」

直後にミニ四駆が走ってきた。勢いそのままに、姿勢を低くしていた俺のもみあげをタイヤに巻き込む。

「いてててて！」

これは痛い。物凄く痛い。天善、このミニ四駆は改造しすぎだと思う。

「どうだ羽依里、負けを認めるか？」

「み、認める！ 認めるから、助けてくれ！」

「勝負ありだ！ このバトル、恭介の勝ち！」

俺の降参宣言で観客が大いに湧くが、俺はそれどころじゃない。早く助けて。

「よし、まずは初戦突破だな」

恭介が近寄ってきて、俺の髪を巻き込んでいたミニ四駆を取り外す。

「……おっと」

その時、恭介の手が滑ったらしく、ミニ四駆が観客へ向かって走り出す。

「皆気をつけてくれ！　それは、俺の夏の思い出なんだ！」

それを見た良一が必死に観客に呼びかけていた。でも、盛り上がっている観客たちに、その声が届いている様子はない。

「踏まないでー！ー！」

直後に、ばきつと鈍い音が響き渡った。さらば、良一の夏の思い出。

「……それじゃ、羽依里の称号は『チャーハンに生まれ変わりたい』だ」

一瞬の沈黙の後、何事もなかったかのように恭介から称号が贈られた。というか、すでに半分チャーハンと化してるけど。

「うう、海老の香りが凄い」

そろそろ次のバトルが始まろうとしていたけど、俺はこのまま観戦するわけにはいかない。

元々汗でどろどろの上に、チャーハンの素まみれだ。これはやばい。

「羽依里、おばーちゃんに言つといたから、駄菓子屋のお風呂場借りてきなさいよ」

Tシャツの端を摘んでいると、蒼にそう声をかけられた。

「でも、着替えとか持ってないんだけど」

「あ、着替えならあるよ」

鷗がそう言いながら、スーツケースからどう見ても男物のTシャツを取り出していった。

「ちよつと鷗、なんでそんなの持ってるの？」

『鑑定結果　30円』とか書かれた値札までついてるし。すごく怪しい。

「なんでもいいじゃない。ほら、せっかくだし、使つてよ」

少し悩んだけど、このままだと本当にチャーハンになりそうだし、俺はお言葉に甘えて風呂場を借りることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ふう、助かった」

駄菓子屋の風呂場を借りてチャーハンの素を洗い流し、鳴から渡された服を着て戻ってきた。

「羽依里さん、大丈夫ですか？」

「まったく。チャーハンを粗末にするから、そんな目に合うんだよ」

表に戻つてくると、夏海ちゃんとしろはが声をかけてくれた。

「ところで、バトルの方はどこまで進んだの？」

「勝負あり！ このバトル、鳴の勝ち！」

そう質問をしていると、鳴の勝利を告げる恭介の声が聞こえた。対戦カードから察するに、第七試合まで終わったみたいだ。

「やったー！ 勝ったー！」

鳴は全身で喜びを表していた。もしかして鳴、あの来ヶ谷さんに勝ったんだろうか。

「うぐぐ、私が勝った暁には、カモメマックスという称号をくれてやろうと思っていたのに……」

来ヶ谷さんは心底残念そうだった。見損ねてしまったけど、どんなバトルだったんだろう。

「かもちゃん、それでは姉御に称号をどうぞ」

「来ヶ谷さんの称号はゆいちゃんだよ！ ほら、皆で呼んであげよう

！ セーの！」

「ゆーいちゃーん！」

鳴の音頭の後、観客全員でそう叫ぶ。

「馬鹿だのクズだの罵ってくれて構わないから、その称号だけはやめてくれ……」

来ヶ谷さんはうなだれながら、観客の中に消えていった……。

「うん。お風呂を借りてる間に、だいぶ進んじやったみたいだね」

「はい！ しろはさんも勝ったんですよ！」

「おお、しろは勝ったのか。おめでとう」

「ど、どうも……」

なんだろう。確か、クドとの対決だったはずだけど。あまり嬉しそうじゃない。

「クドさんの肉球グローブも可愛かったですけど、やっぱりしろはさんの聖剣エクスイカバーがカッコよかったです!」

「夏海ちゃん、それは言わないで。ものすごく恥ずかしかったんだから」

「しろは、エクスイカバーって何?」

「教えてあげない」

……これ以上聞いたらどすこいと言われそうだったので、話題を変えることにした。

「じゃあ、しろは以外のバトルはどんな感じだったの?」

「第三試合は蒼さんと葉留佳さんのバトルでした。ビー玉を駆使して戦う葉留佳さんを、蒼さんがイナリさんのイナリビームを使って焼き払ったんですよ!」

「ちよつと待つて。後半がわからないんだけど。イナリビームって何」

「えつと、イナリさんの必殺技です!」

「ごめん、全く想像できない。目とか口からなんか出すんだろうか。」

「それで、勝った蒼は葉留佳に『動く拡声器』の称号を贈ったんだよ」

しろはがそう続けてくれた。確かに葉留佳の周囲は必然的に声が大きくなる気がするし、ピッタリの称号だった。

「その次の第四試合では、目をつぶっていたにも関わらず心眼でピンポン玉を武器として選んだ天善さんと、おっきな猫さんを武器にした鈴さんのバトルでした!」

夏海ちゃんが身振り手振りを交えて教えてくれる。それにしても、心眼でピンポン玉を引き当てる天善すごい。

「でも、武器として使っているのはピンポン玉だけで、ラケットは使っちゃダメだね」

「あ、そうだったんだ」

しろはが続ける。その時点で、なんとなくオチが見えてきた気がする。

「天善さん、必死に攻撃を仕掛けたんですが……空気抵抗で球が逸れてですね」

「そのままピンポン玉は観客の方に飛んでいって、そのまま行方不明になったの」

「つまり武器が無くなったから、天善は負けたと」

「うん。そういうこと。ちなみに天善君は『ワカメガネボーイ』の称号を贈られていたよ」

なんと言うか、色々な意味で天善を体現していた。リトルバスターズの皆、なかなかセンスがある。

「それですね、第五試合は謙吾さんとのみきさんのバトルだったんですが、これまた圧巻だったんですよ！」

え、圧巻ってどういうことだろう。

「謙吾さんがお鍋のふた、のみきさんが小さな水鉄砲を武器に選んだんですけど、のみきさんが一撃で謙吾さんの武器を吹き飛ばしてですね」

普通ならあり得ないけど、のみきならやってしまいそうだな。なんてったって、のみきだし。

「すごいのはそこからなんですよ！ 空中に打ち上げたお鍋のふたが落ちてくる前に、また水鉄砲を当ててですね。どんどん遠くにやっちやうんです！」

夏海ちゃんは指鉄砲を作って、大興奮だった。よっぽどすごい光景だったんだろう。

「ということ、そのまま武器が無くなってのみきが勝ったんだね」

「はいー」

「最終的に、鍋のふたは駄菓子屋の屋根に打ち上げられていたよ。あれはどうやっても取れないと思う」

しろはが屋根を見上げながらそう言っていた。たぶんだけど、鍋のふたはそのまま屋根の上にあるんだろう。

「それで、のみきは謙吾にどんな称号を贈ったの？」

『ケンゴローコバヤシ』だって
「ぶっ」

面白かった。のみきも結構いいセンスしてるな。

「お、羽依里も戻ってきたか。今から第八試合が始まるぞ」

その時、噂の謙吾がやってきて、そう教えてくれた。彼は何も悪くないんだけど、顔を直視できなかった。ごめん。コバヤシ。

「それでは、第八試合を始める。選手は前へ！」

「よし、やるぜー！」

「お手柔らかにお願いします」

恭介の合図で、良一と西園さんが歩み出てきた。

良一がやる気満々なのはわかるけど、西園さんがこの手のゲームに参加するのは、なんか意外だった。

「それじゃ、武器を投げ入れてくれ！」

恭介がそう言うのと、例によって無数の武器が投げ込まれる。

「よし、俺はこれだぜ！」

良一が目をつぶって、自分の武器を掴み取る。

「ひ、ひげ猫危機一髪!」

良一の手握られていたのは、樽に入ったひげ猫と、無数のおもちのナイフ。

「なあ恭介、この樽で殴ったり、ナイフで刺していいの？」

「駄目。本来の使用方法で戦うこと」

「マジかよおお——！」

つまるところ、ナイフを樽に刺し、飛び出したひげ猫人形を西園さんに当てないと駄目ということなのかな。

「私はどれにしましょうか」

西園さんが投げ込まれた武器を物色している。するとその中に、見慣れないものが多数混ざっていることに気がついた。

「こ、この武器はまさか」

西園さんが驚愕の表情で手にしたのは、変わった形のヨーヨーだった。なんだろうあれ。

「ほう。サイバーヨーヨーか。なかなか良いチョイスだ」

その時、観客の中から、謎の白衣集団が出てきた。誰だろう。

「ど、どうして科学部部隊がこの島に!？」

え、科学部部隊って何？

「西園君、深く考える必要はない。NYPがある場所に、我々は現れる。さあ、NYP値を測定しろ!」

なんだかよくわからないけど、白衣を着た人たちはなんだかよくわからない機械を持ち出して、なんだかよくわからない数値を測りだした。

「NYP値、良好っす!」

「さあ、西園君! 君の力を見せてくれたまえ!」

白衣の人にそう促されて、西園さんがサイバーヨーヨーを振るう。びかびか光ってるし。良一、大丈夫かな。

「よし、それではバトルスタート!」

そして、試合開始の合図がされた。

「うおおおお!」

先手必勝ということで、良一はものすごい速さでナイフを樽に刺す。

……しかし、ひげ猫の人形は飛び出さない。

「ちつくしよー!」

「……おまんら、許さんぜよ」

その直後、西園さんが謎の台詞を口にしながらサイバーヨーヨーを振り回す。

「ぎゃー!」

なんだかよくわからないけど、光るヨーヨーをぶつけられた良一が痺れている。なんだろうあの武器。

「おまんら、許さんぜよ」

「ぎゃー!」

痺れて行動できない良一に向けて、西園さんの追撃。再び痺れた良一は、そのまま地面に倒れ……動かない。

「勝負あり! このバトル、西園の勝ち!」

その様子を見て、恭介が西園さんの勝利宣言をしていた。

良一の武器の不遇さもあつたけど、西園さんの圧勝だった。なんだかよくわからないけど、あのヨーヨーすごい。

「それじゃみおちゃん、負け犬めに称号をどうぞ」

「そうですね……『実は寝る時はネグリジエ派』とかどうでしょう」

ちよつと待つて。変な想像しちやつたじゃない。今晚、夢に出てきたらどうしよう。お腹が痛い。

俺は必死に頭を振って、脳内に出現したピンクな良一の存在を打ち消す。

「羽依里、顔が青いけど大丈夫？」

「あ、ああ。ネグリジエでも平気だよ」

「……？」

しろはは隣で首をかしげていたけど、これで一回戦が全て終わった。トーナメント表を見ると、二回戦はそれぞれ、恭介と藍、鈴と蒼、のみきとしろは、鳴と西園さんという対戦カードに決まったみたいだ。

俺はもう負けてしまったけど、次からは一度は勝利を収めたメンバー同士のバトルになる。ますます白熱していきそうだった。

第三十四話・完

第三十五話 8月21日（後編）

駄菓子屋の前で唐突に始まったバトルトーナメントも、二回戦に入っていた。

「それでは、続けて二回戦を始めろぞ。選手は前へ！」

二回戦最初の対戦カードは恭介と藍。恭介が選手として出場するため、例によって謙吾が司会を務める。

「藍ー、頑張んなさいよー！」

「藍さん、頑張ってくださいーい！」

「恭介さん、ファイトですー！」

「筋肉の仇を取ってくれええー！」

リトルバスターズから、島の皆から、各々声援が送られる。

「藍、お前とはいつか本気の勝負をしなきゃいけないと思っていたぜ」
「奇遇ですね。私も同じ気持ちです。リトルバスターズのリーダーさんが相手でも、負ける気はありませんよ」

沢山の観客に囲まれて、道路の中央に立つ。二人とも全く物怖じしていない。さすがだった。

「お前ら、武器を投げ込んでくれ！」

恭介がそう叫ぶと、周囲の観客たちから様々な武器が投げ込まれる。

「よし、俺はこれだっ！」

恭介は目をつぶって武器を掴み取る。

掴んだのは、ガムテープだった。

「おっと。これは恐るべき武器を引いちまったな……」

どう見ても普通のガムテープだけど。あれでどうやって戦うんだろう。

「私はこれにします」

続けて藍が選び取ったのは、洗濯バサミ（10本セット）だった。

「本当はボールとか、飛び道具が欲しかったんですけど。一回戦に比

べて、明らかに武器のグレードが下がっていませんか？」

「仕方ないだろ。あくまで観客が用意してくれるものだし、基本くだらないものだからな」

「そ、それはそうですが……」

藍は手に持った洗濯バサミを見つめていた。あの武器でどう戦うか、悩んでいるようだった。

「この武器はやっぱり、挟むんですよね？」

「ご明察」

「わかりました。やってやろうじやないですか」

「オーケー。よし謙吾、俺はいつでも準備できてるぜ」

「よしきた。藍も準備はいいか？」

「いつでも構いませんよ。この洗濯ばさみで挟みまくってやります」

藍は両手に洗濯バサミを持って、恭介を睨みつけていた。

「ではいくぞ！ バトルスタート！」

司会の謙吾が高らかにバトル開始を宣言をする。同時に、観客たちが一斉に沸く。

「先手必勝です。えい！」

藍は持ち前の身体能力の高さを活かして、素早く恭介に近づくと……恭介の鼻と両耳に洗濯バサミを挟む。

「いててててー！」

恭介は痛みのみならず、その場に膝をつく。うん。あれは絶対痛い。

「あの耳は痛いよ。絶対痛い」

「私は鼻の方が痛そうな気がします。あれは耐えられません」

鳴とクドが半分顔を覆いながら、指の隙間からその光景を見ていた。確かに、見てるこっちが痛くなってくる。

「ふっふっふ。今度は両頬です！ 覚悟してください！」

恭介が怯んでいる隙に、藍は更なる追撃を仕掛ける。

「……なーんてな」

「はっ!？」

藍が再度近づいたその時、恭介が大きく引き出したガムテープを構えて迎え撃つ。

「え、ちよつと……ひゃ!?!」

そして勢いよく突っ込んできた藍に対し、目にも留まらぬ速さでガムテープを巻き付け、その両手を封じる。

「それ、もう一丁!」

動きが止まった隙を見逃さず、今度は素早く藍の両足をガムテープで絡み取る。

「ひゃー!?!」

両手両足の動きを封じられた藍は、まるで蒼みたいな悲鳴をあげながら地面に倒れてしまう。

「うう……業腹です。まさか、こんなプレイがお好みですか?」

「ド変態だな」

「鈴、変な言い方はよしてくれ。ガムテープの本来の使用方法で戦っただけだ……いててっ」

恭介は顔に挟まれた洗濯バサミを、丸めたガムテープで取り外していた。あれはあれで痛そうだけど。

「うう、屈辱です」

藍はもそもぞと動いているけど、さすがに起き上がるのは無理みただ。だって、ガムテープだし。

「これは……どう見ても試合続行不可能だな。このバトル、恭介の勝ち!」

その状況を見ていた謙吾が、堪らず試合終了を宣言する。バトル終了と同時にハサミを持った葉留佳が飛び出して、藍を救出していた。

「……ガムテープでべとべとじゃないですか。どうしてくれるんです?」

ガムテープから解放された藍は、手首をさすりながら恭介を睨んでいた。

「そう睨まないでくれ。これでも、その綺麗な髪にガムテープがくっ付けないよう、細心の注意を払ったんだ」

「そ、そうですか。それはしゅしよーな心掛けですね」

藍は細みたいなことを言いながら顔をそらしていた。どうしたんだらう。なんか顔も赤いし。

そういえば、紬や静久はどうしたんだろう。見たところ、バトルーナメントの見学にも来てないみたいだし。用事が忙しいのかな。

「それでは恭介さん、あいちゃんに称号をどうぞ」

「そうだな……『シスコンお姉ちゃん』」

「シスコンお兄さんにだけは負けたくなかつたです……蒼ちゃん、ごめんなさい」

藍はそのままがつくりと肩を落としていた。称号は本人にピッタリ過ぎて、笑えなかった。

「よし、それでは第二試合を開始する。選手前へ！」

バトルが終わったことで恭介が司会に復帰し、次の選手を呼び出す。

「よーし、やってやるわよー！」

「蒼ちゃん、私の分まで頑張ってください」

「鈴ちゃんも頑張ってー」

「あお、勝負だ」

前に歩み出てきたのは蒼と鈴だった。今回は妹対決だった。

「よしお前ら、気合いを入れて武器を投げ入れろー！」

例によって恭介がそう叫ぶと、様々な武器が投げ込まれる。

「ポーン！」

「ぬお〜」

その時、多種多様な武器に混ざって、イナリと、これまた大きな猫が投げ込まれた。

「よし、イナリ、あんたに決めたわ！」

「あたしもだつ。ドルジ、お前に託すぞ！」

二人は待っていたかのように、それぞれの相棒に手を伸ばすが……。

「お前ら、ルールを忘れたのか。二試合続けて同じ武器を選んで駄目だぞ」

「うぐっ」

二人が同時に固まった。どうやら、完全に忘れていたらしい。

「うう、別のねこと言われてもな」

鈴はそう言って視線を泳がせる。鈴にとっては武器Ⅱ猫なんだろうか。

「にゃあー!」

「にゃにゃー!」

その時、人ごみをかき分けて、何匹もの猫が鈴の元に集まってきた。

「なんだ? お前らもしかして、一緒に戦ってくれるのか?」

「うにゃー!」

鈴の問いに答えるように、猫たちが大きな声で鳴いた。よく見ると、その猫たちは鈴に懐いていた、この島の猫たちだった。その数、6匹。

「ちよつと、多すぎやしませんか?」

「だが、いくら束になったところで猫だぞ?」

藍とのみきがそう話していた。まあ、所詮猫と言えばそれまでだけだ。

「でもよ、実際には投げ込まれたわけじゃねえ猫たちを武器に使っていいのか?」

「別に良いだろ。そこら辺に転がってる武器の方が、攻撃力が高そうだしな」

真人が当然の疑問を投げかけていたけど、恭介が理由をつけて了承していた。確かに、ボールとかダンベルとか落ちているし、あつちのほうが強力そうだ。

「それじゃ、えーつと……あたしはどうしようかしら」

相棒のイナリを禁じられたせい、蒼は足元の武器を見ながら、選びあぐねていた。虫取り網とかあつたら、得意そうなんだけど。

「……もす!」

その時、ピンク色の生き物がやってきて、蒼の足に顔を摺り寄せてきた。なんだろうあれ。犬かな。

「え、何?」

「もすもす!」

「よくわかんないけど、もしかしてあんた、あたしと一緒に戦ってくれ

るの?」

「もつす!」

その謎生物は、しばらく蒼と会話を交わした後、ぴよんと跳ねる。任せて! と言っているような気がした。

「それじゃ、期待しちゃうわよ? よろしくね。もす!」

「もつすもす!」

よくわからないけど、どうやら蒼の武器はあの犬に決まったみたいだ。ピンク色だし、蒼にピッタリかもしれない。

「恭介、鈴の猫じゃないが、蒼の犬は武器として認めるのか?」

「許可しよう。猫と犬の対決だろ? 良い勝負が出来そうで、燃えるじゃないか」

投げ込まれた武器を拾って戦うルールはどこに行っただろう。確かに、面白そうなバトルにはなりそうだけど。

「オーケー。それじゃ、お互いに武器も決まったところで、バトル開始だ!」

そうこうしているうちに、恭介が試合開始を宣言し、バトルが始まる。

「お前ら、後でツナ缶やるからがんばれ!」

「うなあー!」

鈴の言葉を聞いて、猫たちの士気が一気に上がった。

「いけえー!」

「にやにやにやー!」

そして猫6匹による、怒涛の先制攻撃が始まった。

「あたたたたた! 猫パンチいたい! ひっかかないで! うひゃー!」

うわあ。防御できないし、あの攻撃は地味に痛い。

「ちよ、ちよっと、もす! あんたも戦って!」

「もす?」

首をかしげていた。なんだろう。特別な命令でも待ってるんだろうか。

「あいたたた！ もす、ちびつとで良いから頑張つて！」
「……もす！」

蒼のその言葉を聞いた直後、ピンク犬はジャンプして手足を収納。空中でピンク色の球体に姿を変える。

そして着地するや否や、そのまま地面を高速で転がって周囲の猫たちに体当たりをかます。犬離れた動きだった。

「うにゃーん！」

「にゃー！」

……あつという間に、6匹の猫の半分近くが吹き飛ばされていた。

「ちよつと、ストップストップ！ もす、もういいわよ！」

「もつす！」

くるくると回転していたピンク犬は、次第にその動きを止めて、蒼のすぐ隣に納まる。

一方の猫たちだけど、上手く受け身を取って、怪我はしていないみたいだ。でも、明らかに戦意喪失している。

「ああ、おまえらっ、にげるなっ」

そして鈴の制止も聞かず、猫たちは散り散りになって人ごみに消えていった。

「武器である猫が逃げてしまったため、武器消失とみなし、このバトル、蒼の勝ち！」

恭介が試合終了宣言をすると、これまた観客が盛り上がる。

「やりましたね。さすが蒼ちゃんです」

姉は妹の勝利を称えていたけど、今回の勝因は明らかにあのピンク犬だと思う。

「ポーンポーン！」

「もす？ もつすもす！」

なんかそのピンク犬、イナリと会話が成立していた。やるなお前。それほどでもー。みたいな会話をしてるんだろうか。

「おお。ちび、こんなところにいた！」

そんなことを考えていると、観客の中から髪の毛の長い女の子が飛び出

してきた。変わった髪飾りをつけて、髪の一部を三つ編みにしている。

「コタさん、ちびもすいたよー」

「おお、いたか。小鳥、でかした」

そう言いながら、一人の青年が女の子の後ろについて出てきた。

「まったく、お前どこほつつき歩いてんだ？」

「もすもすー」

青年は小鳥と呼ばれた女の子の足元にすり寄っていたピンク犬を見下ろしながら、呆れ顔だった。

「まあいいや。ちびもすも見つかつたし、行こうぜ」

「そうだねー。ようやく鳥白島まんじゅうを売ってる場所も見つけたし」

「俺はまんじゅうより、四天王せんべいのほうが気になるんだけどさ」

「気になるんなら、一緒に買えばいいよ。ほらほら善は急げだよー」

「もすもすー」

二人と一匹はそのままきびすを返すと、人混みの中に消えていった。

「……あのワンちゃん、見慣れない種類だと思っていいたら、旅行者さんのペットだったみたいですね」

彼らが消えていった先を眺めながら、夏海ちゃんがそう言っていた。今日は本当に色々な人が島に来ているんだな。

ちなみにその後、称号発表が行われ、鈴には『猫まつしぐら！』の称号が贈られていた。

「さて、次は第三試合。テンポよく行こう。選手は前へ！」

恭介がそう言いながら選手の入場を促す。今回はのみきとしろはの試合らしかった。

「しろはー、頑張れよー！」

「のみきも頑張れー！」

気がつけば、鳥白島の出身者同士のバトルだった。これは、どっちを応援するべきだろうか。

「お二人とも、頑張ってくださいーい！」

「どっちも頑張つてねー！」

夏海ちゃんも鷗も、両方を応援していた。俺もそれに倣って、二人を応援することにした。本心では、しろはを応援したいけど。

「良い感じに盛り上がってきたな。それじゃ観客の皆、武器を投げ込んでくれ！」

例によって無数の武器が投げ込まれる。

「よし、私はこれにしよう」

そんな武器の中から、のみきが選んだのはバドミントンラケットだった。

「恭介氏、これで叩いて構わないのだろうか？」

「ああ。それが本来の使用方法だ」

あのラケットはリーチが長いし、背の低いのみきにピッタリだった。

「……ところでしろは、なぜ中華鍋なんて持つてるんだ？」

そののみきが、何とも言えない顔でしろはの武器を見ていた。しろはは大きな中華鍋を両手で持っていた。

「こ、これは違うの。気がついたら持ってしまったというか、これで戦う気は毛頭なくて。本能で手に取っちゃって。今選びなおすからもう少し待つ」

「よし、バトルスタート！」

「あああああ」

必死に言い訳していたしろはをよそに、無情にもバトルが始まってしまった。

「勝ち進めば、いつかはこのような試合もあるだろうとは思っていたが……まさか、いきなりしろはとのバトルになるとはな。いくぞ！」

のみきはバドミントンラケットを構えて、一気にしろはとの距離を詰めていく。

「なあ恭介、ところで中華鍋の本来の使用方法って？」

ふと気になったので、俺は恭介に聞いてみた。まさか、この場で料理をするわけにもいかないし。

「そうだな……頭に被って良いことにしよう。戦国時代には、兜の代わりに鍋を被ったという話もあるしな」

「そ、そういうことなら……ほい！」

話を聞いていたしろはが、とっさに中華鍋を頭に被る。

「えい！」

直後、のみきが振り下ろしたラケットが中華鍋を直撃。カーンと甲高い音を立てる。

「うああああ……」

それと同時にしろはの動きが止まる。

そっか。鉄製の中華鍋を被ってるんだから、外側から叩かれたら頭に思いつきり響くわけか。あれはきつい。

しろはは中華鍋を脱いで、ぶんぶんと頭を振っていた。大丈夫かな。

「うう……でも、これで攻撃する時はどうすればいいの？」

未だ焦点が定まらない目で恭介の方を見ながら、しろはがそう問うていた。

「頭に被って良いんだから、そのまま頭突きでも食らわしたらいいんじゃないか？」

「わかった。やってみる。かたじけのうごぎる！」

恭介の答えを聞いて、そのまま中華鍋を被りなおして頭突きを仕掛けていく。ちなみにしろは、そのゲームはもう終わったから！

「く、来るな！」

対するのみきも避けることができないので、苦し紛れに中華鍋をラケットで叩く。再び甲高い音がする。

「うああああ……」

のみきの攻撃が頭に響いているんだろう。再びしろはが動きを止め、悲鳴を上げる。悪い意味で攻防一体の武器だった。

「か、かたじけのうごぎ！」

「すまない、しろは！」

気を取り直して再度攻撃……としていたところに、とどめの一発。一層大きな音が響き渡る。

「あうあうあうあう……」

しろははそのままふらふらとよろめいて……地面に倒れてしまった。

「勝負あり！ このバトル、のみきの勝ち！」

「すまない、しろは。大丈夫か」

のみきはバトル終了宣言がされると同時に駆け寄り、頭の中華鍋を取り払って、しろはを抱き起こす。

「ううう、中華鍋は料理以外に使っちゃ駄目……」

しろはは目を回しながら、うわごとのようにそう呟いていた。

「それでのみき、しろはへの称号なんだが」

少し時間を置いて、恭介が言いにくそうにのみきに聞いていた。

「すまないが、私はこれ以上幼馴染を辱めることはできない。鷹原、お前が考えてくれないか？」

「え、俺？」

そこで、何故か俺に話を振られた。

「ああ、頼む。この通りだ」

のみきは深く頭を下げていた。そこまでされると、むげに断れない。

「わ、わかった。それじゃ、中華鍋を被っていたのもあるし……しろはの称号は『チャーハンかけばあ』で」

咄嗟に思いついた言葉を並べてみたけど、なんだかすごい単語が出来てしまった気がする。

「ど、どうせチャーハンかけばあですよ」

口をとがらせて、しろはが拗ねていた。うう、そんなつもりじゃなかったのに。

「さて、次で二回戦も最後だ。選手は前へ！」

恭介に呼ばれて前に出てきたのは、鷗と西園さんだった。

「幼馴染同士の対決だね！」

「だから、その言い方は語弊がありますから」

「俺にはよくわからないが、これまた因縁のある対決となりそうだな。それじゃ、武器を投げ入れてくれ！」

恭介が言った直後、次々に武器が投げ込まれる。

「よし、今回はこれにしよう！」

そう言つて鴎が選んだのは、巨大な紙だった。

「鴎、なんだそれ？」

「ペーパークラフトだね。ステゴザウルスだって！　がおがお♪」

「でもこれ、組み立てる前じゃないの？」

蒼がそう言っていた。作り方を書いた紙がついてるし、完成前だった。

「組み立てたら、これで叩いていいんだよね？」

「ああ、時間かかると思うけどな」

「今から作つていいの？」

「いや、バトルが開始されてからだ」

「それじゃ、説明書だけ目を通しておくね！」

鴎はそう言つと、ステゴザウルスの作り方の書いた紙を熱心に読み始めた。

「ところで恭介さん、同じサイバー兵器でも種類が違うのであれば続けて使つてもOKですか？」

「ああ、OKだ」

「では、これにします」

そんな西園さんが選んだのは、アニメとかSF映画に出てきそうなビームライフルだった。

「ほう。良いチョイスだな。西園君」

「いいチョイスつす！　西園さーん！」

西園さんが武器を選ぶと同時に、また科学部部隊が出てきていた。

「よし、NYP値を測定しろ！」

「了解つす！」

なんかよくわからないけど、また数値を測りだした。彼ら、毎回出て来るんだろうか。

「上々つす」

「良い感じだな。思いっきりやれ。西園君！」

「思いっきりいくつす！ 西園さん！」

科学部部隊の皆から声援が飛ぶ。本当に、どういう関係なんだろう。

「よし、それじゃ、バトルスタート！」

お互いに武器選びも終わったというところで、恭介が試合開始の宣言をする。

「よし、説明書もしっかり読んだし、一気にいくよー！」

バトル開始と同時に、鷗が物凄い早さでペーパークラフトを組み立て始めた。

対する西園さんも、ビームライフルのエネルギーチャージを始めた。うん。俺も何言ってるかよくわからないんだけど。とりあえず、銃口に何か淡い光が収束していた。

観客もすごく盛り上がっているけど、皆、逃げなくていいのかな。

「がおがおーっと！ よし、完成ー！」

「え、もうできたの？」

「うん！ 簡単だったよ！」

鷗はあっという間にペーパークラフトを完成させていた。普通に早いんだけど。さすが手先が器用だった。

「というわけで、みおちん覚悟ー！」

鷗の手を離れたステゴザウルスは、火を噴きながら自立駆動し、西園さんへ向かっていく。

「ちよつと待つて鷗。あれって材料は紙だけだったよね？」

「うん、そうだよ！」

「なんで自走したり、火を噴いたりするの!？」

「知らないよ！ 説明書にはそう書いてあったの！」

というか、本来ステゴザウルスは火なんて吹かなかつたはずだけど。

何にしても、ペーパークラフトは猛スピードで西園さんへ迫っている。西園さん、どうするのかな。

「……エネルギーチャージ完了。ビームライフル、発射です！」

「うひゃー！？」

そのタイミングで、西園さんもチャージ完了したらしい。ギリギリまで引き付けて、一撃でステゴザウルスを消し飛ばしてしまった。

「せ、せっかく作ったステゴザウルスが……」

武器を破壊されてしまい、鴉はがっくりと膝をつく。

「勝負あり。武器消失につき、このバトル、西園の勝ちだ」

「うう……せっかく作ったがおをおを、みおちんがビームで焼き払っていきました」

鴉は恨めしい表情で西園さんを見ていた。

「……少し、やりすぎたかもしれません」

ビームライフルが命中した地面は少し陥没し、黒く焦げていた。ステゴザウルスは所詮は紙だし、跡形もなかった。

「それで西園、鴉の称号だが」

「そうですね……特に思い浮かばないので『カモメマックス』で良いですか」

「ふぎやー！」

それは鴉の初戦で来ヶ谷さんが贈ろうとしていた称号だった。その時は結局鴉が勝ったので、贈られずに済んだのだけど。今回は逃げられなかったみたいだ。

「さて、バトルトーナメントも終盤戦だな。選手は前へ！」

「いよいよ準決勝が始まる。まずは、恭介と蒼の試合だった。」

「蒼ちゃん、恭介さんをちみどろにしてください」

だから藍それ、別の人の台詞だから。

「藍の仇、取らせてもらおうわよー！」

「フツ。返り討ちだ。お姉ちゃんと同じ目に合わせてやる」

二人ともやる気に満ち溢れている。そしてすぐさま、無数の観客たちから様々な武器が投げ込まれる。

「よし、俺はこれだっ！」

目をつぶった恭介が選び取ったのは、見慣れない機械だった。

「恭介、なにそれ」

「これは数取器だな」

カチカチと上のボタンを押すと、画面に数字がカウントされていた。道路の交通量調査とかで使われてる、あの道具だった。

「よし、あたしはこれよー」

蒼が選んだのは、三つのサイコロだった。

「え。ちよつとこれ、どうやって戦うの!？」

自分で選んでおきながら、その反応はないと思うけど。

「そうだな……そのサイコロを振って、三つ全て同じ数が出たらその場で勝ちというのはどうだろう。俺の方は、この数取器で999までカウントを進められたら勝ちだ」

「面白そうね。それでいいわよ」

「よし。それなら武器も決まったことだし、さっそくバトル開始を宣言してくれ」

その提案を蒼が了承したことで、恭介は謙吾に試合開始を促す。

「ああ、いくぞ。バトルスタート！」

「うおおおおお！」

試合開始と同時に、恭介は全力で数取器のボタンを連打する。

「うりゃあっ！」

対する蒼も、地面に向かって無心でサイコロを振る。

最初に出た数字は『5』『2』『4』。

その次は『4』『5』『2』。まだ揃う気配はない。

これは、地道にコツコツやる恭介が勝つか、運を味方につけた蒼が勝つか、手に汗握るバトルになりそうだ。

「うおおおお！」

カチカチと小さな音を立て、恭介のカウントが進む。

「てい！・うりゃー！」

カランコロンと、蒼がサイコロを投げる。揃わない。

「……ねえ羽依里、どうしよう。すごく地味だよ」

「そうですよ。とても準決勝の試合とは思えません」

鷗と夏海ちゃんが小さな声で俺にそう言ってきた。

確かに地味だけど、それは選んだ武器のせいだし。やってる本人た

ちは真剣そのものだし。

「鷗、お前実況でもやらないか？」

「……やめとく」

一瞬間に出かかったけど、足が止まった。さすがの鷗でも、入り込む余地はないと悟ったんだろう。

……そのまま数分が経過した。

「ふう、なかなかいきついな」

手が疲れてたんだろうか。恭介は数取器を持つ手を変えて、再びカウントし始めた。ちらつと見えた数字は『512』。ようやく半分を超えた感じだ。

「ていつー！」

時を同じくして、蒼が投じたサイコロの目は『6』『6』『1』。惜しい。

「……」

「れいげんいやちこなれー」

ちなみに、向こうの方では藍としろはが蒼の勝利を必死に祈っていた。なんか妙なオーラを纏っていて、声をかけるのはばかられる。

「いやーしかし、見てるだけで指や腕がおかしくなりそうな戦いですネ」

「さすがの恭介氏も疲れが見えているな」

「わふー。ものすごい汗なのですー」

「……こりゃ、明日の試合に響くかもな」

恭介は痙攣する右腕を時折揉みながら数取器のボタンを押し続けた。リトルバスターズの皆も心配そうに戦況を見つめている。

……それから更に数分後、ようやくバトルは佳境を迎える。

「うおおおおっー！」

恭介は最後の力を振り絞って、すごい速さで数取器のボタンを押す。今の数値は790。だいぶ進んできた。

「ていー！ うりゃっー！」

対する蒼が投げたサイコロが示した数は『1』『5』『4』。次点が『4』『6』『3』。こつちもなかなか揃わない。

そうこうしているうちに、恭介の数取器のカウントは『850』。終わりが見えてきた。

「いい加減揃いなさいよー！ このっ！」

その時、蒼が渾身の力を込めてサイコロを投じる。出た目は……。

『2』『2』『2』。

おお、ついに揃った。すごい。

「やったー……！」

蒼が思わず両手を高くつき上げる。

「勝負あり！ このバトル、蒼の勝ち！」

サイコロの目を確認した謙吾がすぐさま蒼の勝利を宣言する。

「ちくしょー。もう少しだったんだがな……」

己の敗北を知り、恭介は力なくその場に座り込む。その手に握られた数取器には『960』の数値が刻まれていた。

「いやー、本当に手に汗握るバトルでしたネ」

「あたしたちは全身汗だくだけどねー」

決勝進出が決まった後、蒼も恭介と同じように座り込んでいた。数えていないけど、蒼もサイコロを何十回投げたんだらう。

「蒼ちゃん、本当におめでとうございます。私は信じていましたよ」

藍が嬉しそうに駆け寄ってくる。揃った数字も双子の『2』だし、藍の願いが届いたんだらうか。

「それであおちゃん、きよーすけさんへの贈る称号なんだけど」

「あ、そーねー……ちよつと今、何も考えられないかも」

例によって葉留佳が称号を伺いに来たけど、蒼は息も絶え絶えだ。

「……なら、蒼ちゃんの代わりに私が称号を贈りましょうか」

そう言っつて藍がほくそ笑む。これはもしかしなくても、やり返すつもりだ。

「じゃあ、藍に任せるわー」

「では『ド変態おにーさん』で」

蒼からの了承も得たので、藍がさつきと称号を発表していた。

「冗談はよしてくれ。シスコンおねーちゃん」

「なんですか？ ド変態おにーさん」

蒼を挟んで、お互いがにらみ合う。どっちもどっちな気もするけど。

「それでは準決勝・第二試合を始める」

恭介はさつきまでの戦いの疲れも見せず、司会を務める。

ちなみに蒼はというと、藍に膝枕されながら駄菓子屋前のベンチで横になって、決勝へ向けて英気を養っていた。

「よし、選手は前へ！」

「……いよいよか。お手柔らかに頼むぞ」

「いえ、こちらこそお手柔らかにお願いします」

恭介に促されて、のみきと西園さんが前に出てくる。

それと同時に、待ってましたとばかりに観客から様々な武器が投げ込まれる。もはや、見慣れた光景だった。

「よし、私はこれだ！」

最初にもきが手に取ったのは、三輪車だった。

「つて、誰だ!? 三輪車を投げ込んだのは!?」

だから、不満があるんなら、最初から選ばなきやいいのに。なんだろう、本能で選んでしまったんだろうか。

「一度選んだ武器を代えるのは……駄目だったな？」

「駄目。羽依里の時のような特例を除いて、最初に手にした武器で戦うこと」

「それでは、私はこれにしましょう」

そう言っって西園さんが手に取ったのは、一回戦でも使ったサイバーヨーヨーだった。

それにしても、サイバー兵器のローテーション使用は鬼畜だと思う。

「その武器も、だいぶ君の手に馴染んできたようだな。西園君」

西園さんが武器を選ぶと、すぐにまた観客の中から科学部部隊が出

てきた。例によって何かの数値を測り始める。

「あ、駄目っす」

何が駄目なんだろう。よくわからないけど、科学部部隊に動揺が広がっていた。

「うーむ、気をつけていけ。西園君！」

「気をつけるっす！ 西園さーん！」

科学部部隊の声援を受け、西園さんがサイバークローを構えるけど……なんか変だ。良一を瞬殺した時みたいに、ビカビカ光っていない。どう見ても普通のクローだった。

「では、お互いに武器も行き渡ったようだし、バトルスタート！」

「うう、何故私はこんな武器を選んできましたっだー！」

恭介の試合開始宣言と同時に。のみきがなんか叫びながら、三輪車をこいで西園さんに突っ込んでいく。ものすごくカオスだった。

「おまんら、ゆるさんぜよ」

対する西園さんは、そんなのみきが射程に入ったのを確認して、サイバークローを振るう。

「あつ」

投げ放たれたクローはのみきを直撃するけど……普通にはじき返されていた。良一の時のように痺れたりしない。

「……やっぱり、駄目ですか」

「なんだかよくわからないが、その武器は本来の力を失っているんだな。なら、今がチャンスだ！」

その隙を突いて、のみきは猛烈な勢いで三輪車をこぎ進め、西園さんに体当たりを食らわせる。

「きゃ!?!」

もちろん大したダメージにはならないのだけど、普段から運動していない西園さん転ばせるには十分だった。

そして転んだ拍子に、手に持っていたサイバークローは西園さんの手を離れ、ころころと転がりながら観客の中へと消えていった……。

あれ。これってもしかして。

「武器消失により、勝負あり。このバトル、のみきの勝ち！」

その状況を確認した恭介がバトルの終了を宣言していた。

サイバー兵器で無双するかと思われた西園さんだけど、予想外に実力を発揮できずに終わってしまった。

「今回に限ってNYP値が低かったのが災いしたな……惜しかったぞ。西園君」

「惜しかったつす！ 西園さーん！」

科学部部隊の皆が西園さんの善戦をねぎらっていた。確かに、西園さんが準決勝まで進んでくるなんて、誰も予想してなかったけど。

「その……すまない。本気でぶつからないと、やられると思ったんだ」のみきが申し訳なさそうに謝っていた。それまでの西園さんの戦いを見ていれば、その判断は正しいと思う。

「いえ、構いません。決勝進出、おめでとうございます」

「正直なところ、喜んでいいのか微妙だがな……」

「それではみきちちゃん、みおちに称号をどうぞ」

お決まりに葉留佳が飛び出してきて、そう伺いを立てる。

「そうだな、鷹原、またお願いできないか？」

「え、また俺？」

「ああ、頼む」

「それじゃあ……『サイバー少女・みらくる☆みおちん』」

「……」

ちよつと皆、可哀想なものを見るような目で見ないで。

のみきに頼まれたとはいえ、また妙なものを創造してしまった。

「さて、バトルトーナメントもいよいよ決勝戦だ。選手は前へ！」

恭介に呼ばれ、優勝を争う蒼とのみきが皆の前に出てくる。

「まさか、この二人の決勝になるとはな思わなかったな」

「うむ。おねーさんもリトルバスターズが全滅するとは思わなかったぞ」

「蒼ちゃん、ファイトです」

「のみき、応援してるぞー！」

「どっちも頑張ってくださいーい！」

決勝戦ということで、口々に声援が飛び、観客も一層盛り上がる。

「それじゃ、お前ら気合い入れて武器を投げ入れろっ」

恭介の言葉に応えるようにして、無数の武器が投げ込まれる。

「じゃあ、あたしはこれよー！」

投げ込まれた武器の山に手を突っ込んで、導かれるように青色の生き物を引っ張り出す。

「よろしくね、イナリ！」

「ポンー！」

蒼はやっぱり、最後はイナリでいくらしい。

「よし、私はこれだ！」

そう言つてのみきが手にしたのは、どこからどう見てもハイドログライダーエーター改。彼女の愛銃だった。いつも背負っているはずなのに、誰が投げ込んだんだろう。

「ちよつとのみき！ それって本物の武器じゃないの!？」

「同じ武器を続けて使えないルールが地味に痛くてな。結局、最後まで取っておく羽目になった」

のみきが笑顔で言っていた。結果論なんだろうけど、現状ではまさに鬼に金棒だった。

「お互いに武器が行き渡ったな。それでは決勝戦……バトルスタート
！」

恭介はそんなこと知ってか知らずか、早々に試合開始宣言をする。

「……悪いが、さっそくイナリを攻撃させてもらうぞ」

のみきはそう言うと、ハイドロの照準をイナリに合わせる。

どうやら、蒼の武器であるイナリを吹き飛ばして、武器消失を狙う作戦らしい。

「ふっふーん。のみきの作戦はお見通しよ！ やれるもんなら、やってみなさいー！」

何か作戦があるんだろうか。蒼も自信満々にのみきを煽っていた。
「いいだろう。後悔することになるぞ」

のみきも完全に戦闘モードだ。さすがのイナリでもハイドロ持ったのみき相手だと厳しいかもしれない。

俺は夏海ちゃんの話进行を思い出す。謙吾の武器を吹き飛ばしたように、イナリは山の向こうまで吹き飛ばされてしまいうんじやないだろうか。

「すまない。許せいナリ。ファイア！」

「びやあああーっ！？」

「な、なに!？」

のみきがハイドロを発射した直後、のみきとイナリの間で蒼が割って入った。

「うう、冷たっ……」

「蒼、どういうつもりだ!？」

「あたしが盾になれば、こうやってイナリを守れるでしょ!？」

蒼はそう言っ胸を張る。まさかの我が身を盾にした作戦だった。「確かに相手の攻撃を避けてはいけないルールだが、武器を守るため、自ら攻撃に当たりに行くなんてな……」

蒼のまさかの行動に、恭介は驚愕の表情を浮かべていた。

「イナリ、あたしが盾になるから後ろに隠れて！ ゆっくり近づくわよ！」

「ポ、ポン！」

背後のイナリにそう指示を出し、ゆっくりと前進していく。その間にも、蒼はのみきから無数の水弾を受けて、全身ずぶ濡れになっていた。

……その時、俺は大変なことに気づいてしまった。

「な、なあ蒼、お前も少し、前を隠した方が良くと思うぞ」

「へ?？」

「いやその、目のやり場に困るから。す、透けてるし……」

「……」
俺の言葉の意図に気づいたんだろう。蒼はゆっくりと視線を下げる。

……蒼の服は思いつき透けていた。うん、下着の色さえもわかつ

ちやうレベルで。

「えええ、ちよつとくくく！」

蒼は反射的に身体を隠すようにしながら、その場にしゃがみ込む。「男の子たちは全員目をつぶってください。さもないと、後でひどいですよ！」

状況に気づいた藍がそう訴える。そんなこと言われても、せつかくの決勝戦なのに。

結局、正直に目をつぶった男子は少数みたいだ。俺もできるだけ蒼を視界に入れないようにしながら、バトルの行方を見守る。

「ポンポーン！」

その時、そんな蒼を守るようにイナリが前に出る。

「見ろよあのタヌキ。飼い主を守ろうってんだ。男気あるぜ」

真人がそう言っていた。イナリはメスだけど。

「すまないな。不本意だが、これで終わりに……」

のみきが改めてイナリに銃口を向けた……その時。

「ねえねえ、このバトルトーナメントって、そういえば優勝賞品とかないの？」

鴉が良く通る声で恭介に質問していた。

「いや、特に考えていないな」

「だったら、優勝した方が羽依里とデートするってのは？」

……ちよつと鴉、またその流れにするの？ もう何度目だっけ。

「よくわからないが、羽依里はしろはと付き合っているんじゃないのか？」

恭介が当然の疑問を口にしていった。うんうん。もつと言ってやって。

「羽依里は他の女の子全員とデートしてるから大丈夫だよ！ 優勝したら、のみきさんは初デートだし、蒼ちゃんは今度は藍ちゃん抜きで、羽依里と二人つきりでデートすればいいんじゃない？」

「え」

そんな鴉の声のみきと蒼の耳に届いたらしい。二人は揃って俺

の方を見て、顔を真っ赤にしていた。

「そうですね！ 二人つきりでスタパに入るとか、楽しそうですね！」

夏海ちゃんが笑顔で追い打ちをかける。たぶん、本人には悪気はないと思うんだけど。

「そうだね。腕組みもしたらいいと思うよ」

しろはも乗っかって、そう言っていた。無表情なのがすごく怖いんだけど。

「いや、そんな、いくらなんでも、私と鷹原が……腕組み……は、はじゆかしすぎるぞ……」

「ちよつと待つて。今度は二人きりつて……それつてつまり、やっぱりその……」

あああ、二人とも頭から湯気が出る。ダブルピンクになってる。しっかして。バトルしないと。

「……ほう」

しかし俺の願いは届かず……ぼふん、と音がして、二人とも顔を紅潮させたまま、その場に倒れてしまった。

「ありや……これは引き分けだな」

一瞬の静粛の後、恭介がそう宣言する。待つてましたとばかりに藍や良一が飛び出してきて、気絶してしまった二人を回収する。

「予想外の結末になったが、バトルーナメントはこれにて終了だ。観客の皆、協力ありがとう！」

恭介が最後をうまく締めてくれる。観客たちからは笑いと共に、温かい拍手が送られていた。

その後、片づけやら何やらでバタバタしていたこともあつて、優勝賞品の話はうやむやになってしまった。

俺としては、助かったような残念なような、複雑な心境だった。

バトルーナメントが終わった後、夏海ちゃんと一緒に加藤家に帰

宅する。居間の時計を見ると12時を少し回っていた。

13時から祭りの準備が控えているし、急いでお昼ごはんを食べることにした。

「今日のお昼、この鳥ごぼろうどんで良いですか？」

「うん、それでお願いするよ」

「はい！ それじゃ、むぎゆつとお湯入れておきますね！」

夏海ちゃんはそう言っただけで急ぎ足で台所へと向かっていった。ところで、むぎゆつとってどういう意味だろう。

一方、俺は玄関先にタオルや軍手を用意しておいた。それに、午後からも暑くなりそうだし、水分も用意しておいた方が良さそう。

「夏海ちゃん、あとで水筒に水入れておこう！」

「わかりました！ 用意しておきます！」

……それから数分後、完成した鳥ごぼろうどんを食べた。

鴨の出汁がきいていて、なかなか美味しかった。できることなら、もう少しゆつくり味わって食べたかったけど。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

きつかり13時。夏海ちゃんと一緒に役所前に行くと、既にリトルバスターズのメンバーも揃っていた。

「鷹原たちも来たか。さっそくだが、仕事を割り振らせてもらおうぞ」
その集団の中心にのみきがいた。どうやら彼女が役割分担を決めてくれているらしい。

「まず、リトルバスターズの男子には組み立て式のテントや看板を漁港まで運んでほしい」

テントって、あの袋に入ってるあれだろうか。よく運動会で見る白いテントだ。

「……結構重たそうだな」

「すまない。本来ならトラックを手配したいところなんだが、あいにく全て出払っていてな。数人でゆっくり運んでもらって構わない」

役所から漁港まで、そこまで距離はないけど、あれを人力で運ぶのは骨が折れそうだ。

「のみき、そんな心遣いは無用だぞ。こつちには筋肉担当が二人もいるからな」

恭介はそう言うと、真人と謙吾の方を見やる。

「へっ、望むところだぜ！ よし謙吾、どっちが多く運ぶか、競争だ！」

「いいだろう。受けて立ってやる！」

そう言うと、二人はテントの入った袋を軽々と持ち上げ、漁港へ向けて全速力で走り去っていった。

「ありや、せつかちだなあいつら」

さも当然のように見送ってしまったけど、あのテントって二人で持たないと運べないくらい重かった気がするんだけど。

「それじゃ理樹、俺たちは二人で運ぶか」

「そうだね。さすがにあんな速度は無理だけど……」

残っていた恭介と理樹は二人で一つのテントを持ち上げると、漁港へ向かって歩いていった。

「では次に、夏海ちゃんは神北さんや西園さん、能美さんと一緒に、小学校に置いてある灯籠を漁港へ運んでもらいたい」

「わかりました！」

「おっけーですよー」

「了解なのですー」

四人は快諾していた。でも小学校からだ、漁港までは結構距離がある。灯籠はたくさんあったけど、四人だけで大丈夫なんだろうか。

「地元の小学生たちも手伝ってくれるはずだから、一緒に運んでくれ。大変だろうが、頼んだぞ」

「わかりました。それでは皆さん、行きましょう」

「はいーい！」

そのまま西園さんを先頭にして、夏海ちゃんたちは小学校の方へ歩

いていった。

「そして残りの女性陣だが、神社から漁港へ向かう道に順路の案内板を設置してもらいたい」

のみきはそう言いながら、葉留佳と佳奈多、来ヶ谷さんや鈴に配置図らしき紙を配っていた。

「おおー、これはこれは、なかなかの数ですネ」

「既に看板そのものは各所に置いてある。後は組み立ててもらおうだけで良いんだが、いかにせん数が多くてな。手分けして行ってほしい」

「よーし。それじゃ、ちやちやつと終わらせませよー！」

「葉留佳、手抜きなんかしちゃ駄目よ？ 後でチェックするから」

「ぶーぶー、信用ないなー」

「よし、おねーさんは頃合いを見て抜け出して、コマリマックスたちと戯れるとしよう」

「来ヶ谷さんも逃がしませんからねー！」

「フ……。元風紀委員長は厳しいな」

紙を受け取った四人は神社の方へ向かって歩いて行った。気がつけば、役所前には俺とのみきだけが残される。

「あれ、俺は？」

「鷹原はバイクを持っていたろう。それでやって欲しいことがある」

「やって欲しいこと？」

「ああ。この島では祭りの前に、島民が神社にお供えをする風習があるんだ。鷹原には、そのお供え物の収集をお願いしたい」

のみきはそう言いながら、俺の方に笑顔で地図を渡してきた。所々に、丸印が書いてある。

「つまり、バイクでこの丸印がつけられた家を回って、お供え物を集めてくればいいんだな？」

「察しが良くて助かる。島民の中には、足腰が悪くて神社まで来られない方も居てな。集めた品物は、そのまま神社に預けてほしい。話は全て通しておく」

「わかった。それじゃ、さっそく行ってくるよ」

「ああ、よろしく頼むぞ。収集が終わったら、また役所に戻ってきてくれ」

俺は挨拶を交わした後にのみきと別れ、一旦加藤家へと戻る。

ガレージからバイクを引っ張り出していると、あることに気づいた。

「そういえば、たくさんの荷物を積むのに、この荷台じゃ心許ないよな……」

少し考えて、以前キャンプの準備をした時に、港の商店で大きめの箱を借りたことを思い出した。お供え物の収集を始める前に、もう一度あの箱を貸してもらえないだろうか。

そう思い立って、まずは島の反対側、港の方へ向けてバイクを走らせた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「えっと、確かこの辺りだったんだけど」

俺は港の入り口にバイクを止めて、そこから歩いて商店を探していた。

祭り当日ということもあって、島の玄関口である港はたくさんの観光客でごった返していた。とてもじゃないけど、バイクで乗り入れるなんて無理だった。

「お姉ちゃん、こつちだよお」

「はっはっはっ。佳乃、そんなに急がなくても祭りはまだ始まらないぞ」

ちょうど船が到着したみたいで、また何人もの観光客が島に上陸していた。

「祐一くん、沢山お店が出てるよー!」

「あゆ、そんなに急がなくても出店は逃げないぞ」

「たい焼き売ってるかな?」

「いや、夏にたい焼きはないだろ……」

「それじゃ祐一、イチゴサンデーならあるかな？」

「いや、あつても氷イチゴくらいじゃないか……?」

期待に胸膨らませながら、次から次へと観光客が通り過ぎていく。これは藍の言う通り、夕方にかけてますます人が増えそうだと。

それにしても、港には普段は見ないような出店がたくさん出ていて、賑やかだった。

「クレープいかがですかー? 竜太サンドもありますよー!」

向こうに見える屋台では、元気のいい売り子さんがクレープを売っていた。その隣に金髪の……春原さんの姿も見える辺り、あの人が妹さんなのかな。どつかで見たような気もするけど。

「さあ、俺の人形劇で大笑ってくれ!」

「「ヒヤッホー! 国崎最高ー!」」

出店が集まっている場所の反対側には特設ステージが設けられていて、なにやら催し物が行われていた。気にはなったけど、今は商店に行かないと。

その後、人波をかきわけて、ようやく商店に到着した。

「あの一、すみませーん!」

アルミサツシの引き戸を開けて、店内に呼びかける。

「はいはいー」

すぐに商店のおじさんが出てきてくれたので、箱を貸してほしい旨を伝える。

「ああ、もしかして、祭りの準備かい?」

「はい。お供え物を収集を任せました」

「それはそれは。明日は野球の試合だつていうのに大変だねえ。ちよつと待ってておくれ」

おじさんはそう言うと、すぐに店の奥から箱を持ってきてくれた。

『鳥白島漁協』と書かれた箱で、たぶん、以前借りたものと同じだろう。

ところで、なんでほとんど面識のない商店のおじさんまで明日野球

の試合があるって知ってるんだろう。

「そうだ、この後、神社に行くんだろ？」

そんなことを考えていると、店の奥からおじさんにそう声をかけられた。

「はい。行きますけど……？」

「ついでで悪いんだけど、これも神社に届けてくれないかな？」

そう言っておじさんが持ってきたのは『奉納』の熨斗がつけられたお米だった。どうやらお供えの品らしい。

「構わないですよ。お預かりします」

「よろしくね。あ、箱はいつ返しに来てくれてもいいから」

「はい、ありがとうございます」

俺は借りた箱をバイクの荷台に固定すると、のみきから預かった地図を広げる。回らなければいけない場所はそこまで多くない。

「港の近くは2件か。後は住宅地の端っこに5件と……」

一通り場所を確認してから、バイクを走らせる。とりあえず、近い場所から始めてみよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

のみきが話を通してくれていたおかげか、特に問題なく全てのお供え物を集め終わり、神社に到着した。

さすがに境内まではバイクで上がれないので、石段の下にバイクを止めて、荷物を抱えて石段を登る。

「ふう。結構きついな」

お供え物として預かったのは、5kgの米が二袋に、お酒が三本。他に野菜がたくさん。なかなかの重さだった。

「お、鷹原じゃないか」

その時、背後から声があったので振り返ると、そこには天善と……もう一人、見たことはあるんだけど名前が出てこない男子がいた。確

か、同い年じやなかったつけ。

「えつと天善、そちらは……」

「徳田です。徳田実篤です」

「あ、ご丁寧にも。鷹原羽依里です」

丁寧に自己紹介をしてくれた。そうだった。彼が徳田だった。

ラジオ体操にも来てるんだけど、まったくと言っていいほど話さないから、すっかり忘れてしまっていた。

「えつと、二人もお供えを持ってきたのか？」

「ああ、毎年のことだからな」

そんな話をしながら石段を登り終わる。荷物を持ってお堂に近づくと、役所の人が対応してくれた。

「奉納品だね。御苦労さま」

「徳田スポーツです。今年もお願いします」

徳田を先頭に、俺たちも品物を奉納する。お堂の前には、俺が持ってきたのと同じような品が並んでいた。

奉納品の中に魚がないのは、祭りの間は釣りが禁じられている、この島の風習と関係しているのかもしれない。

「それじゃ、俺はこれで」

「あ、ちよつと待って」

大量のお供え物を運び終わり、神社を後にしようとしていると、役所の人に声をかけられた。

「君、これだけの品を運んできたっていうことは、何か乗り物に乗ってきてるよね？」

「はい、バイクで来てます」

「ついでで悪いんだけど、このローソクとお酒を漁港に届けてくれな
いかな」

「構わないですけど、このローソクは何に使うんです？」

「暗くなつてから灯籠を海に流すんだけど、その灯籠に入れるローソクだよ。確か、まだ持って行ってないはずだからね」

「わかりました。そういうことでしたら、持って行きます」

「悪いね。よろしく願いますよ」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺は神社で預かった品物を持って、漁港へとやってきた。

既にたくさんのテントが立てられ、島民の皆がせわしなく動き回っている。ここには、観光客の姿はほとんど見られない。

「すみません。神社からお酒とローソクを預かってきたので、ここに置いておきます」

港で作業をしていたおじさんたちにそう声をかけて、お酒とローソクを適当な場所に置く。

「お、加藤さんとその。お使いを任されたか？」

「今日ばかりは彼女とイチャイチャするわけにもいかねえだろ？ どうだい、この後俺たちと一緒に飲むのは？」

「あはは、せっかくですが、今回は遠慮させてもらいます」

おじさんたちは笑顔で誘ってきてくれたけど、それをやんわりと断って、バイクの方へ戻る。さすがに未成年だしなあ。

「ふう……」

それにしても暑い。空は雲一つないし、太陽が憎たらしくなってくる。

俺はさんさんと輝く太陽を見やってから、水筒を取り出して一口飲む。

「おつ、羽依里じゃねーか」

その時、野太い声がした。見てみると、真人が日陰で何か飲んでいました。

「真人、何飲んでるんだ？」

気になったので、近づいてみる。真人が持っているのは、2リットルのペットボトルだった。

パッケージはウーロン茶のそれだけど、ガムテープがぐるぐるに巻かれていて、内容物が見えない。

「何なら飲むか？ 俺特製、マッスルエクササイザーだ」

「いや、やめておくよ」

真人のオリジナルドリンクだろうか。名前はかっこいいけど、中身が見えないし、なんか怖い。

「連れねえ奴だなあ。良い筋肉してるくせによ」

いやその、筋肉基準で言わないでほしいんだけど。

「良一のやつは飲んでたぜ。直後にトイレに駆けこんでたけどよ」

駄目じゃん。それ、駄目なやつじゃん。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺は真人と別れて、借りた箱を返して港へ向かった。

「すみません。助かりました」

「こんな早く返しに来てくれなくても良かったのに……あ、そうだ」
バイクの荷台から箱を外し、おじさんに渡そうとした時……おじさんが思い出したように言う。

「悪いんだけど、もう一仕事お願いできるかな」

「え？ 今度は何でしょう？」

「ついさっき、青年会館から電話があつてね。料理に使う砂糖と醤油が切れたから、大至急届けてくれて言われたんだよ」

「いいですよ。乗り掛かった舟ですし」

一度外しかけた箱を再び荷台に取り付け、おじさんから砂糖と醤油を預かる。

「すまないね。青年会館は役所の隣だから。看板も出てるし、行ったらすぐ分かると思うよ」

「わかりました。それじゃ行ってきます」

どのみち、のみきに報告するために一度役所にも戻らないといけな
いし。ちようど良かった。

俺は強い日差しの中、バイクを走らせる。

「……あれ？」

一本道に差し掛かったところで、例の大きな木の下にのみきを見つけた。

「のみき、どうした？」

思わずバイクを止めて、近づいてみる。

「ああ、鷹原か。ちよつと休んでいただけだ」

そう言うのみきは、ちよつと顔が赤い気がする。これだけ暑いし、もしかして歩いてる途中に日射病にでもなったんだだろうか。

「そうだ、水筒に水が入ってるんだけど、飲むか？」

「そ、そうだな……少しもらえるか」

「ああ。全部飲んでくれて構わないからな」

のみきは俺から水筒を受け取ると、ごくごく喉を鳴らしながら飲んでいった。そこまで冷たくはないけど、今は冷たすぎない方が身体に良いかもしれない。

「……ふう。すまない。助かった」

のみきは大きく息を吐きながら、俺に水筒を返す。ほとんど空になっていた。

「のみき、どこか出かけていたのか？」

「ああ、ちよつと港で騒動があつてな。それを解決してきたんだ」

「え、騒動？」

俺もついさつきまで港にいたけど、あれだけ観光客がいて賑やかだったし、全然気がつかなかった。

「観光客同士の喧嘩らしい。すでに解決してあるから、問題はないぞ」「ならいいけどさ……」

「しかし参つたな。至急役所に戻らないといけないんだが」

まだ頭がぼうつとしてるのだろうか。のみきが気怠そうに頭を振る。

「そうだ。のみき、良かったらバイクの後ろに乗っていかないか？」

「なに？」

「ほら、なんだか本調子じゃないみたいだしき。役所まで送らせてくれよ」

「いや、しかし……」

「俺もどのみち青年会館まで行かないといけないし、荷物があつて後ろは狭いけど、のみきならなんとか乗れると思うから」

「……なら、今回ばかりはお言葉に甘えるところでしょう」

のみきは少し悩んで、そう返事をしてくれていた。俺はバイクにまたがって、その後ろを促す。

「すまない。よろしく頼む」

すぐ後ろの荷台に箱がついてあるせいか、かなり体を密着させないと乗れない。

「いやその、これはかなり恥ずかしいぞ……」

「悪いけど、役所に着くまで少し我慢してくれな」

「ああ。鷹原の背中は大いし、いい匂いがする」

「え？」

背後でのみきが何か言っていた。

「そ、それじゃ、できるだけゆっくり走り走るから」

妙な恥ずかしさを感じた俺は、それを隠すようにバイクを走らせた。

「それで鷹原は、まだお供え物の収集をしていたのか？」

そろそろ住宅地に差し掛かったころ、のみきが荷台の方を見ながらそう言っていた。風に当たったせいかわ、だいぶ体調も良いみたいだ。

「いや、それは結構前に終わったんだけどさ……」

俺は神社からこれまでの流れをのみきに説明する。

「……というわけで、島中を走らされていき。なかなか役所に報告に行けなかったんだ。ごめん」

「いや、別に謝る必要はないぞ。鷹原も島の皆に協力してくれていたわけだしな」

「そう言ってもらえると助かるよ」

「……む!?」

その時、背後ののみきが急に動いた。サイドミラー越しに見てみると、のみきは即座にハイドロを構えて、道路を歩いていた三人を狙い撃っていた。

「ぶわっ!?!」

「げふっ!?!」

「どわっ!?!」

直後、撃たれた三人はもんどりうって倒れた。すれ違い様だったから顔はよく見えなかったけど、上半身裸だった。

「良一に謙吾、もう一人いたな。眼鏡をかけていたら天善かと思っ
て撃ってしまったが、知らない顔だったな。観光客だろう」

のみきが水鉄砲をしまいながら、呆れた口調で言っていた。

「いくら暑いからといって、人前で裸になるとはな。その度胸だけはすごいと感心するが」

俺にしてみれば、すれ違いざまに三人を正確に射抜くののみきもすごいと思うけど。まるで流鏝馬（やぶさめ）だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

役所の前に到着し、そこでのみきを降ろす。

「鷹原、手を煩わせてしまつてすまなかつたな」

「気にしないでくれ。それより、体調は大丈夫か?」

「ああ、だいぶ良くなった。鷹原からもらつた水のおかげだな」

のみきはそう言つて笑顔だった。だいぶ顔の赤みも引いた気がするし、役所の中は冷房が効いているという話だ。もう大丈夫だろう。

「それじゃ、俺はこれで」

「ああ。青年会館に用があるんだつたな。さつき通り過ぎた、あの建物だぞ」

「わかつた。ありがとう」

のみきと別れた後、俺はバイクを反転させて、青年会館へと向かった。

「お邪魔しまーす」

建物に足を踏み入れると、正面には大広間が広がっていた。奥にはステージらしきものも見えるし、島の敬老会とか、ここでイベントをやるんだろうか。

移動中にのみきに聞いた話によると、入って右側に調理室があるらしい。確かにそっちの方から、煮物のいい匂いが漂ってきていた。

玄関で靴を脱ごうとすると、思いのほか沢山の靴が置いてあるのに気がついた。婦人会のおばさまたちが集まっているんだろうか。

「すみませーん。頼まれていた醤油と砂糖を持ってきたんですけどー」

調理室の入口を少しだけ開けて、そう声をかける。室内は思いのほか広く、皆忙しそうに作業をしていた。

「あ、わざわざありがとうございますー」

俺の声に気がついたのか、近くにいた女性が俺の方にやってきた。

「つて、蒼?」

「あれ? 羽依里じゃない。配達でもやらされてるの?」

汗だくの顔でそう笑う。割烹着に三角巾だったから、全然わからなかった。

「ああ。バイクを持ってたのが仇になったよ。蒼も、手伝い大変そうだな」

「まあねー。しろはに藍もいるわよ?」

蒼が指差す先で、しろはと藍が盛り付けを担当していた。姿が見えないと思つたら、こんな所にいたのか。

「ここで何を作ってるんだ?」

「神社にお供えする料理とか、お祭りの後に出す食事とかね。結構大変なのよー」

祭りと言えば男の力仕事ってイメージがあつたけど、女性も大変そ

うだった。

「蒼、砂糖届いたの？」

「うん。羽依里がバイクで持ってきてくれたわよー」

その時、しろはがやってきた。白い三角巾が似合っていた。

「しろはも大変そうだな」

「盛り付けはお店で慣れてるから大丈夫。味付けしなくていい分、楽だよ」

「え、味付けしないの？」

意外だった。しろはの煮物、美味しかった記憶があるんだけど。

「うん。味付けとかは、おばさまたちの担当なの。そう言う決まりなんだよ」

よくわからないけど、婦人会にも年功序列みたいなルールがあるんだろうか。それ以前に、しろはたちがすでに婦人会に入会してるってのも不思議な話だ。

「そうだ羽依里、バイクがあるんなら、お願いしていいかな」

しろははそう言うのと、引きずるようにしながら大きなピッチャーを運んできた。昔懐かしい四本足の、巨大なピッチャーだった。

「これ、中に麦茶が入ってるんだけど、小学校のグラウンドまで届けてくれないかな？」

「え、小学校？」

「うん。小学校で明日の準備をしてくれている人たちがいるから、差し入れてあげて」

「わかった」

「あとこれも。おにぎりが入ってるから」

ピッチャーの上に、どすつ、と袋が乗せられる。

「羽依里は食べちゃ駄目だよ？」

「いくら何でも食べないよ。それじゃ、行ってくるから」

「うん。お願いね」

醤油と砂糖を二人に渡し、代わりに巨大なピッチャーと大量のおにぎりを預かった俺は、再びバイクを走らせることになった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よいしょつと……」

小学校の正門前にバイクを止めて、ピッチャーとおにぎりを持ってグラウンドへ向かった。

作業をしてきている人たちに差し入れの品を渡し、再び正門前へと戻つてくると……子供たちと並んで歩く、夏海ちゃんたちの姿が見えた。

「あれ、夏海ちゃん」

「あ、羽依里さん。どうしたんですか、こんなところで」

俺に声をかけられて振り返った夏海ちゃんの手には、以前皆で作った灯籠が抱かれていた。

「灯籠運び、まだ終わらないの？」

「……はい。実はこれ、三往復目なんです」

「え、三往復？」

「えつと、実はですね……」

夏海ちゃんの話によると、どうやら祭りで使う灯籠は子供たちが作ったものだけじゃ数が足りないらしい。

確かに、先日プールサイドで作った灯籠だけだと、パンフレットにあるみたいに海を灯籠で埋め尽くす……とまではいかないかもしれない。ない。

それを踏まえて、学校の先生たちが追加で作ったものもあつたみいで、その数はおよそ100。それを夏海ちゃんたちだけで、小学校から漁港まで運んでいたらしい。

当然、子供たちが持てる数も限られるので、何度も往復する羽目になつたらしい。

「それは……大変だったね」

「はい……葉留佳さんたちが手伝ってくれなかつたら、まだまだ終わりが見えなかつたかもしれません」

「え、葉留佳さん？」

夏海ちゃんに言われて、改めて集団を見てみると……子供たちの中に特徴的なツインテールや、黒髪の女性が見える。

「葉留佳や来ヶ谷さんも手伝ってくれてたのか」

「うむ。ちょうど小学校の前で頭を抱えていた夏海君を見かけてな。助け舟を出したまでだ」

「やはは、私たちの仕事もちょうど終わってたしねー」

「クドリヤフカや神北さんも困っていたようだし、ちょうど良かったのよ」

「そうだ。手伝わない理由はない」

先の二人に加えて、佳奈多に鈴も居た。元々参加していた小毬さんたちを合わせると、総勢7人のリトルバスターズの皆が手伝ってくれていたことになる。

「それでですね羽依里さん。三往復目で終わらせようと頑張ったんですけど、どうしてもあと二つ、持てきれずに残っていたんです」

夏海ちゃんが申し訳なさそうな顔で俺を見てきた。この流れはもしかして。

「良かったら、手伝ってもらえませんか？」

「いいよ。俺も一仕事終わったところだしね」

「ありがとうございます！」

子供たちを含め、皆必死に手伝っているんだし。放ってなんかおけなかった。

「プールサイドに置いてあるんだよね？ 取ってくるよ」

俺はプールサイドまで走り、置いてあった最後の二つを手にとって戻ってくる。

「みんな、これが最後だからね。頑張ってください！」

「おー！」

夏海ちゃんが子供たちをそう鼓舞していた。年齢が近い分、リトルバスターズの皆より慕われている気がした。

その後は皆で、漁港目指して歩く。

手に持ってみてわかった。この灯籠は紙と木で作られてるだけ

あつて、ちよつとした衝撃でも壊れてしまいそうだ。これは人の手じゃないと運べない。

「よく見ると、この灯籠は細かい模様がたくさん描いてあつて、綺麗なのですー」

クドが手にした灯籠をまじまじと見ながら、そう言っていた。

「毎年この時期に、小学校で作ってるんだよ。たぶん、クドとかなら混ぜたってもいいんじゃないかな」

「そ、それは私が小さな子供に見えるということでしょうかー」

「当たり前じゃないか。何を今更な。ミニ子だしな」

その時、背後の葉留佳が声色を変えながら会話に入ってきた。

「とういか葉留佳、それ俺のマネ？」

「ああ、似ているだろ。さしずめ俺は、傷ついたズツキーニ」

「いや、全然似てないから」

傷ついたズツキーニつてのも意味が解らない。そのまま廃棄処分されるんだろうか。

「……馬鹿なこと言つてないで、しっかり歩きなさい。動く拡声器さん」

佳奈多がそう言うと、子供たちの間から笑いが起こる。

「そういえば、クドの称号つて何だったの？」

「わふ？」

灯籠を持ったまま、クドが首をかしげていた。本当に犬みたいだ。

「ほら、バトルトーナメントでしろはに負けたじゃない。その時贈られた称号だよ」

俺はちようど見逃していたし、夏海ちゃんもしろはの勝利に興奮していたのか、特に触れてなかった。今更ながら、少し気になった。

「えーつと、それはー……」

クドはなんかごによごによ言ってる。やっぱり、恥ずかしいものなんだろうか。

「私は覚えてるぞー！ ミニ子の称号は『1001匹クーちゃん』だー！」
そんなクドを尻目に、葉留佳が大きな声で叫ぶ。さすが、動く拡声器だ。

「ううう、情けないのですー」

クドは見るからに落ち込んでるけど、101匹のクドとか、一部の
人にとっては天国みたいな状況だと思うけど。

「うむ。鷹原少年あたりはムヒョッス最高だぜ、と思っっているに違
ない」

「いや、思っっていないけどさ……」

そんな会話をしながら歩く。喋りながらだと、そこまで疲労感を感じ
ないから不思議だった。

漁港に全ての灯籠を運び終え、用意しておいたローソクを灯籠の中
に入れる作業に入る。

ちなみに、夏海ちゃんは島の女の子と仲良くなったらしく、ずっと
一緒に作業をしていた。

「……夏海ちゃん、このローソク逆さま」

「あ、本当ですね。ぼーつとしてました」

「おいおい」

見た感じ、夏海ちゃんより少し年下って感じかな。碧色の髪飾りと
ショートヘアが印象的な子だった。

「……うん、これで全部入れ終わったね。皆、お疲れ様」

全ての灯籠にローソクがきちんと入っていることを確認して、よう
やく漁港での作業も終わった。

「それじゃ、俺はちよつと箱を商店に返してくるから」

「はい！ 羽依里さん、ありがとうございます！」

夏海ちゃんたちと別れ、バイクの方に向かう。

「お、加藤さんよこのー！」

……その矢先、漁師風の男性に捕まってしまった。嫌な予感がす
る。

「少し頼みたいことがあるんだけどよ。にーちゃんバイク持ってたよ
な？」

「は、はい。持ってます、けど……」

結局その後も、俺はあちこちで用事を頼まれ、島中をバイクで駆け巡ることになった。たぶん、灯台以外のあらゆる場所に行った気がする。

そして祭りの直前になって、なんとか解放されたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

水平線が赤く染まり始めた頃、俺たちは神社の境内に集まっていた。

「祭りが始まるまでのこの独特な雰囲気、何回味わっても慣れないわよねー」

周囲には俺と夏海ちゃんの他に、空門姉妹にしろは、のみきの姿がある。少し離れたところで、リトルバスターズの皆も同じようにお堂を見つめていた。

「今から何が始まるんですか？」

「夏鳥の儀よ。もう少ししたら、あのお堂から夏鳥の役に扮した女の子が出てきて、舞を披露しながらゆっくりと海へと向かうの」

「その夏鳥の後には船神輿が付き従うんだ。良一たちが担ぐんだぞ」

蒼の説明を、のみきが引き継いでいた。演舞だけじゃなく、神輿も出るんだな。

しばらくして祭り囃子が流れ始めた。いよいよ始まるみたいだ。

やがてお堂の扉が開き、今年の夏鳥の役を任された少女が出てくる。いつもは騒がしいリトルバスターズの皆も、今は神妙にその様子を眺めていた。

少女はそのまま境内の中央へゆっくりと歩みを進めると、静かに舞い始めた。なんだろう。初めて見るはずなのに、胸が締め付けられるような気がする。

夏鳥の少女が舞うたびに、澄んだ鈴の音が周囲に鳴り響き、身に着

けた装束が華麗に舞う。

同時に、その艶やかな髪が夕日を受けて黄金色に輝く。

……いや、夕日を受けなくても、金色に輝いていた。

というか、俺はあの夏鳥の少女に見覚えがある。

「……紬!?!」

「紬さん!?!」

俺と夏海ちゃんは同時に大きな声を出してしまっていた。

直後に顔を見合わせて口をふさぐけど、時すでに遅し。皆に注目されてしまった。

「な、なんで紬さんが夏鳥の役をしてるんでしょう……?」

「わ、わからない。そんな素振りは全然……」

そう言いかけて、ふと思いついた。

そういえばここ数日、紬は用事があるとかでラジオ体操に来なかったり、野球の練習に遅れて来る時があった。

午前中のバトルトーナメントも見学にすら来てなかったし、もしかして、ずっと練習していたんだろうか。

「ふふ。紬、頑張っていたのよ」

声のした方を見ると、いつの間にか静久が立っていた。どうやら、静久は全部知ったうえで秘密にしていたようだ。

「お祭りの一週間前に寄合で決まったみたいだね。紬、すごく練習していたのよ」

「でもこう言うお役目って、それこそ伝統とか、血筋とか厳しそうだけど」

それこそ、やりたいと言ってできるものでもないはずだし。

「紬の夏鳥の役は、鳴瀬翁が推してくれたんだぞ」

「え、そうなの」

のみきがそう教えてくれた。あの人こそ、伝統とか血筋とか言いそうだけど。

「あの娘こそ、誰よりも島のことを知る、烏白島の生き字引……みたい
なことを会合で言っていたらしい。あの鳴瀬翁が冗談を言うとも思
えないのだが、その場の勢いで、今年の夏鳥の役は紬に決まったんだ」
それを本人抜きで決めてるところがすごい。酒の席じゃあるまい
し、さすが島の寄合だった。

事後報告を受けた紬が、むぎゆむぎゆ言いながら頭を抱えていると
ころまで想像できた。

「それにしても……」

当の紬は大勢の人に見られながらも、凜とした表情で舞を続けてい
る。見惚れてしまうほど、優雅な舞だった。

普段の紬を知っていればいるほど、別人のようだった。まるで、紬
であって、紬じゃないような。

「……まるで紬じゃないみたいだね」

振り向きながら夏海ちゃんに話かける。

「……えっ？」

……あれ。夏海ちゃん。もしかして、泣いてる？

「……あ、いえその、感動しちゃって。すみません」

言葉には出さなかったけど、俺の視線で気がついたのか、夏海ちゃ
んは手の甲でごしごしとその涙をぬぐう。

「まあ、気持ちはわからないでもないけど」

ズツ友の紬が頑張ってるんだし、感動する気持ちも理解できる。で
も、一瞬見えた夏海ちゃんの表情は……その言葉とは裏腹に、すごく
もの悲しいものに見えた気がした。

「ほらほら、良一たちが来たわよー」

その時、蒼にそう言われて視線を前に戻す。

すると、舞を終えて歩みを進める紬の後ろに船の形を模した神輿が
ついて出てきた。その上にはお堂のようなものもついているし、神輿
舟というやつかな。

それを担ぐのは、良一や天善といった、島の男たちだった。

「羽依里、お前は担がないのかよー」

「鷹原も、ほとんど住人みたいなものだろう」

ちょうど横を通りかかった時、そんなことを言われた。というか、神輿が出る事すら知らなかったんだけど。

「全く。担ぐ資格は十分にあるというのに、情けない奴だ」

そう言うのはしろはのじーさんだった。なんだろう、ふんどしにねじり鉢巻き。その逞しい肉体に、ものすごく似合っていた。

「すみません。来年は参加します」

「当然だ。ならば、今年はせいぜい、この島の祭りをその目に焼き付けるがいい！」

そう言うが早い、若い衆を先導して行った。あのじーさん、元氣すぎだろ。

……待てよ。来年やるってことは、俺もあの格好をしないとイケないって事なのかな。それはちよつと嫌なんだけど。

その後は、その20人ほどの行列がゆっくりと石段を下りて、町へ向かう。

昼間、葉留佳たちが設置した看板が順路を示しているみたいで、それに沿うようにたくさんの観光客が沿道に並んでいた。

道中でも、紬は立ち止まって演舞をし、その度に金髪が華麗に舞う。

一団は本当にゆっくりと海へ向かって進んでいった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺たちが漁港に辿り着いた時には、すっかり日も沈んでいて、その海には明かりがついた灯籠が無数に浮かべられていた。

「きれーなのですー」

「うわあ、これは壮観っすネ」

リトルバスターズの皆も、その幻想的な光景に思わず声をあげていた。

その幻想的な海を前にして、紬が最後の演舞を行った後、神輿船が

静かに海へ流される。

「あの船、本当に流しちゃうんですね」

「そうみたいだね。なんだか、ちよつともつたいないよね」

「後でちゃんと役所が回収する。心配はいらないぞ」

そう言うのはのみきだった。日中散々準備に走り回っていたこともあり、達成感に満ち溢れた表情をしていた。

やがて船は灯籠と一緒に、ゆっくりと沖へ向かって進んでいった。これで、全ての祭事は滞りなく終了したみたいだ。

簡単な片づけが行われる中、俺たちは紬を中心に集まっていた。

「ツムツム、きれいだったよー!」

「はい! 本当に綺麗でした!」

「まさか、紬が夏鳥の役をやるなんてねー」

紬が夏鳥の役をすることは、本当にのみきと静久以外は知らなかったらしい。その演舞を称賛する声と同じくらい、驚きの声があがっていた。

「むぎゆ、さぶらいずというやつです! 驚きましたか?」

「うん。すごく驚いたよ」

そりやもう、思わず声が出ちゃったくらいに。

「でも、凄いね紬、一週間くらいの練習であそこまで踊れるなんて」

「む。むぎゆー……」

恥ずかしそうに、衣装の袖で口元を隠していた。

「……昔はあれくらいは舞えないと、笑われてしまいましたから」

「え?」

「むぎゆ?」

なんだろう。今一瞬、紬だけど紬じゃない誰かがその場にいたような。

「なあ、紬ばかりじゃなく、俺たちの方も褒めてくれよー。頑張ったんだぜー?」

その時、ふんどし姿の良一と天善がこつちにやってきた。

「美しくないので駄目です」

西園さんと藍の声がハモっていた。まあ、気持ちはわからなくもないけど、ちよつと可哀想だった。

「……そうだ。こんな時ですまないが、皆に話があるんだ」

その時、恭介が手を挙げて、遠慮がちに発言していた。

「ちようど鳥白島チャーハンズの皆が揃っているようだから、明日の試合について話しておきたくてな」

そうだった。俺たちのチーム名は鳥白島チャーハンズだった。すっかり忘れていた。

「明日の試合だが、朝8時半から、いつものグラウンドでいいか？」

「構わないと思うよ。皆もそれでいいよね？」

俺は皆の意見を聞いてみる。誰も異議はないみたいだった。

「朝が早くて悪いな。帰りの船の都合上、明日はそのくらい余裕を持っておきたくてな」

恭介の気持ちもわかる。なにしろ大人数だし、あれだけ個性的なメンバーだし。どんなアクシデントが発生するかもわからないし。

「帰りの船……あ！ そうでした！ すみませーん！」

その時、夏海ちゃんが思い出したように、近くの役所の人に話しかけていた。

「今日の最終便って、何時になりますか？」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

役所の人に船の時間を聞いて、俺と夏海ちゃんはオッサンたちの見送りに港へ向かった。

俺たちが到着した時、ちようど最終便がやってきたところだったらしく、次々と観光客が乗り込んでいた。

そのタラップに近い所に、オッサンや早苗さん、岡崎さん一家の姿があった。

「ん、もしかして、見送りに来てくれたのか？」

俺たちの姿を見つけて、朋也さんがそう声をかけてくれた。

「明日の試合、頑張れよ。できたら見てやりたかったけど、仕事があったな」

続けて、申し訳なさそうにそう言ってくれた。大人の夏休みは短い。わかっていただけど、仕方がないことだ。

「いえ、朋也さんたちもお元気で」

「ああ、ありがとうな。良い島だし、また来るよ」

「汐ちゃんも、元気でね」

「うん。さようなら」

俺が朋也さんたちと別れのあいさつを交わしている間、夏海ちゃんは少し後ろの方でその様子を見ていた。見送りに行きましようって言ったのは夏海ちゃんのはずなんだけど、どうしたんだろう。

「……オッサン、先に乗ってるぞ」

「ああ」

その様子に何かを察したのか、岡崎さん一家と早苗さんの四人は一足先早く船へと乗り込んでいった。

その頃になると、船に乗り込む人はまばらになり、俺と夏海ちゃん、オッサンの三人だけが埠頭に残されていた。

「ほら夏海、こっちに來な」

三人だけになったのを見計らって、オッサンが夏海ちゃんを手招きする。それに応えるように、夏海ちゃんはゆっくりと歩み寄ってくる。

「明日の試合、頑張れよ」

「は、はいっ……」

オッサンが夏海ちゃんの肩に手を置いて、優しく言っていた。なんだかんだで、俺たちのチームの中でオッサンが一番気にかけていたのは夏海ちゃんだった気がする。

夏海ちゃんは必死に堪えてるけど、今にも泣き出しそうだ。たぶん、さつきまでは汐ちゃんもいたし、泣き顔を見られないように離れていたのかな。

「あー、俺様は子供の涙には弱えんだ。だから泣くな」

涙をこらえながら鼻をすすつてる夏海ちゃんを見かねてか、オッサンはポケットから四つ折りにした紙を取り出して、手渡す。

「……あの、これは？」

「俺様んとこの住所が書いてある。泣くほど心残りがあるなら、それを全部明日の試合にぶつけやがれ。それで、その試合結果を手紙で送ってこい」

「あ……」

「ただし、俺様は負けた試合の言い訳なんて興味ねえからな。手紙を送ってくるなら、勝利報告だけにしろ」

「わ、わかりました！ 絶対、絶対勝ちます！」

「おう。その意気だぜ」

笑顔になった夏海ちゃんの頭をぽんと撫でてから、オッサンは俺の方に向き直る。

「それとな、羽依里」

「え？」

……オッサンから初めて名前を呼ばれた気がする。

「お前らが組むバッテリーってのは、お互いの信頼関係が一番大事だ。明日の試合は、羽依里がしっかり夏海をリードしてやれ。負けんじやねえぞ」

「わかってるよ。オッサン、ありがとうな」

「ふん、礼を言われるほどのことはやってねえよ」

『宇都港行き最終便。間もなく出港いたします』

その時、乗船を急がせるアナウンスが流れた。

「……おっと。さすがに限界だな」

アナウンスが鳴り響く中、オッサンは急ぎタラップを渡っていく。

「……いい結果を期待してるぜ。元気だな」

「はい！ ありがとうございました！」

オッサンは俺たちに背を向けたまま、右手を軽く上げながら船内へと入っていった。

俺たちはその後、船が島から遠く離れるまで見送っていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

船を見送った後、俺たちはしろは食堂へ向かった。

「お祭りの夜なのに、しろはさんの食堂は開いてるんですか？」

「うん。俺たちやリトルバスターズの皆のために、少しの間だけ店を開けてくれてるらしいんだ」

「嬉しいです。すごくお腹空いてましたし」

その頃になると、夏海ちゃんはすっかりいつもの調子だった。

「しろはー」

「しろはさーん」

食堂の扉を開けて中に入ると『本日、トンカツ定食かアジの開き定食の二択です』と書かれた張り紙が目についた。

「あれ、今日はメニューが二種類あるんだ？」

「うん。本当はトンカツ定食だけだったんだけど、漁師さんからアジの開きをたくさん貰ったから、急遽追加したの」

カウンターに並んで座る真人と謙吾、それに小毬さんの三人にトンカツ定食を提供しながら、しろはがそう教えてくれた。

店内を見渡すと、カウンターの三人の他に、座敷の方にクドと佳奈多が座っていた。この二人はアジの開き定食を食べていた。

「クド、うまいもんだね」

「はい。おじーさまが日本通なので、教え込まれました」

クドは箸を使ってアジの小骨を上手に取っていた。すごく手慣れた感じだった。

「クドリヤフカ、しょうゆ取って」

「はい！ おしょうゆです！」

一方で、佳奈多がクドからしょうゆを取ってもらっていた。アジの開きってそれなりに塩味がついている気がするけど、物足りなかったのかな。

「羽依里たち、いつまでも人が食べるのを見てたら失礼だよ。早く座って」

「ああ、うん」

しろはにそう注意されて、俺たちはカウンター席に向かい、小毬さんの隣に並んで座る。

「ふたりとも、どっちの料理にする？」

「じゃあ、俺はトンカツ定食にしようかな」

「私はアジの開き定食にします！」

おしぼりを受けとりながら、各々の注文を済ます。食事が用意されるまでの間、おのずと同じカウンターに座る謙吾と真人のやり取りが気になった。

「なあ謙吾、あれ見てみろよ。あそこにあるの、クライストのサインじゃね？」

「ん？ どれだ？」

真人が食堂の一角を指さし、謙吾の注意がそちらに向く。その後、謙吾のトンカツ一切れを真人がかっさらっていった。

「サインなんて、どこにもないじゃないか」

「悪い、見間違いだったぜ」

その時、真人たちのやりとりを見ていた小毬さんが、こっそりと自分のトンカツを一切れ、謙吾の皿に移していた。まるで天使の所業だった。

「おい謙吾、あれはなんだ」

それで味を味を占めたのか、その後も同じやりとりが繰り返される。真人が謙吾の気をそらし、トンカツをかっさらう。その減った分を健気に小毬さんが補填する。

どうしよう。止めた方が良いだろうか。このままだと、小毬さんのトンカツがなくなってしまう。

「……ちよつと真人、謙吾のトンカツ取っちゃ駄目だよ。さつきから、ずっと見えてるんだからね」

そんなことを考えていると、しろはがジト目で真人の方を見ながらそう言っていた。カウンター越しのはずなんだけど、なんでしろはに

は見えるんだろう。

「え、というかこれ、食っても減らない魔法のカツじやなかったのか!？」

「わけのわからないこと言っていないで、食べたのと同じ数だけ、小毬に返してあげて。さもないと、今日の食事代は全部真人の筋肉で払ってもらおう?。」

「お、おう……。」

しろはに気圧されて、真人が素直に言うことを聞いていた。食べ物に関して、しろはも引かなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夕飯を堪能した後、加藤家に帰宅する。鏡子さんはまだ祭りの後片付けが終わらないのか、はては打ち上げに行っているのか、家には誰も居なかった。

手早く入浴を済ませた後、俺は自室で野球のメンバー表と向き合っていた。

明日はいよいよリトルバスターズとの試合だ。オッサンと約束した以上、良い勝負をしたい。

でも、明日の試合が終わるということは、リトルバスターズの皆との別れを意味する。

彼らと過ごしたのは、ほんの数日だったけど、ものすごく密度の濃い数日間だった気がする。

今日の夏海ちゃんじゃないけど、明日の別れの時、泣かずにいられるかな。

「……って、俺が暗くなってどうするんだ」

ぱしぱしと頬を叩いて、気合いを入れる。感傷的になる前に、明日の試合のことを考えなきや。

「できれば夜のうちに、打順を決めておきたいけど……。」

いくつかパターンは考えたけど、どうもパツとしない。

「うーん……」

悩んだ結果、俺は夏海ちゃんに相談することにした。

なんだかんだで、鳥白島チャーハンズ唯一の経験者だし。いいアドバイスをもらえるかもしれない。

「夏海ちゃん、まだ起きてる？」

俺は夏海ちゃんの部屋の前に行き、ふすま越しに声をかける。

「はい！ 起きてますよー！」

「入ってもいい？ 明日の試合のことで、ちょっと相談に乗って欲しいことがあるんだけど」

「いいですよ、どうぞー！」

許可をもらって部屋に入ると、夏海ちゃんは絵日記を書いていた。

「あ、今日も絵日記書いてたんだね」

確かこの島に来てすぐ、藍から手渡されたんだっけ。

「もちろんです。途中でやめたりなんかしたら、藍さんに何をされるかわからないですから」

夏海ちゃん、笑顔が引きつってるよ。やっぱり怖いのかな。

「それで、どうしたんですか？」

「明日の打順についてなんだけどさ。どうもうまくまとまらなくて……」

俺は自分の部屋から持ってきたメモを夏海ちゃんに見せる。

「そうですねー。やっぱり、一番は蒼さんじゃないでしょうか」

「え、蒼？」

俺の中では、天善か良一くらいにしようと思ってたんだけど。

「それじゃ、一番バッターを蒼にするとして、二番は？」

「二番はですねー……」

「うんうん」

その後、俺と夏海ちゃんは夜遅くまで打順表と向き合っていたのだった。

第三十六話 8月22日（前編）

「えっと……羽依里さーん、朝ですよー……？」

……朝。今日も夏海ちゃんの声で起こされる。

でも、いつもに比べて音量が控えめなような気がする。

それになんだか、いつもより声が近い。そして、下が硬い。

「……あれ」

目を開けてみると、畳の上だった。もしかして、布団を敷かず寝ちやつたのかな。

「おはようございます」

体を起こしてみると、すぐ目の前に夏海ちゃんがいた。

「えーっと、おはよう」

とりあえず挨拶は返したけど、イマイチ状況が把握できていない。夏海ちゃんの背後には大きなアクリイのぬいぐるみが見えるし、どうやらここは彼女の部屋みたいだ。

「ごめん、なんで夏海ちゃんの部屋で寝てるんだっけ……？」

「たぶん、これじゃないですか？」

そう言いながら、一枚の紙を俺に見せてくれた。確かこれ、打順表だ。

「……思い出した。夏海ちゃんと一緒に今日の試合の打順を考えて、完成と同時にそのまま寝ちゃったんだ」

完成したのは夜も遅かったし、たぶん、安心感と達成感で二人揃ってバツタリいっちゃったんだと思う。

「最後の方はどうやって決めたか記憶にないですけど、無事完成したみたいで良かったです！」

夏海ちゃんは笑顔だった。右の頬に思いつきり畳のあとがついてるけど、ここは黙っておこう。

「それじゃ鏡子さんがやって来る前に、起きて準備しようか」

「はいー」

そう言つて二人同時に立ち上がったその時、廊下を近づいてくる足音が聞こえた。

「……やばいー！」

俺はとつさにふすまの陰にへばりつくようにして隠れる。ここなら、入口からは死角になって見えないはずだ。

「え、どうしたんですか？」

「……夏海ちゃん、おはよう」

直後に部屋のふすまが開いて、鏡子さんが顔を覗かせた。

「お、おはようございませうー！」

思いつきり動揺していた。舌がもつれてるし。

「そろそろ起きないと。ラジオ体操に遅れるよ？」

「はい！ すぐに準備しますー！」

「今日は野球の試合もあるんだよね？ 皆で応援に行くから、頑張つてね」

「はい！ ありがとうございますー！」

そう言った後、ぴしやりとふすまが閉じられる。

「ふうー」

俺と夏海ちゃんは、ほとんど同時に安堵の声を漏らし、畳の上に座り込んでしまった。

……危なかった。また変な誤解を生んで、実家に電話されるところだった。

今のうちに自分の部屋に戻って、身支度を整えよう。

そう思って立ち上がった……その時。

「そうそう夏海ちゃん、今日のお昼なんだけど……」

何か言い忘れたことでもあったんだろうか。再びふすまが開いて、鏡子さんが顔を覗かせる。

「えーっと……」

そして、笑顔のまま固まってしまった。

「……とりあえず、お姉さんに電話してくるね」

そして、努めて冷静に居間へと向かっていった。自然すぎて、逆に怖い。

……でも、結局この流れになるのか。今日はうまく切り抜けられたと思っただけに！

踊りをビデオに撮られているのを知って、紬が奇声を発しながらビデオカメラを奪いに行っていた。

紬と藍はけっこう身長差があるし、さすがに奪えそうにはないけど。

「そういえば……」

俺はちよつと気になって、リトルバスターズが集まっている方を見ている。今日は試合の日だし、さすがの彼らもピリピリムード……。

「本日最後の筋肉アトラクションは、とっておきの筋肉フリーフォルだ！　いつくぜええー！」

「わーい！」

……そんなわけがなく、いつも以上にはしゃいでいた。まあ、その方が彼ららしいけど。

「はるちん・超・スーパ―・タービュランス・アターック！」

「うわー！　また負けたー！」

少し離れた場所では、葉留佳が子供たちとメンコ勝負をしていた。

「ふっふっふ。まだまだ青いですネ」

「青いってどういう意味だ？　はるちん、難しい言葉使うなよ。オレたち、子供なんだからさ」

「まだまだ私には勝てないってこと！　出直してこーい！」

「でもはるちん、超とスーパ―は同じ意味よ？　帰国子女の子が言ってるんだから、間違いないわ」

「う、うううるさいなー。そう言うセリフは、私に勝ってから言ってみな！」

葉留佳は大きく胸を張って、ご機嫌だった。うん。ものすごく、大人げない。

「よーし、今度はオレが相手だ！」

そこへ、なかなか体格のいい男の子がやってきた。あの子は力がありそうだ。

「ダイちゃん、がんばれー！」

「よーし、かかってこーい！　はるちんのメンコがそう簡単にひっくり返されるはずが」

「うりやー！ ししよー直伝！ 夜の蝶の舞！」

直後、ばしーんと良い音がして、葉留佳のメンコが宙を舞っていた。「えええ、うそー！ 夜のうちから油につけて、重さを増しておいたのに！」

「おいおい」

一人の女の子がツッコんでいた。それにしてもはるちん、思いつきり卑怯な手を使っていた。

「はるちゃんが負けたから、子供たちにコンペイトウあげるよー」
「わーい！」

そういう約束になっていたんだろうか、勝負が決まった直後に、小毬さんが子供たちにお菓子を配っていた。

……うん。今日もいつも通りの騒がしさだった。

「よーしお前らー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

やがてラジオ体操大好きさんがやって来て、ラジオ体操が始まった。今日も頑張ろう。

「……よーし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「ありがとうございますましたー！」

例によって独創的な、島のラジオ体操が終わった。相変わらず、ラジオは使わなかった。

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

その後、今日のスタンプとログボを受け取る。今日はくりまんじゅうだった。

「く、くりまんじゅう……」

ログボを受け取った夏海ちゃんは画然としていた。さすがに、あれはどうやってもチャーハンにできないよね……。

今の夏海ちゃんには下手に声をかけられないし、俺は自分のくりまんじゅうを食べながら、こっそりと夏海ちゃんのそばから離れた。

「ほら、この紬ちゃん表情とか最高ですよ」

「本当ね。凜々しいわ」

「うむ。普段の紬君はまず見せない表情だな。これ、写真にできないのか？」

適当にぶらぶらしていると、少し離れたところで、藍と静久、来ヶ谷さんの三人が顔をくっつけ合っていた。たぶん、紬のビデオを見るんだろう。

その証拠に、少し離れたところで紬がむぎゆむぎゆ言いながら頭を抱えていた。ビデオは俺もちよつと気になったけど、さすがにあの三人の間に割って入る勇氣はない。

「お前ら、お楽しみのところ悪いが、ちよつと集まってくれ。今日の試合についてだ」

そんな中、恭介は持ち前のリーダーシップで集合の指示を出していた。

「皆、今日の試合は8時半にグラウンドで行う。よろしく頼むな」

時間と場所は昨日も確認はしていたけど、再確認といったところだろうか。

「わかった。恭介、お手柔らかかをお願いするよ」

俺はそう言いながら歩み出て、恭介に握手を求めた。

「……残念だが、手は抜けないぞ？ あくまで真剣勝負だからな」

恭介は握手を返してくれながら、悪戯っぽく笑う。もちろん、こつちも手を抜いてもらおうなんて微塵も思っちゃいない。

「うむ。やるからには、我々も本気だぞ」

「鷹原さん、負けませんよー！」

来ヶ谷さんやクドも、やる気に満ち溢れていた。

「俺たちだって必死に練習してきたんだ。そう簡単には負けないぜ？」

「日頃の生活で培った島民の身体能力、なめてもらっちゃ困るわよー？」

良一や蒼も気合十分。どちらのチームもやる気に満ち溢れているみたいだった。良い勝負できるといいけど。

「楽しみにしてるぜ。それじゃ、また後でな」

そこまで話をした後、恭介はリトルバスターズの面々を引き連れて、神社から去っていった。

「夏海ちゃん、俺たちも帰ろうか」

「はい！」

そんな彼らを見送った後、俺たちも帰路に就いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里さん、朝ごはん、くりチャーハンでいいですか？」

加藤家に帰宅するなり、夏海ちゃんが笑顔でそう言ってきた。語呂は良いけど、くりまんじゅうだし。さすがに美味しくなさそうだ。

「夏海ちゃん、あのさ」

「くりチャーハンでいいですよね？」

だから笑顔で言わないで。お願い。

平静を装ってるけど、しれっとチャーハンモードだった。

「そ、そういえば、しろはが言ってたんだけど」

「はい？」

「チャーハンの極意は具材にあらず。塩コショウと卵、ネギのみチャーハンこそ、チャーハンの神髄だつて」

「え、しろはさんがそんなことを？」

……以前、似たようなことは言っていたけど、半分嘘だった。でも、くりチャーハンを回避するには、今はこれしか方法が思いつかない。

「今日はシンプルなチャーハンを作ってみてよ。夏海ちゃんのチャーハンが、しろはのチャーハンにどれだけ近づいているか、俺が判定してあげるからさ」

「……わかりました！ それじゃあ今日は、普通のチャーハンに挑戦にしてみます！」

夏海ちゃんはそう意気込んで、俺にくりまんじゅうを手渡してくれ

た。

いいぞ。イチかバチかだったけど、しろはの力でチャーハンモードに打ち勝てた気がする。

「じゃあ、今日は具材の代わりに、魂を入れますね!」

そう言いながら、エプロンをつけて台所へと消えていった。今日のチャーハンは、ソウルチャーハンとでも名付けようかな。

夏海ちゃんを見送った後、俺は特にできることもないので、居間で待つことにした。

「おはようございまーす! お届け物でーす!」

……その時、玄関から元気のいい声がした。出てみると、この島では珍しいケロケロ便だった。

「鷹原羽依里さん宅はここですよね? ケロケロクール便です! こちらにハンコがサインをお願いしまーす!」

俺は配達員に促されるがままにサインをして、ずっしりと重い荷物を受け取る。住所は加藤家になってたけど、確かに俺宛だった。

「ありがとうございます!」

「どうも、ごくろうさまでした!」

配達員を見送った後、俺は荷物の発送元をしてみる。これ、どこかの会社っぽいんだけど。

「……あれ、誰か来てたんですか?」

直後、夏海ちゃんがチャーハンの乗ったおぼんを持ってやってきた。早い。もう完成したのかな。

「うん、俺宛の荷物みたいなんだけど……お腹空いてるし、ご飯食べてから開けることにするよ!」

「はい! 冷めないうちに、味の判定をお願いします!」

……そうだった。今日はそういうことになってたんだ。荷物のおかげで、すっかり頭から飛んでいた。

「さあ羽依里さん、食べてみてください!」

とん、と俺の前にできたてのチャーハンが置かれる。俺の向かいに

座る夏海ちゃんは自分のチャーハンには手を付けず、俺の方を食い入るように見つめている。

「それじゃ、いただきます」

その視線に気圧されながら、ソウルチャーハンをいただく。卵と塩コショウ、そしてネギだけの、本当にシンプルなチャーハンだった。

「……ど、どうですか?」

「うん、美味しい」

夏海ちゃんのチャーハン、特に具材を入れなくても十分美味しいじゃない。

「し、しろはさんのと比べてどうですか?」

「……ごめん。比べさせてもらうと、まだしろの方が美味しいよ。しろはを90点とすると、夏海ちゃんのは82点くらい」

「そ、そうですか……その8点の差、すごく大きそうですね」

がつくりと肩を落としてしまった。下を向きながら、しろはさんには羽依里さんへの愛情という最強の調味料がありますもんね。とか呟いている。

「でも、十分美味しいと思うよ。さすがだね」

「ありがとうございます……」

そうフォロースると、夏海ちゃんは何とも言えない顔で自分の作ったチャーハンをほおぼりはじめた。

夏休みのうちに、もう一度夏海ちゃんにチャーハンの作り方を指導してあげられないか、しろはに聞いてみようかな。

朝食を終えた後、さっそく荷物を開封してみる。

「何が入ってるんですかね?」

洗い物を終えた夏海ちゃんも一緒になって、箱の中を覗き込む。中には、冷凍されたお肉の塊がいくつも入っていた。

「え、お肉ですか?」

「みたいだね……でも、なんでお肉が?」

不思議に思っていると、箱の中に一枚の紙を発見した。

「……高級バーベキューセット、ご当選のお知らせ」

俺は紙に書かれていた内容をそのまま読んでみた。

そう言えば何ヶ月か前、雑誌の懸賞に応募したんだっけ。

確か、しろはの持っていた雑誌に懸賞付きのクロスワードパズルが載っていて、それを二人で解いたんだ。

その賞品の中に、高級バーベキューセットがあった記憶がある。複数の賞品の中からランダムに当たる仕様だったし、何が当たるのかわからなかったけど。

しろはは『懸賞なんて、どうせ当たらないよ』と言っていたけど、俺は特賞の熱海温泉ペア旅行が当たって欲しくて、たまたま加藤家の住所を書いて、応募したんだ。

「懸賞って当たるものなんですね。びっくりしました」

夏海ちゃんが目を輝かせていた。俺も当たるなんて思わなかったし。

「でも、これだけたくさんのお肉、ここの冷蔵庫に入りますかね？」

「うーん、ちよつと厳しいかもしれないね」

俺は夏海ちゃんと揃って、台所の方に視線を送る。加藤家の冷蔵庫は、ほとんど調味料の類しか入ってないんだけど、それでもこれだけのお肉が入るほどのスペースはないと思う。

かと言って、このままだとせつかくのお肉が腐ってしまう。何かいい手段はないものか。

「……あ、そうだ」

その時、良いこと思いついた。俺は電話を手に取って、しろはに電話をかける。

「……もしもし」

「ひっ!?!」

……数回のコール音の後、電話に出たのはしろはのじーさんだった。そういえば、祭りの翌日も漁は禁止なんだっけ。そりゃ、じーさんも家にいるわけだ。

油断していたわけじゃないけど、耳元であの声を聞くと、さすがにビビる。

「お、おはようございます。羽依里ですが、しろはは？」

「しろははか。少し待っている」

「ごっこん、と受話器を置く音がした。続けて、少し遠くでジーさんがしろはを呼ぶ声がする。」

「……しろは！ 電話だぞ。しろは！」

「い、今着替えてるから、もう少し待って！」

「なんか電話の向こうから、そんな声が聞こえてきた。しろははラジカステロに出来ないし、今くらいの時間に起きてるんだろうか。」

「……ごめん、おまたせ」

「しばらくして、しろはが電話口に出た。」

「ああ、着替えてたんならしょうがないよ」

「え、もしかして、聞こえてた？」

「うん。ぼっちり」

「……」

「なんか急に黙ってしまった。電話の向こうで、しろはが赤くなっているのが容易に想像できる。」

「そ、それで、朝早くからどうしたの？ 電話なんて珍しいよね」

「ああ、実はさ……」

「俺はしろはに、以前応募した懸賞で大量の肉が当たったことを伝えた。」

「……それで、食堂の冷蔵庫を貸してほしいの？」

「そう。これから持って行くから、お願いできないかな」

「いいよ。でも、冷蔵庫は食堂でも使うし、そんなに長い間は入れておけないからね？」

「構わないよ。実はもう一つ、考えがあるんだ」

「考えて？」

「それは食堂で話すよ。とりあえず、持っていくから」

「わかった。気をつけてね」

「うん。ありがとう」

「そこで電話を切る。そのまま壁にかけられた時計を見ると、7時過

ぎ。まだ試合までは余裕がある。

「夏海ちゃん、今からこのお肉を持って、しろはの食堂に行ってくるから」

「食堂ですか？」

「うん。しろはが食堂の冷蔵庫を貸してくれるらしいんだ」

「そうなんですネ。あそこの冷蔵庫、大きいですもんね」

「少し用事もあるし、夏海ちゃんは打順表を持って、先に小学校に行つてほしいんだけど」

「わかりました！ 小学校で待つてますね！」

「うん。それじゃ、また後でね」

俺は夏海ちゃんにそう告げて、大量のお肉が入った段ボールとバイクのキーを持って、表のガレージへと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里、おまたせ」

食堂の前で待つていると、しろはがやってきた。彼女は体操服姿で、髪をポニーテールに纏めている。どうやら、この後すぐに野球の試合に行けるように、準備をしてくれてくれたらしい。

「はい。どうぞ」

そのまま食堂の鍵を開けてもらい、店内に上がらせてもらう。ちなみに、しろはが持つてている鍵には、以前のデートの時に一緒に買った鳥のキーホルダーがついていた。

俺のバイクの鍵にも同じものが付いているのを思い出す。自分からペアグッズが欲しいとか言っておきながら、実際に持つてみるとすごく照れくさかった。

そんなことを考えながら店内を歩き、カウンターの上に段ボールを置く。

「それで、当たったお肉つてのがこれなんだけど」

俺は箱の中から肉の塊を取り出して、カウンターの上に並べていく。

「……すごい量だね。良いお肉みたいだけど」

しろはそのうちの一つを持ち上げながら、そう言っていた。俺にはよくわからないけど、しろが見れば、品質の良さは一目瞭然らしい。

「でも、あの懸賞……羽依里、こっそり応募してたんだね」

「あー、うん……俺としては、特賞の熱海温泉ペア旅行が当たって欲しかったんだけどさ」

「ぶっ」

わざと聞こえるような声で言ってみた。直後、動揺したしろはが持っていたお肉を落としてしまっていた。まだ梱包されていて、本当に良かった。

「あ、朝から何を言ってるの……」

落としてしまった肉を慌てて拾いながら、しろは顔を赤くしていた。

「いや、せっかくだから二人つきりで旅行とかしてみたくて」

「は、羽依里はいつも旅行で島に来てるでしょ。それより、電話で言っただももう一つの考えってなに？」

「え？ ああ……このお肉を使って、お昼にお別れバーベキューをしたらどうかかって」

「お別れ、バーベキュー？」

「そう。今日の試合が終わった後、島の皆と、リトルバスターズの皆でさ。お別れのバーベキューをしたらどうかね」

「……あ、それはいい考えかもね」

「だろ？」

最後に親睦も深められるし、沢山のお肉も処理できるし、一石二鳥だと思う。

「それじゃ、さっそく準備しないとね。場所は食堂の前を使ったらいいよ」

どうやら、しろはも乗り気になってくれたらしい。さっとエプロン

をつけて、棚から調理道具を取り出し始める。

「私がお肉や野菜の下ごしらえをしておくから、羽依里は道具の用意をお願い」

「その道具はどこにあるんだ？」

「網やバーベキューコンロは奥の倉庫にあるよ。表に出して、軽く水洗いしておいてね」

「わかった。倉庫だな」

俺はしろはから指示を受けて、食堂奥の倉庫へと向かう。入ってすぐのところコンロが置かれていた。そこまで埃もかぶっていないし、定期的に使っている感じだ。しろはの言う通り、軽く水洗いすれば問題なく使えそうだった。

「羽依里、できるだけ急いでね。野球の試合に間に合わなくなっちゃったら、元も子もないよ？」

「そ、そうだよな。急ぐ」

その後は二手に分かれてバーベキューの準備をした。

でも、俺は勝手がわからない食堂の倉庫の中で、炭を探すのに手間取ってしまった、結局は手際良く食材の下準備を終えたしろはにも手伝ってもらったことになってしまった。

「……うん。ひとまず、これで準備完了だね」

椅子や食器の類は後々用意するとして、なんとか試合前にあらかたの準備を終えることができた。

その直後に時計を見ると、8時15分。そろそろ時間的にやばい。

「しろは、バイクの後ろ乗って。そろそろ試合に間に合わなくなるよ」

「あ、本当だね。それじゃ、お願いしようかな」

「うん。ヘルメット、しっかり被って」

「うん」

その後はしろはと一緒に、急いで小学校へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

小学校の正面前にバイクを止めて、しろはとグラウンドへ向かう。

「……ねえ羽依里、なんだか歓声が聞こえるんだけど」

「え、歓声？」

……耳を澄ましてみると、しろはの言う通り、どこからか声が聞こえる。しかもそれは、グラウンドに近づくにつれて大きくなってくる気がした。

やがてグラウンドに到着した俺たちは、その目を疑う。

「え、なにこれ」

そこには、広いグラウンドをぐるっと囲むように特設の観客席が設けられていた。もしかして、昨日ここで作業をしていた人たちって、これを作っていてくれてたのかな。てつきり祭りの準備だとばかり思っていたけど。

「あ、羽依里さんにしろはさんー！」

俺たちの姿を見つけて、夏海ちゃんが興奮気味に走ってきた。

「夏海ちゃん、おまたせ。すごい歓声だね」

「はい、私も驚いています！ それに、あの旗を見てください！ すごいですよー！」

「え、旗？」

夏海ちゃんが指差す方を見してみる。ほとんど埋まっている観客席の中で、たくさんの旗が揺れていた。

中には漁船で使う大漁旗もあったけど、そのほとんどはひげ猫団の旗だった。色も形もそれぞれ違う。どうやら、島の皆が俺たちを応援するために手作りしてくれたみたいだ。

「そう言えば新聞紙ブレード大会の時、ひげ猫をチームの旗にしていたっけ」

「うん。その話が広まっちゃったんじゃないかな」

ニコニコ顔の夏海ちゃんとは裏腹に、俺としろはは呆気に取られてその旗を見ていた。昨日今日の話なのに、島民の団結力すごい。

「……立派な観客席だな。ちようどいい、打球があそこを超えたらホームランというのはどうだろう?」

背後から声がしたので振り返ると、恭介を筆頭にリトルバスターズのメンバーが集まっていた。

確かに、あれより向こうにボールを飛ばされたら拾いに行くのは無理そうだ。

「うん。それでいいよ。後で他のメンバーにも伝えておくから」

「ああ、頼んだぜ」

「あ、そうだ恭介たち、試合の前に一つ話があるんだけどさ」

「ん? どうした?」

「筋肉を分けて欲しいってんなら、今日は他をあたってくれよ?」

「いや、残念ながら筋肉は必要ないからさ」

真人は本当にブレないなあ。

「この試合が終わった後、食堂の前でバーベキューしようと思ってるんだけど、リトルバスターズの皆も一緒にどうかな」

「ほう。さしずめ、我々の送別会と言ったところか」

「えっと、まあ、そんなところ」

さすが来ヶ谷さんは察しが良い。すぐに俺たちの意図に気づいてくれた。

「そういうことなら、参加しないわけにはいかないな」

恭介がそう言い、リトルバスターズのメンバーもそれに同調してくれる。

「でも、試合後のバーベキューを楽しむためには、まずはこの、とてつもないアウエーゲームを乗り切らないといけないわけですネ」

無数のひげ猫の旗が振られる観客席を見ながら、葉留佳がそう言っていた。確かに、リトルバスターズにしてみればプレーしにくいことこの上ないかもしれない。

「まあいいじゃない。アウエーのほうが燃えるわよ」

そう言うのは佳奈多だった。なんとなくくだけど、この人は逆境に強そうだ。

それにしても『必勝！ 鳥白島チャーハンズ！ 具材のごとく、魂を熱く焦がせ！』みたいな横断幕まで見えるし。さすがにやり過ぎじゃないだろうか。

「……すごいですねこれ。何のお祭り会場ですか」

「試合のこと、島中で噂になってたみたいだけど……ここまでやってくれるなんてねー」

「島民にしてみれば、滅多にないイベントだしな。気合いが入ってるんだろ」

「大方、昨日の祭りの続きみたいにしてるのかもな」

そう話をしながら、空門姉妹や良一、天善がやってきた。予想外の状況に、皆して苦笑いを浮かべている。

「すごいよなこれ。すごいパワーをもらえる気はするけど」

『……あー。あー。ただいまマイクのテスト中』

合流した四人と話をしていると、不意にのみきの声が聞こえてきた。

『ライト方向の観客席、聞こえるか？ 聞こえたら手を振ってくれ』

そしてその言葉に応えるように、ライト方向の観客たちが一斉に手を振っていた。どうやら、感度も良好みたいだ。

「……もしかして、放送機器まで入ってるの？」

グラウンドの隅に小さなテントが出ていて、そこにのみきと西園さんが座っていた。どうやらあの二人が司会を務めてくれるらしい。

「まあ、放送機器は運動会とかでよく使うし、のみきも島内放送してるから、得意なんじゃないの？」

しろはがそう教えてくれた。こういう小さな島だと、運動会も島を上げて盛り上げるって言うけど。

「鳥白島チャーハンズ、頑張れー！」

「応援してるぜー！」

……この島民の一体感を見るに、間違いなさそうだ。

「間に合ったー!」

「さすがシズクです! おっぱいパワーです!」

続いて、賑やかな声がした。見ると鷗と紬、そして静久がグラウンドにやってきていた。これで全員集合だ。

「スーツケースを押すなんて貴重な体験、させてもらえて嬉しいわ……」

静久はそう言いながら、肩で息をしていた。見た感じ、鷗と紬をスーツケースに乗せて、それを押してきたみたいだ。おかげで遅刻はしなかったみたいだけど。静久、大丈夫かな。

「皆に渡したいものがあるの!」

「あるんですよ!」

そんな静久をよそに、鷗と紬は手に持った何かを俺たちに配り始めた。

「鷗、これなに?」

「鳥白島チャーハンズของทีมキャップだよ!」

「え、チームキャップ?」

言われてから、よく見てみると……正面に手書きのひげ猫があらわれた、オレンジ色の帽子だった。つまり、これを試合中に被って欲しいということだろうか。

「全員分、ほとんど徹夜で作ったんだよ!」

「はい! 実質2時間くらいしか寝てません!」

三人とも、よく見たら目の下に少しくまがあるような気がする。皆のために睡眠時間を削ってまで、この帽子を作ってくれたらしい。

「ありがとう。使わせてもらおうよ」

鷗たちが作ってくれた帽子を、全員で被る。なんだかこれだけで一体感が増した気がする。

「そうだ。全員集まったところで話があるんだけどさ……」

俺は皆が揃ったタイミングで、ホームランのルールや、試合後のバーベキューの件を伝えた。予想はしていたけど、皆快諾してくれ

た。

『おーい、そろそろ試合を始めるぞ。参加選手の皆は本塁周辺に集合してくれ』

夏海ちゃんに持ってきてもらった打順表を皆で見ながら最終確認をしていると、のみきからそう放送がかかった。俺たちは指示された通り、ホームベースに集合する。

集まってみると、そこには対戦相手のリトルバスターズや西園さん、のみきの他に、見たことのない人が4人並んでいた。

「えっとのみき、この人たちは……？」

「紹介しよう。今日の試合を担当してくれる審判団だ。右から順に、球審の斎藤さん、一塁塁審の斎藤さん、二塁塁審の斎藤さん、三塁塁審の斎藤さんだ」

え、この人たち、全員同じ苗字なのか。偶然にも程がある。

「この斎藤さんたちはかつて、あの甲子園で試合を裁いた経験がある、凄い人たちなんだぞ」

甲子園っていうくらいだから、凄いことなんだと思う。公正で優秀な審判がいるのは良いことだ。

「それでは、試合を始める前にルールの確認をしておくー！」

球審の斎藤さんが前に歩み出て、試合のレギュレーションが確認された。

それによると、今日の試合は基本5回まで。5回終了時点で同点だった場合、最大7回までの延長戦を行う。それでも決着がつかない場合は、引き分けになるらしい。

そして3回以後、後攻チームの攻撃が終了した時点で7点以上の差が開いていた場合、コールドゲームとなり、そこで試合終了になるとのことだった。

また、夏海ちゃんのカーボンバット使用や、俺たちの守りの際に打球が鷗のスーツケースに当たった場合アウトになること、鷗の走塁時はスーツケースの帯同可など、特別ルールの取り決めがされた。

この辺りは小学生の夏海ちゃんや、ハンデのある嶋に対する救済措置として了承されたらしい。

「そして今日の試合は、一部島ルールが適応される。それについては、その都度説明する。うまうー」

二墨塁審の斉藤さんがそう言っていた。でも、島ルールって何だろう。少し気になったけど、今聞くのは野暮な気がした。

ルール確認が終わり、俺は恭介と打順表を交換する。それによると、各チームの打順やポジションは次のようになった。

■リトルバスターズ

- 1：来ヶ谷唯湖（ショート）
- 2：棗恭介（ライト）
- 3：直枝理樹（キャッチャー）
- 4：宮沢謙吾（ファースト）
- 5：二木佳奈多（セカンド）
- 6：井ノ原真人（サード）
- 7：三枝葉留佳（センター）
- 8：能美クドリヤフカ（レフト）
- 9：棗鈴（ピッチャー）

控え選手：神北小毬

実況：西園美魚

■鳥白島チャーハンズ

- 1：空門蒼（ファースト）
- 2：空門藍（セカンド）
- 3：三谷良一（センター）
- 4：久島鷗（ライト）
- 5：鳴瀬しろは（サード）
- 6：鷹原羽依里（キャッチャー）
- 7：加納天善（ショート）
- 8：紬・ヴェンダース（レフト）

9：岬夏海（ピッチャー）

控え選手：水織静久

控え選手兼実況：野村美希

大方の予想通り、リトルバスターズは一発を狙えるメンバーが上位を固めてきている。

俺たちは一発を狙える選手は少ないけど、打線の繋がりには自信がある。どうやって鈴を打ち崩すかが勝負の鍵になりそうだ。

また、同時にジャンケンで先攻後攻も決められ、俺たちは後攻めになつた。

「夏海ちゃん、リラックスして！」

……試合が始まるまでの僅かな時間を使って、俺と夏海ちゃんは最後の投球練習をしていた。

試合直前の緊張感。スポーツは違えど、水泳のそれと同じだった。マウンドから投球練習をする夏海ちゃんからも、緊張が伝わってくる。

ちなみに投球練習をしている間、放送で各ポジションの選手が紹介されていた。まんま高校野球だった。

「……それじゃ皆、頑張ろう！」

「おー！ー！」

最後に皆で円陣を組んで、気合いを入れる。この気持ちの昂ぶり、部活をやめて以来、本当に久しぶりかもしれない。

「……相変わらず、素晴らしい団結力だな」

円陣が解かれると同時に、恭介からまっすぐな言葉がかけられた。

「……ああ、最高の仲間達だからさ」

「俺たちリトルバスターズだって最高のチームだ。良い勝負をしようぜ」

恭介はそう言って、軽く右手をあげると一塁側のベンチへと歩いていった。

……俺の失言に端を発した、リトルバスターズとの交流。

僅か数日間だったけど、試合を目標に島の皆と野球の練習をして、絆がより一層深まった気がする。

今日はその集大成だ。絶対に負けたくない、心から思った。

「それでは試合を始める。全員、整列！」

審判団と共に並んであいさつを交わした後、俺たちはグラウンドに散る。いよいよ試合が始まる。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「プレイボール！」

全員が各ポジションにつき、球審の斉藤さんから試合開始の宣言がされる。

『一回の表、リトルバスターズの攻撃です。1番バッターは来ヶ谷さんです』

西園さんの声がグラウンドに響く。同時に、来ヶ谷さんが打席に立った。

「さて、お手並み拝見と行こうか」

来ヶ谷さんはどこか余裕のある表情で夏海ちゃんを見る。夏海ちゃん、落ち着いて行こう。

「……えいー！」

夏海ちゃんの初球はフォーク。来ヶ谷さんはバットを振ることなく見逃す。判定はボールだった。

「えいー！」

その後の二球目、三球目とギリギリ決まって、ツーストライクと追

い込んだ。

「ほう。なかなかのコントロールだな」

「(……夏海ちゃん、ここはもう一回外そう)」

俺は夏海ちゃんへそうサインを出して、グローブを外側に構える。

「フ……甘いぞ」

しかし、来ヶ谷さんはその球筋を見切って、一塁方向へ流し打つ。ライナー性の強い当たりだった。

「うりやあつー！」

しかし、そのボールをファーストの蒼が横つ飛びで押さえる。そのまますぐに一塁へ戻ってベースを踏む。これでワンアウトだ。

『おお、試合開始早々、ファインプレーだな』

「さすがだ蒼、助かった！」

「これくらい、どーってことないわよー！」

泥だらけになりながら、右手を挙げてくれる。

「いいぞ、蒼ちゃん！」

いきなりの好プレーに観客が沸く。

「うわ、なんかはずかしーわね……」

「……へえ、予想はしていたが、やっぱり一塁は守りが固そうだな」

そう言いながら、2番バッターの恭介が出てきた。

『続くバッターは恭介さんです。彼もなかなかの強打者ですよ』

「西園のやつ、勝手に人の情報をばらさないでほしいもんだな……」

……そんな話をしながらも、恭介はボールをよく見ている。三球投げて、取れたストライクは一つだけだった。

「……よし、そこだつ！」

続く四球目を狙われた。恭介が打ったボールはショートを守る天善の頭上を超え、リトルバスターズにチーム初ヒットをもたらす。

「カノーさん、行きますよー！」

捕球した袖から天善を経由して、恭介のいる一塁へとボールが中継される。アウトにこそできなかったけど、球筋も安定しているし、練習の成果が出ていると思う。

『最初のアウトは取れたものの、続く恭介氏にヒットを許してしまっ

たな』

『シングルヒットですし、まだ大きなピンチではないですよ。続くバッターは3番、直枝さんです』

「うーん、さすが恭介は上手だなあ……」

恭介に続いて、理樹が打席に立つ。悪いけど、彼にそこまで強打者のイメージはない。どうして3番打者なんだろうか。

「よし理樹、ここはバントだ！」

その時、恭介が一塁からそう指示を出していた。草野球だから、誰かが指示役を担うのは当然なんだけど、その手の指示って、もつとこっそりやるもんじゃなかったっけ。

「たあっ！」

その後、理樹は夏海ちゃんがわざと外したナツクルを上手にバントしていた。

俺は前方に転がったボールを捕球した後、一瞬二塁を見る。恭介は足が速いし、これは二塁を刺すのは無理っぽい。

「いくぞ、蒼！」

安全策でそのまま一塁へ送球せざるをえなかった。理樹をアウトにして、これでツーアウトになったけど、得点圏にランナーを進められてしまった。

『リトルバスターズは一打先制のチャンスだな』

『はい。続くバッターはリトルバスターズが誇る4番、宮沢さんです』

司会の二人が話す通り、ここで満を持して4番バッターの登場だ。

謙吾は元剣道部ということもあって、腕っぷしも強そうだ。

「悪いが、連戦連勝の男だぞ」

その言葉に偽りはなく、打席に立っただけでも、すごい威圧感だった。あの真っ赤なリトルバスターズジャンパーのせいもあるかもだけど。

「うう……」

そんな謙吾に気圧されてしまったのか、夏海ちゃんが投じた球は二球続けてボール判定だった。

「(夏海ちゃん、ここは外角ギリギリにナツクルを投げよう)」

そう指示を出して、外にミットを構える。

「よし、もらった！　メーローン！」

しかしその三球目を狙われた。かろうじて芯で捕えられなかったらしく、そこまで高くは飛ばなかったけど、ボールの勢いがすごい。

一、二塁間を守る空門姉妹の間を抜けて、ライト方向へ高速で転がっていく。これはやばい。長打コースだ。

「よし、さすがだ謙吾！」

悠々と三塁を回り、ホームベースへ走り込んでくる恭介を為す術なく見ていた……その時。

ぼすつと音がして、ライトを転がっていたボールが鷗のスーツケースに当たった。

『特別ルールにより、今の打球はアウトになります』

「ええーっ！？」

西園さんが放送でそう言うと同時に、理樹がベンチで大きな声を上げていた。無理もない。普通ならツーベースヒットは固い打球だし。

「スリーアウト！　チェンジ！」

その結果を受け、球審の斉藤さんが攻守交代を宣言する。

「無念っ……」

「なんてこった。アンラッキーだったぜ」

謙吾と恭介はやるせない顔をしながら、ベンチへと下がっていった。なんにしても、助かった。

		1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0					0	
鳥白島チャーハンズ	—					0	

『鳥白島チャーハンズ、立ち上がりには失点のピンチを迎えましたが、スーツケースによって救われました』

『まったく。スーツケース様々だぞ』

そんな実況を聞きながら、俺たちはベンチに集まる。

「鷗さん、ありがとうございました！」

「いやいやー、なっちゃん、気にしないで良いよー」

結果的にチームのピンチを救うことになった鷗は、その大きな胸を張っていた。

「でも鷗ちゃん、ボールがライト方向へ転がっていった時、ひえー！とか言いながら、スーツケースの陰に隠れてませんでした？」

そんな鷗を、セカンドを守っていた藍がジト目で見ていた。

「そ、それはその、結果オーライということで！」

……うん。ボールがスーツケースに当たってくれて本当に良かった。

なんにしても、初回の攻撃は無失点で切り抜けられたわけだし。ベンチに座る夏海ちゃんの顔にも、安堵の表情が見て取れる。

「それじゃあ、今度は俺たちの攻撃だ。トップバッターの蒼、任せたぞ」

「切り込み隊長つてやつねー。頑張ってくるわよー」

蒼はバットを手に、打席へと向かっていった。なんとも頼もしい背中だった。

『一回の裏、鳥白島チャーハンズの攻撃だ。先頭打者は蒼だな』

実況ののみきがそう言い、蒼がバッターボックスに立つ。同時に、観客席から歓声が巻き起こる。

「それじゃあ皆、しまつていこー！」

一方で、キャッチャーの理樹がリトルバスターズの皆を鼓舞していた。

「蒼ちゃん、頑張ってください」

先制攻撃を仕掛けるために、俺たちの中で一番身体能力の高い双子を打順の頭に並べて配置したんだ。早めに出塁して欲しいところだけど。

「よし、いくぞっ……てりやつ！」

鈴が振りかぶって、第一球。

「……ストライク！」

「え、ちよつと」

蒼は驚愕の表情でボールを見送る。それしかできないくらいに、鈴の球が速かった。

あれは、昨日一緒に練習した時よりボールが速い気がする。

「ねえ鈴、昨日よりボール速くない？　もしかして、実力を隠してた？」

思わず、蒼がそう聞いていた。

「別に隠してたわけじゃない。今日は調子が良いんだ」

キャッチャーの理樹からの返球を受け取りながら、鈴はあつけらかんと言う。もしかして、昨日俺たち相手に投げたのが、いい投球練習になったんだろうか。

「続けていくぞっ……てりやっ！」

……二球目は外れたけど、三球目はまたストライクだった。蒼はあつという間に追い込まれてしまった。

「こ、このー！」

続いて投げられた四球目を狙ってバットを振るけど、空振りだった。オッサンほどじゃないけど、すごく落ちるフォークだった。

「ストライク！　バッターアウト！」

「うう、悔しい……」

三振を喫した蒼が肩を落としながらベンチへと下がってくる。想像以上の鈴の投球に、観客席からもどよめきが起こっている。

「カーブ、スライダー、フォーク。どれもすごい球威なんですけど」

本気の鈴を見て、夏海ちゃんはかなりのショックを受けてるみたいだった。

『続くバッターは2番。藍だな』

「蒼ちゃん、仇は取りますよ」

蒼が続いて、藍が打席に立つ。彼女も島では身体能力が高い方だ。練習でも常に結果を出していた印象があるし、期待したい。

「いくぞ、あい。てりやっ！」

……一球目はストライクゾーンから外に逃げていく誘い球。藍はこれを見送る。ボール。

「ていつー！」

続く二球目。真ん中近くに飛んできたストレートを狙い打つ。

「なにいつ!?!」

ライナー性の当たりが三塁方向に飛ぶ。よし、このまま抜ければ一気に長打だ。

「フ、甘いぞ」

しかし、ショートを守る来ヶ谷さんがノーバウンドで捕球していた。これでツーアウトになってしまった。湧き上がった歓声が一瞬でため息へと変わる。

『く、来ヶ谷氏の守備力もかなりのものだな……やすやすと捕球しているように見えるが、あれは難しいぞ』

のみきの声も動揺していた。くそ、今のは絶対ヒットになったと思っただのに。

「蒼ちゃん、ごめんなさい……」

蒼と同じように肩を落とし、藍がベンチに戻ってきた。こういう時も、やっぱり双子だった。

『鳥白島チャーハンズは二者連続で凡退に終わってしまいました。続く3番バッターは三谷さんです』

「よしし藍、ここは男の俺が目にももの見せてやるぜ!」

西園さんに名前を呼ばれた良一が、これみよがしに藍を見た後、意気揚々と打席に向かっていく。良一、頼んだぞ。

「しねっ!」

「……!」

しかし、頼みの良一も鈴の剛速球の前に、固まっていた。

「なあ……これ、女子が投げるボールじゃねーんだけど」

「そんなことは痛いほどわかってる。なんとかしてくれ。男なんだから」

俺は半分析するような気持ちで良一にそう告げる。そうこうしている間に、もうツーストライクと追い込まれていた。

「くそっ……おりゃあっ!」

良一はなんとかバットにボールを当てるけど……大きく打ち上げてしまった。

「よしきた」

その内野フライをファーストの謙吾が捕球して、スリーアウト。まさかの三者凡退だった。

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	—				0
鳥白島チャーハンズ	0					0

『鳥白島チャーハンズ、初回は三者凡退に終わりました』

『いや、鈴がすごいというのを知っていたが、正直ここまでとは。私も驚いている』

『鈴さんはこの島に来てから、全くと言って良いほど練習をしていなかったはずですが』

『そ、それであの投球なのか？ 恐ろしいな……』

解説の二人の会話が響く中、俺たちはほとんど休憩することなく、守備位置につく。

『それでは二回の表。リトルバスターズの攻撃です。迎えるバッターは5番、二木さんですね』

『夏海には悪いけど、思いつきり強振させてもらうから』

佳奈多はそう言ってバットを構える。彼女も元剣道部という話だし、新聞紙ブレード大会の時を思い出すと、来ヶ谷さんと謙吾の間みたいなイメージだ。

「(夏海ちゃん、ここは低めに集めよう)」

俺はそう狙いを伝えて、ミットを低めに構える。夏海ちゃんも頷いてくれるし、この作戦で行くしかない。

「えいー」

一球目はかんでしまったのか、ワンバンしてしまった。俺も何とか捕球する。まずはボールだった。

続く二球目。今度はうまくミットに収まったけど、また外れてしまった。

「……えいー!」

夏海ちゃんの投じた三球目。投げた本人も、低めの球が続くのを気にしていたのか、ボールが高めに浮いてしまった。

「……そこね」

そのボールを見逃さず、佳奈多はバットを一閃。レフトとセンターの間に落ちる、大きな当たりだった。

「くそー!」

転々と転がるボールをセンターの良一が捕球して、三塁のしろはに送る。残念ながら、余裕でセーフだった。

「おおー、さすがおねーちゃん!」

「かなちゃんすごいー」

リトルバスターズのベンチから歓声が飛ぶ。ノーアウト三塁。いきなり大ピンチだった。

『リトルバスターズ、先制のチャンスを迎えました。続くバッターは6番 井ノ原さんです』

「よし、筋肉打法だ!」

全力でバットを振り回しながら、真人がバッターボックスに立つ。いかにも飛ばしそうな、逞しい筋肉だった。

「(夏海ちゃん、ここは内角を攻めよう)」

俺はそういう意図を込めて、ミットを内側に構える。夏海ちゃんも領いてくれたし、ここはなんとか抑えたい。

「……いってっ!?!」

「あ」

次の瞬間、どむつと音がして、夏海ちゃんが投げたボールが真人の脇腹を直撃していた。内側を意識しすぎちゃったのかな。

「テッドボール!」

「い、い、ごめんなさい!」

球審からそう宣告され、夏海ちゃんが帽子を取って謝っていた。

「夏海、気にする必要はない。真人の筋肉はヘルメットより頑丈だからな」

「へっ。そう誉めるなよ。筋肉が照れるぜ」

恭介がそうフオローしていた。真人は本当に何ともないようで、軽く手をあげて一塁へと歩いていった。

でも、これでノーアウト一、三塁。こうなってしまったらランナーは気にせず、目の前のバッターに集中するしかない。

『リトルバスターズ、チャンスを広げました。次のバッターは7番、三枝さんです』

「ほらほらセンター、バスター！」

続いてバッターボックスに立ったのは、葉留佳だった。元気よくバットを振り回して、打つ気満々だ。

「よーし、なっちゃん！ こーいー！」

「(夏海ちゃん、落ち着いて。まずは初球を外して様子を見よう)」

デッドボールを与えてしまった夏海ちゃんのケアも考えて、今度は俺は外側にミットを構え、ボールを待つ。

「いきます……えいー！」

「でええー！？」

「ストライク！」

初球を外してみたけど、葉留佳は大きくバットを振っていた。とうか、ほとんどボールを見ていない。

……あれ？ これってもしかして。

「(夏海ちゃん、もう一回外してみよう)」

俺はもう一球外すように、夏海ちゃんにサインを送る。

「今度こそー！ー！ー！ ありやー！ー！？」

「ストライク！」

……葉留佳は二球目も大きく空振っていた。

「(夏海ちゃん、今度は落としてみよう)」

「……えいー！」

「よしきた絶対好球ー！ー！」

……直前で落ちるフォークボールに、葉留佳はまんまと引つかかった。

「ストライク！ バッターアウト！」

「はるちん、豪快に空振ったー！」

自分でなんか言ってるし。何にしても、これでワンアウトだ。

「うう、最後がフォークボールなんてヒドい……」

三球三振を喫した葉留佳は、さすがごとベンチへ下がっていった。ごめん。これも勝負だから。

これで調子を取り戻したのか、続くクドもファールフライに仕留める。打ち上げたボールを三塁手のしろはが捕球し、これでツーアウトだ。

「ふう……」

二つのアウトを取ったことで、夏海ちゃんも多少落ち着きを取り戻してくれた感じだ。ひとまずは安心かも。

『三枝さん、能美さんと続けて打ち取られてしまいました。まだチャンスは続いています。次のバッターは9番。鈴さんですね』
鈴はピッチャーだからか、ラストバッターを務めていた。

「いい、なつみ」

打席に立った鈴は眼光鋭く夏海ちゃんを見ていた。まさに獲物を狙う猫だった。

「(夏海ちゃん、ここはなんとか抑えよう)」

俺は慎重に配球をするけど、一球目、二球目共に見送られ、ボール判定だった。さすがピッチャーだけあって、鈴は選球眼がある。

続く三球目はファール。ファーストの蒼が直接捕球しようとしたけど、ギリギリ間に合わなかった。

……それに続いて投じた四球目。

「……そこだっ！ えいっ！」

「あー！」

外角低めに投じた一球を捉えられ、うまくセンターの深い所にはじき返された。

その間に三塁走者の佳奈多がホームイン。一塁にいた真人も三塁へ。バッターランナーの鈴も一気に二塁まで進んだ。見事なツーベースヒットだった。

『リトルバスターズ、先制しました。これで0―1です。ランナーもまだ二人残っていますし、チャンスは続いています』

『うう、皆、頑張ってくれ……』

マイクを通してのみきの悲痛な声が聞こえる中、打順が一巡して、迎えるバッターは来ヶ谷さんだ。

「最初の打席で感じたが、一塁側は守備が固いな」

バットを構えながら、今度は三塁方向を見ていた。もしかして、今度はあっちの方に打つつもりなんだろうか。

「……えいー！」

その来ヶ谷さんに対し、夏海ちゃんが投げた一球目。動揺して投げ損じてしまったのか、ど真ん中だった。

「……うむ。絶好球だな」

そのボールを来ヶ谷さんが逃すはずがなく、レフトの深いところへ運ばれてしまった。これはやばい。

「むぎゅー……！」

レフトの紬が急いで捕球しに向かうけど、その間に三塁走者の真人、二塁走者の鈴が続けてホームイン。あつという間に2点を追加されてしまった。

「フハハハハ！」

そしてバッターランナーの来ヶ谷さんも、不敵な笑いと残像を残しながら、ものすごい速さで三塁を蹴っていた。

……まずい。このままじゃランニングホームランになる。

本塁の守りを意識しながらボールの位置を確認すると、ちょうどショートの天善がボールを受けたところだった。あそこからだと、普通にホームに投げ返したんじゃ、とても間に合わない。

「そうだ……天善！ 六波羅反台を使え！」

今からホームへ返球しようとする天善に、俺は大声でそう伝える。

「……その手があったか。いくぞ！ 奥義！ 六波羅反台！」

俺の言葉を受けた天善は素早くボールを空中へと投げ、なぜか右手に持っていたラケットで、全力でボールを打つ。

すると、そのボールは手で投げるより遥かに速いスピードで、一直線に俺のミットに収まった。

「よし、間に合えー！」

捕球を確認した俺は、直後に本塁に突っ込んできた来ヶ谷さんと交錯する。

「……スリーアウト！ チエンジ！」

「ふう……危なかった」

正直微妙なところだったけど、なんとか来ヶ谷さんをアウトにすることができた。さすがに、これ以上の失点はまずかつたし。

「……まさか、あそこまでの好返球が戻ってくるとは予想外だったよ。楽々セーフだと思ったんだがな」

俺と交錯して、まだ地面に倒れたままの来ヶ谷さんがそう言う。やっぱり、この人の足の速さは異常だ。

「悪いけど、真剣勝負だからさ」

「当然、それは理解している。だが鷹原少年。いくらアウトにするためとはいえ、おねーさんの胸の上に手を置くのはどうかと思うぞ？」

「え？ あ、ごめん！」

言われて気づく。思いつきり来ヶ谷さんの胸を触ってしまった。もちろん、グローブ越しだけど。

「フツ、おねーさんは気にしないよ。そういうお年頃だろうしな」

「うう、不可抗力なのに……」

俺は急に恥ずかしくなりながら、その手を放す。

「え、なにしてるの」

でも、守備位置から戻ってきたしろはに、その状況をバッチリ見られてしまった。

「し、しろは。違うんだこれは」

「やっぱり、羽依里は大きな胸がいいの……？」

しろはは自分の胸を押さえながら、俺の脇を通り過ぎてベンチに

戻っていった。ち、違うから。俺にとってはしろなのがベストサイズだから。

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3			3	
鳥白島チャーハンズ	0	—			0	

「……ところで恭介、天善のあの返球方法に関しては異議を唱えないのか？」

リトルバスターズのベンチからそんな声が聞こえていた。とっさにやつちやつたけど、確かにルール上問題はないんだろうか。

「別に良いんじゃないやね？ 奥義とか、カッコ良いじゃないか」

恭介はすました顔でそう言っていた。リードしてる余裕もあるんだろうか。なんにしても、助かった。

『二回の表が終わりました、リトルバスターズが3点を先取しました』
「皆さん、ごめんなさいです……」

西園さんが途中経過を放送する中、夏海ちゃんがベンチで申し訳なさそうに頭を垂れていた。

リトルバスターズを完封できるとは誰も思っていないし、しょうがない部分はあると思う。

「大丈夫だよ。まだ試合は始まったばかりだし」

「ああ。3点くらい、すぐに取り返してやる」

「ナツミさん、気にしてはいけません！」

そんな夏海ちゃんに皆が声をかけて、元気づけてあげていた。こういう時、皆の優しさが本当にありがたい。

「それじゃ、私が反撃の狼煙を上げてくるね！」

ぽんっ、と夏海ちゃんの肩を叩いて、鷗がバットを手に立ち上がる。そうだ、次は鷗の打席からだった。

「はい！ 鷗さん、頑張ってください！」

「我らが鳥白島チャーハンズが誇る4番バッター、久島鷗。頼むぞ」

「島の外から来た旅行者だけに、助っ人外国人だね！ 行ってくるよー！」

夏海ちゃんや静久の声援を受けて、鷗が元気にバッターボックスへと向かっていた。

『それでは二回の裏。鳥白島チャーハンズの攻撃です。この回は4番、久島さんからです』

『ピンチの後にはチャンスあり、と言うしな。頑張ってもらいたいところだ』

「りんちゃん、お手柔らかかにねー」

鷗は普段と全く変わらない調子で打席に立つ。今更だけど、鷗の体操服って誰が用意したんだろう。ツインテールに纏められた髪も、凄く似合っているし。

「よし、いくぞっ……てりやっ！」

相手が4番バッターだということもあって、警戒しているんだろうか。鈴も最初の二球は外してきた。

鷗はそのボールをしっかりと見定めて、ツーボール。ボールカウントが先行して、バッターが有利な状況になった。

「……見えた！ とりやー！」

続く三球目。ストライクゾーンに甘く入ったフォークをしっかりと捉え、センター前へと運ぶ。

「おお、飛んだ！」

「いいから鷗、走れー！」

「それー！」

ヒットになったのを確認すると、鷗はスツケースにその身を預けて、足で地面を蹴ってスツケースごと一塁の方へと滑っていく。

「なんだあの摩訶不思議なスツケースはー！」

センターの葉留佳がそう言いながらもボールを拾い、そのままファーストの謙吾に投げる。鷗は余裕でセーフだった。

「……そのスツケース、砂の上を滑ってたぞ？」

葉留佳からのボールを捕球した謙吾は、信じられないものを見るよ

うな目でスーツケースを見ていた。

「うん、グラウンド仕様にしてある！」

俺たちもよくわからないけど、鴫は以前のキャンプの時、マウンテン仕様にしてきたこともあったし。カスタマイズ可能なスーツケースなんだろうか。

それにしてもさっきの打球、普通に走っていれば二塁は手堅かったはずだ。鴫だから一塁で止まってるけど。これもハンデだよな。

何にしてもチーム初ヒット。ノーアウト一塁だ。

『チーム初ヒットが生まれ、このまま勢いづくでしょうか。続くバッターは5番、鳴瀬さんです』

「それじゃ、いつてくるね」

「しろは、練習の通りにやれば、きつと打てるぞ。鴫に続いてくれ」

「うん。頑張ってみる」

西園さんに名前を呼ばれ、しろはが打席に立つ。いよいよチャーハン打法がそのボールを脱ぐ。

「よし……いくぞっ」

先頭打者にヒットを許してしまった鈴だけど、逆に開き直ったのか、積極的にストライクを取りに来ていた。

対するしろはは、一球目、二球目と外から内に入ってくるボールを見逃し、早くもツーストライクと追い込まれてしまった。

「これで……どうだっ！」

……三球目。鈴が勝負球に選んだのは、思いつきり落ちてくるフォークだった。そのボールに対し、しろははなんとか食らいついて、ファールにしていた。

「……やっぱり、しろはの打ち方はよくわからない」

マウンドからしろはのバッティングフォームを見ていた鈴が、不安げにそう口にしていた。確かに、しろはは相変わらずタイミングの取り方が独特だ。

「えいっ！」

先のフォークに続いて鈴が投げた球は、渾身のストレートだった。

明らかにさっきの球より速く、緩急をつけてきたみたいだ。

「……ほいー」

……しかし、しろはそのストレートにもタイミングを合わせて、豪快に打ち返した。その打球はショートの内野谷さんの頭上を軽々と越える。

「マジかよ……あの細腕でレフトまで飛ばしやがるのか。一体どんな筋肉してやがる」

三塁を守る真人が、レフト前を転々とするボールを見ながら、驚愕の表情を浮かべていた。なんだろう。しろの場合は、チャーハン筋とでも名付けようか。

「わふー……」

クドがボールを拾って、慌てて二塁へ送球するけど……すでに鷗はスライディング走法で二塁へ到達していた。これでノーアウト一、二塁。チャンスが広がった。

『これは、烏白島チャーハンズ、絶好のチャンスだ』

『そうですね。次のバッターは6番。鷹原さんです。頑張ってください』

「え、俺？」

あろうことか、ここで俺の打席が回ってきた。

「羽依里君、頑張ってるね！」

「お？ それじゃ、あいつが加藤さんとの親戚か？ こりゃ、応援するしかねえな！ 打てよー！」

「しろはちゃんにかっこいい所を見せるんだよー！」

反撃ムードが高まり、鏡子さんを筆頭に観客席から沢山の声援が送られてきた。どうしよう。俺、チャンスを広げるため、バントしようと思っただけ。とてもそんな空気じゃなくなっちゃった。

「よし。勝負だ、鈴」

俺は仕方なく、普通にバットを構えて鈴と対峙する。

「いくぞっ……しねっ！」

最初に投げられたのは、恐らくカーブっぽい。判定はストライク

だった。

「えいつ！」

続くボールは、ワンバウンドするくらいの落差を誇るフォーク。思いつき引つかかって、バットを振ってしまう。

「うう、しまった……」

あつという間に追い込まれてしまった。いざ対峙してみると、鈴のボールは多種多様で、すごく狙い球を絞りにくい。

一度深呼吸をして、意識を集中させる。よし、今度こそ。

「くらえ、ライジングニャットボール！」

次の瞬間、光の筋が理樹のキャッチャーミットに収まった。速すぎて球が見えなかった。

「ストライク！ バッターアウト！」

球審の斉藤さんの手が上がる。鈴の投げたボールのあまりのスピードに、観客席がどよめいていた。

「うう、皆、ごめん……」

結局三球三振を喫した俺は、すごすごとベンチに下がるしかなかった。

『スピードガンによる計測によると、ただいまのボールは時速140キロとのことです』

『ちよつと待ってくれ。何かの間違いじゃないか？』

西園さんがライジングニャットボールの球速を皆に通知していた。隣に座ったのみきも、動揺を隠せないでいる。

「ひゃ、140キロ……」

ベンチに戻してみると、夏海ちゃんも驚愕の表情のまま固まっていた。うん。全然見えなかったし、俺も信じられないよ。

『こ、こほん。鷹原は三振に切って取られたが、まだ烏白鳥チャーハンズのチャンスは続いている。続くバッターは7番。天善だ』

「水織先輩！ 見ていてくださいー！」

天善はビシツとラケットを構えて、打席へ入っていった。ちよつと待って。せめてバットを持って。

俺はその天善の後を、バットを持って慌てて追いかけた。

「……天善のやつ、打つ気満々だな」

「そりゃ、あこがれの人の前だしねー」

良一や蒼が笑顔で天善を見ていた。彼は二回の守りでも多大な貢献をしてくれたし、ここは攻撃でも頑張つてほしい。

「いくぞっ、てりやつ！」

「チヨレeeeeeeeeee！」

そんな天善は鈴の初球を狙い打ったけど、力み過ぎたのか大きく打ち上げてしまった。

「し、しまった！」

「オーライ」

そのボールはライトの恭介に難なく処理されてしまった。これでツーアウトだ。

あの位置だと、二塁の鷗も走ることは無理そうだ。ランナーは一、二塁のままだった。

「くっ……水織先輩、申し訳ありません！」

一球で打席が終わってしまった天善がベンチに戻ってきた。

「き、気にしないでいいわ、加納君。また次があるわよ」

土下座でもしそうな勢いだったので、静久が慌てて取り繕う。

『この回、先頭から二者連続で安打を許した鈴さんですが、続く打者は抑えています。次は8番。紬さんですね』

西園さんが淡々と試合状況を説明してくれる。ツーアウトにはなってしまうけど、おっぱい打法の使い手である紬なら、ライン際を狙って長打も十分あり得るし。期待したい。

「紬、頑張つてー！」

「紬さん、頑張つてくださいー！」

静久や夏海ちゃんの声援が飛ぶ中、髪をポニーテールにして気合いを入れた紬が、打席へと向かう。

「むぎeeeeeeeeee！」

打席に立った紬は、天善と同じように鈴の初球を狙い打った。

弾かれたように飛んだボールは、ライト線ギリギリに飛び、一塁を守る謙吾の脇を抜け……。

「おっとー！」

……るかと思われたけど、謙吾がとっさの判断で身体を張り、ボールを止める。

そのままボールを拾い直して、一塁を踏む。紬はそこまで足が速くないし、アウトになってしまった。本当に惜しかった。

「スリーアウト！ チェンジ！」

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	—			3
鳥白島チャーハンズ	0	0				0

『鳥白島チャーハンズ、初ヒットから続けざまにチャンスを作りましたが、無得点に終わりました』

『惜しかったんだがな……もう少し、天善が粘っていれば……紬の打球が抜けていれば……』

『野村さん、心の声がダダ漏れですよ？ 落ち着いてください』

『あ、ああ。すまない……』

のみきが悶々としているのが、痛いほど伝わってくる。自分は参加できずに見ているだけ、と言う状況に耐えられないようだ。

『それでは三回の表、リトルバスターズの攻撃です。バッターは2番、恭介さんからです』

また上位打線との対戦だ。恭介には前の打席で打たれているし、ここは慎重に行かないと。

俺は外角ギリギリのところミットを構える。そこに投げ込まれた夏海ちゃんのナツクルは、二球続けてボール判定となってしまうた。

「むむむ……」

夏海ちゃんはマウンド上で難しい顔をしていた。一球目はともかく、二球目は決まったと思ったんだけど。球審の手は上がらなかつ

た。

「よし、もらったー！」

その次、ストライクを取りに行ったボールを見事にセンター前に弾き返された。これで前の回に続いて、先頭打者の出塁を許してしまっただ。

続く3番、理樹は再びバントを決めて、俺が一塁へ送球する間に恭介が二塁へ進塁。これでワンアウト二塁となった。それにしても、このタイミングでのバントは定石とはいえ、理樹の自己犠牲の精神はすごい。

『リトルバスターズ、チャンスが広がりました。ここで4番バッターの登場です』

この状況で謙吾に打席が回ってきた。初回こそ鷗のスーツケースに助けられたけど、あれは本当に運が良かっただけだし。要注意人物であることに変わりはない。

「夏海ちゃん、ここは最悪歩かせてもいいから、めいっぱい外を狙おう」

俺はその意思を込めて、外側にミットを構える。夏海ちゃんも頷いてくれた。

「いきます……えいー！」

初球はギリギリのところに決まり、ストライク。

……続く二球目。

「よし、今だー！」

中途半端に入ったフォークを上手く打たれてしまった。ショート方向にライナー性の打球が飛ぶ。これはまずい。

「チョレローイー！」

しかし、天善がその打球をダイビングキャッチしていた。超ファインプレーだった。

「おお、天善、助かったぞー！」

「天善さん、ありがとうございます！」

「ふっ、日々のトレーニングの成果が出たようだな」

ショートはボールが行きやすいポジションとは聞いていたけど、天善に任せておいて本当に良かった。

「加納君、かつこいいわよ!」

「つ、次もお任せください!」

静久に褒められて、真つ赤になっていた。なんにしても、天善は守備では本当に頼りになる。

結局ランナーの恭介は動けず、ツーアウト二塁。よし、あと一人だ。

『加納さんのファインプレーが出ました。すごい運動能力ですね』

『伊達に毎夜のように秘密基地に籠っていないみたいだな』

「加納のせがれ、いいぞー!」

天善の気迫のプレーに、観客席からも歓声が飛ぶ。天善はビシッとラケットを構えて、その声援に応えていた。

……うん。ツツコみたいのは山々だけど、今は何も言わないでおいとあげよう。

『さて、ツーアウトにはなりましたが、強打者が続きます。続くバッターは5番、二木さんです』

西園さんと呼ばれて、佳奈多が打席に立つ。彼女にも前の打席で長打を許しているし、ここは敬遠したほうがいいかもしれない。ちょうど一塁も空いていることだし。

「(夏海ちゃん、一塁空いてるし、敬遠しよう?)」

俺はそうサインを送るけど、夏海ちゃんは首を横に振る。

……もしかして、今度こそ抑えようと思ってるんだろうか。

考えてみたら、仮に佳奈多を歩かせても、その次はパワーが服着てるような真人が相手になるわけだしな。

「(……わかった。勝負しよう。夏海ちゃん)」

そう決めて、俺はできるだけ内側にミットを構える。

「……佳奈多さん、行きますよ!」

一球目は内角ギリギリに入って、ストライク。

「えい!」

二球目はバットの先に当てられたけど、ファールになった。これで

追い込んだ。

続く三球目は僅かに外れて、ボール判定。

今までの球は全部がナックルボール。特に三球目は夏海ちゃんも打ち取りにいったらしく、渾身の一球だったのに、見切られてしまった。佳奈多はすごい選球眼がある。

「……見切ったわ。ここね」

……続く四球目。僅かに浮いたボールを狙い打たれた。

「あ……」

佳奈多の打球は綺麗な放物線を描いて、観客席を高々と超えていった。やられた。ツーランホームランだ。

夏海ちゃんはボールの行く先を見届けた後、がっくりと肩を落としていた。

「おねーちゃん、ナイスバッティングー！」

「すごいのですー！」

「かなちゃんすごいー！」

ダイヤモンドを回ってベンチに戻る恭介と佳奈多を、リトルバスターズの皆が出迎えていた。

『二木さんのツーランホームランが飛び出しました。これでリトルバスターズの5点リードに変わります』

『……』

『……あの、野村さん、大丈夫ですか？』

『あ、ああ。すまない。少し意識が飛んでいたみたいだ』

……どうやら、のみきも一瞬気絶するくらいのショックを受けていたらしい。

でも、それ以上に夏海ちゃんは大丈夫だろうか。ホームランはピッチャーへの精神的ダメージが大きいつて言うし。

「あー！ ごめんなさいー！」

やっぱり心配が的中した。夏海ちゃんは動揺したのか、続く真人にまたデッドボールを与えてしまっていた。

「うおおー！ー！ 上腕二頭筋がー！」

大袈裟に叫んでいたけど、別に大丈夫そうだった。さすが頑丈な筋

肉だ。

それより、夏海ちゃんが心配だ。かなり浮足立ってるし。

「ハイハイなっちゃん、カモン！」

次に打席に立ったのは、葉留佳だった。良かった。助かった。

「姉御直伝！ おさげ打法——！ ありやー!?!」

そう言いながらバットを豪快に振り回す葉留佳をセカンドゴロに抑え、なんとかその回の守りを終えることができた。

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	2			5
鳥白島チャーハンズ	0	0	—			0

ホームランを打たれた後、どうにか後続は抑えたけど……ますます点差が広がってしまった。

これから試合は後半へと向かっていくけど、このままじゃまずい。なんとか反撃しないと。

第三十六話・完

第三十七話 8月22日（中編）

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	2		5	
鳥白島チャーハンズ	0	0	—		0	

『三回の表が終わりました、リトルバスターズが大量リードしています』

『続いて、鳥白島チャーハンズの攻撃なんだが……打者が出てこないな』

『状況が状況ですし、作戦会議でもしているんでしょう。観客の皆さん、しばらくお待ちください』

実況の二人がそう観客をなだめてくれている間、俺たちはベンチに集まり、対策を考えていた。

「いつそのこと、狙い球を絞るってのはどうだろうか」

「視点を変えるため、代打を使うのも手よ」

「点を取らない事には始まらないし、好成績を残しているしろはや鷗の動きを真似てみよう。おのずと攻略法が見えて来るかも」

「実力差があるとは思っていたけど、まさかここまでなんて。ここまです点差が開くと、嫌が応にもワールドゲームが見えてくる。」

「はあ……」

そんな中、夏海ちゃんだけが皆の輪に入らず、ベンチに座っていた。

「ごめんなさいです……羽依里さんは敬遠を勧めてくれたのに。自分勝手なことをして、打たれてしまいました」

夏海ちゃんは責任を感じているのか、うなだれていた。

「夏海ちゃん……」

そんな夏海ちゃんを見てると居たたまれない気持ちになる。こんな時、あのオツサンならなんて声をかけてあげられるだろうか。

「……夏海ちゃん、ちよつといいですか」

かけるべき言葉を探していると、藍が夏海ちゃんの正面に座り込み、視線を合わせながら話しかける。

「は、はい……」

藍に話しかけられて、夏海ちゃんがわずかに顔を上げる。ちよつと目が赤い気もする。

「……でこびんっ」

「ひあつ!？」

次の瞬間、藍が夏海ちゃんにでこびんをかましていた。ちよつと、なにしてるの。

「あ、藍さん、何をするんですか!？」

夏海ちゃんは、叩かれたおでこを右手で押さえながら憤慨していた。

「……一人で全部の責任を背負っていきそうな顔をしていたので、お仕置きです」

「あ……」

その言葉を聞いた夏海ちゃんは、憑き物の落ちたような顔をする。

「そうだよ夏海ちゃん。皆がいるよ」

その様子を見て、今度はしろはが優しく手を握ってあげていた。

「うんうん。チームなんだから、皆で頑張らないと!」

「そですよ!」

それに続くように、鴟や紬も混ざる。あつという間に夏海ちゃんを中心に輪ができた。

「ほら、一人は皆のために、皆は一人のために。って言うじゃない?」

蒼の言うのは違うスポーツの言葉な気もするけど……この際なんでもいい。ここは便乗しよう。

「そうだよ。だから夏海ちゃんも、一人で背負い込まないで!」

俺も皆と一緒に夏海ちゃんを励ます。

それにしても、皆の言葉は夏海ちゃんにだけじゃなく、自分たちにも言い聞かせているような、そんな感じだった。

「……皆さん、一人でヘコんでしまつて、ごめんなさい。まだまだ勝負はこれからですもんね！」

夏海ちゃんは一度だけ頭を下げた後、握りこぶしを作つて立ち上がる。

「夏海ちゃん、その意気だよ」

「はい！ それじゃ、行つてきます！」

そしてカーボンバットを持つて、意気揚々とバッターボックスに向かつていった。うん。もう大丈夫っぽい。

『そろそろ、準備ができたようです。改めまして、三回の裏、烏白島チャールハンズの攻撃です』

『鈴が迎えるバッターは9番、夏海ちゃんだな』

「待つてたぞー！」

「夏海ねーちゃん、ガンバレー！」

夏海ちゃんが打席に立つと、観客席の子供たちから声援が飛ぶ。

そういえば、昨日は一緒に祭りの準備をした仲だし、皆で夏海ちゃんを応援してくれているらしい。

「……鈴さん、勝負です！」

観客席を見て、一瞬驚いた夏海ちゃんだったが、すぐに真剣な表情になつて鈴と対峙する。

「なつみ、いくぞつ……うりやつ！」

鈴の投じた一球目を夏海ちゃんは見送る。ボールだった。

「てりやつ！」

続く二球目は直球のストライク。バットを振る気配はなく、どうも球筋を見ているみたいだった。

「えい！」

その次、三球目のフォークをうまく合わせて打ち返した。

カーボンバットによつて勢いよく飛んだボールは、ライト前に落ちる。

「へえ。夏海、なかなかやるな」

そのボールを恭介が捕球して、ファーストの謙吾に送るけど、夏海ちゃんは悠々セーフだった。

よし、これでノーアウト一塁だ。

『鳥白島チャーハンズ、先頭打者が出ました。打順も先頭に戻りまして、続くバッターは一番、蒼さんです』

「ガンバレ、ししよー!」

先程と同じように子供たちが沸く。ランナーがいる状態からの好打順だし、これはチャンスだ。

「二回目の勝負ねー。鈴、今度は打ち返してやるから!」

「今度もおんなじだ……いくぞっ!」

打つ気満々の蒼に対し、鈴が大きく振りかぶり、渾身のストレートを投げる。

「うりゃあっ!」

対する蒼はバットを水平に構え、三塁方向へ静かにボールを転がす。まさかのバントだった。

「……なに!?」

鈴も一番バッターの蒼がバントをしてくるとは思っていなかったようで、全く反応できず。一方、夏海ちゃんはその様子を見て、さすが二塁へ向けて駆けだした。

「鈴、僕が行くよ!」

そんな中、キャッチャーの理樹がいち早く飛び出してボールを捕球する。

「二塁は……無理っばいね。謙吾、行くよっ!」

理樹は一瞬だけ二塁を見た後、素早くファーストの謙吾にボールを投げ渡す。

「二塁、アウト!」

判定としては微妙な状況だったけど、一塁塁審の斉藤さんはアウトを宣言していた。惜しい。もう少しで蒼もセーフだったのに。

「蒼さん、ありがとうございませす!」

「いいのよー!」

無事に二塁に進んだ夏海ちゃんに手を振りながら、蒼はベンチに戻ってきた。結果、送りバント成功でワンアウト二塁だ。

『意表を突いた蒼のバントが成功して、チャンスが広がったな。続くバッターは2番、藍だぞ』

『藍さんは前の打席で惜しい当たりがありましたし、今回も頑張ってください』

『頼むぞ藍、せめて夏海ちゃんを進塁させてくれ……』

『だから野村さん、心の声がダダ漏れになってますよ?』

『き、気のせいだろう』

「……いくぞ、あい」

そんな実況をよそに、鈴はちらりと二塁の夏海ちゃんを見た後、藍に向き直る。

「うりゃっ!」

最初の打席で良い当たりをした藍を警戒してか、ボールを低めに集めてくる。

結果、二球続けて低い位置に決まり、ツーストライクと追い込まれてしまった。

「てい!」

しかしその次の球、甘く入ったフォークを藍はすくい上げるようにして打った。大きく弧を描いたボールはライト前に落ちる。

「おっと、またこっちか」

先程と同じように恭介がボールを捕球し、三塁を見る。

「……さすがに三塁は無理か。だが一塁は行けるな。とう!」

恭介はボールをすぐに握りなおすと、ファーストの謙吾へ投げる。

「……は?」

……速い。まるで某外野手のレーザービームだ。このままだと、藍が一塁に間に合うか微妙なところだ。

「くっ……このっ!」

状況を見て不利と悟ったのか、藍がまさかのヘッドスライディングをみせる。

「セーフ！」

一塁塁審の齊藤さんがそう判定を下す。ギリギリだった。

これで、ワンアウト一、三塁と、更にチャンスが広がった。

「それにしても、まさか藍がヘッドスライディングするなんて」

「夏海ちゃんにでこぴんしておきながら、無様な結果は嫌ですからね」

藍は顔や髪についた砂をはたき落しながら、三塁の方を見る。一塁の攻防の間に三塁に進んだ夏海ちゃんが、そこから頭を下げている。

『鳥白鳥チャーハンズ、得点のチャンスがさらに広がったぞ。続くバッターは3番、良一だな』

「よし、俺が決めてやるぜ！」

のみきに名前を呼ばれながら、良一が打席に入る。

「いいですか良一ちゃん、最悪夏海ちゃんは生還させないと、後でひどいですよ！ わかっていきますね!？」

一塁から、藍が大声でそう叫んでいた。

「なんだ？ りよーいちが藍の尻に敷かれてるのか？」

そのやりとりを見て、マウンド上の鈴が良一に訝しげな視線を送る。

「そんなんじゃないよ！ いいから鈴、さつさと投げて来い！」

「よくわからんが、気にしないことにしてやろう。いくぞっ……ほわちやー……！」

鈴はそのまま投球モーションに入り、直球を投じる。

「パーーッ！」

良一はその初球を狙い打つけど、力んでしまったんだろうか。大きく打ち上げてしまい、フライになる。

「おーらいなのですー」

その飛球をレフト側のファールゾーンでクドが捕球する。まるで犬がボールを捉えるかの如く、綺麗なキャッチだった。

そしてあの位置だと、三塁の夏海ちゃんも走れない。残念ながら犠牲フライにもならなかった。これでツーアウト一、三塁だ。

『くうう……良一、男を見せないか……』

『とても悔しがっている野村さんはさておき、ここで4番の久島さんに打席が回ってきました』

「鷗、頼んだぞ！」

「まかせといて！ なっちゃん、すぐにホームに返してあげるからね！」

鷗はバットを振り回して、打つ気満々だ。それにしても、本当に4番にはチャンスで回ってくるものなんだな。

「……かもめ、いくぞっ！」

鈴はキャッチャーの理樹となにやらサインを送り合った後、ピッチングモーションに入る。大量リードしていることもあって、どうやら鷗との勝負を選んだらしい。

「……てりやつ！」

前の打席で思いつきり打たれているせいもあって、外いっぱい狙ってくる。さすがに慎重だ。

「スリーボール！」

しかし、なかなかいいところに決まらず、三球続けて外した。これでスリーボールだ。

「むむむ……なら、これでどうだっ！ ライジンググニャットボール！」

こうなると真つ向勝負しかないらしく、ど真ん中に渾身のライジンググニャットボールが投げ込まれた。

「てりや——！」

しかし、鷗はその剛速球すら、たやすく打ち返した。

「なにいいい——!?」

ボールはセンター手前にポテンと落ちる。それにしても鷗、なんであのボールを打てるんだろう。

「うわああ——！ 打たれてしまったああ——！」

葉留佳がそのボールの処理をする間に、夏海ちゃんが生還。そして藍が三塁まで進む。鷗は例によってスーツケースに乗り、一塁へ到達していた。

「皆、やったよー！」

「鷗、ナイスバツティング！」

一塁から手を振る鷗に手を振り返しつつ、生還した夏海ちゃんとハ
イタッチをかわす。

「おかえり、夏海ちゃん！」

「やりましたー！」

これで1点を返した。喉から手が出るほど欲しかった得点だし、
チーム全体の士気も上がりそうだ。

「よっしやー！」

「鳥白島チャーハンズ、反撃開始だぜー！」

なにより俺たちが得点したことで、観客席が大いに盛り上がってい
た。一生懸命応援してくれている皆の期待に少しでも応えることが
できた気がして、嬉しかった。

『鳥白島チャーハンズが1点を返しました。これで1―5です』

『さすが鷗だな。やってくれると思っていたぞ』

『ツーアウトながら、ランナーは一、三塁。続くバッターは5番、
チャーハン砲の鳴瀬さんです』

「へ、変な二つ名をつけてプレッシャーかけないで」

しろはがぶつぶつ言いながら、打席へと向かっていった。チャーハ
ン砲つてのも、言い得て妙だと思うけど。

「いくぞ、しろはっ！ うりやっ！」

先の鷗に続かれまいと、鈴は様々な球種を投じるけど……しろはは
外れた球はきちんと見送り、微妙な位置の球はチャーハン打法でしっ
かりとファールにして、ひたすらに粘っていた。

「……くられ、ライジングニャットボール！」

「……ほいー！」

ついには、ライジングニャットボールまでファールにしていた。
ファールにできるだけで十分凄い。

「うう……」

あそこまでついて行かれると、さすがの鈴も投げる球に困っている

みたいだ。気がつけば、ツーストライクスリーボール。フルカウントだった。

「えいー！」

「……フォアボール！」

続く一球が大きく外れ、最終的にフォアボールになった。これでツーアウト満塁。これまたチャンスだ。

『よし、最高の場面で鷹原に打順が回ってきたな』

「え、俺？」

実況ののみきに言われて気がついた。打順表を見ると、確かに俺だった。

前の打席に続いて、まさか今回もこんなチャンスで俺に回ってくるなんて。

「がんばれー、ガーディアン！」

「羽依里さん、頑張ってください！」

「男見せなさいよー！」

「タカハラさん、ファイトです！」

バッターボックスに立つと、観客席から、ベンチから、たくさんの声援が送られてくる。

気持ちは嬉しいけど、ものすごいプレッシャーだ。俺もしろはからチャーハン打法を習っておけば良かった。

「いくぞっ……うりゃっ！」

鈴の初球は外れて、ボールだった。俺は続く二球目に狙いを定める。

下手に追い込まれたら、またあのライジングニャットボールで仕留められかねない。それまでに勝負しないと。

「てりゃっ！」

……さつきよりボールが少し高い。これは絶好球だ。

「そう、さしずめ俺は……鳥白島のブンブン丸！」

と言うわけで、全力でフルスイングしてみた。直後、バットに強い衝撃があつて、白球が青空を舞っていた。

「なにいいい?！」

鈴が絶叫に近い声を上げながら、ボールの行方を見守る。俺はその光景を横目に見ながら、全力で一塁へとひた走った。

俺の打球は観客席からの大声援を受けながら、左中間へ飛んでいく。このまま落ちれば、二塁打は固い。

「させるかー！ー！ ジャー！ー！ プー！」

誰もがヒットだと思っていたその時、センターの葉留佳が全力で走ってきて、飛び込みながら地面スレスレでボールをキャッチしていた。ものすごいファインプレーだ。

「スリーアウト！ チェンジ！」

チャンスを逸脱した落胆の声と、あの打球を見事に捕球した葉留佳への賞賛の声が観客席で入り乱れる。

「はるちゃんすごいー！」

「いやー、打つ方はからつきしだし、せめてこれくらいはしないと申し訳が立たなくてすね」

「十分だぞ。最少失点で抑えたわけだからな」

「やはは、それほどでもあるかなー」

そんな声がリトルバスターズ側のベンチから聞こえてきた。せっかく皆が作ってくれたチャンスだったのに。本当に悔しい。

「羽依里さん、ドンマイです！」

俺の表情を見て察したんだろうか。ベンチに戻るなり、夏海ちゃんが一番に寄ってきて励ましてくれた。さっきまで落ち込んでたとは思えない。

「よし、夏海ちゃん。次の回は無失点に抑えよう」

だから、ベンチに置いておいたキャッチャーミットを手に取りながら、笑顔でそう返した。

「はい！ 今度は三塁も進ませませんから！」

普通は二塁なんだけど、三塁って言うあたりが夏海ちゃんらしい。「せっかく反撃ムードになったんだから、ふたりとも、頑張つてよね」

同じように、笑顔のしろはに言われた。さっきの葉留佳じゃないけど、打撃で貢献できない分、守りで頑張らないと。

なんとなくだけど、チームの空気が変わってるのを感じる。

		1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	2	—		5	
鳥白島チャーハンズ	0	0	1			1	

『鳥白島チャーハンズ、反撃は1点止まりとなってしまいました。助かりました』

『おや、西園さんも心の声が聞こえてる気がするぞ?』

『……そう言うこと言う人嫌いです』

『ど、どこかの雪女のようなことを言わないでくれ』

よくわからないけど、実況の二人も試合を楽しんでいる感じがする。

『では四回の表。リトルバスターズの攻撃。バッターは8番、クドだな』

『くーちゃん、ファイト、ですよー』

『かつとばセミニ子ー! 先頭打者ホームランだー!』

ベンチからの応援を受けながら、クドがバッターボックスに立つ。それにしても、ホームランを打つクドをイメージできないんだけど。

『クドさん、いきますよー!』

『はい! 夏海さん、いざ尋常に、勝負なのです!』

なんだろう、急に試合が微笑ましくなったような気がする。クドが幼く見えるせいもあるんだろうか。

『えい!』

初球は様子を見てナックルボール。その次はストレート。どちらもストライクゾーンに決まって、ツーストライクと追い込んだ。

『わふー!』

続く三球目。地面につくの承知で低めのフォークを投げてもらったら、見事に引っかかってくれた。これで三球三振。幸先良く、まずはワンアウトだ。

『うう、あいあむべんちばつく……』

クドは何やらごによごによと英語を話しながら、ベンチへと戻っていた。なんだか、すごく申し訳ない気分になってしまう。

『クドを三振に切って取り、続くバッターは9番、鈴だな』

『能美さんはさすがに厳しい状況でしたね。次の鈴さんに期待しましょう』

「なつみ、しよーぶだ」

打席に立った鈴は、相変わらず鋭い目つきだ。なんだろう、やっぱりポジションが同じ者同士、ライバル視しているんだろうか。

「鈴さん、いきますよ！ えい！」

対する夏海ちゃんは、できるだけ低めにボールを集めていく。一球目はボール。二球目はギリギリ決まった。

「そこだっ！」

「あー！」

しかし、続く三球目をすくい上げるように打たれた。打球は地面を転がりながら、ショート方向へ向かう。

「安心しろ、内野ゴロだ！」

ショートの天善がボールを拾い、素早くファーストの蒼へと送球する。しかし、鈴も足が速い。

「セーフ！」

どっちだろうとは思っていたけど、一塁塁審の斉藤さんはセーフの判定を下していた。

「夏海ちゃん、気にしないで！」

「はい！」

俺がそう声をかけると、右腕をぐるぐると回して笑顔を見せてくれた。だいぶ動揺は抑えられてるみたいだ。

『鈴さんの出塁を許したところで、打順が先頭に戻ります。迎えるバッターは1番、来ヶ谷さんです』

『上位打線か……頑張って抑えてくれ……』

「さあ、断罪してやろう」

のみきの祈りが聞こえる中、来ヶ谷さんがそう言いながらバットを構える。

断罪される理由が良くわからないけど、相変わらずプレッシャーがすごい。

「……よし、夏海ちゃん、あれをやってみよう」

来ヶ谷さんがバッターボックスに立った直後、俺はあるサインを夏海ちゃんに送る。

彼女もそれを瞬時に理解したのか、頷いていた。

「いきますよ……えい！」

投球モーシヨンに入った夏海ちゃんは、そのまま身体を反転させて一塁へ送球。鋭いボールがファーストを守る蒼のグローブに収まる。

「鈴、これでタッチアウトよ！」

「な、なにに……!?!」

次の瞬間、少し大きめにリードをしていた鈴を牽制タッチアウトにすることができた。

これまで一度も牽制なんてやらなかったし、鈴もどこか油断していたのかもしれない。なんにしても、これでツーアウトだ。

「ほう、まさか鈴君を刺すとはな。だが、安心するのはまだ早いぞ」

来ヶ谷さんはより一層鋭い視線で夏海ちゃんを睨みつける。だから怖いって。

「ゆいちゃん、頑張ってー!!」

その時、リトルバスターズのベンチから小毬さんの声が聞こえた。

「……小毬君、だからそのゆいちゃんはやめてくれ」

そういえば、来ヶ谷さんは小毬さんにそう呼ばれるのが苦手なんだっけ。

「……それです！ 皆さん、一緒に言いましょう！」

その様子を見ていた藍が、セカンドから大きな声で『ゆいちゃん』と叫び始める。

どうやら、以前来ヶ谷さんが『ゆいちゃん』と呼ばれて悶絶していたのを思い出し、それを利用する手段に出たらしい。

「ゆーいちゃん！」

「ゆーいちちゃん！」

やがて『ゆいちちゃん』コールはセカンドから内野全体へ、やがて外野を経由して、ついには観客席まで伝播していった。気がつけば会場全体が『ゆいちちゃん』コールに包まれていた。

「ゆーいちちゃん！」

「ゆーいちちゃん！」

「ええい、お前達やめろ！」

藍の作戦が功を奏し、来ヶ谷さんが苦しそうに悶えていた。思いつきり集中を乱されているらしく、すでにツーストライクだ。

「(夏海ちゃん、今のうちだよ)」

俺はミットを構えて、早めの投球を促す。

「ゆいちちゃん、いきますよ！ えい！」

夏海ちゃんはそれに応え、急いで次の球を投げる。

「くっ！」

来ヶ谷さんはその球を苦し紛れに打つ。ボールは三塁方向へ転々と転がる。

「ほい！」

サードのしろはがそのボールを捕球し、一塁へ投げる。だけど来ヶ谷さんの足が速いこともあって、ギリギリのところまでセーフになってしまった。

「うう、惜しい……」

悔しいけど、今の状況下でもしつかりと打った来ヶ谷さんを称賛するしかない。

『さすが来ヶ谷さんです。不利な状況になっても、簡単には終わりませんね』

『ところで、彼女は何故ゆいちちゃんと呼ばれるのが嫌なんだ？』

『わかりません。可愛らしくて良いと思うのですが』

「やめろ！ 実況席でその話題に触れるな！」

来ヶ谷さんが一塁ベース上から叫んでいた。

『す、すまない。では続くバッターは2番。恭介氏だな』

気を取り直して、次のバッターを迎える。結局来ヶ谷さんを抑えきれなかったし、状況はあまり変わっていない。

「恭介おにーさん、いきますよー！ えいー！」

「……よし、もらった！」

恭介に対して投じた第一球。高めに入ってしまった球を狙われた。「あー！」

夏海ちゃんが振り返る。俺もボールの行く先を見ていると、ライナー性の当たりが一二塁間を抜け、センターとライトの間を転がっていた。

センターの良一がボールを拾いに走るけど、あのボールはどっちかと言うとライト寄り。これは長打コースだ。

「こうなったらイチかバチか！ スーツケース投げ——！」

その時、ライトの鷗がハンマー投げの要領で勢いをつけて、スーツケースを思いっきり投げ放つ。

そのスーツケースは砂の上を滑るように移動して、転がっていたボールを直撃する。

「特別ルールにより、アウト！」

「えええー！——！」

「おいおい、あんなのありかよ!?!」

最初に特別ルールが適応された時と同じように、理樹がベンチの方で驚愕の声を上げていた。今回は真人も一緒だ。

でも俺たちが守備の時に、相手の打球がスーツケースが当たったことに間違いはない。投げられたスーツケースにボールが当たったや駄目というルールもないはずだし。

「スリーアウト！ チェンジ！」

観客席もざわついてるけど、無失点で切り抜けた。これは大きい。

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	2	0		5
鳥白島チャーハンズ	0	0	1			1

『例の特別ルールによって九死に一生を得た形になりましたね』

『まったくだ。肝を冷やしたぞ』

『それでは四回の裏、鳥白島チャーハンズの攻撃です。バッターは7番、加納さんからですね』

「加納君、頑張って！」

「お、お任せください！」

静久の応援を受けて、天善が打席に立つ。俺も人のことは言えないけど、今のところ天善もノーヒットだし、ここは頑張ってほしい。

「……そうです。静久さん、天善ちゃんが活躍できるよう、パワーを送りましょう」

「え？ パワーって何かしら？」

「えつとですね。ごによごによ……」

藍が静久に何やら耳打ちをしている。その間にも、天善は鈴の七色の投球によって、ツーストライクと追い込まれていた。

「……そうね。わかったわ！」

藍の意図が伝わったのか、静久は深呼吸をひとつした後、大きく息を吸い込む。

「天善君、頑張って！」

「！」

たぶん、天善は初めて静久から下の名前で呼ばれたんだと思う。うまく説明できないような声を上げながら、思いつきりバットを振っていた。

「なにいいいい!?!」

鈴の絶叫がこだまする。天善の打球はセンターの深い所に落ちるスリーベースヒットだった。もう少しでホームランという当たりで、いきなりノーアウト三塁の大チャンスだった。天善すごい。

『鳥白島チャーハンズ、いきなりチャンスを迎えました』

『ここからだとはよく聞き取れなかったんだが、天善は何を言われたんだ?』

『よくわかりませんが、日々のトレーニングの成果がついに打撃にも』

出た、と言うことにはしておきましょう』

『まあ、そういうことにはしておこう。続くバッターは8番。紬だな』

「鈴、大丈夫!? 落ち着いてね!」

「と、当然だっ!」

先頭打者にいきなり長打を打たれたせいか、鈴もかなり動揺しているみたいだ。キャッチャーの理樹が慌ててケアをしていた。

「チャンスよ紬! 頑張って!」

「むぎー!」

静久の声援を受けて、紬も初球から積極的にバットを振っていく。直後に快音が響く。

「うおおおおおー!」 しまったあああー!」

紬のおっぱい打法でレフト線ギリギリへ打ち抜かれたボールは三塁を強襲。そのまま真人のエラーを誘い、その間に天善がホームイン。すごい。これでもう1点返した。

「やりました!」

「紬、ナイスバッティングよ!」

静久は一塁ベース上でピョンピョンと飛び跳ねて喜びを表現する。紬を労いつつ、生還してきた天善とハイタッチを交わしていた。天善、めちやくちや嬉しそうだ。

そしてまだノーアウト。まだまだ勢いは止まりそうにない。

『鳥白島チャーハンズ、打者二人で1点をもぎ取りました。これで2-5です。どうやら、鈴さんのボールにも慣れてきた感じでしょうか』

『恐らくそうだろう。この調子でどんどん反撃するぞ』

心なしか、のみきの声が弾んでいる気がする。それに同調するように、観客席も大いに盛り上がる。

『チャンスが続く中、続くバッターは9番、夏海ちゃんです』

「なつみ、いくぞっ……てりやっ!」

夏海ちゃんに対して投球するものの、やっぱり動揺しているのか、鈴の投球が定まらない。

ピッチャーの夏海ちゃんはそのような鈴の心境をよく理解しているのか、一度もバットを振ることなくフォアボールを選び、出塁した。これでノーアウト一、二塁だ。

『鳥白島チャーハンズのチャンスが続きます。未だノーアウト。打順は1番に戻り、蒼さんですね』

「今度はかっ飛ばすわよー!」

本日三回目の打席。一度バントがあつたとはいえ、まだ一本のヒットも打っていないということもあつて、蒼は打つ気満々だった。

「むむ……しねっ!」

対する鈴は、迷いながらの投球だった。蒼がそれを見逃すはずがない。

「見えた! うりやあっ!」

初球から二球続けて外れた後の、三球目。高めに飛んできたストリートを打ち返した。レフトとセンターの間に落ちる長打だ。この間に紬がホームに帰還して、もう1点を加える。

更に打者の蒼が二塁、夏海ちゃんが三塁へと到達する。

「うう……」

鈴が焦っているのがわかる。次は藍の打席だし、このまま一気に畳みかけるチャンスだ。

「タイム!」

……その時、恭介が高らかにそう宣言していた。審判が試合を止めると同時に、リトルバスターズの面々がマウンドに集まってきた。このタイミングで間を取るなんて。さすが、やり方が上手い。

恭介たちはグラブを口元に当てながら相談をしていたけど、一方の俺たちは反撃の機運が高まっているということもあつて、ベンチではが非でも盛り上がっていた。

「やったな。これで3―5だぜ?」

「ああ、このチャンスを逃す手はないよな」

「うまくいけば、この回で試合をひっくり返せるかもしれないぞ」

良一と俺、そして天善の三人でそんな話をしていた。さつきまでの

空気がウソのように、ベンチの雰囲気は良い。

「でも、まだ樂觀視しちや駄目だよ。逆転したわけでもないんだから」
そんな俺たちに、しろはが釘を刺してくれていた。確かに、まだ浮足立つちやいけない。

「それこそ、捕らぬ狸のなんとやらよね」
「ポン？」

静久の言葉を聞いて、ベンチの下からイナリが顔を覗かせていた。いつの間にか、イナリも応援に駆けつけてくれたらしい。

「……プレイ！」

やがてタイムが明け、リトルバスターズの守備陣が定位置に戻る。

『タイムが明けまして、試合再開です。続きますのは2番。藍さんです。』

『チャンスは続いているぞ。藍、頼む』

「……てりやつ！」

のみきの実況が響く中、投球モーションに入った鈴は急に身体の向きを変え、三塁へ向けて牽制球を投げる。

「あー！」

「三塁、牽制アウト！」

直後、三塁塁審の斉藤さんの手が上がる。

夏海ちゃんもタイム明けで完全に虚を突かれたらしい。これはしてやられた。

「なつみ、おかえしだっ」

三塁手の真人からボールを戻されながら、鈴が誇らしげな顔をしていた。

「うう、やり返されてしまいました……」

夏海ちゃんががっくりと肩を落としながら、ベンチに戻ってきた。四回の表に夏海ちゃんが鈴を牽制アウトにしていたし、そのお返しのもりなんだろう。これで、ワンアウト二塁へと変わる。

「……いくぞ、あい。えい！」

それから藍に対峙した鈴の球筋は、先程までとは見違えるものに

なっていた。藍はわずか三球で追い込まれてしまう。

「これで、どうだっ！」

「こ、このっ！」

続くボールは外側から急激に内角に向かってきた。藍は苦し紛れにバットに当てる。

しかし、その打球は力なくショート方向へ転がる。

「うむ。真人少年、行くぞ」

「ほい、タッチ！ そのまま行くぜ、謙吾！」

「おうとも！」

ショートの来ヶ谷さんがそれを捕球し、三塁の真人に送る。そのまま突っ込んできた蒼をタッチアウトにした後、一塁の謙吾へ送球する。これで藍もアウトにされ、ダブルプレーが成立する。見事な連係だった。

「スリーアウト！ チェンジ！」

あつという間にチャンスが潰えてしまった。なんてこった。

「最後の球がすごくブレていて、芯を外されてしまいました。ナックルボールみたいですね」

ベンチに戻ってきた藍が、苦虫を噛み潰したような顔でそう口にしていた。

「いや、あれはニヤツクルだ」

そしてたまたま通りかかった恭介が何か言っていた。よくわからないけど、夏海ちゃんと同じ球種を使ってきたみたいだ。

「同じ球を使われるなんて、悔しすぎます！ 今度は三者凡退に抑えてみせますよ！」

なんだろう。夏海ちゃんがすごくポジティブになっている。明らかに変わった感じだ。

		1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	—	5	
鳥白島チャーハンズ	0	0	1	2			3

『なんという連係プレーだ。反撃モードが一気にしぼんでしまったぞ』

『どうですか？ リトルバスターズの連携もなかなかのものでしょうか？』

『ああ、あれは正直脱帽だな……』

『……それでは最終回。五回の表、リトルバスターズの攻撃です』

『先頭打者は3番、直枝からだな。皆、相手は好打順だが、頑張って抑えてくれ……』

もはや実況の二人も、自分たちのチームへ対する思いを隠そうとしなくなった。

でも、俺たちとしてはここは抑えないと。最終回裏の攻撃は3番の良一から始まるとはいえ、これ以上点差を広げられたら、なかなかに厳しい。

そんなことを考えながら、キャッチャーミットを構える。

「直枝さん、いきますよー！」

夏海ちゃんは意を決して、ナックルボールを投じる。初球は打ち損じ、ファールだった。

理樹は二打席続けてバントだったし、まともに対峙するのはこれが初めてだ。とりあえず、外角に攻めよう。

「ストライク！」

「ええっ!？」

二球目は外角低めのきわどい所に決まった。これでツーストライクだ。

「……えい！」

続く三球目は外角高めに外れた。続く四球目。

「……えい！」

「ストライク！ バッターアウト！」

今度は内角のギリギリいっぱいになックルが決まった。微妙な所だったけど、球審の斉藤さんの手が上がり、理樹を三振に切って取る。

「とほほ……あのナックル、すごく打ちにくいね……」

理樹はそんな言葉を残してベンチへと下がっていった。首尾よく、

これでワンアウトだ。

『直枝さんを三振に抑えましたか。ですが、続くバッターは4番、宮沢さんです』

西園さんに呼ばれながら打席に立ったのは謙吾。相変わらずオーラがすごい。

「……いきますよー！ えいー！」

一呼吸おいて、夏海ちゃんが外角に向けて一球を投じる。

「ふっ、ここで打つのが4番と言うものだ。メーローン！」

しかし、その球を打ち返された。快音を響かせながら、鋭い打球がセンター方向に飛ぶ。これはまずい。

「うおおおおおー！ー！」

その時、良一が滑り込みながら打球をキャッチした。ボールは地面スレスレ。超ファインプレーだった。

「三谷の坊主、いいぞー！」

「いつも脱いでるだけの男じゃねーんだなー！」

観客席の端、大漁旗の下辺りから歓声が聞こえる。おそらく漁業関係の皆さんが集まっているんだろう。

「……やりますね。良一ちゃん」

「見直したろー！」

良一の気迫あふれるプレーを藍が称賛していた。これでツーアウトだ。

『三谷さん、ファインプレーでしたね。あれが抜けていれば大きなチャンスだったんですが。むぎぎぎぎぎ』

『悔しいのはわかるが、西園さんも紬の真似はやめてあげてくれないか』

『……失礼しました。ツーアウトにはなりましたが、続くバッターは5番。二木さんです』

『彼女は前の打席で夏海ちゃんからホームランを放っている。非常に怖い選手だな』

正直、今日は4番の謙吾より怖い存在となっている佳奈多が打席に立つ。どう抑えようか。

「佳奈多さん、今度は抑えてみせますよ!」

「いいわ。またホームランにしてあげる」

対する夏海ちゃんは勝負する気満々だ。その様子を見て、俺も及び腰の考えを打ち消した。

佳奈多と勝負する覚悟を決めて、ミットを外角低めに構える。夏海ちゃんもその様子を見て、大きく頷く。

「行きますよ……えい!」

一球目。外角ギリギリを狙ったナツクルは外れて、ボールだった。「えい!」

続く二球目。同じくナツクル。今度はバットに当てられたけど、ファールだった。

「えい!」

続く三球目は、また外れてしまった。これでツーボールだ。

「えい!」

四球目はさっきとは逆に内角を狙ってみる。これもボール判定だった。惜しい。スリーボールだ。

「……えい!」

夏海ちゃんが大きく息を吸ってから投じた五球目。俺がミットを出していた場所とは若干ずれた場所に決まったけど、それが功を奏したのか、ストライク判定だった。これでフルカウント。なんとか追い込んだ。

「……これで決めます! えい!」

投じた六球目。夏海ちゃん渾身の一球だった。

「……貴女の決め球はナツクル。わかってるわよ」

佳奈多はそのボールの軌道を読み、タイミングを合わせてバットを振る。

しかし、最後のボールは地面をワンバンするくらい低いフォークだった。バットを振った佳奈多は途中で球種に気づいたみたいだけど、一度振り出したバットを止まらず。そのまま空を切る。

「……やるじゃない」

「空振り三振！ スリーアウト！ チェンジ！」

「やったぁー！」

夏海ちゃんからガッツポーズ出た。宣言通りの三者凡退。これは良い調子かも。

	1	2	3	4	5	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	5
鳥白島チャーハンズ	0	0	1	2	—	3

『それでは五回の裏。鳥白島チャーハンズの攻撃です。先頭バッターは3番、三谷さんですね』

「よし、いくぜ！」

名前を呼ばれ、気合十分で良一が打席に向かっていく。最終回の先頭打者だし、ここは頑張ってほしい。

「良一ちゃんは未だノーヒットですか。不甲斐ないですね」

そんな背中を見ながら、藍がぼそりと呟いていた。

「……しようがないですね。夏海ちゃん、ブーストかけますか」

「ええっ、本当にやるんですか？」

夏海ちゃんがえらく動揺しているけど、藍の言うブーストって何だろう。

「勝利のためですよ。頑張ってください」

「わ、わかりました。勝利のためですもんね」

夏海ちゃんが意を決して、良一の方へ向き直る。そして大きく息を吸う。

「……良一おにーちゃん、頑張つてー！」

「うおおおー！ にーちゃん頑張るからなー！」

ブーストがかかった。

「パーパーッ！」

そして打った。

レフトとセンターの間に落ちる長打だ。良一は一気に三塁まで進

み、いきなりノーアウト三塁と大チャンスを迎えた。

『これまでノーヒットだった三谷さんがスリーベースヒットを放ちました。鳥白島チャーハンズの勢いが止まりません』

『いや、打ったことは素直に褒めてやりたいが……直前に何やら怪しい発言が聞こえたような……?』

『野村さん、気にははいけません。それより、次のバッターは4番、久島さんですよ』

『そ、そうだな。鷗、ここで一発出れば、たちまち同点だぞ』
「まかせといてー!」

鷗のこれまでの成績を顧みれば、のみきの言葉も決して非現実的ではない。

「頼んだぞ、鷗!」

「カモメさん、頑張ってください!」

犠牲フライでも一点と言う場面に、俺たちのベンチをはじめ、観客席も湧きに沸く。

……そんな中、キャッチャーの理樹が横に動いた。

そして、鈴は明らかなボール球を投じていく。どうやらこれは、敬遠の流れみたいだ。

観客席からはブーイングに近い声が聞こえて来るけど、鈴は鷗にいいように打たれてるし、今は一塁が空いてるし、これも当然の作戦だった。

「ねえねえ、このボールって打つても良いの?」

「え、いいけど……?」

その時、鷗がベンチの方を向いて、そう聞いてきた。別に敬遠のボール球を打つちゃ駄目ってルールはなかったはずだ。無条件で一塁に進めるし、わざわざ打ちに行く人もいないと思うけど……。

「それじゃ、冒険してみよう! てりやー!」

次の瞬間、鷗は無理矢理位置を合わせて、敬遠のボール球を打った。うそだろ、あれって打てるもんなんだ。

「なんだとおう!」

その打球はファーストを守る謙吾の横を抜ける、鋭い当たりだった。まさか打っては来ないだろうと油断していたらしい。いや、普通は打って来ないけど。

「よっしやー！ー！」

何にしても、鷗の打球はヒットとなり、これで三塁走者の良一が生還した。鷗は例によって一塁で止まる。依然、ノーアウトだ。

「にーちゃんやったぞー！ー！」

ベンチに戻ってきた良一が夏海ちゃんに抱きついていていた。夏海ちゃんは苦笑いを浮かべてたけど、この際目をつぶろう。

『ここで鳥白島チャーハンズが1点を返しました。これで4ー5です』

『ついに1点差だぞ。更にノーアウト一塁だ。迎えるバッターは5番のしろは。ここで長打が出れば、一気に同点だぞ』

「だから、のみきもプレッシャーかけないで」

先程と同じように小さな声で何か言いながら、しろはが打席に立つ。

「むむむ……」

対する鈴は投球に苦しんでいるようだった。鷗もそうだけど、どうやら、チャーハン打法のしろはも苦手らしい。

「いくぞっ……ライジングニャットボール！」

「……ほいっ！」

鈴は考えた結果、初球から果敢に攻める。しかし、しろははその初球をしっかりと打ち返す。チャーハン打法はついにライジングニャットボールですら捉えてしまった。

「うわああああー！ー！」

鈴の叫びと共に、ボールはセンター方向へ一直線。そのまま葉留佳の頭上を超え……。

「させるかあー！ー！ ジャー！ーンプー！」

……るかと思われたけど、葉留佳が全力のジャンピングキャッチ。何度目かわからないファインプレーで、チームのピンチを救う。

打撃はからつきしだけど、葉留佳の守備はやっぱりすごい。

『良い当たりでしたが、三枝さんの好プレーが出て、同点とはなりませんでした』

『ワンアウト一塁だが、まだチャンスは続くぞ。次のバッターは6番、鷹原だ』

……ここで俺の打席が回ってきた。

よく考えてみれば、ここで俺が下手をすれば、最悪ダブルプレーでゲームセットだ。どうしよう、すごく緊張してきた。

「天善ちゃんも良一ちゃんも、男子には声援作戦が効くみたいですし、羽依里さんにも同じ手で行きましょう」

例によつて、ベンチで藍がなんか言ってるけど、俺の耳にはほとんど入らない。今は打席に集中しないと。

「うりゃっ！」

鈴がボールを投げってくる。ボール球だと思って余裕で見送ったら、途中で起動が変わつて、ストライク判定だった。

「ほら、しろはちゃん、がつつと言っちゃってください」

「えええ、いいよ。そんなの、無理だよ」

「しねっ！ ライジングニヤットボール！」

……今度は目にも留まらぬ速さの剛速球だった。全く反応できずに、ツーストライクと追い込まれてしまった。

「四の五の言っていないで、言つてあげてください。早くしないと、羽依里さんが打ち取られてしまいますよ」

「は、羽依里、頑張つて！」

ベンチの方から、遠慮しがちにしろはの応援が聞こえた。

「……その程度では駄目ですね。もっと愛情のこもった言葉をかけてあげてください」

「えええ。えーつと、えーつと……」

「ほら早く！」

「……は、羽依里、打つて！ わ、私のために！」

……しろはの声が俺の耳に届いたのと、鈴がさつきと同じ剛速球を

投げてきたタイミングはほぼ同じだった。

「うおおおー！ー！」

俺は反射的にバットを振る。強い衝撃があつて、ライジングニャットボールの勢いをそのまま乗せた打球がセカンドの佳奈多を急襲する。

「あつー！」

その打球は佳奈多のグローブをはじき、センター方向へ転がって行く。

「おねーちゃん、ドンマイですよ！」

センターを転々とするボールを葉留佳がカバーし、二塁へ送る。ベースカバーについていた来ヶ谷さんが捕球するけど、すでに鷗は二塁へ到達していた。

もし、佳奈多に直接捕球されていれば、そのまま二塁に送られてダブルプレー成立。ゲームセットになるところだった。佳奈多には悪いけど、助かった。

いや、ここはしろはの愛がボールに届いたと言うことにしておく。

「……羽依里、変なこと考えてない？」

「全然そんなことないから」

しろはが何とも言えない顔をしながら俺を見ていた。なんにしても、これでワンアウト一、二塁。まだ終わらない。

『……一瞬、終わったと思ったぞ……なんとか首の皮一枚つながったみたいだな』

見ると、のみきは額の汗を必死に拭いていた。思いつきり冷や汗をかいていたらしい。

『ランナーが溜まった状況で、続くバッターは7番、加納さんです』

「よし、いくぞー！」

続いて天善がのみきに呼ばれ、バッターボックスに立つ。また静久からパワーを注入してもらおうだろうか。

「皆さん、ここは天善ちゃんに代打を使いませんか？」

その時、藍がベンチでそう進言していた。いつの間にか、監督代行でもやってくれているみたいだ。

「代打ねー。どうしようかしら」

「頼むー。ここは俺に行かせてくれー!」

ベンチの動きを見て、天善がバッターボックスからそう懇願していた。ブーストがあったとはいえ、前の打席でヒットも放っているし、本人もこのまま打席に立ちたいだろう。

「……天善ちゃんの代打、水織先輩にお願いしようと思っっているんですけど」

「はっ!。どうぞー!」

それを聞いた天善はどこからかタオルを取り出すと、丁寧にホームベースを拭いてからベンチへ戻ってきた。静久の名前が出た途端、ものすごい変わりようだった。

「じゃあ、私がパイ打ね。頑張るわよ!」

ずっとベンチで盛り上げ役に徹していた静久が、天善からバットを受け取って打席に立つ。何か言葉に違和感があったけど、まあいいか。

『ここで加納さんに代わりまして、代打。水織さんです』

『ついに来たか。おっぱい打法の申し子が』

『野村さん、言っていることの意味が解らないのですけど』

『私もわからない。気にしないでくれ』

思わず口に出してしまったのだろう。のみきが申し訳なさそうな声を出していた。

「さあ、鈴ちゃん。勝負よ!」

一方で、打席に立った静久は打つ気満々だ。ものすごく心強い。

「……代打はいいが、あのおっぱいはなんだ? 打つ時邪魔になるんじゃないのか?」

投球前に鈴が当然の疑問を口にしていた。

「まあ!? おっぱいが邪魔ですって!? 聞き捨てならないわ!」

「……っ!?!」

その言葉を聞いた静久がすごい剣幕で怒りを露わにしていた。あ

の鈴が気圧されている。

「……い、いくぞっ！」

そして、鈴と静久の勝負が始まった。

初球から二球続けてボール判定の後に、三球続けてファール。一球目はレフト線ギリギリ、二球目はライト線ギリギリ、三球目はまたレフト線ギリギリに飛ばしていた。

あれがおっぱい打法の神髄なんだろうか。あと一歩でフェアになる当たりばかりだった。

「なんであのおっぱいであれだけのバッティングができるんだ……ふしぎだ」

さすがの鈴も、次の一手に困っている感じだった。静久はその後も粘り、さらに二球ファールが続いた。

……続く八球目。鈴も手元が滑ったのか、かなり内角寄りに飛んだ。

「きやあ!?!」

あ、デッドボールだ。しかも、よりによって胸に当たるなんて。

「……って、あぶなっ!?!」

静久に当たったボールは、その豊満な胸に勢いよく弾かれて鈴を強襲。鈴が反射的に避けると、ボールはセンター方向にまで飛んで行ってしまった。

「ごめん」

鈴がきちんと謝る。そこまで強い球でもなかった気もするけど、静久は大丈夫かな。

「水織先輩、大丈夫ですか!?!」

「だ、大丈夫よ加納君。びっくりしたけど、全然痛くなかったわ」

突然の出来事に呆けている感じだったけど、どうやら大丈夫そうだ。

「えっと、この場合は一塁に進めば良かったのよね」

「……いや、二塁だ」

その時、球審を務めていた斎藤さんがそう告げる。デッドボールは

一塁進塁のはずだけど。

「島ルールだ。打者のおっぱいに当たったボールがその勢いで外野まで到達した場合、エンパイトルツーベースとなり、それぞれ二塁進塁が認められる」

つまり、静久が一気に二塁まで進み、それに押される形で俺が一塁から三塁へ。そして二塁の鷗が一気に生還する形となるわけか。

「おお、やったよー!」

島ルールの適応によって生還した鷗が喜びを爆発させながら本塁を踏む。更にワンアウト二、三塁と、一気にサヨナラのチャンスを迎えた。

『これで5―5。鳥白島チャーハンズ、ついに同点に追いついたぞー!』
のみきが試合経過を報告すると、会場がそれに応えるように盛り上がりを見せる。

『これはリトルバスターズは一転、サヨナラ負けの大ピンチですね』
『続くバッターは8番の紬だな。静久に続いて、おっぱい打法で試合を決めることができるか、見ものだな』

「紬ー、決めてちょうだい!」

二塁から静久がそう叫ぶ。

「ハイ! シズクを必ず生還させてみせます!」

静久を含めた大声援を受け、紬がそう返事をしていった。というか、三塁の俺が生還すればサヨナラ勝ちなんだから、二塁の静久が生還する必要はないんだけど。

「いくぞ、つむぎゆー!」

鈴は一瞬三塁の俺を見た後、紬の方を見据えて投球モーションに入る。

「……えい!」

「むぎー!」

……「球目、ファール。」

「うりやつ!」

「むぎゆー!」

……二球目もファール。三球目も同じく。すごい。紬頑張れ。
まるで静久の打席をもう一度見てみたいだった。さすが静久の
一番弟子だった。

「むぎゅー……」

粘りに粘った紬だったけど、六球目を打ちあげてしまい、セカンド
の佳奈多が捕球する。惜しい。これでツーアウトだ。

……よし、ここは勝負だ。

かなり深めの位置でボールが捕球されたのを見て、俺は三塁を飛び
出した。秘かに狙ってはいたし、これならフライの間に、十分にホー
ムを狙えるはずだ。

「おおっ、加藤さんこの、本塁へ走ったぞー！」

「いいぞ、いけー！」

俺の動きを見てか、観客席からも凄い声援が聞こえてきて、俺を
後押ししてくれる。

「させないわ……直枝、しっかりと構えていなさい！」

それを見た佳奈多はすぐさまボールを持ち変えると、恭介に劣らぬ
速度でホームへ返球してきた。これは、ギリギリの勝負になりそう
だ。

だけど、ここまで来たら俺だって引き下がれない。意を決してホー
ムベースへ滑り込む。

「うおおおおっ！」

理樹との壮絶なクロスプレーだった。本塁へ飛び込むと同時に砂
埃で視界が覆われ、一瞬何も見えなくなる。

「……本塁タッチアウト！ スリーアウト！ チェンジ！」

……球審の斉藤さんは、冷静にそうジャッジを下していた。

「エラーしちゃった責任は取らなきゃね」

その判定を聞いて、佳奈多は誇らしいような、どこか安心したよ
うな顔をしながら、ベンチへ戻っていった。

俺たちの反撃は、惜しくも同点止まりだった。くそ、もう少しだっ
たのに。

「……羽依里、惜しかったね」

ベンチに戻ると、しろはが慰めに来てくれた。

「ありがとう。しろはの言葉、届いたよ」

「あ、あれは別に大した意味はなくて、藍に言われたから仕方なくだし！」

「うんうん。わかってるわかってる」

「絶対わかってないし！」

わたわたと説明をしてくれるしろはに笑顔で返事を返す。うん。微笑ましい。

『……鳥白島チャーハンズが土壇場で同点に追いつきました。これから10分間の休憩をはさんで、試合は延長戦に入ります……』
気がつけば、そう放送がかかっていた。

0-5の絶体絶命の状況から、皆の力でなんとか延長戦まで持ち込むことができた。

もう少しでリトルバスターズを超えられるかもしれない。あと少しだけ、皆の力を貸して欲しい。

		1	2	3	4	5	6	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	—	5	
鳥白島チャーハンズ	0	1	2	2	2		5	

第三十七話・完

第三十八話 8月22日（後編）

		1	2	3	4	5	6	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	—	5	
烏白島チャーハンズ	0	0	1	2	2			5

五回裏の攻撃で俺たちはなんとか同点に追いつき、勝負は延長戦へと突入する。

延長戦を始める前に10分間の休憩時間が設けられ、その際に徳田スポーツから両チームへ、飲み物の差し入れがあった。

氷水で冷やされていたらしいスポーツドリンクは冷たくて、すごくありがたかった。

「……よし皆、このまま押し切ろう！」

「おーー！」

休憩時間の最後に、もう一度円陣を組んで気合いを入れた後、俺たちは各ポジションへ散っていった。

ちなみに、前の回に代打で打席に入った静久は、天善に代わってそのままショートの守備についてもらった。

『お待たせしました。それではただ今より、延長戦を開始します。六回表、リトルバスターズの攻撃。迎えるバッターは6番、井ノ原さんです』

「よし、今一度、筋肉打法だ！」

西園さんに名前を呼ばれ、真人がブンブンとバットを振りながら打席に入る。相変わらず、すごく逞しい筋肉だ。

「（夏海ちゃん、ここは低めに集めよう）」

キャッチャーの俺はそうサインを送り、ミットを低めに構える。夏海ちゃんもそれに頷き、投球モーションに入る。

「行きますよ！ えい！」

「……ふん！　ありや!？」

真人がバットを振る。強い風切り音が聞こえてくる程の強烈なスイングだったけど、空振りだった。

「えいー！」

続く二球目。夏海ちゃんには先程と同じコースを狙って投げてもらう。今度は見極められ、ボール判定だった。

そして三球目。俺は若干内側にミットを構える。

「……よし、もらったぜえええー！」

しかし、そのボールを狙われた。

真人の筋肉から生み出されるパワーによって半ば強引に打ち返されたボールは、青空に高々と舞い上がった後、観客席を遥かに超えていく。

「うひゃー！　すごーい……！」

ライトの鷗も一度はボールを追いかけたものの、あまりの飛距離に打球を見送ることしかできなかった。本当に、目が覚めるようなホームランだった。

「いやっほう！　見たかよ、謙吾！」

その結果を受けて、真人はベンチに向かって高らかに叫びながら、ダイヤモンドを回る。俺も夏海ちゃんも、ただ笑うしかなかった。それくらい、気持ちの良い飛びっぷりだった。

『ま、まさかの先頭打者アーチだったな。これで5―6。再びリトルバスターズがリードしたぞ』

『鳥白島チャーハンズはいきなり出鼻をくじかれましたね。続くバッターは7番。三枝さんです』

実況のみきが動揺の色を隠せない中、次の打者である葉留佳がバッターボックスに立つ。

「ほらほらセンターバック！　二者連続ホームランだぞー！」

びしっと予告ホームランのポーズまで決めていた。あの自信はどこから出てくるんだろう。葉留佳、まだノーヒットなのに。

それより、真人にホームランを打たれた夏海ちゃんのメンタルは大

丈夫だろうか。

俺はそう思っ、夏海ちゃん表情を見る。まっすぐに葉留佳を見据えているし、影響はなさそうだ。

「(夏海ちゃん、ここだけど……)」

夏海ちゃんと再びサイン交換をする。あえて、ここはど真ん中にナックルを投げてもらうことにした。

「……葉留佳さん、行きますよー！」

「とーとーうー！　って、ありやーとー!?!」

そして俺たちの思惑通り、葉留佳は初球のブレ球に手を出し、大きく打ち上げてしまう。

「おおー。いらっしやいませー」

そのボールはレフト方向へ飛び、紬が笑顔でキャッチしていた。これでワンアウトだ。

『守備はすごいですが、相変わらず打撃はからつきしの三枝さんはレフトフライに終わりました』

「うう、みおちんの言い方がヒドい……」

葉留佳は泣きながらベンチへ戻っていった。西園さんって、時々心に刺さるようなこと言うよね。

『続くバッターは8番。能美さんのようですが……ここでリトルバスターズも代打を使うようです』

「え、代打!?!」

確かにクドも打ててないから、この場面での代打は十分ありだと思う。でも、誰がいたっけ。

「能美に代わって、代打!　小毬！」

「ようしっ。がんばりますっ！」

困惑していると、恭介によって小毬さんの代打が宣言された。彼女の存在をすっかり忘れていた。

「小毬さーん、私の代わりに、頑張ってくださいーい！」

「頼んだぞ！　小毬ー！」

ベンチの皆に応援されながら、小毬さんが打席に立つ。どうしよ

う。彼女の実力は未知数だ。

夏海ちゃんも、どうしましょう？　みたいな顔で俺の方に視線を送っていた。

「……………うん。夏海ちゃん、ここは落ち着いて行こう」

よく考えてみたら、打者がクドから小毬さんに代わったからと言って、そこまで劇的に打撃力が上がるとは思えない。

俺はミットを低く構えて、夏海ちゃんのボールを待つ。

「……………えい！」

第一球はフォークボールだった。

「ほわあっ!？」

そのボールを小毬さんは豪快に空振っていた。いきなり変わった軌道に驚いたのか、思いつきり尻餅をついていた。

「え、ちよつと小毬さん大丈夫？」

ボールを捕球した直後、俺は思わず小毬さんに話しかけていた。

「う、うんー。びつくりさせてごめんねえ」

立ち上がった小毬さんはお尻についた砂をはたき落としながら、苦笑いを浮かべていた。正直、彼女が運動できるイメージはない。どちらかというと、練習場の端っここで談笑しながらお菓子を食べているほうがしつくりくる。

「さあ、なつちゃん、どうぞ投げてきてくださいー！」

小毬さんは素振りを何度かして、気合を入れ直していた。本人がそう言うんだし、こつちも試合を進めよう。

そう思いながらミットを構える。それを見て、夏海ちゃんが投球モーションに入る。

「……………えい！」

「はいっー！」

夏海ちゃんの投げた直球を、小毬さんが打ち返した。しかし、そのボールは力なく、転々と内野を転がる。これはショートゴロだ。

「蒼ちゃん、行くわよー！」

待ち構えていた静久がそのボールを捕球し、一塁へと投げる。これでツーアウト……………つてあれ!?　小毬さん速い!?

「一塁、セーフ！」

一塁塁審の斉藤さんがそう判定を下していた。特に静久の送球が遅れたわけでもないのに。純粹に小毬さんの足が速かった。

「やったよー」

一塁上の小毬さんはリトルバスターズのベンチに向かって、朗らかに手を振っていた。もしかして、厄介なランナーを出してしまったかもしれない。

『よもや、彼女の足があそこまで速いとは思わなかったぞ。思わぬ伏兵だな』

『一塁にランナーが出たところで、次のバッターは9番、鈴さんです』
『むむむ……次もなかなかに厳しい相手だな。ここを併殺に抑える事ができれば最高なんだが……』

のみき、簡単に言ってくれるけど、併殺ってなかなか難しいんだから。

「りんちゃーん、ファイトですよー」

打席に立つ鈴を、一塁から小毬さんが応援していた。あの状況、すごくやりにくいだろうな。

「……こい、なつみ」

一塁の方に一度だけ手を振り返して、鈴がバットを構える。もう何度目の勝負になるだろうか。

「鈴さん、行きますよー。えい！」

しかし、相手が鈴と言うこともあって、夏海ちゃんもどうしても慎重になる。ギリギリを狙ってボールを投げ続けるけど、三球続けてボール判定になってしまった。

「むむむ……えい！」

「もらった……！ ほわちやーっ！」

そして、明らかに悩みながら投じた四球目。ど真ん中のナックルボールを狙い打たれた。

「うおおおーっ！」

センターとライトの間に落ちるヒットだった。良一が全力で追

かけて捕球するけど、すでに小穂さんは三塁へ到達。鈴木も一気に二塁へ到達していた。これでワンアウト二、三塁。ピンチが広がってしまった。

『ま、また打たれてしまったか……ああもヒットを量産するピッチャーというものも、なかなかいないんじゃないか?』

『ポジションの関係で9番打者になってはいますが、3番打者辺りでも十分通用する打撃成績ですね』

『全くだ。こつちとしては下位打線だからと気が抜けないじゃないか……』

『野村さんの心配はさておき、次は打順が先頭に戻りまして、1番、来ヶ谷さんです』

……まずい。このピンチで来ヶ谷さんなのか。のみきじゃないけど、本当にリトルバスターズの打線は気が抜けない。

「……そうです。皆さん、ここはまたゆいちゃん作戦で行きましょう！」

その来ヶ谷さんが打席に立つのを見て、藍が皆にそう呼びかけていた。しばらくして、再び観客席を含めた会場全体が『ゆいちゃん』コールに包まれる。

「ゆーいちゃん！」

「ゆーいちゃん！」

「ゆいちゃん頑張ってー」

いつの間にか三塁の小穂さんまで混ざっていた。なんにしても、これは着実に来ヶ谷さんにダメージを与え、その集中力を乱しているはずだ。今のうちに仕留めないと。

俺はそう考えつつ、夏海ちゃんに投球を促す。

「はい！ いきますよ……えい！」

すぐに投球モーションに入り、第一球。外角ギリギリを狙うナックルボールだ。

「……フツ。残念だが、今回は対策として耳栓をしているぞ」

来ヶ谷さんはそう言うのと、初球を華麗に打ち返す。

「あー！」

俺と夏海ちゃんは同時に打球の行方を追う。勢い良く打ち返されたボールは、ショートの前で静久の頭上を越えていく。これはまずい。

「帰ってきたよー！」

ボールが地面に落ちたのを見て、三塁を蹴った小穂さんがホームイン。これで2点差だ。

「鳴瀬さん、いくわよー！」

レフトの袖からボールを受けた静久が三塁へとボールを送るけど、鈴は余裕でセーフだった。これでワンアウト一、三塁だ。

『5ー7。これで2点差か……皆、頑張ってくれ……』

のみきの祈るのような実況が聞こえ、同時に観客席からの声援にも悲痛なものが混じる。確かに2点取られたのは痛いけど、取られてしまったものはしょうがない。切り替えて行こう。

『続くバッターは2番。恭介さんです』

それにしても、相変わらず怖いバッターが続く。恭介にも今日はかなり打たれているし。

「恭介おにーさん、いきますよー！」

敬遠という手段も一瞬頭をよぎったけど、夏海ちゃんは勝負する気満々みたいだ。ここは俺も、夏海ちゃんの心意気を買うことにしよう。

「えいー！」

夏海ちゃんが意を決して投じた一球目はストライク。続く二球目、三球目は共に際どい位置だったけど、ボール判定だった。

恭介は選球眼があるし、どうしてもボール球が先行してしまう。

「フハハハハハ！」

その時、不敵な笑いが聞こえた。

見てみると、一塁にいたはずの来ヶ谷さんが一瞬で二塁へ移動していた。これでワンアウト二、三塁だ。

「え、いつの間に盗塁したんですか？」

「ただのイリユージュンだ」

ベースカバーにつくはずの藍も動けず、俺や夏海ちゃんも全く反応できなかった。あの常人離れた運動能力は一体何なんだろう。

「むぎやぎやぎ……」

夏海ちゃんも悔しがっていたけど、気にしてもしようがない。後続を抑えればいいんだ。

「……えいー」

一呼吸おいての、四球目。恭介は低めのナックルにタイミングをずらされ、大きく打ち上げていた。

「……しまった。これは駄目か」

ちやうど俺の真上にボールが来たので、マスクを外しつつしっかりと捕球。なんとか恭介を打ち取った。夏海ちゃんも大きく息を吐いて、これでツーアウトだ。

『なんとか恭介氏を打ち取ったか。息が詰まるな、この試合は』

『息が詰まっているのは野村さんだけですよ』

二人のやりとりに観客席から笑いが漏れる。この二人のやりとり、段々と漫才みたいになってきた。

『次のバッターは3番の直枝さんですね。今のところノーヒットですが、頑張ってください』

『西園さん、それ言わないでよ。気にしてるんだからさ……』

ぶつぶつ言いながら理樹がバッターボックスに立つ。言われてみれば、確かに彼もノーヒットだった。

「いきますー！ えいー！」

そして夏海ちゃんの投じた一球目は、内角ギリギリに決まるナックルボール。先の打席で、理樹にナックルが有効だったのを覚えているみたいだ。

「えいー！」

続く二球目。同じくナックルボール。理樹はそれをうまく打つも、ボテボテのサードゴロだった。

「……ほい」

しろはが捕球して、そのまま一塁へボールを送り、理樹をアウトに

する。これでスリーアウト。なんとかこれ以上の失点は防ぐことができた。

	1	2	3	4	5	6	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	2	7
鳥白島チャーハンズ	0	0	1	2	2	—	5

『それでは六回裏。鳥白島チャーハンズの攻撃です』

『せっかく追いついたというのに、重たい2点を加えられてしまったな』

『後がない鳥白島チャーハンズ、先頭打者は9番、夏海ちゃんからですね』

『例えデッドボールになろうとも、塁に出てきます！』

延長戦だから、この回に追いつけなければ当然そのままゲームセットだ。それを理解している夏海ちゃんは決死の覚悟でバッターボックスに立つ。

そして相手投手に鋭い眼光を向けるけど……そこに鈴の姿はなかった。

「あれ？」

『……リトルバスターズ、ここでピッチャーの交代をお知らせします。鈴さんに代わりまして、小毬さんです』

その時、西園さんのアナウンスが響く。

見ると、鈴はクドに代わってレフトの守備についていて、鈴の代わりに小毬さんがマウンドに上がってくる。

「え、小毬さんって投げれるんですか!？」

「うんー。りんちゃんに習って、ほんのちよつとだけね」

小毬さんが投球練習をするため、球審の指示で夏海ちゃんが一旦打席を離れる。

……それにしても、これは予想外の展開だ。まったくデータがない。

「理樹君、リードよろしくねえー」

「うん。小毬さん、ゆっくりでいいからね！」

その後、数回の投球練習をした後、試合が再開される。

小毬さんの投球、どんな感じなんだろう。俺たちはベンチから、固唾を呑んで夏海ちゃんの打席を見守っていた。

「……はいっ！」

小毬さんが振りかぶって、第一球。

「ストライク！」

すごく微妙な位置に決まったけど、球審の斉藤さんによると、ストライク判定。

球威は夏海ちゃんのそれと同じくらいだけど、コントロールは上かもしれない。

「はいっ！」

「えい！」

「……はいっ！」

「えーい！」

その後も、夏海ちゃんは小毬さんのボールを必死に見て、時にはファールで粘りながら、実に8球ものボールを小毬さんに投げさせていた。

もしかしなくても、夏海ちゃんは鳥白島チャーハンズの皆に小毬さんの投球を見せるため、頑張ってくれてるんだろうか。

「……ストライク！ バッターアウト！」

「あう……」

続く9球目。小毬さんの投球が内角の絶妙な所に決まり、三振に倒れた夏海ちゃんがベンチに戻ってくる。

「夏海ちゃん、気にしないで！」

「は、はい！ ありがとうございます！」

夏海ちゃんはベンチでは努めて明るく振る舞っている。俺たちもそれに合わせるように、空気を明るくする。

「ここからは打順もトップに戻るし、蒼がやってくれるよ」

「そうです。蒼ちゃんにお任せですよ」

「ちよつと二人とも、それってすごいプレッシャーなんだけど」

蒼が苦笑いを浮かべながら、バットを手に立ち上がる。

「あ。蒼さん、ちよつと待つてください」

そんな蒼を、夏海ちゃんが呼び止める。

「え、どうしたの？」

「他の皆さんも聞いてください。小毬さん、たぶんチェンジアップしか投げられないんだと思います。あれだけ投げても、球種を変えてきませんでした」

「そうなのか？」

「はい！ コントロールはすごく良いですけど、球筋は変化しないので、惑わされずによく狙えば打てるはずです！」

そして、投手視点からそう教えてくれた。これは俺たちにとって、心強いアドバイスだ。

「……ありがと。夏海ちゃんの助言、無駄にはしないから！」

助言を受けた蒼は、夏海ちゃんに笑顔を向けながら、打席へと向かっていった。これは小毬さんも、最初に夏海ちゃんを相手にしたのはアンラッキーだったかもしれない。

『粘りましたが、小毬さんが夏海ちゃんを三振に切って取りました。これでワンアウトです』

『だが、これで烏白島チャーハンズも打順1番に戻り、蒼の打席だ。次はそうはいかないぞ』

「あおちゃーん、お手柔らかにねー」

小毬さんがマウンドから蒼に手を振っていた。本当に独特な空気を纏ってる人だ。

「なんだか調子狂うわね……うりゃあっ！」

そんな中、蒼は夏海ちゃんからの助言を元に、二球目のボールを狙い打った。

「ほわあっ!？」

打たれた小毬さんは目をドーナツツのように丸くしながら打球の行く先を追う。ボールはセンター前にポテンと落ち、その間に蒼は一塁へ滑り込む。これでワンアウト一塁だ。

『鳥白島チャーハンズ、ランナーが出ました。続くバッターは2番、藍さんですね』

『ああ。藍には何があっても、蒼に続いてもらわないとな』

「言われなくてもそのつもりです」

そうは言っているけど、藍はバントの構えだった。ツーアウトにしても、確実に得点圏にランナーを進ませる作戦で行くんだろうか。

「な、なんだあ……バントなら、そこまで怖がらなくてもいいよねえ。あいちゃん、いきますよー」

その様子を見て、小毬さんは少し安心した様子で一球を投じる。

「……かかりましたね。ていつー！」

次の瞬間、藍はバントの構えを解いて、思いつきバットを振る。いわゆる、バスターと言うやつだった。

「えええー…… あいちゃん、それひどいー……！」

小毬さんの絶叫が響く中、大きく飛んだ打球はレフト前に落ちる。

藍が一塁に到達すると同時に蒼も二塁へ進み、これでワンアウト一、二塁だ。

『鳥白島チャーハンズ、チャンスが広がりました。迎えるバッターは3番、三谷さんです』

「よし、また打ってやるぜー！」

『頼んだぞ良一！ ここで決めて男になれ！』

実況席に座っていることを忘れてるんじゃないかってくらい、のみきが気合いを入れて良一を応援していた。まあ、気持ちはわからなくもないけど。

「良一君、いきますよー……はいっ！」

理樹の指示だろうか。小毬さんはボールを低めに集めてきた。

対する良一はそのボールを二球続けて見逃す。初球は外れ、二球目はストライク判定だった。

「ああっ!？」

その二球目のボールを受けた直後、理樹の声が響き渡った。見ると、それぞれ一塁と二塁にいた空門姉妹が揃って盗塁をしていた。まさかのダブルスチールだった。

「蒼ちゃん、お見事です」

「藍もさすがねー。タイミング、ピッタリじゃない」

「……羽依里、いつの間に指示を出したんだ？ 思いつきりやられたぞ」

恭介がそう感心していたけど、俺は別に指示なんて出してない。まさに、双子の以心伝心が為せる技だった。

何にしても、これでワンアウト二、三塁。更にチャンスが広がった。

「空門さんちの双子ちゃん、やるねえ」

「三谷のせがれ、ここで一発出れば、サヨナラだぜ！」

長打で同点、ホームランでサヨナラという場面がやってきたせいか、おのずと観客席のボルテージも高まっていた。

「……夏海ちゃん、良一ちゃんにブーストをかけるため、例のアレをもう一回お願いします！ 今度はより一層可愛らしく！」

「えええ、もう一回ですか!？」

そんな中、藍が二塁から叫んでいた。呼ばれた夏海ちゃんはベンチから飛び出して、思いつきり嫌そうな顔をしていた。

「早くしてください！ このままだと、最悪ダブルプレーで試合終了ですよ！」

ちよつと藍、縁起でもないこと言わないでほしいんだけど。

「わ、わかりました……が、がんばって、おにーちゃん♪」

「うおおおー！ー！ 妹よー！ー！」

またしっかりとブーストがかかったらしく、良一のバットが快音を響かせた。

「ほわあー！ー!？」

小穂さんが打球の行く先を見つめる。大きく飛んだボールはライ卜前に落ちる。

「くそっ……良一、やるじゃないか」

恭介がそのボールを素早く捕球し、一塁に投げるも……セーフの判定。その間に三塁の蒼が生還し、1点を返した。

藍も三塁まで進み、ますますチャンスが広がった。

「よーっし、あと1点よー!」

生還した蒼をハイタッチで迎えていると、ベンチの端ですすり泣く声が聞こえてきた。

「う、うう……」

「辛かったですね。ナツミさん。よしよし」

見てみると、夏海ちゃんが袖にすがりついて泣いていた。良一を打たせるためとはいえ、二度目となると、さすがに堪えたんだろうか。

そんな夏海ちゃんには悪いけど、妹ブーストのおかげでワンアウト一、三塁。最高の場面で4番の鷗を迎えることができる。

『リトルバスターズ、一転サヨナラのピンチを迎えてしまいました。そして迎えるバッターは4番。今日全打席でヒットを放っている、久島さんです』

『ちなみに、西園さんも冷静を保っているように見えるが、さつきから必死に汗をぬぐっているんだぞ』

『野村さん、バラさないでください。そう言う貴女こそ、六回の表には半分涙目だったじゃないですか』

この二人のチーム愛はこの際置いといて、ここは4番の鷗に試合を決めてもらうしかない。

「頼んだぞ、鷗!」

「期待してるわよー!」

「頼むぞ、助っ人外国人!」

ベンチから観客席から、期待に満ちた声援が送られる。鷗の今日の成績を見れば、それも納得だ。

「小毬さん、落ち着いて行こう！」

「り、理樹君、頼りにしてるからねえ……」

見た感じ、今回も塁を埋める作戦は取らないらしい。下手に敬遠していたら、前の打席みたいにもた敬遠球を打たれてしまうかもしれない。いいし。

「勝負だよ！ コマリマックス！」

「かもちゃん、いきますよ……はいっ！」

小毬さんが振りかぶって、第一球。

「てりやー！……って、あれー？」

……明らかに遅い球だったけど、鴬は空振っていた。

「はいっ！」

「今度こそー！……って、ありやー？」

どうしたんだろう。ライジンググニャットボールですら打ち返したはずの鴬が、小毬さんの投球に苦しんでいる。これでツーストライクだ。

「とーうりやー！……」

小毬さん渾身の一球……と言っても、半分すっぽ抜けた、超スローボールが外角ギリギリを狙って飛んでくる。

「えー！……い！」

鴬はそれも豪快に空振ってしまった、三球三振となってしまう。まさかの展開で、ツーアウトになってしまった。

「うう、ごめんさい……なっちゃんの助言も受けていたはずなのに」
鴬が心底申し訳なさそうにスーツケースを引きながら、ベンチに戻ってきた。もしかして鴬、速いボールはよく見えるけど、遅いボールは見えにくいとかあるんだろうか。鳥だけに。

『ま、まさか、4番の鴬が三振に倒れるとは……』

これまで全打席出塁していた4番の三振に、実況席でも動揺が広がっていた。

『これでツーアウト。いよいよ後がなくなってきましたね』

『西園さん、言葉の端々に喜びの感情が見え隠れしているぞ』

『き、気のせいです。さて、次のバッターは5番。鳴瀬さんですね』
「しろちゃん、お手柔らかにねー」

相手が誰だろうと、小毬さんは投球前に一声かけるようにしているらしい。常にニコニコ笑顔だし、ある意味すごいと思う。

「はいっー」

理樹がミットを下に構えたのを見て、小毬さんが第一球を投じる。

「……」

しろははその初球を見逃し、続く二球目。

「……ほいー」

センター前に鮮やかに打ち返した。小毬さんの投球に対しても、やっぱりチャーハン打法は有効みたいだ。結果、シングルヒットになり、これでツーアウト満塁だ。

『おお……これで満塁。一打で同点じゃないか』

『そ、そうですね』

さつきとは逆にのみきの語気が上がり、西園さんの声のトーンが下がっている。うん。実にわかりやすい。

「……なあ、これはいけるんじゃないか？」

「そうだな。次のバッターは誰だ？」

『見てくれ。観客席も今日一番の盛り上がりを見せているぞ』

のみきの言う通りだった。鳴が三振した時はどうなるかと思っただけど、満塁となったことで観客席も再び盛り上がりを見せている。ところで、次のバッターは誰だろう。この中で打席に立つのは、かなりのプレッシャーだと思っただけだ。

『この絶好機で立席に立つのは、6番。鷹原さんですね』

「……え、俺？」

どこことなく他人事に思っていたら、まさかの俺の打席だった。

「羽依里、頑張って！」

「羽依里さん！」

「羽依里！」

ベンチから仲間たちが応援してくれている。うん。ここは怖気づいてる場合じゃない。

俺は覚悟を決めて打席に立つ。今度は相手ピッチャーも変わっているし、なんとかして打ちたい。

「羽依里君、いきますよー……はいっ！」

初球。小毬さんのチェンジアップは、外角ギリギリに決まっていた。本当にコントロールが良い。

……これはもう一回、しろはの愛情パワーが欲しいかも。そう思いながら、一塁のしろはに視線を送る。

「……!?!」

それに気づいたのか、しろはは赤面しながら視線を逸らしてしまった。これは愛情パワーは無理っぽい。

「……はいっ！」

再び小毬さんのコントロールされた球が内角ギリギリに決まる。これでツーストライク。早々に追い込まれてしまった。

……こうなったら、俺もチャーハン打法を使うしかない。しろはがチャーハンを作る様子を思い出せ。あの手の動きが、チャーハン打法の原点だ！

俺は必死にその姿を思い浮かべる。しろはがチャーハンを作るところは、他の誰より見てきたはずだ。俺なら、脳内再生余裕だ！

「……よし」

かりそめだけど、脳内でチャーハン打法を修得した。俺は今一度気合を入れてバットを握りしめる。

「……はいっ！」

「……だ！」

続けて投じられた三球目。内角に飛んできたボールをジャストミートする。

「ほわあっ!?!」

小碓さんの悲鳴を受けながら、俺の打球はセカンドを守る佳奈多の頭上を越え、地面に落ちる。それを見た藍がホームベースに滑り込む。

『よし、藍がホームインだ！ これで7ー7。鳥白島チャーハンズ、再び同点に追いついたぞ！』

のみきの放送を受け、観客席が湧く。

その声援に後押しされるように、更にサヨナラのランナーである良一が本塁へと突っ込んでいく。

「させるかつ！ いくぜ、理樹！」

その様子を見て、恭介が拾ったボールを全力でホームへ投げ返す。「うおおおおおっ！」

……理樹がボールを捕球すると、良一が本塁へ飛び込むタイミン
グはほぼ同じだった。どっちだろうか。

「……本塁タッチアウト！ スリーアウト！ チェンジ！」

「ちつくしよー！」

球審の斉藤さんがそう判断を下していた。良一は心底悔しそうに地面を叩く。

恭介のボールは本当に好返球だったし、あれは仕方がない。

		1	2	3	4	5	6	7	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	2	—	7	
鳥白島チャーハンズ	0	0	1	2	2	2		7	

『……鳥白島チャーハンズ、サヨナラのチャンス逃しました』

『同点止まりだったか……皆、惜しかったぞ』

実況の二人からも緊迫感が伝わってくる。なかなか、凄いゲームになってきた。

『それでは最終回表。リトルバスターズ最後の攻撃です。よもや、ここまで長引くとは思いませんでした』

『本当だな。そろそろ試合開始から二時間が経とうとしている。お互いに疲労困憊といった状況だが、最後まで頑張ってくれ』

『そんな中、迎えるバッターは4番、宮沢さんですね』

「先程、真人に目の前でホームランを打たれているからな。ここは、俺も狙うしがあるまい」

そう言いながら、謙吾が打席に立つ。相変わらず、ものすごい威圧感だ。

「夏海ちゃん、ここはしっかり抑えて、裏の攻撃に繋げよう！」

「はい！」

夏海ちゃんは元気よく返事をして、投球モーションに入る。

「……あー！」

投げたと同時にそれとわかる、明らかに失投だった。さすがに一人で投げ続けてるし、疲れが出ちゃったのかな。

「もらった！ンメー……ン！」

そして、そのボールを謙吾が見逃してくれるはずもなく、思いっきり打たれた。白球は快音を残し、観客席の遥か向こうへと消えていく。

『六回に続いて、再び先頭打者ホームランだと……!?!』

『これで7―8。ここまで抑え込んでいた主砲の一振りがここで出ましたね』

まだホームランの余韻が残る中、ダイヤモンドを回り終えた謙吾がベンチでリトルバスターズの面々に迎ええられる。

「ふっ、見たか。真人よ」

「へっ、なに言ってるやがる。俺の方がボールはよく飛んでたぜ？」

「謙吾君いいなー。その打撃力、分けて欲しいですヨ」

「三枝も毎日筋トレしていれば、打てるようになるさ」

「だな。まずは手始めにスクワット1000回だ！」

「なるほどー……って、スクワット1000回もできるかこの筋肉ダルマー！」

リトルバスターズのベンチは本当に賑やかだ。彼らは本当に楽しそうに野球をやっているし、俺たちも負けてられない。

『さて、宮沢さんの後も怖いバッターが続きます。次は本日ホームランを放っている二木さんですね。前の打席に続いて、抑えることができるとしようか』

謙吾の次は佳奈多か。本当にリトルバスターズの打線は気が抜けない。俺は外角低めにミットを構える。

「えいー！」

俺のミットめがけて、夏海ちゃんは全力で投げてくれたけど、体力的にきついんだろう。どうしても高めに浮いてしまう。

「……夏海、さすがに疲れちゃってるみたいね」

そう言いながら、二球目を狙い打たれた。打球は勢いよく一、二塁間を抜け……。

「させるかあー！ー！」

……いや、抜けそうになったところを、蒼がダイビングキャッチしていた。超ファインプレーで、ワンアウトだ。

「……蒼、やるじゃない。抜けたと思ったんだけど」

「ふっふーん。これ以上の点は与えないわよ！ 皆で守ったげるんだからー！」

悔しそうにベンチに下がる佳奈多を見送った後、蒼は夏海ちゃんに向けてサムズアップしていた。

「蒼さん、ありがとうございますー！」

ここに来てのファインプレーに、謙吾のホームランで意気消沈していた夏海ちゃんも元氣を取り戻したみたいだ。

『蒼さんの好プレーでワンアウトを取りました。続くバッターは6番、井ノ原さんです』

『あの筋肉も先の打席でホームランを放っている。本当に危険な打者が続くが、頑張ってほしい』

「……ふんー！」

「ああっ!？」

しかし、のみきの願い空しく、再び真人に打たれてしまった。レフ

トの袖の頭上を超えるスリーベースヒット。これで、ワンアウト三塁だ。

真人は先のホームランで完全に覚醒してしまった感がある。恐ろしい筋肉だった。

『さすが井ノ原さんです。筋肉にものを言わせた打席でしたね』

『これでワンアウト三塁。再びリトルバスターズのチャンスだな』

『続くバッターは……7番、三枝さんですか。ここまで猛威を振るつた打線も、さすがにここまでですね』

『だから、みおちゃんヒドい……』

半泣きで打席に立つ葉留佳だったが、正直俺たちも安堵している。言い方は悪いけど、謙吾、佳奈多、真人の三人に比べると、葉留佳の打撃力は見劣りするし。

「くっそー！ 今度こそヒット打ってやるぞー！」

葉留佳はそう叫びながら、バッターボックスに立つ。俺たちは細心の注意を払いながら配球する。

「行きますよ……えい！」

「うりゃあー……！」

夏海ちゃんの初球は外に大きく外れていたけど、葉留佳は思いつきりバットを振っていた。やっぱり、よくボールを見ていないみたいだ。

「えいー！」

「よしきた絶対好球……！」

葉留佳は続く二球目を打つ。大きく打ち上げられた打球はフラフラと、三塁フェールゾーンの深い所に飛んでいく。

「……ほいっ」

サードのしろはがそれを追従し、フライをキャッチする。これでツーアウトだ。

「よし、筋肉特急だ！」

しろはがベースから離れているのを見てか、三塁の真人が一気に本塁を目指して突っ込んできた。犠牲フライにしては微妙な打球だっ

たけど、ここで来るんだ。

「くそっ……しろは！ 思いつきり投げろ！」

「う、うん！」

その状況を察して、俺はしろはに返球を促す。

同時に本塁を守るように飛び出して、まるで巨大なダンプのように突っ込んでくる真人の前に立ちふさがる。

「羽依里、そこをどけええええ！」

「どけるわけないだろ！ ここは通さないぞ！」

しろはからのボールを受けると同時に、俺は真人と交錯する……。

「……本塁タッチアウト！ スリーアウト！ チェンジ！」

「ふう……」

タイミング的には俺の方が早かったけど、相手はあの真人だ。筋肉の鎧を纏って突っ込まれるわけだし、ものすごい恐怖感だった。

なんにしても、皆のおかげで最少失点で抑えられた。1点差なら、まだ望みはある。

		1	2	3	4	5	6	7	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	2	2	1	8
鳥白島チャーハンズ	0	0	1	2	2	2	2	—	7

『それでは最終回裏。鳥白島チャーハンズの攻撃です』

『いよいよ最後の攻撃だ。皆、頑張ってくれ……』

実況席も観客席も、俺たちの逆転を信じる声で溢れていた。泣いても笑ってもこれが最後の攻撃だ。

ちなみに、リトルバスターズのピッチャーは鈴に戻っていた。なるほど、小毬さんが投げることで、少しの間だけでも鈴を休ませることができたわけか。

そしてその鈴がマウンドに上がった代わりに、小毬さんはレフトにコンバートされていた。

『さて、鳥白島チャーハンズのバッターは7番の静久だ。代打からの

途中出場だが……」

「……あの、ちよつといいですか」

のみきがこの回の先頭打者を読み上げていると、藍が実況席に赴いて、何か話しかけていた。

「先のデッドボールの影響を考慮して、ここはのみきちやんに代打をお願いしたいんですけど」

『なに、私か!?!』

「はい。よろしくお願いします」

『ちよ、ちよつと待っていてくれ!』

藍から代打に指名されたのみきは、慌ててバットを持って、バッテリーボックスへと向かっていく。

『……では、代わりに私が実況をします。のみきちやん、頑張ってください!』

のみきが打席に立つと同時に、実況席からは藍の声が聞こえ始めた。

「お、満を持して美希様の登場だ!」

「ダンチョー、がんばれー!」

「待っていたぞー!」

観客席からも歓声が飛ぶ。先頭打者だし、勢いをつけるためにも、のみきには頑張ってもらいたい。

「……いくぞ、のみき」

鈴はのみきを一睨みすると、大きく振りかぶる。

「うりゃっ!」

「しかし、大した準備運動もなしに打席に立つ羽目になるとは思わなかったぞ……おっと」

のみきは何かぶつぶつ言っていたけど、初球のフォークボールに釣られることなく、見送っていた。ボール判定だ。

「これで、どうだっ!」

続けて、鈴はニヤツクルを繰り返した。

「……よし、この球だ！」

のみきはそのニヤツクルを狙い打つ。球威が違うとはいえ、夏海ちゃんのナツクルボールで散々打ち慣らしてきたし。見事にライト前に打ち返して、ノーアウト一塁になった。

『……野村さん、なかなかやりますね』

『でしょう。ちっちゃいですが運動神経は良いんですよ。そのギャツプが萌えるんですよね』

藍が入ったせいか、なんか実況の感じが変わった。これ、このまま放送続けさせて大丈夫かな。

『先頭打者が塁に出ました。続きまして、紬ちゃんの打席ですが、ここで再び代打の登場です』

「むぎゆ!？」

バットを持って打席に向かいかけていた紬が、そのまま固まる。

ちよつと待って藍。もう代打で出せるような選手は居なかったはずだけど。紬もせつかく調子が良いんだし、勝手なこと言わないでほしい。

ベンチはもちろん、観客席もざわついている。そんな中、一人の恰幅の良い男性がバッターボックスに立った。

『それではご紹介します。今回、特別に力添えをいただきました、鳴瀬小鳩さんです』

「……は？」

「おじーちゃん!？」

ゆらりと打席に登場したしろはのじーさんは、真人顔負けの速度でスイングをしている。とても70歳を超えているとは思えない。

『あ、何か文句がある方がいましたら、ご本人に直接どうぞ?』

藍がそう付け加える。同時に、先程まで騒がしかったベンチや観客席が水を打ったように静まり返った。

「さあ、小娘。来るがいい。四天王打法の神髄、見せてくれよう！」

「……っ!？」

ぎろり、と相手投手を一睨みする。ものすごい眼力だ。あの鈴がす

くみあがっている。ところで、四天王打法ってなんだろう。

「い、いくぞっ……ライジングニャットボール！」

その恐怖心を振り払うためか、鈴は持ちうる最高の球を投じた。

「……ふんー！」

しろはのじーさんはその球を容易く打ち返した。しかし、若干打ち損じたのか、大ファールだった。レフト方向に外れた球は、そのまま見えなくなってしまった。

「あのじーさん、やべえぜ……」

三塁手の真人が冷や汗をかきながらそう言っていた。心なしか、震えている気もする。

「……てりやつー！」

「ふんー！」

続くボールはライト方向への大ファール。もし、この状況でホームランが出ればサヨナラなただけ。まさか、ここに来てじーさんが試合を決めたりするのかな。

「もう一度だー！ ライジングニャットボール！」

鈴は再び全力投球をするけど、その球はかなり内角に寄っていた。

「あー！」

どむっ、と鈍い音がして、鈴のボールがじーさんの二の腕に当たっていた。

「デッドボール！ ランナー一塁！」

「ご、ごめん」

「……別に構わん」

球審の斉藤さんにデッドボールを宣言されて、鈴はすぐに謝っていたけど、じーさんは全く痛がる様子もなく、平然と一塁へ歩いていった。あの速度のボールが直撃して、無事で済むはずがないんだけど。不思議だった。

『どうして鳴瀬さんは、鈴さんのあのボールを受けて無反応なんですか？ 信じられないんですけど』

『しろはちゃんのおじーさんにとって、あれくらい蚊に刺された程度

にしか思っていないんじゃないですか？ これでノーアウト一、二塁。鳥白島チャーハンズ、サヨナラのランナーが出ました』

狼狽えている西園さんを余所に、藍はひょうひょうと実況を続けていた。

「藍、こうなれば総力戦よ！ しろはおじーさんの代走に、イナリをお願いします！」

そして今度は蒼が実況席に走り、藍にそう伝えていた。

『わかりました。しろはちゃんのおじーさんに代わりまして、代走イナリです』

「ポーン！」

じーさんの次は野生動物の登場だった。もう、なんでもありになってきた。

「いい、イナリ？ あそこの方がボールを打ったら、向こうの白い板まで全力で走るのよ？ その次はあっち。ボール持った人にタッチされたら駄目だから、全力で逃げるのよ！」

「ポーン！」

次のバッターの夏海ちゃんが打席に立つ中、蒼がイナリにルールを教えていた。それにしても、イナリに野球のルールが理解できるんだろうか。

『さて、次のバッターは9番。夏海ちゃんです。リラックスしてくださいね』

それにしても、藍は実況が上手い気がする。のみきと同じく、物怖じしない性格つてのものもあるけど。

「ポーン！ ポンポーン！」

「うー、気が散るんだが……」

イナリはポンポン鳴きながら、一塁ベースの周りをうろちよろしている。確かにあれは気になる。

「ええいー！ いくぞ、なつみー！」

鈴は何度か頭を振った後、夏海ちゃんと勝負する。

しかし、結果はストレートのフォアボールだった。鈴としても疲れ

はあるんだろうけど、やっぱりイナリのせいで集中できなかったらしい。

なんにしてもノーアウト満塁。これはビッグチャンスだ。

『ノーアウト満塁。一打サヨナラの大ピンチです。リトルバスターズの皆さん、頑張ってください』

『西園さんのその願い、蒼ちゃんが打ち砕いてみせます。それでは蒼ちゃん、打席にどうぞ』

「そ、そんな風に紹介されると、すごくやりにくいんだけど……！」

藍からそう実況され、複雑な顔をしながら蒼が打席に立つ。

「いくぞっ……えいつー！」

鈴は大きく息を吸い込むと、蒼に向けて初球を投じる。

『手元の集計によると、本日の蒼ちゃんの成績は四打数二安打。打率は五割に達しています』

「……てりやつー！」

『一度のバントが含まれていますが、併殺打を放ってしまった私より遥かに良い成績と……』

「ちよつと実況席！ うるさいわよ！ 集中できないじゃない！」

『ごめんなさい。でも最後に一つだけ。蒼ちゃん、愛しています。頑張ってください』

「だから、放送で言わないでー……！」

「……ストライク！ バッターアウト！」

シスコンの姉に集中を乱され、蒼は絶好のチャンスで空振り三振を喫していた。ちよつと藍、何してくれちゃってるの。

ワンアウトになってしまったけど、依然として満塁。次のバッターに期待するしかない。

「……って藍、次はお前の打席だぞー！」

俺は打順表を確認した後、慌てて実況席に藍を呼びに行く。

『そうでしたね。それでは行ってきます。皆さん、応援よろしくお願いしますね』

藍はそう言いながら実況席を離れる。なかなか自由だなあ。

「そうです。羽依里さん、私の代わりに実況席へどうぞ」

「え、俺？」

「はい。頑張ってくださいね」

そのまま藍に押されるように実況席に座らされてしまった。どうしよう。

『蒼さんが三振に倒れまして、続くバッターは2番。藍さんです。満塁のチャンスは続いています。鷹原さんは藍さんに何を期待しますか？』

そこで、至つて自然に西園さんが俺に話を振ってきた。やめて。話さないといけなくなるじゃない。

『え、えーっと、その……』

こういう時つて、なんて話せばいいんだろう。散々、のみきたちのやりとりを聴いてきたはずなのに、いざ自分がその立場になると言葉が出てこない。

『ダ、ダブルプレー以外なら……ほら、藍は一度やっちゃってるしさ』

「……羽依里、人のやる気を削ぐような発言は駄目だよ」

言つた直後、しろはにそう突つ込まれた。うう、わざとじゃないのに。

「……見切りましたよ！ えい！」

……自分の失言に頭を抱えていると、快音が響いた。

見ると、藍がレフト前にヒットを打っていた。小穂さんが捕球する間に、三塁のみきが生還。これで再び同点に追いついた。

藍は一塁で止まり、満塁は変わらず。今度はサヨナラのチャンスがやってきた。

『そうだ、のみき！ 生還したんなら、実況代わってくれ！』

次のバッターを迎える前に、俺は思わずそう叫んでいた。

「わ、わかったから、いちいちマイクで言わないでくれ。恥ずかしいぞ」

言われてから、俺もマイク越しだったことに気がついた。どうしよう。すごく恥ずかしい。

『えーつと、これで8―8。鳥白島チャーハンズ、再び同点に追いついたな』

そしてすぐにのみきが実況を代わってくれた。助かった。『未だに満塁。二塁にタヌキさんが居座るといふ不思議な状況ですが、どちらにも頑張ってください』

西園さんがそう続ける。じーさんの代走で塁に出たイナリは、ジワジワと三塁まで進んでいた。イナリが生還すれば、サヨナラ勝ちだ。『続くバッターは3番、良一だな』

「夏海ちゃん、また妹作戦をお願いしますー！」
「え」

良一が打席に立ったのを見て、一塁の藍が二塁の夏海ちゃんにそう声をかけていた。夏海ちゃんは無言のまま、涙目でふるふると首を横に振っていた。これは無理っばい。

「……スキありだ！ えい！」

その時、鈴が身体を反転させて、二塁へ向けて牽制球を投じてきた。夏海ちゃん、危ない！

「……はっ！」

「二塁セーフ！」

しかし、夏海ちゃんは素早くベースに戻っていた。良かった。あの状況でも集中力は途切れていなかったみたいだ。

「……ほう、夏海君もやるな」

「一度やられてますからー！」

ベースカバーに入った来ヶ谷さんが、鈴にボールを戻しながら感心していた。

「……それなら、こっちはどうだっ！」

ボールを返してもらった鈴は、今度は三塁方向へ牽制球を投じる。

「……ポン？」

「よっしや、タヌキ、ゲットだぜ！」

そのボールを捕球した真人が、僅かにベースから離れていたイナリに触れる。まさかのタイムリングで、イナリがタッチアウトになってしまった。

「ポンー」

イナリは申し訳なさそうに尻尾を引きずりながら、ベンチに戻ってきた。そういえば、蒼も牽制球については何の説明もしていなかったと思うし、これはしようがない。

『これでツーアウトか。頼むぞ良一、妹パワーとやらは望めそうにないが、なんとか打ってくれ』

「いくぞ、ライジングニャットボール！」

「どわあ!?!」

あと一人抑えれば引き分けに持ち込めるということで、鈴木も全力投球だった。気がつけば、あつという間にツーストライクと追い込まれてしまっていた。

「……なあ蒼、夏海ちゃんがダメなら、お前が代わりに『おにーちゃん』って呼んでくれないか?」

「はあああ!?! なんてあたしなの!?!」

追い詰められた良一が突拍子もないことを言っていた。蒼の反応も至極当然だろう。

「蒼ちゃんがそんなこと言うわけないじゃないですか! アホですか!?!」

一塁の藍も会話に割って入っていた。すごい状況だ。

「この通りだ! お前も妹だろ!」

「蒼ちゃんは私の妹であって、良一ちゃんの妹ではないですよ!」

「蒼頼む! 俺を男にしてくれ!」

藍の猛抗議を敢えて流して、良一は必死に頭を下げていた。鈴木は今にも投球しそうだし、一刻の猶予もない。

「……蒼、俺からも頼む。一度でいいから、良一を『おにーちゃん』と呼んでやってくれ!」

「え、ええー……」

俺は考えた結果、蒼にそう言って頭を下げる。今はこれが最良の手段のはずだ。

「は、羽依里がそこまで言うなら……いい、わよ……」

そこまで言って、蒼はなぜか顔を赤らめながら了承してくれた。そ

して、バッターボックスの方に向き直り、大きく息を吸い込む。

「……おにーちゃん！ 打たなきゃ駄目だよー！」

「い、妹よ——！」

半分声が裏返っていたけど、良一には届いたみたいだった。鈴の剛速球をセンター前に打ち返し、再び満塁とする。

『紆余曲折あったが、良一がヒットを放ち、再び満塁となったな』

『ここで迎えるは、4番の久島さんです。鈴さん、頑張ってください』
実況席の二人もそれ以上は何も言わず、言葉少なに状況を見守る。

「……いくぞかもめ、最後の勝負だっ！」

「来い、りんちゃん！」

最終回裏、ツーアウト満塁。この上ない状況で鷗に打席が回ってきた。

「……えいつー！」

鈴の投じた初球は内角ギリギリに決まって、ストライク。続く二球目は僅かに外れ、ボール判定。

今や、その場に居る全員の視線はこの二人に注がれていた。

「ええーいー！」

三球目が外れた後の、四球目。真ん中に飛んできたボールを鷗は思いつきり振るけど、途中で落ちるフォークボールだった。見事に引つかかってしまい、これでツーストライクと追い込まれた。

「……うりやつー！」

「ボール！」

鈴が投じた五球目は低めに外れ、これでフルカウントになった。

「ふー……」

鈴と鷗、二人が同時に大きく息を吐く。次の一球で試合が決まる。しかし、鈴が投球モーションに入る直前、鷗は夏海ちゃんのいる三塁を見る。

「……なっちゃん！ 今から最高の瞬間をプレゼントするからね！」

そして、そう高らかに宣言する。

「いくぞっ……真・ライジングニャットボール！」

その刹那、鈴が投じた最後の一球。これまでのどのボールより速い、入魂の一球だった。

「てりゃー……！」

鷗はその剛速球を、類まれなる打撃センスをもつて完璧に打ち返す。

快音と共に飛んだ打球は、ライトを守る恭介の頭上を越えた。これは間違いなく、サヨナラヒットだ。

ボールが地面に落下したのを確認して、夏海ちゃんが本塁へ飛び込んでくる。恭介はその様子を見ながら、拾ったボールを投げ返すこともなく、ただ静かに目を閉じていた。

『……ゲームセット！ サヨナラゲーム！』

		1	2	3	4	5	6	7	R
リトルバスターズ	0	3	2	0	0	2	2	1	8
鳥白島チャーハンズ	0	0	1	2	2	2	2	x	9

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「勝った……勝ちました——！」

夏海ちゃんがサヨナラのホームを踏んだ瞬間、俺たちは全員ベンチから飛び出していた。

サヨナラヒットを打った鷗と合わせて、夏海ちゃんと二人を皆でもみくちやして祝福する。

「よーし、胴上げだー……！」

やがて良一がそう言うとおのずと皆が夏海ちゃんを中心に輪を作る。

「えっ、わ、私ですか？」

「最後まで投げ切ってたし、勝利投手を最初に胴上げするのは当然でしょー！」

「ほら、いきますよ。せーの！」

「わーっしょい！ わーっしょい！」

「わーっしょい！」

ぽんぽんと夏海ちゃんが宙を舞う。軽いし、すごくよく飛んでいた。

「まるで鳥さんみたいだねえ。私も頑張った甲斐があったよー」

「鳴、笑顔で見てる場合じゃないぞ。次はサヨナラヒット含め、猛打賞の活躍をしたお前の番なんだからな」

「え。私、鳥みたいな名前だけど、実際に飛びたくはな」

「それ、わーっしょい！ わーっしょい！」

「うひゃーっしょい！ ひええーっしょい！」

一瞬逃げようとした鴟だったけど、すぐに捕まって胴上げされていた。文字通り、鴟が空を飛んでいる。

「よーし、俺たちも負けじと胴上げだあー！」

その時、リトルバスターズの皆も輪に入ってきた。そんな彼らの言動には、敗北のショックなど、微塵も感じない。

「え、胴上げて誰を？」

「もちろん、鳥白島チャーハンズの連中に決まってるだろ！ まずは羽依里、お前からだ！」

そう言うや否や、真人に腕を掴まれる。ものすごい力だ。これは逃げられない。

「いっくぜーっしょい！ わーっしょい！ わーっしょい！」

「わーっしょい！ わーっしょい！」

「うわあああーっしょい！」

リトルバスターズの皆に抱え上げられ、俺の身体が宙を舞う。胴上げってテレビとかでよく見るけど、実際にされるとこんな気分なんだ。

「次はおおちゃんたちですよー」

「順番に胴上げしてやるぞー！ ミニ子、捕まえろ——！」

「がってんなのですーっしょい！」

数回宙を舞った俺が地面に降ろされた直後、今度は空門姉妹が捕

まっていた。

「ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

「離してー！ー！」

「そーれ！ わーっしよい！ わーっしよい！」

「ひゃー！ー!？」

抵抗空しく、空門姉妹が揃って宙を舞っていた。一方で、その次の胴上げ候補なんだろうか。向こうに紬やしろはも捕まっていた。これはもう、全員観念して胴上げされるしかなさそうだ。

『それにしても、劇的な逆転劇だった。これは島の歴史に残る試合になったと……おわっ!？』

「のみき、最強の代打が何やってるんだ」

「そうよ。パイ打のみきよ！」

「いやその、私はパイ打では……うわあああー！ー！」

我関せずと言った感じで締め放送をしていたのみきが、天善と静久に捕まった。そのまま実況席から引きずり降ろされ、胴上げの輪の中へ飲み込まれていった。

「それ、わーっしよい！ わーっしよい！」

「や、やめてくれー！ー！」

のみきも夏海ちゃんばりに軽そうだし、良く飛んでいた。

『烏白島チャーハンズの皆さん、勝利おめでとうございます。観客の皆さんも、どうぞ近くで選手を祝福してあげてください』

そして、西園さんが放送でそんなこと言うもんだから、鏡子さんをはじめとした島の皆が観客席からグラウンドになだれ込んできた。

「羽依里君、皆、おめでとう」

「見ごたえのある試合だったぜー！」

「夏海ねーちゃん、かつこよかったよー！」

皆から沢山の祝福の言葉が贈られる。嬉しい反面、ものすごく恥ずかしい。

最後の方には、どこからか優勝カップまで運ばれてきた。もうすごい騒ぎで、これはしばらく収まりそうにない。

ちなみに、その優勝カップには『徳田スポーツ杯』とか書かれていたけど、ここは見なかったことにしよう。

「ほら、きちんと並んで。撮るよー」

歓喜の輪がようやく収まった頃、俺たちは優勝カップを中心に整列していた。どうやら、記念写真を撮るらしい。

カメラを持つのは鏡子さん。島の誰かから借りてきたものらしい。

「ほら、リトルバスターズの皆も、もつと寄らないと。全員入らないよ？」

前の列、優勝カップの目の前に夏海ちゃん。その両サイドを俺としろはが挟む感じにしながら、鳥白島チャーハンズの皆が並ぶ。その後ろにはリトルバスターズの皆が同じように列を作っていた。

「それじゃ、撮るよー」

その合図で、俺たちはカメラに視線を送る。直後にシャッター音がした。

全員が砂と埃にまみれていて、とても記念写真とは呼べないものだけど、自然と笑顔がこぼれる。

たくさん仲間たちと、かけがえのないこの夏を共に過ごせたことに、心から感謝したかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

野球の試合が終わった後は、先の約束通りに食堂前でバーベキューをすることになった。

試合が長引いたおかげで、着替えて再集合した頃にはちようどお昼時。皆、お腹はペコペコだった。

「……それじゃ、飲み物が行き渡ったところで」

「かんぱーい！」

今回のお別れバーベキューは俺が発起人ということで、のみきに促されて、乾杯の挨拶なんてさせられた。もともと挨拶とか苦手だし、緊張で何を喋ったのか全く記憶になかった。

「……はい。こっちのお肉はもう焼けてるよ」

いくつものバーベキューコンロが並ぶ前で、しろはが肉焼き係を務めてくれていた。こういう時、本当にしろは頼りになる。

「うおお、食うぞー!」

「いったただきまーす!」

肉が焼けていると見るや、すぐに男連中が箸を伸ばす。

「こら、りよーいち、肉ばかり取るなつ。女子にも分けてあげろつ」

「そうだぞー、野菜の方が身体に良いんだぞー!」

そんな男子を、鈴と葉留佳が注意していた。お肉はたくさんあるけど、二人の言うことはもつともだ。皆で分け合わないと。

「でも葉留佳、そう言う貴女のお皿、肉しか乗ってない気がするのだけど?」

「え。いやーそのー、ビョーとケンコーのために、野菜はおねーちゃんに全部差し上げようかと」

「わけのわからないことを言わないの。ほら、ピーマンとニンジンも食べなさい」

佳奈多はそう言いながら、焼きたての野菜をひよいひよいと葉留佳の紙皿に乗せていく。

「うう、ピーマン苦手なのに……」

本当に苦手なのかもしれない。葉留佳は泣きながらピーマンを食べていた。

「三枝さん、お野菜もすっかり食べないと大きくなれないですよ!」
「ぶーぶー。ミニ子に言われたくないぞー」

「わふー!?! 胸の方を見て言わないでくださいー!」
葉留佳が口を尖らせながら、何か言っていた。どうしてすぐそつちの話になるんだろう。

「……そうね。綺麗なおっぱいのためには、お肉と野菜のバランスが大事よ」

「うむ。その通りだな」

そんなことを考えていると、静久と来ヶ谷さんが唐突に話に入ってきた。この二人、おっぱいセンサーでもついてるんだろうか。

「ほらほら、ミニ子にむぎゆ子、聞いたかー？　しっかりメモしておくんだぞー」

「み、水織さん、他に重要なことがあったら教えてほしいのですー！」
「シズク、教えてください！」

「……そうね。やっぱり牛肉と、それに付随して牛乳も大事よ」

「そうだな。その牛乳に紅シヨウガを入れてみるのも良いぞ」

「紅シヨウガですか？　それは初耳です！」

「だってそうだろう。牛丼だって紅シヨウガはつきものだ」

「おおー、なるほどです！」

紬は感心していたけど、紅シヨウガの方は、たぶん来ヶ谷さんの嘘だと思う。現に紅シヨウガが嫌いのはずの蒼も、結構胸は大きいし。

「……羽依里さん、なんで蒼ちゃんを見てるんですか？」

そこで藍に睨まれた。いや、見てないから。そんな軽蔑したような視線を送ってこないで。

「はっはっは。鷹原少年も、結局は男の子だな」

「……羽依里？」

来ヶ谷さん、意味深な発言をしないでください。今度はしろはからすぐく睨まれてるんだけど。変な誤解されたらどうするの。

「そ、そうだしろは。焼けてる食材があったらくれないか？　皆に配ってあげようと思うんだ」

居心地が悪くなった俺は、しろはが焼いてくれた肉や野菜を配りながら、皆の様子を見てみることにした。

「夏海ちゃん、楽しんでる？」

「はいー！　楽しんでますー！」

恭介と並んで座っていた夏海ちゃんに声をかけながら、お肉とカボチャをその紙皿に移してあげる。

「ありがとうございます！」

「相変わらず、恭介と話をしていたの？」

「はい！ 今ちようど、奥さんと友人に、ラスボスが瞬殺されたところ
です！」

「……ごめん。唐突過ぎて話が見えないんだけど」

「幼稚園で人形劇をやった時の話だな。個人で人形を持ち寄った結
果、そんな状況になってしまっただけ」

「ああ、そうなんだ」

恭介がそう話を補足してくれた。彼らはそんな行事にも参加して
いるのだろうか。

「ダンベルと鉄アレイの熱い友情を描く人形劇にならなかっただけ、
まだマシでしたね」

「ああ、まったくくだげ……」

二人が揃って、何とも言えない表情をしていた。ダンベルと鉄アレ
イで人形劇？ どんな状況だろう。

「面白い話と言えば、まだあるぞ。学食をリトルバスターズだけで切
り盛りした話だ」

「あ、それも聞いてみたいです！」

リトルバスターズを中心とした恭介の話は破天荒なものが多いし、
夏海ちゃんは興味津々と言った感じだった。

邪魔しちや悪いし、他の人の所に行ってみよう。

「はむはむはむはむ」

食材の乗った紙皿を手にさすらっている、奇妙な声が出た。見る
と、鷗が焼きたてのトウモロコシを食べていた。

「鷗、トウモロコシばかり食べてないで、肉も食べたらどうだ？」

俺はそう言いながら、手元の肉を鷗の皿に移そうとするけど……そ
の皿には、すでに大量のトウモロコシの芯が積まれている。

「鷗、さすがにこれは食べ過ぎじゃないのか？」

「え。トウモロコシ、美味しいよね？」

「いや、美味しいけどぎ……」

「……久島さん、トウモロコシばかり食べていたら、太りますよ。穀物ですから」

「うぐっ」

その時、隣にいた西園さんが冷静に告げていた。

「みおちんこそ、たくさん食べないと大きくならないよ！ ほら、お肉！」

鴉が俺の皿を奪い取って、そこに乗っていたお肉を次々と西園さんの皿に移す。

「それなりに食べてはいるつもりですし、もう身長は平均値だとは思いますが」

「……うむ。鴉君が言いたいののは、きっと胸の話じゃないか」

また唐突に来ヶ谷さんが現れた。やっぱりこの人、おっぱいセンサー持ってるんだろうか。

「……」

特に言葉は発してないけど、西園さんは今まで見たことないような鋭い目つきで来ヶ谷さんを睨みつけていた。当の本人は涼しい顔をして受け流していたけど、こっちはすごく怖かった。

「……お前たち、楽しんでるようだな」

その時、背後から声がした。振り返ってみると、そこにはしろはのじーさんがいた。

「あれ、おじーちゃん？」

「どうかしたんですか？」

突然の年長者の来訪に、俺やしろは以外の人間は反射的に背筋が伸びていた。相変わらず、その場にいるだけですごい威圧感だ。

「お前たちに差し入れを持ってきた」

そう言って、じーさんはしろはにビニール袋を手渡す。中には魚のみりん干しが大量に入っていた。

「今日も漁は禁止だからな。だいぶ前に干したやつだが、肉ばかりだ

と飽きるだろう。適当に火であぶって食べるといい」

「おおー、コバトさん、ありがとうございます」

皆が呆気に取りられている中、紬が一番にお礼を言っていた。今更だ
けどこの二人、面識があるのだろうか。

「後、これは駄菓子屋のばーさんからの差し入れだ」

じーさんは左肩に乗せていた箱を地面に置く。どすつと音がした
し、結構な重量がありそうだ。

「あの、これは？」

「ラムネ30本らしい。それじゃあ、確かに渡したぞ」

じーさんは魚とラムネを俺たちに渡すと、すぐにきびすを返し、
去っていった。

「……あのじーさん、良いところあるんだな」

「おい、謙吾」

「あ……いや、すまん」

謙吾が思わず、そう口にしていた。直後に恭介に睨まれ、すぐにし
ろはに頭を下げる。

「いいよ。気にしてないから。それより、せつかく持ってきてくれた
んだし、皆しっかり食べてね」

しろはは大して気にする様子もなく、袋からみりん干しを取り出し
て、網の上に並べていく。

俺もそれに倣って、ラムネの入っている箱に手をかける。箱には、
ご丁寧に熨斗までついていた。

「……あれ、重い!？」

実際に箱を手を持ってみると、予想以上に重かった。考えてみれ
ば、ラムネが30本も入ってるんだし。重いのも当然だった。

……あのじーさん、これを片腕に担いで運んできたんだよな。

俺はじーさんの年不相応なパワーに感心しながら、皆にラムネを
配ったのだった。

……しばらくすると、周囲に肉の香りとはまた違った、魚の焼ける

良い香りが広がってきた。

「わふー、おいしそうなのですー」

クドが焼ける魚を楽しそうに眺めていた。犬っぽいけど、魚の方が好きなんだろうか。

「そろそろ焼けたよ。熱いから気をつけてね」

「はい！ いただきますなのですー」

「それじゃ、俺も一つ」

せつかくなので、クドと一緒に焼きたてのみりん干しをいただくことにした。

「これは、ほこほこでおいしいのですー」

クドの言う通り、身がほこほこで美味しい。この甘辛さも最高で、おにぎりが欲しくなる。

「なあ蒼ー、タレ取ってくれないかー」

「いいわよー。これ？」

「ああ、サンキュー」

俺や女性陣の多くがみりん干しを堪能している中、男子数名はバベキューを続けていた。やっぱり、魚じゃ物足りないのかな。美味しいのに。

「すまない。俺もタレをもらえないか」

「紬も少し貰ったら？ お肉、もう少し食べるんでしょ？」

「はい！ もう少し食べます！」

そろそろ何人かタレが無くなつた人がいたんだろうか。良一に続いて、天善や紬、謙吾もタレを継ぎ足していた。特に、紬はたくさん食べてる気がする。もしかしなくても、さっきの静久や来ヶ谷さんの話を真に受けてるんだろうか。

「……あれ？」

でもなんか、足されたタレの色が元と違う気がする。こんな色だったっけ？

「……ぐっ!?!」

「……むぎゆ!？」

「ぐはっ!？」

そんな事を考えていたら、そのタレを使ってお肉を食べた四人が苦しみだした。どうしたんだろう。

「なんだこれは、すごく辛いぞ……!？」

「え、辛い?」

俺としろはが用意したのは、普通に市販されてるタレだ。辛さも中辛だし、そこまで苦しむ程のものではないはずだけど……。

俺は疑問に思いながら、良一のタレを少しだけ割り箸の先につけて、舐めてみる。

「か、辛い……!」

な、なんだこのタレ。明らかに俺たちが準備したものと辛さが違う。これは、明らかに何か混ぜられている。

「こ、こんな悪戯をする人物と言ったら……」

そして全員の視線が、一齐に葉留佳に向けられた。

「……え? いやーそのー、ナンダ? ワタシジャンイデスヨ?」

そうは言っていたけど、明らかに目が泳いでいる。

「じゃあ葉留佳、後ろ手に持つてる七味トウガラシやワサビは何?」

「ひやうう! 見つかつてしまったあ——!」

そして、直後に背中に隠し持っていた証拠を佳奈多に掴まれている。これは言い逃れできそうにない。

「はるちゃん、そんなイタズラしたら、つむちゃんがかわいそうだよー」

小毬さんが葉留佳を叱責していた。ところで、それって聞きようによつては、他の男子にはイタズラしても良いって風にも聞こえるんだけど。考えすぎかな。

「うう、辛いのは苦手です……けほけほ」

「つむぎ、だいじょうぶか」

顔を真っ赤にして苦しむ袖を、鈴が介抱してくれていた。

「ごまりちゃん、何か甘いものを持ってないか」

「はい、つむちゃん。ワタアメをどうぞー」

鈴に促され、小毬さんが笑顔でワタアメを袖に手渡していた。激辛タレの辛みをワタアメの甘さで中和するとか、ナイスアイディアだ。

「うう、小毬、俺たちにも甘いものを……!」

「うむ。少年たちには、おねーさんがキムチをくれてやろう」

喉を押さえながらそう懇願する良一たちの前には、容赦なくキムチの瓶が置かれた。まさに泣きっ面に蜂と言うやつだった。

その後、辛さにもだえ苦しんでいた良一たちは、差し入れに貰ったラムネを浴びるように飲んで、事なきを得ていた。まったく、葉留佳のイタズラにも困ったもんだ。

「パーーーーーッ!」

「チョレーーーーーイ!」

ところがそのラムネを飲んだ直後から、良一と天善のテンションがおかしい。奇声を上げながら、道路で暴れている。

「ねえ野村さん、どうしてあの二人はラムネであそこまでハイテンションになってるの?」

「いや直枝、私に聞かれても困るんだが……」

のみきはそんな二人を見ながら、何とも言えない顔をしていた。どうするべきか、対応に困っているらしい。

「筋肉筋肉——!」

「俺のちよんまげを知らないか——!」

「リトルバスターズ最高——! イエエエ——!」

気がつけば、その中に真人や謙吾、果ては恭介まで混ざり、謎の言葉を発していた。

やっぱり島のラムネ、変な成分でも入ってるんじゃないだろうか。真人や良一、すでに上半身裸になっちゃってるし。

「……そろそろ目に余るな。彼らにも少し、冷静になってもらおうとしてよう」

のみきはそう言いながら、背中に背負っていたハイドログラディ

エーター改を正面に構える。

「一応確認するが……直枝、友人を撃ってしまっても構わないか？」

「うん。良いと思うよ。お手柔らかにね」

「わかった。ハイドログラフェイーター改、殲滅モード。ファイアー！」

「ぶわああああ!?!」

次の瞬間、狙いすました無数の水弾が良一たちを襲った。うん。予想はしていたけど、一瞬で静かになった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、リトルバスターズの皆が島を離れる時がやってきた。

夕方近くになって港にやってきた船は、まもなく出港時間を迎えようとしていて、既に港の周囲には俺たち以外に乗客の姿はなく、船の係員が一人、静かに立っているだけだ。

夕日に照らされた船の前で、俺たちはそれぞれリトルバスターズの皆との別れを惜しんでいた。

「みおちん、またね……」

「ちよつと久島さん、そんなに抱きつかないでください。暑苦しいです」

感情を抑えきれなくなったのか、鴎は思いつきり西園さんに抱きついて泣いていた。この島で久しぶりに再会したようなものだし、気持ちにはわかるけど。

「ほら、まずは涙と鼻水を拭いてください。ひどい顔になっていますよ」

「う、うん……」

鴎は西園さんからティッシュを受け取って、ちーん、と鼻をかんでいた。こんな時でも、西園さんは落ち着いている。

「また手紙を送りますからね」

そう言いながら、鷗の背中をぽんぽんと叩く。なんだろう。おかーさんと子供みたくに見える。

「……うん。今度はこっちも、ちゃんとした招待状を出すからね」

招待状ってなんだろう。よくわからないけど、再会を誓っているよ
うだった。

「楽しみにしています。それでは、お世話になりました」

西園さんは俺たちに向けて一礼すると、そのままタラップを登って
いった。

「うう……ぐすつ……」

西園さんの姿が見えなくなると、鷗はまた鼻をすすり始める。

「鷗、しっかりしろ。お前が泣いてどうするんだ。リトルバスターズの
皆は誰も泣いてなんか……」

「ひっく、うう……」

……いや、思いつきり泣いてる人がいた。小毬さんが大きな瞳に涙
を浮かべながら、しろはの手を握っていた。

「しろちゃん、羽依里君と末永くお幸せにね……」

……泣きながら、大きな勘違いをされている気がする。

「ち、違うし！ まだそこまで進展してないし！」

「そ、そうだぞ！ まだお風呂も一緒に入っていないからな！」

「是非、結婚式にはまた呼んでくださいっ！ それじゃあっ！」

しろはと一緒になって慌てて弁解するけど、俺たちの言葉など耳に
入らないようで、小毬さんは俺やしろはとしっかりと握手を交わした
後、タラップを登って行ってしまった。

……どうしよう。思いつきり誤解されたまま別れてしまった。俺
としろはは、ひたすらに頭を抱える。

「……ぐすつ」

そんな俺たちの隣でもう一人、今にも泣きそうな子がいた。夏海
ちゃんだった。

「あたしに勝ったんだぞ。なんでなくんだっ」

昨日と同じく、必死に堪えてはいるみたいだけど。鈴を見送りに来たらしい島の猫たちも、心配そうにその様子を見ていた。

「しよーがないな……なつみ、これをやるから、なくな」

「え……これは？」

鈴が取り出したのは、鈴が普段髪につけているのと、同じ鈴だった。

「予備のやつだ。おまえにやる」

「……あ、ありがとうございます」

夏海ちゃんは差し出された鈴を、両手を重ねて受け取る。

「……また勝負しよう。次は負けない」

「は、はい！ 私も負けません！ 鈴さん、さよならです！」

「……ん」

慌てて涙を拭いた夏海ちゃんと握手を交わした後、鈴はちりん。と鈴を鳴らし、軽やかにタラップを駆けあがっていった。

鈴も夏海ちゃんもどこか猫っぽいいし、この二人は良いライバルと言った感じだった。

「……せいりゆう！ せい！ せい！ すごく！」

「ぎくー… ぎくー！」

その時、聴き慣れた掛け声が聞こえてきた。

「お前ら、ここまで来て四天王スクワットなのか？」

恭介が呆れ顔でその様子を見ていた。どうやら、良一と真人、謙吾、天善の四人がお別れの四天王スクワットをやっているみたいだった。おかげで、鈴と夏海ちゃんの別れの余韻が台無しになっちゃったんだけど。

「……ふう。楽しかったな」

満足したらしく、むさ苦しいスクワットが終わった。

「真人、いつかまた、一緒に四天王スクワットやろうぜ！」

「おう、筋肉さんがこむらがえったもな！」

汗をぬぐいながら、四人ががっしりと拳を突き合わせていた。男同士の熱い友情だった。

「今度島に来る時は、筋肉かき氷の大食い競争とかやったら面白いか

もしれねえ」

「いいな。考えておこう」

筋肉かき氷って何だろう。シロップの代わりに、焼き肉のタレとかかかってるんだろうか。

「ちよつとやめてよ。かき氷大食い競争なんてやられたら、あたしの腕が死ぬから」

不穏な空気を感じ取ったのか、蒼が会話に参加していた。

「じゃあよ、次来る時まではその細い腕つぶしを鍛えとこうぜ」

「お断りします。ムキムキな蒼ちゃんなんて嫌ですから」

妹の危機を感じ取ったのか、藍も会話に参加していた。何というか、リトルバスターズの男性陣は本当に変わらない。

「この島の四天王スクワットも良かったが、俺は天善との秘密基地での卓球勝負が一番の思い出だ。あの激闘を、俺は一生忘れないだろう」

その時、謙吾が目を細めながらそう言っていた。そういえば、彼は滞在中に天善と秘密基地で卓球勝負をしたって言ってたっけ。

「……そうだな。ラケットが二本壊れ、衝撃で卓球台が歪み、ネットを二回は縫い直す羽目になったが、悔いはない」

天善も思い出すように目を細めていた。俺は実際に見てはいないけど、話を聞く限り、男同士の壮絶な戦いだったんだろう。

「ねえ、羽依里はあの中に混ざらなくていいの？」

その時、背後の理樹からそう声をかけられた。

「そのまま返すよ。理樹は混ざらないのか？」

「あーうん……僕はその、のみきさんと話してたからさ」

「あ、そうなのか」

「うん。バーベキューの後から、のみきさんと意気投合しちゃってさ」

リトルバスターズの次期リーダー候補と、少年団の団長。お互いの立場は違えど、個性的なメンバーをまとめていく者同士、絆のようなものが生まれたんだろうか。

「のみきさんも、これからめげずに頑張ってるね」

「ああ、直枝も大変だろうが、諦めずに頑張るんだぞ」

二人の視線は、さつきまで四天王スクワットをしていた四人へと向けられていた。その視線が全てを物語っている気がした。

「クドさん、お別れにあたって、このぬいぐるみを差し上げます！」

その隣では紬が犬のぬいぐるみをクドに渡していた。

「わふー!? おっきな犬のぬいぐるみなのですー！」

「サイゴーさんですー！」

確かに、あの偉人は犬を連れているイメージがあるし、ぬいぐるみもそれっぽい眉毛がついている。

「ぜひ、宇宙にも連れて行ってあげてくださいー！」

「はいー！ お世話になりましたっ！」

宇宙？ 何の話だろうか。よくわからないまま、クドはマントを翻しながらタラップを登っていった。

クドも紬も、独特の髪色が夕日に照らされてすごく綺麗だった。

「……水織女史、貴女とはまたいつか、じっくりと語り合いたいものだな」

「ええ、その時はオススメのパイ菓子を用意しておくわ。それに紅茶でも飲みながら、おっぱいについて熱く語り合しましょう」

紬と一緒に船の方を見ていると、背後からそんな会話が聞こえた。振り向かなくてもわかる。この会話は間違いなくおっぱい同盟。静久と来ヶ谷さんのものだった。

「……それと藍君。紬君の写真は、野球の集合写真と一緒に送ってくれて構わないからな」

「わかっています。住所も恭介さんから聞いています。学生寮だったんですね」

「むぎゅ!?」

自分の名前が出たためか、お別れの余韻に浸っていた紬が思わず振り返る。

紬の写真でもしかして、今朝言ってた演舞の写真だろうか。あれ、写真にできたんだ。

「フフフ。楽しみにしているぞ。それでは、達者でな」

来ヶ谷さんは不敵な笑みを残しながら、タラップを登っていった。今更どうすることもできないけど、紬は悲壮感溢れる表情になっていた。

「……ねえ藍、本当に紬の写真送ってあげるの？」

そんな紬の様子を知ってか知らずか、蒼がそう聞いていた。

「もちろんです。代わりに来ヶ谷さんがクドちゃんと小毬ちゃんの小恥ずかしい写真を送ってくれるそうですし」

藍は嬉々としてそう言う。二人の間で、そんな闇取引が成立してたんだ。

「……葉留佳、なんとか来ヶ谷さんを止められないの？」

蒼が葉留佳にそう質問していた。紬は元より、写真を勝手に送られてしまうであろう小毬さんやクドを心配しているんだらう。

「うーん、姉御は一度決めたらそう簡単には止められないからなー」

たぶん、おねーちゃんと二人がかりでも軽くあしらわれるかも」

「そうね……あの人は手強いのよ」

葉留佳と佳奈多、二人が全く同じ顔でため息をついていた。どうも、なかなかに厳しいらしい。

「以前、葉留佳と入れ替わってあの人の弱みを握ろうとしたことがあったのよ。カラコンまで用意してね」

どういいう経緯でそういう流れになったのか気になったけど、ここは敢えて何も聞かないことにしよう。

「葉留佳に成りすましていたはずなのに、あの人、私の大嫌いなピクルスを食べさせようとするのよ？ あれ、絶対にバレていたわ」

平静を装っているけど、佳奈多は涙目だった。と言うか、この場で何の話をしてるんだらう。

「でも、双子の入れ替わりというのは面白いかもしれないですね。私もそのうちやってみましようか」

藍が顎に手を当てながらほくそ笑んでいた。嫌な予感がする。何をやるつもりだろう。

……その時、船の汽笛が高らかに鳴った。タラップの脇にいた船の係員が、何やら無線で話しているのが聞こえる。いよいよ時間らしい。

「おまえら、そろそろ船に乗れ！」

「……時間みたいね。それじゃ二人とも、元気でね。また会いましょ」
「あいちゃん、あおちゃん、またねー！ あでゅー！」

恭介の声が響き渡ると、葉留佳は左手を大きく振りながら船のタラップを駆けあがっていった。

「もう、葉留佳ってば……お別れの挨拶くらい、ちゃんとしなさいよ。恥ずかし屋なんだから、まったくもう……」

佳奈多も最後にそんな台詞を残しながら、船へと乗り込んでいった。

その二人を皮切りに、最終盤まで残っていたリトルバスターズのメンバーも、別れの言葉を交わしながら次々とタラップを渡っていった。

……気がつけば、その場には恭介だけが残っていた。

「……今回、鳥白島チャーハンズと試合ができて光栄だった。俺たちとしては結果は残念だったが、全力は出し切った。悔いはない」

恭介は俺たち一人一人の顔を見ながら、そう言ってくれた。彼にそう言ってもらえると、俺たちも頑張った甲斐がある。

「恭介氏、良ければ皆を連れて、また来てくれ」

「もちろんだ。ここの島民は皆、温かいしな。また来させてもらおうさ」
「今度来る時は野球は抜きにして、ゆっくり遊びましょー？」

「この島には、まだまだ魅力的な場所がたくさんありますからね」
「ああ。その時はまたよろしく頼む」

のみきから始まり、恭介は一人一人としっかり言葉を交え、握手をかわしていく。

「……羽依里、俺たちと夏休みを過ごしてくれて、ありがとうな」

最後に俺の番が来た。お互いに目を合わせて、がっしりと握手をす

る。

「……なあ恭介」

「ん、どうした？」

その時、俺は恭介にしか聞こえないくらいの声で質問を試してみた。「練習試合の最後、ライトに飛んだサヨナラヒットさ。あれ、もしかして恭介なら取れてたんじゃないか？」

「……さあ。どうだろうな」

恭介は首をかしげながら、左手で俺の肩を軽く叩く。

「……いくら俺でも、あれだけ強い思いが乗った球は取れないさ。じゃあな。良い島だったぜ」

恭介も俺にしか聞こえないような声でそう返すと、握っていた手を離し、俺たちの方へ軽く右手を上げながら、タラップを渡って行った。最後に恭介が乗り込んだことを確認すると、係員がすぐにタラップを外し、船が港を離れていく。

俺たちはその様子を静かに見送る。

「おーーいー！」

……その時、船から叫び声があった。

見ると、リトルバスターズの皆が船のデッキに集まって、俺たちに向かって笑顔で手を振ってくれていた。

そしてデッキの柵には手作りの横断幕が掲げられていて、そこには『ありがとう』の文字。

「皆さーん、ありがとでしたー！ー！」

「楽しかったですヨー！」

「お前ら、またなー！」

「元気でねえー」

リトルバスターズの皆から、たくさんのお礼の言葉が聞こえる。俺は思わず、目頭が熱くなるのを感じた。

「……羽依里、色々頑張った甲斐があったね」

隣のしろはが、優しい声色でそう言ってくれた。

「……うん。俺、泣きそうだよ」

「ちよつとくらいなら、良いんじゃない？」

「……いや、我慢する。せつかく皆笑顔なんだしさ」

俺はちらりと、横に並ぶ皆の顔を見る。鷗も、夏海ちゃんも、皆が笑顔だった。ここで、俺が泣くわけにはいかない。

「皆、また来てくれよー！」

「ありがとうございますー！」

俺たちも彼らに負けなくらいの笑顔で、いつまでも手を振り返していた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

すっかり日も落ちた19時過ぎ、俺と夏海ちゃんは夕食を食べに、しろは食堂に足を運んでいた。

今日はしろはも疲れているはずなのに、俺たちのためだけに食堂を開けてくれたらしい。

「しろは、わざわざ食堂を開けてもらってごめん」

「別に良いよ。その代わり、出せる料理は一品だけだからね？」

「ああ、全然構わないよ」

まだバーベキューの片付けも完全には終わっていないし、食べさせてもらえるだけで十分だった。

「すぐにできるから、ちよつと待っててね」

二人分のおしぼりを用意してくれた後、しろはは手早く調理に取りかかる。俺たちもいつもの席に並んで座り、お冷を飲みながら料理の完成を待つ。

「静かだな……」

昨日の今頃はリトルバスターズの皆が夕食を食べに来ていて、上へ下への大騒ぎだったはずだ。普段の食堂に戻っただけだというのに、本当に静かだった。

「……あの人たちが帰ったら、急に静かになったね」

しろはも同じ心境だったんだろう。手元から視線を動かさずに、その口にしていた。

「はい。本当に楽しい人たちでした」

夏海ちゃんもそう言いながら、ポケットからボールを取り出して眺めていた。

「夏海ちゃん、そのボールは？」

「えへへ、今日の試合のウイニングボールです」

笑顔でそう言っていた。正確にはちよつと違うと思うけど、夏海ちゃんの夏の思い出がまた一つ増えたんだし、ここで妙なことを言うのは野暮だと思う。

試合が終わって一度着替えてはいるんだけど、思い出の品だし、大事にポケットに入れていたみたいだ。

「夏海ちゃん、思い出の品も良いけど、さすがにごはんの前には、もう一度おしぼりで手を拭いてね？」

「わ、わかってますー！」

しろはにそう促され、夏海ちゃんはボールをポケットにしまつて、もう一度おしぼりでしっかりと手を拭いていた。その様子が何故か微笑ましく感じる。

「……はい、おまちどうさま」

そして夏海ちゃんが手を拭き終わるのを待ち構えていたように、料理が提供された。

「え、もうできたんですか？」

夏海ちゃんも驚いていたけど、目の前には確かに湯気が立ち昇る大きなお椀と、小皿が置かれていた。

「しろは、これってお茶漬け？」

「うん。鯛茶漬けだよ」

「え、鯛ってあの魚の？」

確か、昨日今日と漁に出られないんじゃないやなかったっけ。なのに鯛があるとか、不思議だった。

「何日か前にね、漁港でもらったの。その身をすぐにさばいて、漬けダ

レに漬けておいたんだよ」

しろははそう言うと、カウンター越しにタッパーを見せてくれた。調味液に漬かった魚の切り身が見える。

「出汁はあらかじめ作っておいたから、ごはんをよそって、この切り身に乗せて、最後に温めた出汁をかけるだけ。お手軽なんだよ」

「お手軽な割に、凄くおいしそうだ」

お椀の中を見ると、琥珀色をした出汁の中に、ご飯と鯛の切り身がまるで小島のように盛られていた。一番上にはご丁寧に、三つ葉まで添えられている。

「そっちの小皿には漬物とワサビがついてるから。出汁にワサビを加えると風味が変わって美味しくなるよ。でも、夏海ちゃんは入れ過ぎないようにね」

「わかりました!」

「出汁も昆布と削りがつおから取った出汁だし……」

「……しろは。今のダジャレ?」

「え?」

しろはが饒舌に料理の説明をしていたけど、俺はつい、そう突っ込んでしまった。

「……べ、別にダジャレじゃにやいし!」

言われて気づいたのか、思いつきり噛んでいた。

「そ、そんなのいいから、冷めないうちにめしあがれ!」

急に恥ずかしくなったらしく、しろははそこまで言うと、顔を赤くしながらそつぽを向いてしまった。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます!」

そんなしろはを見て和みながら、俺は夏海ちゃんと一緒に手を合わせて、熱々の鯛茶漬けを食べ始める。

最初に鯛の切り身を一切れ、口に運んでみる。うん。漬けダレと胡麻の風味が効いていて、美味しい。

次に、出汁とご飯を一緒にかき込む。この出汁も美味しい。お昼がバーベキューだったし、胃に優しい感じがする。

「……うん。しろは、美味しいよ」

「はい！　おいしいですー！」

夏海ちゃんは猫舌なのか、ふーふーと冷ましながら鯛茶漬けを食べていた。まあ、夏にここまで熱々なものを食べるなんて、あまりないかも。

俺はそう考えながら、箸休めに漬物を口に運び、同じ小皿のワサビを少量取って出汁に混ぜる。ちよつと味を変えてみよう。

……うん。このワサビの風味も良い。考えれば鯛も魚だし、ワサビが合わないはずがない。出汁も海のものを使った出汁だし。

「んんんー!?」

しろはのダジャレを思い出していると、隣から素っ頓狂な声が出た。思わず視線を向けると、夏海ちゃんが鼻を押さえて悶えていた。どうやら俺を真似てワサビを入れたのは良いけど、その量が多すぎたみたいだ。

「夏海ちゃん、しつかり混ぜないとワサビは溶けないよ。はい、お水」
「あ、ありがとうございます」

近くで声が聞こえたと思えば、しろはが自分の鯛茶漬けを持って、夏海ちゃんの隣に座っていた。今日はしろはもここで夕飯にしてみたいだ。

「……いただきます」

やがて、しろはも手を合わせてから食べ始めた。最初に出汁をすする。

「……ちよつとかつお節の出汁が薄いかも」

そう言つて表情を曇らせていた。俺は美味しいと思うけどなあ。

「それに、さつき噛んだところに出汁がしみる……」

小さな声でそう言つて、左の頬を押さえていた。やっぱり噛んでたんだ。口内炎とか、ならないといいけど。

その後は三人がお茶漬けを食べる音だけが、静かに響いていた。いつもの鳥白島が戻ってきたと実感する、本当に静かな夜だった。

気がつけば、夏休みも残り一週間。これから先、どんな楽しいこと

が待っているだろうか。

第三十八話・完

第三十九話 8月23日

……朝。まだ薄暗い中、目が覚める。

「えい！このっ！」

……なんだろう。廊下から夏海ちゃんの声が聞こえる。

「えーい！あ、逃げた！」

どたどたと走り回る音もしてるし、いったいどうしたんだろう。

俺は布団から這うように抜け出して、四つん這いのまま、ふすまを開ける。

「夏海ちゃん、朝からどうしたの？」

「あ！羽依里さん、そっちに行きました！」

夏海ちゃんが視線を不自然に下へ向けながら、唐突に叫ぶ。え。行っただって何が？

そう思いながら夏海ちゃんの視線の先を追う。すると、黒光りする虫が俺の方へ向かってきていた。

「うわ、(ぎょ)ぎょ(ぎょ)だ！」

思わず横に跳ぶように逃げる。すると、障害物がなくなつた(ぎょ)ぎょきは、そのまま全速力で俺の部屋へと入ってきた。

「しまったー！」

慌てて武器になりそうなものを探すけど、その隙に(ぎょ)ぎょきは敷かれたままになっていた布団の中に潜り込んでいった。ちよつと、やめて。

俺は素早く布団を引つ摺み、掛け布団を乱暴にひっぺがす。しかしそこに、ヤツの姿はない。

「くそ、さすが、逃げ足の速さは超一流だな」

ヤツがこの部屋のどこかに潜んでいると考えただけでも、身の毛がよだつ。早急に見つけ出さないと。

「そうだ夏海ちゃん、玄関に殺虫剤あつたよね。持ってきて！」

俺は布団の周りから視線を逸らさないようにしながら、背後の夏海

ちゃんにそう告げる。

「私も見てみましたけど、あれって虫よけスプレーでしたよ?」

……駄目だ。噴射したところでヤツは逃げ惑うだけで、状況は変わらない。

「……やっぱり、直接攻撃しかありませんよ。敷布団の下ですかね」

夏海ちゃんが俺の隣にやって来て、恐る恐る、と言った感じに布団を踏みしめていた。右手にハエうちを持って、スリッパまで履いていた。

「そうだ夏海ちゃん、そのスリッパ片方貸して! 武器にするから!」

「ええっ、嫌ですよ!」

夏海ちゃんは数歩後ずさった。万一にも踏みたくないんだろうか。

俺は仕方なく、枕元に転がっていた卓球王国の雑誌を丸めて武器にすることにした。リーチ、攻撃力共には心許ないけど、もう何度となく読み返しているし、そのまま捨ててしまっても問題なさそうだ。天善は悲しみそうだけど。

「夏海ちゃん、今から俺が思いつきり敷布団をめくるから、ヤツの姿が見えたらすかさず攻撃してね」

「わかりました! 二次攻撃はお願いしますよ!」

夏海ちゃんはそう言つて、ハエうちを両手で構える。

「うん。それじゃいくよ。セーの……!」

「あ、朝から疲れました……」

「本当だね……」

それから数分間に及ぶ激闘の末、なんとかごきごきを掃討した俺と夏海ちゃんは、ふすまが開け放たれた部屋の真ん中で、背中合わせになつて座り込んでいた。

「……朝から騒がしかったけど、何かあったの?」

その時、鏡子さんが部屋の前を通りかかった。肩で息をしている俺たちを見て、不思議そうな顔をする。

「黒光りする虫が出たので、羽依里さんと一緒にやつつけてたんです」

「ああ、今日みたいな雨の日は、よく出るよね」

「え、雨？」

鏡子さんに言われて、部屋から窓の外を見てみる。薄暗いとは思っていたけど、雨が降っていた。昨日まであれだけ晴れていたのに。

「なんかね、台風が来るみたいだよ」

「た、台風!？」

続く鏡子さんの言葉に、俺と夏海ちゃんは思わず声が重なってしまった。言われてみれば、鏡子さんは手にオレンジ色のカップを持っていた。

「昨日くらいからニュースでやってたよ？ 見てない？」

「ここ最近、テレビはほとんど見ていない。ましてニュースなんて。

「すみません、全然知りませんでした」

「ちようど今やってるから、見てみたらいいよ」

鏡子さんにそう促されて、俺と夏海ちゃんは居間へと向かう。

「うわ、これは直撃コースだね」

夏海ちゃんと並んで、テレビ画面を食い入るように見る。画面に出ている進路予想を見る限り、台風は今夜には鳥白島を直撃するみたいだ。

「今はまだ風も強くないけど、たくさん雨雲をまとってるみたいだね。近づくと前から雨らしいよ」

鏡子さんがそう教えてくれた通り、今日は丸一日雨らしい。せつかくの夏休みだっていうのに。

「あれ？ 雨ってことは、今日のラジオ体操は？」

「残念だけど、お休みだね」

「そ、そうですか……」

夏海ちゃんが心底残念そうに肩を落としていた。毎日頑張ってたし、ちよつとかわいそうだ。

それにしても、今日は朝からぐきぐきと戦う羽目になるし、ラジオ体操は休みだし、台風は来るし。散々だね。

「それじゃ羽依里君、私もちよつと出かけてくるからね」

そんな夏海ちゃんを不憫に思っていると、鏡子さんがそう言いながら、手に持っていたカッパを羽織っていた。やっぱり、島の皆で台風の備えとかするんだらうか。

「あの、鏡子さん。俺も何か……」

「羽依里君は夏海ちゃんのをそばにいてくれればいいよ。台風準備は慣れてないと、色々大変だしね」

「そ、そうですか」

手伝えることがあれば……と思つて声をかけたけど、やんわりと断られてしまった。確かに、慣れていない俺が手伝えるものでもないのかもしれない。

「雨戸出したりするのは夕方からでいいと思うから。それじゃあね」

そう言つて、鏡子さんは出かけてしまった。

「……あの、雨戸ってなんですか？」

鏡子さんを見送つた後、夏海ちゃんがそう聞いてきた。そういえば、今時の家にはあまりないかもしれない。防風シャッターとかならありそうだけど。

「雨や風から窓ガラスを守る戸だよ。主に台風が来る時に閉めるんだ」

「……ちよつと気になります」

「見てみる？ こつちにあるよ」

「え、外にあるんですか？」

「うん、そうだよ」

俺はそのまま玄関から表に出て、雨に濡れないように軒先を通つて移動する。夏海ちゃんも不思議そうな顔をしながら、後に続いてきた。

「ここだよ。使わない間は、ここにしまつてあるんだ」

玄関から一番近い窓に到着すると、俺はその窓と壁の間にある収納スペースに手を入れる。

そして、そこからガラガラと雨戸を引っ張り出す。だいぶ古いけど、まだまだ使えそうだ。

「え、木なんですか」

「この家のはそうみたいだね。去年も使ってるし、風で壊れたりしないから安心していいよ」

夏海ちゃんは木製の雨戸をコンコンと叩いている。強度に不安があるのだろうか。

「そう言えば夏海ちゃん、朝ごはんどうするの？」

「朝ごはんですか？ それはもちろん、ログボを使ってチャーハンを……」

「今日、ラジオ体操休みだし、ログボないけど」

「……はっ」

夏海ちゃんは目を大きく見開いて固まった。もしかして、気がつかなかったのだろうか。

「な、何かチャーハンの具材になるものを探してきますー！」

そう言うが早いか、夏海ちゃんはダツシユで家の中に戻っていった。雨戸を閉めるのは夕方からでも構わないと言われたし、出しかけた雨戸をいったん元に戻して、俺もその後続いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「とくいりよーうりなーんですー♪」

夏海ちゃんが台所で何か歌いながら、チャーハンを作ってくれていた。さつきまで大慌てで具材を探していたみたいだったけど、何か良い食材が見つかったらしい。

俺は例によって手伝えることがないので、居間でテレビの台風情報を見ていた。

『この台風はこのまま進めば、中国地方を縦断することになる。きつ

と、もみじ饅頭でも食べに来たのだろう』

『じー、台風はもみじ饅頭は食べない』

『つて、何故だあああ——!』

なんだろう。あの気象予報士、すごく熱い。

そして相方のキャスターらしい金髪の女性は、逆にすごく冷静だった。

「お待たせしました! ポテチチャーハンです!」

そんなことを考えていると、夏海ちゃんがおぼんにチャーハンを乗せて居間にやってきた。

「え、ポテチ?」

「はい! ポテチチャーハンです! 今回も自信作ですよ!」

夏海ちゃんはそう言いながら、満面の笑顔で俺の前にチャーハンを置く。

そのチャーハンをよく見ると、卵やネギと言った定番具材に混ぜつて、細かく砕かれたポテチが見える。見た感じ、のりしお味かな。

「ポテチはちよつと賞味期限過ぎてましたけど、しつかりと火を通したので、きつと大丈夫です! さあ、食べましょう!」

ちよつと待って。前半の台詞がすごく気になるんだけど。食べて大丈夫なのかな。

「早く天気になりますよーに。いただきまーす!」

夏海ちゃんは俺の不安など気にすることなく、おいしそうにポテチチャーハンをほおぼりはじめた。

「本当に大丈夫かな……」

「……羽依里さん、もしかしてチャーハンの可能性を信じてないんですか!」

スプーンにポテチチャーハンをすくって、訝しげに眺めていると、夏海ちゃんから強い口調で言われた。

「信じてるけど、一抹の不安というかさ」

「騙されたと思って食べてみてください! ほら!」

夏海ちゃんが前のめりになりながら、自分のスプーンで俺のチャーハンをすくって、俺の口元に向けてくる。これはまた、チャーハン

モードになつてる。下手に逆らわないほうが良さそうだ。

「そ、それじゃ、いただきます」

夏海ちゃんのスプーンからポテチチャーハンを食べさせてもらう。

「……あ、美味しい」

「ですよねですよね」

チャーハンだから元々パラパラなんだけど、細かく刻まれたポテチが混ざっていることで、より一層パラパラになっていて美味しい。いい感じに醤油の味もしみ込んでるし。

「やっぱり、チャーハンの可能性のカタマリです！」

夏海ちゃんは安心したのか、再び自分のチャーハンをすくって食べ始めた。チャーハンモードのせいか、特に何も気付いていない様子だった。

朝食後は、本当にやる事が無くなってしまった。テレビをつけてみるけど、どのチャンネルも同じように台風関連のニュースばかりで、すぐに飽きてしまった。

「はあ……」

夏海ちゃんとはほぼ同時にため息をついて、窓の外を見る。薄灰色のフィルムターをかけられたような庭に、雨がしとしとと絶え間なく降り注いでいる。

夏でも雨は降るはずなのに。まるで唐突に夏休みが終わってしまったかのような、妙な錯覚に襲われる。

「あ、そうでした！」

その時、夏海ちゃんが唐突に立ち上がる。

「え、どうしたの？」

「あれですよあれ。手紙出さないと！」

何かを思い出したかのように、ぱたぱたと自分の部屋へ走って行ってしまった。手紙って何だろう。

俺が疑問に思っていると、すぐに茶色い封筒を持って戻ってきた。

「夏海ちゃん、それは？」

「監督に出す手紙です！ 勝利報告ですよ！」

夏海ちゃんの言う監督ってのは、もしかしなくてもあのオツサン……古河秋生さんのことだろう。別れの際に住所を教えてもらっていたし、早速手紙を書いたみたいだ。

「というわけで羽依里さん、ここの住所教えてください！」

「いいよ。ちよつと待っててね」

俺は適当なメモ用紙にこの家の住所を書いて、夏海ちゃんに手渡す。俺も加藤家には散々通い詰めているし、すっかり暗記してしまっていた。

「ありがとうございます！」

夏海ちゃんはそれを受け取ると、封筒の裏にさらさら住所を書き写していた。

昨日撮った集合写真をリトルバスターズの皆に送る時には、俺も手紙を添えても良いかもしれない。

「それじゃ、ちよつと役所に出してきます！」

そんなことを考えていると、夏海ちゃんが手紙をポーチに入れながら立ち上がる。

「え、出してくるって、今から？」

「……そうですけど？」

以前のみきから、役所で郵便業務もやってるって聞いた記憶があるけど、わざわざ台風が来ようとしている今に出しに行かなくても。

「この天気だし、台風過ぎてからでも良いんじゃない？」

「少しでも早く出したいんですよ。雨がひどくならないうちに行ってきます！」

どうも本人の意志は固いらしい。さっさと玄関に向かって、傘立てから赤い傘を一本抜き出していた。台風が来るから船も出ないだろうし、今日出しても明日出しても変わらないと思うけど。

「ちよつと待って。心配だし、俺も行くよ」

俺も同じ傘立てから深緑色の傘を抜き出して、慌てて夏海ちゃんを追いかけた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、ちよつと行つてきますね」

役所の近くまで来ると、夏海ちゃんは小走りでその入口へ向かつていった。

俺は不思議とついていく気にならず、役所に背を向けたまま、雨に濡れる鳥白島の景色をぼんやりと眺めていた。

いつもこの時間なら、うるさいくらいにセミが鳴いているのに、どこに行つてしまったのかと思えるくらい静かだ。当然だけど、雨音しか聞こえない。

さんと照り付ける太陽も、今は灰色の雲に隠されてしまつて、その姿を確認する事は出来ない。

「なんか、鳥白島じゃない別の島に、一人で取り残されたみたいだな」
ぼそりとそんなことを呟いていた。こんな天気だから外には人っ子一人いないし、そんな気分になるんだろうか。

その時ふと、夏海ちゃんまでもう帰つてこないような不安を感じて、俺は慌てて役所の方を振り返る。

すると、赤い傘がこつちに向かつてくるのが見えた。

「おまたせしましたー」

「おかえり。手紙、出せた？」

「はい！ のみきさんが対応してくれたんですけど、すごくヒマそうにしてましたよ」

「え、そうなの」

「……今のところは青年団で手が足りているみたいですよ」

「そうなんだね。さすがに島の皆は慣れてるのかな」

役所の机に突つ伏して唸っているのみきを想像して、少し可笑しくなった。

「そういえば、のみきさんが言っていたんですけど、今日も港に出店が出ているらしいですよ」

「え、今日も!？」

俺はつい、港の方を見やる。一面の灰色だ。こんな中で、何の出店をしてるんだらう。

「です。さすがにお昼までらしいですけど」

リトルバスターズが来ている間は、ちょうど祭りの期間と重なったこともあって、すっかり出店のことは忘れていた。

「……夏海ちゃん、久しぶりに行ってみる?」

「はい。どんな出店が出ているのか、気になっちゃいます」

「それじゃ、ちよつと行ってみようか」

「はい!」

ちようど財布は持っているし、見に行ってみよう。

俺は夏海ちゃんと並んで、港へ向けて歩き出した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港についてみると、確かに出店があった。白いテント屋根の下に、見慣れた顔が二つ並んでいる。

「よう、二人とも」

「あ、いらっしやーい」

「藍さん、蒼さん、おはようございます!」

テントの中では、藍と蒼が店番をしていた。今日は二人とも、鏡合わせのように同じ髪型をしていた。

「今日は髪型も似てるし、ますます見分けがつかないな」

「当然です。今日みたいに風が強い日にストレートだと、すぐにボサボサになっちゃいますからね。理にかなった髪形ですよ」

ポンポンと自分の髪を触りながら、藍がそう言っていた。

「それにしても、こんな日でも出店を出すんですね」

「一応、出してみなさいっておばーちゃんに言われてねー」

「こんな天気でも、もしかしたら物好きなお客さんが来るかもしれま

せんし」

藍はそう返しながらも、椅子に座ってイナリと遊んでいた。見た感じ、他に客の姿もないし、思いつきりヒマそうだった。

それにしても、実際に来てしまっている辺り、俺たちもその『物好きなお客さん』に入るんだろうか。あまり笑えなかった。

「それで、今日はなんの出店なんだ？」

「見てわからない？　これよ、これ」

蒼が笑顔でおもちやの銃を持ち上げてみせる。よく見ると、その先端にはコルクが詰まっていた。

「懐かしいな。コルク銃か？」

「そうそう。それで、的はあれよ」

蒼が指し示す先……テントの奥には、たくさんのお菓子が並んでいた。

「もしかして、射的ですか？」

「夏海ちゃん、ご明察。これなら、雨でもできるでしょ？」

確かに、射的なら天候に関係なくできるだろうけど……これまた随分と懐かしい。子供の頃やって以来だろうか。

「で、お二人はどうします？　射的、やっていきますか？」

「どーせヒマでしょー？」

「そりゃ、暇だけど……夏海ちゃん、やってみる？」

「はい、やってみたいです！」

「……わかった。蒼、二人分頼むよ」

夏海ちゃんがやってみたいというならしようがない。こんな天気だし、少しでも楽しいことを見つけないと。

「まいどありー。一回100円。弾は3発よ」

そう言っつて、俺たちにコルク銃一丁に加えて、コルク弾を3つ渡してくれた。蒼の説明によると、この銃はコルクを3発分まとめてセットすれば、引き金を引くたびに弾が一発ずつ飛び出すタイプらしい。いちいち弾を再装填しなくて良いってことは、標準を合わせ直す必要ないということだし。これは使いやすそうだ。

「羽依里さん、こういうの得意なんですか？」

雨水を切った傘をテントの端の方に置きながら、夏海ちゃんがそう聞いてきた。大きな目のテントだったので、中に入ってしまったら雨に濡れることはないだろう。

「え？ まあ、男だし。小さい頃はそれなりに遊んでたしね」

半分嘘で、半分本当だった。やったことはあるけど、特段上手だった記憶はない。夏海ちゃんの手前、少しだけ誇張してしまった。

「それじゃ二人とも、頑張ってくださいね」

空門姉妹が椅子を持って左右に避けてくれ、的となるお菓子が良く見えるようになった。

細めの棚が二つ並び、様々なお菓子が横一列に置かれている。

手前はガリコやすこんぶ、長森ミルクキャラメルといった、小さ目で撃ち落としやすそうなお菓子が並ぶ。

その奥には、パリングルスやジャイアントプリッツンといった、ちよつとお高めのお菓子が陣取る。

「……なあ蒼、この中で一番高いお菓子はどれだ？」

「あれよ。一番奥のど真ん中」

その質問を待っていたかのように、蒼が一点を指差す。そこには他の駄菓子とは一線を画す、ブルジョワチョコがあった。確かあれ、250円もする駄菓子屋の高額商品じゃなかったっけ。

「……よし、あれを狙ってやる」

「撃って倒すだけじゃ駄目よ。完全に下に落とさないとあげないからね」

「わかってるよ」

この手のお店ではお約束のルールだ。俺はコルク銃を構えて、平常心を保ちながら、狙いを定める。

「……うりゃー！ てい！ うりゃー！」

「はい、残念でした」

……心を無にしてからの、三連射撃は……ものの見事に全弾外れた。

「ポニー」

すまし顔の藍から残念賞の五円チョコを渡されて、イナリからも慰

めの言葉をかけられた。うう、めちやくちや悔しい。

「次は夏海ちゃんの番ねー。しっかり脇をしめて狙うのよー」
「わかりました!」

落胆する俺を尻目に、夏海ちゃんがコルク銃を構える。

俺の結果を受けてなお、夏海ちゃんは果敢にブルジョワチョコに挑むらしい。確かにあれを100円で落とせば、もうけものだけど。

「えい!… えい!… えい!…」

夏海ちゃんが狙いすまして放った三連撃は、見事に全弾命中した……が、ブルジョワチョコは微動だにしない。

「惜しかったですね。はい、残念賞です」

「あ、あれー?」

不思議そうに首をかしげながら、五円チョコを受け取っていた。

「……なあ蒼、あれって本当に落ちるのか?」

「藍は撃ち落としてたわよー? あたしには無理だったけど、きつと角度とかが重要なのよ」

「そんなもんなのか……」

藍はしれつとスペック高いし、あまり参考にならない気もするけど。

「どうするー? もう一度挑戦してみる?」

「どうしようかな……」

笑顔の蒼を前に悩む。一回やったくらいじゃコツが掴めないし、何回かやって慣れた方が良いのかもしれない。

「くーださーいなー」

「あ、いらっしやーい」

その時、右手にスーツケース、左手に傘を持った鴉が出店にやってきた。

「鴉さん、おはようございます!」

「やつほー。なっちゃん、羽依里」

鴉は爽快に挨拶を返すと、持っていた傘をたたんで、端に置く。な

んとも可愛らしい、黄色い傘だった。

「鷗、お前にしては子供っぽい傘だな」

「……これ、のみきさんから借りた傘なんだけど。言いつけるよ?」

「……失言だった。聞かなかったことにしてくれ」

出会って早々、何とも言えない顔で俺を見てくる鷗に必死に頭を下げる。その拍子に、半分くらい雨に濡れたスーツケースが目についた。

「……なあ鷗、スーツケースが半分くらい濡れてるけど、大丈夫なのか?」

「うん! 防水仕様にしてあるから大丈夫だよ!」

よくわからないけど、本人が大丈夫と言ってるんだから大丈夫なんだろう。

「と言うか鷗、お前はわざわざこの雨の中を出歩いているのか?」

「むー。同じように出歩いてる羽依里たちに言われたくないよ。私は台風に備えて、食料品を買いに来たんだから」

ぽんぽんとスーツケースを叩く。おそらく、あの中に入ってるんだろう。

そう言えば、漁港にも小さいながら商店があっただけ。鷗の居候先はこの近くだし、雨が降る中、わざわざ歩いて港の商店に行くのも億劫になったんだらうか。

「それで、帰り道にこのお店が気になっちゃって。ここって何の店?」

「これよ、これ」

鷗がそう質問すると、蒼は俺たちにしたのと同じように、コルク銃を鷗に見せる。

「おお、射的だね!」

それを見た鷗の表情が輝いた。

「得意なのか?」

「うん! 冒険に銃撃戦はつきものだからね!」

「……つきもの、か?」

「お、なんか自信ありげねー。それじゃ、鷗もやってみる? 一回100円よ」

「じゃあ、まとめて二回やってみる！ はい、200円！」

「まいどありー」

「鷗さん、頑張ってくださいね」

代金と引き換えに、鷗の前に二丁のコルク銃と計6発の弾が置かれた。

蒼は純粹な笑顔だけど、藍はなんだか含みのあるような笑顔だ。なんだろう、良いカモを見つけた感じなんだろうか。鷗だけに。

「どれを狙おうかなー」

そんな事とはつゆ知らず、鷗は手慣れた様子でコルク弾を詰めながら、景品の品定めをしていた。俺と夏海ちゃんは左右からその様子を眺めていた。

「それじゃ、いくよー……てーいつ！」

ぱん、ぱんぱん。と軽快な音が響く。次の瞬間、ガリコキヤラメルふたつと、メープルチョコが弾かれるように落下した。

「は？」

「え、ちよつと」

それを見た店員の二人が、全く同じ顔で固まっている。

「それじゃ、二回目！ えいえい！ えーい！」

鷗は次のコルク銃を手に取って、再び慣れた手つきで弾を装填。景品のお菓子を狙い打つ。

俺たちがあれだけ苦戦したブルジョワチョコを二発で落として、最後の一発でおまけとばかりにパリングルスも落とす。うそだろ、信じられん。

「鷗さん、すごいです！」

夏海ちゃんも瞳を輝かせて、その様子を鷗を見ていた。何故だろう。すごく悔しい。

「……蒼、もう一度やらせてくれないか」

俺は財布からもう100円を引っ張り出し、再挑戦を宣言する。

「いいわよー。まいどありー」

蒼からコルク銃と弾のセットを受け取り、すぐに発射準備にとりかかる。

もしかして、藍の言うカモは鷗じゃなく、俺のほうかもしれない……なんてことを頭の片隅で考えながら、次に狙うは、見た目のインパクトも大きい、ジャイアントブリッツンだ。

「今度こそ……うりゃー！」

しっかりと目標をセンターに置いて、引き金を二度引く。

「……あれ？」

弾は両方とも命中したのに、ジャイアントブリッツンは微動だにしない。出力も最大値だったはずなのに。おかしい。

「……もしかして、鷗の使ってる銃に秘密があるんじゃないか？」

俺はそんなことを言いながら、鷗の持つてる銃を見やる。

「まるで私がズルしてるみたいない方しないでよ。その銃貸して」

鷗はそういうと、もう一発だけ弾が残っている俺の銃をひったくる。

「よく見ててね……ほいっ！」

そして、俺が二発撃つても倒せなかったジャイアントブリッツンを、一発で落としてしまった。

「はい、これはなっちゃんにあげる！」

「あ、ありがとうございます！」

鷗は藍から景品を受け取った後、そのまま夏海ちゃんに渡してくれていた。

「そうだ。せっかくだし、やり方教えて上げよっか。例えば、あの辺のお菓子を狙う時は……」

そして、そのまま夏海ちゃんに耳打ちしながら、何やら話を始めた。

「……なあ鷗、代金三人分払うからさ、俺にも教えてくれないか」

その様子を見ていた俺は恥も外聞もなく、小銭を出しながらそんなことを言っていた。情けない話だけど、せめて自力で一つくらい落としたい。

「キャプテン、どうかお願いします」

「にへへー、そう言われちゃ仕方ないねー」

俺がそう言っって頭を下げると、鷗もまんざらでもない感じだった。

「よし、特別に二人に教えてあげよう！」

三人分のコルク銃と弾を受けとりながら、鷗のレクチャーが始まった。

「まず、このブルジョワチョコみたいに四角い形をしてるのは、真っ正面を狙っても駄目なの。上の角に続けて当てれば、一気に落とせるよ」

「え、そうなんですか？」

「うん。重要なのは、しっかり角を狙うこと。他の部分を狙っても、倒れるだけで落ちないから、もらえないしね」

鷗が手元にあるブルジョワチョコを使って、そう説明してくれていた。

「パリングルスはね、これも上ギリギリを狙うこと。そこ以外だと、コルク銃の威力が足りないの」

鷗の指導は文字通りの得ていた。もちろん、全ては狙った場所にきちんと弾を当てられる技量があつての話だけど。

「わかりました！ やってみます！」

そう言うと、夏海ちゃんは銃を構えて、先陣を切る。

「えい！ えいえい！」

……直後、パリングルスを二つ落としていた。すごい。

「よし、俺もやってみよう」

俺も鷗からのアドバイスを元に、今一度別のジャイアントプリッツを狙い撃つ。リゾンベだつ！

「……おお、やった！」

先程までの苦戦がウソのように、一発で落とすことができた。

「これは、一度コツを掴んだら病みつきになりそうだな」

「でしょー。あそこのルッツとか狙い目だよ」

「よしきた。行くぞ」

「ス、ストローップ！ これ以上やられたら赤字よ！」

「ポポーン！」

しかし、そこで蒼とイナリが俺たちの前に立ちふさがった。くそ、ようやく面白くなってきたのに。

「でも確かに、これ以上お菓子を取っても食べきれないかもね」

鵜はスイーツケースからビニール袋を取り出して、景品のお菓子を俺たちに三等分してくれた。それでも結構な量になったし、これ以上取っても、さすがに食べられないかも。

「それじゃ、景品の代わりと言ってはなんだけど、羽依里って梅干し食べる？」

「え、梅干し？ 食べるけど」

「前に駄菓子屋のおばーちゃんからバイト代としてもらったんだけどねー。たくさんあるから、良かったら持っていかない？」

そう言う蒼から、タツパーに入った梅干しを渡された。この雨中、何で出店に梅干しを持ってきてるんだろう。

「これ、普通の梅干しだよな」

タツパーを受け取った直後、俺はそのふたを少しだけ開けながら、そう聞いていた。以前、蒼からもらった佃煮でえらい目にあっただことなく警戒してしまう。

「普通の梅干しよー。のみきとか、この梅干しが入ったおにぎりが大好きなんだから」

「いざという時は、これで美希ちゃんを釣れますよ」

藍の方がなんか言っていたけど、聞かなかったことにしよう。

「……むぎゆ？ 皆さん、何してるんですか？」

その時、背後から声がある。振り返ってみると、紬がいた。黄色いカッパを着込み、手に大きな荷物を持っている。

「あれ、紬？」

紬が港にいるなんて珍しい。それに、今日は一人だった。

「紬さん、今日は静久さんは一緒じゃないんですか？」

「はい。今日はシズクは来れないそうです」

夏海ちゃんからの問いに、紬が残念そうにそう答える。言われてみればそうか。台風が近づいているんだし、本土からの船も出ないんだろう。

「ところで、ツムツムも台風に備えて、食糧の買い出し？」

鵜が紬の荷物を見ながら、そう聞いていた。ビニール袋で何重にも覆われてるけど、どうやらそれっぽい。

「そうです！　これからこの荷物を持って、灯台に戻るところです！」

「……もしかして、紬は台風の間も灯台で過ごすの？」

少し気になったので、俺は紬に聞いてみた。

「ハイ。台風の時はいつも、灯台でやり過ごしています」

「え、それって危なくない？　雨とか風とかさ」

灯台の立っている場所は島の端だし、風とか直撃しそうだ。浜辺が近いから、波も来そうだし。

「そうですね。波とかぶち当たります。時々窓からも入ってきますし、朝にはヒサンなことになります」

「えええ、なにそれ」

笑顔で言ってるけど、それってかなり危ない状況なんじゃないだろうか。

「そうだ。ツムツムと私、二人で羽依里の所に避難させてもらわない？」

その時、鷗が突拍子もないことを言っていた。

「おおー、それはいい考えです！　シズクもないので、実は寂しかったんです！」

「ちよつと待って。百歩譲って紬はいいとして、なんで鷗も？」

鷗は確か、安全な居候先があるはずだ。のみきのアパートだけど。「のみきさんのアパート、海が近いこともあって、すごく風が当たるらしいの」

「いや、それはそうだろうけどさ」

台風が来るわけだし、島のどこにいても風は強いと思う。

「……羽依里、お願い。一人じゃ心細いの」

……鷗、そんな顔でこっちを見ないで。上目遣いずるい。

「つて、鷗はのみきと一緒にいればいいじゃないか？」

「……美希ちゃんも役所で待機してたよ。今日はたぶん、帰れないんじゃないじゃないかな」

「そうなんですわ……つて、鏡子さん!？」

いつの間にか、俺たちの後ろに鏡子さんが立っていた。手にはこれまた、大きめの袋を持っている。

「美希ちゃんから港に向かったって聞いたけど、会えてよかったよ。ちょうど羽依里君に渡したいものがあってね。これ、持って帰ってくれないかな」

そう言っつて、鏡子さんは持っていた袋をそのまま俺に手渡してくれた。中身を見てみると、多種多様なカップうどんがぎっしりだった。「すごい数ですね。これ、どうしたんですか?」

「台風の間、食料にどうかと思っつて」

「そういうことでしたら、ありがたく貰っつて帰ります」

「うん。お願いね」

そこまで話すと、鏡子さんはきびすを返す。忙しそうだし、また役所に戻るんだろうか。

「あの、鏡子さん。一つお願いがあるんですけど……」

俺はそんな鏡子さんを慌てて呼び止める。そして鷗と紬を台風避難として、今夜加藤家に泊めてもらえるかどうか、お伺いを立てる。

「そうだね……事情が事情だし、いいよ。困ったときはお互い様だからね」

「キョーコさん、ありがとうございます!」

「鷗ちゃんも、島の台風は初めてだよね? 心細いだろうし、気にせず泊まっつていっつてね」

「はい! お世話になります!」

二人は一緒に頭を下げていた。これで鏡子さん公認になっつてしまった。

「でも鏡子さん、本当にいいんですか?」

「うん。何人来ても構わないよ。浴衣もあるから、良かったら使っつて」
そう言えば、去年蔵整理をした時に、比較的新しい浴衣が大量に出てきたっつて。確か、押し入れに入れ込んだはずだけだ。

「でも、泊まるのは夏海ちゃんの部屋だからね? 羽依里君の部屋は駄目だよ?」

「わ、わかってますっつて」

「楽しみだね!。なっつちゃん、夜、いっつぱいお話ししようね!」
「はい!」

台風避難のはずなんだけど、なんだかお泊り会の装いを呈してきた。女の子はこういうの好きそうだしな。

「それじゃ、何かあったら役所に電話してね。私、そっちにいるから」
鏡子さんがそう続ける。役所は防災用の詰め所にでもなってるんだらうか。

「後ね、夕方くらいに皆で雨戸だけ閉めておいて欲しいかな。台風が過ぎるまで、私は家に帰れないと思うし」

「わかりました。鏡子さんも気をつけてくださいね」

「うん。ありがとうね。それじゃ」

最後に俺たちに笑顔で手を振って、鏡子さんは足早に去っていった。夕方になったら、忘れずに雨戸を閉めないで。

「何人泊まっても良い……家主さん公認発言でしたね。しかと聞きましたよ」

「え、藍、何か言った？」

「いいえ。何も言ってませんよ」

色々考えていたら、藍が小さな声で何か言っていた。うまく聞き取れなかったけど。

「それじゃ、夕方になったら羽依里の家に行くねー！」

「タカハラさん、ナツミさん、よろしくお願いします！」

「はい！ お待ちしています！」

「んじゃー！」

鷗と紬の二人は元気に手を振りながら、雨の中に消えていった。

まあ、あの二人なら夏海ちゃんの部屋に泊まれるだらうし、今回はかなりは非常事態だし、しょうがないよな。うん。

「じゃあ、そろそろ俺たちも帰るよ」

紬たちも帰ったことだし、俺たちもそろそろ帰ることにしよう。

「うん。気をつけてねー」

「二人も、天気が悪くなる前に帰れよ？」

「わかってるわよー。ありがとうねー」

「夏海ちゃん、気をつけて帰ってください」

「はい！ 射的、楽しかったです！」

空門姉妹とそう挨拶を交わして、夏海ちゃんと二人、出店を離れる。

「……あ、夏海ちゃん、ちよつと待って」

そして港を少し歩いたところで、俺は立ち止まる。

射的の景品のお菓子里、蒼からもらった梅干し、それに鏡子さんから預かったカッププうどんと、結構な量の荷物になってしまった。傘を差しながらこれだけの量を持つのは骨が折れる。

俺は開いたままの傘を一度地面に置いて、一度荷物を整理することにした。

「荷物多いですね。私ももう少し持ちましようか？」

そう言ってくれるけど、すでに夏海ちゃんも鷗からもらったお菓子里を持っていて。元々ポーチだって持つてるんだし、これ以上持たせるわけにはいかない。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと整理すれば……うわ!？」

その時、強めの風が吹いた。開きっぱなしにしておいた俺の傘は、その風に煽られてコロコロと地面を転がっていく。

「し、しまった！」

俺は慌てて傘を追いかけるけど、持つてる荷物かかさばってなかなか追いつけない。その間にも、傘はスピードを増しながら海の方へ向かっていく。これはまずい。

「あああ——！」

結局追いつけないまま、傘は防波堤を容易く乗り越え、海に転がり落ちてしまった。どうしよう。借り物の傘なのに。

俺は防波堤から灰色の海を覗き込み、波に揉まれている傘を見ながら呆然とするしかなかった。

「え、羽依里？」

その時、後ろから透き通った声がする。振り返ると、しろはが白い

傘を差して立っていた。

「しろは、どうしてここに？」

「それはこっちの台詞だよ。私は港の様子を見に来たの。仕入れの関係もあるし」

仕入れってことは、食堂のことだろうか。でもこの天気だし、どの船も漁には出てなさそうだけど。

「それより、羽依里こそ何をやってるの？」

傘も差さずに雨に濡れる俺を見て、しろはが不思議そうな顔をする。

「え、俺はその……」

思わず目を泳がせる。そして、海を漂う傘をしろはに見られないように、咄嗟に身体で隠す。あまりにも恥ずかしい。

「羽依里さーん！ 傘、捕まえられましたかー？」

その時、後から追いついてきた夏海ちゃんがそんな言葉を発する。やめて夏海ちゃん、俺の努力を無に帰さないで。

「……傘？」

「あ、しろはさん！ 羽依里さんの傘を見ませんでしたか？ 深緑色の傘なんですけど」

「え、見てないけど。羽依里の傘がどうしたの？」

「実はですね……」

俺が必死に隠そうとしたのに、夏海ちゃんが洗いざらい喋ってしまった。うん、夏海ちゃんの誠実さは十分理解してるんだけどさ。

「……じゃあ、あそこを漂ってる傘が羽依里のなんだね」

しろはが俺の横に立って、防波堤から海を覗き込む。まだそこまで波は高くないけど、俺の傘はもうほとんど沈んでしまっていた。

「うう、ついてないな……」

俺ががっくりと肩を落とす。島は風が強いとは聞いていたけど、台風接近前からあんな突風が吹くなんて。

「……拾えない傘をいつまでも見ても仕方ないし、私の傘に入る？」

しろはがそう言って、自分の傘を俺の方に差し出してくれた。俺はもはや全身ずぶ濡れなんだけど、しろはのそんな優しさが嬉しかった。

「ありがとう。それじゃ、遠慮なく」

俺は一言お礼を言って、しろはの傘に入れてもらう。荷物はひとまとめにして外側へ持つ。インスタント食品とか、包装されてるものがほとんどだし、多少濡れても大丈夫だろう。

「家に帰るんだよね？ それじゃ、行こう？」

しろはにそう促されて、三人で住宅地へ向けて歩き出す。

「あ……私、急な用事を思い出したので、一足先に帰っていますね！」
直後、夏海ちゃんが何かに気付いたように駆けだしていった。いったいどうしたんだろう。

「……あ」

その時、俺は置かれた状況に気がついた。これって、思いつきり都合傘だ。もしかして夏海ちゃん、気を使ってくれたのかな。

「……どうかしたの？」

「……いい、いや。なんでもないよ」

「……そうっ？」

ここで変なことを言ったら、再び雨の中に放り出されてしまいそうだし。本人が気付いてないなら、それでよしとしよう。

「しろは、服が濡れたらごめんな」

「少しくらいならいいよ。それより、そんなにたくさん何を買ったの？ 非常食？」

「まあそんなところ。台風も来るっていうしさ」

「そうだね。おかげで誰も漁に出てないらしくて、今日は食材が無いから、食堂はお休みだよ」

「あ、やっぱりそうなのか」

傘に夢中になって気にしていなかったけど、思い返してみれば、全ての漁船は高波対策のために幾重ものロープで港に固定されていた気がする。

「まあ、夜には台風の影響がもろに出そうだし、お店どころじゃなくなるんじゃないか？」

「……それは、そうかもだけど」

台風とはいえ、お店を休んでしまうのが悩ましいんだろうか。口元に手を当てながら、うんうん唸っていた。

その後はなんとなく周りの景色を眺めながら、住宅地へ向けて歩みを進める。

こうやって並んで歩いているだけで何故か心地いいのは、隣にいるのがしろはだからこそと思う。

「夏海ちゃん、どうしちゃったんだろうね。急に走って行っちゃったし」

「……あ、そうだ」

しろはの口から夏海ちゃんの名前が出たことで、俺は昨日のやりとりを思い出した。せっかくだし、無理を承知でお願いしてみよう。

「しろは、今度、夏海ちゃんにもう一度チャーハンの特訓をしてあげられないかな？」

「そ、それは構わないけど……いきなりどうしたの？」

「昨日、色々あつてさ。できたら早い方がいいんだけど」

「……じゃあ羽依里を家まで送った後、そのまま夏海ちゃんに教えてあげてもいい？ 今からなら、お昼までには終わるだろうし。台風の影響もまだないだろうから」

「うん。夏海ちゃんも喜ぶだろうし、それでよろしくお願いするよ。急にごめん」

「いいよ。その代わり、材料も道具も羽依里の所のを使わせてもらうからね？」

「それは構わないよ。夏海ちゃんの主戦場は加藤家で、武器はフライパンだからさ」

「……そっか。中華鍋がないんだっけ。なら、それなりの方法で教えてあげないとね……」

その後、しろはは時計折目を閉じながら、夏海ちゃんの指導方法を考えてくれているみたいだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しろはと並んで加藤家に帰宅すると、玄関で夏海ちゃんが大きめのバスタオルを用意して待ち構えていてくれた。

「びしょ濡れですね……羽依里さん、お風呂入りますか？」

「いや、身体を拭いて、着替えるだけでいいよ。夏だし、すぐに乾くと思うからさ」

「そうですか？ せっかくですし、お風呂に入って、しろはさんに背中流してもらったらいいですね」

「ぶっ!？」

俺としろはは同時に吹き出してしまった。夏海ちゃん、冗談に聞かないから。

「しろは、先が上がっていいよ。俺、ちよつと着替えて来るからさ」

その場で全身を念入りに拭いた後、俺はしろはにそう伝えて、脱衣所へと向かった。

「うう、下着までびしょ濡れだよ……」

着替えを終えて居間に戻ると、しろはと夏海ちゃんはエプロンをつけて、台所に立っていた。どうやら、しろはがチャーハンの特訓について、夏海ちゃんに話をしてくれたらしい。

「それじゃ、しろはさん、よろしくお願ひします!」

「うん。夏海ちゃん、この特訓は生半可な気持ちじゃ乗り越えられないからね」

「はい! 望むところですよ!」

なんだろう。二人してチャーハンスイッチ入っちゃったんだろうか。とてもじゃないけど、俺が声をかけられる状況じゃない気がする。

「俺はどうしようかな……」

二人が楽しそうなのはいいことだけど、俺は暇になってしまった。テレビは相変わらず台風情報ばかりで気が滅入るし、何かないかな。俺は自分の部屋に戻り、適当に鞆や引き出しの中を探ってみる。

「……お、これは」

すると、引き出しの奥からたくさんの色紙が出てきた。

「確かこれ、パリングルス工作大会で使おうと思って用意したやつだっけ」

その時は結局使わなくて、すっかり忘れてしまっていた。せつかくだし、折り紙でもしよう。暇つぶしにはちょうど良さそうだし。

俺はそう考えながら、その大量の色紙を持って居間に戻った。

「夏海ちゃん、卵を入れるのが5秒遅いよ。後、油の量も多すぎ。計ってる時間はないけど、目分量でも誤差は5cc以下にしないと」

「はい！ 師匠！」

うんうん。夏海ちゃんも頑張ってるみたいだ。

……それにしても、二人が台所に立っている姿を見ると、姉妹と言うより、何故か親子みたいに見えてしまう。そんなこと言ったら、しろはに怒られそうだけど。

そんな台所からの声を聴きながら、俺は折り紙を始める。

折り鶴から始まって、カエル、やつこさん、手裏剣、紙飛行機……知っている限りの種類の折り紙を、片っ端から折っていく。

「久しぶりにやると楽しいもんだ。燃えてきたぞ」

「お待ちせしました！ ソウルチャーハン・パート2です！」

良い香りと共に、夏海ちゃんができたてのチャーハンを食卓に運んでくる。

「あ、もうそんな時間なんだね」

折り紙に熱中していた俺は、反射的に顔を上げて時計を見る。その

針は12時を指していた。もうこんな時間なんだ。

「ちよつと羽依里、食卓の周りが凄いいことになってるよっ。」

同じくできたてのチャーハンを運んできたしろはは、食卓の周りを見ながら呆れ顔だった。気づけば、俺の周囲はカラフルな折り紙であふれかえっていた。

「ああ、ごめん。すぐに片付けるよ」

「手も洗ってこないと駄目だからね？」

「わかってるわかってる」

その折り紙を部屋の隅にぱつと片付けた後、洗面所で手を洗って、再び居間に戻ってくる。

「ところで、なんで俺の前にチャーハンが二つあるの？」

夏海ちゃんとしろの前には、それぞれ一つずつのチャーハンが置かれているのに、何故か俺の前には二つのチャーハンが置かれていた。

「ひとつは夏海ちゃんが作ったチャーハン、もうひとつは私が作ったチャーハンだよ」

しろはその言葉を聞いて理解した。つまり、これはあれだろうか。食べ比べて鑑定しろって意味だろうか。

「さあ、食べてみてください！」

ずいつ、と夏海ちゃんからチャーハン押し渡される。ちよつと待つて。俺は朝に続いて、二度目のチャーハンなんだけど。

「それは私も同じです！ さあ、どうぞー！」

夏海ちゃん、しれつと心を読まないで。あれは間違いなく、本日二回目のチャーハンモードになってるし。

「それじゃ、いただくよ」

俺はスプーンを手にとって、まずは夏海ちゃんから渡されたチャーハンを食べてみる。昨日と同じ、塩コショウに卵、そしてネギだけのシンプルなチャーハンだった。

「ど、どうですか」

「……うん。美味しいよ。パラパラだし、ごはん一粒一粒にしつかりと味が染みてる。これは88点かな」

昨日の得点が確か82点だったから、一気に6点アップだ。それくらい、美味しくなってる。

「次はこっちを食べてみて」

そのチャーハンを二口三口食べたところで、今度はしろはがチャーハンを差し出してくる。

「じゃあ、こっちのチャーハンもいただくよ」

今度はそのチャーハンを口に運ぶ。うん。こっちも美味しい。これは甲乙つけがたい……。

「……こっちは89点かな」

悩みに悩んだ結果、そう採点を下した。やっぱり、どうしてもしろはのチャーハンが美味しい。

「やりましたー！ー！」

次の瞬間、夏海ちゃんが喜びを爆発させていた。しろはと二人でハイツまで交わしているし、どうということだろう。

「えへへ、実は私が持っていたのが、しろはさんのチャーハンだったんですよ！ー」

「え？」

「うん。それで、私が持ってたのが、夏海ちゃんのチャーハンだよ」
「そ、それってもしかして……」

まさか、二人でわざと反対のチャーハンを持っていたんだろうか。見事にしてやられた。

「今回はしろはさんのチャーハンより、私のチャーハンの方が美味しかったっていうことですよね」

夏海ちゃんは満面の笑顔だった。いつもは中華鍋を使うしろはが、今回はフライパンを使っていたというハンデを差し引いても、良い勝負をしていたと思う。

「そうだね。フライパンを使わせたら、夏海ちゃんのチャーハンの方が美味しい……かな」

自分で得点を発表してしまった手前、観念するしかなかった。

「でも、しろはのチャーハンももちろん美味しいよ。正直、選べないくらいだ」

「そう言うなら、どっちのチャーハンも残さず、しっかり食べないとね？」

「え、どっちも!？」

「うん。どっちも食べないとね。残しちゃ駄目だよ。礼儀だし」

「そうです！ 礼儀ですよ！」

二人が笑顔で迫ってくる。同時に、二人前のチャーハンも。ちよつと待って。さつきも言ったけど、俺は朝もチャーハンを食べただけ。いくら美味しくても、この量はちよつと。

「男の子だし、食べれるよね？」

「羽依里さん、頑張ってください！」

「お、おう。マカセテクレヨ……」

俺はそんな二人の笑顔に負け、二皿のチャーハンにとりかかったのだった……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うう、チャーハンマンになりそう……」

俺は何とか二人前のチャーハンを完食した後、たまらず居間に横になっっていた。

「もう、食べてすぐ寝たらウシになるよ」

「ウシになるのは静久だけだ……」

洗い物を終えて居間に戻ってきたしろはと、そんな話をする。夏海ちゃんの方はまだ台所にいるのか、姿が無かった。

「そう言えば羽依里、さつき夏海ちゃんから聞いたんだけどね」

「え、何を？」

「……今夜、鷗と紬が泊まりに来るって本当？」

「……ど、どこからその話を」

俺はドキリとして、思わず起き上がる。眼中に飛び込んできたしろはは笑顔だったけど、目が笑っていなかった。

「……本当なの？」

「ほ、本当です」

気がつけば、俺は敬語になっていた。台所から戻ってきたのか、しろはの背後には夏海ちゃんが立っていて、必死に手を合わせて謝っていた。たぶん、洗い物中に口を滑らせてしまったんだろうか。

「……どうしてそんなことになってるのか、教えてほしいんだけど」
淡々としているけど、しろはは笑顔を崩さない。うん。ものすごく怖い。

「しろはさん、聞いてください。実は……」

だから俺は正座をしたうえで、お泊り会に至った経緯を誠心誠意、迅速丁寧に説明することにした。

「……というわけなんだ」

「……」

しろはは俺の説明を静かに聞いてくれていた。

「……そっか。それなら、しょうがないよね。うん。しょうがないよね」

「……なんだろう。まるで自分にい聞かせているような言い方だった。

「灯台に波がぶち当たるんならしょうがないよね……」

「えっとその……ごめん」

「……羽依里が謝る必要はないよ。家主の鏡子さんが許可したんだし。困った時はお互い様だし……でも、皆でお泊り……」

ますます自分に言い聞かせるようにしている。だんだん声も小さくなっているし、次第に何か考え込んでいる様子だった。

「あ、あの！　ところで羽依里さん、さつきは何を作ってたんですか？」

「え？」

そんな空気に耐えられなくなったんだろうか。その時、夏海ちゃんが部屋の隅に置かれた折り紙の山を指さしながら、そう聞いてきた。

「ああ、二人がチャーハンの特訓をしてる間、折り紙をしてたんだよ」
俺は天の助けとばかりに、夏海ちゃんが振ってくれた話題に飛びついた。適当に折り紙の山に手を突っ込んで、一つの紙飛行機を引っ張り出す。

「あ、紙飛行機ですか？」

「そう。俺の自慢の紙飛行機だよ。夏海ちゃん、見てて」

俺はおもむろに立ち上がると、居間の奥へ向けて紙飛行機を投げる。

その紙飛行機は安定して滑空し、奥の壁ギリギリのところに着地した。

「おおー、すごいですー！」

「これでも昔は、紙飛行機マスターハイリと呼ばれていたからね」

「……むっ」

俺の台詞を聞いた直後、しろははおもむろに一枚の色紙を手に取り、慣れた手つきで、見たこともない形の紙飛行機を折りあげる。

「しろは、なにそれ」

「スーパーマスタングファイア・コズミックモードレベルⅧ」

「えっ?」

一瞬、何のことかわからなかった。どうやら紙飛行機の名前らしい。なかなかのネーミングセンスだと思う。

「夏海ちゃん、見ててね」

しろははそう言って、自信ありげに紙飛行機を投じる。その細い指先を離れた紙飛行機は、すーっと静かに飛び、居間の向こう側の壁にぶつかって止まった。明らかに俺の紙飛行機より飛んでいた。

「……しろはさん、すごいですー！」

「……ふふっ」

夏海ちゃんに尊敬のまなざしを向けられ、しろはが珍しく勝ち誇った顔をしていた。どうやら、なかなかの負けず嫌いらしい。

「夏海ちゃん、他にもよく飛ぶ紙飛行機があるの。折り方、教えてあげよっか」

「はい！ 知りたいですー！」

「それじゃ、まずはね……」

二人は新しい色紙を手にとって、一緒に折っていく。どうしよう。このままだと夏海ちゃんにも勝てなくなりそうだ。

「くそ、俺だつて」

俺も色紙を手に取り、新しい紙飛行機を折り始める。良く飛ぶ紙飛行機をもう一つ知ってる。

「……完成したぞ。名付けて、ハイリマックスV9!」

「でた。男の子つて、何故か自分の名前をつけたがるよね」

うぐつ。痛い所を突かれた。だって、つけたくなるんだもん。

「……ところで、なんでV9なんですか?」

「ほら、某野球チームみたいに連覇し続けてほしい……みたいなさ」

「あー、なるほどー……」

命名理由を知った夏海ちゃんが何とも言えない顔をしている。関西出身つて聞いたし、もしかしてライバルチームの方のファンなんだろうか。

「夏海ちゃん、そんな紙飛行機マスターハイリの鼻はへし折ってあげようっ!」

「はい!」

ちよつと、その名前を口にしないで。勢いで言ったんだけど、本気で恥ずかしくなってきた。

「できました! エクスネオマキシマム・ブラスト・ネクストⅢの完成です!」

「つて、あれ?」

完成した三人の紙飛行機を並べてよく見てみると、全く同じ形だった。

「……羽依里、この紙飛行機の折り方、知ってたの?」

「いや、なんとなく覚えてたんだけど……しろはに習ったっけ?」

「ううん。教えた覚えはないんだけど……」

まあ、偶然だろう。昔、何かの本で見たのを覚えていたのかもしれ

ないし。

「それじゃ、勝負しましょう！」

夏海ちゃんの一声で、俺たち三人は完成した紙飛行機を持って、加藤家で一番長い廊下の端に並ぶ。ここなら向こう端まで、かなりの距離がある。

「いくぞ、せーの」

「えーいー」

三人同時に紙飛行機を投じる。しかし、三つの紙飛行機のうち、俺のハイリマックスだけが早々に失速し、力なく地面に落ちてしまった。

他の二人の紙飛行機はそのままぐんぐん進み、廊下の突き当たりにぶつかって止まった。なんて飛距離だ。

「くそ、こんなはずじゃ」

同型の紙飛行機のはずなのに、俺のだけ早々にリタイヤしてしまった。微妙に翼が歪んでたりしたのかな。

「ふふ、紙飛行機マスターハイリが聞いて呆れるね」

……ぐは。だからその名前前で呼ばないで。恥ずか死ぬ。

「……そうだ。その称号、しろはに譲るよ」

「えっ」

「今日から、紙飛行機マスターシロハだ」

「えええ、そんな称号いらないし。返すよ」

「だめだ。俺はしろはに完敗したし、もう譲ると決めたんだ」

「う、ううう……」

余程シヨックだったんだろうか。しろはは頭を抱えてうんうん唸っている。

「……そ、そうだ夏海ちゃん。今度はもつと飛ぶ紙飛行機の折り方を教えてあげる」

かと思えば、急に顔を上げて夏海ちゃんに向き直る。どうやら、より飛ぶ紙飛行機の折り方を夏海ちゃんに教えた上で、勝負に負けて不名誉な称号を押し付けようという魂胆らしい。

「そ、それは遠慮しておきますー」

夏海ちゃんもすぐにそれに気づいたのか、するりとしろはの脇を抜けて、俺の背後に隠れてしまった。

「紙飛行機マスターシロハ、何をそんなに落ち込む必要があるんだ」

「うう……やめて、その名前で呼ばないで」

どうだ。俺の気持ちがあわかったか。自分で考えておいてあれだけど、実際に言われるとここまで恥ずかしいんだぞ。

その後は、ぶつぶつ文句を言うしろはをなだめつつ、普通の折り紙を楽しんだ。

俺がだまし船を作っている間に、しろはと夏海ちゃんはうにを作ったりしていた。作る過程は見てなかったんだけど、折り紙でどうやったらうにが作れるんだろう。すごく気になる。

それにしても、なんだかんだで俺たちは雨の日でも楽しく遊んでる気がする。

「それじゃあ、そろそろ帰るね」

「しろは、わざわざありがとうな」

「しろはさん、ありがとうございました！」

15時を過ぎた頃、しろはは風が強くなる前に食堂の戸締りをしてくると言って、帰っていった。

「できましたー！ ハイムスタング・ナツミスペシャルマーク3ですー！」

その後も、俺と夏海ちゃんはやることもないので、再び紙飛行機を折って飛ばし合っていた。

それにしても、なんだか俺としろはの間をとったようなネーミングセンスだった。色々大丈夫かな。

「えいー！」

夏海ちゃんが真上に投じた紙飛行機は、そのまま部屋の中をぐるぐる旋回しながら、ゆっくりと滑空していた。おお、これはこれですごい。

「しろはに教えてもらったの？ すごい動きだね」

紙飛行機を見ながらそんな話をしていると……電話が鳴った。

「……あれ、誰だろう?」

俺は立ち上がって、玄関前に置かれた電話へ向かう。もしかして、鏡子さんかな。

「……はい、加藤ですが」

「あの、鏡子さんはいらっしやいますか? 岬ですけど」

電話に出ると、受話器の向こうから聞いたことのない女性の声が出た。

「今、出かけちゃってるんですよ。良かったら伝言を受けますけど」

「あ、いえ……いないのでしたら、別に……」

目当ての人物が不在とわかったからか、電話相手が男だと気付いたからか、相手の声が急によそよそしくなった。

……それにしても岬って苗字、鏡子さん以外で誰かいたような。

「……あ。もしかして、夏海ちゃんのおかーさんですか?」

「えっ? そう、ですけど……あの」

……そうそう、思い出した。そういえば夏海ちゃんの苗字も岬だった気がする。鏡子さんの姪っ子になるって言ってたし、もしかして、様子伺いの電話だろうか。

思えば夏休みの間、ずっと娘を預けてるわけだし。これまで電話がかかってこなかったことの方が不思議だった。

「夏海ちゃんいますよ。代わりましようか?」

夏海ちゃんも久しぶりに家族と話したいだろうし。俺は軽い気持ちでそう提案する。

「……あの、あなたは何を言ってるんですか?」

……その時、女性の声のトーンが明らかに変わった。今度は怒っているような、悔しさをにじませるような声だった。

「……娘が、夏海がそこにいるはずないじゃないですか。だってあの子は、一年前に事故で……」

「……えっ?」

「……失礼します」

「あの、ちよつと！ もしもし！」

俺はとつきに引き留めようとしたけど、電話はそのまま切れてしまった。

「そうだ、リダイヤル……」

俺はそう思って本機に手を伸ばし……固まった。加藤家の電話は昔ながらの黒電話だ。当然、相手の電話番号なんてわかるはずもない。折り返しは無理だった。

「くそ……」

俺は為す術なく、静かに受話器を置く。

——夏海がそこにいるわけないじゃないですか。だってあの子は、一年前に事故で……。

「……さつきの、聞き間違えじゃないよな」

あの母親の取り乱し方からして、冗談で言ってるようには思えないし、あの後に続く言葉は一つだけ……。

……駄目だ駄目だ。すっかりしろ、鷹原羽依里！

一瞬浮かんでしまった考えを慌てて打ち消そうと、何度も頭を振る。

……それでも、いくら考えても都合の良い答えが出てこない。落ちて着け、俺。深呼吸だ。

さつきまでほとんど聞こえなかった雨風の音が、急に大きくなった気がする。

背中を流れているこの冷たい汗も、きつと蒸し暑さのせいだけじゃないはずだ。

「羽依里さーん！」

「っ！」

両膝に手をつけて、深く呼吸をしていると、唐突に夏海ちゃんに声をかけられた。思わず身体がびくっとなってしまうた。

「さつきの電話、誰からだったんですか？」

「ま、間違い電話だったよ」

そして俺は思わず、そう嘘をついてしまっていた。
「そうですか」

夏海ちゃんは大きな瞳で俺の方を見てくる。まるで、全てを見透かされそうな、まっすぐな瞳だった。

「……なら、いいですけど」
やがて少し首を傾げた後、きびすを返して居間へと戻っていく。

——夏海ちゃん、君はいったい……何者なの？

その小さな背中に向けて、今にもそんな言葉が出そうになった……
その時。

「おじやましまーす！」

「タカハラさん、ナツミさん、お世話になりました！」

目の前の玄関がガラガラと開いて、鷗と紬がやってきた。

「あ、鷗さんに紬さん、いらっしやいませ！」

それに気づいた夏海ちゃんも、元気よく二人を出迎える。

「それとね二人とも。実はもう一人、お泊り希望者がいるんだよ」

いつものスーツケースを玄関先に入れながら、鷗が笑顔を浮かべる。

「え？ もう一人？」

「ど、どうも……」

俺たちが困惑していると、紬と鷗の間から蒼がひよっこりと顔を覗かせる。

「あれ、蒼？」

鷗と紬は聞いていたけど、なんで蒼がいるんだろう。

「実はですね。アオさんはアイさんに家を追い出されてしまったそうです」

「ええ、なにそれ」

紬が憐れむような声でそう言っていた。つまり、蒼は無理矢理藍から加藤家へ台風避難に出されたんだろうか。

「そ、そうなのよねー。『家でうじもじ悩んでるくらいだったら、この

お泊りセット持って、さっさと出て行ってください！』って藍に家を追い出されちゃって」

蒼は苦笑いを浮かべていた。半強制的なお泊りイベント。港での藍のつぶやきは、もしかしなくてもそういう意味だったのかな。

それでも、まさか大事な妹を、台風が迫る中締め出すなんて予想外すぎる。もし加藤家に泊まれなかったら、どうするつもりだったんだろう。正直、空門の家の方が加藤家よりも立派だし、安全だと思うんだけど。

「えーつと、それでね……不束者ですが、よろしくお願いします……」
蒼はそう言いながら、深々と頭を下げる。ちよつと、その言い方やめて。色々違うから。

「まあ、来ちゃったのはしょうがないしき。夏海ちゃんの部屋なら、三人泊まれるよね？」

「はい！ 大丈夫だと思います！」

「それじゃ三人とも、一度夏海ちゃんの部屋に荷物置いてきなよ。それから手分けして雨戸を閉めよう」

「わかりました！」

「なっちゃん、ちよつとスーツケース拭かせてもらえるかな？」

「はい！ タオル持ってきますね！」

なんだか、一気に騒々しくなった。でも、そのおかげでさっきの電話の件はいつの間にか頭の中から消えてしまっていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

荷物を一旦夏海ちゃんの部屋に上げてもらった後、皆で手分けして雨戸を閉めることにした。

そろそろ風も出てきたし、人数が揃ったところで手早く済ませてしまおう。

去年の秋にも台風が島をかすめたことがあって、その時に鏡子さん

からこの家の雨戸の場所は一通り聞いて、把握している。

「ねえ羽依里、まずはどこから閉めるの？」

「そうだな。まずは前庭に面した窓……俺たちの部屋の前から閉めよう」

やる気満々の鷗を引き連れて、俺は軒下を通って前庭へと向かう。

「ここから雨戸を引つ張りだせばいいんだね？　おりやー！ー！」

雨戸の収納場所を教えてあげると、そこからがらー、と鷗が勢いよく雨戸を引き出す。それを俺が受け止めて、良い位置に固定していく。

「おお、なんだか楽しいな」

「そうだねー」

がらがらー、がらがらーと軽快な音を立てながら、立て続けに雨戸が俺の方に向かって流れてくる。何かのアトラクションみたいだ。

「……でもこれ、出す方としてはすごく疲れるんだけど」

「悪い鷗、もう少し頑張ってくれ。もうすぐ終わるから」

「ひーん」

段々と勢いが弱まっているのを感じつつも、最後の一枚まで出し切ってもらう。

「……あれ？」

全部出揃ったはずなのに、いくらしつかりと閉めようとしても隙間が空いてしまう。これはどう見ても、雨戸の数が足りない。

「鷗、もう雨戸は終わりか？」

「うん。もうないよ」

鷗も確認するように雨戸の収納スペースを見ていた。中は空っぽだった。

「去年の秋に見た時は、数も揃っていたはずなんだけど」

家そのものが古いし、雨戸も古くなって壊れちゃったんだろうか。ないものはないし、足りない部分を少しでも補うために、ちよつとずつ隙間を開けて雨戸を配置することにした。この窓は庭に面しているし、植木や塀もあるから、風で物が飛んでくるなんてことはあまりないと思う。

「羽依里さーん、ちよつといいですかー?」

その時、夏海ちゃんに呼ばれた。確か夏海ちゃんは、紬と一緒に反対側の雨戸をチェックしてくれていたはずだけど。

そう思いながら、声がした方に行ってみる。そこはちようどお風呂の裏手で、夏海ちゃんや紬の他に、蒼もいた。

「どうしたの? ここには雨戸はないはずだけど」

「いえ、タカハラさん、あそこにあるんです!」

そう言っ上の方を指さすのは紬だった。え、あんなところにあるの?」

「ちよつと高いけど、羽依里なら届きそうって話をしてたところよー」

青色の傘を差しながら、蒼がそう言っていた。ちようどこの辺りは軒下が狭くて、傘を差さないと雨に濡れてしまうんだろう。

「そういうことなら、任せろ」

俺は適当に足場になりそうな台を持ってきて、その上に立つ。近くで見ると、古いけど確かに雨戸があった。

……ところで、なんで紬がこの家の雨戸の場所を把握してるんだろう。謎だった。

そんなことを考えながら雨戸を引き出すと、手のひらサイズの巨大なクモが一緒に落ちてきた。

「きやあああ!」

「ちよつと、なんでそこで羽依里が叫ぶのよ!?!」

蒼は落ちてきたクモを上手に避ける。着地したクモは、そそくさと植え込みの中へと逃げていった。

「いや、あそこまで大きいものになると、さすがに慣れてなくて」

「この家の守り神じゃないのー? 大切にしていあげなさいよね」

クモを見た紬と夏海ちゃんは固まっていたけど、蒼だけが平然としていた。つい忘れがちになるけど、やっぱり昆虫学者の娘だった。

「うん。雨戸は大体こんなものかな」

一通り家の周りはチェックして回った。たぶん、もう大丈夫だとは

思うけど。

「物干しぎおも倒しておいたし、運べそうな植木鉢は風で飛ばされな
いようにガレージの中に移しておいたよ」

「おお、ありがとう、しろは」

「しろはさん、ありがとうございませすー!」

「……って、しろは?」

いつの間にか、俺たちの中にしろはが混ざっていた。よく見ると、
珍しく大きめのリュックサックを背負っている。

「しろは、どうしてここに?」

「今日、私もここに泊まるよ。たくさん女の子たちと一夜を明かす
んだし、羽依里が変な気を起こさないように見張らないと。その……
か、彼女として」

最後の方、めっちゃ照れながら言った。いや、嬉しいけどさ。

「……そうだね。もしかしたら羽依里、可愛い女の子たちに囲まれて、
狼さんになっちゃうかもしれないし」

ちよつと鷗、その表現やめて。

「うん。狼さんになったら困るから、見張りに来たのです。他意はあ
りません」

しろはは小さく握りこぶしを作っていた。気持ちはわかるけど、ど
うしちやっただらう。

「恋は盲目って、よく言うわよねー」

そんなしろはの背後で、蒼がからからと笑っていた。うん、聞かな
かったことにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

念入りに台風への備えを終えた後、皆で居間に集まっていた。一応
テレビはつけていたけど、相変わらず台風のニュースばかりだし、誰
も見てはいなかった。

「その昔、この島には伝説のスープチャーハンの屋台があつたらしいです」

「紬、良く知ってるわねー。駄菓子屋のおばーちゃんが若い頃、繁盛してたつてお店らしいわよ？　いつの間にか無くなってたらしいけど」

「でも、そのスープチャーハンつてのは訳が分からないよね」

「私もしろはさんと同意見です！　せつかくパラパラなチャーハンにスープをかけるなんて、チャーハンに対する冒瀆です！」

「そーねー。あんかけチャーハンまでは許せるんだけど」

「わ、私はどっちも美味しそうだと思うけど」

「鷗、美味しそうでも、混ぜちゃ駄目だよ。チャーハンとスープ、別々に食べれば良いのに」

よくわからないけど、かつて島に存在していたチャーハン屋台の話で盛り上がっていた。一応料理の話だし、これもガールズトークになるんだろうか。

どのみち、俺は入れそうにない話題だった。和気藹々と話す5人を何気なく眺めていると、鷗の近くに小さな箱が置かれているのが見えた。

「鷗、その箱はなに？」

「これ？　そうそう！　皆と遊ぼうと思って、トランプ持ってきたの！」

鷗は思い出したように箱を手に取り、中身を取り出す。中から見慣れたオジサンが顔を覗かせた。

でも、トランプなら皆で一緒に遊べるし、退屈しないでいいかもしれない。特に俺が。

「よし、せつかく鷗が持ってきてくれてるんだし、皆でトランプやらないか？」

だから、俺はそう提案してみた。

「おおー、トランプですか！」

紬が一番に反応した。もしかして、得意なんだろうか。

「あ。一応、カルタも持って来てるけど」

鷗は笑顔のまま、カルタを取り出して畳の上に置く。一体どこに

持ってたんだらう。

「……これ『おかえりなきやーい』とか書いてるけど。変わったカルタだね」

しろはが適当な字札を読み、首をかしげていた。確かカルタって、ことわざとかを題材にするイメージがあるけど。

「鳥白島迷言カルタだって。ずっと昔、おかーさんから鳥白島のお土産としてもらったの!」

「へー、昔はこんな商品があったのねー」

蒼も物珍しそうに見ていた。駄菓子屋の看板娘だし、やっぱり過去のヒット商品が気になるんだらうか。

でも、さすがにカルタは季節感がないし、ここは皆で相談して、トランプをすることにした。

「よーし、それじゃカードを配るよー」

鴟が慣れた手つきでカードを切って、皆に配ってくれる。大人数でやるトランプゲームの定番と言えば、ババ抜きだらう。今、卓上の心理戦が始まる。

「うーん、うーん」

「むむむぎぎぎぎぎ……」

ババ抜きを始めてすぐに分かったことがある。蒼や紬はものすごく顔に出やすい。

紬に至っては、時折小さな声で『むぎゆ!』って言ってた。たぶん、あのタイミングでババが来てたんだらう。実に分かりやすい。

「よし、これにする! てい!」

一方で、鴟は勢いでカードを選んでいる感じだった。駆け引きも何もあつたもんじゃない。

「……うん。これであがりだね」

そんな中、真っ先にあがったのはしろはだった。彼女はババが来よ

うが、全く表情が変わらなかった。いわゆるポーカーフェイスというやつだろうか。

「やった。あがりですよ！」

「わたしもです！」

続けて、紬と夏海ちゃんがあがった。

「ひーん。ババがきちやったよー」

そしてババは鷗へと引き継がれたらしく、頭を抱えていた。なかなか白熱した戦いになってきた。

「げ、しまった」

「やったー。わざわざババを選びなおしてくれてありがとう！ 羽依里イズいい奴！」

ゲームが進み、俺が鷗からババを引いてしまった。くそ、二分の一の確率だったのに。

「やったー！ これで私もあがりー！」

続けて、鷗が蒼からカードを引く。どうやら揃ったらしく、ニコニコ顔でゲームから離脱した。

……気がつけば、俺と蒼の一騎打ちになっていた。他の皆も、固唾をのんで勝負の行方を見守っている。

「よし蒼、勝負だ。引いてくれ」

俺の手札は残り2枚。そのうちの1枚は鷗から渡されたババだ。対する蒼の手札は1枚。ババ以外を引いた方が勝ちだ。

「むむむむ……」

蒼の細い指が右へ左へ。どうやら迷っているらしい。

「うーん。うーん……」

……そんな悩まなくても。鷗みたいにスパッと引いてくれ。……あれ？

蒼はほとんど前かがみになって、食い入るようにカードを選んでいった。そのせいか、胸元が思いつき見えちゃってる。

こ、これはまずい。俺は慌てて目をそらす。

「うりやつ！ あつちやー……」

直後、蒼がカードを引く。その声色から読み取るに、ババを引いてしまったみたいだ。

「……ほら羽依里、次、引きなさいよ」

「え？ ああ」

蒼にそう言われて、再び視線を戻すと……また見えてる。お願いだからやめて。

「……羽依里？」

その時、ジト目になっていたしろはから、肘で小突かれた。しろはも気づいたみたいだ。

「ごめんしろは。そんなつもりじゃないんだ。わかってるんだけど……。」

まさか言葉に出すわけにもいかないし。俺は心の中でそう思いつつ、視線を外すけど……。

「目をそらすなー！ しっかり見なさいよ、ほら！」

俺がわざとカードから目をそらしていると思われたんだろうか。蒼がそう言っただけで近づいてくる。

やめて、見せないで。誰か助けて。

……結局、ババ抜きは散々長引いた挙句、動揺しまくった俺の負けになってしまった。うん。色々とずるい。

「そ、そうだ。ババ抜きの次は、大富豪をやらぬか」

俺は慌ててゲームを変更する。ついでに並び順も変更してもらった。これで一安心だ。

「……ババを入れて『7』の四枚で革命だよ」

「シロハさん、ありがとうございます！」

「ひーん、大富豪が一転、大ピンチだよ」

その後も、大富豪やポーカーといった定番のゲームを楽しんだ。

総じて思ったのが、しろははカードゲームに強い。なんだかんだで、ほとんど負けていなかった気がする。

18時を過ぎた頃、鷗と蒼、紬の三人は一度荷物の整理をするとかで、夏海ちゃんを連れだつて部屋に戻っていった。

時折、雨戸がガタガタと音を立てている。そろそろ台風の強風域に入ったかな。

一方のしろはは台所へ向かい、夕飯の準備をしてきているみたいだ。

「……あ、そうだ」

その時、鏡子さんから言われていた浴衣の話を思い出した。確かあれ、夏海ちゃんの部屋の押し入れにあったはずだけど。

俺はおもむろに立ち上がると、夏海ちゃんの部屋へと向かう。

「おおー、アリのクイのサユリさんもすっかりといますよ！」

「紬さんに貰ったものですし、大事にしていますよ！」

「パリングルスのオルゴールもしっかりと置いてあるねー。聴いてみていっしょ？」

「はい！ どうぞー！」

「……改めて見ると、この部屋凄いわねー。夏の思い出置き場って感じ？」

部屋の前に立つと、ふすま越しにそんな会話が聞こえた。思えば、夏海ちゃんの夏の思い出も結構溜まってきている気がする。

「……ごめん夏海ちゃん、ちょっといいかな」

せつかく楽しそうに話しているところ悪いけど、ふすま越しに声をかけさせてもらおう。

「はい！ なんですか？」

閉じられていたふすまが少しだけ開いて、すぐに夏海ちゃんが顔を覗かせた。

「あのさ、鏡子さんの言っていた浴衣がこの部屋の押し入れにあると思うんだ」

「わかりました！ 探してみます！」

覗いていた顔が引っ込んだと思うと、がらら、と押入れの戸を開ける音が聞こえた。続いて、がさごそと音がする。

ちなみに俺はその間、部屋をなるべく見ないようにふすまを背にして待つ。女の子たちの部屋だし、妙なことが起こらないとも限らないし。

「なつちゃん、何探してるのー？」

「皆さんの浴衣です！ この辺りにあるらしいんですけど……」

「浴衣だね！ ツムツム、私たちは反対側を探してみよう！」

「はい！」

がさごそと探す音が増えた。どうやら、皆で手分けして探してくれているみたいだ。

「……うわ、おっきな日本人形とか出てきた。これ、夜な夜な動いたりしないよね」

「むぎゆ!? 人形が動くとか、怖すぎます！」

紬の泣きそうな声が聞こえた。確か、そういうホラー映画とかあった気がするし、想像すると怖いかも。

「……ありました！ これですね！」

その時、夏海ちゃんの弾む声が聞こえた。どうやら浴衣を発見したらしい。

「おおー、これは立派なユカタです！」

「羽依里、これ、本当に使っているの？」

「ああ、使ってくれて構わないぞ」

ふすま越しの鷗の声に、そう返す。

「ありがとう！ もしもの時のために持ってきたパリンキーの着ぐるみ、使わなくて良さそう」

パリンキーの着ぐるみ？ どんなものが想像もできないけど、寝巻き替わりに用意していたんだろうか。

「羽依里、ちよつといいかな？」

……その時、廊下の向こうからしろはがやってきた。相変わらず、エプロン姿が良く似合っている。

「え、どうしたの」

「晩ごはんだけけど、本当にこれでいいの？」

そう言うしろはの手には、たくさんのカップうどんが入った袋が握られていた。今朝、鏡子さんから港でもらったやつだった。

「いっぱいあるし、それでいいと思うよ。それに冷蔵庫の中、何もなかったよね？」

「うん。調味料と梅干ししかなかったよ。お昼も思っただけど、冷蔵庫なのに、なんで食材が入ってないの？」

「簡単だよ。夏海ちゃん以外、この家の誰も料理をしないからさ」

「それ、胸張って言うことじゃないよ……」

しろはが物凄く微妙な顔をしていた。そう言われても、加藤家の人間は料理が出来ないんだからしょうがない。

「でもさ、今日のところはカップうどんでもいいんじゃないか？ だんだん風も強くなってきたし、もし調理中に停電したら危ないと思うんだ」

「そ、そう……かな」

「刃物を使うわけだし、しろはがもし怪我でもしたら大変だしさ」

「う、うん……そうだね。ありがとう、羽依里」

しろはは顔を赤くしながらはにかむ。うあ、エプロン姿でその表情はやめて。破壊力すごいから。

「……やっぱり、彼氏さんは優しいわねー」

「お二人とも、オアツイですね！」

「二人の愛なら、きつと台風の進路だって変えられるよー」

いつの間にか、部屋の中にいたはずの四人がふすまの間からこつちを見ていた。うん。思いつき見られていた。

「お、俺たちのことは良いから、そろそろ晩ごはんにしよう！」

「そ、そうだよ。ほら、荷物整理が終わったんなら、皆も居間に来てー」

俺としろはは恥ずかしさから居ても立っても居られなくなり、逃げるように居間に向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後は台所で手分けして夕飯の準備をした。

準備と言っても、ポットややかんにお湯を沸かして、それをそれぞれが選んだカップうどんに注いでいくだけだ。用意するものといえ
ば、箸くらいだった。

「それじゃ、いただきますーす」

「いただきますーす」

……それからきつちり三分後。全員で手を合わせて、カップうどん
を食べ始める。

「おお、肉だ」

まず、俺が選んだのは肉うどん。一日ぶりの動物性タンパク質だ。
ものすごく筋肉に変わっていく気がする。筋肉！ 筋肉！

「うーん、辛いけどおいしいー」

そんな俺の向かいでは、鵬がキムチうどんを食べていた。八割ほど
めくられた蓋には『黄金の豚キムチうどん』と大きな文字が書いて
あった。

「鵬、それってそんなにおいしいのか？」

「うん！ 前に来ヶ谷さんにキムチをもらってから、ハマっっちゃって
てー」

心底美味しそうにうどんをすすする。結構匂いが強いんだけど、鵬は
そういうの気にしないんだろうか。

「このお揚げ、ジューシーで美味しいー」

きつねうどんを選んだ蒼は、そんな鵬の隣でご満悦だった。はがさ
れたパッケージには『お揚げ25%増量中！』と書いてあった。

「……そいえば、イナリさんは台風の中どうしてるですか？」

その蒼の隣でちからうどんを食べていた紬が、お餅をのびーっと伸
ばしながら、そう聞いていた。

「藍が家の軒下に入れてくれると良いんだけど、場合によっては山かもね。あの子、ああ見えて野生動物だし」

そうだった。つい忘れがちになるけど、イナリは蒼が飼ってるわけじゃなく、野生のキツネだった。

「……ねえ夏海ちゃん、その月見うどん、おいしいの？」

「はい！ おいしいですよ！ 半熟卵が最高です！」

その時、俺の隣に座って静かに五目うどんを食べていたしろはが、夏海ちゃんにそう尋ねていた。

ちなみに、夏海ちゃんは月見うどんを食べている。お湯を入れるだけで月見うどんができるのか、最近の技術はすごい。特にあの半熟卵の部分、どうなってるんだろう。

その後は、うどんをすすする音が静かに響いていた。うーん、さながら加藤家がうどん屋にでもなったみたいだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夕飯を手早く済ませると、今度は順番にお風呂を済ませてしまおうという流れになった。万一入浴中に停電した場合に備えて、懐中電灯を一つ、脱衣所の方に持って行ってもらった。

「ナツミさん、わたしと一緒に入りましょう！」

「はい！ 細さんの髪、また洗わせてください！」

「そうですね！ また洗いつこしましょう！」

ズツ友の二人が、そんな話をしながらばたばたと廊下を走っていった。そういえば、あの二人は以前も一緒に入ったことがあったっけ。

「そうだねー。時間の短縮になるし、一緒に入るのはいいかもね。ああお、二人が出たら、次に一緒に入る？」

「え。さすがに狭いんじゃない？ それに、鷗と一緒にだと、色々自信なくなっちゃうし……」

鷗は無垢な笑顔で勧誘していたけど、蒼は渋っている様子だった。

何の自信が無くなるのかは、イマイチわからなかったけど。

二人はそんな話をしながら、夏海ちゃんの部屋へ向かっていった。たぶん、浴衣とか用意しに行ったんだろう。

「じー……」

……ちなみに俺はと言うと、そんな皆を尻目に、居間でしろはに監視されていた。何故か正座で。

「あの、しろは……そんなにじっと見つめられると、すごく居づらいんだけど」

「他の皆がお風呂に入っている間、羽依里が変なことを考えないように見張る必要があるから」

そう言えば、夕方やってきた時にそんなこと言っていた気がする。狼さんにならないようにとかなんとか。

うう……そりゃ、俺も健全な男の子だし、ちよっとくらい変なこと考えちゃうけどさ……。

「はあ……」

一つため息をつきながら、しろはが用意してくれたお茶を一口飲む。濃い目のお茶が美味しい。そのままなんとなくテレビを見るけど、相変わらず台風に関するニュースを伝え続けている。どうやら、あと一時間くらいで暴風域に入りそうだ。

「……そういえばさ、しろは」

「え、なに？」

「お風呂、他の皆は二人一組で入ってるみたいだけど、俺たちも二人一組で入るの？」

「入らないしー！」

顔を赤くして、全力で拒否された。ごめんなさい。言ってみただけです。

「羽依里、お風呂ごちそうさまー」

正座を続けて、そろそろ足の感覚がなくなってきた頃……髪をタオルで拭きながら、蒼が居間にやってきた。風に乗って、うちにある

シャンプーと違う香りがした。自前で持ってきてきたのかな。

「……羽依里、鼻の下がのびてるよ。」

「な、なにも考えてないです!」

しろはに睨まれて、思わず敬語になる。うう、最近しろの方が強い気がする。

「羽依里さん、お風呂上がり皆さんで麦茶を飲んでも良いですか?」

「え? うん、いいよ」

「ありがとう! お風呂上がりの麦茶って最高だよね!」

蒼に続いて、浴衣姿の紬と鷗、夏海ちゃんが居間を抜けて台所に向かっていった。紬のストレートヘアって、普段は見ないから新鮮だよな。

……ところで、なんで夏海ちゃんまで浴衣を着てるんだろう。確かに皆、どことなく艶やかに見えるけど。浴衣美人って言うのかな。

「それじゃ羽依里、先にお風呂入っていいよ?」

他の皆が出たからだろうか、しろはから入浴の許可が出た。

「あれ? 羽依里はしろしろと一緒に入るんじゃないの?」

「だから、入らないし!」

さつき以上に顔を赤くしたしろはから、俺は追い出されるように廊下に出されたのだった。

俺の後に入浴を済ませたしろはが居間に戻ってきた頃、いよいよ本格的に雨風が強くなってきた。幸い停電はしていないけど、時折強い風を受けて、家全体がガタガタと揺れてる気がする。

「それじゃ皆、そろそろ休もうか」

いつもよりは早い時間だけど、こういう時は早く寝てしまうに限る。ニュースによると、かなり台風の足が速くなったらしく、夜のうちに過ぎ去ってしまうとのことだ。

居間の明かりを消した後、雨戸が閉まって薄暗い廊下を歩き、自室の前で皆と別れる。

「タカハラさん、おやすみなさいです!」

「おやすみー」

「なつちゃん、眠くなるまでお話しようね！」

「はい！ 羽依里さん、おやすみなさい！」

「皆、おやすみ」

夏海ちゃんの部屋に消えていく皆に手を振り返した後、自分の部屋に入って布団を敷く。

「……それにしても、夏海ちゃんの部屋に五人か。寝られるのかな」

確か、夏海ちゃんの部屋はこの部屋と同じくらいの広さだったはずだし、ちよつと狭いかもしれない。

「五人じゃないよ。四人だよ」

「え、そうなの？」

「うん。でも皆は荷物もあるし、まだ狭いと思う」

「でも、たぶん紬は夏海ちゃんにむぎゅーつとしてると思うし……つて、しろは!?!」

至って自然に振る舞っていたけど、俺の隣でしろはがいそいそと布団を敷いていた。

「……あの、シロハさん？ 何をしてるんですか？」

動揺してつい、紬っぽい口調になってしまった。

「その、羽依里に変な気を起こされたら困るから。夜も同じ部屋で見張らないと」

そう言いながら、敷き終わった布団の上にちよこんと座る。浴衣姿だし、石鹸のいいにおいがする。

……ごめん。このままだと、しろはに対して変な気を起こしちゃいそうなんだけど。

「でもこれってさ、結局、俺としろはが同じ部屋で一夜を過ごすことになるんじゃない？」

「……あ。ああああっ!?!」

俺の言葉を聞いて、急にわたわたし始めた。自ら招いた状況に、今更気づいたんだろうか。

「お、狼……?」

「いや、ならないから！ そういうのはわきまえてるつもりだから！」

「で、出てってー！」

耳まで赤くしてそう言う。出て行けって言われても、ここ、俺の部屋なんだけど。

「お、狼さんは出てってー！」

「わ、わかった。わかったからー！」

しろはが立ち上がって、俺の服を引っ張って無理矢理立たせようとする。

うう、この際しようがない。最悪、居間でも寝られるだろうし。

俺は枕だけ持つと、しぶしぶ立ち上がり、ふすまを開ける。

「……あ」

「え？」

すると、目の前に鴎がいた。その後ろには、他の三人の姿も見える。

「あれ。皆どうしたの？」

「えっとね、夏海ちゃん部屋の、今日はまるで修学旅行みたいねって話になったのよ」

俺の問いに答えてくれたのは、一番後ろにいた蒼だった。確かに、この感じは修学旅行に近いかもしれない。

「そうしたら、夏海ちゃんがすごく食いついて来てね。いろいろ話をしてるうちに、修学旅行で夜の定番と言えば、枕投げだって話をしたの」

枕投げ。確かに小学生の時は先生に怒られるまでやった記憶があるけど。

「それで、なっちゃんやんがやってみたいっていうから、お手本を見せてあげようと思ってー！」

鴎がそう話を引き継ぐと、俺の眼前にいた四人は背中に隠し持っていたらしい枕を一斉に構える。

「というわけで、二人のラブラブ空間を壊しに来たわよー！」

蒼がそう言うと同時に、中途半端に開いていたふすまが完全に開け放たれて、紬と夏海ちゃんが躍り込んできた。

「待って！俺たちは戦う気なんてないからー！」

「そう言いながら、枕持ってるじゃないですか！ 羽依里さん、いきま
すよー！」

夏海ちゃんは俺の持つている枕を一瞥した後、大きく振りかぶる。
「いや、この枕は違うんだけど……うわっ！」

直後に枕が高速で飛んでくる。鳥白島チャーハンズのピッチャー
として鍛えた腕だ。俺は身を翻し、ギリギリのところその枕をか
わす。

「……わぶ!？」

「あ」

しかし、俺が避けたことで、枕はその先に居たしろはを直撃した。
枕だから柔らかいんだけど、ぼふってすごく良い音がした。

「ううう……」

しろはその顔に張り付いた枕を両手で剥ぎ取って、頭をぶんぶん
振る。

「ほら、しろはも驚いてるじゃない。皆、悪ふざけはほどほどに……」

「……夏海ちゃん、よくも、やってくれたなっ」

しろはおもむろに立ち上がると、持っていた枕を夏海ちゃんへ投
げ返した。ええ、そこでやり返しちゃうんだ。

「ひえっ」

そして夏海ちゃんが素早い身のこなしでその枕を避けると、枕はそ
の背後にいた紬を直撃した。

「……むぎゆ!？」

「あ、紬さん！」

紬は勢いに負けて尻もちをついていた。大丈夫かな。

「なっちゃん、あおおお、ツムツムの吊い合戦だよ！」

そう言いながら、そのタイミングで鷗と蒼も部屋に乗り込んでき
た。もうめちやくちやだ。

「ちよっと待って鷗、近所迷惑だぞ!？」

「台風だし、近所迷惑もなにもないよー!？」

……まあ、確かにそうかもしれないけど。

「と言うか、お前は修学旅行行ったことあるのか!？」

「ないけど、枕投げは知ってるよ！ ふたりとも、覚悟！」

いつの間にか紬の枕も持っていたらしい鷗が、二つの枕を同時に投げた。

「おっとー！」

「ほいー！」

しかし、片手で投げたということもあって大して威力はなく、俺もしろはもタイミングを合わせて、その枕を受け止める。

「スキありー！ うりゃあつー！」

その時、蒼が飛び込んできた。しまった。俺は両手が塞がっているし、次の攻撃は防げない。

「させないよー！ えいー！」

その様子を見て、しろはが持っていた枕を蒼に向けて投じる。

「わっぷ！？」

その枕は蒼の顔面を捉え、視界を完全に覆ってしまう。

「わわわわ」

視界を奪われた蒼はその勢いのまま進み、布団に足を取られる。

「ひゃあああー！？」

そして叫び声をあげながらまっすぐ俺の方に倒れてきた。嘘だろ。

「ちよつと、危ない！」

俺はとっさにその身体を支えながら、布団の上に倒れ込んでしまった。

……その時、何の前触れもなく、部屋の電気が消えた。

「へっ？ 何？ 停電？」

俺のすぐ耳元で蒼の声がする。

「あっちゃー。ついに消えちゃったねー」

遠くの方で鷗の声がした。さすがに停電したことで、皆冷静になつたみたいだ。

「皆、危ないから動かないで。今、明かりをつけるから」

俺はそう皆に伝え、暗闇の中を手探りで懐中電灯を探す。確か、い

ざどという時のために、この辺に置いといたんだけど。

「えーっと」

「ひゃあつ、ちよつと羽依里！ どこ触ってるのよ!?!」

「え?」

そうだった。真つ暗でわからないけど、俺の隣には蒼が倒れてるんだった。

「おかしいな。懐中電灯、ここら辺に置いといたんだけど」

「わひゃつ……ちよつと、だから、撫でまわさないでよつ……!」

……触る限り蒼しかいない気がする。懐中電灯、どこいったんだろう。もしかして、枕投げをしたせいでどこかに転がって行ってしまったのかも。

「……ちよつと羽依里?」

「ご、ごめん。そんなつもりじゃ」

しろはの恐い声が聞こえた。うう、わざとじゃないのに。

「そうだ。こういう時のために、廊下にも懐中電灯を出しておいたんだ」

俺はゆっくりと立ち上がって、壁伝いに廊下を目指す。

停電前の皆の位置は記憶してるし、このまま行けば、難なく廊下に出れるはずだ。

「ひえっ!?!」

……あれ? すぐ近くで鳴の声が出た。そして、手のひらに謎の弾力を感じる。

「ちよつと羽依里、そこはダメ……」

「……羽依里!?!」

「ご、ごめん!」

手のひら全体でむごつほを感じていると、しろはの語気が一層強くなった。俺は慌てて手を離す。

……というか、鳴は壁際にはいなかったはずだけど。まったく、勝手に動かないでほしい。

「……やっぱり、狼さんになってる」

「なってるないから! 全部不可抗力だから!」

「ツムツムとなつちやんも気をつけて！」

そこで鴟がそんなことを言う。何もしないから！

俺はそんな事を考えながら、ようやく廊下へ達する。ふすまの脇に置いていた懐中電灯を手を取ったところで、外から強い光が当てられた。

「え、なに？」

俺が思わず振り返ると、雨戸の隙間から懐中電灯の光が差し込んでいた。そういえばあそこ、雨戸の枚数が足りなくて少し隙間が空いていたんだっけ。

「お前たち、何をしている!？」

続いて、その隙間から窓を叩く音がした。光が眩しくて姿はよく見えなけれど、あの声には聞き覚えがあった。

「え、のみき!？」

俺は思わず窓に近寄って、少しだけ隙間を空ける。当然、若干の雨風が吹き込んできた。

「こんな時間に見回りか？ 大変だな」

のみきは、まるで赤ずきんちゃんみたいな赤いカッパを身にまとっていた。俺はそんなのみきに労いの言葉をかける。

「たまたま見回りに来てみれば、お前たちの声が聞こえてな。気になつて来てみたんだ」

「え、声？」

「ああ。何を大騒ぎしていたんだ？ この雨風の中、表にまで聞こえていたぞ」

のみきはそう言いながら、手に持っていた懐中電灯で室内を照らし……笑顔のまま固まった。

「え、どうしたの？」

俺も振り返るようにのみきの視線を追って……絶句してしまった。懐中電灯の明かりに照らし出されたのは、自分の胸を押さえている蒼と鴟。その隣で抱き合う紬と夏海ちゃん。そして真っ赤な顔をしているしろはだった。うん、見ようによつては、俺が暗闇に乗じて皆にひどいことをしようとしていたように見えなくもない。でも、偶然

だから。違うんだ。俺にそんな度胸はないから！

「のみき、これは誤解なんだ」

俺はのみきの方に向き直り、両手を上げながらそう弁解する。

「ほう。この状況を見て、何が誤解だというんだ？」

のみきは目を光らせながら、窓の隙間からハイドログラディエーター改を差し入れてきた。ここで発砲されたら、部屋が大変なことになるってしまふ。

「いや、そのあの……」

……いざという時は、これで美希ちゃんを釣れますよ。

俺はその時、藍の言葉を思い出した。

「そ、そうだ。台風の中頑張っているのみきに、渡したいものがあるんだ。駄菓子屋のおばーちゃんが漬けた梅干しなんだけど」

「な、なに？」

「取ってくるから、ちょっと待っていてくれ」

のみきが動揺したのを見逃さず、俺は懐中電灯を手に台所へダッシュする。そして冷蔵庫にしまっておいた梅干しの半分を空き瓶に詰め込んだ後、のみきの元に戻ってくる。

「この梅干し、のみきが好きだって聞いてき。良かったら」

「え？ ああ。すまない。そうか。駄菓子屋のおばーちゃんの梅干しか……」

のみきは嬉しさを隠せてない。さっきまでの鬼の形相がウソのように、笑みがこぼれている。藍の言葉の通り、これは助かったかもしれない。

「……しかし、それとこれは話が別だ」

……否、助かってなかった。俺は再び両手をあげる。

「の、のみき、待って」

その時、助け舟を出してくれたのはしろはだった。

「今回の件は私の不手際なの。後でしっかりと行って聞かせるから、今は武器を納めて」

「いや、しかし……」

「お願い」

俺の隣ににじり出てきて、のみきにそう懇願してくれた。

「……わかった。しろはがそこまで言うのなら、今回はお咎めなしとしよう」

しろはの真摯な思いが伝わったのか、のみきはため息交じりにそう言っただけでハイド口砲を納めると、懐中電灯の向きを変えて、闇夜の中に消えていった。

「ほっ……」

誰からとなく胸をなでおろす。その後、俺は静かに窓を閉めた。

「そ、それじゃあ私たちも、そろそろ寝ようー」

「お、おじゃましましたー」

さすがに悪ふざけが過ぎたと思ったんだろうか。のみきがいなくなるのと同時に、鴟たちもそそくさと部屋に戻っていった。

そして、部屋には俺としろはだけが残される。

「た、助かったよ。しろは、ありがとう」

俺は安堵して、しろはの方を向いてお礼を言う。

「……うん。それはいいから、ちょっとこっちに来て正座して」

「えっ?」

「早く」

しろはは俺の手から懐中電灯を奪い取って、部屋の中を差し示す。俺は言われるがままに部屋の中へ移動して、正座をする。

「あのね羽依里、いくらなんでも、やっていいことと悪いことがあるんだよ」

その後、俺はしろはにこんこんと怒られる羽目になった。下方から照らされる懐中電灯の明かりも相まって、すごく怖い。

でも、今回俺はそこまで悪くないと思う。枕投げを仕掛けてきたのは鴟たちだし、停電も偶然だし、不可抗力のオンパレードだったのに。

「それに、蒼が俺の方に倒れ込んできた原因を作ったのは、しろはの投げた枕が……」

「なに?」

「いえ、何でもありません……」

……反論の余地もなさそうだった。

結局、しろはにひたすら頭を下げ続けながら、嵐の夜は更けていったのだった……。

第三十九話・完

第四十話 8月24日

……朝。身支度を終えた四人が家に帰るといふことで、夏海ちゃんと玄関まで見送りに出る。

「羽依里、なっちゃん、お世話になりました！」

「おかげでカイテキでした！」

「ああ、何事もなくて良かったよ……」

「……どうしたの羽依里、目の下、クマできてるよ？」

鴎がそう言いながら、俺の目の下を指差してくる。

「むぎゆ？ クマですか？」

何故か袖が反応していて、不思議そうに俺の顔を見てきた。クマが珍しいんだろうか。

「うん。色々あって、あまり眠れなかったんだ」

「あー、風とかすごかったしねー」

そう言つて笑う蒼は髪が結われておらず、ストレートのまま。それでいて、左右に思いつきりハネていた。自分の家とは違うし、上手くセツトできなかつたんだろうか。

「皆さん、また来てください！」

「うん！ 台風が来たら、またお世話になりに来るよ！」

鴎、縁起でもないこと言うのやめて。そう何度も台風に来られたら困るから。

「むー……」

ちなみに皆とそんな話をしている間、しろははずつとむすつとしていた。夜通し散々謝つただけど、まだ怒ってるんだろうか。

「それじゃあねー！」

「羽依里、夏海ちゃん、お世話になりました」

しろはの顔をうかがっていると、四人はそれぞれ挨拶を済ませ、鴎を先頭に傘を差しながら加藤家を後にしていった。

「なんだかんだで、皆楽しんでくれたみたいで良かったね」

「そうですね！」

そう笑顔で言う夏海ちゃんも、なんだかやつれていた。

「……もしかして夏海ちゃん、あまり眠れてない？」

「……実は、あの後部屋に戻ったら、鷗さんが怖い話を始めたんです」
停電による暗闇の中、下から懐中電灯で自分の顔を照らしながら、だみ声で怖い話をしている鷗が容易に想像できた。

「今夜は寝かせないよ……って言われました」

「色々語弊のある言い方だなあ……」

「でも、一番に寝落ちたのは鷗さんでした」

「え、そうなの」

「はい。おかげでその場はお開きになったんですが……夜中に悪夢にうなされて目が覚めたら、左右から紬さんと鷗さんに抱きしめられてまして」

「うあー……」

紬が夏海ちゃんに抱きつくのは予想していたけど、まさか鷗もなんて。

「ちなみに、悪夢ってどんな夢？」

「大きなパリングルスとパリンキーに左右から押しつぶされる夢です」

あの二人に抱きつかれたなら、そんな夢を見てしまう気持ちも分かる気がする。

眠たそうに目をこすりながら、あくびを噛み殺す夏海ちゃんを見ながら、そんな事を思っていた。

「それで、今日のラジオ体操ですけど……」

居間に戻った後、夏海ちゃんは壁の時計と窓の外を交互に見やる。

台風は過ぎ去ったけど、雨雲は残されているみたいで、今日も朝から雨だった。どう見てもラジオ体操は休みだろう。

「……はあ」

夏海ちゃんは心底残念そうにため息をついて、力なく畳の上に座り込む。やっぱり、夏休みの朝と言えばラジオ体操だし、二日続けて休

みとなると、それはそれで物悲しくなる。

「……よし。それじゃ、俺たちだけでラジオ体操をやろう！」

だから、俺はそう提案していた。

「え、いいんですか？」

「うん。二日もラジオ体操やってないと、俺の身体もなまっちゃいそうだしさ」

「ありがとうございますー！」

夏海ちゃんは嬉しそうに立ち上がった。スタンプもログボもないけど、たまにはこういうのも良いかもしれない。

「じゃあ、今日は羽依里さんがラジオ体操大好きさんなんですね！」

「そ、そう。ラジオ体操大好き羽依里だよ」

言ってからしまったと思っただけど、今更取り消せない。

「それじゃいくよ……第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「はいー！」

夏休みの間、ほとんど毎朝繰り返した体操を思い出しながら、二人で体操を始めた。

「第二の体操！ 横隔膜の振動！ うるああー！ー！」

「うるああー！ー！」

「続いて第三の体操！ 一秒間！ 真剣な目！」

……こんな感じで、二人でひとしきりラジオ体操を楽しんだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「羽依里さん、今朝のチャーハンの具はどうしますか？」

その後、朝ごはんの準備に取りかかった夏海ちゃんは、エプロンの紐を結びながらそう聞いてきた。

「うーん、そうだね……」

ラジオ体操はやってみたけど、当然ログボはないし。俺は悩みながら、夏海ちゃんと並ぶようにして冷蔵庫を開ける。

「あ、昨日蒼さんからもらった梅干しがありますね！」

直後に夏海ちゃんが声を弾ませながら、冷蔵庫からタツパーを取り出していた。

「確かこの梅干し、すごく美味しいって言ってたっけ。おにぎりに入れて、お味噌汁とや漬物と食べると最高らしいよ」

「じゃあ、今日はこれでうめチャーハンを作ります！」

遠回しにチャーハン以外の朝食を勧めてみたけど、駄目だった。すでにチャーハンモードみたいだ。

「いいね、うめチャーハン。さっぱりしてそうだし」

俺は諦めて、夏海ちゃんの意見に賛同した。そういえば、全国チャーハン博覧会でも同じチャーハンを見かけた気がする。和歌山県のご当地チャーハンだっけ。

「ちやちやつと作っちゃいますので、居間で待っていてくださいねー」
もう頭の中に調理のイメージが浮かんでいるんだろうか。裏ごし器を手にした夏海ちゃんの言葉に押されるように、俺は居間へと戻ることになった。

「ただいまー」

俺が居間に戻ると同時に、玄関から鏡子さんの声が聞こえた。

「鏡子さん、おかえりなさい」

玄関まで迎えに出ると、鏡子さんは脱いだカップを玄関先のフックに吊るしているところだった。

「大丈夫ですか？ 大変でしたね」

「うん。ようやく終わったよ」

鏡子さんはそう言いながら、玄関に腰掛けて長靴を脱ぐ。

「特に被害はなかったですか？」

「うん。大きな被害はなかったよ。所々で、小さな被害があったくらいかな」

「小さな被害って、どんな？」

「いつものように田中さんちの屋根瓦が何枚か風で飛んだり、高橋さんちの植木鉢が風で塀から落ちて割れたくらいだよ」

笑顔で言っている辺り、本当にいつものことらしい。大きな被害がないということとは、裏を返せば島民の台風に対する備えが徹底しているということだし。

「海もまだ荒れてて、午前中は船が出ないって話だよ。海に近づくとがあつたら、気をつけてね」

「わかりました」

……鏡子さんとそんな話をしていると、近くの電話が目にとまりました。

「……あ」

ふいに、昨日の記憶が蘇る。夏海ちゃんのおかーさんからの電話。結構気になる内容だったはずなのに、なんで忘れてたんだろう。

「……鏡子さん、ぶしつけなんですけど」

「え？ どうしたの？」

……本来、鏡子さん宛ての電話だったし。当の本人なら、何か知ってるかも。

「昨日の夕方、電話があつてですね」

「電話？ 誰から？」

「それが、出てみたら夏海ちゃんの」

「あ。鏡子さん、おかえりなさい！」

しかし、俺の言葉は背後から飛んできた夏海ちゃんの声に遮られてしまった。

「ちようど朝ごはんを作っていたところなんです！ 鏡子さんも一緒に食べませんか？」

「それじゃ、ごちそうになろうかな。実は、晩ごはんも食べてなくてね」

「はい！ きちんと手を洗ってから、居間で待っていてくださいね！

今日も自信作ですよ！」

「うんうん。期待してるからね」

台所へ戻っていく夏海ちゃんを追うように、鏡子さんも洗面所の方へ行ってしまった。話を続けるタイミングを逃した俺は、妙な気持ちのまま居間に戻ることになった。

「それじゃ、いただきまーす」

数分後。食卓に三人で座り、夏海ちゃんが作ってくれたうめチャーハンをいただく。

「うん。美味しい」

どうやら、裏ごしされた梅干しがご飯と混ぜてあるらしく、梅の香りと程よい酸味がバランス良く全体に染みている。そして大きな梅肉も入っていて、強さの違う酸味と食感が良いアクセントになっている。

「夏海ちゃん、おいしいよ」

「えへへ、ありがとうございますー！」

鏡子さんにも褒められて、夏海ちゃんもニコニコ顔でチャーハンをほおぼっていた。本当にさっぱりしてるし、これは最高の朝チャーハンかもしれない。

「そうだ二人とも、朝ごはんを食べた後、雨戸を片付けるのを手伝ってもらっていいかな?」

「雨戸ですか? いいですよ」

「はい! お手伝いします!」

鏡子さんからの提案を、俺も夏海ちゃんも快諾する。雨は降ってるけど、風の方はもう心配ないだろうし。暗い室内を少しでも明るくしたかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よーっよーっ」

……朝食を済ませた後、三人で手分けして雨戸を片付ける。

海沿いの家だと潮風を受けるから、片付ける前に真水で雨戸を洗う必要があるらしいけど、加藤家は塀に守られてる分、そこまでしなくて良いらしい。

「ねえ、羽依里君」

家の裏手に回って台に登り、高い所の雨戸を片付けていると、背後から鏡子さんに声をかけられた。

「え？　なんでしよう」

「さつき傘立てを見たら、深緑色の傘が無くなってただけ。昨日泊まった誰かが、間違えて持って帰っちゃったのかな？」

「あ。えーっと、その傘はですね……」

俺は台から降りて姿勢を正すと、昨日深緑色の傘を襲った悲劇について、鏡子さんに全てを打ち明けた。

「……と言うわけなんです。すみません」

そして、深々と頭を下げる。あの深緑色の傘は今頃、烏白島近海の海底に沈んでいるはずだ。

「そういうことなら、気にしないでいいよ。傘なら、蔵から出てきたのがたくさんあるし」

「え、たくさんあるんですか？」

「うん。すごく古いのもあるけど、使えないことはないから。適当な傘を見繕って、また傘立てに入れておくね」

「ありがとうございます」

「羽依里さん！　天善さんから電話ですよー！」

鏡子さんにお礼を言っていると、玄関の方から夏海ちゃんの声がした。天善から電話？　一体どうしたんだろう。

「よう天善、どうかしたのか？」

「鷹原か。実はな……」

……天善の話を要約すると、暇だったら秘密基地に遊びに来ないかというお誘いだった。

その話を夏海ちゃんにしてみると、凄く乗り気だったので、二つ返事でOKした。

「確かに秘密基地なら屋根もあるし、天気を気にせず遊べるよね」「はい！」

「二人とも、出かけることになったのかな？ それじゃ、これ使って」
ちようど最後の雨戸を片付け終わったらしい鏡子さんが玄関に戻ってきて、俺用の黒い傘を手渡してくれた。

「ありがとうございます。それじゃ、出かけてきます」

「いつてらっしゃい。私は少し眠ることにするよ」

明らかに眠そうな鏡子さんに見送られながら、俺たちは秘密基地へ向かって歩き出した。

思えば鏡子さん、昨日はほとんど徹夜してたんじゃないかな。だったら、俺たちがいないほうがゆっくり休めるかもしれない。

「羽依里さん、今度は傘を飛ばされないようにしてくださいね？」

「え？ わ、わかってるよ」

隣で赤い傘を差した夏海ちゃんが、その下から覗き込むように悪戯っぽい笑顔を浮かべていた。もう風の心配はないと思うけど、念には念を入れないと。

俺はそう考えながら、両手でしっかりと傘の柄を握りしめたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「紬——！」

秘密基地に着くや否や、紬に泣きついてる静久を目撃することになった。

ちなみに、静久は何故かウシの着ぐるみ姿だった。

「ところで、静久はどうやって島に来たんだ？」

確か、今日の午前中は海が荒れていて船が出ないって話を聞いた

ばっかりなんだけど。

「それがね……聞いてよ、パイリ君！」

静久は目の下にできたクマを隠すこともなく、俺にギリギリまで近づいてきた。なんか、豊満なものが当たってる気もする。

「昨日は台風が近づいていたから、一度は島に行くのを諦めたんだけどね……」

うんうん。それは聡明な判断だと思う……って、一度？

「前に紬が、台風の時は灯台で耐え忍びます！　って言っていたのを思い出してね」

昨日、俺も港で聞いた話だ。どこかのタイミングで、静久も同じ話を聞いたんだろうか。

「その話を思い出したら、居ても立っても居られなくなったの。両親の制止を振り切って、夕方の最終便で島にやってきたの」

えええ。夕方っていうと、もう波もそれなりに高かったはずだ。よく船が動いたもんだ。

「強い風の中、なんとか島に上陸して、やっとこのことで灯台に辿り着いたんだけど……そこはもぬけの殻でね」

その時間帯、たぶん紬は既に加藤家にやって来ていたはずだ。運悪く、入れ違いになってしまったらしい。

「いつ紬が戻って来るかもわからないし、戻ってきたら一番に優しく抱きしめてあげられるように、夜も寝ずに待っていたのだけど……結局紬は帰ってこないし。私は灯台にぶち当たる波や風に怯えながら、朝まで過ごす羽目になったのよー！」

珍しく、静久が人目をはばからずに叫んでいた。聞けば聞くほど、可哀想な話だった。

「それでさつき、ようやく会えた紬に話を聞いたら、パイリ君たちと楽しくお泊り会をしてたって言うじゃない？　羨ましいわー！」

「むぎゆぎゆぎゆぎゆ……シズク、苦しいですー！」

「まだよー！　まだまだむぎゆーつとするのー！　全然足りないんだからー！」

寂しかった昨夜のうっぷんを晴らすかのように、静久は紬を抱きし

め続けていた。紬成分を補給しているんだろうか。

……昨日、蒼に恋は盲目と言われたけど、静久は紬とおっぱいに対して盲目だった。これは、しばらく放っておこう。

そして、改めて秘密基地の中を見てみると、先の二人や俺と夏海ちゃんの他に、電話をかけてきた天善、良一、空門姉妹、そして鷗やしろはまで、島の仲間のほとんどが集まっていた。

「……大集合だな」

「私たちも、天善ちゃんから電話をもらったんですよ」

「まあ、ドーセ暇してるしねー」

「たまには、冒険してみようと思ってる！」

「そんな鷗に捕まっちゃって」

理由はそれぞれ違うようだけど、秘密基地にこれだけの人数が集まるなんて。珍しいこともあるもんだ。

でも、その中でのみきの姿はなかった。鏡子さんと同じく一晚中役所に詰めていたはずだし、さすがに家で休んでるんだろう。

「そう言えば、天善や良一は昨日どうしてたんだ？」

「適当に床の上に座りながら、二人にそう聞いてみる。」

「俺は昨日も徹卓をしていたな」

「え、うそだろ!？」

天善は何でもないといった様子でラケットを構えていた。山の中とはいえ、それなりに雨も風もあったはずだけど。

「夜は停電もしただろ？」

「当然だ。だが、闇夜の中でやるトレーニングほど心が鍛えられるものはない」

さすが天善。全てをトレーニンングと捉える卓球脳だった。

「……お泊りに徹卓と、お前ら楽しそうだよなー。俺なんかよー」

良一は俺と同じように床に座って、駄菓子屋で買ってきたらしいコーラを飲みながら、ブツブツと何か言っていた。なんだろう。目が赤い気がする。

「……良一、何かあったのか？」

「ああ。羽依里、聞いてくれ……」

良一が語った内容によると、彼は一晩中、島の漁師たちと一緒に漁船の見張りをしていたそうだ。

港近くの倉庫を借りて、係留されている漁船の様子を時々見に行く……そんな仕事だったらしい。

でも、夜も更けて来ると他の漁師たちは多少なりとも酒が入り、学生で唯一素面の良一に対して、色々絡みだしたとか。

「ガタイの良い漁師たちに囲まれてよ。逃げることもできずに、俺は無限の悲しみを味わう羽目になったんだぜ……」

そこまで言うと、残っていたらしいコーラを一気に飲み干す。飲んで忘れたいほどの光景だったんだろう。

「朝に帰宅したら、珍しく妹が慰めの言葉をかけてくれたしな。よっぽど顔に出てたんだな」

良一は大きいため息をついていた。哀れだった。

「予め脱出方法を用意しておかないからですよ。良一ちゃんが無計画だからそんな目に遭うんです。アホですか？」

そんな良一を藍が一刀両断していた。アホとまで言わなくても。

「……ところで天善君、呼ばれたから来たけど、今からここで何かするの？」

その時、しろはが周囲の状況を見ながら、おずおずと声をあげる。彼女にしてみれば、鷗の冒険に付き合わされてる形になってるんだし。何もないのなら、帰りたいのかもしれない。

「ああ。この天気で皆退屈しているだろうし、卓球大会をやるうかと思ってるな」

その質問を待っていたかのように、天善がミニ黒板を持ち出してくる。そこにはトーナメント表が書かれていた。

用意周到に番号の書かれた棒もある。これを引いて、組み分けを決めるんだろうか。

「え、卓球大会なの？」

「天善ちゃん、相変わらずの卓球脳ですね」

直後、空門姉妹から不満そうな声が漏れた。特に藍の方は、あからさまに嫌そうだ。

「そう言わずに蒼、久しぶりにやってみないか？」

「卓球わねー。やってもいいんだけど、ちよつと嫌な思い出があるのよねー」

天善に誘われながら、蒼は頭を抱えていた。どうしたんだろう。駄菓子屋がどうか言ってる。

俺としては、皆と卓球やってみたい気持ちもあるんだけど。なんとなく、やりたいって言える雰囲気じゃない。

「夏海はどうだ？ 皆と卓球、やってみたくないか？」

「え？」

状況が芳しくないのを見てか、天善は夏海ちゃんに話を振った。たぶん、天善はこの卓球大会を今日のイベントにしたいんだ。ここで夏海ちゃんがやりたいと言えば、誰も断れなくなるし。

「え、えーつと、その……」

天善からラケットとピンポン玉を差し出されながら、夏海ちゃんは視線を泳がせていた。

「夏海ちゃん、こういう時は周りに流されず、自分の意志を貫くことも大事ですよ？」

天善の背後から、藍がそう夏海ちゃんに話しかけていた。やりたくないオーラ全開で、めちやくちや怖い。藍おねーちゃん、やめてあげて。

「……や、やりたいですー！」

しかし、夏海ちゃんはその藍の圧力に屈せず、卓球大会への参加を表明した。夏海ちゃん、頑張ったね。

「……むう。そう言われてしまったては、断れないじゃないですか」

「……うん。夏海ちゃんがやりたいなら、しょうがないね」

「天善、ラケットどこにあるのー？」

「あ、ああ、その箱の中にくっつかある。好きなのを使ってくれ」

夏海ちゃんの言葉を受けて、皆もやる気になってくれたみたいだ。藍もやりたくないオーラをひっこめて、蒼と一緒にラケットを探し始

めた。

「ポンー！」

……その時、秘密基地の隅の方から聴き慣れた鳴き声があった。

「あれ、イナリ？」

いつの間にかイナリがやってきていた。秘密基地は隙間だらけだし、どこからか入ってきたんだろう。

「もしかして、イナリも卓球をやりたいのか？」

「ポポーン！」

入れてー。と言っている気がした。以前、天善と卓球をしているのを見たことがあるし、実力は申し分ないだろう。

「天善、イナリも参加させていいか？」

雨でずぶ濡れになっていたイナリを、適当な布でわしやわしやと拭いてあげながら、天善に聞いてみる。

「ああ、構わない。卓球をやりに来る者を拒みはしないさ」

天善は満面の笑みで了承してくれた。あれだけ笑顔の天善を、俺は初めて見たかもしれない。

「ところで天善ちゃん、この卓球大会の優勝賞品ですけど『優勝者はここにいる誰か一人に、なんでも一つだけお願い事ができる』というので良いですか？」

「ああ。なんでもいいぞ。任せる」

天善は皆で卓球をできるのが嬉しいのか、藍からの質問も上の空で返していた。ちよつと待って。それって優勝者によってはかなりハードなこと要求されそうで怖いんだけど。

「ねえねえ、それってどんな無茶なお願いでもいいのかな？」

その話に、鵬が食いついてきた。そしてその視線の先は、何故か俺に向いている。

「はい。主催者公認ですからね。これはもう、優勝者のお願いは絶対ですよ」

藍、それってまあお願いじゃなくて、命令だと思っただけ。

「そう……そういう事なら、私も本気で優勝を目指さなきゃいけないわね」

俺の背後で、静久が俄然やる気になっていた。そして、その目は紬を捉えている。

「むぎゆう!」

その視線に謎の恐怖を感じたのか、紬は反射的に近くにいた夏海ちゃんに抱きついていった。

「ふふ。これで私が優勝すれば、蒼ちゃんにあんな格好させたり、こんな格好させたりできますね」

一方で、藍は小さな声で何か言いながら、蒼を見ていた。たぶん今の状況、全て藍の思惑通りに事が進んでいそうな気がする。

「よしよし、じゃあまずは組み分けを決めよう。皆、引いてくれ」

優勝賞品に対する不安が消えないうちに、天善が組み分け用のくじを俺たちの方に差し出していった。これはもう、逃げられそうにない。

俺は意を決して、一番にくじを引いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「えーっと、しろはと鷹原、俺と水織先輩、藍と良一、蒼と鷗、紬と夏海……」

くじ引きで決まった一回戦の組み合わせを、天善がミニ黒板へと書き記していく。

ちなみに参加人数の関係上、一回戦免除となったのはイナリだ。イナリは二回戦からの登場で、紬と夏海ちゃんの試合の勝者と対戦することになった。

「試合は1-1点先取の一本勝負。デユースあり。サーブは通常二本交代だが、デユースになった場合は一本交代だ」

天善が試合のレギュレーションを説明してくれている。さすが手慣れている感じがする。

ちなみにデユースというのは、お互いの得点が10-10となった場合、2点差がつくまで勝負を続けるというルールだ。

「ルール説明は以上だが、最後に重要なことを一つ。ラケットを破壊

した選手はその場で反則負けになるから、覚えておいてくれ」

「え、なにそれ」

「貴重なラケットだからな。スペアを含めて、そこまで数もないんだ」
天善の言うことはもっともだけど、ラケットが壊れる状況ってどんな状況だろう。

「それではさっそく試合を始めよう。一回戦第一試合、しろはと鷹原。用意してくれ」

どうやら、各試合の審判も天善がやってくれるらしい。俺はその天善からラケットを受け取りながら、しろはと対峙する。

「よろしくね、羽依里」

「ああ、こつちこそ」

うう、くじ引きだから文句は言えないけど、一回戦からしろはとの勝負になるなんて。どうせなら、お楽しみは最後に取っておきたかったんだけど。

「皆さん見てください。いきなり夫婦対決ですよ」

「夫婦じゃないから!」

何か言ってきた藍に二人揃ってツツコミを入れる。初戦と言うこともあってか、皆が俺たちの試合に注目していた。

「それでは、試合開始!」

「……ほい!」

天善の試合開始宣言がされ、しろはのサーブからゲームが始まる。
「よし、来い!」

……そのサーブは、ネットを超えて俺の陣地にワンバンした瞬間、変なカーブがかかっていた。

「え、ちよつと」

俺は慌ててボールを追うけど、追いつけない。いきなりサービスエースを決められてしまった。

「0—1!」

「しろは、いきなり容赦ないわねー」

「本当ですね。初見であれば取れませんよ」

しろはの得点が宣言される中、空門姉妹が揃って腕組みしながら、

何か言っていた。

「なあしろは、今のボールなに？」

「四天王サーブ」

「え？」

「……ほいー」

思わず聞き返した瞬間、再びしろはのサーブが来た。俺はさつきボールが飛んできた位置に先回りして迎え撃つ。

「あれっ!？」

しかし、四天王サーブはさつきと真反対の方向に曲がっていき、俺はまた追いつけなかった。しろはのモーションはさつきと全く同じだったのに。もしかして、四天王サーブって名前の通り、四種類の軌道を持っていたりするんだろうか。

「0―2!」

「シロハさん、すごく上手ですー!」

紬が驚愕の声をあげていた。本当に上手だ。聞いたことなかったけど、しろはって卓球得意だったんだ。

「まあ、能ある鷹は爪を隠すって言うしねー」

「べ、別に隠してないしー!」

「それで、本物の鷹さんはいつまで爪を隠してるんですか？」

藍がイナリのお腹をぐるぐると撫でまわしながら、俺の方を意味深な表情で見ている。

「くそ、今に見てろよ」

今度は俺のサーブだ。ラケットを水平に構え、しろはに向けてサーブを放つ。

「ほいー!」

サーブを受けたしろはは前のめりになりながら、即座にそれを打ち返す。速度はなかったけど、思いつきり左側を突かれて、反応しきれなかった。綺麗なカウンターだった。

「0―3!」

あつという間に3点差だ。これはなんとかしないと。

「……ところで、羽依里は優勝したら、誰に何を願うの？」

その時、しろはが俺にしか聞こえないような声でそう聞いてきた。
「え、特に決めてないけど」

これまでの試合の流れを見るに、俺が優勝できる可能性は滅茶苦茶低そうだし。

「そうなんだ。私も特に決めてないの」

まあ、しろはも半分なりゆきで参加してるみたいなものだし。すごく強いけど。

「羽依里さん、頑張ってください！」

「羽依里、俺たちの過ごした修行の日々を忘れたのか!？」

……その時、夏海ちゃんと良一が俺を応援する声が聞こえた。ここは少しでも応援に応えないと。

「よし……今度こそ」

そこですろはとの会話を止めて、一呼吸おいてからサーブを打つ。さつきとはちよつと違う回転をかけて、しろはの左側を狙う。

「ほいー」

それでもやっぱり、いとも簡単に返ってきた。結構全力で打ったんだけど。なんで返せるんだろう。

そして戻ってきた球には、これまた変なカーブがかかっている。俺は軌道が読めず、ラケットを思いっきり空振ってしまった。

「0-4!」

「うう、悔しい……」

サーブ権を持っていても、一点も取れなかった。まさか、ここまで一方的な展開になるなんて。

対するしろはは、これだけのリードを奪っても顔色一つ変えない。昨日のトランプの時と同じく、ポーカーフェイスだった。

「今度は私の番だね」

今度はしろはのサーブ。また四天王サーブが来るのか。

「……ほいー」

しろはの放ったサーブが俺の陣地に落ちる。

「よし、こうなったら一か八かだ……チョレeeeeー!」

ボールが再び浮き上がってきたタイミングに合わせて、俺は渾身の

スマッシュを放つ。

「わっ」

さすがのしろはも男のスマッシュスピードには反応できず、右側に決まった。ようやく1点を返した。ごめん。このまま負けるわけにはいかないんだ。

「……今の見ましたか？ 女の子相手に容赦ないですね」

「本当よパイリ君！ 相手は女の子なのよ!?!」

「ケーベツします」

しかし、スマッシュを打った直後、女性陣から総スカンを食らってしまった。うう、そこまで言わなくても。

「……天善ちゃん、ひとつ提案があるんですけど」

その後、男子は女子との試合ではスマッシュを打っては駄目というルールが追加された。まさか、この期に及んでそんなルール変更なんて。

「ほい！ 四天王サーブ・マークII！」

「うわー！ ボールが分身して見える——!?!」

「……ほい！」

「しまったー！ エッジボールー!?!」

ルール変更によりスマッシュを封じられた俺は、反撃の術を失い、しろはにボコボコにされた。

終わってみれば、2—11。完敗だった。

「さすがしろはねー」

「腕は衰えていないみたいですね」

がつくりと床に座り込む俺を尻目に、島の皆がしろはの勝利を祝福していた。

「ねえ、鳴瀬さんって卓球をやっていたことがあるの?」

「小さい頃、少しの間島の卓球クラブに通っていただけ」

「え、そんなのがあったのか？」

ちよつと気になる内容だったので、俺はさっさと起き上がって静久としろはの会話に割って入った。

「うん。役所の隣に青年会館があつたでしょ。その二階で卓球クラブをやつた時期があつたの」

そういえば、お祭りの準備の時に寄つたことがある。二階があると
は思つていたけど、卓球場だったのか。

「そこで堀田のおじーちゃんから色々なサーブを教わつたの」

「ああ、だから四天王サーブですか」

藍が納得顔で頷いていた。俺はよく意味が解らなかつたけど。

俺としろはの試合に続いて、二試合目。天善と静久の試合が開始される。

「私の試合ね。紬、応援していてね！」

「はい！ シズク、頑張ってください！」

ウシの格好をした静久はラケットを振り回し、やる気満々だった。
やっぱり、藍の提案した優勝賞品が魅力的なんだろうか。

「天善！ 烏白島男子卓球部主将の力を見せてやれ！」

良一が天善に向けて、そう声をかけていた。卓球部の存在自体初耳
だけど、男子の中では一番の実力者だろうし、頑張つてほしい。

「どれだけできるかわからないけど、よろしくね。加納君」

「み、水織先輩！ こ、こちらこそ、よろしく願います！」

……天善は明らかに動揺していた。くじで決まったとはいえ、相手
は静久。憧れの人だし、大丈夫だろうか。

「それではお二人とも、試合を始めてください」

天善が試合に出るので、この試合の審判は藍が務めていた。その藍
は至って冷静に、試合開始を促す。

「それじゃ、私からのサーブね！ いくわよ、おっぱいサーブ！」

静久はまるで双丘のような、謎の放物線を描くサーブを放つ。物理

法則を無視してるような気がしないでもない。

「チョレローイー！」

天善は気合十分にそのサーブを打ち返すけど、ネットに引っかかってしまった。これで0―1だ。

「……天善ちゃん、動揺してますね。さすがに相手が悪いですか」

スコアボードをめくった後、藍がそう呟いていた。

「おっばいサーブ！」

続く二回目のおっばいサーブを受けた天善は、タイミングが合わず、思いつきり空振っていた。

「し、しまった……！」

「天善君、どうしたのかな。いつもらしくないね」

しろはの言う通り、確かにいつもの天善らしくない。色々な意味で。

「……加納君、もしかして私のために、手を抜いてくれているの？」

「い、いえ！ 決してそんなことは……！」

そう答える天善だけど、明らかに手と声が震えている。

「私のためを思うなら、あなたの本気を見せて頂戴！」

「……そうだぞ天善、もつと落ち着いていけよ！」

優勝して、水織先輩にお願い事をするチャンスなんだぞ！」

静久の言葉に続くように、俺と良一も天善にエールを送っておい

た。
「そうか……俺はここで立ち止まるわけにはいかない！ 天善天善天善……！」

その言葉を聞いた天善は無我の境地に達し、天善ゾーンを展開した

！
「おお、何かよくわからないけどすごそうだ……！」

「今度は俺のサーブだな……いくぞ！ サーバー！」

そして、天善が神々しい構えから、高速サーブを繰り出す。

「えいっ！」

しかし、静久もそのサーブになんとか食らいつき、返球する。

「……奥義・舞卦処撥斗！」

そして返ってきたボールにすかさず反応し、何やら叫びながら強烈なブレ球を返す。これはスマツシュじやないので、女子相手に使っても問題はないはずだ。

「きやあ!？」

しかし、そのブレ球……スピードはすごかったけど、相手の陣地に一度もつくことなく一直線に静久の胸を直撃した。

「もう……加納君。いくら勝ちたいからって、おっぱいだけは狙っちゃ駄目よ。おっぱいは神聖なものなんだから」

「ぐわあああつ!？」

直後、静久のおっぱいトークが天善ゾーンを打ち砕いた。天善は両手を床につき、色々なショックを隠せないでいる。

「これで0―3ですね。天善ちゃん。早く起きて試合を続けてください」

「あ、ああ……わかつている……」

藍の言葉を受け、天善はよろよろと立ち上がるが……その眼はもはや生気を失っていた。これは駄目っばい。

「いくわよ！ おっぱいスマーツシュ！」

「うわああー!？」

「もう一度！ おっぱいサーブ！」

「のおおおー!？」

その後は案の定、一方的な試合展開となってしまうた。

「試合終了です。おっぱいさんの勝利ですね」

終わってみれば1―11。天善の得点は、静久のサーブミスによる1点だけだった。

「お、おお……」

試合終了後、天善は真っ白に燃え尽き、秘密基地の隅でうなだれていた。男性陣のホープだったはずなんだけど。藍の言う通り、本当に相手が悪すぎた。

「えっと、次は第三試合。藍と良一の試合だね」

審判役の天善が灰になってしまったので、代わりにしろはが次の試合の審判をやることになった。

「ところで藍、お前卓球できるのか？」

「得意ですよ。良一ちゃんには負けません」

試合前に声をかけてみると、藍は両面にラバーがついたラケットを持っていた。確かあれ、天善のじゃなかったっけ。

「天善ちゃんが灰になっていたので、せっかくなので使わせてもらいます」

藍はそのラケットを表裏にくるくると回していた。どうもシエイクハンドを扱い慣れている感じだ。

「それで結局、藍は優勝したら何を願うんだ？」

「乙女の秘密です」

真意を確かめる意味を込めてもう一度聞いてみたけど、蒼を見ながら含み笑いを浮かべただけで、何も教えてもらえなかった。大体の予想はつくけど。

「良一の方は、優勝したら何を願うんだ？」

「俺か？ そーだな……また妹に『おにーちゃん』って呼んでもらうようにするかなー」

最近、良一はそんな話ばかりな気がする。どうしちやっただらう。

「良一ちゃん、残念ですけど、お願いができるのは今この場にいる人に対してだけですよ？」

「そうなのか。なら夏休みの間だけ、夏海ちゃんに『おにーちゃん』って呼んでもらおうかなー」

「え」

それを聞いた夏海ちゃんが固まった。まさか、自分に矛先が向くとは思わなかったんだろう。

「……夏海ちゃん、そんな顔しなくても大丈夫ですよ。良一ちゃんは

私が倒しますから」

「……藍さん、応援していますー!」

夏海ちゃんがかがっしりと藍の手を握っていた。目が本気だった。「なんだか色々と事情がありそうだけど、ふたりとも準備はいい?」

しろはがスコアボードを持ちながら、選手二人に何とも言えない視線を送っていた。

「ああ、いいぜ」

「いつでも大丈夫ですよ」

「うん。それじゃ、試合開始」

しろはの宣言と同時に、まずは藍のサーブから試合が始まる。

「……それじゃあ良一ちゃん、いきますよ」

藍が放ったのは、スピードの出るドライブ気味のサーブだった。

「くそっ!」

良一はそれを何とか打ち返す。本来なら力づくでスマッシュを狙えるボールだったけど、男子はスマッシュを禁じられている。藍はそれを理解したうえで、敢えてドライブを打ったんだろう。

「そこです。もらいましたよ」

サーブの対応で良一が体勢を崩したのを見逃さず、返ってきたボールを素早く叩く。腰の入った見事なスマッシュが決まった。

「なあ蒼、本当に藍はスポーツ万能だな……」

「でしょー。あたしたちもしろはと同じ卓球クラブに通っていたんだけど、藍は堀田のおじーちゃんに見込みがあるって言われてたしねー」

自ら優勝賞品について進言してきたくらいだし、やっぱり腕に自信があるみたいだ。

「そこですよ。はい」

「うわあー!」

蒼と話をしながら試合を見る。良一も善戦しているけど、なかなか実力差がある。早くもワンサイドゲームの装いを呈してきた。

「うりゃー! どうだ!」

「良一ちゃん、上手く返しましたね。でしたら、これはどうですか」

「くっそー！ー！」

藍が5点をリードしたあたりから、見る側も集中が切れ、試合から目を離すメンバーも出始める。

「……あれ」

たまたま足元に目をやると……ベードマンが転がっていた。

「懐かしいな。昔はよくこれで遊んだな」

「え、なんですかそれ？」

それを手に持っている、夏海ちゃんが興味津々で寄ってきた。

「ベードマンだよ。後ろのトリガーを押すと、お腹のビー玉が飛び出すんだ。こういう風にね」

俺が手本を見せると、軽い音を立ててビー玉が飛び出す。

「こんなおもちゃがあるんですね」

「結構昔のおもちやだけだね。こうやって、空き缶とか狙い撃ちして遊んでたんだよ」

良一が飲み終わり、床の隅に転がっていたコーラの空き缶を持ってきて、ベードマンで狙い打つ。かこん、と音がして、空き缶が弾けるように倒れる。

「へえー、やってみてもいいですか？」

「うん。いいよ」

野球やったりしてるし、やっぱり夏海ちゃんって男の子っぽい遊びが好きみたいだ。

「羽依里さん、同じベードマンがもう一つありますし、どっちが早くあの空き缶を倒せるか、勝負しませんか？」

「いいよ。負けないからね」

二人で床に座り込んで、一つの空き缶を狙う。なんとというか、すごく懐かしい感じがした。

「良一ちゃん、これでおしまいですよ」

「ちつくしよー！ー！ 負けた——！」

しばらく夏海ちゃんとベードマン勝負をしていると、良一の絶叫が

響き渡った。先の見立て通り、どうやら藍が勝ったらしい。

スコアボードを見ると、11―0。卓球のセオリーを無視した、まさかの完封だった。

「次はあたしと鷗の試合ねー」

第四試合を前に、蒼が腕まくりしながら卓球台へと向かう。

「アオアオ、負けないよー」

スーツケースを隣に置きながら、鷗も蒼と対峙する。

「そういえば、鷗は優勝したら何をお願いするんだ？」

「それは……教えてあげないよ！ じゃん！」

くそ、久しぶりに言われてしまった。

「まあ、誰でも言いたくないお願いもあるだろうしな」

「じゃあ、蒼は？」

「あたしも、教えてあげないよ！ じゃん！」

蒼は声色を変えて、鷗と同じ台詞を言っていた。その思わぬ発言に、その場にいた全員が言葉を失う。

「……そ、そこで静まり返らないでよ！ 妙に恥ずかしいじゃない！」

少なからず蒼も意識してしまったのか、顔が赤くなった。

「そ、そうです蒼ちゃん、このラケット使いますか？」

藍はとつさに、さつきまで使っていた天善のラケットを蒼の方へ差し出す。妙な空気を打破するために、妹に助け船を出した形だ。

「い、いいわよー。天善も思い入れあるだろうし、あたしはこっち使うわよ」

蒼もその意図を理解したのか、そう言って別のシェイクハンドラケットを構える。それにしても、姉妹揃ってシェイク使いなんだろうか。

「よし、アオアオ、勝負だよー！」

ようやく空気が戻り、鷗もラケットを構えて蒼に対峙する。鷗が持つのはペンホルダーと呼ばれる、片面だけにラバーが張られたラケットだ。随分古いやつだけだ。

「ところで鷗、お前卓球やったことあるのか？」

「え、ないけど」

「ないのかよっ！」

俺は思わずツツコンでしまっていた。だって、すごく自信満々だったから。

「大丈夫！ さっき、その本読んで勉強してたから！」

鷗が指差す先に『マル秘』と書かれた手作りの本が落ちていた。ものすごく怪しいけど、天善が作ったのかな。

「それじゃ二人とも、準備いいかー？」

今回の審判は良一だった。どうも、天善はまだ灰になったまま、復活していないらしい。

「うん、いつでもいいよー！」

「あたしもいいわよー」

「……よし、準備ができたなら、試合開始だ！」

その良一は選手の意志を確認した後、試合開始を宣言する。

「蒼ちゃん、応援しています。頑張ってください」

「カモメさんも頑張ってくださいいね！」

「応援してますよー！」

いくつもの声援を受けながら、まずは鷗がサーブの構えを取る。

「それじゃ、まずは私から！ いくよ！ カモメサーブ！」

鷗がそう高らかに叫びながら放ったサーブは、しろはのサーブともまた違った軌道を描く、独特なサーブだった。

「うりやつー！」

そんなサーブを蒼が慎重に打ち返すと、返ったボールは予想以上に高く浮いた。

「今だ——！ 必殺！ ドラゴンスレイブ！」

「ひゃああああつっ！」

次の瞬間、鷗は大きくループを描くボールを打ってきた。今のはスマッシュなのか？ 一瞬、光輝く竜が見えたような。

「い、1—0だ……なんだ、今のは」

得点を記録した良一も驚きを隠せていない。今の技を直接受けた

蒼に至っては、床に尻もちをついている。

「あ、蒼ちゃん、大丈夫ですか？」

「へ、平気よ……ちよつとびっくりしただけ」

藍が心配そうに蒼に駆け寄り、蒼はすぐに立ち上がり、服の埃を払っていた。

「……鷗、その技をどこで」

その時、今さっきまで灰になっていた天善がいつの間にか復活して、驚愕の表情で鷗を見ていた。

「え。あの本に載ってたんだけど」

鷗はそう言いながら、先程の『マル秘』と書かれた本を指差す。

「やはり、俺の書いた秘伝の書を……。だが、あれはそう易々と修得できるものではないはず」

「そうなの？ 何回か練習したら、できるようになっちゃったんだけど」

「……鷗、鳥白島から世界を目指さないか？」

「そ、それは遠慮するよ！」

天善はとんだ逸材を発見してしまった風に言ってる。鷗本人には全くそのつもりはなさそうだけど。

「天善、今は試合中でしょ！ 勧誘はあと！」

「そうだよ！ それじゃ、気を取り直して……いくよ！ インフェニットダンゴサーブ！」

「はあああああ!?!」

二回目の鷗のサーブがネットを超えた瞬間、光の加減なのかよくわからないけど、ボールが無数に分身した。そう。まるで大家族のように。

「こ、このっ！ うわっぷー！」

蒼は思いつきり空振りして、そのまま勢い余って、卓球台の上に突っ伏してしまった。確かにあれだと、どのだんご……いや、ボールを狙えば良いのかわからない。

「に、2-0……どうなってるんだ、今のサーブは」

「魂伝影念獅坐威砲(こんでんえいねんしぎいほう)の完成系だ……」

しかも、それをサーブに応用するとは……!」

天善はわなわなと震えている。ごめん。イマイチすごさがわからないんだけど。

「こ、今度はあたしの番ね……うりゃあつ!」

蒼は深呼吸してから、サーブを放つ。

「出た、ピンクサーブ!」

「誰がピンクサーブよ!」

良一が大きな声で何か言っていた。確かに、結構な回転のかかったサーブではあるけど。

「よーし! 必殺! ドラゴンスレーイブ!」

「ひゃー!?!」

しかし、そのボールを鷗は簡単に打ち返していた。先程と同じようにループ気味に返されたボールは、蒼の陣地の左隅に決まる。

「おおー、決まったー!」

鷗は飛び跳ねて、全身で喜びを表していた。あのドラゴンなんか、すごいんだけど。

「こ、これで3-0だな……蒼は俺たちの中でも強い方のはずなんだが……」

「カモメさん、すごいです!」

すごいなんてレベルじゃない気がする。鷗、本当に初心者なのかな。

「うう、あんなボール、どう返せばいいのよ……」

蒼がもう一度ピンクサーブを放つ。どうも迷っているようだ。球筋に出てる。

「もう一回! ドラゴンスレーイブ!」

対する鷗が容赦なく打ち返した……その瞬間。

「あ、あれー?」

……鈍い音が出て、鷗のラケットが砕け散った。何が起こったんだろう。

「……やはり、生半可な修行で必殺技を打ち過ぎたんだろうな」

いち早く状況を察したらしい天善が、冷静にそう言っていた。よく

わからないけど、ラケットに負荷がかかりすぎたんだろうか。まるで漫画みたいだった。

「悪いがルールだ。ラケットが壊れた以上、この勝負は蒼の勝ちとさせてもらおうぞ」

「ひーん」

鴉は唯一残った柄の部分を悲しそうに見つめながら、引き下がっていった。そういえばそう言うルールだった。だけど、まさか本当にラケットが壊れるなんて。

その後は天善が審判に復帰して、一回戦最後の試合は紬と夏海ちゃんの試合だった。ズツ友同士の対決だし、どうなるだろうか。

「紬、今からおっぱいサーブを教えるわよ！」

「ハイ！」

「夏海ちゃん、今から簡単な四天王サーブを教えるね」

「ありがとうございます！」

試合開始直前、静久としてはがそれぞれのサーブを二人に教えていた。全面バックアップしてやっただ。正直、羨ましい。

「そろそろ準備はいいか？ 夏海のサーブから試合を開始するぞ？」

「わかりました！ 紬さん、いきますよ！」

「はい！ ズツ友同士のシンケンシヨープです！」

「紬、頑張って！」

「夏海ちゃん、応援してるからね！」

一回戦最後の試合と言うこともあって、たくさんの声援が送られて、盛り上がっている。

「それでは、試合開始！」

「……えい！」

試合開始宣言と同時に、夏海ちゃんのサーブが放たれる。しろはのサーブほどの力強さはないものの、鋭いカーブを描いていく。

「むぎゅー！」

「あー！」

対する紬はその回転を上手く利用するようにしてボールを返す。回転そのままでも返されて、夏海ちゃんは対応できず、ネットに引っかけってしまった。

「1―0。まずは紬が1点先取だな」

「上手いわ紬。相手のかけた回転に逆らわず、おっぱいの流れに任せて自然に返す。名付けて、おっぱいカウンターよ!」

何でいきなりおっぱいが出てくるんだろう。ごめん静久、意味がよく解らない。いや、わからないほうがいいのかもしれないけど。

試合を見ていると、二人の実力はかなり拮抗していて、その後も一進一退の攻防が続いた。紬がおっぱいサーブでサーブエースを決めようものなら、夏海ちゃんもサーブエースで応戦。

夏海ちゃんのスマッシュを紬が返したり、その逆があったり。中にはすごく長いラリーが続いたこともあった。お互いに試合中に成長してるって感じがした。

「これで終わりです! チャーハンスマッシュ!」

「むぎゅー!」

「9―11。試合終了。この試合、夏海の勝ちだ!」

最後は夏海ちゃんの渾身のスマッシュが決まって、勝負あり。

どっちが勝ってもおかしくない、本当に良い勝負だった。終わった後、お互いに抱き合って健闘を讃えあっていたし。

「うんうん。友情って良いわねえ……」

蒼が笑顔でそう言っていた。スポーツを通じて育まれる友情っていいよな。

これで一回戦の全試合が終わり、続けて二回戦が開始される。

どうも、雨脚が少し強くなったみたいで、秘密基地の屋根や壁を叩

く雨音が大きくなった気がする。

そんな中、その雨音に負けないくらい、ピンポン玉の音が響いていた。

「おっばいサーブよー！」

「ほいー！」

「おっばいゾーンを展開よー！」

「ししんそうおう！ ほいー！」

二回戦の第一試合。俺を瞬殺したしろは相手に、静久もおっばいゾーンを展開して善戦していた。

「……これで終わり。ほいー！」

「3―1―1。試合終了！ この試合、しろはの勝ち！」

しかし、実力で勝るしろはの勝利に終わった。静久のおっばい技も、さすがにしろには通用しなかったらしい。

そしてトーナメント表の関係上、この時点ではしろはの決勝進出が決まった。

続いて、二回戦第二試合が開始される。藍と蒼による、姉妹対決だった。

「今回ばかりは、蒼ちゃんが相手でも手加減はできません。私は優勝して、蒼ちゃんにお願いを聞いてもらわないといけませんから」

藍は本気の目をしていて。そこからは最愛の妹を倒してでも先に進もうとする、ゆるぎなき信念が感じ取れた。

「あー……あたしはそんな藍を、何が何でも止めないといけない気がするわ。このまま藍を優勝させたら、何させられるかわからないし」

確か、藍が優勝したら蒼にあんな格好やこんな格好をさせると公言していたっけ。詳細はわからないけど。

「どちらも準備は良いみたいだな……それでは、試合を始めるぞ？」

「いいわよー」

「はい。いつでもいいですよ」

「……よし、それじゃ、試合開始だ！」

天善の試合開始宣言を合図にして、二人の勝負が始まった。

「藍、いくわよ！ うりやあつ！」

最初は蒼のサーブ。強い回転をかけて、藍の左側に向かってサーブを入れる。

「蒼ちゃんは良く左側に打つてきますから、読んでいますよ」

藍がそのサーブを返し、返球が高めに浮いたところを、蒼がすかさずスマッシュを放つ。

そのスマッシュは藍の真つ正面に打ち込まれ、さすがに返せなかつたみたいだ。まずは1―0だ。

「……蒼ちゃん、やりますね」

「蒼、なかなか幸先の良いスタートじゃないか？」

「でしょー。今まで一度も藍に勝つたことないけど、今日こそは勝つて見せるから！」

え、勝つたことないの。それを聞いて、一気に不安になったんだけど。

「続けていくわよ！ うりやつ！」

しかし、蒼の二回目のサーブは力が入ってしまったのか、サーブミスになってしまった。これで1―1の同点だった。

「それでは、次は私のサーブですね。蒼ちゃん、いきますよ」

その後の藍のサーブは摩訶不思議な軌道を描き、サービスエースになっていた。これで1―2。藍が先行した。

その後は攻める藍に対して、蒼が守りながら必死に食らいついていく試合展開となった。

「ポン！ ポンポン！」

イナリも袖の腕の中から声援を送っていた。イナリのことだし、どっちも応援しているんだろう。

「10―10！ デュースに突入だ！ 非常に見ごたえのある試合だ

ぞ！」

一進一退の攻防が続き、気がつけば今大会初のデュースへと突入していた。サーブはここから一本交代になり、2点差がつくまで試合を続けることになる。

天善もいい試合を見る事ができて嬉しいのか、自然と語気が強くなっていた。

「まさか、蒼ちゃんがここまで強くなっていたなんて。お姉ちゃん、嬉しいですよ」

「だってここで負けたら、ゆくゆく全部あたしに返ってくるじゃない？ そんなの、絶対嫌だから」

姉妹揃って肩で息をしていた。双子同士、お互い手の内がわかっているのか、長いラリーが続く場面も多かつたし、相当に体力を消耗しているみたいだ。

「ここまで来たんだし、絶対勝つわよ！ うりやつ！」

蒼はここで攻めのサーブを放つ。コーナーギリギリを狙った、鋭いサーブだった。

「えいっ！」

藍は腕を思いっきり伸ばしながら、なんとかそのサーブを受ける。しかし、大きくバランスを崩してしまう。

「スキあり！ てい！」

それを好機と見た蒼は、藍のいる位置とは反対側に陣地に向けて強烈なスマッシュを放つ。さすがの藍も追いつけず、これが決まって11-10。この試合、蒼が初めてリードした。

「ついに抜かれてしまいましたね。これは一転、ピンチですね」

藍はそう言うけど、その表情には余裕すら感じられる。自分にサーブ権が移ったということもあるだろうか。

「……いきますよ。四天王サーブ！」

次の瞬間、藍はしろはと同じサーブを放ってきた。

「え、ちよつと……!？」

初めて見る軌道に、蒼は動揺して返し損ねてしまった。サービスエースによつて11-11。藍が同点に追いついた。

「まさか、藍も四天王サーブを使えたなんて」

「堀田のおじーちゃんから四天王サーブを教わったのは、しろはちやんだけじゃないということです。それに、切り札は最後まで取っておくものですよ」

なるほど。藍が余裕たつぷりだったのは、このサーブがあつたからなのか。

「今度はあたしのサーブよね。ここは絶対決めないと……」

続いて蒼のサーブになる。しかし、藍に四天王サーブを打たれて動揺したのか、思いつきり力が入り、痛恨のサーブミスになつてしまった。これで11-12。一転、藍がマッチポイントを迎えた。

「これで決めますよ。蒼ちゃん、覚悟してください」

しかも、再び四天王サーブが来る。四神のうちのどれを表しているのかわからないけど、これまた変わった動きをしていた。

「……よし、今よ！ うりやつー」

次の瞬間、蒼はその四天王サーブを見事に受け返した。

「……は？」

そのまま軽やかに返されたボールは、藍の陣地の左隅に決まる。見事なりターンエースだった。

すごいけど、今の動き、少し前に見たような。

「……今の、もしかしておっぱいカウンターですか」

藍が驚愕の表情を浮かべていた。言われてみれば、今のは静久や紬が使っていたカウンター技だった。

「紬が夏海ちゃんの四天王サーブを返してるのを見て、藍の四天王サーブ対策にも応用できるんじゃないかと思ったのよねー」

「……蒼ちゃん、やりますね」

「切り札は最後まで取っておくものでしょー？」

蒼はしてやったりな顔をする。これで12-12。また同点になった。

「さすが蒼ちゃんです。おっぱいカウンターならぬ、ピンクカウンターとでも呼んでおきましょうか」

「なんでもかんでも、ピンクつけないでよー！」

その後も1点ずつを取り合い、13―13。ゲームが終わる気配はない。

「……すごい勝負になってますね」

「本当だねえ。なつちゃん、どっちが勝つと思う？」

「……正直、わからないです」

白熱の試合展開に、皆がゲームに釘付けになっている。

「藍、いくわよ！」

続く蒼のサーブ。勝負をかけたピンクサーブを、藍は低めに打ち返す。これは、またラリーが続くような感じだ。

「……イチかバチか。やってみるわよ！」

蒼はそう言うのと、ラケットをかなり低く構え……。

「ド、ドラゴンスレイブ！」

大きな声で技名を叫びながら、鷗が使っていたのと同じ技を打ち放つ。

放物線を描いたボールは、ギリギリの位置で、藍の陣地を掠る。

「そんな、エッジボール……」

「あ、ごめん……」

鷗も技を見よう見まねでやってみたらしい。体得しているとは言い難いけど、なんとか決まった。これで14―13。今度は蒼がマツチポイントだ。

「藍の四天王サーブを返したばかりか、ドラゴンスレイブまで……なあ蒼、鳥白島から世界を」

「天善ちゃん、ちよつと黙っててください。今から大事な所なんですから」

興奮気味に話す天善の言葉を、藍がそう遮る。どちらにとっても、次の一球が勝負だった。

「いきますよ……えい！」

藍は少し考えて、四天王サーブを放つ。蒼はそれをピンクカウナーで見事に返し、そのままラリーへと持ち込む。

「……本当にすごい勝負だね」

「ああ、目で追うだけで精いっぱいだ」

しろはの言う通りだ。簡単に返球しているように見えるけど、きつと特殊な回転がかかっているんだろう。

……やがて、藍の返したボールが少しだけ高く浮く。

「よし、もらったあー！ー！」

蒼はそれを見逃さず、渾身のスマッシュを叩き込む。藍も反応したけれど、大きく弾かれてしまい、蒼の陣地に返すことはできなかった。15―13。ついに試合が終わった。

「勝ったああ——！」

蒼は大きく両手を突き上げた後、床に座り込んでしまった。藍も同じように汗だくでへたり込んでいるし、ものすごい勝負だった。

「……負けました。蒼ちゃん、強くなりましたね」

「ま、まさか本当に勝てるなんて思わなかったわー……」

お互いに笑顔で健闘を讃えあっていた。誰からともなく拍手が巻き起こる。

「……私の遺志は、きっと蒼ちゃんが継いでくれると信じています」

それってどういう意味だろう。蒼が優勝したら、藍にあんな格好やこんな格好をしてくれて頼むんだろうか。別に優勝賞品としてじゃなくても、蒼のお願いならもれなく藍は聞いてくれそうだけど。

「……それでは、二回戦第三試合。試合開始！」

前の試合の興奮冷めやらぬ中、夏海ちゃんとイナリの勝負が始まった。

「いきますよ、イナリさん！ 四天王サーブです！」

「ポーン！」

「え!？」

夏海ちゃんのサーブから試合が始まったけど、イナリは尻尾の一撃でリターンエースを決めていた。続く二回目のサーブも同じく。あつという間に0―2となった。

「ポーンポーン！」

続いてイナリのサーブ。尻尾で器用にサーブを打っていた。

そのボールにはこれまた謎回転がかかっていて、全く予測不能な動きをする。あの尻尾、見た目はフワフワなのに。恐ろしすぎる。

「ひええー!?」

夏海ちゃんは困惑したまま、豪快に空振っていた。あんなサーブ、俺も見ることがない。

「……………」。試合終了！勝者、イナリ！」

その後も一方的な試合展開が続き、イナリが圧勝してしまった。これでイナリは蒼の待つ準決勝へと進むことになった。

俺たちも必死に夏海ちゃんを応援したけど、あの尻尾は反則だった。ポーン言いながら、夏海ちゃんの三連続スマッシュを返し切った時のイナリのドヤ顔を、俺はしばらく忘れられないだろう。

「負けちゃいました……………やっぱり、付け焼刃の四天王サーブではイナリさんに敵いませんね」

完敗したせいかな、夏海ちゃんは逆にすっきりとした顔をしていた。

「イナリさん、動きが人間離れしているので、すごく戦いにくかったです」

確かに人間じゃないけど。

「そう言えば夏海ちゃん、絵日記の方は順調ですか？」

その時、ようやく前の試合の汗が引いたらしい藍が夏海ちゃんに話しかけていた。

「はい、ちゃんと毎日書いてますよ！」

「せっかくですし、今日のイベントもしっかり書き残してくださいね？」

「もちろん書きますけど……………雨の日に秘密基地で卓球をして、キツネさんに負けましたなんて絵日記、誰も信じてくれなさそうですね」

確かに。実際に見ない限り、信じられないと思う。それくらい、不思議な勝負だった。

「さあ、いよいよ準決勝が始まるぞ」

天善が鼻息荒くそう話す。トーナメント表の関係で、すでに決勝進出を決めているしろは今回休みとなり、準決勝は蒼とイナリの試合だけが行われる。

両者とも、二回戦ですごい戦いを演じていたし、天善が注目するのも納得だ。俺も着実に成長している蒼に注目していたんだけど……。

「ポーン！」

「ひゃー！？」

「ポポーン！」

「えええー！？」

どうも、蒼は藍との試合で色々なものを使い切ってしまったみたいだ。序盤からイナリに圧倒されてしまっていて、スコアボードを見ると、早くも0-6になっていた。

「そ、そういえばしろは、今日も食堂は休み？」

さすがに見ていられず、俺は隣にやってきたしろはにそう話しかけていた。

「ううん。今日は開けるよ」

「おお、営業するんだな」

夕飯どうしようかと思っていたから、助かる。

「でも、おじーちゃんが今日も漁には出られないって言っていたから、魚料理はできないよ？」

「いや、十分だよ」

しろは食堂には魚料理以外にもたくさんメニューがあるし、全然気にならない。

「ところで羽依里、これって何？」

心の中で夕飯の心配がなくなったことを喜んでいると、しろはがコマのような形状をしたおもちゃを手に持っていた。

「それはビーブレードだよ。リングの上で戦わせるんだ」

「ふーん……男の子って、こういうの好きだよね」

「そう言わずにさ、しろはもやってみたら？」

俺はそう言いながら、奥の方に置かれていたリングを持ってくる。

「このスターターにビーブレードをセットして、ボタンを押すだけで発射。簡単だろ？」

「た、確かに簡単そうだけど」

「こんな感じだよ。ちっちのちー！」

俺がスターターのボタンを押すと、ビーブレードは勢いよく飛び出し、リングの中心で豪快に回り始める。

「え、今の言葉はなに？」

「今の？ 掛け声だけど」

「それ、必要？」

……この手のおもちゃをそんな冷静な目で見ないで欲しい。

「うん。言うルールなんだ」

そう言いながら、しろはにも白いビーブレードを手渡す。

「ほら、しろはもやってみなよ」

「そ、それじゃ……ち、ちっちのちー！」

俺の真似をして、しろはがビーブレードを発射する。

ぎゅいんぎゅいん音を立てながら、先に回っていた俺のビーブレードとぶつかり……しろはのビーブレードがはじき出されてしまった。

「あ」

「おっと、当たり所が良かったのかな。俺の勝ちだ」

「……もう一回」

「え？」

「もう一回！ 今度は同時に！」

「わ、わかったわかった」

ああ見えて、しろはは実はかなり負けず嫌いだったりする。

「ちっちのちー！」

その後、しろはとビーブレードで遊びながら、ちらちらと卓球の試合結果も見ていた。結局、2―1でイナリが勝ち進んだみたいだっ

た。

秘密基地に置かれた時計が12時を指す頃、天善主催の卓球大会もいよいよ大詰めを迎える。

「それでは決勝戦。しろはとイナリの試合を始める」

そう口上を述べる天善は、感無量といった感じだった。正直、予想以上に盛り上がったし、イベントとしては大成功だと思う。

「しろはさん、頑張ってください！」

「ここまで来たら優勝を狙えよ！」

「イナリさん、応援してますよ！」

「落ち着いていきなさいよー」

「頑張ってください」

優勝決定戦と言うこともあって、双方の選手へたくさんの声援が送られる。さて、どんな勝負になるだろうか。

「しろはにイナリ。どちらも準備はいいな？」

「うん。いいよ」

「ポーン！」

「いい返事だ。それでは決勝戦、試合開始！」

「……ほい！」

天善によって試合開始が宣言されると同時に、しろはが四天王サーブを放つ。

「ポーン！」

しかし、イナリはその尻尾でしろはの四天王サーブの回転を完全に止め、逆にリターンエースを決めていた。これで0-1。やっぱり、あの尻尾は反則だ。

「……夏海ちゃんと試合をしてる時も思ったけど、やっぱり四天王サーブは通用しないっばいね」

どうやら、しろはは今の一球で四天王サーブに見切りをつけたらしく、その次のサーブは速度とコースを重視したものへと切り替わった。

「ポーン！」

イナリがそのサーブを卓球台の右側に寄って打ち返す。

「……うん。そこだね」

「ポン!？」

しろはその様子を見て、がら空きになっていた左側の陣地にスマッシュを決めた。これで1―1の同点だ。

ギャラリーからざわめきが起こる。まさか、あそこまできれいに決めるなんて。

なにより、一番ショックを受けているのはイナリのように、その大きな目をより一層見開いていた。

……今度の相手は、今まで戦ってきたどの人間より強い。そう確信したような顔だった。

「次はイナリのサーブよー。頑張んなさいよねー」

「ポポーン！」

蒼の声援を受けて、イナリがサーブを打つ。鋭いサーブがしろはの左側に決まり、サーブエースとなる。

「は、速い……!？」

そのあまりのスピードにしろはも一瞬たじろぐけど、すぐに対策を講じたらしい。続く二回目のサーブはうまく打ち返し、これまたリターンエース。2―2の同点だった。

その後は、高低差や緩急をつけたり、果てはループ気味に打つてみたりと、しろはもあの手この手を使ってイナリと戦いを繰り広げる。「しろはさん、すごいです。あのイナリさんと互角の勝負をしています」

二回戦でイナリと戦った経験がある夏海ちゃんが、台の上を行き交うピンポン玉を必死で目で追いながら、そう口にしていた。

試合はお互いに譲らず、気がつけばスコアボードは10―10を表示していた。白熱の決勝戦はデュースに突入した。これからは、連続得点をした方の勝ちだ。

「……ほい！」

サーブも一回交代となり、まずはしろはのサーブ。これまでと同じく、回転よりもコースを重視した鋭い球だった。

「ポポーン！」

対するイナリは左側に寄って、尻尾をうまく振って打ち返す。

「ほい！」

しろはは真正面に返ってきたボールを、手首のスナップを効かせながら今度は右側へに向かって打ち返す。

「ポーン！」

それを見たイナリは素早く卓球台の上を駆け、身体を回転させながら更にボールを打ち返す。さすが野生動物。絶対人間じゃ無理な動きをしていた。

「ほい！」

「ポーン！」

「ほい！」

「ポポーン！」

そのまま壮絶なラリーが続き、最後はイナリの強烈なスマッシュが決まった。これで10―11。イナリのマッチポイントだ。

しろはは、頑張ってくれ。このままイナリが優勝したら、色々と微妙過ぎるから。

「ポポポーン！」

続く、イナリのサーブ。尻尾から繰り出される謎回転のボールを、しろははなんとか打ち返す。

「ポーン！」

そして、少し浮いたボールをイナリが狙い打つ。しかし、しろははそれを見事にカウンターし、左隅に決める。これで11―11。同点に追いついた。

「いいぞしろは、頑張れ！」

「イナリ、切り替えてもう一度よ！」

本当に手に汗握る戦いだった。見ているこっちが緊張してくる。

「……ほい！」

今度はしろはのサーブ。先程と同じようにコースを狙う。今度は右隅だ。

イナリが即座に追いつき、しろはの陣地へとはじき返す。直後、しろははボールの勢いをなるべく殺しながら、ネット際へと落とす。いわゆるドロップショットというやつだ。

「ポ、ポン!?!」

それに気づいたイナリは慌てて拾いに走ったけど、さすがに手前過ぎて間に合わなかった。これで12―11。しろはのマッチポイントだ。

「…………ふう」

しろはが小さく息を吐く。今度はイナリのサーブ。しろはにとっては勝負の一球だ。

「ポンー!」

イナリもここぞとばかりに気合いの入ったサーブを放つ。

「ほいー!」

しろははそのサーブをしっかりと返す。そのままラリーへと持ち込み、イナリを左右に動かせる。

「ポンー! ポンポンー!」

「あれだけ左右に打ち分けられるしろはもすごいけど、その動きについて行ってるイナリもすごいよな…………」

「ああ、この二人がダブルスを組めば、世界を狙える…………!」

天善が何か言っていたけど、そのタイミングで、しろはが先程と同じような構えを取る。またネット際に落とすドロップショットだろうか。

「ポンー!」

イナリもそれを察して、前方に寄る。同じ手に二度は引つかからなみたいだ。

「…………チャーハンスマッシュ!」

しかし、そこでしろはが放ったのは、まるでこんもりと盛られたチャーハンのような放物線を描く、不思議なスマッシュだった。

「…………ポン?」

そのスマッシュはネット際に寄っていたイナリの頭上を軽々と超え、イナリの陣地の右隅に静かに決まった。

これで13―11。最後はしろはの技あり球で勝負が決まった。

「13―11。試合終了！ しろはの優勝だ！」

審判の天善がそう宣言すると、固唾を呑んで見守っていた皆が選手二人の元へ集まり、口々にねぎらいの言葉をかける。空門姉妹の試合に続いて、決勝戦もすごい勝負だった。

「おめでとう、しろは」

「うん。ありがとう」

しろははものすごく充実した顔をしていた。他の皆にはわからないかもしれないけど、彼氏の俺にはわかる。しろは、めちやくちや喜んでる。珍しく、小さくガッツポーズしてるし。

「しろはさん、すごかったです！ 優勝、おめでとうございます！」

「うん。最後のスマッシュ、夏海ちゃんの技がヒントになったんだよ」
チャーハンスマッシュ。まさかとは思ったけど、やっぱり夏海ちゃんの技が元になってたらしい。

「イナリも惜しかったわよー」

「ポーン」

激戦を終えたイナリはかなり疲れた様子で、ふらふらと蒼の腕の中に納まった。

「イナリさんも頑張りました！」

「ええ、今度油揚げを用意してあげましょう」

「そうですね！」

紬と静久もイナリの健闘を称えていた。確かに、彼女は卓球界最強のキツネだと思う。

「……それではしろはちゃん。優勝賞品のお願い事をどうぞ」

「え、そんなの別に良いし」

優勝決定の余韻が収まった頃、藍を筆頭に、皆でしろはを取り囲む。その輪の中心に、何故か俺も巻き込まれていた。

「え？ 何ですか？ お願い事は、羽依里さんに抱きしめてもらいたい……ですか？」

しろはの口元に耳を持って行った藍が、わざとらしくそう言っていた。俺はしろはのすぐ近くにいたけど、しろはは何も言っていない。

「ち、違うし……！」

当然、しろはも否定していたけど、皆の茶化す声によってほとんどかき消されてしまった。

「しろは、そんな謙遜しない！ ほら、羽依里に思いつきり抱きしめてもらいなさい！」

「愛を込めたハグね。良いわね」

「よくないし！」

俺はしろはと揃って拒否していた。蒼も静久もしろはの背中をぐいぐいと押しているし。どうしてそういう流れになるんだろう。

「ハグは駄目ですか。それなら、やっぱりキスしかないですね。呂の字ですよ」

「そうよねー。やっぱり、彼氏さんのキスでしょー」

「違うし！」

また俺としろはは思いつきりハモってしまった。と言うか、ハグの次はキスとか、難易度が上がってる気がする。空門姉妹も、変に煽らないで。

「さすが息ピッタリですね」

うう、島の皆……特に女性陣。絶対楽しんでいる。

「羽依里も男見せなよー」

「むぎゅーつとしましよー！」

「鷗も袖もやめてくれ。背中を押さないで」

「ほらほら、しろしろと密着モードだよ！」

だから、しろはは何も言っていないのに。完全に公開キスの流れになってる。ちよつと、本当にやめて。皆、押さないで。

「わ、わ、わ」

同時に、真っ赤になったしろはの顔が眼前に迫ってくる。これはもしかして、本当に覚悟を決める必要があるのかも……！

「……ス、スイカバー！ 羽依里、私、スイカバーが欲しい！」

その時、しろはがそう叫ぶ。俺はすぐにその言葉の意図を理解した。

「よしわかった。しろはのお願い事は『スイカバーが欲しい』なんだな！」

「うん。それで決定。やった。うれしいな！」

俺としろははとっさに三文芝居をして、今の状況を打開する。しろはがお願い事さえしてしまえば、誰もこれ以上無理強いはできないだろうし。

「……ちえー。せっかくここまでお膳立てしてやったのによー」

「まったく、長年組んだ混合ダブルスなら、それくらい楽勝だろうに」俺たちの思惑通り、しろはの願いが決まるとすぐに周囲の輪がぼらけていく。それと同時に、良一と天善が心底つまらなそうに言っていた。いや、そんなこと頼んでないから。皆の前でキスするとか、恥ずかしすぎるから。

「まったく、羽依里さんもしろはちゃんも意気地なしですね」

藍が口をとがらせて、これまたつまらなそうに言っていた。だから、しろははそんな願い事はしていないし、さすがにやりすぎだと思う。夏海ちゃんだって見てるんだしさ。

「……」

そう思いながら夏海ちゃんの方を見ると、口元に手を当てたまま、目を点にして固まっていた。なんだろう。変に想像力が働いちやっただんだろうか。

「もうお昼だし、そろそろ解散しましょう」

しばらくすると、年長者の静久がそう言って締め、その場は解散となった。雨脚もだんだんと強くなってきたし、ちようどお昼時だ。俺たちは足早に帰宅することにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

卓球大会を終えて、夏海ちゃんと二人で加藤家に帰宅する。

「お腹空きましたねー」

傘の雨粒を払って、傘立てに戻した後、手を洗ってから台所に向かう。

「羽依里さん、お昼ですけど、このカップうどんでもいいですか？」

先に台所に行っていた夏海ちゃんが、両手に同じ種類のカップうどんを持って居間にやってきた。

「……ごまだしうどん？」

「ごまだし……ってなんですかね？」

「さあ」

聞いたことのない名前だった。出汁って言うくらいだし、調味料だろうか。夏海ちゃんから渡されたカップうどんのパッケージには『ご当地うどんシリーズ！』とでかでかと書かれている。

「な、なんだか怖いですね」

「そ、そうだね。キワモノの部類だったらどうしよう」

でも、昨日の夕飯に皆でカップうどんを食べてしまったせいで、お昼に食べられそうなものはこれだけだ。背に腹は代えられないし、食べてみよう。

そう思いながら、ふたを開けてかやくとスープを入れて、お湯を注ぐ。

「うわ、なんだこのにおい!？」

お湯を入れた途端、何とも言えない独特な香りが漂ってきた。

「魚をすりつぶした特製のごまだひを使っています。って書いてありまふよ。美味しいんですふあね？」

……夏海ちゃん、口と鼻を押さえながら喋らないで。確かに、すごく独特な香りだけど。

そうこうしているうちに三分が経過した。これ以上時間をかけても麺が増えるだけだし、食べるしかない。

「羽依里さん、お先にどうぞ！」

夏海ちゃんが笑顔で促してくる。そんなおっかなびつくりしなくても。

俺は意を決してふたを取る。においの感じはさつきまでと変わらない。なかなかいきつい。

「それじゃ、お先にいただくね」

手を合わせてから、恐る恐る一口食べてみる。

……あれ、意外とおいしい。

香りは独特だけど、しっかりと魚の旨味も出ていた。

「……夏海ちゃん、これ美味しいよ」

「え、本当ですか？」

「うん。においの方はあれだけど……魚の出汁が効いてるよ」

「そ、そうですか？ それじゃ……いただきます」

手を合わせた後、夏海ちゃんもごまだしうどんを口に運ぶ。

「あ、本当ですね」

思いのほか、口に合ったみたいだ。俺も食べているうちに、においも気にならなくなってきたし。珍しい味付けで美味しかった。

昼食を済ませると、暇になってしまった。外を見てみると、相変わらず雨が降り続けている。

なんとなくテレビをつけてみるけど、台風被害を伝えるニュースばかりだった。どこどこで木が倒れたとか、窓ガラスが割れたとか、聞くだけで気が滅入る。

「そうだ夏海ちゃん、駄菓子屋に行ってみない？」

「そうですね！ 行きましょう！」

夏海ちゃんもその言葉を待っていたようで、元気いっぱい立ち上がる。やっぱりこういう時は、駄菓子屋でかき氷でも食べるに限る。

俺と夏海ちゃんは傘を差しながら、駄菓子屋へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださーいなー」

「おおー、いらっしやーい」

「いらっしやいませー」

今日の駄菓子屋は雨を避けるためか、ガラス戸が閉められていた。その戸を開けながら店内に声をかけると、カウンターの向こうから鴫と紬が出てきた。

「え、どうしてお二人が店番をしてるんですか？」

「アイさんにお店を任せました！」

「そう！ 駄菓子屋の看板娘、一日体験だつて！」

揃って笑顔だったけど、それつてつまり、言葉巧みにタダ働きさせられてるってことじゃないかな。

「滅多にできない体験なんだつて！」

その事実には、二人は微塵も気付いていないらしい。見事に藍に言いくるめられてしまっている気がする。

まあ、本人たちが楽しんでるんなら、野暮なことを言うのはやめよう。

……そして、それ以上に気になることがある。

「ところで、どうして二人ともメイド服を着てるんだ？」

「一日体験の間は、この服を着る決まりなんだつて！」

「決まりなんですよ！」

……藍がそう言ったんだろうか。絶対嘘だ。

「それで……どう？ 似合ってる？」

「似合ってますか？」

二人はくるりとその場で回つて、衣装を見せてくれる。どうも、髪型も変えさせられた感じで、鴫がツインテール、紬がポニーテールになつていた。

「ああ、よく似合ってるよ」

「はい！ お二人とも、すごく可愛いです！」

「にへへ、ありがとー」

「むぎゆ……言つてはみたものの、すごく恥ずかしいです……」

直後、二人は揃って顔を赤くしていた。ノリでやってしまったんだろう。

……それにしても、藍は二人分のメイド服をどこで手に入れてきたんだろう。まあ、本当にすごく似合ってるからいいけど。

「そういうえば紬、静久は？」

思えば、駄菓子屋には静久の姿が無かった。大抵、紬と一緒にいるはずなのに。

「シズクは一旦家に帰りました。服もびしょ濡れでしたし、なにより両親に心配をかけたと、へこんでいました」

「ああ、そういうこと」

朝の話だと、かなり無茶をして家を飛び出してきたって言ったし。この天気だと服も乾かないし、いつまでもウシの格好でいるわけにもいかない。

「ハイ。午後から船が動き出したらしいので、一番の船に飛び乗っていきました」

「その時、ズクズクを見送った直後のツムツムと港で偶然会って、駄菓子屋さんに行こうって流れになったの」

鴉がそう話を続ける。それで紆余曲折あつて、二人で駄菓子屋の一日看板娘をすることになったらしい。

「それで、タカハラさんたちは何かゴヨイリですか？」

紬が急に接客モードになった。何か聴き慣れない単語が聞こえた気もするけど。

「うん。かき氷二つももらえるかな？」

「はい！ おまかせください！」

注文を受けると、紬は意気揚々とかき氷器へ向かう。

「待ってツムツム、先にお代を貰わないと！」

「そでした！ お二人で200万円です！」

紬がUターンしてきて、柔らかそうな手のひらを揃えてこつちに差し出してきた。お約束も良いんだけど、何味かも聞かれてない。色々

とグダグダだった。

「じゃあ、俺は氷メロンで」

「私はブルーハワイでお願いします!」

二人で味を伝えて、100円ずつ渡す。

「わかりました! どれも同じ味ですけどね!」

紬が続けて、別のお約束を言う。この台詞も蒼以外に言われると新鮮な気がする。

「それじゃ、すぐにできるからね!」

鴉が棚の上からシロップを用意する一方で、紬がしゃしゃること氷を削り始めていた。こんな分担作業も、普段見ない光景だった。

「おまたせしましたー」

しばらくして、紬がポニーテールを揺らしながら、二人分のかき氷を運んできてくれた。

「あれ? 紬さん、このブルーハワイ、白っぽいんですけど」

「上からみぞれと練乳をかけておきました! サービスです!」

サービスは嬉しいけど、すごくカロリーが高そうなかき氷だった。

「それでね。羽依里のかき氷んだけど、メロンシロップが途中でなくなつたから、上からイチゴシロップをかけておいたよ!」

「ええええ」

言われてみれば、なんか茶色っぽい色になっていた。二色かき氷つてもあるけど、これは思いつきり色が混ざってしまったている。正直言って、美味しそうに見えない。

「ど、どれも同じ味だから! ね!?!」

鴉はそう取り繕っていた。確かに同じ味だろうけど……。

しゃくしゃくとかき氷を口に運ぶ。なんとも言えない微妙な味だった。蒼曰く、香料で違いを出してるだけらしいから、おいが混ざると本当に微妙な味だった。

そして、雨で気温が低い中でかき氷を食べたせいとか、身体が冷えてしまった。やっぱり、かき氷は太陽の下で食べるに限る。

「むーぎーぎー」

俺が思わず足踏みをして体を温めていると、紬の鳴き声が聞こえた。見ると、開けた段ボール箱を前にして、なにやら唸っていた。

「紬、どうしたの?」

「朝にトンヤさんが商品を置いていったらしく、アイさんにお店に並べるよう頼まれているのですが……」

「トンヤさん……ああ、問屋さんか。どれどれ」

紬の横に立って、一緒に段ボール箱を覗き込む。中には見慣れたものから新商品っぽいものまで、様々な駄菓子詰まっていた。

「これを全部並べるんですか?」

「そうですね。商品をいかにきれいに並べるかも、看板娘のギリョーのひとつらしいので」

夏海ちゃんも反対側にやって来て、同じように段ボールを覗き込んでいた。量はないのだけど細々としたものが多くて、並べるのが大変そうだった。

「紬、俺たちも品物並べるの手伝うよ」

「い、良いんでしょうか?」

「いいよいいよ。どうせ暇だし。夏海ちゃんも良いよね?」

「はい! お手伝いします!」

「え、羽依里たちも手伝ってくれるの?」

話を聞いていた鴎が、持っていた段ボールを地面に置きながら、嬉しそうにそう言っていた。

「この段ボールもそうなんだけど。いいの?」

「ああ。乗り掛かった舟だし、手伝うよ」

そう言って、段ボールの中から適当な駄菓子を手に取る。

すこんぶにうめガム、ガリコキヤラメルにフライデポテト。まずはこの辺りの見慣れた商品から並べてしまおう。自慢じゃないけど、鴎や紬よりかは商品位置を把握しているつもりだ。駄菓子屋にはかなり通っているし。

「よし、こんなもんかな」

四人で手分けすれば早いもので、15分もしないうちに商品を並べ終わった。

そして段ボール箱の中には、置き場所がわからない新商品だけが残されていた。

パリングルスのヒーコー味に、パリンキーの牛タン弁当味。キワモノっぽいけど、どんな味か気になる。

「鳴、これって試食用とかないのか？」

「え、ないけど」

「……じゃあ、俺が買うからさ。皆で食べてみない？」

「本当ですか？ いいですねー！」

夏海ちゃんも元気な声で賛同してくれた。やっぱり、少なからず新商品が気になっていたみたいだ。

「うんうん。私たちもちょうど休憩したかったんだよー」

「そうですね！ タカハラさん、フトツパラです！」

鳴と紬もニコニコ顔で寄ってきたので、ひとまずパリンキーとパリングルスの代金を支払って、皆で食べてみることにした。

「まずはパリングルスから試してみよう」

適当にティッシュを広げて、その上にパリングルスを出す。なんとも言えない香りが広がった。

「すごいヒーヒーのにおいがあるんだけど」

「でも、フレーバーの表記はヒーコー味になっていたぞ。誤植かな」

「どうなのかな。ヒーコー味って何だろうね」

「わからない」

とりあえず、食べてみよう。いくらなんでも身体に悪いものは入っていないだろう。美味しいかどうかはわからないけど。

四人同時にヒーコー味のパリングルスを口に運ぶ。そして、同時に首を傾げた。

「むぎゅ……？ うまく表現できない味です……」

「なんでかな。私は無性にヒーコーをラッパ飲みしたいっ……！」

「俺は急に自然現象に論理を問いたくなってきた……！」

「ヒーコーチャーハン……！」

「むぎゅ！ 皆さん、しつかりしてください！」

直後、紬以外の三人が意味の分からない衝動に駆られていた。紬はやっぱりパリングルスを食べ慣れている分、耐性があるのだろうか。

「やめよう。ストップ。これは危険な食べ物だ」

本能がそう告げていた。俺は素早くヒーコー味のパリングルスに蓋をすると、近くにあったゴミ箱の中に放り込んだ。

「つ、次はこのパリンキーを試してみよう！」

先のパリングルスの悪夢を消し去るべく、鴎がパリンキーの封を切る。今度は牛タン弁当味だった。

「いただきますー！」

これまた四人で同時に口に運ぶ。うん。牛タンとレモンの風味が口の中いっぱい広がる。これは美味しい。

「美味しいけど……これ、牛タン味じゃダメだったのかな。なんで牛タン弁当味なんだろう」

気に入っただらうか。鴎は次々とパリンキーを口の中に放り込みながら、そんなことを言っていた。どうして弁当味なのか、確かに気にはなるけど。

「実はこのパリンキーにも一癖あって、食べ過ぎると変な能力に目覚めたりしてな」

「うぐっ、妙なこと言わないでよ。オカルト好きな羽依里が言うのと、妙に説得力あるし」

「ごめんごめん。冗談だよ」

「笑えない冗談はやめてほしいっすよー」

なんか鴎の口調が変わっているような気がする。気のせいだよな。

新商品のチェックも終わり、そろそろ帰ろうかと思っていた時、アイスクリームストッカーが目に入った。

「そうだ鴎。スイカバー貰える？」

「え、スイカバー？」

「うん。今日の卓球大会の優勝賞品に、しろはに渡そうと思って」
「わかった。ちよつと待っててね！」

カウンターに座っていた鴎が立ち上がって、アイスクリームストッカーを覗き込む。

「……新発売されたっぽい、メロンバーとスイカバーのダブルソードセットもあるけど？」

「いや、普通のスイカバーでいいよ」

何がソードなのかよくわからないけど、今回は無難にスイカバー単品にしておこう。メロンはさつき食べたし。

「えーっと、これだね！ はい、100万円だよ！」

見慣れたスイカバーを持ってきてくれた鴎に100円を渡し、商品を受け取る。

「それじゃ、そろそろ帰るよ。かき氷、ごちそうさま」

「ごちそうさまでした！ お二人とも、店番頑張ってくださいね！」

「うん、ありがとう！」

「マイダーリン！」

笑顔の二人に見送られながら、俺と夏海ちゃんは駄菓子屋を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

途中、再び雨脚が強くなって、小走りになって帰宅した。どうも雨だと調子が狂う。早く晴れないかな。

加藤家に戻り、買ったスイカバーを冷凍庫に入れた後は、また手持ち無沙汰になってしまった。

結局、居間でジャイアントプリッツンを食べながらぼーっとテレビを見ている夏海ちゃんの隣で横になり、自室から持ってきた雑誌を眺めていた。

「ボクのこと、忘れてください」

音声だけ聞いていたけど、何やらドラマをやっているみたいだ。

「なんのドラマ見てるの？」

俺は雑誌から目を離し、体を起こしながら夏海ちゃんに話しかける。

「はい。冬の街で7年ぶりに再会した男女のお話です！」

夏海ちゃんも女の子だし、そういうトレンドドラマに興味があるんだろうか。

そう思いながら、なんとなく画面の方に視線を移すと……どうも昔のドラマの再放送みたいだ。表現がいろいろと古い。うぐうつてなんでしょう。

「……なんだか、たい焼きが食べたくなるドラマですね」

「本当だね」

そして、作中の随所にたい焼きが出てきた。どうもヒロインがたい焼きが好きという設定らしい。それにしても、出過ぎじゃないだろうか。

そのドラマが終わった後、夏海ちゃんは絵日記を書くと言って部屋に戻っていった。ついていくわけにもいかず、俺も自分の部屋で過ごすことにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……鏡子さん、ハサミないですか？」

「ハサミ？ あるとは思うけど……」

「……できたら、大きいのが良いんです」

「ちよつと待ってね。確かこつちに……」

自分の部屋で夢うつつになっていると、居間の方から、夏海ちゃんと鏡子さんのやりとりが聞こえてきた。鏡子さん、帰ってきたのかな。

「……それじゃ、ちよつと出かけてきますね」

「うん。お願いね」

うーん……夏海ちゃん、天気も悪いのに、またどこかに出かけるのかな……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……あれ」

目が覚めると、部屋はかなり薄暗くなっていた。

「しまった。気を抜いたら寝ちゃったのか」

読んでいた雑誌はいつの間にか俺の下敷きになって、しわくちゃになつていた。散々読んだし、もういいけど。

俺は身体を起こし、思いつきり伸びをする。パキパキと首や背中が鳴った。

昨夜まともに寝てなかつたうえに、午前中は皆と卓球。ここにきて、疲れが出ちゃったんだらうか。

「やけに暗いけど、今何時だらう」

部屋の時計を見てみると、ちょうど18時だった。外が暗いのは、雨が降っていることもあるんだらう。

そんなことを考えながら、廊下を抜けて居間に向かう。その居間にも明かりはついておらず、誰も居なかった。

「鏡子さんはまた寄合だとしても……夏海ちゃんはどうしたんだらう」

……もしかして、部屋で寝てる俺を見て、一人で晩ごはんを食べに行つたのかもしれない。

そう思いながら玄関の傘立てを見てみると、夏海ちゃんが使ってる赤い傘がない。やっぱり、先にしろは食堂に出かけたみたいだ。

「それなら、俺も食堂に行こうかな」

俺も自分の傘を持って、夜の帳が下り始めた道を食堂へ向かって歩いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろはー」

「あ、いらっしやい」

食堂に顔を出すと、笑顔のしろはが出迎えてくれた。

「……あれ？ 夏海ちゃん来てない？」

「ううん、来てないけど……？」

「おかしいな。てつきり食堂に来てるものと思ったんだけど」

「どうかしたの？」

「いや、昼寝から起きたら、家に誰も居なくてさ。鏡子さんは寄合で、

夏海ちゃんは食堂だろうって思ったんだけど」

「うーん……どこかで行き違いになってるのかもしれないし、そのうち来るかもしれないね。待つてみる？」

「うん。そうするよ。夏海ちゃんの傘もなかったし、出かけてはいると思うんだけど。外も暗くなってきたから、どこかで追い抜いちやつたのかも」

そう言いながら、カウンター席に腰を下ろす。夏海ちゃんも来るかもしれないし、セルフの水は二つ用意しておいた。

「どうする？ 羽依里、先に食べてる？」

「いや、夏海ちゃんが来るまで待つよ」

「そう……じゃあ、メニューだけ決めておいたら？」

しろはがそう言って、メニュー表を手渡してくれた。それを見た瞬間、俺のお腹の虫が盛大な音を立てた。

「うう、恥ずかしい……」

「やっぱり、先に食べてたら？ 夏海ちゃんもあの性格だし、気にしないと思うし」

「そ、そうだよな……それじゃしろは、今日の日替わりは何？」

「……ごめん。今日は日替わりはできないの。漁師さんから魚が仕入

れられなくて」

「あ、日替わりも駄目なんだ」

「うん。台風が過ぎても、すぐには海に出られないんだって。魚も少ないしね」

やっぱり、台風の波で海の中もかき回されてるし、魚もどこか安全なところへ逃げちゃうんだろうか。

「おじーちゃんも仕事にならないから、今日は早めに寝るって言うってたよ」

「……確か、あの人って寝るの滅茶苦茶早かったよな」

「うん。もう寝てるんじゃないかな。明日は朝3時に起きて、海の様子を見てみるって言うってたし」

「漁師さんの朝は早いっていうけど、さすが本職はすごい時間に起きるんだな」

「それでも、明日は遅い方なんだって……ところで羽依里、料理決まった？」

「……それじゃ、親子丼A頼める？」

「うん。それならすぐにできるから、待っててね」

そう言っ、注文を受けたしろはが調理に取りかかる。すぐに食材を刻む、心地いい音が聞こえてきた。

「そうだ。しろは、今日の卓球大会の賞品なんだけど」

「え？」

「さっそく駄菓子屋でスイカバーを買ってきて、加藤家の冷凍庫に入ってるから。良い時に取りに来て」

「……もしかして、本当にスイカバー買ってきてくれたの？」

「そうだけど？」

「もう、正直すぎるよ……気にしなくていいのに」

卵を割る音がして、黄身と白身をかき混ぜるリズムミカルな音がする。続いて、しょうゆと出汁のいい匂いが漂ってきた。

「……それが羽依里の良い所なんだけどね」

「え？」

「……なんでもない」

しろはが小さな声で何か言っていたけど、調理の音にかき消されて、聞き取れなかった。

「はい、おまちどうさま」

ほどなくして、俺の前に親子丼が提供される。うん。この香りだけで、すごく美味しそうだ。

「それじゃ、いただきます」

きちんと手を合わせてから、できたての親子丼に箸を伸ばす。

「うん、美味しい」

卵はふわふわとろとろで、半熟具合が絶妙だ。でも具材の鶏肉とタマネギも負けてなく、噛むごとに旨味と甘味が溢れだす。

「そ、そんな慌てて食べなくても」

「いや、本当に美味しくてさ」

「ほら、右のほっぺ、ごはん粒ついてるし」

「え、本当？　しろは、取ってくれ」

「取らないし！」

……至って自然に言ったつもりだったんだけど、しろはは顔を赤くして拒否していた。

「……美味しかった。ごちそうさま」

「……お粗末さまでした」

……ごはん粒は取ってもらえなかったけど、親子丼は本当に美味しかった。

「それにしても……夏海ちゃん、来ないね」

俺に食後のお茶を淹れてくれながら、しろはがそう呟いた……その時。

『――緊急放送。緊急放送』

「えっ、何？」

唐突に島内放送が流れた。緊急放送って何だろう。

俺としろはは慌てて表に出て、放送に耳を傾ける。

『島内で土砂崩れが発生。家屋に土砂が侵入した模様。場所は――』

……その後に続いた言葉に、俺は耳を疑った。確かその場所は……。

「……私の家」

いや、そんな、まさか。

「……おじーちゃんー！」

放送を聞いたしろはは顔面蒼白といった様子で、扉の近くに置かれていた懐中電灯を掴むと、そのまま雨の中へ飛び出していった。

「しろはー！」

俺も少し遅れて、その後を追いかける。雨脚は強いけど、傘なんて差している場合じゃない。

すっかり日が落ちた闇の中で、懐中電灯の明かりだけが、しろはの位置を教えてくれる。速い。既にかなり先の方を走っている。

「しろは――！」

俺も全力で追いかけるけど、足元は雨でぬかるんでいて、時々転びそうになる始末だ。逆にしろはとの距離が開いていく。

思えば、しろはは毎日この暗い道を家まで歩いて帰っているんだし、慣れているのは当然だった。

「くそっ、追いつけない」

俺は走りながらも、必死に頭の中の悪い予感を消し去ろうとしていた。

……家屋に土砂が入り込んだって言っても、他人の家……いや、無人の小屋かもしれない。

倉庫とか、納屋とか、何かしら別の……。

……でも、あの辺りには建物が一つしかない事を、俺は知っている。……だめだ。嫌な予感しかしない。

そんな不安な気持ちを消し去ろうと、俺も必死にしろはを追いかけた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

田舎道を全力で駆け抜け、川沿いを上流へ向かって進み、途中から逸れて山を登る。

……その先に、しろはの家があった。

既に役場の関係者だろうか、カツパに身を包んだ人が何人かいて、トランシーバーでどこかと慌ただしく連絡を取っていた。

そして、その人たちが懐中電灯の光を当てながら見つめる先……家の一部が、土砂に埋まっていた。

それを見ながら、呆然と立ち尽くすしろはに声をかける。

「しろは、あの辺って」

「……おじーちゃんの部屋！」

俺の言葉で、自分がやるべきことを思い出したかのように、しろはは土砂の山に駆け寄り……素手で土砂を掘り始める。

「……また誰かなくなるのは耐えられない。また失うのは嫌」

……もしかして、両親の時のことを思い出しているんだろうか。

「もう、誰かがいなくなるのは嫌……！」

しろははうわごとのようにそう言いながら、必死の形相で泥をかき分ける。しろはの綺麗な指先が泥に汚れていく。

「くそっ……しろは、俺も手伝うからな！」

俺も同じように土砂に立ち向かう。

もし、ここにしろはのじーさんが生き埋めになってしまっているのなら、一刻の猶予もない。

でも、大量の水分を含んだ土砂は重く、かきわけてもかきわけても流れ落ちてくる。中には拳くらいの大きさの石も混ざっていて、いくら頑張っても掘り進んでいる気がしない。

空しく時が過ぎ去り、焦りと不安が俺の心を支配し始めた、その時……。

「……しろはー！」

俺たちの背後から、聴き慣れた野太い声がした。

二人同時に振り返ると、そこにしろはのじーさんと、夏海ちゃんが立っていた。

「え、おじー、ちゃん……？」

しろはは驚愕の表情を浮かべたまま、ふらふらと立ち上がる。

「おじーちゃんー！」

そしてそのまま、じーさんの胸に飛び込むようにして抱きつき、人目をはばからずにむせび泣く。

……良かった。じーさん、無事だったんだ。

最悪の事態が回避されていたことを知り、俺も一気に脱力し、その場にへたり込んでしまう。

「……鳴瀬翁、御無事でしたか。状況が状況でしたし、てっきり……」
役所の人たちも、じーさんの無事な姿を確認して安堵の声をあげていた。

「……一度床に就いたが、夏海に起こされてな」

じーさんは少し困ったような顔でしろはの頭を撫でながら、隣の夏海ちゃんに視線を送る。

「はい！ 港を歩いていたら、こぼとさんの船の様子がおかしい気がしたので、慌てて呼びに行っただんです！」

そういう夏海ちゃんは傘も差しておらず、全身ずぶ濡れだった。足元のスニーカーも泥だらけだし。余程急いだんだろうか。

「その夏海の言葉に半信半疑のまま、港の方へ行ってみれば、船を係留するロープが切れかけていてな。船が流される寸前だった」

「この台風の波のせいですか？ 危なかったですね」

「いや、波の力に負けたのではない。まるで人の手で切られたような風でな。誰かは知らんが、とんだいたずら者だ」

誰かが意図的にロープを切ったということだろうか。でも、誰がそんなことを。

「その後、緊急放送を聞いて家に戻ってみれば、この有様だ。結果、命拾いをしたようだが」

じーさんはそこまで言っつて、小さくため息をつく。悲しげなその視線は、土砂に埋まってしまった部屋の方へ向いていた。よく見ると土砂の中に布団の切れ端のようなものも見える。あそこで寝ていたら、間違いなく巻き込まれていただろう。

「何にしても、無事で良かったですよ。夏海ちゃん、お手柄だね」

「えへへ。良かったです……」

夏海ちゃんも雨と泥にまみれた顔で、安心したように笑っていた。

それからしばらくして、放送を聞いたらしい島民が続々と集まってきた。中には鏡子さんの姿も見える。

そんな中で、じーさんは恥ずかしそうにしながらも、腕の中のしろはが泣き止むまでずっと抱きしめてあげていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しろははひとしきり泣いて、どうやら落ち着いたらしい。そのしろはと、じーさんの二人を連れ添って、加藤家に帰ってきた。

鳴瀬の家はあの状況だし、鏡子さんの提案でしばらくの間、二人には加藤家に住んでもらおうという話になったのだ。

「……すまん。しばらく世話になる」

「お世話になります」

そう言いながら、しろはとじーさんは俺たちに頭を下げる。二次災害の危険もあるし、二人の手荷物は必要最低限のものだけだった。

「しろはちゃんにはいつもお世話になっていますし、困ったときはお

互い様ですよ。自分の家だと思って、くつろいでください」

そんな二人を、鏡子さんは笑顔で迎え入れてくれていた。

「えっと、そんなわけだから、しばらくの間よろしくね。羽依里」

「あ、ああ。こちらこそ」

しろはからそう言われると、内心ほんのちよつとだけ嬉しかった。状況が状況だけに、かなり不謹慎とは思うけど、まさか一つ屋根の下で暮らすことになるなんて。

「……………ほん」

その心情を見透かされたのか、わざとらしく咳き込んだジーさんに睨まれた。うう、怖い。

「それじゃ、今日はもう夜も遅いですし、お風呂に入って、ゆつくりと休まれてください」

「ああ、そうさせてもらおうとしよう」

「ありがとうございます」

「後、しろはちゃんは夏海ちゃんの部屋に泊めてあげて。いいかな?」

「はい! しろはさん、よろしくお願いします!」

夏海ちゃんは笑顔で了承していた。あれ? この流れつてももしかして。

「鳴瀬さんは羽依里君の部屋でお願いします。布団は後で持ってきてますから」

「何から何まですまん」

やっぱりこういう展開になってしまった。家主である鏡子さんが決めたことだし、逆らえないけど。

入浴を済ませて、部屋に布団を敷いたころ、土砂崩れの続報が放送されていた。

どうやら島民に向けた説明みたいで、被害に遭ったのは家の一部だけで、人的被害はなし。明日から復旧作業を行うといった内容だった。

なにより、放送しているのみき自身が凄く安心している様子が言葉

の端々から伝わってきた。

「明日は、復旧作業を手伝わないと……」

でも本当に、大事にならなくて良かったと思う。

何故か、じーさんに何かあったら、しろはまでいなくなってしまう
そうなの、嫌な予感がしていたから。

「……そんな、まさかな」

いびきをかいて寝ているじーさんを横目に、窓の外を見る。気がつ
けば雨はすっかり止んでいて、星空が見えていた。

明日はようやくやく晴れそうだった。

第四十話・完

第四十一話 8月25日

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

今日も夏海ちゃんの声で起こされる。

……けど、今日はやけに眠かった。

「ごめん夏海ちゃん、あと5分……」

「え、ダメですよ！ 起きてくださーい！」

頭から布団を被りなおすと、ゆさゆさと身体を揺すられる。地震、だおー。

「……羽依里、相変わらず夏海ちゃんに起こしてもらってるんだ」

「え？」

透き通った声に、思わず布団から顔を出す。目の前の布団を掴む夏海ちゃんの隣に、しろはが立っていて、ジト目で俺を見ていた。

……そうだった。昨日からしろはもこの家で暮らすことになったんだった。

「えーつと、二人とも、おはよう」

「おはようございます」

「おはよう。それにしても、羽依里も寝起き悪いんだ。これじゃ夏海ちゃん、いつも苦労してるんだね」

「きよ、今日はたまたまだよ。いつもは、もつとすんなり起きるから」
そう言いながら立ち上がって、いそいそと布団をたたむ。昨夜はしろはのじーさんの寝言で何度も目が覚めてしまったし、眠くてたまらない。

『げんげん！』とか『甘いわ小僧！』とか言ってた気がする。どんな夢を見てたんだろう。

そんなことを考えながら、隣のじーさんの寝床を見ると、すでに布団は畳まれていて、本人の姿はなかった。

「あれ、じーさんはもう起きてるんだ？」

「それが、こぼとさんは朝の4時くらいから漁に行ってるみたいですよ」
「え、漁に!？」

「うん。昨日まで海が荒れてたから、まずは軽く潮の様子を見て来るんだって。朝ごはんまでには帰るって言ってたよ」

二人がそう教えてくれた。昨日あんなことがあったっていうのに、本当に元気な人だ。

「それより、今日からラジオ体操が再開されるらしいし、早く準備しないと遅れるよ?」

「あ、そうなのか」

しろはに言われて窓の外を見てみると、快晴だった。耳をすましてみれば、久しぶりに蝉の声も聞こえる。ようやくいつもの鳥白島が戻ってきた気がした。

「じゃあ、準備するから二人は玄関で待ってて」

「うん」

「はい! 急いでくださいね!」

二人はそう言いながら、ゆっくりとふすまを閉めて、俺の部屋から出て行った。

「……そう言えば夏海ちゃん、いつも朝ごはんってどうしてるの?」

準備をしようと思って冷蔵庫を見たら、梅干ししか入ってないんだけど」

「いつもはですね、ラジオ体操でもらったログボでチャーハンを作ります」

「もしかしてって思ってたけど、やっぱり朝からチャーハンなんだね」

「はい! チャーハンは万能ですから!」

「そこは否定しないけど……」

そんなやりとりをしながら、二人の声が遠ざかっていった。夏海ちゃんのチャーハン万能説を否定しないところが、実にしろはらしい。

「さて、俺も準備しないと」

久々のラジオ体操に遅刻するわけにはいかない。俺も手早く準備に取り掛かることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

身支度を整えた後、玄関先で二人と合流して神社へと向かった。

それにしても、しろはがラジオ体操に参加するなんて珍しいな……とか思っていたら、すぐにその理由がわかった。

「おお、鳴瀬さんとこの。この度は災難だったねえ」

「しろはちゃん、元気だしなよ」

「できることがあつたら、何でも言つてね」

「家の片づけ、手伝いに行くからな！」

神社へと向かう道すがら、会う人会う人全員がしろはを心配して声をかけてくれていた。皆、昨日の土砂崩れの件を知っていて、励ましてくれているみたいだ。

「……うん。うん。そこまでひどいことにはなつてないから、大丈夫」
そしてしろははその都度、丁寧に説明をしていた。どうやら、島の皆に余計な心配をかけないために、きちんと話をしておきたかったんだと思う。

その中で、食堂の話も出ていた。それによると、家の方がある程度落ち着くまで食堂はお休みらしい。こればかりはしょうがないと思う。

「こんなので悪いけど、お見舞いだよ」

「うちのスイカでも食べて、元気出しておくれ」

また、しろはを心配してくれる人の中には、お見舞いの品として大量の野菜や果物をくれる人もいた。気がつけば、俺はすっかり荷物持ちになつていた。

「しろは、大変だったわねー」

「困っていることはないですか？ なんでも手伝いますよ」
「そうどうぞ。なんでも言ってくれ」

その状況は神社に到着しても変わらず、境内に着くや否や、しろは空門姉妹や天善といった島の仲間たちに取り囲まれていた。

島内放送で詳細が報じられただけあって、本当に島の隅々まで土砂崩れの話が知れ渡っているみたいだ。

「お前たち、心配なのはわかるが、そんな一度に話しかけるんじゃない。しろはも困っているだろう」

その時、のみきが石段を登って神社にやってきた。

「しろは、すでに鳴瀬翁には話を通してあるんだが、役所が中心となつて、今日の9時から鳴瀬家の片付けを始めようと思うんだ」

「わかった。9時からだね」

のみきがそうスケジュールを伝えていた。やっぱりこういう作業って、役所が中心になってやってくれるのか。

「のみき、その作業、俺たちも手伝わせてもらえないか？」

それに合わせて、俺と夏海ちゃんも参加を申し出る。

「それは助かる。手伝ってくれる人数は、多ければ多いほどいいからな」

のみきはそう言いながら、うんうんと頷いてくれていた。

「二人とも、ありがとう」

しろははそんな俺たちにお礼を言いながら、柔らかい笑顔を向けてくれる。手伝うのは当然なんだけど、面と向かってお礼を言われると、なんだか小恥ずかしい。

「そうよねー。しろはも羽依里が傍で手伝ってくれた方が、嬉しいもんねー？」

「全くです。しろはちゃんはこんな時まで羽依里さんといちゃらぶしたいんですね」

「そ、そんなんじゃないしー！」

そんな空気を悟ってか、空門姉妹がさかさず茶化しを入れてきた。俺としろはも声がハモってしまって、恥ずかしさが増す。

「茶化すのも良いが、少年団も全員手伝いに来るようになる」

「もちろんですよ」

「任せといてー」

「おうー」

続くのみきの言葉を、少年団の皆も快諾していた。こういう時の皆は本当に頼もしい。

そして今この場にはいないけど、紬や静久、鷗も声をかけたらきつと手伝ってくれるはずだ。後で連絡しておこう。

「よーしお前らー！ 数日振りだなー！ 今日もラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第四の体操！ 三半規管の鍛錬だ！ ぐるぐるぐる〜！」

「ぐるぐるぐる〜！」

「うう、久しぶりにやると身体が感覚を忘れていいのか、気持ち悪くなりますね……」

藍が頭を押さえていた。俺と夏海ちゃんは昨日も自主練をしたはずなのに、気持ちが悪い。身体感覚云々の問題じゃない気がする。

「よーし、今日のラジオ体操はここまでー！」

「二ありがとうございました——！」

やがて久しぶりのラジオ体操が終了し、スタンプとログボを受け取る。

「そうだ。今日は台風で中止になった二日分のログボも一緒に配るかなー！」

ラジオ体操大好きさんはそう言って、複数の段ボールから次々とログボを取り出す。

そして渡されたログボは、軍手、スポーツドリンク、塩飴だった。あ

れっ、この三点セットでもしかして。

「皆、今日は宿題が終わったら、鳴瀬さんところに手伝いに行くんだぞー！」

「はーい！」

ラジオ体操大好きさんがそう呼びかけると、その場にいた子供たち全員が元気に返事をしてくれていた。すごい結束力だった。

「ねえ……しろは。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「え、なに？」

少し時間が経ち、境内の人が掃けてきた頃、蒼が小声でしろはに質問していた。

「こんな時になんだけど……今、しろはって羽依里のところに居候してるの……よ、ね？」

「そ、そうだけど」

「へー。噂には聞いてたけど、本当だったのか」

「ほう。正式な混合ダブルス結成前の事前合宿というわけか」

しろはの肯定を受けて、良一や天善たちも寄ってきた。なんて地獄耳だ。

「うんうん。やっぱり、彼氏さんと一緒にいると心も休まるでしょう。いいと思いますよ」

藍が何か悟ったように頷いていた。なんだろう、藍にそう言われると、素直に喜べない。

「そ、そうよね。止むない事情があるとは言え、彼氏と一つ屋根の下。これってやっぱり、夜の営みとか……」

その隣で、蒼がマツハでピンクになっていた。ちよつと蒼、その表現やめて。

「……さあ、しろはに夏海ちゃん、そろそろ帰ろうか！」

会話の雲行きが怪しくなってきたし、ここは逃げの一手に限る。

俺は大量の荷物を急いで持つと、しろはたちに声をかけて、足早に神社を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、三人とも、おかえりなさい」

「ただ今戻りました」

加藤家に帰宅すると、出掛けの際には居なかったはずの鏡子さんと
じーさんがいた。二人とも帰ってきていたみたいだ。

「鳴瀬さんがね、たくさんの魚を持って帰ってきてくれたから、冷蔵庫
に入れておいたよ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「気にするな。どうせ市場に出せない、あまりものだ」

お礼を言ってみるけど、しろはのじーさんはそつなく返して、すぐ
にテレビに視線を戻してしまった。

つられてテレビを見ると、先日と同じように台風被害のニュース
だった。どうやら、本土の方も大変そうだった。

「それにしても、羽依里君たちも荷物いっぱいだね」

「えっと、三日分のログボと……訳あって、近所の人からもらった野菜
とかです」

俺は鏡子さんに、そう内訳を説明する。一人一人からもらった量は
少ないんだけど、まとめてみると結構な量だった。

「これだけあれば、しばらく野菜には困らなそう」

「そうだよな」

袋の一つを覗き込みながら、しろはが笑顔で言っていた。こういう
時の善意は本当にありがたい。

「それじゃ羽依里、その袋持って台所まで来て。冷蔵庫にしまってお
かなきゃ」

「ああ、わかった」

直後、しろはにそう言われて、俺は袋を持って台所へと向かう。

台所につくと、しろはは慣れた手つきで野菜を選別して、冷蔵庫へ

としまう。

ものの数分で、冷蔵庫の中は食材でいっぱいになった。俺は未だかつて、これだけ中身の詰まった加藤家の冷蔵庫を見たことがない。

「それじゃ、朝ごはん作るね。羽依里も居間で待っていいよ」

いつもは夏海ちゃんが着けているフリフリなエプロンを着けながら、しろはがそう言う。

料理となると、俺の出る幕は全くないので、大人しく居間に戻ることにした。

その後、しろはのじーさん、鏡子さん、俺、夏海ちゃんの四人で居間に座って、しろはの料理ができるのを待っていた。

普段なら俺と夏海ちゃんだけで使っている座卓も、これだけの人数が座ると狭く感じる。特に、しろはのじーさんの威圧感がすごい。

「ごぼとさん、今日は何の魚が釣れたんですか？」

「……いつもと変わらん。カマスに、アジ、タイだな」

そんな中、夏海ちゃんはじーさんの向かいに座って、色々と質問をしていた。こういう時、夏海ちゃんの人懐っこい性格は本当に助かる。俺や鏡子さんだけじゃ、絶対に場が持たなかったと思うし。

「……おまちどうさま」

しばらくして、しろはがお盆に朝ごはん乗せて、居間にやってきた。「おお……」

今朝の献立は炊きたてのごはんに、ジャガイモとシイタケの入った味噌汁、そして焼き魚だった。至ってポピュラーな朝食だけど、普段からチャーハンばかり食べている俺にしてみれば、どれも魅力的だった。

「……ほう。カマスは塩焼きにしたか」

じーさんはというと、出された焼き魚を感心した風で見ている。

「カマスですか？」

「ああ。本来、カマスは秋に獲れるが、これは別名アオカマスと言つてな。少し時期が早い」

「そうなんですな」

「この辺りの海で獲れるのは珍しいが、今は大して脂も乗っていないからな。こういう風に、塩焼きにするのがいい」

興味津々の夏海ちゃんに対し、じーさんは少し嬉しそうに説明をしていた。さすが漁師の知識だった。しろはが持っている魚の知識は、やっぱりじーさん譲りらしい。

「それじゃあ、冷めないうちにめしあがれ」

「はい！ いただきまーす！」

しろはが食卓についたところで、皆で挨拶をして、朝食を食べ始める。

俺はまず、味噌汁を一口すすってみた。

……うん。ジャガイモの甘味が出ていて美味しい。しっかりと旨味を吸ったシイタケも絶品だ。

「ごぼとさん、このカマス、美味しいです！」

「……そうか」

一方の夏海ちゃんは、さつそくカマスの塩焼きを口にして、満面の笑みだった。

そしてやっぱり、じーさんもどこか嬉しそうだ。

せっかくだし、俺もカマスを食べてみよう。

「うん、美味しい」

身もホクホクだし、塩加減もちょうど良い。これは、ごはんがいくらでも食べられるやつだった。

朝食を済ませた後、俺たちは片付け作業へ向けて準備を始めた。

ログボでもらったスポーツドリンクだけだと不安があるので、水を入れた水筒も用意して、軍手、タオルで装備を固める。

「夏海ちゃん、頑張ろうね」

「はい！ 頑張りますよー！」

夏海ちゃんは頭にタオルをバンダナみたいに巻いて、気合い十分だった。

「夏海、タオルでなく、帽子を被れ。その方が日避けになる」

「は、はい！」

直後、じーさんにそう言われ、夏海ちゃんは慌てて部屋に帽子を取りに走る。

「鏡子さん、スコップとか、土を入れる砂袋は向こうに用意されてるんですか？」

「あると思うよ。その辺りも青年団が用意してくれてるはずだし」

朝から役所に行っていたらしい鏡子さんに質問すると、そう答えが返ってきた。

「……羽依里、お前達がいちいちそんなことを気にする必要はない」

「え？」

「こういう時、あれやこれや考えるのは、大人の仕事だ」

じーさんがそう言いながら、俺にも帽子を投げて寄こした。これを被れという意味だろうか。

「お前達は、できることを手伝ってくれるだけで良い。それだけで、十分助かる」

「そうそう。羽依里君たちが色々考える必要はないんだよ」

鏡子さんが笑顔でそう続けてくれる。大人二人が凄く頼もしく見えた。

「お待たせしましたー」

「おまたせ」

その時、夏海ちゃんと一緒にしろはもやってきた。着替えを終えたらしいしろはは、髪を上の方に纏めて、夏海ちゃんとお揃いの麦わら帽子を被っていた。

「これなら、いくら汚れてもまた洗えばいいから」

「はいー」

全員の準備が終わったのを確認して、俺たちは鳴瀬家へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

鳴瀬家に到着し、改めて状況を見てみる。土砂が流れ込んでいたのは本当に鳴瀬家の一部だけだった。土砂崩れの規模としては、かなり小さいもののように思う。

昨日は暗かったし、気が動転していたこともあって、凄い被害が出ていると思っただけだ。

そしてその場所には、役所の職員や青年団の人、少年団の皆、港でよく見る漁師さんたちに、ラジオ体操に来ていた子供たち……本当にたくさん島民が手伝いに来てくれた。

「おお、時間通りだな」

その人数に圧倒されていると、その中からのみきがこっちにやってきた。つられて、他の人たちも俺たちの周囲に集まってくる。

「その……皆、すまん」

直後、じーさんがそう言っただけで頭を下げた。よもや、ここまで多くの人が集まってくれているとは思っていなかったんだろう。

「皆さん、今日はよろしくお願ひします」

同じようにしろはも頭を下げていた。俺や夏海ちゃんも、つられるように一緒に頭を下げる。

「なーに、こういう時はお互い様ですよ。鳴瀬翁」

「そうそう。皆でやれば、すぐに終わるさ」

「早く安心してもらって、しろはちゃんにはまた食堂を開けてもらわないとねー」

頭の上から、そんな温かい言葉が次々と聞こえてきた。

「……うん。だいじょうぶい」

その時、頭を下げたまま、しろはが俺にしか聞こえないような小さな声でそう言っていた。

「しろは、なにそれ」

「小さいころ、おかーさんがよく言っただけ言葉。言うよね。元気が出

るの」

「そっか。なら、だいじょうぶいだ」

「……うん」

いくら被害が小さいからって、自分の育ってきた家が土砂に埋もれてシヨックを受けない人はいない。思い出の品とか、たくさんあるだろうし。俺がしろはを支えてあげないと。

「少年団の皆、それから子供たち、ちよつと集まってくれ。作業を始める前に話がある」

各々準備をしていると、のみきからそう招集がかかった。言われた通り、皆で彼女の周りに集まる。

「役所の職員と、青年団による話し合いが持たれた結果、私たちの仕事は比較的危険の少ない、庭の土砂の片付けとなった。危険が残る裏山付近での作業は、青年団が担当する」

のみきが真剣な表情で、そう説明していた。恐らく、これが大人が決めた役割配分なんだろう。

「なあのみき、裏山はまだそんなに危険なのか？」

聞きにくい所を、良一が一番に聞いていた。こういう時の彼はごく頼もしい。

「ああ、どうも裏山は二次被害の危険があるらしくてな。専門の業者に来てもらって、防護柵を設置する必要があるそうだ」

それってつまり、また大雨が降ったりしたら崩れる可能性があるってことだよな。

「だが、先の台風で本土の方にもあちこち被害が出ているらしくてな。業者としても、なかなか島までは手が回らないそうだ。防護柵の設置は、早くても数日先になるだろうな」

なるほど、そういう理由もあるのか。なんだかんだで、鳥白島は僻地にあるし。こればかりは致し方ない。

「後、この土砂についてだが……」

更にものみきから、土砂が流れ込んだ経緯も説明がされた。

それによると、崩れた土砂は裏山に面した窓を破って屋内に侵入し、じーさんの寝室を中心に建物の中を通り抜け、庭に達したらしい。「つまり、土砂には割れたガラスが混ざっているかもしれない。土砂を触るときは、軍手をしていても必ずスコップを使うようにな」のみきはそう続けた。全員スコップや移植ごてを持っているし、土砂を直接触ることはないと思うけど、頭の隅に置いておこう。「だが、中には良い話もあるぞ。色々調べてもらった結果、幸いなことに鳴瀬家の電気や水道、電話といったライフラインは問題なく使えるらしい」

「おお、そうなのか」

確かに、これは不幸中の幸いだ。汚れを洗い流したりするのに近くの水道を使えるというのは、本当にありがたい話だし。

「また、役所の方で無料の給水所を用意してある。喉が渴いたら、好きなだけ利用してくれ」

のみきが指差す方を見ると、鳴瀬家の母屋から少し離れた場所に白いテントが立てられていて、そこにやかんや大きめのピッチャーが用意されていた。

スポーツドリンクに加えて自前の水筒も持ってきたけど、どうやら水分に関してはそこまで神経質になる必要はなさそうだ。

「それでもなお、暑さにやられそうな者がいたら言え。必要と判断すれば、ハイドログラディエーター改による水弾をお見舞いしてやるぞ」

最後に、のみきがそう笑顔で言って締めくくっていた。最低限の注意は必要だが、余計なことは考えずに作業に集中しよう、という意味が込められているのかもしれない。

「よし皆、それじゃあ始めようぜー」

「おーーー！」

良一がスコップを片手にそう号令をかける。それを合図に、皆一斉に作業に取り掛かる。

全員で一列に並び、庭に溢れる土砂をローラー作戦で砂袋に詰めていく。できるだけ列を乱さないように、一番作業速度の遅い人に合わせながら、ゆっくりと前進する。

満杯になった砂袋は口を結んで後ろに置いておき、ある程度数が貯まったら皆で一斉に下の道まで運ぶ。

下の道にはトラックが何台も待機してくれていて、そこからはピストン輸送でどんどん港の方へ砂袋を運び出してくれる手はずになっている。

そして土砂を見た感じ、先に青年団の方で大きながれきは取り除いておいてくれたらしい。おかげで俺たちは土砂の除去だけに集中することができる。

「よいしょ、よいしょ」

夏海ちゃんとしろは俺の隣で、移植ごてを手にして砂袋に土砂を詰めていた。そしてその袋を一輪車に積むと、せつせと下に運んでいく。

俺も負けじと土砂をスコップで砂袋にすくい入れ、頃合いを見ては良一や天善たちと一緒に下のトラックへと運ぶ。

そんな作業を一時間半ほど繰り返していると、さすがに腰が痛くなってきた。

「……羽依里、少し休んだら？ 頑張りすぎてても身体に悪いよ。」

「いや、まだまだいけるよ」

滴る汗をタオルで拭きながら、水筒の水を飲む。体力には自信があるし、まだ大丈夫だ。

「うむ。しろはちゃんと言う通り、そんなに急いで身がもたんど。ペース配分が重要じゃ」

「ぶひぶひー」

その時、背後から声が出た。

「え、沢田さん!？」

振り返ってみると、作業着姿の沢田さんがウリボウを連れて手伝いに来てくれていた。

「白虎よ、一人だけ抜け駆けは許さんぞ！」

「玄武の危機とあれば、我ら、推参せん！」

その沢田さんに続いて、見るからに逞しいじーさんが二人やってきた。すでに一人はスコップを持ち、もう一人もばんばんに膨れ上がった砂袋を担いでいる。

「……ふん。お前達の助力など必要ないわ」

その三人を見て、しろはのじーさんはにやりと笑みを浮かべていた。そして触発されたのか、土砂の入った砂袋を二つ同時に担ぐ。あのパワー、どこから出てくるんだろう。

「ぷっひ、ぷっひ」

ちなみに、ウリボウは鼻先を器用に使って土砂を砂袋に入れたり、その袋を引っ張って運んでいた。さすが、小さくても野生動物だった。

その後も皆で交代で休みを取りながら、少しずつ作業を進めていく。

「大変そうだから、手伝いに来てやったぞ。これは差し入れだ」

別の声が出したと思ったら、スポーツドリンクの入った段ボールを持った徳田が立っていた。どうやら、彼も手伝いに来てくれたらしい。

「よーし、ガーディアンに続けー！」

「よーいしよー！ よーいしよー！」

「きつとこの庭のどこかに、お宝が埋まってるぞー！」

「……おいおい」

向こうの方では、子供たちが協力して土砂を砂袋に入れてくれたり、一輪車を押してくれていた。男の子がほとんどだけど、中には堀田ちゃんの姿もあった。

「おーい、どんな感じだー？」

「手伝いに来たぞー！」

子供たち以外にも、沢山の大人が入れ代わり立ち代わり手伝いに来てくれた。重機が使えない分、本当に人海戦術だ。鳥白島の島民の団

結力、侮っていたかもしれない。

「ふー」

さらに三十分ほど作業をした後、給水所で冷えた麦茶をもらって小休止する。

ログボのスポーツドリンクや水筒の水は、この暑さのせいで早々になくなってしまうけれど、給水所のおかげでこまめに水分補給することができる。

「……羽依里さん、頑張りすぎてへばってないですか？」

「少し遅くなったけど、手伝いに来たわよー！」

その時、空門姉妹がやってきた。二人とも長い髪をシニヨンにまとめて、頭にはタオルを巻いていた。

「はいこれ。駄菓子屋のおばーちゃんからの差し入れ」

重い音と共に俺の近くの地面に置かれた箱には、タカのマークの栄養ドリンクが詰まっていた。

「一応40本はあるはずなんだけど、足りそうにないわねー」

蒼が周囲を見渡しながら苦笑する。確かに、ぱっと見ただけで50人以上の人間がいると思う。

「さーて、遅れた分を取り戻すわよー」

「しろはちゃん、砂袋を運ぶの手伝いますよ」

着いて早々作業に参加する双子姉妹に続くように、俺も作業に戻る。よし、もうひと踏ん張りしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆さーん、そろそろ一休みしましょー」

そろそろお昼時……という頃になって、たくさんの女性たちがやってきた。

どうやら島の婦人会の皆さんらしく、作業をしている皆のために、わざわざお昼ごはんを用意してきてくれたらしい。

「おにぎりはたくさんあるから、いっぱい食べてね！」

「飲み物は麦茶のほかに、冷たい牛乳もあるわよ！」

……さつきから聞いた事のある声がしていると思ったら、その女性陣の中に紬や静久、鷗の姿があつた。あの三人はどうやら、炊き出しの手伝いをしていていたらしい。

「……ちようどお昼だし、皆さん、少し休憩にしませんか」

青年団の誰かがそう言い、そのままお昼休憩となる。各々が軍手を外し、水道で手や顔を洗う。

「鷹原さん、お疲れ様です。どうぞ」

「え？ ああ、ありがとう」

俺も水道で顔を洗っていると、一人の女の子がタオルを差し出してくれた。

「いつも兄がお世話になっています」

その子はそう言つて一礼すると、すぐに去つて行つてしまった。誰だっけ。どこかで見たことあるような。

「よう羽依里、おつかれ」

「……ああ、おつかれ」

そんなことを考えていると、良一がやってきて、特大のおにぎりを手渡してくれた。

俺はそれを受け取つて、良一と一緒に適当な場所で腰を下ろす。

「……あ」

その時、ようやく思い出した。さつきのあの子、良一の妹だ。

「羽依里、どうした？」

「いや、何でもないよ」

色々今更だった。それより、いつの間にか上半身裸になっている良一の方が気になった。

「良一、裸でいると、またのみきに撃たれるぞ」

「いや、今日は大丈夫みたいだぜ。俺以外にも裸になっているじーさんとかいるしな」

言われてみれば、上半身裸の島民も何人かいた。まあ、今日の良一の働きっぷりは際立っているし、のみきも見逃してくれている感じだ。

「それにしても、庭の土砂はだいぶ減ったんじゃないか？」

おにぎりをかじりながら、良一がそう言う。改めて庭を見渡してみると、庭の土砂は半分ほどに減っていた。まさに、皆の努力の賜物だった。

「問題は裏山だな。業者が来ないことにはどうにもなんねーし」

「そうだよな……」

俺もおにぎりをかじりながら、考えを巡らせる。

一度、休憩を兼ねて裏山の様子を見に行ってみたけど、あれは確かに専門の人に見てもらわないと、どうにもできなさそうだった。

ついでに土砂が侵入した家の中の様子も見てみたけど、畳や家具がある関係で、庭とは別の意味で片づけが大変そうだった。

「業者、いつになったら来れるのかな」

欠片になったおにぎりを口の中に放り込みながら、ため息交じりに言う。

何にしても、防護柵を設置するなりして安全を確保しないことには、しろはたちは家に戻れない。思った以上に、状況は深刻かもしれない。

「え？ 業者がどうしたの？」

その時、やかんに入った麦茶を配りながら、鴎が俺たちの方んってきた。

「ああ……鴎、実はさ」

やってきた鴎に、業者が来なくて裏山に手が付けられないことを伝える。正直、彼女に言ったところで、愚痴以外のなものでもないんだけど。

「そうなんだ……それは、大変だね」

俺の話を聞いた鴎はそう答えた後、手を口元に当てて、何か考えるようなしぐさをしていた。

「……そうだ！ しろしろ、ちよつと電話貸して！」

そしてすぐに、何かを思い立ったかのように立ち上がって、しろはに電話を借りに行った。なんなんだろう。

「……パイリ君に三谷君、まだお腹に余裕はあるかしら?」

「わたしたちのおにぎりも食べませんか?」

そんな鵜を不思議に思っていると、入れ替わりに紬と静久がやってきた。

「それじゃ、ひとつもらおうかな」

「はい! どうぞ!」

紬が笑顔で差し出してきた箱には、丁寧にラップで包まれたおにぎりがたくさん入っていた。

「もしかしてこれ、全部紬が握ったの?」

「いえ、シズクと半分ずつ作りました!」

「向かって右側が私、左側が紬よ」

静久がそう付け加えていた。見た目に違いはなく、海苔が巻いてある普通のおにぎりだった。

「パイリ君へのおすすめは、当然紬のおにぎりよ。ちよつと小ぶりだけど、美味しいの」

言われてみれば、左側のおにぎりは心なしか小さい気がする。握った紬の手が小さいからだろうか。

「それじゃ、紬のをもうらうよ」

俺は左側のおにぎりを選び取って、ラップをはがしてから、口に運ぶ。うん。美味しい。

「紬、美味しいよ」

「それは良かったです! あいじよーをむぎゆつと詰め込んだ甲斐がありました!」

「むぐつ!?!」

ちよつと紬、食べてる時に変な冗談言わないで。おにぎりを変なところに入りかけた。

「おお、水織先輩のおにぎりもうまいっす」

俺が慌てて麦茶を飲んでいるのを尻目に、良一は静久のおにぎりを選んだみたいだ。ご満悦と言った様子でかじりついている。

「……水織先輩のおにぎりがもらえるというのはどこか!？」

その時、何の前触れもなく天善が現れた。

「加納君もどうぞ。乳酸菌たっぷりよ」

「ありがとうございます！ いただきます！」

その天善はひざまずきながら、静久からおにぎりを受け取っていた。ところで、聞き違いかな。乳酸菌ってなんだろう。

「羽依里さーん、そろそろ作業を再開するそうですよー！」

食後も身体を休めながら舳たちと話をしていると、しろはや空門姉妹と一緒に休んでいたらしい夏海ちゃんが声をかけに来た。

「うん、すぐに行くよー！」

そう返事をして、軍手をつけながら立ち上がる。お昼からも頑張ろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、もうひと頑張りだよー！」

「オツケー、船長ー！」

無心で土をすくっていると、少し離れたところから元気な声が聞こえてきた。

見ると、鴎が子供たちに指示を出しながら、一緒に作業していた。

宝探しイベントを主催して以来、鴎は島の子供たちから『船長』とか『キャプテン』とか呼ばれて慕われているらしい。

子供たちのほとんどが頭にタオルを巻いているせいか、本当に船長とその子分みたいに見える。

「その子、疲れたなら休んでいいよー！」

「うん！ ありがとうございます！」

「その代わりに、体力のありそうなキミ、ほっちゃんの荷物を一緒に

持ってあげて！ ほら、かつこいい所を見せるチャンスだよ！」
「あいあいさー！」

つまるところ、鴟は子供たちの見守り係を買って出ているらしい。

この状況だと、大人もせわしなく動き回るし、どうしても子供たちへの見守りが疎かになる。こんな時、鴟のような存在はありがたかった。

「この袋を運んだら少し休憩にしよう！　いくよー！　よーいしよー！」

見事に子供たちをまとめ上げている様子を見ると、鴟ってやつぱり、リーダーシップが必要な仕事とか向いてるんじゃないだろうか。

その後も、時折休憩をはさみながら、地道に作業を続ける。

皆で頑張ったおかげで、日が傾く頃には庭を埋め尽くしていた土砂の大部分が取り除かれ、見違えるほど綺麗になった。

「皆さん、日も落ちてきましたし、今日の所はこの辺で終わりにしませんか？」

朝と同じ青年団の人がそう言い、作業をしていた皆が集合する。

本日の成果や、また明日も同じ時間に作業を始めること等、簡単な打ち合わせがされ、その日は解散となった。

「それじゃーなー」

「また明日も来るわねー」

「皆、ありがとうな」

俺と夏海ちゃんも使っていた道具を片付けた後は、しろはやじーさんと一緒に帰路に就く皆を見送っていた。

ちなみに鏡子さんは青年団の人と打ち合わせをしていたかと思うと、トラックに乗って、役所の方へ行ってしまった。どうやら、給水所で使った道具の片づけを手伝うらしい。

俺たちは最後の一人まで見送った後、四人一緒に加藤家へと帰宅することにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その帰り道。しろはのじーさんが手に何か持つてるのに気がついた。

「じーさん、それは？」

「これか。晩飯用だ」

……晩飯？ 俺は不思議に思いながらも、じーさんの手元をよく見てみる。

「……ひっ!?!」

日も落ちて、周囲が薄暗くなっていたので最初は分からなかったけど、それは絞められたニワトリだった。首が変な方向に曲がってる。

「ひえええ……」

俺と同じくそれに気づいた夏海ちゃんも、俺の陰に隠れるようにして、できるだけニワトリを見ないようにしていた。

「それってもしかして、あの鶏小屋の?」

しろの方はニワトリの状態を気にする様子もなく、そう質問をしていた。

「ああ、鶏小屋も土砂崩れの影響か、金網が壊れていてな。鶏のほとんどが逃げてしまっていた」

あの鶏小屋は裏手の方にあっだし、多少なりとも被害に遭ってしまっただらしい。

「今日、気になって覗いてみれば、この一羽だけが残っていた。だから捕まえて、食べることにしたんだ」

「……なんだか、かわいそうです」

その時、夏海ちゃんが何とも言えない顔でニワトリを見ながら、そう呟いていた。

「……こいつは、元々弱っていた。他の鶏のように逃げ出さなかったのも、逃げる力が残っていなかったのだろうな」

じーさんがその手に持った鶏をちらりと見やり、夏海ちゃんに向かってそう言う。

「それに、今の家の状況では、家畜になど構っていられん。満足に世話ができれば、こいつもそのうち飢え死にしていた。そうなる前に、楽にしてやったんだ」

「そうかもしれないですけど……」

夏海ちゃんはそこで言葉を飲み込んで、唇を噛んでいた。夏海ちゃんの気持ちもわかるけど、じーさんの考えも理解できる。こんな時、なんて声をかけてあげればいいだろうか。

「……夏海ちゃん、残酷な話に聞こえるかもしれないけど、命をいただくっていうのは、そういうことなんだよ」

そこで、しろはがそう言葉を紡ぐ。どうやら、しろはもじーさんの意見に賛同しているみたいだ。

「この鶏、私も心を込めて料理するから、夏海ちゃんも残さず食べてあげてね。それが礼儀だから」

「……わ、わかりました。頑張つて食べます」

夏海ちゃんほうん、うん、と何度も頷いていた。自分の中で、何かを納得させているみたいだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、おかえり」

俺たちが加藤家に帰宅すると、役所に向かった鏡子さんが先に帰ってきていて、お風呂を沸かしてくれていた。確かに皆泥だらけだし、食事の前に汚れを落とさないとい。

「俺たちは後で良いんで、鏡子さんたちから入ってください」

じーさんは帰り着くが早いか、鶏と包丁を持って裏庭の方に行ってしまった。ついていく勇気もないし、俺は玄関先で立ったまま、そう伝える。やっぱりこういう時、入浴は女性が先だろう。

「そう？ それじゃ、お言葉に甘えちゃおうかな。夏海ちゃん、せっかくだし、一緒に入ろう？」

「はいー」

そんな感じで、鏡子さんと夏海ちゃんが先にお風呂に入り、少し間をあけて、今度はしろはが入浴する。

その頃になると、鶏の下準備を終えたじーさんが戻ってきた。

「しろは、さばいた鶏は台所に置いておくからなー」

……直後、風呂場からしろはの叫び声が聞こえた。

どうやら、じーさんは鶏を台所に置いた後、浴室の扉を開けて、直接しろはに伝えたらしい。

「おじーちゃん！ 勝手に開けないでって、いつも言ってるのに！」

何か聞こえる。気にしない気にしない。妙な想像をするな、俺。

やがて入浴を済ませたしろはが調理に取りかかってくれ、その間にじーさんに続いて、俺も入浴を済ませる。湯船にニワトリの羽が浮いていたのは、きっと何かの見間違いだと思いたい。

「ふう……」

身も心もさっぱりして居間に行くと、食卓には鶏を一匹丸ごと使った、鳥料理のフルコースが並んでいた。

「……これはすごいね」

鳥の炊き込みご飯、鶏のから揚げ、鳥ガラスープ、色々な種類の焼き鳥。朝、島民からもらった野菜も随所に彩を添えていた。

「……すごくおいしそうです」

先程とは打って変わって、夏海ちゃんは目を輝かせていた。どうやら料理を前にして、色々吹っ切れたみたいだ。思いつきりお腹も鳴ってるし。

「ほら、羽依里も早く座って。冷める前にめしあがれ」

しろはにそう促されて、俺も食卓につく。

「それじゃ、いただきますしよう」

家主の鏡子さんの一言で、夕飯が始まる。

俺は最初に、鳥の炊き込みご飯を食べてみる。

「……うん、美味しい」

鶏の出汁に、ニンジンやゴボウといった根菜の旨味も加わって美味しい。具材も主張しすぎない、優しい味だった。

「んー、美味しいです！」

夏海ちゃんも唐揚げを口いっぱいにはおぼって、笑顔だった。

「じゃあ、次は焼き鳥にしようかな」

俺はそう言いながら焼き鳥に手を伸ばしかけて……固まる。

「なあしろは、この焼き鳥、見たことない部位ばかりなんだけど」「きちんと処理をすれば、焼き鳥はたくさんさんの臓物を処理できるの。どれも美味しいから、食べてみて」

「えっと、食べてみてと言われても……」

パツと見、鶏皮やレバーくらいしかわからない。

「右から、レバー、ハツ、鶏皮、軟骨、砂肝、ぼんじり、ふりそで、チョウチン、ベラ、さえずり、トサカだよ。数は用意できなかったけど」「あの、しろはさん。トサカって、あのトサカですか？」

「うん。夏海ちゃんの想像してる通りのトサカだよ」

「えええ」

「カリカリに焼いてあるから、コラーゲンたっぷりでおいしいよ」

「そうなんですね……：：：～」

そうやって、一口かじりつく。同時に、カリッという音がした。

「ふおいしいです。あちち……」

一口食べた後は、熱いのか冷ましながら、夢中で食べていた。どうやら、口に合ったみたいだ。

「ところで、ふりそでって何？」

「手羽元と胸肉の間の肉だよ。肉汁たっぷり、私は好きだけど」

「しろはが好きなら、食べてみるよ」

そうやって、手にしたふりそでかじりついてみる。直後に旨味たっぷりの肉汁が口の中に広がって、癖になりそうな美味しさだった。

「それにしても、これだけたくさん種類の焼き鳥があると、まるで居酒屋さんみたいだね。鳴瀬さん、一杯やりませんか？」

笑顔でそう言う鏡子さんは、どこからか一升瓶を取り出していた。この人がお酒を飲むイメージはないんだけど。

「……ほう。お前さん、若いくせにいける口か」

「ええ、少しですけどね。お付き合いますよ?」

向かいに座る大人二人が晩酌を始めたので、未成年の俺たちは、食べる方に集中することにした。

「うん。唐揚げも美味しい」

揚げたての唐揚げもすっかり下味がついていて、一口かじると中から肉汁があふれ出てきた。あの短い間にどうやってここまでしっかりと下味をつけたんだろう。やっぱり食堂を経営しているだけあって、他人には教えられないマル秘テクニクとかあるんだろうか。

「……ちなみにしろは、このニワトリって名前があったりするの?」

「え、急にどうしたの?」

「なんとなくさ。以前のキャサリンを思い出して」

「キャサリン? よくわからないけど、ついてた名札に書かれてたのは……確か、ともこだよ」

「ともこおおお!」

「ともこさん、美味しくいただいています」

名前を聞いたら、何故か急に愛おしく感じてしまった。

こうして俺たちはこの日、命をいただいた。鶏ガラスープも美味しかったし、文字通り、骨の髄まで味わい尽くした感じだった。

晩ごはんを終えると、俺は急激な眠気に襲われた。昼間の作業の疲れに加え、お風呂にも入って、お腹も膨れている。これは眠くならなはずがない。

「ほら羽依里、居間で寝ちゃわないで。布団で寝ないと」

「……そのやり取りを聞いていると、しろはちゃん、まるで奥さんみたいだね」

「ふん。羽依里、お前のような若造に、まだまだしろはやらんぞ。10年早いわ」

お酒が入っているせいか、二人とも饒舌だった。でもじーさん、10年は長いから、せめて5年くらいにしてももらえないかな。

「ほらほら、夏海ちゃんも起きて」

「はうー」

見ると、夏海ちゃんも座ったまま舟をこいでいた。慣れない片付け作業を頑張っていたし、本当に眠そうだ。

「ほらほら、しっかりして。二人とも、布団はこっちだよ」

二人してしろはに導かれるように、必死に意識を保ちながら部屋に向かい、そのまま倒れるように眠ってしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……あれ？」

目が覚めると、部屋は真っ暗だった。

僅かに差し込んでくる月明かりに照らされた時計を見ると、午前2時を示している。

隣では、しろはのじーさんがいびきをかいて寝ていた。中途半端な時間に布団に入ったせいか、なんとも微妙な時間に目が覚めてしまった。

「うう、トイレトイレ」

そして、俺は無性にトイレに行きたかった。たぶん、夕飯の時に麦茶をたくさん飲んでしまったのが原因だろう。

俺は急ぎ足で寢床を抜け出して、トイレへと向かった。

「……ふう、すっきりした」

無事用を足し終え、ペタペタと廊下を歩く。何の気なしに中庭を見ると、蔵から明かりが漏れていた。

「ああ、鏡子さんはこの時間まで蔵の整理をしているのか。大変だな

……」

半分眠った頭でそう考えて……すぐに違和感に気づいた。

……待て。蔵は去年、俺が整理し終えたはずだ。現にこの夏、あの蔵に明かりが灯っていたことなんて一度もない。何か変だ。

正体のわからない不安に駆られた俺は、玄関からこつそりと庭に出て、蔵へと向かった。

蔵に近づいてみると、僅かに扉が開いていた。そこから一筋の光と共に、小さな声が聞こえてくる。

「……どうでしょうか」

「うん……やっぱり、変わってないね。あのバイク事故から、もう二週間経ってるはずだけど」

「やっぱりこれ、もうどうにもならないんでしょうか」

「今のところ、包帯で塞いでおくしかないね」

耳を澄まして聞いていると、確かに鏡子さんと夏海ちゃんの声だった。

それにしても鏡子さん、お酒を飲んでいたはずなんだけど。今の口調からは、酒気は微塵も感じられない。

「……こんな夜中に、何を話してるんだろう」

中にいるのが鏡子さんだけなら、調べものでもしてるのかと思うところだけど、夏海ちゃんまでいるのは妙だ。

俺は蔵の扉に近づき、その僅かな隙間から中を覗いてみた。

蔵の中には、広い空間が広がっていた。去年俺が整理したんだから、整然としているのは当然だった。

その真ん中に、鏡子さんと夏海ちゃんが向かい合って座っていて、近くの床には長めの包帯が乱雑に転がっていた。

いつの間にか気にしなくなっていたけど、夏海ちゃんは最近、ずっと左手に包帯を巻いていた。確か、本人は火傷したと言っていたけ

ど。

そう思いながら、夏海ちゃんの左手を見てみる。鏡子さんへ向けて、軽く広げられたその手のひらは淡い光を放っていて、そこから光る蝶が飛び出した。

「……!?!」

俺は思わず二度見してしまうけど、目の錯覚なんかじゃない。蝶だった。間違いなく夏海ちゃんの手のひらから蝶が飛び出して、ひらひらと周囲を舞っている。

……その時、力を入れ過ぎたのか、手をかけていた扉ががたんと大きな音を立てた。

……しまった。

「……っ!?!」

その音で、二人は俺の存在に気がついたみたいだ。俺は覚悟を決め、扉を開けて蔵の中へと足を踏み入れる。

「は、羽依里さん……」

「羽依里君……」

俺の姿を確認した二人は、揃って驚いたような、困惑したような表情をして、顔を見合わせる。

「……ごめん。覗くつもりはなかったんだけど」

「い、いえ……どうしたんですか。こんな時間に」

夏海ちゃんは俺の方に向き直って、努めて笑顔でそう言う。それ、俺のセリフなんだけど。

そして、素早く左手を身体の後ろに隠していた。その拍子に、またもう一匹、小さな蝶が飛び出してきた。

「……夏海ちゃん、その左手は……どうしたの?」

できるだけ気持ち落ち着かせて、そう聞いてみる。それでも、自分の声が震えているのがわかった。

「こ、これは……その、今度、役所で隠し芸大会があつてですね! その練習です!」

夏海ちゃんはそう言うけど、動揺しているのは明らかだった。うん。普段嘘をつかない子が嘘をつく、すぐにわかってしまう。

「それですね、その、あの……」

やがて、救いを求めるような目で鏡子さんを見つめる。やっぱり、鏡子さんは何か知っているみたいだ。

「……鏡子さん、何か知ってるんですか？」

「……」

俺も鏡子さんにそう問いかけてみる。でも、鏡子さんは口元に手を当てたまま、無言だった。

「……先日、夏海ちゃんのおかーさんから電話があつたんですよ」

そこで俺は、先日かかつてきた電話の話をすることにした。

「俺も最初は様子伺いの電話かと思つて、夏海ちゃんに代わろうとしたんです。そうしたら、ものすごく動揺されて『娘がそこにいるわけではない』つて、そう言われたんです」

「……そう。羽依里君、知っちゃつたんだね」

鏡子さんは少し困つたような顔をしながら、そう言葉を発する。一方の夏海ちゃんはどういうと、がっくりと肩を落とし、うつむいてしまつていた。

「その電話を受けたんなら、薄々感づいてはいるかもしれないけど……その、夏海ちゃんは本来、ここにはいないはずの子なの。傍人（そばびと）なんだよ」

少しためらつた後、鏡子さんはゆっくりとそう言葉を紡いでいた。

「……そばびと？ 初めて聞く言葉だった。」

「その傍人と、その手のひらから出てくる蝶に、どんな関係があるんですか？」

「そうだね……羽依里君、七影蝶って知ってる？」

その時、鏡子さんから唐突に質問された。

「え？ ええ。蒼やのみきから聞いて、少しですけど」

「ああ……空門さんの家は山の祭事を取り仕切ってるから、詳しいかもね」

「それで確か、七影蝶は死んだ人の想いの残滓だつて言われました」「……うん。大体あつてるよ。でも、その七影蝶、今は見えない人がほとんどなの。のみきちゃんや蒼ちゃん、羽依里君は見えるみたいだけ

ど」

人によつて、見える人と見えない人がいるのか。そういえば、朋也さんや汐ちゃんも光る蝶を見たつて言つてたような気がする。

「蔵にあった文献によると、人によつて見える蝶も違つたりするみたい」

よくわからないけど、いわゆる靈感が強いとか弱いとか、そんな感じだろうか。本当に幽霊みたいだ。

「それでね。夏海ちゃんの左手から出てる光る蝶、それが七影蝶なの」
言われて、改めて夏海ちゃんの左手を見る。今はもう隠されることなく下げられたその左手から、また一匹の蝶が飛び出していた。

「……これが、七影蝶」

ひらひらと舞うそれを目で追う。その七影蝶はあつという間に手の届かない高さまで舞い上がり、そのまま蔵の天窓から外へと消えていった。確かに俺は、今まで島のあちこちでこの蝶を見た記憶がある。

「でも、どうしてその七影蝶が夏海ちゃんの手のひらから出てくるんです？ それも、何匹も」

「……そこから先は私が話します」

俺の言葉に、夏海ちゃんがそう言つて顔を上げる。何か、決意を秘めたような目をしていた。

「羽依里さん、私がいじめられてたつて話、しましたよね？」

「……うん。覚えてるよ」

学校でいじめられた結果、友達もいなくて、夏休みは学校から逃げるためのものになつてしまつた……という話だ。

夏休みの初めに、夏海ちゃんが勇気を出して話してくれたんだ。忘れるわけがない。

「……ちようど一年前。私、そのいじめつ子たちに学校の階段から突き落とされたんです。夏休みを翌日に控えた、終業式の日でした」

「え？」

「向こうはいたずら半分だとは思ふんですけど……頭がすごく痛くて、すごく熱かつたのを覚えてます」

なにそれ。そこまで来ると、いたずらじや済まされない。俺はふつふつと怒りが沸きあがってくるのを感じた。

「でも、覚えているのはそこまでで、次に気がついたら、私は一匹の蝶になって、どこかのお花畑を飛んでいました」

「花畑って……もしかして夏海ちゃん……」

「……たぶん、死んじやったんじゃないですかね。死にかけた人がお花畑を見たって、よく聞く話じゃないですか」

あつけらかんと言っていた。でも、それが一年前の出来事なら、彼女の母親が言っていたことの意味が全て繋がる。

「その花畑、たぶん『トキアミ』っていう場所だと思うよ。手紙にも書いていたし」

鏡子さんがそう補足してくれていた。トキアミ？ よくわからない。

「それでそのお花畑を彷徨っていたら、急に声が出たんですよ」

「初めて聞く声だったんですけど、なんだか懐かしいような、安心する声でした。その声に耳を傾けていると、私と同じような蝶が周りにどんどん集まってきました」

夏海ちゃんが思い出すように話をしてくれる。彼女にとっても夢のような、うろ覚えの出来事なのかもしれない。

「やがて目も開けられないくらいの強い光に包まれて、気がついたらこの島に来ていたんです。島の神域に、一人で立っていました」

「夏海ちゃんがやってくることも、手紙に書いてあったの。傍人（そばひと）が来るって」

「さっきも言っていましたけど、傍人ってなんですか？」

「そうだね……少し違うけど、協力者みたいなものかな」

協力者？ 夏海ちゃんが何に協力するんだらう。まだ話が見えてこない。

「じゃあその、手紙っていうのは？」

「私の親友……瞳からの手紙だよ。羽依里君も、瞳のことは知ってるんじゃないかな？」

「それは……もちろん知ってますけど」

これまた、唐突に名前が出てきた。確か瞳さんは、しろはの母親だ。でも10年以上前にいなくなってしまうたと、しろはからは聞いている。

「この手紙にはね。羽依里君が島にやってきて、しろはちゃんと恋に落ちる去年の夏の出来事から、夏海ちゃんがやってくる今年の夏の出来事まで、色々なことが書いてあるの」

「……ちよつと待ってください。その手紙は瞳さんが書いたものなんですよね？ どうして10年以上前の手紙に、俺や夏海ちゃんのことを書いてあるんです？」

「うん。私も最初は半信半疑だったんだけどね。ここまで当たっちゃうと、信じるしかなくてね」

そう言つて夏海ちゃんや俺を見る。手紙という形式を取つてはいけるけど、それつて未来予知つてやつなんじゃないだろうか。

正直、にわかには信じられない話だ。でも、俺がこの島にやって来て、しろはと恋人同士になっているという事実が、全ての証明になっている気がする。

「それで、夏海ちゃんが傍人としてこの島に来た理由なんだけど……どう説明したらわかりやすいと思う？」

「そうですね……」

二人は同じように口元に手を当てて、ああでもないこうでもないと思悩んでいる。俺はその間に、少しでも頭を整理する。話について行くだけで精いっぱいだ。

「……そうだ。羽依里君、オカルト好きだよな。だったら、並行世界つてわかる？」

やがて、鏡子さんが口を開く。並行世界。確か、パラレルワールドというやつだっけ。

「えっと、一応、知ってますけど」

「あれね、本当にあるみたいだよ」

「え、何を言ってるんですか？」

話の理解がいつて行かないうちに、話題が変わった。未来予知の次

は、並行世界だ。

「たとえば羽依里君、初めて来た場所なのに、見覚えがあったり、懐かしかったりするこつてあるよね」

「それはへじやぶ……いえ、デジャヴですよ。その原因について、色々議論はされてはいますけど」

「そうだね。脳の錯覚だとか、前世の記憶だとか言われたりもするけど、それは並行世界の、もう一人の自分の記憶の断片だったりするんだつて」

「……すみません。よくわからないです」

なんで突然そんな話に？ それが夏海ちゃんが島にやってきた理由と、何か関係があるんだろうか。

「瞳の手紙によると、10年くらい前を起点にして、この世界とは『別の世界』が存在したらしいよ」

別の世界？ まるで漫画か映画の話だ。でも、10年くらい前と言われると、妙に現実味がある。まして、俺や夏海ちゃんのことを予見した、瞳さんの手紙だ。

「別の世界が生まれた原因は、ある事象から抜け出すために、やり直した結果……らしいんだけど。私にもよくわからなくて。とにかく、こつことは別の世界があつたらしいよ」

「あつたらしい……つてこつことは、今はないんですか？」

「どうだろうね。確かめようがないし。でも、手紙の中で瞳は、その世界のこつことを『消えた世界』つて呼んでいたよ」

「消えた世界……」

つまるこつころ、それが並行世界……パラレルワールドつていうこつだろうか。

「その世界では、羽依里君は蒼ちゃんや鷗ちゃん、紬ちゃんともお付き合ひをしていたらしいよ」

「いやいや、ありえないですよ。俺はずつと、しろは一筋ですから」

「今はそうだね。でも、そういう世界があつたらしいの。ものすごく、強い想ひが込められた世界がね」

そう言われても、しろは以外の女の子と恋仲になる状況なんて、全

く想像できない……。

「……いや、そういえば」

……バイクの後ろに座っていた蒼に、眠るなって変な声かけをした
り。

……一度だけ、袖に下の名前で呼ばれたり。

……七ヶ浜で、急に鷗が消えそうに感じて、思わず手を握ったり。

……断片的だけど、何かを覚えている気がする。

「……少しですけど、心当たりがあります」

それはデジャヴと呼んで片付けるには、あまりに回数が多かった。

それに、この夏に初めて体験した出来事ばかりのはずだ。

「でも、仮にその消えた世界があったとして、夏海ちゃんとどんな関係
があるんです？」

「その消えた世界はね、想いが強すぎたの。それで、新しくできた今の
世界を、引っ張っちゃった」

「引っ張る？」

「そう。誰かの意思とかじゃなくて、ただただ、強い想いの力で。覚え
てない？ 夜釣りに行って海に落ちかけたこと」

「はい、覚えてます」

「他には、バイクでこけたりとか」

「……覚えてます」

「あの出来事は、全部消えた世界が関係してるみたいなの。羽依里君。
この手紙を見て」

鏡子さんはそう言いながら、ポケットから何枚かの手紙を取り出し
て、そのうちの一枚を俺に見せてくれた。恐らくこれが、瞳さんから
の手紙なんだろう。

「え、これって……」

……それは手紙というよりは、箇条書きされたメモのようだった。

・ 7月25日

この日から迷い橋が散るまでの間、傍人がやってくる。トキアミを通ってくるから、夜に神域で待っていてあげて。かわいい女の子よ。協力して、頑張つてね。

・ 8月6日

羽依里君が夜釣りに行くから、海に落ちないように気をつけて。釣り場の端に杭があるから、そこに古い船をロープで結び付けて。あとは潮の流れに任せれば、きつとだいじょうぶい。

・ 8月11日

夕立ちがあるから気を付けて。乗り物かな。ごめん。それくらいしかわかんない。

・ 8月16日

この日、羽依里君が島の外に行くなら救命胴衣を着てもらつて。たぶん大丈夫だとは思うけど、念のために。

・ 8月24日

台風の翌日は鳴瀬の家が危ない。夕方にお父さんを港に連れ出して。放送があつたら、もう安全だと思う。

そこに記された文章はどれも、まるでこの夏の出来事を見て書いたかのようなだった。でも、紙やインクの古ぼけた感じから、何年も前に書かれたもので間違いはなさそうだ。

「……信じられないです」

「やっぱりそうだよね。私も最初は信じられなかったよ」

ある程度予想はしていたけど、まさか日付までしっかりと書かれているなんて。

「それでも、私だけじゃ手紙に書かれた出来事全てに対処するは無理だったから、傍人として来てくれた夏海ちゃんに手伝ってもらったの」

「あの、手伝って、具体的にはどんな？」

「例えば夜釣りの日。手紙に羽依里君が海に落ちる場所が書いてあったから、夏海ちゃんに船を用意してもらったよ」

「……あの船って偶然じゃなかったんだ」

「偶然なわけないじゃないですか。遠くの船着場から船を引つ張ってくるの、すごく大変だったんですよ?」

……言われてみれば、落ちた真下に船があった気がする。あれのおかげで助かったんだけど、まさか、夏海ちゃんが用意してくれていたなんて。

「後は、記憶に新しいとは思うけど、昨日の土砂崩れもね」
「もしかして、あれも?」

当日の食堂でのしろはとの会話を思い出す。もし、しろはのじーさんがいつもの時間通り寝ていたら、間違いなく生き埋めになっていたと、しろはは言っていた。

「それも、瞳からの手紙に具体的な日時や場所が書いてあったから対処できたの。夏海ちゃんに鳴瀬さんの船を係留していたロープを切ってもらって、それを理由に鳴瀬さんを家から連れ出してね」

「そんなことまで、夏海ちゃんがやってくれてたんですか?」

「船のロープを切るなんて、もし鏡子さんがやって、見つかったら後が大変じゃないですか。私ならもし見つかったら、子供のイタズラで済みますし」

言われてみれば、島民である鏡子さんがそんなことをしている場面を見られたら大変なことになる。確かに、夏海ちゃんにしかできない内容だった。

「でも一つだけ例外だったのが、バイクの事故かな。あれは手紙の内容が抽象的で、すぐに対策できなかったの」

「だからやむを得ず、私の力を使っただんです」

「え、夏海ちゃんの力?」

「はい。手紙によると、私の身体はトキアミに存在する何千という七影蝶が集まって作られているらしいので。あ、七影蝶って、一匹だと大した力はないですけど、数が集まるとすごい奇跡を起こせるんですよ」

自分の左手から抜け出てきた七影蝶を弄びながら、そう言う。さっき見た手紙にはその辺りの情報は書いてなかったし、別の紙に書いてあるのかもしれない。

夏海ちゃんの話から推測するに、七影蝶になってトキアミを彷徨っていた彼女を、瞳さんが何らかの方法で鳥白島に呼び寄せたのは間違いないんだろうけど。

「それである日、バイクでこけた羽依里さんを見た時、とっさに私の中の七影蝶にお願いをしたんです。羽依里さんを助けてあげてって」
「そうだったんだ……」

そう言えば不思議な光に包まれた後、しろはと一緒に介抱してくれていた夏海ちゃんが『間に合って良かったです』と言っていた気がする。あれだけの事故で無傷だったのも、夏海ちゃんのおかげだったのか。

「でもその時、ちよつと力を使いすぎてしまいました。その代償が、これなんです」

夏海ちゃんはそう言いながら、俺に左手を見せてきた。変わらず、手のひらが淡い光を放っている。

「力を使ったことで、私の身体を編んでいた七影蝶の一部がほどけてしまつて、穴が空いちやつてるんです」

「……これ、大丈夫なの？」

「平気ですよ。痛みもないですし」

「……触ってみてもいい？」

「どうぞ」

夏海ちゃんの許可をもらつて、その光っている部分にそつと触れてみる。別に熱を持っていたりするわけでもなく、触った感じは普通の肌と全く同じだった。

「ずつと見てたけど、ここから七影蝶が逃げてる感じだよね。その、数が減つたりしても大丈夫なものなの？」

「さっきも言った通り、私の中には何千という七影蝶がいますので、この穴から少しくらい逃げてても何も変わりません。こうやって包帯で塞いでしまえば、多少は抜け出る数も減らせますし、穴も隠せますので」

夏海ちゃんはそう言いながら、包帯で左手を覆う。思えば、夏海ちゃんが包帯を巻き始めたのはバイク事故の翌日からだった気がする

る。

「じゃあその左手、火傷じゃなかったんだね」

「あ、はい……隠してごめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。それより……二人とも、ありがとう」

そこで俺は心からお礼を言つて、頭を下げる。

消えた世界とか、七影蝶の力とか。正直、わからないことだらけだけど……鏡子さんと夏海ちゃんの二人は、瞳さんの手紙を手掛かりにして、俺やしろはのじーさんを守るために人知れず頑張ってくれていたんだ。

「本当にありがとう」

だから、難しいことは抜きにして、二人にお礼が言いたかった。もし、俺やじーさんに何かあったら、島の皆……とりわけ、しろはが悲しむだろう。そんなことにならなくて、本当に良かった。

「そんな、お礼なんて良いんだよ。私も瞳との長年の約束を、無事果たせたわけだし」

「そうですよ！　これで私も傍人としての役目も終わりましたし！」

俺の反応が予想外だったんだろうか。二人は一瞬キョトンとしてから、表情を綻ばせる。

「え、役目が終わった……ってどういうこと？」

「それなんだけど、羽依里君、瞳の手紙をよく見てみて。8月24日の土砂崩れまでしか書かれてないでしょう？」

鏡子さんはそう言つて、もう一度瞳さんの手紙を見せてくれる。確かに24日以後は、何も書かれていない。

「……じゃあ、これから先、もう危険なことは起こらないってことですか？」

「自分から危ない所に行ったりしない限りは、大丈夫だと思うよ」

「でもほら、予言にないことが起こるとか」

「……羽依里君、それはさすがにオカルト番組の見すぎじゃないかな」

そこで何故か鏡子さんに引かれた。さつきまで並行世界について、流暢に語っていたはずなのに。

「羽依里さん、手紙に書かれていても、何も起こらなかった日だってあ

るんですよ？ ほら、鷗さんとのデートの日についても、手紙には書いてます。私たちはあの日、散々救命胴衣をつけるように言いましたよね？」

「そういえば、言われたような気がする」

「でも、海には落ちなかつたですよ？ 手紙に書かれていても起こらない場合があるんですから、書かれていないことは起こらないんですよ！」

確かに、夏海ちゃんの説明も一理あるけど……。

「うんうん。夏海ちゃんの言う通り、羽依里君はこれ以上、何も心配しなくていいよ。変に意識しないで、残りの夏休みを楽しんで」

「そうですよ！」

二人はそう言つて笑う。特に夏海ちゃんは吹っ切れたかのような笑顔だった。本当にもう何も無いのなら、一安心だった。

「でも羽依里さん、私の正体を島の皆に話したりしたら、絶対にダメですよ？」

「わ、わかつてるよ」

第一、夏海ちゃんの正体は七影蝶です……なんて言つたところで、誰も信じてくれないと思うし。

「それじゃあ、そろそろ二人は寝なきや駄目だよ。明日も片づけがあるんだしね」

「え、私もですか？」

「もちろん夏海ちゃんも。私はもう少し調べ物しないといけないから。それじゃ二人とも、おやすみ」

そう言う鏡子さんに背中を押されて、俺と夏海ちゃんは蔵から追い出されてしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……ところで羽依里さん、怖くないんですか？」

「え、何が？」

鏡子さんに締め出された後、蔵の扉を前に二人で佇んでいると、夏海ちゃんがおもむろに口を開く。

「私ですすよ。だって、私は七影蝶の集合体って言いましたよね？
言い換えれば、オバケみたいなものなんですよ？」

そう言いながら両手を顔の所に持つてきて、お化けのポーズをしていた。

「ぷっ」

それだと、まるでネコのポーズなんだけど。俺は思わず吹き出して
いた。

「夏海ちゃんみたいな可愛いオバケなら、いくらでも会いたいけど」

「えええ、なんですかそれ」

俺は戸惑う夏海ちゃんの頭に手を置いて、優しく撫でる。

「……それに、夏海ちゃんは夏海ちゃんだよ。正体を知ったからって、
何かが変わるわけじゃないし」

「……あ、ありがとうございます。でも、私の話、本当に信じてくれて
るんですか？」

「うん。蔵に入った時もそうだったけど、夏海ちゃんは嘘をつくとす
ぐ顔に出るから。トキアミの話をしている間は、嘘をついていないっ
てわかったよ。それなら、信じるしかないよね」

「そ、そうですか……ありがとうございます」

夏海ちゃんはもう一度お礼を言いながら瞳を細め、安堵の表情を浮
かべる。

「やっぱり、不安だったんです。本当のことを伝えたら、変な目で見ら
れるんじゃないかって」

「今更だよ。ずっと一緒に夏休みを過ごしてきた仲じゃない」

夏休みの初めにも感じたことだけど、夏海ちゃんはどこか、かつて
の俺と境遇が似ている気がする。

それこそ、去年の俺が蔵整理に全てを費やさず、島の皆と打ち解け
ていたら。一足早く、今のような関係が築けていたかもしれない。

今年鳥白島にやってきた夏海ちゃんは、早くにそれに気づいて、一

番に島の皆と打ち解ける道を選んだ。

結果、俺や島の皆とも仲良くなれたし、楽しい夏休みを過ごさせていると思う。

「……あ。でも私がいると、しろはさんとの幸せな生活の邪魔になったりしません……？」

そう言う夏海ちゃんの視線は、しろはが寝ているであろう自分の部屋に注がれていた。

「え、そんなことないよ。大丈夫」

その辺りは……しろはのじーさんもいるし、幸せな生活にはまだほど遠いと思う。

「本当ですか？ 羽依里さんはしろはさんと幸せになってもらわないと困ります。そうじゃないと、私がこの島に来て頑張った意味、なくなっちゃいますから！」

俺の方をまっすぐに見て、悪戯っぽく笑う。なんだろう。ずっと隠していた秘密を共有できたからか、一層距離が近くなった感じがする。

「じゃあ夏海ちゃんも、傍人としてのお役目も終わったってことは、残りの夏休みはご褒美みたいなものなんだよね？」

「そ、そうですね！ 少なくとも夏休みの間は、この島に居れると思いますー！」

……元氣いっぱいに答えてくれたけど、何故かその言い方に違和感を感じた。何か忘れているような。

「……じゃあ、明日もラジオ体操や片づけがあるし、今日はもう寝ようか」

気になることはあつたけど、そろそろ寝ないとまずい遅い時間だ。明日の作業に差し支えても悪いし。

「それじゃ羽依里さん、おやすみなさい！」

夏海ちゃんはそう言うのと、駆け足で家の中に入ってしまった。俺もその後を追うように部屋へと戻り、布団に潜り込む。

……布団に入った直後、違和感の正体に気づいた。

鏡子さんに見せてもらった瞳さんの手紙、そこには確か『迷い橘が散るまでの間、傍人がやってくる』と書かれていたはずだ。

迷い橘がなんなのか、俺にはわからないけど……つまり、夏海ちゃんには存在できる『期限』があるってことだ。

さっきの口ぶりからして、夏休みの間は大丈夫らしいけど。

……じゃあ、夏休みが終わる時、夏海ちゃんはどうなるんだろう。

本人は、自分はまだ死んでいると言っていた。ということは、もしかして……。

「……いや、考えるのはやめよう」

一度生まれてしまった不安は消えなかったけど、今はなるべく考えないようにしたかった。

俺は布団を頭までかぶり、意識を無理矢理に眠りの中へと沈みこませていった。

第四十一話・完

第四十二話 8月26日

「……ほら羽依里、起きて。朝だよ」

……朝。しろはの声で目が覚める。

「ああ、しろは……おはよう」

目を開けると、既にふすまは開け放たれていて、枕元にしろはが座っていた。やむを得ぬ事情があるとは言え、朝から恋人に起こしてもらえるなんて。男として、最高の喜びだった。

「……朝からニヤニヤして気持ち悪いんだけど。何考えてるの?」

「え? な、何も考えてないよ」

どうやら顔に出ってしまったらしい。俺は両頬をパンパンと叩きながら、身体を起こす。

「うおっ、いててて……!」

身体を動かした瞬間、鈍い痛みが全身を襲う。これはあれだ、筋肉痛というやつだった。

元運動部ってこともあって、ここまでの筋肉痛なんて長いこと経験して無かったのに。昨日、慣れない作業したせいかな。

「どうかしたの?」

「いや、なんでもない。大丈夫だよ」

しろはの手前、情けない姿は見せられない。俺は全身の痛みを隠しながら立ち上がり、布団をたたむ。

「それより、今日はしろはが起こしてくれたんだ」

「うん。夏海ちゃん、まだ寝ちやつてるみたいだね」

「え、そうなの?」

「今、鏡子さんが起こしてくれてるよ。昨日頑張りすぎて、疲れちゃったのかな」

「そうかも。夏海ちゃんも頑張ってたもんな」

昨日は夜も色々あったし。俺に秘密を打ち明けたことで気が楽になって、寝すぎちやつてるのかも。

「そういえばしろは、じーさんは？」

「漁に出てるよ」

「あ、やっぱり今日も？」

俺は綺麗にたたまれた隣の布団を見る。昨日の夜中に起きた時、じーさんは寝ていたし、明け方に寢床を抜け出したんだろうか。

「うん。また朝ごはんの頃には戻ってくると思うよ」

自分の家のこととはいえ、昨日は俺以上に動きまくってたと思うんだけど。あの年で本当に元気だよな、しろはのじーさん。

「おはようございまふあ〜……」

そんなことを考えていると、部屋の前の廊下を大きなあくびをしながら夏海ちゃんが通り過ぎていった。髪の毛も爆発していて、すごいことになっていた。

「……夏海ちゃん、起きたみたいだね」

しろはも口元に手を当てて、必死に笑いかみ殺していた。

「寝坊した時の夏海ちゃん、いつもあんな感じだよ」

「そ、そうなんだ」

二人して、夏海ちゃんが歩いていった先の廊下の先を見る。なんとなく、朝から微笑ましい気分になった。

「……あ。羽依里もそろそろ準備をしないと。ラジオ体操に遅れるよ？」

「え？」

そう言われて、反射的に時計を見る。もう良い時間だった。

「わかった。着替えるから、そのまま見ていてくれ」

「見ないしー」

至って自然にそう言ってみるけど、しろははさっと立ち上がり、ふすまを勢いよく閉めて部屋を出て行ってしまった。

あそこまで顔を赤くしなくてもいいと思うんだけど。冗談なんだしや。

その後、手早く身支度を済ませて、三人で神社へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、おはよう」

「おはようございます！」

境内についてみると、いつもの少年団の皆に加えて、静久と紬の姿があった。二人は当然のように、ウシとネコの着ぐるみ姿だった。

「紬と静久もおはよう」

「おはよう、パイリ君」

「タカハラさん、それにシロハさんとナツミさんも、おはようございます！」

ネコの着ぐるみを着た紬が俺たちにあいさつを返してくれる。朝の陽射しに負けないくらい、眩しい笑顔だった。

「そういえば、二人は昨日も灯台に泊まったの？」

「もちろんよ！ 今日も作業を手伝うんだから、いちいち本土に帰ってなんていられないわ！」

ウシさんはそう言って、大きな胸をどん、と叩いた。うん、朝から色々な意味で気になるから、やめてほしいんだけど。

「おお、鷹原たちも来たか。ちようどいい。今日の作業について説明をするから、こつちに集まってくれ」

俺たちがやってくるのを待っていたかのように、のみきからそう声がかかった。瞬く間にのみきを中心に輪ができる。

「例によって鳴瀬翁には伝えてあるが、今日の片付け作業も9時からだ。皆のおかげで、昨日だけでかなりの量の土砂を除去できたらしい。青年団の皆も驚いていたぞ」

それを聞いて、この場にいた子供たちから歓声が巻き起こる。大人に褒められれば、子供たちも自信がつくよね。

「残るは庭の細かい所とか、裏山だな……」

良一が顎に手を当てながら、そう呟いていた。確かに裏山は未だ業者待ちで、手が出せないんだよな。

「……って、良一たちは今日も手伝ってくれるのか？」

「当然だ。手伝わない理由なんてない」

「当たり前よー。あ、今日はあたしたちも朝から参加するから」

最初に良一がそう言い、空門姉妹、天善がそれに続く。皆、疲れた様子も見せずには笑顔だった。俺なんて全身筋肉痛だって言うのに。本当にありがたい話だった。

「あれ？　そういえばのみき、今日は鴉は来てないんだな？」

皆の顔を見てみると、一人足りないことに気づいた。鴉はラジオ体操にこないことも多いんだけど、昨日の今日で来ないなんて。

「ああ、彼女は野暮用だ」

一緒に住んでるのみきなら、何か知ってると思っただけけど、ただ笑顔で浮かべるだけだった。野暮用？　なんだろう。

「お前らー！　今日もラジオ体操を始めるぞー！」

その先の質問をする前に、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第二の体操！　横隔膜の振動だ！　うるあああああー！」

「うるあああああー！」

今日も今日とて、変わったラジオ体操だった。

「もし今度、普通のラジオ体操をやることになったら、逆に違和感を感じそうだね」

「そうですね……すっかり、この島のラジオ体操に馴染んじやいましたし」

「こらそこー！　おしやべりは禁止だ！」

「す、すみません」

夏海ちゃんと二人で話をしていると、ラジオ体操大好きさんに怒られてしまった。

「次は第三の体操！　一秒間、黙って真剣な目！」

「星屑ロシリネンス……」

その後は全力でラジオ体操に取り組んだ。相変わらず、ラジオは使わなかった。

「よし、スタンプはこっちだぞー」

その後、本日分のスタンプとログボを受け取る。

今日のログボは昨日と同じく、スポーツドリンクだった。『レモン果汁入り!』と大きく書かれていたので、若干味が違うのかもしれない。

「それじゃーねー」

「また後でなー」

「ああ、またよろしく頼むよ」

ラジオ体操を終え、帰路に就く蒼や良一たちにそう声をかけた後、俺たちも帰宅することにした。

三人で横並びになって、住宅地を加藤家へ向かって歩く。真ん中に夏海ちゃん、その両サイドに俺としろはが並ぶ形だ。

「……それにしても夏海ちゃん、お腹空いたね」

「はい。空きました」

ラジオ体操もして、時間的にも良い頃合いだ。おのずとそんな話題になる。

「今日の朝ごはん、楽しみだなー」

「楽しみですねー」

そして二人で示し合わせたように、期待に満ちた笑顔をしろはに向ける。一方のしろはは、困惑した表情を浮かべていた。

「そ、そんな期待されても……私の料理なんて、普通だし」

「そんなことないですよ! しろはさんのごはん、まるでおかーさんの料理みたいで、安心するんです!」

「そうだぞ。食堂をやってるしろはの料理が、普通なわけがない」

そう言いながら、二人で更なる笑顔を送ってみる。困惑するしろはを見るのは楽しい。

「もう……二人とも、褒めても朝ごはんのおかずは増えないんだからね」

しろははそう言つて、恥ずかしそうに顔をそむけてしまった。ちよつとやりすぎたかな。

でもこの夏、毎日のようにしろはのごはんを食べてきたけど、これまで料理がハズレだったことはない。本当にお世辞でもなんでもないんだけど。

「……あら、鳴瀬さんちのしろはちゃん」

そんな話をしていると、近くを歩いていた女性から声をかけられた。誰だっけ。名前は知らないけど、顔はどこかで見たような気がする。

「ちようどいいところに。うちのニワトリが卵をたくさん産んじやつてね。どう配り歩こうか悩んでいた所なのよ」

言われてみれば、女性は大きな袋を持っている。その中には、真っ白い卵がたくさん入っていた。

「良かったら、少し持って行ってちようだいな」

そう言いながら、卵を小さな袋に小分けにして、しろはに手渡してくれた。

「わあ。佐藤さん、ありがとうございます」

「いつも鳴瀬さんには魚を分けてもらってるから、そのお礼ね。それじゃ」

俺たちに爽やかに手を振ると、しろはに佐藤さんと呼ばれた女性は、そのまま去っていった。大きな袋にはまだまだ卵が入っているみたいだし、これから配り歩くんだろうか。

「……今の人、誰でしたっけ。見覚えはあるんですけど」

その後ろ姿が見えなくなった直後、夏海ちゃんが首をかしげながらそう聞いてきた。

「夏海ちゃん、覚えてない？ 今の人、昨日婦人会の一員として私の家に来てた人だよ」

「あ。あの時、炊き出しをしてくれた人ですか？」

「そう。佐藤さんは今、島の婦人会長さんをやってくれるの」

しろはが夏海ちゃんへ、そう説明してくれた。そうだったのか。それなら、見覚えがあるのも納得だった。

「佐藤さん、昔は本土の漁協に務めていたんだって。そこで、行き倒れになっていた旅人にボーリング球くらいの大きさのおにぎりを渡して、命を助けたことがあるとかないとか」

「え、なにそれ」

俺も思わず会話に入る。若い頃に神戸の老舗洋菓子店で修業したことがある木戸のおばーちゃんといい、この島には印象的な経歴を持つ住民が多い気がする。

「おお、しろはちゃんじゃないか」

そんなことを考えていると、今度はおじさんに声をかけられて、キャベツと大根、海苔の佃煮を渡された。昨日に続いて、もらいものだらけだ。

そろそろ、加藤家の冷蔵庫のキャパシティーをオーバーしそうなんだけど、大丈夫かな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅すると、しろはは野菜や卵の入った袋を持って台所へ行き、さつそく朝ごはんの準備に取り掛かってくれる。

しろはのじーさんも戻ってきていたので、俺と夏海ちゃん、そして鏡子さんを加えた四人で居間に座り、朝食ができるのを待つ。

「ごぼとさん、今日はどんな魚が釣れたんですか？」

「今日はタイとアジだな。後、珍しい魚が獲れたから、持って帰ってきた。夕飯を楽しみにしているといい」

「はい！ 楽しみにしています！」

相変わらず夏海ちゃんが場を繋いでくれるから頼もしかった。とここで、珍しい魚って何だろう。

「はい、おまちどうさま」

しばらくして、しろはが人数分の朝ごはんを運んできてくれた。

今朝の献立は炊きたてのごはん、キャベツや豆腐、ニンジンが入った具だくさんの味噌汁、海苔の佃煮、そしてメインのおかずは佐藤さんからもらった卵を使った目玉焼きだった。うん、どれも美味しそうだ。

「それじゃ、いただきますでしょうか」

「いただきますーす」

エプロンを外したしろはが食卓に着いた後、例によって家主の鏡子さんの言葉を待って、食事を始める。

最初に、味噌汁をすすする。うん。キャベツの甘味が味噌と出汁の中に溶け込んで、美味しい。

次にごはんを手にして、海苔の佃煮に箸を伸ばす。

「……この佃煮、なんか既製品とは違う気がするんだけど」

「うん。島で獲れた海苔を使った手作りらしいの。さっき味見したけど、美味しかったよ」

「どれどれ」

俺は佃煮をごはんの上に乗せて、一口食べてみる。

「おお、うまい」

甘辛く煮た海苔はご飯のお供として最高だ。これだけでいくらでもご飯が進む。

「ふふ、しっかり食べて、今日の作業も頑張らないとね」

「朝から食いすぎて、腹を壊したりせんようにな」

「わ、わかってますって」

そんな俺たちの様子を、大人たちが温かい目で見てくれている。

「ねえ、おしようにゆ取って、おとーさん」

「ああ、いいよ……って、おとーさん!？」

「……はっ。すみません。つい」

急におとーさん呼ばわりされて、思わず隣を見る。夏海ちゃんが口元に手を当てて、顔を赤くしていた。べ、別に良いけどさ。

「まるで家族で食事をしてるみたいなのでその、口が滑っちゃいました」

「でも、おとーさんはないよ……せめて、おにーちゃんとかさ……」
俺は複雑な心境のまま、ごはんをかき込む。

……でも確かに、こうやって見渡してみると、夏海ちゃんの言う通りだった。

それまでは鏡子さんだけが住んでいた加藤家に、夏の間だけとはいえ俺や夏海ちゃんがやってきて、今は新たにしろはとそのじーさんが加わった共同生活。

本来は他人同士なのに、いつの間にか一つの家族のように馴染んでいる。そんな不思議な感覚がそこにはあった。

「やっぱり、目玉焼きにはおしょうゆが一番ですね!」

そんな中、笑顔で目玉焼きにしょうゆをかける夏海ちゃんを見ていたら、ある疑問が浮かんだ。

「夏海ちゃんって、関西出身なんだよね? 目玉焼きにはソースじゃないの?」

「はい? なんでソースなんです? 普通はおしょうゆですよね?」

夏海ちゃんは同意を求めるように他の皆の顔を見る。

しかし、その場にいる皆は夏海ちゃんの意見に同意することなく、一様に視線を泳がせていた。

「えーっと、羽依里は目玉焼きになにかけるの?」

微妙な空気の中、しろはが俺にそう聞いてきた。

「えっと、普段ならケチャップかな」

俺は正直にそう答える。島にいる今でこそ、朝はチャーハン派……じゃない、ご飯派になってるけど、本来ならパン派だし。パンに合うという意味でも、目玉焼きにはケチャップが一番だと思っている。

「……ケチャップだと? これだから、都会の人間は」

「本当。羽依里、それだけはやめた方がいいよ」

「羽依里君、ケチャップはほどほどにね」

え、そこ怒られるところなの?

変わってるのは自覚していたけど、まさか三人揃って否定されるとは思わなかった。

「じゃあ、しろはは何かけるの?」

「私は塩かな。おじーちゃんは素材本来の味が一番って言って何もか
けないんだけど、私はそれだと、どうしても味気なくて」

そう言うしろはの手元には、台所から持ってきたらしい、小瓶に
入った塩が置かれていた。

「じゃあ、鏡子さんは何をかけるんですか？」

炊きたてのごはんの上に半熟の黄身を広げながら、夏海ちゃんがそ
う質問する。

「私はなんでも。その日の気分かな」

鏡子さんがそう言う。この人はかなりの偏食だし、すごいものかけ
たりするんじゃないだろうか。

「あ、ひでんソースの時もあるね」

なんだろう。加藤家秘伝のソースとかあるんだろうか。なんにし
ても、鏡子さんの作ったものだし、深く言及しないほうが良さそうだ。
もし出されたりしたら、断り辛いし。

……その後は思い思いに食事を楽しみ、食後は昨日と同じように準
備をして、全員で鳴瀬家へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に着いてみると、子供たちや青年団、少年団といった島民に
混ざって、見慣れない作業服の集団がいた。なんだろう、あの人たち
のみきなら事情を知ってそうだけど、見たところ、青年団との打ち
合わせの真っ最中だ。声をかけるのは憚られる。

「あ、羽依里——！ しろしろ——！」

その時、鷗の声が聞こえた。どこからだろうと思つて周囲を見渡し
てみると、先の集団の中心にその姿を見つけた。隣には、母親の鷺さ
んの姿も見える。

「おかーさん、あの人たちがそうだよ！」

鷗はそう言いながら、鷺さんと一緒に俺たちの方にやってきた。

「鳴、変な人たちに囲まれてたけど、なんかあったのか」

「変な人たちじゃないよ！ おかーさんの会社の人たち！ 今日の作業を手伝ってくれることになったの！」

「え、会社の人？」

「うん！ その道のプロフェッショナルだよ！」

鳴の突然の発表に、俺たちが頭の上に疑問符を浮かべていると……隣鷺さんが一歩前に出る。

「皆さん、この場に似つかわしくない格好ですみません」

作業着やTシャツ等、作業向けの格好をしている俺たちに対し、鷺さんは普段着だった。どうも、作業を手伝いに来てくれた感じじやなさそうさ。

「今回、縁あってこちらの裏山に防護柵を設置させてもらうことになりました。作業員の皆さん、こちらが家主の鳴瀬さんと、孫娘のしろはさんです」

鷺さんにそう紹介され、作業服を着た人たちが集まってきた。代表のような人が二人に挨拶をすると、じーさんもしろはも、呆気にとられたような顔で受け答えをしていた。

「……あの人たちは普段、島の南側にある会社で土木関係の仕事をしている人たちだそうさ。今回、無償で手伝ってくれることになった」その時、青年団との話し合いを終えたいらしいのみきが俺の隣にやって来て、そう教えてくれた。

そういえば島の南側……七ヶ浜がある辺りは、とある企業の私有地だと、のみきが言っていた気がする。

でも、そんなすごい人たちが、どうして手伝ってくれるんだろう。「……作業員の皆さん、本日はお休みのところ、本当に申し訳ありません。まさか私に相談もなく、娘が直接電話をするなんて思わなくて」「良いってことですよ。社長の娘さんの頼みとあっちゃ、断れないですしね」

「そうッスよ。友達の力になりたいって、泣かせる話じゃないッスか」……鷺さんと作業員の会話を聞く限り、どうやら鳴が手配してくれたりらしい。かなり、強引なやり方だったみたいだけど。

「鳴、ありがとうな」

俺は鳴の近くに寄って、そうお礼を言う。

「お礼なんていいよ。私がやりたかっただけだし」

そう言って笑うけど、大人に協力してもらうのは簡単じゃなかったはずだ。しろはのために、鳴がそこまでしてくれるなんて。その行動力には本当に驚嘆するばかりだった。

「……ところで鳴、鷺さんって社長なの？ あの人、童話作家じゃなかったっけ？」

「よくわからないけど、本の印税を元手に、色々な所でお仕事してるみたい」

気になっていた疑問を思い切って聞いてみたら、そんな答えが返ってきた。娘によくわからないと言われている辺り、本当に謎な人だ。以前も、大量のスーツケースを買い取ってくれたりしたし。

でもその人脈のおかげで、いつになるかもわからなかった防護柵がすぐに設置してもらえることになったんだから、本当にありがたい話だった。

その後、全員に改めて作業員の皆さんが紹介された後、各々の割り振りが決められて、今日の作業が始まった。

「よーし、慎重に運べよー！ 落として壊したら、お前らの給料から天引くからな！」

「勘弁してくださいよ。いくらすると思ってるんすか！」

作業が始まると、作業員の皆さんはすぐに小型の機械を鳴瀬家の裏手に運び込んでいた。どうやら、掘削用の機械らしい。

既に下の道に資材を満載したトラックを待機させているらしく、掘削機械の設置が終わり次第、一気に作業を進めるとのことだった。

「裏山の方はあの人たちに任せて大丈夫みたいだね。羽依里、私たちは自分の仕事をしよう？」

「ああ、そうだな」

しろはからそう声をかけられ、俺は表の庭へと向かう。防護柵の設置状況も気になるけど、まずは自分たちの作業に集中しないと。

俺たちの作業は昨日と同じく、庭に残った土砂の除去だ。今日は朝から空門姉妹や紬、静久も手伝いに来てくれていた。

「皆、手伝うよ」

「おう。羽依里、筋肉痛になってんじやねーか？」

「だ、大丈夫だ。大したことない」

良一がそう言いながら、俺の肩を軽く叩いてきた。実際はかなり痛いけど、気にしてる場合じゃない。

「まったく、先が思いやられますね」

「無理はしないようにねー」

やせ我慢しているのがバレバレだったみたいで、藍はジト目で、蒼は笑顔で、それぞれこつちを見ていた。

「さあ紬、この動きはかなりクーパー靱帯のトレーニングになるのよ！」

「はい！ 頑張りますよ！」

そんな空門姉妹から少し離れたところでは、紬と静久が移植ごてを手にして、砂袋に土砂を詰めていた。

静久は髪をおだんごに纏め、紬はポニーテールにしていた。二人とも髪が長いから、汚さないようにするのが大変そうだ。

ちなみに、今日は昨日のようなローラー作戦ではなく、皆で散開して目についた土砂を砂袋に詰める作業だった。一見綺麗になっている庭も、塀の陰や花壇の隙間、植込みの奥など、よく見ると所々に土砂が残っていた。

その土砂の除去もあらかた終わると、今度は青年団の人が長めのホースを用意してくれ、鳴瀬家の水道を使って壁の汚れを洗い流す。

土砂が残っているときに水を流すと、その土砂が水を吸って重くなるから良くないらしい。

「いきますよー。それー！」

意気揚々とホースを手にした紬が、凄く楽しそうに壁に水をかける。

現に楽しいのか、土砂が無くなって手持ち無沙汰になった子供たちも集まってきていた。

壁に跳ね返った水を浴びて、びしょびしょの泥まみれになっていたけど、既に皆散々汚れているし、黙々と作業するより、たまにはこういうのもいいかもしれない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆さーん、お昼ご飯を持ってきましたよー」

もう少しでお昼と言う頃になって、昨日と同じように島の婦人会の皆さんが昼食を持って来てくれた。

「皆さん、少し早いですがキリが良いですので、お昼休憩にしましょう！」

その様子を見た青年団の人がそう号令をかけて、いったん休憩時間となる。

皆が続々と給水所や水道へ向かう中、俺は一人、裏山の方へ向かった。

休憩時間であることを伝える意味もあったけど、防護柵がどうなったのか、気になっていたし。

「皆さん、お昼休憩らしいですよ。島の婦人会でお昼を用意してますので、良かったらどうぞ」

作業員の皆さんにそう伝えながら、裏山を見渡してみる。

「おお、すごいですね」

見ると、山の縁に沿うように鉄製の柵が埋め込まれていた。あれがあるだけで、一気に安心感が増す。

「坊主、これくらいで驚かれちゃ困るぜ。今はまだ基礎部分を樹脂で固めてる最中だ。樹脂が固まったら、まだまだ柵を高くするぜ」

現場監督風の男性がタバコを出しながら、こんなの朝飯前だと言わんばかりの表情でそう言っていた。

「……いや、職人の技術というものは、すごいものだな」

いつの間にか、俺の隣にのみきが来ていた。確かに、協調性では俺たちも負けないけど、一人一人の技術力が違う。この人たちに任せていれば、本当に大丈夫だろう。

その後、俺は作業員の皆さんと一緒に庭の方へ戻り、昼食をいただくことにした。

今日も昨日と同じように、たくさんのおにぎりを用意されていた。どうやら今回はおにぎりによって具が違うらしい。

「おにーさん、まだ食べてないみたいだね」

どのおにぎりにしようか迷っていると、一人の女性から声をかけられた。この人、朝に会った……確か、佐藤さんだっけ。

「ええ、どのおにぎりも美味しそうで」

「そうだねえ。なんなら、色々な具が楽しめる、とびきり大きいのがあるけど、それにするかい？」

「はい。それじゃ、そのとびきり大きいのを貰えますか」

しっかりと作業した後でお腹が空いていたので、思わずそう注文をする。

「はいよ。とびきり大きいのね」

……次の瞬間、目の前にあるのは別の箱から、まるでボーリング球のような巨大なおにぎりが出てきた。

「大きすぎて、誰も取らなかつたんだよ。おにーさん若いし、これくらい食べられるよね？」

「は、はい。いただきます」

自分からとびきり大きいのを……と頼んだ手前、今更突き返すわけにもいかなかった。俺はずっしりと重いおにぎりと麦茶を手に、適当な場所で腰を下ろす。

「しまった……しろはの言っていた、佐藤さんの話は本当だったのか」
俺は手元のボーリング球……じゃない。おにぎりを見つめながら、大きくため息をついた。

「でも、受け取った手前、食べないとな……礼儀だし」

俺は意を決して巨大なおにぎりにかじりつく。

「あ、美味しい」

いわゆる爆弾おにぎりと言うやつだった。色々な食材が入っているのか、一口かじることには違う味がする。これは飽きなくていいかも。量はものすごいけど。

「パイリ君、どうしてそんなおっぱいみたいなおにぎりを食べているの？」

「おおー、おつきなおにぎりですね！」

ボーリングおにぎりに悪戦苦闘していると、静久と紬がこっちにやってきた。

「いやその、色々あつてさ……そういえば二人とも、もうお昼は済ませたの？」

「ごめんね。もう済ませちゃったのよ」

「はい！ コンブの入ったおにぎりをいただきました！」

「そっか……」

まだ食べてなかったら、口をつけてない裏の方とか加勢してほしかったんだけど。そういうわけにはいかないみたいだ。

「タカハラさん、頑張ってください！」

紬がポニーテールを揺らしながら、そう応援してくれる。

「……紬から『がお』って言われたら、頑張れるかも」

「むぎゅ？」

「パイリ君、現実逃避してないで、頑張つて食べないと。もうすぐお昼休憩が終わっちゃうわよ」

「わ、わかった。頑張るよ」

その後も二人に応援されながら頑張ったけど、結局半分くらいしか食べられなかった。残りは持って帰って、しろはにアレンジしてもらおう……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

庭の方があらかた片付いたということで、午後からは皆で家の中に入り、じーさんの部屋の畳と床板をあげて、床下の土砂の除去作業を行った。

古い日本家屋だけあって、大きな石が土台として置かれ、その上に床を支えるように木材が組み合わされていた。

「羽依里さーん、大丈夫ですかー？」

夏海ちゃんやしろはが心配そうに見下ろす中、俺やじーさん、良一をはじめとした男性陣が、土台を傷つけないようにしながら慎重に土砂をスコップでかき集めて、砂袋に詰めていく。

いっぱいになった砂袋はそのまま床上に持ち上げて、外へと運び出される。この作業を何度も繰り返した。

流れ込んでいる土砂はそこまで多くないけど、この手の家は床下の通気が大事らしく、念入りに作業が行われた。

「根太や根がらみも大丈夫のようだな。これなら、一安心だ」

そんな作業の中で、じーさんがそう言っていた。部位の名前はよくわからなかったけど、安心してみたいだった。

「……よし、もういいだろう」

やがて、しろはのじーさんの一声で、床下の作業が終了する。

道具を片付けて、皆と一緒に外へ出てみると、作業員の皆さんも表に戻って来ていた。

どうやら、防護柵も完成したらしい。せつかくなので、皆で見に行ってみることにした。

「おおー、すごいですー！」

「これは圧巻だな……」

そこにはテレビでよく見るような、立派な防護柵が出来上がっていた。これ、全部手作業でやったのか。あの人たちすごい。さすがプロだった。

「……よもや、ここまで立派なものができるとは思わなかった。礼を言う」

「皆さん、ありがとうございます」

その時、しろはとじーさんが作業員たちにそうお礼を言って、頭を下げていた。

「良いつて事よ。俺たちも島の皆には世話になつてゐるんだ。ここらで恩返しの一つでもしておかねえとな」

現場監督がそう言うと、そうだそうだと他の作業員も続く。

「防護柵だけでなく、裏山の土砂の処理もしてくれたんですね。ありがとうございます」

直後、青年団の人がそうお礼を言う。言われてみれば、手付かずだったはずの裏山の土砂がいつの間になくなっていて、端の方に大量の砂袋が積まれていた。

「ああ、掘削用の機械を入れる必要があったしな。邪魔な土砂を先にとかしたただけだ。ついでだよ、ついで」

そして豪快に笑う。でも、これは絶対についでにできる量じゃない。

作業員の皆は技術だけじゃなく、男気や人情も持ち合わせた、すごい人たちだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、裏山の安全が確保されたということで、大人たちや関係者だけで一度話し合いを持つということになり、俺たちはお役御免となった。

その話し合いに参加するとのことで、じーさんやしろは、鏡子さんは鳴瀬家に残ったため、俺は夏海ちゃんと二人で加藤家に帰宅する。

帰宅してすぐに風呂を沸かして、全身の汚れを落とす。その後はや

ることもなくなり、暇になってしまった。

「……ふう、さっぱりした」

入浴を終えて居間に行ってみると、夏海ちゃんが畳の上に寝っ転がって、特に興味もなさそうにテレビ画面を眺めていた。

俺もその隣に腰を下ろして、テレビを見ている。

『天王寺先生のー、ガチの園芸ー!』

テレビでは国営放送がついていて、園芸番組をやっていた。どうも、趣味レベルじゃないらしい。ガチの園芸のようだった。

『皆さんこんにちわ。本日の講師は、昨今のガーデニング界に旋風を巻き起こしている、天王寺小鳥先生です!』

『どもー』

女性司会者に紹介されて、髪の毛長い女性が画面に出てきた。花の形をした髪留めをしていて、なんというか、独特の雰囲気を持つ先生だった。

『では、今日はアサガオの種を収穫します』

そう言いながら、二人はアサガオの鉢植えの前に移動する。そういえば、もうそんな時期かな。

画面にズームアップされたアサガオは茎を含めた全体が茶色く変色し、カラカラに乾いていた。

『こんな感じの色になったら、なるべく早めに収穫した方がいいよ。ほっとくと、種が弾けて飛んでいっちゃうから』

『中には熟していない種もありますよね。早く収穫しすぎた場合、どうすればいいですか?』

『適当に紙の上に並べて陰干しして、しっかりと乾燥させればいいよ』
先生は話しながらも、慣れた手つきでひよいひよいと種を摘んでいた。

『あ、でもアサガオで乾かしているのは種だけだよ。他の部分を乾かすと、おやばいことになる。詳しくは言わないけどさ』

え、おやばいことって何だろう。そこで話を切られると、逆にすごく気になる。

『……うちのダンナも頑張つて稼いでいるんだけど、やっぱりツヤスコの謝辞デーはやめられないねー』

その後は、トークが急に俗世な話題になっていった。一方で番組内容は秋に向けてのコスモスの苗植え指南へと変わり、専門的な肥料の名前がズラズラと並べられていた。バーミキュライトつてなんだろう。強そうだけど。

「本当にガチの園芸だね……」

「はい。なんだか頭痛くなってきました……」

先生は個性的だったけど、内容は本当にガチだった。俺と夏海ちゃんは二人揃って畳に突っ伏して、脱力する。

「うーん……」

俺はその体勢のまま首を動かし、壁の時計を見る。時間は15時前といったところだ。まだまだ日は高い。

「そうだ夏海ちゃん、今から駄菓子屋に行ってみない？」

「え、駄菓子屋ですか？」

「うん。かき氷でも食べようよ」

「いいですね。行きましよう！」

待つてましたとばかりにぴよんと跳ね起きると、ぱたぱたと玄関の方へと走って行ってしまった。

「よっぽど暇だったんだろうなあ……」

俺は苦笑しながらポケットに財布を突っ込むと、夏海ちゃんの後を追った。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夏海ちゃんと二人、駄菓子屋に向かって歩く。昼下がりを少し過ぎた、暑さの盛りだ。外を歩いている人の姿はまったくくない。

「……ところで、トキアミなんだけどさ」

「はい!? い、いきなりその話題を出さないでください!」

ふと気になることがあって、そう切り出してみる。夏海ちゃんは驚いたらしく、目を白黒させていた。

「ごめんごめん、二人つきりだし、良いかと思つて」

「それはまあ、いいですけど……」

夏海ちゃんはキョロキョロと周囲を気にしている。誰もいないし、そこまで神経質にならなくても。

「それで、トキアミがどうしたんですか?」

「少し気になったんだけど、そのトキアミにさ、川とか流れてなかった?」

「川ですか? そんなもの見えませんでしたよ。どこまでも花畑が続いてました。変な質問しますね?」

「ほら、三途の川があるとしたら、そこなつて思つただけ」

「……遠くに白い塔みたいなのがあつたような気もしますが、川なんてなかったですよ」

「そつか……残念。貴重な体験を聞けるかと思つただけ。オカルト好きとして、気になつてさ」

「むー。羽依里さん、三途の川とか非現実的なこと言うのやめてください」

非現実の塊みたいな子に、そう言われてしまった。

「じゃあ、今度は七影蝶についてなんだけど」

「今度は何ですか?」

あからさまに不機嫌そうだった。ちよつと最初にふざけすぎたかな。

「七影蝶は死者の強い思いの残滓が具現化したものなんだよね。それじゃ、夏海ちゃんの持つてた『思い』って何?」

「……え?」

俺からの質問に、夏海ちゃんは呆気にとられたような顔をしていた。今まで考えたことが無かつたんだろうか。

「急にそう言われても……私、トキアミを通る前のことはあまり覚えては……あ」

夏海ちゃんは口元に手を当てて少し考えて……何かを思い出したみたいにはつとなる。

「トキアミに来るきつかけになったあの時……階段から落ちて、意識を失う直前。『一度でいいから、お友達と一緒に、楽しい夏休みを過ごしたかった』って心の底から思ったんですよ」

「つまり、それが夏海ちゃんの思いであり、願いなわけなんだね」

「はい。しかもそれ、叶っちゃってます。私は今、お友達……と呼んでは失礼かもしれないですけど、島の皆さんと一緒に、すごく楽しい夏休みを過ごさせてもらってます。叶っちゃってますよ……」

夏海ちゃんは自分の発言の意味をかみしめるように、うん、うんと頷いていた。

やっぱり、夏海ちゃんは理由もなく瞳さんに呼ばれたわけじゃないらしい。

鏡子さんの姪ということで、島に縁があるのもそうだけど、今の夏海ちゃんは『楽しい夏休みを過ごしたい』という同じ思いを持った七影蝶の集合体でもあるのかもしれない。

「そう、さしずめ夏海ちゃんは……思い出の渡り鳥」

「はい？ 私がなんですか？」

「い、いや、なんでもないよ」

考えに浸っているうちに、変な思考になっちゃったみたいだ。暑さにやられかけているのかもしれないし、駄菓子屋に急ごう。

「くーださーいな」

「……誰も居ないみたいですね」

駄菓子屋に到着し、店の中に声をかけてみるけど、見事に無人だった。店番の空門姉妹はおろか、おばーちゃんの姿もない。

「くーださーいなー！」

もう一度、少し大きめの声で呼びかけてみるけど、やっぱり誰も出てこない。

よく見ると、カウンターのところに小さなザルとメモが置かれてい

て、メモには『お代はごちらへ』と書かれていた。信じたくないけど、やっぱり無人販売になっっているみたいだ。

「……いつも思うんですけど、これってすごいシステムですよね」

夏海ちゃんがそのメモを見ながらそう言う。確かに、島ならではだと思っけど。

「でも、これじゃかき氷が食べられないね」

「そうですね……」

無人販売だからと言って、勝手にかき氷を作るわけにもいかない。これはどうしたものか。

俺と夏海ちゃんは落胆しながら、店を出る。するとその時、店の脇に置かれたガチャポンが目にとまった。

「……そうだ夏海ちゃん、ちよつとこのガチャポンでもやってみない？ やってるうちに、おばーちゃんや店番の蒼たちが戻ってくるかもしれないしさ」

「あ、やってみたいですー！」

何の気なしにそう提案したけど、思いのほか、夏海ちゃんは乗り気だった。

「こういうのって普段は学校で禁止されてたので、気になってたんです！ どんなものが入ってるんですかね？」

夏海ちゃんは嬉々としてガチャポンの方へ向かっていく。そういえば、最近はガチャポンを禁止にしている学校があるって聞いたことがある。

「えーつと……」

俺もそんな夏海ちゃんの後を追っていき、一緒にガチャポンのラインナップを見てみる。

『当たりを入れる事だけは忘れなかった……鳥白島セレクション』

『夏の今こそ冬を！ k a n o n セレクション』

『ガチャ結果を書き換えることができるだろうか……Rewriteガチャ』

『爆死必須!? 死んだ世界戦線ガチャ』

俺たちの眼前には、四つの筐体が並んでいた。どれも煌びやかな虹色の配色がされていて、ものすごく派手だった。

「夏海ちゃん、どれ回してみる？」

「そ、そうですね……これだけあると、悩みますね」

夏海ちゃんは百円玉を握りしめて、目移りしているようだった。なんとというか、すごく微笑ましい。

「……決めました！ これにします！」

悩んだ末、夏海ちゃんが選んだのは、死んだ世界戦線ガチャだった。

「百円入れて……ガラガラポン、と……」

夏海ちゃんがハンドルを回すと、中から青いカプセルが出てきた。

「……ミニチュア版、天使フィギュア。麻婆豆腐つき……なんですかねこれ」

カプセルの中には、小さなソフビ人形が入っていた。よくわからなけれど、当たり前なんだろうか。

「それじゃ、俺はこのガチャポンを回してみよう」

俺が選んだのは、k a n o n セレクションと書かれた筐体だった。とりあえず百円を入れて、ハンドルを回す。

かこん。という音がして、白いカプセルが出てきた。

カプセルを開けてみると、中には小さなカエルのような形をしたデジタル時計が入っていた。

一緒に入っていた説明書を読んでもみると、どうやらこれは音声を録音できるタイプの目覚まし時計らしい。

「え、目覚まし時計ですか？ そんなに小さいのに、すごいですね」

夏海ちゃんが興味津々で覗き込んできた。色々弄ってみると、背面に音声再生のボタンがあったので、絶縁テープを抜いた後、試しに押ししてみる。

『あさー。あさだよー。朝ごはん食べて、学校行くよー』

次の瞬間、昼下がりの住宅地に、何とも言えない声が響き渡った。

「え、何ですか今の」

……もう一度押してみる。

『あさー。あさだよー。朝ごはん食べて、学校行くよー』

音声の内容的には起こそうとしているみたいだけど、聞いてると逆に眠たくなるのはなんでだろう。

『あさー。あさだ』

俺は何とも言えない虚無感を感じて、スイッチを切った。よくわからないけど、たぶんハズレっぽかった。

「……お？ 二人して、何やってんだ？」

その時、背後から声がした。振り返ってみると、良一と天善が立っていた。

「あ、良一さんに天善さん、こんにちはです！」

「ちーっす」

「良一たちも、駄菓子屋に用事なのか？」

「ああ、今日も暑いし、かき氷でも食べようと思っただけ」

「楽しみにしているとこ悪いけど、今は店に誰もいないぞ」

「なに!？」

驚いた良一が店の中に飛び込んでいく。そしてすぐに、肩を落とすて戻ってきた。

「よりによって無人かよ……この炎天下の中歩いてきたってのに、そりゃないぜ……」

「私たちもかき氷を食べに来たんですけど、誰もいなくてですね。時間が経てば誰か戻ってくるんじゃないかと思いましたが、こうしてガチャポンをしていたんです」

夏海ちゃんが俺に代わって、そう説明をしてくれていた。かき氷難民という点では、俺たちは同類だった。

「そういうことか。これも何かの縁だし、俺たちも久しぶりにガチャポンをやってみるか」

「え、いいのか？」

「おう、どーせ暇になったしな」

良一はそう言うと、ポケットから百円玉を取り出し『鳥白島セレクション』の筐体へと投じる。

「いくぜ！ ガラガラポン……っつと」

かこん、と音がして青色のカプセルが出てきた。

良一がそのカプセルを開けると、中には小さな水鉄砲が入っていた。

「ミ、ミニチュア版、ハイドログラディエーター改!？」

一緒に入っていた説明書を読んだ良一が愕然としていた。

「うう、トラウマがよみがえってくるぜ……」

自分の身体を抱きながら震えている。今年の夏だけじゃなく、俺が知らない夏にも、あの水鉄砲で酷い目に遭ったんだろうか。

「でもほら、このミニグラディエーター改、ちゃんと水も入って撃てるみたいですよ！ 凝ってますよね！」

夏海ちゃんがそう取り繕っていたけど、全然フォローになってない気がする。

「……なあ羽依里、お前も何か当てたんだろ？ これと交換してくれないか？」

「え、俺？」

良一はそう言いながら、涙目で俺にすがりついてきた。

「こんなの持ってたら、夢に見そうなんだ。頼む！」

「そう言われても、俺の当たりはこの目覚まし時計しかないんだけど」俺はそう言いながら、ポケットからカエルの目覚まし時計を取り出す。

「もう、この際何でもいい！ 交換してくれ！」

良一は俺の手から目覚まし時計を奪い取ると、ミニグラディエーター改を押し付けてきた。そこまで毛嫌いしなくても。

「うう、れいげんいやちこなれ……!」

良一は電信柱の陰でうずくまって、どこかで聞いたことある呪文を呟きながら震えていた。まあ、少ししたら元に戻るだろうし、放っておこう。

「ところで、天善はどのガチャポンを回すんだ？」

「そうだな……俺もこれにしよう」

天善も良一と同じく、鳥白島セレクションを選択してみたんだ。

「いくぞ。ガラガラポン！」

そして、元気よくハンドルを回す。

……どうでもいいけど、なんで皆ガチャポン回すとき『ガラガラポン』って言うんだろう。言わない俺がおかしいのかな。

「……む？」

出てきたカプセルの中には、袋に入った粉みたいなものがいくつも入っていた。

「これは懐かしいな。シーウツキーだ」

「え、シーウツキーだって!？」

久しぶりに聞いた単語に、俺は懐かしさを覚えた。あれって、まだあつたんだ。

「いやー、懐かしいな」

「……あの、シーウツキーってなんですか？」

そんな俺に対して、夏海ちゃんは頭に疑問符を浮かべていた。確かに、今の子はあまり知らないかもしれない。

「この粉を水道水に溶かした後、こっちの卵を入れると、小さなエビみたいな生物が育つんだよ」

「え、これって、生き物なんですか？」

卵の入った袋を日の光に透かすように見ながら、夏海ちゃんが驚きの声を上げていた。俺も小さい頃は、太古の昔から姿形が変わらないという宣伝文句に心躍った記憶がある。

「夏海、夏休みの自由研究にどうだ？ 今時は逆に、珍しいと思うぞ？」

「い、いえ、遠慮しておきますー!」

夏海ちゃんが手を振ったその時、手に持っていた天使のフィギュアが地面に落ちて、ころころと天善の足元へ転がっていった。

「……なっ!？」

それを見た瞬間、天善が驚愕の表情を見せる。

「その人形はまさか、激レアなやつじゃないのか？」

「え、これがですか？」

夏海ちゃんは反射的に、拾った天使の人形を見やる。どこにでもありそうな人形なただけ。

「……夏海、それと交換してくれないか」

「もしかして、そのシーウツキーとですか？ 嫌ですよ！」

手のひらサイズのフィギュアを両手で包み込むようにして守っていた。本気で嫌がっているみたいだ。

「頼む。この通りだ！」

「ええええ」

天善はその場で土下座を始めた。夏海ちゃんは完全に引いてる。そこまでして、この人形が欲しいのだろうか。

「頼む！」

「……わ、わかりました！ 交換します！ 交換しますよ！」

結局、強引に押し切られる形で、天使のフィギュアは天善のものとなってしまった。天善があそこまでするなんて。あの人形に何があるんだろう。

「……夏海、無理を言って済まなかったな。ほら良一、帰るぞ」

「あ、ああ。悪いが天善、肩を貸してくれ。腰が抜けちゃって、自力じゃ歩けそうにない……」

まるで二人三脚のようにしながら良一と天善が去っていった後、俺と夏海ちゃんの手元にはミニハイドロ砲とシーウツキーが残された。

「えーと、それで夏海ちゃん、そのシーウツキー、育てるの？」

「いや、育てないですから」

明らかに不機嫌になってる。声のトーンも下がってるし、俺の方を睨まないで。

「くーださーいなー」

その時、店の方で聞き慣れた声があった。見てみると、いつの間にか鴟とのみきがやって来ていた。

「二人とも、今は無人販売みたいだぞ」

「え、そうなの？」

二人揃って鴟……いや、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていたので、俺は状況を説明する。

「なるほどな。おばーちゃんも蒼たちもいないのか」

「残念……かき氷、食べたかったんだけど」

「どうやら、この二人は役所での話し合いを終えた帰りらしく、打ち上げを兼ねて、かき氷でも食べようという話になっていたらしい。」

「……ところで、なつちゃんや羽依里が暇つぶしにやってたガチャポンってこれ？」

「鴉は興味津々と言った様子で、ガチャポンの筐体を見ている。かき氷の件は、すっぱりと諦めたみたいだ。」

「はい、それです！」

「……よし、私も冒険してみよう。ガラガラポン……つと」

そして次の瞬間、百円玉を取り出してkanonセレクションガチャを回していた。

「おお、何が出た」

転がり出てきたカプセルを開けると、中には小さな天使の人形が入っていた。

「あ、かわいいですね」

「鴉の手のひらのそれを、夏海ちゃんが羨ましそうに見ていた。」

「このお人形は、三つまで願いを叶えてくれるお人形なんです……だって」

「鴉と一緒に入っていた説明書を見ながらそう言っていた。理由はよくわからないけど、女の子はそういうのが好きそうだな。」

「よし、ここはのみきさんも冒険してみよう！」

「なに、私もか？」

「続けて、鴉がのみきにもガチャポンを勧めていた。最初は渋っていたけど、鴉の勢いに負けて、死んだ世界戦線ガチャの筐体の前に立つ。」

「ガラガラポン……と」

「おずおずとハンドルを回して、出てきたカプセルを開けると、中から小さな機械が出てきた。俺が当てた目覚まし時計とはまた違う形をしている。」

「これはなんだ？ ボタンがついているぞ？」

「押してみよう。ぽちつと」

訝しげに首をかしげるのみきの代わりに、鷗がそのボタンを押す。

『実は私、着痩せするタイプなんです！』

「……」

……なんか男の声がした。着痩せするタイプ？ なにそれ。

『実は私、着痩せするタイプなんです！』

のみきももう一度押ししてみる。何度聞いても同じ内容だった。

「なんだこれは。すごく恥ずかしい気分になるぞ」

「SSS、ボイスシリーズその④……らしいですね」

何とも言えない顔をしているのみきに、カプセルに残っていた説明書を見ながら、夏海ちゃんがそう告げていた。その④？ あんなのが後3つもあるのだろうか。

『実は私、着痩せするタイプなんです！』

「うーむ……」

のみきは何とも言えない顔をしている。どう考えても、これはハズレらしい。

「そ、そうだ！ 羽依里やなっちゃんもガチャポン回したんでしょ？

何が当たったの？」

そんな微妙な空気を感じ取ったのか、鷗がそう話題を振ってきた。

「俺たち？ これだけど」

元々当たった品は良一や天善と交換してしまったので、俺たちは手元にあつたミニハイドロ砲とシーウツキーを見せる。

「……なっちゃん、その粉何？」

「シーウツキーらしいです。この粉を水道水に入れて、その後こつちの卵を入れると、エビみたいな生き物が育つそうですよ」

「おお、なんか面白そう。なっちゃん、私のこの人形と、交換してくれない？」

「え。それは構わないですけど……」

「やったー！ なっちゃん、ありがとう！」

夏海ちゃんが差し出したシーウツキーを、鷗は笑顔で受け取っていた。確かに鷗は人形より、こつちの方が好きかもしれない。

「ところで、鷹原のそれは……なんだ？」

「ミニチュア版ハイドログラディエーター改らしいぞ。ちゃんと水も入るらしい」

「何？ ちょっと見せてもらっていいか？」

「ああ、いいよ」

俺から受け取ったミニハイドロ砲を、のみきは興味津々と言った様子で見っていた。いろいろ引つ張ったり、覗き込んだりしている。

「信じられないな……ハイドログラディエーター改は、言うまでもなく私のオリジナル水鉄砲だ。素材や製作工程は私の頭にしかなく、当然紙の設計図も存在しない。それをどうやってか、この大きさを再現するとは」

のみきが肩を震わせていた。設計図すら存在しないはずのものが、どうしてガチャポンから出てくるんだろう。不思議だった。

「鷹原、悪いがこれを譲ってはもらえないだろうか。色々調べてみたい」

「え、いいけど」

俺が持つていても仕方ないし。

「そうだ。ただというのも悪いし、私が当てたこの機械と交換ということにしよう」

のみきはそう言つて、ミニハイドロ砲の代わりに先の機械を手渡ししてくれた。

……正直、いらないんだけど。断れるような状況じゃなかった。

良一の時もそうだったけど、この島ではガチャポンで当てたものは捨てずに交換しないとイケない決まりでもあるのだろうか。

「羽依里、なっちゃん、それじゃーねー！」

「鷗さん、ありがとうございます！」

しばらくして、のみきと鷗は去っていた。

「えへへ、良い取引ができて、良かったですー！」

「そ、そうだね」

なんとも微妙だったシーウツキーから、可愛らしい天使の人形に変

わったわけだし。夏海ちゃんはすっかりご機嫌になって、天使の人形を手のひらで弄んでいた。

「……あ、タカハラさんとナツミさんです！」

そろそろ誰か帰ってこないかなと思っていると、今度は背後から聴き慣れた声があった。

振り返ってみると、紬がツイントールを揺らしながら、ぱたぱたとこつちに駆けてくるところだった。

「どもです」

「紬さん、どもです！」

二人は同じように右手をあげて挨拶をしていた。さすがズツ友だ。

「紬はどこか出かけていたの？」

それにしても、紬が一人で住宅地を歩いているのは珍しいんだけど。

「えとですね、シズクを港に送った帰りです！」

「ああ、そういうこと」

静久は昨日も灯台に泊まっていたって言ってたし、さすがに今日は早めに帰ったらしい。

「それで、お二人は何をしているのですか？」

「ああ、ガチャポンだよ」

「……ガチャポンと言うと、フリヨーのするアレですか」

その名前を聞いた紬が数歩後ずさった。

ちよつと待って。確かにガチャポンにはギャンブル要素があるけど、それは言いすぎだと思っただけだ。

「紬さん、ガチャポンは確かにちよつとリスキーですけど、こんなかわいいい人形も入っているんですよ」

そう言つて、手のひらに乗せた天使の人形を見せる。ところで夏海ちゃん、リスキーなんて言葉、どこで覚えたんだろう。

「おおー、それは可愛いです！」

「せっかくですし、紬さんもやってみませんか？」

「むむ……ナツミさんのおススメですし、なけなしの百円を使って、挑

戦してみることにします！」

紬はそう意気込み、Rewriteガチャに百円を投じる。

「あ」

「では、ガラガラポン！」

確か、天使の人形が入っていたのはkanonガチャだったけど……それを伝えるよりも早く、紬はハンドルを回していた。

「……むぎゆ？」

排出された緑色のカプセルから出てきたのは、俺が持っているのとそっくりな機械。どう見ても、人形じゃない。

「ボタンがあるので、押してみます」

紬は恐る恐る、その機械についたボタンを押す。

『セエイシユンツテエエーツツ！ ナンヤアアアアアー！』

「むぎゆ!？」

「ひえっ!？」

「うわっ!？」

突然、かなり大きな音量で男の声が流れた。

『セエイシユンツテエエーツツ！ ナンヤアアアアアー！』

紬がもう一度ボタンを押す。同じ声が流れた。考えたくないけど、これもハズレみたいだ。

「むぎぎぎぎぎぎ」

『セエイシユ、セエイシユ、セエイシユンツテエエーツツ！ ナンヤアアアアアー！』

悔しさがこみ上げてきたんだろうか。紬はボタンを連射する。

そしてその後、がっくりと肩を落とす。紬にしてみれば、なげなしの百円を使った結果がこれだし。見るに堪えない。

「つ、紬さん、この人形、あげます！ 交換しましょう！」

夏海ちゃんも同じ心境だったんだろう。持っていた天使の人形を紬に押し付け、代わりに紬の当たった品を受け取っていた。

「え、いいんですか？」

「はい！ その、大切にしてあげてください！」

「ナツミさん、ありがとうございます！ この人形はツキミヤさんと

「そう。この前の台風で、家の倉庫が壊れたとか言っていたねえ」
「そういえば昨日、空門姉妹は鳴瀬家に来るのが遅かった気がする。
何か用事でもあるんだろうと思ってはいたけど、まさかそんな事情が
あったなんて。」

「あの、羽依里さん」

その時、夏海ちゃんが訴えるような目で俺を見てきた。

「わかってる。手伝いに行こうか」

「はいー」

状況を知った俺たちは居ても立ってもいられず、空門家に向かうこ
とにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あれ、羽依里に夏海ちゃん?」

空門家の玄関前でインターホンを押そうかどうか悩んでいると、庭
にいた蒼から声をかけられた。

見ると蒼は大きな段ボールを抱えながら立っていて、その足元には
イナリの姿も見える。

「駄菓子屋のおばーちゃんから話を聞いて来たんだけど、空門の家も
台風の被害に遭ったんだって?」

「えー、あー。そ、そうなのよねー」

蒼はバツが悪そうにそう話す。もしかして、あまり知られたくな
かったんだろうか。

「大したことないんだけど、倉庫の屋根に穴が空いちやっつて」
「え、穴?」

「そう。小さな穴なんだけど、そこから雨水が入っちゃってね。藍と
片づけがてら、中の荷物がどんな感じかチェックしてたのよ」

「藍と二人だけでやってたのか? 言ってくれたら手伝うのに」
「いいのよ。しろはの家のほうが大変なんだから」

そう言つて笑う。もし俺たちに気づかれなかつたら、本当に二人だけをやつてしまつつもりだつたんだろうか。

「それはそうだけど、せつかくだから頼つてくれよ。水臭いぞ」
「そうですよ!」

俺と夏海ちゃん、揃つて笑顔を向ける。二人は鳴瀬家の片付けを手伝つてくれたし、今度は俺たちが力になる番だ。

「ありがとね。それじゃ、お言葉に甘えて、手伝ってもらおうかしら」
「ああ、任せてくれ」

「倉庫はこつちよ。ついてきて」
「ポンポン!」

俺たちは蒼とイナリに先導されて、家の裏手へと回る。そこには小さなプレハブの倉庫があつた。かなりの年代物のようで、本来白いであらう壁は所々苔むして、緑色になつていた。

「あれ、お二人も来てくれたんですか」

そこには三つ編み姿の藍がいた。髪が汚れるからだろうか。それにしても珍しいな。

「駄菓子屋のおばーちゃんから話を聞いたらしくてね。手伝いに来てくれたらしいのよ」

「そうなんですネ。おかーさんはパートで忙しいですし、おとーさんは帰国する目途も立たないみたいなので、正直、助かります」

「え、二人の父親って、どこか外国に行つてるのか?」
「えーっと、今はどこつて言つてたつて。コーヒーの国なんだけど」

「今はコロンビアにいるはずですよ」

コロンビアつてどこだつて。昆虫学者だけあつて、世界を股にかけてるみたいだ。

「それで、俺たちは何を手伝えばいいんだ?」

「そうですね。まずは倉庫の荷物を全部表に出しますから、それを手伝つてください」

「え、全部!」

「そうです。穴が開いたのは倉庫の一番奥の天井なので、まずは荷物を全部出さないといいけません」

そうなのか。よりもよって、一番奥だなんて。

「台風の時つてことは、やっぱり風で何か飛んできたのか？」

「たぶん、近所の田中さんちの屋根瓦が飛んできたんだと思うんだけどねー。うちの倉庫も古いし」

「そうですね。屋根瓦が飛んでこなくても、そのうち勝手に穴が開いたんじゃないですか？」

「そうよねー」

二人は同じ顔をして笑っていた。都会とかで同様の被害が出ると、やれ弁償だ保証だとかで近所トラブルになるって聞くけど。この島はそんな話とは無縁のようだった。

「それでですね。荷物を全部運び出した後、羽依里さんに雨漏りの応急処置をお願いしたいんですけど」

「……え、俺？」

「当然でしょう。まさか、女の子にさせるつもりじゃないですよね？」

藍が腰に手を当てながら睨んできた。ものすごく怖い。

「どのみち、あたしたちじゃ背が届かないし。脚立はあるから。お願いねー？」

それこそ倉庫にしまわれていたらしい脚立を指差しながら、蒼が笑顔で言う。

「お、おお。それくらい、朝飯前だよ」

この期に及んで、やったことないなんて言えない状況になってしまった。まあ、なんとかなるだろう。

「それじゃ、始めましょう。羽依里さん、表に出した荷物はこのブルーシートの上に運んでください。私たちが中身をチェックしますので」「ポンポンー」

「ここだよ！　と言わんばかりに、イナリがビニールシートの周りで飛び跳ねていた。

さつきから倉庫の近くにブルーシートが敷かれているのが気に

なっていたけど、そういう目的だったのか。

「わかった。それじゃ、片っ端から運び出すよ」

「よろしくお願いします。夏海ちゃんは私たちと一緒に、荷物整理をしましょう」

「はいー」

三人が和気あいあいとビニールシートの方へ向かう中、俺は一人、倉庫へと足を踏み入れる。

倉庫自身は広くないんだけど、中には大きささまざまな段ボール箱が隙間なく詰め込まれていた。

「……うわ、結構な量だな」

「うちのおとーさん、それこそ加藤のおばーちゃん並みに蒐集癖があるしね」

「全く、片付けるほうの身になって欲しいですよ」

誰に言うでもなくそう口にする、二人が反応してくれた。

今回ばかりは、藍の意見に同意だった。けど、文句を言っても荷物は勝手には動いてくれないし。ここは無心でやるしかなさそうだ。

「よっこいせー」

まずは目の前にある段ボール箱を抱え上げて、ブルシートの上へと運ぶ。

「……これさ、ガチャガチャと音がするんだけど」

「食器みたいですね。古くて割れてるものも多いみたいですし、捨てましょうか」

藍が段ボールの中身を確認して、そのまま隅の方に持って行く。どうやら、処分するやつはあっちに運ぶみたいだ。

「よいしょー！ この箱、やけに重いな。何が入ってるんだ？」

「なんですかね？ すぐいい匂いがしますけど」

先程と似た重さの段ボール箱をビニールシートの上に置く。すぐに夏海ちゃんが寄ってきて、何か匂いを嗅ぐようにしていた。俺には何も匂わないけど。

「どれどれ……あ、これは調香瓶よ」

蒼が箱を開けて、そう言う。調香瓶？ 聴き慣れない単語だった。

「蒼さん、これって何に使うんですか？」

「香水とか作って、中に入れてたみたいね。おとーさん、蝶の集まりやすい香りの研究とかしてたから」

蒼が段ボール箱の中から、一つの小瓶をつまみ出す。中は空っぽだった。

「長いこと使っていないみたいだけど、匂いが残ってるのかしら。夏海ちゃん、鼻が利くわねー」

そう言いながら、がちやがちやと音を立てて中身を確認する。どうやら、これは取っておくみたいだ。

俺はその様子を見ながら倉庫に戻って、また別の段ボール箱を持って来る。

「この箱、大ききのわりに重たいぞ？」

「あ、子供のころ読んでた本ねー。なつかしーわね」

中にはたくさんの本が入っていた。いくつか表紙が見えたけど、中にひげ猫団の冒険が混ざっているのが見えた。やっぱり皆忘れてるだけで、読んでるんだな。

鷗に教えてやったら喜びそうだなと思いながら、再び倉庫へ向かう。

「よいしよ……あれ？」

目の前に大きな段ボール箱があったので、気合を入れて持ってみたけど……すごく軽かった。

「なあ、この箱は大ききのわりに、すごく軽いんだけど」

「昔、あたしたちが使ってたぬいぐるみみたい。よく取ってあったわねー」

姉妹が揃って段ボールを覗き込む。中には小さなウサギのぬいぐるみとか、人形が入っていた。それも全部二つずつ。やっぱり双子だし、同じものを買って与えていたんだろうか。

「わあ。懐かしいですね。小さい頃、これでよく蒼ちゃんと遊びましたね」

なんだろう。藍がこれまで見たことないくらい笑顔になっていた。

藍もあんな顔するんだ。

「人形はいいけど、こっちのぬいぐるみはボロボロねー」

「そ、そうですね。どうします？ 紬ちゃんにでもあげちゃいますか？」

なんだろう。藍はそう言うけど、表情は曇ってる気がする。

確かに紬や静久なら、このぬいぐるみも見事に再生させるんだろうけど……藍は内心、まだ取っておきたいんじゃないだろうか。

「二人の思い出なんだし、まだ取っておいてもいいんじゃないか？」
だから、俺はそう提案しておいた。

「まあ、それもそうよねー。もう少し、置いとこうかしら」

「そうしましょう。羽依里さんとしろはちゃんの間にご子供が生まれたら、お祝いにこのぬいぐるみを修繕して差し上げるのもいいですね」
「ぶっ!」

せっかく助け舟を出してやったっていうのに、恩を仇で返された。くそ、藍の方が上手だ。

俺は気を取り直して、また倉庫の中へと戻る。

「うわ、こっちの段ボール箱も妙に重たいな」

ゆっくりとブルーシートの上に置く。なんだろう。食器とかとは違う重さだけど。

「これはビデオテープですね」

「え、ビデオ？」

「そう。おとーさんが撮りためた、あたしたちの成長記録みたいねー」
蒼が持つビデオテープのラベルには『藍と蒼・七五三詣り』と書かれていた。

「たぶん、本当に生まれた時から、小学校低学年くらいまでの記録じゃないですかね」

藍がガチャガチャとビデオテープをかき分ける。見慣れたサイズの他に、見たことない大ききのテープもあった。見当たらないけど、どこかに専用の再生機があるんだろうか。

「おとーさん、昆虫学者って言ったでしょ？ その関係で、昔から撮影機材は高価なの持ってたのよね」

「なるほど、そういうことなのか」

俺が興味深そうに見ていたのに気づいたんだらうか。蒼がそう説明をしてくれていた。

「……蒼ちゃん、この辺りどうしますか。こっさり捨てちゃいますか？」
藍がビデオテープを持ち、微妙な顔をしていた。そのビデオのラベルには『藍と蒼・小学二年生 運動会』と書かれていた。

「この頃の体操服ってブルマだったので、恥ずかしいんですよ……」
そして、なんか小さな声で言っていた。うん、聞かなかったことにしよう。

「あたしも正直恥ずかしいんだけど、捨てたりしたらおとーさんが本気で落ち込んじゃうだろうしねー。取っておいてあげましょ」

蒼は苦笑いを浮かべながらも、そう決断していた。父親思いの良い娘だった。

そんなこんなで、ようやく倉庫の荷物を全部表に出し終わった。

表に並ぶ段ボールを眺めながら、俺は一息つく。同時進行で整理をしていたおかげで、中身のチェックが終わっていない段ボール箱はひとつかふたつといったところだった。

「あの一、蒼さん、この服って……」

その時、衣類の入った段ボール箱を整理していた夏海ちゃんが、なんと微妙な顔をしていた。

「え、なにそれ」

続けて夏海ちゃんが両手に持って広げたのは、どう見てもメイド服だった。

「ああ。それは一昨年の文化祭で島カフェをしてですね。その時に蒼ちゃんが使ったものです。当日、蒼ちゃんはレジ係で……」

そのメイド服を見て、藍が嬉しそうに語りだした。え、文化祭？

島カフェ？

「ちよつと藍！ 思い出話はいいから！ それは捨てて！ お願い！」

「……蒼ちゃんがそう言うなら、仕方ありませんね。可愛かったですのに」

藍は名残惜しそうに、そのメイド服を燃えるゴミの袋に入れていた。

「ほら、あらかた荷物は出し終えたし、天井を見てみましょー!」

もうちよつと文化祭の話を聞いてみたかったけど、それを言い出す前に蒼から倉庫の中に引っ張り込まれてしまった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺は修理の道具と脚立を持って、蒼と一緒に倉庫の天井を注意深く眺める。

「ほら、あそこよ」

「あー、確かに穴が開いてるな」

蒼が指差す場所を見ると、確かに天井小さな穴が開いていた。倉庫の中は基本薄暗いんだけど、そこだけ僅かに陽の光が差し込んでいたので、穴が開いてるのはすぐにわかった。

「羽依里、ちよつと見てもらえる?」

「わかった。よっこらせつと」

俺は蒼と一緒に脚立を立てて、それに登って天井付近をしてみる。

「どう?」

よく見てみると、薄めの鉄板が上からの力に負けたように変形し、その中央に小さな亀裂が生じていた。

「見事に穴が開いてるな。ここから雨水が漏ったんだな」

でも、これくらいの小さな穴なら、うまい感じに金づちで均して、防水テープ貼ったらいけるんじゃないだろうか。

「蒼、防水テープってある?」

俺は脚立の上から見下ろしながら蒼に問う。

「えーつと……これ?」

蒼は道具箱の中から一卷きになったテープを取り出して、見せてくれる。

「それそれ。後、金づちを貸してくれ。鉄板を均してみるから」

「うん。お願いね」

「さんきゅ」

下を覗き込むようにして、蒼から金づちを受け取った直後……俺はあることに気づいた。

「……あれ？　どうかしたの？」

「いや、なんでもないよ。脚立が倒れないよう、支えててくれな」

……これは、下は見ないようにしよう。なんで蒼のやつ、作業するっていうのに胸元の広い服着てるんだろう。

その後は作業に集中する。一度裂けてしまっているせいか鉄板自体は柔らかく、金づちで叩いているうちにそれなりに平らになった。それだけで、穴の方もほとんどわからなくなった。最後に穴があった場所に防水テープを貼って、応急処置を終わらせる。

「ふう、こんなもんかな」

「きれいになったじゃない。さすが男の子ねー」

「でもこれ、本当に応急処置だからさ。今度、屋根の上から修理した方がいいかも」

「わかってるわよ。ありがとねー」

ニコニコ顔の蒼と一緒に表に出る。なんにせよ、これで一安心だ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「蒼さん蒼さん、これってなんですか？」

表に出ると、待つてましたといわんばかりに、夏海ちゃんが蒼に話しかけてきた。藍とイナリの姿がないんだけど、どこ行ったんだろう。

その手には、見慣れないものが握られている。

「ああ、それは吊り灯籠ね。山の祭事で使うのよ。『七晝』て言うの。きれいでしょー」

「え、山の祭りって何？」

「気になったので、俺もその会話に入ってみる。」

「この間、お祭りあったでしょ？ あれが海の祭り。あたしたち空門の家がやってるのが、山の祭りね」

「へえ、山の祭りもあるのか。見てみたいな」

「残念だけど、今年はもう終わっちゃったの。この灯籠持って山を練り歩くだけだし、つまらないわよー？」

「そうか……蒼の巫女服姿、見てみたかったんだけど」

「へ？ あたし、巫女服着るなんて言っただけ？」

「……え？」

一瞬、巫女服姿の蒼が浮かんだんだけど。言われてみれば、そんな格好をした蒼を見たことはない。想像にしては鮮明過ぎるし、たぶん、これも鏡子さんの言う『消えた世界の記憶』なのかな。

「ま、まあ、また来年を楽しみにしておくよ」

「なんとかそう取り繕う。その間も、夏海ちゃんはじっと灯籠を見つめていた。」

「でもこれ、本当に綺麗ですね」

「そう？ あたしにしてみれば、ただの古ぼけた灯籠って感じなんだけど」

「綺麗ですよ。なんだか吸い込まれそうな気が……します……」

……あれ？ 灯籠を見つめる夏海ちゃんの瞳の色が変わってるよな。見慣れた青色から、揺らめくようにして、七色に。目の錯覚かな。

「……夏海ちゃん？」

変に思っただけで声をかけたその時、夏海ちゃんがゆっくりと背中から倒れていく。

「え、とつととー！」

一番近くにいた蒼が、慌ててその身体を支えるけど、夏海ちゃんは本当に脱力しちゃってるみたいで、蒼の力だけじゃ支えきれない。俺

は慌てて駆け寄って、二人を一緒に支える。

「ちよつと夏海ちゃん、しつかりして！ どうしたの!?!」

その身体をゆっくりと横たえながら声をかけてみるけど、反応がない。

「……え。この七影蝶、どこから来たの?」

その時、蒼が夏海ちゃんのすぐ近くに落ちていた灯籠を見ながら、そう呟いていた。確か、蒼は七影蝶が見えるんだっけ。

夏海ちゃんに声をかけ続けながら、俺も視界の端にその灯籠を捉える。

「……!?!」

その灯籠には、無数の七影蝶が集まっていた。昼間だからわかりにくいけど、かなりの数だ。

「……待って。祭りは終わってるし、迷い橘だって。今年はもう、この灯籠で七影蝶を集めることはできないはずなのに」

蒼が何か言ってるけど、俺の耳には入らなかった。

「……え、どうしたんですか!?!」

「ポンポン！」

その時、家の方から人数分の麦茶を運んできていた藍が、俺たちの状況に気づいて、慌てて走ってきた。その足元にはイナリも一緒だった。

「二日家の中に運びましょう。二人とも、手伝ってください！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

突然倒れてしまった夏海ちゃんを、三人で空門家のリビングへと運び入れる。

「ねえ藍、夏海ちゃん、大丈夫かしら。もしかして日射病? 無理させ過ぎたかしら?」

「蒼ちゃん、落ち着いて。まずはエアコンのスイッチを入れてくださ

い。それから氷枕を用意してください」

「う、うん！」

夏海ちゃんをリビングのソファに寝かせた後、藍がそう指示を出す。蒼はそれに従って、冷房のスイッチを押した後、氷枕を用意するため、リビングを出て行った。

「でも、蒼ちゃんの言う通り、暑さにやられたのかもしれない。私は診療所の先生に電話をします。羽依里さんはこのまま、夏海ちゃんのそばにいてあげてください」

「わかった」

そう言うと、藍もリビングを出ていった。一人残された俺は、ソファ横の椅子に座って、夏海ちゃんの様子を見してみる。

暑さにやられたにしては、特段顔色に変化はないし、そこまで汗をかいてるって感じでもない。

試しに夏海ちゃんの額に手を当ててみるけど、熱がある感じでもないし。一体どうしたんだろう。

「……あれ、羽依里さん……？」

その時、夏海ちゃんがうつすらと目を開ける。良かった。気がついたみたいだ。

「……夏海ちゃん、大丈夫？」

「はい……えっとその、ごめんなさい。私、気を失っちゃってたみたいで」

まだ少し、目が泳いでる気がする。状況を把握できていないんだろうか。

「ここは空門家のリビングだよ。倉庫の前で突然倒れたから、蒼たちと三人でここまで運んできたんだ」

「そ、そうだったんですね。ありがとうございます」

「それにしても、いったいどうしたの？ 見た感じ、日射病とかじゃないみたいだけど」

「たぶん、あの灯籠のせいです」

「え、灯籠？」

夏海ちゃんはリビングのドアの方を気にしながら、静かに頷く。

「……あの灯籠、触っちゃいけないものだったみたいです。あれを持ってしばらくしたら、意識が遠くなっちゃいましたし」

「……そういえば蒼が、あの灯籠で七影蝶を集める……みたいなこと言ってたっけ」

「はい。たぶん、私の中の七影蝶があの灯籠に引き寄せられて、パニックになっちゃったんじゃないですかね」

「その結果、気を失っちゃったと」

「……うかつでした。もう山の祭事の時期は過ぎてるので、平気だと思っただけですけど」

あの灯籠も、空門の家に代々伝わってるものみたいだし、何か特別な力があるのだろうか。

普段なら信じないけど、昨日の蔵での出来事を思い返すと、何が起こっても不思議じゃない気がした。

「きつと私の中にも、神域を通って空の上のトキアミに還りたい七影蝶がいたんでしょうね」

そう言っただけでなく笑う。トキアミ……空へと続く門がある場所が、空門家の神域だなんて。家名って奥深いものだよな。

「……あ、夏海ちゃん、気がついたの!？」

その時、空門姉妹の二人が揃ってリビングに戻ってきた。

「もう、いきなり目の前で倒れられて、本当に心配したんだから!」

蒼がすぐさま駆け寄って、夏海ちゃんを抱きしめていた。

「す、すみません。ちょっと、めまいがしてしまいました。お二人とも、ご心配をおかけしました」

「全くですよ。もう少ししたら診療所の先生が来てくれるので、一度診てもらってください。それまで、この氷枕を頭の下に敷いて、安静にしてください。良いですね?」

「はい……」

藍が有無を言わずそう言っていた。冷静を装っているけど、藍もすごく心配してくれていたみたいだった。

その後すぐ、診療所の先生が来てくれた。

診察の間、俺は別室で待っていたけど、結果は特に異常はなく、軽い熱中症だろうということだった。

「あの、私もう大丈夫ですから」

「駄目ですよ。もう少し休んでいてください」

「そうよー。こんな時くらいクーラーの効いた部屋にいても、バチは当たらないわよ」

先生が帰った後、すぐに起き上がろうとする夏海ちゃんを空門姉妹がベッドに寝かしつけていた。

「なんというか、微笑ましい光景だな……」

窓の向こうに見えるそんな光景を尻目に、俺は庭に放置されてしまっていた荷物を倉庫へと片付ける。

全ての作業が終了し、俺たちが空門の家を出発した時、太陽は山の向こうに沈んでしまっていた。これは、急いで帰らないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おかえり。少しはリフレッシュできた？」

できるだけ急いで帰宅すると、玄関前で鏡子さんが待っていた。心配をかけてしまったようで、俺たちは揃って頭を下げる。

「……はい。遅くなつてすみません」

「……いいよ。空門さんの家で手伝いをしてたつて聞いたし、今回はお咎めなしにしてあげる」

「ありがとうございます」

鏡子さんはそう言つて許してくれた。どう伝わったのか知らないけど、既に鏡子さんの耳には入っていたみたいだ。

「おかえり。二人とも、早く手を洗ってきてね。すぐに晩ごはんの用意をするから」

居間に行くと、鏡子さんから一通り説明がされているのか、しろは

やじーさんも怒っている様子はなかった。

そんな二人にも頭を下げてから、洗面所で手を洗い、食卓につく。

「はい。おまちどうさま」

しばらくして、色とりどりの料理が俺たちの前に並べられた。

ごはんは吸い物、おからの和え物や、おひたしに加えて、メインの大皿には魚のから揚げが盛られていた。

「しろは、この魚は？」

魚なのはわかるんだけど、見たことない形をしていた。

「これはフグのから揚げだよ」

「え、フグ!？」

から揚げを二度見する。フグって言うと、高級食材のアレだろうか。

「でも、フグって毒があるので、調理するのに免許がいるんじゃないやありませんでしたっけ？」

俺が思っていた疑問を、夏海ちゃんが先に口にくれてくれた。確か、特別な免許がいるはずだけだ。

「これはサバフグと言ってるな。毒のないやつだ」

「え、そうなんですか？」

夏海ちゃんが驚嘆の声を上げていた。俺も、フグに毒のない種類がいるなんて初耳だった。

「そう。これなら免許もいらさないから、私でも料理できるの。本格的なフグに比べたら、味は劣るらしいんだけどね」

しろはがそう言いながら食卓につく。今朝、じーさんが言っていた変わった魚って言うのは、このサバフグのことだったのか。

「今日はぐちそうだね。それじゃ、いただきましょうか」

家主の鏡子さんがそう言い、皆で挨拶をしてから夕飯が始まった。

「どれどれ……」

俺はさっそくフグのから揚げに箸を伸ばし、少しポン酢をつけて食

べてみる。

「美味しい……」

それ以外の言葉が出てこなかった。いい感じに下味がついていて、身がプリプリで、本当に美味しかった。

「……ふむ。やはり、まだまだ旬はこれからだな」

一方のじーさんは首をかしげながらそう言っていた。漁師さんだし、普段から食べ慣れているんだろうか。

俺はそんなことを考えながら、吸い物をすすする。

「……もしかしてしろは、この吸い物も？」

「そう。から揚げにできないくらい小さいフグの骨を使って、出汁を取ったの。美味しいでしょ？」

「うん。これは美味しいね」

何とも言えない良い香りが鼻に抜ける。から揚げに吸い物と、まさかのフグ三昧を堪能した。

夕飯を済ませた後、じーさんはさっさと俺の部屋の方に行ってしまった。きつと、もう寝るんだろう。

「羽依里君たち、先にお風呂入っちゃって。私は後で良いから」

夏海ちゃんと一緒に食器を片付けていると、鏡子さんからそう声をかけられた。

「そうだね。夏海ちゃん、先に入っちゃってよ」

やっぱり、こういう時は女の子が先だろうし。

「え、しろはさんの家から帰った時に一度入ってますし、今日はもう良いですよ。お湯も勿体無いですし」

「夏海ちゃん、女の子なんだから、お湯が勿体無いとか言っちゃ駄目だよ」

かちやかちやと心地いい音を立てながら食器を洗っていたしろはが、振り向きながらそう言う。

「え、でも……」

「なんなら、しろはちゃんと二人で一緒に入ったらどう？ それなら、

使うお湯の量も減ると思うし」

それでも尚、渋っていた夏海ちゃんに対して、鏡子さんがそう続ける。

「鏡子さんがそう言うなら、私は一緒に入ってもいいよ？ 片付けが終わってからになるけど」

「うーん……わかりました。それじゃあしろはさん、よろしく願いします」

しばらくして、二人は揃ってお風呂に行ってしまった。俺は居間に腰を下ろして、ぼんやりとテレビを見ていた。

「そういえば羽依里君、明日の予定なんだけどね」

鏡子さんがそう言いながら、俺の向かいに座ってきた。たぶん、鳴瀬家の片付けについてだろう。昼間、大人たちで話し合いが持たれたはずだし。

「鳴瀬さんの家ね、明日から室内の掃除に取りかかるらしいの」

予想通りだった。庭も裏山もだいぶ片付いたし、防護柵のおかげで安全も確保されたということで、次は室内に着手するらしい。

「これまでは大勢の人に手伝ってもらえたけど、家の中となると話は別だね。個人的な品もあるし、明日からは夏海ちゃんと羽依里君だけで手伝ってあげて欲しいの。二人なら、鳴瀬さんも許可してくれたし」

建物内で被害に遭ったのは、じーさんの私室のはずだ。そこを片付けるということは、鳴瀬家のプライベートな部分に踏み入れるということ。その許可をくれたということは、多少なりともじーさんに信用されてると考えていいんだろうか。

「わかりました。夏海ちゃんにも伝えておきます」

「うんうん。よろしくね」

鏡子さんは笑顔で頷いてくれた。その直後、俺は少し思うことがあって、テレビを消して鏡子さんに向き直る。

「あの、鏡子さん……少しいいですか？」

「……うん。どうしたの？」

俺の態度から、何かを感じ取ってくれたらしい。鏡子さんも真剣な

表情になつて、俺の方を見る。

それを確認して、俺は空門家で夏海ちゃんが倒れた話をした。

「……そう、そんなことがあったの」

俺の話を最後まで聞いた鏡子さんは、何かを考え込んでいた。

「……やっぱり、無理してるのかもね」

「え、無理って言うのは？」

「えっと……あの手紙では、傍人……つまりは夏海ちゃんだけど、島に存在できるのは迷い橋が散るまでだつて書いてあつたよね？」

「ええ。つまりは夏の間ですよ」

「……それなんだけどね。ちよつと違うの」

「違つて何がです？」

「その、迷い橋が散る時期っていうのは、トキアミへの道が閉じる時期と重なるらしくて」

鏡子さんが言葉を探すようにしながら、ゆっくりとそう説明してくれる。彼女自身も、上手く理解できていないんだろう。

「その年によつて多少ズレることもあるみたいだけど……大抵、海の祭事が行われる頃には閉じてしまうみたい。今年なら、21日だね」
「ちよつと待つてください。21日って、もう過ぎちゃつてるじゃないですか」

「そうなんだよ。迷い橋が散ると『トキアミ』へと通じる門も閉じてしまうから、夏海ちゃんは還れなくなる。手紙の一文は、そういう意味だつたんだよ」

確か昼間、蒼がもう迷い橋は散つてしまつてると言つていた。つまり、トキアミへの門は既に閉じているということだろう。

「じゃあ夏海ちゃんは、本当なら21日にいなくなるはずだつたんですか？」

「そう。本来ならね。でも、あの子は還らなかつた。私も前日に確認はしたんだけど、やり遂げたいことがあるって言つてね」

「やり遂げたいこと？」

「うん。夏海ちゃん、練習頑張つてたもんね」

「……そうか。野球だ」

記憶を思い起こしてみる。確か、夏海ちゃんが還るはずだった日の翌日、リトルバスターズとの試合が控えていた。

あの時、夏海ちゃんは試合のある日を知ったうえで、自ら望んでピッチャーになっていた。もしかしたら、あの時から既に還らないと決めていたのかもしれない。

「やっぱり夏海ちゃん、夏の思い出を選んだんだね」

鏡子さんは何かを悟ったような表情をしていた。

「……でも、トキアミに還れない夏海ちゃんは、この後どうなるんです!?!」

「私にもわからないの。どうなるのかは、手紙にも書いてないし。ごめんね」

「あ……いえ、俺の方こそ、すみません」

つい、強い口調になってしまった。この人を責めるのはお門違いだ。

「いいんだよ。それより羽依里君、夏海ちゃんが選んだこの島の夏休み、最後まで一緒に楽しんであげてね」

「もちろんですよ」

その後はお互いに口をつぐむ。これ以上は話せることはない感じで、沈黙が訪れる。

「お風呂、ごちそうさまでしたー」

その時、お風呂からあがったらしい夏海ちゃんが、タオルで髪を拭きながら居間にやってきた。

「も、もう出たんだね。じゃあ次、俺が入ろうかな」

完全に虚を突かれて、少し動揺してしまった。俺はそれを隠そうと立ち上がり、足早に居間から出ていこうとする。

「あのー、羽依里さん、まだしろはさん入ってますよ?」

「……おっと」

俺は足を踏み出した格好のまま、固まる。

「いいんじゃない? 羽依里君も一緒に入ったら?」

「入りませんから!」

まったく、鏡子さんも何言ってるの。今日はお酒は飲んでないはずなのに。

……もしかして、俺と同じように動揺したのかな。

その後、しろはが風呂から出たのをしっかりと確認して、俺も風呂場へと向かった。

「ふう……」

身体を洗った後、湯船につかりながら浴室の天井を見つめる。

おのずと、これから先のことを考えてしまう。

夏海ちゃんは自分のことを、七影蝶の集合体だって言っていた。

その七影蝶の還る場所であるトキアミ。

還る場所をなくした夏海ちゃんは、これからどうなるんだろうか。

なんとなく、まだあるんだろうと思っていた時間が、実はほとんど

残されていないんじゃないかという、漠然とした不安が襲ってくる。

「……まだ残っていると思っていた砂時計の砂は、とうに空っぽになっちゃってしまっていたのかも」

「……え、砂時計？」

「へっ？」

思わず声のした方を見ると、曇りガラスの向こうに、しろはの姿が見えた。

「あれ、しろは？ どうしたんだ？」

「私が使ったのでバスタオルが最後だったから、新しいのを持ってきたんだけど……浴室から物音一つしないし、大丈夫かなって思ってたごめんごめん。ちよつと考え事をしてたんだ」

「もう……お風呂で考え事なんてしたら、湯あたりするよ？」

「わかってる。もう少ししたら出るよ」

「……心配事があったら、相談してね」

「ああ、ありがとう」

うん。と小さく声が聞こえて、向こうの気配が消えた。

「……よし」

すっかりしろ。俺が気落ちしてどうするんだ。ここはあれこれ考えず、鏡子さんに頼まれた通り、夏海ちゃんとの夏休みを楽しめばいいんだ。

さすがに風呂場で自分の名前を叫ぶわけにもいかないのです、俺は両頬を強く叩いて気合いを入れて、頭の中の不安心を追い払った。

第四十二話・完

第四十三話 8月27日

「……おい。起きろ」

……朝。今日も夏海ちゃんの声で……。

「おい。羽依里、起きんか」

……おかしいな。随分野太い声がする。これは夏海ちゃんじゃない。
い。

「……しろはから聞いていたが、ここまで起きんとはな。こんなのと一緒になったら、先が思いやられるぞ」

え？ 今、何か聞き捨てならない発言があつた気がするんだけど。気のせいかな。

「かくなる上は……四天王スクワットだ！ ししんそうおう！」

……その掛け声に、身体が勝手に反応してしまった。

「……朱雀！ ざく！ ざく！ 白虎！」

俺は布団をはねのけて起き上がり、その流れで目の前にいたジーさんと一緒にスクワットをする。

「やはり、この方法が一番早く目覚めるようだな。白虎！ びゃこ！ びゃこ！ 朱雀！」

「朱雀！ ざく！ ざく！ 白虎！」

その後しばらくの間、半強制的にスクワットをする羽目になってしまった。おかげで目は覚めたけど、この夏で一、二を争う目覚めの悪さだった。

「……話は聞いていると思うが、今日は家の中の片づけをするぞ。お前たちは昨日と同じように、午前中だけ手伝ってくれればいい」

スクワットの後、ジーさんは息一つ乱すことなく、俺にそう告げる。
「ぜえ、はあ。わ、わかりました……」

一方の俺は疲れ果て、両膝に手をつけて肩で息をしていた。なんか変な汗が出るし、ひどい目に遭った。

「あ、終わりましたか？」

朝から重たくなってしまった身体を引きずるように布団をたたんでみると、廊下の方から夏海ちゃんがひよつこりと顔を覗かせた。どうも、スクワットが終わるのを待っていてくれたらしい。

「羽依里さん、おはようございます」

「お、おはよう。夏海ちゃん」

「こぼとさんも、おはようございます」

「ああ、おはよう」

夏海ちゃんはニコニコ顔でじーさんに挨拶をしていた。それにつられてか、じーさんも珍しく少し笑顔だった。

「そういえばお前たち、今日もラジオ体操に行くそうじゃないか。せいぜい、遅れんようにな」

「はい！ 今日頑張ります！」

「それとな。家の片付けを始めるのは昨日と同じ、9時からだ。頼んだぞ」

じーさんは俺と夏海ちゃんにそう告げてから、部屋を出ていった。俺はラジオ体操の前に、既にクタクタなだけだ。

「……あ、起きたんだね」

そのじーさんと入れ違いになるようにして、今度はしろはが部屋にやってきた。

「おはよう。しろは」

「おはよう。朝から元気のいい声でしたけど、おじーちゃんとモーニングスクワットやってたの？」

「うん。成り行きで、そうなっちゃって」

「……凄い汗だけど、大丈夫？」

「……慣れないことはするもんじゃないね」

俺はそう言いながら額の汗をぬぐう。うん、これは早急に着替えな

いと。
「ちよつと着替えるからさ。二人とも玄関で待っていてくれないかな」

「わかりました！」

「うん。少し急いでね」

二人はそう言つて、廊下の先へと消えていった。俺は鞆から着替えを引つ張り出して、手早く身支度を整えることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神社に到着すると、そこにはいつもの島の少年団の皆に加えて、紬と静久、鷗と言つたメンバーが集まつていた。

「皆、おはよう」

「おはよう、パイリ君」

「おはようございます！」

「羽依里、なつちゃん、おはよう！」

その面々と挨拶を交わしていると、少し離れた場所で、のみきが子供たちを集めて何か話をしているのが見えた。

「のみきは子供たちと何の話をしてるんだろう？」

「なんですかね？」

「ほら、あれじゃない？ しろはの家の片付け」

「今日からは家の中での作業に入るんでしょう？ その説明じゃないですか？」

夏海ちゃんと二人で疑問に思っていると、左右から俺たちを挟むように空門姉妹がやってきた。今日は姉妹揃つて髪をストレートにしていた。

「俺たちも、じーさんから話は聞いてるけどさ……」

姉妹と話しながら、漏れ聞こえてくるのみきの言葉を拾ってみる。どうやら、今日からは手伝いが不要なことを伝えつつ、ここ数日の子供たちの労をねぎらっている様子だった。

「さすがに家の中はプライベートな部分になるし、あたしたちじゃ手伝えないしねー。羽依里と夏海ちゃんは、しっかりと手伝つてあげてね」

「はい！ もちろんですー！」

「わかってるよ」

夏海ちゃんに続いて、俺も返事を返す。ところで、なんで俺たちが手伝うって知ってるんだろう。相変わらず、話が広まる速度が尋常じゃない。

「よーしお前らー！ 今日もラジオ体操を始めろー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「……そうそう。今日はラジオ体操の前に連絡があるんだ」

……と思つたら、何か連絡があるみたいだった。いつもと流れが違うと、なんだか調子が狂うな。

「この夏のラジオ体操は、明日で最終日になる！ 皆、よく頑張ったな！」

ラジオ体操大好きさんがそう言つて、皆を褒め称えていた。そうか、明日でラジオ体操も終わりなのか。

「……あれ？ ラジオ体操って、普通31日までやるもんじゃないのか？」

直後に純粋な疑問を感じて、近くにいた良一たちに聞いてみた。

「そりやもう、皆やることがあるだろう？」

良一は、なに当たり前のことを聞いているんだ？ みたいな目で俺たちを見てきた。やること？ 何かあつたけ。

「……あれだよ。夏休みのラスボスだ」

「え、ラスボス……ですか？」

続く良一の言葉に、夏海ちゃんも頭に疑問符を浮かべていた。

「もう、察しなさいよね……あれよあれ。夏休みの宿題」

「……ああ、なるほど」

蒼に言われて、ようやく理解した。そういえば、その場の誰もが目を泳がせたり、青い空を見上げたりしている。やっぱり、終わってない人も多いんだろうか。

「さあ、嫌なことは忘れて、今日もラジオ体操を始めろー！」

ラジオ体操大好きさんはそう言つて、悲壮感に暮れる皆を鼓舞する。その場は忘れられたとしても先延ばしになるだけで、なんの解決

にもならない気がするんだけど。

「いくぞー！ 第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

そんな俺の疑問を飲み込みながら、改めて今日のラジオ体操が始まった。

「……よし、今日のスタンプはこっちだぞー」

いつもと変わらぬラジオ体操が終了し、スタンプとログボを受け取る。

この慣れ親しんだラジオ体操も明日で終わりとなると、なんだか感傷深いものがある。

そんなことを考えながら受け取ったログボを見ると、白い束のようなものがビニール袋に入っていた。

「あれ？ これってそうめん？」

「みたいですね……もしかして、お中元のあまりだったりするんでしょうか」

同じように手にある白い束を見ながら、夏海ちゃんがそう言っていた。一瞬、そうめんチャーハンという単語が浮かんだけど、俺は急いでそれを打ち消した。

「とりあえず、しろはなら何かしら役立ててくれそうだし。帰ったら水屋にしまっておこうか」

「そうですねー！」

「それじゃ、しろはもそろそろ帰ろう……あれ？」

しろはを探そうと境内を見渡すと、他の皆が一ヶ所に集まって何やら話をしているのが見えた。

その中にしろはの姿もあったので、俺たちもその輪の中に加わってみる。

「一番の問題は古文や漢文よねー」

蒼がうんざりしたような顔でそう言っていた。やっぱりと言うか、どうやって夏休みの宿題を片付けるか、皆で相談していたみたいだ。

「数学も嫌になるよね」

「さすが羽依里！ 名案だな！」

蒼やしろは、良一といった宿題終わってない組が即座に賛同してくれた。三人寄ればなんとやらって言うし、心強かった。

「ねえ羽依里、私も行っていい？」

その時、鷗が自分を指差しながら、そう言ってきた。

「やっぱり、鷗も宿題終わってないのか？」

「ううん。終わってるよ」

「え、終わってるの？」

ちよつと意外だった。

「むー。羽依里、すごく意外そうな顔してるんだけど」

「いや、全然そんなことないぞ。というか、鷗は宿題終わってるなら、来る必要ないんじゃないか？」

「だって、皆と一緒にいたほうが楽しそうだし。ね？ いいでしょ？」

「いやまあ、来る者拒まずだけどさ……」

だから鷗、その上目遣いやめて。無意識なんだろうけど、かなりグツと来るから。

その後、改めて参加者を募ったところ、俺や夏海ちゃんはもちろんのこと、しろは、蒼、良一、天善、のみきが是非参加したいと申し出てきた。

既に宿題が終わっている藍や鷗も参加することになったし、指導役も申し分ないと思う。次の問題は、これだけの人数が集まれる場所の確保だった。

「皆で宿題をやるにしても、これだけの人数が集まれる広い場所があるのかな」

俺はぐるりと皆の顔を見渡す。ざつと10人近い。屋内でこれだけの人数が集まれる場所があっただろうか。

「のみき、役所に使っていない部屋とかないのか？」

「残念だが無いな。青年会館も……今日は確か、催し物の予約が入っていたしな」

のみきが腕組みをしながら、残念そうに言う。そういえば、青年会館で秋子先生の手作りジャム教室を開催します……みたいな内容の

回覧板が来ていた気がする。よりもよって、今日だなんて。

「午前中はしろはの家の片付けがあるから、午後からでいいんだけど……どこかないかな」

そこで皆、考えに詰まる。やろうと思えば屋外でもできない事もないけど、人目につくし、なんとなく恥ずかしい。

「ねえ紬。それなら、灯台でやってもらったら良いんじゃないかしら。中は広いし」

「おおー、それはいい考えですね！」

その時、静久と紬がそう提案してくれた。確かに、灯台ならこの人数でも余裕だと思う。

「二人とも、いいのか？」

「はい！ 好きなだけ使ってください！」

そのまま笑顔で了承してくれ、勉強会の会場は灯台に決まった。

「パイリ君たちが午後からがいいのなら、時間は13時からにしましょう」

「そうですね！」

その後は、灯台の主である二人が中心となって予定が決められていく。

「皆でやるのはいいんだけどよ。やっぱり宿題は憂鬱だぜ……」

そんな中、良一がそう言っていた。一人、残っている宿題の量を想像していたんだろうか。顔色が悪い。

「そう言わないの。皆で立ち向かうのよ！」

隣の蒼はそう言って握りこぶしを作っていた。その通りだ。皆で協力すれば、きつとこの試練を乗り越えられるはずだ。

「……そういう時は、宿題を終えた後のお楽しみを用意しておくといいのよ？」

俺たちの様子を見て、静久が笑顔でそう言っていた。

「え、お楽しみ？」

「そう。今日中に宿題が終わったら、明日は皆で遊園地に行くってのはどうかしら」

「え、遊園地ですか？」

遊園地という単語に、夏海ちゃんが反応した。

「最近、なんとなく夏海ちゃんが元気がないような気がしたし……夏の終わりに、こういう形で皆と思い出を作るのも良いんじゃないかなって思ってた」

「え？」

静久は優しい顔で夏海ちゃんを見ていた。隣の袖も笑顔だし、もしかして宿題の有無に関わらず、遊園地の件は提案するつもりだったのかもかもしれない。

「確かにこの夏、俺は本土に何度も出かけたけど、夏海ちゃんは一度も外出してないよね」

「そ、それはそうですけど……悪いですよ」

だから俺も、そんな二人の提案に乗っかる形で、夏海ちゃんにそう言う。

「言われてみればその通りですね。これは不公平ですよ」

「ほら、なっちゃんも遠慮しないで！」

俺の意図は他の皆にも伝わったようで、良い感じに乗ってきてくれた。最初は渋っていた夏海ちゃんも、皆の意見に押されて、迷っているみたいだった。

「えっと、すごく嬉しいんですけど……その、そういう遊園地のチケットって、高いんじゃないですか？」

「うふふ。実はここに、こんなチケットがあるのだけど」

そう言うと、静久はどこからかチケットの束を取り出して、皆に見せてくれる。ぱつと見、10枚以上ある気がする。

「宇都山ハイランド……？」

そのチケットには『今年の夏は宇都山ハイランドで最高の夏を！

本場ブラジルカーニバルと、ウォーターバトル！』と、派手な字が書かれていた。

そう言えば、宇都港の案内板にそんな名前の遊園地があった気がする。確か、港から少し離れた山の上だったような。

「でも、なんでそんなにたくさんチケットを静久さんが持ってるんですか？」

「これはね、大学の先輩からもらったの」

そう言えば、静久は女子大生だったんだ。そんな素振りは微塵も見せないから、つい忘れがちになるけど。

「だ、大学の先輩ですって!？」

「天善、そこが気になるのはわかるけど、このタイミングで話に入らない!」

静久の発した単語に過剰反応した天善を蒼が抑える。全く、話の腰を折ろうとしないほしい。

「その先輩は夏休みの間、宇都山ハイランドでアルバイトをしているんだけど……有効期限が8/31までのこのチケツトが、たくさん余ってしまったらしくて。私に譲ってくれたの」

俺も飲食店でバイトした経験があるけど、遊園地のバイトはチケツト販売のノルマまで課せられるんだろうか。その先輩って人も、色々大変そうだ。

「そういうわけだから、夏海ちゃんも遠慮しないで。ね?」

チケツトの出所を説明した後、静久はもう一度笑顔で夏海ちゃんを見る。

「わ、わかりました……それじゃあ、私も皆さんと一緒に、遊園地行きたいです!」

夏海ちゃんが意を決してそう言っていた。

「うんうん。決まりね。それじゃ、明日皆でお出かけするためにも、頑張って今日中に宿題を終わらせましょう!」

「おーっ!」

気合いを入れる意味を込めて、皆で拳を突き上げる。後々の楽しみが増えたし、これは頑張って宿題を終わらせないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……その後、皆と別れて、しろはや夏海ちゃんと三人で加藤家に向

けて歩く。

そうだ。加藤家に戻ったら、午後からの勉強会と明日の外出について、鏡子さんにお伺いを立てないか。

「うーん……遊園地……行ってみたい、けど……」

そんなことを考えていると、隣のしろはが小さな声で唸っていた。どうやら、自宅があんな状況なのに自分だけ楽しい思いをしているのかと、悩んでいるみたいだ。

「……しろはが行きたいんなら、思い切って聞いてみたらどう？」

「え？」

「俺たちも朝食の席で鏡子さんに聞いてみるからさ。しろはもその流れで、じーさんに聞いてみてもいいんじゃないか？」

「う、うん。そうだね……」

「俺も、しろはと遊園地デートしたいし」

「……み、皆と一緒だから、デ、デートじゃないし！」

しろはにしか聞こえないような声でそう伝えてみる。直後、瞬間湯沸かし器のように真っ赤になってしまった。ちよつと調子に乗りすぎたかな。

「ただ今帰りましたー」

帰宅した後、例によってしろはに朝食の準備をお願いして、俺たちは居間で過ごしていた。

「夏海ちゃん、ちよつと手伝ってくれないかな」

「わかりました！ 今行きますー！」

いつものように夏海ちゃんが場を繋いでくれていたんだけど、しばらくするとしろはに呼ばれて、台所へと消えていってしまった。

結果、居間には俺と鏡子さん、そして小鳩さんの三人が残される形になる。

「……」

「……」

……途端に会話がなくなり、居間はなんとも微妙な空気に包まれ

る。

「えーっと、あの……きよ、今日もいい天気ですね」

「うん。今日も暑くなりそうだよ」

「そうですね。日射病に気をつけないとですね」

「……」

「……」

俺は何とか会話を続けようとするけど、大した話題が出てこない。すぐに何とも言えない空気に戻ってしまった。

ここ数日、こんな空気にならなかったのは、やっぱり夏海ちゃんの功績が大きかったらしい。

……弱ったな。まだ二人が戻ってこないから、宿題や遊園地の話題を出すわけにもいかないし。

俺は助けを求めるようにテレビを見る。画面では黒縁の眼鏡をかけたアナウンサーが、淡々と朝のニュースを読み伝えていた。

「……夏海ちゃん、その味噌をお玉ですくってみて」

「こうですか？」

「そう。それで、お鍋の中で少しずつ溶かしながら混ぜてみて」

「はいー」

台所からは、二人の楽しそうなやりとりが聞こえてくる。まるで親子だ。しばらくして味噌汁のいい匂いもしてきたし、俺もそっちに行きたい。

「お待たせしましたー」

その場をしのぐために見ていたニュース番組が終わる頃、夏海ちゃんとしろはがおぼんに朝ごはんを乗せて、居間にやってきた。

そして食卓に並べられたのは、炊きたてのごはんに味噌汁、キュウリの漬物、アジの開きだった。今日もおいしそうだ。

「……あれ？ しろは、俺だけごはんがないんだけど」

気がつけば、俺の前にだけ白ごはんがなかった。どうしたんだろう。

「羽依里はこれだよ」

そう言つてしろはが運んできてくれたのは、大きな焼きおにぎりだった。

「え、これは？」

「昨日、羽依里が持つて帰つたおにぎりをアレンジしたの。もつたいないしね」

そういえば昨日の昼、もらったおにぎりを食べきれずに持つて帰つたんだっけ。それを焼きおにぎりにしてくれたのか。さすがしろはだ。

「今日は羽依里君だけ特別メニューなんだね。それじゃ、食べましようか」

鏡子さんがそう言い、挨拶をしてから、今日も朝食が始まる。

何をさておき、俺は焼きたての焼きおにぎりにかじりつく。

一口かじると、味噌や醤油の風味が鼻に抜ける。表面も香ばしく焼いてあるし、これは美味しい。

続いてきゆうりの漬物を口に運び、焼きおにぎりをもう一口かじる。

「……あれ、夏海ちゃんどうしたの」

その時、隣に座つていた夏海ちゃんが味噌汁をすすりながら、俺の方を見ていた。

「いえ、なんでもありません！」

夏海ちゃんはその直後、ごにごによごによと何か言いながら漬物を口に運んでいた。

もしかして、この焼きおにぎりが食べてみたかったのかな。

だけど、思いつきり口をつけてしまったし。今更分けてあげると言うわけにもいかず、俺はそのまま食事を続けたのだった。

「ごちそうさまでしたー」

「さすがしろはちゃん、今日も美味しかったよ」

「お、お粗末さまです」

「あの……鏡子さん。実は折り入ってお願いがあるんですけど」

皆が食事を終えたタイミングを見計らって、俺はそう話を切り出す。

「お願い？」

「はい。今日のお昼からなんですが、皆で夏休みの宿題をしたいんで、三人で灯台に行ってもいいですか？」

「灯台？ それは別に構わないけど」

「それとですね。今日中に宿題が終わったら、明日は皆で本土の遊園地に行かないかって誘われたんです」

「え、明日？」

「はい。無理でしょうか」

「うーん。島の花火は明後日だし、良いんじゃないかな」

「ありがとうございます」

「いいよ。あまり遅くならないように、楽しんできて」

「はい！ ありがとうございます！」

「……あのね、おじーちゃん。その遊園地、私も行っていいかな」

俺の助言通り、しろはがそのタイミングでじーさんにそうお伺いを立てていた。

「……まあ、いいだろう。気晴らしも必要だ。楽しんでくるといい」

「おじーちゃん、ありがとう」

しろはのじーさんは一瞬だけ悩むような素振りを見せていた。鏡子さんや夏海ちゃんもいるし、この場で選択を迫るのは酷だっただろうか。

「その代わり、今日は家の片付けをしっかりと手伝って、昼からも宿題をきちんと終わらせるんだぞ」

「うん。わかってる」

努めて表に出さないようにしているけど、言葉の端々に嬉しさがにじみ出ている。しろは、良かったな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

その後、俺たちは片付けのために鳴瀬家へと向かった。

今回は室内ということもあって、昨日よりは荷物は少ないみたいだった。

「お前たちは、タンスの中身を廊下に出してくれ。もし泥をかぶっていても、日の当たるところに並べておけば、そのうち乾くだろう」

じーさんは俺たちにそう指示を出すと、部屋の隅に積んであった畳やふすまを担いで、庭へと運び始めた。

「……今更だけど、なかなかすごいな」

残された三人で、室内を見渡す。いざ片付けようとタンスを見ると、どれも乾きかけの泥がこびりついてしまっていた。

「タンスの上の方はそこまで被害ないみたいだし、まずは中身を確認しようよ」

「そうだな。よし、やろう！」

しろはにそう言われて、俺たちは手分けしてタンスの中身の確認作業を始めた。

「……これ、随分と古そうな着物だな」

「たぶん、おばーちゃんのだと思う。おじーちゃん、ずっと取ってあったみたいだね」

「そうなんだな」

着物はタンスの下の方に収められていたけど、立派な桐の箱に入っていたおかげか、泥の被害を受けていなかった。

「その着物はそのまま廊下の方に出しておいてくれたらいいよ」
「わかった」

そう言えば、しろはからおばーさんの話は聞いたことがない。どんな人だったんだろう。

「しろはさーん、この書類はどうしましょう?」

その時、少し離れた場所にいた夏海ちゃんが、タンスの中身を引つ

張り出しながらそう尋ねる。よくわからないけど、中にはたくさん書類が入っていた。どれも泥で汚れてしまっていて、読めるような状態じゃない。

「とりあえずまとめて表に出しておけば、おじーちゃんが選別してくれると思うよ」

「わかりました!」

夏海ちゃんはテキパキと書類を束ねて、廊下の方へ運んでいた。

俺はそんな夏海ちゃんを尻目に、別の引き出しを開ける。

「あれ?」

その引き出しには、たくさんのアルバムが入っていた。

「この辺は大丈夫そうだけど……」

この引き出しは床から離れていたからか、中身は泥に汚れていなかった。それでも俺は写真の状態を確認するように、ゆっくりとページをめくっていく。

「白黒写真とか初めて見たな。随分古いものみたいだけど……え!?」

その中に貼られた一枚の写真を見て、俺は思わず声をあげてしまう。

「ど、どうしたの?」

その声に反応して、しろはが俺のそばにやってきた。

「なあしろは、この人って……?」

「ああ……それ、若い頃のおばーちゃんだよ」

着物を着てはいたけど、見れば見るほど、しろはにそっくりだった。

「……すごく、しろはに似てるんだけど」

「そうかな……? それなら、こっちも似てると思うよ」

そう言ってしろはが指し示した写真には、上半身裸の、良一に似た人物が写っていた。さっきのと同じく、白黒写真だった。

「……これってもしかして」

「うん。良一のおじーさんの若い頃」

格好が似てることもあって、もう良一本人なんじゃないかってくらい似ていた。これは新しい発見だ。

「鳴瀬家だけじゃなくて、島の全体の歴史みたいなものだな」

俺はそう言いながら、別のアルバムを開いてみる。今度はカラー写真が納められていた。写真に添えられたコメントを読む限り、どうやらしろはの両親が撮った、幼い頃のしろはの写真みたいだ。

パラパラとページをめくってみると、その中に、どっかで見たことがあるソフビ人形を持ったしろはが写っていた。このしろは、5歳くらいかな。

「なあしろは、この人形、なんだっけ」

「それ？ バノレタン星人だよ。ふおふおふお」

……しろはが妙な声色で、両手でハサミを作っていた。

「……かわいいそんなものを見るような目で見ないでほしいんだけど。知らない？ バノレタン星人」

「いや、懐かしいけどさ……この手のおもちやで女の子が遊ぶイメージがないんだけど」

「おかーさんが買ってくれたの。おとーさんはリコちゃん人形をあげたかったらしいんだけど。まるで反対だよね」

すごく懐かしそうに言っていた。家族の思い出なんだろう。

「……って、さつきからなんの写真見てるの？」

そこで俺が見ているアルバムに気がついたのか、ジト目で睨んできた。

「ごめんごめん。彼女の子供の頃の写真とか、気になってさ」

「もう……少しだけだからね。こういうの見だすと、片付けて進まないんだから」

「わかってるわかっている。少しだけだから」

そう言っぺページをめくる。すると、見慣れた食堂の前で、しろはたちの家族全員が並んで写っていた。花輪が出るし、開店当時の写真だろうか。

「これ、食堂が出来た時の？」

「うん。ほとんど廃墟同然だった建物を、おとーさんとおかーさんが改装したの」

両親が居なくなった後も、しろははその食堂を一人で引き継いでいたわけか。そういう過去を知ってしまうと、しろはができるだけお店

を開けようとしていた気持ちも分かる気がする。

再びページをめくる。

そこには、厨房でチャーハンを作る父親の写真があった。中華鍋の躍動感があつて凄いい写真だと思つていたら、その父親の足元に幼いしろはが抱きついていた。

父親も笑顔で、厨房の中で写真撮るなよー。という声が今にも聞こえてきそうだった。

「懐かしいね。私の作るチャーハンのレシピは、元はおとーさんが考えたものなんだよ」

「そうなのか。じゃあ、しろはのチャーハンは父親との思い出の味でもあるわけだな」

「うん。おとーさん、そのレシピを大切にしまい込んでいてね。厨房の奥でようやくそれを見つけたのは、居なくなつてから何年も後で……」

そこまで言つて、しろはが口をつぐむ。

「……あれ。でもそのレシピを見つける前に、同じ味のチャーハンを食べたことがあるような。誰かが、作ってくれたの」

「え、そうなのか?」

「うん。うまく思い出せないんだけど」

「そりゃ、昔の話だし。覚えてないのも当然だよ」

「そうだけど……」

しろはは何かを思い出すように口元に手をやる。よくわからないけど、どこかで似た味のチャーハンを食べたりしたのかな。

「……やーはん……?」

しろはがそう呟くと同時に、その瞳から一筋の涙が零れる。

「……しろは?」

「……え? あ……大丈夫。ごめんね。どうしたんだろうね」

しろはが慌てて目元をぬぐい、誤魔化すようにアルバムをめくる。すると、しろはと一緒空門姉妹が写つてる写真が出てきた。

「あ、ほらこれ見て。子供の頃の蒼たちだよ」

「え、どれどれ」

しろはに言われて、覗き込むように写真を見る。小さなしろはに抱きつくようにして、どこか面影のある二人が写っていた。

「蒼は昔から積極的だったんだな」

「私に抱きついてるのは藍の方だよ。その後ろに隠れるようにしてるのが蒼だよ」

「え、そうなのか。なんか今と随分イメージ違うな」

「一緒に遊び始めて最初の夏休みだったかな。確か皆で遊んでるところを、親戚のおじさんが撮ってくれたんだと思うけど」

言われてみれば、このページには夏っぽい写真がたくさん貼られていた。

「こっちの写真に写ってるのがのみきで、こっちの眼鏡の少年が天善だな」

「うん。当たり前」

のみきは小さな水鉄砲持ってるし、天善も眼鏡にラケットと、基本スタイルは今とあまり変わっていない気がする。

「ところでさ、こっちの写真に写ってるこの大人しそうな少年誰？」

徳田か？」

「……それ、良一だよ」

「え、うそだろ？」

「すぐく大人しそうで、なんか本持ってるし。これが良一!？」

「昔はのみきが外に引っ張って行かないと、ずっと家に籠ってるような子だったんだよ。今はあんな関係だけど」

「へえ」

じつくりと写真を眺めてみる。俺の知らない昔の皆を知ることができたみたいで、なんか嬉しかった。

「……むう。お二人とも！ アルバムも良いですけど、こっちの荷物を運び出すのを手伝ってください！ お昼までに終わりませんよ！」

「ああ、ごめんごめん」

後ろから声がして振り返ると、夏海ちゃんが両手いっぱい本を抱

えながら、むくれていた。あれも引き出しに入っていたんだろうか。夏海ちゃんに怒られたこともあって、その後は気を取り直して作業に集中することにした。

「……よし。まあ、こんなものだろう。お前たち、もういいぞ」

お昼前になって、部屋の中を見渡していたしろはのじーさんから終了の合図が出た。

「え、まだ残ってる気もしますが。汚れたタンスもそのままですし」「タンスもそうだが、窓ガラスやふすま、床板に畳と、後は業者に頼まねば手が付けられんからな。荷物の整理ができただけで、大助かりだ」

まだまだ気になる場所はあつたけど、家主のじーさんがそう言うのなら、俺たちはここでお役御免ということだろう。

「……そうだ。しろは、ちよつと来なさい」

「え、何、おじーちゃん」

その直後、しろははじーさんに呼ばれて、母屋の方に行ってしまった。俺は夏海ちゃんと二人、その場に残される。

「どうしたんですかね?」

「さあ?」

そういえば、土砂崩れによる建物の被害はここだけで、母屋の方は別に何ともなかったんだっけ。居間やしろはの部屋も母屋にあるし、何か必要なものを取りに行ったのかもしれない。

「待たせたな」

しばらくして、二人が戻ってきた。じーさんはその手に大きな段ボール箱を持っている。

「あの、それは?」

「お前達には色々世話になったからな。これくらいしかないが、受け取ってくれ」

そう言われて、じーさんから段ボールを受け取る。中にはそうめんや缶詰、乾物や缶ジュースと言った品物がこれでもかとはかりに詰め込まれていた。

「え、これを貰っちゃっていいんですか？」

「ああ。中元の品で悪いがな」

「いえ、ありがとうございます」

夏海ちゃんと二人でお礼を言う。もしかして、わざわざお礼の品を取りに行ってくれていたのか。

「そうめんは期限が近いから、今日のお昼にでも皆で食べようね」

そういうしろはの手には大きめの手提げ袋が握られていた。

「しろは、その袋は？」

「家に置いてた宿題だよ。お昼から皆でやるんだよね？」

「あ、そうだった」

片付け作業に集中していて、本当に忘れていた。俺たちの戦いはここから始まるんだった。

その後、戸締りをしっかりと確認して、俺たちは加藤家に戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「夏海ちゃん、また手伝ってくれる？」

「はい！ お手伝いします！」

加藤家に到着すると、しろはは夏海ちゃんを連れだって、台所で昼食の準備を始めてくれた。

ちょうど居間に鏡子さんが居たので、お昼ご飯ができるまでの間に、じーさんからもらった品物について説明をしておいた。

「おまちどうさま」

しばらくして、大きなガラスの器一杯に盛られたそうめんが運ばれてきた。

「おお、すごい」

氷も乗っかっていて、見るからに涼しげだった。あんな大きな器、加藤家にあつたんだ。

「たくさん茹でたから、いっぱい食べてね」

「薬味も色々ありますよー」

最後に夏海ちゃんがめんつゆが入っているらしい御猪口を運んできてくれ、二人も食卓につく。

「……さて、食事の前に、一つ話をさせてくれ」

その全員が着席したタイミングを見計らって、じーさんがそう口を開く。話して何だろう。

「午前中に手伝ってもらったおかげで、家の方はだいぶ片付いた。おかげで、今日の夕方にはわしらも家に帰ることができそうだ」

「……え？」

……そうか。裏山の安全も確保されて、片付けも一通り終わったということは、この二人も加藤家で生活を続ける必要もなくなるわけだ。

「鳴瀬さん、そう急がなくても……今月一杯はゆつくりとしてくれて良いんですよ？　うちは全然構いませんから」

じーさんの言葉を聞いて、鏡子さんがそう提案する。

「気持ち嬉しいが、いつまでも甘えるわけにはいかんからな。世話になった」

「お世話になりました」

じーさんとしろはが揃って頭を下げる。それを見て、俺は無性に寂しい気がしてしまった。二人にとっては今の加藤家での生活こそが非日常なわけだし、ようやく元の生活に戻れるんだから、むしろ喜ばしいことのはずなのに。

例えば、部屋の片付けが終わった直後にお礼の品を持ってきてくれたし、二人は早いうちから決めていたのかもしれない。

「広い家だから、他の部屋を使えば寝泊りはできるよ。電気も水道も、

問題なく使えるし。何も心配いらナイよ」

俺の顔を見て、しろはがそう付け加えてくれた。くそ。逆に気を遣わせてどうするんだ俺。

「それに、夜はまた食堂開けるから、食べに来てね」

「え、食堂も再開できるの？」

「うん。まだ出せるメニューは少ないと思うけど、いつまでも閉まってるって、島の皆にも心配かけちゃうでしょ」

そう言って笑う。しろははやっぱり、俺が思う以上に芯が強い。リトルバスターズとの一件以来、食堂の経営者としても一皮むけたみたいだし。

「それじゃ、心配事も一つ減ったことだし、食べましようか。せっかくのそうめんがのびちやうしね」

話がひと段落したところで、鏡子さんがそう言って手を合わせる。俺たちもそれに倣って挨拶をして、食事を始める。

「それでは、いただきまーすー！」
各々そうめんに箸を伸ばす。夏と言えば、やっぱりそうめんだよね。

俺も美味しそうなそうめんを箸ですくって、少しだけめんつゆにつけてから、口に運ぶ。

……うん。良い感じにコシがあるし、のどごしも最高だ。

加藤家ではカップうどんばかり食べているせいか、麺類Ⅱうどんみたいな感じだし、実はこの夏、初そうめんだったりする。

「ところでしろは、このめんつゆってもしかして……？」

「うん。手作りだけど。美味しくなかった？」

「いや、逆だよ。市販品の麺ドロソボーよりおいしかったからさ。さすがしろはだよ」

「あ、ありがとう……えっと、沢田さんの畑で採れたシソもあるから、入れてみたらいいよ」

しろはが照れ隠しをするように、小皿に盛られた薬味を差し出してきた。

「まるで新婚さんみたいだね。やっぱり私たち、お邪魔かな」

「ふん。そんなものを気取るには、まだ10年早いと言っただろう」
だから10年は長いので、せめて5年くらいにしてください……。
鏡子さんたちの冗談に、心の中でそう返事をしながら、昼食の時間
は過ぎていった……。

昼食を済ませた後、俺たちは灯台に向かう準備に取りかかる。

「あれ？ 筆箱がない」

自室で参考書やらを鞆に詰め込んでいると、筆記用具がないことに
気がついた。

「おかしいな。確か、この辺りに置いておいたのに」

長いこと居間で宿題もしていないし、この部屋から持ち出した記憶
はないんだけど。

「羽依里、準備できた？」

引き出しの中を漁ったり、鞆の中身をもう一度ひっくり返したりし
ていると、しろはがやってきた。

「しろは、もうちよつと待って。筆箱が見つからないんだ」

「ええ……どこにしまったの？」

「いや、この辺りに置いてたはずなんだけど。おかしいな」

その後、しろはも一緒になって探してくれたけど、筆箱はなかなか
見つからなかった。

「ねえ羽依里、これだけ探しても出てこないんだから、もしかして部屋
の中にはないんじゃない？」

「……俺もそんな気がしてきた」

「羽依里君、もしかして探してる筆箱ってこれ？」

その時、鏡子さんが部屋にやってきた。その手には、俺の筆箱が握
られていた。

「あ、それです。どこにあったんですか？」

「居間に置いてあったよ。何かに使って、そのままだったんじゃない
？」

「そんな記憶はないんですけど……なんにしても、ありがとうございます」

ます」

俺は首をかしげながら、筆箱を受け取る。特に使った記憶もないんだけど。

「それとね羽依里君、夏海ちゃんから伝言なんだけど『時間がなさそうなので、お二人には悪いですが先に灯台に行きます』だって」

「え？」

その伝言を聞いて、俺としろはは反射的に壁の時計を見る。結構ま
ずい時間になっていた。これはもう、歩いたら間に合わない。

「せっかくだし、二人でバイクに乗って行ったら？」

鏡子さんが笑顔でそう言う。確かに遅刻しないためには、それしか
方法がなさそうだけど……。

「え、二人乗り？」

それを聞いたしろはは、明らかに困惑していた。

「ちゃんとヘルメットもあるし、そこまで飛ばさないから大丈夫だよ」

「そ、そうじゃなくて」

「え、何？」

「バ、バイクに二人乗りとか、恥ずかしすぎるし！ 一人でも、歩いて
いくし！」

しろはは顔を真っ赤にして拒否していた。そこまで言わなくても。

「でも、今から歩いて行ったら、遅刻しちゃうよ。それも皆に悪いよ
ね」

そこで、鏡子さんがそう助け船を出してくれた。俺としても、しろ
はだけ遅刻させるわけにはいかないし。

「うううう……」

……しろははその後、しばらく頭を抱えていたけど……やがて折れ
てくれ、重い足取りでガレージにやってくる。

「仕方なくだからね。皆に悪いから、仕方なくだからね」

「わかってるわかってる」

未だにぶつぶつ言っているしろははヘルメットを手渡して、ガレー
ジからバイクを出す。しろはとは対照的に、俺の心は高鳴っていた。

「……あ、そのキーホルダー、使ってくれてるんだ」

「え？ ああ、もちろん」

ポケットからバイクのキーを取り出していると、例のキーホルダーが見えたんだろう。しろはが一転、弾んだ声を出す。

一応、ペアグッズとして買ったものだし。俺が大事にしているのがわかって、嬉しいのかもしれない。

「そうだ、しろはも今日から食堂開けるなら、食堂の鍵持つてるよな？」

「え？ もちろんあるけど……？」

そう言つて、食堂の鍵を取り出す。そこには、俺のと対になった鳥のキーホルダーがついていた。

「ちよつと借りていい？」

「いいけど……」

しろはの許可をもらつて、俺は食堂の鍵についていた鳥のアクセサリーを外して、俺の鳥とくつつける。元々はこれが本来の形だし、やっぱりしっくり来る。

「この鳥たちも、たまにはこうして一緒にいさせてやろうと思つてさ」「あ、それはいいかもね」

しろはは優しい目をしながら、その鳥たちのアクセサリーを見ていた。

「それじゃ、灯台に向けて出発するよ」

「うん。その、ゆっくり急いでね」

俺がバイクにまたがると、しろははその後ろに乗って、そろりそろりと肩に手を置いてきた。

「しろは、もつとしつかりくつ付いた方がいいと思うぞ。落ちたりしたら危ないし」

「だ、大丈夫だからいいよ」

「駄目だぞ。ほら、この鳥たちみたいにくつつかないと……」

……言つてから、めちやくちや恥ずかしくなった。なに言ってるんだらう俺。

「ううう……言つたな……！ えいつ！」

背後から一瞬躊躇するような声が聞こえた後、しろはの細い腕が俺

の腰に回された。

……その直後、柔らかい感触が背中全体に広がった。

「ひいっ!？」

思わず変な声が出て、背筋が伸びてしまう。い、色々と柔らかい。これはやばい。

「し、しろは、なにもそこまで……」

「は、羽依里が言ったんだからね」

後ろから少し震えたような声が聞こえる。

「ほら、遅刻しちゃうから、早く出発して!」

……確かに、これは俺も運転に集中した方が良さそうだ。色々な意味で。

「よし、それじゃ、いくぞ!」

俺は必死に冷静さを保ちながら、灯台に向けてバイクを発進させた。

「おおー、あの二人、やるねえー」

「若いっていいわねえ〜」

「うむ。ワシも昔は、ああやってばーさんと島中を走り回ったもんじゃ」

……出発してすぐに、俺は後悔していた。

今思えば、ここは住宅地のご真ん中だった。こんな場所をバイクで二人乗りして走っていたら、嫌でも人目になってしまう。

「あ、あああ」

しろはもそれに気づいたんだろう。背中越しに伝わってくる体温が、明らかに上がった気がする。

「は、羽依里、もっと急いで!」

「む、無理言わないでくれ。さすがに住宅地じゃ、これ以上飛ばせない!」

「ううう、恥ずか死ぬ……」

「……もしかしてさ、夏海ちゃんや鏡子さんに嵌められたかもしれない

いな」

「え、どうして?」

「だって、夏海ちゃんと三人だったら、絶対にバイクなんて使わなかったからさ」

まさかとは思うけど、筆箱も意図的に隠されていたのかも。

「ううう……羽依里、急いで……」

俺の背中に顔をうずめながら、しろはがそう言っていた。そうすることで、少しでも現実から目を反らしたかったのかもしれない。

一方で、俺は背中にしろはの吐息を感じてしまい、現実と向き合うしかなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「夏海ちゃん、たばかったな……!」

「えー、何がですかー?」

「たばかったなあ……!」

灯台で夏海ちゃんに会うや否や、しろははその両肩を掴み、前後に揺さぶっていた。夏海ちゃんも妙に白々しいし、既に集まっていた皆は大方の状況を察しているのか、一様に笑顔だった。

そんな二人を尻目に、久しぶりに入った灯台の中を見渡してみると……いくつもの木箱が置かれていた。

「紬、この木箱ってもしかして机の代わり?」

「そうです! どうぞ使ってください!」

横の方に思いっきりフジツボの破片とかついてるし、どうやら漂着物みたいだった。特に濡れているわけでもないし、机としては十分使えそうだけど。

「それじゃ、勉強会を始める前に、一つ確認しておくわね」

全員が揃ったところで、年長者の静久が音頭を取り、まずは各自の宿題の進み具合を確認することになった。

それによると、この場で宿題が終わっているのは藍と静久、そして鴫の三人だけだった。

「藍や静久は当然として、やっぱり鴫が終わってるってのが信じられないんだけど」

「やっぱり羽依里、ものすごく失礼なんだけど」

「そうだぞ。鴫は実は秀才なんだ。夏休みの間、私も勉強を教えなくてもらっているくらいなんだぞ」

憤慨する鴫を、のみきがそうフォローしていた。

「むしろ、のみきが宿題残ってる方が意外なんだけど」

「実は、英語が苦手な……それ以外はほとんど終わっているんだが、ここ最近、色々と立て込んでいたからな」

言われてみればこの所、台風に土砂崩れと、想定外の事態が起こっていた気がする。のみきも役所の人間として対応に追われていたし、無理もない話だ。

「勉強できるんなら、是非鴫ちゃんに教えてもらいたいぜー」

良一はそう言いながら、隅の机の上にノートや参考書を広げて、臨戦態勢だった。

「良一は宿題、どれくらい終わってるんだ？」

「そうだな。残りは3割ってとこだな。ま、なんとかなるだろ」

謎の自信に満ち溢れてるけど、今日の勉強会に参加できなかったらどうするつもりだったんだろう。夏休み、あと数日なんだけど。

「天善はどれくらい終わってるんだ？」

「いや、まだ半分といったところだ」

良一の隣に、もつと強者がいた。繰り返すようだけど、夏休みはあと数日なんだけど。危機感ってものはないんだろうか。

「宿題をする暇があったら、その時間を卓球のトレーニングに当てていた。そっちの方がよほど有意義だろう」

胸を張ってそう言い放つ。部活も大事だけど、学生の本分って勉強じゃなかったっけ。

「全く、絵に描いたような卓球馬鹿ですね。夏休み明けに補習なんて受けないでくださいよっ」

天善の惨状を聞いて、藍が呆れたようにそう言っていた。

「なら、藍が教えてあげたら？」

「は？」

しろはがそう進言すると、藍はあからさまに嫌な顔をした。

「残念ですが、私は蒼ちゃん専門です。蒼ちゃんの宿題が終われば、女の子の宿題なら手伝ってあげますが、男の子は自力で頑張ってください」

「どうやら、最強の家庭教師を雇うことは無理そうだ。残ってる宿題の量が量だし、天善、どうするんだろう。」

「それなら、私が教えてあげましょうか」

「そ、そんな！ 滅相ありません！」

そこで名乗りをあげたのは静久だった。しかし、天善は即座にその申し出を断っていた。

「いいじゃないですか。憧れの静久さんに勉強を教えてもらった結果、補習なんて受けるわけにはいきませんよね」

「そ、それは確かにそうだが……！」

「いーじゃない。こんなチャンス、滅多にないわよー？」

天善は引き続き断りたい感じだったけど、結局最後は皆に押し切られる形で静久の申し出を受け入れることになった。うん。天善、色々頑張れ。

「えーっと、しろはや蒼の残り具合はどんな感じなんだ？」

実は天善並みに宿題が終わっていない俺は、自分に矛先が向かないように細心の注意を払いながら、皆の状況を確認していく。

「わ、私は7割くらい……かな」

「あたしも8割くらい終わってるわよー。古文と化学以外は……だけど」

台風の後色々大変だったしろははしようがないとして、最強の家庭教師がついているはずの蒼がこの体たらく。全く嘆かわしい。

「……ねえ羽依里。なんか失礼なこと考えてない？」

「き、気のせいだろ」

胸の内が顔に出ていたのか、蒼に睨まれてしまった。ここは誤魔化

さないと。

「それより、紬は宿題は終わった？」

「むぎゆ？　ないですよ？」

「え、ないの!？」

「はい！　ありません！」

もう終わったって意味だろうか。よくわからないけど、本人がないと言うんだし、気にしないようにしよう。

「それじゃ、頑張って今日中に宿題を終わらせましょう！」

「おー！ー！」

皆の進捗状況を確認した後、勉強会が始まった。

作戦としては、既に宿題を終わらせているメンバーを中心にしてお互いに苦手分野を補いながら宿題を進めていく感じだ。人数は集まっているし、この方法なら皆で協力していけるはずだ。

ちなみに灯台の中は直射日光が当たらないせいかわ涼しく、勉強をするには快適な環境だった。

「なあ藍、極めるに寒い……で、なんて読むんだ？」

「良一ちゃんはゴツサムとでも読んでおけばいいんじゃないですか？」

「じゃあ、こっちの英文なんだけどよー」

「……良一ちゃん、どすこいですよ？」

「ぐはっ！」

女の子にしか教えないと宣言していた藍に、良一が色々質問していた。例によって教えてもらえず、軽くあしらわれた挙句、どすこい言われていた。

「なあ羽依里、英語教えてくれないか。藍が教えてくれねーんだよ」

取り付く島もないと思っただろうか。今度はノートを持って、俺の方にやってきた。

「教えないだなんて心外ですね。私は女の子専門なだけです」

向こうの机でしろはの宿題を手伝いながら、藍がそう言っていた。それって教えないのと同じだから。

「俺に分かるところならいいけど……どれだ良一。見せてみる」

ちよつとかわいそうになってきたので、見てやることにした。

「これなんだけどよー」

……あれ？ こんな文法、俺は知らないぞ。

「こつちの文法の応用で行けるらしいんだが、よくわからなくてよー」
ちよつと待って。俺、一学期の最後によくその文法を習ったところなんだけど。

これってつまりあれだろうか。島の皆の方が、都会の俺たちより授業が進んでるってことなんだろうか。色々とショックだった。

「とうわけで羽依里、ぱぱつと頼むぜ！」

「いや、えつとその」

頼むと言われても、俺も分からない。どうしよう。ここは正直に言うべきだろうか。

「あ、そこはね。こつちの文法を使えばいいんだよ！ 例えばね……」

その時、背後から鷗がそうアドバイスしてくれた。助かった。

「……あれ？ 鷗、お前もしかして英語話せるのか？」

鷗が単語について説明するとき、その発音がかなりネイティブだった。

「うん！ 旅行で外国に行った時に便利だから、英語とドイツ語は話せるように覚えたの！」

「え、ドイツ語?!」

英語だけじゃなく、ドイツ語も話せるの？ もしかして鷗、すごいんじゃないだろうか。

「羽依里は話せる？」

「え、えーつと……グ、グ〜テンタ〜クとか」

「ぷっ」

うわ、鷗に鼻で笑われた。

「か、鷗にも何か一つは取り得があつたんだな」

それが悔しくて、俺はできる限りの皮肉を言っておいた。

「もー！ Hayori beendet seine Hausaufgaben vorzeitig!」

「え、俺が何だつて?」

そうしたら、ドイツ語で返された。頭に俺の名前があつたけど、その先は全く聞き取れなかった。

「ふっふっふ。わからないでしょー」

鷗は鼻高々と言った感じだった。でも確かに、すごい滑らかな発音だった。

「悔しいけど、わからない……なんて言つたんだ?」

「教えてあげないよー! じゃん!」

お約束で返されてしまった。ますます悔しい……。

「むぎゅ……えとですね。ハイリさんは、早く宿題を終わらせなさい……ですね」

その時、少し離れた場所で俺たちのやりとりを聞いていた紬が、そう答えていた。

「え? ツムツム、なんでわかつたの?」

鷗が驚愕の声あげると同時に、皆の視線が紬に集まる。紬、なんでわかつたんだらう。

「その、久しぶりに故郷の言葉が聞こえたもので。つい、答えてしまいました」

その視線に気がついたのか、紬は恥ずかしそうに顔を伏せる。

思えば、紬は日本人とドイツ人のハーフだった。なら、ドイツ語が理解できるのも納得だ。

「紬、ドイツ語がわかるなんてすごいわ。どうして黙っていたの?」

静久も知らなかったようで、驚きの声を上げていた。

「えとですね。普段は使うことがないので」

紬はつき合わせた指を胸の前でもじもじさせながら、そう言う。全くもってその通りだった。

「それならツムツム、久しぶりにドイツ語でお話ししよう!」

「は、はい！ その、よろしくお願いします！」

そして二人は奥の方でドイツ語トークを始めてしまった。時々俺やしろはの名前出ていたのだけは聞き取れたけど、それ以外は何を言ってるかさっぱりだった。

「……二人の会話も気になるけど、俺も宿題をやらないと」

その後はしばらく、宿題に集中する。時々わからない問題もあったけど、やっぱりこれだけの人数がいると、誰かに聞けばわかることが多くて、宿題は順調に進んでいった。

「……加納君、ここの英文訳が間違っているわ。ここはこの三つの単語をセットにして考えるのよ」

「はい！ 申し訳ありません！」

向こうの方では、静久が天善に勉強を教えていた。

いちいち騒がしいけど、静久に教えてもらってるおかげで、天善の方も着々と進んでいるみたいだ。

「……のみきちちゃん、その数式が違いますよ。その問題は公式をそのまま当てはめても解けないんです。こっちの応用ですね」

「そういうことか。さすが藍だな」

「そして蒼ちゃん、ここの漢文はこう読みます。そうすると解釈が変わるので、それで次のページの……」

「あー、なるほどねー」

8月の頭に終わらせているだけあって、女子の間では藍が一人無双していた。女の子専用つてのが、すごくもったいない。

「しろはさん、すみません。算数教えてもらえますか」

「いいよ。どこかな」

「ありがとうございます！ ここなんですけど……」

見ると、夏海ちゃんがしろはに宿題を教えてもらっていた。

それにしても高校生の皆に勉強を見てもらえるなんて、夏海ちゃんはラッキーだね。

……そう考えた直後、夏海ちゃんは別に宿題をやってもやらなくても関係ないことに気がついた。

「後ですね、この社会の問題なんですけど……」

「あ、そこはあたしがわかるわよー。それはねー」

「蒼さん、ありがとうございますー！」

……でも、今の夏海ちゃんなら『宿題も含めての夏休みです！』とか、笑顔で言いそうだし。ここは触れないようにしておこう。

「……あれ、この数式はどう解くんだっけ……？」

そして順調に宿題を消化していた俺だけど、数学のとある問題で詰まってしまった。

「あ、そこはねー」

悶々としていると、夏海ちゃんの宿題を見終わったらしい蒼がやってきて、声をかけてくれた。

「蒼、数学できるのか？」

「まあねー。古文とかは苦手だけど、数学は得意なのよー」

「そういえば、駄菓子屋のお約束の時の計算も早いしな」

「あれは小さい頃、そろばんを習っていた時期があつてねー」

「なるほど、それで計算に強いのか」

そろばんを習った人は、暗算する時に頭の中にそろばんが浮かぶつて言うし。

「それでその問題だけど、この公式を応用してねー」

蒼が俺のすぐ近くに腰を下ろして、半分もたれかかるようにして説明してくれる。ちよつと蒼、近いんだけど。

「むー……」

俺の肘に胸が当たっちゃいそうでドキマギしていると、夏海ちゃんに理科の問題を教えていたしろはがジト目でこつちを見ていた。しろは、これは違うんだ。

「うーん……」

勉強を始めて2時間が経過した頃、俺は大きく伸びをする、さすがに疲れてきた。宿題の方は皆のおかげで、たぶん8割くらいは終わったと思うんだけど。

「それじゃ、そろそろ少し休憩しましょうか」

静久がそう言いながら手を叩くと、その場の空気が緩む。

「そうですね。息抜きも必要ですよ。冷たいハーブティーを用意してありますから、どうぞ飲んでください」

同時に、藍がどこからか大きな水筒を取り出して、紙コップにハーブティーをついでいく。

なんだろう。独特な香りが灯台中に広がっていく。

「藍、それ何？」

「ローズマリーティーですよ。先日、佐藤さんからもらいました」

「え、佐藤さん？」

先日もらったニワトリの卵もそうだけど、あの婦人会長さん、なんでも育ててるんだな。

「あの人は家庭菜園で野菜やハーブも育ててるからね。出来そこなつたハーブをニワトリにあげたりもしているらしいよ」

藍に続いて、しろはがそう教えてくれた。烏白島ハーブ鶏とか、どこかのブランドみたいだ。

「それにしてもいい香りだな。藍、俺たちも一杯貰えるか？」

「は？ このハーブティーは女の子専用ですよ。男の子は外で水道の水でも飲んできたらいいんじゃないですか」

ちよつと待って。この扱いの差は何。

「そ、そりゃないぜ……」

「トホホ……」

正直、リフレッシュしたい気持ちもあるし。俺たち男三人はトボトボと扉に向かって歩き出した。

「タカハラさん、ミタニさん、どうぞー！」

そんな俺たちを見かねてか、紬が灯台の奥からブラック黒田の缶コーヒーを持ってきてくれた。

「紬、ありがとう。眠くならなくてちょうどいいよ」

「カノーさんもどうぞ！」

「ああ、すまない」

俺たちは表に出るのをやめ、その場でプルタブを開けて、ブラック企業の高カフエイン缶コーヒーを飲みはじめた。

「うう、苦い……」

「ミズタニ選手のスマッシュのように、ガツンと来るな」

そしてそのあまりに苦さに、三人揃って悶える。紬には悪いけど、後で表の水道の水を飲んだほうがいいかもしれない。苦みが強すぎで、逆に喉が渴いてきた。

「ねえ、羽依里たちもお菓子食べる？」

こめかみを押さえながら本気でそう考えていた時、鴎がスイーツケースからいくつもお菓子を取り出して、差し出してくれる。

「暴君ヤバネロとかどう？」

やめて。苦いのに加えて激辛とか、考えただけで舌がおかしくなりそう。

「せめて、何か甘いお菓子をもらえないか？ ほら、勉強には糖分が大事だっていうしさ」

「そうだね……甘いのだと、メルキーキャンデーとか、マルポーロとかあるけど」

「じゃあ、メルキーももらえる？」

「いいよー」

どうやら、今日の灯台の女神は鴎だったみたいだ。俺たちはブラツクコーヒーの苦みをメルキーキャンデーで中和しながら、喉を潤したのだった。

「そういうえば、静久は宿題終わったのか？」

少し気になったので、休憩時間のタイミングを見計らって、静久にそう質問してみた。大学の宿題とか、どんなのか気になるし。

「宿題というか、教授ごとに夏の課題が出ていたわね。もう終わらせ

「であるわ」

確か、静久は美術大学に進んだんだっけ。芸術とかよくわからないけど、大変そうだった。

「やっぱり、絵を描く課題なのか？」

「そうよ。静物画、風景画、そして裸婦画の課題が出ていたの」

「え、裸婦？」

「そうよ。もちろん、裸婦のモデルは紬にお願いしたわ」

静久は頬に手を当てながら、眩しいくらい笑顔だった。

「そ、そうなんだな」

思わず横目で紬を見てしまう。裸婦……？

「……むぎゆ。タカハラさんからヨコシマなオーラを感じます」

鳴と一緒にお菓子を食べていた紬がこっちにやって来て、俺を睨んできた。そ、そんなことないぞ。

「それにしても、よく紬がその……裸婦のモデルを引き受けたな」

「もちろん最初は断りました。でも、シズクの熱意に負けて、引き受けることにしました」

「そうなのよ。紬に髪を下ろしてもらって艶やかさを出してもらってね。多少盛ってる部分もあるけど、乳魂の一作なの」

話しながら、静久はうつとりとした表情を浮かべていた。何を多少盛っているものすごく気になったけど、この話題にはこれ以上深入りしないほうがいい気がした。

「皆、ごめんね。そろそろ食堂の準備に行かないといけなくて」

やがて15時半を回った頃、しろはがそう言っただけ荷物をもとめる。

藍が蒼と並行して宿題を手伝っていたこともあって、自分の宿題はしつかりと終わらせたらしい。

「しろはさん、ありがとうございます！」

最後の方は付きつきりで宿題を見てもらっていた夏海ちゃんがお礼を言っていた。

「うん。皆も残りの宿題頑張っただけ。それじゃ」

入口から軽く手を振った後、しろはは帰っていった。

よし、俺の宿題も残り少し。苦手分野は終わらせたし、ラストスパートだ。

「よし、終わった——！」

最後に天善が数学のノートを閉じると、この場にいた全員が宿題を終えた。皆でハイタッチをして喜びを爆発させた後に腕時計を見ると、18時半近かった。実に5時間以上かけて、一気に終わらせたことになる。

正直、俺も今日中に終わるか不安だったけど、島の皆の方が授業が進んでいたことが幸いして、なんとか終わることができた。田舎の方が学力高いっていうけど、本当なんだな。

「うん。なんとか無事に全員宿題が終わったみたいね」

「これも水織先輩のおかげです！　ありがとうございます！」

天善が土下座しながら、感激の涙を流していた。ずつとつきつきりで教えてもらえてたんだし、彼にとっては夢のような時間だったに違いない。

「いいのよ。それにしても加納君、後半の集中力はすごかったわね」

「恐れ入ります！」

静久が言う通り、さすが毎日トレーニングしているだけあって、天善のここぞという時の集中力はすごかった。ちよつと見直したかもしれない。

「それじゃ、改めて明日の予定の話をしましょう」

晴れて全員がミツシヨンをやリ遂げたということで、静久から明日の遊園地について具体的な話がされる。

「明日だけど、皆は8時半の船に乗ってちょうだい。私は宇都港で待っているから」

静久が一人一人にチケットを渡しながらそう言う。どうやら、以前のデートの時と同じパターンらしい。

「港からは遊園地まで無料の送迎バスが出ていてね。そこから30分

くらい移動すれば、目的地よ」

宇都山ハイランドはその名前の通り山の上にあるっぽいし、それくらいの時間はかかるのかもしれない。

「あと、水を使ったアトラクションがあるらしいから、各自で水着は用意しておいてね?」

「わかりました! 忘れずに準備します!」

夏海ちゃんがノートの端に、必死にメモを取っていた。

「それとパイリ君、この内容、しろはちゃんにもしっかりと伝えてね?」

「もちろん。しっかりと伝えるよ」

しろはの分のチケットを受け取りながら、俺はしっかりと頷く。夜は食堂に行く予定だし、その時に伝えることにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

明日の最終確認が終わり、勉強会は解散となった。

その後は夏海ちゃんと二人でバイクに乗って、加藤家に帰宅する。

昨日と同じくらい遅くなってしまったけど、加藤家には人気も無く、明かりもついていなかった。たぶん、鏡子さんも出かけているんだろう。

「……あれ。しろは、鳥のキーホルダー忘れてる」

バイクを加藤家のガレージにしまおうとした時、俺のとくつついたままになっている鳥のキーホルダーを見つけた。

「慌てて帰って、忘れちゃったんだろうな」

まあ、夜に渡せばいいだろうし。

俺はそのキーホルダーを外して、遊園地のチケットと一緒にポケットにしまう。

「羽依里さーん! 洗濯物取り込むの、手伝ってくださいーい!」

「ああ、今行くよー!」

直後に夏海ちゃんから呼ばれて、俺は慌てて庭の方へ向かった。

「そういえばもう、しろはもじーさんももうこの家には戻ってこないんだっかね」

干しっぱなしにされて冷たくなってしまった洗濯物を夏海ちゃんと一緒に取り込みながら、ぽそりと呟く。

「あ、やっぱり寂しかったりしますか？」

「まあ、そりゃあね」

ここ数日がすごく賑やかだった分、何とも言えない寂しさがある。「……羽依里さん、たくさん勉強してお腹空きましたし、洗濯物を取り込み終わったら、さっそく食堂に行きましよう！」

夏海ちゃんが笑顔でそう言う。少しでも早く、しろはに会わせようとしてくれてるんだらうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

すっかり夜の帳が下りた住宅地を抜けて、一本道を通り、坂道を下って、しろは食堂へ到着した。

しろはのじーさんが書いたこの看板も、随分久しぶりに見る気がする。

「しろはー」

「あ、いらっしやい」

ガラガラと扉を開けると、いつもと変わらぬ感じでしろはが対応してくれた。

「しろは、これ」

俺は食堂につくと、すぐに鳥のアクセサリーをしろはに渡す。

「ありがとう。持ってきてくれたんだ。ごめんね」

「俺の方こそごめん。灯台についた後、すぐに返せばよかったのにな」

「ううん。私の方こそ急いで帰っちゃったし」

「いや、ペアグッズだからって調子に乗って、ずっとくつつけてた俺も悪いんだよ」

お互いにペコペコと頭を下げ合っていた。なんか、このままだといつまでも謝ってそうだ。

「……やっぱりそれ、ペアグッズだったんですね」

その時、後ろの方から夏海ちゃんが笑顔で俺たちを見ていた。

「え、えーつと……こほん。夏海ちゃん、いらっしやい。今日は何にする?」

しろはは一瞬視線を泳がせた後、何事もなかったように取り繕った。心なしか、笑顔なのに怖い。この話題はこれ以上追求しないで。と暗に語っている気がした。

「うん。それじゃあ夏海ちゃん、座ろうか」

俺もそのしろはに倣って取り繕う。セルフの水を用意して、夏海ちゃんと一緒にいつもの席に座る。

「しろは、今日は何ができるの?」

受け取ったおしぼりで手を拭きながら、メニューを眺める。

「活け造り定食や日替わり定食はできないけど、それ以外ならできるよ」

仕入れの関係か、日替わり定食や一部のメニューにバツ印のシールが貼られていたけど、ほとんどのメニューは提供できるみたいだ。

「じゃあ、久しぶりにコロツケ定食もらえるかな」

「あ、私もそれでお願いします!」

俺と夏海ちゃんは同じメニューを注文していた。俺も、なんだか久しぶりに、しろはのコロツケが食べたくなったし。

「今日のコロツケはカニクリームコロツケだけど、それでもいいかな?」

「はい! お願いします!」

「うん。それじゃ、少し待っててね」

そう言っしてしろはが調理に取りかかる。俺や夏海ちゃんはお冷を飲みながら、そんなしろはの様子を眺めていた。

「そうだ。しろは、あの後皆で話し合って、明日の遊園地には朝8時半の船で出発することになったよ」

俺は静久から預かったチケットをしろはに渡しながら、そう説明する。

「8時半の船だね。わかった。遅れないように港に行くよ」

「後さ、水を使ったアトラクションがあるから、水着を用意しておいて欲しいんだって」

「そ、そうなんだ。水着……」

水着と聞いて、しろはな複雑な表情を浮かべていた。以前、皆で海水浴した時も着ていた気がするけど。何か問題でもあるのかな。

「遊園地とか久しぶりなので、楽しみですー！」

隣の夏海ちゃんは満面の笑みを浮かべながら、そう言っていた。

「夏海ちゃん、明日も楽しみだけど、明後日は島の花火もあるんだよ」

「え、花火ですか？」

「そう。島名物の、夏の終わりを告げる花火。すごく綺麗なんだよ」

しろはが手元から視線を外さずにそう言っていた。確かに、この時期に花火大会をやるなんて珍しいかもしれない。

「なら、その花火はしろはさんと羽依里さんの二人っきりで見たらどうですか？ ロマンチックですよね」

夏海ちゃんがカウンターに頬杖をつきながら、笑顔でそう言っていた。なんか最近、夏海ちゃんが積極的に俺たちをくっつけようとしている気がする。

「も、もう……夏海ちゃんがそんな気を使わなくていいの。それに、花火は皆で見た方が楽しいよ」

「そうだよな。確か、出店も出るんだっけ」

「うん。本土からもお店がやって来て、港にたくさん並ぶんだよ。皆で見て回ろう？」

「わかりました！ 楽しみにしています！」

その後も花火の話題で盛り上がっていると、しろはの料理が完成し

た。

「はい。おまちどうさま。コロッケ、揚げたてだから熱いよ」

「ご飯とみそ汁、三色なますの小鉢に続いて、メインのコロッケが乗った皿が運ばれてきた。

「おお、おいしそう」

「それじゃ、いただきまーす！」

料理が揃ったところで二人揃って挨拶をして、さっそくコロッケに箸を伸ばす。

「あっちちち！」

そして、揃って熱さにもだえる。

「揚げたてだから熱いよって言ったのに」

「う、うん。油断してたよ」

俺はお冷を口に含んで、慌てて口の中を冷ます。今日はカニクリームコロッケだったこともあり、一層熱かった。

俺たちは味噌汁やごはんを先に食べて、コロッケが少し冷めるのを待ってから、改めて口に運ぶ。

「おお、うまい……」

一口食べると、口の中にトロつとしたホワイトソースとカニの風味が広がって、なんとも言えない美味しさだった。

「しろは、これって本物のカニ？」

「当たり前だよ。本物じゃないカニクリームコロッケなんてないよね」

場所によってはカニに似た何かだったり、缶詰のカニを使っていたりするんだけど。しろは曰く、このカニクリームコロッケのカニは港で獲れたてのものを使っているらしい。

「しろはさん、すごく美味しいです！」

夏海ちゃんもご満悦の様子でカニクリームコロッケをほおぼっていた。俺の方までザクザクという衣の良い音が聞こえてくる。確か、クラッカーを細かくして衣に混ぜてるって言ってたっけ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろは、ごちそうさま」

「ごちそうさまでしたー」

「うん。それじゃ二人とも、また明日、港でね」

夕飯を堪能した後、しろはにそう挨拶をして、食堂を後にする。

「……なんだか、すっかり秋めいてきましたね」

その食堂からの帰り道。住宅地へと続く一本道を歩いていると、夏海ちゃんがそう呟く。

確かに、草むらで鳴いている虫の声も、段々と夏の虫から秋の虫に変わってきていた。嫌でも夏が終わっていくのを感じる。

「……あのさ、夏海ちゃん」

「え、なんですか?」

そこで俺は足を止めて、どうしても気になっていたことを夏海ちゃんに聞いてみる。

「鏡子さんに聞いたんだ。本当なら夏海ちゃんは、21日……あの祭りの日に、トキアミに還るはずだったんだね」

「……そう、ですよ」

夏海ちゃんは両手を後ろに組みながら、ばつが悪そうに視線を外す。

「どうして、還らなかったの?」

「だって……」

「だって、楽しいんですもん」

「島の皆さんと一緒に過ごす、この夏が。楽しくて、眩しくて。還りたくないって、思っちゃったんです」

「でも、このままだと夏海ちゃんはさ……」

「……たぶん、存在を保てなくなつて、消えちゃうんじゃないですかね?」

「え?」

「実は、もう迷い橋はもう散ってますし、空への門も閉じちゃつてると

思うんです。このまま時間切れになれば、私は消えるだけですよ」

夏海ちゃんが夜空を見上げながら言う。まるで、どこか遠くにあるトキアミを見ているようだった。

「それでたぶん、消えたら忘れられちゃうんですよ」

「どうして?」

「だって元々、私はここに存在しないんですよ? 消えたら、それまで。そんな気がするんです」

……もしかしてこの子、それを全部受け入れたうえで、残る道を選んだのだろうか。

「それにほら、もし私が21日に還っていたら、次の日の試合もできなくなるどころだったですよ?」

夏海ちゃんはボールを握るような格好をして、そのまま投球モーションを見せる。試合というのは、リトルバスターズとの試合のことだろう。

「あれだけギリギリの試合だったんです。私がいなかったら、まず勝てなかったですよ!」

「た、確かにそうかもだけどき」

「それに、明日の遊園地に明後日の花火。この夏には、まだまだ楽しいことが残ってたんです。もし、あの日に還っていたら、絶対後悔しました」

夏海ちゃんが俺に視線を向ける。心残りなんて微塵もない、まっすぐな目をしていた。

……そうか。これは傍人の役目を終えた夏海ちゃんが、自分の意志で決めたことなんだ。

「……夏海ちゃん、変なこと聞いてごめんね」

「え?」

「俺は最後まで、一緒にいるからさ」

「……はい! その、よろしくお願いします!」

夏海ちゃんは深く頭を下げた後、俺に背中を向けて走り出した。一瞬見えたその瞳は、心なしか潤んでいた気がする。

「夏海ちゃん、暗いんだから走ったら危ないよ!」

そんな夏海ちゃんを、俺は急いで追いかけた。

今日頑張ったおかげで、明日は遊園地に行けることになったし。静
久や皆に感謝だ。

……残り少ない夏休み。全力で駆け抜けないと。

第四十三話・完

第四十四話 8月28日（前編）

……朝。

今日も夏海ちゃんの声で起こされ……ない。自然に目が覚めた。

「……あれ？」

壁の時計を見てみると、いつも起きる時間とそこまで変わらない。今日の遊園地が楽しみで早く目が覚めた……ってわけでもないみたいだ。

「えーっと」

寝ぼけている頭をゆっくりと動かしていく。何かおかしいような。

……そうだ。布団がやけに狭いんだ。妙にあつたかい気もするし。

「……あれ、まさか」

そこで俺はある答えに辿り着き、ゆっくりと布団をめくってみる。

「くー、すぴー」

そこでは、夏海ちゃんが俺にくつつくようにしながら、気持ち良さそうに寝息を立てていた。

「は!？」

なんか、前も同じようなことがあったような。

また夜中にトイレに起きて、そのまま俺の布団に潜り込んでしまったんだろうか。

何にしても、これはあらぬ疑いをかけられる前に、一度部屋から出た方が良さそうだ。

そう思い立って、夏海ちゃんを起こさないようにゆっくりと布団から抜け出す。そのまま慎重に部屋のふすまに手をかけた……その時。

「羽依里君、そろそろ起きないとラジオ体操に遅れる……よ？」

目の前でふすまが開き、笑顔の鏡子さんが顔を覗かせた。

「あら……？」

その笑顔のまま、鏡子さんが固まる。これはまずい。お約束の流れだ。

「ああ……夏海ちゃん、昨日は夜遅くまで七影蝶を取りに行ってたみ

「たいだしね。帰ってきたのは良いけど、力尽きちゃったんだね」

「え？ 七影蝶がなんですか？」

予想外の反応だった。呆気にとられている俺を尻目に、鏡子さんは俺の隣を抜けて、夏海ちゃんの横に座り込む。

「ほら、夏海ちゃん。朝だよ。起きないと」

そしてその肩を優しくゆする。

「うみゆ……おはよーございます……」

夏海ちゃんはすぐに目を覚ましたみたいで、ゆつくりと身体を起こして布団の上に正座をし、ぶるぶると頭を振っていた。まだ眠たそうだけど。

「ふあ……。私、また羽依里さんの部屋で寝ちゃってましたか？」

そして部屋の中を見渡しながら、あくび交じりにそう言う。

「うん、驚いたよ」

「……ごめんなさい。驚かせちゃいましたよね」

すぐに俺の姿を見つけたらしく、申し訳なさそうに苦笑する。

「いや、それはいいんですけどさ」

鏡子さんに見つかった時は、いつものような騒ぎになるとばかり思っていたから、ちよつと拍子抜けしてしまっただけ。

「ところで、夜に七影蝶がどうかって言ってたけど……どういうこと？」

「それはその、昨日も夜中に少し、七影蝶を採りに行っていたので」

「え？ 採りに？ 七影蝶を？」

「……あれ？ 言ってませんでしたっけ」

「……初耳なだけだ」

「私、七影蝶のカタマリなので、時々七影蝶を補充しないとイケないというか、夜中になると無性に欲しくなるんですよ」

夜中にちよつとお菓子が食べたくなくなるんです。みたいな感じで言わないでほしい。

「あ、もしかして、夏海ちゃんが時々寝坊してたのって」

「……はい。夜中に七影蝶を探して出歩いていたからです。この島に来てから、ちよくちよく採りに行ってきましたから」

「そうなんだね」

言われてみれば、結構寝坊してた気がする。その時は単に疲れたか、夜更かししたのかな……くらいにしか思ってたけど。

「もしかしてその原因って、俺のバイク事故の影響で夏海ちゃんの七影蝶が減っちゃったから？」

「いえ、それは関係ないです。以前から、食堂の帰りとか、肝試しの時とか、こつそり採りに行っちゃってましたし」

イタズラが見つかったら風な顔で言っていた。夏海ちゃんにとっては自然なことだったんだろうか。

「でも、七影蝶を捕まえるとすごく安心するんですけど、その代わりにすごく眠くなっちゃうんですね。えへへ」

「それで、俺の布団に潜り込んできたよ」

「そうなんです！ 頑張つて帰ってきたんですけど、あと少しというところでどうしても耐えられなくなって……その、ごめんなさい」

「いや、理由がわかったら別にいいんだけどさ」

夏海ちゃんの朝寝坊に、まさかそんな理由があつたなんて。

やっぱり、それだけ夏海ちゃんという存在を維持するのは大変なことなんだろうか。

「……ところで二人とも、そろそろ準備しなくて大丈夫？ 今日是最後のラジオ体操があるんだよね？」

「え？」

鏡子さんに言われて、俺と夏海ちゃんは同時に時計を見る。

「……まずい、もうこんな時間だ！」

「本当です！ 急いで準備しないと！」

俺たちは慌てて起き上がって、すぐに身支度を始めた。今日は遊園地もあるし、朝から色々慌ただしくなりそうだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

朝から騒がしく鳴きはじめた蝉たちの声を聞きながら、住宅地を抜けて神社に到着する。

「皆、おはよう」

「おはようございます！」

「ちーっす」

「よう」

既に境内には少年団の皆が集合していた。他にも鷗や紬の姿もあったけど、今日はしろはや静久の姿はなかった。

「紬、確か静久は今日、本土の港で待っていてくれるんだよな」

「そうですね！ 向こうで皆さんをお待ちしているそうです！」

紬は朝の太陽に負けないくらい笑顔だった。やっぱり、皆でお出かけできるのが楽しみなんだろうか。

「羽依里、昨日の水織先輩の話、ちゃんとしろはに伝えたわよね？」

その時、空門姉妹がこっちにやってきながら、そう話しかけてきた。

「ああ、夕飯を食べに食堂に行ったとき、ちゃんと伝えたよ。チケットだつて渡したし」

「羽依里さんのことですから、しろはちゃんと遊園地デートしたいとか言っただんじやないですか？」

「い、言っていないし」

俺の下心は、藍に思いつきり見抜かれていた。というか、具体的にさぐる。食堂に盗聴器でも仕掛けられてるんじゃないだろうか。

「いやー、爽やかな朝だぜ」

「そうだな。これほどまで朝日が美しいと感じるのは、いつ以来だろうか」

そんな俺たちから少し離れたところでは、良一と天善が朝日を浴びながら清々しい表情をしていた。昨日で宿題も終わったし、色々なしがらみから解放されたんだろう。

やっぱり、この後に楽しみが控えているということもあって、皆どこか浮足立っているように思えた。

「お前らー！ この夏最後のラジオ体操を始めるぞー！」

その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。最後のラジオ体操を

前に、当人も気合十分。これは俺たちも全力で応えないといけなさそうだ。

「よーし、今日のラジオ体操はここまでー！ー！」

「ありがとうございますましたー！ー！」

子供たちに混ざって、俺たちも精一杯大きな声でお礼を言っていた。ラジオ体操大好きさんも、最後の方は声が枯れていたし。全てを出し切った感じだった。

「それじゃ、皆勤賞の景品を配るぞー！ スタンプカードを持ってきてくれー！」

どうやら、今日はログボはないらしい。代わりに、皆勤賞の子に温泉の素が渡されていた。キャンプに行った関係で皆勤賞を逃した俺たちは、その光景を遠巻きに眺めるしかなかった。

「すごいですねこれ。熊が出るので誰も入れない秘湯のもと……ですか？」

「うん。すごいでしょ」

景品を手にした堀田ちゃんと夏海ちゃんが話をしていた。よくある、どこか有名温泉地を模した入浴剤かと思ったら、何か違うらしい。「……熊が出るんなら、その熊を倒せるような人じゃないとその温泉には入れそうにないね」

「おいおい」

冗談を言ってみたら、堀田ちゃんに突っ込まれた。しろはのじーさんとかなら、熊とも戦えそうな気がするけど。

「よーし！ 続いて、準皆勤賞だ！」

「え、準皆勤賞？」

聴き慣れない単語だった。その後の説明によると、スタンプが一つ足りない子にも特別に景品があるとのことだった。

「おお、まさに俺たちだそうだな！」

良一が声を弾ませる。確かに、俺たちが該当していた。

俺たちはラジオ体操大好きさんにスタンプカードを見せた後、手のひらサイズの箱を受け取る。

試しに箱を開けてみると、中には小さな置物が入っていた。なんだろうこれ。

「これはもしや、温泉の置物じゃないか!？」

中身を確認するや否や、天善が大きな声を出していた。先日のガチャポンの時もそうだったけど、天善ってこういうミニチュアみたいなのが好きなんだろうか。

「天善、詳しいのか？」

「ああ、これは日本各地の温泉地に売られている置物でな。人気温泉地のものになると品薄になり、なかなか手に入らないらしい」

よく見てみると、ご当地キャラクターらしい黒い熊や緑の鳥が温泉に入っている。隅の方には『黒川』と『湯布院』とか地名が書かれていた。

「これを風呂場に置いておくと、幸せが舞い込むらしいぞ」

天善が笑顔でそう言っていた。よくあるパターンだけど、せっかくだし加藤家の風呂場に置いておこう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、また港でねー」

「遅刻したら、置いていくからなー!」

皆とそんな挨拶を交わしてから、加藤家へと帰宅する。

「羽依里さん、朝ごはんどうしましょう」

玄関にスタンプカードを置くと、心配そうな顔をしながら、夏海ちゃんがそう聞いてきた。

「そっか。しろはたちは元の家に帰っちゃったし、朝ごはんはまた夏海ちゃんにお願いしないといけないのか」

「そうなんですよ。今日はログボもないですし、私も頭を悩ませてる

んです」

夏海ちゃんは準皆勤賞でもらった温泉の置物をてのひらで弄びながら、そう言う。

「……そうだ。昨日、しろはのじーさんから手伝いのお礼に沢山の品物を貰ったよね。それを朝ごはんに使えないかな」

「あ、それがありませんね!」

それを聞いた直後、夏海ちゃんは胸の前でポンと手を叩いて、急ぎ足で台所へ向かっていった。

俺は特に手伝えることもないので、居間で朝食ができるのを待っていた。

「お待たせしました! 今日こそうめんチャーハンです!」

「え、そうめん!?」

夏海ちゃんが満面の笑みで運んできてくれたそれを、俺は二度見してしまった。それくらい、真つ白なチャーハンだった。

「夏海ちゃん、これ、お米使ってないんじゃない?」

「はい! たくさん残っていたそうめんを細かく砕いて、ごま油でぱらっぱらに仕上げました!」

「でも夏海ちゃん、これじゃまるで焼きビーフ……」

「チャーハンです!」

即答された。それにしても、じーさんから貰った品はそうめんの他にも、サバの缶詰やなめこの瓶詰とかあったはずだ。なんでよりによって、そうめんなんだろう。

「チャーハンなんです!」

夏海ちゃんはすっかりチャーハンモードみたいだった。笑顔だけで怖い。

「わ、わかったよ。そうめんチャーハン、おいしそうだね」

「ですよねですよね。今日も自信作ですよ!」

ニコニコ顔のままエプロンを外して、俺と向かい合って食卓につく。昨日の今日であれだけど、しろはたちがいないだけで、すごく寂

しくなってしまった気がする。

「それじゃ、いただきまーす」

夏海ちゃんもそれを感じ取っているのか、努めて賑やかに振る舞っている気がする。俺も挨拶をして、そうめんチャーハンをスプーンですくい、口に運ぶ。

「あ、美味しい」

夏海ちゃんの言う通りにパラパラだった。良い感じに胡麻油の香りが鼻に抜ける。

「美味しい、けど……」

具材としてタマネギやニンジンが入っているし、見た目からして香りからして、どうしても焼きビーフンだった。

「そうめんチャーハン、美味しいですね」

「……うん。美味しいね」

色々と気になる部分はあったけど、この際目をつぶろう。これはチャーハンなんだ。

朝食を済ませた後、俺たちはそれぞれの部屋で外出の準備をする。「……うん。こんなものかな」

準備と言っても、いつもより少しだけ洒落つ気のある服を着て、水着やタオルが入った鞆を用意した後は、財布を持つくらいのものであった。

「羽依里さーん、準備できましたかー？」

その準備も終わった頃、ふすまの向こうから夏海ちゃんの声があった。

「うん。今終わったところだよ」

その声に返事をしてふすまを開けると、廊下に夏海ちゃんが立っていた。いつもよりおしやれしてる感じで、珍しくスカートを履いていた。

そしていつも大事なものを入れているポーチを持って、ナツプザックを背負っている。たぶん、あつちに水着とか入ってるんだろう。

「夏海ちゃん、似合ってるね」

「えへへ、ありがとうございます！」

そしていつもと違う格好だけに、どうしても左手の包帯に違和感がある。

「それじゃ、先に玄関で待ってますね！ 羽依里さん、遅れないでくださいよー！」

夏海ちゃんはそう言うと、ぱたぱたと廊下を走っていった。

「ふふ、ものすごく楽しみにしてるみたいだね」

その時、手にほうきを持った鏡子さんが廊下を通りかかった。

「遊園地、楽しんできたらいいよ」

「ありがとうございます。それで、あの……一つ聞きたいことがあるんですけど」

「え、何かな？」

立ち去りかけた鏡子さんが、そう言って振り返る。

「夏海ちゃん、島から出たりしても大丈夫なんですか？」

遊園地を楽しみにしてるし、言い出せなかったんだけど……何故か、妙な不安があった。

「……大丈夫だと思うよ。日帰りだしね」

鏡子さんは笑顔でそう断言してくれた。すごく頼もしく、安心できる笑顔だった。

「羽依里さん！ まだですかー？」

「ほら、夏海ちゃんが呼んでるよ。そんなこと気にしないで、思いっきり楽しんできて」

「……わかりました。行ってきます」

「うん。いってらっしゃい」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

港についてみると、他の皆は全員集まっていて、乗船ゲートの近く

で談笑していた。

「あ、やっと来たよ」

「もう、二人が最後よー」

乗船券を買ってからその輪に加わると、一番にそう言われた。まだまだ出港まで余裕があるし、俺たちが遅いんじゃないかと、皆が早いんだと思うんだけど。

「あ、夏海ちゃんもかわいいーじゃない」

「ありがとうございます！ 蒼さんも素敵です！」

蒼が夏海ちゃんの服装を見ながら目を細めていた。本土への外出ということ、やっぱり皆の服装も気合が入っている感じた。

空門姉妹は髪型をそろえて、色違いのワンピースを着ていた。蒼のあの服って、確かデートの時にウニクロで買った奴じゃなかったっけ。

「二人とも、今日は髪型も揃えたんだな」

「外出スタイルですよ。遊園地で乗り物を楽しみますから、この髪型がちょうどいいんです」

「いつもの藍の髪型だと、絶叫マシンとか乗ったら一発でボサボサになりそうだもんねー」

そう笑い合う二人の足元を見ると、イナリが居た。

「おおいナリ、お前は見送りか？」

「ボン！」

さすがにイナリはついて来ないんだろう。なんだかんだで、野生動物だし。

「むぎぎぎぎぎぎ」

その時、背後からまるで野生動物のような声が聞こえてきた。

「紬、朝からすごい顔してどうしたの」

振り返ってみると、紬が唸っていた。

「ナツミさんが可愛くて、ヤキモチを焼いています。むぎぎぎぎぎ」

そう頬を膨らませる紬は控えめのフリルがついた洋服を着て、髪をポニーテールにしていた。その髪を結ってる青いリボンは確か、以前お出かけた時にプレゼントしたやつだ。

「いや、紬も十分可愛いと思うけど」

「むぎゆ!？」

ぼん、という音が聞こえてきそうな勢いで耳まで真っ赤になった。「そ、そういう風に言われると、照れてしまいます。むぎゆ〜……」

紬は恥ずかしそうに視線を泳がせる。顔は赤いし、髪は金色だし、リボンは青いし。色々とカラフルだった。

「女連中は色々と大変そうだよなー」

お互いのファッションについて楽しそうに話す女性陣を遠巻きに見ながら、良一がそう口にする。

そんな良一はワイシャツの上に一枚上着を羽織っただけの、割と普通のスタイルだった。

「良一、その格好で行くのか？ とっさにパージできないぞ?。」

「島の外じゃ、ほいほいパージなんてしねーよ！ 変態じゃねーか!。」

良一はそう憤慨する。でも、きちつと服を着た良一なんて、違和感しかないんだけど。俺がおかしいのかな。

「いつもと同じ格好で出かけようとしたところ、妹に止められたと聞いたが」

「そうなのか……え!？」

相槌を打ちながら天善の方を見て……俺は絶句した。天善が普通の服を着ている。卓球のユニフォーム姿じゃない。

「鷹原、どうした?。」

「い、いや……」

思わず、まじまじと見てしまう。白いワイシャツに、黒地のズボン。至って普通なんだけど、めっちゃくちや違和感がある。登校日に見た、制服姿以上だ。

「その……今日はラケットを持っていないと思ってさ」

続く言葉を見つけるのが難しく、俺はそう話題を変えてみた。

「いや、持っているぞ」

そう言うと、天善は持っていた鞆の中からラケットを取り出す。まさかと思っただけど、やっぱり持ってた。

「ラケットは二つあるから、船やバスで暇になったら言ってくれ」

言ったらどうなるんだろう。場所を問わず、一緒に卓球をするんだろうか。それはそれで嫌だ。

「……まったく、天善は本当にブレないな」

そのため息混じりに言うのはのみきだった。小さなポーチと一緒に、水着が入っているらしいナツプザックを背負っている。奇しくも、夏海ちゃんと似た格好だった。

「のみきの私服姿も珍しい気がするな」

「そ、そうか？ まあ、島だとあまり着ることはないがな……」

のみきは顔を赤面させて、これまた目を泳がせていた。

ちなみにその服装は、緑を基調としたパステルカラーのTシャツに、ハーフパンツ姿だった。島だと制服のイメージが強いんだけど。

「羽依里、私は？」

その時、のみきの後ろから鷗が出てきて、俺の前でぐるりと回ってみせる。

鷗は白を基調としたワンピースに、同系色でつばの大きい帽子をかぶっている。そのコーディネートに鷗の黒髪が映えて、すごくきれいに見えた。

「似合ってるけど、ますますカモメっぽくなったぞ」

「えええ、その言い方ひどいんだけど」

正直なことを言うと、鷗は普段黒っぽい服が多いから、今日の服装は新鮮だった。

「羽依里ー、そんな言い方してると……」

鷗は悪戯っぽい表情を浮かべながら、胸元から青い石のついたペンダントを引き出す。あれは鷗とのデートの時、プレゼントしたやつだ。

「しろしろにこのペンダントのこと言っちゃおうかなー」

「そ、それだけは勘弁してくれ」

そう言えば、鷗とのデートの内容はしろはに筒抜けだったけど、そのペンダントのことはしろはも知らないみたいだったし。今、この夕イミングで話されたら困る。

「どーしよっかなー」

「え、私がどうしたの？」

「おわっ」

鴉がペンダントを指先で弄んでいると、唐突にしろはが現れた。

「鴉、そのペンダント綺麗だね。何の石がついてるの？」

「お、教えてあげないよ！　じゃん！」

不意を突かれた鴉は慌ててペンダントをしまい込み、そのまま器用にスーツケースに寄りかかるようにしながら、俺たちのそばから離れていった。

「……？」

しろははそんな鴉を首をかしげながら見送る。あのスーツケース、ああやって逃げる時にも使えるのか。やっぱり便利だな。

「……それより、やっぱりしろはの服装が一番だな」

「そ、そう……？　普通だよ？」

俺は改めてしろはの服装を見てみる。しろはは薄い青色の服を着ていた。確か、カシユクール・ワンピースとかいうやつだった。

髪色と服の組み合わせもあるんだろうか、露出は多くないのにすごく涼しげで、いつも以上にかわいく見える。

「なんだかんだ言ってる、やっぱり自分の彼女が一番可愛く見えるのよねー」

「当然だろ」

笑顔の蒼からそう言われ、俺はつい、正直に答えてしまっていた。

「……出発前からお腹いっぱいになるんですけど」

「本当、朝から焼き鳥になるよ！」

藍や鴉がそう言ってる茶化してくる。しまった。墓穴を掘った。

『……宇都港行き、間もなく出港いたします。お乗りの方はお急ぎください』

「ほら皆、そろそろ船に乗らないと」

その時、そうアナウンスが流れた。これは天の助けだ。

「そうだな。ここで乗り遅れるわけにはいかないぞ。皆、急げ」

のみきの言葉を皮切りに、俺たちは次々と船に乗り込んでいく。

「それじゃイナリ、あたしたちがいない間、しっかりと島の平和を守るのよー」

「ポーン！」

最後にイナリにそう託して、蒼が船に乗り込む。しばらくしてタラップが外されて、船はゆっくりと島を離れていった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

船に乗り込んだ俺たちは、到着までの時間をデッキで過ごすことにした。

船室は冷房が効いてるんだけど、これだけの人数だ。他のお客さんの迷惑になっても悪いし。

「おお、いい良い風だ」

「気持ちいいですね！」

今の時間ならそこまで日差しも強くないし、風もあつて涼しい。夏海ちゃんはそんなデッキの柵に掴まって、海の方を眺めていた。

海面は日の光を受けてキラキラと輝き、たくさんの海鳥が船の後を追うように飛んでいる。

「ほら鷗、島の仲間が見送ってくれてるぞ」

「……むう。羽依里、やっぱりしろしろにペンダントのこと……」

「じよ、冗談だよ。許してくれ」

鷗は胸元からチラチラとペンダントを見せてくる。しばらくはこのネタを引つ張られそうだ。

「そ、それにしても鷗、お前はやっぱりそのスニーカーを持って遊園地に行くんだよな」

「もちろんー！」

だから俺は急いで話題を変えた。船の上だから今のところ違和感はないけど、このスニーカーが遊園地を闊歩する姿を想像したら、違和感ありまくりだった。

「あの、鷗さん、良かったら一緒に船の中を探検しませんか？」

「いいよー。なつちゃん、一緒に探検しよう！」

その時、夏海ちゃんにそうお願いされて、鷗は嬉々として船内へと向かっていった。夏海ちゃんもすごく楽しそうにしてるし、邪魔しちや悪いかな。

改めてデッキを見渡してみると、他の皆はデッキの各所に散らばって、思い思いに過ごしていた。

普段、船に乗る時は一人だし。同じ船にこれだけ顔見知りに乗ってるっていうのは、不思議な感覚だった。

「……羽依里、物思いにふけてどうしたの？」

その時、しろはが俺の隣にやってきた。その拍子に爽やかな海風がしろはの髪を撫でていく。

「いや、俺って島に行くときか、本土に帰るときしか船を使わないからさ。これだけ知った顔がいると、不思議な感じなんだ」

「その気持ち、少しわかるかも。私もいつも学校行くときに皆と船に乗ってるけど、今日はまた特別な感じがするし」

「あ、やっぱりしろはもそうなのか」

この夏、本土には何度か出かけたけど、最後の最後に皆で外出するなんて思わなかったし。

「その……しろは、せっかくの遊園地だし、楽しい思い出作ろうな」
「……うん」

俺としろはは他の皆に気づかれないようにこっそりと手を繋ぐ。お互いに何も喋らないけど、何故か心地いい。そんな時間が、ただただ過ぎていった。

『……まもなく宇都。宇都港に到着いたします。お降りの方はお忘れ物のありませんようー』

やがてそうアナウンスが流れ、船はゆっくりと速度を落としていく。名残惜しいけど俺たちも手を放して、下船の準備を始めた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、こっちよー」

船から降りると、すぐ近くの案内板の前で静久が待つてくれた。

「やっとシズクに会えましたー!」

「私も会いたかったわ。紬——!」

そんな中、一番に紬が静久の大きな胸に飛び込んでいった。静久も全力でむぎゅーっとしていたし、まさに感動の再会だった。

「相変わらず、仲が良いわねー」

「あの二人はズツ友だからな」

そんな二人を、仲間たちは笑顔で見つめていた。ここは港だし、めちゃくちゃ人の往来が激しいんだけど。他人の目なんて、全く気にしていない様子だった。

「さあ皆、宇都山ハイランド行きのバスはこっちよー」

ひとしきり細成分を補充したらしい静久に案内されて、以前ショッピングモールに向かった時とは反対方向に向かって歩く。

歩くこと数分で、大型のバスが停められた港の駐車場に到着した。

「皆、チケットを用意して。これを見せれば、無料で乗せてくれるわ」
静久に指示された通りに、俺たちはチケットを取り出してバスの運転手さんに見せる。運転手さんはそのチケットに確認のスタンプを押して、席へと案内してくれた。

「お客様、そのスーツケースをお預かりしてよろしいでしょうか?」

「あ、よろしくお願いしまーす」

俺が席に座った頃、鷗がそう声をかけられていた。いくら大型バスとはいえ、さすがにスーツケースを持っては乗れないだろうし。

「鷗、大丈夫か?」

「バスの乗り降りくらいなら大丈夫だよー。よいしょつと」

鴟は座席の一部に掴まりながら、バスに乗り込んできた。

一方、預けられたスーツケースにはタグが取り付けられ、バスのトランクルームへと運び込まれていった。

やがて定刻になり、それなりの人数を乗せて、バスは宇都山ハイランドへ向けて出発した。

バスには俺たちの他にも家族連れが何組か乗っていたけど、そこまでお客さんは多くはなかった。俺たちは奥の方に全員固まって座る。

三人掛けが可能な一番奥の座席には、良一と天善が陣取る。その二人を見張るようにのみきが座り、それから手前の二人掛けの座席にそれぞれ、静久と紬、鴟と夏海ちゃん、藍と蒼、俺としろはという風に分かれていた。

「なっちゃん、たけやぶの里あげる」

「ありがとうございます！」

バスが発車してすぐ、鴟が皆にお菓子を配り始める。夏海ちゃんは小分けにされた、たけやぶの里を受け取っていた。俺はどっちかっていうと、キノコの方が好きなんだけど。

「三口チョコパイもあるよ。アオアオ、パス！」

「ありがとうー」

「アイアイや、その後ろののみきさんにも分けてあげてね！」

「りよーかい」

後ろの席には、袋に入ったチョコ菓子を投げて渡していた。あれも美味しいよな。

「良一くんや天善くんには、ヤバネロチップスだよ！」

続けて、空門姉妹の頭上を越えて、一番奥の二人に激辛チップスが渡された。あれは色々ヤバそうだ。

「ツムツムとズクズクには、一口ワタアメ！ イチゴサンデー味！」

「ありがとうございます！」

通路を挟んで斜め奥の二人にはワタアメが渡された。

「羽依里としろしろには、ぽつきーあげる！」

「サンキュー」

「鳴、ありがとう」

鳴と通路を挟んで座っている俺たちには、ぽつきーが渡された。それにしても、鳴はあれだけのお菓子をどこに持っていたんだろう。スーツケース、預けちゃったはずなんだけど。

「せっかくだし、ポツキーゲームでもしたら？」

「やらないから！」

鳴からそう言われて、二人同時に拒否していた。

「まったくもう、鳴も変なきよと言うよね」

しろはは冷静を装っていたけど、舌が回ってなかった。

その時、前の編みポケットに宇都山ハイランドのパンフレットが入っているのに気がついた。

「……そうだ。遊園地に着くまでの間、これでも見ていよう」

「そ、そうだね」

ぽりぽりとぽつきーを食べながら、しろはと一緒にパンフレットに目を通す。

「……そういえば、羽依里は遊園地とかよく行くの？」

「いや、小さい時に行って以来だと思う」

都会に住んでるからって、そういう場所に出かけていくかと言えば、そうじゃない気がするし。

「見て。メインはサンバカーニバルだって」

「え、サンバ？」

しろはが指し示す所を見てみると、カラフルな服装をした男女の躍動感あふれる写真が載っていた。よくわからないけど、そういうテーマパークなんだろうか。

「フリーフォールに、バンジージャンプ……ジェットコースターは4種類もあるんだね」

「へえ、絶叫マシンが多いんだな」

「山の上だから、景色もすごいらしいよ」

「そ、そうなんだ。でも正直、絶叫マシン苦手なんだけど……」

「え、何か言った？」

「いや、何でもないよ」

思わず口から出た言葉を、慌てて誤魔化す。なんか、ひ弱な男と見られそうだし。

そのまま窓の外に目をやると、バスは山道を登り始めていた。それっぽい看板も見え始めたし、そろそろ到着しそうだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「いらつしやいませー。宇都山ハイランドへようこそー♪」

バスを降りると、すぐに遊園地のスタッフが俺たちを出迎えてくれた。

広めの駐車場には、開園したばかりだと言うのに結構な数の車が止まっていた。送迎バスに乗ってる人は少な目だったから、皆、自家用車で来るんだろう。

「あ、静久ー。来てくれたのね！」

皆で入場ゲートの方に近づくと、スタッフの一人が声をかけてきた。

「皆、こちらがチケットをくれた先輩よ。先輩、今日はお招きありがとうございますー」

静久がそう言って紹介してくれる。俺たちも口々にお礼を言う。

「こつちもチケットを捌けて助かったわー。皆、楽しんでってね！」

「ありがとうございます」

……良かったな天善。先輩は女の人だったぞ。

「学生さんばかりって聞いてたけど、小学生の子も何人かいるのね」先輩が夏海ちゃんとのみきを見ながら笑顔で言っていた。のみきには悪いけど、先輩の前だし、静久も苦笑いを返すしかなかった。

……その後、先輩から園内の設備や今回のチケットについて、色々

と説明を受けた。

それによると、このチケットは入場券に加えて、乗り物のフリーパスや昼食のバイキングチケットにもなるらしい。これってもしかして、普通に買ったらすごく高いチケットなんじゃないかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

入場ゲートをくぐって、いよいよ遊園地の敷地内に足を踏み入れる。テーマパーク独特の雰囲気を感じて、自然と俺たちの気分も高揚してくる。

「……敷地の外周をぐるっと回ってるあれ、なんだろうね」

しろはが言う方を見てみると、かなり高い所に何かレールが走っていた。形状的に、ジェットコースターじゃなさそうだけど。

「高さ15メートルの空中サイクリングらしいですね。山の上ですし、大パノラマを一望できるらしいですよ」

藍がもらった園内マップを見ながらそう言っていた。あんなところで自転車をこぐのかな。

「しろは、後で一緒に乗ってみない？」

「ええ……私、スカートだし」

「あれだけの高さですし、誰も気にしないとしますけど。それでも恥ずかしいのなら、スパッツとか貸してくれるみたいですよ？」

「借りるほうが色々と恥ずかしいし！」

恥ずかしがるしろはに、藍が澄まし顔でそう言っていた。

「まあ、時間はたっぷりある。何に乗るか考える時間も楽しいものぞぞ」

そう言うのみきは手に撮レレンですを持っていた。あれで思い出の写真でも撮るんだろう。

「それじゃ、どこから回ろうかしらねー」

「やっぱり、一番は絶叫マシンですよね」

藍の園内マップを覗き込みながら、空門姉妹が相談を始めた。

「身長制限も大丈夫そうですし、夏海ちゃんやみきちちゃんも一緒にジェットコースターに行きましょう」

「はいー」

「い、いきなり行くのか……？ お手柔らかに頼むぞ……」

姉妹にそう誘われて、二人は正反対な反応を見せていた。夏海ちゃんは行く気満々みたいだけど、のみきは絶叫マシン苦手なのかな。

でも、夏海ちゃんは蒼たちに任せて良さそうだ。それなら俺は心置きなくしろはと遊園地デートを……。

「しろはちゃんも一緒にジェットコースター乗りましょう。ウルトラちびもすタイフーンらしいですよ」

「え、私はいいよ」

「いいからいいからー」

「えへへ、何事も挑戦ですよ！ しろはさんー！」

「そうです。せっかく乗り物のフリーパスまでついてるんです。乗らないと損ですよ」

タイミングを見てしろはに声をかけようとしたけど、しろははそれより一足早く、ジェットコースター組に連れ去られてしまった。

「紬、私たちも色々と見て回りましたよ。向こうにぬいぐるみ館があるらしいわ」

「おおー、それは気になりますー！」

そんな話をしながら、紬と静久も人混みに消えていってしまった。結局、その場には男三人が残される。

「……で、いきなりどうするんだ、この状況」

「どうすると言われてもな……」

正直、遊園地に来ること自体が久しぶりだ。それ以前に、男友達と遊園地に来るのは初めてだし。どうすればいいのかわからない。

こういう時、行動力のある女子が羨ましく感じる。

「せっかくフリーパスあるし、何か乗り物でも乗るか……？」

そんな話をしながら、園内マップに目を通していた……その時。

「レッツ、サンバー！ー！」

そんな掛け声と陽気な音楽に乗せて、派手派手な衣装に身を包んだ人たちがサンバを踊りながらこつちにやってきた。

中央に設置されたステージで定期的に行われるショーがメインらしいけど、時間帯によっては、ああやって園内を踊り歩くらしい。

「なんか、すごい熱気だな」

「お、飛び入り参加OKらしいぜ」

その集団を見た良一が、目を輝かせながらそう言っていた。

よく見ると、踊りの集団の中には明らかに素人っぽい人たちも混ざっている。

「行こうぜ、羽依里！」

「いや、そんな笑顔で言われても、俺は行かないから」

「なんだよ。釣れねーやつだな」

良一は参加したくてたまらないみたいだ。今にも駆けだしそうな感じだ。

「係員さんに言えば、衣装も貸してくれるんじゃないか？」

「衣装なんかなくても、俺は行くぜ！ んんんー、パーーッ！」

「え、おい！」

良一はそう言うと、着ていた服を乱暴に脱ぎ捨てて上半身裸になり、そのまま踊りの輪の中へと飛び込んでいってしまった。

「のみぎが居なくなっただとはいえ、いくらなんでもパーッ早すぎだろ……」

俺は脱ぎ捨てられた衣服が邪魔にならないように、適当に拾って近くのベンチに畳んで置いておく。

そして今の騒ぎに紛れて、天善も居なくなってしまうていた。どこ行っただろう。

「さて、どうしようかな……」

結局一人になってしまった。遊園地に来て早々、途方に暮れる。

しろはたちが終わるまで、ジェットコースターの出口で待っていていよかな。俺はオカルトは得意だけど、絶叫マシンは苦手だし。

「……あれ、羽依里は皆と乗り物乗らないの？」

園内マップを見ながら、しろはたちが向かったジェットコースターはどれだったっけ……と頭を悩ませていると、背後から声をかけられた。

「あれ。鷗?」

「預けたスーツケースを受け取るのに時間かかっちゃってー。もう皆、自由行動になっちゃったの?」

そういえば、鷗はスーツケースを荷物としてバスのトランクに預けた関係で、入場が遅れていたんだっけ。

「ああ、女連中は先にジェットコースターに乗るんだってさ」

「羽依里はしろしろと一緒に行かなかったんだ?」

「いや、俺は……その……」

「……」
「ご」によごによと言葉を濁す。声をかけるタイミングを逃したなんて、恥ずかしくて言えない。

「よーし、それじゃ、しろしろたちが戻ってくるまで、一緒に乗り物に乗って時間をつぶそう!」

「え、乗り物って……もしかしなくても、絶叫系?」

「もちろん! 向こうの方に、この夏登場したばかりのマシンがあるんだって!」

「……悪い鷗、実は俺、絶叫マシンとか苦」

「それじゃ、しゅっぱーっ!」

……鷗は全く話を聞いてなかった。俺は腕をがっしと掴まれて、そのまま最新のパイレーツマシーンに連れていかれてしまった。

「安全バーをしつかりと確認してくださいねー」

「はーい!」

「いや鷗、いくらなんでも最前列に座らなくても良いんじゃない」

「だって、先頭が一番楽しいよね!」

鷗はニコニコ顔だった。ここまで来たら逃げられない。俺も覚悟を決める。

「それでは、いってらっしゃーい」

担当の係員さんが笑顔で手を振る。それと同時に始動を告げるブザーが鳴り、巨大な船がゆつくりと動き出した。それはやがて巨大な

波に揉まれるように、前後に激しく揺れ動く。

「びよおおおー！？」

「うひゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

隣の鴫はめちやくちや楽しそうにしていたけど、俺は生きた心地がしなかった。先頭怖すぎる。誰か助けて。

「……羽依里、大丈夫？」

「船酔いしたっぽい。ヨソロー」

アトラクションから降りた後、俺はその近くに設置されたベンチに突っ伏していた。

まだ頭が前後に揺れてる。乗るんじゃないかった。まさに大後悔時代だ。

「お、俺のことは良いからさ。鴫は楽しんで来いよ」

「え、いいの？」

「ああ、どこかでしろはに会ったら、俺が探していたと伝えてくれ」

「じゃあ、アルティメットちるちるゴーランドに乗ってくる！」

鴫はそう言いながら、半ばスキップしながら人混みへと消えていった。

俺と違って、絶叫マシンでむしろ元気になっている気がした。さすが、冒険大好きなだけある。

「よ、よし、だいぶ落ち着いてきたぞ」

少し休んで気分も良くなってきたので、園内を適当に見て歩くことにした。しろは、どこだろう。

たくさんの親子連れが行き交う中を歩いていると、偶然コーヒークップの近くに差し掛かった。軽快なメロディーに乗せて、カップかくるくると回っている。

「おおー、これはすごいですー！」

聞き覚えのある声があったのでよく見てみると、その中に紬と静久が

いた。カップの回転に合わせて、例のリボンで結われたポニーテールがくるくると回っている。

「あ、パイリ君よー！」

「タカハラさんー！」

その二人も俺に気づいたらしく、笑顔で手を振ってくる。

俺も思わず手を振り返すけど、こういうのつて変に注目されて、少し恥ずかしかったりする。

それにしても、細つてこういうアトラクションがやけに似合うのはなんだろう。本人に言ったら怒りそうだけど、なんとなく子供っぽいせいかな。

「二人とも、楽しそうだなー！」

「楽しいですよー！」

「すごく勢いよく回ってるな！」

「回っていますよー！」

「このままだと、勢いよく飛び出しちゃうんじゃないか!？」

「飛び出しませんよー！」

「君は、ムテキなのー!？」

「ムテキでーす!」

どこか懐かしいやり取りをしながら、回るカップを眺める。うん、勢いよく回ってる静久のカップも大きいし……つて、何考えてるんだろう俺。

「ところで二人とも、しろは見てない!？」

「見てませんよー！」

「そっか……」

どうやら、この辺りには来ていないみたいだ。楽しそうにしている二人にもう一度手を振ってから、俺はその場を離れた。

再び園内を歩いていると、なんだか轟音が聞こえてきた。

見てみると、緩衝材で区切られたコースの中を数台のゴーカートが疾走していた。安全のためにヘルメットもつけていて、なかなかのス

スピード感だ。

「すごいな、ゴーカートまであるのか」

ちやうどレースが終了した所らしい。そのマシンたちがスピードを落としながら、俺の前に停車する。

「あ、羽依里さん!」

そんな中、一位でゴールしたマシンから降りてきたのは、まさかの夏海ちゃんだった。

「夏海ちゃん、楽しんでるみたいだね」

「はい! 楽しんでます!」

ヘルメットを外しながら、これ以上ない笑顔だった。満喫してるみたいで良かった。

「うーむ、エンジンの出力が同じならば、やはり、軽さが重要なのか……? 明らかにスピードで負けている……」

ぶつぶつ言いながら、別のマシンからのみきが降りてきた。

「のみきも乗ってたんだ」

「藍も乗ってるのよー」

そう声が出した方を見ると、コースの外に蒼がいた。

「藍がこういうのやるなんて、意外だな」

「……夏海ちゃんに誘われましたからね。やるからには本気だったんですか」

ゴーカートから降りてこっちにやってきた藍は、ため息交じりにそう言う。どうやら二位でフィニッシュしたらしく、賞品でもらったシルバーメダルチョコを悔しそうにかじっていた。

「そうです! 羽依里さん、私と勝負しませんか?」

「え、勝負!?!」

その時、夏海ちゃんが俺の方を見ながらそう言ってきた。

「……いいですね。負けた方は、罰ゲームとしてバンジージャンプをやることにしましょう」

ちよつと藍、何言ってるの。そんなのやめて。怖すぎる。

「ほ、ほら、もし夏海ちゃんが負けたら、可哀想だしさ」

「えー? 私、負ける気なんてありませんけどー?」

余程自信があるんだろうか。夏海ちゃんは含みのある表情を見せる。

「いや、でもさ……」

「……あれ、もしかして羽依里さん、逃げるんですか？」

「えっ？」

「そうですね。きつと、夏海ちゃんに負けるのが怖いんですよ」

「そりやそうよねー。相手は小学生だし？　もし負けたりなんてした日には……」

……なんだろう。空門姉妹が露骨に煽ってきた。

「ちよ、ちよつと待って。そこまで言うなら、相手になるよ」

その煽りに負けて、俺はつい、そう言ってしまった。罰ゲームは怖いけど、このまま勝負をせずに逃げたと思われるのも男として嫌だし。

「そう言ってくれると思っていました。それでは羽依里さん、私のヘルメットをどうぞ」

俺の返事を待っていたかのように、藍がヘルメットを渡してきた。

「私ももう一度参加していいか？　もう少しで何か掴めそうなんだ」

それに合わせるように、のみきも参加表明してきた。何が掴めそうなんだろう。

「それじゃ、向こうのカウンターで登録を済ませてください。すぐに次のレースが始まりますよ」

藍に言われるがまま、参加登録を済ませる。結局、次のレースの参加者は俺たち3人だけだった。

「それで間もなく、レースを開始します！　参加選手の皆さんは、位置についてくださいー！」

軽く試験運転をした後、3人でスタートラインに並ぶ。

さすがに車を運転したことはないけど、普段からバイクには乗っているし。ゴーカート程度のスピードなら余裕だ。

「この中で最下位だった人がバンドジージャンプですよ。頑張ってくださいね」

藍がコース外からそう言った直後、スタートフラッグが振られた。

いざ勝負だ。

「うう、負けた……」

クリームパンみたいなコースを三週するだけの、シンプルな勝負だったはずなのに。

俺はスタート直後のカーブを曲がり切れず、派手に緩衝材の壁にぶつかり、思いつきり出遅れた。それから持ち直したものの、体重のせいかな全然速度が上がらず、気がつけば周回遅れ。ぶつちぎりの最下位となっていた。

「さあ、罰ゲームですよ」

「バンジージャンプはこつちです！」

「その……鷹原、男を見せるんだ」

「頑張んなさいよー」

その後、皆が背中を押してくれて、バンジージャンプへと案内される。その間の俺は空を仰ぎ見て、必死に現実逃避していた。

「た、高い……！」

そしていざジャンプ台に立ってみると、ものすごい高さだった。あれだけ高く見えた空中サイクリングが、遙か下に見える。

「それでは次の方、レッツバンジー！」

「……ええい！ 朱雀よ、俺に力を！」

そして係員さんに促されるまま、俺は空中へと身を投じた。

直後、本日2回目の絶叫が宇都山ハイランドに響き渡った。

「うぐう……バンバンジー……」

罰ゲームは無事にクリアしたものの、バンジージャンプによって受けた精神ダメージはかなりのもので、その回復にはかなりの時間を要した。その間に、蒼たちはどこかへ行ってしまったみたいだ。

ようやく復活した頃には、園内の時計は11時近くになっていた。ところで、しろはどこに行っただろう。

「むー」

適当に園内を歩いていると、難しい顔をした藍がいた。

「あれ？ 他の皆はどうしたんだ？」

「ああ、別のアトラクションに行ってるんですよ」

そう言いながら藍が見上げているのは、フリーフォールだった。

「すごい高さだな。今度はこれに挑戦するのか？」

バンジージャンプに負けない高さだった。これは怖そうだ。

「挑戦したいのは山々なんですけど、これって別料金なんですよ」

「え、別料金？」

言われてから、近くにある看板を見てみる。身長制限の告知に並んで、フリーパス対象外との注意書きがあった。

「時々あるよな。フリーパス対象外のアトラクション」

「そうなんです。楽しみにしていたのに、普通にお金を支払ったら2000円も取られるんです。全く業腹ですよ」

藍は頭上高くそびえるフリーフォールを見上げながら、腰に両手を当てて憤慨していた。それでもここから離れない辺り、なんとなく諦めきれないみたいだ。

「いや、ちよつと待って。何か書いてあるぞ」

引き続き看板を見ていた俺は、その中に気になる一文を見つけた。

『真夏のカップル応援キャンペーン中！ 男女ペアでチケットを購入された方は、なんと特別料金！ お一人様、500円！』

「はあ?！」

一緒に看板を見ていた藍が、今まで聞いたことのないような声を出した。

「いや、でも、これは……」

そして小声で何か言いながら、俺の顔と看板を交互に見ている。

「……あのさ、せっかく割引があるって言うんだし、藍が乗りたいなら付き合おうか？」

「え、本当ですか？」

俺の言葉に、藍の表情が目に見えて明るくなった。それは嬉しいんだけど、どうして俺はそんなことを口走ったんだろう。絶叫マシン、苦手なのに。

「そ、そうですね。せっかくですし、利用できるものは利用しましょうか」

それって、割引キャンペーンのことだろうか。それとも、俺のことだろうか。

「それじゃ羽依里さん、行きましょう」

「お、おう……」

明らかに雰囲気が変わった藍に戸惑いながら、フリーフォールたもとのチケット売り場へと向かう。

状況が状況だし、二人分の料金は俺が支払うことにした。それにしても、ペアで行くだけで一人1500円引きって、いろいろ問題あるんじゃないだろうか。

「ペアチケットですね。購入ありがとうございます。それでは、ゲートの方まで、お二人で腕を組んでお進みください」
「は？」

俺と藍は揃って口を開けたまま、固まってしまった。

「注意書きにも、ちいさく書いてありましたよ。お気づきになりませんでした？ カップルでしたら、それくらいできますよね？」

係員さんは笑顔だった。これは嵌められた。

「は、羽依里さん、どうするんですか」

藍が顔を赤くして、小声でそう聞いてくる。

どうするって言われても、いつまでもチケット売り場で立ち止まっているわけにもいかない。

「フリーフォールのためだ。少しの辛抱だぞ」

「わ、わかりました」

俺たちは覚悟を決めて、お互いに腕を絡ませる。

「こ、こんな状況、万が一蒼ちゃんに見られでもしたら」

「俺だっけそうだ。こんな状況、しろはに見られたら」

周囲に最大限の警戒をしながら、できるだけ速足で入場口へと向か

う。途中変に緊張していて、足がもつれそうになった。

「それでは、行ってらっしゃーい」

少し順番待ちをした後、決死の覚悟でフリーフォールに乗り込む。速やかに安全ベルトの確認がされ、俺たちの乗った筐体はゆつくりと上昇していった。地上の喧騒がみるみる遠くなっていく。

「す、すごい高さだな」

「……羽依里さん、どうしたんですか。顔が青いですけど」

俺の顔が強張っているのに気づいたんだろうか、隣の藍が心配そうな顔で俺を見る。

「いやその、実は絶叫マシン苦手です」

「そうだったんですか？ それならそう言って、断ってくれば良かったのですのに」

「いや、それだと藍が残念がるだろうし……」

「……まったく、お人よしですね。あ、そろそろ動き出しますから、下を向いていると首を痛めますよ？」

「え、そうなの？」

藍の忠告を受けて、反射的に空を見上げる。次の瞬間、俺たちの乗った筐体が急激な落下を始めた。

「びよおおおおおー！」

「ひゃあー……っ！」

急降下の後に再び急上昇。そしてもう一度落下したと思うと、不意打ちのように途中で止まり、一瞬安心させといてまた落下……文字通り機械に弄ばれ、本日3回目の俺の絶叫が響き渡った。

「うぐぐ……もうゴールしてもいいよね……」

藍と別れた後、俺はフラフラになりながら園内をさまよっていた。絶叫マシン、今日だけで3回目だけど、全然慣れない。

鳴とのパイレーツマシンで前後に揺さぶられた後は、バンジージャンプにフリーフォールと上下に揺さぶられている。三半規管がおか

しくなりそうだ。

「うう……少し休もう」

なかなか目が回るような感覚が抜けないので、俺は自販機で飲み物を買って、適当なベンチに腰を下ろす。

ここは他のベンチと違って、頭上にカラフルなひさしがついていた。これなら多少、暑さもしのげそうだ。

「羽依里、大丈夫ー?」

背もたれに背中を預けてぐったりしていると、前方から声をかけられた。顔だけ上げてみると、蒼がこつちに歩いてきていた。

「あれ、蒼? 他の皆は?」

「鷗からパイレーツマシンに乗ろうって誘われてね。皆行っちゃったのよー」

「きつとすぐに、大後悔時代に突入すると思うぞ」

「へ?」

「いや、なんでもないよ」

「でも、そのパイレーツマシンに静久や紬もついて行っちゃったのよ。めずらしーわよね」

確かに、あの二人が絶叫マシンに乗るイメージないんだけど。

「なんか、水織先輩がすごく乗り気でねー。紬を引っ張って行っちゃったのよねー」

「……わかった。きつとオツパイレーツマシンだからだ」

「え、何?」

「気にしないでくれ。それより、蒼はパイレーツマシンに行かなかったのか?」

「あたしはちよつと、疲れちゃってねー。のみきや夏海ちゃんと一緒に、パスしたのよ」

「あ、その二人も乗らなかったのか」

「一度は行ったんだけど、すぐ戻ってきたし、なんか身長制限に引っかかったって言ってたわねー」

そういえば、あの絶叫マシンは身長制限が高めになっていた気がする。可哀想だけど、こればかりは仕方がない。

「それじゃ、夏海ちゃんたちはどこに？」

「あそこ。ローラスケートで遊んでるわよー」

蒼が指差す先を見ると、少し離れた場所に専用のエリアが設けられていて、その中で夏海ちゃんとのみきがローラースケートをやっていた。

「のみきさん、こつちですよー！」

「野球の時も思ったが、本当に身軽だな……ついていくのが精一杯だぞ……」

他の皆が戻ってくるまでの時間つぶしなんだろうか。係員さんもないし、自由に遊んでいい場所みたいだ。

「あ、このベンチ、涼しーわね」

その様子を眺めていると、蒼が俺の隣に座ってきた。

「ああ、良い感じにひさしがあるからな」

「山の上だけど、さすがにお昼近くなったたら暑いわねー」

無意識だろうけど、右手で胸元を広げながら左手でぱたぱたと風を送っていた。俺は慌てて視線を逸らす。

「夏海ちゃん、元気よねー」

「そうだな。夏の塊って感じだ」

のみきを翻弄している夏海ちゃんを見ながら、蒼がそう言っていた。

なんだろう。ああやって夏を全力で楽しんでいる彼女を見ていると、どこかに忘れた懐かしい気持ちがある気がする。

「藍や鷗と一緒に、ジェットコースターも全部制覇したらしいわよー」

「へえ。それはすごいな……」

……そんな話をしていると、俺と蒼の目の前を一匹の七影蝶が横切った。

「……ええ？」

とつさに飛んできたであろう方向を見やる。すると、今まさに別の七影蝶が夏海ちゃんの左手から飛び出してくるところだった。

「な、なあ。蒼」

「んー？」

俺はとつさに蒼を見るけど、特に気付いていない様子だった。鏡子さんが、蒼やのみきは七影蝶が見えるって言っていた気がするけど。そういえば七影蝶が見える人でも、見える七影蝶に差があるって言ってたっけ。夏海ちゃんと一緒にいるのみきも気づいていないっぽいし、たぶん、この七影蝶は俺にしか見えてない。

……やっぱり夏海ちゃんは、夏の塊なんだ。

夏の……思い出。その欠片の集合体。

今はその欠片を全力で燃やしながら、思いつきり夏を楽しんでいるんだろう。

「あ、パイリ君たち、こんなところにいたのね」

その時、静久たちがこっちにやってきた。どうやらパイレーツマシンを堪能したみたいだ。

「むっぎゅぎゅぎゅ……」

「紬、しっかりして」

いや、約一名が大後悔時代に突入していた。しろはに肩を支えられながら、紬が目を回していた。

「あ、終わったんですね!」

「た、助かったぞ……予想外に疲れてしまった……」

静久たちの姿を確認してか、夏海ちゃんとのみきもローラースケートをやめてこっちにやってきた。

「皆、そろそろいい時間だし、お昼ごはんにしない?」

静久に言われて時計を見る。いつの間にか12時を回っていた。心なしか園内のお客さんが少なくなってきたと思っていたけど、皆食事に行っているらしい。

成り行きで自由行動になったし、お昼の待ち合わせ場所とか決めてなかったから、このタイミングで合流できてよかった。

「ねえ、良一君と天善君がいらないんだけど」

やっぱり遊園地に不釣り合いなスーツケースを持った鷗が、周囲を見渡しながらそう言っていた。

「良一の居場所なら見当がつくけど、天善はどこ行ったんだろうな」

「あ、天善さんならゲームセンターで見かけましたよ」

「え、ゲームセンター?」

その時、夏海ちゃんが思い出したようにそう言っていた。

「いつの間にか卓球のユニフォームに着替えていてですね。『最新式3D卓球マシーン・卓球王への道』とかいうゲームで遊……いえ、トレーニングしてました」

「そ、そうなんだ」

「建物の外まで聞こえていそうな声で『四方八方からピンポン玉が飛んできて、これはすごいトレーニングになるぞ!』と叫んでいましたけど」

夏海ちゃんがラケットを構えるポーズをしながら、そう話す。そんなトレーニングは島じやできないだろうし。天善は天善なりに、遊園地を満喫しているらしい。

「まあ、その二人にもレストランの場所は伝えてありますし、お腹が空けばそのうち来るかもしれません。私たちは先にレストランへ向かいませんか?」

そんな藍の提案に皆が賛成する。確かにお腹も空いたし、二人には悪いけど、先にお昼にさせてもらおう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……うわ、すごい人だ」

レストランに到着してみると、俺たちと同じようにお腹を空かせた人たちであふれかえっていた。

「ちようどお昼時だし、これはしばらく時間がかかりそうねー」

その人混みに圧倒されながら蒼が言う。こここの食事はバイキング形式って話だし、なかなか回転率も悪い感じだ。店員さんもてんやわんやしている。島だどここまでごった返すことなんてないから、なんとなく声をかけるのも憚られるし。

「予約表に名前を書いてくるから、皆は外で待っていて。しばらくすれば人も減るわよ」

静久はそう言いながら、混沌としている店の中へと消えていった。こういう時、年長者の静久は本当に頼りになる。

「……お、皆もまだ飯食ってなかったのか?」

静久がいなくなった直後、俺たちの背後で良一の声が出た。

「ようやく戻ってきたか。まったく、どこをほっつき歩いて……」

声だけで誰が戻ってきたのか察したんだろう。のみきが呆れたような声を出しながら振り返って……目を見開いて固まった。

「りよ、良一お前、その格好は……?」

のみきが驚くのも無理はない。良一はいつの間にかサンバの衣装に着替えていた。上半身は裸同然だし、ものすごく、露出が多い。

「……貴様、公衆の面前でなんて格好をしているんだ?」

すぐに我に返ったのみきは、ハイドログラフェイター改を構える。え、どこに持ってたんだろう。

「まままま待て! 俺はただ、サンバを楽しんでいただけだぞ!」

急に銃口を向けられ、良一は反射的に両手を上げる。

「ついさつき午前の部が終了して、このレストランの前で解散になったんだ! サンバチームの皆と別れたら、ちようどお前らの姿が見えたから、声をかけたんだ!」

良一は必死にそう弁解していた。確かに、良一は純粹にサンバを楽しんでいただけらしい。

「み、皆と一緒にいる時は、せめて上着を着ろ。反射的に撃つてしまいたいぞだ」

状況を理解したのか、のみきはぼつが悪そうにハイドロをしまう。それを見て、良一もいそいそと上着を羽織る。

「めちやくちや爽やかな笑顔だけど、サンバはそんなに楽しかったのか?」

「ああ、合法的に裸になれるんだぜ。天国だよ」

本当に楽しかったんだろう。良一は珍しくサムズアップしてきた。「ブラジルから指導に来てるインストラクターから、素質があるって

褒められてよ。午後からはダンスリーダーをやってくれて頼まれ
ちまった。なんなら、のみきたちも参加しないか？」

「い、いや……せっかくだが、気持ちだけ受け取っておこう」

あのド派手な衣装を自分が着ているところを想像したんだろうか。
のみきが顔を赤くして、目を泳がせていた。男はともかく、女性の衣
装は目のやり場に困りそうだ。

「あ、三谷君も合流したのね！」

その時、レストランの方から静久が戻ってきた。

「とりあえず1人で予約しておいたけど、だいぶ時間がかかりそう
なの」

人数が人数だし、それはしょうがないと思う。どこかで時間をつぶ
さないと。

「そうです。皆さん、どうせならあそこで時間をつぶしをしませんか
？」

「え、あそこ？」

そこで、藍が指差す先を見てみると……レストランからは少し死角
になったような位置に、なんだかおどろおどろしい建物があった。

「スリラーハウス……いわゆるお化け屋敷ですよ。あそこならすぐに
レストランに戻れますし、少し行ってみませんか？」

「まだ時間があるんですしたら、行ってみたいですよ！」

一番に夏海ちゃんがそう賛同していた。他の皆の反応は様々だっ
たけど、時間はつぶさなきやいけない。結局、全員でお化け屋敷へと
向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

全員でお化け屋敷に到着して、係員さんから説明を受ける。

それによると、このアトラクションは二人一組で挑戦するもので、
制限時間の5分以内にクリアできたら景品がもらえるらしい。

そして一度に一組しか入れないけど、怖くて耐えられないと思ったら、スタート時に渡されたボタンを押すとスタッフが助けに来てくれるとのことだった。もしかして、それだけ怖いのかな。

「それでは、挑戦する順番とペアを決めましようか」

いつの間にも用意したのか、藍がこよりを手にそう言う。

「え、くじ引きで決めるの？」

俺はつい、そう口にしていた。せつかくだし、しろはと一緒に行きなかつたんだけど。

「だってそうしないと、羽依里さんは100%しろはちゃんと一緒に行くこうとするでしょう？」

「そ、それはそうだけど」

凶星だった。まあ、それ以外の選択肢はないんだけど。

「ええ……私なんかと行っても、つまらないよ？」

「いや、吊り橋効果ってわけじゃないけど、好感度が上がるかもしれないしや」

……島でやった肝試しの時の反応を見た限り、望み薄かもしれないけど。

「そんなので好感度を上げられても困りますし、ランダムの方が面白いですよ。さあ、くじを引いてください」

そう言いながら、こよりの束を差し出してくる。これは引くしかないさそうだ。

天善がいらないから、ちょうど10人。どんなペアができるだろうか。

くじ引きの結果、鷗と夏海ちゃん、良一とのみき、しろはと蒼、藍と静久のペアができた。ちなみに俺はというと、紬とのペアだった。

さらに別のくじを引いて、挑戦する順番は鷗たちからになった。

「それじゃ、切り込み隊長カモメ！ 先陣を切ってくるよ！」

「はい！ 行ってきます！」

ガラガラとスーツケースを引きながら、鷗と夏海ちゃんがお化け屋

敷の中に消えていった。

そして今更だけど、中に一組しか入れないってことは、俺たちは結局外で待たないといけない。

「まあ、いいけど……」

他の皆は思い思いの場所で、絶叫マシンの感想とかを話していた。絶叫マシンに良い思い出のない俺は会話に入る気が起こらず、ちょうど日陰になっていたお化け屋敷の建物の壁に、何の気なしにもたれかかる。

「……うう、怖いですね」

「なっちゃん、いざとなったら、このスーツケースに入っていからね！」

……その時、中に入ってる鴉たちの声が聞こえた。この建物、構造上壁が薄いのかな。

もしかしたら、攻略のヒントになるような発言があるかもしれない。俺たちの番が来た時のために、よく聞いておこう。なんだかんだで、やるなら制限時間以内にクリアしたいし。

「と、扉があるね」

「どれでしょうか」

二人の言葉からするに、入ってすぐに複数の扉があるらしい。

「こういう時は冒険してみよう！ おっじゃましまーす」

「ひえええー……」

……二人の悲鳴が聞こえた。どうやら、開けた扉の先に何か怖いものがあるらしい。

「こ、今度はなっちゃんが開ける番だよ！」

「わ、わかりました……えい！」

少しの間後、また扉を開ける音がした。

「あ、今度は正解みたいですよ！」

「よーし、先に進もう……！」

そして、段々と二人の声が遠ざかっていった。位置的に、ちよつと離れたのかな。

「……な、なっちゃん！ スーツケース乗って！」

……しばらくして、また声が聞こえ出した。すごく慌ててる感じがするけど、どうしたんだろう。

ガラガラと車輪の音がする。たぶん、何か怖いものがあって、それから逃げるためにスーツケースを押してるんだろう。その車輪の音も、段々と遠ざかっていった。

「……あ、これがその暗証番号じゃないですか？ これであの扉がうみゃー！？」

しばらくすると、また声が聞こえた。というか、暗証番号ってなんだろう。

「お帰りなさいーい」

やがて、笑顔の係員さんに迎えられて鳴と夏海ちゃんが戻ってきた。心なしか、げんなりしてる気がする。

「うう、怖かった……」

「ご飯の前にやるものじゃないですよ……」

ちなみにクリアタイムは6分。惜しくも景品はもらえなかった。

「それじゃ、次は私と蒼だね」

「あははー、行ってくるわねー」

続いて、しろはと蒼がお化け屋敷へと入っていった。

俺は先程と同じように、壁にもたれかかって、耳をそばだてる。

「しろははこういうの、慣れてるのー？」

「……なりかな。うちの……、離れだし」

元々しろはの声が小さ目なせいとか、壁越しではよく聞こえなかつ

た。蒼の声は良く聞こえるけど。

「あたしもお役目で夜の山にはよく入るから、暗いのは慣れてひゃー！？」

話している途中で、蒼の絶叫がこまりました。

「よく見て。絵だよ」

「あ、あははー。そうよねー」

複数の扉に辿り着く前に、なんか怖い絵があるらしい。これは良い情報だ。

その後は例によって距離が離れてしまったらしく、時折蒼の悲鳴が聞こえるくらいで、新しい情報はなかった。

「おかえりなさいーい」

「はふう……」

しばらくして、しろはたちが戻ってきた。タイムは6分30秒。壁越しに聞いていた感じだと、蒼が足を引っ張ってしまったみたいだ。

「ほら蒼、ゴールしたよ。ずっと目指してきたゴールだよ」

しろは、その台詞はいろいろとまずいからやめて。涙腺崩壊しそう。

「よーし、今度は俺たちの番だなー！」

「よりによって良一とペアとはな。スタート前から先が思いやられるぞ」

「それでは、行ってらっしゃーい」

続いて、良一とのみきの二人が係員さんに見送られながら、中に入っていた。犬猿の仲だけど、色々と大丈夫かな。

どんな展開になるのか気になって、俺は壁にもたれかかった。

「おおー、割と本格的だなー」

「そ、そうだな」

「幽霊が出てきたら、その背中のハイドログラディエーター改で撃ち

抜いてくれるんだろー?」

「撃つか! 相手は人間だぞ!」

もし本物の幽霊が現れても、のみきのハイドロ砲の前には尻尾を巻いて逃げ出しそうだ。中の水を聖水にすれば、霊体にも効きそうだし。

「ひゃああっ!?!」

「お、おい!? のみき!? のみきさん!?!」

「す、すまない。そんなつもりはなかったんだが」

「いや、別にいいんだけどよ……急に抱きつかれると、その、心の準備が……」

「うにゃー!?!」

「うおおおおお?! またか!?!」

中盤以降は、二人の叫び声ばかりが聞こえてきた。のみきってもしかして、怖い駄目だったりするんだろうか。

「おかえりなさいーい」

「の、のみきー、大丈夫かー?」

「た、太陽がまぶしいな……この眩しさだけは、忘れなかったぞ……」
しばらくして、二人が戻ってくる。のみきは良一に肩を貸してもらいながらへろへろだった。ちなみにタイムは5分40秒。この二人でも景品ゲットとはならなかった。

「それじゃ、行ってくるわね」

「シズク、ファイトです!」

「ちやちやつと終わらせてきますからね」

「頑張りなさいよー」

のみきたちが続いて、今度は静久と藍のペアが中に入っていった。珍しい組み合わせだけど、この二人ならくしよーでクリアするだろう。

俺はそう考えながら、またまた壁に頭を預ける。

「……ひっ!？」

「お岩さんの絵ね。上手に描けているけど、まだまだ胸が足りないわ」
あ、扉の前にある絵はお岩さんの絵なのか。ところで静久、胸とかそういう問題じゃないと思うんだけど。相変わらずブレない。

「む、昔の人は栄養が足りないことが多かったらしいですし、胸のサイズも小さ目だったんじゃないですか……ひっ!？」

ところで、さつきから小さな悲鳴みたいなのが聞こえるんだけど、これって藍かな。

「……藍ちゃん、さつきから大丈夫?」

「じ、実は小さい頃から蒼ちゃんに『あそこに光る蝶々がいるよ!』とか言われたりして、お化けとか少し苦手なんです」

「あら、そうなのね」

「ほ、他の皆さんには内緒にしておいてくださいね。普段は気づかれないようにしているのよ」

「わかってるわ。私と藍ちゃんだけの秘密よ」

……うん。俺も聞かなかったことにしよう。

「……あら、長い廊下ね。左右にカーテンが下がってるし、これは何かありそうね」

「し、静久さん、見るからに不気味ですし、早く通り過ぎてしまいましょう」

「そうね。私の肩にしつかり掴まってね。怖かったら目をつぶって、心の中でおっぱいと呟くのよ」

「わ、わかりました」

わかっちゃうんだ。もしくは、その辺りの判断ができないくらいの恐怖を味わっているのかな。

「ひえええっ! 怖い怖い怖い! 蒼ちゃん!」

……うん、今の声も聞かなかったことにしよう。なんか、可哀想に

なってきたし。

「おかえりなさい」

「な、なかなかスリリングでしたね」

「楽しかったわー」

しばらくして、二人が戻ってきた。

藍はすまし顔だった。でもよく見ると涙目だし、必死に誤魔化している感じだった。

それでもクリアタイムは6分。なかなか目標タイムをクリアできない。

最後に、いよいよ俺と紬の番がやってきた。

「それでは、いってらっしゃーい」

「タ、タカハラさん、頼りにしていますね」

「あ、ああ。大船に乗ったつもりでいてくれよ」

係員さんからボタンのついた脱出用の機械を受け取り、二人で建物の中へ足を踏み入れる。皆のおかげで色々な情報を得ることができたし、それを最大限に生かさないと。

「うう、なんだか寒気がします」

少し進むと、さっそく少し強めの冷房と恐ろしげな音楽が恐怖心をあおってきた。

紬は俺の隣で不安そうな顔をして、小さく振るえていた。

「紬、怖かったら俺の背中に隠れてもいいからね」

「は、はい」

そう言うが早いか、紬は俺の右手を取って、ぴったりとくっついてきた。ちよつと、紬さん。

突然の行動に驚いたけど、振りほどくわけにもいかないし。このままの体勢で進んでいくことにしよう。

入って最初の角を曲がると、目の前に幽霊の描かれた絵が現れた。これが静久たちの言っていたお岩さんの絵だろう。

「確かに胸は小さいかもだけど……」

「むぎゆ？ 何が小さいんですか？」

「いや、なんでもないよ」

心の声が漏れてしまっていたらしい。適当に誤魔化して、お岩さんの絵を横目に角を曲がる。

「おおー、オキクさんです！」

その先には、井戸から恨めしそうに顔を覗かせる幽霊の絵が飾られていた。

「紬、お菊さんは知ってるんだね」

「はい！ シズクから教えてもらいました！ 確か、パリングルス一枚をつまみ食いしたばかりに、悲しい運命を辿ることになった女性ですね！」

パリングルスが一枚、パリングルスが二枚……ああ、足りないわー……とか言いながら悲しんでる女性が頭に浮かんだ。色々違う気がするけど、別の意味で怖い。

そんなことを考えながら、お菊さんの絵を通り過ぎる。ところで紬、この手の絵は怖くないのかな。

絵を通り過ぎると、目の前に三つの扉が現れた。

「と、扉があります」

「そうだね……どれにしようか」

少なくとも一つの扉の先には、何か怖いものがあるはずだ。先の皆の会話を思い出しても、それ以上のヒントはなかった気がする。

「……よし、こっちだ！」

迷ってる時間が惜しいし、俺は直感で左端の扉を選び、意を決して開ける。

「うわっ!？」

「むぎいーいー!？」

扉が開くと同時に、恐ろしい表情をした血まみれの巨大なクマのぬ

いぐるみが覆いかぶさってきた。

「ちよつと紬、抱きつかないで」

「ううう、このクマのぬいぐるみは怖すぎです……!」

紬は俺の腕にしがみついて震えていた。どうやら、俺の言葉は聞こえていないらしい。なんにしても、この扉はハズレみたいだ。

「それじゃ今度は、こっちの扉を開けてみよう」

結局紬に抱きつかれたまま、俺は隣の扉を恐る恐る開けてみる。

……今度は何も飛び出さず、扉の先には細く長い廊下が続いていた。

「紬、先に進むよ?」

「は、はい……」

扉をくぐって、先へと進む。この廊下にも、何か仕掛けられてそう
だ。左右の黒いカーテンとか不自然すぎる。

……とところで、さっきから左肩を叩かれてる気がする。

「紬、どうしたの?」

「むぎゆ? わたしはこつちですよ?」

俺が振り返ったのと反対方向から紬の声が飛んできた。そりやそ
うか。紬は俺の右腕に抱きついているんだし。

……あれ? じゃあ今、俺の左肩を叩いてるのって誰?

……もう一度見直してみると、カーテンの隙間から真っ黒い手が伸
びて、俺の肩を叩いていた。

「ひえっ!」

「むぎゆー!?!」

それに気づいた俺と紬は、驚きのあまり揃って尻もちをついてしま
う。

同時に、それを合図にしたかのように左右のカーテンの間から無数
の黒い手が飛び出してきた。これは怖い。

「紬、掴まって!」

「は、はい!」

俺はとつさに紬の手を掴んで、廊下の先へ全力疾走する。

無数の手をかいくぐって廊下の突き当りにたどり着くと、そこには

大きな扉があった。

えええ、この扉、赤い手形が無数についてるんだけど。正直、開けたくない。

けど、このままだとあの黒い手の餌食だ。紬は俺が守らないと。

「ええい、れいげんいやちこなれ！」

……半分体当たりするように扉を開けると、部屋全体が赤い照明で照らされた、やけに広い部屋に出た。机やロッカーが乱雑に置かれていて、どうも教室をイメージしているみたいだ。

そして、一番奥にはまたまた扉が見える。

おっかなびつくりとその扉に近づいてみると、プッシュ式の鍵がついていた。どうやら扉を開けるためには、これに四桁の数字を入力して鍵を外す必要があるみたいだ。

「こ、これはなんでしょーか？」

ああ、夏海ちゃんの言っていた『暗証番号』って、そういうことなのか。

「わかった。紬、たぶんこの部屋のどこかに、四桁の暗証番号が隠されていると思うんだ。それを探そう」

「はい！ 番号を見つけて、イッコクも早く脱出しましょう！」

というわけで、二人で手分けしてロッカーや机の中を探してみることにした。

「ひっ!?!」

俺が適当に開けた引き出しには、マネキンの首が入っていた。思いつきり目が合ってしまったって、一瞬思考が停止する。

「むぎゆ？ タカハラさん、どうしました？」

「い、いや。なんでもないよ」

これ以上紬を怖がらせるわけにはいかない。俺はできるだけ大きな声を出さないように努める。

その後も、棚を開けたらおもちゃのクモがびつくり箱の要領で飛び出してきたり、床に謎の液体が仕掛けてあったりしたけど、なんとか耐えることができた。

「おお、ありました！　これですね！」

しばらくして、紬が暗証番号を発見したらしい。メモを手にも、笑顔で立ち上がる。

……その瞬間、俺たちの目の前に二体のゾンビ人形が降ってきた。

「うおおおっ!?!」

「むぎー!?!」

暗証番号を見つけて気が抜けたタイミングだったこともあり、俺たちは完全に不意を突かれてしまった。特に紬は絶叫した後、仰向けにひっくり返ってしまう。

「ちよ、ちよつと紬、しっかり!」

俺は慌てて駆け寄り、そんな紬に声をかける。

「こ、腰が抜けてしまいました……立てません」

余程驚いたんだろう。紬は涙目だった。なんだか、膝も笑ってるみたいだし。

「しょうがないな……よつこらせ」

「むぎゅ!?!」

俺はとっさに紬をお姫様抱っこして、そのまま扉へと向かう。手元の時計を見た限り、急げばギリギリ制限時間内にゴールできる。

紬を抱いた状態のまま、手早く暗証番号を入力して扉を開ける。その先には、再び長い廊下。奥に小さな光が見えるけど、またあの無数の黒い手がうごめいている。

「紬、目をつぶって!　俺が必ず守るから!」

紬にそう告げてから、無数の手の隙間を縫うように駆け抜けて、俺は一気に外へと飛び出した。

「よし、ゴール!」

紬を抱きかかえて、お天道様の下へと飛び出す。ああ、太陽って素晴らしい!

「おかえりなさい。クリアタイムは4分50秒です!」

……残り時間10秒。ギリギリクリアだった。

「おめでとうございます！ それでは、景品をどうぞ！」

そう言う係員さんから、まだ俺に抱きかかえられたままの紬へと景品が手渡される。透明の袋に入っていたけど、大きなお化けのぬいぐるみだった。

「おぉー、さっきのと違って、これはかわいいです！」

「せっかくだし、紬にあげるよ」

「ありがとうございます！ お化けのフーコさんと命名して、大切にします！」

俺の腕の中で、紬は笑顔だった。俺も頑張った甲斐がある。

「ところでその……二人は中で何があったんだ？」

「え？」

ひきつった笑顔のみきにそう言われた。それで冷静になると、俺は紬をお姫様抱っこしたまま、皆の前に飛び出してきたまっていた。皆からの視線がものすごく痛い。

「っ、吊り橋効果……!?!」

「ないから！」

絶望的な表情でそう言うしろはに、俺は紬を下ろしながら必死に弁解する。

「み、皆、これには深い事情があるんだ！」

「へー」

そっけなく言う蒼だけど、笑顔がものすごく怖かった。

「ほ、ほら。紬も説明して」

「その、わたしをタカハラさんが優しくだっこしてくれてですね。必ず守るからと耳元で……」

「ほう」

「やるなあ」

ちよつと紬、そうなるまでの経緯を説明して！ そこだけ抜粋すると、ますます誤解を生んじゃうから！

「……」

しろはが生暖かい目で俺の方を見てくる。しろは、違うんだ。

『……11名でお待ちの水織さまー?』

……その時、レストランの方からマイクでそんな放送がされた。助かった。まさに渡りに船だ。

「み、皆、ちようど順番が回って来たみたいだぞー！ お昼にしようー！」俺はわざとらしくそう言つて、急ぎ足でレストランに向かった。後ろから色々な声が聞こえたけど、全て聞き流すことにした。

「夏海ちゃん、お昼からはプールの方に行つてみましょう?」

「はい！ 楽しみです!」

皆で思い思いにバイキングを堪能していると、静久と夏海ちゃんがそんな話をしているのが聞こえた。そういえば、ウォーター 슬라이ダーのついた大きなレジャープールの看板が出ていた気がする。

それこそ、お化け屋敷での一件はプールの水に流して、午後からも遊園地を満喫したいところだ。

俺はそんなことを考えながら、料理を口に運ぶのだった。

……しろはからの視線が気になって、味なんてほとんどわからなかったけど。

第四十四話・完

第四十五話 8月28日（中編）

昼食を済ませた後、全員でプールに行くことになった。

俺たちは男女に分かれて、備え付けられた更衣室で着替えを済ませる。

「ところで良一、お前は午後からサンバのダンスリーダーをやるんじゃないのか?」

「なにも午後一番ってわけじゃない。皆とプールを楽しむ時間くらいあるぜ」

そうなんだ。あれだけ楽しんでいたし、午後からもすぐに飛び出していくものかと思っていたけど。

「……それより、お前らも気になるんじゃないのか?」

「え、何が?」

「女子の水着だよ。島に住んでいても、水着姿を見る機会は少ないしな」

「今更だな。水着なら、以前皆でビーチバレーした時にも見たじゃないか」

「目の保養になるって話だよ。羽依里もしろはの水着、楽しみじゃないのか?」

「そ、そこはノーコメントで」

「わかってるわかってる。みなまで言うな。シティーボーイ!」

笑顔でそう言いながら、バシバシと俺の肩を叩いてくる。すでに水着に着替え終わった後だし、かなり痛いんだけど。

それにしても、サンバのテンションをそのまま引きずっているんだろうか。良一がいつも以上に饒舌だ。

「ところで天善、自然とラケットを持つてるけど、今から向かう先は卓球場じゃなくてプールだぞ?」

「ああ、わかってるさ」

そう言いながら、颯爽とプールサイドの方へ向かっていった。絶対

わかってないと思う。

ビーチ卓球とか言う競技があったかな……とか考えながら、俺と良一もその天善に続いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、来たわねー」

「どうして男の子の方が女の子より着替えるのが遅いんですか」

「ごめん。その、色々と話しててさ」

三人でプールサイドにやっていると、女性陣はすでに集まっていて、蒼と藍が一番に声をかけてきた。

この姉妹は以前、島の海水浴で着ていた水着と同じパレオを着ている。髪型は揃って三つ編みだ。

「まったくもう、先に行っちゃうところだったですよ！」

腰に手を当ててそう言う夏海ちゃんは、蝶のアクセントのついた水着だった。

島で海水浴をした時には気に留めてなかったけど、あの蝶もちゃんという意味があつたのかもしれない。

「ふふ、夏海ちゃんの水着、可愛いわよね」

その時、静久が俺の隣にやってきて、笑顔でそう言う。全く持ってその通りなんだけど、あまり近づかないでほしい。その、静久の水着姿は迫力がありすぎて、目のやり場に困るし。

「……タカハラさんからヨコシマなオーラを感じます」

そう言いながら俺の方を睨む紬も、珍しく三つ編みだった。

「今日は紬も三つ編みなんだね」

「そうです！ シズクにしてもりました！」

「ええ。紬は髪が長いし、こうやってまとめておいた方がプールの時は楽なのよ」

「ああ、なるほど」

言われてみれば、先の空門姉妹も、向こうにいるしろはや鷗も、髪が長い子は皆揃って三つ編みだった。あの髪型の方が都合が良さだろう。

「それにしても……」

夏海ちゃんにしろは、そして紬と、ワンピースタイプの水着が多い中で、静久や鷗、のみきはビキニタイプの水着だった。

特に、のみきはストライプ模様のビキニ姿だった。着やせするタイプなのか、普段は目立たない胸が妙に強調されている気がするし。

「その……鷹原、そんな目で見られると、すごく恥ずかしいんだが」

「え？ わ、悪い」

無意識に見つめてしまっていたらしい。だって、ビーチバレーの時は水着を着てなかったし、目新しかったんだもの。

「……羽依里、視線がえつちだよ」

しろはにまで、ジト目でそう言われてしまった。心なしか、不機嫌そう。これはもしかして、嫉妬というやつなんだろうか。

「悪かった。じゃあ、しろはだけ見つめてる」

「そ、それはそれで恥ずかしいし！」

だからそう切り替えしておいた。しろはは顔の前で手を振りながら、途端に真っ赤になった。

「……はいはい、夫婦喧嘩は良いですから、どこに行くか決めましょう」

しろはをいじって遊んでいると、藍がため息交じりにそう言って、案内板の方へ向けて歩き出した。それについて歩くと、やけに周囲からの視線を感じた。特に男連中から。

普段はあまり気にしてないけど、やっぱり皆きれいだし。注目を集めているみたいだ。

「へー、プールにもいろいろあるのねー」

「あつちに見えるのがウォータースライダーみたいですね」

空門姉妹を中心に、皆でプールサイドに設置された看板を見ながら

行く先を相談する。

目の前に見える流れるプールの他に、奥の方に遊泳用のプールや子供用プールもあるらしい。ウォータースライダーも気になるけど、午後からは帰りのバスの心配もしなきゃいけないし、できるだけ団体行動しないと。

話し合いの結果、最初は皆で流れるプールに行ってみることにした。

「おお、すごい迫力だね……」

いぎ、流れるプールに到着してみると、それなりに流れがあつて、まるで大きな川のようなだった。ブラジルだけに、アマゾン川をイメージしてるのかな。

そこまで沢山というわけじゃないけど、ちらほらと泳いでいる人もいる。

「うーむ、意外と流れが急だな……」

プールの縁に立っていた良一が顎に手を当てながら、そんなことを言っていた。

「流れが急つて、鳥白島の海に比べたら全然大したことないだろ？」

「……前も言ったが、俺はバタフライしかできない」

そういえば、そんなこと言ってたっけ。確かにバタフライは少しでも波があると疲れるだけだし、流れるプールには向かないかもしれない。

「良一ちゃん、ぶつくさ言っていないで、お先にどうぞ」

「どわあっ!？」

プールに入るのを渋っていた良一の背中を、藍が文字通り押していた。良一は叫び声を残して、プールに落ちていった。うん。良い子の皆は、後ろから急に押ししたりしたら駄目だからね。

「おおー、ミタニさん、早いですね!」

「私たちも続きましょう!」

笑顔でやってきた紬と夏海ちゃんは、大きな浮き輪を持っていた。

「ふたりとも、それどうしたの?」

「はい、向こうで貸してくれました!」

夏海ちゃんが指差す先に、浮き輪の無料レンタルがあった。レンタル水着の文字も見えるし、最悪水着を持ってなくてもプールには入れるみたいだ。

「それでは紬さん、行きましょう!」

「もちろんです! カツパのカワナガレですよ!」

微妙に使い方の違うことわざを口にしながら、二人が浮き輪に乗って、流れに身を任せていった。川下りつてほどじゃないけど、あれはあれで楽しそうだ。

「それじゃ、私たちも入りましょう」

「プールなのに流れてるって、変な感じだね」

そんな二人が続いて、女性陣も次々と流れるプールへと入っていた。

皆楽しそうだし、俺も入ろうかな。

「……うおおおおお! こいつは、すごいトレーニングになるぞ!」

軽く身体に水をかけて慣らしていると、大きな声がした。見てみると、天善が隣にある別のプールに入っていた。

どうやらそのプールも流れるプールみたいだけど、皆が入っているプールとは比べ物にならないくらい流れが速い。まさに激流だった。「うおおおおお!」

天善はその流れに逆らって泳いでいた。確かに流れと逆に泳げばそれだけ負荷がかかって、トレーニングにはなるかもしれないけど。

あのプール、身長制限に加えて、ライフジャケットの着用推奨との注意書きもあるし。天善、大丈夫なんだろうか。

「た、鷹原も一緒にどうだ!? 元水泳部だろう!」

「い、いや。せつかくだけで遠慮しておくよ……」

正直、俺はあそこまで頑張れる気がしないし。皆と一緒に普通の流れるプールで泳ごう。

俺は頑張る天善に静かにサムズアップをして、軽い準備運動の後、プールに飛び込んだ。

「お、おおお!？」

飛び込んですぐに、かなり強い水の流れを感じた。仕組みはよくわからないけど、この流れに身を任せながら泳ぐと、すごく速く泳いでいるような気になってくる。

「おおー、これは楽しいです!」

そのままずっと進んでいくと、紬と夏海ちゃんが乗った浮き輪に追いついた。

「二人とも、お先に!」

俺はそんな二人を颯爽と追い抜いていく。

「さすが羽依里さん、すごく速いですね!」

「元水泳部は伊達じゃないからね! それじゃ!」

一度水面に顔を出してから振り返り、二人に手を振った後、再び泳ぎ始める。

……ほどなくして、見慣れた水着姿が見えてきた。

「よう、しろは」

「え、もう追いついてきたの?」

俺の姿を見つけて、しろはが驚きの表情を見せていた。それにしても、しろはが泳ぐところとか初めて見た気がする。

「しろはって泳げたんだな」

「当たり前だよ。前に、羽依里に教えてもらったし」

「……あれ? そうだっけ」

当然のように言われたけど、俺にはそんな記憶はない。なんかの拍子に、アドバイスしたかな。

「でも羽依里、なんだか生き生きしてるね。水を得た魚みたい」

「よくわからないけど、たまには思いつきり泳ぎたくてさ」

「良いんじゃないかな。それにしても、水に入るのも躊躇ってた羽依里から、そんな言葉が聞けるなんてね」

……確かに。去年の俺からしたら、想像もできない状況だった。

でも、それはきつと全部、しろはたちのおかげだと思う。

「そ、それじゃ、俺はもう少し泳いでみるから」

「うん。他のお客さんにぶつからないように気をつけてね」

「わかってる」

そんなことを考えていたら急に小恥ずかしくなつて、俺は再び水をかく。

しばらく無心で泳いで、ちょうど全長300メートルのプールを一周したところで、休憩を兼ねてプールサイドに上がる。

「くそー、洗濯機で洗われた気分だぜ」

俺が上がると、ほぼ同時に良一もプールから上がってきた。妙に疲れた顔をしているし、変な体勢でプールに落とされたせいで、あまり楽しめなかったらしい。

「いやー、皆楽しそうだねー」

そんな俺たちを、プールサイドに備え付けられたベンチに座つた鷗が笑顔で見ている。

「あれ？ 鷗、お前は泳がないのか？」

「少し入つてみたけど、やっぱり流れが速くて。冷やし過ぎても悪いし」

「あ、そういうことか」

俺の視線はおのずと鷗の白い足に向かう。確か、鷗の病気はあまり体を冷やしちやダメなんだっけ。

「できることなら、浮かべたスーツケースに乗つて思いっきり激流下りを楽しみたいところなんだけど」

本人は病気のことなど気にする様子もなく、あつげらかんとそう続ける。さすがにスーツケースは更衣室に置いてきたみたいだ。

「それにしても羽依里、泳ぐのすごく速いんだね。まさに水を得た魚って感じ」

「それ、同じ言葉をしろはに言われたんだけど」

「おお、私としろしろは以心伝心だね！」

なんかちよつと意味が違う気がするけど……嬉しそうにしてるし、

いいか。

「あ、こんなところにいた」

その時、噂をすればなんとやら……じゃないけど、先にプールから上がっていたらしいしろはがこっちにやってきた。

「……おっと。お邪魔虫は退散するね」

「鳴ちゃん、退散しなくてもいいですよ。ちょうど今から、皆でウォータースライダーに行こうと話していたところですよ」

変に空気を読んだ鳴が立ち上がったタイミングで、他の皆も合流してきた。どうやら、他の皆も一足早くプールから上がっていたらしい。

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ」

その集団の中には、別のプールで激流に逆らって泳いでいた天善の姿もあった。

「ほら天善ちゃん、こんなところで体力を使い果たしてどうするんですか。段々人も増えてきましたし、次に行きますよ」

天善は肩で息をしていたけど、藍に無理矢理連行されていた。なんとなくわかつてはいたけど、島のヒエラルキーが垣間見えるようだった。

でも藍の言う通り、段々と人も増えてきて、流れるプールはまるで芋の子を洗うような状況になってきた。一番暑い時間帯つてのもあるんだろうけど、まだまだ増えそうだし、そろそろ移動することにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

ウォータースライダーに辿り着いてみると、その入り口には長蛇の列ができていた。

俺たちも並んで様子を見てみると、どうやら二人同時に滑れる大型のウォータースライダーらしく、行列は割とスムーズに進んでいっ

た。

「あれ？ 鷗？」

「羽依里？」

「いよいよ俺たちの番が近づいてきた頃、隣を見ると鷗がいた。おかしいな。さつきまでしろはが隣にいたはずなんだけど。進んでいくうちに、列がずれちゃったのかな。」

「それでは次の方、どうぞー」

「そうこうしているうちに、俺たちの順番が回ってきてしまった。どうしよう。」

「……よし、これも何かの縁だし、ここは勇気を出して一緒に滑ろうー！」

「そう言う鷗から、がっしりと腕を掴まれた。たぶんだけど、俺が躊躇しているのを見て、怖がってると思ったんだろうか。パイレーツマシンの前例もあるし。」

「いや、俺は別にウォーターライダーは……」

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

理由を説明するよりも早く、鷗は俺の腕を握ったまま、滑り口に身を投じる。

「ちよつと鷗、せめて手を放……うわあああーっ！」

「おおおーっ！ー！ これ楽しいーっ！」

俺はそのまま、鷗の体重に引っぱられるようにしてウォーターライダーへ身を投じる羽目になった。もみくちゃになりながら猛スピードで滑り降りて、下のプールへと落下する。

「げほごほ、思いつきり水飲んだ……」

「どう？ 二人一緒なら、怖くなかったでしょ？」

「え？ まあ……そうだな。スリル満点だったけど」

「なら良かったよー」

文句の一つでも行ってやろうかと思ったけど、鷗の笑顔を見ていたらそれも野暮な気がしてきた。まあ、楽しかったのは楽しかったし。

「……ふたりとも、どいてくれー！」

「え!?!」

その時、上から声がして、俺と鴎はウォータースライダーを振り返る。すると目の前に、良一と天善の姿が迫っていた。

「ひえー!?!」

「どわああ!?!」

鴎は間一髪避けたみたいだけど、スライダーに背中を向けていた俺は反応が遅れて、避けきれなかった。思いつきり良一から背中を蹴られてしまった。

「いててて」

「おう、悪い悪い」

そう言う割には悪びれる様子もなく、良一は頭をかきながら笑っていた。

「良一たちも滑ってきたのか」

「ああ。すぐに他の皆も滑ってくるぞ」

「なに!?!」

俺は再びウォータースライダーの方をしてみる。

「えっ、なんでまだ下にいるの?」

「お前たち、どいてくれ!」

……直後、しろはとのみきが滑ってきた。

「ちよっ、さすがに滑らせるペースが早すぎ……ぶわっ!?!」

良一は必死に逃げようとしたけど間に合わず、先に滑り降りてきたのみきに思いつきり体当たりを食らわされていた。

俺も急いでこの場を離れようと思ったけど、今から背中を向けて逃げても良一の二の舞になりかねない。かくなる上は。

「よし。来い、しろは!」

「え? えええ!?!」

俺は敢えて逃げずに、滑り落ちてきたしろはをうまく抱き留めた。ナイスキャッチだ。

「も、もう。いつまでも下に居たら危ないよ」

俺に身体を預けたまま、しろはは顔を赤くしていた。なんか色々柔らかいし、これは彼氏の特権だと思う。

「……まったく、こんな所まで来てラブラブカップルっぷりをアピールしないでください」

「ほらほらどきなさいよー!」

そうこうしているうちに、今度は空門姉妹が滑ってきた。

さすがにこれ以上ぶつけられたくもないので、俺たちは急いでウォーターライダーから離れた。

と言うか、上にいる係員さんも出口に人がいないのをきちんと確認してから次の人を滑らせてほしい。たくさん人が並んでいるし、それも難しいのかもしれないけど。

「ひゃあああー!?!」

……ちなみに蒼は着水した時、勢い余って水着のブラがずれてしまったらしい。すぐさましろはが視界を隠してくれたので、俺には何も見えなかったけど。ここは喜ぶべきだったんだろうか。

「さあ紬、覚悟を決めていくわよ!」

「はい! イチレンタクシヨーです!」

空門姉妹に続いて、静久と紬が滑り降りてきた。しつかりと手を繋いでいたらしく、同時に着水して大きな水しぶきが上がる。

「それにしても、これはなかなか爽快だな」

「そうだね。こればかりは島にないしね」

俺が率直な感想を口にする、しろはがウォーターライダーを見上げながら、そう返してくれた。

「でもさ、皆で学校のプールにウォーターライダー作ったことあったよな」

「え? あったかな?」

「あれ? なかったけ」

自然にそう口にしたけど、しろはは知らないという顔をした。確かに、島の皆と一緒に夏を過ごすのは今年が初めてのはずだ。

「……テレビか何かのを見て、勘違いしたのかも」

これもまた、鏡子さんの言っていた『消えた世界』とやらの記憶な

んだろう。

俺はそう考えるようにして、しろはと並んでウォーターライダーを見上げる。

……でもその記憶の中には、島の皆とは別にもう一人小さな女の子がいたような。おぼろげにそんな感じがするだけで、具体的なことは何も思い出せないけど。

「おかしーさん！ 滑るよー！」

その時、上から夏海ちゃんの声がした。

「最後になってしまいましたし、皆さん、ちゃんと見ててくださいね！」

ちようど人が途切れたんだろうか、夏海ちゃんが一人でウォーターライダーの上に立っていた。

「うん、ちゃんと見てるよ」

「うひゃー……！」

その直後、夏海ちゃんが勢いをつけて、滑り口に身を投じる。しばらくすると、歓声とともにプールへと滑り降りてきた。

「えへへ、気持ちいいですねー」

浮いてきた夏海ちゃんは満面の笑みを浮かべたまま、しろはの方へと寄っていく。

「あの、しろはさん、私ともう一度ウォーターライダーを滑ってもらえませんか？」

「え、私と？」

「はい！ 良い感じに人も減ってきましたし、そこまで並ばなくても滑れると思うんです。お願いします！」

「そ、それは別に構わないけど……」

「ありがとうございます！ それじゃ、さっそくお願いします！」

頷いたしろはは、そのまま引つ張られるようにウォーターライダーへと向かっていった。あの感じを見ると、まるで親子みたいだな。

夏海ちゃんはその後、紬や鷗とも一緒にウォーターライダーを満喫していた。俺は近くに置かれたベンチに座って、その様子を眺めて

いた。

『レジャープールをお楽しみの皆様へ、お知らせいたします』
満足したらしい夏海ちゃんを加えて、皆でプールサイドで休んでいると、突然放送が流れた。

『14時より、ウォーターバトルトーナメントを開催いたします。参加を希望される方は、受付までお越しください』
『何かイベントがあるんですかね?』

放送を聞いた夏海ちゃんは興味津々と言った様子だった。もしかして、チケットにも書かれていたウォーターバトルってこれのことかな。

「夏海ちゃん、気になる?」

「はい。少し気になります」

「それじゃ、説明だけでも聞きに行ってみようか」

「はい!」

「……お二人とも、ちょっと待ってください。何やら楽しそうな匂いがしますね」

「抜け駆けは許さないわよー」

俺と夏海ちゃんが立ち上がると同時、そう言っただけで空門姉妹も立ち上がった。

「私たちも少し気になるわね。紬、行ってみない?」

「はい! 気になります!」

結局静久と紬も加わり、その場の全員で説明を聞きに行くことになった。

プールエリアの端の方に、それらしい受付があったので、そこにいた係員さんに話を聞いてみる。

「それでは、ご説明させていただきます。このウォーターバトルトーナメントは男性1名、女性4名の、計5人一組で戦うトーナメント形

式の水鉄砲大会になります。この水鉄砲を使って相手チームを妨害しながら、お互いに相手のチームフラッグを取り合うのが目的となります」

そう話す係員さんの前には二種類の水鉄砲が置かれていた。一つはよく見る奴だけど、もう片方はやけにゴツイ形をしている。

「水鉄砲による被弾回数制限はないので、いかに相手を妨害しつつ、自分たちは素早く相手チームの陣地に攻め込み、フラッグを奪えるかが重要になります」

「あのー、参加費用とかは？」

「ゲームへの参加費は無料で、優勝、および準優勝のチームには賞品が贈られます」

鳴の問いに笑顔で返した係員さんが示す先には、この宇都山ハイランドのグッズに加えて、ひときわ立派な額縁の入ったポスターが置かれていた。赤い髪の女性のポスターだけど、どこかで見たような。

「あ、あのポスターは……！」

その時、夏海ちゃんがそう声をあげていた。よくわからないけど、参加費無料の割には景品が豪華な気がする。

「現在、7チームの参加が決まっています。残り1チーム参加可能ですが、いかがされますか？」

係員さんにそう言われて、俺たちは思い悩む。まだ時間には余裕があるし、島で水鉄砲大会をやったこともあるから、それなりに自信はあるけど……。

「あの……私、できたら皆さんと参加したいです」

その時、夏海ちゃんがおずおずと言った様子でそう告げる。

「いいわよー。せっかくのイベントだしね」

「そう言うと思ってましたよ」

「うん、面白そうー！」

夏海ちゃんの発言を待っていたように、皆が笑顔で了解してくれる。

「それじゃ、エントリーします」

俺もそんな皆の様子を見てから、係員さんにそう伝える。

「ありがとうございます。それでは、より具体的な説明に移らせていただきますね」

係員さんはそう言うと、一枚の紙を手渡ししてくれ、ホワイトボードを引っ張り出してきた。

「各チームには、このハンドガン型の水鉄砲が4丁、ライフル型の水鉄砲が1丁、それぞれ貸し出されます」

そう言って、さつき見せてくれたのと同じ水鉄砲を取り出す。ゴツいと思っていたこれは、ライフル型らしい。いかにも威力がありそうな水鉄砲だ。

「この水鉄砲に加えて、1試合につき5個、水風船をお渡しします。これも好きに相手の妨害に使っていただいて構いません」

係員さんは手のひらサイズの水風船を見せてくれた。球数制限があるし、イメージは手榴弾みたいな感じなんだろう。

「それら以外での妨害行為は禁止となっています。公平を期すため、ゴーグルの着用も禁止ですので、ご注意ください」

確かに、ゴーグルとか持つてない人とかもいるだろうし。島でやった水鉄砲大会と違って被弾制限がないのなら、相手の動きを止めるには必然的に顔を狙うしかない。理にかなった判断だった。

「次に、試合会場の説明ですが」

続いて示されたホワイトボードには簡単な図が描いてあって、長方形のフィールドの上と下に旗のマークが描かれていた。

「各チームフラッグの位置はお互いの陣地の一番奥で固定になります。また、試合開始時のメンバー配置は自由ですが、初期配置は自分たちの陣地内に限られます。なお、ライフル型の水鉄砲を持った選手はスナイパー役となり、自陣から出ることができないルールなので、お気をつけください」

なるほど。持つてる水鉄砲の威力が高い分、スナイパーは移動可能な範囲に限られるってことか。試合会場には遮蔽物もなさそうだし、選手の初期位置も重要そうだな。

「そして勝ち進んだ場合、試合ごとにメンバー交代が可能です。ただし、1チームに男性は1名のみというルールを忘れないでください

ね」

「わかりました」

「それでは、こちらの用紙に代表者のお名前をお願いします」

係員さんからの説明は以上だった。俺は促されるがまま、紙に必要な事項を書き込む。大体のルールは把握できたし、武器となる水鉄砲を受け取った後は、参加メンバーを決めることにした。

「まずは夏海ちゃんは参加確定でいいよね」

「はい！ 望むところですよ！」

握りこぶしを作って気合を入れる夏海ちゃんを中心に、全員で輪になってあれやこれやと話し合う。

「次に、チームに1人は入れないといけない男性枠なんだけど……あれ？」

その点について良一や天善と話し合おうと思い、その姿を探すけど……どこにもいなかった。あれ？ ウォーターライダーの時にはいたはずなのに。

「天善ちゃんは『卓球が俺を呼んでいる！』とか叫んでゲームセンターの方に向かっていきましたよ」

「え、そうなの」

そんな俺の様子を見て、藍が思い出したようにそう言ってきた。

「せっかく水織さんと二人でウォータースライダーを滑れるように取り計らってあげたんですが、逃げ出してしまいました。意気地なしですよね」

いや藍、天善にいきなりそれは無理だと思う。思わず卓球に逃げてしまった天善の気持ちも分かる。

「良一はそろそろサンバの時間だって言って、プールから上がっていったわよー。あつちはあつちで大事みたいだしねー」

そういえば、良一もそんな用事もあるって言ってたっけ。プールに夢中になっていて、すっかり忘れていた。

でもそうなるど、ここにいる男は俺だけだし、必然的に参加することになりそうだ。

「じゃあ、男性枠は俺で確定だよな……残るは3人か」

ある意味、ここまでは予定調和だ。試合ごとにメンバーを交代しても良いとは言われているけど、次の試合に進めなければ元も子もないし。

「後、この大きな水鉄砲を扱える人が欲しいですよね」

夏海ちゃんがスナイパー用の水鉄砲を持ち上げながらそう言う。本当に大きくて、夏海ちゃんだと持つのも大変そうだ。

「そうだね……」

俺は残ったメンバーの顔を見る。この中で水鉄砲の扱いに慣れている人物と言えば……。

「……やっぱり、うちのチームのスナイパーはのみきしかいないな」

「なに、私か!？」

のみきは驚いていたけど、適任だと思う。鉄塔から良一を狙う姿は、まさにスナイパーのそれだし。

「いいんじゃないかな。のみきが適任だと思うよ」

「そ、そうか……? しろはがそう言うのなら、やってみてもいいが……」

のみきはそう言いながら、スナイパー用の水鉄砲を夏海ちゃんから受け取る。やっぱり、ものすごく様になっていた。

これで夏海ちゃんと俺、そしてのみきの参加が決まった。

「それで、残り2人なんだけど……」

「羽依里、私やりたい!」

そこで手を挙げたのは鷗だった。

「そう言ってくれるのは嬉しいんだけど……鷗、大丈夫なのか?」

「メンバー交代OKなんだよね? それなら一試合は大丈夫! 冷やし過ぎなきや平気だし!」

「……わかった。よろしくな、鷗」

「ありがとう! 羽依里イズいいやつ!」

こういうゲームは大好きだろうし、本人がやりたいって言うんなら、断る義理もないと思う。

「あとね、しろしろも参加!」

「え、私も!？」

その次に、鷗から唐突に名前を出されたしろはが目を丸くしていた。

「しろしろ、お願い! 一試合だけでいいから!」

「しろはさん、お願いします!」

手を合わせて頼み込む鷗に、これは好機とばかりに夏海ちゃんも便乗していた。

「な、夏海ちゃんまで……や、やってもいいけど、あまり期待はしないでね」

しろははそう言いながら、水鉄砲を手にする。なんだか押し切る形になつちやつたけど、これで試合のメンバーが固まった。

「しろしろ、ありがとう!」

「しろはさん、ありがとうございます!」

「さあ、喜んでばかりもられないぞ。まずは、作戦を考えなきゃ」

それからウォーターバトルトーナメントが始まるまでの短い時間で、俺たちは様々な作戦を練つたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

『さあ、夏も残すところわずかとなった! だが、宇都山ハイランドの夏はまだまだ終わらない! 今日もレッツ! ウォーターバトル!』
やがて14時になると、サングラスをかけた司会者の男性がマイクを片手にノリノリで口上を述べ始める。ギャラリーも続々と集まってきたし、なんだか盛り上がってきた。

『それでは、さっそく一回戦を始めるぜ! バトルスタート!』
先のホワイトボードに書かれていた通り、広いプールを二つに区切って、二試合同時に試合が始まった。

最初は俺たちとは山が違うチーム同士の試合らしく、思わぬ時間が出来てしまった。俺は水鉄砲の水をチェックしたりしながら、周囲の

状況を見てみる。

この試合会場、元は小さい子向けの浅いプールみたいだ。すごく広いけど、水量の調節がされていて、俺のすねの半分くらいまでしか水がない。でも、現在行われている試合を見た限り、微妙な水の抵抗があるみたいで、なかなか素早くは動けないみたいだ。

そして予想通り、お互いに相手の妨害に水鉄砲で顔を狙っていた。やっぱり、あれが一番効率的だもんな。

また、水風船とスナイパーの役割がかなり重要らしい。特にスナイパーの持つ大型の水鉄砲は、女の子が受けると立っていられない程の威力があるみたいだ。

「のみき、その水鉄砲、なかなかの威力みたいだけど」

「ハイドログラフダイエーター改に比べれば半分ほどの出力だ。その割に重くて取り回しが難しい。素材以前に、内部構造から見直した方が良さそうだ」

のみきがスナイパー用の水鉄砲を試し撃ちしながら、そんなことを言っていた。試合前だと言うのに、既にスナイパーの顔だ。

「それより鷹原、作戦の最終確認をしたいんだが」

「え？ ああ、わかった。皆、ちよつと集まってくれ」

のみきに促されて、俺たちは最後の作戦会議を始めた。トーナメント表を見た限り、三回勝てれば優勝だ。のみきを中心にして、皆で頑張ろう。

『それでは一回戦第三試合！ 鳥白島少年団の皆！ いぎ、プールの中へ！』

反対の山の試合が終わった後、司会の男性にそう呼ばれながら、俺たちはプールへと足を踏み入れる。

俺たちの初期位置としては、一番に守るべきチームフラッグの前に最も攻撃力のあるのみきが陣取り、スナイパー用の水鉄砲を構える。鳴がその左側で補佐につき、俺と夏海ちゃん、そしてしろはは最前線に横並びになり、攻撃を担当する。

『対するは星ノ海学園生徒会！ どんな勝負になるか見ものだぁー！』

そう呼ばれた相手チームの陣形は、俺たちから見て左側に金髪の少女と黒髪の少女、更に青髪で眼鏡をかけた青年の三人が固まるように立ち、それぞれが水鉄砲を構えていた。

そしてフラッグの前には銀髪の少女が仁王立ちし、そこを挟んだ右端にライフル型の水鉄砲を持った女の子がいた。あの子がスナイパーなのかな。見た感じ、夏海ちゃんと同じくらいの年に見えるんだけど。

「……羽依里、相手はどう攻めてくるのかな」

「あの配置だし、たぶん左側から切り崩してくるスタイルだと思う」

「こつちはどう攻めるんですか？」

「右側は手薄になると思うけど、スナイパーがいるし……作戦通りでいいと思うよ。中央突破しよう」

「わかりました！」

「しろはは試合が始まったら、すぐに俺の背後に隠れて、のみきの射撃ルートを確保してあげてね」

「うん」

『……それでは、バトルスタート！』

俺たちがそう作戦を確認したタイミングで、声高らかに試合開始が宣言され、会場が一気に盛り上がる。

「先手必勝でござるー！」

先の打ち合わせ通り、しろはが俺の背後に入ったと同時に……相手のスナイパーがライフルを構え、俺たちの方を狙い撃ってきた。

「うわっとー！」

「ひえっ!?!」

幸い精度が低くて命中はしなかったけど、俺と夏海ちゃんの間の水面が一直線に切り裂かれていた。あまりの威力に、思わず足を止めてしまう。

「す、すごい威力ですね」

夏海ちゃんと同感だ。あれだけ離れてるのに。

「……相手の足が止まったつす！ 黒羽さんたち、突撃！」

その遠距離射撃を皮切りに、相手チームが動き出した。予想通り、左側から攻めてくるらしく、銀髪の少女の指示を受けて、金髪の少女や青髪の青年が動き出す。

「鷹原の読み通りだな……いくぞ！」

その動きを見て、のみきも水鉄砲を薙ぎ払うようにして放つ。それによって、左側から進撃してくる三人をまとめて足止めする。

「あの距離から撃ってくるんすか!？」

相手スナイパーより、明らかに標的までの距離がある中を正確に撃ち抜いた。さすがのみきだ。

「うー、これじゃ進めませんよ！」

「予想以上に強烈ですね……ゆさりんを守る盾になりたいところですが、眼鏡も吹き飛ばされてしまいましたし、これは動くに動きません」

どうやら、男性枠の彼がその逞しい筋肉を盾にしてのみきの攻撃に耐えているみたいだけど、残る二人はその青年の背後に隠れるのが精いっぱい、動けそうにない。

「よし、今のうちに、俺たちも進むぞ！」

「はいー！」

のみきが相手攻撃陣を抑えてくれている間に、俺たち三人も中央突破を仕掛ける。

「……こうなれば、私が相手の注意をひきつけます。お二人はその間に一気に攻め上がってください！」

「ちよつと！ それは奥の手だったはずつすけど!？」

「今がその時です。行きますよ！」

そんな俺たちの動きを見てか、青年が何やら行動を起こすみたいだ。俺たちはその様子を気にしつつも、ゆっくりと前進する。

「くれぐれも相手に当てないように気を付けてくださいよ！ 反則になるつすから！」

「わかっています！ ゆさりん、いのーちーちー！」

……次の瞬間、青年が猛スピードで俺たちの陣地へ突っ込んできた。

「へ!?!」

青年は一直線に俺たちの陣地を切り裂き、猛スピードのままプールサイドに設置された柵に頭から突っ込んでいった。いや、なにあれ。予想外すぎるんだけど。

「え、えええ!?… ちよつとあれなに!?!」

柵に突っ込んで、力なくぶら下がる青年を鷗が驚愕の表情で見つめていた。俺たちも思わず振り返って柵の方に釘付けになってたし、無理もない。

「とうかあの、大丈夫なのかな。完全に気絶しちゃってるみたいだけど」

「……心配無用です。あの人はああ見えて頑丈つすから」

「え?」

そう声かして正面に向き直ると、さっきまでフラッグの近くにいたはずの銀髪の少女が目の前にいた。

「てりやあー!」

「ぶわっ!?!」

……次の瞬間、顔面に水風船をぶつけられた。思いつきり虚を突かれ、俺は背中から倒れる。

「ちよ、ちよつと羽依里!」

「お、重いですよー!」

そして立ち位置の関係で、すぐ後ろにいたしろはと夏海ちゃんも一緒に巻き込んでしまった。

「ふっふっふ。三人くつついてるのが仇になったつすね。例え何人が相手でも、ZHIEENDのサイン入りポスターは渡さないつすよ!」

そう言いながら、少女は少しだけ後退して間合いを取る。その手には水鉄砲と水風船がしっかりと握られていた。

「結果的にこつちは一人少なくなっちゃいましたけど、私が三人引き付けている分、人数的にはイーブンつす!」

少女は勝ち誇った顔をしていた。俺たちは急いで起き上がりながら、周囲の状況を確認する。

「こ、こつち来るなー!」

同時に、鷗の悲痛な声が聞こえた。自分たちの陣地の方を振り返ってみると、先程まで青年の背後に隠れていた少女二人が二手に分かれ、既に俺たちの陣地深くへと侵入していた。

「くっ……やはり、市販品は重すぎて、小回りが利かないな……これはまずいぞ……」

のみきも必死に迎撃していたけど、ああやって二手に分けられたら、さすがに対処しきれないみたいだ。

「ひーん。来るなー！ うりやうりやー！」

そんなのみきの隣に立って、鷗も水鉄砲で応戦してくれているけど、被弾制限がない分、じわりじわりと攻め込まれている。このままだと、俺たちのフラッグが取られるのは時間の問題だ。

……こうなったら何が何でも、相手より先にフラッグを取るしかない。

そんな考えに至り、改めて目の前の少女に向き直って水鉄砲を構えた、その時。

「援護射撃でござるー！」

「いてててて！」

相手スナイパーからの強烈な水弾が右方向から飛来して、俺の脇腹を直撃した。思わず、うずくまってしまいうくらい痛い。

「もう一発受けるでござるー！」

ところで、ござるってなんだろう……いててて！

俺の動きを止めるためなのか、絶え間なく撃ってくる。これは動けない。どうしよう。

「……羽依里さん、そのまましゃがんでいてください！」

その時、頭上から夏海ちゃんの声がして、同時に背中を踏む感覚があった。

「えーい！」

「んぎゃー！」

次の瞬間、俺の背中を踏み台に跳躍したらしい夏海ちゃんが投げた水風船が銀髪少女の顔を捉える。

落下時の力も計算に入れた、強力な一撃だった。その直撃をくらっ

た少女はそのまま仰向けに倒れる。

「今ですしろはさん！ 相手のフラッグを狙ってください！」

「う、うん！」

夏海ちゃんにそう言われて、しろはが倒れた少女の脇を抜ける。

「い、行かせないのですー！」

その状況を見て、スナイパーが慌ててしろはに照準を合わせる。俺も素早く起き上がり、しろはとスナイパーの間に立ちふさがって盾になる。

「……えい！」

『試合終了ー！ー！ このバトル、烏白鳥少年団の勝利だー！ー！』

結局、そのまましろはが相手のフラッグを奪い取って勝負あり。その数秒後に俺たちのフラッグも相手に取られてしまったけど、僅かな差で俺たちの勝利となった。

「な、なんとか、勝てたな……」

「う、うん……」

「大して動いてないのに、へとへとだよ……」

試合が終わってプールサイドに戻るとすぐに、俺たちはその場に座り込んでしまった。特に、しろはと鷗の疲労度が高そうだ。

このゲーム、試合時間は5分もかからないんだけど、多少なりとも足元に水があるせいか、足の疲労感が半端ない。これなら試合ごとにメンバー交代できるっていうルールも納得かも。

「皆、お疲れさまー」

「白熱した戦いでしたね」

空門姉妹がそう言いながら、俺たちの労をねぎらってくれた。

「差し入れに、スポーツドリンクを買ってきたわ」

「はい！ どうぞー！」

笑顔の静久と紬から、冷えたスポーツドリンクを受け取る。喉を鳴らしながらそれを流し込むと、全身に水分が染みわたっていく感じがした。

「……おかげで元気が出ました！ これで次の試合も頑張れます！」
そう言つて夏海ちゃんが握りこぶしを作りながら立ち上がる。彼女はまだまだいけそうな感じだ。

「そうだ。次の試合なんだけど、鷗としろはの代わりに、紬と静久が出てみない?」

「むぎゆ? わたしたちですか?」

「そう。夏海ちゃんはまだまだ元気そうだし、男性枠の俺やスナイパー役のみきは固定せざるを得ないけど、鷗やしろとは交代してあげて欲しいんだ。駄目かな」

「……わかりました! それでは、ナツミさんと一緒に頑張ります!」
そう言つて、紬はがっしと夏海ちゃんと握手を交わす。

「ふふ、紬もやる気になつているし、そういう事なら私も頑張らせてもらうわね」

「ズクズク、よろしくね!」

静久も笑顔で了承してくれ、鷗から水鉄砲を受け取っていた。フレッシユな二人を加えたし、次の試合も頑張ろう。

『それでは準決勝! 鳥白島少年団と、チームSSSの戦いだ! 決勝戦への切符を掴むのはどっちだあー!?!』

それから数分後。司会の男性の口上が響く中、俺たちは再びプールへと足を踏み入れる。

初戦を踏まえて、今回はより攻撃的に行くことにした。このゲーム、一度守りに入ってしまうと圧倒的に不利だつてことが分かつたし。

そんなわけで、今回はのみきを比較的对手陣地に近い中央に配置し、中央突破を図る俺や夏海ちゃんを援護してもらえようにした。新たに参加した静久と紬は、ペアで右サイドからの攻撃してもらふことにした。二人に一発ずつ水風船も持たせてあるし、頑張つてほしい。

対する相手チームはというと、白いベレー帽をかぶったリーダー格

の少女が陣地中央に陣取り、その右斜め後ろにピンク髪の少女と銀髪の少女が並ぶ。

彼女たちは位置的に、紬たちとぶつかりそうだ。

そして、そんな二人からベレー帽の少女を挟んで反対側の位置に、黒髪の女性とスナイパーらしい少年の姿があった。相手チームは唯一の男性枠をスナイパーに使うみたいだ。なんとなく、勿体無いような気がしないでもないけど。

「大山ア！ 男の代表として出てやがるんだから、少しは役に立てよ！ 最悪戦えなくなっても、ゆりつぺの盾くらいにはなりやがれ！」
「スナイパーなんだから、そう簡単に動けないんだし……無茶言わないでよ……」

観客の中からの声に、怯えるようにしてそう言っていた。会話を聞く感じ、知り合いっぽいけど。

『それでは、準決勝第一試合！ バトルスタート！』

やがて高らかに試合開始が宣言され、準決勝が始まった。

「それじゃ行くわよ！ オペレーション・スプラッシュ！」

試合開始と同時に、相手チームのリーダーがそう号令を出す。同時にスナイパーを除く三人が一斉に動き始めた。

「静久に紬、右側の二人をお願いできるか？」

「任せて！ 紬は私の後ろに隠れていてね！」

「はいー！」

「そろそろ射程圏内ですよ！ 会長、撃て撃てー！」

ピンクと銀色の髪をした二人の少女は、射程圏内に入るとすぐに一斉射撃を開始した。

「甘いわ！ おっぱいバリアーよ！」

しかし、静久がそう言っ胸を張ると、なぜか相手の攻撃が全てその胸に集まっっていく。

「こ、これは一体……？」

「うう、何故かあのおっぱいオバケみたいなサイズの胸から目が離せない……！ 攻撃がそっちに行ってしまう……！」

相手二人はそんなことを言っていた。確かにあの子たちの胸のサイズはお世辞にも大きいとは言えないけど……って、何を考えてるんだ俺。

「今は試合に集中しろ、鷹原羽依里！」

ぱんつと両頬を叩いて気合いを入れてから、正面に向き直る。今のうちに進まないよ。

「……あさはかなり」

「え？」

……気がつくのと、さつきまで遠くにいたはずの黒髪の女性が真横にいた。いつの間にも移動してきたんだろう。

「ぶわっ!!」

「わぶっ!!」

そして、すれ違いざまに水風船をぶつけられた。不意を突かれた俺たちがその場に座り込んだ隙に、女性は俺たちを追い抜いていった。

「しまったー！」

俺は慌てて起き上がるけど、その女性は予想以上の速度で移動していく。まるで水に浮いているみたいだ。

……いや、実際に浮いてる!?

「あれって、水蜘蛛の術ってやつですかね。初めて見ました」

少し遅れて起き上がった夏海ちゃんが驚いた表情でそう言っていた。確かに、女性は足に何か丸いものをつけて、水に浮かびながら滑るように移動している。

「えええ、あんなやり方ってOKなの？」

「別に、ゴーグル以外は装備の制限とか聞いてないし。相手の妨害に使わなければ、椎名さんの忍術もセーフでしょ？」

思わず口にした俺の問いに、相手のリーダーが自信満々にそう答えてくれた。ところで、忍術って何。

「……悪いが、そう易々とフラッグを取らせはしないぞー！」

黒髪の女性は俺と夏海ちゃんを抜き去り、高速でフラッグへ向かっていただけ……そこに最後の砦であるのみきが立ちふさがり、強烈な水弾を食らわせる。

「……くっ」

のみきの水弾を受けた女性はいとも簡単にバランスを崩し、転倒してしまった。どうやら水蜘蛛を足に固定している分、動きも制限されるらしい。その後もやつと起き上がっては、のみぎに転ばされるといふ状況が繰り返されていたし、あそこはのみきに任せておけば良さそうだ。

「さすがのみきさんですね!」

後ろの方の状況を見ながら、夏海ちゃんが俺の隣に並んでくる。

一瞬ヒヤツとしたけど、どうやら大丈夫そうだ。大分前進できたし、後は眼前のベレー帽をかぶった少女を抜けば、フラッグは目の前だ。

「羽依里さん、数で勝ってますし、このまま一気に攻め……わぎゃ!」

次の瞬間、夏海ちゃんの姿が消えた。

「……あれ?」

どうやらスナイパーに撃ち抜かれたらしく、後方に吹き飛ばされていた。

「夏海ちゃん、大丈夫?」

「だ、大丈夫です!」

夏海ちゃんは頭を振りながら素早く起き上がる。完全に相手スナイパーの存在を忘れていた。だって、全然存在感が無いんだもの。

「夏海ちゃん、俺の背後に隠れて!」

「はい!」

夏海ちゃんが俺の背中に滑り込んだ直後、すぐ近くを水弾が通り過ぎていった。

「これは、どうしようかな……」

俺は夏海ちゃんを背中に庇った状態で、一度周囲の状況を確認してみる。

静久と紬は向こうで二人の少女と交戦していて、じわじわと前進してはいるものの、高望みはできない。のみきは例の忍術少女を足止めし続けているし、自陣からは出られないから攻撃に転ずる余裕はなさ

そうだ。そして俺と夏海ちゃんも相手スナイパーに狙われていて動けない。膠着状態というやつだった。

「……よし、この手で行こう」

考えてみても、今この状況で動けるのは、相手リーダーと夏海ちゃんくらいだった。

「……夏海ちゃん、これ」

俺は手に持っていた水風船を、こっそりと夏海ちゃんに渡す。

「……わかりました。やってみます」

どうやら俺の意図が伝わったらしく、夏海ちゃんは両手に水風船を持って、タイミングを計る。

これで夏海ちゃんが持つ水風船は二発。これでなんとか突破口を開いて欲しい。

「……えいー」

一瞬の間を置いて、俺の背後から投げ放たれた水風船が一直線に相手リーダーへと向かう。これである少女も何かしら行動を起こすはずだ。

「ふっふっふ。甘いわよー」

……しかし、夏海ちゃんの投げた水風船は相手に命中する前に破裂してしまった。

「え？」

一瞬驚いたけど、どうやら相手のスナイパーの作業らしい。野球経験がある夏海ちゃんが投げた水風船を空中で打ち抜くなんて、すごい腕だった。

「……だから言ったでしょ。オペレーション・スプラッシュ（水しぶき作戦）よー」

「わふ!?」

「ぐわっ!?」

次の瞬間、リーダーの少女が動き出した。俺と夏海ちゃんの顔面に水風船をお見舞いした後、怯んだ俺たちの横を軽やかに抜けていく。

「くそ、やられたー」

滴り落ちる水をぬぐって振り返るけど、時すでに遅し。リーダーの

少女はそのまま一直線に俺たちのフラッグへと向かっていく。

「くっ、二人目だど!？」

相手リーダーの進軍に気づいたのみきが応戦してくれるけど、黒髪の女性と合わせて二人同時に相手にするのは分が悪そうで、じわじわとフラッグとの距離を詰められていく。

こうなると俺たちも急いで攻めなきゃいけないのに、相手のスナイパーのせいで動けない。作戦失敗してしまった夏海ちゃんも意気消沈しているし、どうすればいいんだろう。

「……必殺! おっばいボムよ!」

「ぎゃあああつ!」

「……やられたわ」

その時、静久たちに持たせていた二発の水風船が炸裂した。

「……紬、今よ!」

「はい! チョットツモーションです!」

静久の攻撃によつて二人が怯んでいる隙に、紬がその間を抜けて飛び出してきた。

「うわあ、まずい!」

紬がフラッグに近づいているのを見て、スナイパー役の少年が急いで紬に照準を合わせる。紬、危ない!

「……紬さんに手出しはさせません!」

それを見た瞬間、夏海ちゃんの瞳に闘志が宿った。

そして手元に残っていた最後の水風船を握りしめ、投球モーションに入る。

「えーい!」

「うひゃあつ!」

即座に投げ放たれた一球は、先程とは比べ物にならない速度でスナイパーの顔面を直撃した。さすが、鳥白島チャーハンズのエースピッチャーだ。

その結果、紬を狙ったスナイパーの攻撃は大きく外れた。

「むぎゅー!」

その間に、紬が猛然とダッシュして相手のフラッグを奪取。初戦に続いてギリギリだったけど、俺たちの勝利だった。

『試合終了ー！ー！ このバトル、烏白島少年団の勝利だー！ー！』

「大山センパイ、小学生の子にやられてどうするんですか！」

「うう、面目ない……」

「椎名さんも自信満々で出撃して、あの体たらくですよ！」

「無念なり……」

「ユイ、喧嘩ごしに言わないの」

「だって、優勝したらあのZHIENDのサインがもらえたんですよ！ 悔しいに決まってるじゃないですかー！」

そんな相手チームのやりとりを聞いていると、しろはがやってきた。

「……手に汗握る勝負だったね。皆、決勝進出おめでとう」

「ありがとうございます！ シズクとナツミさんのおかげです！」

「ふふ、皆で力を合わせての勝利ね」

「はい！ 私たちのチームワークはさいきよーです！」

「ムテキでーす！」

紬と夏海ちゃんが笑顔でハイタッチをかわしていた。そんな微笑ましい光景を見てみると、鳴や空門姉妹もこっちにやってきた。

「なっちゃんも、ナイスピッチング！」

「ありがとうございます！」

「のみきもお疲れさまー」

「ああ、スナイパーは体力的に楽かと思いきや、なかなか息つく暇もないな。予想以上に大変だぞ」

「じゃあ、のみきも一本いっとく？」

そう言って蒼が栄養ドリンクを差し出していた。のみきはお礼を言いながらそれを受け取り、ごくごくと飲んでいった。

「水織さんも、ナイスおっぱいでした」

「ありがとうございます。最高の褒め言葉ね」

蒼が続いて、藍が初参加の静久をねぎらっていた。距離が離れていたので、たから良く見えなかったけど、おっぱいバリアとかすごかったみたいだし。

「それにしても、なかなかクーパー靱帯が疲れちゃったわね」
「なら次の決勝戦、紬や静久の代わりに二人が出てみないか？」

静久のあの身体を張った戦い方では連戦は厳しいだろうと思いい、俺は空門姉妹にそう声をかけてみた。

「へっ？ あたしと藍が？」

「そう。せっかくだし、二人にも参加して欲しいんだけど」

「えーっと……どうしようかしら。藍は？」

一瞬悩んだような顔をして、蒼はすぐに姉の顔を見る。

「私は蒼ちゃんが参加するなら一緒に参加しますよ」

「そうねー。それじゃ、やれるだけやってみようかしら」

「蒼、頼りにしてるよ。それで、藍も良いのか？」

「もちろんです。藍に二言はありませんよ」

「ありがとう二人とも。それじゃ、決勝戦の作戦だけ……」

決勝戦のメンバーも決まったところで、俺たちは残された時間を使って最後の作戦会議を行ったのだった。

第四十五話・完

第四十六話 8月28日（後編）

『さあ、本日のウォーターバトルトーナメントもいよいよ決勝戦！
栄光を手にするのはどちらのチームだー！?』

会場内に試合前の口上が響いている。本日最後の試合ということもあり、盛り上がりは最高潮だ。

『まず最初に決戦の舞台上上がるのは、いくつもの接戦を制してここまでやってきた鳥白島少年団！ その強さは本物だー！!』

沢山の声援に迎えられて、まずは俺たちが決勝の舞台に立つ。

ちなみに決勝戦の俺たちの配置は、準決勝と同じように自陣中央のみきを置き、最前線に俺と夏海ちゃんが縦一列に並ぶ形だ。この位置なら、試合状況に応じて攻めにも守りにも、どちらにも動けるし。

そして空門姉妹は二人一緒に左端で待機してもらい、タイミングを見て攻撃を仕掛けてもらう手はずになっている。

『さあ、続いて舞台上に登場するのは、ここまで圧倒的な力で勝ち上がってきたリトルバスターズだー！!』

……ちよつと待って。今、ものすごく聞き慣れた単語が聞こえた気がしたんだけど。

「……おいおい。マジかよ」

直後、驚いた表情を浮かべながら、一人の青年がプールに入ってきた。どう見ても、恭介だった。

「聞き覚えのあるチーム名だとは思っていたが、羽依里たちだったとはな」

「そ、それはこっちの台詞だよ。まさか、こんなところでまた出会えるなんて思わなかった」

「あいちゃん、あおちゃん、やはー」

「……ふむ。同じ夏に二回会うとはな。何か運命めいたものを感じる

ぞ」

恭介に続いて、葉留佳に来ヶ谷さん、鈴といつたメンバーが続々とプールに入ってくる。一番奥の金髪の子以外、見事に見慣れた顔ばかりだった。

「え、なんで恭介さんたちがいるの!?!」

「おお、まさかの全員集合だね」

どうやら、観客席にいたしろはや鷗もリトルバスターズの存在に気がついたらしい。揃って驚きの声をあげていた。

「あら、あそこにいるのはパイ友のゆいちゃんね」

「ぐは……水織女史、パイ友は良いが、ゆいちゃんはやめろと……」

……パイ友って何だろう。すごく気になるけど、ここは下手にツツコまないほうが良さそうだ。

「ありや、良一や天善はいねえのか? せっかくだし、なんとかスクワットと一緒にやりたかったんだけどよ」

「イノハラさん、残念ながらあの二人はちよつとヤボヨーです!」

「つむちゃんにかもちゃん、おひさしぶりー」

「やつほー、こまりん!」

観客席の方からも、続々と聞き覚えのある声が聞こえてくる。どうやら試合に参加しないメンバー同士で合流したみたいだ。

「ようし、それじゃ、皆で応援しましよー! リトルバスターズ、島白島少年団、どっちも頑張つてー!」

「がんばってくたさーい!」

しばらくして、小毬さんやクドを中心にして合同応援団が結成される。ほんの数日間、島で一緒の時間を過ごしたただけなのに。まるで旧知の仲のように受け入れてくれていた。

『えーつと、さつきから話を聞いていると、彼らは知り合いなのか!?!』

状況を見て、司会の男性がそう言葉を紡ぐ。

「まあ、俺としても久しぶりの再会を素直に喜び合いたいところだが……ここからは真剣勝負だ。せっかく、リベンジのチャンスがやってきたんだからな」

リベンジというのは、恐らく野球のことだろう。恭介はそう言いな

がら水鉄砲を構える。その仕草にアロハシャツ姿がやけに似合っていた。

「よーし、お前ら、準備はいいか!？」

少しの間を置いて、相手陣地の中央に立つ恭介がそう確認する。いつの間にかリトルバスターズの皆もプールの中に散開していて、俺と夏海ちゃんの正面に恭介。その背後に鈴がいる。

俺たちから見て左側、空門姉妹と対峙する位置に葉留佳と来ヶ谷さんが縦に並んでいて、最後の金髪の……恐らくスナイパーと思われる子は、俺たちから見て右側の一番端に陣取っている。

こうやって見ると、そうそうたる顔ぶれだ。各チームに男性は一人というルールがあつて良かった。恭介に加えて真人や謙吾まで出てこられたら、まず勝ち目はなかっただろうし。

「……皆、相手は強敵だけど、頑張ろう!？」

そう仲間たちを鼓舞して、士気を上げる。運動能力の高い空門姉妹が入つて、俺たちもベストメンバーだ。ここまで勝ち上がってきた自負もあるし、負けるわけにはいかない。

『……それでは決勝戦! バトルスタート!』

大きな歓声とともに、決勝戦の幕が上がった。

「よーし、あいちゃん、あおちゃん、覚悟——!」

その直後、葉留佳が水鉄砲を手に空門姉妹に突進していった。単身飛び込んでいくとか、何か作戦でもあるんだろうか。

「来ましたよ。蒼ちゃん、集中攻撃です」

「りよーかい! うりやうりやー!」

「ぎやあああ——! あぶぶぶぶ……!」

……葉留佳は勢いよく飛び込んだのは来たものの、そのまま空門姉妹にボコボコにされていた。あれ? 何かの作戦じゃなかったのかな。

「あ、姉御! 早く援護射撃を……!」

大量の水弾を浴びながら、葉留佳がそう言つて後ろを振り返る。しかし、そこには誰も居なかった。

「つて、いねえー！？」

「……おや。そういえば、そんな作戦だったな。おねーさん、忘れていたよ」

くると水鉄砲を手のひらで弄びながら、来ヶ谷さんは余裕顔だった。というか、スタート位置から動いていない。

「えええー！ー！ 二人同時にあいちゃんたちを攻める作戦だったじゃないですか！ 何をのんきにあぶぶぶぶぶ……！ー」

思わず批判の声をあげた葉留佳だったが、空門姉妹は息の合った連携で絶え間なく水弾を浴びせる。さすがだった。

「くっそー！ー！ こうなったら！おさげでいふえんすー！ー」

次の瞬間、葉留佳が自分の髪を顔に巻き始めた。何をしてるんだろう。

「今一度説明しよう！ おさげデیفエンスとは！ー」

「蒼ちゃん、集中攻撃です」

「オツケー！ー」

「はるちんのトレードマークであるおさげを顔に巻き付けることで、ゴーグルの代わりにあぶぶぶぶぶ……！ー」

何やら説明を始めたけど、空門姉妹はそんなのおかまいなしに攻撃を続ける。葉留佳はもう、全身ずぶ濡れだ。

「うわああああー！ーん！ 濡れた髪の毛が顔に張り付いて、前が見えなーい！ー」

そして、そう言いながらプールの中をのたうち回る。いや、あれだけ髪が長いんだから、あなることは予想できたと思うんだけど。他の皆みたいにも、三つ編みにすればいいのに。

「……やれやれ。見ていられんな」

遠巻きにその一方的な戦いを見ていた来ヶ谷さんが、ゆっくりと葉留佳の方に近づいていく。どうやら、選手交代みたいだ。

「その状態ではなにもできないだろう。葉留佳君、君の水鉄砲を貸せ」

「……姉御、お願いしやすー！ー」

ひよいつと放り投げられた水鉄砲を、来ヶ谷さんが空中で受け取る。あれつてもしかして、二丁拳銃つてやつじゃないだろうか。

「ちよ、ちよつと待つてください。水鉄砲は一人一丁でしょう？ 二丁拳銃は反則じゃないんですか!？」

その来ヶ谷さんの装備を見て、藍が堪らず抗議の声をあげる。

「…………ふむ。各チームには4丁のハンドガン型と1丁のライフル型の水鉄砲が与えられるというルールは聞いているが、別に1人1丁しか装備できないというのは聞いていないぞ？」

『あ、そうです！ チーム内の所持数さえ守っていれば、個人でいくつ水鉄砲を装備しても構いません!』

藍と来ヶ谷さんのやりとりを聞いてか、司会の男性がそう補足してくれた。言われれば確かに、1人1丁とは言ってなかった気がする。

「つまりはそういうことらしいな。まあ、もちろん武器を他人に渡せば、今の葉留佳君のように丸腰になってしまいうわけだが」

「ふぬぬぬ…………」

そんな葉留佳は自分の髪の毛と未だ格闘していた。もはや、丸腰云々の問題じゃない気がする。

「というわけで、可愛い双子ちゃんはおねーさんが断罪してやろう」

次の瞬間、来ヶ谷さんの二丁拳銃が火を…………いや、水を噴く。

「あぶぶぶぶぶぶ」

「フハハハハハハ」

それぞれ左右の水鉄砲から絶え間なく顔を狙い撃ちされ、二人が同じ反応をしながら圧倒される。

「…………わひゃっ!？」

やがてその攻撃に耐えられなくなったのか、姉妹揃ってその場に倒れ込んでしまった。あの水鉄砲、本当に俺たちと同じなのかな。威力がまるで違う気がするんだけど。

「来ヶ谷さん、それ以上の狼藉は許さないぞー!」

その時、あまりに一方的な展開を見かねてか、のみきが援護射撃を行う。

「…………おっと」

来ヶ谷さんはそれに気づき、僅かに後退して水弾を回避する。ようやく雨のような攻撃が止んだ。

「ふたりとも、大丈夫か!？」

「な、なんとかねー」

「一方的にやられてしまいました。相手が悪いですね」

かなり離れた場所から来ヶ谷さんに水鉄砲の銃口を向けたまま、のみきが空門姉妹を気遣う。

「来ヶ谷さんの相手は私に任せて、お前たちは相手のフラッグを狙うんだー!」

「わ、わかったわー!」

のみきがそう言うと、姉妹が顔をぬぐいながら立ち上がる。そしてタイミングを合わせ、一気に来ヶ谷さんの両サイドを抜けていった。「……ほう。この水の中でなかなかの瞬発力だな。おねーさん、驚いたよ」

水しぶきをあげながら無人のフラッグへと駆けていく二人を見ながら、来ヶ谷さんが感心したように言う。あの二人、さすがの身体能力だ。

「ちよ、ちよつと姉御――! あいちゃんたちを行かせて良かったんですか?」

「ああ。相手の守りが減ったと思えばいい。おかげでこっちも、のみき君を抜きさえすればフラッグまで一直線だしな」

髪の毛をほどいて、やつとこさ起き上がった葉留佳に片方の水鉄砲を返しながら、来ヶ谷さんがそう言う。

「さすが姉御ですネ。数的優位も確保し……でええええー!?!」

余裕顔で来ヶ谷さんと話していた葉留佳の元へ、のみきの強烈な水弾が飛んできた。葉留佳はその直撃を受け、仰向けにひっくり返る。「何やら勝った気にいるようだが、水鉄砲の射程はまだまだ私の方に分がある。相手が二人でも、私たちのフラッグに近づかせはしないぞ」

「フ……私との勝負を選んだこと、後悔させてやろう」

そう言いながら走り出した来ヶ谷さんは、ものすごいスピードでのみきとの距離を詰めていく。なんだろうあれ。まるで水の上を走っているみたいだ。

「え、ビーチサンダル!？」

その足元をよく見てみると、なんとビーチサンダルを履いていた。あれで浮力を得て、水の中でも素早く動いているらしかった。水蜘蛛がOKなくらいだし、ビーチサンダルもOKなんだろう。

それにしても、準決勝の水蜘蛛といい、今回のビーチサンダルといい、皆、ルールの抜け道を探すのがうますぎる。

「……羽依里、隣ばかり気にしてちやいけないぜ」

「え……ぶわっ!？」

左側の攻防にばかり気を取られていたら、目の前の恭介から顔面に水鉄砲攻撃を食らわされた。

「くそっ、夏海ちゃん、一旦下がろう!」

「はい!」

現状、リトルバスターズのフラッグを狙うのは左サイドを突破した空門姉妹に任せの方が良さそうだし。俺たちは守りに徹しよう。

俺たちはじわりじわり後退し、のみきのすぐ近くまで下がる。

「夏海ちゃん、のみきを援護してあげて!」

「わかりました! 来ヶ谷さん、覚悟してください! えい! えい!」

「フ、遅いぞ夏海君」

俺の背後に隠れていた夏海ちゃんが、手に持っていた二つの水風船を立て続けに投げるけど、ビーチサンダルを履いた来ヶ谷さんは素早い動きでそれを回避する。標的を失った水風船はそのままプールサイドのコンクリートに当たり、空しく弾ける。

「な、なんで避けれるんですか?」

「イリユージョンだ」

のみきの攻撃も全く堪えている様子もないし、どうなってるんだろう。

でも、このまま来ヶ谷さんを足止めし続けていれば、空門姉妹がフラッグを奪ってくれるはず……。

「ひゃあっ!？」

「わぶっ!？」

そう思っていた矢先、相手フラッグに向かっていた空門姉妹が盛大に転んだ。見た感じ、相手のスナイパーにやられたみたいだ。

「ようやくあたしの射程に入ってくれたし、ここから先には進ませないわ!」

スナイパー役の女の子が陣取る場所から、空門姉妹のいる地点までは結構な距離があるのに、そこから正確に攻撃していた。かなりの腕前らしい。

……ところで、あの子は誰だろう。先日、リトルバスターズが島にやってきた時には、一緒に居なかったはずだけど。

「紹介するぜ。新入りの朱鷺戸だ」

恭介が俺たちから視線を外さずに、親指をスナイパーの方に向けながら言う。

「あなたたちに恨みはないけど、なんだかんだで理樹くんと一緒に出られなかったのが悔しいのよ! その腹いせなのよ! 滑稽でしょ? 滑稽よね!?! 笑いなさいよ! 笑えばいいわ! あーっはっはっはっは!」

「ひゃああああ!?!」

「わわわわ!?!」

理由がよくわからないけど、朱鷺戸と呼ばれた少女はまくし立てながら空門姉妹へ怒涛の攻撃を見舞う。あの状況だと、あの二人はとても動けそうにない。

このままだとジリ貧だし、ここはリスクを冒してでも攻撃の手を増やすしかない。三人がかりになれば、あのスナイパーでも止めきれないだろうし。

「……夏海ちゃん、今から俺が隙を作るから、その間に恭介たちの横を抜けて、相手フラッグに向かって走ってほしいんだ」

「わ、わかりました。やってみます」

「……うん。お願いね」

夏海ちゃんが頷いてくれたのを確認して、俺は手にしていた水鉄砲を真上に投げ放つ。

「……!?!」

目の前にいた棗兄妹は思わずその水鉄砲の方に目が行ってしまおう。それを確認した俺は、隠し持っていた水風船を恭介の顔面へと投げつける。

「ぐはっ!?!」

その攻撃で完全に虚を突かれた恭介は、そのまま顔を押しさえながらしやがみ込む。

「ごめん恭介。でも、これも勝負だからさ。夏海ちゃん、走って!」

「はい!」

そのタイミングを見て飛び出した夏海ちゃんが二人の横をすり抜けた……その時。

「……悪いが羽依里、ここまでフラッグに近づいた時点で、俺達の勝ちだ」

「え?」

しやがみ込んだ体勢のまま、恭介がそう言う。

「……さあ、跳べ、鈴!」

「……まかせろ。きよーすけ、おまえのぎせいは忘れん!」

そう言うが早いか、鈴はしやがみ込んだ恭介の背中に足をかける。

「え、ちよつと、まさか」

止める間もなく、鈴は恭介を踏み台にして大きく跳躍。俺やのみきの頭上を軽々と跳び越え、まるで猫のように空中で一回転した後、綺麗にフラッグの前に着水した。

「な、なに!?!」

一瞬で防衛網を突破され、のみきも驚愕の表情を見せていた。鈴の運動能力を甘く見ていたわけじゃないんだけど、この行動は読めなかった。

「く、くそ!」

俺は鈴を止めようと即座に振り返って……自分の手に何も持っていないことに気づいた。そうだった。俺の水鉄砲は恭介たちの気を引くために手放してしまったんだ。

隣のみきは持っている水鉄砲が大型なためか、急な方向転換ができずにいるし、一度前に飛び出してしまった夏海ちゃんも戻れそうにない。これは、万事休すだ。

「……悪いが、コールドゲームだ」

『試合終了——！ 本日のウォーターバトルトーナメントの優勝チームは、リトルバスターズ！』

……直後、鈴が俺たちのフラッグを奪い取り、リトルバスターズの勝利が宣告された。優勢に試合を進めていたはずなんだけど、最後の最後でひっくり返されてしまった。

『……鳥白島少年団の皆もナイスファイトだったぞ！ 会場の皆、彼らに惜しみない拍手を！』

間髪入れずに、割れんばかりの拍手が俺達に送られた。

悔しいような恥ずかしいような、それでいて嬉しいような。複雑な気持ちの中、ウォーターバトルトーナメントは幕を閉じたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

表彰式が済むと、恭介たちリトルバスターズの皆は足早に宇都山ハイランドを後にしていった。どうやら彼らは送迎バスじゃなく、別の手段で帰るらしい。もう少しゆっくり話をしたかったんだけど、こればかりは仕方ない。

ちなみに準優勝の賞品として、宇都山ハイランドのグッズやお土産をもらった。マグカップやマスコットキーホルダーはわかるけど、敢闘賞として夏海ちゃんが受け取っていたブラジルの湯つてなんだろう。

その後、疲れ切った俺たちはプールから上がり、着替えを終えてカ

フェスペースにやってきていた。

送迎バスの時間まで、ここで飲み物でも飲みながらまったりと過ごそう……ということになったんだけど……。

「うろう、悔しいったら悔しいです！」

「なつちゃん、気持ちわかるよー。飲んで忘れよう？」

夏海ちゃんがすごく悔しそうにトロピカルジュースをヤケ飲みしていた。

鴫はそんな夏海ちゃんと同じ丸テーブルについて、彼女をなだめながらボトルのジュースをコップに継ぎ足してあげていた。口には出してなかったけど、やっぱり夏海ちゃん、そのなんとかいうバンドのファンだったのかな。

「でも、夏海ちゃんが悔しがる気持ちも分かるかな。もう少しで勝てそうだったもんね」

その様子を見ながら、俺としろは少し離れた丸テーブルに向かい合って座っていた。頭上にはヤシの葉を模した屋根が日陰を作っていて、良い感じに涼しい。

「本当だよ。あのスナイパーが誤算だった」

てつきり、佳奈多とかがスナイパーをやってくるんだと思っていたら、まさかの新入りだなんて。空門姉妹が完全に封じられるとは思わなかった。

「けど、リトルバスターズの皆と再会できるなんて思わなかったね」

「そうだよな。唐突過ぎて何も話せなかったよ。水鉄砲大会が終わったら、すぐに帰っちゃったしさ」

「恭介さんも島であれだけ感動的な別れ方をしたし、改めて話をするのが恥ずかしかったのかもね」

「そうなのかなあ……」

「……おまたせしました。ヤシの実ジュースでございます」

「えっ？」

……その時、俺たちの前に、ストローが二つ刺さった大きなヤシの実が運ばれてきた。

「あの、注文してませんけど」

「あちらのお客様からです」

ウェイターさんが示す先を見ると、その席には空門姉妹が座っていて、藍が俺たちの方に親指を立てていた。

啞然としていると、手本を示すように蒼とヤシの実ジュースを飲み始めた。藍、めちやくちや幸せそうな顔してるんだけど。俺たちもやらなきゃいけないんだろうか。

「……しろは、そのさ」

「やらないし！ 恥ずか死ぬし！」

しろはも空門姉妹を見て悟ったらしく、顔を赤くしたままストローを一本引っこ抜いて、投げ捨ててしまった。いくら恥ずかしいからって、そこまでしなくても。

「じゃあ、しろはが一人で飲んで良いよ……」

俺はそう言って、二人のちようど真ん中に置かれていたヤシの実をしろはの方に押しやる。ずっしりと重い。

「ええ……でも」

「せっかく藍が注文してくれたんだしさ。これ、メニュー表を見たら800円もするし、残したらもったいないよ」

「……わ、わかった。喉は乾いてるし、少しもらうね」

そう言って、残ったストローを口にくわえる。その様子をじつと見ていたらまた何か言われそうな気がしたので、俺は視線をずらす。

「おおー、シズクのよりおつきいです！」

「さすがに、ヤシの実には勝てないわね」

偶然向けた視線の先では、紬と静久が意味深な会話をしながら一緒にヤシの実ジュースを飲んでいた。

「……ねえ、羽依里」

「え？」

何とも言えない気持ちで紬たちを見てみると、しろはから声をかけられた。慌てて顔を戻すと、目の前にヤシの実ジュースがあった。

「さすがに一人じゃ飲みきれないから。あげる」

「え？ ああ、それじゃ遠慮なく」

しろはからストローを回してもらって、俺もヤシの実ジュースを飲んでみる。うん。トロピカルで美味しい。

「残ってるの、全部飲んでいいからね」

「お、おう……」

笑顔でそう言われたら断れない。頑張って飲んだけど、値段が値段なだけあって結構な量のジュースが入っていた。帰りのバスの中でトイレに行きたくならないといいけど。

「うぶ。飲み過ぎた……」

「……そんなに頑張って飲まなくてもよかったのに」

「いや、しろはにはあ言った手前、残すわけにもいかなかったからさ」
そう言いながら、水っ腹を気にしながら椅子にもたれる。その拍子に、向こうでそびえ立つ観覧車が見えた。

「……しろは、帰りのバスの時間まで後どれくらい？」

「え？ 後三十分くらいだと思うけど」

「じゃあさ、最後に二人だけで観覧車乗らない？」

「観覧車？」

「そう。今からなら、バスにも間に合うしさ。駄目かな」

「いい、けど……」

「なら、急ごう」

俺は代金を支払うのもそこそこに、しろはの手を取る。

そして皆に見つからないように、こつそりとカフェスペースを抜け出して観覧車へと向かったのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それでは、行ってらっしゃい」

係員さんに見送られて、観覧車のゴンドラがゆっくりと上昇してい

く。しばしの空中散歩だ。

宇都山ハイランドの観覧車はフリーパスが適応されず別料金だったけど、しろはのためなら気にならない。

「あ。見て羽依里、ずっと海の向こうまで見えるよ」

「おお、本当だな」

「この遊園地は山の上にあるし、ここからなら鳥白島まで見えるかもね」

座席にしろはと並んで座って、小窓から海を眺める。さすがに遠いのか鳥白島は見えなかったけど、本当に良い眺めだった。

「あのさ……しろは」

「なに？」

「……俺、この夏をしろはと一緒に過ごせて良かった。色々あったけどさ。楽しい夏休みだったよな」

やがて観覧車が頂上に近づいた頃、俺は呼吸を整えてから、そう切り出した。

「……うん。私も楽しかったよ」

「それに……一緒にデートもできたしさ」

「ぶっ」

これは予想外の話題だったんだろうか。しろはが噴出していた。

「そ、それでさ……この前のデートの時、できなかったし、その……」

「え、なに？」

そこまで言いかけて、言いよどむ。だけど、ここで諦めるわけにはいかない。勇気を出せ、鷹原羽依里。

「えつと、ひ、ひと夏に、一回くらい……その……しろはと、キスしたい」

「え、ええ、ええ……」

……いい、言ってしまった。たぶん、俺の顔は今、真っ赤になってると思う。

「……そ、そんなの、恥ずかしいし……」

しろはも顔を紅潮させて、視線を泳がせていた。

「こ、これまで何回もその、してるしさ……」

「きよ、去年の冬と、今年の春の二回だけだし！ ひ、人をキス魔みたいには言わないで！」

大声でそう言っていた。ここが観覧車の中で、本当に良かった。

「……あ、もしかして、そのために観覧車乗ったの？」

「……うん」

「……わざわざ、別料金まで払って？」

「……そう。しろはと二人つきりになりたくてさ」

「……」

うわ、ものすごい目で見られてる気がする。こ、これは無理かも。

「しろは、ごめん。やっぱり……」

「……い、いい、よ……」

「……え、いいの？」

しろはの口から出た言葉に、俺は自分の耳を疑ってしまった。

「な、何度も言わせないで。や、優しくしてね」

そう言って、戸惑いながらも目を閉じる。

「そ、それじゃ……」

俺は高まる胸の鼓動を必死に抑えながら、しろはの肩に優しく手を添えて、ゆっくりと唇を近づけていく。

「……」

目の前のしろはは、火が出るんじゃないかってくらい顔を赤くしているし、その唇は小さく震えてる気がする。

……あ、あまり見続けても悪いし、俺も目を閉じよう。

……そう思った矢先。視界の隅に隣のゴンドラが見えた。

「……!？」

……そのゴンドラには、何故か蒼と藍が乗っていた。

蒼は顔を真っ赤にして固まっているし、藍はカメラのようなものを構えていた。明らかに、見られている。

いやいやいや、ちよつと待って。さすがにこの状況でキスできるほど、俺の肝は据わっていない。

「……羽依里？」

そして、あまりにタイミングが遅いのが気になったのか、しろはが目を開ける。

「え、いったいどうし……ふえ!？」

そして俺の視線の先を追って……しろはも変な声をあげて固まっ
てしまった。

「な、ななな……なんで蒼たちが?」

「わ、わからない。絶対に気づかれてないと思っただけだ」

結局、しろはの肩を抱き寄せた微妙な格好のまま、ゴンドラは無情
にも地上へと降りていった。

「おかえりなきーい」

係員さんがドアを開けてくれると同時に、しろはは逃げるように飛
び出した。

それを追ってゴンドラから出ると、俺たちを待ち構えていたかのよ
うに、観覧車の入り口に皆が揃っていた。やっぱり、後をつけられて
いたみたいだ。

「ほう、二人つきりで観覧車か」

「やるなあ」

いつの間に合流したのか、天善と良一がニヤニヤしながら俺を見て
いた。

他の皆も一様にわざとらしい笑みを浮かべていた。結局、何もでき
てないんだけど、恥ずか死にそうだ。

「……ただいまです。のみきちゃん、カメラ返しておきますね」

「ああ、よくわからないが、お目当ての写真は撮れたのか?」

「いえ、あとちよつとの所で無理でした」

俺たちが続いてゴンドラから降りてきた藍がのみきに撮レルンで
すを返しながら、何か言っていた。うん、聞かなかったことにしよう。
「そうだ。フィルムがあと二枚ほど残っているんだ。せっかくだし、
皆で記念写真を撮らないか」

「おおー、いいですね!」

「それは良い思い出になるな」

「ちようどあそこに係員さんもいますし、撮影をお願いしましょう」
そしてのみきの提案で、入場ゲートの前で集合写真を撮ってもらったことになった。

「はい、それでは皆さん、笑ってくださいねー！」

撮影用の看板の前に整列して、係員さんがシャッターを切ってくれる。この際、観覧車の出来事は忘れて、とびきりの笑顔で写ってやろう。

さすがに夏休み中の現像は無理だろうけど、これはいい思い出になると思う。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

写真撮影も終わり、やってきたバスに全員で乗り込む。定刻になると、バスは宇都港へ向けて出発した。

皆、思いつきり遊んで疲れているようで、バスが出発するとすぐにあちらこちらから寝息が聞こえてきた。

特に夏海ちゃんはバスが出発するとすぐに、隣席のしろはの膝に倒れ込むようにして眠ってしまった。

「……夏海ちゃんも疲れちゃったみたいだね」

しろはは迷惑がることもなく、その頭を優しく撫でてあげていた。

確かに、あれだけはしゃいだら疲れるだろうけど……それだけじゃない気もする。

たった今、夏海ちゃんの手のひらから抜け出てきた七影蝶を目で追いながら、俺はそんなことを考えていた。

……その後、宇都港から船に乗って、鳥白島に帰り着いた。

皆と別れて加藤家に帰宅する頃には、夏海ちゃんもすっかり元気になつていたので、水着やタオルを洗濯しておくことにした。

「羽依里さーん、窓拭き用の洗剤ってこっちにないですかー？」

「ああ、たぶんこれじゃないかな」

「ありがとうございますー！」

ついでに風呂掃除や窓拭きもやっておいた。鏡子さんもどこかに出掛けているみたいだし、たまには家事をしておかないと。

それが終わると、今度は自分たちの部屋で荷物整理をすることにした。

「えーつと、宇都山ハイランドチップスに、宇都山ハイランドクッキー……無難なのはこの辺りかな」

水鉄砲大会でもらった景品の中に、手ごろなお菓子があつた。後で鏡子さんにお土産として渡すことにしよう。

「……よし、こんなもんかな」

ようやく片付けがひと段落して、達成感に満たされながら部屋を見渡していると、お腹が鳴つた。

反射的に時計を見てみると、良い時間になっていた。そろそろ晩ごはんを食べに行こう。

「夏海ちゃん、いい頃合いだし、しろは食堂に行かない？」

そう声をかけながら、居間に足を運んでみる。

「……あれ？」

明かりは点いていたけど、無人だった。さっきまで居間にいた気がするけど。

「……部屋かな？」

俺は首をかしげながら、夏海ちゃんの部屋へ向かう。

「夏海ちゃん？」

部屋の前から、ふすま越しに声をかけてみるけど……返事がない。隙間から光が漏れてきているし、中にいると思うんだけど。

「夏海ちゃん、開けるよー？」

——たぶん、存在を保てなくなって、消えちゃうんじゃないですかね？

ふすまに手をかけた、その時。昨日の夜、夏海ちゃんが言っていた言葉が脳裏をよぎった。

……そんな、まさか。

でも、遊園地でも七影蝶がたくさん出ていたし、帰りのバスでも力尽きたように寝ていたし。

……嫌な予感がする。

「夏海ちゃん!」

俺は思わず大きな声を出して、部屋のふすまを開ける。

「え? どうしたんですか?」

……部屋に入ると、夏海ちゃんはイヤホンをつけて、MDを聞いていた。

「い、いや、なんでもないよ……」

右のイヤホンを外して、キョトンとする夏海ちゃんを見て、一気に力が抜けてしまった。

「そりゃ、イヤホンつけてれば、聞こえないよね……」

そう言いながら視線を下に動かすと、夏海ちゃんが一枚の写真を持っているのに気がついた。

「あれ、その写真って、お花見の時の?」

「はい。夏休みの最初に、一度見せましたよね。この島に来た時、鏡子さんにもらった写真です。何度見ても、本当に楽しそうなので」

……今度、桜が咲く時期になったら皆で見に行こう……と言いかけて、やめた。写真を見る夏海ちゃんの表情が、すぐく儂げに見えてしまったから。

「それで、血相変えてどうしたんですか?」

でも、そんな表情はすぐに消え失せて、今度は不思議そうな顔で俺の方を見てきた。

「ああ……うん。そろそろ晩ごはん食べに行こうかと思ってさ」

「あ、もうそんな時間なんですネ。それじゃ、行きましょう!」

手早く写真をポーチにしまい、MDを片付けて立ち上がると、ぱたぱたと玄関へ向かっていった。俺もその後を追って、部屋を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しろはさーん」

「しろはー」

「あ、二人とも、いらっしやい」

夏海ちゃんと二人で食堂に顔を出すと、しろはが笑顔で迎えてくれる。一緒に遊園地から戻ったばかりなのに、いつもと変わらぬ様子で食堂を開けてくれていた。

「今日は何にする？ 仕入れができてないから、日替わりはできないけどね」

カウンター席に座った俺たちにおしぼりを渡してくれながら、しろはがそう言う。

「構わないよ。それじゃ、かつ丼できる？」

「うん。それならできるよ。夏海ちゃんはどうする？」

「えーっと、そうですね……」

夏海ちゃんはメニュー表とにらめっこしていた。珍しく迷っているみたいだ。

「……それじゃ、私はコロッケ定食ください！」

「え、また？ 夏海ちゃん、昨日もコロッケ定食だったよね？」

「はい！ その、しろはさんのコロッケ、すごくおいしいので……ダメですか？」

「全然構わないけど……それじゃ、少し待っててね」

しろはは注文を受けると、すぐに調理に取りかかってくれた。さっそくコロッケやトンカツを揚げる、いい匂いが漂ってくる。

「あの、しろはさん。それともうひとつ、お願いがあるんですけど」

「え、なに？」

俺がセルフの水を用意していると、夏海ちゃんが立ち上がった、しろはにまた別のお願いをしていた。

「定食のごはん、チャーハンにしてもらっていいですか？」

「チャーハン？」

「はい、しろはさんのチャーハンが食べたいんです！」

「別に良いけど……そんなに食べられる？」

「だ、大丈夫です！ お腹は空いてますので！」

「……わかった。それじゃあ作ってあげる。今日だけの特別だよ」

「はい！ ありがとうございます！」

しろははキャベツを切る手を止めて、チャーハンを作り始めた。希望が通ったこともあり、夏海ちゃんは元の席に座って、嬉々としてお冷を飲み始めた。

「一度にたくさん作った方が美味しいから、羽依里のごはんもチャーハンにしてあげるね」

「え、俺の注文、かつ丼なんだけど」

チャーハンかつ丼ってどうなんだろう。想像してみるけど、完全に別のメニューな気がする。まるでトルコライスだ。

「しろは、俺のは普通の白ごはん……」

「はい。おまちどうさま」

……俺が断るより早く、しろはの料理が完成していた。トンカツは先に揚げられていたとはいえ、さすがの手際だった。

「美味しそうですねえ」

既に夏海ちゃんはニコニコ顔で割り箸を割っていた。こうなったら、俺も腹をくくるしかない。

「それでは、いただきますーす！」

「い、いただきます」

笑顔でコロツケにかぶりつく夏海ちゃんの隣で、俺はサクサクパラパラのチャーハンかつ丼にとりかかったのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うう、気持ち悪い……」

食事を終えて加藤家に帰宅した後、俺は居間で突っ伏していた。よく考えたら、チャーハンかつ丼はトンカツだけじゃなく、ごはんにも油たっぷりだった。これは胃もたれするわけだ。

「台所の方に、胃薬がなかったっけ……」

俺は重たい腹を抱えるようにして、台所へと向かう。水屋のどこかに、救急箱があったはずだけど。

「……それにしても、賑やかだな」

お風呂場の方から、夏海ちゃんと鏡子さんの話し声が聞こえる。確か、今日は夏海ちゃんが鏡子さんに見せたいものがあると言って、一緒にお風呂に入ったんだっけ。

「お、胃薬があった。これを飲めば少しは楽になるはず……」

その場で適当なコップに水を注いで胃薬を飲むと、俺は再び居間へと戻り、たまらず横になったのだった……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……あれ、夏海ちゃん、これは何？」

洗い場で身体を洗っていた鏡子さんが、私が用意した置物に気づいて、そう聞いてくれました。

「温泉の置物です！ 少しでも温泉気分が味わえるんじゃないかと思いで、そう聞いてくれました。」

「そうなんだ。この黒い熊、可愛いね」

鏡子さんがそう言って、湯船に浸かる黒熊のご当地キャラクターを指でつつきます。私としては、こっちの緑色の鳥も可愛かったりするんですけど。

「それに、今日はお湯の色も変わってるね」

「はい！ この入浴剤を入れてみました！ 遊園地のお土産なんです！」

「ブラジルの湯？ よくわからないけど、フルーティーな香りがするね」

身体を洗い終わった鏡子さんが、湯船のお湯をすくって確認しています。私は一足先に湯船に入ってますけど、すぐく南国って感じの香りです。これがブラジルかと言われると、よくわからないですけど。

「それじゃ、私も入ろうかな」

「え、待ってください。さすがに狭いですよ!？」

「詰めれば入れるよ。お邪魔します」

「えええ」

私は止めましたけど、鏡子さんはそう言いながら湯船に入ってきました。お互いに体育座りするみたいにして、なんとか湯船に浸かります。

「へえ、光の加減でお湯の色が違って見えるんだね。珍しいし、これは羽依里君も喜んでくれるんじゃないかな」

「あ、その羽依里さんのことなんですけど……その、話しておかなくて良かったんですか?」

「え、何を?」

「三枚目の手紙に書いてあった、瞳さん……鳴瀬の一族の力についてですよ。しろはさんにも、その力があるんですよね?」

「……うん。考えたんだけど、それは話さない方が良いと思ってね。ほら、しろはちゃんはこの世界だと、あくまで普通の女の子だから」

「そ、そうですか。鏡子さんがそう決めたんなら、いいですけど……」

私は返す言葉が見つからず、湯船に顔の下半分を沈めて、意味もなくブクブクしてみます。

「……やっぱり夏海ちゃんの中には、ここまで導いてくれた瞳の七影蝶も混ざってる気がするよ」

「そ、そうなんですかね?」

私は思わず、自分の両手を開いてみます。特に変わったところはないんですけど。

「うんうん。チャーハンに情熱を傾けるところとか、絶対に鳴瀬家の影響を受けてるよ。だってこの島に来るまで、夏海ちゃんは料理なん

てやったことなかったんでしょ？」

「はい。急にできるように……いえ、しなきやいけな！ という謎の使命感に襲われたんです」

「やっぱりそうだよ。瞳がしろはちゃんのことを気にかけるように、夏海ちゃんもしろはちゃんのことを気になってるんだよ」

「そ、そうでしょうか」

そう言われても、よくわかりません。私は私のはずです。

「……夏海ちゃん、明日は島の花火大会だよ。そんな顔してたら、楽しめないよ」

私が不安そうにしていたからでしょうか。鏡子さんは私の頬に優しく触れながら、笑顔でそう言ってくれます。

「……はい。ありがとうございます」

その触れた指先から、鏡子さんの気持ちが伝わってくる気がして、私もできるだけ笑顔で返します。

「私の方こそ、楽しい夏休みをありがとうございます」

そして、鏡子さんは私を優しく抱きしめてくれました。

……トキアミを通ったせいとか、私、本当のおかーさんのことはあまり覚えていないんです。でもきつと、おかーさんのぬくもりって、こんな感じなんだと思います。

だから、鏡子さんは私にとって、島のおかーさんです。この島にやってきて、不安だらけだった私を、受け止めてくれた人ですから。

……本人に言ったら、怒られちゃいそうですけどね。えへへ。

第四十六話・完

第四十七話 8月29日

「羽依里さーん！ 朝ですよー！」

……朝。

いつも以上に元気な夏海ちゃんの声で目が覚める。

「おはよう、夏海ちゃん」

「おはようございます」

「……あれ？ 今日はずいぶんゆっくりなんだね」

背伸びをしながら壁にかけられた時計を見てみると、7時半だった。

「はい。ラジオ体操も終わっちゃいましたし、たまにはゆっくりするのも良いかと思ってます」

夏海ちゃんはそう言いながら、手にホウキを持っていた。

「もしかして、朝から掃除をしていたの？」

「はい！ 埃は夜のうちに床に積もるので、朝は掃除するのに最適な時間なんですよー！」

もしかして、夏海ちゃんは早起きして掃除をしてくれていたんだろうか。

「起こしてくれば手伝ったのに……」

「いえ、早く目が覚めてしまったので、ついでにやっただけです！ もう終わりましたし、すぐに朝ごはんの支度をしますね！」

そう言うが早いか、夏海ちゃんは廊下をぱたぱたと走って行ってしまった。相変わらず、朝から元気だなあ。

「……って、感心してる場合じゃないよな。俺も起きないと」

その背中を見送った後、俺も急いで立ち上がって布団をたたむ。それから身支度を整えて、居間へと向かった。

居間に行ってみると、鏡子さんの姿はなかった。今日は花火大会が

あるし、その準備にでも行ってるんだらうか。

「夏海ちゃん、手伝うよ」

「え？ 急にどうしたんですか？」

そして気がつけば、俺は台所に顔を出していた。夏海ちゃんが朝から掃除をしてくれていたのに、惰眠を貪っていた後ろめたさもあって、何か手伝えることないかと思っただけ……。

「お気持ちだけでもらっておきます！ 台所は女の戦場ですので！」

エプロンという名の戦闘服に身を包んだ夏海ちゃんにそう言われて、笑顔で追い返されてしまった。

「確かに、男の俺が戦場に行つたところで後方支援すらできないけどさ……」

むしろ、皿を割ってしまったり調味料を間違えたりと、戦線を混乱させてしまいかねない。俺はそんなことを考えながら、居間で一人テレビを見ていたのだった。

……やがて朝のニュースが終わり、ラーメン特集が始まった。どこかで見たことある金髪のレポーターさんが、ものすごく幸せそうな顔でラーメンを食べていた。ところで、なんでこのレポーターさんはラーメンのことをメンラーって呼ぶんだらう。

「あれ？」

……それにしても、朝ごはんができるのがいつもより遅い気がする。ラジオ体操のログボこそないけど、先日しろはからもらったお中元の品がたくさんあったし、食材には困らないはずだけど。

ちよつと気になって、台所に行ってみる。

「うーん、うーん……」

すると、夏海ちゃんがお中元がまとめられた段ボール箱に頭を突っ込んで、うんうんと唸っていた。

「夏海ちゃん？」

「わひゃあ!!」

声をかけながら、その肩に触れると……不意を突かれたのか、声を

あげながら数センチは飛びあがった。

「あ、ごめん……大丈夫？」

「び、びっくりして、口から七影蝶が飛び出るかと思いました……」

……そこ、心臓じゃないんだ。まさに、夏海ちゃんならではの表現だった。

「もしかして、メインの食材選びに悩んでいたりするの？ やっぱり、チャーハンを作るんだよね？」

台所のテーブルを見る限り、サラダ油や卵、フライパンといったチャーハン作りに必要なものは一通り揃っている感じだけど。

「そうなんですよ……これだけたくさん食材があると、逆に考えがまとまらなくてですね」

夏海ちゃんは右手にかんぴよう、左手にツナ缶を持って悩んでいた。

「うーん、そうだね……」

俺も一緒になって、お中元が入った箱を覗き込んでみる。そうめん……は昨日使ったし、このサバ缶とかどうだろうか。

「夏海ちゃん、このサバ缶とかは？」

「うーん、それも良いんですけど、なんかこう、降って来ないんですよ」

よくわからないけど、夏海ちゃんには夏海ちゃんなのこだわりがあるらしい。

「こっちのカボチャを使って、カボチャーハンにしてもいいですけど……丸々一個使うわけにもいかないですし」

テーブルの上には小ぶりながらも、カボチャが一個まるごと置かれていた。どうやらこれは、先日しろはがもらってきた野菜の残りみだ。

「確かに、まるごとカボチャーハンを朝から食べるのはなかなかへビーそうだね」

「ですよねえ……」

そう言っつて、二人同時に頭を悩ませる。朝からチャーハンを作ろうとしている時点で、へビーも何もないかもしれないけど。

「……決めました！ この高級塩を使って、塩チャーハンを作ります！」

「え、塩?!」

しばらく悩んだ結果、夏海ちゃんが高そうな袋に入った塩を高々と掲げて、そう宣言していた。随分シンプルになったけど、どうして塩なんだろう。

「はっかったのっしおっ。これ、一度使ってみたかったですよね」

どこかのCMで聞いたことあるようなセリフを発しながら、夏海ちゃんが卵を割り始めた。これは、塩チャーハンで決まりみたいだ。

「かのうせいのかったまり♪」

食材選びが終わった後、俺は大人しく居間に戻り、塩チャーハンができるのを待つ。なんか台所から、どこかで聞いたことあるような歌が聞こえる気がする。

「お待たせしました！ 塩チャーハンです！」

しばらくして、夏海ちゃんが超大盛のチャーハンをおぼんに乗せて、居間にやってきた。

「え、それって二人分!?!」

「……あ、やっぱり多いですかね？」

俺がそう指摘すると、夏海ちゃんはばつが悪そうな顔をしていた。「……実は、チャーハンの歌をうたいながら調理していたら、ついつい作りすぎてしまいました。なんとか盛り付けてみたんですが、多いですよね……?。」

どうにか二皿に取り分けてあるけど、どう見ても三人前はある。いくらなんでも、朝からこの量はちよつと。

「少し減らそうか。残った分は別の器に分けて、ラップをかけておけばいいよ」

「わかりました。冷蔵庫に入れておきますね」

そう言うと、夏海ちゃんは手際よく塩チャーハンを別の器に移し、冷蔵庫にしまっていた。温めなおせばまた美味しく食べられるし、も

しかししたら、鏡子さんが食べてくれるかもしれない。

「それじゃ、冷めないうちに食べましょう！ いただきまーす」

夏海ちゃんが居間に戻ってくるのを待ってから、一緒にあいさつをして塩チャーハンを食べ始める。

「……うん。美味しい」

具材はネギと卵だけ。それに程よい塩味が効いた、本当にシンプルなチャーハンだった。ご飯もしっかりパラパラだし、これは美味しい。

「えへへ、今日も自信作ですよ！」

そう言って笑う夏海ちゃんと向かい合いながら、塩チャーハンを堪能した。

朝ごはんを済ませると、暇になってしまった。

洗い物を済ませた夏海ちゃんと二人、テレビを見たりするけど、この時間はどこも似たような情報番組しかやってなくて、すぐに飽きてしまった。

「あの、羽依里さん」

朝から駄菓子屋に行くのも、なんかはばかられるし……とか考えていると、唐突に夏海ちゃんから声をかけられた。

「え、どうしたの？」

「もし良かったら、今日の午前中、バイクで島を回ってみませんか？」

「いいよ。それじゃあ久しぶりに島を巡ってみようか」

「ありがとうございます！ それじゃ、用意してきますね！」

「うん、先に表で待ってるからね」

「はいー」

嬉しそうに部屋へと向かう夏海ちゃんを見送った後、俺もテレビを消してから立ち上がる。そのままバイクの鍵を持って、ガレージへと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

後ろに乗った夏海ちゃんを気にかけてつつバイクを走らせ、最初は漁港へ行ってみた。

既に漁師さんの仕事は終わっていて、代わりに見慣れない人たちがあちこちでテントを組み立てていた。

「あれ、なんですかね？」

「たぶん、夜の花火大会に向けて会場設営をしてるんじゃないかな。ほら、向こうの骨組みは出店っぽいし、こつちには仮設のステージみたいなのもあるしさ」

「本当ですね。皆さん忙しそうです」

当然だけど、港は色々な人が慌ただしく走り回っていた。俺たちはなるべく邪魔にならないように、漁港の端を歩くことにした。

「羽依里さん、変わった船がありますよ？」

「え、船？」

しばらく歩いていると、夏海ちゃんが港に停泊していた船を指差していた。なんだろう。普段は見ないような大きな船だけど、漁船にしてはそれらしい設備もないし、形も変だ。

「……あの船は台船と言ってたな。夜になったら、あの船から花火を打ち上げるんだ」

その時、背後から声がした。振り返ってみると、のみきが立っていた。

「あれ、のみきも手伝いに来てるのか？」

「ああ。午前中だけだな」

考えてみれば、花火大会は島の一大行事だ。この時期に花火大会が少ないこともあって、かなりの観光客が集まるらしいし、役所も総動員で準備するのは当然かもしれない。

「のみき、何か手伝えることはないか？」

「……いや、気持ちだけ受け取っておこう。先日の祭りと違って、専門の業者がたくさん入ってくれている。私たちも、半ば雑用係といった

ところだ」

「そつか。それじゃ、頑張ってくれよ」

「のみきさん、夜の花火、楽しみにしていますー!」

「ああ、この島の花火は余所のような派手さはないが、花火との距離が近いことで有名だ。迫力だけはあるから、期待していてくれ」

「はいー!」

その後、のみきは仮設ステージの方に呼ばれていった。あまり長居して準備の邪魔になっても悪いし、俺たちは別の場所に行くことにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

というわけで、港を後にした俺たちは、今度は秘密基地へとやってきた。そこには先客として、良一と天善、そしてイナリがいた。

「よう。イナリはここにいたのか」

「ポーン!」

俺が声をかけると、元気に尻尾を振って挨拶を返してくれた。

「ぜえ、はあ、くそー!」

「た、鷹原に夏海か……ど、どうした……?」

一方で、良一と天善は息も絶え絶えに、卓球台の近くに座り込んでいた。どうしたんだろう。

「二人ともどうしたんだ? 朝から死にそうな顔をしてるけど……!」

「き、聞いてくれ鷹原、実は……!」

天善によると、朝から良一と二人で秘密基地で駄弁っていたところへ、イナリがやってきたらしい。

そこで天善は良一と共にイナリに卓球勝負を挑んだらしいけど……二人の状態を見た限り、ボコボコにされたらしい。

「イナリ、少しは手を抜いてやれよ」

「ポーン!」

それはできない。勝負の世界は厳しいんだぜ、と言われていた。どうやら、先日の卓球大会でイナリも卓球に目覚めてしまったらしい。

「……そういえば、私も卓球大会の時、イナリさんに負けちゃったんですよね……」

「ポ、ポン？」

その時、夏海ちゃんが口元に手を当てながら、ジト目でイナリを見ていた。その様子を見て、俺はなぜか藍の表情と被って見えた。

「……天善さん、ラケットつてもう一つないですか？」

「ラケットか？ あるにはあるが……」

夏海ちゃんにそう聞かれ、天善が隅の箱からラケットを取り出した。

「ありがとうございます。それじゃ、三人がかりでイナリさんにリベンジしましょう！ 天善さん、良一さん、立ってください！」

夏海ちゃんはそれ受け取ると、びしつとラケットを構えながら、イナリに向き直る。まさかの展開だった。

「な、夏海ちゃん、本気でやるのか!？」

「もちろんです！ 良一さんはイナリさんに負けたままで、悔しくないんですか!？」

「そ、そりゃあ悔しいぜ……だけどよ……」

「なら、つべこべ言わずにリベンジしましょう！ ほら、天善さんも！」

「あ、ああ……」

最初は躊躇していた二人だけど、夏海ちゃんに鼓舞されるうちにやる気になったらしく、ラケットを持って立ち上がる。

どうやら、本気で三人がかりでイナリに挑むらしい。ダブルスならぬ、トリプルスだ。

「えーっと、それじゃ、イナリのサーブから試合開始！」

「ポーン！」

俺は慌てて得点板を構えながら、試合の行方を見守ることにした。

「うう、全然勝てないです……」

「無念だぜ……」

「完敗もいい所だな……」

夏海ちゃんたちは小一時間ほど粘っていたけど、まったく相手にならなかった。三人揃って床に座り込み、天井を仰ぎながら肩で息をしている。

天善の魂伝影念獅坐威砲も、良一のパージサーブも通用せず、夏海ちゃんのチャーハンスマツシユIIまで見切られていた。

「見てて思ったんだけどさ、卓球台の片方に三人もついていたら、狭くて全然動けてなかった気がするんだけど」

「鷹原の言う通りだな……数が多ければどうにかなるというものではなかった……」

「た、卓球道は奥が深いですね……」

「ポン！ ポーン！」

完敗を喫した三人を見下ろすように、イナリだけが卓球台の上で元気に飛び跳ねていた。

「それじゃ、俺たちはそろそろ行くよ」

「ああ、またな」

「イナリさんも、またです！」

「ポン！」

しばらく休んでから、俺たちは秘密基地を後にすることにした。次はどこへ行くろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

山を下りた俺たちは、そのまま住宅地とは反対方向へとハンドルを

切る。そして夏の日差しと風を全身に浴びながら、田舎道を進んでいく。

……やがて、小学校が見えてきた。

「羽依里さん、ちよつと止めてもらっていいですか？」

「うん、いいよ」

小学校の校門脇にバイクを止める。当然夏休み中だし、校門は閉まっていた。

夏海ちゃんはその校門やプールを横切って、グラウンドへと向かっていく。

「あのプールで灯籠を作ったり、このグラウンドで野球の試合をしたのが随分前のような気がします」

夏海ちゃんは嬉しそうにそう言い、しばらくの間グラウンドを見渡していた。

夏の初めには恐怖の対象だった学校も、この島で過ごすうちに思い出の場所へと変わったみたいだ。なんだか、俺も嬉しい気持ちになった。

夏海ちゃんとひとしきり小学校での思い出話をした後、そのまま田舎道を抜けて、今度は港の方に行ってみる。

ちなみに道中、しろは食堂の前を通りかかったけど『本日臨時休業』の札が下がっていた。夜は花火大会だし、さすがに今日は食堂を開けないみたいだ。

「あれ？ あの人たちも花火大会を見に来たんですかね？」

「かもしれないね」

適当に港の空いている場所にバイクを止めて、二人でぶらぶらしているところ、ちよつど船が到着したらしく、たくさんのお客が歩いていた。

そこまで大きく宣伝とかしてないみたいだけど、毎年の恒例行事だったら、噂を聞き付けた観光客とかがやって来るのかもしれない。

「あの一、すみませーん」

その時、二人組の女性から声をかけられた。

「烏白島まんじゅうって、どこに売ってるか知りませんか？」

「え？ ああ、こっちですよ」

烏白島まんじゅう。駄菓子屋にも売ってるけど、確か以前、ここからほど近い商店にも売っているのを見た気がする。

この人たち、身なりからして観光客っぽいし、案内してあげることにした。

「ここです。このお店に売ってますよ」

俺は港のすぐ近くの商店に二人を案内する。

「ありがとうございますー。ところで、お二人はご兄妹ですか？」

「え？ いや、この子は親戚の子で」

「あ、そうだったんですねー」

「仲良さそうなので勘違いしちゃいましたー。お嬢ちゃんもありがとうございますー」

観光客の二人は笑顔で俺たちに手を振ると、そのまま商店の中に入っていった。

「羽依里さん、どうしたんですか？ なんだか嬉しそうですね？」

「観光客に地元の人間に間違われるくらい、俺もこの島に溶け込んできたんだなって思ってます」

「はあ……確かに、さっきの羽依里さん、すぐく地元の人っぽかったですね」

夏海ちゃんもそう言って笑ってくれた。俺も一ヶ月以上この島に滞在しているし、それくらいわかって当たり前なんだけど。不思議なくらい嬉しくなって、思わず笑みがこぼれた。

「……羽依里、お店の前でニヤニヤして、なんか怖いんだけど」

「え、鳴？」

……そんな様子を、鳴にしつかりと見られていた。

「鳴さん、こんにちわですー！」

「やつほー、なっちゃんー！」

夏海ちゃんに負けなくらい、鷗も元気な声で挨拶を返していた。この二人、本当に元気だな。

「それで、羽依里たちは買い物？」

鷗はいつものスーツケースを持ち、白い日傘を差していた。今日も朝から日差しが強いし、やっぱり暑いんだろう。

「いや、俺たちは観光客を道案内してただけだよ。鷗こそ、どうして港にいるんだ？」

「今夜花火大会あるでしょ？ おかーさんの会社がそのスポンサーしてるから、港で議員さんを待ってたの！」

スポンサー？ 議員さん？ なんか今、しれっとすごいワードが聞こえたような。

「よくわからないけど、お偉いさんとかと会うのか？」

「まあ、そんなところ。でも軽く挨拶しただけで、すぐにおかーさんと議員さんは役所に行っちゃったから、私は暇になっちゃったんだけどね」

ああ言ってるけど、たぶん鷗は母親と一緒に役所に行くのを断つて、港に残ったんだろう。理由は多分、俺たちの姿が見えたから。

せっかくだし、少し話をしていこうかな。

「そういえば、なっちゃんはもう浴衣用意した？」

そんなことを考えていると、鷗が夏海ちゃんにそう質問していた。

「え、浴衣って何のですか？」

「花火大会のに決まってるよ。なっちゃんも着るんだよね？」

「……はっ」

鷗の言葉を聞いて、夏海ちゃんが口元に両手を当てて固まる。

「ど、どうしましょう。何も用意してません」

「ええっ、用意してないの？」

続いて鷗が驚嘆の声をあげる。俺もすっかり失念していたけど、花火大会に浴衣はつきものだ。

夏海ちゃんも着たいはずだし、しろはや鏡子さんに頼んで、浴衣を用意してもらえないだろうか。

「ふっふっふ。安心して！ そんなこともあろうかと、沢山の浴衣を

用意してあるから！」

「ど、どこにですか？」

「ご覧あれー！」

次の瞬間、鷗は持っていたスーツケースを開く。その中には色鮮やかな浴衣がたくさん入っていた。

「すごいですね。見ても良いですか？」

「気に入ったのがあったらあげるよ。なっちゃんに合ったサイズはこの辺りかなー」

「え、もらっちゃっていいんですか？」

「うん！」

「ありがとうございますー！」

夏海ちゃんはスーツケースの近くに座り込んで、嬉しそうに浴衣を物色し始めた。

それにしても、こうやって道端でスーツケースを広げていると、怪しい行商人みたいだ。

「鷗、お前は浴衣の行商でも始めたのか？」

「違うよ！ ちよつとわけありでね。浴衣を貰ってくれる人を探してるの」

「え、そうなの？」

「うん。私が港に来たのは、これを受け取る用事もあつたしね」

何か深い理由がありそうだし、ここは詮索しないほうが良さそうだ。

「それでね。お昼から駄菓子屋の座敷を借りて、浴衣の譲渡会を開催しようと思ってるの。あそこなら試着もできるし、なっちゃんもゆっくり選べると思うよ？」

「じゃあ、お昼から駄菓子屋にお邪魔します！」

「うん、待ってるよ！」

落ち着いて浴衣を選べる目途が立ったからか、夏海ちゃんは手にしていた浴衣をスーツケースへと戻す。

「羽依里、それでね。せっかくだから他の女の子たちにも声をかけておいてくれないかな。皆お気に入りの浴衣があるかもだけど、少しで

もたくさんの人に貰ってほしいの」

「わかった。誰かに会うことがあったら伝えておくよ」

「よろしくね。それじゃ、またお昼から!」

そこまで話すと、鴎は残りの浴衣を手早くスーツケースへとしまい直す、そのまま去っていった。

「夏海ちゃん、浴衣の目途が立って良かったね」

「はい! すっかり忘れていたので、助かりました!」

夏海ちゃんは笑顔だった。お昼から駄菓子屋で譲渡会か。お昼になつたら、忘れずに駄菓子屋に行かないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

午後からの予定は決まったけど、まだお昼までは時間があるし、俺は後ろに夏海ちゃんを乗せて、またバイクを走らせた。

「ここは風があつて、涼しいですね」

島の隅々まで巡った後、最後に灯台にやってきた。

「おおう、さすがシロハさんです!」

灯台の扉をノックしようとしたその時、浜辺の方から紬の声が聞こえた。どうやら、しろはもいるらしい。

「あら、パイリ君に夏海ちゃん」

声がる方に行つてみると、先の二人に加えて静久も居た。

「タカハラさん、ナツミさん、いらっしやいませ!」

髪をポニーテールにまとめた紬が満面の笑みで迎えてくれた。風にそよぐ金髪が太陽の光でキラキラと輝いて、綺麗だった。

「賑やかだけど、三人で何やってるんだ?」

「はい! お昼ゴハンの調達です!」

言われて見てみると、三人が三人、釣り糸を垂らしていた。しろはが例の釣り場以外で釣りしてるなんて珍しい。

「あれ? ここって釣りしていいのか?」

「遊泳禁止の看板は出てるけど、釣りは禁止されてないよ」

一番奥にいたしろはがそう教えてくれた。そういうしろはの足元のバケツには、たくさんのアジが入っている。

「おお、さすがしろはだな」

「たまには釣り場を変えてみるのもいいみたい。場所が違うと、魚も油断してるのかな……ヒット」

直後にもう一匹、大きなアジを釣り上げた。さすがの腕前だった。

「私もしろはちゃんに教えてもらいながら釣っていたのだけど、変わった魚しか釣れないのよ」

そう言う静久のバケツには、なぜか大量のハリセンボンが入っていた。これは、釣れていないのと同じだ。

「むぎぎぎ……シズクはまだ魚が釣れるだけ良い方です。むぎぎぎぎ」

そんな静久の隣にいる紬は、妙な声をあげながらわなわなと震えていた。足元のバケツは空っぽで、すぐ隣にいくつものぬいぐるみが転がっていた。もしかして、これが釣れたんだろうか。

「三人とも、エサも道具も同じはずんだけどね」

しろはが不思議そうな顔をしていた。やっぱり、しろはは魚に好かれる体質なんだろうか。彼女がそんな体質つてのも、なんか嫌だけど。

「そういえば看板見たんだけど、今日は食堂を開けないのか？」

「うん。夜は皆、花火に行くしね」

新しいエサを針に付けながら、しろはがそう教えてくれた。ちなみに、エサは浜辺で獲ったらしい虫だった。

「それに、本土からたくさんのお店が来るし、賑やかなんだよ」

「ああ、一度港に行ったときに見たよ」

「美味しいものがたくさんあるから、夏海ちゃんも晩ごはんは食べずに行くのが良いかもね」

「はい、そうしますー！」

魚港で準備されているの見た感じ、沢山の屋台が出るみたいだし。今から楽しみだ。

「そうだ。せっかくだし、羽依里や夏海ちゃんも釣ってみる？」
「良いのか？」

「うん。私は沢山釣ったし」

「それではナツミさん、わたしの釣り竿をどうぞ！」

「ありがとうございます！」

俺と夏海ちゃんもそれぞれ釣り竿を受け取って、勢いよく海へと投じた。

「……おお、また釣れた」

「またヒラメだね。刺身にすると美味しいよ」

「こつちも釣れました！」

「夏海ちゃんのはカレイだね。煮つけにすると美味しいよね」

道具もエサも、何もかも同じはずなのに、これまたしろはたちとは全然違う種類の魚が釣れていた。本当に不思議だ。

「左ヒラメに右カレイって言うてね。違いが分かればちゃんと見分けられるんだよ」

「そうなんだな」

俺からしたら、全く見分けがつかない。さすが食堂をやってるだけある。

「……うん。たくさん釣れたし、もうこの辺でいいんじゃないかな」

「そうですね！」

その後もしばらく釣り続けると、結構な量の魚が釣れた。これは大漁だった。

「ところで、灯台からこれだけの魚を持って帰るのは大変そうだな」

ビニール袋に入れたとしても、結構な量になりそうだし。

「……それじゃ、ここで食べる？」

「え？」

しろははそう言うが早いか、まな板と包丁を取り出した。どこに

持ってたんだらう。

「料理をするなら、ガスコンロにお鍋、調味料もあるわよ！」

「灯台の中から持ってきました！ なんでもござれです！」

紬と静久はその手に様々な調味料や調理器具を持っていた。いつの間に灯台に戻ったんだらう。

「お醤油にワサビもあるし、アジやヒラメは刺身にするね。夏海ちゃんも手伝ってくれる？」

「わかりました！」

そうしろはに指示された夏海ちゃんが、しろはから別の包丁とまな板を受け取って魚をさばき始めた。だから、どこに持っていたの。

「ねえ紬、サラダ油と天ぷら鍋があったら貸してほしいんだけど」

「はい！ これですね！」

「唐揚げ粉もあるわよ。これでいいかしら？」

「うん。大丈夫」

俺が色々と考えているうちに、しろはの望んだものが何でも出てきていた。紬たちも普段からここで料理をしているんだらうか。素晴らしい準備の良さだった。

「羽依里もぼーっとしてないで、灯台の水道から水を汲んできて」

「え？ ああ、わかった」

俺は渡されたバケツを手に、言われるがままに水汲みへ向かった。戻ってくると、しろはがハリセンボンをさばいていた。

「ええ……それって食べられるの？」

「うん。から揚げにしようと思って。南の方では普通に食べてるらしいし、礼儀だから食べない」と

あれよあれよという間に、立派な魚料理が出来上がっていった。時間的に、これはもうお昼ごはんと思っていいたいだらう。

「それじゃ、いただきますしよう」

「はい！ いただきますーす！」

全員で手を洗った後、完成したばかりの魚料理をいただくことにし

た。

「それじゃ、まずは……」

俺は最初に自分が釣ったヒラメの刺身を一切れ食べてみた。うん。コリコリして美味しい。

「今食べたのが、ヒラメのえんがわ。一番おいしい所だよ」

「そうなんだ。脂も乗ってるし、これはご飯が欲しくなるな」

「そうだわ。鮎、確か灯台にアレがあつたわよね。主食に食べてもらつたらどうかしら」

「おおー、それは名案です！」

俺がついそう言うと、静久に何やら提案された鮎が灯台の中へと戻っていった。まさか、ごはんが出てくるんだろうか。

「……皆さん、どうぞー！」

しばらくして、鮎は両手いっぱいコッペパンを持って戻ってきた。

なるほど。コッペパンといえばワタアメやタコに続いて、鮎の主食の一つだった。

「さつきから不思議に思っていたけど、灯台には何でも揃ってるんだな」

「ええ、実は時々灯台に食材を持ってきて、鮎と一緒にごはんを作っているの」

「はい！ シズクの作るごはんは美味しいんです！」

なるほど、そういうことだったのか。それなら、あれだけの調理道具が揃っているのも納得だ。

謎が一つ解けたところで、揚げたてのハリセンボンのから揚げをコッペパンに挟んで、ソースをかけていただくことにした。

ハリセンボンを挟んだコッペパンなんて初めてなんだけど、サクサクして美味しかった。

「そうだ三人とも、今夜の花火大会で着る浴衣は用意してるの？」

「え、浴衣？」

そして俺は食事をしながら、港で鷗が言っていた浴衣の譲渡会について、三人に話を振ってみた。

「もちろん用意はしてるけど……どうかしたの？」

「実は、鷗が午後から駄菓子屋で、わけありの浴衣を譲りたいって言ってたんだ。たくさんあるらしいんだけど、三人も行ってみないか？」

「むぎゆ。それは少し気になります」

「でもわけあり……って、なんだか怖いね」

「着てると段々帯が締まってきて、息が苦しくなるとか？」

「むぎゆ!? それは怖すぎます!」

「ちよつとパイリ君、紬を怖がらせないで」

「ごめんごめん。それで、三人にも是非来てほしいんだけど」

「じゃあ、お昼から駄菓子屋に行ってみるね」

「私と紬もお邪魔するわ」

「はい!」

「うん、よろしくお願いするよ」

これで三人は確保した。鷗も人がたくさん来てくれた方が喜ぶだろうし。

心配事がなくなったところで、俺は食事を再開することにした。うん、このカレイの煮つけ、味が染みて美味しい。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

一度加藤家に帰宅し、バイクをしまう。思わぬところでお昼ご飯が食べられたので、少し休憩してから、そのまま駄菓子屋へと向かった。

「くーださーいな」

「……いらっしやい」

駄菓子屋についてみると、カウンターにおばーちゃんがいた。どう

やら、今日は蒼たちは来ていないみたいだ。

「今日も暑いねえ」

「本当ですね」

おばーちゃんに相槌を返しながら、店の中を見渡す。座敷のふすまは閉じられているし、鴎の姿もない。どうやら、まだ浴衣の譲渡会は始まっていないみたいだ。

「そうだ。おばーちゃん、かき氷貰えますか？」

店に入った手前、そのまま外に出るつても気が引けた。とりあえずかき氷でも食べながら待つことにしよう。お昼ごはんの関係で、少し喉が渴いていたし。

「いいよ。どれにするかの？」

「それじゃ、ブルーハワイで。夏海ちゃんは どうする？」

「私は氷イチゴください！」

「どれも同じ味じゃがの。ほい。200万円」

「はい」

いつものお約束をして、おばーちゃんに代金を支払う。それからかき氷ができるまでの間、なんとなく商品の陳列棚を眺めてみる。

すると、以前鴎が作ったボトルシップが目に残る。ちょうど目の前の高さに、目立つように置かれていた。

「やつぱりこれ、すごい出来栄だよな」

「そうそう。その船を見た子供たちから、いくつもボトルシップの注文が入ってねえ」

しゃこしやこと氷を削りながら、おばーちゃんがそう教えてくれる。確かに、この完成品を見たら自分でも作ってみたいという衝動に駆られそうだ。そういう意味では、鴎はこの店の売り上げに貢献していると言えるのかもしれない。

「ほいよ。ブルーハワイに、氷イチゴだったの」

しばらくして、たつぷりとシロップのかかった山盛りのかき氷をおばーちゃんから受け取る。

「奥の座敷で食べるとええよ。扇風機があつて涼しいしの」

「それじゃ、上がらせてもらいます」

おばーちゃんはそこまで言うと、カウンターの前にザルを出して店を無人販売にして、どこかに出掛けてしまった。俺はその背中を見送った後、奥のふすまを開ける。

「…………へ？」

…………そこには下着姿の蒼と藍がいた。

二人は俺の方を向いて、同じ顔をして固まっていた。というか、俺も固まって動けない。

「羽依里さん、どうしたんですか？ あ…………」

不意に立ち止まった俺を不思議に思ったのか、夏海ちゃんが横から顔を出し…………同じように固まる。

「え、えつとその」

しろはと付き合つて結構経つし、正直この手のハプニングは慣れてきた。こういう時はあわてず騒がず、ゆっくりとふすまを閉めて…………。

「…………っ！」

俺がそう考えている間にも、藍が声にならない声をあげながらこっちに近づいてきた。え、なんで近づいてくるの。

そして俺の手からブルーハワイを奪い取ると、満面の笑みを浮かべながら俺の顔面に押し付けてきた。

「びよおおおお!!」

俺はあまりの冷たさに絶叫した。ちよつと藍、ぐりぐりするのやめて！

「あわわわわわ」

すぐ近くで夏海ちゃんが困惑している声が聞こえるけど、俺はそれどころじゃない。顔面に押し付けられたかき氷は俺の体温で溶けて、そのまま顔を伝い落ちて襟元から服の中に入ってくる。これは冷たい。冷たすぎる。許して藍おねーちゃん！

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……で、何か弁解する事はありますか？」

「ないわよねー？」

……数分後、俺は空門姉妹に見下ろされながら、駄菓子屋前の地面で正座をしていた。ブルーハワイを顔面に押し付けられたせいで、俺のシャツは青く染まっている。

目の前には全く同じ笑顔の二人。うん、笑顔なんだけど、すごく怖い。

「えつとその、これは事故かと」

「は？」

予想通り、二人は大変怒ってらっしゃった。そんな俺を、向こうのベンチに座った夏海ちゃんがかき氷を食べながら心配そうに見ていた。

「うう、ブルーハワイのシロップでベッタベタなんだけど」

俺はシャツを摘みながら、何とも言えない気持ちになる。地面に正座しているし、このままだと蟻にたかられそうだ。

「自業自得です。なにより、蒼ちゃんの下着姿を見たことは許せません。反省してください」

藍は目くじら立てながらそう言うけど、俺の記憶に一番残ってるのは、かき氷を投げつける時に迫ってきた藍の胸なんだけど。

「ところで、二人はどうして駄菓子屋で下着姿に？」

「……その言い方、語弊があるからやめて欲しいんだけど」

「私と蒼ちゃんは鷗ちゃんからもらった浴衣の試着をしていたんですよ。そこに羽依里さんが入ってきたんです」

なるほど。それは本当にタイミングが悪かった。せめて夏海ちゃんから先に座敷へ入ってもらえば、その先の展開も違っただろうに。

「……って、それじゃ鷗来てるのか？」

「へ？ 来てるわよー。ほら」

俺の問いに、蒼がそう言って開けっ放しになっていた座敷を指差す。畳の上に、鷗のスーツケースが置かれていた。

「本体のスーツケースを残して、鷗はどこ行ったんだ？」

「あ、終わった？」

不思議に思っていると、ガタガタと奥の押し入れが開いて、そこから鴟が顔を覗かせた。

「いやー、二人の豹変っぷりに驚いて、ついつい隠れちゃったよー」
後ろ頭を掻きながら、鴟がもそもそと這い出てきた。俺たちも店内に戻り、座敷の方へと向かう。

「そりゃ、男の子に下着姿を見られたら豹変もするでしょー？」
「そうかなー。私は冷静にスーちゃんてむこうずねをガツツと……」

ちよつと鴟、想像するだけで痛いからやめて。

「鴟、それよりさ、夏海ちゃんにも浴衣を試着させてあげてほしいんだけど」

「いいよー。ほらほらなつちゃん、そんなところに立ってないで、カモンカモン」

ちよつとかき氷を食べ終わったのか、店の入口から中を覗き込んでいた夏海ちゃんを鴟が見つけて、そう言つて手招きをした。ようやく、本題に入れそうだ。

「さあさあ、皆様お立会い！」

元々いた空門姉妹に夏海ちゃんを加えて、改めて浴衣の譲渡会が始まった。鴟はまるで叩き売りのような口上を述べながら、座敷の畳の上に色鮮やかな浴衣を並べていた。

俺も何の気なしに座敷の入口に座り、綺麗に並んだ浴衣を眺めっていると、ふと疑問が浮かんだ。

「ところで鴟、なんでこんなにくさんの浴衣を持つてるんだ？」
「おかーさんの知り合いに呉服屋さんをしてた人がいてね。もう年だからお店をたたむことにしたらいいんだけど、その時にまだ使えそうな着物を譲ってくれたらしいの」

なるほど、高価な着物や振袖は譲渡先があるかもしれないけど、浴衣となると時期物だし、なかなか引き取り手もないのかもしれない

い。

「それで良かったら、皆に使って貰おうかと思つて！」
わけありつて、そういう事だったのか。なんというか、鳴らしかつた。

「というわけだから、なつちゃんも好きなの選んでいいよ！」
「はい！」

夏海ちゃんは目を輝かせながら、近くにあった浴衣を手に取る。

「帯もこつちにあるから、良いのを選んでね！」

「ありがとうございます！ どれも綺麗なので、悩んじゃいます！」

「さつきも着てみたけど、やっぱりこつちの柄も良いわね！」

「この帯も、蒼ちゃんには似合うと思いますよ？」

そこに空門姉妹も加わつて、和気あいあいと浴衣を選び始めた。
やっぱり女の子つてこういうの好きなんだな。

「色の取り合わせが気になったら、試着してみても良いからね！」

「着付けなら、あたしがしてあげるわよー？」

「ありがとうございます！ それじゃさつそく……あ」

その時、女子の視線が一斉に俺に集まつた。

「そ、それじゃ、俺は表で待つてるから！」

さすがに試着するとなると、ここにいるわけにもいかない。俺は飛びのくように立ち上がつて、慌ててふすまを閉めた。

「はあ、なんだか疲れた……」

俺は閉め切られた座敷に背を向けるようにしてベンチに座り、ぐったりしていた。

カウンターに置かれたいたザルに代金を入れて、すこんぶを買ってちまちましゃぶつてみるけど、大して時間は潰れない。

「くーださーいなー」

「あら、パイリ君」

……その時、紬と静久がやつてきた。

「ああ、鴟の譲渡会なら奥の座敷で始まつてるぞ」

「そですか。それでは行ってみます！」

浴衣を選ぶのが楽しみなんだろう。紬は半分スキップしながら座敷へと向かっていった。

「ふふ、せっかく来たのに、パイリ君も大変ね」

「わかってくれるのは静久だけだよ……」

どうやら、静久は俺が外のベンチに座っている理由を察してくれたらしく、すれ違いざまに慰めの言葉をかけてくれた。その心遣いが今は身に染みる。

その後、俺はビツクカツバーを食べながら、なにをするでもなくぼーっとしていた。今日も空は青いなあ。

「蒼さん、この帯も試してみたいんですけど……」

「あ、ちよつと待ってねー」

座敷のふすまを閉めていても、賑やかな声が漏れ聞こえてくる。

どうやら蒼が着付けを担当しているらしく、なかなか忙しそうだ。

「では、ナツミさんの浴衣はわたしが着付けます！」

「え、紬、着付けできるの？」

「はい！ この道100年のタクミの技をお見せしましょう！ するするするー」

「おおー、ツムツム上手！ 意外だねー！」

よくわからないけど、紬は着付けが上手いらしい。紬に和服のイメージはないんだけど。

「紬、私にもお願いできないかしら」

「シズクの場合は帯板の位置を調節したり、この和製ブラジャーかタオルを使って、そのおっきな胸が目立たないようにしますー！」

「まあ、おっぱいにそんなことするなんて、紬はいじわるなの!？」

「べ、別にイジワルではないです！ こうしないと、アンバランスになっちゃうのでー！」

なんか生々しい会話まで聞こえる。まあ、楽しそうだからいいけどさ。

……あ、期待してる人には悪いけど、今回は夏海ちゃん視点にはならないらしいよ。

って、俺は何を考えているんだろう。暑さにやられかけてるのかな。

「……あれ、羽依里？ 一人なの？」

その時、しろはがやってきた。ベンチに座っている俺を見て、不思議そうな顔をしている。

「ああ、皆は座敷で譲渡会をやってるよ。試着もしてるみたいでさ。俺がいるわけにもいかないから」

「そうなんだ。それはしようがないよね」

「譲渡会もだいぶ盛り上がりつつあるみたいだし、しろはも行ってきなよ」

「うん。それじゃ、行ってくるね」

しろはもそう言いながら、俺の横を通り過ぎていった。

「……ところで、なんでシャツが青く染まってるの？ 灯台で会った時は、普通の白いシャツだったよね？」

通り過ぎたと思ったら、しろはが振り返ってそう聞いてきた。

「いやその、かき氷を食べてて、ブルーハワイシロップをこぼしちゃったんだ」

「ええ……乾いちちゃったら落ちにくいから、早めに洗濯したほうがいいよっ。」

「わ、わかってるよ」

まさか正直に話すわけにもいかず、適当にはぐらかしておいた。

そしてしろはを見送った後、また暇になった。

さつきからお菓子ばかり食べて喉が渴いてきたし、ラムネでも買って飲もうかな。結局、かき氷は食べられなかったし。

「やっぱり、一人黄昏てるわねー」

そう思っていた矢先、蒼が表にやってきた。

「あれ、蒼？ もう終わったのか？」

「あたしは選り終わったわよー。しろはも来たし、ちよつと座敷が手狭になってきたから、退散してきたの」

「なるほどな。それで、蒼はどんな柄の浴衣にしたんだ？」

「それは夜のお楽しみって事で」

「よ、夜の……蒼が言うのと、なぜかエロく聞こえるよな」

「え、エロちやうわ！」

なんかこのやりとりも久しぶりな気がする。まあ、それこそ夜のお楽しみにしておこう。

「ところで蒼、かき氷貰える？」

「へっ、かき氷？」

「ほら、結局食べられなかったしき」

「あーね……良いわよー。何味？」

「じゃあ、今度はレモンで」

「りよーかい。今度シャツにかき氷こぼしたら、緑色になるわねー」

「うぐっ、しろはから聞いたのか。その話は忘れてくれ」

「はいはい。100万円よー」

お約束をしながら蒼に100円を渡す。すると、すぐに氷を削る涼しげな音が聞こえてきた。

「そういうえば港に行ってみたけど、観光客もたくさん来てたぞ」

「そうねー。実行委員会の皆が毎年気合入れてるから」

「そうなんだな」

「花火、2500発も上げるのよ。こんな島でねー」

そう言いながら、純白のかき氷にレモンシロップをかける。見るからにおいしそうだ。

観光客は来るけど、そこまで宣伝とかしてないところからして、花火大会は純粋に島民の皆が楽しむためにやってる感じなんだろう。

「はい。おまたせー」

やがて蒼が大盛のかき氷を手渡してくれる。いつも思うけど、この量で100円は安いと思う。

「あれ、なんか白いんだけど」

「練乳、サービスしといたわよー」

「嬉しいんだけど、レモンに練乳ってありなのか？」

「レモン牛乳ってのがあるんだし、いいんじゃないの？」

「それもそうだよな」

妙に納得しつつ、氷レモンを口に運ぶ。甘酸っぱい独特の風味が口に広がって、美味しかった。

かき氷を食べ終わった頃、ようやく譲渡会が終了したらしい。各々が浴衣を手に、座敷から出てきた。

「それじゃ良い時間だし、そろそろ帰って準備をしましょう？」

静久がそう言う。その手には浴衣と別に、白い袋があった。

「カモメさんのところには、後で着付けに伺います！」

「ツムツム、よろしくね！」

続いて、紬がそう言っていた。ふすま越しに聞いた感じだと、この中では紬が一番着付けが上手いらしい。やっぱり意外だ。

「その後になります、ナツミさんのところにもお邪魔します！」

「あ、着付けは鏡子さんができると聞いたので、鏡子さんをお願いしようと思っっています！」

「そですか。では、お祭りの会場で会いましょう！」

「はいー！」

「それじゃーねー」

皆は手を振りながら、それぞれが自分の家の方へ向けて歩いていった。そして駄菓子屋の前には、俺と夏海ちゃんだけが残される。

「ところで夏海ちゃん、どんな柄にしたの？」

「はい！ これです！」

満面の笑みで見せてくれた浴衣は、蝶の柄だった。うん、いかにも夏海ちゃんらしい。

「それじゃ、俺たちも帰ろうか」

俺も帰って着替えないと。完全に乾いちやってるけど、このブルー

ハワイシロップ、落ちるかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おまたせしましたー」

夕方近くになって、段々と漁港の方に人が集まっている気配がしてきた。

一足早く準備を終えて玄関先で待っていると、着付けを済ませた夏海ちゃんが鏡子さんと一緒に出てきた。

「おお、その浴衣、似合ってるね」

「えへへ、ありがとうございますー」

夏海ちゃんの浴衣は赤を基調としていて、所々に蝶のアクセントが入っていた。予想通り、すごく似合っていた。

「それじゃ、楽しんできてね」

「あれ、鏡子さんは一緒に行かないんですか」

「まだ用事が残ってるね。花火が始まるまでには行けると思うから、夏海ちゃんは先に楽しんできてね」

「はい！ それじゃ、行ってきますー！」

「うん。いってらっしゃい」

手を振る鏡子さんに見送られながら、俺たちは花火大会の会場へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……すごい人ですね」

花火会場の漁港に到着してみると、この島にこんなに人がいたのかと思えるくらいの人が集まっていた。

朝から出ていた仮設ステージでは、様々な催しものが行われていた。花火までまだ時間があるし、あれで場を盛り上げるみたいだ。

そんなステージから少し離れた位置に、たくさんの出店が並んでいた。この夏、色々な出店を見たけど、これだけ一堂に会していると圧巻だった。

「羽依里さん、良かったら先にちよつとだけ、出店を見て回りませんか？」

「え、二人で？」

「です。皆さん、まだ来ていないみたいですし、先に出店の下調べしちやいましょう！」

言われてみれば、皆との集合場所とか決めてなかった気がする。会場はそこまで広くないし、出店を回っていれば、そのうち誰かに会えるかもしれない。

「そうだね。それじゃ、少しだけ一緒に回ろうか」

「はい！」

夏海ちゃんはそう言って、おもむろに俺の手を取ってきた。

「え、ちよつと夏海ちゃん？」

「……しろはさんが来るまでの、少しの時間だけでいいんです。駄目ですか？」

「いや、構わないよ」

俺は一瞬驚いたけど、優しく握り返してあげた。

「ありがとうございます！ それじゃ、行きましょう！」

……その後は、夏海ちゃんに半ば引つ張られながら出店を見て回る。

「羽依里さん、ワタアメを売ってますよ！」

「本当だね。買ってみる？」

「いえ！ 紬さんより先に手を出したら、なんだか恨まれそうな気がしますので！」

夏海ちゃんはそう言って笑う。確かに、ワタアメの恨みは恐ろしそうだ。

「あ、かき氷もあるね」

そんなワタアメの屋台の隣では、知らないおじさんがかき氷を売っていた。どうやら本土からやってきた人らしく、値段も島の駄菓子屋より高かった。

「かき氷……は、また後にしましょう！」

万一小じさんに聞こえた時のことを考えたんだろう。夏海ちゃんはそうはぐらかしていたけど、たぶん買わないと思う。この夏、毎日のように食べていたし。

ワタアメやかき氷の他にも、やきそば、たこ焼き、ベビーカーステラ、焼きもちこし……食べ物屋台だけでも、結構な数が出ていた。

「夏海ちゃん、お腹空いてたら先に何か食べる？」

しろはに言われた通り、俺たちも晩ご飯は食わずに出てきた。それなりにお腹は空いてるところに、これだけの屋台。これは目に毒だ。

「えつと、じゃあ……いい、いえ！ 食べ物は皆さんと一緒に食べた方が美味しいですし、後の楽しみに取っておきます！」

夏海ちゃん、耐えた。でも、確かに皆と一緒にの方が何倍も美味しいだろうし、俺もここは目星をつけるだけにしておこう。

「あ、射的がありますよ！」

「本当だね。これ、後で鷗とのみきを対決させたら面白そうだね」

「そうですね！」

俺たちは食べ物の誘惑から逃れるように、それ以外の出店を見て回ることにした。

会場に出ているのは、射的に輪投げ、金魚すくいにヨーヨー釣り……全てこの夏に、どこかでやったことがあるものばかりだった。

金魚すくいとカ腕に覚えがあるし、後で皆と一緒に挑戦してみるのも面白いかもしれない。

「あ、いたよ！」

「おーい、羽依里！ 夏海ちゃん！」

金魚すくいの屋台を見ながらそんなことを考えていると、人ごみをかき分けて皆がやってきた。

「あ、皆来たのか」

「皆さん、こんばんわです！」

「よもや、集合場所を決め忘れるとはな……探したぞ」

手に持ったうちわで自身を扇ぎながら、先頭のみきがため息混じりにそう言う。そんな彼女は薄桃色の生地には、無数の桜が散りばめられた浴衣を着ていた。

「おお、のみきの浴衣は可愛らしい感じだな。似合ってるぞ」

「そ、そうか？ 少し子供っぽいかと心配したんだが、そうか。似合っているか」

のみきはすごく嬉しそうにしていた。そしてさすがに、今日はハイドロは背負っていないみたいだ。

「羽依里、私は？」

そんなのみきの横から顔を出し、鷗も笑顔で浴衣の感想を聞いてきた。

鷗の浴衣は白地の上に、紫色のアサガオが散りばめられていた。鷗の髪色と相まって、すごく映える気がする。

「似合ってるんじゃないか。鷗にしては」

「むう、最後の一言が余計なんだけど」

「鷗、羽依里はね、きつと女の子に囲まれて照れてるのよー」

「ぜ、全然そんなことはないぞ」

「そう言う割には、目が泳いでますけど。ほら、ちゃんとこっちを見てください」

そう言っただけからさまに寄ってくる蒼と藍はそれぞれ、青色と藍色の浴衣を着ていた。この二人、本当にこの色が似合うよな。

「相変わらず、タカハラさんはモテモテですね！」

そんな二人に続いて、目の前に金髪の少女が現れた。

「えーつと、どちらさまっ？」

「むぎゆ!? 紬です！ 紬・ヴェンダースです！」

よく見てみると紬だった。緑色の浴衣を着て、髪を下ろしているせいか、いつもと雰囲気全然違っていた。

「紬さん、その浴衣、すごく似合ってます！」

「ありがとうございます！ ナツミさんもよくお似合いです！」

二人は手を取り合いながらお互いの浴衣を褒め合っていた。この二人も、本当に仲が良いよな。

「紬も一生懸命浴衣を選んでいたもの。良かったわね」

「はい！」

そう言う静久は、黒地に大きな白い花の模様が入った浴衣を着ていた。あの花、月下美人って言うんだっけ。なんというか、艶やかだった。

「……紬が着付けをした時、だいぶ目立たない様にしたらしいけどよ……相変わらず、すごい迫力だよな」

「何の話だ。俺はもう、ベビーカーステラしか頭にないぞ」

そう言う天善は、あからさまに静久から視線を外していた。何の話をしているかは、大体見当がつくけど。

ちなみに、良一と天善の二人は甚兵衛を着ていた。こうして見ると、普通の格好をしている俺の方が浮いてる気がする。

「……まったく、羽依里も言ってくれたら甚兵衛用意したのにおじーちゃんのだけど」

「いや、あの人の甚兵衛だと想像するだけで、身体が勝手にスクワットを始めそうだから」

そう口にしなから、声がした方を見る。そこにいたしろはを見て、俺は息を呑んでしまう。

「おお……」

しろはは白地に菖蒲の柄が入った浴衣だった。シンプルだけど、本当に似合っている。

「やっぱり、しろはには白が似合うよな……」

「そ、そう……？」

しろはは右手で自分の髪を触りながら、どこか恥ずかし気に首をかしげる。そんな仕草でさえ、すごく魅力的だった。

「ほらほら、二人だけの世界に入るのは、せめて花火が始まってからにしてくださいね」

俺たちの方をジト目で見ながら、藍が先頭に立って歩き始めた。そ

れに続くように、皆も歩き出す。

「ところで天善、帯にうちわを差してるのならわかるけど、なんでラケットなんだ？」

歩き出してすぐ、隣の天善の格好が気になったので、そう聞いてみた。

「それはもちろん、卓球部だからだ！」

帯からラケットを抜き放ち、ビシッとポーズを決める。予想通りの返答だった。

「天善君、相変わらずだね」

「天善ー、人混みの中でそんなもの振り回したら危ないわよー」

「バカなことやってると、置いていきますよ」

女性陣はそう冷たく言い放ち、すたすたと先に歩いていく。確かに時間も惜しいし、気を取り直して皆で出店を楽しもう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

まずは腹ごしらえをしようという話になり、全員で食べ物の屋台を巡ることにした。

先に夏海ちゃんと下見をした通り、焼きそばにたこ焼き、フランクフルトにアメリカンドッグ、焼きとうもろこしと、色々な屋台が出ている。どれにしようかな。

「蒼ちゃん、チョコバナナ売ってますよ。さっそく食べましょう」

「いいわねー」

そんな中、空門姉妹は一番にチョコバナナを買っていた。先陣を切って歩き出しただけあって、さすがに行動が早い。

「しろしろ、りんごあめ食べよう！ りんごあめ！ 奢ってあげるよ！」

「え、ええ……!?!」

続いて鷗がしろはを引っ張っていき、一緒にリング飴を買って

た。それにしても、鳴ってすぐりんご飴が似合うよな。

「俺は何にしようかな……」

皆が思い思いに屋台を覗き込み始めたし、俺も何か食べないと。

「羽依里、悩むより先に買った方が良いぜ？」

そう言う良一は右手に焼きもろこし、左手に焼き鳥を持っていた。いつの間にも買ったんだらう。

「こういう時はしっかりと食つとかないとな」

「ああ、人気の店だと行列ができて、すぐ売り切れてしまうぞ」

隣に立つ天善は牛すじ煮込みと、大量のベビーカステラの入った袋を持っていた。

「ベビーカステラはわかるが、牛すじ煮込み？」

「この島ではよく見るんだが。余所にはないのか？ 美味しいんだぞ」

そう言うて器を差し出してくれたので、一口貰って食べてみる。おお、確かに美味しい。

「蒼ちゃん、あっちにクレープがありますよ」

「美味しそうねー。藍、買っちゃう？」

もうチョコバナナを食べ終わつたんだらうか。空門姉妹は続いてクレープの屋台へと足を運んでいた。

「いらつしやいませー。おススメはプリンセスクレープですつー！」

「今ならクレープを買ってくれた人に、もれなく竜太サンドがついてくるよー！」

「ストロベリースペシャルを二つください。竜太サンドは全力で拒否させてもらいます」

「あんた鬼つつスね！」

屋台でクレープを売っていたのは、以前本土で見た兄妹だった。あの二人、よく島に来るよな。

それにしても、あの姉妹は甘党なのかな。よく甘いものばかり食べられるな。

「島の皆って普段節制してるイメージがあるからか、こういう時って羽目を外すよね」

「ふあい？」

苦笑いしながら後ろの夏海ちゃんに声をかけてみると、鷗と一緒に焼きもちを食べていた。

「やつふありおみやふりっていつふあら、ふおれだね！」

「鷗、言いたいことはわかるけど、きちんと飲み込んでから喋ろうな」
鷗は焼きもちにかじりつきながら、反対の手にフランクフルトを持っていた。リンゴ飴はもう食べ終わったらしい。

「やつぱり、これだけお店がたくさんあると、目移りしてしまいますね」

焼きもちを食べながら、夏海ちゃんがそう言う。確かにこれだけお店があると、悩んでしまうよね。

「ふふ。夏海ちゃん、そんな時は皆で分けて、少しずつ食べればいいのよ」

「そですよ！ ナツミさん、タコヤキをどうぞ！」

声が出た方を見ると、笑顔の袖がたまようじに刺したたこ焼きを夏海ちゃんに差し出していた。

「それでは、ひとついただきます！ あちち……」

そのたこ焼きを夏海ちゃんが飛びつくようにして食べる。すごく熱そうだった。

「んー、熱いですけど美味しいです！」

「それは良かったです！ タカハラさんも、どうぞ！」

「え、ああ。ありがとう」

俺も夏海ちゃんに続いて食べてみる。うん、確かに熱いけど、サクふわの生地にソースと青のりの風味が効いていて美味しい。

「ほら、こうすれば色々なものが食べられるしね。はい、のみきちやん」

「ああ、すまないな」

静久はそう言いながら、のみきとお好み焼きを分けて食べていた。あれも美味しそうだな。

その後も皆で出店の間を練り歩く。

「あ、このバター焼きって美味しいですね」

「でしょ。私のオススメなの」

夏海ちゃんはたこ焼きの後、しろはからバター焼きを買っていた。ところでバター焼きって、なんのバター焼きなんだろう。

「できたぜ。ありがたく受け取りな。お前にネオレインボー」

そして、のみきはワタアメを買っていた。サングラスをかけた怪しげな店主が見事な七色のワタアメを作っていたけど、あの人、どこかで見たとあるような。

「んむ。変わった味だな」

「あの、ノミキさん、一口だけ味見させてくださいー！」

直後、鳥白島一のワタアメテイスターである紬が食いついていた。

「ああ、こつち側なら口をつけていないから、ちぎってくれて構わないぞ」

「のみきさん！ 私も少し食べたい！」

食べ物匂いを嗅ぎつけたのか、鷗も飛来していた。本当によく食べるな……。

「……って、俺もそろそろ自分で買わないと」

さつきからもらってばかりだし。女の子たちは色々なものを分けて食べてる感じだったけど、男としてはこう、がつつりお腹に溜めたかった。

……そんな折、目の前でジュージュューと焼かれている焼きそばがとても魅力的に映った。

「すみません。焼きそば一つください」

「はいよ。まいどありー」

俺はそのソースの香りに負け、速攻で焼きそばを買ってしまった。

さすがにパックに入った焼きそばを食べ歩きするわけにはいかなかったなので、皆に一声かけてから、適当なベンチに腰を下ろして食べることにした。

「……うん、うまい。なんで屋台のやきそばって美味しいんだろうな」

「……家で作る時と違って、火力の高い鉄板を使ってるからね。余計な水分が飛んでソースが良く絡むから美味しいんだよ」

いつの間にかしろはが俺の隣に座っていて、そう教えてくれる。

「あとは、鉄板で麺が焼ける音とか、ソースの香りとか。お祭りの雰囲気だね」

「ああ、やっぱりそういうのあるのかな」

「ずるずると麺をすする。家でも使ってそんな普通の中華麺なのに、不思議と美味しい。」

「そうだ。せっかくだし、しろはも食べてみるか？」

「え？」

半分ほど食べたところで、しろはにそう提案してみる。

「ほら、今後の食堂メニューの研究にさ」

「うちの食堂、鉄板を置く予定はないんだけど……」

「まあ、そう言わずに。美味しいから」

「そ、それじゃ、少しだけね」

俺の押しに負けて、しろはは俺から焼きそばの入ったパックと割り箸を受け取ると、少しだけ口に運ぶ。

「……うん。美味しいね」

「だよな。不思議と美味しいんだよ」

「でも、使うソースの種類を変えればもっと深みを出せそうなんだけど。他にも、何か足りない気がする……」

ぶつぶつ言いながら、もう一口、もう一口と口に運ぶ。なんだろう、料理人としての研究心に火がついてしまったんだろうか。

「島の焼きそばなんだから、せめて海産物は入れないと……」

その後もなんだかんだ言いながら、残りの焼きそばは全てしろはが食べてしまった。

「……あ、ごめん。少しだけって言いながら、全部食べちゃった」

「いいよいいよ。今度、食堂のメニューが増えるのが楽しみだな」

「だから、増えないからね……」

思わず完食してしまったからだろうか。空っぽになったパックを近くのゴミ箱へ片付けながら、しろはが恥ずかしそうにそう言っていた。

そして、しろはがベンチから立ち上がった拍子に、食べかけのリン

ゴ飴が袋に入ったままベンチに置かれているのに気がついた。

「あれ？　しろは、リンゴ飴食べないの」

「うん。鵬に貰ったけど、ちよつと多くて。羽依里の焼きそばは私が食べちゃったし、良かったら食べていいよ」

「それじゃ、遠慮なく」

ちよつと焼きそばの脂っこさを消したかったし。俺はリンゴ飴を袋から出して、一口かじってみる。

「……おお、甘酸っぱくてうまいな」

「でしょ」

俺はリンゴ飴を食べながら、目の前を行く人々を眺める。

見た感じ恋人っぽい二人組に、孫を連れのおばーちゃん、友達同士で本土からやって来ているらしい人たちと、色々な人たちが行きかっていた。

年齢も出身もバラバラだったけど、皆揃って笑顔だった。

「……やっぱり、祭りの雰囲気って良いよな」

「そうだね」

それからしばらくの間、しろはと二人で祭りの喧騒に耳を傾けていたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

あらかたお腹が膨れた後は、今度は食べ物以外の屋台を見て回るこ
とになった。

「あ、射的がある！　のみきさん、勝負しよう！」

そして射的の屋台を見つけた鵬が、のみきを誘っていた。

「ほう、鵬は腕に覚えがあるのか？　いいだろう。返り討ちにしてやる」

「面白そうですね。私も混ぜてもらっていいですか？」

そんな鵬の挑戦を受けたのみきが続いて、藍も参戦していた。のみ

きや鷗の実力は知ってるけど、藍って射的得意なんだろうか。

「お嬢ちゃんたち、挑戦するかい？」

「ええ、三人分お願いします」

「よっしゃ。景品は完全に落とさないとあげないからね」

「わかっています。一番高そうなのは……あのブルジョワクッキーですね」

俺がそう考えている間にも、景品の前に三人が横並びとなり、コルク銃を構えていた。

「よし、二人とも、勝負だよ！」

「ああ、悪いが勝負にならないぞ」

「ふふ。お二人とも、あとで吠え面かかないでくださいよ」

……その後、コルク銃の音と店主の絶叫が響き渡った。三人が三人とも、すごい射撃の腕だった。これは、店主も相手が悪かったとしか言えない。

「……あら、金魚すくいがあるわね」

射的の屋台を後にして、しばらく歩くと、今度は静久が金魚すくいの屋台を見つけた。

「紬、やってみない？」

「そうですね！ ナツミさんも一緒にやりましょう！」

「はいー！」

そんな紬に誘われて、夏海ちゃんが意気揚々と屋台へと向かう。かつて、港に出ていた伝説の金魚すくい屋でボスと戦ったメンバーだ。今更、普通の金魚で相手になるはずがなかった。

「な、なあ、お嬢さんたち……そろそろそれくらいで勘弁してくれねえか」

案の定、ものの数分と経たないうちに大量の金魚が捕獲されていた。

「夏海ねーちゃん、なかなかやるなー」

よく見ると、三人以外にも何人か島の子供たちがいて、金魚を乱獲していた。

一方で、店番のおにーさんは笑顔を引きつらせていた。悪いけど、この人も島民を甘く見ていたみたいだ。

「よーし、今度は型抜きだよ！」

「いや、懐かしいな」

「でもこれ、意外に難しいんだよ……あ」

「あっちゃー、あたしも割れちゃった……」

今度は鴟に誘われる形で、俺としろは、そして蒼の三人で型抜きに挑戦していた。子供の頃に比べて手が大きくなってるせいかな、すごく難しく感じる。予想はしていたけど、手先の器用な鴟の圧勝だった。ちなみに紬たちが大量にすくった金魚だけど、鴟がシーウツキーと一緒に飼うとか言って預かっていた。シーウツキー、金魚に食べられそうで心配だ。

「くっそー！ またハズレだ！」

「特賞の人生ゲームまでとはいかなくとも、せめてミニラジコンくらいは当てたいところだが……」

そんな俺たちと道を挟んだ向こう側で、良一と天善はくじ引きに挑戦していた。

声を聞いた限り、結果は芳しくないみたいだ。ああいうのって、実際には当たりくじが入ってないって噂を聞いたことがあるけど、どうなんだろうか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

まるでこの夏を凝縮したみたいな楽しい時間はあつという間に過

ぎ去り、いよいよ花火の時間が近づいてきた。

まもなく花火が始まる旨を伝えるアナウンスが流れる中、人々が移動を始めていた。

「俺たちも早く行かないと。良い場所が無くなっちゃいそうだし」

「……あ、羽依里。私たちはこつちだよ」

「え？ そつち？」

花火会場の方へ移動しようとしていると、しろはが人の流れとは別の方向を指差す。

「こつちに私の秘密の場所があるの。そこからなら、きっと綺麗な花火が見えるよ」

「え、そんな場所があるのか？」

「うん。特別に皆にも教えてあげる。ついてきて」

そう言つて笑顔で歩き出したしろはを、俺たちは慌てて追いかけた。秘密の場所つて、どういうことだろう。

しろはの言う秘密の場所は、漁港から浜辺の道に沿って海岸線を少し歩いたところにあった。舗装された道の先に低めの防波堤があり、その向こうには砂浜が広がっている。

「本当の秘密の場所はあの砂浜なんだけど、さすがに夜は足を取られて危ないから、ここにしようね」

そう言つて防波堤の前で立ち止まる。メインの花火会場からだいぶ離れたせいか喧騒も遠く、マイクの声も小さい。

その代わり、無数の虫の音と、静かな波の音が聞こえる。

「こんな場所があつたんですね」

夏海ちゃんが周囲を見渡しながらしみじみと言う。

「ここはね。普段から私のお気に入り場所なの」

「そうなのか」

夜ということもあつて、防波堤以外に目につくものはない。しろはの口ぶりから察するに、景色とは別に思い入れがある場所なのかもしれない。

「小さい時におとーさんに教えてもらったんだよ。島の花火を見る時は、ここからだとすぐ綺麗なの」

……なるほど、父親との思い出の場所なのか。それなら納得だ。

むしろ、花火を見るためにそんな大切な場所を俺たちに教えてくれたしろはに感謝しないと。

「ここならちょうど位置に防波堤もあるし、寄りかかれば花火も見やすいわ」

「本当よねー」

そんなことを言いながら、俺たちは防波堤に沿って一列に並ぶ。

「しろはちゃんは羽依里さんの隣に行つて、こつそりんと手をつなぐといいですよ」

「繋がらないしー！」

藍からそう言われ、俺たちは思わずハモリながら否定する。さらつとなに言ってくれちゃってるの。

「そうだ夏海ちゃん、私と羽依里の間に入つたらいいよ」

「うんうん。夏海ちゃん、それがいいよ」

なんとも気恥ずかしい気分になり、俺としろはは一緒に夏海ちゃんを呼ぶ。

「い、いえ。そこは私が入っちゃいけない気がしますし、こつちにお邪魔します！」

夏海ちゃんはそう言うと、一番端……俺の右側に落ち着いた。そんなに動揺しなくてもいいのに。

結局、左奥から順に、良一と天善、のみき、鷗、空門姉妹、紬と静久が続き、しろは、俺、夏海ちゃんと並ぶ形になった。

「そうだ。ここは静かだし、花火の前に皆に話があるんだ」

その時、のみきがそう言いながら俺たちの顔を見る。話つて何だろう。

「明日の19時から、食堂で鷹原と夏海ちゃん、そして鷗の送別会をやると思う。ぜひ参加してくれ」

「え、送別会とかやってくれるのか？」

「ああ、お前たちもすつかり島の一員だ。夏休み最終日になると色々

と忙しいだろうから、明日が最適と思つてな」

「ありがとう、嬉しいよ」

「のみきさん、ありがとう！」

「ありがとうございますー！」

「お、お礼なら皆に言つてくれ。発起人は蒼だし、場所を提供してくれたのはしろはだ」

俺たち三人からお礼を言われ、のみきが明らかに照れていた。

「皆も。ありがとうな」

「気にしなくていいわよー」

「なんだかんだ理由をつけて、皆騒ぎたいんですよ」

「そういうことだね」

他の皆もそう言つて笑う。まさか、送別会までしてもらえるなんて。これはまた、明日の楽しみができた。

「……あ、そろそろ始まるよ」

しろはがそう言うと同時に、俺たちは一斉に夜空を見上げる。

……直後に、夜空を覆い尽くすような巨大な菊型花火があがった。

それを皮切りに、赤や緑、黄色の花火が次々に花開いていく。

「おお、思った以上に本格的なんだな」

小さな島の花火とは思えない。これはすごい。

「すごいでしょ」

「ああ、すごく綺麗だ」

心なしか、隣のしろはも嬉しそうだ。花火と同じように色を変える顔が笑っている気がした。

「それにね。綺麗なのは花火だけじゃないよ。海も見てみて」

「え、海？」

俺はしろはに言われるまま、眼下の海に目をやる。そこでは花火が炸裂するたび、不思議な青い光が放たれていた。

「え、なにあれ」

「ウミホタルだよ」

……ウミホタル。確か、刺激を受けると光る水棲の虫だっけ。たぶん、この花火の音や振動に驚いて光を放ってるんだろう。

原理は知ってるけど、ものすごく、幻想的だった。

「綺麗ですね……」

右側の夏海ちゃんもうっとりした表情で頭を上下させていた。その動きが滑稽だったけど、そうしたい気持ちも分かる。

まるで花火と連動して動く仕掛けでも海の中に施されているかのように、花火とウミホタルが見事にシンクロしていた。

「ウミホタルも毎年光るわけじゃないんだよ。今年はラッキーだったね」

そう言つて微笑むしろはの手を、俺はそつと握る。

しろはは一瞬驚いていたけど、そのまま優しく握り返してくれた。俺もそれを確認して、再び花火へと視線を戻した。

その後も菊や牡丹、柳と言つた定番の花火が次々と打ち上げられる。見慣れた花火のはずなんだけど、迫力が全然違つていた。のびが言つていたように、花火との距離が近いんだろうか。

「絢、今の花火、綺麗だったわね」

「はい！ それに、すごく変わっていました！」

「あの花火は千輪菊っていうのよ」

……その時、一風変わった花火が上がった。静久の説明によると、無数の小花が咲き乱れるタイプらしい。小さな花の一つ一つの色が違つて、すごく綺麗だった。

やがて花火も後半に差し掛かると、時折変わった形の花火が混ざり始めた。静久によると、あれは『型物』と呼ばれる花火らしい。

ところで、なんで静久は花火の種類に詳しいんだろう。美術系の大学だと、そういうのも学ぶんだらうか。

「すごく綺麗だねー」

「本当よねー」

空門姉妹は鷗と一緒にスーツケースに腰を下ろしながら花火を見

ていた。あのスーツケースに三人座るとか、明らかに定員オーバーだ
と思うけど。

「おお、今のはもしかして、スーツケース型の花火!?!」

その時、これまた変わった花火が打ち上げられた。思いつきり四角
かったし、まさかのスーツケース花火なんだろうか。

「あ、今のつてもしかしてかき氷?」

続いて、緑色と赤色のかき氷型の花火も打ち上げられていた。本当
にバラエティーに富んでいるな。

「そういえば、この島の花火は手出しする金額によって、メッセージ付
きの花火とか作ってもらえましたね……これは来年に向けて、資金を
貯めておかないといけませんね」

「ちよつと藍、どんなメッセージ入れるつもりよ——!?!」

スーツケースに座ったまま、空門姉妹がすごく楽しそうにしてい
た。藍の言うメッセージ付き花火、俺も少しだけ興味あるんだけど。

「……げ、スイカだ!?!」

「ほう。ピンポン玉の花火とは、担当の花火師も相当な卓球好きなん
だな」

その時、新しい型物花火が打ち上げられていた。ちなみに天善、
さっきの花火はピンポン球じゃなく、スマイルマークだから。

俺はそんな皆の様子を横目に見ながら、空と海にまたがって幻想的
に咲き乱れる花々に見入っていたのだった。

途切れることなく上がっていた花火が一旦止み、向こうの会場の方
では何やらアナウンスがされていた。いよいよフィナーレらしい。

「例年通りなら、最後はスターマインだね」

名前は聞いたことがある。静久によると、速射連発花火のことらし
い。仕掛け花火の一種で、短時間に数十〜数百発の花火を立て続けに
打ち上げるんだとか。

「あ、始まりました!」

……そんなことを考えていると、間の長い大きな花火が三つ同時に

打ち上げられた。

それらはひととき大きな笛の音を鳴り響かせながら、やがて遙か上空に届き、無数の花を咲かせる。

「おおお、これはすごい」

最後だけあって、気合いが違う。花火の色が次々と変化して、大小様々の花が天空に咲き乱れる。まるで夜空全体を花火が埋め尽くしていくみたいだ。

実際は僅かな時間なんだろうけど、すごく長い時間花火が続いているような、そんな錯覚にとらわれていた。

……最後の花火が散ったあとも、俺たち全員が余韻に浸り、誰もが無言だった。

少しの間を置いて、漁港の方から拍手が巻き起こる。

「……予想以上にすごい花火だったね。夏海ちゃん」

「はいー」

「最後のスターマインとか、まるで……」

俺はそう感想を口にしながら、弾んだ声をあげる夏海ちゃんの方を見やって……息を呑んでしまった。

「な、夏海ちゃん……？」

「……へ？」

……夏海ちゃんの身体が透けて、向こうの景色が見えていた。

「その、夏海ちゃんの身体がさ……」

俺はなんと表現していいのかかわからず、夏海ちゃんを指差しながら言い淀む。

「え、身体……？」

そこまで言われて、夏海ちゃんは自分の両手を見やる。

「……!？」

……そして、ようやく自分の身に起こっている異変に気がついたらしい。

「うそ……もう？ そんな、早すぎ……」

夏海ちゃんは何かやら眩きながら、透けた自分の手を見て、わなわなと震えている。

「あ、あのー！ 羽依里さん、私……！」

そして驚愕した表情のまま俺の方に向き直って、ほとんど叫ぶような声で何かを伝えようとするけど……俺に聞き取れたのはそこまですだった。

……次の瞬間、夏海ちゃんは無数の光の蝶となって霧散してしまった。

俺は反射的に手を伸ばしたけど、何も触れることはなかった。

「え、ちよつと」

俺は目の前で起こった出来事が信じられなくて、思わず夏海ちゃんが立っていた場所に駆け寄ってみるけど、その姿はどこにもなかった。

「夏海ちゃん……？」

俺はもう一度暗闇に目を凝らしてみるけど、目の前には背の低い防波堤が続いているだけで、隠られるような物陰はない。

まさかと思つて防波堤の向こうも見てみたけど、砂浜が広がっているだけだった。

——夏の終わりを告げる花火。すごく綺麗なんだよ。

俺は今更ながら、先日の食堂でしろはが言っていた言葉を思い出していた。

——夏が終わったら……たぶん、存在を保てなくなって、消えちゃうんじゃないですかね？

そして、その帰り道に夏海ちゃんが言っていた言葉も。

……夏の終わりを告げる花火。それは夏と同時に、夏海ちゃんとの別れも意味していたんだろうか。

それにしたつて、こんな突然に？

「今年の花火もすごかったわねー」

その時、俺は蒼の良く通る声で我に返った。

「ああ、今年の花火は例年以上に気合が入っていたな」

「……ところで羽依里、さつきからどうしたの？」

キヨロキヨロと周囲を見渡していた俺を變に思ったのか、しろはが声をかけてきた。

「いや、その……夏海ちゃんが消えちゃったんだ」

俺はうまい言葉が見つからず、ありのままにそう答えるしかなかった。

「え、誰がいなくなったの？」

「だから、夏海ちゃんだよ」

「……夏海ちゃんって誰？」

「……え？」

そして、続くしろはの言葉に、俺は言葉を失った。

「……えっと、冗談だよな？」

俺は皆の顔を見してみる。全員が一様に戸惑うような視線を俺に向けていた。皆がしろはと同じ心境だということは、その表情を見ればすぐに理解できた。

——それでたぶん、消えたら忘れられちゃうんですよ。

存在が消えたら、皆の記憶からも消える……夏海ちゃんが言っていた言葉の意味って、そういうことだったのか？

「……ははあ。さては羽依里、出店を回ってるときに女の子の知り合いでもできたんだな」

「え、それってもしかして、不倫!？」

「しろはちゃん、これは修羅場ですよ」

良一が口火を切り、それを空門姉妹がはやしたてる。皆が無理矢理にでも場を和ませようとしてくれるのがわかった。

「いや、そのさ……」

俺も自分で混乱しているのがわかる。まさか、目の前で——ちゃんが消えちゃうなんて。

「……あれ？」

俺はなんとか弁解しようとして……言葉に詰まる。あの子の名前が出てこない。

……変だな、さつきまで覚えていたはずなのに。

「えっと、その」

そして気がつけば、自分が何に必死になっていたのかさえ分からなくなっていた。

「羽依里、本当に大丈夫？」

しろはが心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「あ……ああ。大丈夫だよ。心配かけてごめん」

「……まったく、羽依里さんはどさくさに紛れて、お酒でも飲みましたか？ ほら、花火も終わりましたし、帰宅ラッシュに巻き込まれる前に帰りますよ？」

場の空気が和んだのを感じたのか、藍がそう言って歩き出した。まさか、この島で帰宅ラッシュなんて言葉を知るとは思わなかった。

「そ、そうだな。藍の言う通り、早めに帰り支度をした方が良く。花火の後は観光客を港へと運ぶため、たくさん臨時バスが出るんだ。普段より格段に交通量が増えるから、危ないぞ」

「俺もこのテンションのまま徹卓に入りたいところだな。鷹原も一緒にどうだ？」

「いや、俺は遠慮しておくよ……」

各々の理由を口にしながら、皆が住宅地へ向けて歩き出した。俺も心のどこかにしこりのようなものを感じながら、帰路に就いたのだった。

第四十七話・完

第四十八話 8月30日

……朝。

不思議と早い時間に目が覚めた。

「……なんでこんな早く起きたんだろう」

背伸びをした後、閉まっていたふすまを開け放つ。

……強い陽射しと、それに負けなくらい元気な蝉の声が飛び込んできた。

「……うん。今日もいい天気だ」

布団を畳んで、身支度をした後、あくびを噛み殺しながら玄関へと向かう。

「羽依里君、おはよう」

「あ、おはようございます」

ちようと外に出ようとしたところで扉が開き、鏡子さんが入ってきた。

「こんな時間にどこか行くの？」

「はい。ちよつとラジオ体操に……」

「え？」

そこまで言つて、気がついた。この夏のラジオ体操は何日も前に終わったんだつた。

「……羽依里君、寝ぼけてるのかな？」

「いえその、ちよつと散歩に行つてきます」

勘違いしてしまったのが恥ずかしくて、俺は苦笑いを浮かべながらそう答える。スタンプカードにまで手を伸ばしてるし、習慣つて怖い。

ところで、なんでスタンプカードが二枚もあるんだろう。しろはのを預かってたつて。

「そうだ。外に行くんなら、港の方で朝ごはん買つて来たら？ 早い時間から開いてる商店もあるし、総菜パンくらいなら売つてると思う

から」

「わかりました。行ってみます」

俺は鏡子さんの提案に頷いて、散歩がてら港へと向かうことにした。

朝もやが残る住宅地を抜けて、田舎道を歩く。まだ涼しいし、気分も清々しい。

「……それにしても、なんか静かだよな」

いつもはこう、もつと賑やかだったような。何か物足りないような、変な感じだった。

20分ほど歩いて港に到着すると、さっそく商店に立ち寄って総菜パンを買う。

その時、店番のおじさんに『兄ちゃんがパンを買いに来るなんて珍しいねえ』とか言われた。いつもここで買った気がするんだけどな。

一方、船着き場の方はやけに賑やかだった。ちようど始発の船が着いたばかりらしく、本土から島に働きに来たらしい人たちが自転車やバイク、送迎のバスに乗って、島中に散っていくところだった。

俺たちのように夏休みがある学生と違って、働く大人たちは大変そうだった。

「あれ、羽依里?」

そんな人の流れを眺めていると、鷗から声をかけられた。

「おはよー。奇遇だねえ」

「おはよう……珍しいな。鷗も朝食の買い出しか?」

「そうだけど……羽依里がここにいる方が珍しいよ?」

「あれ? そうだっけ」

「うんうん。羽依里、いつも朝は家で自炊してたでしょ?」

「え、自炊? 俺が?」

自慢じゃないけど、鷹原家……もとい、加藤家の人間が作る料理は料理と呼べるものじゃない。その血をがつつりと受け継いでいる俺が自炊できるはずがない。

「まあ、それはそれとして……羽依里、ここで出会ったのも何かの縁だと思っただよ」

鴫はそう言いながら、目の前でちよこん、とスーツケースに腰掛けて、上目遣いで俺を見てくる。

「……みなまで言うな。押せばいいのか？」

「ありがとう。羽依里イズいいやつ！」

「まあ、俺も買い出しは終わったしな……それじゃ、出発するぞ」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……というわけで、港で鴫と出会った俺は、その鴫が乗ったスーツケースを押しながら田舎道を進んでいた。

「で、どこまで送ればいいんだ？」

「役所の前までお願い」

「わかった。役所だな」

帰る道すがらとはいえ、港から役所までは結構な距離がある。朝食前の運動にしては地味にきつい。

「……こうやって羽依里にスーツケース押してもらえるのも、この夏は最後なのかな」

「え？」

汗を流しながら無心でスーツケースを押していると、鴫が前の方を向いたまま、そう呟いていた。

……そういえば、俺と鴫はこの夏に初めて知り合ったんだっけ。

こいつは積極的な性格だし、島に溶け込むのも早かったから、ずっと昔からの知り合いみたいに感じていたけど。

「夏は最後まで、秋だろうが冬だろうが、いつでも押してやるぞ？」

「ありがとう。やっぱり、羽依里イズいいやつ」

俺がそう言うと、鴫は振り返ってとびきりの笑顔を向けてくれた。

「……夏休みが終わったら、鴫も本土に帰るのか?」

「うん。次に島に来れるのは、早くても秋の連休かな。羽依里は夏休みの後も、ちよくちよく島に来るんでしょ?」

「いや、毎週しろはに会いに来たい気持ちはあるけど、さすがに夏の間ずっと滞在してたし、資金が底をついてさ。夏休みが終わったら、しばらくはバイトしないと」

「じゃあ、しばらく会えないんだ」

「そうなるな。静久も大学があるから、本土に戻るだろうし」

「……寂しくなるね」

鴫がそう言うと、本当に寂しい気がしてくる。ずっと会えなくなるわけじゃないのに。

「じゃあ、送られる者同士、今日の送別会は思いつきり楽しんじゃおうね!」

そう言つて、また笑顔になる。さつきは寂しそうな顔をしていたはずなのに。ころころ表情が変わる奴だな。

「まあ、最後のイベントだし。俺も楽しむことにするよ」

「うんうん。それが一番だよね!」

夏休みは明日まであるけど、移動とかで慌ただしくなるだろうし。実質、今日が最終日みたいなものだった。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

しばらくして、鴫は上機嫌に鼻歌をうたいだした。この歌、確かwithだったな。

その心地いいハミングに耳を傾けていると、やがて役所前に到着した。俺はそこで鴫と別れ、加藤家へと帰ることにした。

加藤家に帰宅すると、鏡子さんの姿はなかった。忙しい人だし、また出かけてしまっているんだろう。

とりあえず、朝ごはんにしよう。

俺は手を洗った後、居間に座って総菜パンを食べることにした。

「……うん。美味しい」

マヨネーズとコーンが乗ったパンだ。シンプルだけど、安定した味だった。

「美味しいけど……喉が渇く。むぐっほ」

朝からスーツケースなんて押したせいかな、無性に喉が渇いていた。俺は変にむせながら、麦茶でも飲もうかと冷蔵庫を開ける。

「あれ？」

すると、ちょうど目の前にラップのかかったチャーハンが置かれていた。なんでチャーハンが？

まあいいか。そこまで古いようには見えないし、お昼にでも食べる事にしよう。

俺はお昼ごはんの心配がなくなったことに安堵しながら、ドアポケットに入っていた麦茶を手にして、居間に戻ったのだった。

朝食を済ませた後、特にやることもないので、ぼーっとテレビを見ていた。

『ルピナスの種まきのポイントは、最初はポットで育てる事と、植える前の種は水に浸して、さらに傷をつける事だね』

「うーむ、わからない」

さすがに天王寺先生のガチの園芸には全くついていけず、俺はすぐにテレビを消して、仰向けにひっくり返る。

「……なんだあれ」

仰向けになった拍子に、天井近くを一匹の七影蝶が飛んでいるのが見えた。なんだろう。どこからか迷い込んだのかな。

「……それにしても、暇だ」

夏休みの最後って、毎年こんな感じだったっけ。なんだろう。すごく無駄な時間を過ごしているような気がする。

この夏休みも、これまででは何か違ったような。こう、毎日イベントがあった気がするし。

なんとなく、心がモヤモヤする。なんだろうこれ。

「……よし、でかけよう」

俺はそんな気分を吹き飛ばしたくて、思い切って身体を起こす。灯台や秘密基地に行けば、誰がいるかもしれないし。誰とも会えなくても、バイクで風を切って走れば、気分も晴れるかもしれない。思い立ったら、善は急げ。俺はバイクの鍵を手にして、ガレージへと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よう、二人とも」

「お、鷹原か」

「ちーつす」

「ポーン！」

海を見ながらバイクを走らせ、秘密基地へと向かう。その扉を開けると、良一と天善、そしてイナリがいた。

「イナリは今日もここで卓球をしていたのか？」

「ポーン！」

秘密基地の中に置かれた卓球台の前で、二人と一匹が向かい合っていた。

その脇に置かれたスコアボードを見ると、1―11。どうやら、二人は完敗を喫したらしい。

「そうだ。鷹原も来たことだし、昨日のリベンジマッチと行くか？」

「いいぞ。イナリ、今日は負けないからな」

「ポンポーン！」

何度かかかってきても同じ事よ！　と言っている気がした。俺は天善たちと並んでラケットを構え、イナリと対峙する。こんな夏があってもいいかもしれない。日本の夏、卓球の夏。

……昨日は三人がかりでも勝てなかったし、今日こそリベンジだ！

「くそっ、惨敗だ……」

「ちくしょー！ー！」

4ゲームほどやってみたものの、結果は俺たちの全敗。昨日の方がまだ良い勝負ができていた気がする。

「だめだ。卓球じゃイナリには勝てない。別の遊びをしよう」

二日続けてのこの体たらく。俺たちは完敗を認め、別の遊びをすることにした。

「おっ、このミニ四駆なんていいんじゃないか？」

秘密基地の中を見渡していると、隅の方に色々なおもちゃが詰め込まれた箱があった。その中に、懐かしい車のおもちゃがあった。

「確かそれは、俺が改造してやったマシンだ。チビモスタツシユモーターを積んでな」

天善が懐かしそうにそう言っていた。確かそれ、公式大会じゃ禁止だったモーターじゃなかったっけ。マシンを受け止めた時の、指を怪我しそうなくらいのパワーが魅力的だった記憶があるけど。

「こっちのマシンはタカジヨードツシユモーターを積んでるんだな。これも速かったよな」

タカジヨードツシユモーターは禁止こそされてなかったけど、カーブでコースアウトしてばかりでレースにならなかつた気がする。

「電池もすっかりと残っているみたいだな。さすが天善が作っただけある」

更にもう一台、同じようなマシンが出てきた。スイッチを入れてみると、これもしっかりと動く。

「よーし！・ さっそく走らせてみようぜ！」

そう言いながら一番に表に飛び出していった良一を追って、俺と天善も表に出ることにした。

「ポンポン」

俺たちがミニ四駆を空転させながら構えると、尻尾で器用にチエツカーフラッグを持ったイナリが横に立つ。

……どうやら、スターターを務めてくれるらしい。

「いくぜ！ 俺の夏の思い出たち！」

「イナリ、いつでもいいぞ！」

「ポーーーーン！」

イナリが勢いよくフラッグを振ったのを確認して、俺はマシンから手を離す。かつとべ、ハイリマックス号！

「……おお、結構速いな」

「当たり前だ。誰が改造したと思っている」

軽快なモーター音を響かせながら、俺たちのマシンは砂利道を疾走していく。その動きを見て、俺たちは年甲斐もなくはしゃぐ。中でも、天善は得意顔だった。

「……あ」

……直後、俺たちのミニ四駆は大きな石に乗り上げる。

そして俺たちが止める間もなく、三台のマシンはそれぞれ方向を変え、一台は山の中へ。残る二台は崖下へと転落していった。

「やはり、モーターが強力過ぎたか……」

「みたいだな……」

「お、俺の夏の思い出——！」

……呆然となる俺と天善の横で、良一は親友を失ったかのように泣き叫んでいた。ハイリマックス号。成仏してくれな。

その後、テンションが下がりまくった良一が帰ってしまったので、その場は解散となった。

童心に帰って遊んだけど、心のモヤモヤは晴れるどころか、さらに濃くなったような気までする。それこそ、夏休みが終わるのが寂しいんだろうか。

「……俺、まるで子供みたいだな」

まだお昼までには時間があるし、俺はまたバイクに乗り、灯台へ向

かうことにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おーい、紬―」

「むぎゆ！ タカハラさんです！」

灯台に着いてみると、いつもと同じように紬と静久がいた。

「パイリ君、ちようどいいところに来てくれたわ！」

「え、ちようどいいところ？」

静久は俺を見つけるや否や、笑顔で駆け寄ってきて、デッキブラシを渡してくる。

「これは？」

「実は、今日はシズクと二人で灯台の大掃除をしていたんです！」

「していたのよ！」

「大掃除……」

言われてみると、二人は何故か水着姿で、その傍らにはバケツや石鹸、雑巾が置かれていた。

「夏の間、この灯台にもお世話になったし、最後に綺麗にしてあげようかと思ってね」

「ああ、そういうこと」

「ところがですね。室内の掃除が終わって、いざ壁をきれいにしようと思つたら、重大なことに気がついてしまいました」

「ええ。壁を掃除しようにも、私たちじゃ高い所が洗えなくて」

「……わかった。手伝うよ」

だいたい話の流れは理解できた。俺は受け取ったデッキブラシを握りなおして、そう答える。皆で宿題をしたり、パリングルス工作大会を開催したりと、灯台は何度も使わせてもらったし。少しは恩返しをしないと。

「そう言ってくれると思っていたわ！ 頼りにしてるわよ。パイリ

君」

静久はそう言いながら、どこから用意したのか脚立を灯台の壁に立てかけていた。俺は石罅の泡をつけたデッキブラシを持って、その脚立に登る。

「それではタカハラさん、わたしが水をかけるので、思いっきりこすっちゃってくださいー！」

「ああ、いつでもいいよ」

俺は頭上高くにデッキブラシを構えて、紬の放水を待つ。

「それでは、いきますよー！ー！」

……直後、紬の手にしたホースから俺の頭上に向けて大量の水が放たれた。

「ぶわわわっ!?!」

……当然、勢いよく出てきた水は壁に跳ね返り、下でデッキブラシを構えていた俺に襲いかかる。

「あ、パイリ君ー！」

「むぎゅ!?!」

紬が慌てて水を止めるけど、時すでに遅い。とっさに体を灯台に預けたので、脚立から落ちることはなかったけど、俺は全身ずぶ濡れになってしまった。

「タ、タカハラさん、大丈夫ですか!?!」

「う、うん。驚いたけど、平気だよ」

今更ながら、二人が水着を着ている理由がわかった気がする。壁に水をかけるんだから、濡れるのは当たり前だった。

「今日も暑いし、むしろ気持ちいいくらいだよ」

心なしかしよんぼりしている紬をそう慰めて、俺は目の前の壁を見つめる。

やっぱり、こうやって水で濡らしてみると、汚れているのが良くわかる。所々黒ずんでいたり、苔みたいなのが生えてるし。

……どれくらい落とせるかわからないけど、やれるだけやってみよう。

「よし。紬、もう一度水を出してー！」

「わ、わかりました。それでは、また出します！」

心なしか、紬はさつきよりは優しく放水してくれた。濡れることには変わりはないんだけど、そんな紬の心遣いが嬉しかった。

「……紬、そろそろ水を止めてー！」

ある程度水をかけてもらった後、俺がデッキブラシで壁を擦る。汚れが浮いたら、それを落とすためにもう一度水を流してもらおう。

壁がきれいになったのを確認してから脚立を動かし、紬には次の箇所水をかけてもらう。俺はその間に静久へデッキブラシを渡し、石鹸の泡をつけてもらう。

灯台の周りをぐるぐると回りながら、この作業をしばらく繰り返した。

「……ふう。こんな感じでどうかな？」

手が届く範囲だけだけど、たっぷり一時間以上かけて、念入りに掃除をした。

「そうね。だいぶ綺麗になったんじゃないかしら」

「はい！ これで、どこにオヨメにやっても恥ずかしくくない、立派な灯台になりました！」

元々真っ白な灯台だから、綺麗になったのが一目でわかる。そろそろ真上に来ようかとしている太陽の光を受けて、キラキラと輝いていた。

俺たちは掃除道具を片付けた後も、しばらく綺麗になった灯台を眺めていた。

……しばらくして、不意にお腹が鳴った。

腕時計を見てみると、ちょうど12時。そろそろお昼ごはんを食べに帰らないと。

「それじゃ、そろそろ帰るよ」

「はい！ タカハラさん、ありがとうございます！」

「パイリ君、ありがとうね」

笑顔の二人に見送られながら、俺はバイクにまたがる。

頭のとっぺんから足の先まですぶ濡れだけど、これだけ暑いし、加藤家に辿り着くまでにそれなりに乾いてしまうと思う。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「…………ふう、お腹空いたな」

加藤家に帰宅した後、すぐに手を洗って台所へと向かう。いつもなら一人寂しくカップうどんを食べるところだけど、朝見た限り、冷蔵庫にチャーハンが入っていたはずだ。

俺は冷蔵庫を開けて、チャーハンを取り出す。結構なボリュームだけど、卓球に掃除と身体を動かしてお腹も空いてるし、これくらいいけるだろう。

ラップをはがすと、フライパンを使って適当にチャーハンを温めなおす。

「…………まあ、こんなもんかな」

良い感じに温まったところで器に移し、それを持って居間へと向かう。

「それじゃ、いただきまーす」

座卓の前に腰を下ろし、きちんと挨拶をしてから、チャーハンをいただく。

「…………うん。美味しい」

ネギと卵だけのシンプルなチャーハンだけど、上品な塩気が効いていて、美味しかった。

それにしても…………このチャーハン、誰が作ったんだろう。

俺はチャーハンを一口ずつ味わいながら、そんなことを考える。

…………まず、鏡子さんじゃないと思う。俺を含めて、加藤家の住人は誰も料理ができないし。

「次に思い当たるのは、しろはくらいだけど……」
でも、しろはが作ってくれたにしては何か違うし。似てるけど、何か別の……情熱のようなものを感じるような……。

——えへへ、今日も自信作ですよ！

……一瞬、目の前の席に座る女の子の姿が見えた気がした。

「……夏海、ちゃん……」

続けて、自然にその名前が口からこぼれた。

「……どうして忘れてしまっていたんだろう」

それをきっかけにして、堰を切ったようにあの子との夏の記憶がよみがえってきた。

昨日の夜、夏の終わりを告げる花火とともに、俺の目の前で夏海ちゃんは消えてしまった。

同時に俺や、島の仲間たちの記憶からも。

あの子がいないから、朝から妙な違和感を感じていたんだ。

「……ごちそうさま。夏海ちゃん、美味しかったよ」

俺は誰もいない居間に向かって、静かにお礼を言っていた。
せつかく思い出したんだ。もう、忘れないようにしないと。

その後、俺は食器もそのままに、居間に座り込んで考えを巡らせていた。

——あ、あの！ 羽依里さん、私……！

消える直前、夏海ちゃんは何を伝えようとしたんだろう。

俺もどこかで覚悟はしていたつもりだけど……別れが唐突過ぎた。

しかも、俺を含めた皆に忘れられちゃうなんて。いくらなんでも可哀想すぎる。

……夏海ちゃんとは、もう会えないんだろうか。

「あ、羽依里君。帰ってたんだね」

その時、鏡子さんが居間にやってきた。

「あれ？ お昼、何か作ったの？」

まっさらになった皿を見て、そう聞いてきた。

「……ええ。おいしかったですよ。夏海ちゃんのチャーハン」

「……羽依里君」

俺は至って自然にそう返した。すると、その言葉を聞いた鏡子さんは驚いたように口に手を当てる。

「……良かった。思い出してくれたんだね」

その様子から察するに、何故か鏡子さんは夏海ちゃんのことを忘れていなかったみたいだ。

「花火の後、羽依里君一人だけで帰ってきたのに、全然気にしてない様子もなかったから、言い出せなかったの」

……昨日の夜、夏海ちゃんのことを完全に忘れてしまった俺を見て、鏡子さんはどんな心境だっただろう。

「……すみません。忘れてしまっていて」

「ううん。仕方のないことだよ。思い出せたことのほうが、奇跡みたいなものだからね」

鏡子さんは目頭を少しだけぬぐった後、笑顔で俺の方を見る。

「でも、鏡子さんはずっと夏海ちゃんのことを覚えてたんですよね？」
「うん。私も羽依里君ほどじゃないけど、あの子とは縁が深いから。それに、瞳からの手紙があるからね。まだしばらくは大丈夫だと思うよ」

そう言っただけで、どこからか手紙を取り出す。夏海ちゃんのことについて書かれた手紙。どうやら、肌身離さず持っているみたいだ。

「昨日の段階じゃ確信が持てなかったけど……羽依里君たちの記憶からも消えたってことは、やっぱり夏海ちゃん、七影蝶に戻っちゃったんだね」

「え？ 七影蝶に？」

鏡子さんが呟いた言葉を、俺は聞き逃さなかった。夏海ちゃん、消えたわけじゃないんだ。

「そうだよ。たぶん夏が終わったから、元の七影蝶に戻ってしまった」

の。きっとそのせいで、皆の記憶からも消えたんだね」

そういえば、夏海ちゃんは自分のことを七影蝶の集合体だと言っていた。きっと存在できる『時間』がなくなつて、身体が完全にほどこてしまったんだ。

「じゃあ、七影蝶に戻つた夏海ちゃんは、どうしてるんです?」

「わからないの。私には七影蝶が見えないからね。たぶん、島のどこかにいるんじゃないかな」

迷い橘が散つて、本来還るはずだったトキアミへの道は既に閉じてしまつていと夏海ちゃんが言つていたし、今は島の中をさまよつているという話も筋が通つている。

……なら、俺のやることは一つだった。

「……ちよつとでかけてきます」

「もしかして、今から夏海ちゃんの七影蝶を探すの?」

「いえ、まずは島の皆にも夏海ちゃんのことを思い出してもらおうと思うんです。探すのは、その後です」

「え、皆にも?」

「はい。俺でも思い出せたんですし、皆も今は忘れてしまつていても、きつかけがあれば思い出せると思うんです。思い出してさえしてくれば、蒼やのみきにも七影蝶が見えます。探す人数は多い方がいいです」

「……難しいんじゃないかな。私はともかく、誰より長く一緒の時間を過ごしていたはずの羽依里君でさえ、ようやく思い出せたんだから」

「でも……やってみないとわからないじゃないですか」

「それにね、どんなに遅くても、明日にはまた羽依里君も夏海ちゃんのことを忘れちゃうと思うよ。そういうものなんだって」

「……なら、今日中に見つけなければいいんです」

「羽依里君……」

「……俺、あの子と約束したんです。最後まで一緒にいるって。最後まで一緒に、夏休みを楽しむって」

そう。傍人としての役目を終えた夏海ちゃんが、自分の意志で決め

た道だ。

「まだ終わりじゃないのなら、まだ可能性が残っているんなら、俺はそれに賭けてみたいんです」

「……そうだね。羽依里君の言う通り、やる前から諦めちゃ駄目だよね」

鏡子さんは目を閉じて、静かに頷いてくれる。

「羽依里君、夏海ちゃんをお願いね」

「……ありがとうございます。行つてきます」

俺は鏡子さんにお礼を言つて、加藤家を飛び出した。

正直、仮に夏海ちゃんの七影蝶を見つけられたとしても、その後どうすればいいのかわからない。

でも、何か行動を起こさずにはいられなかった。

上手く事が運んで、皆が夏海ちゃんのことを思い出せば、何かすごい奇跡が起こつて、本人が何食わぬ顔で戻ってくるんじゃないか……そんな希望的考えまで、頭をよぎっていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

誰をさておき、まずはしろはだろう。夏海ちゃんとは一緒に料理もしたし、それなりに一緒の時間を過ごしたはずだ。

俺はそう考えながらガレージからバイクを引っ張り出して、鳴瀬家へと向かった。

「しろは——」

鍵のかかかっていない玄関口から大きな声で呼んでみるけど、反応はなかった。どうやら、無人らしい。

「考えてみれば、しろはが家にいる事の方が珍しい気がするな……」

……家にいないとなると、島をしらみつぶしに探すしかない。

俺は鳴瀬家を後にして、しろはが良そうな場所を探してみることにした。

「くそ、どこにもいない……」

釣り場やため池、もちろん食堂にも行ってみたけど、しろははいなかった。

望み薄とは思いつつも、バイクの給油がてら漁港にも足を運ぶ。漁師さんでもいれば話が聞けるかと思っただけど、昼下がりの漁港は閑散としていた。

「はあ。ここにいないよな……」

周囲を見渡してみるけど、ここにもしろはの姿はない。本当にどこにいるんだろう。

「あ、羽依里ー」

その時、前方から鴎がやってきた。朝と同じように、見慣れたスーツケースを引いている。

……そうだ。せつかく会えたんだし、鴎に夏海ちゃんのことを思い出してもらえないだろうか。

鴎もしろはほどじゃないけど、本を貸してあげたりして、夏海ちゃんと仲が良かったし。もしかしたら、簡単に思い出してもらえないかもしれない。

「……鴎、ぶしつけなんだけどさ」

「え、なに？」

「……なっちゃんって覚えてない？」

「なっちゃん？」

「ああ、なっちゃんだ。俺の親戚の、女の子なんだけど」

……俺は慎重に言葉を選びながら、鴎が夏海ちゃんのことを思い出してくれるような話の流れを作っていく。

「……前に、会ったことあるかな？ その子」

「えっと、ついこの間まで島にいてさ……鴎とも一緒に遊んでただけど」

「むー……なつちゃん……?」

「ほら、昨日の花火大会で、浴衣を用意してくれただろ。蝶の柄の浴衣。喜んでたよな」

俺はできるだけ鴬の記憶に残ってそうな事柄を拾いながら説明する。

「後さ、ひげ猫団の冒険。読書感想文を書くからって、三冊まとめて貸してあげたよな」

「そ、そうだったけ……?」

鴬はこめかみに指を当てて、むんむん呻きながら、必死に記憶の糸を手繰り寄せようとしてくれていた。

「うーん……思い出そうとしてるんだけど、そうすればするほど、頭がモヤモヤして、胸が苦しくなるの」

「そ、そうか……でもさ、もう少し」

「……ごめん。帰るね」

「あ……」

鴬は俺の制止も聞かず、そのまま俺の脇を抜けて、役所の方に歩いて行ってしまった。

すれ違いさまに一瞬見えた鴬の顔は、今まで見たことのない辛そうな表情をしていた。

鴬の背中を見送った後、俺は港で一人考えていた。

もしかして、一気に話しすぎたんだろうか。皆に夏海ちゃんの記憶はないんだし、突然知らない女の子の話をされたら、俺だって戸惑うと思う。

「なら、いきなり記憶に訴えるんじゃないやなく、実際の思い出の品とか見てもらうといいかもしれない」

俺はそういう結論に至り、一度加藤家へ戻ることにした。

加藤家に帰宅した俺は、そのまま夏海ちゃんの部屋へと向かう。

「ごめん。お邪魔するよ」

主のいない部屋に足を踏み入れると、目の前に巨大なアリのぬいぐるみが鎮座していた。

「よし、これくらいインパクトがあるものならいいかもしれない」

俺はそのぬいぐるみを背負うと、再びバイクにまたがって、灯台へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おーい、紬」

「むぎゆ？ タカハラさん、また来たですか？」

灯台の扉を叩くと、すぐに紬が出てきた。そして巨大なぬいぐるみを背負った俺を見て、目をぱちくりさせる。

「タカハラさん、その大きなアリのさんは一体なんでしょうか」

「えっと、このぬいぐるみのことで話があるんだけど……静久もいる？」

「いえ、シズクはでかけています。夕方の送別会には間に合わせるらしいですが」

「そ、そうなんだ……じゃあ、紬だけでもいいから、話を聞いてくれるかな？」

「はい。一体なんでしょう？」

紬が灯台から出てきて、俺の前に立つ。俺は背中に背負っていたぬいぐるみを紬の方へ向ける。

「このぬいぐるみさ、見覚えはない？」

「むぎゆ……？ おおー、アリのサユリさんです！ お久しぶりですね！」

そう言いながら、アリのぬいぐるみを抱く。まるで旧友との再会を果たしたみたいだ。

「紬、このぬいぐるみ、誰にあげたのか覚えてない？」

「むぎゆ？ タカハラさんが持っていたということは、タカハラさん
にあげたのではないでしょーか」

「違うよ。思い出せない？」

「……むぎゆ。わかりません」

「ズツ友の夏海ちゃん。覚えてないかな？」

「ナツミ……さん？」

紬はその名前を口にしながら、まじまじとアリクイを見る。夏海
ちゃんとズツ友だった紬なら、きつと思いい出してくれるはずだ。

「親戚の子なんだけど、仲良く遊んでたよね」

「ナツミさん……」

「……紬？」

その時、大きく見開かれた瞳から、一筋の涙がこぼれる。

「ご、ごめんなさい。このぬいぐるみを見てみると、胸が苦しくなっ
てしまっ……お、お返しします！」

そして紬は一瞬だけ苦しそうな表情を見せた後、俺にアリクイのぬ
いぐるみを押し付けて、そのまま灯台の中へ入ってしまった。

「ちよつと、紬!」

俺は思わず扉に手をかけるけど、開かない。どうやら、内側から鍵
をかけられてしまったみたいだ。

「……紬、俺はもう帰るから。怖がらせてしまっ……ごめんな」

俺は扉越しにそう告げる。あれだけ取り乱した紬は初めて見た気
がするし、なんだか嗚咽のような声も聞こえる。

「い、いえ、少ししたら落ち着くと思いますので。わたしの方こそ、ご
めんなさい」

少し時間を置いて、そう返事が返ってきた。何にしても、俺がこれ
以上灯台に留まっても、紬に辛い思いをさせてしまうだけだ。

俺は灯台の中の紬にもう一度謝って、その場を後にしたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……きつかけがあれば、皆もすぐに夏海ちゃんのことを思い出してくれる……そう単純に考えていたけど、鷗や紬の反応を見た限り、それは間違いだったのかもしれない。

バイクとぬいぐるみを加藤家に戻した後、俺はひたすらに打開策を考えながら、住宅地を歩いていった。本当に無意味な行動だけど、身体を動かさずにはいられなかった。

結局いい考えは浮かばないまま、気がつけば駄菓子屋のベンチに座っていた。

「センチメンタルな顔してるわねー」

そんな俺に気づいたのか、店番をしていた蒼が声をかけてきた。

「え？ そんな顔してる？」

「してるわよ……わかった。もうすぐ夏休みが終わって、しろはと会えなくなるのが寂しいんでしょー？」

「そ、そんなんじゃないからー！」

俺はそう否定するけど、おのずと顔が熱くなるのがわかる。

「寂しいんなら、駄菓子屋で油売ってないで、さっさと会いに行ったらいいんじゃないのー？」

「それがさ、島中を探してみたんだけど、見つからないんだ」

「え、そうなの？」

「ああ。一応しろはが居そうな場所は一通り探してみたんだけどさ」

「……どうしてもって言うなら、のみきに頼んで放送してもらえらけど？」

「いや、それはさすがに恥ずかしすぎるからさ……駄菓子屋に居たら、しろはがスイカバーを求めてやってくるんじゃないかと思って」

「あー、そういうことねー」

そう言つて、にこにここと笑う。この様子だと、きつと蒼も夏海ちゃんのことを覚えていないんだろう。覚えていてくれたら、夏海ちゃん七影蝶探しも楽になるのに。

「じゃあ、ただ待つつてのもあれだし、島の最後の思い出に、かき氷食べてく？」

「なんか、随分安っぽい島の思い出だな」

「最後だし、あたしがおごってあげる」

「じゃあ、練乳たっぷり頼む」

「現金ねえ……それで、何味？」

蒼がそう言いながら、かき氷器の方へと向かう。

「じゃあ、ブルーハワイで」

「りよーかい。夏海ちゃんは？」

「え？」

俺は思わず蒼の方を振り返る。同じように振り返った蒼と、目が合ってしまった。

「……あれ？ い、今あたし、なんか言った？」

……もしかして、これは脈ありかもしれない。俺は思わず立ち上がる。

「……蒼、思い出せないか？ 夏海ちゃんだ。よくこの駄菓子屋でかき氷食べてたんだけど」

「え？ えっと、その……」

「蒼だけじゃなくてさ、藍とも仲良かったんだぞ。一緒に天体観測に行ったり、浜辺でビーチバレーしたり、花火も……」

「……ごめん羽依里、ちよつと待って」

つい、矢継ぎ早に話してしまっていた。気がつくのと、蒼は俺を右手で制止つつ、顔を背けていた。

「……なんか変な感じなの。涙出ちゃってるし、ちよつと顔洗ってくるわね」

「あ……」

言い終わらないうちに、蒼は自分の身体を抱くようにしながら、店の奥へと行ってしまった。

「……またやってしまった。一瞬、脈ありだと思ったんだけど」

俺はがっくりと肩を落とす、再びベンチに深く腰掛ける。

「……でも、蒼たちに罪はないんだよな」

たまたま目の前を飛んでいた七影蝶に向かって、俺はため息混じりに呟く。つまるところ、俺は一人で足掻いているだけなのかもしれない

い。

「……少し、頭を冷やそう」

俺はゆっくりと立ち上がって、奥の座敷へと向かう。結局かき氷はもらえなかったし、扇風機にでもあたることにしよう。

「……は？」

「ひえっ！」

ふすまを開けると、そこには何故かメイド服を着た鷗と藍がいた。

「ご、ごめんー！」

俺は見ているいけないものを見てしまった気がして、とっさに謝りながらふすまに手をかける。なんか、昨日も似たような場面に遭遇したような。まるでへじやぶだ。

「ちよつと待ってくださいー！」

「どわあ!？」

ふすまを閉めようとしたところで藍に襟元を掴まれて、逆に座敷の中に引つ張り込まれてしまった。すごい力なんだけど。藍って武術か何かやってるのかな。

「……羽依里さん、ここで見たことはまだ秘密にしておいてください！ いいですね！」

俺は情けなくも畳の上に仰向けにひっくり返った格好で、藍に見下ろされていた。

「そ、それはわかったけど、どうして二人はメイド姿に？」

「カモメイドだよ！」

「鷗ちゃんは黙っていてください！ 私はそそのかされてしまっただけですよ！」

「ええっ、ひどいよ！ 一人だけで着るの恥ずかしいって言うから、一緒に着てあげたのに！」

「だから、鷗ちゃんは黙っていてください！ とにかく、この案はボツです！ ダメです！ 実際に着てみたら、恥ずかしすぎます！」

「ええ、似合ってると思うけど」

「そうだよ！ アオアオに見せたら、きつと喜ぶよ！」

「こんな姿、見せられません！」

イマイチ話が見えないけど、やっぱり俺は見てはいけないものを見てしまったらしい。

「羽依里さん、もう一度だけ念を押ししておきますけど、ここで見たことは黙っていてください！ しろはちゃんにも、夏海ちゃんにも、言つては駄目ですからね！」

「え。ちよつと藍、今の名前……」

「ほら、早く外に出てください！ 着替えますから！」

今度は蹴りだされるように部屋の外に出されてしまった。さっきの蒼もそうだけど、空門姉妹はどこかに夏海ちゃんとの記憶が残ってるのかもしれない。

「いてて……」

座敷から追い出されてしまったけど、蒼はまだ戻ってくる気配がないし、どうしよう。

俺は店の中で一人、手持ち無沙汰になってしまう。

「くーださーいな」

「あれ、のみき？」

その時、のみきがやってきた。

「おや？ 今日鷹原が店番をしているのか？」

「えつと……まあ、そんなところ。のみきは何か買いに来たのか？」

駄菓子屋の看板娘が、まさか俺のせいで席を外してるなんて言えず、そう取り繕っておいた。

「いや、今日は買い物ではなくてな。写真を持ってきたんだ」

「写真？」

「先日、リトルバスターズとの練習試合後に集合写真を撮っただろう。その写真ができたんだ」

……そう言えば鏡子さんがカメラを借りて撮ってくれてたっけ。あれ、もうできたんだ。

「あ、写真ができたんですか？」

「のみきさん、見せて見せて！」

ちようどその時、着替えを終えたらしい二人がやってきた。

「一人一枚あるから、そう慌てるな」

のみきが苦笑しながらそう言つて、持っていた封筒から写真を取り出す。

……待てよ。確かあの集合写真には、夏海ちゃんも一緒に写つていたはずだ。

これは思わぬところで、思い出の品が出てきた。夏海ちゃんが写つた写真を見れば、皆も必然的に夏海ちゃんのことを思い出すはずだ。

「ほら、これだぞ」

俺は早る気持ちを抑えながら、受け取つた写真を見てみる。

「……え？」

優勝カップを前に並ぶ俺や、島の仲間たち。その後ろにはすっかり見慣れたリトルバスターズの皆。

最高の瞬間を写したはずの写真だけど……そこに夏海ちゃんは写っていないかった。

……そんなはずはない。俺としろはの間、ちようど優勝カップの前に、確かにいたはずなのに。

「あははー、しろはと羽依里、せつかくなんだからもつとくつつけば良かったのにねー」

「本当ですね。恥ずかしがり屋なんですから」

いつの間にか蒼が戻つてきて、藍と一緒に写真を覗き込んでいた。俺としろはの間、不自然なくらい空間があるのに、誰も気にしないなんて。

「のみきー、この写真、あたしの分もある？」

「ああ。心配しなくても、人数分きちんと焼き増ししてある。何故か一枚余っているが、おそらく写真屋さんが予備を入れてくれたんだろう」

……のみき、それはたぶん、夏海ちゃんの分だから。

「あのさ……皆、この試合のピッチャー、誰がやったか覚えてる？」

「そりや、えーつと……よく覚えてないけど、のみきじゃない?」

「誰でもいいじゃないですか。勝ったんですし」

「そうよねー。鷗のバツティング、すごかったし」

「いやいやー。二人のダブルスチールもさすがだったよー!」

さりげなく聞いてみたけど、やっぱり夏海ちゃんのこととは思いつけないみたいだ。皆、試合内容とか覚えているのに。

その後、良一や天善も駄菓子屋にやってきた。俺は他の皆と同じように探りを入れてみたけど、二人は女の子たち以上に夏海ちゃんとの縁が薄いし、思い出してはくれなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

結局、全く物事が進まないまま、送別会の時間が近づいてきた。

「はあ……」

加藤家の自室で一人、自分の不甲斐なさを嘆いていると、鏡子さんがやってきた。

「羽依里君、焦る気持ちもわかるけど、送別会に主賓が遅れるわけにはいかないよ?」

「そ、そうですね。行ってきます」

「うん。行ってらっしゃい」

正直、送別会って気分でもなかったけど、鏡子さんに背中を押され、俺は重い足取りで辱堂へと向かった。

「……あれ?」

食堂に到着してみると、入口のところに七影蝶がいた。今日は本当によく見る日だな。

そしてその入口には、昼間にはなかった『本日貸し切り』の札が出ていた。

「……お、ようやく最後の主賓の登場か」

「待つてたわよー」

扉を開けると、既に皆揃っていて、笑顔で俺を迎えてくれた。

人数が多いせいか、皆も今日はカウンター席でなく、奥の座敷に座っていた。

「ほらほら羽依里！ 私の隣が空いてるよー！」

そんな雰囲気気圧されていると、笑顔の鷗からそう声をかけられる。俺は流されるように、鷗の隣に腰を下ろす。

「……それでは、鷹原と夏海ちゃん、鷗の送別会を始める」

のみきは夏海ちゃんの名前を口にしてはいたけど、周りの人間はおろか、本人も気づいていない感じだった。

「それでは、まずは二人から挨拶をしてもらおうとしよう」

直後、のみきが笑顔のまま俺の方を見てきた。

「え、挨拶？」

「……どうしよう。挨拶なんて、何も考えてない。」

「……えーっと、その」

のみきが続いて、皆の視線が俺たちに集まる。なんて言えばいいだろうか。

「皆、楽しい夏をありがとう！ 最高の仲間たちと、鳥白島に……かんばん……いー！」

そんな折、鷗が先に挨拶をしてくれ、そのまま乾杯の音頭まで取ってしまった。

「か、かんばん……いー！」

その勢いに負けて、皆してグラスを鳴らす。ハイテンションな鷗のおかげで、俺の挨拶はうやむやになった。助かった。

「よーし、食うぞー！」

やがて良一の一言を皮切りに、それぞれが目の前の料理に箸を伸ばす。

俺たちの前には、鳥の唐揚げやフライドポテト、おいしそうな魚の刺身に、焼き鳥、だし巻き卵、野菜サラダ、枝豆といった居酒屋メニューが並ぶ。

そして主賓という意味合いもあつてか、俺と鷗が一番奥、つまりは

上座と呼ばれる位置に座らされていた。

俺に近い方から、壁際にしろは、のみき、良一、天善と並び、鷗の方には静久と紬、空門姉妹が座っていた。

「さあパイリ君、鷗ちゃん。今日は主役なんだから、しっかり食べて！」

「料理が足りなかったら言ってね。まだ材料はあるから」

そう言いながら、しろはと静久が小皿に盛った料理を配ってくれる。

「すごく豪華な料理だけど、これ全部しろはが作ったのか？」

「一応、そうだけど……時間が無くて、そっちのフライドポテトとかは冷凍ものなの」

島の料理人としてのプライドが許さないんだろうか。しろはは少し残念そうにそう言っていた。

俺はしろはに不満そうな視線を向けられているフライドポテトを摘んで、口に運んでみる。

「……十分美味しいと思うけど」

「やっぱり、フライドポテトを作るなら島芋を使って、味付けは島の天然塩で……」

俺の感想は聞こえていないみたいだった。しろはは口元に手を当てて、うんうんと唸っていた。

「あまりにしろはちゃんが忙しそうにしていたから、私も少しだけ買い出しを手伝ったのよ」

「うん。唐揚げや焼き鳥に使った鶏肉は、静久に本土で買ってきてもらったんだよ。お肉はどうしても島じゃ手に入りにくいし」

なるほど。静久が食材を用意してくれたんなら、むね肉を使った料理が多いのも納得かもしれない。

「しろしろ、このサラダ美味しい！」

「あ、それは島で採れた夏野菜で作ったの。ドレッシングも自家製だから、たくさん食べてね」

「うん！」

鷗は嬉しそうにサラダをほおばっていた。しろはの料理は、変わら

ず他の皆からも好評のようで、大皿に盛られた料理はどんどん減っていく。これは、俺も負けずに食べないと。

「カモメさん、このだし巻き卵も美味しいですよ！」

「ツムツム、ありがとう！ ー、美味しい！」

皆に負けじと料理を口に運んでいると、紬が鵜に卵焼きを薦めていた。ふつくと焼き上げられていて、大根おろしまでついている。本当に美味しそうだ。

「タカハラさんもどうぞ！」

「え？ ああ、ありがとう」

小皿を手に身を乗り出して、紬からだし巻き卵を受け取る。その拍子に、紬と静久の間に箱があるのが見えた。

「あれ、その箱は？」

「最近、パイ作りに凝っていてね。後で皆で食べてもらおうと思って、アップルパイを焼いてきたの」

「そうです！ シズクのパイは美味しいんですよ！」

「そうなんだ。楽しみにしておくよ」

もしかしなくても、灯台で焼いたんだろうか。あそこにそんな整った設備があるようには思えないんだけど。

でも、静久がパイ作り……意外と言えば意外だけど、まさか、おっぱい繋がりだなんて言わないよな……。

「んー、このお刺身も美味しいー」

俺が変な想像をしていると、隣の鵜はぱくぱくと刺身を口に運んでいた。

「さすが鵜だけあって、おいしそうに魚を食うよな……」

「え、なに？」

「いや、なんでもないよ」

「……ところで羽依里、この夏の一番の思い出って何？」

「一番の思い出？」

その時、鵜から唐突にそんなことを聞かれた。一番の思い出……なんだろう。

「……やっぱり、野球かな」

対戦相手のリトルバスターズとの交流もあつたせいかな、すごく記憶に残っている。

「鴎は何かあるのか?」

「んー、私はねー」

「野球もそうだけど、やっぱり宝探しかなー、海水浴も良かったし、スイーツレースも楽しかったよねー」

鴎は食事の手を止め、あれやこれやと考えながら、この夏の思い出を指折り数えていた。

「あ、そうだ。昆虫採集も楽しかったよね! 羽依里やなっちゃんと一緒に、ため池を超えて、ヒマワリ畑への大冒険!」

そこまで大げさなものでもなかった気がするけど。確か、ちよつと遠出のハイキングって感じだったような。

「……って鴎、思い出したのか?」

「え、何を?」

「なっちゃんって言ってたろ、今」

「うーん?」

思わず反応してしまった。ちよつと期待したんだけど、やっぱり駄目みたいだ。空門姉妹と同じで、一瞬思いだしただけらしい。

「二人とも、何暗い顔してんのー? 送別会だからって、本当に暗くなっっちゃ駄目よー?」

「ほら、鴎ちゃんのグラスも渴いてますよ」

「羽依里も男の子なんだから、もつと食べないとねー」

その時、空門姉妹がそう言いながら、笑顔で料理を運んできてくれた。

「そ、そうだよな。鴎、さっきの話は忘れてくれ。ほら、枝豆食うか?」
「うん! 食べる食べるー!」

また昼間みたいになってもかわいそうだし。俺は空門姉妹に合わせるように、とっさにそう取り繕う。

「……ところで、空門姉妹の二人はなんでメイド服姿になってるんだ?」

さつきまでは普通の格好をしていたはずだけど。いつの間に着替えたんだろう。

「最初は私だけが着る予定だったんですが、蒼ちゃんも一緒に着られると言ってくれまして。二人で着れば怖くありません」

藍は満面の笑みを浮かべていた。確か、駄菓子屋では一人で着るのは嫌だとか言ってた気がするけど。結局そういう流れになったんだ。「それより羽依里さん、お皿を片付けますから、残った唐揚げを食べてしまってください」

「わかった。食べるよ」

俺は皿に一つだけ残っていた唐揚げを指でつまみ、ひよいっと口へ運ぶ。

「おかわりは今、しろはちゃんが作ってくれてますから」

「え？ おかわり？」

見てみると、隣にいたはずのしろははいつの間にかカウンターの向こうに移動していて、あわただしく調理をしていた。

「しろは、いつの間に……」

そう言えば、今日はしろはとゆっくり話せてない。せっかくだし、しろはの方に行ってみることにしよう。

「しろは、こんな時まで料理させてごめんな」

「別に良いよ。皆、おいしそうに食べてくれてるし」

俺はカウンターの奥で忙しそうにしているしろはとそんな話をしながら、自然にいつもの席に座る。

「ひよつとして、午後からずっと送別会の準備をしてくれてたのか？」

「そうだけど……もしかして、何か用事があった？」

「……いや、大した用事じゃなかったし、気にしないで」

「そう……？ なら、いいけど」

……しろはは、夏海ちゃんのこと、覚えてる？

そう聞きかけたけど、止めておいた。しろはにまで、皆と同じ思いは味わってほしくないし。

「羽依里、もう少ししたら追加の料理ができるから、テーブルまで持って行ってくれる？」

「ああ、任せてくれ」

そう言った直後、自分の指先に違和感を感じた。しまった。さっき藍に急かされた時、残っていた唐揚げを思わず手でつまんでしまったんだっけ。

「……しろは、悪いけどおしぼりもらえない？」

「いいよ。はい」

しろはは手慣れた様子でおしぼりを取り出すと、俺に手渡してくれる。

「ありがとう」

「……あれ？」

俺におしぼりを渡した後、しろはは別のおしぼりを俺の隣の席に置こうとしていた。そこは誰もいないのに。

「……しろは？」

「……変なの。朝から頑張りすぎて、疲れてるのかな」

そういえばこの夏、ほぼ毎日夏海ちゃんと一緒に夕飯を食べに来ていたし。しろはも条件反射みたいになっていたのかもしれない。

「すっかりしてくれよ。俺の隣には誰もいないぞ」

まさか、毎日一緒に来ていた女の子の話をするわけにもいかないし、俺はそう言って誤魔化すしかなかった。

「ほい、鳥の唐揚げお待たせ」

しばらくして、完成した料理を乗せた大皿をテーブルへと運んでいく。飲食店でもバイトをしたことがあるし、これくらい楽勝だ。

「わーい！ 揚げたての唐揚げって、最高だよね！」

山と盛られた唐揚げを見て、鳴が歓喜の声をあげる。まだ食べるつもりらしい。

「そうだ。鷹原もしろはも座るといい。そろそろ出し物が始まるぞ」「え、出し物？」

嬉々として唐揚げに箸を伸ばす鷗を眺めていると、のみきにそう言われた。

「出し物って何だろうね」

「……さあ？」

俺の後に続いて着席したしろはも、隣で不思議そうな顔をしていった。

「……それでは一番！ 三谷良一！ 瞬間脱衣します！」

まず、そう言って立ち上がった良一が、自分の服に手をかけた。

「良一、待て！ こんな所で脱いだら、またのみきに撃たれるぞ!？」

その良一を、俺は思わずそう止める。しかしのみきの方を見ると、特に何をするでもなく、笑顔でその様子を見ていた。

「いや、今回は無礼講だ。脱いでいいぞ」

「よっしゃー！ くん！ パー！」

のみきからの許可が出た瞬間、良一は一瞬で上半身裸になってサンバを踊り始めた。

「レッツサンバー！ アツミーゴ！」

先日の遊園地で習得したらしい。すごい動きだった。

「ここは食堂だし、衛生的にどうかと思うけど……」

踊り狂う良一を、隣のしろはが複雑そうな顔で見ている。まあ、楽しそうにしてるし、ここは大目に見てあげよう。

「では、次はわたしの番ですね！」

良一の踊りが終わった後、大掛かりな機械を持った紬が皆の前に立つ。なんだろうあれ。

「わたしはこのワタアメ器で、ワタアメアートを作ります！ くるくるくる」

「おおー、すごい！ 毛玉犬だー！」

「はい！ ぴこぴこです！」

良一に続いて、紬がワタアメアートなるものを披露していた。どこかで練習していたのだろうか、すごく上手だった。

「では、いよいよ真打登場ですね」

「……私の番か」

完成したワタアメアートを皆で美味しくいただいていると、藍にそう促されたのみきが笑顔で立ち上がる。

「よし、良一を扉の前に連れて来てくれ」

「やめろー！ー！ー！ やめてくれー！ー！ー！」

のみきが笑顔を崩さずにそう言うのと、いつの間にか椅子に縛り付けられた良一が運ばれてきた。

「それではみきちちゃん、最大出力でどうぞ」

「ああ」

続けて、藍がのみきに目隠しをする。同時に蒼が良一の頭上にリングを置き、天善が良一の背後の扉を開け放つ。

全ての準備が整ったのを見て、のみきは静かにハイドログラディエーター改を構える。

……もしかして、のみきは目隠しをしたまま、あのリングを狙うんだろうか。それはそれでスリリングだ。

「お助け——！」

「良一ちゃん、下手に動くとも顔に当たりますよ」

「う、うう……」

藍にそう言われて、良一が大人しくなる。無礼講だけど、のみきも撃たないわけじゃないんだ。

「こういう時は、心の目で見るんだ……それ！」

次の瞬間、のみきの水撃が見事にリングを撃ち抜いた。扉の向こうに吹き飛ばされたリングには大きく穴が開いている。さすがの威力だった。

「……よし、次は俺の番だな。俺は目隠しピンポンだ！」

のみきに続いて、天善が良一の前に立つ。同時に、良一の頭には火のついた口ウソクがセットされる。

「天善天善天善……」

目隠しをしてもらった天善は、念入りに素振りをしながら、天善

ゾーンを展開して感覚を研ぎ澄ませていた。

「天善ー！ やるなら早くしてくれー！ 溶けたロウが垂れてきちまう——！」

「まあ待て。もう少しだ……！」

「うわあああ——！」

なんだかんだで、良一は先行パージした報いをしっかりと受けていた。可哀想に。

「……それじゃ、私はおっぱいでこの割りばしを折ってみせるわ！」

「私はスーツケースのスーちゃんて腹話術やるよー！」

……その後も、皆は色々な出し物を披露してくれた。

ところで、なんで出し物に鴉が参加してるんだろう。まあ、本人は楽しそうにしてるし、いいけどさ。

他の皆も、まるで過ぎゆく夏を惜しむかのように心から楽しんでいて、俺やしろはも一緒になって笑う。

そんな中、何の気なしに天井を見上げると、隅の方に一匹の七影蝶がいた。

もしかして、入口にいたやつかな。いつの間に入って来たんだらう。

「いやー、騒いだわねー」

「しろはがやつてる食堂だからできたことだよな」

「シロハさんのお料理は、相変わらずゼツピンでした！」

「そうね。紬があれだけ食べるなんて珍しいわ」

「ズクズクのアツプルパイも美味しかったよ！」

……結局、送別会がお開きになった後も、しろはが閉店作業を終えるまで皆と居座り、揃って食堂を出ることになった。

「確認するが、鷹原は明日の14時の船で帰るんだったな」

「ああ、その予定だよ」

「わかった。皆で見送りに行くからな」

「やめてくれよ。泣いちゃうからさ」

「それが目的ですよ。絶対に泣かせてやります」

「そうよねー」

わいわいとそんな話をしながら田舎道を抜け、住宅地に差し掛かったころ。

「……あれ？」

気がつけば、俺たちのすぐ近くをまた七影蝶が飛んでいた。

……思えばこの七影蝶、食堂からずっとついて来ていた気がする。

不思議に思っていると、その七影蝶は俺たちの周りをぐるりと一周回った後、ひらひらと山の方へ飛んでいってしまった。

「……今の七影蝶って、もしかして夏海ちゃんなのかな」

遠く離れていく七影蝶を見ながら、俺は思わずそう呟く。思い返せば、あの七影蝶は朝からずっと俺の近くにいた気がする。

空門姉妹やのみき、鳴が夏海ちゃんの名前を呼んだ時も、あの七影蝶が近くにいた。

偶然にしては出来過ぎているし、あの七影蝶が夏海ちゃんで、皆は少なからずその気配を感じ取ったと考えるのが自然だろう。

そしてなにより、あの七影蝶は送別会の間、ずっと食堂にいた。

皆に忘れられても、七影蝶に戻ってしまっても、夏海ちゃんは送別会に来ていた。きちんと約束を守っていたんだ。

「……あの子が頑張ってるのに、俺は何をやってるんだらうな」

皆との楽しい時間を壊したくないばかりに、いつの間にか夏海ちゃんのことを諦めかけていた。あれだけ鏡子さんに啖呵を切っておきながら、情けない。

「……なあ蒼、神域があるのって、あの山だったよな」

俺は夏海ちゃんとの会話を思い出しながら、蒼にそう尋ねる。

「へっ!? どうしてそんなこと聞くの？」

「俺、ちよつと神域に行かなきゃいけないくて」

「な、ないわよ! あの山に、空門の神域なんてないわよ!」

「……相変わらず、嘘下手な。俺、ちよつと行ってくるよ。約束を果たさないといけないから」

「え、羽依里、どこにいくの？」

しろはが驚いた顔をするのを横目に見ながら、俺は山の方へ向かって駆けだした。

「皆、先に帰っててくれ！ 俺、少しだけ用事を済ませてくるからさ！」

背後からの困惑の声を振り切って、俺は木々が生い茂る山の中へと飛び込んだ。早くあの子を見つけないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

月が出ているおかげで、山の中は比較的明るかった。

俺はその月明かりを頼りにしながら、木々の間を抜けていく。

夏海ちゃんの七影蝶は完全に見失ってしまったけど、彼女の行き先だけは見当がついた。

「……トキアミ」

本来、夏海ちゃんが還るはずだった場所へと続く、空門の神域だ。

「確か、この木を右に見ながら進んで、その先の分かれ道を左に……」
これも消えた世界の記憶と言うやつなんだろうか。一度も行ったことのないはずの場所なのに、頭の中に次々と神域までの道筋が浮かんでくる。

……俺はかつて、この道を何度も通った記憶がある。ある時は誰かを探して。ある時は誰かを背負って。一緒に神域を目指していた。
何かに導かれるかのように、俺は山の奥へ奥へと足を踏み入れていった。

「……くそ、この辺りだと思っただけど」

そろそろ神域に近づいてきたとは思っただけど、さつきから同じ場所をぐるぐる回ってる気がする。まるで侵入者を拒む結界でも張ら

れているみたいだ。

……やつぱり、空門の巫女と一緒にやないと辿り着けないのかな。

「……そうだ。こういう時は、山の住人を頼ってみよう」

そんな考えに至った俺は、少し息を整えてから、大きく息を吸い込む。

「イナリ……！」

そして俺は大声でイナリの名前を呼んでいた。

「……ポ……ン……！」

何度か呼びかけていると、やがて草むらをかき分けて、イナリがやってきた。

「おお、イナリ。来てくれたか」

「ポーン！」

何故イナリを呼んだのかはわからない。でも、イナリなら連れて行ってくれる気がした。

「イナリ、お願いがあるんだ。空門の神域に案内してほしい」

「……ポーン！」

俺の言葉を聞いたイナリはひと声鳴くと、そのまま背を向けて走り出した。俺はその姿を見失わないように、必死についていった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ポーン！」

しばらく進むと、イナリは一段と深い茂みの前で立ち止まる。どうやら、この奥がそうらしい。

「この奥なのか。ありがとうな」

「ポーン！」

俺はイナリにお礼を言って、その茂みをかきわけて奥へと進んでいく。

どうやら、神域の周りは背の高い草に囲まれているらしい。これは

見つからないわけだ。

「……おお、着いた」

やがて茂みを抜けると、急に開けた場所に出た。背の低い草が風にそよぎ、上には満天の星が見える。

その場所の中央に、一本の大きな木が生えていた。

「……迷い橘」

俺は自然にその名前を口にしていった。恐らく、あれがそうなんだろう。始めて見たはずなのに、すぐにそれと確信できた。

そしてその木のたもと、無数の七影蝶を纏いながら、あの子が立っていた。

「……夏海ちゃんー」

その橘の木とはかなり距離があっただけど、あれは確かに夏海ちゃんだ。俺は全力でその近くに駆け寄る。

「……え、はいり、さん？」

儂げな表情をして迷い橘に手を添えていた夏海ちゃんは、俺の姿を見て目を丸くする。

近づいてみると、その姿は半分透けていて、背後の橘の木が見えていた。一度は七影蝶に戻ってしまったんだし、今の夏海ちゃん存在は不完全みたいだ。

「……ようやく見つけたよ。やっぱり、あの七影蝶は夏海ちゃんだったんだね」

「そ、そうです。ずっと羽依里さんの近くに居ました。送別会の約束もありましたし」

「やっぱりそうだったんだ。気づいてあげられなくて、ごめんね」

「……いえ、思い出してもらえただけで、十分です」

俺は息を整えながら夏海ちゃんの隣に並び立つ。夏海ちゃんは心なしか嬉しそうに、周囲を舞う七影蝶を弄んでいた。

「もしかして、この辺を飛んでいる七影蝶って全部……」

「……はい。全部私の身体を編んでいた七影蝶ですよ」

「そうなんだ……」

そう言う夏海ちゃんの身体からは、今もいたるところから七影蝶が

飛び出し続けている。以前は手のひらから時々出てくる程度だったのに。

「ところで羽依里さん、こんなところまで、どうして来てくれたんですか？」

「……だって、夏休みの最後まで一緒にいるって、約束したしね」

「……その約束、覚えててくれたんですね。嬉しいです」

「……そう言って笑う夏海ちゃんから、また二匹の七影蝶が飛び出した。」

その七影蝶は他の七影蝶と同じように、橘の木へと寄っていった。思わず目を凝らしてみると、枝という枝に無数の淡い光が見える。

「逃げないで、この木に集まってるんだね」

「たぶん皆、トキアミに還ろうと思つて、本能的に集まってるんじゃないですかね。さすがに、もう無理みたいですけど。橘の花も全部散っちゃってますし」

夏海ちゃんは地面に落ちている橘の花を寂しげに見ていた。確かに、七影蝶こそ群がっているけど、そこには一輪の花もついていなかった。

「……ということは、やっぱり夏海ちゃんも還れないの?」

「……はい。無理みたいです」

夏海ちゃんは力なく橘の木の根に腰を下ろし、自分の両手を見ている。

「こうやってまた人の姿になれたのだから、不思議なくらいなんですから。還るなんて無理ですよ」

「じゃあ、夏海ちゃんはこのままだと……」

「遅かれ早かれ、また七影蝶に戻つて、トキアミにも戻れずに、島の中をさまようんだと思います」

「……七影蝶に戻つてしまうつてことは、やっぱり皆から忘れられたままなんだろう。それは悲しすぎる。」

「……また夏が来て、うまく蒼さんに神域へ導かれるのを祈るしかないですね」

笑顔でそう言うけど、それは簡単なことじゃないだろう。

今この場所だけで、これだけの数の七影蝶がいるんだ。神域からトキアミへ行ける期間は限られるし、下手をすると、何年も先の話かもしれない。

「……じゃあ、夏が来るたびに、皆で君を探す」

「えっ？」

「トキアミに戻れないんなら、この島のどこかに、ずっといるはずだよね」

「そ、そうですけど」

「なら、また夏が来たら、君を探すよ。皆と一緒にね」

「……そんなこと、言わないでください」

夏海ちゃんの声が震え、その瞳にみるみる大粒の涙が溜まっていく。まるで、張り詰めた心の糸が切れてしまったみたいだ。

「皆さん、忘れてます。羽依里さんだって、明日になったらまた私のことを忘れちゃいますよ」

「そうかもしれないけどさ……俺は、こんな体験があるんだ」

「……え？」

俺は夏海ちゃんの隣に腰を下ろし、静かに話しかける。

「……ずっと昔。永遠みたいな夏を駆け回っていた、小さなころ。毎日が眩しかったんだ」

「でも、大きくなるにつれて、そんな思い出は記憶の彼方に埋もれてしまっ

「だけど、あの時感じた眩しさだけは忘れなかった。心のどこかで覚えていて、夏になれば思い出していたんだ。まるでポケットの中に、その欠片が残っていたみたいに」

「……だからさ、もし君のことを忘れてしまっても、俺たちが夏海ちゃん

「……や、やめてください。そんな風に言われたら、期待しちゃうじゃないですか」

夏海ちゃんはたまらず顔を伏せる。その拍子に、ぼたぼたと光る雫

が草の上に落ちた。

「……これで最後だって、もう諦めていたのに。覚悟は決めてるつもりだったのに」

顔を伏せたまま、涙声でそう続ける。

「そんな風に言われたら、いつかまた、この島で、羽依里さんや、皆さんに巡り会えるんじゃないかって。考えちゃうじゃないですか」

「……きつと会えるよ」

「え？」

「だってこの島は、そんな奇跡も起こしてくれる場所だからさ」

俺は迷わずそう口にする。

……そう。

――諦めないことで可能性が広がる夏があった。

――小さな冒険が大きな絆を紡いだ夏があった。

――限られた時間を眩しい思い出に変える夏があった。

――大切な人との思い出を育み、導く夏があった。

――いくつもの優しさを繋いだ先に、辿り着いた夏があった。

……うつつすらと覚えている、いくつもの夏。

今とは違う世界で、いくつもの奇跡を起こしてくれたこの島なら、この世界でも奇跡を起こしてくれるんじゃないか。

俺は、そう信じずにいられなかった。

「……いました！ ナツミさんですー！」

「羽依里もいるよー！」

……その時、聞き慣れた紬や鷗の声が聞こえ、無数の懐中電灯の光が神域に飛び込んできた。

俺と夏海ちゃんは、思わず声がした方へ視線を送る。

「おお、本当になつちゃんもいたー！」

「鷹原もここにいたのか。まったく、心配させるな」

「……こんな場所が、山の中にあつたんだね」

「らしいな。なんにしても森さえ抜けてしまえば、こんなものに用はない」

皆は手にしていた懐中電灯を次々と消しながら、俺たちの方へやってきた。明かりが無くても、月の光のおかげで皆の顔が良く見える。

「……皆、どうしてここに」

「羽依里つてば、急に走り出すから。蒼に頼んで、ここまで案内してもらったの」

俺の問いに、しろはがそう答えてくれた。

「でも羽依里、よく一人で神域にたどり着いたわねー。ここ、あたしの案内がないと来れない場所のはずなんだけど」

「そこは、優秀な案内人がいてさ」

「案内人？」

蒼が不思議そうな顔をする。まさか、イナリに案内してもらったなんて言えないし。

「それよりあの、皆さん、私のこと思い出してくれたんですか？」

「それ！ それなのよ！ 皆で羽依里を追いかけて山の中を進んでたら、急に夏海ちゃんのことを思い出したのよー！」

「蒼の言う通りなんだ。なぜかわからないが、揃いも揃って、すっかり夏海ちゃんのことを失念しててな」

「……夏海ちゃん、本当にごめんね」

皆、本当に申し訳なさそうにそう言う。今は夏海ちゃんも人の姿になっっているから、皆の記憶もその影響を受けているのかもしれない。

何にしても、皆は完全に夏海ちゃんのことを思い出してくれたみたいだ。

「……ほらね。夏海ちゃん、この島に不可能なんてないんだよ」

「ほ、本当ですね……嬉しいです。嬉しすぎますよ」

夏海ちゃんが涙に濡れた顔のまま、泣き笑いのような表情で皆を見ていた。

「ほらほら、夏海ちゃん、泣いてる場合じゃないですよ」

「えっ？」

そんな夏海ちゃんを取り囲むように、皆はその近くに腰を下ろす。
「……今からここで、夏海ちゃんの送別会を始めるぞ」

そんな皆を代表して、のみきがそう言う。俺も夏海ちゃんもまさかの展開についていけず、呆気にとられる。

「だって、なつちゃんってば、送別会にも来てないんだもん！ だから、今からここで送別会やるの！」

「ここだと料理も用意できないけど、できるだけ楽しんでね」

「は、はあ……」

思わず素っ頓狂な声を出す夏海ちゃんに対して、皆は一様に笑顔だった。夏海ちゃんの身体が透けてるとか、何故こんな山の中にいるのかとか、全く気にしていない様子だった。

……ああ、皆は本当に夏海ちゃんを見送るために、ここまで来てくれたんだ。

「さあ、まずは主賓の挨拶だぞ」

「え、挨拶ですか!？」

「そうだね。挨拶は大事なんだ。夏海ちゃん、頑張つて」

「は、はい！」

そんな皆の気持ちに応えるため、俺も一緒になって夏海ちゃんを鼓舞する。

夏海ちゃんは涙をぬぐって立ち上がり、皆の方をまっすぐに見る。

「えっと、私にこんな楽しい夏休みを過ごさせてくれて、ありがとうございました！ 毎日、すごく楽しかったです！ 皆さんと、この島のこと、大好きです！」

そう言つて頭を下げる。同時に温かい拍手が送られた。

「うんうん。夏海ちゃん、立派な挨拶だったわよー」

「本当ですね。まともに挨拶できなかった羽依里さんとは比べ物にならないですね」

……ちよつと藍、せつかく隠していたのに、バラさないで。

その後は夏海ちゃんの希望で、皆でこの夏の思い出を語り合うこと

になった。

「あら、夏海ちゃんの一番の思い出は、やっぱり野球なのね」

「はい。羽依里さんと同じですね。えへへ……」

他にも、缶ケリ、ビーチバレー、肝試しに水鉄砲大会、キャンプ……一人一人と額を合わせるようにしながら、思い出話に花を咲かせる。

時折、身振り手振りを交えて楽しそうに話す夏海ちゃんを、俺は隣で見守るように見ていた。

「なつちゃん、また一緒にスニーカース乗ろうね！」

「はい。また羽依里さんに押ししてもらいましょー！」

「来年の夏には、あのヒマワリ畑に皆でピクニック行こう！」

「そうですね。楽しみにしてます！」

「その時は、しろしろに特製のチャーハン弁当を作ってもらおう！」

「……ちよつと待って、私が作るの？」

「うん！ しろしろのチャーハン美味しいし！」

「でも、夏海ちゃんのチャーハンもこの夏で随分上達したよ？」

「えへへ、ありがとうございます！ そうだしろはさん、来年はフライパンじゃなく、中華鍋を使ったチャーハンの作り方を教えてくださいな！」

「中華鍋を？ いいけど、まずは玉砂利を使ったトレーニングからだからね」

「ええ、なんですかそれ」

「ふふ、チャーハン道は厳しいんだよ」

「そ、それはこの夏で思い知りましたけど……」

「……ふむ。やはり、しろのはのチャーハンに対する情熱は、俺の卓球道に似ているな」

「そんな天善さんも、来年こそはイナリさんにリベンジしましょう」

「ああ。俺もトレーニングを続けるから、夏海もトレーニングを怠るなよ」

「はい。わかっています」

「……まったく、夏海ちゃんは体育会系ではないぞ？」

「そう言うのみきさんは良一さんと仲良くしてくださいね？」

「なっ、なぜそんな話になるんだ!？」

「そ、そうだぞ! 俺とのみきは、別に仲が悪いわけじゃない! それより今は、夏の思い出の話だろー!」

「それじゃ、良一さんはマリンジェットで島を案内してくれた時のこと、覚えてますか?」

「ああ、覚えてるぜ。海から灯台近くの浜辺に上陸したりしたよな」
「です。海から見ると、全然違った島の姿が見れて、楽しかったです」

「なら良かったぜ。俺ももう一人妹ができたみたいで、楽しかったしな」

「そ、そうですか? 私もお兄ちゃんができたみたいでした」

「……ちよつと夏海ちゃん、良一ちゃんに今の発言はいけません。どんな行動に出るかわかりませんよ」

その時、ジト目をした藍が背後から夏海ちゃんを守るようにしていた。

「いや、何もしねーよ!」

「まーまー、ああ見えて、藍も悔しがってるのよー? 一緒にマリンジェット乗り回すとか、あたしたちじゃ無理だしねー」

ばつが悪くなったのか、ぶつぶつ言いながらその場を離れた良一に代わって、蒼が夏海ちゃんの正面にやってくる。

「藍さん、蒼さん、また駄菓子屋に行ったら、かき氷作ってください」

「いいわよー。夏海ちゃんが来たら、特別に大盛にしたげる」

「大盛だけじゃないですよ。シロップも練乳もかけ放題です」

「本当ですか? えへへ、嬉しいです……わぷ」

……その時、二人が同時に前後から夏海ちゃんを抱きしめていた。

「……あたしが絶対見つけてあげるからね」

「……はい」

そんな小さな声が、かろうじて俺の耳に届いた。二人とも、どうやら感極まってしまったらしい。

「……ナツミさん、むぎゅゅゅゅ」

「ぎゅゅゅゅ」

その二人が離れると、今度は紬と静久が左右から抱きついていた。

「……ナツミさん、わたし、もう忘れません。ナツミさんは、わたしのズツ友です」

「えへへ、そう言ってもらえると、本当に嬉しいです……」

「次の夏には、三人で灯台に登りましょ」

「そうですね。紬さん、今年は結局登らせてくれませんでしたし」

「あら、そうだったの。紬も意地悪しないで、登らせてあげたら良かったのに」

「むぎゅ!? シズク、人聞きの悪いことを言わないでください!」

「……やっぱり、あの灯台の頂上から見る夕日とか、綺麗なんですよね?」

「ええ、すごく綺麗よ」

「それはもう、ゼツケイなんです!」

「楽しみですね……」

……夏海ちゃんが島の皆と交わす約束は、決して叶うことのないものなのかもしれない。でも、それを語る夏海ちゃんの瞳は輝いていて。とても強く。とても儂く思えてしまう。

「よーし! なっちゃんのために、もう一度出し物をやろう!」

「ああ、あまり話してばかりでも、疲れてしまおうしな」

話の種が尽きてくると、鷗がそう言って立ち上がる。

「だが、出し物をしようにも、小道具がないな。俺のラケットとのみきの水鉄砲くらいか」

「仕方ないな……良一、もう一度瞬間脱衣しろ」

「笑顔で水鉄砲構えるんじゃねーよ! 誰が脱ぐか!」

そして、即興の出し物が始まった。

のみきの水撃から逃げ惑う良一を笑いながら見ていると、夏海ちゃんがふいに俺の方にもたれかかってきた。

それでも、ほとんど重さを感じない。一瞬視界に入った夏海ちゃんの顔は、憔悴しているようにも、甘心しているようにも見えた。

「……夏海ちゃん、大丈夫？」

「へ、平気です。お祭りの日から、覚悟はしてましたし」

気付けば、夏海ちゃんからあふれ出る七影蝶の数もどんどん増えている気がする。それでも、夏海ちゃんは笑っていた。

「……それじゃ、腹話術師カモメによる、スーツケースのスーちゃんの冒険・第二幕のはじまりまじまりー！」

皆も心のどこかで、夏海ちゃんに残された時間がもう少ないことを察していると思う。

けど、誰もそれを口にすることなく、ひたすらに明るく振る舞ってくれていた。

「……楽しいです」

俺にもたれかかったまま、夏海ちゃんが小さな声でそう言う。

「……羽依里さんも、楽しいですよね？」

「……もちろん」

そう言った直後、俺は思わず橘の木を見上げた。このままだと、涙がこぼれそうだったから。

頭上には無数の七影蝶が見える。あれを捕まえて、夏海ちゃんに戻すことができれば、この子と一緒に過ごす時間を少しでも長くできるんだろうか。

……そう考えていた矢先、目の前に一匹の七影蝶が飛んできた。俺は思わず手を伸ばすけど、するりと逃げられてしまった。

——羽依里さん。私、ずっと待っています。この島で。

次に聞こえてきたのは、本当にか細い声だった。たぶん、俺にしか聞こえていない。

——この夏の思い出を持って。ずっと待ちます。

……また、無数の七影蝶が舞い上がる。その度に、隣にいるはずの夏海ちゃんの気配が希薄になっていく。夏海ちゃんが消えていく。

——羽依里さん、泣いちゃ駄目ですよ。

「……うん。大丈夫」

……その時、誰かが俺の隣にやってきて、優しく手を握ってくれた。

……すごく安心する。たぶん、しろはかな。

——羽依里さん、しろはさんと、幸せになってくださいね。

「もちろん、幸せにするよ」

——えへへ、約束ですよ……。

……一瞬だけ夏海ちゃんの光が強くなった。でも、それはまるで口ウソクの最後の灯のように、急激にしぼんでいく。

——羽依里さん、大好きですよ……。

……そして、最後まで淡く残っていた光が弾け、夏海ちゃんの気配が完全に消えた。

出し物をする皆の賑やかな声もいつの間にか止んでいたけど、俺は視線を戻すことができずに、上を向いたまま、いつまでもしろはの手を握り続けていた。

第四十八話・完

第四十九話 8月31日

「……いくぞ、ししんそうおう！」

「青龍！ せい！ せい！ 朱雀！」

「ざく！ ざく！ 玄武！」

「げん！ げん！ 朱雀！」

「ええ、また俺?! ざく！ ざく！ 白虎！」

……朝、港の商店にパンを買いに行ったら、しろはのじーさんたちに捕まってしまった。

「びゃー！ びゃー！ 朱雀！」

「ぎく！ ぎく！ 青龍！」

……かれこれ、一時間近くスクワットをしている。足の感覚なんて、もうとつくになくなっていった。

「……よし、羽依里の上体がふらついてきたし、このくらいにしておいてやろう」

そろそろ体力の限界が近づいてきた頃、ようやく四天王スクワットが終わった。

「ぜえ、はあ……」

俺は思わず膝に手をつけて、肩で息をしていた。まったく、どうしてこんなことになったんだろう。

「……羽依里。聞けば、今日本土に帰るそうじゃないか」

全く息を乱すことなく、じーさんが言う。この人の体力、どうなってるんだろう。

「え？ ええ、まあ……」

「なら今のは、むしろからの餞別の四天王スクワットだ」

「あ、ありがとうございます」

「また来るといい。達者でな」

俺が息も絶え絶えにお礼を言う中、じーさんたちは満足そうな笑みを浮かべながら去っていった。

「せ、餞別は嬉しいんだけど、もつと別な……うう、朝からひどい目に遭った……」

スクワットをやったせいで、せっかく買ったパンも潰れてしまったし。うう、揚げクリームパン、楽しみにしていたのに……。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あいてて……」

重たい足を引きずりながら、加藤家に帰宅する。

「あ、おかえり。ずいぶん遅かったんだね」

玄関で靴を脱いでいると、鏡子さんが出迎えてくれた。

「……うわ、もうこんな時間なんですね」

壁にかけられた時計は既に9時半を回っていた。どうも、四天王スクワットに時間を取られ過ぎてしまったらしい。

「早く朝ごはん食べて、荷造りしないとね」

「そうですね。ちゃちゃつと食べちゃいます」

正直、荷造りにそこまで時間はかからないだろうけど、時間に余裕があるに越したことはない。

「……ところで羽依里君、今日は14時の船で帰るんだよね？」

潰れたパン片手に居間へ向かおうとしたところで、そう呼び止められた。

「え？ はい、その予定ですけど」

「……ごめんね、できたら港まで見送りに行つてあげたかったんだけど、この後どうしても抜けられない寄合が入つていてね」

「いえ、気にしないでください。色々とお世話になりました」

俺は鏡子さんの方に向き直つて、深く頭を下げる。

「ううん。私は大したことしてないしね。帰つたら、お姉さんにお土産話をいっぱいしてあげたらいいよ」

「はい。そうします」

……でも、母さんが興味があるのは思い出話なんかより、しろはとの進具合だと思うけど。どんな子か会ってみたって、しろはに電話する度に言っていた気がするし。

「……それでね羽依里君。夏海ちゃんの部屋なんだけど」

「え？」

そんなことを考えていると、鏡子さんからそう話を振られた。

「できるだけ、今のままにしておくよ。いつ戻ってきてても良いようにね」

「……ありがとうございます」

「いいんだよ。その代わり、羽依里君も島に来た時には、時々掃除してあげてね？」

「もちろんですよ」

「うん。それじゃ、私は出かけるね。羽依里君も、道中気をつけて」

「はい。お世話になりました」

俺はもう一度改めてお礼を言い、その背中を見送った。

……その後、居間で朝食のパンを食べることにした。

「おお、美味しい」

モーニングスクワットで疲れた体に、揚げクリームパンの糖分が染みわたる。見てくれは最悪になっちゃったけど、なかなか美味しいじゃないか。

「……それにしても、不思議だな」

今朝目が覚めても、俺は何故か夏海ちゃんのことを覚えていた。

一方、港の商店で出会った鷗とのみきは、昨夜食堂を出てからの出来事を全く覚えていなかった。たぶん、他の皆も同じだろう。

「……まあ、しょうがないよな」

そういうものなんだろうと自分を納得させて、残りのパンを口に放り込んだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

遅めの朝食を済ませ、荷造りを始める前にガレージへとやってきた。

「よう、相棒」

バイクに近づいて、ポンポンと車体に触れる。思えば、こいつにも色々な人に乗せて、島中を走った気がする。

「お前もこの夏、頑張ってくれたよな。ありがとうな」

一言お礼を言っつて、俺はバイクの鍵につけていた鳥のキーホルダーを取り外す。

「せっかくしろはと買ったペアグッズだし、これを忘れていくわけにはいかないもんな」

俺はそのキーホルダーをポケットにしまい込むと、ガレージを後にした。

「……よし、始めるかな」

自室に戻った俺はボストンバックを引っ張り出して、荷造りを始める。

この夏の間、ずっと使わせてもらっていたタンスから衣類やタオルなどを取り出して、鞆へと詰めていく。

元々持つて来ていた荷物の他にも、パリングルス工作大会で作ったタンバリンとか、ガチャポンで当てたおもちゃとか、色々なものが増えていた。

「せっかくの夏の思い出だし、持つて帰れるものは持つて帰りたいけど……」

何度も衣服を出し入れしたり、荷物の向きを変えたりしてみるけど、なかなか入らない。

「……仕方ない。この辺りの本は置いて行こう」

俺は鞆の隅に押し込んでいたオカルト雑誌や卓球専門誌を引っ張

り出し、部屋の隅に積む。この本、持つては来たけど全く読まなかったし。そのうち天善にでもあげることになろう。

「……うん。こんなものかな」

最後に、忘れかけていた洗面用具を無理矢理詰め込んで、荷造りが終わった。一息ついてから時計を見ると、まだ11時を少し過ぎたところだった。

「いざ集中して荷造りを始めたら、思いのほか早く片付いちやったな」
島でこまめに洗濯することを前提にして、必要最低限のものしか入れてなかったせいかな。

……部屋を見渡しながら達成感に浸っていると、お腹が鳴った。
港でモーニングスクワットをしたせいか、朝食のパンだけでは足りなかったらしい。

「……少し早いけど、お昼ごはんにしようかな」
確か、台所にカップうどんがあつたはず……なんて考えながら、俺は台所へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、いただきまーす」

お湯を注いで、きつちり三分後。きちんと挨拶をして、カップうどんをいただく。

「……バイクじゃないけど、カップうどんにも結構お世話になったよな」

ずるずると麺をすすりながら、そんなことを考える。これも食べ収めだ。

この夏、夏海ちゃんと一緒に津々浦々の銘柄を食べた気がするし、すっかりカップうどんマスターになってしまった気がする。

「……食べ収めと言えば、しろはの料理もしばらく食べられなくなるのか」

思い返してみれば、昨日の送別会の料理が最後だったわけだ。もつと味わっておけばよかった。

「後々、しろはの味が恋しくなったから、チャーハンを冷凍にして送って欲しい……なんて電話をしたら、怒りそうだよな」

……冷凍するなんて、チャーハンに対する冒瀆だし！ とか言いそうだ。

俺はそんなしろはの反応を想像しながら、カップうどんを堪能したのだった。

……昼食を終えた後、最後にお世話になった部屋の掃除をする。

と言っても普段から掃除はしていたし、その掃除もあつという間に終わってしまった。

「えーつと、もう忘れ物はないかな」

俺はすっかり綺麗になった部屋を眺めながら、最終確認をする。

もし忘れ物をして、すぐに取りに来れる場所じゃない。かといって、わざわざ送ってもらうのも鏡子さんに悪いし。念入りにチェックしないと。

「……あれ、そういえばMD入れたっけ」

そう気がついて、もう一度ポストンバックの中を探してみたけど、見当たらない。

「うーん、どこに置いたかな……」

正直、島では全く使わなかったけど、今日は電車での長距離移動もあるし。できたら持っておきたかった。

俺は記憶の糸を手繰りながら、自室から居間、廊下から玄関に至るまで、家の中をくまなく見て回った。

「……ないなあ」

家中を探したけどMDは見つからず、俺は首をかしげながら自室の前に戻ってきた。

「……あ、そうか」

その時、隣の部屋に目が行った。そういえば、MDはずっと夏海ちゃんに貸していたんだっけ。

「確か、何日か前にも聴いていたような気がするし」

俺はそんな結論に至り、夏海ちゃんの部屋のふすまに手をかける。

「……夏海ちゃん、お邪魔します」

そう声をかけてから、ゆっくりとふすまを開ける。

……当然だけど、部屋の中は昨日俺が入った時のままだった。

一番奥の壁際にアクリイとクマのぬいぐるみが鎮座し、机の上にはパリングルスのオルゴールに、桜貝の入った小瓶。そして、泥だらけのボールが置かれている。

確かこれ、リトルバスターズとの練習試合に勝った時のウイニングボールだっけって言ったっけ。

「……それにしても、この部屋もすごいなあ」

部屋に置いてある品物一つ一つに、夏海ちゃんの大切な思い出が詰まっている気がした。

「お、あった」

物思いにふけりながら部屋の中を見ていたら、目的のMDはすぐに見つかった。

入口に近い畳の上に、一冊の本と一緒に置かれていた。

「あれ、この本って」

MDを手を取った拍子に、その本が目に残る。なんとなく、表紙に見覚えがあった。

「……これ、絵日記帳じゃなかったっけ」

確か夏休みの初め、自由研究のお題に悩んでいた夏海ちゃんに、藍が渡したやつだ。

「……ちよっと、見てみようかな」

こういうのって見ちゃいけないっていうけど、俺は自然にページを開いてしまっていた。

——7月29日。

今日から、絵日記を書き始めることになりました。藍さんとの約束なので、夏休みの思い出を書き残していこうと思います。

——7月30日。

しろはさんの出店の手伝いをしました。しろはさんはすごく料理が上手で、優しい人です。

スイカバーがすごく好きみたいで、この日のスイカバー早食い競争では、6本も食べていました。すごいです。

……絵日記ということで、6本のスイカバーを手に持った笑顔のしろはが描かれている。こうやって絵にすると、すごい光景だなあ。

——7月31日。

今日は島の皆さん、登校日でした。皆さんの制服姿とか初めて見たので、すごく新鮮でした。

……船に乗って行く皆と、それを見送る俺と夏海ちゃんが書かれていた。なんでこの絵の俺、泣いてるんだろう。

——8月1日。

今日から8月です。暑さに負けず、島の皆さんと一緒に缶蹴りをしました。初めてだったですけど、皆さんの連携がものすごくかったです。鷹原さん、ボコボコにされていました。

……地面に大の字になって倒れている人物が描かれていた。文章から見て、これって間違いなく俺だよな。

——8月2日。

鷗さんが駄菓子屋でボトルシップを作っていました。

私も少しだけお手伝いしましたが、鷗さんはものすごく手先が器用で、感動してしまいました！

ボトルシップを完成させて、高らかに掲げている鷗の絵が描かれていた。今にもその声が聞こえてきそうだった。

——8月3日。

今日は鷗さんとペアを組んで、島の皆さんとビーチバレーをしました。もう少して勝てそうだったんですが、負けてしまいました。悔しいです。

でも、夜には紬さんがお泊りに来てくれました。楽しかったですけど、この絵日記を興味津々に覗き込んでくるので、隠すのが大変でした。

……絵のスペースには、夏海ちゃんが鷗と一緒にビーチバレーをしている絵と、紬と一緒に布団に入っている絵が半分ずつ描かれている。それにしても夏海ちゃん、絵も上手かったんだ。

「ビーチバレーかあ。少し前の話なのに、随分懐かしい気がするな」
俺も絵日記の内容を確認しながら、ゆっくりとページをめくっている。

——8月8日。

今日は鷹原さんが蒼さんたちとテートなので、良一さんとマリンジエットで島巡りをしていました。皆さんには色々と言われているみたいですけど、良一さんは優しく、すごく頼りになりました。

……マリンジエットに乗った良一と夏海ちゃんの絵が描いてある。本人もすごく喜んでた記憶があるんだけど、なんか良一に負けた気がして、悔しい。

——8月10日。

なんでも鑑定隊のイベントでは、紬さんが優勝しました。優勝賞品は鷹原さんのテートらしいです。えへへ、どちらも頑張ってたんださい。

……皆に祝福される紬と、一人がつくりとうなだれている俺の絵が描かれていた。ここまであからさまだったかな。

——8月11日。

海老チャーハンがトラウマになりそうです。鏡子さんはクマゼミの方が美味しいんですって。ううう。

……冒頭でいきなり泣いていた。この日、なんかあつたけ。俺としてはバイク事故が印象に残りすぎてるんだけど。

でも、絵日記の中身はというと、お宝探しのイベントについて書いてあるだけで、バイク事故には触れてなかった。

——8月13日。

実はこの日から呼び方を変えてみました。えへへ、気付いてくれるでしょうか。

そして今日は皆さんが水鉄砲大会を開いてくれました。ため池全部を使ったイベントは楽しかったですけど、のみきさんが強すぎでした。

……絵のスペースには、鬼の形相をしたのみきが、ため池の向こうから俺たちを狙い撃つ様子が描かれていた。確かに、鬼のように強かった記憶がある。まるでのみ鬼だった。

——8月14日。

キャンプに行っていたので、次の日に書いてます。私、ズルしてますね。

皆さんとのキャンプ、すごく楽しかったです。でも、鷗さんが始めた怪談話だけは、怖すぎでした。

……そこには爪が伸びて目がつりあがった、まるで妖怪みたいに誇張された鷗の絵が描かれていた。いくらなんでも、ここまでしなくても。

ちなみに、翌日の絵日記にはイナリが尻尾で金魚を豪快に打ち上げてる絵が描かれていた。躍動感がありすぎて、逆に笑えてくる。

——8月16日。

羽依里さんは今日、鷗さんとデートらしいです。近くの小島に向

かったという目撃情報もありました。

しろはさんが凄く心配していましたし、羽依里さん、ハンサーしてください。

……なんとなく紬テイストが入っている気がする。夏海ちゃんなの、マンネリ化対策だろうか。

一方で、カウンターの向こうで悲しみに暮れるしろはの絵が描かれていた。まさか、ここまで打ちひしがれていたのかな。

——8月17日。

羽依里さんはしろはさんとデートに行ってしまったので、私は良一さんや天善さんと秘密基地で卓球をしていました。

するとそこに蒼さんたちが乗り込んできて、私を拉致……いえ、助け出してくれました。

……書いている途中で、藍に見せる時のことを考えてしまったんだろうか。内容が修正されていた。

ちなみに、この絵は秘密基地に空門姉妹が乗り込んできたシーンなんだろうか。その二人が仁王立ちして、良一と天善が地面に突っ伏している。すごい光景だ。

……その後も絵日記は続き、リトルバスターズの皆がやって来て、皆で野球の練習をやって、練習試合に勝つまでの様子が描かれていた。

「この辺、余白まで文章がはみ出ちゃってるよ。よっぽど書きたい内容が多かったんだろうなあ」

それからは台風避難を兼ねたお泊り会、皆でやった卓球大会と、記憶に新しい出来事が綴られていた。

……本当に毎日がイベントだらけだ。こういうのって、似たような日が続くと書く内容に困るっていうけど、この絵日記の場合はそんな心配は無用みいだった。

そんなことを考えていると、あるページの内容を見て、手が止まる。

——8月26日。

昨日の夜、羽依里さんに私の秘密を話しました。羽依里さんはありのままの私を受け入れてくれたようで、すごく安心しちゃいました。残りの夏休み、楽しみたいです。

……鏡子さんを交えて蔵で話をした、あの日のことが書いてあった。この日は絵も描かれてないし、心なしか文字も震えている気がする。

……思えばこの頃、あの子は自分という存在がいつ消えるかもしれない恐怖と戦っていたはずだ。

それでも、そんな感情は一切表に出さずに、毎日の輝かしい思い出だけをこの絵日記に綴っていたんだ。

俺はページをめくる。

——8月28日。

夏休みのラスボスをやったので、晴れて皆さんと一緒に遊園地へでかけました！

……つい先日。皆と一緒に行った遊園地での出来事が書いてあった。絵も気合が入っていて、乗り物もしっかり描かれている。

でも、この次の日に夏海ちゃんは消えてしまったから、絵日記もこの日で終わっている……はずだった。

「……あれ？」

——8月29日。

今日は鷗さんから借りた浴衣を着て、皆さんと島の花火を見ました。

しろはさんには悪いですけど、少しだけ、羽依里さんとデートしちゃいました。他の皆さんもデートしてるんですし、私もちよつとくらい、いいですね。えへへ。

……何も書かれていないだろうと思っていたページには、皆で花火を見上げる絵と共に、そんな文章が添えられていた。

え、ちよつと待って。デートって？

……あの時、やけに積極的だとは思ってたけど、まさかそんな風に思っていたなんて。

いやいや、それよりもこれ、いつ書いたんだろう。

俺は妙に気恥ずかしい思いに駆られながら、ページをめくってみる。

——8月30日。

今日は島の皆さんが、私の送別会を開いてくれました。

挨拶はすごく緊張しましたがけど、皆さんの出し物が凄く面白くて、お腹が痛くなるまで笑ってしまいました。

こんな楽しい夏を過ごさせてくれた皆さんのことが、大好きです。

……次のページには、そんな文章と一緒に、神域で皆と一緒に笑っている俺や夏海ちゃんの絵が描かれていた。

……どうしてこの絵日記の続きが書かれているのか、気になってはいたけど。

最後のこのページを見て、どうでもよくなってしまった。

……これは夏を全力で駆け抜けた、一人の少女の記憶だった。

この島で感じた、夏の眩しさ。俺や島の皆と一緒に過ごした、かけがえない時間。それらを全部まとめて詰め込んだ絵日記。

読んでいるだけで、小さい頃に忘れてしまった何かを思い出させてくれそうな、魔法の絵日記だ。

「……夏海ちゃん、これはずるいよ」

俺はうつすらと浮かんでしまった涙をぬぐって、ゆつくりと絵日記帳を閉じる。

姿は見えなくても、あの子は島のどこかにいるんだろう。

そして、その思い出もこうして、この島と共にあるんだ。

俺は心の底から温かい気持ちになりながら、夏海ちゃんの部屋を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ごめんくださいーい」

……廊下に出たところで、玄関から声がしているのに気がついた。
え、誰だろう。

「はーいー!」

玄関に出てみると、しろはがやってきていた。

「あれ、しろは?」

「……よかった。呼んでも返事がないから、もう帰っちゃったのかと思っただ」

「いや、予定通り14時の船だよ。それより、どうしたの?」

「えっと、その……羽依里に渡したいものがあって」

「え、渡したいもの?」

言われてみれば、しろはは両手を後ろに隠している。何か持っているんだらうか。

「うん。ちよつとそこに座って、目をつぶってほしいの。私が良いって言うまで、目を開けちゃ駄目だよ」

「ああ、わかったよ」

俺はしろはに言われるがまま、玄関口の上がり框に腰を下ろし、目をつぶる。

「そ、そのまま動いちゃ駄目だからね……」

「……?」

……何をくれるんだらうと思っていると、肩に手を置かれた。

「……んっ」

……直後、唇に柔らかい感触。

「……!?!」

思わず目を開けると、顔を赤くしたしろはが目の前にいた。

「……め、目を開けちゃ駄目って言ったのに」

しろははそう言いながら、顔を真っ赤にしたまま俺から離れる。

「え、もしかして今」

思わず自分の唇に手を当てる。俺は今、しろはからキスされたんだろうか。

「え、その、しろは、なんで……？」

……嬉しさと驚きと、色々な感情が混ざり合って、上手く言葉が出てこない。

「だ、だって、遊園地の時は羽依里からしようとしてくれたのに、結局できなかったし、その、昨日もなんとなく元気なさそうだったし、今日が夏休み最後だって思ったら、いても立つてもいられなくなっただというか、えっとその」

しろはは耳まで赤くして、目を白黒させながら言い訳を並べていた。

……やばい。可愛すぎる。

「し、しろは、もう一回。今度は味わうから」

「味わわないで！ もう駄目！」

しろはを抱き寄せようとしたけど、素早くかわされてしまった。

「わ、忘れず見送りには行くから。それじゃ！」

「あ」

呼び止める間もなく、しろはは身を翻して外へ飛び出していったしまった。

「……恥ずかしすぎるのはわかるけど、そこまで全力で逃げなくても……」

俺はがつくりと肩を落とす。

……でも、ようやくこの夏、しろはとキスができた。

俺は天にも昇る気持ちになりながら、開け放たれたままの玄関を見つめ、キスの余韻にたつぷりと浸っていたのだった。

「……はっ。もうこんな時間だ」

そんなこんなしていると、いつの間にか時計は13時近くになっていた。そろそろ出発しないと。

俺は荷物の入った鞆を肩にかけて立ち上がる。まだ船の時間まで少し余裕があるけど、早く動くに越したことはない。

「……お世話になりました」

俺は加藤家の門をくぐったところで一度振り返り、家そのものにお礼を言う。

「……よし、いこう」

そして、まだまだ強い日差しと蟬の声を浴びながら、港へと向けてゆつくりと歩き出す。

この夏、何度となく通った道だけど、今は何となく足が重い。心のどこかに、島を離れたくない気持ちがあるのかもしれない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、来たわよー」

港に到着すると、昨日言っていた通り、皆が見送りに来てくれた。た。

「皆、本当に見送りに来てくれたんだ」

「当たり前です。泣かすって言ったじゃないですか」

ちよつと藍、その言い方は語弊があるから止めて欲しいんだけど。嬉しいような恥ずかしいような、そんな気持ちになりながら、わざわざ集まってくれた皆の顔を見る。皆一様に笑顔だった。

「ポンー」

その時、足元で聞き慣れた声があった。見てみると、イナリがいた。「おお、イナリも見送りに来てくれたのか。ありがとうな」

「ポンポン」

お礼にイナリのお腹をなでてやると、嬉しそうな声を出していた。「……羽依里、イナリばかりじゃなく、しろはにもかまってあげなさ

「いよー」

「そうですね。しろはちゃん、羽依里さんとの別れが寂しくて、ここ数日は毎夜のように枕を濡らしていたそうじゃないですか」

「べ、別に全然寂しくないし！ 枕も濡らしてないし！」

しろはは空門姉妹にそう話を振られ、首をぶんぶんと振って全力で否定していた。

そんな彼女を見ていると、俺もどうしてもさっきのキスを思い出してしまう。

「ほらほら、せつかくだし、お別れのキスとかしないのー？」

「そのままぶちゅつとやっちゃってください」

「しないしー！」

俺の胸の内を知ってか知らずか、双子が同じ顔ではやし立ててきた。それに対して、しろはと声をハモらせながら全く同じ反応を返してしまった。

……というか、しろはとのキスはもうやったんだけどさ。

……でも、冷静になって考えると、扉が閉まっているとはいえ、玄関でキスしてしまうなんて。

もし誰か尋ねて来たら、恥ずかしいなんてものじゃない。それこそ、噂は一瞬で島中を駆け巡るだろう。

そんなことになったら、噂は確実にしろはのじーさんの耳に入つて、俺は二度と鳥白島の土を踏めなかったかも……。

……そこまで想像して、急に寒気がした。誰にも見られてなくて、本当に良かった。

「……むぎゆ？ タカハラさん、顔が青いですよ？」

「え？ いや、大丈夫だよ」

……その時、紬の声で現実を引き戻された。

「ところで紬、そのぬいぐるみは？」

不思議そうに俺の顔を見ていた紬は、何故かクマのぬいぐるみを抱いていた。

「クマのツムギちゃんです！ 一緒にタカハラさんのお見送りをしようと思ひましてー！」

「ああ、確か灯台の中にいた子だっけ」
「そうです！」

ニコニコ顔の紬は例のリボンで髪をポニーテールにしていた。いつものツインテールも似合ってるけど、こっちの髪型も良いと思う。「それで、紬からパイリ君に贈り物があるのよね？」
「はい。タカハラさん、これをどうぞ！」

潮風になびく金髪を見ていると、唐突にそう言われて、小さな白いクマのぬいぐるみを渡された。

「え、これは？」

「クマのモンザエモンさんです！」

「ふふ、浜辺に流れ着いていたのを、紬と一緒に修繕したのよ」

「はい！ しました！」

「そうなんだ。ありがとう」

言われてみれば、所々に縫い直したような後がある。そこまで大きいものでもないし、せっかく紬がくれるって言うんだから、ありがたく受け取っておこう。

「……わたしと違って、大事にしてください」

……ちよつと紬、その発言は色々と問題があるから。ほら、しろはが冷たい視線を送ってきてる。

「鷹原、俺からも贈り物がある。受け取ってくれ」

そんなしろはに弁解するより早く、今度は天善がピンポン玉を渡してきた。

「これを俺だと思って、お前の部屋に置いてくれ」

「あ、ああ。ありがとう。嬉しいよ」

どうやら、試合用のスタースリーみたいだ。天善らしいと言えば天善らしい。

これも、せっかくくれるっていうんだし、断る義理はない。正直、そこまで嬉しくはないけど。

「……紬は良いとして、天善は変なものを渡すんじゃない。鷹原が困っているじゃないか」

その様子を見て、のみきが目くじらを立てていた。そんな彼女の背

後では、良一が何かを慌ててポケットにしまっていた。

ちらつとしか見えなかったけど、ミニ四駆みたいだった。もしかして、先日崖下に転落していったハイリマックス号を見つけ出してくれたのかもしれない。

「その……良一も元気だな」

「お、おう。羽依里もな」

良一はポケットの中身を俺に渡したような顔をしていたけど、のみきの目が光っているので無理なようだ。

「そうだ。来年こそ、水泳で羽依里に勝ってみせるぜ。いつまでもシティーボーイに負け続けてたら、島の人間として恥ずかしいしな」

「ほう。悪いけど、まだまだ良一に負けるつもりはないからな」
部活をやめて久しいけど、バタフライしかできない良一に負けるつもりは微塵もない。

「……なら、来年はマリンジエツトで勝負しようぜ！」

「え、マリンジエツト!？」

「ああ。来年の夏には、鷗に頼んで鳥白島一周マリンジエツトレースを開催してもらおう。それで勝負だ！」

「いやいや、それはいくらなんでも……なあ鷗」

「面白そう！ おかーさんに相談してみようかなあ」

良一の唐突な発言に、スポンサー様の娘は意外と乗り気だった。まあ、楽しそうではあるけどさ。

「そういうえば、鷗も今日帰るんだよな？」

「うん！ でも、私はおかーさんと一緒に帰るから、もう一つ後の船だね！」

「あ、そうなのか」

てつきり俺と同じ船かと思ったんだけど。

「ちなみに、私は最終便で帰るのよ。少しでも長く、紬と一緒にいたいから」

静久は紬に抱きついたまま、笑顔でそう言っていた。彼女はほぼ毎日本土から島に通ってきてるし、実家も近いんだろう。

「夏休みが終わったら、秋の文化祭が終わるまでは忙しくなるの。し

ばらくは袖にも会えなくなるし、寂しいわ」

確か、美術系の大学だつて言っていたし、文化祭とかものすごく力を入れているのかもしれない。

「……確かに、鷗や鷹原が帰ってしまうとなると、この島も寂しくなるな」

その時、のみきが少しだけ愁いを帯びた顔をしていた。のみきもこの夏の間、鷗と寝食を共にしていたはずだし、やっぱり寂しいんだろう。

「そういえば、寄合があるって言っていたけど、のみきは行かなくて良かったのか？」

「今回は秋の芸能祭へ向けての話し合いでな。正直、私はそこまで関係がないんだ」

「え、そんなイベントがあるのか？」

「ああ。秋には芸能祭の他に、島の運動会もある。まだまだ忙しいんだぞ」

そう言いながらも、のみきは先程とは打って変わって嬉しそうな顔になった。やっぱり、充実しているんだろう。

「……なら良いんだけど。のみきにも、色々世話になったな」

「なに、礼を言われるようなことはしていない。それより本土に帰っても、定期的に島の皆へ連絡をくれると嬉しい」

「ああ、わかってるよ」

「彼氏さんなんだから、しろにはちよくちよく電話してあげなさいよー？」

その時、空門姉妹が笑顔で会話に入ってきた。

「その点は大丈夫。毎日電話するから」

「……うわ、真顔で言ってますよ。しろはちゃん、これはやりかねませんね」

「迷惑だし！」

藍の言葉を真に受けたのか、しろはが叫んでいた。いや、さすがに冗談だけだよ。

「まあ、時々はあたしたちにも近況報告しなさいよねー」

「あ、それで思い出したんだけどさ……蒼、以前教えてもらった電話番号、変わってたりしないよな？」

「へっ？ 変わってないけど？」

「春にも何度か電話かけたんだけど、繋がらないからさ」

「えー？」

蒼は首をかしげていた。俺もすっかりと番号を確認したはずなんだけど。

「……実は、蒼ちゃんに都会の危ない情報が入らないように、羽依里さんちの電話番号は着信拒否にしてあります」

疑問に思っていると、藍がそう言っつうすら笑いを浮かべていた。

「ちよつと藍——！ 何してくれちゃってるの——!？」

「……そういうことだったのか。言われてみれば、空門家の電話は最新式のコードレスホンだった気がする。」

「……わかりました。蒼ちゃんがそこまで言うのでしたら、そのうち解除しておいてあげますよ」

「……そのうちなのか。かなり不安なんだけど。」

「……そうだ蒼、ひとつだけ頼みがあるんだけどさ」

「え、なに？」

「また夏になったら、山の祭事をしてほしいんだ。来年も、その次もさ」

「そ、そりゃ、空門のお役目だし？ 言われなくても続けるけど……突然どうしたの？」

「いやその、特に理由はないんだけど……なんとなくさ。お願いするよ」

「りよーかい。あたしに任せときなさい」

やっぱり、昨日の記憶はないんだろうけど、そんな蒼の笑顔が頼もしかった。

なんとしても、蒼には夏海ちゃんの七影蝶を見つけ出してほしい。

……その後も、残された時間を惜しむように、皆と他愛のない話を

する。

何度経験しても、島を離れる時はつらい。名残惜しくて、自然と涙がこぼれそうになる。

「……羽依里、泣いちゃ駄目だよ」

「わ、わかつてるよ」

そんな胸の内を感じ取ってたのか、しろはが傍にやって来て、諭すように言う。

「……私も我慢してるんだから」

「え、何？」

先の言葉に続けて、しろはが何か呟いたような気がしたけど、声が小さすぎて聞き取れなかった。

「……なんでもない。それより、楽しい夏休みだったね」

「ああ、俺も楽しかった」

「その、道中気をつけて。ご飯はしっかり食べないと駄目だよ」

「ありがとう。しろはも夏バテとかしないように、体調気をつけてな」「うん」

「……ほら、今こそお別れのチューですよ」

「ひゅーひゅー！」

「……だからしないし！」

そんな俺たちを見て、仲間達が一斉に冷やかしてくる。やっぱり、こんなやりとりをするこの時間が、すごく心地いい。

『宇都港行き、まもなく出港いたします』

……その時、船のアナウンスが流れる。

同時に、不覚にも視界が滲んでしまった。

「……皆、ありがとう。それじゃ！」

俺は皆に頭を下げた後、涙目になっているのを見られるのが恥ずかしくて、急いでタラップを渡る。

そのまま船内の階段を走るように登って、一気にデッキへと移動する。ここなら、多少涙目になっても気づかれないだろう。

……デツキから皆に手を振っていると、また少し涙が出てきた。俺、こんな涙もろかつたっけ。

「……見てくださいあれ。絶対泣いてますよ」

思わず手の甲で顔をぬぐったのを見られたらしく、藍が俺の方を指差しながらほくそ笑んでいた。

「な、泣いてないぞ！ 目にゴミが入っただけだから！」

「はいはい、そういうことにおきますよ」

我ながら苦しい言い訳だと思うけど、今はそれが精一杯だった。

……やがて、船はゆっくりと港を離れていく。

俺は皆の声が聞こえなくなるまでデツキに立ち、手を振り続けた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

向きを変えた船がゆっくりと港を離れはじめ、皆の姿が完全に見えなくなると、俺の気持ちも少し落ち着いてきた。

「……そろそろ船内に入ろうかな」

なんだかんだで真昼間だし、いくら風があるとは言え、デツキは暑い。い。

……そう思っている間にも船は進む。気がつくと、防波堤に立つ赤い灯台が見えてきた。

そういえば以前、なんであんな陸地から離れた場所に灯台があるのか不思議に思っ、しろはのじーさんに聞いたことがある。

じーさん曰く、あの赤い灯台は反対側にある白い灯台と対になっていて、港口を表す灯台らしい。

それぞれ違う色の光を放つので、夜に港へ入る船はそれを目印にするんだとか何とか……。。

「……………え？」

そこで、俺の思考は停止する。

……………その、今まさに通り過ぎようとしている、赤い灯台。

……………そのたもとに、あの子が立っていた。

小さな体を思いつきり伸ばして、満面の笑みで手を振ってくれている。

「……………夏海ちゃん!?!」

当然、かなりの距離があるし、聞こえるかわからなかったけど、その名前を呼ばずにはいられなかった。

短めの髪と、見覚えのある蝶の髪飾りが太陽の光を反射してキラキラと輝いている。間違いない。あれは夏海ちゃんだ。

「夏海ちゃん!」

俺はもう一度その名を叫び、デッキの柵から身を乗り出さんほどの勢いで手を振り返す。

「夏海ちゃん、俺は忘れないから！　また来年！　一緒に遊ぼう！」

——はい！

実際に声は聞こえないけど、小さな口がそう動いていた気がする。

「……………うわっ!？」

……………その時、強い風がデツキを通り過ぎ、俺は思わず目をつぶってしまった。

「あれ……………?」

……………次に目を開けた時、その灯台には誰の姿もなかった。

……………もしかして、今は幻だったのかもしれない。

けど、この夏の終わりに、あの子はもう一度だけ姿を見せてくれた。俺はそう思うことにした。

そして、俺は覚えておかないといけない。

大切な皆の他に、もう一人、一緒に夏を過ごした女の子がいたことを。

そう心に刻みながら、鳥白島の島影が霞んで見えなくなるまで、俺はいつまでも海を見つめていた。

……………毎日が眩しくて、懐かしくて、ほんの少しだけ不思議な、俺の夏休みが終わりを告げた。

第四十九話・完

第五十話 エピローグ

おんなのひとが、こっちにやってきた。

あおいどうぶつをつれてる。

……どこかで、あったことあるような。

……おもいだした。あおさんだ。

あおさん、かきごおりください。

……あおさんは、こまったようなかおをしていた。

それから、わたしはみちびかれるように、なないろのひかりについていく。

……そして、ひかりのなかにのみこまれた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……視界を覆う白い光。

その先に見えてきた、青い空、青い海。その全てを飛び越えて。

私は誰かに導かれながら、青く染まった世界を進む。

すると、どこか懐かしい街並みが見えてきた。

……どうして懐かしいんだろう。
不思議に思っていると、また視界が真っ白になった。

……やがて、ずつしりと重い体の感覚が戻ってきた。
目を開けると、真っ白い天井。

壁も、視界の隅に見える扉も、全部が白かった。
身体がすごく重い。何とか動かそうとすると、とたんに痛みが走る。

……私の身体には、色々な管がつながっていた。

……その時、ドアが開いて、白い服を着た女の人が入ってきた。看護師さんだ。

「あ……」

私は反射的に声を出そうとするけど、のどがカラカラで、ほとんど声が出なかった。

なんとか首を動かすと、やっと気づいてもらった。

でも、看護師さんはすごく驚いて、そのまま部屋の外に走っていつてしまった。

……しばらくして、何人もの看護師さんや、先生がやってきた。

色々調べられたり、質問されたりしたけど、よく覚えてない。皆知らない人だった。

その先生たちをかき分けて、女の人が出てきた。

この人は知ってる。おかーさんだ。

……おかーさんは私に抱きついて、まるで子供みたいに泣いた。

……もう。どつちが子供だかわからないよ。おかーさん。

……それから何日かして、ようやく私も声が出るようになってきた。

……あなたは何年も眠り続けていたのよ。
おかーさんは、そう話してくれた。

……あのね。おかーさん。
私、夢を見ていたの。すごく優しい皆と、一緒に夏休みを過ごす夢。
うつすらと思いだせる、あの島での日々は本当に楽しくて。

あの夏のおいや、蝉の声、皆の笑い声。
どこか、霞みがあったようになってしまっているけど。

——あの眩しさだけは、忘れなかった。

……きつとまた、会えるわよ。

だから、リハビリ頑張りなさいね。

おかーさんはそう言つて、笑いかけてくれた。

……えへへ。頑張る。

それでね、おかーさん。

その島の名前は——

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……あれから何度も夏が巡って来たけど、夏海ちゃんと出会うことはなかった。

最近七影蝶ですら、ほとんど見なくなった気がする。

その数自体が減ったのか、俺が見えなくなったのかはわからないけど。

もちろん、夏海ちゃんのことを忘れないように努めたけど、8年という歳月は少しずつ、俺の思い出を薄めていった。

「……羽依里、こんなところにいたの?」

船のデッキに立ち、段々と近づいてくる鳥白島を眺めていると、しろはから声をかけられた。

「……あれ。羽未は？」

「……後ろにいるよ」

「えっ？」

「どーん！」

……直後に元気な声がして、軽い衝撃が走る。見ると、羽未が俺の腰辺りに抱きついていていた。

「羽未、外は暑いんだから、おかーさんと一緒に船の中に居たらいいのに」

「えー」

「羽未ちゃん、おとーさんと一緒に居たいんだって」

「そっか。嬉しいこと言ってくれるな」

俺は羽未を優しく抱き上げる。目に入れても痛くない、大事な大事な愛娘だ。

「おお、羽未もだいぶ重くなったな」

「当たり前だよ。羽未ちゃんも来年から小学校なんだよ」

「そう言えばそうだったな。あの夏から、もう8年か」

「何が？」

「いや、なんでもないよ」

……その流れゆく歲月の中で、俺は自然としろはと結婚して、羽未を授かっていた。

島に移住してからの、結婚や子育て。全部が手探りだったけど、しろはや島の皆に助けってもらいながら、なんとかやっている。

「これから学費も必要になるし。おとーさん、もつと頑張らないとね」

「わ、わかってるよ」

思わず苦笑いを返す。もちろん、しろはも俺にとって大事な妻だ。

「……あれ？ 何の音だ？」

そんなことを考えていると、船のエンジン音が近づいてきた。

「うー……み……！ し……ろ……は……！……」

何だろうと思っていると、海の方から聞きなれた声があった。思わず見てみると、一艘の漁船がフェリーと並走していた。

「あ、ひーじーじー……」

羽未が柵に張り付くようにしながら、そう叫んでいた。太陽の光が海面に反射してよく見えないけど、あのシルエットはしろはのじーさんで間違いない。

「ひーじーじは、今日も頑張っているぞお——！」

「ひーじーじ、かつこいいー！——！」

「お、おじーちゃんってば、恥ずかしい……！」

ニコニコ顔で手を振る羽未とは裏腹に、俺としろはは恥ずかしさのあまり、頭を抱えた。

「おい、じーさん！ さすがにフェリーに近づきすぎだ！ 離れようぜ！」

そんなじーさんの隣に立って、必死に止めている半裸の男性。声かちらして、おそらく良一だろう。

良一も漁師見習いとしてじーさんに弟子入りしたはずだけど、なかなか難儀してるみたいだ。

「やはり、孫はいいな……気をつけて帰るんだぞお——！」

しばらくして、騒がしく漁船が離れていった。あのじーさん、もう80歳はゆうに超えてたはずなんだけど。元氣すぎだよな。

……それにしても、周りの観光客は何事かといった表情で俺たちを見てくるし。恥ずかしすぎて、穴があいたら入りたい。

『まもなく鳥白島。鳥白町漁港に到着いたします』

……その時、到着を知らせる船内アナウンスが流れた。

「……良かった。天の助けだ」

俺は近くに置いていた荷物を持つと、二人にも声をかけて、そそくさと下船の準備を始めた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

船が着岸した後、賑やかに話をする学生たちや観光客に混ざって、俺たち家族も港に降り立つ。

それと同時に、容赦ない日差しと蟬の鳴き声が降り注いでくる。

「うわ、羽未もすっかり帽子被るんだぞ?」

「うん」

「羽依里、荷物多そうだね。少し持とうか?」

「いや、これくらい大丈夫だよ」

俺は着替えやらが入った鞆を背負った後、両手いっぱい荷物を持ち上げる。

「……結構な荷物になっちゃったね」

「鳥じゃ手に入らないものばかりだし、仕方ないよ」

実はここ数日、本土での用事がてら、家族旅行にでかけていた。今はその帰りだったりする。

「それじゃ、荷物はおとーさんに任せて、羽未ちゃんはおかーさんと手を繋ごう?」

「でも、おとーさんかわいそう……」

そんな中、しろはと手を繋ぎながら、羽未が心配そうに俺の方を見てくる。

「大丈夫だぞ。こう見えておとーさん、力持ちだからな」

そう言いながらも一度、俺は両手に持った荷物を肩くらいまで掲げてみせる。

「うみもてつだう」

「え?」

大丈夫な様子を見せても、羽未はそう言ってしろはの手を離し、俺の方にやってきた。

「うーん、でもなあ……」

「羽依里、羽未ちゃんがお手伝いしたいって言ってるんだし、軽いのも持たせてあげたら?」

俺が渋っている、しろはがそう進言してきた。確かに、羽未でも持てそうなくらい軽い荷物もあるにはあるけど……。

「それじゃ、おとーさんとのジャンケンに勝ったらな」

「わかった」

ただ持つてもらっただけじゃ面白くないし、少し遊んでみよう。

「よーし、いくぞー」

俺は持っていた荷物を地面に置いてから、無邪気に握りこぶしを作る羽未と対峙する。

「じゃーんけーんー!」

「ぼん!」

「ふっふっふ。またおとーさんの勝ちだぞ」

「おとーさん、つよい……」

結局、5回じゃんけんをやって、俺の全勝。

「羽未は顔に出るからな。ぐーを出すときは、ぐーつてさ」

「うううううっ!」

羽未はよほど悔しいのか、俺の腰辺りをぽかぽかと殴り続けている。大して痛くないし、むしろ心地いいくらいだ。

「全く、おとーさんは意地悪だね」

「うん……」

そんな我が子の様子を見かねたのか、しろはが羽未の近くにやってきた。

「そんなおとーさんは、しばらくチャーハン抜きだね」

「えええ、そんな」

ちよつと待って。可愛い娘に荷物を持たせなかったらチャーハン抜きとか、どんな家庭だろう。

「それが嫌だったら、意地悪しないで羽未ちゃんにも荷物持たせてあげて」

「わ、わかったわかった……じゃあ、羽未にはこの袋を持ってもらおうかな」

「うん!」

俺はいくつかの小物が入った袋を手渡す。これなら軽いし、羽未でも持てるはずだ。

「手が疲れたりしたら言うんだぞ?」

「だいじょうぶー!」

荷物を任されたのがよほど嬉しかったのか、羽未はそのまま笑顔で走り出す。

「ちよつと羽未ちゃん、急に走ったら危ないよ」

そんな羽未を、しろはが慌てて追う。なんとも微笑ましい光景に癒されながら、俺も二人の後に続いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

皆さんと太陽が照りつける田舎道を、三人で並んで歩く。

その時、道端にひっそりと佇むオブジェが目に入った。

変わった色合いをした球体で、一部が滑り台みたいになっている。季節によっては、遊具のように遊べるかもしれない。

「確か、これも静久が作ったんだよね」

「ああ、そのはずだよ」

……静久は美術系の大学を卒業した後、外国での数年間の修行を経て、現代アートの先駆者となった。

今はなんとかいう名前でアーティスト活動をしていて、国内外で絶大な人気を誇っているらしい。

数年前から『私を育ててくれたこの島に恩返しをしたいの』と言って、鳥白島の各所に無償で作品を設置してくれている。

近年はそれ目当てに島を訪れる観光客も増えているし、作品自体も不思議と島の景観にマッチしている気がする。

「まるでおっぱいみたいな形をしているのもあるけど、島民は何とも思っていないのかな……?」

港の広場や道端など、できるだけ島の自然を壊さないように配慮してくれているし、あまり気にしていないのかも。

「……羽依里、どうしたの?」

「え、いや、なんでもないよ」

思わず率直な感想が口から洩れてしまったみたいだ。しろはが不

思議そうに俺の顔を覗き込んできた。

「あー、羽依里、しろしろー！」

……その時、前方から元気な声が飛んできた。

見てみると、白い帽子をかぶった鷗がスーツケースを引きながら、向こうからやってきた。

「おおー、羽未ちゃん、久しぶり！」

そんな鷗は羽未に気づくと、そのまま駆け寄って全力で抱きしめる。

「……かもめさん、くるしい」

「ごめんねー。羽未ちゃんが可愛くって、つい」

鷗は羽未の訴えも気に留めず、猫なで声で抱擁を続ける。きつといつものように、羽未パワーを補充するつもりだ。

「……ふはっ」

しばらくして自由の身になった羽未は、身の危険を感じたのか、そのまましろはの背後に隠れる。

「あちゃー。怖がらせちゃったかな」

「気にしないでいいぞ。それより鷗、お前も島に来てたのか」

「うん！ 明日から夏休みだしね！ 今年もサマーキャンプやるよー！」

鷗は右手を空高く突きあげながら、気合を入れていた。

……言われてみれば、明日から夏休みか。

思い出せば、お昼過ぎの船なのに、たくさんの学生さんが乗っていた気がする。

きつと彼らは、明日から始まる長い夏休みに胸躍らせているに違いない。

学校を卒業して久しいけど、俺はどこか懐かしい気持ちになっただ。

「……ねえ、サマーキャンプって？」

その一方で、聴き慣れない単語に羽未が反応していた。おずおずとしろはの後ろから出てくる。

「残念だけど、サマーキャンプは小学生にならないと参加できないの。

羽未ちゃんは、来年からだねえ」

「ざんねん……」

鴉はまるで自分のことのように、羽未と一緒にがっくりと肩を落と
していた。

「社長権限で参加させてやれないのか？ 一日だけでもいいからさ」

「そんな勝手なことできないよ。それに、ひげ猫財団だから、社長じゃ
なくて団長なの！ 団長カモメ！」

「あ、そうだったな。悪かったな。鴉団長」

「わかればよろしい」

鴉は誇らしげに、さらに大きくなった胸を張る。うん。すごくむ
ごっほだ。

……ちなみに鴉は数年前、母親からの資金を元手に財団を設立した
らしい。

それが、財団法人ひげ猫。通称、ひげ猫団。

具体的には何をするのかというと、烏白島観光協会と提携して、島
での様々な冒険……もとい、イベントを企画している。

それこそ、さつき言っていたサマーキャンプを筆頭に、烏白島の自
然を活かしたウォークラリーやスポーツイベントを通して、観光客の
誘致に多大な貢献をしているらしい。

「でもね。今年のサマーキャンプは一味違うよー」

鴉は嬉しそうにそう話す。どういうことだろう。

「え、違うって何が？」

「ついに、海賊船が完成したの！」

「おお、ついに完成したのか？」

そういえば、鴉は母親と相談しながら、何年もかけて本格的な海賊
船を作っていると言っていたっけ。

「そう！ いやいよ、今年のサマーキャンプで初お披露目なの！ 苦
節7年！ ようやく私の夢が形になったんだよ！」

両手を大きく広げながら、嬉々としてそう語っていた。眩しいくら
いの笑顔だった。

「……かいぞくせん？」

「そうだよー。その海賊船になら、羽未ちゃんも乗せてあげる！」

「たのしみー」

「私もだよー。進水式の日程が決まったら、また教えてあげるね！」

それじゃー！」

そこまで話すと、鴫は俺たち家族に手を振りながら、爽やかに港の方へと向かっていった。

「……相変わらず、鴫は元気がいいよな」

「本当だね。圧倒されちゃう」

「かいぞくせん、たのしみー」

風を切る鳥のごとく、去っていった鴫の後姿を見ながら、そんなことを話す。

……それにしても、鴫は毎年夏になると島に長期滞在するけど、見た目は全然変わってないよな。いつまでも美人だし。

……もつとも、しろはも負けてないけどさ。

「……羽依里、どうしたの？」

「いや、なんでもないぞ」

しろはを横目で見ていたせいかな、変に感づかれたかもしれない。

「さあ、鴫に負けてられないし、俺たちももうひと頑張りだ！」

「おー！」

俺はそれを誤魔化すように気合いを入れなおし、加藤家への道を再び歩き出した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいま戻りましたー」

「きよーごさん、ただいまー！」

「三人とも、おかえりなさい。長旅だったみたいだし、疲れたでしょう？」

加藤家に到着すると、鏡子さんが出迎えてくれた。

「冷たい飲み物を用意するから、居間で待っていてね。羽未ちゃんはオレンジジュースでいいかな」

「うん」

「ありがとうございます」

鏡子さんにお礼を言いながら、居間と足を運ぶ。そのまま隅に荷物を置いて、ようやく一息つく。

「ずずしいー」

帽子を脱いだ羽未は、扇風機の前で汗だくになった髪を乾かしていた。

相変わらず、加藤家の冷房器具は扇風機しかないんだけど、不思議と涼しかった。風が良く通るし、蝉の声が遠くに聞こえるせいもあるのかな。

「……それで、準備は順調？」

鏡子さんが飲み物の入ったおぼんを座卓に置きながら、そう聞いてくる。

「ええ、保健所の許可も下りましたし、着々と進んでいます」

「そう。なら良かった」

俺もそう答えながら、冷えた麦茶を受け取り、一口飲む。

「……それにしても、羽依里君がこの家を使って民宿をやりたいって言い出した時は、本当に驚いたよ」

「……あの時は、鏡子さんの気持ちも考えずに、無茶なことを言ったと思います」

……加藤家を改築して、鳥白島で民宿を開業したいと思い立ったのは、今年の初めだった。

「この島の良さをいろんな人に知って欲しくて。そのためには、やつ

ぱり民宿を開くのが一番だと思ったんです」

「私はいい考えだと思うよ。家は使ってもらってこそだと思うし」

……話をした直後は、さすがの鏡子さんも驚いていたけど、すぐに承してくれた。

その後は島の皆にも協力してもらいながら、必要な改修工事や手続きに奔走した。

手続きの中でも、一番苦労したのが申請書類の類で、何度も本土に足を運ぶことになった。

民宿を開業するにあたって、どうしても島の役所でできることには限界があったし、定期的に本土の保健所に相談に行く必要があった。

ここ数日島を離れていたのも、現地調査を終えた保健所の方と直接話し合う必要があったからだ。

「……一日一組限定の、小さな民宿。うん、良いんじゃないかな。完成が楽しみだね」

保健所に提出した書類の控えを見ながら、鏡子さんが笑顔でそう言ってくれた。

少なからず、祖母との思い出がある家のはずなのに。それを快く提供してくれた鏡子さんには、いくら感謝してもしきれなかった。

「……ねえ羽依里、私はちよつと実家に行ってこようと思うんだけど。二人はどうする?」

小休憩をはさんで、持って帰った荷物の整理を終えた頃、しろはからそう声をかけられた。

「そうだな……書類の提出もあるし、俺は役所に行つてくるよ」

保健所の許可は下りたけど、最後に島の役所からも営業許可を取らないといけない決まりらしいし。

「羽未ちゃんは どうする? 船での様子を見てたら、おじーちゃんもすぐく羽未ちゃんに会いたそうだったけど」

「おとーさんといくー」

しろははきつと、じーさんに羽未を会わせてあげたかったんだろうけど、当の本人は笑顔で俺の方に飛びついてきてくれた。なんとなく、じーさんに勝った気がして、嬉しかった。

「よし、それじゃ羽未、いくか」

「バイクー」

「え、バイク？」

「うん！」

「ふふ。変だと思ったら、羽未ちゃんは最初からバイクに乗りたかったみたいだね。せつかくだし、島巡りでもしてあげたら？」

鏡子さんが羽未の意図を察したらしく、笑顔でそう言っていた。

「わかりました。そうします」

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

羽未は鷗みたいな台詞を口にしながら、表に飛び出していった。

どうやらジュースを飲んで、元気も補充されたらしい。俺も急いでその後を追う。

「二人とも、バイクで行くなら、ちゃんとヘルメット被らないと駄目だよ」

「わかってるー」

俺と羽未は声をハモらせながら、ガレージへと向かう。バイクの収納スペースには子供用のヘルメットも入ってるし、準備は万端だ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「きもちいいー」

俺は安全運転を心がけながら、バイクに羽未を乗せて住宅地を進む。

ちなみに、これまでずっと乗っていたバイクは3年前に壊れてしまった。愛着もあつただけけど、元々古かったし。こればかりはしょうがない。

「……よし、ついたぞ」

元々狭い島だし、ゆっくり走つてもあつという間に役所に到着した。

「まずは、おとーさんの用事を終わらせてくるからな。島巡りはその後だぞ」

「たのしみー」

バイクを降りた後、自然と羽未と手を繋いで役所へ足を踏み入れる。

「よう、のみき」

「ああ、鷹原。島に戻ってきていたのか」

カウンター越しに声をかけると、のみきが自分の席を離れて、俺たちの対応をしてくれる。

今日は役所も職員が少ない日なのか、のみき他には割腹の良い男性職員が一人いるくらいだった。

「のみきさん、こんにちわー」

「ああ、羽未ちゃんも居たのか。おとーさんと一緒にいいな」

「うんー」

どうやら、羽未の背が低くてカウンター越しだと見えなかったみたいだ。目の前に来て、ようやくその存在に気づいたらしい。

「……あれ、のみきって目が悪かったっけ？」

そしてよく見ると、今日ののみきは眼鏡をかけていた。

「……事務仕事が増えたせいかな、最近急に目が悪くなってしまったな。困ったものだ」

のみきは眼鏡のフレームを弄りながら、そうため息をついていた。「それは大問題だな。目が悪くなったら、鉄塔から良一を撃てないじゃないか」

「い、いつの話をしているんだ……そんなことより、何か用事があるんじゃないのか？ わざわざ顔見せに来てくれたんじゃないだろう？」

「ああ、本土の保健所から書類を預かってきたんだよ。島の役所に提

出してくれってさ」

「その顔を見ると、民宿の件は首尾よく運んでいるようだな」

のみきはそう言いながら、書類の入った封筒を受け取る。その拍子に『三谷』と書かれたネームプレートが目に残った。

……そう言えばのみき、良一との大恋愛の末に、半年前にゴールインしたんだっけか。

「苗字が変わったのに、いつまでものみきって呼ぶのも変だよな。のみきがいいか？」

「や、やめてくれ。違和感しかない」

受け取った封筒を自分の机に置きながら、のみきが身震いをしていった。俺としても、違和感バリバリだった。

「せつかく結婚したんだから、のみきも良一に養ってもらえばいいんじゃないか？ あいつは漁師で稼ぎも良いんだしさ」

「そ、そういうわけにはいかないぞ。あいつはチャンスさえあれば漁師をやめて、レンタルテント屋をやりたいと言っている。将来性が無さすぎる」

「え、そうなのか」

良一が生粋のテントコレクターだってことは知っていたけど、まさかそこまで考えていたなんて。

「ああ、今年のサマーキャンプでも、またテントを提供すると張り切っていたし、インストラクター役も買って出るそうだ」

良一のキャンプ指導は人気があると鷗が言っていたし、確かに漁師よりそっちのほうが天職なのかもしれないけど。

「はは、美希ちゃんに辞められたら、うちはおしまいだよ。ラブラブなのはいいけどね」

その時、奥に座っていた男性職員がそう言って頭を掻いていた。

「役所の職員の間でも噂になってるよ。机の中に旦那の写真を入れているとか……」

「そ、それより鷹原、知っているか!？」

今まさに開けかけていた机の引き出しを乱暴に閉めて、のみきが無理矢理話題を変えてきた。

「え、何を？」

「先日、天善と静久さんがついに入籍したそうだぞ」

「おお、そうなのか。苦節5年。本当に長かったな」

近日中には入籍するだろうと、島中の噂にはなっていたけど、あの二人もついに結婚したのか。なんだかんだで、おめでた続きだ。

「式の日程はまだ決まっていないそうだが、本当に幸せそうだったぞ」のみきは笑顔で言っていた。静久は先に言った通りだけど、天善は現在家業を継いで、島で修理屋をしている。

バイクや自転車をはじめ、穴の開いた鍋釜から水道管まで修理してくれるとのことで、島民からすぐ頼りにされている。

相変わらずトレーニングは続けていると言っていたけど、天善も天善なりに頑張っているんだし、幸せになって欲しい。

「……おとーさん、まだー？」

その時、不満そうな声が聞こえた。見ると羽未が壁にもたれながら、ほっぺを膨らませていた。

「ああ、ごめんな。そろそろ行くこうか」

つい、話し込んでしまった。俺の用事は済んだし、羽未と島巡りをすることにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ羽未、どこに行きたい？」

役所を後にして、バイクにまたがりながら俺は羽未に行き先を尋ねる。

「どうだい！」

「灯台か。あそこなら、紬がいるかもしれないね」

「つむぎさん、あいたいー」

羽未は紬と仲が良いし、灯台は風があって涼しい。行ってみてもいいかもしれない。

「あと、オルゴール！」

「うんうん、わかってるよ。羽未は本当にあのオルゴールが好きだよな」

「うん、すきー」

「よし、それじゃあ出発するぞ」

「しゅっぱーっ！」

羽未がヘルメットをかぶっているのを確認して、俺はゆっくりとアクセルを回した。

一気に住宅街を抜け、キラキラと輝く海を見ながら、海岸沿いを進む。ここなら視界も良好だし、少しだけスピードを出す。

「はやいー」

「羽未も大きくなったら、バイクの免許取るんだもんな？」

「うんー。とるー」

風が気持ちいいのか、弾んだ声が返ってきた。

「そしたら、おとーさんといっしょにはしるのー」

「嬉しいこと言ってくれるなあ」

……いつか、羽未と並んでこの景色を見る日が来るのだろうか。

そんなことを考えながらバイクを走らせていると、やがて白い灯台が見えてきた。紬、いるかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おおー、ハイリさんにウミさん、いらっしやいませー」

適当な場所にバイクを止めて灯台の方へ行ってみると、そのたもとに紬が立っていた。

すっかり見慣れたポニーテールを揺らして、俺たちを笑顔で迎えてくれる。若干大人びた感じはするけど、相変わらず若々しい。

……ちなみに、紬が俺をハイリさんと呼びだしたのは、羽未が生まれてからだ。

タカハラさんが三人になったから、そろそろ下の名前で呼んでほしい……と、お願いしたのがきつかけだった気がする。

「つむぎきょん！」

そのきつかけとなった羽未は、元気に紬の胸に飛び込んでいった。「それで、今日はこういったご用でしょーか」

紬は羽未を抱きしめたまま、顔だけ俺の方に向けてくる。

「紬に会いたかったってのもあるけど、羽未がまたあのオルゴールを聴きたいんだってさ」

「うん、ききたいー」

「わかりました！ こちらへどうぞー！」

立ち上がった紬はそのまま羽未の手を引いて、すぐ近くの真新しい建物に案内してくれた。

「相変わらず、立派な建物だな」

「はい！ リツパな門構えですー！」

この建物は数年前に建てられた灯台資料館。紬はここに住み込みで、灯台の管理人の仕事をしている。

というのも、紬がかつて住んでいた灯台は老朽化が進んでしまったとかで、住むことができなくなってしまった。

その代わりに、島の皆で協力して寄付を集め、敷地内にこの建物を建てた。灯台が大好きな紬が、できるだけそこから離れずに暮らしていけるように。

「はい、どうぞー」

俺と羽未は紬に招かれるまま、その灯台資料館に足を踏み入れる。

資料館なだけあって、壁一面にこの灯台の設備に関する資料や、役割についての展示がされていた。

窓際に簡単な椅子やテーブルも置いてあって、休憩もできるようになっていているらしい。

そして入口から見て、右手奥には扉がある。『管理人室』とプレートが下がっているけど、つまりは紬の部屋だった。

わざわざ会いに来てくれたらしいです！」

「そっか。静久は新進気鋭の芸術家だもんな」

「そですね！」

紬は笑顔だけど、どこことなく寂しそうだった。親友の活躍を喜ぶ一方で、一緒に過ごせる時間が減ってしまったからだろうか。

「……でも、寂しくはないですよ」

「え？」

まるで俺の心が読まれたみたいだった。思わず紬の方を見ると、彼女は壁の方を見ていた。

その視線の先を追うと、そこには灯台の資料に混ざって、歴代の灯台守の写真が並んでいた。紬はその中の、軍服姿の男性の写真を眺めていた。

「わたしはこの場所で、毎日灯台を見守っています。少し違いますが、やっていることは灯台守と同じです」

紬はそう言いながら、今度は目を細めて窓の向こうの灯台を見る。先程と違って、充実感に満ちた顔になっていた。

「おとーさん、のどかわいたー」

紬と一緒にあって灯台を眺めていたら、いつの間にかオルゴールの音色も止んでいて、羽未がテーブルに手をつきながらそう訴えていた。

「あ、そう言えば水筒を忘れてきちゃったか。紬、ここって何か飲み物とかない？」

「むぎゅ……自販機がありますけど、あの自販機にはブラックコーヒーしか売ってません」

……そうだった。最近、灯台資料館にやってくる観光客向けに自動販売機が設置されたんだけど、契約したメーカーの関係なのか、売られているのはなぜかブラックコーヒーばかりだった。

さすがに羽未にはまだブラックコーヒーは飲めないし。どうしたものか。

「……そうだ。羽未、駄菓子屋に行かないか？」

「だがしやさん？」

「そう。蒼にかき氷作ってもらおうよ」

「うん！ かきごおりたべたい！」

俺の提案を聞いて、羽未の顔が輝いた。

「それじゃあ紬、俺たちは行くよ」

「はい、またのお越しをお待ちしていますー」

「つむぎさん、またねー」

そうと決まれば善は急げだ。俺たちは紬にあいさつをして、一路、駄菓子屋へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、おとーさん、イナリがいるよー！」

「おお、本当だ」

灯台から住宅地へ戻る道すがら、羽未が草むらの中にイナリの姿を見つけた。俺たちは一旦バイクから下りて、イナリに近づいていく。

「ようイナリ、元気そうだな」

「ポーン！」

俺たちに気づいたイナリは、尻尾を振りながら元気な声を返してくれた。

「イナリー」

羽未がそんなイナリに抱きつくようにしながら、その身体を撫でていた。青い体毛と独特の鳴き声は相変わらずだけど、こいつも見違えるくらい大きくなった。

「ポーン！ ポーン！ ポンポン！」

その時、草むらの中から次々と小さなイナリが顔を出してきた。

「イナリ、また子供を産んだのか？」

きちんと数を数えたわけじゃないけど、顔を出すコイナリが増えて

いる気がする。

……それにしても、子供がいるんだから当然父親となるキツネもいるはずなんだけど、警戒心が強いのか、俺は一度も見たことがなかった。

「ポンポンー」

「ポンー！」

「ポポーンー！」

でも、ちっこいイナリも可愛らしいな。こいつらをモデルにして、烏白島イナリまんじゅうとか、イナリ写真集とか出したら売れそうなのがするけど……。

「うみゃー！？」

そんなことを考えていると、羽未の叫び声が聞こえた。見ると、いつの間にか何匹ものコイナリに群がられていた。

「わ、ここから、離れてくれ」

俺はコイナリの群れにもみくちゃにされている羽未を抱きかかえるように救出する。

「ポポン！ ポポン！」

それでも、コイナリたちは遊び足りないのか、不満そうに俺の足元に群がってくる。

「ポンー！」

しかし、そこでイナリがひと声鳴くと、コイナリたちはしゅんとなつて、渋々とイナリの後ろへ戻っていった。

「イナリ、お前も立派におかーさん、やってるんだな」

「ポンー！」

えっへん。と胸を張るように鳴いたイナリの頭を軽く撫でてあげた後、俺たちは再びバイクへと乗り込み、駄菓子屋を目指すことにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださーいなー!」

駄菓子屋に到着すると、羽未はすぐにガラス戸を開けて、店の中へ飛び込んでいった。

「いらっしやーい。あ、羽未ちゃん、帰ってきてたのねー」

「うん! かきごおりください!」

同時に蒼の声が聞こえた。俺も道の脇にバイクを止めて、駄菓子屋の中に入る。

「おとーさんも一緒なのねー。羽未ちゃん、何味にする?」

「んー、いちごがいい!」

「りよーかい。羽依里もかき氷食べる?」

「じゃあ、ブルーハワイ貰おうかな」

「いいわよー。それじゃ、200万円」

「ほい」

「199万9800円足りないわよー?」

代金を渡して、いつものお約束をした後、蒼はかき氷器へと向かっていく。身を翻した拍子に、綺麗に結われたポニーテールがふわりと揺れた。

……ちなみに、蒼は藍と一緒にの大学に進んだけど、腰を悪くしたおばーちゃんが駄菓子屋をたたもとうとしているの知って、大学を中退して島に戻り、この駄菓子屋を継いだ。

さすがに両親から相当反対されたらしいけど、蒼の信念は揺るがなかつたらしい。

氷を削る涼しげな音が響く中、軽快にかき氷器を回す蒼の後ろ姿を見ながら、俺はそんなことを思い出していた。

「羽依里、どうしたのー?」

そんな俺からの視線に気がついたんだろうか。蒼が振り返りながら、そう聞いてきた。

「いやさ、蒼がこの駄菓子屋を継いでくれて良かったと思って」

「へ? 突然なに?」

「もし、蒼がこの駄菓子屋を継いでくれてなかつたら、こうやって羽未

と一緒にかき氷を食べることもできなかつたしさ」

「……あたしたちが小さな頃からあるこの場所を、無くしたくなかつた……なーんて言ったら、子供っぽいかしらねー」

蒼が少し恥ずかしそうに言っていた。なんだろう。その気持ち、よくわかる気がする。

「それにほら、いい年になつちやつたけど、初代看板娘だし？ 継ぐんなら、あたししかないと思つてねー」

直後に誤魔化すように言つて、からからと笑う。こういうところは、出会つた時から変わつていない。

……ちなみに、現在の駄菓子屋の看板娘は堀田ちゃんだ。今日は休みみたいだけど、時々蒼に厳しく教え込まれているのを見かける時がある。

「でもさ、蒼もそこまで謙遜しなくてもいいんじゃないか。まだまだ若いし、綺麗だしさ。俺は全然OKだと思……」

「へっ？ そ、それつてもしかして……だ、駄目よ。羽依里には妻子がいるじゃない……！」

蒼はそう言つて、顔を真っ赤にしながらかき氷器をぐるぐると回していた。

「おーい蒼、帰つてきてくれー。大盛になりすぎて、かき氷がこぼれるぞー」

……すぐ脳内ピンクになる癖も変わっていない。それはそれで、蒼らしさだと思ふけど。

「はい、おまたせー」

しばらくして、いつもの調子に戻つた蒼が大盛のかき氷を運んできてくれた。俺と羽未はそれを受け取つて、ベンチで食べることにする。

「いただきますーす」

羽未はかき氷を食べる時にも、きちんと手を合わせて挨拶をする。これもしろはの教育の賜物だろう。

「んー、つめたくておいしいー」

「本当だな。やっぱりこの時期のかき氷は最高だ」

とろけそうな笑顔を浮かべる羽未の隣で、俺も久しぶりのブルーハワイを口に運ぶ。思えば、この夏で初のかき氷かもしれない。

「おとーさんにもあげる。はい。あーん」

「え？」

その時、羽未がそう言いながら、かき氷の乗ったスプーンを差し出してくれた。

「ありがとうな。あーん」

そのまま、羽未のスプーンからかき氷をもらおう。うん。しっかりとしたイチゴの風味が鼻を抜ける。

「おとーさん、おいしい？」

「うん。おいしいよ。イチゴもいいね」

「うん。イチゴ、すきー」

「じゃあ、おとーさんのブルーハワイも食べてみる？」

「うん、たべるー」

……そんな俺たちを、蒼が遠巻きに見ていた。

何か言いたそうにうずうずしている気がするけど、まだ羽未の前では、かき氷のシロップが全部同じ味だなんて言わせない。子供の夢を壊さないでほしい。

「うおお……」

「……羽依里、ちょっと話があるんだけど、いい？」

俺が久しぶりのアイスクリーム頭痛に苦しんでいると、蒼が隣にやってきた。心なしか、さっきより神秘的な顔つきになっている気がする。

「ああ、いいぞ。どうしたんだ？」

「……あたしが毎年夏にやってる、山の祭事って覚えてる？」

「もちろん」

去年の夏にも何度か同行させてもらった。迷い橋が咲いている期

間、灯籠を持って夜の山を練り歩き、七影蝶を集めて空門の神域からトキアミへ送る儀式だ。

「今年もやってくれるなら、できる限り手伝うぞ?」

あの夏以来、俺は夏海ちゃんの七影蝶を探すため、何度も夜の山に入った。蒼と二人で入ることもあったから、毎回しろはへの説明が大変だった記憶がある。特にやましいことなんてないんだけどさ。

「それなんだけどね。去年……ううん、一昨年だったかしら。久しぶりにイナリと二人つきりで山に入った時に、変わった七影蝶に出会ったのよ」

「変わった七影蝶?」

「そう。普通なら、灯籠に寄ってきた七影蝶って大人しいままなんだけど、その七影蝶はあたしやイナリの周りをくるくると何度も飛び回っていたのよね。まるで、会えて嬉しいみたいにな」

「へえ、そんな七影蝶もいるんだな」

「その後は大人しかったから、きちんとトキアミに送つといたけどね。なぜか忘れてただけど、急に思い出しちゃって」

「そうなのか。教えてくれてありがとうな」

「別に良いわよ……って、それより羽未ちゃんの服、大変なことになつてない?」

「えっ?」

蒼に言われて、反射的に隣の羽未を見ている。夢中で食べたのか、襟元がかき氷で赤く汚れてしまっていた。

「うわわ、羽未、気をつけて食べないと。服を汚したら、またおかしさんに怒られるぞ?」

「だって、おいしかったから……」

「それはわかるけどさ……蒼、濡れタオルとかない?」

「あるわよー。これ使って」

蒼が手早くカウンターに寄って、脇に置いてあったタオルを取ってくれる。受け取ってみると、程よく湿っていた。

「ありがとう、助かるよ」

俺は借りたタオルで羽未の顔や服を拭いてやる。そんな光景を蒼

が笑顔で見ている。

「え、どうかしたのか？」

「まっとうにおとーさん、やってると思ってるねー」

「ま、まあな……しろは、怒らせると怖いし……よし。これで綺麗になった」

「……話を聞いてる感じ、しろはに頭が上がらないところは相変わらずみたいだけど」

「そ、そこは気にしないでくれ」

急に気恥ずかしくなって、俺は黙々と残りのかき氷を口に運んだ。

「……ふう。食べたなあ」

「おいしかったー」

「……そう言えば、藍も羽依里に話したいことがあるって言ってたわよー？」

「え、藍が？」

かき氷を食べ終えて、空の器を返したタイミングで、蒼がそう言う。ちなみに藍は大学を卒業した後、小学校の先生になった。確か本土の小学校に何年か務めた後、今年の春からこの島の小学校に赴任している。

「やっぱり藍、小学校にいるのかな」

「たぶんそうじゃない？ 子供たちは夏休みでも、先生に休みはないんですよ。全く業腹ですね……って言ってたわよー」

さすが双子。実は入れ替わってるんじゃないかって思えるくらいそっくりだった。

そう言えば、羽末も来年から小学生なのに、まだ小学校をきちんと見せたことがないし、この機会に行ってみてもいいかもしれない。

「それじゃあ羽末、来年から通う小学校、見に行ってみないか？」

「いくー！」

待ってましたと言わんばかりに、元気いっぱい声が返ってきた。

「よし、それじゃ行こうか」

先に走り出して、ヘルメットを被っている羽未を追いかけるように、俺もバイクに乗る。

「羽未ちゃんも一緒なんだから、安全運転しなさいよねー」

「わかってるよ。蒼、かき氷ごちそうさま」

「ごちそうさまー!」

蒼にそうお礼を言っつて、俺たちは駄菓子屋を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

蒼に言われた通り、安全運転で住宅地を進んでいると、前方から軽トラがやってきた。

「あれ、天善?」

その運転手を見て、俺はバイクに乗ったまま、思わず声をかける。

「鷹原じゃないか。帰ってきていたのか?」

俺の姿を確認した天善は、軽トラを道の端に寄せ、その窓を開けて身乗り出してくる。

「ああ。今日の昼過ぎにな……それより、ついに入籍したんだってな。おめでとう」

「帰って来たばかりの鷹原の耳にも、もう入ったのか。本当に島は噂が広まるのが早いな」

「役所に行った時、のみきから聞いたんだよ。今度、盛大にお祝いしてやるからな」

「おお、それは期待させてもらおうとしよう」

俺としろはが結婚した時や、羽未が生まれた時も、節目節目に皆がお祝いしてくれたし。

今度は俺たちがお祝いをしてあげる番だ。しろはに頼んで、天善が好きなワカメ料理のフルコースを用意してもらうのもいいかもしれない。

「……ところで天善、灯台でも静久の姿を見なかったけど、今は家にい

るのか？」

「いや、静久は今日から東京で個展があるらしくてな。朝の船で本土に出かけてしまった」

「人気アーティストだもんな……仕方ないとはいえ、天善も寂しいよな」

「なに、どれだけ離れていても、俺たちには長年混同ダブルスとして培った絆があるさ」

卓球例えは相変わらずだったけど、天善は人として皮剥けた気がする。最近は秘密基地での徹卓も、時々しかしなくなつたみたいだし。

そんなことを思っていると、軽トラの荷台に乗せられた何台もの自転車が目についた。

「あ、もしかして仕事だったのか？」

「ああ。港の方で壊れた自転車を譲ってもらったんだ。うちで修理して、安く販売させてもらおうと思つてな」

「天善とこは中古自転車の販売もしてるのか。今度、羽末が小学校に上がつて自転車が要になつた時には、利用させてもらうな」

「ああ。親友のよしみで、特別料金にしてやるぞ」

「おいおい、そこは気前よく入学祝でくれよ」

「悪いがそういうわけにはいかない。こつちも商売だからな」

そこまで言つて、笑い合う。せつかくだし、羽末の自転車は天善の店で買いたいな。自転車は徳田スポーツでも買えるけど、あそこ、品質は良いけど高いし。

「……それじゃ、俺たちは行くよ。仕事なのに呼び止めて悪かつたな」

「構わないさ。こつちこそ、わざわざありがとう」

去り際、軽く手を挙げてくれた天善を見送つた後、俺は再びバイクを走らせた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しばらくバイクを走らせて、小学校に到着した。

ところで、藍はどこにいるんだろう。やっぱり、職員室かな。

「ひろいー！」

そんなことを考えていると、羽末が元気にグラウンドを駆けていた。確かに平地の少ない島だし、これだけ広い場所もそうないと思う。

……うん。藍の話つても気になるけど、せつかくの機会だし、職員室の前に羽末に学校の設備を見せてあげることしよう。

「羽末、こっちのプールも見てごらん。大きいよ」

「すごいー！」

そう考えてプールサイドに案内してあげると、嬉しそうにはしゃいでいた。

羽末も灯籠作りで入ったことはあるけど、あの時は人がたくさんいたし。今は独り占めって感じだ。

「羽末、嬉しいのはわかるけど、あまり端に近付いちや駄目だぞ、落ちたら危ないし」

「おとーさん、ウォーターズライダーは？」

「え、ウォーターズライダー？」

なんだろう。まさか、作れっていうんだろうか。まあ、皆で頑張れば、できなくもないかもしれないけど……。

「……プールで何やら声がすると思ったら、羽依里さんたちじゃないですか。全く、不法侵入ですよ」

……その時、いつの間にかプールサイドに藍が立っていた。

その藍は紺のレディーススーツ姿で、長い髪を大きな三つ編みにまとめていた。

「あいせんせい、こんにちわー」

「こんにちわ。羽末ちゃんも一緒だったんですね」

羽末の存在に気づいた藍はしやがみこんで、同じ目線に合わせてくれながら、その頭を撫でていた。あの仕草を見ると、やっぱり先

生なんだと思ってしまう。

「それで、藍から何か話があるって、蒼から聞いてきたんだけど」

「ああ、それはですね……」

藍はゆっくりと立ち上がると、俺のそばに寄って、耳打ちしてきた。

「……蒼ちゃんの書いてる、灯台物語ですが」

「え、あれ、まだ書き続けてるのか？」

灯台物語というのは、蒼が趣味で書き続けている、その……えっちな小説だ。

藍から許可をもらって一度だけ読ませてもらったけど、登場人物の二人が限りなく紬と静久に似ていたような気がする。なんというか、蒼の妄想全開の小説だったような。

「もちろんです。それを今度、コミックマーケットで売りだそうとか考えてるみたいです。そのお手伝いを、羽依里さんをお願いしたいとかで」

「えええ、ちょっと待って」

羽末もいるんだから、その手の話はやめてほしいんだけど。

「……と言うのは冗談で、本題はこっちです」

藍はあっけらかんと言って、上着のポケットから一冊の古ぼけた本を取り出した。良かった。冗談だったのか。

「それで、その本は？」

「この小学校の資料室にあった本です。七影蝶について書かれています」

藍はそう口にして真顔になった。七影蝶。いきなりそんな単語が出てくるなんて。

「七影蝶に関する本が、この小学校に？」

「ええ。恐らく何十年も前に寄贈されたものだと思います。古い教材に混ざって、置かれていました」

……一時期、俺も躍起になって七影蝶について調べていた時期があった。結局、大したことはわからなかったけど、こんな身近に資料があったなんて。

「……ちょっと読んでみてもいい？」

「ええ、読めるのでしたら」

俺は藍から本を受け取って、ページを開いてみる。達筆すぎて全然読めなかった。

「うう、全然読めない……」

「私も鏡子さんに手伝ってもらいながら、なんとか解説したんです。そう易々と読まれてはたまりませんよ」

「じゃあ、藍はこの本に何が書かれているか知ってるんだな」

「もちろんです。その本によると、身体に強い衝撃を受けた場合、七影蝶が飛び出してしまうことがあるそうです」

「え、飛び出す？ 七影蝶が？」

「そうです。強い衝撃というくらいですから、現代だと交通事故に遭ったり、階段から落ちたりして、頭を強く打ったとかですかね」

「仮に、そんな事故で七影蝶が抜け出ちゃった人はどうなるの？」

「ずっと眠ったままだったとか、そのまま亡くなったとか色々な事例が書いてありました。恐らく、現代医学的には植物状態と診断される状態じゃないですかね。羽依里さんが好きなオカルト風に言うなら、幽体離脱とか、魂が抜け出た状態に近いのかもしれないんですけど」

藍が顎に手を当てながらそう言う。蒼曰く、七影蝶はいわゆる幽霊みたいな存在らしいし。つまりは魂が抜け出た状態……ってことになるのかな。

「……じゃあさ、一度抜け出た七影蝶は、もう戻ってこないのかな」

「……ごく稀に、自然に戻る場合もあったらしいですね。理由はよくわかりませんが」

そう言えば、事故で長い間昏睡状態にあった人が、ある日突然意識を取り戻したってニュースを時々聞くけど、それも実は七影蝶が関係していたりするんだろうか。

「そして意識を取り戻した人は、皆口を揃えて『白い花畑を見た』、『時編に行った』と言ったそうです」

「え、トキアミ？」

「はい。お花畑とか見えてる感じから、一種の臨死体験みたいなものなんですかね？」

「いや、そこで俺の方を見られても。俺も臨死体験なんてしたことないからわからないけどさ」

「あと、これは余談になりますが、身体から飛び出した七影蝶を戻す方法についても載っていましたよ」

「え、具体的にどうやるの？」

「キスですよ。接吻です。呂の字です」

……藍が口元に手を当てて、わざとらしくウインクをしていた。

「……ちよつと。そんな可哀想なものを見るような目で見ないでもらえますか？ 本当なんですからね！」

俺が冷めた目で見ていたのに気づいたらしい。顔を赤くしながら、必死に弁解していた。

「と、とにかく！ この本に書かれていたのは、だいたいそれくらいです。大したことじゃないですけど、わかったことは話しておこうかと思ひまして」

「いや、貴重な情報をありがとうな」

今すぐ何かに生かせるような情報じゃなかったけど、藍が必死に調べてくれたんだし。俺は素直にお礼を言っておいた。

「うー、むずかしい……」

「ああ、羽未、ごめんな」

そんな時、話についていけない羽未が俺の隣で頭を抱えていた。ついで、夢中になってしまった。

「羽未ちゃんも小学校に入って勉強すれば、わかるようになりますよ」

「うんー」

半分ふてくされていた羽未の頭を撫でながら、藍がそう慰めていた。

それでも、俺としては小学生で幽体離脱について理解してほしい。い。

『羽依里のせいで羽未ちゃんがオカルト好きになった！ たばかった

な!』とか、しろはに怒られそうだし。

「……可愛い羽未ちゃんも来年から一年生ですし、今から楽しみで仕方ないですね」

来て欲しくない未来を想像していると、藍が今にも踊りだしそうになりながらそう言っていた。

「え、楽しみってどういう意味?」

「もちろん、私が新一年生の担任に内定しているからに決まっているじゃないですか」

「ちよつと待つて。もうそんなことが決まつてるの」

こんな時期に担任内定って、いくら島の小学校とはいえ、早すぎるんじゃないだろうか。藍、どんな手を使ったんだろう。

「羽未ちゃんの担任もそうですが、家庭訪問も楽しみなんですよね」

……家庭訪問。そうか。藍が羽未の担任になるということは、家庭訪問もあるのか。

「しろはちゃんとの愛の巢にお邪魔しますね」

頼むから、笑顔で言わないで。本当に怖くなってきた。

『あのー、空門先生ー、いつまで見回りしてるんですかー? 職員会議、始めますよー』

……直後に校内放送が流れて、藍は職員室に呼び戻されていった。というか、まだ仕事中心だったのか。

「がっこう、たのしみー」

羽未の無邪気な笑顔と裏腹に、俺は不安でいっぱいだった。寝室の写真、片付けておかないと。藍なら入ってきかねないし。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

『……まもなく鳥白島。鳥白町漁港に到着いたします』

……聞き覚えのある島の名前が聞こえた。それだけで、私の胸は高鳴る。

ゆつくりと船が着岸した後、少ないお客さんと一緒にタラップを渡って、港へと降り立つ。

「……やっぱり、この島だ」

夕方近くになっても元気いっぱいな蝉の声と、鼻をつく潮の香り。この雰囲気、間違いない。

そんな島の空気を胸いっぱい吸い込んで、どこか懐かしさを覚えながら、茜色に染まった港を歩く。

……そういえば、港の裏手の本屋さん、まだあるのかな。

そんなことを考えながら歩いていると、坂道の手前で、あのお店を見つけた。

「……懐かしい」

自然とそう口にしていた。しろはさんの食堂。あの特徴的な看板、全然変わってない。

記憶にある建物より低く感じるのは、私の背が伸びたからだと思う。

「お嬢ちゃん、観光客かい？ その店は夜しか開いてないんだよ」

「あ、そうなんですね」

そんな風にお店を見上げていると、偶然通りかかったおじさんにその声をかけられた。確かに、扉には準備中の札がかかっていた。

「この島は初めてかい？」

「……来るのは初めてですけど、久しぶりなんです」

「は、はあ……？」

狐につままれたような顔をするおじさんに手を振って、私は坂道を登り始めました。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー！」

「ただ今戻りました」

だいぶ日も傾いてきた頃、俺と羽未は加藤家に帰宅する。

「おかえり。ずいぶんゆつくりだったんだね」

「ええ、行く先々で人に会っちゃいました。すみません」

居間に行くと、鏡子さんがテレビを見ていた。なんだかんだで遅く
なつてしまったし、謝っておく。

「そういうえば、しろはもまだ帰って来てないんですか？」

俺はそう言いながら居間を見渡す。しろはの姿はないし、まだ鳴瀬
家から戻ってないんだろうか。

「……とつくに帰ってるよ。二人とも、遅すぎ」

その時、台所の方からエプロンをつけたしろはが顔を覗かせた。ど
うやら、夕飯の準備をしてくれているらしい。

「全く。結構長い時間待ってたのに、結局二人とも鳴瀬の家には来な
いんだから。おじーちゃん、羽未ちゃんと会うの楽しみにしてたんだ
よ」

あ、二人とも待ってたんだ。羽未も行きたいと言い出さなかった
し、すっかり忘れてしまっていた。

「今度会った時は、羽未ちゃんに新しい服を買ってあげるって言っ
たよ」

「そうなんだな。これで34着目か」

「すぐ着れなくなるからいらないうって言ったのに。おじーちゃんつ
てば……」

しろははぶつぶつ言いながら、台所に戻っていった。じーさんは本
当に羽未を溺愛してくれているし、また日を改めて会いに行くこと
しよう。

……しばらくして、スパイシーな香りが漂ってきた。

「いいにおいー」

羽未も鼻をひくひくさせていた。今日の夕飯はなんだろう。

「もしかして、晩ごはんはチャーハンかな」

「え、チャーハン!?!」

ぱあつと羽未の表情が輝く。相変わらず、しろはのチャーハンが大
好きみたいだ。

「……残念だけど、晩ごはんはおじーちゃんが釣ってきた魚だよ。羽
依里も羽未ちゃんに期待させるようなこと言わないで」

「ご、ごめん」

「……でも、ひーじーじーのさかなも好き！」

羽未は一瞬残念そうな顔をしたけど、すぐにまた笑顔になってい
た。うんうん。曾祖父への心遣いも忘れていない。我ながら、できた
娘だ。

「……そうだ。せっかくだし、羽未ちゃんも晩ごはんの支度、手伝って
くれる？」

「うん！」

しろはにそう言われて、羽未がぱたぱたと台所の方に駆けていく。

「めばるだー！」

「よく分かったね。タコもあるから、今度たこ焼きパーティーしよう
ね」

「たのしみー」

そんな二人の楽しそうな声が台所から聞こえる。羽未も今の歳で
メバルがわかるとか、ゆくゆくはお魚博士とかになったらどうしよ
う。

「……そういえば羽依里君、さつき、のみきちゃんがこれを持って来て
くれたよ。民宿関係の書類だつて」

そんな台所からの声に耳を傾けていると、鏡子さんが大きめの封筒
を手渡してくれた。

「え、もう来たんですか？」

さすが仕事早い。本土からの書類、ついさつきのみきに渡したよ
うな気がするけど。

はやる気持ちを押さえながら、俺は封筒の中身を確認する。

「……保健所の審査結果を受けて、島の役所も民宿開業を承認するそ
うです」

大丈夫だとは思っていたけど、役所の印鑑が押された書類を見て、俺は胸をなで下ろす。

「……おめでとう。これで、いつでも民宿を開業できるわけだね」

「ありがとうございます。でも、正式な開業はまだまだ先ですよ。準備するものもありますし……」

「……そこで、ふと疑問が浮かんだ。夏海ちゃんの部屋はどうしよう。」

もちろん、俺たちが加藤家で暮らすようになってからも定期的に掃除はしている。でも、いざ民宿を始めるとなると、そのままにはしておくわけにもいかない。

ずっと置きっぱなしにしてる絵日記帳も、年月を経てだいぶ痛んできちゃってるし。どうしたものかな。

「……そうそう。今日は夕方の船でもう一人、親戚の子が来ることになってるの」

「あ、そうなんですか」

悩んでいると、鏡子さんから唐突にそう言われた。

明日から夏休みだし、加藤家も親戚が多いから、かつての俺みたい
に心の傷を癒しに来る人がいるのかもしれない。

「……その子ね。私の姪になるの」

姪ってことは女の子なのか。どんな子なのかな。

「何年も入院していたんだけど、最近ようやくリハビリを終えて、退院
できたらしくてね」

「……え？」

「退院したら一番にこの島に行くって言って、聞かなかったんだって」
「ちよ、ちよつと待ってください。それって……」

鏡子さんの話を聞くうちに、俺の中に一つの考えが浮かんだ。

あの子……夏海ちゃんは頭を強く打ったことで七影蝶となって、ト
キアミに迷い込んだ。

そして瞳さんの七影蝶に導かれて、この島にやって来た。

そのきっかけて、今日藍が教えてくれた七影蝶の状況に似てない

だろうか。

さらには、蒼が数年前にトキアミに送ったという、変わった七影蝶の話。

これはあくまで俺の憶測だけど、七影蝶が抜け出てしまった夏海ちゃんの身体は、どこかで眠り続けていて。

トキアミに戻れた夏海ちゃんが、再び瞳さんの七影蝶に導かれて、元の身体に戻れたとしたら？

……あの子、トキアミを通る前の記憶もあるって言っていたし、その逆もあり得るのかも。

……俺の中で、色々なものが一つに繋がった気がした。

……でも、そんな奇跡みたいな話、起こりえるんだろうか。

「……他の皆は初めてかもしれないけど、たぶん、羽依里君はその子を知ってるんじゃないかな」

必死に考えを巡らせている俺をよそに、鏡子さんはそう言うて笑う。その顔を見た瞬間、俺の憶測は確信へと変わった。

「あの一、すみませーん！」

……そして、玄関からすぐく懐かしい声が出た。

「……羽依里君、仲良くしてあげてね」

「……もちろんですよ」

胸の奥に懐かしいものを感じながら、俺は玄関へと向かう。

「……あの、ここ、加藤さんのお宅ですよね？」

「……うん。そうだよ」

……ああ、背も髪も伸びてるから、すっかり見違えちゃったけど、記

憶の中のあの子の面影がある。

「……おかえり。久しぶりだね。夏海ちゃん」

「……はい！ ただいまです！」

——その一言に、数年分の思いを乗せて。

——彼女は、太陽のように笑った。

——これからまた、新しい夏が始まる。

—— Summer Pockets #2 完

Summer Pockets #2・外伝

——とある夏の、とある日。その朝。

「ない……！　ないない……！　ないですよ……！」

まだ夜が明けたばかりの時間帯。廊下を走り回る音で声で目が覚めた。あの声は夏海ちゃんだ。

「夏海ちゃん、どうしたの？」

眠たい目を擦りながら布団から起き上がって、襖を開ける。ちょうど目の前に夏海ちゃんがいた。

「あ。羽依里さん……お、おはようございます……」

声をかけると、あからさまに視線を泳がせた。なんだか様子が変だ。

「夏海ちゃん、おはよう。何か探しもの？」

「えーつと、まあ……そんなところですよ……」

そして、再び泳ぎ出す視線。肯定はしたけど、なんか煮え切らない言い方だった。

「探しものなら、俺も手伝うよ。今日も特に予定ないしさ」

「い、いえ！　その、羽依里さんには関係ないのでっ！」

全力で拒否された。ええ……これでも長いこと一緒に夏休みを過ごしてきたのに、関係ないとか言われるなんて。ショックだった。

「そんなこと言わないでさ。俺と夏海ちゃんの仲じゃない」

「えー、でも、その……えつと……」

「確かに俺は頼りないかもだけどさ。一人で探すよりいいと思うんだ。是非、手伝わせてよ」

「わ、わかりました。それじゃ、お願いします」

俺の願いが通じたのか、渋々ながら了承してくれた。多少強引だった感じも否めないけど、これで夏海ちゃんの力になれる。

「任されたよ。それで、何を探してるの？」

「わ、私の……つです……」

「えっ？」

思わず聞き返してしまった。後ろのほう、声がしりすぼみになって聞き取れなかったし。

「……私のぱんつです！一枚、見つからないんです！」

聞き直ったのか、大きな声で言った。ええ、探してたのって、それなの。

「ほーら、嫌そうな顔してます！だから、言いたくなかったんです！」

「そ、そんなことないよ。俺も夏海ちゃんのぱんつ、探したいなあ！」
勢いで言ってから、自分がとんでもない発言をしたことに気づいた。正直、恥ずかしいことこの上ないけど、あれだけ啖呵を切った手前、今更手伝えないなんて言えない。

「ところで、鏡子さんに聞いてみなかったの？ その……ぱんつ……」
「なんで羽依里さんが恥ずかしそうに言うんですか！ 恥ずかしいのは私ですよ！」

うがー！ と頭を掻きながら天井を見上げた。その後の話によると、鏡子さんは朝から寄合なのか、この時間からすでに部屋にいないらしい。

「だから困ってるんですよ……物干し台の周りはもちろん、自分の部屋の引き出しも、鞆の中も、脱衣所も、洗濯機の中も全部見てみたんですが、見つからないんです」

先程までの元気が嘘のように、がっくりと肩を落としてその場に座り込む。その様子からして、俺が起きるよりずっと前から一人で探していたんだろう。

「でも、そんな時つてあるよね。必死に探すときほど、探し物は見つからないっていうさ。そのうち、ひょっこり出てくるかもしれないよ？」

「ええ……でも気になるじゃないですか。羽依里さんだって自分のぱんつがどこか行ったら、気になりませんか？」

「いや、ならないけど」

「……もういいです。自分で探します」

「いやいや、気になる。気になるから手伝うよ」

口をへの字に曲げながら立ち上がり、すたすたと廊下を進んでいく夏海ちゃんを慌てて呼び止める。難しい年頃だなあ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

手早く身支度を整えた後、とりあえず探し物の基本として、夏海ちゃんがぱんつを最後に見た場所を聞いてみることにした。

「昨日の夕方まで干してありました。それは確実です。それから取り込んだはずなんですが」

腕組みをしながら、必死に思い出していた。昨日は夏海ちゃんが洗濯当番だったし、そこは間違いないだろう。

「取り込む時に取り落として、植え込みとかにあつたりしないの？」

「一応、探してはみたんですが……」

「もう一回、手分けして探してみようよ。二人で探せば、簡単に見つかるかもしれないさ」

……というわけで、夏海ちゃんと一緒に物干し台の置かれた庭へとやってきた。ぱっと見た感じ、何かが落ちているような感じはしない。いい。

「……そういえば、探してるぱんつってどんなの？」
「え」

「その、柄とか特徴を教えてもらわないと、探しようがないんだけど」
「え、えーつとですね、その」

夏海ちゃんは耳まで真っ赤になってしまった。何聞いてるんだらう俺。

「薄い青色で、真ん中にリボンがついてるんで……す……」
「ありがとう。リボンのね」

努めて冷静に答えたけど、俺の内心は穏やかじゃなかった。夏海ちゃん、ごめんね。

……夏海ちゃんが決死の覚悟で特徴を教えてくださいましたものの、いくら探してもぱんつは見つからなかった。

ふと、加藤家の敷地内に落ちていたらそれは夏海ちゃんのなんだから、わざわざ特徴なんて聞かなくても良かったんじゃないか……なんて考えがよぎったけど、今更だった。

「昨日の夕方は風が強かったし、もしかして敷地の外に飛ばされちゃったのかもね」

「そんな……ふち最悪です」

どこかのヒトデ好きな女の子みたいな台詞を口走りながら、再び肩を落とす。もし風に飛ばされたとなると、探すのは大変そうだ。

「うー！ こうなったらヤケチャーハンです！ 朝ごはん食べて体力つけたら、外に探しにいきましょう！」

踏み石を力いっぱい踏みつけながら、すごく悔しそうに夏海ちゃんと言う。まあ、腹が減ってはぱんつ探しはできないし、いいんじゃないかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

恒例の朝チャーで気力と体力を回復した後、俺たちはぱんつの搜索範囲を加藤家の外に広げた。

「ないなあ……」

「ないですねえ……」

二人揃って地面を見ながら、住宅地を徘徊する。道中に島民から「二人一緒に散歩かい？ 相変わらず仲が良いねえ」とか、声をかけられたけど、まさかぱんつを探しているだなんて言えず、俺たちは早くも途方に暮れていた。

「この島、交番とかありませんでしたよね？」

「ああ……あわよくば、落とし物が交番に届けられているかも……っ

て話？ 残念だけど、この島に交番はないなあ」

基本、治安の良い島だから……なんて思いながら、俺は晴れ渡った空を見上げる。蝉たちも元気よく鳴いているし、鉄塔も朝日を反射して輝いている。うん。今日も島は平和そうだ。

「……あ」

鉄塔を見たその時、俺にある考えが浮かんだ。

「夏海ちゃん、一ヶ所だけ思い当たる場所があるんだ。そこに行ってみよう」

「え？ どこか、ぱんつの辿り着く場所があるんですか？」

「それは着いてのお楽しみ。こっちだよ」

まるで昔のゲームのエンディング曲みたいなことを言う夏海ちゃんの手を引いて、俺はある場所へと向かった。

「……ついた。ここだよ」

「え、なんで役所なんですか？」

そして辿り着いたのは、鉄塔の袂。島の役所だった。

「島の落とし物は基本ここに集まるんだ。だから、可能性が一番高いかと思って」

「あー……でもお……」

役所の職員の視線が集まる中、「ぱんつの落とし物が来てないですか？」なんて問いかけをする場面を想像したんだろうか。夏海ちゃんが何とも言えない顔をした。

「そんな顔しなくても、俺が聞いてあげるから大丈夫だよ。ほら、行こう」

微妙な顔をする夏海ちゃんをそう諭して、俺は役所の扉を開ける。

すると、目の前のカウンターにのみきの姿があつた。

「のみき、ちよつと聞きたいことがあるんだ。島で発生した落とし物についてんだけど……」

「ああ、島民が落としたものはたいてい持ち主が分かるから、ここにあるのは観光客が忘れていった傘や水筒が主だな。ほとんど持ち主が

現れることはないが、一定期間保管する決まりになっているんだ」
そう言いながら、奥から大きなプラスチックケースを運んできてくれた。のみきの言う通り、中にはお洒落な水筒や花柄の傘がいくつも入っていた。

「それで、二人は何を探しているんだ？」

「それがさ……」

「ぱんつですー！」

「なに??？」

「ぱんつを探しているんですー！」

俺が言おうと思っていた単語を、夏海ちゃんが役所中に響く声で言っていた。どうやら、開き直ったらしい。

「ぱ、ぱんつ……は、さすがにないな……その、すまない……」

のみきも恥ずかしさを隠しながら、がさごそとプラスチックケースの中を一応探してくれたが、夏海ちゃんのぱんつはなかった。

「本当に、すまない……」

何度もそう謝るのみきにお礼を言って、俺たちは役所を後にした。

……唯一の希望が潰えてしまったけど、これからどこに行こう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

しばらく住宅地を彷徨った末、俺たちは駄菓子屋を訪れていた。

「……別に新しいのを買いたいわけじゃないんですけど」

ガラス戸に手をかけたところで、夏海ちゃんがぼつりと言う。ジト目で見ないで。わかっているから。

「駄菓子屋は鑑定大会とかやっているからさ。もしかしたら誰かが拾って、ここに持ってきてるかもって思ってたさ」

「……自分のぱんつがお宝として持ってこられたら、それはそれで微妙なんですけど」

だからジト目やめて。痛いから。

「あ、いらつしやーい。夏海ちゃん、何か探し物？」

「ぱんつを探してるんです！」

「へっ、パンツ!?」

役所の時もそうだったけど、単刀直入過ぎるよ。夏海ちゃん。

「えーっと、女性用下着があるにはあるけど……夏海ちゃんサイズ？」

「えーっと、どうだったかしらねー」

「蒼、ストップ」

目を白黒させながら奥の倉庫へと向かおうとする蒼を呼び止めて、俺が理由を説明した。

「なーんだ。そういうことねー」

勘違いしちやつたー。と付け加えながら、蒼は後ろ頭を掻く。まったく、早とちりしないでもらいたい。

「それで、ぱんつは届いてたりしませんか？」

「残念だけど、来てないわねー。第一、そんなもの持つてくる子がいたら、そのまま回収して役所に送ってるわよ。役所、行ってみた？」

「はい。なかったです」

「そう……」

返答を聞いて、蒼は心配顔で夏海ちゃんを見る。足りないんなら一枚買っとく? 半額にしたげるわよ? みたいなことも言ってくれていたし、やっぱり、女性同士で通じる部分もあるんだろうか。

「……ちよつと待つて。ぱんつ探してるってことは……夏海ちゃん、今はぱんつ……」

「穿いてます! ちゃんと穿いてますから! 見てください! ほら!」

続けて変な勘違いをした蒼の元へダッシュしていき、ズボンのフロント部分を少し広げてみせていた。俺の方からは当然見えないけど、夏海ちゃんも必死だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……駄菓子屋でも成果を上げられず、俺たちは一旦加藤家に帰宅。少しの休憩をはさんだ後、ぱんつの搜索範囲をいよいよ島全域に広げるため、ガレージからバイクを引っ張り出した。

「行きましょう！　ぱんつ探しの旅に出発です！」

後ろの夏海ちゃんもだいぶ壊れちゃってるなあ……なんて考えながら、俺はバイクのエンジンを噴かした。今度は女性陣中心に話を聞いてみるかなあ。

「あ、羽依里、なつちゃん！」

住宅地から港へと続く一本道を進んでいると、道の反対側から歩いてくる鷗に声をかけられた。

「話は聞いたよー。なつちゃん、災難だったねえ」

バイクを止めると、同時にそんなことを言われた。鷗、誰から聞いたんだろう。

「ぱんつ、良一君に取られちゃったんだって？　今、のみきさんが討伐隊を組織しているみたいだから」

「え？」

続く鷗の言葉を聞いて、俺と夏海ちゃんの声が重なった。良一がなんだって？

「いや鷗、俺たちは確かにぱんつを探してはいるけど、良一がどうこうって話は初耳なんだけど」

「そうなの？　私はその話、ツムツムから聞いたんだけど」

紬から？　どこからそんな話になったんだろう。噂が広まってる過程で、尾ひれがなくなってしまったのかな。誰も悪くないはずなのに、急に不安が襲ってきた。

「た、大変です。このままじゃ、良一さんが酷い目に遭ってしまいます！」

事の重大さに気づいた夏海ちゃんが俺の背中を叩きながら言う。正義感の強いのみきのことだし、噂を鵜呑みして、良一を徹底的に叩きのめすつもりに違いない。

「のみきを止めよう。鷗、ありがとうな！」

「なんかよくわからないけど、頑張つてね！」と、エールを送つてくれる鷗にお礼を言つて、俺はバイクを反転させる。向かう先は役所だ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くそ、誰もいない……！」

バイクを飛ばし、もの数分で役所に到着するけど、既にのみきの姿はなかった。青年団の人たちもほとんどいない所を見ると、鷗の話は本当みたいだ。

「皆さん、どこに行つたんでしようか」

「この時間帯に良一がいる場所といえば、秘密基地だと思う。討伐隊の皆も、そこに向かったに違いないよ」

「それじゃ、急いで向かいましょう！」

バイクにまたがって待つていた夏海ちゃんに急かされながら、俺もバイクに飛び乗る。次に目指すは秘密基地だ。良一、無事でいてくれ

……！

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……秘密基地に到着してみると、時すでに遅し。その周囲は無数の水鉄砲を持った青年団の人たちに包囲されていた。どうしてこんなことに。

「あれ、羽依里さんと夏海ちゃんじゃないですか」

俺たちはただ、ぱんつを探していただけなのに……なんて無力感を味わっている、見知った声が聞こえた。見ると、藍がその集団の中から抜け出し、こっちに歩いてきた。

「え、なんで藍がこんなところ？」

「たまたまおかーさんの用事で役所に行ったら、良一ちゃんの討伐隊を組織するとか言う話が出ていたので、用事そっちのけで参加した次第です」

せめて、用事済ませてからにしようよ……なんてツツコみたくなつたけど、今はそれどころじゃない。

「藍、これは誤解なんだ！ 確かに俺たちはぱんつを探していたけど、良一は関係ない！」

「そうです！ 私たち、こんなこと望んでいませんよ！」

俺と夏海ちゃんは必死に訴えるけど、藍は困ったような顔をしていった。

「薄々そんな気はしてましたけど、一度大きくなった流れは止められませんよ。ほら、見てください」

そう言つて藍が集団を指差すと同時、スピーカーからのみきの声が響いた。

『こちらは少年団有志及び、青年団執行部。ハイドロ部隊だ。お前たちは完全に包囲されている。自らの罪を認め、大人しく投降しろ！』
「待ってくれ！ 俺たちが何したっていうんだ！」

「そうだぞ！ 少なくとも、俺はとぼちちりだ！ 開放してくれ！」

のみきの言葉に、秘密基地内の良一と天善が必死の訴えを見せていた。彼らの言葉は事実だ。

「……ところで藍、ハイドロ部隊って何？」

「みきちちゃん直属の部隊らしいですよ。島の有事に召集され、迅速な対応で事態を処理するんです」

確かに迅速な対応を見せてるけど、これは勘違いだから！ 止めないといー！

『……投降の意思なしと見なす。総員、ハイドロを構えろ！』

俺が大声を出して制止する前に、のみきが叫ぶ。駄目だ。もう止め

られない。

「きつと皆さん。ストレスのはけ口を探しているんですよ。ストレスの発散って大事だって言うじゃないですか」

己の無力さを痛感していた俺に、藍は水鉄砲のポンプを動かしつつ、全てを悟ったかのように言う。この人たち、島でストレスとは無縁の生活をしてそうだけど。

『各自、安全装置解除！ ジェノサイドモード！ ファイア！』

「ぎゃー……！」

……そして次の瞬間、無情な虐殺が開始された。余りに凄惨な光景に、俺は夏海ちゃんの顔を覆い隠した。

そして討伐隊は秘密基地を半壊させた後、家宅搜索を始めた。でも、当然のように夏海ちゃんのぱんつは見つからなかった。

その代わり、良一のコレクションとか天善の愛蔵書とか、とてもじゃないけど夏海ちゃんに見せられない本が多数押収された。二人とも、本当にごめん……！

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

引け目を感じた俺たちは、逃げるように秘密基地を後にして、加藤家へと帰宅した。

「うー。もう諦めます！ きつと、私のぱんつは誰かが島モンのエサにしたんですよ！」

バイクをガレージにしまつて戻つてくると、夏海ちゃんが庭の土を蹴りながら訳の分からないことを言っていた。

「風に乗って戻ってきたりは……してないよね？」

ダメ元でもう一度、物干し台の周囲を見てみる。やっぱり落ちていない。

「しつかり干してあったのは見たんです。それで、間違いない取り込んだんですよ」

物干し台を見つめながら、大きなため息をつく。他の洗濯物と一緒に取り込んで、きちんと畳んでそれぞれの部屋に運んだんだと。俺の部屋にも洗濯物は届いていたし、間違いないだろう。

……あれ？ 俺の部屋？

……その時、俺の中にある可能性が浮かんだ。よもやと思いなから、俺は自分の部屋と向かう。

そこには昨日、夏海ちゃんが届けてくれた洗濯物が綺麗に畳まれた状態で積まれていた。夜のうちにダンスにしまおうと思っていたのに、すっかり忘れていたんだ。

俺はその洗濯物を一枚、また一枚と丁寧にどけていく。するとその中に、見慣れない布があった。

「……あった。夏海ちゃん、これじゃない!？」

嬉しさのあまり、部屋の中から庭の夏海ちゃんに呼びかける。「えっ、本当ですか!？」と、当の本人も踏み石を蹴とばす勢いで庭から縁側を経由して、俺の部屋に駆け込んだできた。

「そうです！ これです！ 見つけました！ ありがとうございます！ す！」

自分のものだと確認すると、心底嬉しそうにお礼を言っ、俺の部屋を飛び出していった。色々あったけど、見つけて良かった。まさか、俺の部屋にあったなんて。灯台下暗しとはこのことだ。

「……あら？ 夏海ちゃん、パンツなんて持ってどうしたの」

その時、廊下から鏡子さんの声がした。気がつけばお昼前だし、寄合から帰ってきたらしい。

「はい！ 朝から私のぱんつが無くなってですね。あちこち探したら、なんと羽依里さんの部屋にあったんです！」

「え、それって……お、お姉さんに電話しなきゃー！」

続いてそんな台詞が聞こえ、バタバタと遠ざかっていく足音。

……え？ ちょっと待って。夏海ちゃんの言い方は間違っていないけど、あれだと俺、思いつき誤解されてる？

「待つてください鏡子さん！ そんなんじゃないんです！ 話を、話を聞いてください！」

俺は部屋を飛び出して、全力で鏡子さんの後を追う。

その後、とりあえず電話線を引っこ抜いて通報を阻止した後、夏海ちゃんも交えて鏡子さんに理由を説明するのに、小一時間を要した。

……そんな、夏の一日。

S u m m e r P o c k e t s # 2 ・ 外 伝 完